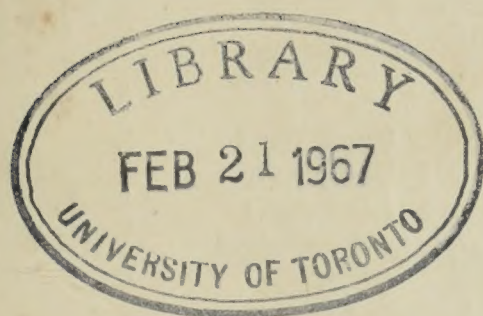
國文注釋全書

文學博士本居豐穎
文學博士木村正辭校訂
文學博士井上賴圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

緒言

一萬葉集註釋ハ一名萬葉集抄ト云ヒ、マタ仙覺抄トモヨベリ、鎌倉ノ僧仙覺ノ著ニシテ二十卷ナリ、卷首ニ總論ヲ掲ゲ、往々古點ノ誤謬ヲ論ジテ新點ヲ施シ、大ニ發明セル所多シ、且ツ處々ニ諸國ノ風土記中後世ニ傳ラザルモノヲモ引用シタリ、寶永年間ニ刊行シタレドモ誤字頗ル多ク、殆ンド讀過シ難キモノアリ、本書ハ幸ニ木村博士ノ校訂書入本ヲ以テ校合シタレバ其ノ全キヲ得タリ、

一萬葉諱ハ今井似閑ノ著ナリ、本書ハ漢土ノ戰國秦漢ノ時代ニ、聖人ノ經書ヲ經トシ、雜説ヲ解キタル書ヲ緯書ト名ヅケ、經書ノ解ニ便ニシタルニ倣ヒテ、萬葉集ヲ經トシ、其ノ緯トナルベキ參考書ドモヲアツメ、或ハ抄出シテ萬葉緯トハ名付ケタリトイヘリ、本書世ニ廿卷アリト傳フレドモ、編者未タ其ノ全キモノヲ知ラズ、今黑川家ニ秘藏セラル、十五冊本ヲ底本トセリ、

一詞林采要抄ハ釋由阿ノ著ニシテ十卷ナリ、万葉集中ノ名所、名物、枕詞、故事等ヲ注セリ、卷末ニハ旋頭歌、長歌短歌及び、萬葉集書樣、時代、撰者等ノ事ヲ記シタリ、本書ハ木村博士所藏本ヲ底本トシ、井上博士所藏本ヲ以テ對校セリ、

一和歌童蒙抄ハ藤原範兼ノ著ニシテ十卷ナリ、萬葉集ノ歌ヲ主トシ、其他ノ歌集ヨリモ多クノ歌ヲ拔抄シテ、天部、人部、居所部、草部、鳥部、獸部等拾數部ニ分類シ、各首ニツキテ其ノ出所典故等ヲ考證シタルモノナリ、卷尾ニ和歌ノ雜詠、歌病、歌合判等ノ事ドモヲ記セリ、本書ハ木村博士ノ校訂校合本ヲ底本トセリ、

明治四拾三年八月　　　　編者識ス

萬葉集仙覺抄

全

萬葉集註釋卷序

先此集を萬葉と名つくるは○何ノ意ぞや○これはよろつのことの葉の義也詩賦は漢家の文花歌は我朝の風俗也在レ心曰レ志形レ言曰レ詩うたも亦爾也されは古今の眞名序には夫和歌者託二其根於心地一發二其花於詞林一者也といひ假名序にはやまとうたは人の心をたねとしてよろつのことの葉とはなれりけるとかけるは此心なり難云古今は延喜の御宇の集萬葉は平城の天子の御集也何ぞ以二後集の序の詞一說二先ノ集題目一乎そのゆへ似レ逆如何答前後雖レ然其理無レ違故也何況彼古今の序にはうたのをこりをかきあらはすとしてひさかたのあめにしてはしたてるひめにはしまりあらかねのつちにしてはすさのをのみことよりぞをこりけるといふよりして人の世となりて三十文字餘り一文字をよむことをいひ歌のむつのすかたのわかちなとしてその丶ちうたをよみいつるさま〲のなさけをかきつらねていにしへよりかくつたは○るうちにも奈良の御時よりぞひろまりにけるかの御世やうたの心をしろしめしたりけむ彼御ときにおほきみつのくらゐかきのもとの人丸なむ歌のひしりなりけるなとかきつらねたりさて又此人々ををきてすくれたる人もくれ竹の代々にきこえかたいとのより〱にたえかたくなむありけるか丶りけるささの歌をあはせてなむ萬葉集と名つけられたりけるとかけるこれみなよろつのことの葉といふへき義つふさにきこえたり以後の集の序の詞を不レ可レ證二先の集の題目一といふべからざる也問曰古今より以來代々の撰集みな題目の下に有二和歌兩字一所謂古今和歌集後撰和歌集等云り何ぞ萬葉集の題目に無二和歌兩字一乎如何答不レ書二和歌兩字一ことにいみしき也可レ有二其子細一不レ書二和歌兩字一可レ有二二故一一にはよろつのことの葉といへる則歌也何ぞかさねて可レ書二和歌兩字一乎二には如二故儀一若は花にもよせもしは月にもよせて詠レ歌時又有二他人一詠二同題一和歌と云不レ然只其早作○○歌なとかけるなり萬葉集意如レ此但古今以下の集に書二和歌集一は詩はこれからのうた

木村正辭按天平元年云々此文皇代記之文也袋冊子卷一(二十二左)又(三十五左)卷二(六左)又(七左)又(十二左)及詞林采要卷十引之可以證但今本皇代記不載此文

なり今の五句のうたは我朝の風俗なれはやまとうたといふなるべしその意趣聊(ナシ(抄))異歟今此萬葉集不明何時之撰古來の大なる不審なり世多以謂大同之撰其故者古今和歌集序云昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百年云々是則相當大同御時乎或云此集者聖武天皇御時之撰歟其故者彼帝御時和歌盛興之由見古今序隨能令作和歌又天平元年正月十四日奏諸歌云　如此等者聖武御時相當　但至平城之號者凡以聖武并桓武大同之朝號平城帝也見國史此中大同者付山陵號之(三字夾注(擣イ))次至古今序十代之詞者文筆之習依若過若減皆存大數之儀棄餘數取十代歟同序云近代存古風纔二三人云々而所擧者已六八也又雖稱千歌廿卷(イ)局實則千九十九首也如此者付文花不必稱定數歟云々於此時代古來好士斷簡(事料(イ擣抄))各區雖費言塵儀(義(抄))勢之趣大旨如此也今撿云此集爲聖武之撰事無疑有道理有文證先道理者此集卷(之(抄))。中神龜年中歌天平廿年之間歌具以多載之始自第十八卷(イ)局天平勝寶年中。(之(抄))歌多以入之是一次作者官途是淺大伴家持所載之官唯(只(擣イ抄))內舍人越中守兵部少輔同大輔少納言右中辨等也此外所經官(官)位不見家持者寶龜十一年二月一日(朔(イ))任參議延曆二年七月十三日任中納言此集若大同之撰者公卿時歌何不載之乎加之右大(大(イ))辨藤原朝臣八束左中辨大中臣朝臣清麿民部少輔多治比朝臣土左治部少輔石上朝臣家嗣(嗣(イ))此集作者也而藤原八束朝臣者改名眞楯天平神護二年正月八日任大納言清麿朝臣者寶龜二年三月十三日任右大臣土左朝臣者寶龜元年七月十三日任參議家嗣朝臣者寶龜十一年二月一日(朔(イ))任大納言凡云作者云々　非(ナシ(抄))作者淺位被載其名於其集之(此(抄))輩天平勝寶以後次第昇進加階經數年之後或任大臣或列公卿之類十餘輩也若爲大同之撰者何不擧極官(官(イ))乎以知聖武之時撰也是上代歌者擧其時代所謂伯(泊(イ))瀨朝倉宮御宇天皇代高市岡本宮御宇天皇代乃至藤原宮御宇天皇

代等註之元明天皇御宇歌有寧樂宮之詞第一二局有之也而今於神龜天平等之歌者無如此詞是當代之故也代々天皇御製歌亦有其註第十八卷太上皇御在難波宮之時歌七首（清足姫天皇也云々）此元正天皇也至聖武天皇御製者無如此之註是當代故也是三其道理如斯此上當集中有三文證而先達未題之若疑雖令見知依秘藏且不言歟又恐不措心勘漏歟其三證者一者第一卷以文武天皇稱大行天皇今撿文武天皇崩御之後天平勝寶以前有元明元正兩帝之崩御然而彼兩帝不稱大行天皇至文武者聖武之父大王也爲顯之有大行之稱譬如凡人之道俗稱先師先考等是顯聖武之撰一文證也抑以第一卷大行天皇或人謂之持統甚以誤也何者第一卷云慶雲三年太上天皇幸難波宮時歌四首太上天皇幸吉野宮時高市連黒人作歌云々又次大行天皇幸難波宮時歌三首大行天皇幸吉野宮時歌二首等云々彼時言太上天皇者持統也大行天皇者文武也若

爲二帝者何忽換言可擧之乎依之第九局云大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首云々若爲一帝者何煩相連兩名乎應知二者第廿局先太上天皇御製霍公鳥歌一首註云日本根子高瑞日清足姫天皇○云々今撿持統元明共有太上天皇之號然而事隔故不稱先天平勝寶以後聖武既太上天皇也此集今應太上天皇之詔撰之仍爲異之以元正稱先太上天皇是指聖武之撰二文證也三者勘此撰集年紀始自天平年中至于天平勝寶被撰之旨分明者也所謂第十七局歌者始自天平二年冬十一月歌至于同廿年歌其中載山部宿禰明人詠春鶯歌云右年月所處未得詳審但隨聞之時記載於茲云々此歌天平十三年歌中書之又古歌一首（大原高安眞人作）年月不審但隨聞時記載茲焉云々此歌天平十八年歌中書之次者第十九局歌者天平勝寶二三四五年歌也其中天平五年贈入唐使歌并阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌載之了不審右件歌者傳誦之人越中大目高安倉人種麿是也但年月次者隨聞

顯昭萬葉
時代難事
詞林采要抄

レ之時載二於此一焉此歌天平勝寶三年之中書レ之又云
壬申年之亂定以後歌二首（壬申年之亂者天武天皇元年大友皇子兵亂也）
皇者神爾之座者赤駒之腹波布田爲乎京師跡奈之都
右大將軍贈二右大臣大伴卿一作
大王者神爾之座者水鳥乃須太久水奴麻乎皇都常成通
作者不レ詳
右二首天平勝寶四年二月二日聞レ之即載二於茲一也等
云々是指二聖武之撰一三文證也今既有二如レ此明證一何
又背レ之好立二異儀一還懷二迷惑一乎　次撰者或稱二山上
臣憶良一或稱二橘大臣一或稱二藤原眞楯一或稱二大伴家
持一今撿　山上憶良者此撰集以前先達歟此集歌中見二
山上憶良一類聚歌林等引レ之故凡此集者六箇集爲レ宗
被レ撰之由所二申傳一也六箇集者古歌集柿本人丸麿（抄）
歌集山上憶良類聚歌林笠朝臣金村集高橋連蟲麿集田
邊史福麿（抄）集也以引二此等集之歌一可レ知二年紀前後一又
非二撰者一歟不二證據分明一者猶有二疑殆一又如二前兵衛
佐顯仲入道抄物一者萬葉集者橘諸兄藤原眞楯等奉レ勅
撰レ之云々雖レ然於二眞楯一者不レ知二其證據一如二當集現
文一者橘大臣大伴家持兩人爲二撰者一歟所以者何橘大
臣謂二撰者一事者先達多以稱レ之隨萬葉集奥書云天平
勝寶五年左大臣橘諸兄撰二萬葉集一云々何可レ不レ用
レ所レ註乎就中此集中橘（抄）大臣爲二撰者一歟之由有二見事一
第十九局（抄）卷（イ）少納言大伴宿禰家持歌云白雪能布里之久山
乎越由加牟君乎曾母等奈伊吉能乎爾念　左大臣換レ尾
云伊伎能乎爾須流然猶喩曰如レ前誦レ之也如レ此書左
大臣爲二撰者一之間於レ不二甘心一何々歌換レ之歟而ナシ（塙）欲（イ塙）ナシ（抄）
又家持相共依レ爲二撰者一○喩二如レ前誦レ之由一乎南人猶（イ）
共不レ爲二撰者一者不レ可レ及二評判一者歟爰知左大臣爲二
撰者一乎次又家持見二撰者一證據勘レ之者第十九局奥二卷（イ）
云但此○中ニ不レ稱二作者名字一徒錄二年月所處緣起一者卷（イ塙抄）
皆大伴宿禰家持載二作歌詞一也云々然則前所レ舉天平
五年贈二入唐使一歌幷壬申年之亂定以後歌隨レ聞得レ之
如レ載二天平勝寶三四年之中一者皆是家持所レ註也加之卷（イ）
同第廿局天平勝寶七年春時分昔年訪レ人歌書レ之畢云防（塙）
々
右八首昔年訪レ人歌矣主典形部少錄正七位上磐余伊防（塙抄）刑（イ）

○詞林采要抄

續日本紀卷廿四ノ九

▲(塙)早下作日下部三字而以朱添書昇二字(一本)早作(抄)作イ昊早

美吉諸君抄寫贈兵部少輔大伴宿禰家持云々當知
爲撰者故註贈古歌也依有如此見所兩人相
共謂爲撰者也萬葉集爲聖武之撰道理文證無所
通但以聖武稱平城事有慥證跡乎答其證跡非(イ塙)
有何疑殆乎一云石川朝臣年足後岡本朝左大臣大紫
蘇我連羅志曾禰平城朝左大辨三位石足一男者
以之案之石足者天平元年二月任於參議正四位
下左大辨三月從三位 此(イ塙抄) ○平城朝相當聖武矣
又云藤原朝臣弟貞 第(イ)芳(抄) 平城朝左大臣正二位長屋王男者
以之案之長屋王者和銅二年十一月參議從三位宮
内卿同三年四月廿三日式部卿靈龜元年二月四日正
二位左大臣天平元年二月十日坐 寔(抄) 自殺此平城朝
者相當聖武矣
續日本紀云從五位下紀朝臣國益男清人天平十五年治
部大輔等爲平城宮留守者
以之案之相當聖武矣
萬葉集第十七云天平十六年四月五日獨居於平城故
宅大伴家持作歌六首者

●尾張國風土記云葉粟 栗(イ抄) 那川島社 在河沼郷川島村
奈良宮御宇聖武天皇時凡海部忍人 ナシ(抄) 中此神化爲白鹿
時出現有詔奉齋爲天社同國愛知郡福興寺 習(抄) ▲俗名
三宅寺南去郡家九里十四歩在平 群(抄) 昇(イ) 郡郷伊福 村(抄) 寺
平城宮御宇天靈國押開櫻彦命天皇神龜元年主政
外從七位下三宅連麻佐所奉造也當國風土記兩所之
文殊以分明乎
備中國風土記云賀夜郡松岡書岡 去(塙抄イ) 東(塙抄イ) 南維二里驛路在
今新造御宅奈良朝廷以天平六年甲戌國司從五位
下勳十二等石川朝臣賀美郡司大領從六位上勳十二等
下道朝臣人主少領從七位下勳十二等薗臣五百國木 等カ
時造始云○ 云(抄)
筑前國風土記云當奈羅朝 斎(抄) 天平四年歲次壬申西海道節 ナシ(抄)
度使藤原朝臣諱宇合爐前議之偏考當時之要者
以前三箇國風土記之文以聖武天皇御宇稱平城事
更以無相違矣
又疑云以聖武稱平城事誠其證據是多歟但如古
今序者昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來

時歷十代數過百年云々然聖武天皇以後至延喜相當十六代所謂

聖武　孝謙　廢帝　稱德　光仁　桓武　平城　嵯峨

淳和　仁明　文德　淸和　陽成　光孝　宇多　醍醐

已上十六代也

以聖武號平城者○歷十代之文既可謂相違歟以平城天皇可號平城天子歟名字既顯然時又當十代旁可無相違何強以聖武以下十六代謂十代乎如何答謂十代支其議非一又可有子細歟如通漏義者云若過若減皆存大數義次者或義云以父子相續取一代所謂

一聖武　二廢帝　稱德　孝謙重祚故不取之

三天智孫光仁　四桓武太子平城　五桓武第二子嵯峨　六桓武第六子淳和

七嵯峨第二子仁明　八文德　仁明太子　淸和太子陽成　仁明第三王子光孝

九光孝第三子宇多　十宇多第一王子醍醐

已上十代也是者以父子者取一代至兄弟各別取之也云々此儀自本爲一義歟然而此上又依道理立一義於諸文理有多種義事爲當歟何強遮之哉若又義理不相背者諸有智者何不依附乎今謂十代者

一聖武　二孝謙聖武御女　三廢帝　六稱德孝謙重祚故不取之

四光仁天智孫　五桓武光仁御子　平城桓武太子　嵯峨

淳和桓武第三子　七仁明嵯峨第二子　文德仁明太子　淸和文德第四子

陽成淸和子　八光孝仁明第三子　九宇多光孝第三子　十醍醐宇多子

以上十代也是則自光仁天皇至醍醐御門已上七代者繼體王位次第也不取其餘此義當知諸王臣人民計其重代之時始自父祖乃至適子曩孫任其譜系數之者也若舅姑兄弟之間於諸藝能雖有名人如置不數之光仁以上先三代者又最初者撰集又無始也爭不取乎凡勿論也次第二代最初與繼軆中間非可省略且又如國郡領知相傳券契等不論自家他家奉其次第者也今又不可違於斯仍書之時歷十代者也若又以大同天子令相配時歷十代之句者不可云數過百年自大同元年至延喜五年者百年也不可云過百年何況大同天子者在位

正辭按夫木卅三こけころもちふくしもよみふくしもちこのをかになつむすこいへきけ云々」古本操之或本作ニ籠毛ニ與ニ籠母一也

四年也自ニ即位年一有ニ撰集一事不審又好歌給叓不レ見云々(抄)當ニ其時一無ニ撰者仁一之是右不審也或本古今序數及ニ百年一〇〇かく(抄)是又不レ可レ然歟也(墒)古キ(墒)眞名序假名序其旨趣(イ意)不レ可ニ相違一焉而(墒抄)假名序にはかのとしよりこのかたとしはもゝとせあまり世はとつぎになむなりにけるとかけり何可ニ相違一乎

萬葉集註釋卷第一上

泊瀨朝倉宮御宇天皇代

天皇御製歌

籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志持此岳爾(イ墒菜)採須兒家吉閑名告沙根虛見津山跡乃國者押奈戸手吾許曾居師告名倍手吾己曾座我許者背齒告目家呼毛名雄毛(語)

此御製歌に有ニ二種點一一本點云

こけころもちふくしもよみふくしもちこのをかになつむすこかいへきけなつけさねそらみつやまとのくにはをしなへてわれこそをらしつけなへてわ(イ墒め)(墒へ)れこそをらめわれこそはせなにはつけぬいゑをもなをも

又或本點云

こ(イ墒に)もよみもにふくおもふもよめふきみしちこのを(け(イ))かになもつますこのいへきかなかさねそらにみつやまとのくにはをしなへてわれてそゐしかつ(墒イけ)ちなへてわれこそをらしわれこそはせなにはつけ

*官本仙覺奥書云抑萬葉集和字出來之後者漢字歌一首書了又更書假字歌事常習也是者不知漢字男女等僞合見安歟據之二首恐一首交恐更字訛

▲正辭按讀て、此二字は、よ、見、ふの三字の誤りなり上文或本點合弦すべし墒本イ本にもヨミテさあれさ○これもテ○はフの訛りなりさてよ見ふきみ一句なり

ぬいゑをもなをも　以前の兩點文言章句各異に義理由緣顯はれざる歟。初の點に云古計其呂母知布久之毛余美その心をえず故はいかん若衣ての歌の發句に相應せざるが故也中に就て籠毛與の與の字これを古と和せり豈可然乎をよそこの歌の發句籠毛與美籠母乳古本かくのことし而して籠毛與美の美字其點見ず古點の習ひ漢字歌二首書レ之乎又交ニ假名ニ歌書レ之仍て如レ此落字訛謬等を人露顯せざる歟又次の或本の點者こもよこもの句宜に似たりと雖とも第二句にふくおもふもの句より讀てきみしちこのをかになもつますこのいゑきかなさねそ○にみつやまとのくには等の句不レ得ニ其意一朦籠綿々如レ對ニ夕霧一以前の兩箇之點前點は頭句不可にして末句漸可也後點は頭句可にして中心不可也又兩點相似の句猶有ニ少差別一稽古の人勘レ之いま試に加ニ新點一云こもよみてもちふくしもよみふくしもちこのをかになつむすこいゑきかなつけさねそらみつやまとのくにはをしなへてわれこそをらしつけなへて我こそをらしわれこそはせなにはつけぬいゑをもなをも此御製歌に籠とはわかなをつみいるかたみなり布久思と云は採レ菜器なりすことい ふは野人今歌の意は義諧ニ賤女一凡子とは通ニ男女に一しかれども今歌の意女子にあひあたれり

如レ云

吾妹子未通女子名告沙根とは名を告よと云也沙根者言助こまつがしたのくさをかりさねと云がことし今御製歌意者天皇野遊之時叡覽爲レ體也籠もよみ籠もち布久思もよきふくしも地に此岡に菜採女子家をきかしめ名をつけよ和國者皆これ我みしま所也我こそは背には家をも名をもつけめと令レ詠給御製也彼賤女艶妙故有ニ此御製一歟此御歌詞中押奈戸手吾許曾居師告名倍手吾己曾座句一本の點にはをしなへてわれこそをらしつけなへてわれこそをらめと點す又或本にはをしなへて我こそゐしかつけなへてわれこそをらしと點す二つとも

にそのことはをとゝのへす是によつて今の點には
をしなへて我こそをらしつけなへてわれこそをら
しとゝのへ點する也古人傳云長歌をよむならひ
とゝのへたる句をよめるをもちて其故實とすとい
へりされは此次下の御歌ともにもくにはらはけふ
りたちたつうなはらはかまめたてたつとも令レ詠
給ひ○あさかりにいまたゝすをしゆつかりにい
またゝすらしとも侍はこのならひなるへしをよく
とゝのへたることは〔長歌一首カウチニ或一所
アル歌モアリ又二所三所アルモ侍ルナルヘシ又ト
ゝノヘタルコトハナキ〕長歌もはへりかならすし
も一様にはあらされとももしとゝのへたることは
をよみそへたるうたみきたらはこれ故實を存して
ふるまひよめるとしるへき也

天皇遊二獵内野一之時中皇命使二間人連老一獻歌

八隅知之我大王之

此詞所々に多以て詠レ之或又書二之安見知之一其點
不二一准一或はやすみしる○○○○○○○或やすみ
しり或やすみちの或くにしりし或やしはしる又
付レ書二安見知之一或あめしりしと點レ之如レ此種々
點付レ之その和の意詞を料簡するに八隅知之を以
てやすみしるとも若やすみしりとも若やしましる
とも和すれば之の字和せられず或又やすみしりし
とも若くにしりしとも和すれば之字は和せらると
い○ども先帝を慕ひ奉るに似たり然に此詞は天皇
遊獵の行幸之時駕に從がふ臣下多以て詠レ之必ず
先帝を奉慕とならば其義不二相階一仍勘二日本紀續
日本紀等一謂二之也須美師志一其心詞尤階まさにせ
り知字の一音は師なり假令如下寺官中之知客謂上レ之
師可上レ耶須美師志の詞證歌勘レ之者日本紀第十一
卷云大鷦鷯天皇五十年春三月壬辰朔丙申河内人奏
言於茨田堤鷹産之即日遣レ使令レ視曰既實也天皇於
是歌以問二武内宿禰一曰多莽耆破耶宇知能阿曾儺虚
曾破豫能等保臂等儺虚曾波區珥能那餓臂等阿耆豆
辭莽揶莽等能區珥珥箇利古武等儺波企箇輸揶武内

*正辭按原書今本作夜須美斯留古事記傳卷廿八十一續紀に夜須美斯留とある留字後人のさかしらに改めたるなるへし古本には志と作り年中行事秘抄に出せるにも志とある

宿禰答歌曰夜輸瀰始之和我於朋枳瀰波于陪儺于陪儺和例烏斗波輸儺阿企舜辭摩揶莽等能倶珥々局(イ)箇利古武等和例破枳箇儒　又同十四卷　云　大泊瀨幼武天皇五年春二月狡遊(イ墒)二獵于葛城山一靈鳥忽來其大如レ雀尾長曳レ地而且鳴曰努力々々俄而見レ逐逐(イ墒)嗔猪從二草中一暴出逐レ人獵徒緣レ樹大懼天皇詔二舍人一曰猛獸逢レ人則止宜逆射而且刺判(墒)舍人性懦弱緣レ樹失色(イ)五情無主　嗔猪直來欲レ噬二天皇一々々用レ弓判(墒イ)刺止致(墒)擧レ脚踏殺於レ是田罷欲レ斬二舍人一々々臨レ刑而作レ歌曰野須瀰斯志倭我飫裒枳瀰能阿蘇麼斯斯々能宇拖枳舸斯固瀰倭我尼碍能裒利志阿理嗚能宇倍麻(イ)能婆利我曳陀阿西嗚斯(ナ)云々この詞歌雖レ多畧して一兩を出す也又續日本紀第○十(イ墒)局(イ)五　卷歌曰夜須美斯志和己於保伎美波多比良氣久那河久伊米之弖等與美*留(紀)岐麻都流支(墒)八隅知之可レ點二之夜須美斯志一證據かく

のごとし次に其心を釋せば先達多以二耶須彌志流一は帝は八方をしろしめす義たるの由釋レ之其義しからず理を盡にあらず故はいかん天皇の御　宇　何限二八方一乎下地に於ては其授緣(イ墒)領の源たり虛空も亦領二一國の上天一かるが故に八方を知めすとのみ云べからず是一　又方角もとより各別也されば或四云(イ墒)方四角とも或四方四維とも或四方四隅とも。方角すでに各別也何ぞ混亂してやすみといはんや是二(イ墒)是に依て其釋理に不レ叶なり又至二和字一者如二日本紀眞名假名一耶須彌斯志と云べし其心詞相應するが故也問云耶須彌志流とは帝王の八方を知しめす義とするの由先達等これを釋することは常の義也而今其義不二相應一者何義可レ爲二正義一乎又耶須彌斯流ナシ(イ墒)ナシ(イ墒)等　云　也　耶須彌斯志云同歟異歟如何答やすみしるといひやすみししといふその旨趣替りめなしといへどもしかもその優劣遙に異なり八隅知之これをやすみしると和すれば之の字和せられすうへ語禮なき二ノ失也又やすみしりしと和すれは慕奉二るに似たり先帝一やすみしゝと和すれば和し殘

◎イ陬釋氏云陬隅也爲陬廬爾雅正月曰孟陬果云說文聚居
▲イ谷須和作和名須

す文字○○○(の雖も(イ塙))自然に脱レ之(マヌカレ(イ)タッシ ナシ(イ塙))難し語禮を存せざるに○○(しも(イ塙))非ず先帝を慕奉る○○○○○(雖も無して(イ塙))其點意普巧(ク)也(ナシ(イ塙))なき事難し仍て日本紀續日本紀等の眞名假名皆此和語に依也次に耶須彌斯志(やすみしし)と云意は何者やすみと云は八洲(嶋(塙イ))なりしゝといふは初のしはしろしめす詞次のしは詞の助也これ我國の國主大八島の國をむけたいらげてしろしめす詞也凡島をすみといふしとすとは五音の同内相通まとみと又同内相通也故(只(塙))にしまといひすみといふは唯(皆(イ))おなし意なり心は(言(塙))海中の島をもつて人の居所とす東宮切韻に云陬(塙)◎釋名云陬隅也爲陬爾雅正月曰孟陬(塙)廬果云說文聚居 又洲はすなはち島とおなしきなり洲▲爾雅云水中可レ居者曰レ洲音州谷須和詫須注云四方皆有レ水也名(塙)李巡不思議疏云經川者常流水不レ絶也洲者水中可レ居所也云々島を隅と云こと明鏡也就レ中於ニ我朝ニ者伊弉諾伊弉冊尊立ニ於天浮橋之上ニ共計曰底下豈無レ國歟廼以ニ天之瓊(瓊玉也此曰レ努)矛ニ指下而探之是獲ニ滄溟ニ其矛鋒滴瀝之潮凝成ニ一島ニ名レ之曰ニ磤馭盧島ニ二神於是降ニ居彼

島ニ因欲ニ與爲夫婦産ニ生洲國ニ便以ニ磤馭盧島ニ爲ニ國中之柱ニ(本紀ニ見ニ日)これ島を以て可レ云ニ隅縁なり拐其後生ニ八洲國ニ○(御)○見(ストタリ(イ塙)ナシ(イ塙))日本紀見云及レ至ニ産時ニ先以ニ淡路洲ニ爲レ胞意所レ不レ快故名之曰ニ淡路洲ニ廼生ニ(與(塙イ))大日本(日本此云ニ耶麻騰ニ下皆效レ此)豐秋津洲ニ次生ニ伊豫二名洲ニ次生ニ筑紫洲ニ次双(雙(イ塙))ニ生隱岐洲與ニ佐度洲ニ世人或有ニ雙生ニ者象レ此也次生ニ越洲ニ次生ニ大洲ニ次生ニ吉備子洲ニ由レ是始起ニ大八洲國之號ニ焉(此次有ニ五種異說ニ大體雖レ同有ニ少異ニ也欲ニ悉知ニ者可レ見ニ日本紀ニ)聖王この八洲國をしろしめす故にやすみしゝわがおほきみと詠する也されば風土記等にも介レ記ニ代々御宇事ニ○(所(イ塙))所にも此義見えたり所謂常陸國風土記あるひは卷向日代宮大八洲照臨天皇(景行天皇)之世と云或云ニ石村玉穗宮大八洲所馭天皇(繼體天皇)之世ニ或云ニ難波長柄豐前大朝八洲撫馭天皇(孝德天皇)之世ニ阿波國風土記或云ニ大倭志紀彌豆垣國大八島國所知天皇(崇神天皇)朝廷ニ或云ニ難波高宮大八島國所知天皇(仁德天皇)ニ或云ニ檜前伊富利野乃宮大八島國所知天皇ニ又續日本紀第一文天

武天皇之眞宗豐祖父天皇丁酉年八月甲子朔受禪即位辰以下八字如本詔曰現御神上大八島國所知天皇大命上（局イ）長麻詔大命乎云々同第十五卷天平十五年五月辛丑自三月至今月不雨奉幣（帶墒）帛畿内諸神社祈雨焉三日癸卯群臣於内裏皇太子親儛五節右大臣橘諸兄奉（房賣イ墒）詔奏太上天皇曰天皇大命爾坐而奏賜久掛母畏伎飛鳥淨御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇（桂墒イ）（飛墒イ）命天下乎治賜比所思坐久上下乎齋倍和氣久無動久靜加爾令有爾波禮等樂等二都並置弖志平久長久可有等隨神母所思坐弖此乃舞乎始賜比造賜比伎等聞食弖與天地共爾絶事無久於繼爾受賜波利行牟物等之弖（彌イ墒）皇太子斯王爾學志頂命荷弖我皇天皇乃大前爾貢事乎奏等也巳上（云イ）八隅者八洲云同言例證（云へり墒）也又或賢者說云八隅知之者於一須彌之下有東（一イ墒）南西北之四州於四維又。維有一中洲合八中洲也（イ墒）○其東南角以巳方州名娑摩羅州是云大日本國我朝聖主攝領此州故曰八隅知之我大王也云々有此義立爲令知所注載也疑云八隅即大八島國爲同言支其例證聞之支巳了爾者八隅知之其點有數中一謂之八島知此點可爲正訓歟（奔イ墒）得其意事無煩故也何。易用難乎如何答耶須美斯志者其意詞離難隨又日本紀等眞名假名詞也誰有識仁不依之乎何拋花梵通才之妙辭偏用邊州卑淺之微言矣

朝庭取撫賜夕庭伊緣立之御執乃梓弓之奈加弭乃（賜イ）（祭イ）音爲奈利（祭イ）

とりなてたまひとは弓のはず也いよせたてゝしはいは發語の詞也天竺には阿字を發語の詞とす我朝には伊字を發語の詞とする也みとらしと云は御弓なり見とらしといふをまたはみたらしともいふとたと同内相通の故なり或說云はゝ弓をみたらしといふは天笠の多羅葉其長七尺五寸弓の長又七尺五寸也故是をたら子といふ也さて文武二道は一雙の物なるか故に筆の長も最長なるは六尺或五尺に

する也是殊の外の甲乙なからむかためなり彼多羅葉黄色にして莖赤し故に移レ之經教をは黄紙 朱軸にするなりなかはすといふははすと。はしといふ同言也ものにしたかひてはすをつくるに矢もしは張殿のしゐしなむとのはすをはなかをえりてうらうへのはしにつく弓のはすは中につくるものなれは中はすといふ又はすといふはなつといふ同言也はとなと同韻相通すとつと同韻相通なり弓は兵殊にかきなつる物なれは朝にはとりなて給と詠也中はすのをとすなりと云は弓のつるはすとは すうらはすにかけてはりたれはつるうちのをともたてなれはなるはすのをとす也と詠レ之廣韻曰弓釋名曰弓其末曰レ簫又謂二之弭一以レ骨 爲レ之滑弭には也中天曰弣之言 撫也又取二撫持一也云々

反歌

たまきはるうちのおほ野にむまなへてと 云々

たまきはるといふは常の釋にはたましゐきはまる義臨終のよしを釋すまことたまきはるいのちなむとよめる歌にはしかるへし但如レ此事は言葉はをなしけれともしたの心かはれることおほしそれをは言惣意別と云也顯宗の學問の名目にもかやうの事おほかる也和語にも又爾也今のうたのたまきはるうちと云は内野は内裏なりたまきはるとは嚴麗きはまるといふことはなりこれうちといはむためによそへよめることはなり仁德天皇の武内大臣にたまふ御歌にたまきはるうちのあそとよませ給るも此意也もしたましゐきはまる義ならはいかてか天皇遊獵の時さる禁忌のことはを令二詠進一乎又内野といふは大和の國宇知の郡の野なり今内野と書るはいにしへはかくのことくかきけるにや又ことはたにもたかはされはともかくもかける常事也於國郡鄕村等用二二字一用二好字一元明天皇御宇和銅六年被レ作二諸風土記一時事也其以前國郡江 村 名或一字二字又鄕村等眞名假名にて或は三字四字もありける也而令レ注二進風土記一之時任太政官。下之旨各定二二字一用二好字一也

＊本書卷五（廿一ウ）可合攷左

幸二讃岐國安益郡一（擴）之時軍王見レ山作歌

わつききもしらす

といふはわびしきもしらす也村肝者忌二除事一向

思歎其肝凝二胷（擴イ）又（イ）間一也。ぬえとりのうらなきをれ

はとはしたなくをうらなくといふなり

たまたすきかけのよろしく

とはたまたすきはかくる物なれはかくといはんと

てたまたすきとはをけるなり

とをつかみわかおほきみの

とはすめろきをかみといへる也かみといふはよろ

つをかゝみ給ふ義也明王はあめのしたのもろ〳〵

のたかきいやしきものをかゝ見給ひいにしへをも

いまをもかゝみたまふこと百錬鏡のことくあきら

かにましませはとをつかみわかおほきみのといへ

る也ますらをとはたけきものゝふをいふ壻荒男と

かくは此字也たつきとはたより也あみのうらとは

さたまれる名所にあらさる歟海人のあみひく浦の

惣名とみえたり

反歌

かせをときしみ　といふはしみはしけしと云詞也

＊註是時宮前在二一樹木一云々伊與國風土記云二木者

一者椋木一者臣木云々臣木可レ尋レ之

私勘臣木者もみの木也

イ小書、擴朱頭註、一本以下ナシ

明日香川原宮御宇天皇代

額田王歌

あきの丶のみくさかりふき

みくさとはすゝきなり此歌點にも或はおはなかり

ふきとも或はみくさかりふきとも點レ之此歌には

みくさと點せる殊宜也みくさといふはもろ〳〵の

草の中にたかくおゝしき草なるかゆへに眞草の義

にて見くさと云へし難云たかくおゝしきによらは

荻（擴イ）萩葦等又これあり何そかれをみくさと不レ云乎

答云たとひ其義もありぬへくとも古賢者殊烋のは

なすゝきを賞せり故柿本朝臣人麿云（十廿五ウ）人みなはは

きを秋といふいなわれはおはなか末を秋とはいは

む云々又諸草おほしといへとも此集のうたの義讀

卷中に草花とかきておはなとよむこれすゝきまこ

とのくさなる故也可レ思レ之又うちのみやことは行

正辭按ニ古本ニ同ジトクトリ韻相通也トブルニヨルヘシ今本ハ誤也其ハ誣ルニ引タル高麗ヲカクリト云香山チカクヤマトヨムモ韻

宮也非二京都一也可二分別一之

熟田津爾船乘世武登月待者〔すきたつみふねのりせむとつきまては〕（熟|熟(イ)）　此歌頭句如二古點一者或はむまたつ或なくたつ也（ハ|リ(墑)）因撿二日本紀一「第廿六（以下十六字旁書(墑イ)）卷天豐財重日足姫天皇御宇也」七年春正月丁酉朔壬寅御船西征始就二于海路一（局(イ)）甲辰御船到二于大伯海一（此(イ)）時大田姫皇女産レ女焉仍名二是女一曰二大伯皇女一庚戊御船泊二伊與熟田津石湯行宮一熟田津此云二儞枳陀豆一（熟(イ)）（九字夾註(イ墑)）　如二日本紀一者にきたつと和すへし　にきたつといふは祈二渡海安隠一義也（穩(墑)）〇〇〇（にき(墑)）（き(イ)）といふは祈禱をいたして神慮をやはらけたてまつる義也旅行のならひ水陸ともに祈請すへしといへとも殊渡安隠をいのる故也（穩(イ墑)）

ゆふつきのあふきてとひしわかせてかいたゝせるかねいつかはあはなむ

ゆふつきとは十三四日のゆふへの月也いたたせるかねといへるはいは發語の詞よめる心はゆふつきのことくあふきてとひしわかせてかたちてやあるらむいつかあはむとよそへよめる也これは愚老新點の歌のはしめの歌也彼新點の歌百五十二首はへるなかにこれはくはしく釋をかきそへて侍るうたなりくはしきむねをしらむと思はん人は可レ爲二披見二彼釋一也

中皇女命往二于紀伊温泉一之時御歌

きみかよもわか世もしれやいはしろのおかのかやねをいさむすひてな

此歌も有馬皇子のいはしろの松をむすひたまへりけるを本縁としてよましめ給へる歌とみえたりかの本緣は孝德天皇と申ける御門の位をさりたまはむとしけるときにありまの皇子の位をたもつましきけしきをみしりたまひてゆつりたまはさりければ世をうらみてうかれありきたまひていはしろといふところにて松のえたをむすひていはしろのはま松かえをひきむすひまさきくあらはまたかへりみんとよみたまへりけりしかれはまたこれもきみか世もわか世もしるらんおかのかやねをいさむすはんとよみたまへる成へし

あこねのうら　紀伊國

ノ○カヲ○クニ通シタルニテ明ラケシ此外韻ノウヲクニ轉シタルコト古書ニイト多カリシカルヲ拾穗抄ニ此ヲ引デ今本ノマヽニカトたト同韻相通也トカケルハ笑フヘキヿ也サテハコヽノ文義通セヌヲヤサテハ此書モト眞片假名モテカケルヲ刊板ノヲリ草ニ書改タルナリヨリテ片假名ヲ見誤リテカキヒカメタルトコロオホシコヽモ○ツヲ○カ○クヲ○タト見誤リシモノナリ

中大兄（近江宮御宇天皇）三（みつ）山歌

中大兄とは天智天皇御諱なりいまた皇子の時の御歌なりけれは御諱をかゝれたる也三山或本にはみやまのうたと點せり其心かなはす三山者　畝火香山　耳梨山也見ニ風土記ニさて又此歌古點にはたかやま（ナシ(イ墻)）のはら（く(墻)）もねひ（なく(イ)）をゝしと○點せり（ミ(イ)）其心たかへり高山波雲根火雄男志（かくやまはうねひをおし）等と和すへしかと（う(イ墻)く(イ)）たと（墻）は同韻相通也されは高麗をかのくにの人はかくり（ナシ(イ墻)）といふ事しかれは香山とかきてもかくやまと韻同事也其由縁はむかしは山川も夫婦の契をむすひけりかゝる（しかる(墻)）にかくやまは女山也畝火山と耳梨山とは男山也しかるにみゝなしやまはしめにかくやまをけしやうするになにとなくうけひくけしきなりけりそのゝちにうねひのやま又かく山をけしやうするにうねひの山はすかたもおゝしくよかりけれはこれに心うつりにけりをゝしといふはけたかくよきなりさてみゝなしやまさきのやくそくにまかせてあはむとするにかくやまうけひかすうねひの山これを聞てともにたゝかふこれをみつ山のたゝかひと云也いまこのみうたに彼本縁をよませ給として神代よりかゝるにあらしいにしへもしかにありてそうつせみもつまをあひうつらしきとは令ㇾ詠給也うつせみとはつねに人のおもひならひたるは蟬のぬけからをいふといへとも此ふるき歌ともにみえたるはしかにはあらすうつせみとはわか身をうつくしむ義なりむかしはものをほむることはにうつともいつともよろつのものにいへるなり難云うつくしむ義ならはたゝうつみといふへしうつせみといふせの字をなかにそへたるはせみとこそきこえたれ如何答ていはくせの字はたすけのことはなりたとへはかひをうつせかひといふかことしせもしをくましくはたゝうつかひとやはいふへき又うつせかひといふもひとへにむなしきかひといふとのみこゝろうへからすうつくしきかひとも心うへき也又身をうつせみといふにもむなしき身と心得る共（ナシ(イ墻)）ひか事とはいふへからす凡梵語も和語もことはひとつにてあまたの心をこめたる

△集原書作阜是也當訓ヲカ古本作隼即阜俗體也蕀翻花

○原書和作倭

をたくみなりとするなり私考云幡磨國風土記云香山里本名二鹿來墓一 土下上所三以號二鹿來墓一者伊和大神占レ國之時鹿來立二於山一。岑一是忽似レ墓故號二鹿來墓一後至二道守臣爲レ宰之時乃改レ名爲二香山一家內谷即是香山之谷形如レ恒廻故號二家內谷一云々香をかくとよむ證也日本紀第三卷云宜取二天香山社中土一香山此云二介過夜摩一香をかくとよめるは高をかくとよまむ事不レ可レ疑レ之伊香と云姓有レ之又近江國に伊香と云所有レ之可レ思レ之

反歌

いなみくにはら

といへるはかのみゝなしやまをきをひてあはされはいなみくにはらといへるなるへし　私云幡磨風土記云出雲國阿菩大神聞二大和國畝火香山耳梨三山相闘一以レ此歌一諫レ山上來之時到二於比處一乃聞二闘止一覆二其所一乘之船一而坐レ之故號二神集之形覆一以レ之思レ之かく山とみゝなし山とあひし。きたちうらみにこしいなみくにはらとよめるは此阿菩大神播磨まて來事をいへるにや伊奈美國はら若いなみくにはらとよむへき歟美の字みとよめる事はこも與美こもちをはしめとして其例多之神集　若　印南邊歟以二風土記一猶可二了見一レ之

わたつみのとよはたくもに入日ねしこよひの月よすみあかくこそ

此わたつみのとよはたくも○○○○○○とはいはんとてわたつみとをける歟と云義も侍也一の義には海雲の古語也共釋せり當夕日雲赤色なり似レ幡雲也入日能時は月光淸也云々此歌中五文字つねには入日さしと點す二條院御本に入日ねしと點す漢字すてに弥也尤入日ねしと點すへし就レ中入日さしといへるは其心おほやう也禰しといふはやはらくといふことはなれは入日やわらひては可レ屬

嚴經音義云早又爲畢字丘本也可以證

清(晴イ撝)天ニこと殊ニ其(ナシイ)いはれあひかなへるなり

近江大津宮御宇天皇代額田王以レ歌判之歌　ふゆこもりはるさりくれはと云者未冬きのすかたにてはるのくれはといふ也　そこしうらみしあきやまそわれは　と云はうらといふはしたと云詞也そこしはそこはくなりそこはくした心にかけてみしあきやまそ我はと云は秋のなさけをまされりと判歌也

額田王下ニ近江國一時作歌井戸王即和歌味酒三輪乃山云々

古點者あちさけのみわのやまと點せりしかれとも古語によらはうまさかといふへきなり

日本記(紀撝)曰御間城入彦五十瓊殖天皇八年冬十二月丙申朔乙卯天皇以ニ大田々根子一令レ祭ニ大神一是日活(ナシ撝)日○(自イ撝)舉ニ神酒一獻ニ天皇一即宴竟之諸大夫等歌之曰

宇磨佐開游和能等能々阿佐茄珥毛伊第亙由介那游和能等能渡瀍(鳴イ撝)

於レ茲天皇歌之曰

宇磨佐階游和能等能々阿佐茄珥毛於辭箝(イ撝)羅箇禰游和能等能渡鳥云々

しかれは如ニ古語一者うまさかといふへき也さけをさかといふこと五音相通なれはいつれもたかふへからすたゝしものをよむならひ梵語よりはしめて和語にいたるまてむねとは男聲をもちゐるを口傳とす男聲といふはあかさたな(ナシイ)はまやらは五音のはしめの字なりいきくちにひみ○りゐより以下をは(し(イ撝)　い(イ撝))みな女聲といふ也さてさかといふ言葉(詞イ)はさかゆと云ことはなり酒宴はみな人のさかへたのしむゆへ(く(イ撝))也しかれはさかともさきともさゝとも○○○(さけとも(撝イ))さてともいはむみなおなしことは○○(なる(イ撝))にとりて男聲をもちゐるをむねとする故にさかといふへき也さて古點にあちさけのみわと點せるにつきて先達これを釋するによきさけはみのうかひたれはあちさけのみはとつゝくるなりといへりまことにさるかたもはへるへきにやしかれとも是は神のさけをみわ

晋張勃吳錄云長城若下酒有名溪南曰上若北曰下若并有村村人取若下水以釀酒醇美勝雲曜吳興記云上若下若村併出美酒

正辭按ニ此文古事記ノ全文ニハアラズ仙覺カ釆要シテ引タル也記傳廿三五十三丁には土佐國風土記云とて倭迹々媛以下を戴せたれど古本に據にこれより以下は風土記の文にはあらず又按に萬葉緯に引るにも倭

といへはうまさかのみはとつゝくる也その濫觴は神の御ために作りたりけるさけのことにめてたかりけれはうまさかのみはとはいふ也神酒とかきてみはと訓するはこのゆへ也此事土佐國の神河水をもちて爲ニ大神一釀レ酒たりけるかことにめてたかりけれはかの河の名をとりて神酒をみはと云なり唐朝に上若村（うへわかむら）中若村（なかわかむら）下若村（しもわかむら）と云三の村ありこれ一河の流也而上若村の川水は最上の美酒也中若村の川水は上若村の酒の味にをよはされとも是美酒なり下若村になりたれはすへて酒の味なしたゝよのつねの水也しかれ共この下若村の水をもちてつくりたるさけ餘所の酒にすくれて最上の美酒也故に詩に酒は是下若村の所レ傳頗甚美也とは云也このやうに我朝にとりては神河水にてつくりたる酒無雙也ける也土佐國風土記云神河訓三輪川源出ニ此山之中一屆ニ（于（イ墒））○伊與國水清故爲ニ大神一釀レ酒也用ニ此（世（墒イ））河水一故爲ニ河名一也（訓神字爲三輪者多氏古事記曰崇神天皇之世（イ墒））倭迹々媛皇女爲ニ大三輪大神婦一毎夜有ニ一壯士一密來曉去（イ墒）歸皇女思奇以ニ綜麻一貫レ針及ニ壯士之曉一去也以レ針

貫レ襴及レ旦也看レ之唯有ニ三輪一遺レ器者故時人稱爲ニ三輪村一社名亦然云々此由緣のことくは神酒をみはと云彼神酒氣味すくれたれはうまさかのみはとはよめりとえられたりこれにつきて又尋（由（イ墒））○ことはうまさかのみはとつゝくることはまことにそのいはれあり古歌にうまさかのみむろのやまなとよめるはいかにといふをいつれのことものを云に文字を略すること常のならひ（わ（イ））なりしかれはうまさかのみはといふをはの字（わ（イ））を略してうまさかのみむろといふなりといへり○○今案乃（是な（イ））はの字（之（イ墒））をりやくするもさることにて三輪といひ三室（するにわ（イ））と云は只同（局（イ））事にみえたりされは萬葉集の第三卷登ニ神岳一山邊宿禰赤人作歌には三諸之神名備山にと詠なり可レ思レ之

青丹吉奈良能山乃（あをによしならのやまの）云々　青丹よしならとつゝくる事先達等これを釋するに其義まち／＼也或は青ゐかく丹の貝（具（イ墒））のあをにをならさかにてとりけり外の青によりもよかりけれはあをによしならといふ也と

の字の上に多氏古事記曰崇神天皇世の十一字ありさて歸な去着な看に作れり

いへり或崇神天皇十年秋七月丙戌朔己酉武埴安彦埴（墒）與妻吾田（あだ）媛（ひめ）謀反逆として師を興して忽至各道を分て夫は山背より婦は大阪より入て帝京を襲する時天皇五十狹芹彦命をつかはして吾田媛○擊師ヲ（イ墒）即大阪に遮吾田媛殺盡其軍擊斬ッ（イ墒）後大彥與彥國葺をつかはして山背に向て埴埴（墒）安彦を擊以二忌瓮一和珥の武鐰鐰（イ墒）坂の上に鎮坐て則精兵卒卒（イ）遮二那羅山一といふ也委見日本紀第五爰忌瓮を以て和珥武鐰坂上鎮坐といへり此忌瓮はあをに也されは青瓮瓮（イ）吉那羅とは云也あをにといふナシ（イ）は訛也といへり已上の義先達等の釋にて侍は此等にてうとたすへし但於レ物あまたの義あること常のならひなり所見一儀出レ之今このあをによしならとつゝくることはあをにといふは神にたむけたてまつるぬさのなかにあをにきてしらにきてといふこと有よりてあをにといふはあをにきてをいへることは也ならとつゝくることはかのにきてはならならとまとはるものなれはあをによしならとは云るなりしかるに楢の木はわが枝若葉何れの木よりもしなやかにてをのつから風ふきゝたれはまとはれやすけれはあをによしならとはよそへつゝくる也古語諷詞體如レ此事ナシ傍例おほかる也さて局（イ）かやうに楢葉によそへるゆへに萬葉集第十三卷歌中には帛呼楢從出出（イ墒）而と詠也又古今第十八卷貞觀局（イ）御時萬葉集何代撰乎と被仰ける時文屋康秀或有レ材奉歌神無月（かみなつき）時雨ふりをけるならのはの名におふみやのふることとそこれと詠するもならのはによそふることは也可レ思レ之

伊隱萬代（いかくるゝまで）　といふ伊は發語詞也梵語には阿字をもつて爲二發語の詞一和語には伊字を以て發語の詞とする也いかくるゝまてとはかくるゝまで也伊積流萬（いつるま）代爾（でに）も如レ上自餘皆效レ之

綜麻形乃林始乃狹野榛能（とまかたのはやしはじめのさのはぎの）校（イ）

そまかたのといへるは林のしげくして杣山などの形のことくはやし初むる心也この歌の次の詞に右一首歌今案不レ似二和歌一歟（イ）とは凡和の歌と云は若は花にもあれ月にもあれよろづのことにをひて先詠

ずる人のよめる題を同しく詠するを和の歌とは云べし和と云は答義加義也而いま額田王の歌は長歌にも味酒三輪乃山を心なき雲のかくせるよしを詠ず反歌又おなじ長歌の心におなじ次に綜麻形之林始のうたは井戸王の和する歌ときこえたり而して前の長歌及反歌の心にあらざれば不レ似ニ和歌ニ云也

天皇遊ニ獦蒲生野ニ時額田王作歌

茜草指武良前野逝標野行云々この歌を釋するにあかねさすといふは天皇のみゆきなるかゆへにみかとをは日にたとへたてまつれはみゆきなれるをあかねさすといふ也次にむらさき野は山城也しめ野は大和なり彼御遊獦の間むらさきのしめ野をもゆきめくり給といふかと釋せり此義然るへしともおはえずあるひは紫野のしめ野の蒲生野にありといへり是はさもと聞ゆさてあかねさすといふ發句は帝を日にたとへたてまつれはみゆきのなれるをあかねさすとよそへむさることもはへるへき歟但これは古語のよそへことはのさまをみるはむらさきは根用とするもの也その根あかきものなれはあかねさす紫とつゝけ名也紅葉淺深ありといへとも同赤色の攝なりされは字訓の所にも紅をは淺赤とかき紫をは深赤とかけるは此儀也皇太子の答御歌に紫のにほへるいもをとつゝけ給へるもあかきを丹にといふことあれはむらさきのにほへるとは令詠給也

河上乃湯都盤村二草武左受常丹毛冀名常處女煮手乎

湯都盤村は所名也ゆつはといふはゆといとは相通なれはゆつといふはいつといふ同事也川上はみつのいつれはかはかみのゆつはといふ又つはといふはけなともおひすしてつるめきたることはなりつはいもといひつはきなといふは此儀也ゆつりはなんといふも又おなしくさむさすといふはくさの不レ生也されはかのゆつはのむらの草もおひさるかことくわれもつねにとこおとめにて君につかへむことをこひねかひて吹黄力自かよめるうたなり

私云湯都盤村は非所名歟可勘之磐村歟如何波多横
山何村有之云々
打麻乎麻續王白水郎有哉
うつといふはものをはむる詞の隨一也よきあさを（な（イ））
と云ことは也
天皇御製歌詞中
隈毛不レ落　くまと云は山のゆきあひいりたる所な
り洞なり
時自久曾　しくはしけき也時しげくといふ也
私云　日本紀第六活目入彦五十狹茅天皇垂仁天皇九（ナシ（塙））（校第（イ））
十年春二月庚子朔天皇命二田道間守一遣二常世國一令
レ求二非時香菓一香菓此云二箇倶能未一（縵（イ塙））今謂レ橘是也九十九年秋七
月戊午朔天皇崩二於纏向宮一時年百四十歲冬十
二月癸卯朔壬子葬二於菅原伏見陵一明年春三月辛未
朔壬午田道間守至レ自二常世國一則賚物也非時香菓
八竿八縵焉田道間守於是泣悲歎之曰受二命天朝一遠（域（イ））
往二絕域一萬里踏レ波遙度二弱水一是常世國則神仙秘
區俗非レ所レ臻是以往來之間自經二十年一豈期獨凌二

峻瀾一更向二本土一乎然賴二聖帝之神靈一僅得二還來一
今天皇既崩不レ得二復命一臣雖レ生之亦何益矣乃向二
天皇之陵一叫（叫（塙イ））哭而自死之群臣聞皆流淚也田道間守
是三宅連之始祖也以レ之案に時自久曾雪者落等言
云々（云（イ塙）依之下（イ塙））非レ時雪はふると。歟下依レ之其雪時無如とよ
めり非時之義無レ疑歟無間曾雨者落等言と云はひ
まなくしけき儀ときしくは非時趣なり能々可レ思
レ之
第三卷赤（局（イ））人不盡山歌云　白雲母伊去波伐加利時
自久曾雪者落家留云々これも非時雪のふる義歟可
レ思レ之
過二近江荒都一時柿本朝臣人麿作歌詞中玉手次畝火之
山乃檀（橿（イ塙））原日知之御世從
たまたすきといふこと此卷の中舒（舒（塙イ））明天皇幸二讚岐
國安益郡一之時軍王見レ山作歌の詞の中に珠手次懸
乃宜久なとよめるは人のかくるたすきときこえた
り今の歌の玉手次はことははおなしけれともしか
にはあらずこれは耕レ田詞也うねひのやまをいひ

いたさむためにたまたすきとはをけるも也田に畝あるかゆへなり玉はものをはむることは也

順和名釋ニ畝字一引ニ唐令一云諸田廣一步長二百四十步爲レ畝。百爲レ頃 云頴反 今案者今之法六町六段二百四十步也

私云論語第一云子曰導ニ千乘之國一馬融曰導者謂レ爲ニ政教一也司馬法六尺爲レ步々百爲レ畝々百爲レ夫々三爲レ屋々三爲レ井々十爲レ通々十爲レ城々出ニ革(イ)軍車一乘一然則千乘之賦其地千城也居地方三百一十(イ墒)六里有レ可レ准ニ公侯之封一乃能客レ之雖ニ大國之賦一亦不ニ是過一焉馬融者依ニ周禮一云々畝者百步歟

橿原乃日知之御世從とは大日本國人皇第一帝神武天皇三月辛酉朔丁卯にみことのりをくたさしめてのたまはくわれひんかしをうちしよりこゝに六年になりみたりまさに山林をひらきはらひ宮室をおさめつくりてつゝしみて寶位にのぞみてみたからをしつむへし觀夫畝傍山の東南の橿原の地はけたしし國の中區也みやこをつくるへしこの月にすなはちつかさ〳〵におほせて經ニ始帝宅一故古語稱まうしていはくうねひのかしはらにしてしたついはねに宮はしらふとしきたてゝたかまのはらにちきたかしりてはつくにしらすすめらみことゝいへり委見ニ日本記第三一

阿禮座師とはむまれましますと云ことは也をよそあらすといふはちらすと云詞也胎内にはらまれたるこむまれいつるはちる義也しかれはあれましゝといふ也

神之書樛木乃彌繼嗣爾(かみのあらはすこかのきのいやつき〳〵に) 此句如ニ古點一者神のしるさるまもりきのいやつき〳〵にと點す或本にはつけの木のと和す樛字つけと和せん事未レ知ニ誘例一何今勘合ニ其心詞一かみのあらはすとかの。。いやつき〳〵にと點する也玉篇書字注レ之書者著也と云り故かゝてあらはすと和する也神は人のおかしあやまちをとかめ給ふものなれは神のあらはすとかのきのとはよそへつゝくる也次樛の字とがと和することは勘レ之者玉篇云樛 居秋切 詩曰南有ニ樛木一下曲

*正辭按玉篇料作枓下同勾作句
△廣韻云作曰下同
◎料作蚪

曰レ轇料同レ上爾雅云下勾（句（墧））曰レ料廣韻下平聲卷第二云轇說文云下句（イ）云轇詩曰南有轇木傳云木下曲（イ）也居料切しかれは轇木をとかのきと和也自拗ニ和語一とかといふはもとのまかれるといふことは也ととい（ナシ）ふはもとかといふはかゝまれる義なり次拗ニ傍例一者此集乃中にとかのきのいやつき〳〵にとよめる歌兩三首有レ之傍例明白なる歟

青丹吉平山平超（あをによしならやまをこえて）　此句古點者あをによしひらやまをこえてと點ず　あをによしならつねのことも也不レ可レ有ニ相違一

天離夷者雖有（あまさかるひなにはあれど）　此とはあまさかるひなと讀人おほき歟この字聲によりてゐなかはゆくすゑはるかなれはそらのひきにみゆれはあまさかるといふひなとはゐなかをいふなりと申也此義不レ爾歟日本紀のしるし（紀（墧））歌はみな文字の聲をさしたるにあまさかるひなとさしたる也此心はひなとはゐなかをいふこのひの字をいひいてんためにあまさかるとかみによそへをく事は日のそらをめくり給ふことかみすちひとつをきるほともよとみ給ことなく長時不斷に空をさかりゆきたまへはあまさかるひなとは申也古語の諷詞のならひ一字をとらむために物の名を上句にをく事常のならひなりいといはむとてしらまゆみいそへともいひ鵜といはんとてしまつとりうかひなといふことし

百磯城之大宮處（もゝしきのおほみやところ）　大内には百官の直廬のやしきあれはもゝしきといふなり

友人木村氏以寛永年間古抄本及墧氏所藏抄本校訂今就木村氏本寫焉安政五年九月　況齋

正辭按補中抄卷十七に云手向草禮部本にはすきひ草とよめりてむかふと云義に付てよめる歟心よからず

萬葉集註釋卷第一下

白浪乃濱松之枝乃手向草幾代左右而賀年乃經去良武

一云年者經爾計武

此歌第一第二の句しらなみのはままつがえとつゞけたることおぼつかなし普通にはしらなみのよす(やうなる(塙イ))るはまといはんとてつゞけたる〇〇〇〇にやたゞしその義ならばおほやうなるべしこれは和語の心によらばはと云は白きことは也まといふはまはれることば(よりて(塙イ))也さくはまといふもしろくめぐりたりと云〇心に(こもり(塙イ))もちたれば白なみの濱まつとはつゞけたるなるべし第三の句或はたむげぐさと點じ或はすま(八(イ))ひぐさと點せり後の點は手向草とは手をむかふとかきたればすまひこそ兩人は手むかひ(出(イ塙))てまづ手をあはするものなれはすまひくさといへるはこれ推點歟たむけぐさ常事也てれ(の(イ塙))點につきてたむけぐさとは神にたてまつれるもの也神に奉るものを松の枝(イ塙)〇〇にかけをきたれば濱松かえのたむけ草とよめる也と云(也(塙イ))〇この義常の事也あしからず常陸國風土記に香島郡の舊聞異事を註すところに海上安是足之孃子歌曰伊夜是留乃阿是乃古麻都爾由布悉是(イ塙)在和乎布〇彌由母阿是古志麻波母云々(弖々(イ塙)利(イ塙))(同し(イ塙))是は濱松かえのたむけ草などよめらんためし事と聞えたりしかるを古老の口傳に濱松がえのたむけ草と云は女蘿を云なりされば(し(塙))こそ古松に女蘿のかゝりたるを詠ずと見えて濱松がえのたむけ草いくよまでにかとしのへ(み(イ))ぬらんといへるは理り相階て聞ゆる事なれと申也しかるを是を聞て疑ひなす人の云理りは(は松のこけ(イ塙))誠に相叶てきてゆたゞし女蘿を濱松とも又はひかげのかづらとも(けシ(イ塙))いへる事は見え侍りたむけ草といへる證據あるぞやと尋る事也誠に證據分明に注し出たるものいまだこれを見をよばず然してこの義は古老の傳説なり道理あひ叶たればさもやと聞ゆ無文有義得者用レ之の理り一旦にすてをき難き歟

古老傳說亦見板本萬葉集卷廿跋文

正辭按石山寺縁起第二卷詞書曰康保の頃廣幡の御息所の申させ給けるによりて源順勅をうけたまはりて萬葉集をやはらげて點し侍りけるによみさかれる所々おほくて當寺

今又和語のおもむきをもつてこれを按ずるにたむけといへるはたは手の義（むは高き義（イ塙））○○○○けは毛髮の義也しかればかの女羅手ながくして高き木○○（の枝（イ塙））にかゝれりと聞えたりかるが故にしりぬ（ナシ（イ塙））手向草と云事和（和する（イ塙））語に相かなふ歟古今の物名○（の（塙））所に（しよ（イ））さがりごけとよめるすなはち是なるをや又古老の物かたりに云村上天皇の御宇天暦五年十月晦日梨壺の五人に勅して萬葉集の歌を和せしむ而（るに（イ塙））して今の歌の第四句幾代左右二賀の句にいたりて是を和し難し依て源ノ順石山に參籠して此歌を和する才智をしるべき（き（イ塙）ナシ（イ塙））示現を蒙るへさの由觀音に祈請せしめて七ケ日夜をへてしかうして敢て示現なししかる間退心をおこして京宅に歸らんと欲す其夜大津の邊に旅宿す曉天にをよびて隣家の旅人出たつをみれば旅客の主人とおぼしきもの馬荷を付る一の卑夫あり片手をもつてこれを抑ゆ主人の云までをもつて抑ゆべしと云々爰にをひて順その意をえていくよまでにかとこれを和すさて此集の中にまてと云事には或は左右とかき或は二手とかけるは皆此義也私云ノ

以下低行

（他（イ塙））ニ濱成式云旨羅那美能一句波麻々都我延能一句佗牟氣倶佐三句伊倶與麻豆爾可四句等旨能倍爾計牟五句此式者光仁天皇御宇寶龜三年五月七日云々順等定て存知せしむる歟既に伊倶與麻豆爾可云々左右をまてと云○理（義（塙イ））は雖レ不レ知レ之此歌の第四句いくよまでにかとこれをよむべき條は不審なき歟ともに（但此（イ））今集には川島ノ皇子或ハ云ク憶良云々今或はいはく（但（塙））如ニ角沙彌紀濱歌曰ニ云々これを考べし手向草非ニ女羅ノ別ニ松羅とてこれありと云々

幸ニ于吉野宮ニ之時柿本朝臣人麿作歌詞中

澤二雖レ有といへるはおほくあれともといふ詞也日本記（紀（塙））に多の字をさはとよめる也

反歌

常滑乃絕事無久復還見牟（め（塙））

とこなへと云はつねになめらかなるいはは也

次長歌詞中　神長柄神佐備世須登云々

にいのり申さんさてまゐりにけり左右さいふもしのよみなささらおして下向の道ずからあゝしもてゆく程に大津の浦におほせたる馬に行あひたりけろか口つきのおきな左有の手にておほせたるものななしなほすさておのかさちまてよりさ云こさないひけるにはしめて此心なささり侍けゐさそ

かみながらと云は日本記第廿五巻に惟神(惟神者謂隨神道亦自有神道也)紀(塙)局(イ)かみさひさすと云せ(イ塙)はかみさびすと云なりおとてさびをとめさびなといふがことしせすといふすの字は詞の助なりかみ正辞按ず恐せ訛すさひせ○ると云にはあらざるべし高殿といふはさ(イ塙)樓閣也かさならずしてたゞおほきにつくれるをば大殿とはいへどもたかどのとはいふべからず

疊有青垣山○之神乃山(イ)

たゝなはるとはかさなれると云也山は似屏風などいふ心なり屏風のことくにたゝなはれる也

山神古點のことくならばやまかみと點せりてれよろしからずやまづみと云詞なり

遊副川之副(塙)

よしのにある川の名也かしてにはゆかはと云也こかや(イ塙)れおなしこと歟

山川母依弖奉流神乃御代鴨○さいふは(イ)○○○

山にある川をやまかはといふ事には詞(イ塙)あらずやまもかはもよりてつかふるかみの見よといふ詞也是はかみにいひつらねたるやまづみのたつるみつきとはるべにははなかざしもち秋まではもみちかざた(イ塙)せりと云は山神のまもりめぐみてたて給ふみつきなりゆふかはの神もおほみけにつかへまつるとかみつせにうらはらたてゝしもつせにさてさしわたな(イ塙)ナシ(イ塙)しと云は河伯のまもりめぐみてたて給ふみつきなりこれをかさねていふ詞に○山川もよ里てつかふてたまふ(イ)や(イ)りるとは詠する也結ふ

幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌

嗚呼見乃浦爾船乘爲良武㛊嬬等之珠裳乃須十二四寳嬬(イ塙)

三都良武香

この歌頭句古本にはうみのうらにと點せり是は呼を(イ塙)の字和せられず又或本にはをこのうらと點す是和(イ)亦よろしからず是をあみのうらと和すべし嗚呼の雨字あとよむ常の事也されば五節のかためきの夜あゝといふて舞をばからすなきの夜といふからすなき(イ)ぬ(塙)ひ(イ塙)といへり就中今の歌は尤網浦といふべしとなりて

の集第十五卷局（イ）當所誦詠古歌云安胡乃宇良爾布奈能
里須良牟乎等女郎我安可毛能須素爾之保美都良武
賀この歌の注云柿本朝臣人麿歌云安美能
宇良又云多麻母能須蘇爾これは今の歌を指なり又
第三の句或本には之比（イ塙）都末度毛能と和すしか
るに當所誦詠古歌の習替句をもつて注し出し替ら
ざる句にをひてはこれを不レ擧故に今の歌の中の
○五文字是をことめづらかおとめ（イ塙）といふへきなり
劔著手節乃崎二今毛可母大宮人之玉藻苅良武
この歌の第一二句のつゞけやうはたぶしのさきは
所の名なりこのたぶしのことばをいひいでんため
にたちはきのと云諷詞をかみにをける也たぶしと
云はたはことばの上の助けふしはもの丶ふしとい
ふ詞なりもの丶ふしはあしきともがらを降伏すれ
ばもの丶ふしといふなるべしもの丶ふといふもお
なじ事なりもの丶ふは帶劔の器なればたちはきの
たぶしとつゞけたるなり
潮左爲二五十等兒乃島邊榜船荷妹乘良武鹿ら（イ塙）荒島廻乎迴（塙）

しはさゐ一義に云うみのしはさしみちてゐたるを
云なり一義に云塩さき也云々きとゐとは同韻相通
の義歟自本兩義なりといへども今の歌の心にては
塩さしみちたらんはふなのりせん事たよりなるへ
し心くるしくおもひやるべきにあらずしはさきを
しはさゐといはん事はこの歌の心にかきあひて聞
ゆ塩さゐは浪あらき事によめる事この集の中に傍
例一に非ず第三卷局（イ）の歌の中にいはく塩左爲能浪乎
恐美淡路島磯隱居而云々第十一卷局（イ）にいはく牛窓之
浪乃塩左猪島響所依之君爾不相鴨將有云々第十五
卷にいはく之保非奈波麻多母和禮許牟伊射遊賀武
於伎都志保佐爲多可久多知伎奴云々これらをもつ
ておもひ合すべきなり
吾勢枯波何時行良武巳津物隱乃山乎今日香越等云
隱の山は伊勢國也此歌の中の五文字古點はをのつ
もの也其意不分明歟仍今をきつものかく○○○○れいの山
さ和之おきつもはかくれたる物なればおき（イ塙）
○○○○○○○○○○○○○○○つものかくれの
山とよそへつゞくべしされば此集第十一卷局（イ）の歌に

もをきつもをかくさふなみのいはへなみなとよめりたつた山をよむにもをきつしらなみたつた山とよめるかことき也先年の比常陸國にてあるさかしかりし老僧の古修學者にて侍りしが算(竿(イ塙))道の事共なとかたり申しなかに算(竿(イ塙))術の書籍の中に已算(竿(イ塙))畢とかけるは算(竿(イ塙))にをきをはりぬといへる也乃至金銀綿布或は五穀等納所若は下行帳等に書通(連(イ塙))員數畢て已上何十何兩等とかけるはをきあけていくらといへることば也云々

去來見乃山　おなしく伊勢國也

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌詞中隱口乃泊瀬山者

この詞古點のことくならば或はかくらくのはつせの山或はかくれくのはつせの山或はこもりえのはつせの山今撿がふるに此和古語に相かなはずこもりくのはつせの山と云へし何を以てか知事をうるとならば此集第十三卷(局(イ))の歌の中に雨所有之一所に云己母理久乃泊瀬之河之上瀨爾伊杭乎打下瀧爾眞杭乎格云々又一所の歌に己母理久乃波都世乃加波乃乎知可多爾伊母良波多々志己乃加多爾和禮波多知弖云々問(因(イ塙))撿日本記(紀(イ塙))曰大泊瀬幼武天皇六年春二月壬子朔乙卯天皇遊于泊瀬小野觀山野之體勢慨然興感歌曰擧暮利矩能播都制能野磨播伊麻拖智能與慮斯企野磨和斯里底能與廬(盧(イ塙))斯企夜磨能據暮利矩能播都制能夜麻播阿野儞于羅虞波斯阿野儞于羅虞波斯云々而多以かくれ野と和す未見其據をよそ隱の字或はかくれと訓す爲隱　礒隱　○○○○○○○○○○○○○○○等の如き也或はしのひさよむ隱男等の如し或はこもりさ訓す冬隱(イ塙)○○○○○　眉隱等のことときなりみなこれ其讀ありといへともことにより所に隨てこれをよむ至隱口泊瀬山者かくれしのび等の訓不可用之眞名假名歌の所に不書之故也又或所者こもりえと訓す其の心をえず凡書此詞事或隱來或隱國或隱久々或隱口等也然者來國久(口(イ塙))(ナシ(イ塙))○皆是くとよましめんがためなり江とは若口の字の草大にして亂江歟次

釋ニ其詞意ニ者長谷とかけるは正字也和語の習ひ一○(字(墒メ))におゐてあまたの心ある中にはといふになかしと云心有せはせはき也さればはせといふはながくせばしといふこと也しかるをはつせといへるつは詞の助け也泊瀨とかけるはその訓あたれる故にこれをかく假字也はつせといふは無ニ別風情ニ(流(墒イ))ながたにといへることば也かみの諷詞にてもりくとをけるははつといふことば耻る義にかよへばこもりくのはつといへる也たとへば羽束(羽束(イ墒房書))はばづかしの(ナシ(イ墒))もりといふをもはづることばによそふるがことし

又或所海小船泊瀨と書之これによりてはつと云は西國者小船謂ニ之波都ニ云々然而此義又別歟泊字訓ニ之波都ニ者極義也布爾波(豆々(イ墒ー))。○等云是也有ニ此諷(諷(イ))詞ニ故且云ニ海小船泊瀨ニ者乎

安騎野は大和國也吉野山のかたにありといへり文武天皇の父草壁皇子かの秋の野をおもしろからせ給ひておりふしには行啓ありける也その御あとをしたひ給て文武天皇いまだ皇子にておはしましけるときわたらせ給ひて御夜宿ありける成べしかのみち〳〵のあひだはつせ山をとをらせおはしましけると聞えたり坂鳥とはさかのうへより朝にとりのわたるをあみをはりてとるを坂鳥と云

三雪落河野(騎(イ墒))の大野とよめるはかならすしもそのときに雪のふりたりけるに○あらざ(は(イ墒))○○(りけ(イ))るにやあきと云ことばのあかきにかよひたれは雪のふりぬれはあきらかなるによそへてみゆきふるあきのおほ野とはよめる也たひやとりせすむかしおもひてと云はたびやとりすと云ことばなりせは詞のたすけなるべし

短歌　阿騎乃爾宿旅人打靡寐宿良自八方古部念爾

初の句おほくはあきのゝにと點せり然而古歌のならひ五文字の句かならすしも五字ならす四字よめる事これおほし此集にも見えたり日本記(紀(墒))(紀墒)風土記等の歌にもおほかるべしうちなびきとはぬるをいへる也いにしへの事をおもふにいもねられしやもとよめるなり

○正辭按し恐れ訛

*正辭按う恐ふ訛

夏草苅荒野者雖有葉過去君之形見跡レ曾來師

古點にはまくさかるあらのはあれとはすきさるき（く イ塙）みかかた見のあとよりぞこし云々見ゝさと云はすすき也長歌云はたすゝきしのをゝしなみとよめり第二句あらのはあれどゝよ見ではその理分明にきこえずあらのにはあれとゝきこえたりよりて（に イ塙）この字を點じい（○れ）したる也葉過去といへるはそらこ（はゝ イ塙）とのは也かのひなめの見このふることになりたまひたれは葉すきゆくとよめる也すゝきかるはとのあらのにてはあれどもきみがかた見のあとよりきたりたまへるといへるなるへし

東野炎立所見而　あづまのとは東國の野をこそ申侍るに此野をあつまのとよめるいかに侍るにかもしあつまうどをいふにも邊鄙のあづまなどいふてとも侍れはこの野も都にあらざるいやしき野といはんとてよめるにや

藤原宮之役民作歌詞中

荒妙乃藤原我宇倍爾（荒 イ）　これは藤といはんとてあらたへと云諷詞をかみにをけり藤のはなはいたくこまやかにもあらぬものからうつくしけれはあらた（も イ塙）へのふぢといへりぬのゝ衣をよめるに○あらたへのぬののきぬ（ナシ イ塙）をだにきせかてにといへるこれにおなしきか

食國　とはおほやけにみつきものそなふる國を云也

磐（盤 塙）**走淡海國之衣手能田上之**とつゞけたるは淡海國といふはあはうみのくにといふてとなれはいははしる水はあはのたつものなればよそへつゞくるなりあはうみとはしほうみに○あらざる水うみなれ（は イ）はあはうみと云衣手能田上やまとつゞけたるは衣の袖は手のうへにかゝれはよそへたる也

眞木佐苦檜乃嬬手乎　とは檜の木は木の中に殊に良木なれば宮造の材木にとりもちひらるれは眞木のさくそうき（いは 塙イ）といふ也嬬手とはつまと云はつゞくと云ことは又つむといふ心をもかねたり手はなかしといふことは也心は宮木の材木をいかだにつみてながせるを云也

物乃布能八十氏河といふは先達の異義區也一義云ものゝふとは武士也つはものは弓箭を持るものなれは矢といはんとてものゝふのやそうぢがはとつゞくる也一義云武士の姓は八十あれはものゝふのやそうぢとつゝくる也ものゝかずの中に八十をおほかることにいへる算術の法也九々八十一をもちて最初の大數とするが故なり一義云物部八十氏といひけるものを宇治○川(イ塙)のかみにをかれたりければものゝふのやそうぢかはと云也云々

鴨自物水爾浮居而　此句古點にはかもよりもみづにうきゐてと點せり然而此集の歌の中にしゝしものともとりしものともかもしものともよめりしゝしものと云は鹿の事也しもといふは詞の助自餘みなおなじかるべし

不知國依巨勢道從　此句古點にはしらぬくによりこせちよりと點せりしらぬくに何國ぞや頗似荒涼歟今仰推察之いそのくにと云へし大和國礒部(イ)國(イ)上郡○○○礒下郡(塙イ)あるが故也むかしはこほりをくにといへることおほしよしのゝ國ともいひなにはのくにともいへり常陸國風土記二左にはにひはりのくにをかべのくに三左つくばのくにかしまのくに十七右なかのくになどいへりしかれはいそのこほりをいその國といはん事傍例あり是かのいそのくにによりこせちよりふみをえるおへ(イ)かめもきたれりとよめるなるへしうたがひていはくもしいそのくにといふべきならばもしは正字にもかきもしは眞名假名にもかきてわづらひなく不審なかるへし不知とかけるはいさ也なんそ是をいそと云へきやこたへていはく不知とかけるはいさなれば女聲によぶときはそといふ同内相通の中の初後相通の心也若又男聲をもちひばいさと云へしをよそ同韻同内の字におゐてはことにしたがひてこれをよむ今はしめたるにあらず嶺峯(塙イ)字うちまかせてはみねなれ共又用男聲時にはみなと云かことし凡此集の習ひ正字假字義談等をかきまじへたり未通賢鑒文士之堪否妄任管不(イ塙)見卑賤之凡慮勿謗通神廣才英(イ)之豪筆努之

續日本紀卷廿九ノ十六

我國者常世爾成牟圖負留神龜毛新代登泉乃川爾

史記曰○龜者天下之寶也與レ物變化四時變レ色居神(イ墒)而自匿伏而不レ食春蒼夏赤秋白冬黑

態氏瑞應圖曰王者不レ偏不レ黨尊ニ用耆老ニ不レ失能(イ)故舊(イ墒)澤(イ墒)レ政集ニ德澤ー流洽則靈龜出顧野王符瑞圖曰青偽道行政(イ)馬白髮尾者神馬也孝經援神契曰德協レ故至ニ政(イ墒)山陵ー則澤出ニ神馬ー仍勘レ瑞或曰白雁是爲ニ中式(イ)白鳥(イ)瑞ー靈龜神馬並合ニ大瑞ー然文者相ニ當賢王(イ墒)聖主之御宇ー神龜出來事詠也」それにとりてふみをへるあやしきかめといへるは漢朝にも龜背負ニ八卦ー出來たりけると申侍るにやかゝる先蹤はべれば帝(イ墒)道德の瑞相を諷詠歟又我朝にも靈龜元年八月己未廿九日朔丁丑左京大夫從下の大初位(イ墒)高田首久比麿獻ニ靈龜ー長七寸潤六寸左眼白右眼赤頸(イ)著ニ三公ー背負ニ七星ー爾(イ墒)前脚並有ニ離卦ー後脚並有ニ一爻(墒)ー腹下赤白兩(イ墒)點相ニ次八字ー文三字傍書(イ)又天平元年五月甲子朔己卯十六日ナシ(墒)十京職大夫從三位藤原朝臣麿負レ圖龜一頭獻上以下廿四字夾注(イ墒)知(イ墒)長五寸三分潤四寸五分其背有レ文云天皇貴平知百年公云々是以後神龜六年爲ニ天平元年ー云々我朝ふみをへるかめの勘文等藤原宮遷都以後のことなりといへともすへて負レ圖龜の事をあらはさんがために所ニ書載ーなり又且者上古賢者未來の世をさしかゞみて聖德下(イ)○具はり給へる御代にはかゝるへし令(イ)と今ニ聞知ー事かたかるへからさる也新代登といへるは不レ可レ有ニ別意ー計許(イ墒)ー新都をいはひたてまつることは也

眞木乃都麻手乎 如レ前 百不足五十日太爾作

五十をばいとよめばいもじをいはんためにもゝたらずとをける也百にたらざるかずにはいづれにもいふべし

伊蘇波久見者神隨爾有之　とはいそはくとはそこばく也神のまゝならしとはまとの神のまゝにてはあ

らず此卷のはしめつかたの歌にもみえたるかことく帝を神と申也

藤原御井歌

埴安乃堤上爾在立之見之賜者云々

埴安と云は所の名にも侍へらすしかれ共これはかの藤原御井をはうせられける土をはこびをきたる堤の上に立て眺望したるにやそれをはにといふかの土をやすめをきたれは埴安といへるなるへし

日經乃大御門と云は東のつかさされば春の山路はかみさひたてりとつゝけたり東は春をつかさどる方なるが故なるべし背友の大御門といへるは此門にあたれり

影友の大御門といへるは又南大門なり初の二は日の經緯によりて方角をあらはせり後の二はかさねて山の陰陽をあらはせる也いま撿四方陰陽等者日本書紀第七卷曰稚足彥天皇五年秋九月令諸國以國郡立造長縣邑置稻置並賜楯矛以爲表則隔山河而分國縣隨阡陌以定邑里○以東西爲日縱以北南爲日橫山陽曰影面山陰曰背面是以百姓安居天下無事焉

高知也天之御蔭天知也日御影乃水許曾常婆常爾有米御井之清水

といへるはたかくしられてそのかげもうつろひそらにしられて日のかけもうつろへる水てそとゝさ○にあらめとよめる也

短歌　藤原之大宮都加倍安禮衝哉處女之友者之吉召賀聞

此歌落句之吉召賀聞如古點者しきてめすかも云々これその心はおなしかるへしといへとも吉をきなとよむへきにあらず今しきりと點せるは吉文字のちとりとは同韻相通也されば千手陀羅尼の悉吉多伊蒙をばしきりたいもうとよむての心也こせ山のつら〳〵つばきつら〳〵にとよめるは椿はつる〳〵としたるものなれば目もかれずみるによ

そへたる也人の物を見るにめもはなたず見るをつら〳〵みると云かごとく也

朝毛吉木人乏母亦打山行事跡見良武樹人友師母 友(イ)

あさもよひと云ことふるくは炊二朝飯一義なりと釋せりしかれともこれはかならずしも飯をかしく義にはあらさるにやもよひと云ことばによりて朝飯のよしにいひなせるなるへし只寒天にはいつも爐邊をはなれがたく大切なるなかに燎レ火こと朝にはことにすくれたればあさもよひきとつゝくることはあしたにもえてよき木といへる。也(イ擕)もと云はもゆることば也よもぎをもぐさといふがごとし さ(イ) 木人とは樵夫を云といへりともしも。はなさけある人のこゝろにはかの樵夫がをのまさかりやうの物なごうちかづきて山に出入もめづらしくみゆる也

引馬野　三河國也

いつこにかふないてすらん は(イ擕) ○○のさきこきたみゆきしたななしをふね あれ脱歟　安禮の崎三河國こきたみゆきしとはこきめぐりゆきしといふ也迂と云はめくる詞也た たみ(イ擕) なゝしをぶねとはちいさきふねにはたなをせねばたなゝしをふねといふこふねををふねと云は本韻につきてよぶなり諸の物の名に小なるををといふこの義也

ながらふるつまふく風のさむき夜にわかせのきみはひとりかぬらん

ながらふるつまと云はよるの衣をふみくゝみてねたるつまをふく風もさむきよにわがせのきみはひとりかぬらんといたはしくおもひやりてよめる也

暮相而朝面無美隱爾加氣長妹之廬利爲里計武

此歌古點にはよひにあひてあしたをもなみしのひ 局(イ) にかけなかきいもかいほりせりけむと點ず第八巻緣達師 師(擕) 歌にはくれにあひてあさかはゞづるかくれのゝはぎはちりにきもみぢはやつけと點せり此二首かよはして撿二其心詞一をかくれのと云は伊勢國の名所也詠レ之あさかははづるかくれ 局(イ) ののとよそへよめり今の第一巻の歌あしたをもなみと點せるこれあさがはなしみと云べしさればよひにあひてあさがほと點ずべき也古點の 語(イ擕) 云やうをしるに朝夕

*正辭按須恐沛字訛

*正辭按漢書五行志注云霰雨雪雜下也今本釋名氷作水搏作傳安太平御覽十二引作冰作搏與此引合但無下也字

正辭按袖中抄十、十一、引萬葉集

を相對していふにもしはあさよひともいひもしは
あしたゆふべとも云ならはせる故なり第三句いま
のうたにはしのひにかと點ず其心おなしといへと
もかの第八卷のかくれ局(イ)のとよそへ詠するをもてお
もひあはするにかくれにかと云へしけながきいも
がといへるはこの○儀(イ)氣につきてあまたの心ありあ
るひは先相をいふあまげゆきげなどのごとき也あ
るひはそのおもひをいふけしきけはひなどのごと
き也あるひはなごりをいふさかけなんどナシ(イ)云かこと
しいまのけながきと云はこれその心にはあらずな
げき思ふをけながきと云也なげきと云もながきと
云詞也何事をもふかく思ふときにはいきのながく
つがるゝをいふなるべしいはりせりけんとはいを
ねたがると云也はりといふはねがふことば見まく
ほりなどいふがごとし
ますらおのナシ(イ塙)とものやたばさみたちむかひいるまとか
たは見るにさやけし
ともやとは弓いるにはふたりたちむかひているに
矢をてしおよび(イ塙)にはさみている也そのはさみたるやをと

もやとは云なりまとかたは伊勢のくになり
風土記云的形浦者此浦地形似的故以爲名也四(イ塙)
以下細書(イ塙)
「今已跡絶成江湖也天皇行幸須邊歌曰*麻須良遠
能佐都夜多波化(イ)佐美牟加比多知伊流夜麻度加多波麻
乃佐夜氣佐
今歌いまこの御製に同しき歟
あしべゆくかものはがひにしもふりて
はがひは左右はねのゆきあひ也
霰打安良禮松原住吉之弟日娘與与(イ)見禮常不飽香聞
此歌古點にはみぞれふりあられまつばらすみよし
のをとひむすめとみれどあかぬかもと點せり霰字
はみぞれあられもとより兩訓あり玉篇曰霰ハ思
見切暴雪　東宮切韻曰霰ハ*(雨雪雜下也又作霓
霏釋名曰霰ハ星也氷水(イ塙)雪相搏摶(イ塙)如星而散也)とも
に以て本說あり事にしたがひて可和之歟但し四
條大納言公任卿の和漢朗詠集の中にあられに用ら
る又今歌のごときは霰打とかけり打字其意ナシ(イ塙)あり

●可和雷歟次者下句ナトヒナトメトヨメリ（イ-塙）

上句又あられふるあられまづばらと云へき歟住吉
吉如レ江書籍者みなこれすみのえと云はすなはち
よしといふことば也又攝津國風土記釋ニ住吉郡名ヲ
曰本名沼名掠之長岡之國今俗略レ之直稱ニ須美之
叙ニ云々娘の字はをとめとよむ常の事也弟日と云
は男娘と云は女也此歌の心はあられふるあらきま
つばらのおもしろき事はすみよしとおもふ男女の
ごとく見れともあかずとよめる也私云くさまく
ら客去きみとしらませばきしのはにふにゝはざ
らましを右一首清江娘子進ニ長皇子ニ云々以レ之
思レ之すみのえのをとめとよむべきてとうたがひ
なし但長皇子の御歌に付て清江○進ニ此歌ニ也而
隔ニ三首ニ入たるおはつかし但歌の心はあられま
つばらとすみのえのをとひ○○○とみれどあかず
ととはをとめによみてたまひける○二首の歌を心
得あはすべき歟をとひは男の事不審也○考ニ本説ニ
歌のおもてはたゞ弟娘子と聞えたる如何
大伴乃高師能濱乃松之根乎枕宿抒家之所偲由

たかしのはま攝津國也此歌下句まくらにぬれとい
へしゝのはゆと點ず松がねをまくらにぬれどいへ
しゝのばゆと云へきにしあらず松がねをまくらに
てねたらんはもつとも家をしのびぬべきてとにて
そはべりぬべければまくらにねぬといへしゝのば
ゆと和すべき也
きさの中山
吉野山中にきさ山と云山ありかの山のすかた象の
かたちにゝたれはきさやてえしさと申也但し慥説
をしらすもし象王權現のましますによりていふに
やかの所の案内者に尋ぬへし
うぢまやま　大和國
或本　從ニ藤原京ニ遷ニ于寧樂宮ニ時歌詞中にはひにし
といへるはにぎはへると云詞也
玉鉾乃道行晩とはむかしはたびありきするに兵具
のなかにむねと鉾をもちければたまぼこの道と云
たまははてることば也まてとにむかしより兵具あ
またあるなかにたちはてなどいへるはこのこゝろ

歟

朝月夜清爾見者栲乃穗爾夜之霜落磐床等川之氷凝冷夜乎

あさつくよとは朝によりていつる月也下弦以後の月にあたれる也たへのほによるのしもふりといへるはたへといふはいつれの物にもうつくしきをほむるにいふことなればいづれのいろにもわたるべ（へ（イ））けれどもむねとはしろきをいふこと也たと云は高上の義也いづれにもすぐれたりといはんと也白色諸色本と云は是なりしろきいろあらはれ○○（て（塙イ））てふれる霜なればたへのほによるのしもふりといふいはどこ（さ（イ塙））○かはのひこりてさゆるよをといへるは河水のいはとこなどのやうにこほるといふ也こほりをひといふはひゆと云詞也

山邊乃御井乎見我弖利神風乃伊勢處女等相見鶴鴨

山のへのみ井は伊勢國也神風の伊せと云事さまざまに申あひたり或はみもすそがはに神の瀨と云瀨あり太神宮のあまくだり給へるところなりといへり或は神の御めくみをいふといへり日本記（紀（イ））云垂仁天皇二十五年三月天照太神伊勢國にくだり賜とき倭姬命に敎へてのたまはく此神風の伊勢國はすなはち常世の浪の重浪歸る國なりこの國に居とおもふとみことのりし給ふに（ナシ（イ塙））よりて太（大（イ））神のをしへのまゝにその祠を伊せの國に（す丶（イ））たつ仍齋宮を五十鈴川の上に興すこれをいそのみやと云すなはち天照太神はじめてあめよりくだり給ふところなりといへりたゝしこれは神風伊勢國と云名字をあらはすばかり也神風の根元未聞歟（因（イ塙））○勘曰伊勢國風土記云（夫（イ塙））○伊勢國者天御中主尊之十二世孫天日別命之所平治天日別命神倭磐余彥天皇自彼西○（宮（イ塙））征此東州之時隨天皇到紀伊國熊野村于時隨金烏之導入中州而到於菟田下縣天皇勅（且勅（イ塙））太部日臣命曰逆黨膽駒長髓宜早征罰（且勅（イ））天日別命國有天津之方宜平其國卽（卯（イ塙）卯（イ））賜標釣天日別命奉勅東入數百里其邑有神名曰伊勢津彥天日別命問曰汝國獻於天孫哉答（ナシ（イ））曰吾

不見此國居住日久不敢聞命矣天日別命發兵欲
覔(塙)
戮其神于時畏伏啓云吾國悉獻於天孫吾敢
不居矣天日別命令問云汝之去時何以爲驗啓
ナシ(塙)
曰吾以今夜起八風吹海水乘波浪將東入
此則吾之却由也天日別命整勒兵窺之比及中夜大風
四起扇擧波瀾(イ塙)爛光耀如日陸(イ塙)陸國海共(イ塙)與朗遂乘波
而東焉古語云神風伊勢國常世浪寄國者蓋此謂之也
(伊勢津彥神近令○住信濃國)天日別命懷來(イ)築
此國後命天皇則(イ)々々大歡詔曰國宜取國神之
名號伊勢○爲天日別命之村即(塙)地(イ塙)此國賜宅地于大
倭耳梨之村焉
(或本云天日別命奉詔自熊野村直入伊勢國
殺戮荒神罸乎不遵堺山川定地邑然後復
命橿(イ塙)櫃原宮焉
私云日本記第六活目入彥五十狹別天皇紀(塙)狹(イ)垂仁天皇廿五年

春二月丁巳朔甲子詔阿倍臣遠祖武渟川別和珥臣
遠祖彥國葺ナシ(イ塙)ナシ(イ)中臣連遠祖大鹿島物部連遠祖○千根十(イ塙)
大伴連遠祖武日五(塙イ)吾丈夫獻(塙)曰我先皇御間城入彥五
十瓊植天皇惟叡作(イ塙)惟聖欽明聰達深謙除(塙イ)捐
志懷沖退(イ塙)邈綢繆機衡禮祭神祇祇(イ)尅己勤
躬日愼一日是以人民富足天下太平也
今當朕世祭祀神祇祇(イ)豈得有怠乎三月丁亥
朔丙申離天照太神於豐耜入姬命託于倭
姬命爰倭姬命求鎭坐太神之處而詣菟
田筱篠(下同イ塙)幡筱此云佐々更還之入近江國東廻美濃到伊
勢國時天照太神誨倭姬命曰是神風伊勢國
則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲居是國
故隨太神敎其祠立於伊勢國因興齋
宮于五十鈴川上是謂礒宮則天照大(イ)太神始
自天降之處也

うらさぶる心さまみしひさかたのあめのしくれのながれあふみは

うらさぶるとはさびしきをいふ也此歌はしくれをあはれむ心ときこえたりそらかきくもりしぐるゝあめのながれあふを見ばしたさびしきこゝろざま（へん（イ塙））もみえしとよめる也

海底奥津白浪立田山何時鹿越奈武妹之當見武

此歌の發句古點にはみなそこのと點せり　謹考ニ其心詞ニみなそこのといひてはそのことはりあひかなはず海にはしら浪たつならひ也と云どもみなそこにしら波たつとはみゆべきにもあらずめにみえざればまことにいひいづべきにも非ずよりて今（ナシ（イ塙））海底の二字をわたつみと和すへしわたつうみのおきとつゞくる事は傍例これおほしをよそわたつみとは海神とかきてわたつみと和せり神をばつみといふ故なりいまこの海底。（に（イ塙））の心なるへし海神はむねと龍神をいふかの龍宮は海底にあればこれをわたつみと和すへし

遂考喜撰式には海底をわたつみといふといへり

されはこのうたの第三句に立田山とつゞけたりかの山の名此集の中に樣々にかきたり或如ニ今歌ニ立田山ともかけりこれ半假字也或龍田山とかく正字也或は多都多山とかく眞名假名也この歌に立の字にかけるは假名にとりておきつしらなみと云句につゞきたればしばらく立の字その心あるへし又正字。（た（イ塙））おもは°へてしたに龍の義をこめたることたくみなりとすへし歌の九品をたつるとき（り（塙イ））上が上といふはことうるはしくしてあまたの心ある也といへるはこのたぐひなるへし

文永六年二月廿四日記レ之訖　仙覺在判

建治元年十一月上旬比以ニ作者仙覺律師自筆本ニ敎ニ人抄寫ニ畢而後曰校合所レ略等悉令ニ書ニ入之ニ同廿八日書入畢　同廿九日一校畢　同二年六月五日以ニ抄寫本ニ書入畢同六日一校之

（以下十三字無（イ塙））僧正一乘院興福寺別當師實男」　玄覺在判

弘安三年庚辰春正月癸卯朔庚戌以ニ本集ニ一見了管見之所及押紙註レ之

權律師玄覺

（補）○末韻ヲオサムヘケレハツノ訓トガアルヘカラス然而此集ノ眞名假名ノトコロニハミナ奴波多麻トコレヲカクムハタマトモカケルコトハナキ也コノサハタマヌハタマトモニ

萬葉集註釋卷第二上

第二卷

如此許戀乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻死物乎

この歌第二句戀乍不有者と云はこひつゝあられずはなと云ことは也此類多以可出來下皆倣之

居明而君乎者將待奴婆珠乃吾黑髮爾霜者零騰文

ぬばたまともうばたまともいへるはよるをいふなりうばたまとはくろきたまと云心也よるはくろきいろなればうばたまと云へし日のくるゝをくるともくれともいふはくろくなる詞なりましてよるになりぬればいふにをよばず又あくともあしたともいふはしろくなる詞也よるはくろきいろなれば烏玉とも黑玉ともかきてうばたまぬばたまとも和するはこの心也野干玉とかきてうばたまとよめるはきつねは百歳すきぬれば妖艶の女と化する也百年を過ぬれば其儀老女となるが故にうばと訓ずへし然るを喜撰（和歌(イ)）○○式には髮をばむばたまと云夜をばぬばたまといふ夢をばぬるたまといふと別々にかきわけたりしかれともこの集にはよるをもゆめをもかみをもみなぬばたまとかける（り(イ)）眞名假名の歌ともにて勘見ときにそのかくれあるへからす萬葉集をこそ歌源とはするとなるに誰か是をそむきて異義をたてむや又日本記風土記等の眞名假名の歌とも丶萬葉にかはらざる也何れの書を本文としていひかふへきぞやおぼつかなしそれにとりてうはたまといへるは本韻也本韻はみな○末韻なり末韻なれとも其ことはりことにあひかなへるをあらはさんとおもふには義理相應の末韻をとりもちゐる也ぬばたまといへるはぬは寢義はは散義たまは神義也ねてちるたましゐゆめをかへすべきが故にぬばたまと云ぬることは又夜をもつて本とすればよるをぬばたまといへるなるべし

久米禪師娉㆓石川郎女㆒時歌

水薦苅信濃乃眞弓吾引者宇眞人作備而不欲常（可(イ)）將言。聞

この歌發句古點にはみこもかると點す雖㆑如㆓文字㆒其義不㆑可㆓相階（渚(イ)）㆒をよそこもと云こと苅てのちにこもといふいまだからざるときをばこもとはい

*う恐ふ字

はさるよし書籍の中に見たるところなり薦字これをくさとよむみくさとはすゝき也第一卷の歌に釋するがごとし今歌に水薦とかけるは假名なるへしみくさかるしなの丶とつゞくることはしなのとはしら野と云ことば也らとなと同韻相通也秋野乃おばないでなびきてしろくみゆるによそふる也萬木千草おはかりといへとも神祇をいはひかざりたてまつるに榊をみさかきといひすゝき（さ(イ塙)）をみくさと云へしみくさと云はすなはち見ぬ○といふ詞也日本紀(塙)記第一卷に天照大神あまのいはとにとぢこもり給ひしとき諸神憂レ之誘出（誘出(イ塙)）したてまつることを相議ときにも使ニ山雷ー者採ニ五百箇眞坂樹八十玉籤ー野槌者採五百箇野薦八十玉籤ー凡此諸物皆來ー聚ー集時中臣遠祖天兒屋命則以ニ神ー祝々之於ー是日神方開ニ磐戸ー而出焉依之信濃諏方明神乃み（に(イ塙)）○さやま（く(塙ー)）のかりに（は(イ塙)）○花すゝきをとりて見ぬさ○たてまつると云これなりしなの丶まゆみと云ことはしなといふはすなはちしらはなれはまゆみをいふにもしらまゆみと云ことなれはもつとも詞のたよりをえたり弓 又昔倍一千廿張以宛大宰府見續日本記（五字夾注(イ)）うまひとゝいふことはむかし百濟國より馬をこの國へたてまつりたりけるにいくばくもなかりければいみしく（難き(イ塙)）かたものにしてうまとはそのときにはいは（ふ）*うみゝ（ち(イ)）の○もの（け(塙)）とそいひけるそれを秦氏の先祖これをよくのれりけりさてみかとこれをいみしきものにせさせ給ひてうまといはんと云ことさだまりはじめていてま山と云やまにはなちてかはしめ給ひけりそのをりみかとのおほえ有ける人そこのうま（な(イ塙)）○は給はりてのりてありきけるされはこのうまにのりたる人をいみしくやむことなき人にしさる也さてそのかみはよき人をはうまもたる人の子といひける也それをこのよにはうまひとの子と云なりたゝひとのいふまうとのことと云は是也さひてとはこゝにはさびしめてといふことは也かの久米禪師娉ニ石川郎女ー時わがひかばうまひとさびていなといはんかもとよめるはおほかたのよき人を呼へるにはあらずかのをとめをいへる也されはをとめがかへし歌には見くさかるしなの丶まゆみひかず

してしひさるわざをしるといはなくにと。かへせ
る也
あつさゆみつらをとりはげひく人はきみの心をしる
人(イ塙)
べにぞひく
つらをとはつる也るとらと同内相通なれば男勢を
うちゐてつらといへる也
東人之崎乃篋乃荷之諸爾毛妹情爾乘爾家留香聞
あつまつとは坂東の人を云也のさきのはこのにの
をにもとは諸國のみつきものをばのさきと云也の
さきとはにのさきと云也はつはともいふおなしこ
となりこの歌の心はかののさきのはこのはなるま
しくゆひつきたるやうに心にいものとるとたとへ
たるへし
玉葛實不成樹爾波千磐破神曾着常云不成樹別爾
此抄に此歌を釋するにたまかつらといふは葛のな
かに花のみさきてみならぬかつらのあるを云也お
ほくは神のやしろなとにぞよみたるといへり是に
よりてこゝろうるに神のおはしますもりかやしろ
なぞの木をは人のおそれてきらぬものなれば年へ
たるはおほきなるも侍るに花さきてみのならぬ葛
なとのある也それがさすがにこたつさまなれば神
ぞつくといふならぬきことにとよそへよめる也此
歌大伴安麿卿娉巨勢郎女歌なれはみならぬと
きにはとはおもふこともならぬものから心をつく
すと云こと也又女のおとこすべきほどになりてそ
のおとこなければ鬼魅に領せらると云事あれはそ
れによそへてわかゝくるおもひをはとげさせずし
て神に領せらるなとよめる也さて巨勢郎女かかへ
し歌にはたまかつら花のみさきてみならすあるは
たかこひにあらぬわかこひおもふをとめとよめる
也これはうけひきたる歌なるへし
明日香淸御原宮御宇天皇代 天皇賜藤原
夫人御歌
この夫人をは字曰二大原大刀自一也此故に
わかさとに大ゆきふれりおほはらのふりにしさとに
ふらまくはのちとよませ給へる也

わかをかのをかみにいひてふらしむる雪のくたけしそこにちりけん

をか見とは虵龍を云也をよそ龍に四種あり所謂鳥龍金翅鳥也馬龍虵龍雑蛇跋難等也魚龍也豊後國風土記云球珠郡球覃郷此村有泉昔景行天皇行幸之時奉膳之人擬於御飯令汲泉水即有虵靇謂於箇美於兹天皇勅云必將有臭莫令汲用因斯名曰臭泉因為名今謂球覃郷者○也云々常陸國風土記云新治郡駅家名曰太神所以然稱者大虵多在因名駅家云々天下にあめ雪をふらしむるは龍衆不思議也されはを○みにいひてふらしむる雪のくたけしそこにちりけんとはよませ給へる也

足日來乃山之四付妹待跡吾立所沾山之四附二

有抄云山をあしひきと云に四義あり一には三方の沙彌か悪日に山をこしけるに大雪にあひてみちをうしなひたりけるときあしひきの山ぢもしらすしてかしのえだもたはみ雪のふれゝばと詠じければあしひきたる故にあしひきといふ也二には推古天皇山に入りてかりしたまひしに御足にくいをふみたてなやみてひき給ひけるより山をあしひきといふ日本記にみへたりと云々三には天竺に一角仙人と云仙人額に一の角あり鹿の足のごとく也道戒ありけれとも雨ふりて山のみちのすべりけるにたふれて足をそこなへりあしをひきしによりてあしひきといへり委見智度論第十七に云々四にはむかし天地さけわかれて日本の土泥いまだかたまらざりしとき人みな山にありけりとかくありきけるに跡のいりければ日本を山あとゝいひ○又やまとゝいふ是也山へをりのぼりするは足をひくに似たればあしひきと云也四義の中に第四の義をもちいるべしといへりあしひきの義いひなしひとつにあらすかやうにてとのおこりさまぐにいひのべられぬ

ればこのうへには見えたらん義を釋しあらはしてもよしなきことにはべるべけれどもことにおゐてあまたの義あるもつねの事也この歌のみちもいまの世はかりにかきるへからす過去遠々未來永々かきりもあるへからすしかるにこのたびにかぎりていふべき事のあらはれずしてやみなんこともうらみなきにあらすいまの世人毎にまことの故をさとらさることみつのたからあきらかに。し(イ)ら(塙)てをしみ給はんことのかなしきによりて見えさとりたる義をあらはすべしかつはさきのい(塙)四義あまたあるには似たれどもたゞそのをこりを。ひかへたるはかりなり三方の沙彌がふかき雪にみちにまよひてあしをひきけると云も天ぢくの一角仙人が雨ふりに山みちにたふれてあしひきけるといへるも推古天皇の御事も又日本乃土泥いまだかたまらさりけるとき山にをりのぼるが足をひくに似たりければと云もたゞ由緒をいひかへたるばかり也あしをひく義是(イ塙)也(イ塙)この一義はうるはしくあまたの義ともはいふにら(イ塙)たかはず山をあしびきと云ことはやと云はたか

き義まと云はまつむる義まとかなりと云詞なり ほ(イ塙)
○○○○○○○○○○○○○○○○○○（かくるこさなくさゝのほりたるをまさかなりといふ(イ塙)）しかるに山榛齋(イ)ナシ(塙)といふ。木(イ塙)はことにさかへたる木なりこの木はむかし筑紫のかたにおはかりけりことにさかふる木なる故にこの集の第七卷の歌にはあしひなすさかへしきみがほりゐしのとよそへ詠り山はたかくまとかなれはやまをいひいでんとする諷詞にあしひきとをける也あしびと云木なればあしひきといふたとへば櫻をさくら木ともいひかしはをかしは木ともいふがことし山榛齋(イ)ナシ(塙)はあしひ也然れは山榛齋(イ)ナシ(塙)とかきてやまと訓するもこの義也此道の賢哲いかてか覺悟せさらんや源順等も存知したりけるなるべしかつはすみよし玉津島明神宜レ無レ知レ見二焉天平二年庚午冬十二月大宰帥師(塙)(イ)大伴卿向レ京上道(イ)落之後還還(塙イ)入二故家一作歌三首中云焉妹爲而二作之吾山榛齋(イ)欠(塙)者木高繁成家留鴨云々

但この義家門第にあらずしてさかしらくむたてん(イ)者の誇

於詞林采葉抄足果山條云當集相傳八山齊也云云右於釋義者依爲秘曲不註之云云

*按さも下恐脱さ字

家器童となりぬへからん人にゆめ〳〵さかしむへからす

大船之津守之占尒將告登波益爲尒知而我二人宿之 う(墹)ふ(イに)

この歌の第二句つもりのうらといへるはうらなを占也津守連。といひけるは高名の占博士へいるさ 通(イ墹) 也(イ墹)
れば誦作の詞にも大津皇子竊婚石川郎女時津守 竊(墹)
連通占露其事皇子御作歌一首云々歌にも
津守之占尒將告登波とかけり發句に大船之とよめ
ることは津守といはんための諷詞也○○○○○○○おほふれはつれに
もあろくこさなし津にたる物なれは(イ墹)ナシ(イ墹)○○○○○○○○○○○○　されはおほふねのつも の(イ)
りとはよめりしかるをこのつもりを浦の名所の
中にかきたるものともみゆるはあやまりなり
日置皇子命贈石川女郎歌一首女郎字曰大名兒也大
名兒被方野邊尒苅草乃束之間毛吾忘目八
此歌發句如古點者おほなこやと點すおほなこか草 がさ(イ墹)ナシ(イ墹)
をかりたるに似たりいかなる事か傳へるへきおほ
なこをと云へしかやうの點は一字也といへともそ

の歌の心にたかふによりてはゞかりなから點しか ナシ(イ墹)
ふる也
古尒戀良武鳥者霍公鳥蓋武鳴之吾戀流其騰 さ(イ墹)
けだしといふことばはさはやかに。いふことばなりさはやかなるをばけさ〳〵なと云ことありけさ し(イ)
と云をきた。といふべしさとたと同韻相通の故也
かくのことさのことばのたぐひつねにわれも人もいひながらなにとも心得ざる事おほししかるを悉曇のならひ才覺をもちてその心をうる也 學(イ墹)
みよしのゝたままつかえははしきかもきみかみてと
をもちてかよはゝ く(墹イ)
はしきかもとはことのはのしげきによそへたる也
あきのたのはむけのよするかたよりにきみ。よりな に(イ墹)
ゝこちたかりとも
とは秋のたははにいでぬれば日をへてなびきまさる也こちたかりともとは人のいふことのいたましき也あきのたのかたよりによるやうに我は戀によりなん人の云ことはいたましくとも*よそへよめるなり

大夫哉行戀將爲○叫友鬼乃益卜雄尙戀二家里

この歌第四句ふるくはおにのますらおと點すいまはしこのますらおと點する也ますらおとは兵也されば增荒男とかきてますらおとよむ○おにのますらおと點せるにつきて有抄に云ますらおとは難義也この歌の心はわれひとりみひとつにして戀をせんすらんとなげくにわがたましゐをさへくだくとてそれをおにとよめる也されば我身とてもこゝろたましゐとてもこと物にはあらねともたましゐの名に魂と云あり魄と云ありこの故によめるなりと釋せりこの義しかるへしともきこえず鬼益卜雄とかけるはしてはしてのますらおといへる也なにをばしこめといふ是也しこと云は凶といふことはなり凶の字をはしこともよみわろしと○よむされば此歌の心はますらおのたけかるべき身にして諸友に心をかよはしてもおもはぬ人をわれのみや片戀せんとなげけどもしこのますらお見てなほこふるとよめる也

たけはぬれたかねはながきいもかかみこのころみぬにみたりつらんか

此歌は三方沙彌娶ニ園臣生羽之女ニ未レ經ニ幾時一到病作歌たけばぬれたかねはなかきいもかゝみとはたけはとはあぐるなりあけともたけともいふは同韻なりぬれとはまとはる也あぐればまとはりあけねばながきいもかゝみこのころみぬにみだりつらんかとよめる也此歌ををとめがかへすに

ひとみなはいまはながしとたけといへどきみがみしかみみたれたれとも

とよめるはひとみなはとはみな人はといふ詞をむかしは人みなはとたはくつかへる也みな人はいまはながしとあげよといへども君がみしかみゝだれたれとも君ならぬ人にはあげさせずきみをこそまてといへる心也女のかみをばおとこのあくる故也

遊士跡吾者聞流乎屋戸不借吾乎還利於僧能風流士

たはれとはなひく也心つよからずして人の云こと

になびくなりあだなりといふもおなし心うかれ
たれ(は(イ))ばうか〳〵しなと云もおなし事なり

今歌次詞云大伴田主字曰仲郎容姿佳艶風流秀絶見者聞者靡不歎息也時有石川女郎自成双栖(イ搞)之感恒悲獨守之難意欲寄書未逢良信爰作方便而似賤嫗己提鍋子而到寢側(搞(搞メ)側ナシ(イ搞)側(イ搞))哽音蹢(跼(房書))足叩戸諮曰東隣貧女將取火來矣於是仲郎暗裏非識冒隱之形慮外不堪拘接之計任念取火就跡歸去也明後女郎既恥自媒之可愧復恨心契之弗果因作斯歌以贈諺戲焉

されはこの歌はたはれおとわれはきけるをやとかさずわれをかへせりそらことのたはれおとたはふれいへりける也さく田主かかへし歌にたはれおにわれはありけりやとかさすかへせるわれを(そ(イ搞))たわれおにはあるとよめる也たはれると云事はゝ又はにろをこのむことばなればやとかさでかへせるわれぞまことのいろこのみなると云る也

吾聞之耳介好似葦若末(末(イ))乃足痛吾勢勤多扶倍思、

この歌古點にはわかきゝしみゝによくにるあしのはのあしいたわがせつとめたふへしと點せりその詞不分明よりて少々是を和しかへたりわかきゝしみゝによくにるあしかひのあなへくわかせつとめたふへしこの歌をは右依中郎足疾贈此歌問訊なりといへり第三句葦若末乃とかけるはあしかひなり葦芽といふはあしのつのぐみおひたる也あなへくと云はあしいたみてひく也あしかひは葦の苗なればあなへくと云ことばの葦苗にかよへばよそ(ナシ(イ))へよめる也つとめたふへしといへるはつゝみたまふへし也わかきゝのみゝによくに○と(は(イ搞))はあしをやむときてゆるわかきゝのことくまてとならはつゝみたまへとよめる也

右之姫(嫗(イ))爾(お(イ))爲而也如此計(許(イ搞))戀爾(つ(イ))將沉如手童兒

をうなとは老女を云也たはらはとは童女也よめる心(お(イ))はとしたかきうばのみて(身に(イ搞))やわかきをとめのやう

にてひにしづまんとよめる也
柿本朝臣人麿從二石見國一別レ妻上來時歌詞中
よしえやしと云はよしやといふてと也しえは詞の助けおはりのやしのしまた助け也
鯨魚取海邊乎指而和多豆乃
此句古點にはくぢらとるあまべをさしてわたつみと點すそのこゝろさらにあひかなはす今按にいさなとりうみへをさしてにきたつのと和すへしいさなとりといふは捕魚之詞也いさりと云がごとしもしこれをくぢらとるといはゞ鯨鯢は海中の大魚也いかでか海人たやすくこれをとるへきやしかのみならず近江天皇大殯之時太后御詠云鯨魚取淡海乃沖乎云々近江の海にいかてか鯨魚あるへきやはかりしりぬ假字なりと云ことをいさなとりの詞この集の中に十二ヶ所ある也假字義讀眞名假名等をもちひたること一樣ならずそのうちに鯨魚取五所鯨名取一所勇魚取二所不知魚取三所伊魚取一所合十二所也彼鯨魚取勇魚○不知魚取等みなおなじくこれをくちらとると和す皆是あひかなはすいつれもおなしくいさなとり也その故は勇はこれいさな也勇字これをいさと訓す姓中勇山これをいさやまと云かことし魚者是奈也日本紀を見るに魚塩地これをなしほのところといふ又此集第五卷歌云たらしひめかみのみことのなつらすとみたゝしせりしいしはたれみきといへりなつらすと云は釣魚也しかれは○○○○○○○○○○○○○勇不知兩種は假字也鯨魚これをいさなと和する事は鯨魚者洋中之大魚其氣力最勇健也しかればこれをいさと和す半義讀也次に又第十七卷歌昨日許曾敷奈位婆勢之可伊佐魚取比治奇乃奈太乎今日見却流香此歌中の五文字これをいさことると和すてしき相かなはすこれをいさなとりと云へし漁父能涉行泥沙故にいさなとりひちきのなだと諷詠する也抑伊佐奈登利之詞以何爲證者按二日本記一曰雄朝津間稚子宿禰天皇十一年春三月癸卯朔丙午幸二茅渟一

宮ニ衣通郎姫歌之曰等虛辭陪邏枳彌母阿閇椰毛異舍儺等利宇彌能波摩毛能余留等枳等枳於（払イ墒）（伱イ）○時天皇謂ニ衣通郎姫ニ曰是歌不レ可聆ニ佗（他墒イ）人ニ皇后聞必大恨（○カナラズウラミタマハン）故時人號ニ濱藻ニ奈能利曾毛也已上いまこのことはをよめる歌をみるにおほくはいさなとりうみとつゞけたり是則捕魚義なるか故に鵜の字を諷頌する鯨（魚イ）いさなとりの詞義理大旨如此也難していはく不知○勇魚などかけるところをいさなと和せんことは其諷もつともあたれり鯨魚はまさしくこれくぢら也何ぞあながちにいさなと和せんや如何答云如此此字訓て爲にしたがひところにしたがひて和しかふることは常のならひ也然るに鯨魚とかけるところをくぢらと和せばそのことはりさらにあひかなはずさきにいふがごとく鯨鯢者大魚也何漁父浮ニ蒼（滄イ）海之浪ニ輙捕之乎次に又其ことはを近江の海によすへからすかた〳〵そのことはりにかなはさるか故也次に鯨字まさしくこれくぢらなりといふにいたりては如此字訓或は隨譬喩或は依義理闇ニ

正訓ニ用ニ別和ニ者以可レ爲ニ風流ニ假令鴨頭草これをつ（墒イ）いきくさといふもし人これをかもくさといはゞ才人なんぞくちびるをかへさゞらんや金風これをあきかせと云もし人かねかせと云はゞ文士さだめてをとかひをとかむをや今このくぢらとるも又亦お（ん（イ））（び（イ））なしかるべし○○○○○○○○○○○○○○○○その（其心を得たらんもの和を加へし時たさへ（墒））證據（イ墒）せうごなしと云ともかゝるへき也そのうへくぢらをいさといふなり管見のともからはたとひ疑雲をひらき（イ）はらひかたくとも博覽の人におゐてはいかでかかゞみしらさらんや壹岐國風土記云鯨伏在ニ郡（紀（墒））西ニ昔（鄕（イ））（與平分注）者鮨鰐進レ鯨（々（イ墒））○走來隱伏故云ニ鯨伏ニ鰐並鯨並化爲レ石（相（イ墒））査去ニ里俗云○爲伊佐（鯨（イ墒））

八（イ墒）桑楚（イ墒）渦（イ墒）
私勘莊子七庚桑楚云夫尋常之溝泉巨魚無所還其躰而鯢鰌爲之制步仞之丘陵巨獸無所隱其軀而蘖狐爲之祥　元英註云鯢四足足の四ある也（イ墒）之頂也云々」私云海老歟海中の貝の類皆虫也ゑびは魚にあ（は（イ墒））（ナシ（イ墒））らす故に虫と註する歟尋は八尺也常もまた八尺也一倍の義也制は心にまかせて滿る（淤（イ墒））義也步は六尺なり仞は八尺也祥は狐のすみかにはよき所と云義也　以上細字頭註（墒）一本にはなし

浪之共

この句古點にはなみのともと點すいまはなみのむたと點すともと云詞を古語にはむたと云也○○○（めりさも其心おなしけれさも古語にはむたさいふ(イ)）○○○○○○○○○○○○○○○○日本記（紀(摘)）にみえたり此集にもみえたり古集にむかひて古語をそむくへからされはむたと點するなり

念思奈要而悉努布良武

しなへてとはなひきて也

反歌

小竹之葉者三山毛清介亂友吾者妹思別來禮婆

此歌の中の五文字古點にはみたるともと和すいさゝか相かなはすみたれともと和すへし

角鄣（障(イ)）經石見之海乃言佐敞（歎(摘)）久辛乃埼有伊久里介曾云々

つのさはふとはつのおはかる（つの(イ)）といふなり日本記（紀(摘)）には多の字をさはとよむ○○おはかるいはとつゝけんかため也言佐敞（歎(摘)）久とはことばのさへらるゝ也ことはのさだかにもきこえぬ心也辛乃埼は所の名なるへしからのさきをいひてんとてことさへくと（を(イ摘)）はをける也唐人のもの云ことばのさき○はなにともきゝしりかたきによそふる也伊久里介曾とはいは發語の詞くりは石なり山陰道の風俗石をはくりと云也

かたりのやまかゝみの山　可レ考二在所一

敷妙乃袖者通而沾（沾(イ)）奴

しきたへとはうちまかせては枕にこそいひならはしてはへれとも此集にはしきたへの衣しきたへの袖なともよめりしきと云はしげしといふことばたとへはほむることばなればつねにたへなりといはんにはなにこともいはれぬへきにやたとへばとこめつらなといふがことしと云々

裏書押紙云私云○妙といふは敷（敷(イ摘)）義歟しけき義不審

可レ決レ之

秋山介落黄葉須臾者勿散亂曾妹之當將見　一云知里勿亂曾

此歌第一四句古點にはちりなみたれそと點せり今はなちりみたれそと和す如（何(イ)）○古點ちりなみたれそと云へくは一云知里勿亂曾と註すへからすしかれはをはなちりみたれそとよむへき也かはることなくは註に一云ちりみなたれそと云へからさるが故也

*正辭云て恐け字

萬葉集註釋卷第二 下

第二卷之餘

早敷屋師吾嬬乃兒我云々

先達おほく女をははしきやしと云といへり今撿るにはしきやしといふはことのはのしげき義也男とも女ともとりわきては云へからす日本書記(紀(イ塙))卷第十七云男火迹天皇繼體天皇七年九月勾大兄皇子親躬(聘)春日皇女於是月夜清談不覺天曉(旬(イ))斐然(ふみ(イ塙))之藻(あやひ(イ塙))忽形於言乃口唱曰野施摩倶儞都摩々祁狎泥底播屢比能哿(賀(イ塙))須我能倶儞々倶婆施謎鳴阿唎等枳々底與盧志謎鳴阿利等枳々底莽紀佐倶避能伊陀圖嗚伎斯毘羅枳倭例以梨魔志阿都麼怒唎施底魔倶儞圖唎都麼怒唎施底伊慕我提嗚倭例儞魔柯(賧(イ))紬毎倭我提烏麿伊慕儞魔柯紬毎麿左棄逗羅多々企阿藏播利矢自矩矢盧于魔伊爾矢度儞々播都等唎柯稽播儺倶儺梨奴都等唎枳蟻矢播等余武婆紬稽矩謨伊(麻(イ塙))○娜以播孺底阿閇(開(イ塙))儞啓梨倭蟻慕 已上 此歌の心かならすしも女をいふへしともきこえすされはこの集の歌には男にも女にも乃至草木にもあれ水のをとにもあれことのはのしげきにはみなよめり又ははしきやしともはしきよしともはしてやし*ともかけるおなしことなるべし今の第二卷の歌にははしきやしわかつまのことゝ(こかこ(イ塙))つゝけたれば女ともいひつへし女をいふと釋するは此歌なとによりけるにやしかれとも男にもよめりと云事は第十六卷竹取の翁にあひて九ヶ(箇(塙))の神女のよめる歌にははしきやしおきなのうたにおほ(ほ(イ))。しきこえきみのこゝらやか(こゝの、こらや(イ塙))まけてをらんとよめり第廿卷に天平寶字二年二月於式部大輔中臣清麿朝臣家宴歌にもはしきよしけふのあろしはいそまつのつねにみまさねいまもみることゝよめり此歌は作者右中辨大伴宿禰家持なりこの歌ともは男をよめり又第七卷三十五のうたにはしき(ナシ(塙イ))やしわきへのけもゝもとしげくはなのみさきてみならずあらめやもとよめりてのはしきや

*深川元儁云過レ病身故四字可レ訓ニヤマヒニアヒテミウセヌト 谷川士清云輪轜車ハ可レ訓ニフムリクルマート

◎依平云近世ニアラハレタル常陸風土記ニ幡垂國ト點セリコノ訓ヨロシ 正辭按ニ今本此條ヲ脱セリ依平ノ見タル本ハイツレノ本ニヤ

やしは桃によそへて讀り又第十二卷十二の歌にいは
はし家たるみのみつのはしきやしきみにこふらく
わが心からこれは水によそへてはしきやしとよめ
りしかればかならずしも女をはしきやしといふと
は釋しさだむへからざるをや

磐白乃濱松之枝乎（方）引結眞幸有者亦还（還イ塙）見武

此歌の第四句古點にはあるひはまさしくあらばと
點しあるひはまでとさちあらばと點せり兩説とも
にあひかなはずまさきくあらばと和すべしまさき
くといふは眞幸也此集第十七卷四十大伴宿禰池
主歌詞中云吉美賀多太可乎麻佐吉久毛安里
多母等保梨と云々第二十卷追ニ痛防人悲別之心ー
作歌詞中云麻佐吉久母波夜久伊多里弖云々作例
如此何爲不審乎

家有者笥爾盛飯乎草枕旅爾之有者椎之葉爾盛

むかしは飯をは笥にもりける也いまも勸學院に（など）。
には（イ）は（塙）
○○其義はへるとかや

近江天皇聖躰不豫御病急時太后奉獻御歌

青旗乃木旗能上乎賀欲布跡羽目爾者雖見眞爾不相香

裳

青旗者葬具にはべるにや常陸國風土記に信太郡と
名つくる由縁を記して云黒坂命征討（討イ塙）陸奥蝦夷ー
事了剴（凱イ）旋及ニ多歌郡角拈之山ー黒坂命遇（＊過塙）ニ病身ー
故爰改ニ角拈ー號ニ黒前山ー黒坂命之輸（ナシイ）轜車發
自ニ黒前之山ー到ニ日高之國ー葬具儀赤旗青幡（旛イ）
交雜飄颺雲飛虹張瑩レ野耀レ路
時人謂ニ之幡（◎旛イ）○（亦イ）垂國ー後世言便稱ニ信太國ー云々

人者縱念息登母玉蘰（蘰イ塙）影爾所見乍不所忘鴨

玉蘰とは冠の纓をいふ也

天皇崩時婦人作歌詞云

君曾伎賊乃夜夢所見鶴

きそのよとはきのふの夜といふ也見ニ日本記（紀塙）ーきの
ふのよとはあけつる夜を云也それ（非イ塙）をてよひと云は（は塙イ）
うる。しくは飛説なりけふのよをこよひと。云也

されば○夕の後朝の心をつく○る侍にも風自昨夜聲似怨露及明朝涙不禁とつゝれるは七日の夜○○と八日の朝につゝれるなり日本記の心にあひかなへり

太后御歌

若草乃嬬之念爲立

わか草のつまといふこと日本記第十五卷億計天皇御宇六年有女人居難波御津哭之曰於母亦兄於吾亦兄弱草吾夫何怜矣「言於母亦兄於吾亦兄此云於慕尼慕是阿例尼慕是言吾夫何怜矣此云阿我圖摩幡耶言弱草謂古者以弱草喩夫婦故以弱草爲夫哭聲甚哀令人斷腸云々」いふ心はつまと云はつはつゝくといふことばまはまとはると云ことば也くさのなひいでていまだ葉もひらけざるはつゞきまとはれたりおとこをんなもつながれまとはれてはなれぬものなればわかくさにたとへてつまといふなり

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌

神山之山邊眞蘇木綿短木綿如此耳故爾長苔思伎

やまへまそゆふみしかゆふといへるはふたつにはあらず苧といふにふたつのしなありあさをはなかゆふと云ながきかゆへなりまをゝばみじかゆふと云筑紫風土記に長木綿短木綿といへるは是也さて今の歌にやまへまそゆふみしかゆふとよそへよめることは十市皇女のたまのをまそゆふみしかゆふのことく有ける物をなかしとおもひけるとよめる也此歌の落句古點にはながしとおもひきと和せり其ことはりかなはすながくとおもひきと云へき也木綿をよめる歌にあまたのしなあるべしあるひは木のなかに木綿の木ありいふはなとゝよめるはこれなるへしあるひは神にたてまつるゆふありいまのうたのことくなるはなかゆふみしかゆふもあるへしそのさまはことなれとも名をつくる事はいつれもおなし心也白きをゆふと云也

明日香清御原宮御宇天皇代　天皇

崩之時太后御作歌

八隅知之我大王之暮去者召賜良之明來者問賜良志神岳乃山之黄葉乎今日毛鴨問給麻思明日毛鴨召賜萬旨其山乎振放見乍暮去者綾哀明來者裏佐備晩荒妙乃衣之袖者乾時文無

此歌詞の中に暮去者召賜良之明來者問賜良志神岳乃山之黄葉乎の句これをゆふされはめしたまふらしあけくれはとひたまふらしと點せり天皇崩御をかなしみてよみなくさむ歌にめしたまふらしとひたまふらしと云へきにあらすしかればゆふざれはめしたまふらしあけくれはとひたまふらしといふべしめしたまふらしとはゐしたまへらましといふてとはなるへしされはのちにはけふも○○とひたまはましあすもかもめしたまはましといへりさてこそ上下かきあひてこゝろえあはせらるへき事なれは神岳乃山之黄葉乎の句古點にはかみをか○やまのもみちをと和せり此句みわ山のやまのもみちといふべし

燃火物取而裹而福路庭入澄不言八面知男雲

この歌の心は葬禮のならひこたびものをあらためもちゐることはいむへき事なれば死人のまくらかみにともしたる火をもちて葬所にてももちゐるへき也さてともしびもとりてつゝみてふくろにはいるといはすやとよめる也もちおのこくもとはもつへきおのこもきたるといふ歟

鳥宮勾之池之放鳥人目爾戀而池爾不潜

この歌の發句おほくはしまみやのと點せるおほかるへし證本とおほしき本共にはしまのみやと點せり皇子尊宮の舍人○慟○作歌ともをもちて心得あはするにしまのみやとよめるこれ至たき歟我はくにしられてしまのみやはもとよめりあるひはみたちせししまをみるときともよめりあるひはたちはなのしまのみやにはあかぬかもともよめり或はあさひてるしまのみかとにともよめりしまのみやと和すへしとえらはれたり第二句又あるひはまかりのいけのと點しあるひはまなのいけなると點す

正辭云此注玄覺所加也古今可以證按本云蓋指万葉集也本書卷二十一有此文而今本節文之拾穂抄所引一本與此祖同蓋玄覺所見之本書不與今本同也

二條院の御本の流をみるにしまのみやまかりのいけのと點せり放鳥の事有抄にはみてのみやのかはせ給ける鳥をそのみやうせ給ひにけれはしまの宮のいけのうへにはなたれたりける也されはこのはなちとりはその鳥とは云(イ)名をばさすまし日本記紀(壻イ)にはも(壻)かもをぞおほくての池にははなたれたりけるといへるとかけりてのはなちとりといへるはかひたる鳥をのちにはなちたるにはあらすいけにはなつときとをくとびちらせじとて羽ねをよきほとにきりてはなちをきたるをはなちとりといへるなるべし

頭注(イ壻)紀(壻)一〔本云日本記第卅有云開別天皇元年生草壁皇子尊於大津宮持統天皇三年夏四月癸未朔乙未皇太子草壁皇子尊薨〕

水傳礒乃浦廻迴(壻)乃石乍自木丘開道乎又將見鴨

ての歌第四句古點にはてくさくみちをと點すその心をえずもくさくみちをと和すへしもくさくとはしけくさく也

朝日照佐太乃岡邊爾鳴鳥之夜鳴變ナシ(壻)布此年己呂乎

此歌第四句古點にはよなきかへさふてのとしてろをと點すてれ又其心をえず此句をよなきかへてふと點すへし其故はみことのみや御かくれのゝちに(イ壻)かのみてのみやのとねりさだのをかべにかよひける歌さきにすでにみえたりあるひはあさひてるさたのをかへにむれゐつゝわがなくなみだやむときもなしともよめりあるひはたちはなのしまの宮にはあかぬかもさたのをかへにとのゐしにゆくともよめりしかればかのとねりらさたのをかへにとのゐナシ(イ壻)してゆきかよふてとのことのとふ鳥などの夜あくればなきてかへるに似たるとよめる也

柿本朝臣人麿獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌詞中

劔刀於身副副(イ)不寐寢(壻)寐(イ)者

つるぎとたちとふたつにはあらざるか常のたちかたなといへるは片歯にはをつけたる也つるぎたち兩方也といへるは劔などのてとくうらうへにはをつけたるときてえたり此集の第十一巻の歌につるぎたちもろはのときにあしをふみしにしもしなな(イ壻)んきみによりなは○とよめる○故(イ壻)也

明日香皇女木瓲殯宮之時柿本朝臣人麿作歌詞中
（廷(イ)）

許呂臥者川藻之如久

ころといふもふすと云ことは也かさねていへる事よしなきことなれともおなしことをかさねていふこともあれはひとへにあしとおもふべきにもあらず鹿を云にもしゝかせぎと云がごとしそれにとりてころと云はころぶといふことは也かはもは河水にながれのはやきにしたがひてかなたこなたへひるがへるをころふすといへるなるべし

君與時々幸而

とき〳〵とはつねにもおはしまさすしてたま〳〵みゆきし給ひしといふにはあらずをりふしにしたがひてはみゆきしてあそび給ひしといへる也

大船猶豫不○見者（定(イ)）

たゆたふとはやすらふと云とおなし詞也しかれともおほふねのたゆたふとおほくはいへる也こふねなとは浪にゆらるゝ事はたやすく大舟は波にたゆたふこともながく久しきにたとふる也

短歌

能杼賀爾有萬思（乙(イ墻)万(イ)）

とはのとかに○あらましといふなりよとにかあら（か(イ)）ましと云もおなし事也

高市皇子鸞城上殯宮之時作歌詞中（尊(旁書イ)）

狛劔和射見我原乃

高麗國のつるぎはほこさきにえだありてわさ〳〵しけなればこまつるぎわさみとつゞけたるなるべし

鷄之鳴吾妻乃國之御軍士乎喚賜而

あづまのくにと云事は景行天皇の御子日本武尊夷をせめたまひけるとき相模國より上總國へわたり給ふとき海中にして俄に暴風はげしく吹ければ日本武尊のみつま弟橘媛この風はわか故に海神ふかしむる風なりわれいのちをすてゝ君のみいのちをたすけたてまつるべしとてうみにいりなんとの給ふよりて海上にしとねをしきてすなはちうみに入給ひけりすなはち風たちまちにしづまりにければ日本武尊たいらかに岸につかせ給ふにけりさて其後陸奥のあしきもの共うちなびけ給ひてのち日

イ朱書
糺短阿字
呼上聲短
音近悪
お

*正辭按
原書大光
作大人
三字者

本武尊の給はく蝦夷凶黨〔凶首(イ塙)〕こと〳〵くそのつみにふしぬたゞし信濃國いまだおもふけずすなはち甲斐のきたよりうつりまして武藏上野をへてにしのかた碓日坂にをよひ給ふとき日本武尊ことに弟橘媛を忍ひ給ふみこゝろまし〳〵て碓日の嶺にのぼりてたつみのかたをのぞみてみたびなげきてのたまはく吾嬬者耶嬬此云二菟摩一このゆへに山の東の諸の國を名づけてあづまのくにと云也見二日本記〔紀(塙)〕一それにとりてあづまの國といはんとて諷詞にとりがなくとかみにをける事はあづまと云あの字にあくと云心あれば鳥はあくるを見てなく物なれば鳥がなくあづまといへりとも聞〔又(イ)〕えたり夜のあくるは東よりしらみはじむる故也○猶ふかきなさけの故あるへしあかつきには鳥のなくへきをりふしになりぬればまづめとり時をしりてくゝとなくをきゝておとりのなくならひなれはあ○〔か(イ塙)〕つまといふことばにつきてとりがなくあづまとよそへつゞけたる也おしきかなての義はみち○○○〔ふかう(イ) ふかうん(イ) ふかからん(塙)〕しらざらんものにはかくすへし御軍士乎とはつはもの也いくさとはいは〔そ(イ)〕發語のことばくさとはいさましむる義也うちまかせてはたゝかふときをいくさと云とのみ心得たれ〔時(イ塙)〕ともたゝかふときはいふにをよばずたゝかはぬ○なれどもつはものをばいくさといへる也

千磐破人乎和爲路不奉仕國乎治跡

此句古點にはちはやふるひとをなこしとつかへさ〔む(イ塙)〕るくにをおさむ○〔さ(イ)〕と點せり今の和にいはくちはやふるかみをなてしとまつろはぬくにをおさむと云々ちはやふるかみつねの事也こゝには人の字をかきたれともかみとよむへき也其故はかみと云ふものをあきらかにかゞむるを人といふ玉篇に人の字を釋して云周書云惟人萬物之靈孔安國云天地所レ生惟人爲レ貴易曰*大光與二天地一合二其德一與二日月一合二其明一與二四時一合二其序一與二鬼神一合二其吉凶〔凶(イ)〕一禮記云人者五行之端已上これらの心によらは人をかみと訓するにたれり日本記〔紀(塙)〕第一卷に國常立尊をとく注の詞にいはく天地未生之時譬猶二海上浮

雪無所根係其中生一物如葦牙之初生泥土中也便爲化人號國常立尊ちはやふると云事其釋まちまち也あるひはかみをちはやふると云事は千人してはたらかす石をむかし神のけやぶりてよりいひはしめたる也ちはやふるかみとそいふへきといへり私云萬葉に千磐破とかきてちはやふるとよめば是につきてかくいへるにや或はちはやふるとは神の名也神の茅の葉にてふきたる社に久しき代よりふるものにてゐませば申すなるへし共いへり或は神をまつりたてまつるにちはやといひてかけをびのやうなるものをかたにかけてふれはちはやふるかみと申すともいへりこれらの義とりどりに釋すといへ共正義にあらさるにやこれ（心（ー）紀（塙））は神のこの國へあまくたり給ふと云詞也日本記第二天津彦々火瓊々杵尊天降り給ふことを釋して云于時高皇産尊以眞床追衾覆於皇孫天津彦火々杵尊使降之皇孫乃離天磐座 ○○○ 此云阿麻能以簸矩羅 且排分天八重雲稜威之道別々而天降於日向襲之高千穗峰矣これをもちてこゝろうるにちはやと云はみちはやしといふことば也ふるといふはあまくたり給ふことばなり是正義なるべしまつろはぬとはしたがはさるをいふなり

安騰毛比賜　とはいまはとおもひ給ひといふなり

齊流鼓之音者（齊（塙）鼓（イ））

この句古點にはいもゐするつゝみのこゑはと點すその心あひかなはずいもゐ（ひ（イ））とはきよむる言也こゝには然るへしとはおぼえずとゝのふるつゝみのこゑはと云へしをよそなに事にもつゝみをうつことはときよくなりにたりとあまねくけにもをしてと（ナシ（イ）　つけもよほして（イ塙））とのふるはかりこと也

小角乃音母　とは笛のことぐに（鼓（イ））角をふくことありと申なりされは法花經にも擊鼓吹角貝とゝけるはこれ也

言右敝久百濟之原從（敵（塙））

ことうへくとはいふことのことはりにてうけふすなりくたらとはいひのぶべきかたなくてくたらとなれるよし也くたらといはんためにことうへくと

いふ諷詞をばかみにをける也くたらの原は所の名なり

久堅之天爾知流君故爾日月毛不知戀渡鴨

ひさかたとはそら也世界を建立するは天地なり天地の間にして八方をもたつる也しかれは下地堅固ならざればちり灰となる下地つきぬれば四方四維もなししかるに上天はかりはかはることなければ久しくかたしといふなりあめにしらるゝ君故にとは人はむまれおつるより壽限いつまてあるへしと梵天帝釋日月星宿みなてらし見給へり人の壽をば天命と云也しかればこのみこのみこといつまてお はしますべしとあめにみなされて(して(イ墒))おはしましけるきみゆへに日月もしられぬまて戀たてまつるとよそへよめる也

裏書云抑紙云天にしらるゝとは死しては天にのぼると云歟高日しられぬといふもこの心歟昇露と云同し事歟壽限の事すこぶる不審也如何能々可レ決レ之天宮々(天の宮に(イ墒))神隨神(いませば(イ墒))これをばかみあかると云歟

埴安乃池之堤之隱沼乃去方乎不知舍人者迷

埴(イ)

或は埴安池大和國にありぬまとはすゑもながれぬをいへばかくれぬのゆくゑもしらずとよそふる也

なきさはのもりにいみすへ(みわ(イ墒))いのれともわかおほきみ(きた(イ))はたかひしられぬ

なきさはのもり紀伊國也みはとは酒也たかひしられぬとはさきにひさかたのあめにしらるゝといひつる歌のことし

ゐかひのをり　大和國

柿本朝臣人麿妻死之後泣レ血哀慟作歌詞中

天飛也輕路者　輕はところの名なり鳥にかると云鳥(天飛(イ))あれはかのとりによそへてあさとふやかるのみち(ま(墒))とつけたり

狹根葛後毛將相等大船之思憑而

猿(墒)

かつらははびこるときあひわかるれどもえだくみなあちこちながくはひゆくほどにのちにゆきあへばさねかづらのちもあはんとよそふ大船はさりともとたのもしきものなればおほぶねのおもひたのみてとよそふるなり

枕付妻屋之内爾

嬬(イ墒)

つまやといはんためにまくらつくと云諷詞をかみにをけりまくらつくとはまくらなれたると云也

天數凡津子之相日於保爾見敷者今叙悔

かぞふといふはさそふといふことはなりいまもあづまと葉にいふと中人侍りまことにこの歌の心におもひあはするにさもときこゆさとかと同韻相通也をふしつのことはをふしとは少主と云ことはなり津邊の海人なとうなかしつかふべきことばなり姓の中に凡海といふこの心なりされはこのうたは海人さそふをふしつのこかといへる也

神乃御面跡次來中乃水門從船浮而

次來の句諸本に次來とかくこれによりて古點にはしきしまのと點すいたく荒涼也師中納言伊房卿の手跡に次來中乃水門從と書之尤可レ然これにつきてかみのみおもとつきてくると和すべしあまつしまのすへらみことのわかみこたちかしづきたまふ心なりなかのみなととは阿波國にみなとあり中湖といふは牟夜戸與关。湖中あるか故に中湖を名とす阿波國の風土記にみえたり

行船乃梶引折而

かぢひきをりてといふはふなちにはかぢとりが舟のゆきてよかるへきかたをはからひてひきなをしゆづらふる也さればそれかよきかたへやらんとひきむくるをひきをるといへる也

樹討樞とはおほつかなくといふなり

つまもあらはとりてたきましさみのやまのかみのうはきもすきにけり

とりてたきましとはとりてあけまし也うはきとは莪也おはぎともいふ人のくふものなり

人麿死時妻依羅娘子作歌

且今日々々吾待君者石水之貝爾交而有登不言八方

一云谷爾交而

この歌中の五字多本石水之貝爾とかゝれたり依之古點にはけふ〳〵とわかまつきみは○○○○○○○さいはさらめやも(搞イ)いにしみに歟　いしみつにと點す○○○○○○○○○○○○○○○○○○

古事記傳 廿五 五左 又 廿七 卅七左

その心を得ず或本に見の字貝(具(イ))にかく(谷(イ))もつともその
ことはりにかなへり水の字かはとよむこの集の中
にもまた傍例ありよりて和翻(ナシ(塙イ))して云けふ〳〵とわ
かまつきみはいしかはのかひにましりてありとい(揆(イ塙)換(イ))
はすやもなにゝよりてかいしかはのかひにましり
てと和するとならば水の字かはとよむ次下の歌に
いはくいしかはにくもたちわたれみつゝしのばん
とよめりいしかはとよむへしとえら(は(イ))。れたりかひ
にましりてといへるは漢字貝にかける本有これに
付て心をうるに宇治のものかたりのかげろふのま
きにも水のをとのきこゆるかぎりは心のみさはぎ
給ひてからをだにたづねずあさましくてもやみぬ
るかないかなるさまにていつれのそこのうつせに(に)
ましり。けんなどやるかたなくおぼすとかけり今
の歌にいしかはのかひにまじりてありといはずや
もとよめる宇治のものかたりにおなしきをや

姫嶋　豐後國

裏書曰押紙云　私云　接津國風土記云比賣島松原攝(塙)
古輕島豐阿。羅宮御宇天皇世新羅國伎(イ塙)
有二女神道者一其夫來暫住二筑紫國伊波比乃比賣島一
地名乃曰二比賣島一者猶不二是遠一若居。島男神尋來此(イ塙)
小字(イ塙)此
乃更遷來益二亭此島一故所二本住一之地名以レ島爲乙(イ塙)
レ號す
如二此記一者姫島松原攝(塙)接津國也此二首歌中　難波
方鹽干勿曾禰と詠せり故此松原は難波の邊歟風土
記の次上に
長樂地名の邊とみえたり。此比賣島は縦雖レ在二豐後
國一今歌はつのくにのひめしまをよめる也
なにはかたしほひなありそねしつみにしいもかすか
たを見まくくるしも
この歌の心(心(イ))も依羅娘子歌にいしかはのかひにまし
りてとありつる歌におもへるはあいにたるをや
志貴親王　薨時作歌詞中
神之御子之御駕之手火之光曾幾許照而者
此句古點にはかみのおほんこのおほんまのたひの

ひかり○○○○○○○○○○○○○○○○○あひ（そゝこらてりてあるこ點せりおほむまのたひの光（イ擣））（き（イ擣））
かなひても○こえずこれを神のおほんみこのおほ（ナシ（イ擣））
んまのたひのひかりぞこゝたてりたると和すへし（た（イ擣））（みゆき（イ擣））
おほんたとは供奉人おほかるゆきかへり也たひと
は手にもちてふりあくる火なり

本云（ナシ（擣イ））
文永六年沽洗二日於武藏國比企北方麻師申卿書（宇（イ擣））
寫畢　　　　　　　仙覺　在判
建治元年冬十一月八日於鎌倉比企谷以作者仙覺
律師自筆本教人書寫畢
○○○（一校了（イ擣））　　　　　玄覺　在判
弘安三年庚辰春正月癸卯朔乙卯以本集一見之管（关（イ））
見之所及押紙　　　　　　權律師玄覺

萬葉集註釋卷第三

第三卷

皇者神二四座者天雲之雷之上爾廬爲流鴨

いかづちのうへにいほりするかもとは雷とは山の名なりされば次のことばにかきのせたる歌にはいかづち山にみやしきゐますといへりいかづちとは見むろ山の給はりの名なり（ナシ（擣））日本紀第十四卷大泊瀬幼武天皇御宇七年秋七月甲戌朔丙子天皇詔二少子部連蜾蠃一曰朕欲レ見二三諸岳神之形一或云此山之神爲二大物代主神一也（ナシ）或云兎田墨坂神也（黒（擣））汝膂力過レ人自行捉來蜾蠃答曰試往捉之乃登二三諸岳一捉二取大蛇一奉レ示二天皇一天皇不二齋戒一其雷虺虺目精赫赫天皇畏蔽レ目不レ見却二入殿中一（刧（イ））使レ放二於岳一仍改賜レ名爲レ雷

久堅乃天歸月乎網爾刺我大王者蓋爾爲有（皈（擣））（剌（擣））

この歌古點にはひさかたのそらゆくつきをあみにさしわかおほきみはかさになしたりと點ず濱成卿和歌式にはあまゆく月をあみにさしとかけりそらといひあまといふおなしけれとも古語にはひさかたのあまともいひあめともいふなりひとりたちにいふときにあめつちともいひあめにあるなといふこれ女聲なり又ひさかたのあまのかはらなといふ常の事なりまとめと同内相通の故に男聲をよべばあまといはるゝなりこの歌の落句かさになしたりとよめるはその心詞こまやかならす和歌式にきぬ|か(イ)うさにせりといへるもつともよろしきにやこのうたの心はひばりあみの月のことくまろにすきたるをもちたるがきぬかさに似たればそらゆく月をあみにさしわかおほきみはきぬかさにせりとよめるなり

葦北乃野坂乃浦從船出爲而水島爾|将(插)侍去浪立莫勤

此歌は長田王を被レ遣二筑紫一渡二水島一の時の歌なり葦北乃野坂乃浦は肥後國也水島又同肥後也風土記云球磨乾七里海中有レ島稍|積(イ插)可二七十里一名曰二水島一々出二寒水一逐レ潮高下云々かの島をは水島と云然はこの長田王歌二首ある中にさきの歌にはかみさびぬるか|れ(插イ)こしのみづしまといへり次の歌をみしまにゆかんなみたつなゆめと點する事聊不審也同所の名を心にまかせてたちまちにいひかふることと愚老管見にして未二見及一みづしまにゆかむと點ずるもあながちにあしかるべきにもあらず然而みしまにゆかむといへるは其|き、(插)義よろしと思へるにや

重待二後賢一治レ思而已|聞(イ)

珠藻苅敏馬乎過夏草之野島之崎爾舟近着奴|怒(イ)

この歌古點にはたまもかるとしまをすぎてなつくさののしまのさきにふねちかづきぬと點せり又或本には第二句はやまをすぎてと點すともに不二相叶一みぬめと和すへしむとぬと同韻相通也讃岐をさぬきといひ珍海をちぬの海と云かことしされは此集第六卷過二敏馬浦一時山部宿禰赤人作歌。御|者(イ)食向淡路島二直向三犬女乃浦能とかけり又同卷過二敏馬浦一時作歌詞中云八島國百船純乃定而

師三犬女乃浦者とかけり同返歌云眞十鏡見宿女乃浦者百船過而了往濱有七國　然則敏馬無爭みぬめと和すへき也されは今の第三卷羇旅歌(イ)云島傳敏馬乃(イ)崎乎許藝廻者日本戀久鶴左波爾鳴○と云第二の句或本にみぬめのさきをと和す尤その心を得たるをや第四句野島のさきと點ずよろしからず○しまが(の(イ))と點すへし第十五卷當所誦詠の古歌の中にも野島我左吉爾伊保里須和禮波とかけるなりこのみぬめは攝津國にありのしまがさきとは淡路國にありとみえたり

私云　攝津國風土記云美奴賣松原今稱美奴賣者神名其神本居能勢郡美奴賣山昔息長足比賣(帶(イ))天皇幸于筑紫國時集諸神祇於川邊郡內神前松原以求禮福于時此神亦同來集曰吾亦護佑(擣)仍諭之曰吾所住之山有須義乃木(ナシ(イ))宜材採爲吾造船則乘此船而可行幸當有幸福天皇乃隨神教遣命作(法(イ))船此神船遂征新羅一云于時此船大鳴響如牛吼自然從對馬海還到此處不得乘○仍卜占之曰神靈所欲乃留置還來之時祠祭此神於斯浦并留船以献○亦名此地曰美奴賣(神(擣))　敏馬浦此處歟

いなひのもゆきすきかてにおもへれは心こひしきかこのしまみゆ

いなひ野もかこのしまも播磨國也心戀しきとはこひしき也ものを云にこゝろと云ことばをいひそふる事もあり心よしとも心うしとも心かなし共いふがごとし

留火之明大門爾入日哉榜將別家當不見

この歌古點にはともしひのあかしのせとゝ和せりせとゝはおほくは迫門とかきてよめりせばきところと聞えたり大門とかきてせとゝ和すへからす仍今あかしのなたと和する也なだはなといふはなみなり阿波國風土記云奈汰○奈汰(浦(イ))云事者其浦(佐(擣イ)由(擣))波之音無止時依而奈汰云(佐浦(擣))海邊者波立者奈汰等云(ナシ(擣))(佐(擣))たと云(を(イ))はたかき義也海の面渺々として波たるき所也なたと云(ナシ(イ))ははりまなだといへるところ(故(イ))なるへしよりてあかしのなだと和するなり

飼飯海乃庭好有之苅薦乃亂出所見海人釣船 鈎(瑀)

けひの海は越前也にはよくあらしとは海上乃風波しづまりてなぎたるをばにはと云なりにといふはやはらくことばなれば日のやはらぎたるをにはと云なるべし

鴨君足人香具山歌詞

天降付天之芳來山

あもりつくとはあまくだりつくといふことばなり(けシ(イ))あまのかくやま大和國也此山の名を和するにかく山とも點しかこ山とも點すくとことは(も(イ)も(イ))同韻相通なればいつれもいはれあるべけれとも來の文字をかけるところをはこともくとも和すとも具とかけるをばくと點ずべしこともよむことはりあるべけれ共そのまさしきいはれをとるべしあまのかく山とは空の香のかはるところなればいふといへりそらの香のかはるにつきて天の香はことにうつくしければかくと云へしくと云はくはしと云ことばくはしとはこまやかなりほむる詞也あもりつくあまのかく山とつゝけたる事はそらの香のかはりくればあもりつくともよめると心得つべし又阿波國の風土記のことくはそらよりふりくだりたる山のおほきなるは阿波國にふりくだりたるをあまのもと山とぞ云その山のくだけて大和國にふりつきたるをあまのかく山といふとなん申すこの義によらは別の心得やうもいるべからずあまくだりつきたるあまのかく山と云つべし

何時間毛神左備祁留鹿香山之鉾榲之本爾薜生左右二

むすぎかもとにこけむすまでにとはふる木にもあらずおひつきたる木のもとにこけのむすとよめるにや生するをばむまると云がごとし人の子をもむすこといひむすめなと云も生したる義なるべし若なとのおひたるをもむすといふおひしげりたる木のもとにこけむしたるとよめる也おひ木をはいふにもをよはずふる木にもあらずおひつきたる木のもとにこけのむすまでにと云ことはかみの句にいつしかもかみさびけるかとよめる故也をよそ返歌と云は長歌によみたることをかへしてよめるを返歌といふこのむねは第一卷にみえたりしかるに此

香山歌には松風に池波たちてさくら花このくれしげになどいひおはりにはあそぶ舟にはかぢさほもなくてさびしもこぐ人なしにとよめり此歌の返歌二首なれば初の歌には人こがずあらくもしるしいさりするをしとたかへと舟のうへにすむとよめり扨次の歌にむすぎがりとにとよめるは棹ともおほえずこの集のならひ假字をかくこともおほかれば漢字によりて執すまじき事もあまた相ましはるへし但正説あるへし（ナシ（搨））

或本歌

あもりつくかみのかく山　あもりつくといふ詞かくやまと云心さきにすでにあらはれたり但さきにはあもりつくあまのかく山とこそはべりつるにこれはかみのかくやまといへるは○○○○（かく山に（搨））あまくたりたれは神もあまくたり給へるものなれはよそへてかみのかく山といへるにや又神祇の兩字はともにかみとよむにとりて祇をばくにつかみとよむ神をはあまつがみとよむ也されはあまつかみの義にて神のかく山といへるはすなはちあまのかく山と云心也と思へりけるにや先賢の毫筆その心ときさだめかたし

百式乃大宮人乃去出榜來舟者竿梶母無而佐夫之毛榜與雖レ思

此句古點にはもゝしきのおほみや人のゆきいてゝこぎくる舟はさほかぢもなくてさふしもこくとおもへとゝ點せり其心不相叶こきくる舟はといはゝいかゝ次の句にさほかぢもなくてさぶしもと云へき又さほかぢなくはいかゞすゑの句にこくとおもへとゝ云べき句ことにかたちがひなるをや仍今和換ていはくゆきいてゝこぎてし舟はさほかぢもなくてさふしもこかむとおもへと歌の次の詞に云右今案達二都寧樂一之後怜レ舊作此歌歟云々又次上長歌云もゝしきのおほみや人のたちいてゝあそふ舟にはさほかぢもなくてさびしもこく人なしにといへり返歌に云人こかすあらくもしるしいさりすかをしとたかへと舟のうへにすむといへり此前後をかゝみて尤さほかぢもなくてさふしもこがむとおもへとゝ和すべき也○○○○○○○○○○○○（さふしもさいふはさびしき也（イ））ひとふと同内相通也

矢駒山木立爾不見落亂雪驪朝樂毛釣(塙)

この歌古點にはいこまやまこたちも見えずちりみだれ雪のうさきまあしたたのしもと點ず發句いこま山矢の字をいとよめることはさもはへりなん矢をいと云詞あるが故也駒をこまと和せむこと其心を得候是やつり山なるへし第○二卷にもやつり川とよめり山河かはれりといへともそのところ是同しきをや腰句以後又ちりまがふ雪もはたらにまゐてくらしもと和すへし長歌にすでに久かたのあまつたひこし雪しものゆききつゝませとこよなるまてとよめりきたる心これおなしかるべしくるしくも降くる雨かみはのさきさのゝわたりに家もあらなくに

みはのさき五代集歌枕には大和國としるせり然而此みはのさき近江歟近江に三和社あり今歌の前後の歌近江の詞ある故也

長屋王故郷歌

吾背子我古家乃里之明日香庭乳鳥鳴成島待不得而

此歌第二句古點にはふるへのさとのと點せり其詞よろしからずいにしへのさとのと和すへし古家いにしへと和する事傍例是ありしまゝちかねてとはしばまちかねてと云也しはしをしまといふははと同韻相通の故也

人不見者我袖用手將隱乎所燒乍可將有木服而來○

やけつゝかあらむきすてきにけりとよめるはやきつゝとばよけつゝと云也此歌詞かすか也といへどもよめる心はやけつゝかあらむきすてきにけりと云はかたみの衣の心也發句人めにはと點せり人不見とかけるはしのひにはと云へし傍例あり此歌の心はかたみの衣をきたりともわか袖もちてかくさましをかのかたみの衣をすてたるにやきもせてきにけりとよめる也

客爲而物戀敷爾山下赤乃曾保船興榜所見

あけのそほふねとはそほふねは小舟也舟をはあかくいろとるものなれはあけのそほ舟と云山もとはところの名也筑後の國にあるにや但是はあけといはんための諷詞に山下のとをけるにや夜のあくるには山のはよりしらみはしめてあけわたるによそ

へて山下のあけのそはふねとよそへよめる也又。此(イ)
歌はナシ(イ)戀の心とみえたれは旅にして人をこふとてい
をもねすして山もとのあけわたるをみると云心も
あるべし

あゆちがた　　紀伊國

四極山打越見者笠縫之島榜隱棚無小船

此歌頭句古點にはよもやまと和すよも山いづれの
山そや荒涼なるにや是をはしはつ山と云へし極の
一訓はゝつ也その上古今和歌集第廿卷しはつ山ふる也(塙)
りの歌也其理かたゞゝしはつ山にあたれり

とくきても見てましものをやましろのたかつきむら
のちりにけるかも

山城のたかつきむらは所の名也ちりにけるかもと
は木の葉のちりてあれたるを云山林などをふるく
はさくともちるともよめるは春わか柴のさしたる
を春はさきなとよめり又木の葉のちるをにほへる
山のちらまくおしもなとよめりうちきくは山なと
のさきもしちりもせんやうにきてゆれともさかゆ
るをさくといひあれ行をちるとよめる也

然之海人者軍布苅鹽燒無暇髮梳乃小櫛取毛不見久爾

この歌第四句古點にはかみけつりのをくしと點ず
その和いたくなかしこれをくしらのをくしと和す
へし髮梳これをくしらと和すべき事は大隅國風土
記ニ大隅郡串卜鄕昔者造國神勅レ使者遣ニ此村一
令ニ消息一使者報道有ニ髮梳神一云可レ謂ニ髮梳村一
因曰ニ久四西(塙)良鄕一髮梳者隼人俗語久四西(塙)良今改曰ニ串卜鄕一

つのゝ松原　　攝津國

去來兒等倭部早白菅乃眞野榛原手折而將歸

まのゝはぎはら大和國しらすげとは菅は花の白き
ものなればいへるにや白萩白菊と云かことしみな
花の色白きによりて云也郭知玄菅を釋していはく
白花似レ茅無レ毛といへり

壻かれのみつのあまめのくゝつもちたまもかるらん
いさゆきてみん

くゝづとはほそきなはナシ(塙)をもち物いるゝ物にしてゐ
なりのものか(塙)ゝもつなりそれをくゞつといふ

まつち山ゆふこえゆきていほさきのすみだかはらに
ひとりかもねん

◎河海抄十玉藻作尼前恐誤詞林采葉一

いはさきのすみだがはらは紀伊國也
おく山のすかのはしのきふる雪の
菅をすかと云は男聲をよふなりをよそ酒をさかと云
いひ竹をたかといひ菅をすがといひ風をかさと云
がごときはみな男聲をよぶ也悉曇のならひ成べし
すけと云はすぐなりと云也ろも〳〵の草は枝葉あ
りていまだおさなきよりおひしける（なひ（摘））もあるに菅は
すぐにたてるもの也しのくとはしなふ○○○（さいふ（イ））こと
ばなりされはすぐなる草もしなふまてふるゆきと
よめるなり
磐金之凝敷山乎超不勝而哭者泣友色爾將出八方
この歌古點にはいはねのこりしく山をこえかねて
なきはなくともいろにいでんかも（や（イ））と點せりこりし
く山は和の詞なだらかなるにゝたれとも古語の傍
例見えず又その心あまねからすこゝしき山といへ
るは傍例みゆるうへに其心かなへりこゝしきとは
そこはくと云詞なれはいはかねのこゝしきやまを（り（イ摘））
こえかねてといはん事とはりふかゝるへしこゝ
しくとてはすこしてりしきたることもありぬへし

なきはなくともといへる又よろしからすねにはな
くともと和すへき也又傍例おほかるへし
しのすゝきくめのわかこかいましける
しのすゝきとはほにいてぬすゝきをいふしのと云
はしのふと云詞也くめとはこむといふ詞なれはく
めといはんための諷詞にしのすゝきとをける也
梓弓引豐國之鏡山不見久有者戀敷牟鳴
とよくにの鏡山と云は豐前國土記云。河郡（田（イ））鏡山
在郡東。昔者氣長（イ）足姬尊在此山遙覽國
形勅祈云天神地祇爲我助福便
用御鏡安置此處其鏡即化爲石見
在山中因名曰鏡山已上あつさゆみひくとよく
にとよめる事はとよくにとは男女婚姻のときをい
ふと云事あり然者ひくとよ國といはんための諷詞
にあつさゆみとをける也
望不盡山歌
伊去波代加利（伐（イ））　　伊は發語の詞也
詠不盡山歌
奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與己知其智乃國

之三中從出之有不盡能高嶺者

なまよみのかひのくにとつゝけたることは甲斐の國のかといふを香はりの心によそへとれりひと云をよしと云ことによそへとれりかよしといふ心なりこの香をいひいてんとする諷詞なれはなまよみのとをける也なまよはみたるなと云詞也かと云は好香惡香ともにあれとも香と云まさしき詞は好香をいふなり惡香をはくさしといふうちよするするかのくにといへるは駿河のすを海の洲によそへたるなり洲は浪のうちよする物なれは洲をいひいでんとする諷詞にうちよするとをけるなりうつとは波と云字のひとつの訓なれはうちよするといへるに波はおさまれる也又駿河の國には富士山葦高山とて高き山ふたつありふしのやまはいたゝきには葉の嶺あり淺間大菩薩と申神まします本地胎藏界大日也葦高山は五の嶺あり葦高大明神と申御神まします本地金剛界の大日也この富士葦高兩山の間昔は東海道の驛路也けりちて[さて(擒イ)]その中によこばしりの關なんど云所も有ける也あしがら淸見がよこばしりなんど云ことの侍るは是也橫ばし李の關は富士あしたかのあはひ也さて此みちをむかしの旅人とをりける間重服觸穢のものとも朝夕とをりけるをあしがらの明神いとはせ給ひて今のうきしまがはらと云は南海の中に浪にゆられてありけるをうちよせさせ給ひてけりさて其後今の道はいてきにけりとなむ申つたへて侍へる也然ればうちよする駿河の國といへるはこの本緣にもや侍へるらん。む(イ)。たたさること有けりとするゑの世の人に。も(イ)しらせたてまつらんために古老の說をしるしつけ侍る也

石花海

と云は富士の山乾角に侍る水海なりすべてふしのやまのふもとには山をナシ(イ)めぐりて八の。水(イ)海ありとなん申す石花の海と申すはかの八の海の其一也

ふしのねにふりをく雪はみな月のもちにけぬれはそのよ降けり

富士の山には雪のふりつもりてあるか六月十五日に其雪のきえて子の時よりしもには又降かはると駿河國の風土記にみえたりといへり

山部宿禰赤人至二伊豫溫泉一作歌詞中

＊臣上云
恐與

伊豫能高嶺乃射狹庭乃崗爾立而

伊豫のたかねのいさにはのをかといへる事伊豫國 與（塙）
風土記云湯郡天皇等於レ湯幸行降坐五度也景行天皇 釋紀ナシ
以大帯上日子天皇等於湯與ニ太后八坂入姫命二一軀 釋紀日子ニツドクナシ（塙）
爲ニ一度一也
釋紀ナシ 仲哀天皇以大帯 大ナシ（イ）釋紀日子ニツドク 釋紀ナシ 中日子天皇與ニ太后息長足姫命二
軀爲ニ一度一也以ニ上宮聖徳皇子一爲ニ一度一及侍高 帯（釋紀）
麗惠慈僧葛城王等也立ニ湯岡側碑文一其立ニ碑 總（釋紀） 臣（釋紀） 釋紀ナシ
文一處謂ニ伊社邇波之岡一也所レ名伊社邇波○者當土 山（塙イ）
諸人等其碑文欲レ見而伊社那比來因謂ニ伊社爾波本
也云々以ニ岡本天皇幷皇后二軀一爲ニ一度一于時於ニ大
殿戸一有レ椹云ニ臣木一於レ其○集レ上鵤云ニ比米鳥一 ＊ 木（塙） 止（塙）與（塙）
天皇爲ニ此鳥一枝繫レ○穗等養賜也○後岡本天皇近 稻（塙） 以（塙イ）
江大津宮御宇天皇淨御原宮御宇天皇三軀爲ニ一度一

此謂ニ幸行五度一也
臣木毛生繼爾家里 返歌（イ）　臣木可レ尋之
百式記乃大宮人之飽田津爾船乘將爲年之不知人○ 久（塙） 二（イ）
にきたつ日本記第廿六卷には天皇七年春正月丁酉 紀（塙）
朔庚戌御船泊ニ于伊豫熟田津石湯行宮一熟田津此云儞
枳陀豆　伊豫風土記には後岡本天皇御歌曰美枳多
頭爾波弖丁美禮婆云々にとみと同韻相通の故ににきたつともいひみきたつとも云とえらはれたり 弖（イ） 氐（塙）
みとには殊にかよはしていはる丶字と聞えたりい
はゆるなみはやのくにをなにはとはいふにを丶見
をと伊へり蜷をみなと云かことしそれにとりてこ
の集ににきたつのことばをよめる歌に第一卷には
熟田津爾船乘世武登月待者とかけり熟田津これを
にきたつと云事日本紀にみえたり又或は和多豆と
もかき或は柔田津ともかけるは皆にきたつと和す
へきことはりなればいまの點にはみなにきたつと
和する也

登ニ神岳一山部宿禰赤人作歌詞中

河登保志呂之

と云へるは河をはむる詞也をよそ物をはむるにはあるひは玉といひあるひはしろし共いひとをしともなかし共たかしともふかしともいへるは皆はむる詞也

海若之興爾持行而雖放宇禮毛曾此之將死還生

うれもそとは愁の喪ぞといへる也心は端作の詞にいへるがごとく乾飯をつゝめるをたまひてたはふれて請二咒願一とき通觀がよめる歌なれはうみのおきにもてゆきてはなつともいかてかこれかしにかへりいかむうれふるおもひぞまさらんといへる心也

帥大伴卿歌五首內

帥（塙）

萱草吾紐二付香具山乃故去之里乎不忘之爲

この歌古點にはわすれ草わかひもにつくかくやまのふりにしさとをわすれしかためと點せり萱草は忘レ憂草也わすれしがためと云へきにあらすこのうたの心はかく山のふりにしさとのわすれかたくて心くるしけれはわすれ草をわかひもにつけてしるしを得てうれへをのぞかんとおもへる心なればわすれぬかためと點すへき也かやうのたぐひは一字なれともたがひぬれは其心あらはれざるが故にはばかりをかへりみず和し檢るなるべし

換（塙）

白縫筑紫乃綿者身著而未者妓禰杼暖所見

しらぬひのつくしのわたといへる事いにしへはしかるへき人々綿をきぬなんどにもいれねともわたをぬひつゞけてうへにき給ひけり今もやむことなき人はしか仕給ふなどいへる事ありまことに此歌なとにては其義とも心得られぬへしわたともつゝけずしてしらぬひのつくしとよめることもありそれにては猶ことはりあたらずおほえ侍る也日本記

紀（塙）

第七卷大足彥忍代別天皇御宇十八年五月壬辰朔從二葦北一發レ船到二火國一於レ是日沒也夜冥不レ知二着岸一遙視二火光一天皇棱挹者曰直指二火處一因

挾揖（塙）

指レ火往之即得レ着レ岸天皇問二其火光之處一曰何謂邑也國人對曰是八代縣豐村亦尋二其火一是誰人之火也然不レ得レ主玆知レ非二人火一故名二其國一曰二火國一と然れはこれをしらぬひ

のつくしと云へし又つくしといふしの字は島の義也つくしと云はかの筑紫島の形木兎に似たりこの故につくしといへり

太宰帥大伴卿讃レ酒歌

古之七賢人等毛欲爲物者酒西有良師

いにしへのなゝのかしこき人といへるは晉書云晉の七賢世をすてゝ竹の林の中に入て人にもしたかはずすでに入ける時をの〳〵みな酒をたゝへてぐしていりにけりさて林の中にて琴をひき詩をたしなみてすくしける也其七人の賢人は　嵆康　阮籍　阮咸　向秀　王戎　山濤　劉伶也

將レ言爲便將レ爲便不知極貴物者酒西有良之

本文云酒是聖賢と云ことのあるなりされはよろつのものゝ中に酒はかりかしこきものはあらじといふなり

中々爾人跡不有者酒壺二成而師鴨酒二染嘗

人にあらすは酒の壺にならはやと云ことは本文にいはくむかし酒をこのむものありけりそれがわれしなんには酒の壺にならずは人の酒のまむにうけしたみてん所の土とならんとねがひて死にける也

その心をよめる歌也

世間乎何物爾將譬旦開榜去師船之跡無加如

この歌の中の五文字古點にはあさぼらけと點せり此詞ふるくはあさひらけといひけりとみえたり此集の眞名假名の所にあまたありあさひらきといへるなにのきゝにくゝあはさる心あれはやあさほらけと點したるとおぼつかなし今はかつはきゝのよろしきによりかつは古點にまかせてあさひらきと點する也

葦邊波鶴之哭鳴而湖風寒吹良武津乎○崎羽毛

この歌古點にはあしべなみたづのみなきてうしほかせさむくふくらんつをのさきはもと點せり又或本の和には第二句たづのもなきてと點せり此和あひかなひてもみえす發句葦邊波の字はてにをはの字にもちゐる事常の習也あしべなみといふへきにあらずよりていま知樣にいはくあしへにはたづがねなきてみなと風と云へしたづがね常の事なり湖の字訓うしは不審也みなとにつかへる事は阿波國

*袖中抄廿二十七右

風土記に中湖具湖などにも用えたり就中今の歌の心ことば勘二其傍例一此集第七卷歌云美奈刀可世佐牟久布久良之奈呉乃江爾都麻欲比可波之多豆佐波爾奈久といへり都尾崎伊豫國野間郡にありとみえたり

あしへの島 攝津國 さのゝ岡 紀伊國 鹽津山 越前國 つのかの濱 同 たゆひか浦 同

雨ふりてとのくもるよのぬれひちとこひつゝをりき君まちがてら

とのくもるとはたなくもると云おなし詞也たとと同内相通也たなくもるとはたなびきくもると云也たなびくとはたは詞の助なひきくもると云也なひきくもるとはをしなへてくもるといへる也

飫海乃河原之乳鳥汝鳴者吾佐保河乃所念國

この歌頭句古點にはおくのうみと點す爰には相かなふへからす出雲守門部王の歌なり出雲國意宇郡也おふのうみと點すへし

山部宿禰赤人登二春日野一作歌詞中

春日乎春日山乃

春の日をかすかの山とつゞくる事はかすがといへる假名の字訓によらばかといへるはあかき義すといへるはすはうの色也かすといへる詞赤紫也と云心をこめたりしうるに春の日は始て出るときあかくむらさきに霞みて出るによそへて春の日のかすかの山のたかくらのみかさの山にといひくたせるなるへし 容鳥とはゐなか人はかほとりといふ是也かほ〳〵となけば鳴聲を名とせるなり

反歌ニ

やめはつかるゝこひもするかも

とよめるはなきやむかとすれは又啼々するをやめはつかるゝとよめる也此鳥にかぎらすいつれの鳥も此義はかはらずありぬへし鳥のなきやむかとすれは又なくがごとく人のこひしき事もおもひやまんとすれとも又もおもはれ〳〵するにたとふる也

*秋津羽之袖振妹乎

あきつばとはとんばうの羽也うすき物にたとふるなり嬋娟たるをとめなどのしなやかなる袖のけしきによそふるなり羅綺の重衣たるなどかけるも其心おなしかるへし

靑山之嶺乃白雲朝爾食爾恒見杼毛目頬四吾君
乃(イ)ナシ(イ)　頬(墒)

朝爾食爾と云はゆふけに○まさりてといふ詞也あを山にたなびきたるみねのしら雲のあしたてとにみれともいよ〳〵みまさりのみしてみゆるかことく我おもふ人のつねに見れともめつらしきにたとふる也
は(墒)

大伴坂上郎女祭神歌詞中

賢木之枝爾白香付木綿取付而

さかきといへるはかの木ときはにして枝葉しけゝればさかきと云さかきとはさかへたる木と云也木はときはなれとも枝葉茂らぬもあり又枝葉しけゝれともいたくてまやかにくた〳〵しきも侍るへし此木は中をとりてよのつねなりされはわきてさかきとして神祇をかざりたてまつる也白香はしらかみの四手也これすなはち白にきてなるへし木綿取付而とは麻眞苧なとの長木綿短木綿等也是則あをにきてなるへし
け(墒)　は(墒)

齋戸乎忌穿居竹玉乎繁爾貫垂
齊(墒)

と云はいはひへをいはひほりすへとは御酒を醸瓶也竹玉乎繁爾貫垂とは陰陽家に祭の次第をといひ侍へりしかば祭詞の中に異國よりならひつたへたる祭もあり我朝にもとよりまつりきたれる○法もありたかたまといへるは我朝の祭の中に昔は竹を玉のやうにきざみて神供の中にかけてかされる事ありとなん申すさてそれをはたかたまといひける歟たけたまといひけるかと問侍りしかはたかたまと云と申侍りし也
作(イ)

登筑波岳丹比眞人作歌詞中

儕立乃見杲石山跡

ともたちはたがひにつねに見たければみかほし山とよそへよめり又つくは山はおつくばめつくばとて高き嶺のふたつならひたる山なればよそへよめる也
を(墒)

時敷時

時しくとは非時歟此釋委細見上

霰零吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取

此歌肥前國風土記に見えたり

*萬葉緯耳子作軍一字闕上有鄕字荒木田久老風土記冠註引此與温本全同但闕上有鄕字○冠註引熊作麼占作力泥作彌母作謀鴎作鳴

杵島郡縣南二里有二一孤山一從レ坤指レ艮三峰相
連是名曰二杵嶋一坤者曰二比古神一中者曰二比賣神一
艮者曰二御子神一 一名*耳子神靭則兵興矢闘士女提レ酒
軍(塙イ)動(塙イ)興(塙イ)
抱レ琴毎歳春秋携レ手登望樂飲歌舞曲盡而歸
歌詞云阿羅禮布縷耆資熊加多塏塢嵯峨紫彌占。
婀邏(塙)
區縒刀理我泥底伊母我提鴎刀縷 是杵島曲
○ ○ 塢(イ)
しかるにこの集の歌にはきしみかたけをとかけり
しまといひしみといへる同内相通の故歟歌の心は
きしふかたけをさかしみと草をとるかいもか手を
そとるといへる心也
拓之左枝乃流來者
拓者似レ桑有レ刺木也といへり
羇旅歌詞
安倍而榜出牟爾波母之頭氣師
あへてとはあへつく也にはとはさきに釋するかこ
とし空のなきてやはらける也
譬喩歌
たとへうたと云はむねと戀の歌にあり此たとへ歌
といふは風月にもよせ鳥獸にもよせていとへにか
よみ(塙)
れにすがりてたとへにしてその心あらはならずか
た(塙)
くれでしかも興あれば興の歌と云也なそらへ歌の
ことくにはあらずなぞらへ歌と云はたとふべきも
のをいひ出してそれにわかおもひをたくらぶるを
比と云たとへうたと云はひとへにこれにすかりて
心かくれたれば比顯興は隱とは云也たとへと云は
ナシ(塙)
たはたかき義とはとをき義其風情高遠なればたと
へと云譬喩歌はたやすく心得がたければことの有
樣を○○記し申へきなり
おろ(塙)
朱書(塙) 私云此注之正説見二詩六義一可二心得一歟
輕池之納廻往轉留鴨尙爾玉藻乃於舟丹獨宿名久二
うへに(塙)ナシ(塙)
まづ發句にかるの池とよめるはこの歌かもをたと
へにかりていはんとすれば也かると云は鴨のたく
ひ也井なか人はくろかもなど云也しかればおほか
る池のなかにも詞のよせあればよめる也入江めぐ
れる鴨すらに玉藻の上に獨ねなくにとはかもはい
も丶せも夜あくれば求食しにゆきわかれて入江を

めぐりあるけとも日くるればをのがねところをわすれずめぐりくるに我つまはとひくることかたきをうらむる心也たまものうへにひとりねなくにとは鴨はたまもの上ねにくかり（ろ（イ））ぬべきにもつまとたくひねて霜さゆるさ夜中にも羽がへして夜をあかすならひなるに我は獨りねにのみ長夜をあかすとうらむる也鴨はさゆる夜はよなかまてはめとりの羽をおとりにおほひ夜中より後は今すこしさえまさればおとりの羽をめとりにおほひてあかすとなんいへり

鳥總立（六條本）足柄（壖）山爾船木伐樹爾伐歸都安多良船材乎

このとぶさと云事は此集に。兩（一（イ））所侍る也然るを先達是を釋するにとふさとは草木のするなりといへりこの歌ともはしかにはあらず又このうたの發句古點にはとぶさたつと點せり然るに第十七卷の歌をかんがふるに登夫佐多氐船木妓流等伊有（布（イ））能登乃嶋山今日見者許太知之氣思物伊久代神備曾といへり依て今の歌の發句とふさたてと點すへしとふさと云はまさかり也さてとぶさたてあしから山にとつづけたる詞たとひその謂なくともか樣につゞかんことくるしかるへきにはあらずそれにとりてこれはまさかりをのなどやうの物にて木をきるにくだけてちるからをばそま人ともはわかしと云也しかればとふさたてあしがら山とつゞけたるなりさて歌の心は舟木をきるにはかまへてかたはらの木にきりかけじとする也もしそばなる木にもきりかけつればいかによき木なれども舟木にせぬ也舟は物にさへらるゝをいむへき故なるへしされば木にきりよせつあたらふな木をとよめり此歌のたとへたる心は日來より心にもめ（ナシ（壖））さしてかよひきたり足（是（イ））手をつくして誠をいたせ共おもひの外にやらじとおもふかたになびきはてぬればちからをよばでやむべきをあたらしむ心にたとふる也思ひのごとくにたにも舟につくられましかば朽はてんまでにも我にしたがひ我も身をやとすともとしていつくの浦までもはなれさらましとよめる也

不所見十方孰不戀有米山之末爾射狹夜歷月乎外見而思香

山のはとはたかきおもひにたとふいざよふ月をと

は日くるればそなたにむきてまたるゝにたとふみえずともたれかこひざらめとは歌の心はこゝにいそぎてみえずともたれかこひざらん山のはにいでぬべくもよひたる月のいまだこゝにはみえねども西の山に影のうつろひてみゆるはいよ〳〵戀しきをよそに見てしかとたとふる也

印結而我定義之住吉之濱之小松者後毛吾松

しめゆひてとは心にしめゆひておもへるなり濱の小松はのちも吾松とは濱は風はやみ忍ひかたくとも心は我かたになひけておもへる也小松は後も吾松とは色かはらずして千とせまでもあらんとたとふる也

託馬野爾生流紫衣染未服而色爾出來

おふるむらさきゝぬにそめいまだきずしていろに出にけりとは心をふかく君にそめしよりいまだあはぬさきにも思ふいろ深くして人にしらるゝにたとふる也

陸奥之眞野乃草原雖遠面影爲而所見云物乎

みちのくのとはふかきおもひにたとふまのゝかやはらは戀のしげきにたとふとをけれとゝはいまたあはぬにたとふ歌の心は思ひふかくしげくしていまたあはぬものから面影に立てみゆとよめる也

奥山之磐本菅乎根深目手結之情忘不得裳

おく山のとは是も深きおもひにたとふいはもとすげをねふかめてむすびしこゝろとはふかくなからへてむすびしこゝろとよそへたるにとりていはもとすげとは思ひ（ふ塙イ）ふかくいづかたにもゆきがたきにたとふゆきかたきにつけてもふかく契りを結びしに心ゆかんとおもふ心はたえせずしてわすれかねつとよめるなり

妹家爾開有梅之何時毛何時毛將成時爾事者將定

妹家爾開有花之梅花實之成名者左右將爲

此二首の歌詞はいさゝかゝはりたるやうなれとも其心さしはいくはくのかはりめなしいもか家にさきたる梅はむかひゐてみれとも色も香もあく事なくなつかしきにたとふいもと云はいは發語の詞もはむかふと云詞也十五夜の月をもち月と云ことも日在レ東月在レ西遙相望義也もはむかふ詞ちは詞助也衣裳のも又此義也なりなんときにことはさだ

*古今六帖人妻はもりか社か唐國のさらふす野へかねてこゝろみむ

めんとは花をめでみるほとをはいまだ夫婦にならさるにたとふみになりなんをばすでに夫婦の契りまこと有てひとつみとなれるにたとふる也

梅花開而落去登人者雖云吾標結之枝將有八方

此歌落句古點にはえだはあらめやもと點す其ことはりあひかなはす今和換云えだにあらぬやも發句の梅の花の義は色も香もあかずなつかしきたとへは前の歌におなしかるへしさきてちりぬと人はいへど丶はわれにえみて見えしかどもあらぬさまにして外にうつろひぬるにたとふわかしめゆひしえたにあらぬやもとは外にうつろひぬと人はいへともわかしめゆひし枝はいかゝほとなくうつろはんことえたそうつろひぬらんとよめる也

千磐破神之社四無有伐春日之野邊爾粟種益乎

この歌端作詞には娘子報ニ佐伯宿禰赤麿一贈歌とばかりかきてくはしき故は聞えざれとも歌の心によりてみるに赤麿がけしやうしけるをとめのよめると聞えたりちはやふる神のやしろしなかりせばとはさだめて妻あるらんとおそれて神のやしろにたとふるなりふることに人*つまは森か社か唐國の虎ふす野邊かなどいへるがことしかすがの野邊には神のやしろのましませばそれにおそれて粟をもまかぬにたとへたる也もろ〳〵のたなつものおほかる中に粟をよめる事はあはましと云心によそふる也又あはましをとは粟のたねをまきをきなば終にはみになるへければそれがことくやがてこそあはずともおそるへき事だになかりせば後にもあはんと契りをかましとよめる也契りをむすびをかんはたねをまくかことく也

赤麿更贈歌

春日野爾粟種有世伐待鹿爾繼而行益乎社師留烏

とよめる此歌古點には春日野にあはまけりせばまつしかにつぎてゆかましをもりしるからすと點せりその心詞いささか不相叶にや今和換云春日野にあはまけりせはまつしかにつきてゆかましをやしろはしるを和のこゝろはあはまけりせばとはあはんとたにも契りをきたらばまちやすらんとつきて

ゆかましをとよめる也やしろはしるをとは赤麿が
心には一のをとめはつまもあらばそれがひまをも
たづねてあはましと云心也なからんひまをたつね
てしらんを社はしるをとよそふる也さて娘子復報
歌に

吾祭神者不有大夫爾認有神曾好應祀

とよめるはまつると云もとむといふもともにした
がふと云詞也神とはおそるゝ心也つまを心さして
よめり此歌の心はわかしたかへるつまのことを云
にあらすますらおにしたかひたるつまの事をこそ
いへとよめる也よくまつるべきとはなんぢがつま
をぞよくしたがふべきと云也又それをぞよくした
かへてひまをもゝとむべき又よくしたかへなばね
たむことなくもありなんとおもへる也

大伴宿禰駿河麿娉二同坂上家之二孃一歌

春霞春日里之殖子水葱苗有跡云師柄者指爾家牟

春霞春日の里とつゞけたることは春の日は霞に映
せられてあかくむらさきにみゆれば春霞○○の里
といへりさきに赤人の歌に春の日をかすかの山と
云歌のところに釋するかことし殖子水葱と云はそ
の心ことなき也殖と云ことばをかみにをけること
は草木はみなうへ物なれは文字肝要なるときいひ
くはへたる也うへつきともうへたけともいへる是
におなし歌の心は坂上家の二のをとめを駿河丸心
にしめさして思ひけれとも初はいとけなしといひ
しは今はをとなしく成ぬらんとよめる也えはさし
にけんとはこなきのなえなりしか共今ははとへぬ
れば枝さしぬらんとよそへよめるなり

伊奈太吉爾伎須賣流玉者無二此方彼方毛君之隨意

いなたきとはいたゞき也きすめるは來住也意は帝
王は髻中明珠とてみづらの中に玉をいたゞき給へ
る也かのたまはたゞひとつなり又帝王の御髻は二
にとり給ふ也然ればかの一の珠をいつかたにをか
むともみこゝろにまかすへき也今かの珠をたとへ
にかりて我思ふ心いさぎよくふたつなしと君か思
はんまゝにともかくもしたがはんとよそへよめる
也

足日木能石根許其思美菅根乎引者難二等標耳曾結焉

常にはあしひきの山とてそつゝくる習にて侍べれとも今この歌にあしひきのいはねとつゞけたるは思ふところふかゝるへし一には玉篇云高大有レ石曰レ山といへりての義によらばあしひきの岩根といひつべし又あしひきの山といふ事ふるき四の義をもちて釋するにその由縁はかはるといへともみな足を引義也この義によらばあしをいたみてひかんことは岩根のそこばくあらん所にていたむへければ足ひきのいはねとつゞけたりさてこの歌の心は岩ねそこばくあるところのいはのはざまよりおひ出たるすげはひけどかたければ引とりても丶た（ナシ（イ））ねともうつくしくして心にめで思へばまたも〳〵○（も（イ））きてみむと心に○（し（塙））めざしておもふを我心にまかせてひきとりかたき人にたとへてよめる也

已上譬喩歌

挽歌

百傳磐余池爾鳴鴨乎今日耳見哉雲隱去牟（頭句（イ）　乎（塙））

この歌古○○點にはもゝつてのと點せり古語にももつたふと云也百より内の數を云とき或はもゝたらずといひあるひはもゝつたふと云也　いはれの池大和國也

石戸破手加毛欲得

たちからは手のちから也

石田王卒時丹生王作歌詞中

名湯竹乃十縁皇子狹丹頰相吾大王者

なゆ竹とは唐竹を云にやなよ竹といへりゆとよと同内相通也なよ竹のよなかきなともよめり唐竹にあたれりよなかくしてとをくなみよればなゆ竹のとをよるみてとよそへたりさにつらふとはさはゝやしといふ詞につらふと云はにはふと云詞なりはやくにはふことば也

於余頭禮可吾聞都流狂言可我聞都流母

といへるはをよつれとはちかふと云る詞也まかてとゝいふもまかれるよし也よのつねに人のいまふ事をまか〳〵しなと云是也

天雲乃曾久敝能極（歟（塙））

そくへとは底也

高山　大和國とかけり未詳

塙本◎私云是又是詩正義

過二勝鹿眞間娘子墓一時山部宿禰赤人作歌詞中
東俗語云可豆思賀能麻末能弖胡奥ッ椰墓ナ云也

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝壯鹿之間々能手兒名之奥津城處（壯|牡(塙)）

かつしかとは下總國葛餝郡也彼郡の中に大河ありふとゐと云其川の東をは葛東の郡といひ西をは葛西の郡といふかしこにいにしへ眞間（間|門(塙)）をてこなといひ老翁をおきなと云是也又女にもいふすなはちをみなともいひ老嫗をゝうなと云是也意はなろ（なはろの(塙)）ゝ義（な|(塙)）也をなはめなはの義也まさしく男をば上聲に叶とよひ女を平聲になとよふへき也なにともしらさらん人のしとげなくていはんをは難じなをすにもをよばずとも又まさしき心をしらんとおもはんものはいかてかわきまへさらむや

見二姬島松原美人屍一哀慟作歌

みつ〳〵しとはおさな〳〵しといふ詞也

妹毛吾毛淸之河乃河岸之妹我可悔心者不持（持|け(塙)）

この歌古點にはいもゝわれもさやゐの川のかはきしのいもかくゆへき心はもたじと點せり第二句のさやけの川ことはりあらはれず今和換云いもゝわれもきよめし河の川きしのいもかくゆべき心はもたしと云へし其心いかにとならはいもゝわれも風俗をしづめきよめてふた心なければいもがくゆへき心はもたしとよめり今の第二卷肅二淸風俗一釋云謂レ肅者敬也風者氣也俗者習也土地水泉氣有二緩急一聲有二高下一謂二之風一焉人居二此地一習以成レ性謂二之俗一焉縱信濃國俗夫死者卽以レ婦爲レ殉若有二此類一者卽正レ之以レ禮發レ是爲二肅一淸風俗一已上

大皇之命恐大荒城乃時爾波不有跡雲隱座

おほあらきの時とは人の死期を云といへり

大伴坂上郞女悲二歎尼理願死去一作歌詞中

栲角乃新羅國從

此（發イ一）句古點にはたへすみのしらきの國と點せりこの句勘二作例一たくつのゝと云へし第廿卷陳二防人悲別之情一歌詞中云多久頭怒能之良比氣乃宇倍由奈美太多利と云へり然者今の歌の發句たくつのゝ

◎安積皇子薨之時作歌詞中

しらきの國にと點すへしたくと云もたへと云も同しくはむる詞なれはたへの詞其心かはらすといへともたへすみと和するはことはりにかなはさるべし又たへともたくともいふはともに物をはむることばにとりて白きを心さしていへる詞也されは新羅國をしらきの國と云によりてたくつの丶しらきと云る也

内日指京思美禰(彌(墑))爾

うちひさすみやこと云事はふるくも釋したる事なきにや近代の歌仙もしらざるよし申されけり然(昔(墑))ば推義を記し申さん事もはゞかり侍れとも首より今にいたるまでもたしてやみなんこともほいなく侍へるへければ心に思ひ耳に聞及へる事を申のへ侍るべき也是はすへらぎの宮の内は高きものなればば日の光さし入て内をてらし給へばうちひさすみやと云なるべし文選十一宮殿魯靈光殿賦晨光○照内(墑イ)流景外烟　晨光日景也日光照ニ於空中(室(墑))一與流景外發句延也西都賦曰○燉(激(イ))日○而(墑)納レ光烟起といへり　景(墑)　景(墑)

釋義尤對合乎

朱頭書(墑)私云非ニ靈光殿賦ー景福殿賦有ニ此文ー

都禮毛奈吉(ナシ(イ))

と云はうけもなきと云詞也同韻相通乃故なるべし

◎久邇乃京者山城國也山邊爾波花咲乎爲里

をせりとは望見とかきてをせりとよむ心はさきか丶りたる也

和豆香山

とはそま人の山也和とは斧を云和をつかふ人なればわつと云しかれは返歌の落句に云わつかそま山と云々

想ニ傷死妻ー高橋朝臣作歌詞中

入爾之山乎因鹿跡叙(釼(墑))念

よすがとは日本紀には資文字をよめり意はかたみと云心也

萬葉集註釋卷第四

第四卷

崗本天皇御製詞中

味村乃去來者行跡

この句古點にはあぢむらのさりきはゆけと丶和すと丶云々あぢむらは鳥なりいさとはゆけと丶はむら鳥の立羽をとざときてゆればいふ又むら鳥のならひ鳥ひとつも立そむれは皆さそはれてたてばいさとはゆけぞ丶よそへよめる也村鳥はしばしもはなる丶時なくともなひてをるればともにをりゐたてばともにたちてはなる丶時なきにわれはひとりのみして日もくらしかたく夜もあかしかたしと歎き給へる御歌也

其心詞不二相叶一仍和換云あぢむらいさ。はゆけ

返歌

山羽爾味村騷去奈禮騰吾者左夫思惑君二四不在者

此歌古點者やまのはにあぢむらこまはさるなれどわれはさふしゑきみにしあらねばと點せり依之或は山のはにあぢむらこまはさるなれと丶は日をは白駒の影なと丶云てひまゆくこまにたとふれは山のはに日の影はさしたれともわれはさふしもきみにしあらねばとよめると釋する人も侍る也今歌の心詞をみるに不然山のはにあぢこまはさはぎゆくなれとも我はさびしもきみにしあらねはとよめる也さびしと云詞を此集にはさぶしもとかける事あまたみえ侍るなりひとふと同内相通の故也第二句は古點にもあぢむらさはきと點せる本ありこれよろしかるへし第三句はゆくなれと丶點すへし

眞野之浦乃與騰乃繼橋情由毛思哉妹之伊目爾之所見

此歌中五文字證本皆同しく漢字は情由毛とかきて假名にはこ丶ろたもと點せり又或本には田にかけりこれは假名によりてかけるにやこ丶ろゆもと云は古語也是をこ丶ろにも共こ丶ろよりとも所にしたかひて心得合するなりたとへは從文字をにともをともゆともよりともよむは所にしたがひてよめどもいづれの詞をもみなこめてそへたるなり

河上乃伊都藻之花乃何時何時來益我背子時自異目八

方

ある物にはいつもの花とは河の内よりさき出たる花を云なりとかけり但物をほむるにはなに丶もいつのことばをそへていひをける習なれは是も藻の花をほむる心にていつも〳〵きませわかせことさわかめやもとよみつれば賞する詞相叶て聞ゆる也河藻の花は水のしたになびきてさきたるもあり水の上に生出てさけるもあり河の内よりさき出たるはなを幽猶(摘)なりと釋しさるべきにもあらず物の名にをひていつの詞ををく事日本記紀(摘)第三卷にみえたり

天皇大喜乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹以祭諸神自此始有嚴瓮之置也時勅道臣命今以高皇産靈尊朕親作顯齋顯齋此云于圖詩怡破毗用汝爲齋主以嚴媛之號而名所置埴瓮爲嚴瓮又火名爲嚴香來雷水名爲嚴罔象女罔象女此云瀰菟破廼迷粮名爲嚴稻魂女稻魂女此云于伽能迷薪名爲嚴山雷草名爲嚴野椎

といへり今歌第三句のつ丶き河上のいつもといへるは川上は水のいづるによそふる也いつ藻のもの字水にかよふ心もあるべし同内相通の故也但是はめくりたる心得樣なりいつと云假名の詞の内にいつる水の義はこもるべき也いと云は出る義つと云は水也井をつ云かことし水のしろきをつゆと云かことき也又此歌の發句川の上と點したる本ある也川上のいつもとよめる佳也第五の句ときわかめやもとよめる異の字わけとよむときわけめやもとみえたるをわかめやもと點したるは詞のききもなたらかなるによる又かきくけこの五音にをひて男聲をよめる也

朝日影爾保敞散(摘)流山爾照月乃不厭君乎山越爾置手

あさひかけにほへる山にてる月のとよめるは西の山のは近き有明の月は月の光もてらしながら夜のあくるにしたがひて朝日の出なんとするよそほひの影もうつろひたればあかぬなごりによそへよめる也

三熊野之浦乃濱木綿百重成

はまゆふをよめるみくま野のうらの伊勢の國なり濱ゆふは芭蕉に似てちゐさき草也くきのいくえともなくかさなりたるなりへぎてみればしろくて紙

などのやうにへだてみればしろくて紙などのやうにへだてのある也大臣大饗なとには鳥の別足つゝまんれうにいせのみくまのゝうらよりめしのはせらるゝといへり

神風之伊勢乃濱荻折伏

伊勢國には葦をはまをぎと云也攝津國にはあしといひあづまにはよしといふ也といへり

未通女等之袖振山乃水垣之久時從憶寸吾者

をとめとは少女也といへり又女の惣名也と釋する事もあり袖ふる山とは大和のふるの山也ふるといはんとて袖ふるとよそへたるなり水垣とは神社の端籬なり神はあまくだり給ひて後久しければ久しき世よりと云なり

夏野去牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉

この歌は戀によそへてよめる也夏野ゆく鹿とよめるは五月夏至日鹿角解なといひてあり是本文也禮記の月令のまきにみえたりさてそのもとのありし角のおちて今おふる角は手にとる許たにもおひぬるによせてつかのまもとはよめるなりそれをときのまもなしと云心にかよはせるなり

たまきぬのさゐ〳〵しづみいゑのいもに物いはすきておもひかねつも

たまきぬとはよき衣也物をほむる詞に玉と云常の事也さゐ〳〵しづみとはさゐとはゐるなりしづみとはしづむる也いか成きぬなれともよく并をばしつまれはなり事やみて靜かになるにいたくいそぎてものいはずきてくやしき心をよめる也

我せこはものなおもひそことしあらはひにも水にもわれならなくに

此歌のよめる心はいか成事ありとも火にも水にも成てうすへき我にてもなしわかせこは物なおもひそとよめる也

丹比眞人笠麿下二筑紫國一時作歌詞中

青旗乃葛木山爾

とつゝけたるは○○○木にはひかゝりて手の長くしけくしてかゝりたるは青旗ににたれはあをはたのかづらき山のとはつゞくる也をよそはたと云ははながき義たは手なり手のながくてかゝりたれ

ばはたといへり

粟島乎背爾見管

あはしまは讃岐國屋島北去百歩許有レ島名曰二阿波島一といへり此島をよめる歟そかひはせなかあはせ成を云

浪上乎五十行左具久美磐間乎射往

とはいゆきさくゝみはさくくみとははやくくると云也舟の波の上にゆられゆくは浪をくゞるやうにみゆる也岩のまをいゆきもとをりとはめくるをもとむると云岩のあるところをは梶をたきまはしてめぐりゆけばいゆきもとをりといへり

稲日都麻

いなひつま家の島ともに播磨國也

秋田之穂田乃苅婆加香縁相者彼所毛加人之吾乎事將成

はたのかりはかかよりあはゝとは田のかりきはなと云心也よりあはゝそこも人のわれをことなさんとは田をかなたこなたよりかりゆくほどになかばによりあひぬればともになすべき事とぐるにたとへてそこもか人のわれをことなさんとたとふるなり

吾以在三相二指流絲用而附手益物今曾悔寸

此歌第三句に四ケの點あり一にはみこおほせによれる二にはみゝにさしいるゝ三にはみつあひによれるこれ江本也四にはみはかせはれる以上四種の和あるなかに江本勝歟其故は中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌曰ひとりねてたえにしひもをゆゝしみとせんすへしらにねのみしそなくといへり此歌をかへすにいはくわかもたてみつあひによれる糸もちてつけてましものを今そくやしき江本尤得其意乎

春日野乃山邊のみちをよそりなくかよひし君かみえぬこのころ

よそりなくとはよそへよる事もなくかよひしとよめるなり

あつふすまなごやかしたにふせれともいもとしねらばはたしさむしも

あつふすまなごやかしたにとはあつふすまあたゝ

かなればさむき事もあるましけやはらきたるした
にふせれともきみとしねらばさむしとよめるなり
なごやといへるやの字は詞のたすけ也
千鳥鳴佐保乃河門乃瀬乎廣彌打橋渡須奈我來跡念者
奈我來跡念者とは奈とは男を云也委くは間々能手
兒名が所に釋するかことし
佐保河乃涯之官能小歷木莫苅烏在乍毛張之來者立隱
金
此歌古點にはさほ川のきしのわたりのわかくぬき
なかくそありつゝもはりしきたらはたちかくれか
ねと點せり今案するに其心不相叶仍和換云さほ
川のきしのつかさのしばなかりそありつゝもはる
しきたらばたちかくるかにきしのつかさとはきし
のつきと云詞也おほかたつかさと云はつゝき
かさなる心也又つかさと云詞この集の中に兩三所
見え云之侍へる也第十七卷山部宿禰明人詠春鶯歌云安
之比奇能山谷古延氐野豆加佐爾今者鳴良武宇具比
須乃許惠この歌第三句古點にはやつかさと點す其

心不叶のつかさにといへりつかさとは野のつゝき
とよめるなるへし
事清甚毛眞言一日太爾君伊之哭者痛寸取物
この歌古點にはことさよくいたくもいふな日とひ
だにきみかいきなばいたきとり物と點せり其心不
顯今和換云ことさよくいたくもいはし日とひたに
きみしいなくはいたきゝずぞも意はことさよげに
おもはへしにいたくもいはし日とひなりとも君た
にもなくはいたききずなんとのあらんやうにかな
しかるへしと讀る也
ことはにかよひし君かつかひてすいなはあはしと
たゆたひぬらし
とことはにはつねにと云也たゆたひとはたゆむと
云事也
神龜元年笠朝臣金村作歌詞中
安蘇々爾波
あそゝにはとはあそ／＼と云詞也人の物。ゝをい
ふにさそあるらんと云心也和語の習重點を云には

後にはかみの字を略する也たとへはきら／＼といはんとてはきら〻といひはら／＼といはんとてははらゝといひとを／＼といはむとてはとををなんと云たくひ也又今の人のあさな／＼と云事を○○くは○○あさなさなともいへる也已上皆效之

反歌

後居而戀乍不有者木國乃妹背乃山爾有益物乎

妹背の山は紀伊國也いもの山せの山とて二也その中に吉野川なかれたりふたつなれとも引合せていもせの山とよめる歌ともあり古今の歌にも流ては伊もせの山の中に落るよしの〻川のよしや世の中とよめりこの歌は名をは日とつにいひなしたれども中に芳野の川のなかれたることを讀つればふたつと聞えたり又伊もせの山と別々によみたる歌もあり。

幸三香原離宮之時作歌詞中

百夜乃長有與宿鴨

よひとは心よくいをぬるを云也

反歌

今夜之早開者

この歌古點にはこよひのはやくあくれと點す古語にはこのよらのといへり男聲をよぶ故成へしよるをよらといへる事眞名假名のところにみえたるへし

山路道之島乃浦廻爾緣浪間無牟吾戀卷者

やまとぢのしまのうらはなといへる事やまとの國には海もなきにいかてかくよめるにかと人おほくたつぬる事なりこれはやまとの國に島なんどあるにはあらずいにしへの都はおほくやまとの國にありされは都へのぼりくだる道をやまとちといひてつくしなんとよりのぼるあひだのみちをよむとて第十六卷にあり(槁イ)はやまとでのきびの小島をすぎてゆかばつくしのこしまおもほえんかも(ち(槁イ))などよめるなり

吾君者和氣乎波死常念可毛相夜不相夜二走良武

わけとは男を云也この歌下句古點にはあふよあはぬ夜よませなるらんと點せり其心はかはらずといへとも落句の和○(古(槁イ))語にあらず推點とみえたりふたゆくとは一すぢならずしてふたみち成をいへり

天雲乃遠隔乃極遠鶏跡裳情志行者戀流物可聞
とをけともとは遠けれともといへるなり文字を略することも常の習也

古人令食有吉修能酒痛者爲便無貫簀賜牛
きびの酒とはきびをもつてつくる酒なりきはめて性のつよき酒なり貫簀とは竹にてみすのやうにあみたる物なりかみつかたに御てうつたてまつるときたらひの上にうちしきて御手水をばまいらすたばしりなんどを御衣にかけざらんため也

爲君醸之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手
かみしとは酒つくるを云也安野五代集〇には近江と注せりこの歌は太宰帥大伴卿贈二大貳丹比縣守卿の遷二任するに民部卿一歌なり不レ可レ詠近江安野哉筑前國に野聚の郡あり詠彼野歟
私云筑紫には待人の爲に造る酒を待酒と云と云々

不念乎思常云者大野有三笠杜之神思知三
この三笠杜又五代集歌枕に大和とみたりかすがのみかさのもりとおもへるにや大野なるみかさの杜といへるは筑前の國なるへし

無暇人之眉根乎徒爾〇掻乍不相妹可聞
戀しき人をみむとては眉根をかくといふ本文のある也

草香江攝津國　しろとりのとは山山城
うちろの里大和

吾毛念人毛莫忘多奈和丹浦吹風之止時無有
おはなわにとはおほかたにと云也

皆人乎宿與殿金者打禮杼君乎之念者寐不勝鴨
ねよとの鐘とは初夜のかねなり

不相念人乎思者大寺之餓鬼之後爾額衝如此
この歌昔は大なる寺の堂舍には餓鬼をつくりて後戶の方なんどにをきける也それを田舍人なとは堂舍巡禮しておかむとてかの餓鬼をも佛とおもひておがみけるをはけかなき事にしてわらひけるなりさればあひ思はぬ人をおもふはゐなか人などの彼餓鬼のしりへにぬかづくかことしとよめる也ぬかづくとはぬはめぐらす義かはかしらなり神佛をおかみたてまつるにはかうべをめぐらして地になぐ

ればぬかづくといふなり額をぬかと云事あるもし
たの義は同し心也
松之葉爾月者由移去黄葉乃過哉君之不相夜多焉
月のゆつりぬとは月はうつりぬと云なり人の我身
にさりがたくおもふものに官職をもつたへつくる
をゆつると云もうつすといふもおなし事也ゆつる
といふ文字のひゞきにうをおさめたればゆと〇云（も（イ））
は發語の詞にてあればゆつると云には發語の詞を
くは（もおも（塙イ））へ又ゆと云にうのひゞきあればうつると云字
をもてめたればうるはしくいひしりたる詞にてあ
るへき也
奥敝（幣（塙））往邊去何麻夜爲妹吾漁有藻臥束鮒
もぶしつかふなとは水の中にあかもといふ藻（物（塙））のし
たにふす鮒也つかと云心はあつまると云なり又も
ふしつかふなとて只ちいさき魚をいふともいへり
宇波弊（幣（イ））無物可聞人者然許遠家路乎令還念者
うはへなきとはかみもなきと云心なり意はこれは
どに情なき事は又うへもあらじといへるなり
家二四手雖見不飽乎草枕客毛妻與有之乏左

歌の心は家に居てしづかにみるたにもあかぬいも
を旅にて物いそかはしき中にみれば猶めづらしさ
よとよめり
絶常云者和備染責跡燒太刀乃隔付經事者幸也吾君（れ（塙））
やきたちのへつかふとは太刀かたなにきり入たる
きずのあるをばへと云也へとはつゞかずしてへだ
てのあると云なりされはこの歌はかのやきたちの
へつかふ事のあしきをたとへにかりてたゆといへ
はわびさせむとおもふかやきたちのへのつきたる
はよき事かとよめるなり
わきもこにこひてみたれるくるへきにかけてしこれ
とわかこひそめし
くるへきとは糸をかけてくる物也わくと云物にし
ておほきなる也それがやすき時なくめづるをたと
へに引てわきもこにかくる心のくりかへしやむ事
なきとよめるなり
相見若月毛不經爾戀云者乎曾呂登吾乎於毛保寒毳
をそろとはそらことゝいふこと也あつま詞也あひ
みては月もへぬに戀しといへばそらことゝいはん
かとよめる也

＊袖中抄三三左萬葉裏書ヲ引テ此ト同シカラヾ通攷スベシ

不念常曰手師物乎翼酢色之變安木吾意可聞

このうたの中の五文字はねすいろのと和す今案不相應はねすいろのと和すべし第十卷の歌に云山振之爾保敞流妹之翼酢色之赤裳之爲形夢所見管これ又同じくはねすいろと云へし其故は第八卷に大伴家持唐棣花歌に

夏儲而開有波爾受久方乃雨打零者將移香といへり

今の歌うつろひやすき風情其心同し抑唐棣花を釋するに先達有二異說一或云月草是第十二卷歌

唐棣花色之移安情有者年乎曾寸經事者不絕而

この歌の頭句古點にはつきくさと點せり依之月草と云へる歟おそらくは是あやまりなるへし既に第八卷大伴家持唐棣花を詠して波爾受とかきて其和名をあらはせりなに丶よりて月草と和換へきやしかも第十二卷頭句云唐棣花色之とかけりこれをつきくさと和すれば色の字和せられさるをや扨先達等唐棣花を釋するに各異說あり或云庭櫻或云李花或云木蓮花といへり加樣にあまたの異說はあれともたしかの證據をはかきのせす但萬葉集或本裏書云唐棣車下李也子如レ李赤小一名移音迻子栗苦野李也似二白楊一江東呼爲二夫移一子如二櫻桃一可レ食揺邑記云扶移枸節發レ根下垂虛レ中森羅從レ風望云懸髮文又檢本草云陸機草木疏云唐棣即奥李也乃至其花或白或赤六月實成云々それにとりてはねすいろといへるは世のもちゐるところは赤色なるへし十一卷歌にはねすいろ○あかものすかたとよそへよめるか故也又日本紀第二十九卷天渟中原瀛眞人天皇十四年秋七月乙巳朔庚午勅定明位已下進位已上之朝服色淨位已上着朱花 朱花此云波泥須(イ)孺といへり

戀々而相有物乎月四有者夜波隱良武須叟羽蟻待

此歌第四句古點にはよはかくるらんと點す其心不相叶よはこもるらんと和すへし月しあれは夜はまだあるらんしばしまてといへるなり

いづみのさと　山城國

一瀨二波千遍障良比逝水之後毛將相今爾不有十方

此歌古點にはひとつせになみちへさらひゆくみつのゝちにもあはむ今にあらずともと點せり第一二の句の和しかるへしともみえすさらひといへるも作例もなし仍和換云ひとせにはちたひさはらひゆくみつののちもあはなんいまにあらずともたゝなはのなかきいのちをほしけくはたえすて人を見まくほりこそ

たゝなはとはあくるなはと云也あとなと同韻相通也

葉根蘰今爲妹乎夢見而

はねかづらとははなかづらなり花をもつてかざりたるかづら也なとねと同内相通なり（なるべし）

思遣爲便乃不知者片垸之底曾吾者戀成爾家類

もひとは茶垸なり

私云或人云延喜式（式（墒イ））云片垸者底深器云々可見。

大伴坂上郞女從跡見庄賠留宅女子大孃歌詞中

常呼二跡吾行莫（墒）（か（墒イ））魚國小金門爾物悲良爾念有之

とこよにとわかゆくなくにとはとこよは逢萊島也心は逢萊へたつねゆかんこそいたづらに舟のうちに年をつみて○○○○○○○○○○○○○○○（歸るこさかたからめ近きほさの所にたにもはなれゐては（墒イ））○○○○かなしとよめるなりてかなとにとはたち出かたきによそふる也

萱草吾下紐爾着有跡鬼乃志許草事二思安利家理

稽康養生論曰萱草忘憂といへり此歌の意は萱草愁をわするゝしるしあれは我戀のなけきの心やなぐさむるとてわかした紐（紐（イ））につけたれと其しるしもなし凶（凶（墒））草の詞はかり也けりとよめる也鬼のしこ草とはおにとはおそろしきと云なりしことは凶（凶（墒））と云詞也

將相夜者何時將有乎何如爲常香彼夕相而事之繁裳

いつしかあらんとはいつかあらんと云也いつしかといふし文字は詞の助也この歌の心はあはむ夜はいつかあらんなにすとかあはんとちぎるたるよ事のしげきにとよめる也

春日山かすみたなびきこゝろくゝてれる月夜に獨りかもねん

こゝろくゝとはこゝろあやしくと云也歌（奇（墒））の文字（ナシ（墒））をくゝとよめるなり

わかこひはちびきの石をなくはかりいひにかけても
かみのもろふかし（墒）
ちびきの石とは磐石を云也
よのほとろわかいてヽくれはわきもこかおもへりし
くよおもかけにみゆ
よのほとろとはよのひかると云也夜のあくるを云
也しのヽめのほがら〳〵とあけゆけはなと云もひ
かりあくる心也

事不問木尙味狹籃諸茅等之練乃村戸二所詐來
ことヽはぬきすらあぢさゐとは草木は物いはぬも
のなれはことヽはぬ木なと云歌是ならすもみえ侍
へりあぢさゐとはあぢはふる也もろちらがねりの
むらとにあざむかれけりとはもろちとはつまとに
よくするにはもろち。たつといへりかたちなるつ
まとたにもあくればなることにてあるにましても
ろちはことにかしかましくなる也ねりのむらとヽ
はかのつまとのなるをねりとはいへりむらとヽは
つまとのあまたあるをいへりてのつまとをあくれ
はいつれもおなしくなるをこととはぬきすらあぢ
さ井もろちらがねりのむらとにあさむかれけりと
よめる也

事出之者誰言爾有鹿小山田之苗代水乃中與杼爾四手
この歌の心は小山田なとは平地ならす高下あるに
せきいるヽ苗代水なとも始はことにおとなひわた
れともそのひとあせのうちに水たまりぬれはのち
にはをともせずなるをたとへにひきてことでしは
たかことにあるかをやまたの苗代水のなかよとに
してとよめる也
仙覺
ナシ（イ）

正辭按與恐局即卷字

萬葉集註釋卷第五

第五卷

太宰帥（塙）大伴卿報二凶（塙）問一歌

端作詞云　但依二兩君大助一傾ㇾ命纔繼耳といふは

兩君者稻公胡麿歟帥（塙）大伴卿疾二苦枕席一之時庶弟

右兵庫助大伴宿禰稻公姪治部少丞大伴宿禰胡麿給

ㇾ驛發遣令（イ）令看（塙）者卿病而逕二數旬一幸得二平復一釋此集第

四卷若此事歟

與（塙）

余能奈可波牟奈之伎母乃等志流等伎子伊與余麻須萬須加奈之可利家理

いよゝとはいよ／＼也和語のならひ重點を云には次のたびはかみの字を略するひとつのならひなりこのやうは梵語にもある也又略せでいふ事もあり略して云ならひある事をばしるべき也

四生起滅方ㇾ夢皆空

四生とは胎卵濕化なり

三界漂流喩二環不一ㇾ息

三界とは欲界色界無色界なり

二聖至極不ㇾ能ㇾ拂二力負之尋至一

先に右の（塙）

二聖とはさきに言がごとく維摩大士釋迦如來也力負者無常也意者釋迦如來一期化緣皆（俊（塙））御最後圓寂（寂（塙））の所をしめしおはしますに俱尸那城跋提河のほとり（イ本ナシ）沙羅林中なるへかりき然にかの沙羅林へわたし奉るへき途中に大磐石の林（村（塙））によこたはりふしてとをりかたきところ有けり力士等是を聞てをの／＼あつまりてこれをとりのけて平地にせんとするにすへてちからのをよふへきやうなくしてとかくしける所に釋迦如來僧形に現し給ひてこゝにいたり給ふ力士ともにとふての給はく汝等なにことをかなすぞとの給ひけれはかの力士ともはみなかぎりなき大力の者とも無双の宿德の者とも也ければ汝等との給ふを聞て攀緣の心有けりこゝに佛みあしのゆびをもちて大磐石をゆるがしめ給ふ力士も奇特のおもひをなすつゐて佛大磐石（い（塙）ナシ（イ）さも（塙））○○をとりて虛空

になげあげ給ふに梵天までいたりけりもろ〳〵の力士おそれてにげはしるしばらくのほとをへて磐石地におつ釋尊又御手にとりてをしもみて吹給ふにみなちりはひと成て他方世界へちりぬ。佛力士にとふての給はく我ちからいくばく也とかせん力士ほとけにこたへてまうさく心こと葉のをよぶところにあらず三千世界によくならぶもの有へからずと申す佛又のたまはく我にまさりて力のつよきものありいはゆる無常也とのたまひき心はちからも無常にまくといはんとなり三千世界とは倶舍云四大洲日月迷盧六欲天梵世各一千名二一小千界一此小千々倍説名一中千此千倍大千皆同一成壞といへりつぶさにかぞふれば百億の須彌百億の日月百億の四天下也これを三千世界といふ又三重までにかそへあげたれば三千大千世界と云也　黒闇者死也

二鼠は月のねずみ日のねずみを云なり

四蛇は人の身にそなへたる地水火風の四大を四蛇にたとふるなり　三從　四德はともに女人にあり

日本挽歌詞中

宇知那毘枳許夜斯努禮

こやしぬれとはこやとはふすをいふよろびふすと云詞也ふすといはんためにうちなびきとはをけるなり

反歌

いゑにゆきていかにあかさん枕つくつまやさふしもおもほゆへしも

まくらつくとはまくらなれたりと云也つまとはつつく也人の家居はことによろしき人なとは夫婦かならずしも一宅のうちにあらずつくりつゝけたる屋の別のやに妻はすめばかの婦人のゐたる家をつまやと云へしつまといひいでんためにまくらつくとはそへたる也この日本挽歌は山上憶良が妻にをくれてよめる歌なればつまやさふしくおもほゆへしもとはよめる也

大野山きり立わたりわかなげくおきその風にきりたちわたる

おほの山筑前國御笠郡にありおきにとはうみの

奥にあるいそをいふことなれともこれはしかには
あらしわがなげくおきその風にきりたちわたると
はいきをおきとよめるなるへし
令レ反二感情一歌詞中指二示三綱一更開二五教一遣レ之
あまくものむかふすきはみたにくゝのさはたるきは
み　むかふすとはむかひふす也かく文字を略して
いふことゝも例ある事也たにくゝとはたにみつな
り谷をくぐればたにくゝといふなり
反歌
久かたのあまちはとをしなほ〳〵といへにかへりて
なりをしまさに
あまちとはそらのみち也なほ〳〵にとは直々とい
ふ也なりをしまさにとはなりはひをしませと云也
思二子等一歌詞
まながひにとは　まことになかき日也眞長日
哀二世間難一レ住歌詞中
おとめさびすと云はおとめすさびすと云なり
よちこらといふはおなしほとの子等と云心なり
あかてまにしつくらうちをき
あかこまとはむまのけいろはくろきも白きもあり
すへてさま〳〵の色なるもあれともあかきけのむ
まはおほかればあかてまと云しつくらうちをきと
はしつとはしもといふことばなればよくもなき也
いたとりよりてまたまきのたまてさしかへされしよ
の
いたとりよりてとはたとりよりて也いは發語の詞
またまきのたまてさしかへとはよきてといはんと
てまたまといへる也
たつかつえこしにたかねて
とはたつかつえは手につきたるつえ也こしにたか
ねてとはてしにつかへて也
か(墻)け(イ)とゆきは人にいとはへかくゆき け(イ)は人ににくまゆとは
とゆけば人にいとはれかくゆけば人ににくまれと
いふなりえとれ へカ とは同韻相通也この句普通の本と
もにはみなかく○き ゆ(墻)は人にいとはれかくゆきは人
ににくまれと點せりそのことはりあはす二條院御
本の流とゆき か(墻)は人にいとはへかくゆきは人ににく
反歌　まへ也義理尤相叶殊勝云々

とゝみかねつも
とゝめかねつもと云也みとめと同内相通なればく（み（塙））
るしからねとも尾の字をめとつかふ事傍例おほか
るへし
たつのまもいまもえてしかあをによしならのみやこ
にゆきてこんため
たつのまとは龍馬と云也
對馬結石山孫枝梧桐日本琴夢化娘子歌詞中
遠望風波出入雁（鴈）木之間云事　昔莊子行於山中見大木枝葉茂盛伐木者止其傍而不取也問其（歟（塙））故無所可用莊子曰此木以不材得終其天年莊子出於山舍故人之宅故人喜令豎子殺雁（鴈（塙））烹之豎子請曰問其一能鳴其一不能鳴請奚（歟）殺主人之曰可殺不能鳴者（歟（塙））明日弟子問於莊（歟（塙））子○昨日山中木以不材得其終天年今主人之（曰（塙））雁（鴈（塙））以不材死矣先生恂何處莊子咲曰周將處（特（イ））

彼之間才與不才之間似之而非也故未免乎累云々今琴娘子言處才與不才之間乎
いかにあらん日のときにかもこえしらん人のひざのへわがまくらせん
ひざのへとはひざのうへなり
詠鎮懷石歌詞中　私記　この石は神功皇后の新羅征伐の時御袖のしたにはさみつけ給ひし石也
可良久爾遠武氣多比良宜豆
からくにとはもろこし唐をいふやうに常には思ひならひたれどもふるきことばには新羅をも高麗をも任那をもみなおなしくからくにといへるなり今の歌にからくにとよめるは新羅なりいとらしてはとりてなりいは發語のことは
くしみたまはくしはあやしと云詞歌文字（寄（塙））のよみ也（な（塙））
いまのらつゝにとはいまのらはいま也つゝとはつゝきてと云なり心はむかしより今までつゞきてといふ詞也
淡然としてとは　しづかにしてと云也
快然としてとは　こゝろよくしてと云也

◎め恐ぬ字

*与並弖字訛

梅花歌三十二首の内淡然よりしも梅花歌三十二首の序の詞也次第誤り也

波流佐禮婆麻豆佐久耶登能烏梅能波奈比等利美都々夜波流比久良佐武

はるされはあきされはなと云事歌にも連歌にもつねに出くる事也それを或ははるされはなと云は春のするに成たるやうに心得たるとおぼゆる詞も侍へり又子細しりたりとおぼゆる人は只ひたゝけて（しき（墻イ）たゞ　ひたけてカ）春になるを云也と申す人も侍るへしこれはふるき人のかきをきたるを見て申すはかり也其故をあきらかにわきまへ申す人もかたかるへししかるにこの詞を勘かへみるにはるされはとは春になれはと云心也このことばをかきたるに春之在者とかきたるところもありこのかきやうによりて假名をつくれは或ははるのあれはとよまるへしこれを物よむ故實によりて心うれははるなれはと點すはるのあれはとよまるゝをのあをひきあはすれは○○○○（のあなかへ）○○○○○○○（せばなさかへる也（墻本ナシ））のあはな也この故にはるなれはと點すへしあるひははるしあればとよまする故實によりて心ゆれば○○○○○○○○○○（しあなかへせばささかへる（墻本ナシ））しあはさ也この故にはるされはとよまるゝなるへしかゝれば春されはと云も春なれはと云も心は春になれはといふこと葉也それにとりて春に成たるを春されはとよめるとみゆる歌もありいはゆる今の歌のごとく（く（墻））春されはまつさく宿の梅の花獨りみつゝやはる日くらさんとも春されはこめ◎れかかりてうくひすのなきていぬなる梅かしづえにともよめる歌也又春のさかりなれとも春の内にてあれはよめりとみゆる歌もあり第十五卷春相聞寄鳥歌に　春されはもず（與（墻））の草々きみえずともわれはみゆらんきみかあたりはとよめり又春のすぎたるを春されはとよみたる歌もあり第十卷夏相聞寄鳥歌には*（弖（墻））春されはすかるなくのゝほとゝきすほと〳〵いもにあはずきにけりともよみ同卷寄花歌に*（与（墻））　春されはうの花くたしわかこえしいもが垣まはあれにけるかもなとよめりはとゝきすうの花くたしなと春の歌によむへきことはりなきか故に此歌ともは春の過た

るを春されはとよめりときこえたり秋されはなとも是になぞらへてしりぬべし

うちなびく春のやなぎとわかやどの梅の花とをいかにかわらん

これはうちなびく春の柳と梅の花とのいつれもわきかたきなさけある事をよめる也

波流奈例婆宇倍母佐枳多流烏梅能波奈伎美乎於母布得用伊母禰奈久仁

よいもねなくにとはよきいもねられぬとよめる也發句のはるなれはといへるはさきにいへるはるされはとおなし事也

烏梅能波奈伊麻佐加利奈利毛々等利能己恵能古保志枳波流岐多流良斯

もゝとりとは春はもろ〳〵の鳥のなけば百鳥といへるにや又鶯をもゝちのさへづりすとてもゝちとりともいへり今の歌いつれをよめるにかさためがたしてほしきとはこひしき也

わがさかりいたくゝたちぬ雲にとぶくすりはむともまたおちめやも

くたちぬとは斜文字をくたつとよめばわがよはひいたくたけぬとよめる也くもにとぶくすりとは仙藥也仙にのぼりたるものも歎（欲(補)）心たにもおこりぬれば通力うせておつる事なればわかさかりいたくたけたれば仙藥をぶくして通力を得たり共又はおちんとよめる也

梅のはないも（め(補)）にかたらくみやひたるはなともあれもふさけにうかへてそ

みやひといふ詞ことによりて釋しかへたることありあるひはふるまひなといふ事も侍るにや又なさけともいへり今の歌はなさけあるはなとあれもふとよめりと聞えたりあれもふとはあれはわれ也もふとはおもふをいふなりおなし事なれともおの字をかみによびくはふるはふかき心ありもふとはうちまかせては心にかゝれる也さけにうかへてこそと

＊はむかしはうめのはなをもすさちるとみえたり

類二杏壇各言之作一疑二衡皐税駕之篇一

杏壇者大學寮之門前有レ杏故云二杏壇一彼文士也(補)等各作二詩賦一故云二各言疑衡皐税篇之篤者一衡山

五イ　二イ　三イ　一イ

也卓澤也彼寮文士等春花秋葉之時各乘レ車
歷ニ覽山澤ー勝地にいたりぬれは○○車を(塙)かけはづして
詠レ之作レ詩故税駕の篇と云也

もゝかしもゆかぬまつらちけふゆきてあすはきなん
をなにかさかれる

もゝかしとは百日也さかれるとはさはれる也

たましまのこのかはかみにいゑはあれと君をやさし
みあらはさすありき

やさしみとははづるなり

とをつひとまつらのかはにわかゆつるいもがたりと
をわれこそまかめ

或臨ニ洛浦ー徙ニ羨ニ王魚ー　王魚者王餘魚也和名引ニ朱ナシ(塙)比(塙)
匡記ニ云南海有ニ王餘魚ー　和名加里衣○俗云ニ加禮比ー　昔越王作
膾星(イ)レ膾不レ盡ニ餘半ー棄レ水自以ニ半身ー爲レ魚故曰ニ王
餘ー上已彼松浦縣娘子等彰ニ身獨守ー譬レ羨ニ王魚ー
也

大伴佐提比古郎子特被ニ朝命ー奉ニ使藩國ー艤
棹言レ歸稍赴ニ蒼波ー也妾松浦佐用嬪面云々
遂脫ニ領巾ー麾レ之傍者莫レ不ニ流涕ー因號ニ此山ー曰ニ

領巾麾之嶺ー也

以下十一行頭注朱書(塙)十一行ナシ(イ)
私勘　帔玉篇曰帔披僞反在ニ肩背ー延喜式曰帔
一條○十四卷曰縫殿式云鎭魂祭服神祇○伯以　同(塙)　齋服(塙)　官(塙)
下緋帔四條云々東宮切韻曰帔靈王翠帔以ニ翠羽ー餝
レ之領巾也云々左傳曰被也白氏文集五十四卷曰洗ニ淡(塙)
紅花帔淺擅蛺蛾(塙)云々太平廣記曰唐明皇賜レ物○幽通ニ揚(塙)
紫霞ー帔云々白玉簡云々高僧傳曰竺法惠遇レ雨
著ニ油帔ー　梁典○西華冬月著ニ葛帔ー　遊仙窟注曰曰(塙)花(イ)
領巾帔子單曰ニ領巾ー狹曰ニ帔子ー春著ニ領巾ー秋
著ニ帔子ー婦人頭餝也云々尋ニ裝束師家ー當時も五節
の舞姫はめしつの裳を着して上をは裙帶領巾にて
飾レ身荅し也袖にあらざる所見分明也」くめ(塙)

肥前國風土記云松浦縣之東三十里有ニ帔搖岑ー此云ニ　風(塙)　々(塙)　披搖
比禮府離　最頂有レ沼計可ニ半町ー俗傳云昔者檜前天
皇之世遣ニ大伴紗手比古ー領ニ任那國ー于時奉レ命經ニ　世鎭(塙)

過此墟於是篠原村有娘子名曰乙等比賣容貌端正孤爲國邑紗手比古便娉成婚離別之日乙等比賣登此峯擧幡招因以爲名
日本紀第五卷云御間城入彥五十瓊殖天皇崇神天皇六十五年秋七月任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也任那者去筑紫國二千餘里北阻海以在雞林之西南

とをつ人まつらさよひめつまこひにひれふりしよりおひし山の名

ひれとはむかしは女房の裝束に裙帶領巾とて有ける也ひれ或は肩巾此云比禮四かけり領もひれとよむ又肩の守を用たりかたにかゝりたるか膳夫釆女等之手襁肩巾天武天皇御宇十一年三月甲午○辛酉にこれをとゝめらる也
書殿餞酒日和歌

あまとふやとりにもかもやみやこにてをくりまうしてとひかへるもの

あまとぶやとはそらをとぶをいふなりとりにもかもや都までをくりまうしてとは本文なりむかし王喬と云もの沓にかものかたをつくりてそれにのりてはるかなる葉縣と云ところよりみかとのもとへまいりけるを人もしらさりけれはいかにしてかくはよはかにまいるにかあらんとあやしみ思ひてすぎけるに王喬はみやつかへしもよてまいりてみかどのみもとにとまりまたそのつゝてきたりけるかもふたつかへりてゆきけるが人の鳥とるあみをはりたりけるに其鳥かゝりにけりそれをみれは木をもちて鳧といふとりをつくりたる也けりそのときに王喬かのりものといふことをしりにけり
ひともねのうらふれをれはたつた山みまちかつかはわすられなんか
人もねのとは人のおもひのねといへるにやうらふれをれはとはうらみをれはと云也心はたびゆく人のなごりをおしみてとゝまれる人はものおもふねをなきうらみらるゝにゆく人はたつた山なとの

△コヽニ有り

おもしろきをみてなくさみおしむ人をもわすれなんかとよめる也

いひつゝものちてそしらねとのしくもさふしけめやもきみいまさすて

とのしくもとは殿しきりにさひしからんかもとよめる也とのとははしつくりにかけることく殿なるへし

あまさかるひなにいつとせすまひつゝみやこのてふりわすらへにけり

ひなにいつとせすまゐつゝとは受領の一任は遠國は六ヶ年近國は四ヶ年なれは是は筑紫なれは六ヶ年なるべければひなにいつとせすまゐつゝとよめるなりみやこのてふりとは都のふるまひ也

あかのし（ぬ（イ））のみたまたまひてはるさらはならのみやこへめさけたまはめ（れ（墒））

あかのしとはわかぬしのと云也心は父母なとをいふなるへしみたまたまひてとは先靈をまつる事は一年に三度也父母にもあれ師君にもあれとふらふへき人の閉目の日是を忌日といふ七月十五日の朝盂蘭盆十二月晦日也このなかにみたまのふゆすなどいひて十二月の靈供むねとあるべしと聞えたり

はるさらはならのみやこにめさけたまはねとは春にならばといへる也めさけたまはねとはめしあげたまへと云なりしあはさとよまるれば故實にしたがひてめさけたまはねといへるなり

私記假合之身易レ滅（墒ニ行朱頭注〔イナシ（イ）〕）より以下は大伴君熊凝安藝國にて死せる六首歌の序也

あさつゆのを（け（墒））やすきわかみひとくにゝすきかてぬかもおやのめ（な（墒））らほり

ひとくにとは他國と云也わが生土の國にもあらず他國と云也

△假合之身易レ滅とは人の身は四大和合して假に所レ成四大とは地水火風也人の身にうるほひあるは水大也身のあたゝかなるは火大也いきの出入するは風大なり身のみだれずしてたもてるは地大也この四大かりに和合したれば假合の身と云つゐに離散すれば易滅といへる也

望ニ我違（遠（イ））時一必致ニ喪明之泣一とは人はあまりになけ

ば眼をなきつぶすことのある也是を喪レ明之泣と
云也
裏書云禮記第二檀弓上子夏喪二其子一而喪二其明一
明目精也 曾子弔レ之曰吾聞之也明友喪二其明一則哭之
弔|（塙）
痛之也
私云如此文者喪子之時喪二其明一云々今詞
文以同前歟只あまりになけば眼をなきつぶすと
云にはあらざるなり
たまはこのみちのくまみにくさたてり　た|（塙）
とはみちより入たるところをくまといふ
とけしものうちこひふして
とはしものとけたるをとけしもと云霜のとけて露
と成てはころひふせばうちこひふしてとよそふる
なり
いぬしものみちにふしてやいのちすぎなん
とは犬のやうにやみちにふしてしなんとよめるな
り
貧窮問答歌詞中　鼻眦之○○爾志可登阿良農　眦之（塙）
ひゝしひしにしかとあらぬひげかきなでゝといへる

はひゝしひしにしとはひゝしく／＼にしといふなり
かとあらぬとはかとゝは出の字をよむよしといふ　如|本　才（塙）
こゝろ也かとあらぬとはよくもあらぬと云也あさ
ふすまひきかゝふりぬのかたきぬありのこと／＼
きそへとはひきかゝふりとはひきかふりと云也か　も|（塙）
ゝふりといふはじめのかは詞の上の助なりよはき
をかよはきといひはそきをかぼそきなどいふがご
としぬのかたきぬとはひとえなりといふ心也かた
ひらともをあるかぎりとりきたれどもなをさむき
心なり
わくらはにとはたまさかにと云也
ふせいほのまきいほのうちにとはふせいほは屋の軒
なともはらてかたなびきなる庵なりまきいほとは
すみなともなくてまろにつくりたるいほ也わしの
まろやなど云こと也
『可麻度柔播火氣布伎多弖受
コノ火氣布伎多弖受古點ニハヒケフキタテスト點
セリイサヽカキヽヨカラス火氣ヲケフリトヨメル
常ノコト也ケフリフキタラスト點スヘシ』（塙イ）

*按文ノ字當小書

奴延鳥乃能杼與比居爾
ぬえとりは恠鳥也のとよびをるにとはまづしき家のあれたればぬえとりも野などのやうになくとよめるにやまたある人のいふはぬえのなく事は恠事なるによりてのどごゑとてこもりこゑになくこと・にあしき事にすればのとよひをるにとよめるにや・と申すまことにさもやあらんしりかたし

いとのきて　と云はいとゞしくなど云詞なり

たかのとるいとらかこゑは　とはいとらはうづら鶉(塙)也いとうと親類相通の心にやいとうとかよはしていふことあり魚をうをなどいふがごとし

好去好事來歌詞中

かたりつきいひつかひけり云々
いひつかひけりとはいひつく也

うなはらのへにもおきにも神つまりうしはきいます云々
うしはくとは虫のおほくてわきいづるやうにあきつしまの神のおほくおはします心也むしといふはむらがりしげしといふ詞也むとうとは同韻相通なればむしをうしといふうは本韻なれば本韻につきてうしは(塙)わくなどいへりさてわく義ならばうしわくとかくへししかるにうちな(塙)ナシ(塙)はくとかけるはいかにと云不審あるべしさればはとわと同韻なればかよはしてかける也難とすべからず

*大御神等船舳爾毛文(塙)
この句古點にはおほきみかみら(塙)をふねのへにと點せりその詞不相叶おほきみかみら(塙)を其心たがはざれどもら(塙)をといへるは詞のあやなきにたりおほみかみぬ(塙)たちと和すへしふねのへに(塙)とは又反歌も布奈能閇爾云(塙)と注せりいかゞこれを見ながらふなのへにといはずしてふねと點せんや

智可能岫欲利
ちかのくきよりと云は肥前國松浦郡近島のくきなるべし

治痾自哀文詞中
沈(塙)
欲レ顯二二竪之逃匿一イ本ナシ謂晉景公疾秦醫緩視而還者可謂爲鬼所致也

*按事詳左傳成十年

◎按ニイハクチイト見誤タルシルベシ

*二豎と云事は晉の景公疾するにとかく療治しけれどもしるしなかりけりその時に*秦の醫和醫緩と云二人の明醫ありけりさて景公のたまひけるは明日醫和緩(搞)をめしてみせんとの給ひけり其夜景公夢に見給ひけるは二人のわらはありてわがねたるあとまくらにをり一人のわらはのいはく今は我らこゝをさらんとおもふ明日醫緩と云明醫きたるべし然ればつゐむ(搞)にこゝにゐとゝくべきにあらずと云に又一人のわらはのいはくたとひ醫緩來るといふともわれら膏肓高肉已肉(搞)のふかきところにいりなばいかでか治することをうべきといふてひ(搞)二人のわらはあとまくらより身の中へいりぬとみえたりそのあした醫緩來りて見ていはく病すでに膏○肓○肉(搞)肉(搞)のふかき所にいれり治するにちからなしといへり膏○肓○肉(搞)肉(搞)と云はむねのしたふたえへ(搞)かはといふ所也やまひてゝにいりぬれば鍼も及ばず藥もいたらざるが故也景公醫緩がことばを聞て不レ可レ療ことを知ながら夢想にたがはざる事を感じてさま〳〵物を給ひけりてれを二のわらはのかれかくれたるをあらはさんとおもふとかける也

老身重病經年辛苦及思兒等歌詞中

五十蠅奈周作和久兒等遠宇都弖々波（如本うちいましむる也）

う(搞)○つてゝはとはうついしむてゝはと云也大かたてゝといふはてらす義也ちゝともいふは同内相通の◎こゑ也つゝといふはは(搞)ごくむ義なりさて父母をば天地にたとふる也

ねのみしなかゆとはねのみなかるゝといふ也るとゆと同韻也

水沫奈須微命母栲繩能千尋爾母何等慕久良志都

みなはなすとは水のあはなすと云水をみとばかりいふ常の事也みのあはをと和すればのあはな也この故にみなはといはるゝ也

戀二男子名古日一歌詞中

しきたへのとこのへさらず云々

とこのへはとこのうへなり

三枝之中爾乎禰牟登云々

さきくさと云事は假名はおなしけれ共ことにした

がひていひかへたる事ありあるひは檜の木をさきくさといふは諸の材木の中にてとによき木なれば宮木などにもえらひもちゐこれでさいはふ木なればひのき檜木をさきくさと云あるひは葛のなかにとみかづらと云草をさきくさと云ともいへり又草のおひ出てみつ葉よつ葉なるをさきくさと云今の歌の心は草のおひ出て二葉なるをちゝはゝにたとへふたばの中よりさしいづるをば子にたとへたる也

我例乞能米登
こひのめどゝはいのるを云也

伏仰武禰宇知奈氣古
○○○とは今も物をなげくにはむねをうつ也
わかくれはみちゆきしらしまひはせんしたへのつかひおひてとをらせ
まひはせんとはまひなひはせんと云也
ふしおきてわれはこひんをあざむかずたゞにゐゆきてあまちしらしめ
此歌發句ある本にはふせおきてと點せり或本にはふしおきてと點せりふしおきてといへる相かなへり長歌にあかつまかあふきこひのみてにおかみふしてぬるへきといへり反歌もともにふしおきてわれはこひのむと云へき也あまちとは天道也

△勺恐弓
訛

●推古紀
太子傳曆
太子傳補
闕記釉中
抄十

◎正辭按
家去恐奈
吉太恐天
男恐留訛

萬葉集註釋卷第六

第六卷

山部宿禰赤人作歌詞中

花咲乎遠里云々

をゝりとはのぼりと云詞也

おきつなみへなみをやすみいさりすとふぢえのうらにふねぞとよめる

ふちえのうら播磨國にありむかし住吉大明神藤のえだをきらせ給ひて海上にうかへてちかひての給はくこの藤のよりたらんところを我領とすべしとのたまひけりしかるにこの藤浪にゆられてよりたりければこゝを藤江浦と名づくすみよしの御領也

玉藻刈辛荷乃島爾島廻爲流水鳥二四毛有哉家不念有

六.

この歌の第四句古點にはかもにしもあれやと點せり水鳥とかけるはう也うにしもあれやと點すべし第二句又古點兩樣なり或はからかのしま或はからにしのしま後の和あひかなへり播磨國風土記云韓荷島韓人破レ船所漂之物漂就ニ於此島一故方韓荷島云々

都太乃細江　播磨國

韓衣服楢乃里之島待爾玉乎師付牟好人欲得

猶(塙)

この歌第二の句きならのさと或本漢字服猶乃里と

ほ|(塙)

かくこれによりてきなをのさとゝ點すその名たしかに知かたし但楢のことばまとはる心によせたり諷詞から衣とをけるはから衣はしなやかにまとはりたればきならのさとゝいへるにや又證本とおぼしき本ともみな楢の字なり

刺竹之大宮人乃家跡住佐保能山乎者思哉毛君

此歌頭句さゝたけと點せり或本には又さしたけと點すいつれもともにあひかなはさるにや古語によ

勺|(塙)

らばさすたけと云へき也この集の第十五卷歌に作須太氣能大宮人者伊麻毛可毛比等奈夫理能未許能美多流良武又檢ニ此語一聖德太子見ニ道邊飢人一歩近即脱ニ紫御袍一覆レ之即賜レ歌詞中云佐須陀氣

隨(塙)

乃岐爾波夜家去母伊比邇宇惠太許夜世男諸能多比

彌|(塙)

等安波禮といへりはかりしりぬさすたけと云へき
也
去來兒等香椎乃渇爾自妙之袖左倍所沾而朝菜採手六
この歌第二句かしゐのかたと點したる本もあり又
かすひと點したる本もありこれにつきて物知たる
よしする人かすひと云也なと申す又かしゐといふ
につきてあるひはかしゐとかける事もあり或はか
しひとかける事もありそれはひもゐも同韻なれば
いづれもたがふへからす但このところの名をかく
に日本紀には橿日ともかけりこれかしひとよむへ
し筑前國風土記云到筑紫國例先參謁于哿襲宮哿襲
は可紫比也しかれはかしゐと點したるはことにあ
たれる也
指進乃粟栖乃小野之芽花將落時爾之行而手向六
くるすのをの山城國也くるすはくりのいが也され
ば諷詞にさしすきのとをけりすきとはつくと云こ
とば也すきといひつきといふおなし事也つとすと
同韻なるか故也網つくるをすくなど云此義也
藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲麿作歌詞中

やまのそきの丶そきみよと云々
そきとはあいだと云こと也山のあひだ野のあひだ
也丹管士とはあかき躑躅也つ丶じにはすはうの色
なるもありまたしらつ丶じもあり
そこはくのいくさなりともことあげせずとりてきぬ
べきたちをとぞおもふ
たちをとは心たけきつはものなり
あまてもりみかさの山をたかみかもつきのいでてぬ
よはふけみつ丶
みかさをいひいでんために諷詞にあまこもりとを
けりかさは雨にぬれしとてきもしさしもする故也
やきたちのかとうちはなつますらおのねくとよみき
にわれえひにけり
かとうちはなつとはいはのかとなどうちはなつは
との太刀也ねくとよみきとはいはひてのまするお
はみきなり
あはのやま　阿波國
はるされはをゝりにを丶りうぐひすのなくわかしま
そやますかよはせ

をゝりにをゝりとはあかりにあかると云也うぐひすをば遷喬といひてたかきにうつるといふ木のしつえにゐてなきては次第にかみさまへのほる也

石上乙麿卿配土佐國之時歌詞中

石上振乃尊者

ふるといはんためにいそのかみとはをける也いそのかみと云はそのかみと云によそふるなりいは發語の詞也みことゝは賞する詞也みことゝいふはみかとゝ云也みかとゞも君ともいふは本體はおほやけをこそ申せ共分々にしたがひて賞する時にはきみともみことゝもいへる也

古衣又打山從　　とはまつちと云はまたうちと云にかよへば「諷詞にふる衣をきをけるなり參昇をはまうてのほりさ語(塙)云(塙)」まいりのほるなりこのことは古點にはまひまゐちといへりまうでまひそなと云は近代の語也

橋本爾道履八衢爾物乎曾念人爾不所知

たちばなのもとにやちまたにみちをふみたる事本文なとのあるにや有職人にたづぬへし

石綱乃又變若反青丹吉奈良乃都乎又將見鴨

いはつなとは蔦也つたなとの又わかゝへりはへ出ることくにならの都を又も見むかもとつたによそへてよめる也是は天平十五年に久邇の京をつくられてのち傷レ惜寧樂京荒墟一よめる歌也またわかかへりあをによしとつゝきたるはとめでたかるへし奈良と云はならくとまとはれるによそへたる也

過二敏馬浦一時作歌詞中

八千桙之神乃御世自云々

やちほこの神とは國作大己貴命の一名也かの命御號有數多中一名也見二日本記第一卷一

しらのさき　伊勢國

(塙)『文永六年三月十三日記之畢　仙覺在判

建治三年十一月十九日以作者仙覺律師自筆本敎人書寫畢

同　二十一日校畢　玄覺在判』

うちかはにおふるすかこもをかははやみとらできにけりつとにせましを

すかこもとはすげにゝたる河藻也人のくふ物といへり

うちひとのたとへのあしろわれなれはいまはさみをそてつみこすとも

この歌の心はうちひとのたとへのあしろとはひをまつといふこゝろによそへたりひをまつわれなれは人なあつまり來りそしづかにてあらんとよそへよめる也

ちはやひとうちかはなみをきよみかもたびゆく人のたちかてにする

うちとは鹿のあるくみちをいふといへる說ありしかのあるくはきはめてはやき物なりしかのかよひすむところをうちといふはこの義なりと云されはうちといはんための諷詞にちはやひとゝをけりちはやひとゝはみちはやき人なり歌のこゝろはうぢ川なみのいさきよくしてあきかたければ旅ゆく人もこれにめでゝたちかたくするとよめる也

第七卷（本ノマヽ）

あなしかは川なみたちぬまきもくのゆつきがだけにくもたゝるらし

あなし川まきもくのゆつきがだけともに大和國なり

とをるへきあめはなふりそわきもこがかたみの衣われしたにきたり

わかと云ことばゝわきともわくともわがともかけりいつれも同内相通なればともかくもいふなるべしそれにとりてわきもことは女をいへば第二の字母をよびて女聲をとりてわきもこと云わかせことといふはおとこをいへは男聲をよびてわがせことといふなりなにとなくいひたるやうにおもひぬべけれどもものをいふ故實をふかくわきまへしらん人は氣味ふかゝるべき事也

わかひもをいもかてもちてゆふは川またかへりみんよろづよまでに

ゆふは川　五代集の歌枕には肥後の國なりといへり

かみなびのさと　大和

志長鳥居名野乎來者有間山夕霧立宿者無爲

しながどりゐなのといへる事先達の釋さま〳〵なり或人のいはくしろきかのしゝをとりて猪のなかりければしなかとりゐなのと云といへりある人のいはくかりきぬはしりのながき物なるを居るときにはとりてゐればしなかとりゐなのといふといへりこの兩義ともに由緣あらはれずむかし信濃のくにより美濃へいつる山路に旅人とをりければにはかに霧ふりてみちをうしなひて人おほくしぬる事ありけりいか成故といふ事をしらずしかるに日本武尊陸奥の梟徒をはしめとして東國のあしきともがらをみなこと〳〵くうちしたがへてしなのより美濃へ出給はんとする山中にして御飯たてまつりたりけるに御前に鹿の大王のしろきしゝまいりてみことの御まへにむかひをるみことと御膳にそなへたりける蒜を御手にとりひしがせ給ひてそのひるのあはを鹿にはじきかけ給ひければひるのあは白鹿の目中にいりてしかにはかにしにゝけりさてきりもはれにければ別の難なくして山を出給ひにけりそれよりのちかの山路難なくしてしつまりにけりといへりしかればしらかとりといふべしと範兼卿は釋して歌をもしらかとりと書りしかれともむかしよりいひつたへたるがごとくしなかとりと云へしらむとなと同韻なり心かはるべからざるうへにこの集には今の歌のごとく志長鳥ともかきあるひは四長鳥などかけりしながどりといふべしとみえたりしろき馬をしなてまといへるがことし古歌云きみとわれえもおきやらずしなこまや其あしうらのつちなけれとももといへりこれは人をおこさじとちをとるて我すむ家の竈の下墨をとりて合藥して思ふときに東方へゆきたる白馬のあしのうらのつねたる人のへそのうへにつけつればおきあがらずといふ事のあるをよめる歌也さてしなかとりゐなとつゞくる事はしながどりとはますらおをいへばますらおは伴類おほくひきつれたるものなればゐなとつゞくる也ゐなとはなは男をいふゐとは率といふ心なればゐなといはんための諷詞にしなかとりとはをけるなり大かたこの集のこゝろ獵者をばしなかとりといひ漁者をはいさなとりとよめるな

り

武庫河	攝津國	ちぬのうみ	同
あゆちかた	紀伊國	なみくら山	近江國
たかしまのみおのからの	近江		
たかしまのかとりのうら	同		
かしまのさき	常陸	うなかみかた	上總
ひさのうら	播磨	とものうら	備後
あきのうら	紀伊	ゐなのみなと	攝津
なこえのはま	攝津	いとかのやま	紀伊
をすての山	紀伊	たまつしま	同
くろうしの海	同	わかのうら	同
たまのうら	同	おほは山	同
みわのさき	近江	かねのみさき	筑前

天霧相日方吹羅之水莖之岡水門爾波立渡

日方とは風の名也絁衆云巽風也清輔云坤風也といへり未勘愷說岡水門は筑前の國にあり風土記云塢瑪（塙）舸縣之東側近有二大江口一名曰二塢舸水門一堪レ容二大舶一焉（塙）鳥從レ彼通島鳥旗澳名曰二舳門鳥旗等島多也舳門久岐也油（イ）堪レ容二小船一焉海中有兩小島其一曰二河斗ナシ（塙）嶋一々生二支子一海出二鮑魚一其一曰二資波島一資波島波紫摩也ナシ（イ）兩島倶生焉（イ）蕾（イ）烏葛冬薑烏葛黑葛也冬薑萵（塙）迂菜也　これによりてその心をうるにをかのみなとゝいへるは所の名也久々（イ）かみの諷詞にみつぐきのとをけるはくきとはいりたるところなり水のいりたる所なれば水ぐきと云なりけりところの名惣別の名をいひつけて

みよしのゝみつわけ山

（塙本分注）みつわけはあやまり也玄覺勘レ之水分山みこまり山云々」さらしなのをばすて山ともあしがらのはこねともいふがごとくにはあらざるべし

くろかみ山	上野國	ゆふの山	豐前國
くらはし山	大和國		

萬葉集註釋卷第七

第七卷之餘

譬喩歌

今造班衣服面就吾爾所念未服友

いまぬへるまだらころもとははじめてあひそむるにたとふいまだきねどもとはいまだ夫婦にさだまらぬにたとふるなり

紅衣染雖欲着丹穗哉人可知

くれなゐにころもをそめてほしけれどとは心ざしふかくいろにいでぬべくおもへどもといふ也きてにほはばや人のしるべくとはいまだつまとならねばふかき心ざしありとも人はしらじとよめるなり

千名人雖云織次我廿物白麻衣

ちなにはも人はいふともとはあさのぬのをおりいづることはあさはたねをまくよりはじめてかるべきときに成ぬればこれをかりてからをはきすてゝあさとなしそのゝちにこれをうみてへそにまきしづのをだまきくりかへしては是をつむぎかせにかけくるへきにかけわくにうつしてのちたてぬきと云ものになし又くだになしさまぐ〵にすればちなに名をたつとたとふをりつがんとは人にかよひてあはんとおもふにたとふ衣にたとふる事はつゐにはひとつ身と成て袖をならべんとよめるなり

安治村十依海船浮白玉採人所知勿

あぢむらのとはつばさをならぶるちぎりをうらやむ心也とをよるうみとはほとりもなくそこもなきおもひにたとふ舟うけてとは○よはんはかりことをおもふにたとふしらたまとらん人にしらすなとはいもがたまのすがたをおもふにたとへたがひにふた心なくいさぎよからんとおもふにたとふる也人にしらすなとはいまだしのぶてひの心なり

遠近礒中在白玉人不知見依鴨

をちこちはいもせのなかにたとふしらたまを人にしらせてとはさきの歌のごとし

海神手纏持在玉故石浦廻潜

爲鴨
わたつみのてにまきもたるたまゆへにとはわたつみをば母にたとふ母の恩をば蒼海にたとふる故也母の手をはなたずして深窓の内にかしづきをきて玉のごとくにうつくしむ故也いそのうらわにかづきするかもとはをとめごをおもふとてつねには涙のうみにうきしづみなげきがち成にたとふかづきするをなげきにたとふる心は海人かづきするとては水のそこより出てながいきをつくによりて也

海神持在白玉見欲千返告潜爲海子潜爲海子雖告海神心不得知不云

わたつみの義しらたまの義かつきするたとへいづれもさきの歌になぞらへて其心をえつべし

天雲棚引山隱在吾忘木葉知良武

あまくものたなびく山にかくれたるとはたかくふかくおもひいりたるにたとふ木葉しるらんとは草木無心といへとも歌のみちには心なきものに心をあらする事つねのならひなり中にも此集第二卷に山上臣憶良歌には鳥翔成有我欲比管見良目杼母人社不知松者知良武ともよめり第五卷には梧桐日杜(擣)本琴夢化ニ娘子ニおもひをのべ歌を讀り又如ニ日本紀ノ葦原中國有様をいふとして彼地多有ニ螢火光神及蠅聲邪神ー有ニ草木盛能言語ーナシ(擣)といへりをよそ草木無心は小乘の談などにいふ事も侍るぞや然れば此しるらんとよめらんあながちに惡しとすべからず今の歌の心はふかくおもひ入たるわれはいもをわするゝひまもなしあまぐもたなびきてしぐるゝがごとくわが袖も隙なくしぐるればはやくいろにも出ぬべし木の葉もしぐれ〳〵ては色に出る物なれば木のはも身につみて知らんとよそへよめる也

雖見不飽人國山木葉己心名著念

この歌の木の葉の心さきの歌におなじかるべきにや人國山紀伊國といへり

橡衣人者事無跡曰師時從欲服所念

◎如伊豫國風土記者息長足日女命御歌也ト本ニモカケリ

摘本此所ニ如此アリ

つるはみの衣とは四位の朝服なりむかしはつるはみのきぬきたる人にはとがをおこなはざりけるなりさればいもゆへにきりをはらひ星をいたゞくつとめをもおこたりぬべければつるはみの衣をきまほしくおもほゆとよめる也

紅之濃染之衣下着而上取著者事將成鴨

くれなゐのこぞめのころもしたにきてとは心ざしふかけれどもいまだ忍ぶほどをばしたにきるにたとふつまとたのめてあらはれたるをばうへにとりきるにたとふるなり

橡解濯衣之恠殊欲服此暮可聞

つるはみをばふりすさひぬる宮[ナシ(摘)]にいひならはせりときあらひきぬとはいま一しほ[いろ(摘)]めづらしくおぼゆるにたとへてあやしくもことにきまほしきこのゆふべかなとたとへよめる也

橘之島爾之居者河遠不曝縫之吾下衣

この歌如二伊豫國風土記一者息長足日女命御歌也この御歌ことに御なさけふかゝる心したちばなのしまにしをればとははるかにはなれゐて物さびしく昔のいろかを忍ぶるにたとふ川とをみとはいさかよふべきところもなくたのむべきかたもなきにたとふさらさでぬひしわがした衣とはおもひし心[いろもかはらで(摘)]もかはらしとかたみの衣をきたまへることをあらはせり

橘嶋者伊豫國宇摩郡にあり

河内女之手染之絲乎絡反片絲爾雖有將絶跡念也

手ぞめのいとゝはいろふかくおもひしみたるにたとふかた糸にあれどたえんとおもへやとはあふ事なけれどもたえんとはおもはぬにたとふる也

海底沉白玉風吹而海者雖荒[莣(摘)]不取者不止

しらたまをたとへにとる事は如レ前風吹てうみはあるともとらずはやまじとはさまたげさへらるゝ事ありともなをあはんとおもふにたとふる也

大海之水底照之石著玉齋而

將採風莫吹行年

以上の歌になぞらへてこゝろうべし

水底爾沈白玉誰故心盡而吾不念爾

この歌古點にはみなそこにしづむ白たまたれゆへに心つくしてわがおもはなくにと點せりしかるを參議濱成卿歌經標式に引二此歌一云美那曾己爾一句背都倶旨羅他麻二句他我由惠爾三句己々侶都倶旨豆四句和我母波那倶介五句といへりしづくしらたまといへるは古語とみえたりしづむをしづくといへり同韻相通の義なるべし此うた第二句以下のことば歌式によるべし發句のみなそこへといへるへの字は本韻と同聲の故に誦じ直せりとみえたり然れども本韻すでにたかゆへにといひ結句わがもはなくにとかゝれなんうへにはさらふべきにもあらず又この集には水底爾とかゝれぬれば誦じかふべきにあらざるにやそも〳〵さきに海底沈白玉風吹而といへる歌の第二句又いまの歌のことくしづくしらたまといふべし此集は歌の源として古集なればこれにむかひては古語によるべきが故なりとき世にしたがひて今の人の歌にた(寫)つさ(寫)もかくも詠じ侍るべしかきあらたむめん(寫)ることをはさいきるべきにもあらずさて歌の心はしらたまをばいもが玉のすがたにたとふみなそこにしづくとはおくふかく忍びかくしてちかづきがたきにたとふたがゆへに心づくしてわがもはなくにとはわれもに(寫)さしも心をつくして手にとりもちてあそばんとおもへどもいもは何ともおもはじとうらみおもふにたとふる也

伊勢之海之泉白水(寫)郎之島津我鰒玉取而後毛可戀之將繁

嶋津とは嶋人なり東人をあづまつといふがごとしあはびたまとりてのゝちも戀のしげゝんとはたまみぬさきにみまくほしとおもひしよりはとりてのちこそみまさりすれとよめる也をとにきゝて心をかけし人のあひみて後にいよ〳〵おもひまされるにたとふるなり

葦根之懃念而結豆義(寫)之玉緒云者人將解八方

あしのねはしばしゆきわかるゝ事あれどものむすぼゝれたる契り絶せずして後つるにはつねにゆ

さあふかとくねんごろにおもひてむすびてしたまのをといはんそは人なさけあればをしてとかめやもといへる也

白玉乎手者不纏爾（纒(塙)）匣耳（遷(塙)）置有之人曾玉令泳流

しらたまをばいもが玉のすがたにたとふ手にはまかぬにとはなさけなくしていまだちぎりをむすばざるにたとふはてにのみをけりし人ぞとはもらしきこえしことを心ばかりにはさぞとしりたりしにたとふたまおぼれするとは後に又いひおどろかせどもおはぬきいふにたとふるなり

照左豆我手爾纏（纒(イ)）古須玉毛欲得其緒者替而吾玉爾將爲

てるさつとはよきますらお也てにまきふるすたまとはおもひすさひたるつまなりそのをはかへてわかたまにせんとはてるさつがすてたらばとりてわかつまにせんとよめるなり

秋風者繼而莫吹海底奥在玉乎手纏（纒(塙)）左右二

あきかぜはつきてなふきそとはかなしきさはりなつねにありそといふ也わだのそこおきなるたまを手にまくまでにとはふかくこひしき人にあはんまでにと云なり

伏膝玉之小琴之事無者甚幾許吾將戀也毛

ひざにふすたまのをごとのことなくはとはかりにもちかづきてわりなきをとつれのなかりせばとよそふる也

陸奥之吾田多良眞弓着絃（絲(イ)）而引者香人之吾乎事將成

みちのくとはふかきにたとふあたゝらまゆみつるすげてとはゆみをばおとこにたとへつるをば女にたとふひかばか人のわれをことなさんとはゆみにつるすげてひくを夫婦と成たるにたとふひくほどになりてそふともさぞとは思はんとたとふるなり

南淵之細川山立檀弓束級人二不所知

たつまゆみをばいまだ手なれざるさき又見そめてしめさすまでにたとふゆづかまくまでとはわがてにとりもちて射つかはんときにたとふ

いはたゞみかしてきやまとしりつゝもわれはこふるかともならなくに

なほりて逆るなさばへこの祭といふ)たとへば夏のはへのちりみだれたるやうにあしきかみのある也これをはらへなごめむとて六月晦はする也云々私云萬葉に和の字をなごむとよめばなごしは邪神をはらへやはらぐる心也といへど今輪越とかけるによればなごわさかとへば今は輪を越る祓と云心にや

九月十七日神事　大和舞歌

宮司舞時

奈我豆支乃九月之其禮乃安女爾時雨雨奴禮沾天古曾也萬乃山古乃波波宇良加戸留米變良米　(頭注云)宇良加戸留は色の變して紅葉するを云歟らば加を濁るべからず又は色かはるの轉語歟　樋口氏曰うらかへるは今西國詞に草の熟するをうれると云夫歟

十二月十七日神事　大和舞歌

宮司舞時

宇知宇治也萬乃伊須春乃五十鈴波良仁原美知多知天(頭注云)美知多知は衆人滿立也與呂豆與末天耳加奈轉奏　安倍淒乍遊

十一月中寅日鎮魂事年中行事秘抄　(頭注云)秘抄此文有省略今以全文載于茲

天孫本紀　先代舊事本紀云宇摩志麻治命十一月丙子朔庚寅初齋瑞寶奉為帝后鎮祭御魂祈請壽祚其鎮魂之祭自此而始矣詔宇摩志麻治命曰汝先考饒速日尊自天受來天璽瑞寶十種是也以此為鎮毎年仲冬中寅為例有司行事永為鎮祭矣所謂御鎮祭是也凡厥鎮祭之日猨女君等主其神樂舉其言大謂一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十而神樂歌舞尤緣瑞寶蓋謂斯歟

天神本紀　天神御祖詔授天璽瑞寶十種所謂瀛都鏡一ツ邊都鏡一八握劍一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖教詔曰若有痛處者令茲十寶謂一二三四五六七八九十而布瑠部由良由良止布瑠部此如為之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣所謂御鎮魂祭是其緣也

職員令云神祇官伯七人掌鎮魂謂鎮安也謂人陽氣曰魂魂運也言招離遊之運魂鎮身體之中府故曰鎮魂

鎮魂歌

あちめ一度おゝゝ三度　(頭注云)あちめおゝゝ見神樂歌　あめつたに天地　かみわかも　かみ神こ乎

きゆらかすは玲魂　さゆらかす　かみわかも

ゆりは　きねにきかう　きゆらならは　あちめ一度おゝゝ三度　いそのかみ石上　ふるやしろの振社　たちもがと太刀欲得(頭注云)萬葉第十六堺部王詠數種物歌虎衛藥古屋乎起而青淵衛鮫龍取將來劍刀毛我　ねがふそのこに願其兒

神樂歌いそのかみふるや男の太刀もがなくみのをしてゝ宮ぢかよはむ

そのたてまつる奉　あちめ一度おゝゝ三度さつおらが
薩雄等（ろ乎）もた○さのまゆみ持而在木眞弓　おくやまに奥
山　みかりすらしも御狩爲　ゆみのはずみゆ弓筈所見
（頭注云）神樂歌さつをらがもたせのま弓おく山にみかりすらしも弓のはずみゆ
あちめ一度おゝゝ三度のぼりますト上座　とよひるらが（め乎）
豐日孁女　みたまほす御魂欲　もとはかなほこ本金桙す
ゑはゝほこ末木桙
あちめ一度おゝゝ三度みつやまに　ありたてる有立有
ちがさを　いまさかえては今不榮　いつかさかえむ何
時將榮
あちめ一度おゝゝ三度わぎもこが吾妹子　あなしのや
まの穴師山　山の山もと（ひ乎）　ひともみるかに人見　み
やまかづらせよ太山縵爲　（頭注云）神樂歌葛わきもこかあなしの山の山びとゝ人もしろべく山かつらせよ
たまばこに魂筥　ゆふとりしでて木綿取鎭　た
まちとらせよ魂令取　みたまかり御魂上（た乎）をまかりまし
ゝ魂上座　かみは神　いまぞきませる今來座有　みたま
みに御魂見　いましゝかみは去座神　いまぞきませる
今來座　たまばこもちて魂筥持（さ乎）せりくるみたま　去來
御魂　たまかへしすなや魂復爲也

次ひとふたみよいつむゆ（頭注云）雄略天皇五年紀六月むゆ俗六月むゆか　なゝ
やこゝのたりや種季云太利足義而十之古語也其謂止遠者太利之轉也
十度讀之毎度中臣玉結也　今按三代實錄云清和天皇貞觀二年秋七月己酉朔二
十七日甲辰夜偷兒開神祇官西院齋戸神殿盜取三所齋戸衣并主上結御魂絲等云々　古語拾遺云凡鎭魂之儀者天鈿女之遺跡然則
御巫之職應任舊氏云々　貞觀儀式鎭魂祭條下云以安藝不綿
二枚實於筥中進置伯前御巫覆宇氣槽立其上以桙撞槽
毎一度畢伯結木綿訖御巫舞訖次諸御巫猨女舞畢云々　江次
第鎭魂祭の條下云神祇官雅樂寮神樂次御巫衝宇氣次神祇官一人
進結糸於葛筥自一至十此間女官藏人開御衣筥振動註云神
琴師彈和琴衝宇氣神遊儀也神代上卷宇氣船不美止止呂加須義
也以賢木衝槽上也結糸自一至十字麻志麻治命十種○（神
乎）寶振之返死之緣也用糸自一至十計之也　次神祇官一人進
結糸於葛筥（自一至十）此間女官藏人開御衣筥振動畢○（神
乎）祇官着座云々　（頭注云）薩戒記應永卅三年十一月十三日壬
寅――今日鎭魂祭也予爲分配仍引見舊記之所古今儀頗以相
違　深山御記云長寬二年十一月十六日――鎭魂祭也――次予示辨
令始神樂（只琴笛許也）此間神祇官下部取槽（其體如手槽高
三四寸弘二許尺）令敷席一枚置山南方次御巫（小童結髮着青
闕腋袍表袴帶紙以墨畫石形持來押付鈴衣加神）自東北方來
置槽上北面立又下部以御玉緒糸（以葛圓結中縱横繫之其中
結付白糸也）授卜部宮主纔數々挿笏取之――次大中臣
少副親隆進寄件筥前跪指笏取糸結也（一緒也）此間御巫以桙
柄合琴笛音
空衝上
年中行事奥書云本云永仁（伏見）之比被書初之處自然被闕之
畢嘉曆（後醍醐）令終寫功者也外見不可許乎云々　季御讀經祭

よもりつゝをらん
いそのかみふるのわさだとはそのかみよりてひぢにたけたるにたとふひでずともとはよくもなくともといふなりしめだにはへよもりつゝをらんとはよくもなく共しめたにはへたらばわれももりつゝをらんと也もりつゝをらんとはぬしありけりとしるへきにたとふしめたにはへよといふ事はながらへてたにあらば風俗をまもりてあらんとよめるなり風俗の事は令の文をひきてさきに釋するかことし

まきばしらつくる杣人いさゝめにかりいほのためとつくりけめやも
まきとは杉の一名也そま人の杉の木にてとりたる柱をまきばしらと云この木はすぐなる木にて柱にあひかなへりそのうへ久しくくちそんせざる也されば此はしらはながらへてすむべき家のはしらにしたらんこそ其かひもあるへけれかりいはなどのためにはよしなかるべしとたとへの心はもとのすみかをもたてはなれて一すぢに身をまかせてきたりたるを槇ばしらにたとふながらへてすみぬべき宿ならばくちせぬちぎりのかひもあるべきに人の心のうつろひやすげなるけしきをかりいはにたとふる也いさゝめとは程なきをいふなり
押紙云私云まきばしらは槇柱也非杉歟槇は色白くて香くさく味にがきなり土の底にて不朽也杉はくちやすき物なり境の株などに槇柱をたつるなり

向峯爾たてるもゝの木なりぬやと人そさゝめきしなかまみゆめ
こゝろ(壻)
桃は花しげくさきてみなる事はすくなきよしをよめる歌也とみえ侍り花は色めき出てかたらひをなすにたとふみなれるをぞ夫婦としてひとつ身になれるにたとふ人そさゝめきしながまみゆめとは人はとかくいひてつまと成ぬるかなととふともゆめ〳〵ないひそといへる也
たらちねのはゝのそのなる桑もなをねがへば衣にきるといふ物を
衣をは妻にたとふそのなる桑もとは木の心なきたにも衣になしてきんとおもへばきらるゝならひな

るにまして心ある人の身としてかくこひ悲しませ
ながらなどかあはれとおもひてわがつまともなら
ざらんとたとふる也くはもなをねがへばきぬにき
るとはきぬをばくは糸と云故也
はしきやしわかえ（へ（增））のけも丶もとしげく花のみさきて
ならざらめやも
花をばいろめきかたらひよるにたとへ見をば夫婦
の義をなすにたとふれば花のみさきてならざらん
やもとうらむる也
いきのをにおもへるわれをやまぢさの花には君かう
つろひぬらん
歌の心はわれは命のあらんかぎりはたえじとおも
ふに人の心のうつろひやすければ山ちさの花のと
くうつろふにたとふる也
わきもこがやどのあきはぎ花よりはみになりてこそ
こひまさりけれ
花よりは實に成てこそこひまさりけれどたとふる
事ははじめていろめきかたらひしときよりもひと
つ身と成てこそ戀しさもまさりけれとたとふるな
り

あすか川な丶世のよどにすむとりも心あればこそな
みたゝざらめ
な丶せのよどにすむとりとはをし鴨などにやをし
と鴨とはいづれもたえせずつまとたぐひたればそ
ねみねたむ心もあるべしされば浪たゝざらめと云
べしかのとりのいもせの波をたてぬがごとくにわ
がいもせも波たてざらんにたとふる也な丶せのよ
ど丶よめる事はいかにとよめるにかおぼつかなし
つねには瀨と云は淺くしてせゞらぎにはなみたつ
をいひよど丶は深くして浪などもたゝぬを云なら
はしたれば瀨といひよど丶いふはかはりてこそ侍
るに是はな丶せのよど丶ひとつにいへりしかれば
瀨にとりてものどかなるところをよめるにや
押紙云私云な丶せのよど丶は七の淀なり七瀨のあ
ひだによどはあり／＼すべければな丶せにはやが
て七のよど有べき歟
みくにやま　　攝津國
ひろせかは　　大和國
みてもりにいきつきあまりはや川のせにはたつとも
人にいはめやも

みこもりにとはおもひしつみかはくまもなきにたとふいきつきあまりはや川の瀬にはたつとも〻とはなげきにたとふ人にいはめやもとは忍ぶ心也

まかなもちゆげのかはらのむもれ木のあらはるまじきことにあらなくに

埋れ木のふししづみてかはく事なきにたとふあらはるまじき事にあらなくにとは人しれず忍ぶ月日もあまたすぎぬれどもつゐにはあらはれぬべしとよそふるなりゆげのかはらは大和也

おほふねにまかぢしげ（しし（墒））ぬきこぎいでにしおきはふかけんしははひぬとも

大ふねにまかぢしげ（しし（墒））ぬきこぎ出にしとはゆく末もしらずはてしなきにたとへ身もやすきときなくくるしきにたとふ沖はふりけんしははひぬともはおきをわが戀にたとふるなり淺からん戀は鹽ひかたのことしかはくひまも有べき也わが戀は海の沖のことくなれば鹽のひるといふ事をもしらず底のふかさもしられずといはんとぞ

伏越從去益物乎間守爾所打沾浪不數爲而（ふしこえにゆかましものをひまもりにうちぬらされぬなみかぞへずて）　沾（墒）

この歌中の五文字間守爾ふるくは假名なしいま文字にまかせてひまもりにと點ずそのまさしき心知かたき歌也發句ふしこえにといへるは上古にはあしからのきよみがよこばしりとてあしがらのやまより出てふじの山のすそをとをりてきよみが關へ出る道有けりよこばしりの關は富士山と華高山とのあはひにありけりこの道をとをりけるをあしがらの清見がよこばしりといひける也今の海邊の道きよみが崎をとをり田子のうらなどをとをるは中古よりの事也今の（こ（墒））歌は海邊の道出きて後かの富士越のみち有けりこと聞ける人のよめりける歌にあたれりしかあらんには中の五文字の句間守爾はきよみが關には浪のせきもりとよむ事もはべれば此歌關守爾所打沾（うちぬらされ）（沾（墒））といへりけるを關を間にかきなしたりけるにやあらんともおほえ侍るはひか事にや浪の關守と云ことはきよみが崎と云ところ今はくきが崎となん申すかの崎の鹽みちて浪のたかきときはゆゝしくとをりにくかりければ浪のまをとをらんとて立とゞまりて波をかぞへてすぎければ浪

の關守と云なみをかぞへてすぐとはさきにも申はべるがごとく浪はたかく立たびひきく立たびのあるなりたかきをばおなみといひひきゝをばめなみとぞいふなるそのめなみおなみの立たる中にちいさきなみのたつをばしばなみと云なりかのしば波のときにとをるべき也間守爾とかける關の字のかきあやまれるかとおぼゆると○侍べれども又かの浪のひまをかぞへてすぎければひまもりといはんもいたくひがごとも有まじければ當時の漢字にしたがひて假名をばつけて侍るなりさて今の歌のたとへの心はひまなき浪にだに道もゆきやられずしほれはてぬるにたとふ浪かぞへずてとは落る涙のかずもしりかたく心のやみもくらければよろづをわすれたるにたとふる也

いはそゝくきしのうらわによする浪へにきよればかことのしげらん

きしのうらわによする浪とはうらみられて立よりたるにたとふへにきよればかことのしげらんとはわがあたりにきよりたればことの葉のしげきにたとへたる也

いそのうらにきよるしら浪かへりつゝ過かてぬるはきしにたゆたへ

きしにたゆたへとは情ふかくしてとひ來れる人のやすくもかへりやらずたちやすらふにたとふる也いそのうら紀伊の國にあり

むらさきのなたかのうらのまなこちに袖のみふれてねずか成なん

なたかのうら紀伊の國なり名たかのうらといひいでんための諷詞にむらさきのとをけりむらさきとはむはたかき義らはあかき義也紫の字を釋するに郭知玄云色赤黑韓氏云深赤といへり日本紀勾(壙)第卅卷高天原廣野姫天皇御宇四年四月丁未朔己酉被レ定二置朝服色一淨大壹已下廣貳已上黑紫といへりなたかと云につきて尤むらさ云(壙)きとかくべしさてたとへの心はまなこぢとはうつくしきにたとへくたちはてゝおもふにたとふ又なたかのうらと云なの字に浪と云心をふくめり浪のよりかたきにたとふしかれば袖のみぬれてねずかなりなんとはうへはかはけるさまなれどもしたは

ぬれたるところなればぬべきよすかもなきを袖もぬれとをりぬべくいねられかたきにたとふる也

とよくにのまゝの濱邊のまなごちのまなをにしあらばなにかなげかん

此歌第二句間々之濱邊の句不審也聞之濱邊歟豐前に間濱あるが故也若又豐前豐後の間に間濱と云所のあるにや記二明之一後可レ令二一定一歟

鹽みてはいりぬるいその草なれやみらくすくなくこふらく(の(墒))おほき

この歌は戀しき人を鹽みてばいりぬるいその草にたとへてみることはすくなくこふることはおほしとよめるなりそれにとりて人々の釋いさゝかかはれり墒のみちひは一日一夜にかならず二たびみちひる也それにあかずみゆる草どもの墒みちてかくれゆくことをあかぬおもひにたとへてみる事はすくなくおほゆこふる事はおほかるによそへてよめるよし釋する人もありあるひは墒のみちくればみじかき草はやすくみなかくれぬ又をのづからながきはたまさかにみゆればみらくすくなくこふらくのおほきとはよめるなりと釋したる也

おきつなみよするあらいそのなのりそは心の内にとくと也けり

沖つ浪よするあらいそとはふかくときくおも(ほ(墒))ふ心にひかれてよりきてをとづるゝにたとふ(ら(墒))なのりそとはこれにふたつの心有日本紀第十三卷雄朝津間稚子宿禰天皇春三月癸卯朔丙午幸二於茅渟宮一衣通郎姫歌之曰等虛辭陪邇枳彌母阿閉椰毛異舍儺等利宇彌能波摩毛能余留等枳等枳弘(墒)於時天皇謂二衣通郎姫一曰是歌不レ可レ聆二他人一皇后聞必大恨故時人號二濱藻一謂二奈能利曾毛一也この由縁によらばなのりそとは忍ふ義也しかるをなのりと云詞につきて名のりそゆるによそへよめる歌あまた有べし今の歌にもなのりそとは心のうちにとく也けりとよそへ讀る事は沖つ浪の荒礒によりきてをとづるゝにしたがひてこなたへなびきよる草なればなのりそと云名によそへて心のうちにとくひきよせよとおもへるにたとふるなり

むらさきのなたかのうらのなのりそのいそになびか

んときまつわれを
この歌もなのりそと云名にすかりてよそへよめる
なるべし名のりをする事は忍ぶ心なくあらはるゝ
時の事なればなのりそのいそになびかんときまつ
われをとよそへよめるなり
さゞ浪のしかつのうら（しつかのうら（塙房書））のふなのりにのりにし心つね
にわすられす
さゝ波のしかつのうらとは隙なく心をさはがし心
をよするにたとふふなのりにのりにし心とはゆか
んとおもふかたへたよりあらばとくいなんとおも
ふにたとふる也
もゝつてのやそのしまわをこぐふねにのりにし心わ
すれかねつも
舟にのる心前に同じかるべし
みなぎりあふ沖つをしまに風をいたみふねよせかね
つ心は思へと
みなぎりあふとは心はかよひておもふにたとふお
きつをしまとははるかにはなれゐてさびしきにた
とふ風をいたみふねよせかねつとはいさめ（さへ（塙））まつら
るゝさはりありてかよひかねたるにたとふるなり
ことさけばおきにさけなめみなとよりへつかふとき
にさくへきものか
おきにさけなめとはいまだゆくゑもしらずよらん
かたもしりがたくおもひたゞよふ時にいひもきら
ざるにたとふみなとよりとは今はあやぶむ心もな
く思ひしづまりて一すぢにたのみいるにたとふへ
つかふ時とはさしにつくを云今はことさだまりな
んとするにたとふ歌の心はいもせの契りをむすば
んにはじめはかなはじともいはねば一すぢにたの
みをかくるほどにその契りを期と成てかなふまじ
きよしをいふにたとふる也
あき川の　吉野山にあり
　　已上譬喩歌（たとへうた）也
挽歌（ひきうた）
わかせこをいづちゆかめとさき竹のそかひにねしく
いましくやしも
さきたけとはわりたる竹也わりつればせなかあは
せになればそかひにねしくとよそへよめるなり
にはつとりかけのたれおのみだれおのながきなか（ナシ（塙））き

心もおもほえぬかも
にはつとりとはにはとり也かけもおなしことにし
てなくこゑによりていへり又はいへつ○○さり(墻)とも云
とみえたり此集第十一卷号(墻)歌中に念友念金津足檜木
之山鳥尾之永此夜乎と云歌の次に或本歌曰足日木
之山鳥之尾之四垂尾之長永夜乎一鴨將宿といへる
歌を或抄に山鳥の尾とあるは尾にはあらず雄也お
とりのしたり尾のと云也と申す義も侍りさもあり号(墻)
なんとかけりこの義あまりの事也かの第十一号(墻)卷の
歌にも山鳥之尾之四垂尾之とかけり此第七卷のい
まのうたにも可鷄乃垂尾之亂尾乃とかけり第二句
は雄ともみえざるべし
なでのうみ　攝津國

萬葉集註釋卷第八

第八卷

石激垂見之上乃左和良妣乃毛要出春爾成來鴨　本(イ)
この歌をいはそゝくたるひのうへのとかける事あ
りたるみといへるはたるみつなりいはそゝくとい
ひ(墻)ふてはもつともたるみと云へしされはこの集には
垂見之上乃とかけりたるひと云へからざるをや
去年春伊許自而殖之吾屋外之若樹梅者花咲爾家里
いこしてとはいは發語の詞こしてとはひきこつる
なりこぎてなと云もおなし事也ねごしてとも云日
本記には掘文字をねごしてとよめり
いはせのもり　大和國
くさかのやま　紀伊國
くたらの　攝津のくにといへり又冬の野をく
たら野と云說あり
かみなびかは　大和國
たかまと山　同
わかやとにまきしなてしこいつしかも花にさかなん

なそへつゝみん
なぞへつゝみんとはなぞらへつゝみんといへる也心はなでし子の花はしなやかにうつくしければわがおもふ人になぞらへてみんとよめる也

紀女郎贈二大伴宿禰家持一歌二首戯奴 變云和氣

わけかためわかてもすまに春の野にぬけるつばなぞめしてこえませ

わけとは男を云也わかてもすまにとは○○しづか（てもの(塙)）にをかずといふ心なり

晝者咲夜者戀宿合歡木花君耳將見哉和氣佐語爾見代

このうた古點にはひるはさきよるはこひぬるねふりの木きみのみ見んやわけさへに見よと點せり漢字は合歡木花なりねふりのきと點すれは花の字和せられず況歌後の詞に右折二攀合歡花一并茅花贈也とかけりもつともねふの花と和すべきなり文選には合歡ねふりをのぞくといへりそれは晝はねふらて夜るぬべき也さて人のいねぬにはその木をあやさんとて枕にをく也さて家持贈和歌にわきもこ（に(塙)）がかたみのねふは花のみ○さきてけだしもみにならぬかもとよめり此ははなはさきてみはならぬ草木ともありねふも花はおほく咲ながらみはともしき木なればかくよそへよめるにや

ものゝふのいはせのもりのほとゝぎす今もなかぬか山のとかげに

いはせのもり大和國にあり或云つはものは馬をはせながら物をいる故にものゝふのいはせの杜とつづくる也といへり山のとかげとはつねにかげなるところなりときはに陰なりと云心也

おほきのやま 筑前國

大伴家持攀二橘花一贈二坂上大孃一歌 詞中

伊加登伊可登 とは門にと云詞也伊は發語のことはなり

安要奴我爾花咲爾家里

とはわれこそむかしを忍ぶにたち花も花さきぬればむかしの香にはへば我にあへて花咲にけりとよめる也

銅鏡清月夜爾

うちまかせてはますかゞみとかく此集の眞名假名にはみなまそかゞみとかけりいにしへのかきやうとみえたりよりて古語にまかせて今の點にはまそ

かゞみと點ずる也をよそかくのこときの詞のかきやう近き代の歌にはそのときのいひにまかせてかかんこともいはれあるへし不得心の者それをも古語にかきなさん事しかるへからず又古集の詞は眞名假名などにあきらかにみえたるを古點をばそむきて今の詞に點じなをす事又不得心也いつれをもそのときの詞にしたかふべきなりさてこそいづれの代の集ともわきまへ知るべき事にて侍へれ

宇禮多伎也志許霍公鳥云々

うれたきやとはうれふる也志許とは凶〔凶(擣)〕と云詞なり

なてしこはさきてちりぬと人はいへどわがしめしののはなにからめやも

なでしこををとめによそへてよめる也わかしめし野の花とはをとめなりよめる心はなでしこゝそさきてちるともわがしめさしておもふをとめ〔は(擣)〕はわれこそぬしにてはあれ心にまかせて。ちりもらせじといへる也

經毛無緯毛不定未通女等之。黄葉爾〔織(擣)〕霜莫零

この歌古點にはたてもなくぬきもさためずをとめらがをれるもみぢにしもなふりそねと點ず第四句黄葉をもみちとよめる事わきてこの集のならひ也おどろくべきにあらざれども如此の文字づかひ所によりて歌の心にしたがひてよみかへなん事點家の堪否も顯はるべし斟酌故實とすべき也身にあたりて申ひらかん事其はゞかりおほかれども心にのみこめてやみ侍りなば後賢のうたがひ晴がたかるべきか故にしるしつけ侍る也たてもなくぬきもさだめずといひてはをれるもみぢにといはん事かきあひても聞えずさればこの歌の第四句をれるにしき○○○○○○○○○○○○○〔にさ和すへしもみちないつかうにしき(擣)〕とよめる歌上古にも中古にも侍へるめれ〔り(擣)〕大伴家持か歌にはさほの山にしきをりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにしてとよめり此歌古今にはよみ人しらずとて發句をばたつた川とかゝれたり古歌を後代の集にえらびいるゝ時古語の今のきゝにかなはざる詞もしはところの名などのいますこしえんなるへきをば引なをしているゝ事撰者の故實にて侍るとかや又古今の秋の下紀友則が歌にはたがためのにしきなれ

ばか秋ぎりのさはの山べを立かくすらんともよみ藤原關雄歌には霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のをればかつちるともよめりもみぢをひとへに錦といへる事これらにてそのこゝろをえつへし

山上臣憶良七夕歌十二首中

伊奈宇之呂

とはいなは縦也うしろとは厭といふ也ろは詞の助なり

多夫手二毛投越都倍吉天漢敵太而禮婆可母安麻多須辨奈吉

此歌頭句たふてと云はつふて也つふてをたふてと云は阿波國の風俗なりこの歌發句常の本共にはみなおなじく多夫手とかけりこれによりて假名はゆ(夕(塙))ふてとつけたり六條家本二條院の御本流也多夫手とかゝれたりその理尤叶へり殊勝々々

押紙云文選第二東京賦云飛礫雨散

私云つふてをたふてといふ事本説分明なる歟

たまくしけあしきのかはをけふみればよろつよまでにわすられぬやも

たまくしげあしきとつゞけたるはあしきとはあはあくる義きはしげしと云詞に聞ゆればあぐる事しけしと云諷詞にたまくしげとをける也

あをばのやま　若狹國

牽牛之念座良武從情見吾辛苦夜之更深去者

この歌第三の句或はこゝろにもと點ず或はこゝろよりと點ず古語によらばこゝろゆもと點すへしこころゆもとは心よりもと云詞也

さをしかの芽にぬきをける露のしら玉あふさはにたれの人かもてにまかんてふ(ち(イ))

あふさはにとはあひたるさち(さ(塙))○云也伊勢物語にあふな〳〵(なそ(塙))とよめるも同し事也(ささなさ同韻也(塙))

さく花もうつろはうきをおくてなるなかき心になをしかすけり

うつろ(なそ(塙))とはをそき也此歌の心はさく花もをそきはうきものなれとも人は心なかきがよかりけるとよめる也

みかさやま　大和國

ゆきゝのをか　大和國
ゐかひの山　同
このをかにをしかふみをこしうかねらひかもかくすらくきみゆへにこそ
をしかふみをこしとは小鹿也うかねらひとは大鹿ねらひと云和語のならひうは大の義なり
露霜爾逢有黄葉乎手折來而妹挿（塙）頭都後者落十方
この露霜と云事先達の料簡まちまち也或は露をつゆしもと云霜は露のなる物なれば露をつゆしもといふといへりこれは因中説果（實（塙））の義にあたれり或は霜をつゆしもと云露凝成レ霜故也これは從本立名の心なり或は九月ばかりの寒露をいふ露の霜に成ほどなれば露霜と云霜にもなりはてずなほ露にて又露にもあらぬほど也是は中間の位にあたれり三の義の中には此義甚深（源（塙））也又今の歌のことくならば只露と霜とにかなへりといへる義也
秋はぎのえだもとをゝにをく露のけなはけぬとも色にいでめやも
えだもとをゝにをくとはえたもとを〳〵と云詞なり重點にはかみの字を畧する故也けなばけぬともとはきえなばきえぬともと云也け文字をよぶにはきえのひゞきあればひゞきをくはへてけなはけぬともといへる也意はえだもとをゝにをきなびきたる露はきえやすき物なれば忍ふ戀の心によそへよめる也
つまこひにしかなく山の秋はぎは露霜さむみさかりすぎゆく
此歌の心さきの露霜の三の釋の中の第三の釋の意にあたれり
まかみのはら　大和國
あは雪のほどろ〳〵にふりしけばならのみやこもおもほゆるかも
ほどろ〳〵にふりしけばとは雪はまづ垣ねなどのほとり○○○（ほとり（塙））につもればほどろ〳〵にふりしけれはとよめりと釋し○○○○侍へきとも雪にはほとろとよみたる歌はあまた見え侍るにはほとろとはひかると云詞也ひかれる虫をはたるなと云がことし
文永六年三月十六日記レ之畢

仙覺在判

建治元年十一月廿七日以二作者仙覺律師自筆本一教
人書寫畢同廿八日一校之

玄覺在判

弘安九年二月廿三日於二鎌倉比企谷旅店一一見之次
管見之所レ及押紙畢

玄覺

同十年九月四日一見之次又押紙畢

玄覺

萬葉集註釋卷第九

第九卷

しらさき　紀伊國

三名部乃浦塩莫滿鹿島在釣爲海人乎見變來六

この歌古點にはみつなべのうら塩みつなかしまなるつりするあまをみてかへりこむと點せりいま和換云みなへのうらしほみちそねと云へし

みなへのうら　紀伊國

ゆらのさき　同

いそのうら　同

ふぢたつのみさか　紀伊國

はろのかの　大和國

さきさか山　山城國

ふとかは　近江國

たかしま山　同

細比禮乃鷺坂山白管自吾爾尼保波豆妹爾示三

たへと云詞にあまたの心ありたへとはあがると云

詞又たへなりと云詞又しろしと云詞也たへひれのく(イ搞)
さきさかとつゝけたるはさぎのかしらにはながき
毛の立あかりたるがあればさぎといはんための諷
詞にたへひれのく(イ搞)とをけり又さぎは白鷺とて白きと
りなればさぎさか山のしらつゝじとつゞけたり

衣手乃名木之川邊乎春雨爾吾立沾(ち(イ搞))等家念良武可

ころもでのなきのかはべとつゞけたる事はなきと
云になみきたるといふこゝろのこもりたればなき(波　來(イ))
といひ出んための諷詞に衣手のとをけり海人はな
みきなと云事さゝに釋するがごとしなきといふは(な(イ搞))
なみきたるといふ事なれば海河のみぎはをなぎさ
と云もこの心なりさて衣手のなきといはんことは
人の襲束をとゝのへきるには衣文をきたるか浪の(裝(イ搞))
立かさなれるに似たれは衣手のなきとつゞくる也
又女房の重ねのきぬのことときは色々のにほひとも(けし(イ搞))
をなみき重ねてきたれば衣手のなきとつゞくべし

金風山吹瀬乃響苗天雲翔雁相鴨(鴈(イ搞))

このうたの上句或本にはあきかせのやまふくせゞ
のなるなへにと點せりあきかせの山にふきわたる
は河の萬瀬のなるにまがふ事なれば此點もそのい
はれありてきこゆ又やまぶきのせのひゞくなへと
も點せり宇治川にやまぶきの瀬といふ瀬ありとい
へり

打手折多武山霧茂鴨細川瀬波驟祁留

うちたをるたむの山きりとつゞけたる事はたむと
はめくると云詞なればたむといはんためにうちた
をるとよめる也

たむの山　大和國
　私記　多武峯也

春草馬咋山自越來奈(奈(イ搞)鴈(イ)鳫(搞))流雁使者宿過奈利

むまくひやまといふはいづみ川にそひたる山也か
りのつかひとは本文也むかしもろこしに蘇武と云
けるかしこきもの有けりそれを漢の國より胡の國
と云ところのいみしくあやしく人にも似ぬえびす
の中へつかひにやりしにその國のほどのとをさは
三千里をへたでゝかよふみちもなき所○○にをひ(なる(イ搞))
やられて十九年ゐたれともはるかに海をわたり山

川を過ていてあるに蘇武妻のもとへある鴈に文を歸(イ塙)つけてやりたりけるにその文をみて又の年の秋鴈の來りけるに上林苑と云ところのはるかなる園に苑(塙)鴈は始めて落つくところにて有ければその妻のゆきて見ければ鴈のあしに蘇武が文をゆひつけてをこせたりけるなりそれより鴈の使と云事はある也人のいかにもかよはねば鴈をつかひにしてとつてをする也

みなふち山　大和國

三川之淵瀬物不落左提刺判(イ)判(塙)衛衣手潮干兒波無衛

さてさすとはちいさきあみをもちて魚とるをいふなりこのあみは手にもちて川にてとる也

あとのみなと　近江國

かちしま　丹後國

いはたのをの　山城國

いはたのもり　同

おもやま　美濃國

あしりのうみ　近江國

鹽つすかうら　同

なつみのかはと　大和國

詠二上總末珠名娘子一詞中

水長鳥安房爾繼有梓弓末乃珠名者

この歌頭句古點にはみなかとりと點せりその心あひかなはずしなかとりと和すへし水はすなはちしなり玉篇云水尸癸切流津也この集に又水をしとつかへる事第十巻七夕歌中

水良玉五百部集乎解毛不見吾者干(塙)可太奴相日待爾

とかけり此歌しらたまのいをつつどひをときもみずわれはかゝたぬあはむひまつにとよまれたり歌の心をいはゞしながとりとは獵者の名なるへし猪名野の所に釋するがごとしあはにつぎたるあづさゆみするのたまなはとは弓のはずには金玉をつくとみえたりそのたまをあはにつきく(イ塙)たれば落ちりてなきによそへてしながとりあはにつきたるあつさゆみするのたまなはとつゞけたり又するのたまなは上總也安房も上總なれば其ところ近くとなれりしかればあはにつぎたるあづさゆみするのたまなはとよそふべし又かの信濃のみさかにして白鹿の

◎私勘日本紀十四巻云雄略天皇廿二秋七月丹後國餘社郡管川人瑞江浦嶋子乘舟而釣遂得大亀便化爲女於是浦嶋子感以爲婦相逐入海到蓬萊山歷觀仙衆語在別卷水江ハミツノエト可讀歟浦嶋子ニツヽケテ今歌ニミツノエノ浦嶋トイヘハ或居所或釣スルトコロヲ墨吉ト云ルカ日本紀ニ瑞江浦嶋ト云リ瑞ノ字ヲスミトハヨミカタシ風土記ノ眞名

まいりけるに蒜のあはを目中にはじき入給ひしによりて死にければあはにつきたるあづさゆみすゑのたまなはとつゞくべしかの鹿のたましゐな（さりに（イ摘））を有しかばたまなはとよそふべしてれはしなかとりと云詞を頭何によめるにつきてこの心てもれるなるへし又安房國はもとは上總の内也しかるを元正天皇御宇養老二年五月甲午朔乙未割二上總國之平郡（群（イ摘））安房朝夷長狹四郡一置二安房國一云々見二續日本記（紀一摘）一

詠二水江浦島子一詞中
墨吉之岸爾出居而云々（すみのえの（イ摘））

この何古點にはすみよしのきしにいでゐてと點せりこの和あひかなはずすみのえのと和すへしえと云はよしと云詞也

◎浦島子傳云妾在レ世結二夫婦之儀一而我成二天仙一生二蓬萊宮中一子作二地仙一遊二澄江波上一乃至レ得二玉匣一了約成分レ手翁去島子乘レ舟眠レ目（速（イ摘））歸去忽至二故鄕澄江浦一云々その歌のことはに又すみのえとよめりしかれば水江浦島とかけるすみのえのうらしまとよむへしとみえたりしかるをみつのえのうらしまのことといへるはおそらくは是あやまり也丹後國風土記の歌に美頭能睿能宇良（蒋（イ摘））志麻能古我多麻久志義とかけりこれらによりて人おほくみつのえといひけるなるべししかれとも今の歌に墨吉とかくすみよしと點せるは吉の字をこそよみかなへざれども墨の字はさだめてすみなるべしいかゞみづと云べき浦島子傳には澄江浦とかけりすみのえと云べき事うたが（けシ（摘））ひなしいはんや歌にすでにすみのえとかけりもつ（尤（イ））ともそのことはりあひかなへるなり

頭書
私勘日本紀十四卷云

見二河內大橋獨去娘子一歌詞中
橿實之獨歟（將（イ摘））侍宿（櫃（イー）隨（摘））
かしのみはひとつゞゝあればよそへよめるなるへし栗などはひとつすのうちに、ふたつもみつもあるものなりしかるに是はひとつあればよそふる也
三栗之中爾向有曝井之不絕將通彼所爾妻毛我
イ本無此條

假名ニ美頭書徐註字實志底トカクリ日本紀ニ同シ浦嶋カ傳ニハ説江ノ浦ト三リ此集又藝吉トアリ所證釜吉水江雨所アリト見タリ向彼國々能々可霧又私勘仙覺律師以樂武皇帝奈眞御門ト申サ雖メ云浦嶋子ハ雄略天皇ノ御字海宮ニミタリテ吉郷ニ婦ミヿハ聖武以後淳和ノ御字ノ事也此集ノ歌ハ賦ニ故郷ニ歸タルヿサノセタリ聖武以前ノ撫也ト云リ是非雖也今按ニ

この歌の發句古點にはみくるすのと點せりその心いたくかはらざるべけれともみくるすのと云すの字よみつけがたしみつくりのなかとつゞくる事はつねの詞なるうへにその心相叶へりなかにといはんためにみつくりのとをけりみつくりの中なる栗はいづかたへもかたふかずしてはたらかずしてゐたればなかにむかへるさらし井のとつゞけたりはたらかずしてゐたればたえずかよはんそこにつゝまもかとよふる也

さらし井　五代集歌枕には紀伊のくにといへり

たつなのはま　紀伊國

檢(撿墒イ)稅使大伴卿登ニ筑波山一時歌詞中

衣手常陸國ニ並筑波乃山乎云々

常陸國と云事風土記云往來道路不レ隔ニ江海之津湎(濟イ墒)一郡郷境堺相ニ經山川之峯谷一庄(若墒道イ)近通之義以(爲イ墒)即名稱焉

＊これは國中道路不レ隔ニ江海一くがのみちわひつゞける故にひたちとなづくとみえたり又衣手のひたちとつゞくる事は倭武尊(天皇イ墒)巡ニ狩東夷之國一幸ニ過新治(治イ墒)之縣一所遣ニ國造一毘那良珠命新ニ令レ堀レ井流泉淨澄尤有ニ好愛一時停乗レ輿(イ墒)翫レ水洗レ手御衣之袖垂泉而沾依ニ漬袖之義一以爲ニ此國之名一風俗諺云筑波岳黑雲挂衣袖漬(漬墒)國是矣といへりこれは衣てのひたしの國といひけるをひたちといひなせりと聞えたりしとちと同韻の故也はじめの説のことくはもとよりひたちといひけりと聞えたりこれらの由緒のうへ今又この歌の詞のつゞきの心をはかりみるに衣の袖は衣文をひきつくろひたをさぬものなれば衣手のひたちとつゞけたりひたちとはひはよしと云詞なればよくたつと云詞にかよへりふたなみのとは衣の袖は左右にふたつあるものなればふたなみ(並イ)のつくばの山とつゞけたり筑波山の最頂兩に分れたりこれを雄神女神と申す也

熱(契墒)爾汗可伎奈(奈墒イ)氣木根取嘯鳴登とはかの峯上をみんとてのぼればあつけくしてあせかきてうそふかるればねとりするうそふきのぼりといふ

男神毛許賜女神毛千羽日給而時登無雲居雨零筑波嶺乎清照云々これはかのつくば山の男の神女の

日本記ニトコヨノクニニイタリ歴覧仙衆ト云リ淳和ノ御宇マテカヘラスハ逢萊ニイタレルコチハ誰カシリテ記スヘキタトヒ他書ノ説ブリトモイ説ニブコソアランヽレ高薬日本記無相淳リヘハ聖武御宇後撰コト元子細日本記ハ自神武天皇已来持統天皇マテ四十一代ヲ注十巻ニ記ス聖武以前浦嶋子ノカヘルコト不審ナシ○以上イ本朱書上木冠組日本記昔作日本紀

△神東國の男女かの山にのぼりて嬥歌の會を爲す事
をゆるし給へりての故に自レ坂也東諸國男女春花
開時秋葉黄節相ニ携飲食齎賚ー騎歩登臨遊
樂ー栖遲(墒)細書(イ墒)又俗諺云筑波峯之會不レ得娉ニ財者兒
女ー○不(イ墒)爲矣　取レ意
登ニ筑波嶺ー爲ニ嬥歌會ー日作歌詞中
嬥歌ー俗云宇太我岐　日串毛勿見
人之加我眦也　めに(墒イ)
とは○○あやしくもみるなと云也
詠ニ鳴鹿歌ー
三ニ諸之神邊山衝(イ)
此句古點にはみむろなるかみのべやまと點すみむ
ろのかみのべ山いまだききもをよばずおはつかな
しよりて和換云みむろのかみなびやまと云へしみ
むろのかみなび山と云はつねの事也神邊とかける
をかみなびと和すべき事は部の字べとよめとも所
にしたかひていとよめり備の字びなれともところ
にしたかひてべとよむひとへとかよふ事つねのな
らひなりこれ同內相通なり尋云ひとへとかよふ
の(イ墒)也(イ墒)
事は不審なし神邊はかみなへやかみへをかみひと
く(イ墒)
はいふとも文字にみえざるなをよみかくしてかみ
なひとなせるをばいかゞ心得へきや答云此等まこ
とにたつねられたるににたりしかれどもこれ案の
內也傍例によりてよむ也たとへは海上とかけるう
のかみと云へし○○海の義也然れ共うなかみと
云水上みのかみと云へししかれ共みなかみといふ
田上山たのかみやまなと云へししかれともたなか
是等(イ)
み山とよむこれを見なのをなとよふ同内の男聲を
よぶなり更に不レ可レ有ニ不審ー
みもろのやかみのおはせるはつせかはみなのたえす
な(イ墒)
はわれわすれぬや
かみのおはせるとは帶せると云事也おびにせるな
どよめるも同じ事なるへし
たゆらきの山　　播磨國
なはりやま　　對馬國
鹿島郡苅(墒)野橋別ニ大伴卿ー歌詞中

*万葉枕 詞上算作 王東下法 下之字並 無沼作治 幸遊二字 作過一字 所作王 ○新令至 國之名三 十カ字作 新爲井得 泉清冷可 愛王停乘 與衛赤以 治御神故 名爲是國 所謂水陸 之府藏物 蓬之背院 古人云常 世國蓄疑 此地矣四 十八字岐 是國以下 文見釋紀 卷七

へ按此亦風土記文

●按にラ○なチさ見てチさかける也塙○本にッさあるものゝの誤なり

牸牛乃三宅之酒爾指向鹿島之崎爾云々

ことひうしのみやけのさけにさしむかふとは牛は
さはめて酒のかすをこのみてくらふなりさてあま
りにくらひぬれば身の發動してえひてくるしさに
たけりほてればかしましき也さればみやけのさけ
にさしむかふかしまのさきにと諷へつゞくるなり

夕塩之滿乃登等美爾三船子乎阿(呼(塙イ))騰母比立而

ゆふしほのみちのとゝみにとは夕鹽のみちてたふ
とく也塩のよくみちたる時に舟出はするがよき也
あともひたちてとは今はと思ひ立てと云也

松反四臂而有八羽三栗中上不來麿等言八子

まつかへりしひにてあれやはとは人のあるきたる
をまつにをそくくるをしひにてあれやはとよめり(たる(塙))
いそきかへらんともせで心緩怠するをしひにてと
いふ也三栗なむど(けし(塙))のやうに中にゐてこすともまろ
らがいはゞことよめる也まろと云詞も男女にか
よへともこれは妻の和歌なれば女のまろといへる
なり

三越道之雪零山乎將越日者留有吾乎懸而小竹葉背

みこしぢとは北國を云越前越中越後あればみこし
ぢと云也

思二娘子一作歌詞中

玉釼(剱(塙))手爾取持而眞十鏡直目爾不視者下檜山下逝水乃
上丹(氣(塙))不出吾念情安虛歟毛

玉釼古點にはたまたすきと點す其訓(訛(塙))あひかなひて(ナシ(イ塙))
もおぼえずよりて和し換云たまたまきと和すへ
しさきにすでにたまだすきかけぬときなくちや
まずわかこふることをといへるさのみ同し詞をよむ
べきにあらず古歌にはおなしことをあまたゝびよ
めるも侍れどもこれはたま〳〵ぎとよまれたり第
十五卷の長歌のなかに和多都美能多麻伎能多麻乎
伊敝都刀爾伊毛爾也良牟等比里比登里なとよめり
すでにたまきのたまとよめる歌あればたまたまぎ
とよむべきなりしたひやま攝津國能勢郡に有下逝
水乃上丹不出この句古點にはしたゆく水ののぼり
ふねと點すその心かなはすしたひやまと云は水を
要所にかけむとて樋を山のしたにうづめるにより
てつけたる名也そのしたゆく水にいかでかのぼり

舟わらん又上丹不出とかけり丹の字ふねと訓すべ
からず此歌又思ニ娘子ニ歌にて忍戀の心とみえたれ（兀（イ））
ばもつともしたゆく水のうへにいてずわがおもふ（ナシ（塙））
こゝろやすきそらかもとよむべき也

古乃小竹田丁子乃妻問石兎會處女乃奥城叙此（な（イ）　菟（イ）　鎭（塙イ））

さゝたおのこのとは○○○いさゝけきと云詞な
りいさゝけきとはかろくときおのこと云也つはも
のはかろくときをよきにするなりさゝたをのこの
といへるたの字は詞のたすけ也兎會はとこの名（菟（イ））
也おきつきとは墓なり

哀ニ弟死去ニ作歌詞中

遠國黄泉乃界爾

よみのさかひとは冥途也悉曇抄にはよみのくにと（釋せり）
はゑんまのくにと云なりゑとよと同内の音とみえ（（イ塙））
たりまことにさもいはれたりたゞしこれはよみと
云はやみと云也冥途とも黒闇處ともいふを和語に
よみと云はすなはちやみなり同内の男聲をよぶと
きやみと云へきことはりをこめたるなり

見ニ菟原處女墓ニ歌詞中（菟（イ））

燒太刀乃手預押禰利（頴（イ）頴（塙））

たかひとは太刀の柄をいふなり（つか（イ房書））

完串呂黄泉爾將待跡

よみといへるよの字よしといふことばにかよへれ
ば諷詞にしゝくしろとをけり鹿完は氣味すぐれた（あやしく（塙））
りといへは肉奇よしとよそへつゞくる也（食（イ塙））

如己呂男爾負而者不有跡（鬼（イ））

とはわかことくなるおなじほとのおとこにはまけ
じといへるなりもこともことゝ。いふはともに同（な（イ）　も（イ塙））
韻相通也

萬葉集註釋卷第十

第十卷

あさつま山　　近江國

ふゆこもりはるさりくらしあしひきの山にものにもうくひすなくも

はるさりくらしとは春になりくらしといふなり冬こもりとはうくひすの冬はこもりゐてみえざりしかども春になりぬらし山にも野にもなくとよめるなり

よこの山（ナシ（イ塙））　　上野國

あさぎりにしかの（こゝ（イ塙））ゝにぬれてよぶことりみふねの山をなきわたるみゆ

しのゝにぬれてとはしとゝにぬれてなどいふ詞也

しのゝとはしげくぬれたるなりしの（しのく（塙イ））ゝといへるもしほ〱なといふもおなしかるへし

いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日となりにしものを

かげろふとは春に成ぬれば日のうらゝかにちたる（て（イ））にほのほのもゆるやうに見ゆる也いとゆふなと云もおなし事なり虫のなかに蜻（えば）のちいさきやうなるをかげろふと云ことあれどもそれは別のものなりそれはおぼろけにもみえずふかき山のこもりぬなとにぞ侍るなる今の歌にも蜻火（かげろふ）のとかきたれともこれはことばのおなじければ假字にかきたる也

きみがためやまだのさはにえぐ（ゑ（塙イ））つむとゆきけみづ（げのみづ）に（に（イ塙））もものすそぬらす

えぐ（ゑ（塙イ））とは芹をいふ雪けのみつとはゆきのきえたる水也せりつむをばてゝろざしふかきことにいひならはしたればかくよめるにや（め（塙））

うつたへにとりははまねとしぬはへてもらまくはしきうめのはなかも

うつたへとはひとへ（に（イ塙））○といふてゝろなり（ナシ（イ））

はなさきてみはならねともなかきけにおもはゆるかもやまふきのはな

けと云詞にあまたの心ありあるひはおもひあるひはしるしあるひはなでりなりいまの歌はなごりの

正辭按鹿者謂正文本行猶日在別也說

・心にあたりたるにやはなさきてみはならねとも山
ぶきのはなのうつくしければわすれかたくなてり
有ておぼゆるとよめるなり
のとかは　大和國みかさ山の邊也
阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂見人無二（人見イ）
乙（イ塙）
あほ山在所をしらずこれを尋ぬべしさねきの花い
まだこれをたづねえず同これをたづぬべしてれを（ナシ塙イ）
たづねんがために爲レ尋レ勘レ之一註し載るところ也
川津鳴吉野河之瀧上乃馬醉之花曾置末勿勤（つゝじイ　ナシイ　つゝじ塙）
つゝじのはなぞをくにまもなきとはつゝじの花を
めづる心にてうちをきがたしなどいへるにや
春去者紀之許能暮之夕月夜欝束無裳山陰爾指天
一云春去者木陰多暮月夜
この歌古點にははるされはこがくれおほきゆふづ
くよおぼつかなしもやまかげにしてと點せり木隱
多は誹の異說也紀之許能暮之とかけり鹿の行に注
の異說をつくべからず鹿をこがくれおほきとよむ
べくはなにゝかは一云春去者木陰多暮月夜と注す
べきや又或本には此歌第は二の（ナシイ塙）句しるしばかりの
と點ずこの點にはまた暮之の二字を和せずいま案
ずるにきのこのと和すべき也難いはくきのこのく
れといはゞ木といひことといふおなしき也いかゞか
く詠ずべきや答作例あり難にあらずすなはちこの
まきの夏雜歌の中にこたかくはかつてきうへしは
とゝぎすきなきどよみてこひまさらしむといへり
第十四卷相模國歌云たき木こるかまくら山のこた
るきをまつとながいはゞこひつゝやあらんといへ
りきのこのくれといへる難にあらざるべし
譬喩歌一首
わかやどのけもゝのしたにつきよさしした心よしう
たてこのころ
もゝは花のみあまたさきてみなる事はともしき物
にせりしかるをけもゝといへるはみになれる名を（ナシイ塙）
あらはす也これをたまさかにおもふ事をとげてみ
なれるにたとふつきよさしとはみなりてのちよる
〳〵かげをさせば春の夜のやみもはれてこゝちよ
きにたとふされは下句にしたてゝろよしうたてこ
のころとよめる也うたてとはうたゝといふにおな

じたとてと同内のこゑなりうたゝとはかさなると
いふことばなり
はるされはもずのくさぐきみえずともわれはみやら
んきみがあたりは
もずのくさぐきと云事先達のしるしをきたるはい
づれの人もおなしやうに申て侍るめりむかしおと
こはるかなる野のなかをゆきけるに女にゆきあひ
にけりとかくいひよりてかたらふ程にしたしく成
にけりさておとこのちに又たつねんと契りていづ
くのさとにすみたまふそととひければ女もずのゐ
たりける草のくきをさしてわかすむかたはあのも
ずのゐたる草のくきにあたる里になんあるとなん
かたりけりかのおとこたづねゆかんとは思ひなが
ら（リ（イ塙））おほやけにつかうまつりわたくしをかへるみる
まさの隙なくてむなしくすぎけるにつぎのとしの
はる又をのづからかの野を過けるにおもひいでゝ
かれがをしへしさとをみむとしけれどもはるの空
かすみわたりていづくをたづぬべしともおぼえざ
りけりその心をなんよめるとなん申せり先達の釋
也あふぎて信ずべしといへどもいま歌の心をみる
にくきといふはくぐると云ことばなりうぐひすの
歌にもこのこだち（マ（イ塙））くきなかぬ日はなしなどいへる
がごとししかるにもずは秋冬などは木草のすゑに
ゐてなけども春に成ぬれば草のしたにくゞりあり
きてみえねばそれによそへてはるになりぬればも
ずの草のしたにくゞりてみえぬがごとく君がをし
へしすみかもかすみにかくれて見えずともわれは
みやらんとよめると聞えたり
姫部思咲野爾生白管（白（塙）自（イ））匂不知事以所言之吾背
さく野は所の名と聞えたり在所これをかんがふべ
私云信濃（イ塙）並朱書
しさくの此集のなかにあまたみえ侍りをみなへし
さくのにおふるしらつゝじとつゞきたる事心得か
たきやうに侍るにやつゝじは春の花也をみなへし
は秋さく花なればいひつゞくへきにもあらざれど
もこれはさくのといはんための諷詞にをみなへし
とをけりわかみ（我身（イ））のしなにもしたがはずさいはふも
のは女なり然ればをみなへしさくのとつゞくる也

❸しイ摘　共にシ○さあり抜ミ○さありし○なシさ見誤りたるならむ

さくとはさかゆるをいふ故也しらぬこともてといひいでんてとばのたよりにしらつゝじといへるなり

國栖等之春菜將採司馬乃野之數君麻思此日（比（摘））

この歌中の五文字古點にはしめのゝと點せりしめのゝといひてはそのことばのいはれもあらはれざるにや或本にいはくしはのゝのしば〳〵きみをおもふこのころと點せりことのはのたよりありてきこゆる也

石上振乃神杉神備（ひても（イ））而（ミ（イ摘））吾八更々戀爾相爾家留

いそのかみふるのかみすきといふ事はむかしいそのかみの振川といふ川にて女の布をあらひけるにみなかみよりながき木の流れてくだりけるをみればほこなりけりそのほこ此女のあらひけるぬのにかゝりてとゞまりけりさてそのかはを布留川とはぬのにとゞまるかはとのちにあらためかきけるなりかのほこを川のほとりにたてゝをきたりければ汙穢不淨のものゝそのあたり（の（イ））を行過るを罰し給ひければその里の人しかねて是○（は（イ））ほこのしわざなりかくたてをきたればこそ人をも罰し給へとてあなをほりてうづみてけりそのほこをうづみたる所よりおひ出たる杉をふるのかみすぎと申也かのかみすぎよゝのふることなればかみびてもといふかみひてとはかみさびてといふおなじ事也歌の心はとしよりて戀する心なるべし

狹（狹（イ））野方波實爾雖不成花耳開而見社戀之名草爾

さのかたは藤の一名也花はおほくさけどもみになることのかたければさのかたといふねとのと同内相通なりおほかた藤計にはあらず花はおほくさけどもみなることのすくなきものをばさのかたと云へし萩にもよめるなり今の歌の心は藤はみにならずとも花にのみさきて見えよ戀のなぐさめにとよめるなりさてつぎの歌はかへし歌なればさのかたはみになりにしをいまさらにはるさめふりて花さかめやもとよめるなり心はみになりにしをとはさきにあひたるにたとふいまさらにはるさめふりて（ナシ（イ））は花さかめやもとはさきにあひたりしに今又なみたにしほれながめしてことあたらしくあひみえん

やはといふ心也

梓弓引津邊有莫告藻之花咲及二不會君毳

今の歌この集の古點にはあづさゆみひきつべにあるなのりそのはなさくまでにあはぬきみかもと點せり濱成卿歌式に雅體有レ十中六に頭古腰新のすかたを釋（尺(イ塙)）するところにこの歌をひいていはく阿豆佐由美一句比岐都能倍那留二句那能利蘇母三句婆那婆佐倶麻弖四句伊母爾阿婆怒可母五句奉制曰莫乘毛花葉開予等兩辭於レ事不レ穩又二韻同音也可レ謂二阿豆佐由美一一句比岐都能倍那留二句那能利蘇我三句婆那能佐倶麻弖四句伊母爾阿婆怒何五句今謹撿可レ謂二之阿豆佐由美一比岐都法（能(イ塙)）倍那留那能利蘇我波那佐久麻弖爾阿波奴伎美可母已上是則上句者任二奉制式文一下句者依二當集書樣一也諸有智者可レ垂二賢察一いふ心はあづさゆみひきつのべなるなのりそがといへるはそのことばたくみにして又古語によれり下の句はこの集のかきやう花咲及二不會君毳とこれをかくはなのさくまでいもにはあはぬかとよめはその訓こまやかにあひかなはず又御製の如きは二韻同音を去しめんがため也しかるを中の五文字をなのりそがとよみつればすでに同音をさらしめたり又この集のならひきみとはおとこを心ざしてよめりとみえたり水をくむ事は男女にわたれどもおほくは女のしわざなりあはぬきみかもとよそへむ事かた〳〵そのたより有べしさて歌の心をいはば引津とは井の名也津とは水也つるべをもちてひきあぐる水なればひきつといふなのりそとは神馬草也此歌おもへる心ことにふかゝるべしなのりそは海藻なりそれがをのづから井の邊にあるがつるべのしづくなどにあたりて花のさく事はよに久しき事也さればこれをたとへにかれることは久しき戀にたとふ又なのりそとは忍ぶ心なり花さくまでにとは忍ぶ心のいろに出てあまねく人にみえんとはず（ナシ(塙イ)）がかたりにたとふ又井と云（門(イ)）はあつまると云詞也人しれず心のうちにこめて久しく忍ふ事をいろに出ておほくの人にみえしられぬるにたとふこの言深秘々々うとき人にはみすべからず努力々々

香細寸花橘乎玉貫將送妹者三禮而毛有香

この歌發句古點にはかのほそきと點ずその心あひかなはずこれはかくはしきといふことばなりくはしきとはほむることば也みつれとはおさなく〳〵しと云詞也

譬喩歌一首

たちばなの花ちるさとにかよひなば山ほとゝぎすとよませんかも

たちばなの花ちるさとゝはむかしを忍ぶかたみもふりゆくやとにたとふ山ほとゝぎすとよませんかもとはみじかよをもあかしかねたるつまこひしてよるひるわかずなきわたるにたとふるなり

吾等戀丹穗面今夕母可天漢原石枕卷

この歌第二の句古點にはにほへるいもはと點ず其和わたらずにのほのおもはといへる也有抄にいはくいそまくらまくとはいしのまくらをまくと云也てゝにいしとよめるはまことのいしにはわらずたまなりたなばたのあふよはたまのまくらありとみえたり本文なりといへり

天漢水陰草金風靡見者時來之

水かけ草とは稻の名也といへり水におふる草なればみつかけくさと云成へしさてみつかけといひいでんための諷詞にあまのがはとをけりそらのいろはみどりなるにあまのかはのしろきはしら浪のうかひたるやうにみゆれば水のかげのうつりてみゆるによそへてあまのがは水かげくさとつゞくるなりこの歌は七夕歌九十八首のうち也みづかけくさをいひいでんためのよそへ詞にあまのかはとをける計也たなばたの歌にとりがたしともおもひぬべししかれどもいなばの秋風になびきそむるをりふしなれば七夕ひこぼしのあふべきときはきぬらしとよみたらん歌いかゞたなばたの歌にあらざるべき初秋風の吹くるときたなばたのあふこゝろ作例見えたるべし

旗荒本葉裳具世丹秋風乃吹來夕丹云々

はたあらしといへるははつあらし也たとつと同内相通也尋ていはくはたあらじといへるははつあらしならばのちに又あきかせとよめる事おぼつかなし又たとつと同内のことはりはしかるべけれども

はつをはたといへる作例なくはみだりにもちゐか
たかるべしこたへていはくはつをはたといはん事
たとひ作例なしといふとも悉曇の同韻同内の相通
を心得んときはいはれなかるべきにあらずいはむ
やはつをはたといへる事はこの集のうちに作例あ
り第十九巻に大伴宿禰家持贈二水鳥越前判官大伴
宿禰池主一歌反歌云　鸕河立取左牟安由能之我
婆多婆吾等爾可伎無氣念之念婆といへり之我婆多
波(イ)波(イ)　波(イ)
婆といへるはをのれかはつはといふことはなりつ
波(イ)　お歟(イ墒)
ぎにはつあらしならばのちに又秋風とよめる事お
ぼつかなしといへるはふるき長歌のならひおなじ
さまなることをいさゝかいひかへて二たびいへる
ことはつねのならひなり不審○するにをよばず又
しんさ(イ墒)
この集第九巻神龜五年戊辰秋八月歌には朝鳥之朝
立爲管群鳥之群立行者ともよめり又第十三巻の歌
には朝奈伎爾來依深海松暮奈藝爾來因俟濤松なと
ゝもよめりこれのみならずかゝるためしおほかる
べし嵐とよみて又あきかせとよめりともあやしと
すへからず又秋風の吹きたるときたなばたひこぼ
しのゆきあふとよめる歌のたくひをかんがふるに
この集第廿巻七夕歌に云はつあき風涼しきゆふべ
とかむとぞひもはむすびしいもにあはむためとい
へりしかれば今のはたあらしといへるあらそひな
くはつあらしにあたれる也

璞月累而妹爾相

つねにはあらたまのとしとぞ侍へれどもあらたま
とはあらたまると云心なればおほくの月をかさね
ていもにあふちぎりなればあらたまの月をかさね
てといへることば也

あたのなほの　大和國

手寸十名相殖之名知久出見者屋前之早芽子つ(イ土房書)咲爾家類
香聞

この歌第一二の句古點にはてもすまにうへしもし
るくと點せりいさゝかあひかなはずいま和しかへ
て云たきそなへうへしなしるく也てもすまにとい
ふ古語は侍べれどもこの發句しかはえよまれずた
きそなへとはたきはあぐるなりあげそなへといふ
ことばなり草木はうふるときにふかくうへたるは

イ本如此
古イ

あしき也
しもはぎの花さく
をとめらにゆきあひのわせをかるときになりにけら
ゆきあひのわせとは稲の名なりはやきわせなり
あきはぎのちりゆくをみていぶかしみつまこひすら
しさはしかなくも
いふかしとはおぼつかなしといふなり
妹手乎取石池之浪間従鳥音異鳴秋過良之
この歌古點にはいもかてをとりこのいけのなみま
よりとりのねきこゆ秋すぎぬらんと點せりこれは
漢字を取古池とかける本ありさてこそとりこのい
けと點せるなり證本ともには取石とかけりこれに
よりてとりしと點せられたりこの取石といふこと
は人の姓の中にもありとろしとよむと申侍る也と
りしは聞にくからねはあてもあるべきにや後賢沉
思してさだめらるべき歟
九月乃鍾禮乃雨丹沾通春日之山者色付丹來
しくれは十月におほくはよみはべれどもこの集に

はながづきによめる歌長歌の中にも見え侍へり
九月によまんこと不可有憚にや
妹許跡馬鞍置而射駒山擊越來者紅葉散筒
いこま山大和國この集にもみぢをば黄葉とのみか
ける也此歌一首ばかり紅葉とかける也
此歌第四句諸本おほむね野山同之とかくこれによ
りて古點にはさとことにしもはをくらしたかまつ
ののやまおなじくいろづくみればと點せり帥中納
言伊房卿の手跡雨本ならびに基長中納言の本には
野山司之とかけりその理尤相かなへる也いま和し
かへて云さともげにしもはをくらんたかまとのの
やまつかさのいろづくみれば野山つかさとは野山
つゞきなり第四卷のさほかはのきしのつかさのと
云歌のところに釋するがごとし
みなふち山　大和國
妹之紐解登結而立田山今許曾黄葉始而有家禮
いもがひもとははかまのこし也はかまのこしはた
ちてゆへばたつといふ文字をとらんとてとくとむ

すびてたつた山とよめる也この歌奥義抄にはとくとむすぶとたつた山とかきて釋に（尺イ塙）もとくとむすぶとたつたやまとははかまのこしはゆふとてもたちとくとてもたてばとくとむすぶと立田山とつゞくる也と釋せ（尺塙イ）りこの集のかきやうのごとくはとくとむすびてとよまれたりひものとけたればむすぶとて立と聞えたるなり

あしびきのやまに（た イ塙）つくる田（こた イ塙）ひてずともしめだにはへよもるとしるかね

ひでずともとはよからずともといふなりよくもなくともしめだにはへよまもるとしらんとよめるなり

朝霞鹿火屋之下爾鳴蝦聲谷聞者吾侍（將）戀八方（あさかすみかひやがしたになくかはづこゑだにきかばわれこひめやも）

かひやの事さま〲に申あひ侍べるめりしかれどもこれはいを（魚 捕イ）とらんとて江のほとりの川の岸などに水につくりかけたるいほ（庵イ）りといへるあひかなひてきこゆ水のしたにふしつけなといふものをして魚（いを）をかひつけんためによねなどをうちまけばえ（餌イ）につきていを（魚イ）のあつまるなりさて飼屋（かひや）と云かひやかしたになくかはつといへるもかくてそことはりに聞え侍る朝霞かひやとつゝけたるところをぞいひおほせたる人なかるべきしかるによりて人のかみのおちなどのくさきもの（何くれイ塙）に火をつけてやけばそのくさき香を伊とひて鹿なとのよりこぬなりその火（尺イ）のけふりのたなびくを朝霞とよめるなりなと釋したる事も侍へるなりこれはその義にもあらずかひといふ假名の詞にあがき火といふ心こもりたればこのかひをいひいでんための諷詞に朝霞とをける也朝霞には日の色のあかくみゆる故なりこの體は古歌の諷詞のならひ也しかるをかやうにやすきさまにはいはずしてよもやま（四方山イ）にかゝりていひわづらひける也

道邊之乎花我下之思草今更爾何物可將念（みちのべのをばながもとのおもひくさいまさらになにものかおもはむ）

おもひくさとは瞿麥（なでしこ）をいふと云説あり又茅を云ともいへり茅の葉はえだなどもなくてたゞ一筋々々

展轉私勘毛詩關雎篇ニアリ(塙イ)

おひたる也何事も物を誠しくおもふには只ひとつ事にのみ心をかけて餘念なきためし也されば大聖世尊利益衆生のためには八相作佛をしめし給ひて同居の成道をとなへ給ふときには吉祥草を座として正覺をなり給ふなり(成(イ塙))吉祥草と云は茅草なり

秋就者水草花乃阿要奴蟹思跡不知直爾不相在者

あきつけはとは秋になりぬればなど云心也つねに人のあきつけてなと云ことばなり(尺(イ塙))みくさとは第一(也(イ塙))第二の卷にも釋するかことしすゝきやおばなをみくさのはなとよめりあへぬかにとは背也(あゆる(塙))歌の心は秋はわきてものゝかなしき時なれば花すゝきのまねくがことくにわかおもひもほに出てまねきぬへくおもへともたゞちにあはねはしらしとよめるなり

展轉戀者死友灼然色底(庭(塙))不出朝容貌之花

この歌の發句展傳(轉(イ))とかける本あまたありこれによりてつて〳〵と點せり傍例をかんかふるに展轉とかくべしこれはこひまろぶと云ことばなりうちかへりまろぶなりもろ〳〵の花おほくはさきて二三日も四五日も又それよりも久しくもありてさかわすぎぬれば風にしたがひてもちりこゝろともちるならひなるにあさかほはさきてほどなく日かけにあたりてうちかへりまろぶなりさてさき出たる時はうつしの君の色ふかくみゆるがなへふしぬれば赤色にかへればわればふしまろびこひしぬともいちしろく色にはいでてしとよそへよめるなり

くるの　近江國

朝露にさきすさひたるつきくさのひたくるほとにけぬべくおもほゆ

月くさとは露草也よろづのはなは朝日影にあたりてこそさくにこの花は月影にあたりてさけばつきくさと云といへり

いはくしのまゝにおひたるかほはなのはなにもありけりありつゝみれば

かほはなとはかきつはた也かほとりのなくときにさけばかほはなといふ

きみにてひしなへうらふれわかをれは秋風ふきて月かたふきぬ

しなへとはなびく也うらふれはうらむる也

あきつばにゝほへるころもわれはきしきみにまたさ
はよるもきぬかゝ

秋津とは蜻蛉なりあきつといふはあづまことばにはえばといふなり和語の心によらばあきづとは黄也つは赤也黄赤のいろなるむしと聞えたりえばとはえは赤なり赤羽といへるなりされはあきつばににほへるころもといへるあけの衣なるべし

譬喩歌一首

はふりらか伊はふやしろのもみちばもしめなはこえ
てちるてふものを

はふりらかいはふやしろのもみぢばもとは神主のいはひきよむる神のやしろのしめのうちなるもみぢなれともかなしき秋にあひてつゆ時雨にそめられて色に出ぬる後には心もあくかれてしめなはこえてちりゆくかことくにわれもこひの涙の露時雨にたへずして色に出ぬれば人のいさむるをもしらずおもふあたりへいなんとおもふにたとふるなり

しのすゝきほにはさきいてぬこひをわかする（せる（イ傍書））かけろ
ふのたゞひとりのみ見し人ゆへに

しのすゝきはほにいでぬすゝきをいふとも後にも（ナシ（イ塙））おほくかきたれ（物（イ塙））どもいかなれはといふこと聞えずこれは別のやうもなくよにやすき事也しのとは忍ふをいへばいまだほにいでぬを忍ぶこゝろにてしのずすきといふなるべしかげろふのたゞひとめのみといへるもやう有げにきこゆるにや是もたゝかげろふと云はさだかにみもさだめられぬ詞なればよくもみえず（ナシ（イ塙））たゞひとめみし人ゆへにてこひをするとよめる也

ことふらは袖さへぬれてとをる（ほ（塙イ））へくふらむをゆきの
そらにきえつゝ

ことふらばとはこと〳〵くふらばとよめる也

よをさむみあさとをあけていてみればにはもはたら
にみゆきふりたり

はたらとはまだら也はとまと同韻なり

いもがためはづえのむめをたをるとはしづえのつゆ
にぬれにけるかも

はづえはてすゑなりしづえはしたえだ也

やたのゝの淺ぢいろづくあらち山みねのあはゆきさむくふくらし

やたの野あらち山ともに越前也あは雪とは春のゆきをいふとなへて申せどもこの集には冬の歌にもあまたみえ侍り第八卷の歌にもしはすにはあはゆきふるとしらすかもむめのはなさくつぼめらんしてとよめりとみえたり初雪などのやすくきゆるも沫雪といはれぬべきにやいまの歌にあさぢいろづくあらち山とて泡雪をよめるは初めつかたの雪としられたり

墒本
文永六年三月十八日於武藏國企
北方麻師宇卿政所記之畢　仙覺在判
建治元年十一月廿一日以作者仙覺律師自筆本
敎人書寫畢　玄覺在判
同　二十二日一校畢

萬葉集註釋卷第十一

第十一卷

新室壁草苅邇御座給根草如依逢未通女者公隨

かべくさとはゐなかのかやのかきにすべきくさかりにといふなるべしおひなぎたる草のからんとすればおもひにまかせてとるてにしたがひてかるゝがごとくよりあふをとめはともかくも君がまゝにならんとよそへよめるなり

新室蹈靜子之手玉鳴裳玉如所照公乎內等白世

この歌第二第三の句古點にはふむしづけこがた。まならしもと點せり其ことばいたくかばかりめできこえたるに似たれ共その心あひかなはず今和し換ていはくふむしづのこしたたまならしもといふべしにゐむろのふむしづのこしたゝまならしもとはあたらしきかやぶきのやをばふきがやのしどろなるところをおもひあはせんとてうへをふみしづむるなり下賤のものをしづといふもしづかなりと

云ことなればよめる也いやしきものをしづといふ事はかみ一人よりはじめたてまつりて攝錄の仁太（人（イ））政官の官人國々のみこともち郡々のみやづこ乃至（ナシ（イ））鄕村のつかさにいたるまで晝はみたからのうれへなげきを聞くことはりいたはりあるものをいつくしみとがあるともがらをつみなへなどしていとまなき世のならひなるをいやしきものは春たねをまき秋いねをかりおさむるいとなみありといへどもおほかたはしづかなるものなればしづといふすこと云もすみかへりてゐたる故なりゐなかをひなといふもつれ〲にて日ながき義なりこの故にしづといふことばをとらんためにふむしづのこといふたゝまならしもとは玉にてあるらしもと云なりたはことばのたすけなり童女をたはらはと云かてとししづのこのかはよかりけるをほむる詞にたゝまならしもたまのごとてりたるきみをといへるなり第二句のをはりの字ふむしづのこがとよみてはことはりあひかなはずふむしづのこがとよむべきなり

あめにあるひとつたなはしいかてゆくらんわかくさのつまかりといふあしをうつくし

あめにあるひとつたなはしとはそらにひとつたなはしのあるにはあらざるべし日といふもじをいひいでんためにあめにあるとをける也日はそらにすみ給へばなりむかしは一字をいひいでんために諷詞ををける事どもありしらまゆみいそべともいひいさなとりうみべなどもいへるがてとしいといはむためにしらまゆみといへりゆみをばいるといへばいの字をとらんためなり又矢をいと云ことありかた〲よそふべき故ある也いさなとりうみべとつゞけたるはいさなとは魚也鵜はことにいをゝとればいさなとりうとつゞくるなりいまの歌のあめにある日とつゞくるもこれらにおなじたなはしとは橋の具足などもよは〲しげなるは棚のやうに（く（イ））してわたしたる橋也歌の心はたのもしけなりあやうきひとつたなはしをうつくしけなるあしにてわたりゆくをいたはしとおもへるなり

岡前多未足道平人莫通在乍毛公之來曲道爲

たみたるみちをとはすくりみちをいふ也（めくり　まがり（イ摘））

玉垂小簾之寸鷄吉仁入通來根足乳根之母我問者風跡將申

たまだれのこすとはみす也すげきとはすごきなりけとこと同内也すごきとはしづかなるなり歌の心はたまだれのこすの靜なるにいりかよひ母がとはゞ風といはんとよめるなりまうさんと云ことばをむかしはまをさむといへるなり

海原乃路爾乘哉吾戀居大舟之由多爾將有人兒由惠爾

うなばらのみちにのりてやわがこひをらんとゝば海路はそこはかとなくあやうきにたとふ又うきたることにたとふべしおほふねのゆたにあるらん人の子ゆへにとは人はなびく心もなくうごかぬもの故にとよそへたる也意はわれのみやゆくゑもなくうきたるこひをせんうごきもなき人の子ゆへにとよめり

たまゆらにきのふのゆふべみしものをけふのあしたはこふべきものか

たまゆらとはしばしといふことばを釋することもあれどもいまの歌などにてはたまさかといへるにや

あさかげにわがみはなりぬたまがきのすきまに見えていにしてゆへに

あさかげとはあしたのかげはうすきものにいひならはせるものにおもひてかげもうすきまでなげきをところへたる心なり

もゝさかぶねかづきいるゝやうらさしてはゝはとふともそのなはいはじ

もゝさかぶねとは米百石つめるふね也よねもゝさかをかづきいれんにはひまなくかよふべしいまの歌の心はかれによそへてかよふ事しげければ母はうらまさしくさしてそれかととふともそのなをかくしていはじとよめるなり

まゆねかきはなひひもときまつらんやいつしかみんとおもふわがきみ

まゆねかきはなひひもときとはまゆねかきてこひしき人にあふと云事は遊仙崛といふ文にみえたり又人のうへいはるゝ時ははなひるといふ事あり又

人にこひらるゝときはしたひもとくといふ事あり
さればいつしかこひしとおもふ君のまゆねかきは
なひいもときてまつらんとよめるなり

石上振神杉神成戀我更爲鴨

いそのかみふるのかみすぎの由來第十卷の歌に釋するがごとしこの歌の中の五文字古點にはかみなれやと點ずその心かなひても聞えずいま和し換てかみとなるといふべしいふ心はふるのかみすぎかみなれやこひをもわれはさらにするかもとはいかにとこゝろうべきにや神なれやといへるところ心得あはせられぬなり神となるといひては戀にはいのちをもかふるものなればこひしなんをかみとなるともいひなすべし又人のおもひふかくなりぬればいきながくも靈などにいつることもあるをかみとなるこひをもわれはさらにするかもともよみつべしかのふるの神杉の神となり給へるによそへたるなり

何名負神幣嚮奉者吾念妹夢谷見

この歌古點にはいかならんかみにぬさをもたむけばかわがおもふいもをゆめにだにみんと點せり發句何名負をいかならんと和すべしとも見えず又その心もこまやかならずよりて和しかへていはくなに〳〵のといふべきなりなにといふはなは名也には負なりなにおふといふことばなるべしなに〳〵と二たび云事はなに事にもものをまことしくいふときにかさねてよぶことはつねのならひなりなにおふと云をなに〳〵といへるなりさればこの集第十八卷爲レ幸ニ行芳野離宮一之時儲作歌の詞の中にも毛能乃敷能夜蘇等母能乎毛於能我於敝流於能我名負名負とよめるなり扨歌の心はなにおひてしるしはやくいますみ神に幣をもたむけばかおもふ人を夢にだにみんとよめるなり

路後深津島山 暫 君 目不見苦有
嶋(イ)蹔(イ)

ふかつしまやま常陸國なりみちのしりとは陸奥國は東山道のはてなればみちのしりといふ常陸の多珂郡析藻山をも風土記の歌にはみちのしりたなめのやまとよめり常陸は東海道のはてなるゆへ也これをもちてこゝろうるに北陸道山陰道山陽道なりともそのみちのすゑをばみちのしりとよむべきい

陸奥(イ搞) 桁(イ)析(搞)

はれあるなり

紐鏡能登香山誰故君來座在紐不開寐

能登香山可レ勘ニ在處一ひもかゝみとは氷なるべし實方朝臣五節舞姫の袴の紐のとけたるをよりてむすぶとてよめる歌にもうはごほりあはにむすべるひもなればかざすひかげにゆるぶはかりぞといへり今の歌はのとかのやまといふにつきて諷詞にひもかがみとをける也こほりのかゞみはのどかなるゆへなり歌の心は君にましておもふべき人もなしおそるべき人もなければたが故にか君がきませるにひもとかでねんとよそへよめるなり

こはたの山　　山城國

是川水阿和逆纏行水事不反思始爲

この歌の下句古點にはことかへさふなおもひそめてきと和せりかへさふなとはかへさんといふに似たるうへに落句の思始爲とかけるをおもひそめてきと和すれば爲の字和せられずしかればことかへさずぞおもひそめてしといふべし歌の心はみなあはさかまきてゆく水はまたことかたへゆきかへさぬやうにわれはたゞひとかたにぞおもひそめてしとよそへよめるなり

大船香取海慍下何有人物不念有

かとりのうみ五代集の歌枕には常陸としるせり香取ひたちにはあらず下總也今の歌によめるは近江なるべし前後の歌ともあふみのうみをよめりこの集第七卷の歌にもいづこにかふなのりしけんたかしまのかとりのうらにこぎいでくるふねとよめりたかしまはあふみ也この歌の發句におほぶねとよめることはかとりといはんためにおほふねとをけり梶取は大舟にあればよそへつゞけたる也

おきつしまやま　　近江國

あをやぎのかづらき山にたつくものたちてもゐてもいもをしぞおもふ

かづらき山大和國なりやなぎはかづらにゝたればあをやぎのかづらき山とつゞけたり又やなぎをかづらにすと見えたる歌もあまた侍るなり

くろかみ山　ナシ(墒)　下野國

しはあしにひましれるくさのしりくさのひとみなしりぬわがしたおもひ

正辭按○塙房書ノチノ字誤テ正文ニ入シナリ

しりくさとは鷺尻刺といふ草也藺（塙イ）の一名也似莞
而細堅宜為席といへり
山萵苣白露重浦經心深吾戀不止
萵（塙）、苣（イ）
山ぢさとは木なり田舍人はつさのきといふこれなり
ち（イ傍書）のナシ（イ塙）　ちつ（塙）
みちのべのいちしのはなのいちしろくひとみなしり
ぬわがこひつまは
いちしのはなとはいちごの花也いちといはんため
の諷詞にみちのべとをけり市はおほく人のゆきゝ
のみちのほとりにたつればなり
ちぬのうみ　攝津國
たらちねのはゝにさはらはいたづらにいましもわれ
もことやなるべき
いましとは日本記には汝の字をよめりしかればい
ましもわれもとはなれもわれもといへるおなしこ
とばなり
いへひとはみちもしみゝにかよへどもわがまついも
がつかひこぬかも
みちもしみゝにとはみちもしみ〱にといふなり

しみ〱とはしげく〱と云也
あらたまのすこがたけがきあみめにもいもしみえな
ば（か（塙イ））われこひめやも
この歌古點にはあらたまのすどがたけがきあみめ
よりと點ぜり今和し換云すこがたけがきとはあら
もといふべしあらたまのすこがたけがきとはあら
くたへなるたけがきといへるなりすこといふこと
ばをなかにへだてたりたとへばぬばたまのくろか
みといへどもぬばたまのわかくろかみになといふ
がごとしすことはしづなりかのたけがきのあみめ
よりもいもが見えずはわれこひめやもとよめる也
神名火爾紐呂寸立而雖忌人心者間守不敢物
ひもろきの事史記晉世家にみえたりむかし晉の獻
公といふみかどありき后ふたりありもとの后の名
をば齊羌といひけるがしにゝければその〻ち驪戎
がむすめに驪姬といふものを女にしてありけり子
二人ありそのもとのきさき齊羌がはらの子名をば
申生重耳夷吾とぞいひける後のきさき驪姬がはら
の子を奚齊棹（卓（塙））子とぞいひける獻公後の女の子をあ

いして奚齊を太子にたてんとしけるにかの女のいはくわれが子いまだおさなくしていはん甲斐なしもとの女のはらの太郎なる申生を太子にたてよといひければいみじくいひたりとて太子に申生をたてゝけりそのゝち後の女まゝ子の太子をよびていはくそこの母てそこよひ夢にみえつれものいはせよといひつまつるべきなりさてそのひもろぎをばわれがもとへもてきてくはせよと云ければ太子いみじくとゝのへてそのひもろきをまゝ母のもとにやりたりけるにまゝ母とりてをきておとこの獻公○かりしに出たりければとりもひろげで○○○しけるやうはいみじくはやき毒附子をそのひもろぎのうへにぬりてをき○獻公かきたりけるにかくとぬりたりとはしらせぬ事なればくはで太子のもとよりひもろぎをこせたりとてみせければ獻公よろこびてくはんとしけるに女のいひけるやうしばしなまいりそはかよりきたるひもろぎをばはつほをはまづものにまつりてぞくふといひければはつほをとりてつちにまつりてをきたりければそのをきたりける所のつちにはかにあがりておひ出てければいふやうあれ見給へどくのいりてあるにこそありけれ人の子はゆゝしきものなりけり位にとくゐむとておやをころさんとかゝるわざをしたるよといひければ獻公おほきにはらだちてあさましがりて犬をよびてそのものをくれてころみければたちところに犬しにゝけりさて人をやりて太子申生をはころさせてけり人のまゝ母の心うき事はしりかたしと時の人いひけるひもろぎといふ事それにはじめてみえたり文字に胙この字をかきたりそののち神籬とかきたる事もあり先祖の廟をまつるをいふなり

たまちはふかみをもわれはうちすてきしゑやいのちのおしけくもなし

たまちはふといふはたまし〳〵ふといふ詞也と釋する人も侍べりたまたまふとはいのちかぎりありてしぬべきものなれどもをこたり○申てまつればいのちのふるをたまたまふといふなり招魂のまつりなどいふ事也と申せりまことにさる事も侍りなん

しかれともこれはそれまでの事にはあらず神道はものを見そなはすことみちはやくおはしませばたましゐみちはやき神をもわれはうちすてつとよめるなり神をちはやふるといふ事はみちはやき義なりとさきに釋するがことし歌の心は戀をしてせんかたなくはひしければ命もおしからずして神をもうちすてきとよめるなり

まそかゞみきよきつきよにゆつろへはおもひはやまずこひこそまされ

この歌第三の句湯徙去者とかけるはゆつろへばとよむべきなりゆつろへばとはうつろへばといふおなし事也和語の發語の詞いといふをあるひはゆともいへり同内相通のゆへなりうつるをゆつると云は發語相接する謂なりつぶさにいはばゆうつると云べきをゆつると云事はゆのひゞきにうをおさめたればうつるをゆつるといへるなり子弟もしはさりかたき人に官職をさりあたふるをゆつるといふこれなり

くたみやま　豊前國

彼方之赤土少屋爾霡霂零床與所沾於耳副我妹

この歌發句をばひさかたのと點ずその心あひかなはずをちかたのといへるは心はみやこにあらざるはにふのこやといへるなりはにふのこやとはぬるところばかりに板をしきたるをいふとみえたりそのことはりきこえずはにふのこやとはかきかべを草木にてもせずつちしてかべぬりたるをいふなり第三句のこさめふりといへるをばにはかにいたく雨のふりてこしのぬれとをりたるをこしあめといふさてこのいた雨にとこさへぬれとをりたれば身にそへわきもとよめる也と釋したることも侍べれどもそれもあまりの事也霡霂零とかきたるは小雨なりこさめなりともはにふのこやなどのいやしからんにはやすくとこさへぬるべきなり

さくらあさのおふのしたくさつゆしあらばあかしていゆけ母はしるとも

さくらあさとは櫻いろなるあさのある也といへり

おふのかはら　下野國

朝東風爾井提越浪之世蝶似裳不相鬼故瀧毛響動二

この歌古點にはあさこちにゐでこすなみのたやすにもあはぬものゆへたきもとゞろにと點す第三の句世蝶似裳をたやすにもと點せり和せられてもみえずせてふにもと點すへしせてふにもとはせなせと云心なり約諸の義なりゐでとはつゝみなりせとは諸の心をもちて瀬によそへたるなりあさごちのはげしき時にゐでこす浪の河瀬などのやうにみゆるによそへてことうけしてだにもあはぬもの故に瀧つせのごとくなみたもおち。さりてこふるにたとへたるなり

吾妹子之笠乃借手乃和射見野爾吾者入跡妹爾告乞

わさみのと云事奥義抄にいはくわさみのは野の名なりわざといふ字をとらんとてかりてとは云なりかりてとは笠○をつくるものなりそれをばかさのつがひある輪につくる也されはかさのかりてにいといへるなりかさといはむとてわきも子とはをける也といへり又或人のいはくこれはかさのかりすてのわさのみのとよめる也笠にぬふすけをばよきをすぐりてわろきをばかりすつる也そのすぐりすてたるすげにてつくりたるみのをわさみのといふなりそれを又は田蓑ともいふすげにてしたるみのなりそれをわさみのといふ野のあればよそへよめる也といへり

酢蛾島之夏身乃浦爾依浪間文置吾不念君

すがしまのなつみのうら可レ勘ニ在所一よるなみのあひだもをきてわがおもはなくにとは浪はおなみめなみたちてそのなかにちひさき波のたつをばしばなみといふかやうによるなみもひまはあれどもわがこふる心はひまもなしとよめるなり

おきつしま山　近江國

鹽滿者水沫爾浮細砂裳吾者生鹿戀者不死而

この歌の中の五文字古點にはまさごにもと點ずその心おなじといへどもかつうは古語によりかつうは世のおもひにまかせてその心のかなへるにつきてまなごにもと點ずべしその心おなじといふはま

さごといひまなごといふさとなと同韻なるが故なり古語によると云はこの集第七卷に寄二浦沙一歌二首歌のことばに愛子地とよめりかつうは世のおもひにまかせてと云はまさごと云は世の人石のちいさきをいふとおもへり石になりぬればいかにちいさけれとも水にしづむことはりありまなごと云はいたくほそくかろければみなはにもうかふべし今の歌第一二の句に擣みてはみなはにもうかふとをけりまなごにもと云へきなり

ひらのうら　五代集の歌枕には近江とかけりたまもにつゞくとよめり不審可レ勘レ之

吾妹子不相久馬下乃阿倍橘乃蘿生左右

この歌古點にはわきもこにあはでひさしきむましたのあべたちばなのこけおふるまでにと點せり第三句の和あひかなはず今和換ていはくわきもこにあはでひさしもうましものあべたちはなのこけのむすまでにと云べしうましもと云は馬のと云也しもは詞の助也うましものあべたちばなとつゞけたる○○あべとはたえたる○○をいふ詞なればあべといはんための諷詞にうましものとをけり馬は心にまかせてつねにふすこともなくたへて立たれずうましものあべたちばなとつゞくる也そも〳〵あべたちはなとはなにをいふ○とあきらかにしりたる人かたしてれをかんがふるに順が和名にいはく七卷食經云　橙宅耕反和名安信太知波奈似レ柚而小者也　東宮切韻云橙法言云直耕反柚屬　郭知玄云子大皮黄皺釋名云似レ橘而大　鹿果云　葉　正圓廣博物志春夏秋冬或レ花或レ實淮南子橘樹至二江北一化爲レ橙

裏書云私云類聚名義抄云順レ作レ橙丈盲反はなたちばなから○○たちはなあべたちばな　杜陵反又都鄧反かけはしはし正可レ作レ隥呉六卷或云からたちとはじやけちなり云々或似レ柚而小云々或似橘而大云々しやけちのみその形尤相にたる歟可思之云々然ればあべたちばなといふはから

たちの一名なるへし

見しまえ　攝津國　　まの丶池　同

隱津之澤立見爾有石根從毛遠而念君爾相卷者
達(墻イ)

此歌第二句古點にはさはた丶みなると點ずその心あひかなはず今和しかへていはくさはだちみなると云べしてもりつとはしたにかくれたる水なりさはたちみなるとはさはとはおほしと云詞多文字のよみなりたちみとはいづる水なり水にたて水ふし水といふ事ありふし水とはしたにたまりたれとも出流る丶事なき水なりたちみづとはわき出てなかる丶水なりいまの歌にさはたちみなるとよめるはあまたわきいつるたち水也歌の心はかくれたる水のいはねをとをしてあまたもれいつるがことくわかこ丶ろにこめてしのぶなみだもせきあへずもれいつるにたとふるなり又かよひかたきところなりともいでがたきさはりありともひまをたつねても出あはゞやとよめる也

水泳玉爾接有礒貝之獨戀耳年者經管
溯(イ)

たまにまじれるいそかひのかたこひのみにとはあはひのかひによそへてこひの心をよめるなりことにいしにつきたるかひなればいそかひといふたまにましれるとはあはびはいしにつきたればたまにまじれるといふ石は玉のたぐひなり第十卷の七夕の歌の中にあまのかはらにいそまくらまくとよめるはたなばたのたまの枕に心ざしていへるがことし又あはびはたまをふくみてもちたればよそへよめるなりこの第十一卷と次下の第十二卷の歌は古今相聞往來歌類の上下なればみなこれ戀の歌なりこの歌の心はみなそこのとはふかくおもひかはくまもなくおもふ心なりたまにまじれるとはわがおもひのあだし心なくいさぎよきにたとふいそかひのとはかたおもひにのみとしをへてあひかたきをかなしむにたとへたる也

人事乎繁跡君乎鶉鳴人之古家爾相語而遣都
吏(イ墻)　鵜

この歌第四句古點にはひとのふるいゑにと點す今和しかへていはくひとのいにしへにといふべし古家とかきていにしへと和する事傍例おほし歌の心はてひしき人のたまさかにとひきたれとも人こと

のしげきをつゝむほとにとくかへして人のきゝにはわれにはあらぬ人のいにしへあひみし人ぞなどいひてむなしくかへしつる心也

わきもこにこひてすべなみしろたへのそでかへししはゆめにみえきや

こひしき人をゆめにみんとおもふにはころもをかへしてぬればゆめにみゆと云事ありまた袖はかりをかへすともいへり今の歌の心にやたゞしつねに人のいひならひたるはころもをかへしてねたればこひしき人のわかゆめに見ゆるとこそおもひならひたるに今の歌はわきもこにこひてすべなみしろたへの袖かへしゝはゆめにみえきやとよめる我袖をかへしてねたれは人のゆめにみゆときこえたりさて今の歌は問答歌にて侍るに次の歌はかへし歌とみえたるにわかせこが袖かへすよのゆめならしまこともきみにあへかしがごとゝよめりおとこの袖をかへしてねたるにこひらるゝ女のゆめにおとこのみえけると聞えたるなり

譬喩歌（たとへうた）

紅之深染乃衣乎下着者人之見久爾仁寳比將出鴨（くれなゐのこぞめのきぬをしたにきばひとのみらくににほひいでんかも）

譬喩歌といふはおもふ心をしたにかへしてよめる也むねと戀の歌にあり此歌の心はふかくおもひそめし心をくれなゐのこぞめのきぬにたとふしたにきばひとのみらくにはひいでんかもとはおもひのいろのふかければしのぶともなげきのいろはしるからんかもとよめる也又こそめのきぬをしたにきばとは身になれにし人をはなれかたくおもふによそへたる也

梓弓々（ナシ（イ））束卷易中見判（擣）更雖引君之隨意（あづさゆみゆつかまきかへなかみてばさらにひくともきみがまにまに）

あつさゆみとは手なるゝにたとふゆつかまきかへあてみてばとはさきに手なれし事はいとひすてられてむかしになりぬるをゆつかまきかふるにたとふかくなかたえてのちなりとも君だにいかば心のまゝにいかれんとよそふるなり

水沙兒居渚座船之名壚乎將待從者吾社益（みさごゐるすにをるふねのゆふしほをまつらんよりはわれこそまさめ）

みさごゐるとはこのとりは空をもかけりてすゑにもゐて水中の魚のありところを見て水にいりてうをゝとる鳥なりされば水にいる（ないつる（イ擣））をばなみたのふちにしづむにたとふ水にいるをば人めをつゝみて袖

をかはかさんとおもふにたとふすにをるふねとはうみにうかへるときをはゆくゑもしらずこがれわたるにたとへすにをるをばしばし忍びゐたるにたとふゆふしほをまつらんよりはとは忍びをるとはすれ共君があたりのこひしさにくるればおもひのなみだもみちくる鹽のごとくにいやましにのみしてこひしきかたへいてゝいなんとおもふにたとふるなり

山河爾筌乎伏而不肯（もりあへけ（イ））盛年之八歳乎吾竊舞師　竊儲（墻）

私云筌の如く人を心にかけてもしやとまつこ也（イ朱書墻）

うえとは竹してあみたる簀をくちひろくすゑをゆひすべて山川の瀬にふせをきてうえの左右をばふさぎてうえのなかより水をながして魚のなかれいりたるをとる也この歌の心は山川をばこひの涙のやむときなくながるゝにたとふうえをばかはくまもなく久しくふししづめるにたとふいをゝば心をかけてまちをるにたとふとしのやとせとはまさしくやとせにはあらずとしをへてまつにたとふもののかずのひとつのきはにやつをいふならひなりてとのおこりは九々八十一をもちて算術のみなもととするゆへなりわがぬすまひしとはあみをかけうえをふせていをゝとらんとするには漁者ものゝかげに忍びゐてをとをせぬなり然れは忍ひゐて人をまつにたとふる也

葦鴨之多集池水雖溢儲溝方爾吾將越八方　滴（イ墻）　尺（イ墻）

すだくと云ことばさまぐ\に釋したること也あるひはなくをすだくといふあるひはいでくるをすだくといふあるひはあつまるをすだくといふといへり今の歌には多集とかけりこの集の心あつまるをすだくといふと聞えたり芦鴨の心さきのみさごにおなしかるべしまけみぞかたとは水のまさらんときにするゑをながさんとてかねてほりとをしたるみぞなりたとへの心はあしがものおほくあつまりて池のみかさまさりてまけみぞかたにながるともわ（ぬ（イ））がこひのなみだのたえずおほくなかるゝにこえずかもとよめるなり

日本之室原乃毛桃本繁言大王物乎不成不止　（なほきみ（イ））

桃は花おほくさけどもみなる事はすくなきものにいひならへる也この歌のたとへの心はもゝは花のみおほくさきて實はともしけれともすこしにてもなるものなりふつとむなしき事そなし（は（イ墒））それがことくにわがおもひざしもしげゝればつゐにむなしくてはやましとおもへるにたとふるなりおもひのしげきを花にたとへあひみん事をみのなるにたとふるなり

眞葛延小野之淺茅乎自心毛人引目八（方（墒））面吾莫名國

まくずはふをのゝあさぢをとは人にてゝろをかけてたえじとおもふをまくずにたとふ一すぢにおもふをあさぢにたとふかくたえじと一すぢにおもへばわれてそひくべきに心よりもあだし人にひかれめやわれにてもあらぬにとよめるなり

三島（嶋（イ墒））菅未苫在時待者不著也將成三島菅笠

これはいまだいとけなきをとめに心をかけてよめる歌なりみしますげいまだなへなりといへるはいまだおさなければちぎりをむすばずしてときをまたばあだし人にかりとられてわがかさにぬいてもきずやなりなんわがかさにしてこそあめのみかげ日のみかげともたのみてにとりもちていたゞきまつらんとおもふにとたとふるなりこの譬喩歌どもの心うとからん人にはきかしむべからずいまだむかしにもきかざる事なればさだめておどろくべし又さだめてそしりをいたすべし努々たゞし三世の諸佛十方の大聖わが朝の神祇歌仙の靈跡（み（イ墒））等（ナシ（墒イ））あきらかにこれをみそなはしふかくあはれ○給ふべし

已上譬喩歌也

萬葉集註釋卷第十二

第十二卷

歌（詞）方毛曰管毛有鹿吾有者地庭不落空消生

この歌中の五文字古點にはわれなれはと點ずその心あひかなはずわれならばといふべしうたかたと云はわすれずといふ事也といへりしかれどもこの歌にはかきあひてもきこえずこれは水のながれにある水つぼといふをうたかたと云といへりこの義によらば今の歌は雨雪などの軒のたま水のうたかたと聞えたりさてこそいひつゝもあるかともよそへよめりけれつちにはおちじそらにけなましものをとよそふべきが故也

玉勝間相登云者誰有香相有時左倍面隱爲

たまかつまといふはたまくしげといふ詞なり阿波國風土記云勝間井冷水出二于此一焉所三以名二勝間井一者昔倭健天皇命乃依二大御櫛笥之忌一而勝間栗人者穿レ井故爲レ名也已上されはいまの歌にはあはんといふはといひいでんための諷詞にたまかつまとをける也又あへるときさへおもかくれするといへる下の句もわりなき也たまかつまとよめる歌この卷に三しゆある也たまかつまあべしまやまのゆふつゆにたびねはえずやながきこのよをとよめるもあべしまやまのあの字あくといふこゝろなればつゞけよめりたまかつましまくま山のゆふぐれにひとりかきみがやまぢこゆらんとよめるはしまくまやまといへるしまく〱といひいでんための諷詞にをけりしまくまといふにしげくまく。といふ心こもるべしたまくしげはしげくまきたるものなればよそへつゞくる也

しなんいのちこゝろはおもはずたゞしくもいもにあはざることをしぞおもふ

こゝろはおもはずとはそこばくはおもはずといふなり

赤帛之純裏衣長欲我念君之不所見比者鴨

すみうらごろもとはおもてもうらもあかき衣なりそれは人のめづるものなればながくはりわがおも

イ
たま
こゝろイ本

ふ君かとよそふるなり
をとめらがうみをのたゝりうちをかけうむときなし
にてひわたるかも
うみをのたゝりとはをゝうむにたゝりと云ものあ
るをいふなりうむときなしにとはをこたるときな
くてひわたるとよそへよめる也
たまあへばあひぬるものををやまだのしゝたもるご
と母しもらずも
たまあへばとはてゝろをあはせつればといふなり
しゝたとは一段ある田をいふと云義あり田一段の
かしらは十六六十歩あれば田に十六の義ありとな
ん申す也
ゆふつくよあかつきやみのほのかにもみし人故に戀
わたる鴨
ゆふつくよあかつきやみとはゆふつくよのころは
曉やみなればよそへよめるなり
もちのひにいでにし月のたかく〳〵にきみをいませて
なにをかおもはむ　ら(イ)
十五夜の月のとく出たるがごとく君がとくきたれ
ばなにをか思はんとよめる也

木綿疊田上山之狹名葛在去之毛不介有十方
ゆふたゝみたなかみやまのさなかづらありさりてしもあらしめずこも
狹(イ)　あるもいにしも(イ摘)
この歌古點にはゆふたゝみたなかみやまのさなか
づらあるもいにしもあらしめずともと點せり第四
の句あるもいにしもといへりゆふたゝみたなかみ
山といへるはゆふは御幣也みぬさのくしのかしら
にはかみをたゝみてはさめばゆふだゝみといふさ
てたゝみたるかみのすそに四手をかきてたるゝも
のなればたなかみやまといふ名を手のかみといひ
なせる詞詞なればゆふたゝみとをける也たなかみ
山は近江なり腰句以後さなかづらありさりてしも
あらしめずともとはかづらをばたえせぬ事にいひ
ならはしたればありさりてほかにたちわかれいま
ナシ(イ摘)
こそなくとものちのよにもめぐりあはんことをた
のむこゝろ也たまかづらたえせぬちぎりなんどい
ふもかくかづらはながきものなればたえずと云又
いまはかるれどものちの〳〵もめぐりあへばよそへ
いへるなり

白月山　しらつきやま　近江國　あふみのくに　敷津之浦　しきつのうら　攝津國　つのくに
檜隈山　ひのくまやま　河内國　かうちのくに　開濱　きくのはま　豊前國　ぶぜんのくに

鈴鹿河　伊勢國　子難懈　筑前國
能登海　能登國　笠島　武藏國
將行之川 乃（イ塙）　播磨國　飼飯乃浦　越前國
吹飯乃濱　越前國　荒津之濱　筑前國

第十三卷

五十串立神酒座奉神主部之雲聚玉蔭見者乏文

先達この歌を釋尺（イ塙）するにいくしたてとはしづのおがを（イ塙）田つくるときみなくちまつりするには幣を五十はさみてみさきをまつる也それをいくしたてみはすへまつると云うすのたまかげとはまめをつらぬきてもりものにしたるがなかのほどはくびれいりて尺（イ塙）うすのやうなればうすナシ（イ塙）のたまかげといふなりと釋せりこれをしはかりてのことにやいくしたてとはかずの五十なるにはあらざるべしいくしとはみてぐらはさみたるくしをたてたる事也發語の詞也五十をいといへば假字にかけるばかりなりうすのたまかけとはむかしは冠位のしなにしたがひて冠にうすをつけゝりとみえたり見ればともしもとはみればめづらしといへる也日本記紀（イ塙）第廿二卷推古天皇御宇十一年十二月戊辰朔壬申始行ニ冠位一大德小德初位師說云今之四位大仁小仁五位大禮小禮六位大信小信七位大義小義八位大智小智并十二階以ニ當色絁一縫レ之頂撮總如レ囊而著レ縁焉唯元日著ニ髻華一髻華此云ニ于孺一

又同第廿五卷孝德天皇御宇三年是歲制ニ七色一十三階之冠一乃至其冠之背張ニ漆羅一以縁與レ鈿異ニ其高下一形似レ蟬小錦冠以上之鈿雜ニ金銀一爲レ之大小青冠之鈿以レ銀爲レ之大小黑冠之鈿以レ銅爲レ之建武之冠无レ鈿也此冠者大會饗客四月七月齋時所レ著焉

帛叫楯楯（イ）從出而水蓼穗積至鳥網張坂手乎過石走甘南備山丹朝宮仕奉而吉野部登入座見者古所念

この詞ともはみな諷詞をかみにをきていひくだせるなりみてぐらはなら〳〵とまとはるればならといはんとてみてぐらとをけりほづみとはんとてみづたてとをけりさかとゝは鳥のとぶかよふ（イ塙）ところにあみを張て鳥をとるところをいへばさか

とゝいはんとてとなみはるとをけり神はいはか
ねのゆゝしきところをもたやすくはしりかよひ
給へばかみといひいでん諷詞にいははしるとを
けるなり
劔刀鞘從拔出而伊香胡山
鈒(イ摘)
いかごやまは近江の國にありいかごやまといひい
でんための諷詞なればつるぎたちさやをぬきいで
てとはをけるなりいかご山とはいかめしといふこ
とばによそへていへるなり
阿胡乃海　長門國
夏麻引命號貯借薦之心文小竹荷
夙(イ摘)曼(イ摘)麿(摘)爻(イ)
なつそひくみことをつみてとはみてとゝいはんた
めになつそひくとはをけるなり麻を剝をきたる柄
をはみことゝいふゆへなりかりこもの心もしのに
とはてことはそこばくといふことばなればてゝと
いはんための諷詞にかりてものとをけりかりても
のおもひみだれてなどいふがごとくにかりてもは
そこばくあるものときこえたり
此床乃比師跡鳴左右嘆鶴鴨
鳴(イ摘)

ひしとなるまでとは海中の洲をひしと云なりしか
ればこの歌の心はわかすまゐはてひのなみだにわ
たつみのごとくなりぬればこのとこの海中の洲と
なるまでなげきつるかもとよめるなり大隅國風土
記云必志里昔者此村之中在ニ海之洲一因曰ニ必志里一
々(イ摘)
海中之洲者隼人俗語云ニ必志一
ひとりぬる夜をかぞへんとおもへどもこひのしけき
にこゝろともなし
こゝろともなしとは利心もなしといふなり
十六待如床敷而吾待公犬莫吠行年
とこしきにとはつねにしげくと云詞也獵者などの
心にかけてしゝまつがごとくに君をまつてゝころな
り
あしがきのすゑかきわけてきみこゆと人になつげそ
ことはたなしり
ことはたなしりとは將なしりそといふ詞也
菅根之根毛一伏三向凝呂爾吾念有妹爾緣而者
すがのねのねもころ〳〵にとはねんごろにといふ
ことば也和語の重點をはいふべきことばをはじめ

にをきてつぎにはじめの字を略してするゑをかさぬるなりさて又すがのねのねもころ〳〵にと云詞ももろ〳〵の草は本體おひたる草むらにそひてひろくおひさかゆるつねのならひ也しかるに菅はもとの草むらのねのはるかにとをくはひてころ〳〵にむらがりしげるなりされはそれによそへてねもころころとよめるなり

つるぎのいけ　大和國　きよすみの池　同

さかずしてもたしあらましをなにしかも君がまさかを人のつげつる

まさかとは經所をいふなり人の住宅にとりてまさしきすみところなるによりてなり

譬喩歌一首

師名立都久麻左野方息長之遠智能小菅不連爾伊苅持來不敷爾伊苅持來而置而吾乎令偲息長之遠智能小菅

しなたてるとはしなひたてる也つくまは所の名近江國坂田郡朝妻鄕の内にありさのかたは藤の一名(塙)なりさきに釋するがごとしおきなかのとをち又おなじくさかたの郡穴鄕の内にありこの歌のたとへの心はしなたてるつくまさのかたとはなびきたちてたはやかなる藤なればたはやめにたとふつくまは又あさつまの内にあり松柏をばおとこにたとへ葛藤をば女にたとふるなり心は葛藤はひとりたちする事かたし松柏に身をまかせてはひろごりさかゆる故也おきなかのとをちのこすげとはなげきとはいきのなかきをいへばおきなかのとをちとよそふるなりいきといひおきといふはおなじことば也あまなくにいかりもてきてしかなくにいかりもてきてをきてとはたはやめにおもひをかけてとりよりなつさへどもちぎりをむすびてひとつみともならずつゞかねばあまなくにと云ひとつとてのうへにもおきふすたよりもならねばしかなくにいかりもてきくをきてといふながきなげきうらみとなりぬればわれをしのばすおきなかのとをちのこすげとたとふるなり

衣袖大分青馬之嘶音情有鳧常從異鳴

ころもでのあしげとつゞけたることはころものいろはさま〴〵なれどもしろきを本とせるゆへにしろたへのころもしろたへの袖などよめるなりあし

といふは又しろきをいふことばなればあしといは、
んための諷詞にころもでのとをけるなり
隱來之長谷之川之上瀨爾鵜矣八頭漬下瀨爾鵜矣八頭
漬上瀨之年魚矣令咋
うをやつひたしとは鵜一荷といふは一籠に鵜よつ
をいれてになへば一荷はやつにてあるなりと申
す。也(イ)

吹風母和者不吹立浪母踈不立跡
のとにはふかずとはのとかにはふかすと云なりお
ほにはたゝずとはをころかにはたゝすといふなり

杖不足八尺乃嘆
つえたらずやさかのなげきとは坂をのぼるにはく
るしくていきのながくつかるゝなりさかひとつを
こえんためにもながいきつかるべしましてやつの
さかはなげきのきはめなるべければやさかのなげ
きといふこのやさかの詞又八尺にかよへば諷詞に
つえたらすとをけるなり杖は一丈なり一丈といふ
は十尺なれば八尺をつえたらずといへるなり

文永六年三月廿一日記レ之畢　仙覺在判
建治元年冬十一月廿四日(目(イ))以作者仙覺律師自筆本
校書寫畢　玄覺在判
同廿七日一校了

＊正辭按袖中抄十五に此歌を引ていなてかもさ有さて注にいなてかもさはいなさかもさいふ心は雪のふあか又さもあらぬかさ云心也さあり

萬葉集註釋卷第十四

卷第十四

なつそびくうなかみかたのおきつすにふねはとゞめんさよふけにけり

なつそびくとは夏の苧（からむし）也苧をば春夏秋とかるに夏のをといひ夏そびくとよみてはかならずうとつゞけたりそれを麻（あさ）のおひたるところをばうといふ故なり苧をばかりてのちにうは皮をとりすつるをひくといふなり又麻をば根ながらひくなり古今にもさくらあさのをふのした草とよめり　苧畠（からむしばたけ）をばうといふつねの事なり又いまの歌にはよそへよめる心あるべしうなかみがたとはうはおほきなる義なは女の義なり心は老女なりうばともいひをうなともいふおなじ詞也苧をひきたるは老女のかみに似たればなつそびくうなかみがたのおきつすにとよそふべしこのうなかみがた（うなかみがた）は上總國にありとかけり上總國にいまは海北海南（うなかなみ）といふ郡はふるき海上（うながみ）の郡なりと申す常陸の鹿島（壹（イ塙））が﨑にむかしうなかみと云ところありそれはあら海のほとり下總の國なり

今の歌によめるうなかみにはあらざるべし

つくはねのにゐ（ひ（イ））くはまゆのきぬはあれどきみがみけし丶あやにきほしも

蠶（こかひ）養は春夏するに春かひたる蠶（こ）の糸にてをりたるきぬのよきをいふなりそれをにゐくはまゆのきぬはあれど君がみけしのあやにきほしきとよめる也

筑波禰（つくはね）爾由伎可母布良留伊奈手（塙手イ本作乎）可母加奈思吉兒呂我＊爾奴（努（イ塙））保佐流可母

ゆきかもふらるとはふれるといふ也らとれと同内のこゑなり第三の句仲奈手可母とかける本おほしこれによりていなてかもとよめりその心おひかなはすよき本には漢字は乎（乎（イ塙））とかきて假名はなら（猶（イ塙））也漢字のよき本にまかせていならかも（な（イ塙））と云へしこの詞しかも作例ありやがてこの卷の相聞（間（イ））歌中（さうもんかのなかに）安比見氐（弖（イ塙））波千等世夜伊奴流伊奈乎加母安禮也思加毛布伎美末知我氐（弖（イ塙））爾とありこの歌第十一卷の中（間（イ））（局（塙））にもいれりゆきかもふらるいなをかもとは雪のふり

たるかふらぬかとよめる也又はさるかもとはぬのほせるかとよめるなりかくいふことはかた〳〵そのいはれあるべしひとつには布の字をばのとよめりのとよむにつきてかんかふればのにはぬのともにのともいふひゞきありふたつには今の歌にはにぬはさるかもとかきたるにつきてかんがふればまにぬいのひゞきありぬにぬのひゞきあればぬのをにぬとかきなせる事ふかきいはれありもろ〳〵の有智(うち)の著うたがひあるべからず

あらたまのきへのはやしになをたてゝゆきかつましじいをさきたゝに

この歌の發句(ほつく)にあらたまのとをけるは遠江國の郡の名也なをたてゝとは名なりいをさきたゝにとはいは發語の詞をさきたゝにとは尾崎たひらにといへるなり歌の心はきへのはやしと云名をはたてながら尾崎もたひらかに雪かつもれるとよめるなりさてこの歌はきへのはやしの名はかりをたてゝそれともみえぬがことくにわが思ふ人も名をのみたてゝかよひこぬによそへたるなり

きへひとのまたらふすまにわたさはたいりなましものいもかおとこに

きへ人のまだらふすまにわたたはくいれたるがことくにわれもいもがねたるところにいりなましものをとよめるなり

あまのはらふじのしばやまこのくれのときゆつりなばあはずかもあらん

富士とは火しげしといふことば也はひふへほともに火界(くわかい)をむすべる詞なれともふといへるは黑色をあらはす詞なればけふりにかたどるべししかればふじと云はすなはちけふりしげしと云詞なりあまのはらふじとつゞけたるもふじの山はことにたかければそらにけふりのしげくみゆるによりてあまのはらふじといふなりときゆつりなはとは時うつりなばと云也

ふじのねのいやとをながきやまちをもいもかりとへばけによはずきぬ

いもかりとへばとはいもかりといへば也けによはずきぬとはおもひにまよはずきぬといへるなり

さぬらくはたまのをばかりてふらくはふじのたかねのなるさはのごと

たまのをばかりとはたまのをはすくなき事にたとふ父なかたゆる事にたとふこふらくはふじのたかねのなるさはのごとゝはたかき事にたとへたえせぬ事にたとふる也

いつのうみにたつしらなみのありつゝもつきなんものをみたれしめゝや

うみのなかにたつ浪はかたなびきにたちつゞきてあらひ〔く（イ搞）〕うちかへす事もなければつきなんものをみたれしめゝやとよそふるなり

あしがらのをてもこのもにさすわなのかなるましつみころあれひもとく

をてもこのもとはをてもはおちなりかのもこのもといふおなじ事也さすわなのとは鳥とるわな也わなのあやつりのはづるゝ時は鳴(なり)て紐(ひも)のとくればころあれひもとくとよそふるなり

さかみねのをみねみそくしわすれくるいもがなよびてわをねしなくな

をみねみそくしとはみすこしといふなり

わかせこをやまとへやりてまつしたすあしがらやまのすぎのこのまか

したすとはしたはひまといふ詞すはすみかなりわかせこをやまとへやりてまつあひだのすみかといふ心なり

あしがらのはこねのやまにあはまきてみとはなれるをあはなくもあやし

この歌の心はあしがらのはこねの山にまきたるあははみとなれるをわかおもふ事はいかでみならぬぞとあやしむ心也人に心をかけそむるをあはまくにたとふあはん事をみならんにたとふはこねの山といひつれば筥(はこ)にはふたといひみといへばみとはなれるをとよそふるなり

私にいはくあはまきてみとはなれるを粟なくもあやしとはみに成ぬればあはあるをあはなくもあやしとなそらへよめる歟よく〳〵可思之(これをおもふべし)

かまくらのみこしのさきのいはくえのきみがくゆべきこゝろはもたじ

みこしのさきとはいまのこし〔腰越（イ）〕でえをいひけるとなん申すむかしも石のよはくてくづれけるにや

まかなしみさねにわはゆくかまくらのみなのせがはにじはみつなんか

まかなしみとはまことにかなしき也さねにわはゆくとははやくねにくればゆくといへるなりしほみ〔わ(イ塙)〕つなんかとは塩みちなんかといふ也この歌の心はみなのせ川をへだてゝつまもたりけるものゝよめるうたと聞えたり塩みつなんかとはゆふしほのささぬさきにといそぎわたれる心なり

もゝつしまあしからをぶねあるきおほみめこそかるらめこゝろはもへど

世をわたるならひあしがらをぶねあるき〔ナシ(イ塙)〕おほくして心にはおもへどもめ〔ナシ(イ塙)〕かれてそするらめとよめる也あしがらをぶねとはあしかるき小舟といふこゝろにもかよへるなりしかれはあしがらをぶねあるきおほみとよめるにえんあるべし

あしがり〔ろ(イ塙)〕のまゝのこすげのすがまくらあせかまかさんこゝせたまくら

あせかまかさんとはなにしかまかせんといふなりころせたまくらとはころせは男なり歌の心はすがまくらもなにしかまかせんせこがたまくらしてねんとよめる也あしがらをあしかりといへりらとりと同内のゆへなり

あしかり〔ら(イ塙)〕のはこねのねろのにこくさのはなつつまなれやひもとかずねん

にこくさとは苔をいふといへり花の心よくもさかざるなるべし

あしがらのみかさかしてみくもりよのあかしたはへをこちてつるかも

みかさかしこみとはみかさのおそろしくてといふなりくもりよのあかしたはへをこちてつるかもとはくもり夜はふかき時にはにずものゝあやふまれて心のしたにたゆまずおもひやるをあかしたはへをといふさてほそみち〔細道(イ)〕などのよげかたきところに馬人のいきあはん事をおそれてよばはれはこちてつるかもといふなり

むさしのにうらべかたやきまさてにものらぬきみかならにてにけり

むかし天照太神あまのいはやにこもりましくしとき思兼神(おもひかねのしん)はかりことをなしてあまのかく山の鹿をいけながらとらへて肩(かた)をぬきて香山(かくやま)のはわかの

木をねごしにしてその肩の骨をやきてうらをせし事也件のうら今の世には卜部氏のものは蓍の木に(イ搞)てかめのかふをやきてうらなふなり公家には龜の甲のみうらとて今にたえざるはこのながれなりむかしの思兼の神は今の卜部氏の遠祖なりむさし野は鹿のおほくてつねに狩をする野なりまさてとはまされてとい(イ搞)へるなり
私勘占の事は易にありこゝに沙汰するは和國の(イ搞朱頭注)事をいふ也
こひしけはそてもふらんをむさしのゝうけらがはなのいろにつなゆめ
うけらがはなとは心よくもひらけずしてはつるものなればいろにづなゆめとよそふるなり
いりまちのおほやがはらのいはゐつらひかばぬるぬるわになたえそね
いりまちとは入間なりいはゐつらとは藺なりおほ藺といふはわらゝかなる藺也これはこまやかなる藺なればいはゐといふいはとはいへと云詞也ひかばぬる〳〵わになたえそねとはする〳〵とまとはるゝ詞也藺は灯心なとにひくにまとはれたまりてきれぬものなればひかばぬる〳〵わになたえそねとよそへよめるなり
かつしかのまゝのてこながありしかはまゝのおすひになみもとゝろに
まゝのおすひにとはおそひになり山のそひにといふなり
にほとりのかつしかわせをにへすともそのかなしきをとにたてめやも
奥義抄に云にほとりとはにゐとりと云なりにゐはあたらしといふなりあたらしくとりたるわせなりにはにゐは五音の字にてかよはしてよめりゐなかには田つくるときやとひたる人々をあつめてこのはつかりのいねにてにえをして饗するなりその日は門をさしてさはりのいてこぬさきにいひのゝしるなりこのときにくる人をばうちへもいれねとも君きたらば戸にたてんやはとよめるなりかつしかとは所の名にやといへり又有抄云本說にいはくかつしかわせといふはかつ〳〵しや(イ搞)わせをとり

はじめてにえする心なりしやかといふはそれかと云詞也かれといはんとてながといひしやかといはんとてしかといふおなじ心なりといへりいま古歌のよみやうをこゝろうるにさきの釋尺（イ墒）ともは正義にあらずかつしかは下總の國葛飾の郡なりかのかつしかの郡のなかに大河ありふとゐといふ川のひがしをば葛東の郡といひ川のにしをば葛西のこほりといふなりにほとりのかつしかとつゞけたることはかつしかといふかつの詞かづくといふ心にかよへばかづくといひいてんための諷詞にはとりとをけるなりにほ鳥は水のなかにいりてかづくがゆへなりにえすともそのかなしき尺（イ墒）をとにたてめやはといへる由緣はさきの釋に相違なし

あのをとせすゆかんこまもがかつしのまゝのつぎはしやますかよはん

あのをとせずとはあしのをとせずといふなりあしをあといふ事むまのあしかくをあがくといひあしなゆむをあなゆむなどよめるがごとし

つくばねにかゞなくわしのねのみをかなきわたりなんあふとはなしに

かゞなくとはわびなく也

つくばねにそかひにみゆるあしほやまあしかるとがもさねみえなくに

そかひとはせなかあはせにみゆるなり葦穗山常陸國新治治（イ墒）郡にありあしかるとがもさねみえなくにとはあしとおもふがもはやみえすなりぬべきとよめるなり

さごろものをつくばねろのやまのさきわすらえこばこそなをかけなはめ

さごろものをつくばとつゞけたるはみどりこの衣にはをびをつけたればさころものをつくとはよそへたりわすらへこばこそなをかけなはめとはわするゝ事のあらばこそことに出てわすられしなどゝもいはめとよめるなりわすらへとはわすられ也えとれとは同韻相通なり

をつくばのねろにつくたしあひたよはさはたなりぬをまたねてんかも

をつくばとはつくば山にふたつのみねあるに西の

＊按海人下恐脱八字

かたなるを。（を(イ擣)）つくばといふといへりつくたしとは月の出てといへるなりしかれはこの歌はをつくばよりなを西なる里にすみてよめる歌となんきこゆべきにや歌の心はをつくばの嶺に月の出てあひたる夜はあまたになりぬるにまたねてんかもとよめるなり

をつくばのしげきこのまよたつとりのゆめかなをみんさねさらなくに

このまよとはこのまより也歌の心はしげきこのまよりたつ鳥のことくゆめ（はゆ(イ擣)）にやなれをみんはやくねなくにとよめる也

ひたちなるなさかのうみのたまもこそひけはたえすれあとかたえせん

ひたちのくにゝなさかのうみといふはいづくにあるぞとゝしごろあまたの人にたづぬれどもすべてしりたる人なし名をだにもきかずとなん申すさればちからをよばぬによりてこれを案ずるに常陸の鹿島の崎と下總のうなかみとのあはひより遠いりたる海ありすゑはふたながれなり風土記にはこれを流海とかけり今の人はうちのうみとなん申すそのうみ一なかれは北のかた鹿島の郡（ナシ(イ擣)）南のかた行方（ナシ(イ擣)）の郡とのなかにいれりひとながれは此のかた行方（ナシ(イ擣)）郡と下總の國のさかひをへて信太の郡茨城の郡までにいれりしかるにかのうちのうみ塩のみつるときには浪殊にさかのぼるしかれば浪のさかのぼる義によりてなさかのうみといふへき也けり浪を海＊人なといふ事前に釋するがことしかのふたながれ（尺(イ擣)）いる海に玉藻おほくおひなびけりあとかたえせんとはなどかたえせんといへるなり

しなのぢはいまのはりみちかりばねにあしふましむなくつはけわがせ

はりみちとはつくりみちなりかりばねとは木かや小（竹(イ擣)）行などのかり杭なり

しなのなるちくまのかはのさゞれしもきみしふみてはたまとひろはん

さゝれしとは小石なり石をしと云。（い(イ擣)）は發語の詞しといふはいし（石(イ擣)）也いしはちいさけれども水にうかふことはりなしかならすしつむがゆへにしといふ

なかまなにうきをるふねのこぎてなばあふことかたしけふにしあらずは

なかまなとは川のなかすのまなごなるをいふ

あかこひばまさかもかなしくさまくらたごのいりののおふもかなしも

まさかとは寢所(ねどころ)なり草まくらたごとつゞけたる事おぼつかなかるべしつねにはくさ枕旅とこそいふをたごとよそへたるはおほかたたびといふはたかくひさしき心なりつねのすみかをたちはなれてよろづにおもひのたかき心なるべししかるにたかき事をいふにはたかともたけともいふはたの字たかしと云義なる故なりこれによりてたかともたこともいはんかとこと同内相通にておなじかるべければ上野國のたこをたびによそへてよめる也たこのいりのゝおふもかなしもとはあさなとかりしきたる苧生(をふ)にねたるこゝろなり歌の心はわかこひはまさしきねどころにて○も(塙)かなしくくさまくらたこのいりのゝおふにてもかなしとよめる也たひはおほかたのおもひたかゝるへきうへに草まくらなともうるはしきまくらよりはたかく侍るにや諷詞とものなかにも常陸の多珂(たか)の郡をばこもまくらたかのこほりといへるなり

かみつけのあそのまそむらかきむたきぬれとあかぬをあとかあがせん

まそむらとは苧をかりてひといだきばかりづゝたばねをきたる也それをとりはこふにはねはきなればたやすくもえとらでふしてかきいだけばよそへよめるなりあとかとはいかにかといふことばなり

かみつけのまくはしまどにあさひさしまきらはしもなありつゝみれば

まくはしまどゝはまどより朝日のさし入てものゝいろのくはしくみゆればまくはしまとゝいへりまどはあかりのためなれば垣壁(かきかべ)のなからよりかみによりてしたるがよければかみつけのまくはしまととよそへつゝけたりあさひのかげはまばゆければまぎらはしなどよそへよめる也

にひたやまねにはつかなくわによそりはしなるこえしあやにかなしも

ねにはつかなくとは山のねにはつかずしてといふなりにひた山のはなれてはしなるかごとくわれに

よりてはしなるせながあやしくかなしきとよめるなり

いかほろのあまくもいつきかぬまつくひとゝおたは(に（イ）)ふいさねしめとら(（イ墒同）)　◎本裏書云いかほ山上有池又有沼（墒）

いかほろとは心はいかほ山なりろは詞の助あまぐもいつきとはあまぐものつゞきたなびけるなりいは發語の詞かぬまつくとはぬまなれたりといふ詞かはてとばの助ひとゝおたはふとはそ(そ（イ）)ばへたる也

歌の心はいかほのぬまにあまくものたなびきくたれるが水にうかひなれたる人のことくにてそばへたるはいさねんとかとよそへよめる也いかほの沼は請雨之使(しやううのつかひ)たつところ也といへり

いかほろのそひのはりはらねもころにおくをなかねそまさかしよりは(手を（イ墒）)(を（イ墒）)

そひのはりはらとはほとりのはりはらと云なりまさかしよりはとはねところよくはといふなり歌の心はいかほの山のはりはらなりともねところにもよくはさてありなんやまふかくいらずともとよめ(山(深イ))

る也

たこのねによせつなはへてよすれともあにくやしつ(し（イ墒）)のそのかほよきに

この歌の心は女の男をいとひてたごのねにかくれたるをとりもてこんとて手繩(つな)なんどもちてたつねゆきてあひたるにそのかほよきにめでゝな(何)にしかつ(罪（イ）)みなへんとおもひつらんといやしかりたる心にや(く（墒）)

とねかはのかはせもしらずたゞわたりなみにあふのすあへるきみかも

これは川せもしらずたゞわたりにわたる程に浪しろき瀬の河洲(かはす)にわたりつきたるがごとくに君にあへるがよろこばしき心也

いかほろのやさかのゐてにたつぬしのあらはろまでもさねをさねては(の（イ）)(（イ墒同）)

たつぬしのとはたつ虹のといふなりぬるよの數かさなりてあらはるゝによそへたり

かみつけのかほやかぬまのいはゐつらひかばぬれつ

つあをなたえそね
いはゐつらひかばぬれつゝとよめるはむさしの國
のいそまちのおほやかはらのいはゐつらの歌に釋（尺イ撝）
しつるおなし心なり
かみつけのいならのぬまのおほゐくさよそにみしよ
はいまこそまされ
よそにみじよはとはよそにみしよりはといふなり
あつまことはにいやしきものゝ今もいふことば也
かみつけのさのたのなへのむらなへにことはさため
ついまはいかにせも
むらなへとはさなへをとりてたばねをきたるなり
そのむらなへは○○○○（うつしも（イ撝）ナシ（イ撝））うふべきところをさだめを
きてとりたる也それがやうにわかこゝろにかけた
る女などのゆくべきところをさだめたるにたとへ
てよめるなり今はいかにせもとはなげく心也
朱頭註イ撝　私に勘ふたばねとは一束つゝゆへるを云也
かみつけのさのゝふなばしとりはなしおやはさくれ
とわはさかるかへ
（取　放（イ））
とりはなしとはとりはなちといふなりちとしとい（な（イ撝））
ふ事これも同韻相通なればことはりなきにあらず
しかれともこれをば男語の內にする也あめつちを
あめつしといひたちをたしといふがごときなりお
やはさくれどわはさかるかへとはかはといふなり
おやはさくれとわれははなるゝかはとよめるなり
しもつけのみかものやまのこならのすまくはしころ
はたかけかもたん
こならのすとは小楢（こならの）の木なりことに（殊に（イ））葉のみる／＼
としなひうつくしけなる也こならのすとはこなら
なすといふ也こならのやうにうつくしきといふな
りまくはしとはことにくはしといふ詞也たかけか
もたんとはてかけかもたんといへるなり

譬喩歌（たとへうた）

とはつあふみいなさほそえのみをつくしあれをたの
めてあさましものを
この歌殊勝の譬喩歌なりみをづくしとはとしをへ
てふかきこひちにたちてかはくまもなきにたとふ
戀ぢとは泥によそふかはくまもなくしてたちたれ
どもあたりちかくかよひくる人もなきにたとふ發
句にとはつあふみとよめるはあふことはるかなる

にたとふいなさはそえとはいなさとはわがいふことにしたがはずいなふるにたとふはそえははとちかけれどもかよひかたきにたとふるなり

したのうらをあさこぐふねはよしなしにこぐらめかもよなしてさるらめ

あさこぐふねはよしなしにこぐらめかもよとはあま人も夜もすがらみるめに心をかけてあくればいつしか舟をうかへてあさまきしつゝかよひくればみるめもなびきあひてみゆるにたとふ發句にしだのうらとよめるはしたと云詞はひまといふ詞なればよそへよめり歌の心はひまをたづねてみるめを心ざしてあくがれきたるになどおなじ心にひまをたづねてもきたりみゆる事なきぞとよそへうらみたる也

あしかりのあきなのやまにひて〔くイ〕（二字イ房書）ふねのしりひかしもよこゝはこがたに

あきなのやま可レ詩ニ其所一ひこぶねのとはいく舟の也しりひかしもよこゝはこがたにとはこなたにはそこばく心にいれてひけどもあとのかたは心にいれてもひかぬをおなし心ならぬにたとふおなし心にだにもあらばこゝろくるしき事なくしてゆくべきところへもとくゆきなんとたとふる也

あしかりのわをかけやまのかつのきのわをかつさねもかつさかずとも

さきの歌によめるあきなの山この歌のわをかけ山ともにたしかなるところをもしらずしておほくの人にたつね侍へりしか〔しも〕ども知ずしてとし月をつみ侍へりしに建長三年霜月のころするがの國へこえ侍りしにせきもとの宿にてやとのあるじの鬢〔髮（塙）〕（イ）のかみみなしらけていろくろ〔ナシ（塙イ）〕きすぢなきが侍りしにもしやとてあしかりのわをかけ山と云はいづこぞととひ侍りしかばいまだしり給はずやととひかへし侍へりしかばしらねばこそとへと申しかばたうじ〔當時（イ）〕はかくらのだけと申すをこそ昔はわをかけ山とは申けるとうけたまはれと申侍りし也まことにさもやとおぼゆる事にはきりたりける木のもとのいくらともなく侍るをいまも人のおほくはつりとり侍へるがこの歌の心におもひあはせられ侍へる也斧にわといふ名ありとみえたりかの山の木むかしよ

りおほく杣木にとりければわをかけ山といひける
にやかつの木のとは木のきりのこしたるもとをた
き木にせんとて今も人のはつりとるをかつともい
ひうつともいふおほかたゐなかの○○（もの（據））は木のねな
どをほり（取（イ））てたき木にするをもねうちなどいふ也わ
をかつさねもかつさかずともとはこの譬喩歌とも
はみなてひの心なればわがかつ寢るをもかの木の
きりくゐをかつくさきとるがごとくにかつ〳〵い
さめさけずともとたとへたる也

たきゞこるかまくらやまのこたるきをまつとながい
はゞこひつゝやあらん

たき木こるかまくらとつゞけたる事はこるといひ
かるといふはおなしこと也かとこと同內也木こり
草かりといふも只おなし事なり鎌といはんための
諷詞なればたき木こるとをけるなりこたるきをと
は木のえたのたりかゝる也まつとながいはゝこひ
つゝやあらんとは松を待によそへて待とながいは
ばとたとふる也

かみつけのあそやまつゞらのをひろみはひにしもの
をあせるたえせん

ひろきのにつゞらのはひひろごれるがごとくきみ
をおもふてこゝろもたゆることなく月日をかさねて
は露けきことの葉もしげく成ゆくにたとふるなり

いかほろのそひのはりはらわかきぬにつきよらしも
よたへとおもへば

はりといひはぎといふおなじ事也榛この字をはり
ともよみはぎともよむ播磨國風土記云萩原里（はぎはらのさと）土中
有レ井所三以名二萩原一（はぎはらとなづくる）者息長帶日賣命韓國還上之時
御船宿二於此村一一夜之間生二萩根一高一丈許仍名二
萩原一即闢二御井一故云二針間井一已上しかればはぎ
といひはりといふおなじ事と聞えたりきとりと同
韻のゆへなるべしひたへとはひとへといふなりか
のはりはらのころもにうつろふが如くに君が心も
わがきぬにつきよらしめよひとへにおもへばとよ
そへよめるなりすりゑ（に（イ據））なしはかさなれるきぬのひ
とへにするものなればたとへよめるなり

しらとほふをにひたやまのもるやまのうらかれせな
くとこはにもかも

しらとほふとはほむることばのそのひとつ也あた

らしきをはむることばにしらとはふにゐといふなりうらかれせなくとはうらがれすな〳〵（な丶(イ)）と云也もる山のことくにうらがれせてときはにもかなとよめる也

みちのくのあたゝらまゆみはじきをきてさらしめきなはつらはかめかも

みちのくのあたゝらとはおくふかくおもへるにたとふまゆみとはあさゆふ手にとりもちてなであいするにたとふはじきをきてとはことの葉しげきををきてたちはなれなんするにたとふつらはかめかもとはわれはかへゆきなばつるかけてもひかんやとよめるなり

已上譬喩歌也

萬葉集註釋卷第十四

第十四卷之餘下

須受我禰乃波由馬宇馬夜能都追美井乃美都乎多麻倍（め(イ)め(イ)）
奈伊毛我多太手欲

この歌第二の句古點にははゆめうめやのと點せりそのこと葉あひかなはず今和換（は(イ墻)）云○いまうまやの（める(墻)）と云へし驛使これをはいまづかひとよむゆへなり又この集の第十八卷先妻不レ待二夫君之喚使一（間(イ)）自（句(墻)）來時作歌にも左夫流兒我伊都伎之等能爾須受可氣奴（ナシ(イ)）波由麻久太禮利佐刀毛等騰呂爾とよめりこれもはいまくだれりさともとゞろにと點ずべしつゝみ井とは人馬などをもおちいらせじ不淨のものをもいれじとていはりをつくりおほへる井也いもがたゝてよとはいもが手のうつくしきにといへる也

（イ墻朱頭注）
私勘　日本記第二十六云東方驛云々又いはく

自₂近江朝₁驛使至といへりともにはいまと點ず註釋相違なし今案ずるにはいまは早馬の心也いとやと同内相通也

このかはにあさなあらふこなれもあれもよちをぞもてるいててたはりに　一〇云ましもあれも なのも（イ埼）

よちをそもてるとはよきほどをぞもてるといふ也 本（埼イ）

いてこたはりにとはいは發語の詞手こたはるほとにといへるなり てすこしはろ（イ埼）

まとほくのくもゐにみゆるいもかへにいつかいたらんあゆめあがこま

まとほくとはまことにとをきなりいもかへにとは 實に遠（イ）
いもが家也いへと云はいは發語の詞へといふがいへにてある也しかれは戸主なといふときはへといふが家の義にてあるなり

うらもなくわかゆくみちにあをやぎのはりてたてればものもひつゝも てつ（イ埼）

うらもなくとはした心もなくといふなりなに事をも思はでゆくみちにあをやきのもえいでゝたてるをあはれみてものおもひつゝとよめる也 てつ（埼イ）
きはつくのをかのくゝみらわれつめどこにものたなふせなと〔つ〕まさね

枳波都久岡常陸國眞壁郡にあり風土記にみえたり 婆（イ）
くゝみらとはくゝたちたるにら也ここにも〇たなふとはこにものたまふなり の（埼イ）

くさかけのあのとなゆかんとはりしみちあのとはゆかずてあらくさたちぬ ナシ（イ） ナシ（イ）

あのとはわれ也はりしみちとはつくりしみちといへるなり

はなちらふこのむかつをのをなのをのひじにつくさまできみかよもかも ナシ（イ埼）

むかつをのとはむかひのをのといふ也をなのをのとは尾のうへに又かさなりて二重にみゆる尾也ひしにつくまてとは海中の洲をひしといふ第十三卷に釋するかことし 何（埼） 尺（イ） 間（イ）

はをくさかりめり
をくさをとをくさすけをとしはふねのならへてみれ

●按イ本別書かい二字誤入于本文中

この歌の心はもしはみなと川もしは入江なとにあまたの舟のあるをみれば草かりにゆくしつのおが(を(イ))のれるふねもありあるひは菅かりにゆくおのこ(な(イ))の のれる舟もあり或は壇舟もあるをみれは壇舟にのれるものはもとむるものなければをる(お(イ))ゝ事かたしすげかりにゆくおのこ(な(イ))はすげのなきところにはを(お(イ))りず草かりに出たるおのこ(な(イ))はいつくにも草はおほかるものなれば舟よりを(お(イ))りて小草かるを讀る也

かせのとのとをきわきもがきせしきぬたもとのくだりまよひきにけり

かせのとのとは風の音をいふなりをとゝ云はをは動作の義とは鳴義也門戸をとゝいふも人のたゝけばなる故也をとを只とゝいへる事この集の歌の中にも少々みえたり

丹後國風土記の中に與子更不レ勝レ戀望歌曰古良彌古非阿佐刀遠比良企和我遠禮波等許與能波麻能奈美能等企許由とよめりまよひきにけりとはき条(一)ぬ布なとのぬきのかたよりにみだれよりたるをよめる也風のをとをとをくきてえしわきもこがきせしきぬのたもとのしたさまもみだれよりにけりとよめるなり

うちひさすみやのわかせはやまとめのひざまくことにあをわすらすな

うちひさすみやのわかせとは禁中につかうまつるわがせはといふ也ひさまくことにとはひさめくことにわれをわするなとよめる也

なせのこやとりのをかちしなかたをれあをねしなくよいくつくまてに

なせのこやとは男なりとりのをかちしなかたをれとはなかたをれといふにうらうへはさかりありと聞えたり山さかはくるしきものなればあをねしなくよいくつくまてにとよそへよめる也いくつくとはいきづくなり

私勘うらうへ南(兩(イ塙))方といふ詞也
(イ塙朱書頭註)

たれそこのやとのおそふるにふなみにわけか(イ)(塙二字削書)○○せを乙(イ塙)●かい(イ)やりていはふこのとを

にふなみにとはにふ〳〵にと云也わけせとは男也おとこをばわけともいひせともいふをひきあはせてわけせとよめる也いはふこのとをとはものいまひする心也この歌の心はわかせこが用事ありてあるかんといへはにぶ〳〵にいとまを〔さら(イ本)〕せてはかへやりたれはつゝしみてゐたるにたれぞや〔ナシ(イ本)〕このやの戸を〔ナシ(イ本)〕をそふるはとよめるなり

あせといへかさねにあはなくにまひくれてよひなはこなにあけぬしたくる

あせといへかとはなにといへば也さねにあはなくにまひくれてとはとくぬることにもあはなくに眞(ま)日(び)くれてといふなりよひなはこなにとはよひにはこぬにと云也あけぬしたくるとはしたはひまなり心はよひにはこであけぬほどにきたるといへり

ひとことのしげきによりてまをこものおやしまくらはわはまかしやも

おやしまくらとはおなしまくら也おなしといふことばをは古語にはおやしとよめり日本記のよみなりやとなと同韻の故なるべし

やまとりのをゐのはつお〔を(イ)〕にかゝみかけとなふへみこそなによそりけめ

この歌を奥義抄(あうぎせう)には山鳥のをゐのなかおにかゝみかけとなふへみこそなによそりけめとかきてこれを釋〔尺(イ本)〕するに此歌こゝろえかたしなきよそりけめとこそ〔ナシ(イ本)〕あらんと思ふに集にもなによそりけめとあるおぼつかなし又ある物にはむかし隣國より山鳥ををくりて鳴こゑたえたるよしを申けれとすべて鳴ざりけるを或女御(にようご)友をはなれてなかぬならん鏡をかけてみせ給へと申給ひければ籠に鏡をかけたりけるに影をみてなきけるとあり心ゆきてもおもはえず籠にかけたらん鏡をおろのながおにかゝみかけといはん事もおはつかなしある說には山鳥は夜るになれば女鳥(めとり)と尾をへだてゝ別々にぬるにおかつきに成ておとりのおをもたげてみるに女鳥のある所の鏡にてみゆる也この故に山鳥のかゝみとは云也と申すこれはさもと聞ゆ問云山鳥おをへたててぬといふ事は山の尾をへだつにはあらずひとゝころにねたれどおとりの尾をりかへしてなかに

◎按これ下恐のみ二字

へだてゝぬる也ゐなかなんどにてをのづからみるにおほくならびねたると申す人あるはいかにこたへていはくしかあらんはしらずふるくはなを山の尾をへたてゝぬとぞいひならはせる古歌にいはくひるはきて夜るはわかるゝ山鳥のかげみるときぞねはなかれけるとありこれ◎ならずその例おほく侍へりこの歌はわがおに鏡ある心にかなへりといへり今釋して云おろとはおとり也はつおとはなが尾といふ詞なりははなつかしといふことばつは語の助也長谷をはつせといふがごとししかればはつおとかきてながをとてゝろうべしさればとてながおとはかきあらたむべからずなによそりけめとは雄によりけめといふ心也なの詞は男女ともにかよへりその心は縄の義也男を心ざしていへるなは上聲女を心ざしていへるなは平聲なるべしさのやまにうつやをのとのとはかともねもとかてろかおゆにみえつるをのとゝは斧のをと也とはかともとはとほくとも也おゆにみえつるとはゆはより也山のおよりみえつるといへる也うへこなはわぬにこふなもたとつくのぬかなへゆけばこふしかるなもうへこなはとはうへはまことにといふ也こなはは男也わのにこふなもとはわれにてふらんといふなりたとつくのぬかなへゆけばとはつきたちてやうやくみゆる三日月のやゝ夜數かさなりゆけば月のしろくみちゆきてなかはまでになりぬればてひしかるらんとよめるなりのかとは中也とはしとふこなのしらねにあほしたもあはのへしたもなにてそよされとはしとふとはとぼしといふにとりてはむる詞をかねたりてなのしらねとはてじのなかのしらねといふなり文字をてと〳〵くいはねとも略していふもつねのならひ也おのなかのおをおなのをとよめるがことなりてなのしらねとは越中のたて山なるべしあほしたもあはのへしたもなにてそよされとはあほしたはあはぬひまもなれにてそよれとよめる也かのてしのなかのしらねのとこなつに雪ふ

（行間注記）実中（イ）　尺（摘）　ナシ（イ）　ナシ（摘）　お（イ）　おとり　の（イ摘）　の（イ摘）　ナシ（イ摘）

りつめるをみる時にもめつる心つきせず雲かくれてみえぬときにも忍ふ心のしげきがごとく心はたえず君にこそよれとよめる也大都山屬二愛レ山人一といへるかてときなり

からころもすそのうちかへあはねともけしきてゝろをあがもはなくに

けしきてゝろをとはをてたる心をいふ也

あさをらをそけにふすさにうまずともあすきせさめやいさゝをとてに

いさゝをとてとは男をばいさゝけきつはものなどいひてかろく利がよき也

あづさゆみすゑにたましきかくすすそねなくなりにしおくをかぬかぬ

すゑにたまゝきかくすすそとはいたく結構のゆみには金玉をはずにつくるをいふさていたくおもくするほとにあたにうちをく事もなきをねなくなりにしとよそふる也

おふしもとこのもと山のましばにものらぬいもがなかたにいでんかも

おふしもととは笞罪なり忍ひ妻のことおしも○[こ(塡)]などをおはせてとへどもまことにもいはぬいもが名もうらかたにやいてんとよめるなり

おそはやもなをこそまためむかつをのしゐのこやてのあひはたがはし

おそはやもとはをそくもはやくもといふ也なをこそとは男也なといふは男女にわたれとも或本歌に曰とて伎美乎思麻多武と注せり君といふ詞も男女にわたれとも男をきみといふへしとみえたり此集第十三巻[匂(イ)]の注に兩所みえたる也可勘合之しゐのこやてのあひ[間(イ)]はたがはしとはこえだ也やとえと同内ちとたと同内なればかよはしてえだをやて[て(旁書イ)]とよめる也或本歌曰思比乃佐要太能といへる尤符合せるをやあひはたがはじとはよろづの草木の小枝さす事は長短高下ひとしき事なけれとも椎の杪はいさゝかの高下なく齊しく生する也

こもちやまわかかへるてのもみつまてねもとわはもふなはあとかもふ

わかかへるてとはわかき鷄冠木なりねもとわはもふなはあとかもふとはねんと我はおもふなれはい

かゝおもふといふなり

いはほろのそひのわかまつかきりとや〔か(イ)〕きみかきまさぬ〔に(イ)〕うらもとなくも

うらもとなくもとはうらはした也もとなくとは心もとなくといふ也意文字をこゝろとももとゝもよめばもとなしといふはすなはちこゝろもとなしと云也歌の心は岩のきはにおひたらん松はなをおひそふべきにもあらずつちなどにてだにもあらばおひそふべきにいははなればおひそはぬがごとくいまはかぎりとなり君がきまさぬとよそへよめる也

たちばなのこばのはなりがおもふなん〔ら(イ)〕こゝろうつくしいてあれはいかな

歌の心はたち花の木の葉はちりがたき〔けシ(イ)〕がごとくはなれがたくやおもふらん心うつくしくあればいかんとよめるなり

かはかみのねしろたかゝやあやに／＼さね／＼てそことにてにしか

川かみにおひたるたかかやは水に洗はれてねのしろければねしろたかゝやとよめりさね／＼てこそことにてにしかとは根はなかば水にあらはれてよはけれはなびきふしたる也水のうるほひによりておひしげりたるが秋風吹くればそよぎわたるなりそれをいもせのなからひもさね／＼てはむつことしけきによそふる也

をかによせわがかるかやのさねかやのまことなこやはねろとへなかも

この歌の心はかやをかりつみたる〔か(塙)〕をさねかやといふそのかりつみたるかやの○くれは風もよどみてなこしければねぬべきによそふる也

むらさきはねをかもをふるひとのこのうらかなしけをねをゝへなくに

むらさきのねはいろのうつくしきにめでゝ人のたづねとれば久しくある事かたきがごとく人のこのかなしけなるもやすく人にとらるゝにたとふるなり

あはをろのをろたにおはるたはみつらひかばぬる／＼あをことなたえ

あはをろとは地のみちつゞけるところをあはをなどいふをろとはつちのかたまらずしてをろ／＼と

＊正辭按したな下忘脫こ字
◎正辭按に拾穗抄ゞ引けるには人は制すれごも朝にれきたる顔はせの云ゝさあり

したるを云おはるとはおふる也たはみつ◦をとは〔ら(摛)〕
三積草(みくりくさ)をいふひかばぬる〳〵あをことなたえとは
〔璞(イ摛)〕ひかばまとはれきて我にことなたえそといへるな
り
わかまづまひとはさくれどあさがほのとしさへてゝ
とわはさかるかへ
わか〔めせい(摛)〕まつまとはしため〔如本(イ摛同)＊〕したをこなと也歌の心は人
◎はめかくれすれともあしたにねきたるかほばせの
あくことなきにそこばくのとしもへぬべくおぼえ
てわれははなれがたしとよめるなり
はるべさくふちのうらばのうらやすにさぬるよぞな
きころをしもへば
歌の心は春邊さく藤のうら葉はなびきかゝりてし
たやすらにねたれどもわれは子をおもへば藤のう
ら葉のことくやすくする夜ぞなきとよめる也
にひむろのことさにいたればはたすゝきほにてしき
みが見えぬてのころ
にひむろとはめづらしきによそふおばなをとりあ
つめて家をふくこともあるに家はふきつれはその
はたすゝきもみえぬによそへてめづらしとおもひ
てゐたれば君がみえぬにたとへたる也
たくふすましら山風のねなへともころかをそきのあ
ろこそえしも
たくふすまとはたえなるふすま也白さをわきてた
へとはいひならはしたればしらといはんための諷〔二(イ摛)〕
詞にたくふすまとをけりころかをそきのとはうら
かうす衣(きぬ)といふなりあろこそえしもとはあるこそ
よしもといへる也心はしら山風ふきてねられねと
もころかうす衣(きぬ)のあるこそよけれとよめる也
ゆふされはみやまをさらぬにのくものあせかたえん
といひしころはも
にぬくもとはぬのをひきたるやうにしろくたちた
る雲なるべしぬのをにぬと云事この卷のはじめに
つくばねに雪かもふらると云ところに釋〔尺(摛イ)〕するがご
とし深き山のみねつゞきなどにつねに立てみゆる
雲也
たかきねにくものつくのずわれさへにきみにつきな
くたかねともひて

のずとは虹也

からすとふおほをそとりのまさてにもきまさぬきみをころ丶とぞなく

おほをそとりとはからす也まさてにもとはまさしくもといふ也ころ丶とぞなくとはからすはかう〳〵となき又ころ〳〵ともなくによそへてよめるなりをよそから（う（イ塙））といふはくろしといふ詞也しかればこの詞を云にからきりくるけしてころともいふはみなおなしことばなりこれは轉聲の心なり

きそころそはころとさねしかくものうへゆなきゆくたづのまどほくおもほゆ

きそとはきのふをいふなり

さかこえてあべのたのもにゐるたづのともしききみはあすさへもかも

あべのたのもとは駿河の國府の邊なり東路のてこのよびさかといふ歌の侍べるをあるいは上野のうすひざかを云といふ説ありあるいはうつの山の坂なりともいへりしかるを今の歌の心にてはさかこえてあべのたのもにゐるたづのとよめるはうつの山の坂にあたれるをや

まをこものふのみちかくてあはなへはおきつまかものなげきぞあがする

まをこものふのみちかく（近（イ））てとはしきもの丶たくひのこもはあみふのちかくてあはねばまをこもといふにつきてよそへよめるにやともきこゆしかれともこれは草のもとのふし（節（イ））をふとよめるにやとみゆあみふのふも草のふしのふもふといふこと（ことば、（塙））へだつといふ心はおなしき也諷詞をおく事は歌のもとすゑことく〳〵かきあはぬ事をもよそふる事おほければ難とすべきにあらされども鋪設（ふせつ）のこものあみふの義にては鳥をよめる歌のことばのえんにあらず只草のふしの義にてはならびふしたるよそへのたよりあるべしおきつまかものなげきあがするとは水鳥はいつれも水底（みなそこ）にいりてかづくものなれば水より出てはいきをながくつくべきものなればなげきぞあがするとよそふるなり

みく丶のにかものはほのすころがうへにことをろはへていまだねなふも

はのすとははのめかす也鴨は水をくゞればみくゝ
野をよそへよめり一鳥はさき立てをりゐたるに又
一鳥は空にかけりて啼ながらをりゐぬほとなれば
いまだねなふもとよそふる也
ぬまふたつかよはとりかせあがてゝろふたゆくなり
となよもはりそね
ふたゆくなりとゝはふたみちゆくなといふ心也な
もといも(けシ(イ壻))は詞の助也なよもはりそねとはなおもへ
りそねと云なり
おきにすもをかものもてろやさかとりいきつくしい(もの(壻イ))
もをおきてきぬかも
おきにすもとはおきにすむ也もころとはことくと
いふなりやさかとりいきつくいもをとは高き坂を
とびこゆる鳥はくるしければいもがいきづくによ
そへたる也
久敝胡之爾武藝波武古宇馬能波都波都爾安比見之兒
良之安夜爾可奈思母
この歌[illegible]何ある本歌には宇麻勢胡之といへりこれ
は本[illegible]なりむかし孔子の夏ものへおはしけるに弟
子ども七十人ありそれにとをり給ひけるみちに馬
のかしらをさしいだして門(戸(イ))(ミ(イ壻))のかたなりける草をく
はんとて頭のはづ／＼にさし出て口のをよばざり
けるを孔子の見たまひてのたまひけるはあれみよ
うしの草くはんとするよとのたまひければ弟子ど
ものいひけるやうてはいかに馬をばたしかに見給
ひながらかゝるひが事をはのたまふにかと思ひて
馬なりとあらがひけるを孔子は聞給ひてひかごと
は我はせずなんぢたちのえしらぬ也とのたまひけ
ればあやしみおもひて第一の弟子に顔回といふも
のこゝろえんとて心のうちに思ひて案するほどに
孔子のたまふ事ことはり也けりひよみのむまとい
ふ文字は午なりそれにこの文字にかしらをさし出
しつれば牛とよめばそれをのたまふなりけりとこ
ころえてと申ければ孔子よび給ひていくらはかり
にか成ぬるとのたまひければ六町がうちにこゝろ
えたりといひければしばしなあかしそとの給ひて
すく／＼と過給ひけるに又第二の弟子閔子騫とい
ふものゝいはく我もこゝろえたりと申けり聞ての

たまはくいくらはかりにか心えたると思ひ給ひければ十二町にて心得たると申ければ顔回にをとりたる事六町也けりとのたまひて猶それもあかさで過給ひけるほどに又第三の弟子冉伯牛といふものいはくわれも心えたりと申ければ孔子いくらばかりにてこゝろえたるととひ給ひければ十八町にてなん心えたると申ければ閔子騫にをとりたる事又それも六町也とのたまひてしばしなあかしそとの給ひけりそのほどまたなをおはしければ第四の弟子仲弓といふものまうさく我も心えたりと申ければ孔子のたまはくいくらばかりにて心えたるととひ給ひければ仲弓がいはく廿四町にて心えたりと申ければ冉伯牛にをとりたる事是も六町にこそあむなれとてあかさで過けるに六町又過て十餘町に成けるに孔子のたまふやうこのなかにいまはこの事心えたるものは四人よりほかにあるまじきかとのたまひければこと弟子ともあるましき事也いかにしてか心えんと申ければ孔子いまはわか弟子は四人よりほかにあるまじかりけりとてみちにとゝまりて弟子四人を四方にすへていかにか心えたるをの〳〵かけとのたまひければ四人のものどもひよみの午といふ字をまづかきて後にかしらをさし出して牛の字になしけりとぞさてゐ紀といふ博士はこれを題にて讀ける歌には垣こしにむまはうしとはいはねども人の心のほとをしるかなとよめりけり

ひろはしをむまでしかねてこゝろのみいもかりやりてわにてゝにして

ひろはしとはもしはみぞもしはほりなどのひろさ一尋ばかりあるにはそき橋を渡してかち人ばかりはあやふ○ながらわたりかよふところを馬は橋をもわたるべきやうもなく堀溝をもてしかねたる心なり

あすのうへにてまをつなぎてあやほかとひとまつころをいきにわかする

あすのうへとはあしのうへといへる也

むろかやのつるのつゝみのなりぬかにてろはいへどもいまだねなくに

むろかやとはかやをたかくかりしきたる心なりつ

るのつゝみとはわたればあしのつる〳〵といるつ
つみといへるなり歌の心はつゝみのみちのあしく
てとをりゆく人馬のあじのいる堤にかやをたかく
かりしきたればかよふともくるしかるまじとおと
めはいへともとあやうかりしをはゞかりていま
たゆきてもねぬにたとへたる也
あをやきのはらろかはとになをまつとせみとはくま
すたちとならすも
はらろとは青柳のもえ出て木のめのはれる也なを
まつとは男をまつ也せみとはくますとは水はくま
すといふなり
なるせろにきつのよすなすいとのきてかなしけせろ
にひとさへよすも
なるせろとはなるはなやむ也せろは男なりきつの
よすなすとはきつねの夜啼するなりいとのきてと
はいと〻しく也ひとさへよすもとは人さへ夜なき
すといへるなり歌の心は男のなやむにきつねのな
けばいかゞとあやしみなげくにいとゞしくかなし
きにまた人さへ夜鳴するとよめる也
まつがうらにさわゑうらたちまひとことおもほすな
もろわかもほのすも
まつかうらにとはまつは人を待なりうらとはした
也さはゑとはさは速(はや)き義也はゑは詞のたすけうら
たちとはしたに思ふ事有てたてる也まひとこと〻
はよき人の事也もろとは女なりわがもほのすもと
はわがおもひほのめかすもといふなり歌の心はい
もが人待けしきにて立たればわれを待かと思へば
なをなかめしてたちたるをよき人の事をしたに思
ひて立たるかわかおもひをほのめかしてあるにと
よめるなり
あちかまのかけのみなとにいるしほのこてたすくも
かいりてねまくも
あちかまのかけのみなと可レ勘ニ在所一(さいしよをかんかふべし)心はみなと
にいる鹽のよどめるによりて心うるにこてたすく
もとはみなとに木草のえだなどにもかゝりなびき
たるすくもの鹽のみちくるにしたがひて水のした
に入初めたるによそへていもが寢る床にいりてね
ばやとおもふにたとふる也
こ〇のわたり　かへ(イ摘)　下總國

しほふねのを（お（イ））かれはかなしさねつれはひとことしけ
しなをとかも（も（イ塙））しむ

しほふねのとはからき（辛（イ））おもひにたとふを（お（イ））かればか
なしとはをくればかなしきなりさねつれば人こと
しげしとはねたれば又人のとかくいふにたとふな
をとかもしむ（も（イ））とはなにとかもせんといへる也

あはずしてゆかばをしけんまくらかのこがこぐふね
にきみもあはぬかも

まくらかのこがこくふねにとつゞけたる事はこが
はところの名なりことといふはふすと云詞なればこ
といはんための諷詞にまくらかのとをける也又ま
くらかといふかの字もこかといふかの字もともに
かといふはところといふ詞なり

まかねふくにふのまそほのいろにてゝいはなゝのみ
ぞあがてふらくは

まかねふくとはくろがねふく也にふはところの名
越前にありまそほとはまことにのぼるはのはなり

かなとでをあらがきまゆみひかとればあめをまとの
ずきみをとまとも

かなとでをとはなでりおしくてたち出かたき戸也
ひかとればとはひきとれば也まとのすとはのずは
虹（にじ）也虹たちてはかならず雨のふればあめをまつに
じといへる也歌の心は出がたき戸をまゆみのこと
くひきとりていぬればにじの立て雨をまつがこと
く君をまつとよそへよめる也

ありそやにおふるたまものうちなびきひとりやぬら
んあをまちかねて

ありそやにとはいそあるくき也入たる所をばくき
ともいひか（や（イ塙））きともいふなり

わきもこにあかてひしなはそわへかもかみにおほせ
んこゝろしらずて

そは（わ（塙イ））へとはそはそむく義也は（わ（イ塙））へはことばの助なり
歌の心はわきもこにわがてひしなばその心をばし
らでわれをおしむおやをはじめてやからはらから
などもたすけたまへと神にいのり請（こひ）しかどもしる
しもなければ神もなにゝせんとかいはんとよめる
也

あしのはにゆふぎりたちてかもがねのさむきゆふべ

〇墦本布以下七字在此而小書

しなをばしのばん
この歌のことばづかひ心ばせやさしき歌也此歌になをばしのばんといへるなは女を心ざしてよめる也

譬喩歌

あともへかあしくまやまのゆつるはのふゝまるときにかせふかずかも
〇布敷まるときにあともへかといふ詞は今はとおもふと云心につかへるところもあり又かなしと思ふといふこゝろとみえたるうたもある也いまの歌もかなしとおもへかといふにあたれり假名の文字はおなしくしてしたの心はかはれる事傍例ひとつにあらずたまきはるといふもあるひは奇麗きはまりたるをいへる歌もありあるひはいのちの限りをいへる歌も有よしといふ詞もはむることばにもいひいなふ詞にもいふかゝるためしおほかるべしさていまの歌の心はゆづるはのふゞまるときに風ふかずかもとたとふる心は草木の葉のかせになびきしたがふ事はさかりなるときのみかなびくゆづり葉のいまだひらけもせずみるゝゝとあるも風ふけばなびくがごとくいまださかりにならずともわれになびけかしとたとふる也いまだいとけなきものにおもひをかけてよめる歌とみえたりさては彂石にもかなしとおもへかといふ心もある也

あしひきの山かづらかけましはにもえかたきかげをおきやからさん
やまかづらとは神樂するには眞蘿にてかしらをゆふなりそれを山かづらといふ歌の心はあしひきとはたかくふかく思ふにたとふ山かづらかけとはくり返しみんとおもへるにたとふ又神もあはれみたまへと思ふにたとふましはにもとはまことにもといふ詞なりえがたきかげをきやからさんとはかく契りはむすびつれともつゐにはかれやせんとかねて歎くにたとふる也

挽歌

かなしいもをいづちゆかめとやますけのそかひにねしくいましくやしも
いつちゆかめとやますげのそかひにねしくとはさ

きにも釋（尺（イ摘））するがごとく山すげはねのながくしても
との草村よりはるかにとをくのきてころ〳〵にお
ひしげる草なればせなか（ナシ（摘））あはせにとをざかりゆく
心にて今のうたの挽歌なればそかひにねしくいま
しくやしもとよそへよめる也

萬葉集註釋卷第十五

第十五卷　十六（イ）

はなれそにたてるむろのきうたかたにい（も（摘イ））さしきとき
をすぎにけるかも

有抄（あるせう）に云うたかたはわすれずといふ事也といへり
しかれとも今の歌には心あひかなひてもみえずこ
れはかりそめといへる心にやあらんはなれそとは
はなれたるいそなればそれにおひたるむろの木の
かりそめなるやうにみえながら久しき時を過にけ
るとよめるなるべし水つぼをうたかたといへるも
かりなる心也又かりねをうたゝねといふもてのた
ぐひにやあらんとおほえ侍る也

私注（わたくしにちうす）　水のあはを東國には水つぼといへる歟

あをやぎのえだきりおろしゆたねまきゆゆしききみ
にてひわたるかも

柳はとくもえいづるものなれば春とくするなはし
ろなどにきりしきてたねをまきたる心にやゆゝし
ききみにといはんための諷詞にゆたねまきとはを
ける也

しろたへのふぢえのうらにいさりするあまとやみらんたびゆくわれを

しろたへとはものをほむる言葉のそのひとつなればば藤をほめんとていへるにやしろといふもたへといふもともにほむる詞なり又藤もむらさきにはさきながらしろみのおほくみゆればしろたへといへるにやあらん

てひしけみなくさめかねて日くらしのなくしまかげにいほりするかも

いほりするかもとはいを寢たがりてふすをいふなりいは寢の義ほりはほしがる也

まりふのうら　周防國

ゐ（い イ）はひしま　同

わきもこははやもこぬかとまつらんをおきにやすまんいゑ（へ 擣イ）つかずして

いゑ（へ 擣イ）つかずしてとはいは發語の詞へつかずしてとは舟のきしにつくには舳をつくる也さて舟のつくをばへつかふと云なりこの歌はわきもこははやもこぬかとまつらんにおきにやすまんとよめる也おきにあればへつかずしてとはよめる也

わがたびはひさしくあらしこのあがけるいもがころものあかつくみれば

あがけるとはわがきる也　筑前國

のこのうら　壹岐國

いはたの

たかしきのうら　對馬國

きみがゆくみちのながちをくりたゝねやきほろぼさんあめのひもかも

くりたゝねとはくりあつむる也たゝねはぬる也あ（ナシ イ擣）めのひとは天火なり　つかぬるさ云詞也擣八字朋書

ちりひぢのかずにもあらぬわれゆへ（わ イ擣）におもひはふらんいもかかなしさ

ちりひちとは草木のくだけたるをばちりといふつ（研 擣）ち（土 イ擣）の人馬なとにふまれたるが風にふかれてたつをばひぢといふなり

あちまの　越前國

あまこもりものもふときにほとゝぎすわがすむさと

にきなきとよます
あまこもりとは雨にふりこめられてゐたるをいふなり

本云文（ナシ（イ搞））永六年三月廿九日記之　仙覺在判
建治元年十一月廿七日以作者仙覺律師自筆
本數人書寫了
同廿八日一校畢　玄覺在判

第十六卷

無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來作潜者水波將涸

みゝなしの池　大和國

足曳之玉縵（縵（イ））之兒如今日何隈乎見管（菅（搞））來爾監

この歌第二の句やまかづらのこと點ずこれは次上の歌は足曳之山縵之兒と書り依之いまの歌もやまかづらと點ず山といふもたかく圓かなる義なり玉と云も又高く圓かなる義也玉のたかきといふは價直のたかきを云なりもとより此集の義讀の詞相更（交（イ搞））れる集なれば玉の字を山とよむ事かたしとすへからず又この三首の歌の端作の詞にいはく其壯士等不レ勝二哀頽之至一各陳レ所レ心作歌三首（娘子字曰二縵（イ）鬼（イ搞）兒一也）といへりしかればかのをとめの名はかづらのことといひける聞えたりされば山かづらのこともいひなせ玉かづらのこともいひなすともかづらのことといふ文字だにもかはらずはかみによそへつゞくるに文（何（イ搞））字はいつれにてもくるしからぬ方も侍べるべしい

*正辭按後惡帝字說板本古葉集叢文亦載此事

何（イ摘）かに況や山玉ともに字義おなじければ文字の正訓たか（イ摘）をばくはへずして和しなさん事又あたはずと云べきにあらず二條院御本の流にはたまかづらのてと點せられたり後御本淸輔朝臣奉レ勅點と云〻但頭何の足曳といふに付て山とつゞくべき理ありしかる*を又高大有レ石曰レ山こゝなれば玉はすなはち石のたぐひなり玉縵之兒と和せん事ふかき理にたがふべからずこの兩點愚老は不レ及二裁斷一於二其採判（摘イ）用一者任二後哲之意一

竹取翁作歌詞中

たまたすきにふ〇かこ（イ摘）みには

搓襁平生蚊見庭

たまたすきは負レ兒衣也ちごのなきをすくひあげ知本手（イ摘）たれば玉だすきといふ又たすきをほむる詞也玉篇云襁居兩切〻負レ兒衣也織レ縷爲レ之結經方衣冰津裡丹裏（イ）廣八寸長二尺以負二兒於背上一也縫服頸着之童子蚊見庭結幡之袂着衣服我矣とはか𢮦（イ摘）みも頭つきに生たるうなゐこが衣には袖をつけて着する也丹因子等何四千庭三名之綿蚊とはわれも

かくおさなかりしをによれる子とものよきとてとち（摘）見なしてなみゐたるかといふなり古部之賢人藻後之世之堅監狗爲迹老人矣送爲車持還來とは周の文王の太公望をみつけて車にのせてをくりける事をいへるなり

墨江之小集樂爾出而寤爾毛己妻尙乎鏡登見津藻おのかめ（摘イ）

有抄云をへら（摘）とはゐなかもの〻出あつまりてあそぶを云なりそれに住吉には年ことに〇〇〇濱にて（イ摘）をへらゐとてあそふとあり昔あやしかりける男のあまた出てあそびける人の中にいみじくかたちありさますぐれてめでたかりける女もたりけりおとこのをのれが妻のかたちをほめてよみける歌也この義にては此歌の第二句をへらにいでゝといへる也しみゆふづくひさすや河邊にあへる屋のかたちつくる（摘）しかそよりくる

しかぞよりくるとはさぞよりくるといふなり

刺名倍爾湯和可世子等檪津乃檜橋從來許武狐傳𦊆牟佐判（摘）刺（イ）武

さすなへとは鐺子也きつとはきつね也

虎爾乘古屋乎越而青淵爾鮫龍取將來劍刀毛我

この歌さる本緣ある事歟ひろくたづね問べしもしさせる本緣なくは只命をすてゝ青淵にいりて鮫とりて來つへきつるき太刀もかなとよめるにやとらとは無常をば虎にたとふ人のかたちをば家にたとふるによりて也この事をある人にかたり申しかばそれは聖教にみえたる事なれば我朝のふるき歌にはあるべからずと申されしかどもこの萬葉集にも佛教にしるせる詞ともみえたり第五卷に山上憶良日本挽歌の序には四生起滅方レ夢皆空三界漂流喩レ環不レ息なども書たり又從來厭レ離此穢土一本願託二生彼淨刹一なともいへり假合の身などいふこともあれば聖教の理り歌によまん事難あるべからずと心得へきにや

頭書（イ墻朱書）

私勘周處三奇の心なり○鮫龍をとりてのちは我心はやすしと也

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之

この歌は新田部親王かつまたの池を御覽してかへらせ給ひて憐愛に忍ひずたをやめにかたりてのたまひけるは今日遊行して勝間田の池をみるに水の影濤々として蓮花灼々たり可レ憐斷レ腸不レ可レ得言とのたまひにけるにたをやめのよめる歌也心は新田部親王はきはめたる大鬚にておはしましけるなりさて此歌はかつまたの池はわれしる蓮なししかいふ君がひげなきがごと○はうちゝかへてよめるなり

なら山のこのてがしはのふたおもて○とにもかくにもねぢけびとかも

このてがしはとはひらけもはてぬかしは也卯月に伊勢にくだりけるかりのつかひのかのこいれて太神にまいらせけるにも用けるとみえたりこのてかしはといふはひらけもはてねばまさしくにぎりたるにもあらずひらけたるにもあらねばとにもかくにもねぢけたるにたとふるなり

無心所著歌二首

吾妹兒之額爾生流双六乃事負乃牛之倉上之瘡

吾兄子之犢鼻爾爲流都夫禮石之吉野乃山爾氷魚曾懸有

この歌は舍人親王の家にいみじう歌よみけるものをいとおしうしてをかれ。。けるよるかたもなきものには物をとらせなどしてをきすへられたりけるに大舍人安倍朝臣祖父といふものこのうたをよみたりければあはれみて錢二千文をたびける歌也この歌はたゞいはるゝにしたがひてよめるやうなれどもおもへるところふかゝるべしその故はあるまじき事をのみしてあるべき事をせねばいたるべき所なくしてよしなきところにある心也人のたいには双六は生なんやされればそれはあるまじき事也ことひの牛のくらの上に瘡はいつべしとなりいたづらにうしの身にはいでずして倉の上にかさの出たらんがことしとたとふる也又つぶれいしはつぶらなる石なりそれをば人はたふさきにしてんやされぱあるまじき事にてよしなく氷魚をとらんには宇治川へこそゆくべきに大和の吉野の山に氷魚のさかりてあらんやうにとたとふるなり

小兒等草者勿苅八穗蓼乎穗積乃阿曾我腋草乎可禮

やはたでとは蓼の穗は八すぢたつがある也本文なりといへり但かならず八筋たゝずとも穗のあまたたつ義にてやはといはるべき也物のかずの中には八を以て員の一の極りとする心也たとへば八重櫻とも八重山吹ともいへるはかならずしも八重かさならねどもかさなりてさきぬればやえといふがごとし穗積とは人の姓なり其人の腋に香の有けるをよめる也これらは皆たはふれごとなるべし

心をしぶがうのさとにをきたらばはこやの山を見まくちらけん

ぶがうの里は仙人のすむところなりはこやの山又おなじ

頭書(墻朱書)私勘無何有といふ事莊子に見えたり

ふちのきにはひおほとれるくそかつらたゆることなくみやづかへせん

ふちのほとは西海子なりはひおほとれるとははひおほはれと云なり

婆羅門乃作有小田乎喫烏瞼腫而幡幢爾居

ばらもんとは智惠ふかきものなりさればそれが咒しをきたる田をはむからすのいちしろくまなぶたはれてはたはてに居てなく/\と也

やらのさき　筑前國　コカタノウミ　同（イ塙）

吾門之榎實毛利喫百千鳥千鳥雖來君曾不來座

吾門爾千鳥數鳴起余起余我一夜妻人爾不知名け（イ塙）

も丶ちどりとは人のなへていふは鷸なりと鷸はもさえづりの鳥といへばそれを云ともありされどもこの歌によりていへば僻事なり只百千の鳥といふこ丶ろなり榎の實は秋ある物なり又云それも心得られず只千鳥といふ鳥のあるなりそれをよめるなるべしそれに千々といふこ丶ろのあればも丶といふ詞をそへてよめる也といふ數鳴とはしきりになく/\といふこ丶ろ也千鳥は夜も明かたに成たると云心にてしば/\なく/\といふをしばなく/\といふそな（塙イ）れにこの歌は人の妻を忍びて有けるに夜はあけ。んとす人にみえずしられずしておきなんといふなり

能登國歌三首

堦楯熊來乃夜良爾新羅斧墮入和之河毛侶河毛侶勿鳴爲曾禰浮出流夜登將見和之 如本

やらとは水つきてかつみ芦やうの物など生しげりたるうき也田舍のものはやはらともいふわしとは斧也又歌の心は斧をおとしいれての丶しりいふ心也かまびすしくものいふをばわし/\といふなど云事は此事也わしくるなど云もおなじこと也をのをわと云は木を破る義也杣人をわつといへるも此義なるべし

辛塩傳吉胡登毛美

こ丶ともみとはそこばく。といふなり も（塙）

母爾奉都也目豆兒乃負父爾獻都也身女兒乃負

めづちごみめちごともにはむることば也まけとはまうけなり

爲レ鹿述レ痛歌詞中

吾角者御笠乃波夜詩

はやしとはかさ也下皆倣レ之

爲レ蟹述レ痛歌詞中

葦蟹とは海邊に人馬などのをとを聞てはしりちる白

きかに也
毛武爾禮乎とはもむとはしげしと云詞
にれとは木の名なりしげりたるにれの木なり陶人
とはかはらけつくる人也

萬葉集註釋卷第十七

第十七卷

海未通女伊射里多久火能於煩保之久都努乃松原於母保由流可聞

おほゝしくとはおぼつかなきなりあまのいさり火はほのかなるものなればおほゝしくといへりつのゝ松原は攝津國なり

家爾底母多由多敷命波乃宇倍爾思之乎禮波於久香之良受母

たゆたふとはたゞよふ也おもひさだめぬをいふおくかもしらすとは奥も不知と云也

讃三香原新都歌詞中

春佐禮播花咲乎々理

花さきをゝりとは花さきあがりといふ也

秋佐禮婆黄葉爾保比於波勢流

おはせるとは帶也

反歌

楯並而伊豆美乃河波乃水緒多要受都可倍麻都良牟大（壩）

(塙イ朱書)此歌在上卷

宮所

たてなへていづみのかはといへる事日本紀第五卷崇神天皇御宇武埴安彦謀反逆興レ師登二那羅山一而軍之時官軍屯聚而蹢二跙草木一因以號二其山一曰二那羅山一蹢跙此云布瀰那羅須更避二那羅山一而進到二輪韓河一。與(塙イ)埴安彦狹レ河屯之各相挑焉故時人改二號其河一曰二挑河一今謂二泉河一訛也といへりこのゆへにたてなへていづみのかはといへるなり

あしびきの山邊にをれは子親(時鳥(イ塙))てのまたちくきなかぬ日はなし

たちくきとはたちくゞるなり

安之比奇能山谷古延底(氏(イ塙))野豆可佐衛今者鳴良武宇具比須乃許惠

この歌の中に五文字古點にはやつかさにと點すその心あひかなはずのつかさと點ずべしつかさといふはつゞきといふ詞也野つゞきに鶯のなく心なり

第二十卷の歌に云多可麻刀能宮乃須蘇末(未(塙イ))乃努都可佐爾伊麻佐家流良武乎美奈弊(奘(イ塙))之波原この歌の中の五文字のつかさにと點せりさらに替るべからず

ほとゝきす夜こゑなつかしあみさゝば花はすぐともかれずかなかん(なかな(イ))

心は郭公の來鳴たちばなに網さしをきたらばかれずかなかんとよめる也

かきつばたきぬにすりつけますらおのきそひかりする月はきにけり

きそひがりとは卯月(五月(塙イ))○のほとに藥かりとりする(て(塙イ))也いつれのますらおもきほひかればきそひかりといへりきそひとも云きほひともいふ同韻の故也されば次上の第十六卷爲レ鹿述レ痛歌の中に四月と五月のほと(は(塙))にくすりかりつかふるときにとよめり

よろつよに心にとけてわかせこがつみしをみつゝしのひかねつも

つみしをみつゝとはますらおが年でろに成てたがひにはちかはす心もなければわきもこがうみたる麻をつむぎをきたるをみて忍ひ思へる心なり

鶯のなく〳〵ら谷にうちはめてやけはしぬとも君をしまたん

くら谷とは所の名にやおぼつかなしうちはめてとはうちはまりてといふなりやげはしぬともとはよけはしぬともといふなり心は鶯の鳴たにゝうちはまりておほろけにもこゝにくる事はなくとも君をまたんとよめる也

安麻射加流比奈爾安流和禮乎宇多我多毛比母登吉佐氣氐於毛保須良米也

うたかたとはわすれすといふ詞なりとかきたる事も侍へるにこの歌こそさもやとも聞え侍るめれ言は同しくて心はかはりたることも侍へれば一すちにもさだめがたくやひも紐(塙イ)ときさけてとは紐とかずしてこふらんとよめるなり

なこのあまのつりするふねはいまこそはふなたなうちてあへてこぎてめ

なこの海などの浦越中也ふなたなうちてとはふなばたをたゝく同じ事也

哀二傷長逝之弟一歌詞中

多麻保許能道乎多騰保美山河能弊奈里底安禮婆

みちをたとをみとは道をとをみなりたは語の助山かはのとは山と河と也へなりてあれはとはへだゝりてあれはと云也

忽染二枉(狂(塙イ))疾一殆臨二泉路一仍作二歌詞一以申二悲緒(旨(一))一詞中

大船乃由久良由久良爾とはゆたかにといふなり

安良志於須良爾奈氣枳布勢良武

あらしおとは荒増雄お(イ)なし言也

春の花いまはさかりに匂ふらんをりてかささんたちからもかも

たちからもかもとは手の力也

更逐歌詞中

之奈射加流故之乎遠(袁(イ塙))佐米爾

しなさかるとは邊土は人のふるまひてことがら○の(塙イ)しななければしなさがるといふなり

今日毛之賣良爾孤悲都追曾乎流

しめらにとはしつかにといふなり

いてたゝむちからをなみとこもりゐてきみにゆ(に(イ塙))ふる

にこゝろともなし
こゝろともなしとは心利ことなしと云也
述二戀緒一歌詞中
宿夜於知受伊米爾波見禮登
いめにはみれととは夢を云なり越のくにのならひ
には夢をいめといふ也
奈須良牟妹乎安比氐早見牟
なすらんとはなやむらんと云ふなり
之夫多爾能さきのありそによするなみいやしく〳〵
にいにしへおもほゆ
しふたにのさき越中國なりしく〳〵にとはしげき
なり
遊二覧布勢水海一賦詞中
宇加波多知可由吉加久遊岐見都禮騰母曾許母安加爾
等
かゆきかくとはとゆきかくゆきといふなりそこも
あかにとゝはそこばくといふ詞也
立山賦詞中
安麻射可流比奈爾名可加須古思能奈可
あまさかるひなになかゝすこしのなかとは北國越
前越中越後あるが故になかゝすといへり東山東海
にも上下をつけたる國もならび西海にも前後をよ
はるゝ國○あれともなかゝずいはるゝ國はこしち
の越の國かけともの道の吉備の國はかり也
敬和二立山賦一詞中
安麻曾々理多可吉多知夜麻
あまそゝりとはそらにあかりたりと云也物を上さ
まにあくるをそゝりあぐなといふがことし
由布佐禮波久毛爲多奈眦吉
くも井とは常にいふ詞なればみな人も心得たるや
うには侍へれども若又いかなればいふぞとたづぬ
る人あらんときにはことかたき人もあるへきによ
りて注し侍へるなり雲井と云は大かた霞は天の氣
霧は地の氣雲は山川の氣なりくもといふ○くは內
へまくりいる詞もはむかふ義これ雲のすがた也こ
のすがたは小雲にもみなみゆべしゐと云はあつま
ることば也しかればたかくもあれとをくもあれ其
ほどはるかにへだゝりて山川の氣かさなりあつま
りたらんは雲井といはるべき也

かたかひ川　越中國

入京漸近悲情難レ撥(撥塙)述レ懷歌詞中

加伎加蘇布敷多我美夜麻爾

ふ(イ塙)
ゆたかみ山といひいでんためにかきかそふとをけり物の員をいはんにはいくつの數にもいふべき也

美許登母知多知和可禮奈婆　ニ(イ塙)

みこともちとは國司也國の守は宣旨をもちて任國にくだりて其宣旨を國の廳の帶の上にかけてそのまへにして政事をなす故也　ナシ(塙イ)

聊奉レ所レ心歌詞中

乎須久爾能許等登理毛知弖和可久佐能安由比多豆久利

をすくにとは望見國也あゆひとはくきなりあゆひといひいでんための諷詞にわかくさのとをけり草のはしめておひ出たる葉はくきのもとにまとはれたればあゆひによそへたる也　はゝき(塙イ)　ナシ(塙イ)

思レ放二逸鷹一夢見感悦作歌詞中

之麻都等里鵜養我登母波

しまつとりとは鵜をいふこの鳥こそ水をかづきて魚をくふ能をほとこす故に絕嶋にすむゆへに嶋津鳥といふ魚をくふひまくにはつはさをほさんかために嶋をすみかとする也　このみて(イ塙)

露霜乃秋爾伊多禮婆野毛佐波爾等里須太家里等

すたくといふ詞さきにもいふことくにさまくなれともこの集には多集と書てすだくとよめり今の歌の心は又あつまる義にあたれり此集の心にてはあつまるといふ義つよかるべし　き也(塙イ)

矢形尾乃安我大黑爾　ら(塙)

やかたおとは尾のふの矢の羽のやうにもとのかたさまにきりたる鷹也

私記大黑とは蒼鷹の名也此註在本(イ塙)

多夫禮多流之許都於吉奈乃

たふれたるとは狂じたるといふなりしことは凶といふ詞なり

等乃具母利安米能布流日乎

とのくもりとはたなくもりといふなりたとゝと同内なり心はたなびきくもると云たは言のかみのた

すけなひきくもるといふなり
知波夜夫流神社爾底流鏡之都爾等里蘇倍
しづとはしでなりしづもしでもともにしつむる義
なりされば袖とりしてゝとも衣してうつともいふ
はいつれもしづかなる心也
都奈之等流比美乃江過弖
つなしとは魚の名也
知加久安良婆伊麻布都可多米
ためとはめくるといふ詞なりちかくあらはいまふ
つかはめぐりあるかんすらんといへるなり
奈孤悲曾余等曾伊麻爾都氣都流
いまとはゆめなり反歌にいはくふたかみのおても
このもにあみさしてあかまつたかをいめにつけつ
もといへり
まつかへりしひにてあれかもさやまたのをちかその
ひにもとめあはすけん
まつかへりしひにてあれかもとはまたれてかへる
ことくしひにてあるかもといふなりさやまたのお
ちとは養吏山田吏也この故にさやまたといふおち
とは老翁なれば也

ひめの野　越中國
あゆの風いたくふくらしなごのあまのつりするをぶ
ねこぎかへるみゆ
あゆのかぜとは北國のならひは東の風をはあゆの
風といふなり

さかみ川　越中國
うさか川　同
はひつき川　同
にしき川　同

萬葉集註釋卷第十八

第十八卷

なこのうみにふねしましかせおきにいてゝ波たちくやとみてかへりてん

しましとはしはし也同韻なるか故なるへし

ふせの海　越中國　おふのさき　同

たる○め(ひ(イ塙))の浦　同

かへるさ(ま(イ))のみちゆかんひはいつはたのさかに袖ふれわれをしおもはゝ

いつはたのさか越中より越前の國へこ(へ(イ塙))ゆるにこの道ありいつはたてえは海津(かいづ)(すいつ(イ塙))へいづきのめごえはつるがの津へ出る也きの(へ(イ塙))めごえはことにさがしき道なり

はりえ　攝(接(イ))津國

たちはなのしたてるにはにとのたてゝさかみつきいますわかおほきみかも

さかみつきとはおほきみにたてまつる御酒宴なり

あさひらきいりえこぐなるかぢのをとのつばら〳〵にわがへ(け(イ塙))しおもはゆ

つばら〳〵にとはつばひらかにといふなり

あすよりはつぎてきこえんほとゝきすひとよのからにこひわたるかも

ひとよのからにとは一夜の間(あひた)なり

かたおもひをうまにふつまにおほせもてこしへにやらはひとかたはむかも

うまにふつまにとは馬におほする馬にといふなり

ひとかたはむかもとは人かたへむかもといふなり

安萬射可流比奈能都夜故爾安米比度之可久古非須良波伊家流思留事安里

この歌第二の句よみやう一端はおぼつかなかるへし比奈能都夜故といへり都の一字みやこ也のちの夜故の二字なにのためにかあらんされは二條院の御本の流にはひなのつやこにと點せられたりかたゞ〳〵不審はれがたかるべしこれによりてつらつ(貴(イ塙))ら事の心を案ずるにひなのつやことよみてはまことに眞名假名のよみ異義なく假名にあたれり但し

續紀卷廿四九今本作平羅志正辭按本書序九左作連羅志則仙曾所見本如此作也〇詞林栄葉抄六亦同

その心あひ叶はず都夜故とかきてみやことよむ事（ナシ（イ塙））は傍例の證據もありぬへしたとへば後岡本朝臣左大臣大紫蘇我連をあるひは蘇我連羅志ともかけり連の一字むらじなれともするに羅志の二字を書具せり又この集第十六卷能登國歌につくえの島のしたたみをいひろひもちきていしもちてといふ次の句に都追伎破夫利とかけり破の一字やぶりとよみつべし然じてすえに夫利の二字を書具せり今の歌のみやこも又などか都夜故とかゝざらんや次にその心をいはゞみやことは王城をいふしかるにひなのみやこといふは諸國の國府は田舍にとりてのみやこなればひなのみやこといふべしたとへは君と申すも王者をむねと申せとも又分々にしたがふて五位にいたるまでもまうち君といはるゝが如く也あめひとしといふは天人なり大伴家持が姑坂上の郎女を賞ずる詞なりかくてひすらばとはかくてひすればといふなりれとらと同内なる故に男聲をもちゐる也

となみの關　越前國

獨居二幄裏一遙聞二霍公鳥喧一作歌詞中

こゝろつこきし（て（イ塙））うちなけきとはこゝろつくしてうちなけきといふなりことくと同内きとしと同韻の故なり

あをのうら　越中國

出二金詔書一歌詞中

天地乃神安比宇豆奈比

あめつちのかみとは天神地祇なりあひうつなひとはあひ（ナシ（塙））あらはるゝなり

麻都呂倍乃牟氣（け（イ塙））爲麻爾々々

まつろへのとはしたかふる也むきとはたひらぐる（け（イ塙））なり

之我願心太良比爾

しかとはそれかと云詞也かれがといはんとてながといひしやがといはんとてしかともさかともいふいつれもおなし心也

大伴能遠都神祖乃其名乎婆大來（み（イ））目主登於比母知豆加倍之官（か（イ））海行者美都久屍山行者草牟（け（イ））須屍大皇乃敝爾

許會死米可弊里見波勢自許等等太弖

此事續日本記第十七卷天平二十年二月丁巳陸奥始貢ニ黄金ー於レ是奉レ幣以ニ畿內七道諸社ー夏四月甲午天皇幸ニ東大寺ー御ニ盧遮那佛像前ー勅遣ニ左大臣橘宿禰諸兄ー宣命詞中云

又大伴佐伯宿禰波常爾母云久天皇守仕奉事顧奈伎人等爾阿。波汝多知乃祖止母乃云來目久海行波美都久屍山行波草牟須屍王乃弊爾去能杼爾波不死止云來流人等止奈聞召須といへり今の歌の詞その意まつたくおなしきなり

等伊夜多弖於毛比之麻左流

といやたてとはときやたてとといへる歟

御言能左吉乃とはみかとのさ井はひ給ふといへるなり

いにしへをおもふすらしもわかおほきみよしのゝみやをありかよひめす

ありかよひめすとはありかよひますと云おなし事也まとめと同內也

爲レ贈ニ京家ー願ニ眞珠ー歌詞中

珠洲乃安麻能

すゝのうみ　越中國

思良多麻能伊保都々度比乎手爾牟須妣於許世牟安麻波牟賀思久母安流香

むかしくもあるかとはゆかしくもあるといふなり

むとゆと同韻なり

さとひとのみるめはづかしさふるこにさとはすきみかみやてしりふり

さとはすとははやくとふなりみやてしりふりとはわかすむ家をいてゝゆく也みやとは分々に賞ずる詞也しりふりとはあるくとてしりをふるなり

くれなゐはうつろふものぞつるはみのなれにしきぬになをしかずやも

くれなゐをば新妻にたとふつるはみのきぬをば舊妻にたとふ紅のいろははなやかなれどもやすくうつろふ物なりつるはみの色はめをとゞめずうつく

しからねどもふりすさひずとてなれざるにたとふるなり

さふるこがいつきしとのにすゝかけぬはいまくたれ（ゆ（イ本）イ塙三字房書）りさともとゞろに

さふることとは遊行女婦（姬（イ））の字すゝかけぬはいまくたれり（イ塙）とは官使のゆきて宿する所をば驛路といふは**いまぢとよむなり官より鈴を賜はりてそれをしる**しにて（殊に（イ塙））驛へゆく鈴をふりならして宿する也國王七つのすゞをもつて七道へつかはすには官使にひとつゝ（イ塙）。たまはる也七鈴のなかに一はくちのかけたる鈴なりそれを給りぬる使は道の間よろづに付て物あしといひつたへたりさてかの鈴をふりならすを聞て馬のはみものなどを供（備（イ塙））するをはいまと云なるべしゆといと同韻の故なりしかるに是は家持の宿禰越中にいたりて在國の間あそび姬さふるこを思ひけるに家持が先妻不レ待二夫君之喚使一自來たれば鈴かけぬはいまくだれりといふなり

橘歌詞中

皇神祖能可見能大御世爾田道間守常世爾和多利

日本記（紀（イ塙））第六卷　活目入彥五十挾茅天皇（垂仁天皇）九十年春二月庚子朔（校（イ））　天皇命二田道間守一遣二常世國一令レ求二非時香菓（杲（イ））一　香菓此云二箇俱能未一　今謂レ橘是也

安由流實波多麻爾奴伎都追（へ歟（イ塙））

あゆるみとはたえたるみはといふなりもろ〳〵のこのみはやすくちりうする物なれとも橘のみは次の年の花のさくまで堪（たへ（イ塙））てある木の實なればあゆるみはと云べし又いづれの木も花はやすくちれども實は花のごとくにはあらずたへて久しければあゆるみはといふなり

阿之比奇能夜麻能許奴禮波久禮奈居爾

この歌の書様多本みな如是或證本には久爾のあひだに二三字ばかりの闕字あるなりもとより脫落する故歟闕字なきに付て和點をくはへんと欲すればたとへば久爾仁保比知禮止毛とよむべししか點するならばことはり相かなふべからず黃葉はちりや

すくして久しからざるがゆへ也闕字あるに付てこれを勘がふるに久禮奈居爾仁保比知禮止毛といふへきなり然れば久爾の兩字の中に禮奈居の三字を脱落せり此詞の作例を檢るには第八巻の佛前唱歌にいはく思具禮能雨無間莫零紅爾丹保敝流山之落巻惜毛云々今の歌の詞まつたくおなしきものを哉幸哉　弟子至二此脱字一思慮輙及二于不レ失二歌意一若不レ如レ是今一句終不レ復レ本乎

さゆりばなゆりもあはんとしたはふるこゝろしなくはけふもへめやも

さゆりはなゆりもあはむとつゞくることはゆりといふ名につけてつゞけぬべきうへにかの花はこと花よりもおほ并（イ塙）らかにおもきによりて風なといさゝかも吹時はわきてゆられたちたればゆりもあはんとよそへよめる也

忽見二雨雲之氣一作歌詞中

あしびきの山のたをりに

山のかひなどにみゆる雲なるへし

わたつみのおきつみやこにとは龍宮をいへるなり龍の雨をふらすには雲をおこすことなればその本文をおもはへてよめる也

文云譬如二龍子始生七日即能興レ雲亦能降レ雨　久

このみゆるくもはびこりてとのくもりあめもふらぬかこゝろたらひに

くもはびこりてとは雲はびこりて也

七夕歌詞中

和多里母理布禰毛麻宇氣受波之太爾母和多之弖安良波

この歌はあまの川にはわたりもりの舟もまうけず橋もなしと聞えたりしかるにこの集第九巻の七夕の歌には久堅乃天漢爾上瀬爾珠橋渡下湍爾船浮居雨零而風不吹登毛風吹而雨不落等物裳不令濕不息來益常玉橋渡須といへり第十巻の歌には機　蹋木持往而天河打橋度公之來爲ともいへりされば或は舟もなく橋もなき樣によみたるはたゞ風情をめぐらしてあまの川の有さま七夕ひこぼしのあふせを思ひやりてそのなさけをあらはし心をあそばしむるばかり也かたく舟橋なしともいひありとも云べきにあらずそれにとりて今の歌にはわたりもり舟

もまうけず橋だにもわたしてあらばそのへゆもいゆきわたらしたつさはりうなかけりゐておもほしきこともかたらひなぐさむるこゝろはあらんをなにしかもあきにしあらねばことゝひてともしきこらといへり反歌（かへしうた）にはあまの川はしわたせらばそのへゆもいわたらさんをあきにあらずともといへりつねの人間界の江津（かうしん）を渡るには渡舟も時をかぎらず又橋をかけをきてある所もあるにこれは我（秋(イ摛)）ならぬかぎりはてとゝふ（ひ(イ摛)）事のともしきことをうらみてなきがごとくにいひなせるすぢもありぬべし小在（せうざい）屬無（ぞくむ）と云ふがごとし

はりふくろおひつゝけなからさとことにてらさひあるけとひともとがめず

てらさひあるけどゝはてらめきあるく也人もとかめすとはあれはいかにといふ人もなき也

とりがなくあづまをさしてふさへしにゆかんとおもへとよしもさねなし

　ふさへしにとはあた（く(摛)）へしにと云詞也

あしひきの山のこぬれのはよとりてかざしつらくはちとせほくとぞ

　こぬれとは木のうれ也ほよとりてとは木のわか葉のはひひらけたる也

本云（ナシ(イ摛)）　文永六年孟夏朔日記之畢　　仙覺在判

建治元年（季(イ摛)）十一月晦日（昌(イ)）以作者仙覺律師自筆本致人書寫畢

同十二月一日一校了　　玄覺在判

萬葉集註釋卷第十九(墒イ)

第十九卷

はるまけてものかなしきにさよふけてはふりなくしぎたかたにかすむ

はるまけてとは春さかりてといふ心なり罷とかきてまけてとよめる事ありたかたにかすむとはたがためなり

もの丶ふのやそのいもらがくみまがふてらゐのうへのかたかごのはな

此歌の落句古點にはかたかしのはなと點せり是をかたかこの花と點すへしかしと點ずれば櫓の木に(イ本ナシ)(イ)まがひぬべし端作の詞に堅香子草花とかけり草と聞えたりかたかごをば又はゐのしりといふ春花さく草也その花の色はむらさきなり

よくたちにねさめてをれば河瀬とめてこゝろもの丶に(し(イ))(ナシ(墒))嶋ちとりかも

よくたちにとは更闌てなどいふ詞也

いはせの　越中國

矢形尾乃麻之路能鷹乎屋戸爾須惠可伎奈泥見都追飼久之余志毛

矢形尾第十七卷にいへるかことしましろのたかとは目の上の(ナシ(イ墒))白き鷹といへり

さきたの川　越中國

磯上之都萬麻乎見者根乎延而年深有之神佐備爾家里

都萬麻何木乎可レ詳ニ有職(識(イ墒))之人一仍記レ之

慕レ振ニ勇(勇(イ))士之名一歌詞中

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等

ち丶の木は葉似ニ楊梅葉一葉如ニ胡黏子一熟時色赤

鴨好食レ之云々此木在ニ走湯山一又伊豆大島(頗(イ墒)殘(イ))此樹茂盛也云々柞葉者如レ常似ニ橡葉一(而(イ墒))○厚者也

詠ニ霍公鳥並時花一歌詞中

四月之立者欲其母理爾鳴霍公鳥從古昔(ナシ(イ))可多里都藝都流鶯之宇都之眞子可母

うつしまこかもとはうつしは現なり心ははとゝきすはうぐひすのまことの子かと云也

詠二霍公鳥并藤花一歌詞中
許能久禮乃繁谿邊乎呼等米爾
めすらめにとは君につかうまつる近習の人などの
あくればさだめてめすらんと霧をはらひてまうづ
るが如くほとゝきすも朝とくわたりて鳴と讀る也
つきたちしひよりをきつゝうちしのびまでどきなか
ぬはとゝぎすかも
郭公鳥は立夏の日來鳴こと必定といへり今の歌も
此心と聞えたり
いもにゝるくさとみしよりわがしめしのべの山ぶき
たれかたをりし
いもにゝるくさとは山吹はかほりもなつかしくた
はやかにしなひたる草なればいもに似ると讀る也
け（塙）
藤なみのかくなるうみのそこきよみしづくいしをも
たまとわがみる
しつくとはしづむ也この集第七卷に水底爾沉白玉
誰故心盡而吾不念爾といふ歌を濱成卿の和歌式
に（塙イ）を引ていはく如下藤原宮内卿ナシ（イ塙）奉レ贈二新田部親王一歌
曰上美那曾己歟（塙）弊旨都倶旨羅他麻他我由惠爾己々呂侶（イ塙）

都倶旨豆和我母婆那倶爾しづくといふはしづむと
いふ詞の古語なりくとむと同韻の故なるべし
從二京師一來贈歌詞中
美久之宜爾多久波比於伎底
たくはひをきてとはたくはへをきて也
あしひきの山のもみちにしづくあひてちらん山ちを
きみかこえまく
山のしづくとゝもにもみぢのちらん山ぢを君がこ
えいなんことをかなしくおもひやりてよめる歌也
ふる雪をこしになつみてまいりてしるしもあるか
としのはじめに
此歌は天平勝寶三年正月三日會二集越中介內藏忌
寸繩麿之舘一宴樂時大伴家持作歌也雪中集會
飲樂する心の歌也
雪嶋岩巖（イ塙）爾殖有奈泥之故波千世爾開奴可君之揷頭爾
この歌の第二句古點にはいはほにおふると點せり
漢字に殖有とかけりうふると云べし又發句雪嶋爾
といへる所の名などにはあらざるべし次上の歌の
端作の詞に

于時積雪彫二成重巖之起一奇巧綵二發草樹之花一等云々然れば此なでしこもいろどりひらける花也もしは嶋をも題にしなでしこをも題にてまこ（き（イ塙））としく歌をよみいでんときにもとめ用意あるべし（尤（イ）も（塙））次上の廣繩歌にもなでしては秋さくものを君かいへの雪のいはほにさけりけるかもとよめるもつくりものと聞えたり

あま雲をほろにふみあたし鳴神もけふにまさりてかしてけめやも

ほろにふみあたしとはふみわたり也

いはせの　越中國

向二京路一上依レ興預作二侍宴一應レ詔歌詞中

四（方（イ塙））市之人乎（もの（イ塙））母安天左波受

あてさはずとはわづらはさずといふ也

多婢未禰久とはたゆみなく也

たづかゆみてにとりもちてあさかりにきみはたちいぬたなくらのゝに

有抄云たつかゆみとはたづかをおほきにまきたるゆみをいふといへりしかれとも是はたゞ手にとるをたつかといへるにやこの集第五巻に哀二世間難レ住歌の中にたづかつえてしにたかねてといへるも手にとりてつきたるつえをこしにつかへたるときこえたり

梳毛見自屋中毛波可自久左麻久良多婢由久伎美乎伊波布等毛比氐

くしも見しやなかもはかしと云は人のものへありきたるあとには三日は家の庭はかずつかふくしをみずといふ事のある也

あめにはもいはつつなはふよろづ代にくにしられんといはつゝなはふ

いはつゝなはふとよめること本縁あるにや有識（職（イ））の人に尋ね問べし依て注載之

あしひきのやましたひかけかつらけるうへにやさらに梅をしのばん

ひかげとはあふひ也葵は日の影のさせるかたにしたかひてなびきかたふく故にひかげ草といふかつらけるとはかつらにかけたる也ひかげのかづらと（ナシ（塙イ））いふ是なり

のと河の後にはあはんしましくもわかれといへばか
なしくもあるか
のと川　　大和國
わかやどのいさゝむら竹ふく風のをとのかそけきこ
のゆふべかも
いさゝむら竹とはいさゝかにかろくして風になび
きやすきむら竹也かそけきとはかすかなるなり

萬葉集註釋卷第二十

第二十卷

霜上爾安良禮多婆之里伊夜之爾安禮婆麻爲許牟年
緒奈我久

しものうへにあられたはしりと云は本文也露結爲
レ霜々凝爲ニ雹雪一と禮記正義といふ文にいへる也た
はしりとはとばしると云なり

秋といへはこゝろぞいたきうたてき（け イ墻）に花になぞへて
みまくほりかも

花になぞへてとは花になぞらへてと云也

みやひとのそでつきころもあきはぎにはひよろし
きたかまとのみや

そでつきころもとはみも袖もおなし色にはあら
ずしてさま〳〵に並文しにしきなどを袖にたちき
たる衣にや秋萩に匂ひよろしきなぞいひつゞけた
るあたりしかにやあらんとみゆる也

（イ本）「あきのにはいまこそゆかめものゝふのおとこおみ
なの花にほひみに

◦おとこおみなの花とはおほとちと云草をはおとこ
◦おみなへしとなん申す也」
かしこきやみことかゝふりあすゆりやかえかいむた
ねをいむなしにして
みことかゝふりとは見ことかゝふりてといふなり
初めのかは詞のたすけ也あすゆりやとはあすより
やなりかえかいむたねをとはかえがはかれが也え
とれと同韻也いむたねをとはいは發語の詞むたは
莽（共（イ塙））也かれかともねをといふ也いむなしにしてとは
いもなしにしてと云也
わかつまはいたくてひらしのむみつにかこさへみえ
てよにわすられす（ほ也）
かこさへとはかをさへ（け（イ塙））なり
主張（帳（塙イ））丁とは近來の公文なり
ときく〳〵のはなはさけともなにすれそはゝとふはな
のさきてこすけん．
はゝたふはなとはおやなとかへりみる（顧（イ））。かへ（さ（塙イ））のは
なのさかさるらんとよめる也

ちゝはゝもはなにもかもやくさまくらたびはゆくと
もさゝごてゆかん
さゝごてゆかんとはさゝげてゆかんとなり
ちゝはゝがとのゝしりへのもゝよくさもゝよひてま
せわかきたるまて
もゝよぐさいまだこれを勘得せず後人爲にこれを（被考之註）
考かへられはこれを注識（載也（イ塙））よ
おほきみのみことかしこみいそにふりうのはらわた
るちゝはゝをおきて
いそにふりとはいそにふれ也うのはらわたるとは
うなばらわたるなり
ますらおのゆきとりおひていてゝいけばわかれをを
しみなげきけんつま
ますらおとはおとこをいふあるひは増荒（荵（塙））男ともか
けりたけきおとこをいへるかゆぎとりおひてとは
防人といふものは靭負の職なり靭（勒（イ））と云はかとのお
さなどのをふやなぐゐ也をよそ左右衛門のつかさ
の人をはゆけひのつかさといふこれ也
うなはらをとをくわたりてとしふともこらがむすべ

るひもとくなゆめ
ゆめとはゆめ〳〵といふことば也餘歌みなこれに效へ
さきもりのほりえこぎつるいつてふねかぢとるまなくてひはしげゝむ
さきもりのほりえとて名所の中にかきたることあ(け(イ)ナシ(イ))りおぼつかなき事也是はたゞ(たゝ(墒イ))防人が堀江を漕出たるにやいつてふねと云ことゝ又櫓を十丁たてゝ漕舟(尺(イ))をいつて舟といふ櫓二ちやうをひと手といふと釋したり(ろ(墒イ))事も侍へる也しかれとも舟は伊豆國よりつくりたてまつりたれば伊豆乎舟といへるにやあらんかく申す人もあまた侍へるなり日本紀(紀(墒イ))第十卷譽田天皇御宇五年秋八月庚寅朔壬寅令二諸國一定二海人及山守部一冬十月科二伊豆國一令レ造レ船長十丈船既成之試浮二于海一便輕泛疾行如レ馳故名二其船一曰二枯野一由二船輕疾一名二枯野一是義違焉若謂二輕野一後人訛歟
しかれは伊豆出舟といはん事そのいはれあるべしかつらは一事におひてあまたの義あることもみゆる傍例ある故也
みつとりのたちのいそきにちゝはゝにものはずきにていまぞくやしき
ものはずとはものいはずなり
たゝみけめむらしかいそのはなりそのはゝをはなれてゆくかなしさ
たゝ見けめとはたゝみこも也むらしがいそ駿河といへりむとといふはたかき義なればむらしがいそといふむの字をいひいでんための詞にたゝみこもとをけるなり鋪設(しく(イ墒))はたかくかさねて見がく故也
くにめくるあとりかまけりゆきめくりかひりくまてにいはひてまたね
あとりかまけりゆきめぐり(し(イ))とはあとりはわれひとり也ゐなか人のつねにいふ詞也まけりはまかり也
かひりくまてにとはかへりくるまでになり
ちゝはゝがいはひてまたねつくしなるみつくしらたまとりてくまでに
みつくしらたまとはみつきものにそなふるしら玉と云也

わろたひはたひとおめはとこひにしてこめちやすら
んわかみかなしも
わろたひはとはわかたびは也たひとおめはととは
たびと思へども也てめちやすらんとは籠もちやす
らんといふなり

わきめ(こ(塙本傍書イ))と(も(イ塙))ふたりわかみしうす(ち(イ塙))えずるするがのねら
はくふしくめあるか
わきめてとはわきもて也うちえするとはうちよす
る也ねらとは山なりむかしは山をばねといひける
也らは詞のたすけくふしくもあるかとは戀しくも
あるか也
ち丶は丶がかしらかきなでさくあれていひしことは(けさはせ(イ塙))
ぞわすれかねつる
さくあれてとはさくりしてなく也いひしけとはせ
とはいひしことはぞなり
にはなかのあすはのかみにてしはさしあれはいは丶
むかへりくまてに
あすはのかみとはあしへのかみといへるにや庭は
人のかよふところなれば庭にてしばさしてきよめ
んとよめるにや
みちのへのうまらのうれにはほまめのからまるきみ
をはかれかゆかん
うまらはうばら也はほまめははふまめなりはかれ
かゆかんとははなれゆかんと云也
あしかきのくまとにたちてわきもこがそでもしほ丶
になさしそもはゆ
くまと丶はくみ戸なりそてもしほ丶にとは袖もし
ほ/\と丶いふ也そもはゆとはおも(ろ(イ塙))はゆ也
陳二私拙懐一歌詞中
安麻乎夫禰波良々爾宇伎弖
日(曾(イ塙))伎太久毛於伎呂奈伎可毛
はら丶にうきてとはちり/\にうきてといふなり
そきたくもとはそこばくも也おきろなきかもはお
くもなきかも也
己伎婆久○由多氣伎可母
こきはくはこ丶はく也ゆたけきかもはゆたかなる
かもなりひろしと云心なり
つくはねのさゆるのはなのゆとこにもかなしけいも

そひるもかなしけ
ゆとこにもは夜どこにもなりかなしけとはかなし
きなり
あしからの見さかたまはりかへりみずあれはくえゆ（二イ塙）
くあらしをもたしやはゝかる
みさかたまはりとはみさかのみちはさかしくおそ
ろしければあやまちせしとてよこめもせすまもり
ゆく也たまはりといふたは詞のたすけ也あらしを
もとは心たけくあらきおのこもと云なりたしやは
ばかるとはたちやはゞかるといふなりたけきおの
こもあやうく思ひてたちはゝかるといへるなり
むまのつめつくしのさきにちまりゐてとは
みやこへのはるみちのあひだにつくしの崎と云と
ころありともいまだ聞をよばず是は天平勝寶七歳
乙未二月諸國の防人等を筑紫へつかはされけると（り塙イ）
きの事なればつくしのさきにとよめるにやちまる
ゐてとはとまりゐて也
さけくとまをすかへりくまでにとはさけくはさきく
なり

けふよりはか（ろイ）へりみなくておほきみのしこのみたて
といでたつわれは
しこのみたてとはしきりのみたてといふなりしき
りにたて〳〵とおほすれば出たつ也
あめつちのかみをいのりてさつやぬきつくしのしま
をさしていくわれは
さつやとははやき矢也
まつのきのなみたるみれはいはひとのわれを見をく
るとたゝりしもころ
いはひとは家人也いはともいへともいほともいふ
はみなおなしきなり同内相通のこゑ也いはとはう
ち聞ところは異樣なれども物の名をよふには男聲
を本とするならひなればいはと云はよき也たゝり
しもころとはたゝりしが（ナシ塙イ）ことしといふ也
たびゆきにゆくとしらずてあもし（き塙イ）ゝにことまをさす
ていまぞくやし氣
あもしゝとは妻也あもはわきもといふ詞なりしゝ
は女の義父母をも骨肉といふがごとき也
上丁とはさきもりにたつ人夫の四十を上丁とし十

八歳を下丁とすといへり
あもとしもたまにもかもやいたゝきてみつらのなかにあへまかまくも
あもとしもあもしゝのことしとしとは女を賞する詞也とはとめる義しはあるしの義也としとはとめるあるしといふ詞也みつらとはもとゞり也（もとゝ（イ墒））
つくひよはすくはゆけともあもしゝかたまのすかたはわすれせなふも
つくひよはとはつくはつきなみの月也ひよは月夜（日（イ墒））なりすくはゆけともは過はゆけどもと云也
ふたほかみあしけにとなりあたゆまひはかするときにさきもりにさす
ふたほかみとは○○○○（け（墒イ）ふたほほ（墒イ）ふたへ（墒））ふたえ也（にへ（イ））かみとは（ナシ（墒））たましゐ也あし氣とはあしき也あたゆまひとは價の賄なり心はふたえたましゐあしきひとなりまひなひの（に（へイ））ために物なとまいらせたれば（ふたへ（墒））とりおさめてのち又さきもりにさすといへる也
つのくにのうみのなきさにふなよそひたしてもときにあもかめもかも
たしてもときにとはさしていでんときにといふなり
あかときのかはたれときにしまかきをこきにしふねのたつきしらすも
かはたれときとはかれはたれときと云也ゆふへをたちかれときと云がことくに曉をかはたれときといへる也しまかきとは嶋かげ也たつきとはたよりなり
助丁とはまさしき使のほかに相副者也
わかゝとのいつもとやなぎいつも〳〵おもかこひすすなりましつしも
いつもとやなきとはむろこしに陶令といふもの閑居をこのみて琴をひき酒をこのみき門に五柳おひたり依て五柳先生といひきそれによそへてよめる也おもかこひすゝとはおもといふも女也女にはみなもの字をつけたるいもわきもと云がごときなりなりましつしもとは有ざま靜なりといふ也
ちはのぬのこのてかしはのはゝまれとあやにかなしみおきてたかきぬ

○し(イ摘)亦作し證も証

はゝまれとは[さゝ(摘イ)]いまだひらけぬなりたかきぬとはと
をくきぬといふなりたかきはすなはち旅の心也よ
める心はおさなき子なとのあやしくかなしきをを
きながらはるはると來ぬるといへる也
たびとへどまたひになりぬいへのもかきせしころも
にあかつきにけり
たびとへとゝはたびといへどゝいふ也いへのもか
とはいへのいもかと云也
むらたまのくるにくきさしかためとしいもがこゝり
はあよくなめかも
むらたまのくるにくきさしとはゐなかわたらひの
いやしきしづがやどにはひま[隣(イ)]わらき風[垣(イ)]の戸にくゞ
ると○てくさ[さ(イ摘)]びをさしてかたむることの[かき(摘)]ある也い
もが[ゑ(イ摘)]こゝりとはいもが心は也あよくなめかもとは
あるくなみかもと云也心はおとこのある時には戸
もさしかためねどもひるはあけをきてあればいも
もいたく家のおは[さは(イ摘)]つかなき事もなくてゆかんと思
ふところ○われはわりなくあるきなんどするにおと
こはさきしりに立ぬればくるにくきさしかためて

いもか心はしづかにてあるきたかふこともなく成
なんとよめるなり
あめつしのいつれのかみ[な(イ)]かいのらばかうつくしはゝ
にまたことゝはん
あめつしとはあめつち也うつくしはゝとはわれを
うつくしむ母也
おほきみのみことに[に(摘イ)]されはちゝはゝを[の(イ)]いはひへとお
きてまゐてきましを
みことにされはとはみことにしあればと云也しあ
はさとよばるれば引合せていふ也
たつたやまみつゝこえこしさくらはなちりかすぎな
んわかかへるとに[れ(イ)]
わがゝへるとに(摘)とはわが歸るさきにと云也
爲二防人(はうじん)情(なさけ)一陳レ思(おもひ)作歌詞中
於比曾箭乃曾與等奈流麻泥奈氣吉都流香母
をひそやとはをふたるそや也
おほきみのみことかしてみあをくものたなびくやま
をこえて[よ(イ摘)]きぬかも

こよてとはこえて也
わかいはろにゆかもひともかくさまくらたびはくるしとつけやらまくも
いはろとは家也
陳二防人悲別之情一歌詞中
乎可之佐伎伊多牟流其等爾
いたむるとはめぐる也
まくらたちこし（イ搞）にとりはきまりなしきせろかまきこんつくのしらなく
まくらたしは枕太刀也せろかまきこんとはせろは男也まきこんはまゐこん也まゐこんとはまうでこん也つくのしらなくとはつきのしらなく也
おはきみのみことかしこみうつくし氣け（イ搞）まこかてはなり（搞イ）れしまづたひゆく
うつくしけはうつくしき也このうつくしけの氣の字古點にはうつくしきと點せり然れどもかやうの東語はたゞゐなか人のいふやうに點すべき也此故に今けと點ずる也此たぐひいづれもおなしかるべしまこかてはなりとはまこがてはなれ也まことはまことの子なり
しらたまをてにとりもしてみるのすもいへなるいもをまたみてももや
てにとりもしては手にとりもちて也みるのすもはみるぬしも也また見てもゝやとは又○○見て（イ搞）もゝやと云也重點はかみのもじおほきにもしもの字はかりをかさぬる事もある也
くさまくらたびゆくせながまるねせばいはなるわれはひもとかずねん
まるねせばはまろね也いはなるとは家なるなり
あかこまをやまのにはかしとりかにてたまのよこやまかしゆかやらん
あかこまとはわかこまといへるにや馬をば赤駒と云事もありそれは馬の毛色もさま／＼なれともあかき馬のおほければ多分につきてあかこまといふあかうしもありまたらうしもあれとも多分につきて牛をくろきものにいふかことしそのやうにむまをも赤駒と云事もあれとも今の歌はたゞわがといふ義にあたれるにややまのにはがしとははなちにがしたりと云義なりとりかにてはとりかねて也か

しゆかやらんとはかちよりややらんといふなり
いはろにはあしふたけともすみよけん（な塙イ）つくしにいた
りてこふしけもはも
いはろとは家也あしぶとはあし火也すみよけをと
はすみよきを也こふしけもはもはこひしけんやも
也こひしけんやもとは戀しからんやもといへる也
くさまくらたびのまるねのひもたえはあかてとつけ
ろこれのはるもし
まるねはまろね也つけろとはつげよ也これのはる
もしとはこれのはりもちてといへる也
わかゆきのいきつくしかはあしからのみねはほくも
をみとゝしのはね
いきつくしかはとはいきつきしかは也みねはほく
もをとはみねはふくも也みとゝしのはねはみつゝ
しのはんといふ也
あしからのみさかにたしてそてふらはいはなるいも
はさやに見もかも
みさかにたしてとはたちて也いはなかは家なる也
いろふかくせながころもはそめましをみさかたはら
はまさやかにみん

たはらはと云は（ナシイ塙）てはらはと云也まさやかにみんと
はまことにさやかにみんと云也
『いはのいもろわをしのふらしまゆすひにゆすひし
ひものとくらくもへは
わをしのふらしとは我を忍らし也まゆすひにとは
まむすひ也』之の文（イ塙）により補ふ
わかせなをつくしはやりてうつくしみえひはとるな
なあやにかもねん
つくしはやりてはつくしへやりて也えひは帶なり
うまやなるなはたつこまのおくるかへいもかいひし
をおきてかなしも
なはたつこまとは馬のふしたるをなはを切たれば
たつをいふおくるかへとはおくるかはと云也歌の
心はむまやなるこまのふしたるかなはをきりたれ
ばれくるかことくわれをおくるかはといひしいも
をゝきてかなしきとよめる也
あらしをのいをさたばさみむかひたちかなるましつ
みいてゝとあかくる
あらしをのとはますらお也いをとは弓をと云也ゆ
みをかへせばい也かなるましづみいてゝとあがく

二埼本マフスノフハサノ誤テリ今本カトアルハ本ヤトブリシキカト見誤テカトカケルナリ

るとは箭をいれりては鳴をしづめてきく也そのごとくにわれもなりをやめていてゝくるといへる也

さゝかはのさやくしもよにな丶へかるてろもにませるてろかはたはも

な丶へかりとはな丶えきる也 ハ(イ埼)

さへなへぬみことにあれはかなしいもかたまくらはなれあやにかなしも

さへなへぬとは故障せぬみことにあればといへる也

已上此歌防人等が歌の詞みなこれ夷〔褒(埼)〕詞とも也或は又鬼語なともあひまじはりてかたくなる詞どもなればすゑの世にやまとことの葉もてあそばん人のまなぶへきにもあらず〔なるか(イ埼)〕又ふるき口傳髓腦にもみえざるべしつたへなき事共成か故也もし又しゐてその心さし深くして思ひわかつ事あらんものははやくさとりぬべしかたかたしるしと丶むるには〔き(イ埼)〕ゞかり侍へるへけれともさきの世の契り深くおさ〔中(イ)〕なきもの丶松のとぼその内〔うち(埼)〕にすみなれて此集歌の心しるしと丶めてたまふべきよしす丶めかす〔申(イ)〕こと度々に成ぬるによりては丶かりをかへりみず書と〔まふす(埼)〕ゞめ侍へる也かくうは〔ナシ(イ埼)〕又このつゐでをもちて三世の佛たち四方の大き聖の御いつくしみ此秋つしまの内〔うち(埼イ)〕にひかりをやは丶げちりにまじはり給へるあまつやしろくにつやしろの御あはれみをむくひたてまつらんと思ふ心ざし侍へるによりてそのかみ〔昔時(イ)〕のことのおこりより初めてゆく末のねがひの契りにいたるまで申ひらくべく侍へる〔也(イ埼)〕○愚老〔衰(イ)〕をところへくだれるすゑの代にあたりてあづまのみちのはてに生れ來れる身なれば竹馬の時より此事に心ざしありといへども〔ナシ(イ)〕そのみなもとをたつねてかくなり〔雖かりき(イ埼)〕きこれによりて年はじめてと丶せあまりみつのとしより四十あまりにいたるまてあはせてみそぢが間日ごとに諸佛ぼさつを初めたてまつりて秋つしまのうちに跡をたれましますおほみ神たちあまてる太神王城の鎮守かも八幡の大明神ひえのなな

社又熊野のみたけ白山の權現東の國の伊豆筥根三嶋の大明神ふじ諏方鹿嶋香取の大明神わきてはすみよし玉津島の明神北野の天神山柿その外の歌仙聖靈等に祈請をいたして我いま生をあきつしまにうけたりねがはくはやまと言の葉のみなもとをさとらしめこの一事におゐて無師自然の智惠をあたへ給ふべきよしをいのりこひ侍べりきそのしるしにやありけん三十一年にあたりて萬葉集の本々披見の因緣自然に出來れる事おはかりきつゐに寛元四年七月十四日萬葉集の中諸本無點の歌長歌短歌旋頭歌合て百五十二首を抄出して推點をくはふる事すでに畢ぬ其後又萬葉集の本々披見の因緣漸々に出來するのあひだこの集の中の端作の詞といひ〇〇〇〇〇〇もしは落字もしは損字大體たゞさるゝ者也第十四卷の歌ならびに此卷防人等の歌の詞其さゝはいやしけれどもをのづから見なれ悉曇のならひをそむかずまことにこの事不可説々々々也これによりて且は獨りわらひ且は獨り悲しひて或は本韻末韻をわきまへ或は男聲女聲をたゞしあるひは同韻同内をかよはしてその心詞を釋したる也娜麼婆羅縛社惹也悉曇と云を歸命一切智成就と翻する事此言まことなる哉抑又古歌の詞といひなべての古語といひ日本記風土記等にみえたるべしそれ〇みな本韻末韻男聲女聲同韻同内によらすと云事なし所詮自然道理のしからしむる也けんかし世もあかりその道深かりけん人はやすくたゞされぬべかりける也しかるを今いやしき身にしてそのさとり山河の瀬よりもあさしといへどもその心ざしわたつうみの底よりもふかきによりて言葉の花もみぢの色かはれるいはれをもさとり思ひの露しもの結びつゞけたることはりをもしる事はみなこれ神佛の御たすけ也ければ此ことをしるしあらはしてかゞみてらさしめたてまつらんと也たとへば春の田をつくる御百姓としのにぎはひをいのりてひて思ひのごとくに秋のいねをかりおさめつればか

へりて是をたむけたてまつるがことし又むかしこのあきつしまに生れ來り給ひし大ひじりたちの唐(から)舟にのりもとむとてもろ／＼の神佛のおほむめぐみを賴みたてまつりて思ひのごとくみのりの水をうつしてくはかへりて法のたむけをほどこし給ひしがごとし是すなはちからのうたやまと歌の六義のなかの第六の頌の心なるへし又ねがはくはみづはなすかりの世に生れきたりて人と成てよりこのかたいそぢの春秋をへてもてあそぶところの和歌のうらのも塩草は濁りにそめるあやまり○○○○（ありと云々）も後の代には必こゝの品の（墻イ）○○○○○○○○○はちすのうへにむまれきて彌陀のみかほをおがみたてまつりてたえせぬひかりをほめたてまつるよすがとせん（得イ）と思ふ今此記しとくてとはりをみん人ふかきなさけをえしめん事たとへば藍に染る糸すぢのあゐよりもあをく水に結ぶ氷の水よりも寒きがごとくならざらめかも

あさなさなあがるひばりになりてしかみやこにゆきてはやかへりこん

あさなさなとは今の世の人の朝な／＼云々（ゝ云イ）詞也假名の重點はかみの字を略していふならひ也

なでしこがはなとりもちてうつら／＼みまくのほしきゝみにもあるかも

うつら／＼とはうつくしき也

うるはしみあかもふきみはなでしこがはなになぞへて見れどあかぬかも

うるはしみもほむる詞也花になぞへてとはなぞらへて也

にほとりのおきなかゝはゝたえぬともきみにかたらんことつきめやも

おきなかゞはといひいでんための諷詞にほ鳥のとをける也おきなかとはいきながしと云詞にて聞ゆればにほとりは水の中にいりて魚をとる也水をかつきて出ぬればいきをながくつくべきが故也

ほりえこぐいづての船のかぢつくめおとしはたちぬみをはやみかも

かぢつくめとは舟の梶をつかぬる也

ふなきおふほりえのかはのみなきはにきゐつゝなくはみやこどりかも

ふなきおふとはふなよそひなといふもおなじこと

也みなぎは○○みぎはなり　さは(イ塙)

喩レ族歌詞中

多可知保乃多氣倆阿毛理之云々

たかちはのたけは日向國にあり風土記云天津彥々火瓊々杵尊離ニ天磐座一排ニ天八重雲一稜威之道別々道道別々(塙イ)而天ニ降於日向之高千穗二上之峰一時天暗冥晝夜不別人物失レ道物色難レ別於玆有ニ土蜘蛛一名曰ニ大鉗小鉗一二人奏ニ言皇孫尊一以ニ尊御手一拔ニ稻千穗一鉗(イ塙)爲レ籾投ニ散四方一得ニ開晴一于時如ニ大鉗等取レ奏所(イ)鉗(イ塙)抜(塙)搓ニ千○穗稻一爲レ籾投散即天開晴日月照レ光因曰ニ高千穗二上峰一後人改號ニ知鋪已上　千(塙)乙(イ塙)上(塙)

於保久米能麻須良多家乎佐吉爾多豆由伎登利於保世　飾(イ)

萬多親王姓字錄第十二卷右京神別中

天神大伴宿禰高皇產靈尊五世孫天穗日命之後也初天孫彥火瓊々杵尊神駕之降也天穗日命大來目部　ナシ(イ)

立ニ於御前一降ニ乎日向高千穗峰一然後以ニ大來目部一爲ニ天靫負部一靫負部之號起ニ於此一也

みつはなすかれるみそとはしれゝともなはしねかひつちとせのいのちを

みつはなすとは水つはのことくなると云也水のあはのなかにかはらけなどのやうにてうかひたるをれつ(塙イ)水つはといふを今の歌にはみつはといへる也水をみとはかりいふもつねの事也

さほかはにこほりわたれるうすらひのうすきこゝろをわかおもはなくに

うすらひとはうすごほり也こほりを氷といふはひゆる義也

あしひきのやつをのつばきつらくにみともあかめやうへてけるきみ

やつをのつばきつらくにとはつはきの花はつるは(塙)如本葉(イ)めきたるものなれはつらくにとよそへよめる也

はりえてえとをきさとまてをくりけるきみがてゝろはわすらゆましめ　も(イ塙)

わすらゆましめとはわすられましもといふなり
水鳥のかものはのいろのあを馬をけふみるひとはかきりなしといふ
あをむまと云事不審なるべき事也今の歌のごときは水鳥のかもはのいろのとよそへつればあをき馬と聞えたりしかるに○○○○○○○○○○○○○あをむまとよめばしろきをあをむまといふと聞えたりこれはやすき樣にてしかも深き心あるべし物の色にあの字をかみにをきてよぶ事はあさきをいふ心也をといふはみどり也みどりのうすきと云はしろきによりたる也されば木の葉の見どころならぬはなけれとも柳にかぎりて青柳といふ事は柳は葉のおもてはしろくしてうらはみどりなる也されは柳はみとりのいろ淺き義にて青柳といはるゝ也さぬなとにもおもてしろくてうらみどりなるをやなぎといふ也又やなぎを白楊とかきたる○○○もこの心なるへし
はしきよしけふのあろじはいそまつのつねにいまさねいまもみること
あろじはあるじ也留とろと同內なり
わかせこがかくしきこさばあめつちのかみをこひのみなかくとそおもふ
かくしきこさはとはかくしげくこばといふなり
勃海大使少野田守朝臣
續日本紀第十卷云渤海郡者舊高麗國也云々渤者海水踊騰貞也彼國殊海水踊漂之處也
新年之始乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家餘其騰
この歌天平寶字三年春正月一日大伴宿禰家持於ニ因幡國廳一賜二饗國郡司等之宴一歌也仍て祝言の歌と聞えたり年始乃波都波流能今日落雪と侍へるはその日雪のふりたりけるによりてよそへよめるにやいやしけよことゝはけふふる雪のしけきがごとく君につかへて世のまつりことをとりおこなふ事もしげからんとよめる也
『イ本
寬永庚午之仲春於江府之仕暇書寫其五月初三之日

其功了
右守川氏捨魚所藏但自卷三至卷八缺本也」』

塙本

文永六年孟夏二日於武藏國比企郡北方麻師宇郷政所註之了
權律師仙覺在判

建治元年十二月二日以作者仙覺律師自筆本敎人書寫訖同日一校畢
玄覺在判

此十帖以律師玄覺之本如系圖令相傳又重考分書入之更不可有類本雖爲一詞能々可惜須如眼壽不可說云々
十佛判（保孝云坂士佛の父に十佛と云あり其人なるべし扶桑拾葉の系圖坂士佛の條みるべし）

右溫故堂塙氏所藏也全部十卷卷一卷二卷三（本書卷三）卷四（本書卷四）卷四（本書五六）卷五（本書七八）卷六（本書九十）卷七（本書十一、十二、十三）卷八（本書十四）十五）卷九（本書十六、十七、十八）卷十（本書十九、二十）

校正萬葉集註釋の跋文左の如し（但明治二十一年八月刊行編者著述、萬葉集書目提要に記したるもの）

右古寫本二本をもて校合す、其一は、奥に寬永庚午之仲春、於江府之仕暇書寫、其五月初三之日功了とあり、此本は友人守川捨魚所藏、但し卷三より卷八にいたりて缺本なり、其一は、溫故堂の藏本にて、卷尾に文永六年孟夏二日、於武藏國比企郡北方、麻師宇郷政所註之了、權律師仙覺とありて、次に建治元年十二月二日、以作者仙覺律師自筆本敎人書寫記、同日一校畢、玄覺とあり又次に、更此十帖、以律師玄覺之本如系圖令相傳、又重考分書入之、更不可有類本、雖爲一詞能々可惜、須如眼壽不可說云々、十佛とあり

安政三年八月　欟齋正辭識

字彙編

全

萬葉緯卷第一日本紀

洛東隱士編輯

日本書紀續日本紀第八元正天皇養老四年五月癸酉先レ是一品舍人親王奉レ勅修二日本紀一至レ是功成奏二上紀三十卷系圖一卷一今案序并表可レ有焉文粹等之古籍無二所見一○明月記廿九（土御門院）建永二年五月廿日顯昭付二家長一進二日本紀歌註一云云望二申法橋一云云不レ知二其由一日本紀者我朝之國史尤可レ重若可二其沙汰一者大臣公卿官外記尤可二奉行一歟非二法師撰進之仁一歟廿三日顯昭昇二綱所一云云今案惜哉顯昭日本書紀歌註今世不レ傳適釋日本紀引二公望等私記一雖レ註レ之不レ免レ無二誤謬一憾賢未レ見二顯昭歌註一歟釋中無下書二其曰一語上于玆密乘沙門契冲師撰二日本書紀並古事記歌註厚顏抄三卷一因成二欲頭一并施二假字一神代卷歌六首人皇紀歌百二十首

凡百二十六首

（連歌二首）

是時素戔嗚尊自レ天而降二到於出雲國簸之川上一（頭注云）簸之川上出雲風土記云仁多郡室原川源出郡家東南卅五里鳥上山北流所謂斐伊河上也又曰横田川源出郡家東南卅六里室原山北流此則所謂斐伊川上　同大原郡斐伊郷屬郡家樋速日女命座此處故云樋（神龜三年改字斐伊一）　神名帳出雲國大原郡斐伊神社　同社座斐伊波夜比古神社 時聞三川上有二啼哭之聲一故尋レ聲覓往者有三一老公與二老婆一中間置二一少女一撫而哭之素戔嗚尊問曰汝等誰也何爲哭之如此耶對曰吾是國神號脚摩乳我妻號手摩乳此童女是吾兒也號奇稻田姬所二以哭一者往時吾兒有二八箇少女一毎レ年爲二八岐大蛇一所レ呑今此少童且臨被呑無レ由二脱免一故以哀傷素戔嗚尊勅曰若然者汝當以レ女奉レ吾耶對曰隨レ勅奉矣故素戔嗚尊立化奇稻田姬爲二湯津爪櫛一而插二於御髻一乃使二脚摩乳手摩乳一釀二八醞酒一并作二假庪八間一各置二一口槽一而盛レ酒以待之也至期果有二大蛇一頭尾各有二八岐一眼如二赤酸醬一松柏生二於背上一而蔓二延於八丘八之間一及二至得一レ酒頭各一槽飮醉而睡時素戔嗚尊乃拔二所レ帶十握劒一寸斬二其蛇一至レ尾劒及少缺故割二裂其尾一視之中有二一劒一此所謂草薙劒也素戔嗚尊曰是神劒也吾何敢私以安乎乃上二獻於天神一也然後行覓二將婚之處一遂到二出雲之淸地一焉乃言曰吾心淸淸之（此今呼二此地一曰レ淸）於彼處建レ宮或云時武素戔嗚尊歌之曰

夜句茂多菟伊弩部本毛夜覇餓岐菟磨語味爾夜覇餓枳菟倶盧贈廼夜覇餓岐廻

（頭注云）大蛇鵜河風土記云史家謂八岐大蛇不レ云二大蛇一可レ謂於呂地取二於土脅於土脅志賁之義一也云々

（頭注云）先代舊事記於彼處建宮之時自其地雲立騰矣因作御歌曰　古事記茲大神初作須賀宮之時自其地雲立騰爾作御歌其歌曰云々

同記倭建命御歌夜都米佐須伊豆毛多祁流云々　又雄武紀云爲二難波曲八嵏刺曲一云々　萬葉第十七云我宿の花橘を花ごめに玉にぞあ

貴待たば苦しみ　後撰今日櫻しつくに我
身いさ沾む香こめに誘ふ風の來ぬまに
乃相與遘合而生兒大己貴神因勅之曰吾兒宮首者
即脚摩乳手摩乳也故賜號於二神曰稻田宮主神
已而素戔嗚尊遂就於根國矣
天照大神勅天稚彥曰豐葦原中國是吾兒可王之
地也然慮有殘賊強暴橫惡之神者故汝先往平之
乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢遣之天稚彥受勅來
降則多娶國神女子經八年無以報命故天照大
神乃召思兼神問其不來之狀時思兼神思而告
曰宜且遣雉問之於是從彼神謀乃使雉往候之
其雉飛下居于天稚彥門前湯津杜樹之杪而鳴之曰
天稚彥何故八年之間未有復命時有國神號天探
女見其雉曰鳴聲惡鳥在此樹上可射之天稚彥
乃取天神所賜天鹿兒弓天眞鹿兒矢便射之則矢
達雉胸遂至天神所處時天神見其矢曰此昔我
賜天稚彥之矢也今何故來乃取矢而咒之曰若以
惡心射者則天稚彥必當遭害若以平心射者則當
無恙因還投之即其矢落下中于天稚彥之高胸
因以立死此世人所謂返矢可畏之緣也時天稚彥之
妻子從天降來將柩上去而於天作喪屋殯哭之

先是天稚彥與味耜高彥根神友善故味耜高彥根神
登天弔喪大臨焉時此神形貌自與天稚彥恰然相
似故天稚彥妻子等見而喜之曰吾君猶在則攀持衣
帶不可排離時味耜高彥根神忿曰朋友喪亡故吾
即來弔如何誤死人於我耶乃拔十握劍斫倒喪
屋墮而成山此則美濃國喪山是也世人惡以
死者誤己此其緣也時味耜高彥根神光儀華艷映
于二丘二谷之間故喪會者歌之曰或云味耜高彥根
神之妹下照媛欲令衆人知映丘谷者是味耜高
彥根神故歌之曰

阿妹奈屢夜乙登多奈波多廼汙奈餓勢屢多磨廼彌素磨
屢廼阿奈陀磨波夜彌多爾輔拖和拖羅須阿泥素企多伽
避顧禰

（頭注云）波夜玉の光さ見ゆるはやさ云なりやの字は其光やさ云ひてこさわらむためなり下云みまきいりひこは
や　萬葉近江の海波かしこしさ風守り年はやへなむこぐさはなし
におくれてゐて我はや戀むいなみ野の秋はき見つゝいなむ君ゆ
ゑに　大山美夜麻景行紀　萬葉吾宇奈雅流珠乃七　神代上卷一書
曰已而素戔烏尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊云々　萬葉十七七夕歌
云白玉のいほつゝさひなさきもみず吾はかゝたぬあはむ日待に
足玉も手玉もゆらにおる機を君かみけしにぬひあへむかも　天

故　天離
出萬葉

又歌曰
阿磨佐箇屢避奈菟謎廼以和多邏素西渡以嗣箇播箇拖

輔智僞多輔智爾阿彌播利和拖嗣妹盧豫嗣爾豫嗣豫利據彌以嗣僞播僞拖輔智（頭注云）古事記伊勢三重婇歌曰麻紀佐久比能美加度衛比那閉衣濟護氏流毛毛知流波都紀賀延波本部延波阿米遠淤帶理那加都延波阿豆麻袁淤帶理志豆延波比那袁淤帶理　晏行紀歌云まへつきみいわたらすも　萬葉九伊波爲見者云々　師說倉者のよめるまゝ下照姫の歌にまれ味耜の神の事をはいかによめるにか　其意知かたし其中に後の歌は下照姫の歌とはみえぬにや

此兩首歌辭今號夷曲

○皇孫因幸豐吾田津姫則一夜而有身（頭注云）雄略紀云童女君者本是采女天皇與一夜而娠云々　皇孫疑之遂生火酢芹命次生火折尊亦號彥火火出見尊母誓已驗方知實是皇孫之胤然豐吾田津姫恨皇孫不與共言皇孫憂之乃爲歌之曰

憶企都茂播（頭注云）萬葉奥津藻之名延之妹此詞多陛爾播譽戻耐母佐禰耐據茂阿黨播怒介茂譽播磨都智耐理譽

須臾有鹽土老翁來乃作無目堅間小船載火火出見尊推放於海中云々自至海神之宮云云海神則以其子豐玉姫妻之遂纏綿篤愛已經三年及至將歸云云先是豐玉姫謂天孫曰妾已有娠也天孫之胤豈可產於海中乎故當產時必就君處如爲我造屋於海邊（頭注云）造屋之間脫產字乎以相待者是所望也故彥火火出見尊已還鄉即以鸕鷀之羽葺爲產屋屋蓋未及合豐玉姫自馭大龜將女弟玉依姫光海來到時孕月已滿產期方急由此不待葺合徑入居焉已而從容謂天孫曰妾方產請勿臨之天孫心怪其言竊覘之則化爲八尋大鰐而知天孫視其私屛深懷慙恨既兒生之後天孫就而問曰兒名何稱有當可乎對曰宜號彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊言訖乃涉海徑去 私記 于時彥火火出見尊乃歌之曰

飫企都鄧利（頭注云）萬葉十六奥島鴨云船同第六奥島味經乃原紀中可怜小汀是也軻茂豆句志摩爾和我謂禰志（頭注云）雄略天皇歌云多斯爾波韋泥受萬葉十四伊傻豆久伎美乎爲泥氐夜頁佐禰同第十六橋寺之長屋爾吾率宿之云々萬葉二十立しなふ君かすかたを忘すは世の限にや戀亘りなむ伊茂播和素邏耶譽能據鄧馭鄧利母

○是後豐玉姫聞其兒端正心甚憐重欲復歸養於義不可故遣女弟玉依姫而奉報歌曰

阿軻娜磨廼比訶利播阿利登比鄧播伊珮耐企騰我譽贈比志多輔妬旬阿利計利此贈答二首號（頭注云）古事記此歌贈答前後せり

二首號曰擧歌

○神日本磐余彥天皇戊午年秋八月甲午朔乙未天皇使徵兄猾及弟猾者是兩人菟田縣之魁帥者也時兄猾不來弟猾即詣至因拜軍門而告之曰臣兄兄猾之爲逆狀也聞天孫且到即起兵將襲望見皇師之威懼不敢敵乃潜伏其兵權作新宮而殿內施機欲因請饗以作難（頭注云）廢書名㡀機張 願知此詐善爲之備天皇即遣道臣命察其逆狀時道臣命審知有賊害之心而大怒誥嘖之曰虜爾所造屋爾自居之因案劒彎弓逼令催入兄猾獲罪於天事無所辭乃自踏機而壓死時陳其屍而斬之流血沒踝故號其地曰菟田血原已而弟猾大設牛酒以勞饗皇師焉（頭注云）漢書文帝紀上擧功行賞諸民里賜牛酒 後漢書馬援傳擊牛釃酒勞饗軍士 天皇以其酒完班賜軍卒乃爲御謠之曰

于儾能多伽機珥辭藝和奈破蘆和餓末菟夜辭藝破佐夜羅孺伊殊區波辭區施羅佐夜離固奈漭餓那居波佐麿多知曾麼能未廼那難句塢居氣辭被惠㢡宇破奈利餓那居波佐麼伊智佐介幾未廼於朋雞句塢居氣儾被惠㢡

（頭註云）詩新臺云魚網之設鴻則離之傳云所得非所求也 萬葉第五
百日しもゆかぬ松浦路けふ行てあすは來なむを何かさやれる
又云こやにさやりぬ 勇女（伊左奈）名細花香細共萬葉懸神紀由呢此云佐魔實倶 被惠㢡禮記少儀云兒爲宛脾皆猶而切之集注云猶而切之謂先爲大臠而後報切之爲膾也 又禮運陳豚集注擘析豚肉云云 和名抄云日本紀私記竹刀（阿乎比衣）言以竹刀剪金無滯也 古事記此歌總云疊々（音引）志夜胡志夜此者伊碁能而（此五字以音）阿々（音引）志夜古志夜此者嘲咲者也云々

是謂來目歌今樂府奏此歌者猶有手量大小及音聲巨細此古之遺式也

○冬十月癸巳朔天皇嘗其嚴瓮之粮勒兵而出先擊八十梟帥於國見丘破斬之是役也天皇志存必克乃爲御謠之曰

伽牟伽筮能伊齊能于瀰能於費異之珥夜異波臂茂等倍屢之多儾瀰能之多儾瀰能阿誤豫之多大瀰能異波比茂等倍離于智弖之夜莽務于智弖之夜莽務（頭注云）萬葉第二（長歌略）

渡會乃齋宮從神風爾伊吹惑之天雲乎日之目毛不令見常闇爾覆賜而定之水穗之國乎云々 同云机之島能小螺乎伊拾持來而石以都追伎破夫利 同第十九藤原太后賜入唐大使藤原清河御歌大舶爾眞梶繁貫此吾子乎云々

○謠意以大石喩其國見丘也既而餘黨猶繁其情難測乃顧勅道臣命汝宜帥大來目部作大室於忍坂邑盛設宴饗誘虜而取之道臣命於是奉密旨掘窨於忍坂（頭注云）提掘乎 而選我猛卒與虜雜居陰期之曰酒酣之後吾則起歌汝等聞吾歌聲則一時

刺レ虜已而坐定酒行虜不レ知ニ我之有ニ陰謀一任レ情徑醉時道臣命乃起而歌之曰

於佐箇廼於朋務露夜珥比苫瑳破而異離烏利苫毛比苫瑳破而枳伊離烏利苫毛瀰都瀰都志倶梅能固邏餓勾鶩都都伊異志都都伊毛智于智弖之夜莽務 （頭注云）和名抄城上郡忍坂

（於佐加）苫玉篇舒嬿切草名茅苫也　師説登廉の和訓の下略なり紀中迹津等以上三字用和訓　瀰都瀰都志今案瑞瑞也志助也瑞入坂瓊と云る瑞と同し祥瑞とつゝきたれば幸の意あるにや幸は物をほむる意あり和訓の意は今草さゝのうるはしくおい出人もわかやかにうるはしきをみる〳〵云りつとると音通こゝも久米子等かうるはしくみる〳〵とみゆるをほめていへるとみえたり　萬葉第三見津見津四久米能若子我伊觸家武磯之草根乃于卷惜裳　勾鶩今案今俗うはかぶきと云詞と同蕪甲是也今西國の人頭痛丼舟のゆるを共にかぶると云

時我卒聞レ歌俱拔ニ其頭椎劒一（頭注云）頭槌劒私記云劒名其頭曲　石椎私記云劒名頭似レ石一時殺レ虜虜無ニ復䠊類者一（頭注云）噍類後漢書云襄城無噍類言無復有活而噍食者也江次第大嘗會午日の宴會奏久米舞伴左佐伯右舞人廿人琴工六人如駿河舞終拔劒無歌以琴爲節　皇軍大悅仰レ天而咲因歌之曰

伊莽波豫伊莽波豫阿阿時夜塢伊莽儴而毛阿誤豫伊莽儴而毛阿誤豫

今來目部歌而後大哂是其緣也

又歌之曰

愛瀰詩烏毗儾利毛苫那比苫比苫破易陪廼毛多牟伽毗毛勢儒 （頭注云）皇極紀軍中之人相謂之曰一人當千謂三成

此皆承ニ密旨一而歌之非ニ敢自專一者也

○十有一月癸亥朔己巳皇師大擧將レ攻ニ磯城彥一云云

先レ是皇軍攻必取戰必勝而介胄之士不無ニ疲弊一故聊爲ニ御謠一以慰ニ將卒之心一焉謠曰

哆哆奈梅弖伊那瑳能椰摩能虛能莽由毛由豫者摩毛羅毗多多介陪磨和例破椰隈怒之摩途等利宇介譬餓等茂伊莽輸開珥虛禰 （頭注云）仲哀紀盾列陵（盾列此云多多那美）　聖德太子歌伊比爾慧氏云々　萬葉第十七楯並而伊豆美乃河波乃云云　萬葉第十七安由波之流奈能左加利等之廂都等里鵜養我登母波云々　當卷上云及緣水西汗亦有作梁取魚者天皇問之對曰臣是苞苴擔之子此則阿太養鵜部祖也

果以ニ男軍一越ニ墨坂一從レ後夾擊破之斬ニ其梟帥一兄磯城等ニ十有二月癸巳朔丙申皇師遂擊ニ長髓彥一連戰不レ能ニ取勝一云云昔孔舍衞之戰五瀨命中レ矢而薨天皇銜之常懷ニ憤懟一至ニ此役一也 （頭注云）文選四十九干令升晉總論向日役謂擧師 意欲ニ窮誅一乃爲御謠之曰

瀰都瀰都志倶梅能故邏餓介耆茂等珥阿波赴珥破介瀰羅毗苫茂苫曾廼餓毛苫曾禰梅屠那藝弖于笞弖之夜莽務

又謠之曰

瀰都瀰都志倶梅能故羅餓介耆茂等珥宇惠志破餌介彌句致弭比倶和例破浣輸例儒予智屯之夜莽務

因復縱兵忽攻之凡諸御謠皆謂來目歌此的取歌者而名之也 (頭注云)大嘗會儀式云巳日奏田舞(十人共舞)午日伴佐伯兩氏率舞人入自儀鸞門(左伴氏右佐伯氏五位以上四人別而列)就中庭床子(所司預設)奏久米舞(廿人二列而舞)訖退出次安部氏人(五位以上相別而列)奏古志舞(出入門并人數行列事同久米舞)

○御間城入彥五十瓊殖天皇八年夏四月庚子朔乙卯以高橋(頭注云、神名帳添上郡高橋神社)邑人活日為大神之掌酒冬十二月丙申朔乙卯天皇以大田田根子令祭大神是日活日自擧神酒獻天皇仍歌之曰

許能瀰枳破和餓瀰枳那羅孺椰磨等那殊於朋望能農之能介瀰之瀰枳伊句臂佐伊句臂佐 (頭注云)万葉第十八白酒黒酒しろきくろきさ點せりきさ計も酒の名也那殊は日本を作り成すなり

○如此歌之宴于神宮即宴竟之諸大夫等歌之曰

宇磨佐開瀰和能等能能阿佐妬珥毛伊弟弖由介那瀰和能等能渡嶋 (頭注云)和名抄云日本紀私記云神酒和語云美和

於茲天皇歌之曰

宇磨佐階瀰和能等能能阿佐妬珥毛於辭寐羅爾餌瀰和能等能渡嶋 (頭注云)萬葉第八事繁み君はきまさすほとゝきすなれたに來鳴け朝戶開かむ 介當集加さ計さ兩方に用たり 古事記仁德天皇段云參伏前殿戶者違出後戶參伏後殿戶違出前戶

即開神宮門而幸行之所謂大田田根子今三輪君等之始之祖也

○十年秋七月丙戌朔己酉詔群卿曰導民之本在於敎化也今既禮神祇災害皆耗然遠荒人等猶不受正朔 (頭注云)正朔始皇本紀文選干令升晋紀總論註正朔謂曆數也 是未習王化耳其選群卿遣于四方令知朕意九月丙戌朔甲午以大彥命遣北陸武渟川別遣東海吉備津彥遣西道丹波道主命遣丹波因以詔之曰若有不受敎者乃擧兵伐之既而共授印綬為將軍壬子大彥命到於和珥坂上時有少女歌之曰 一云大彥命到山背平坂時道側有童女歌之曰

瀰磨紀異利寐胡播揶飫迺餓烏塢志齊務苦農殊末句志羅珥比賣那素寐殊望於朋耆妬庸利于介伽卑氐許呂佐務苦須羅句塢志羅珥比賣那素寐須望 一云於朋耆妬庸利于介伽卑氐許呂佐務苦須羅句塢志羅珥比賣那素寐須望 (頭注云)比賣那素寐紀中表者也 次云香聟武埴安彥之妻吾田媛密來之取倭香山土裹領巾頭而祈曰是

倭國之物實則反之(物實此云望能志呂)是以知有事焉
於是大彦命異之問童女曰汝言何辭對曰勿言也
唯歌耳乃重詠先歌忽不見矣大彦乃還而具以狀
奏於是天皇姑(頭注云)和名抄爾雅云王父姊妹爲王姑(於保乎波)倭迹迹日百襲姬
命聰明叡智能識未然乃知其歌恠言于天皇是
武埴安彦將謀反之表者也云云於是更留諸
將軍而議之未幾時武埴安彦與妻吾田媛謀反
逆興師忽至　一說之意者武埴安彦之自外窺來天
欲殺乎大彦命之不知之由也大意同上歌只擧一說耳
○是後倭迹迹日百襲姬命(頭注云)百襲姬孝靈帝皇女崇神帝王姑焉倭迹迹姬孝元帝皇女崇神帝姑則別人也爲大物主神之妻然其神常晝不見而夜來矣
倭迹迹姬命語夫曰君常晝不見者分明不得視其
尊顏願暫留之明旦仰欲覲美麗之威儀大神對曰
言理灼然吾明旦入汝櫛笥而居願無驚吾形爰
倭迹迹姬命心裏密異之待明以見櫛笥遂有美麗
小蛇其長大如衣紐則驚之叫啼時大神有恥忽化
人形謂其妻曰汝不忍令羞吾吾還令羞汝仍
踐大虛登于御諸山(頭注云)今三輪若宮社若宮十三之時蠶入足跡菜社之數板現在右足跡有澀氣與今別也爰倭迹迹姬命仰見而悔之急居則箸撞陰

而薨乃葬於大市故時人號其墓謂箸墓(頭注云)今箸墓也現在是墓者日也人作夜也神作故運大坂山石而造則
自山至于墓人民相踵以手遞傳而運焉時人歌
之曰
飫明佐介珥菟藝廼煩例屢伊辭務邏烏多誤辭珥固佐摩
固辭介氏務(眞云介氏務さ訓む歟)介茂(頭注云)神名式葛下郡大坂山口神社和名抄葛上郡大坂　神代紀下天安河邊所在五百箇磐石
○六十年秋七月丙申朔己酉詔群臣曰武日照命從
天將來神寶藏于出雲大神宮是欲見焉則遣矢
田部造遠祖武諸隅而使獻當是時出雲臣之遠
祖出雲振根主于神寶是往筑紫國而不遇矣其弟
飯入根則被皇命以神寶付弟甘美韓日狹與子
鸕濡渟而貢上既而出雲振根從筑紫還來之聞神
寶獻于朝廷責其弟飯入根曰數日當待何恐之乎
輙許神寶是以既經年月猶懷恨忿有殺弟之
志仍欺弟曰頃者於止屋淵多生蔞願共行欲見則
隨兄而往之先是兄竊作木刀形似眞刀當時自
佩之弟佩眞刀共到淵頭兄謂弟曰淵水清冷
願欲共遊(游木)沐弟從兄言各解佩刀置淵邊

沐於水中一乃兄先上レ陸取二弟眞刀一自佩後二弟驚而取二兄木刀一共相撃矣弟不レ得レ拔二木刀一兄撃二弟飯入根一而殺之故時人歌之曰

揶句毛多菟伊頭毛多鷄流餓波鷄流多知菟頭邏佐波磨枳佐微那辭珥阿波禮

(頭注云)推古天皇御製云句禮能摩差比 私記云眞劔之名也師説摩差比眞鋤也神代紀上素戔烏尊乃以蛇韓鋤云々神武紀鋤持之神天武紀少子部連鉏(サヒ)劔古事記上云其和邇將返之時解所佩之劔小刀著其頸而返故其一尋和邇者於今謂佐比持神也

⊙大足彦忍代別天皇十七年春三月戊戌朔己酉幸二子湯縣一遊二于丹裳小野一時東方望之謂二左右一曰是國也直向二於日出方一故號二其國一曰二日向一也是日涉二野中大石一憶二京都一而歌之曰

波辭枳豫辭和藝幣能伽多由區毛位多知區暮夜摩苦波區珥能摩保羅摩多多儺豆久阿烏伽枳夜摩許莽例屢夜摩苦之于瀰破試異能知能摩曾祁務比苦破多多瀰許莽幣遇利能夜摩能志羅伽之餓延塢于受珥左勢許能固

(頭注云)師説波辭枳はなつかしくよしの意萬葉に多き詞也 禮記云玉佩垂則臣佩委 楚辭莊忌哀時命曰衣攝葉以儲與兮 萬葉第二多田名附柔膚尚乎 區珥能摩保羅摩 應神御製云區珥能朋母瀰喩云々 萬葉第十八須賣呂伎能可米能美許登能伎己之乎須久爾能麻保良爾云々此外第九にも見えたり私記に奥區也さいへる意は叶り萬葉第一疊有靑垣山第六高知爲芳野離者立名附靑墻隱第二田立名付靑垣山之隔者 古事記上云大國主神曰然者治奉之狀奈何答言吾者伊都伎奉于倭之靑垣東山上此者座御諸山上神也 萬葉第十九島山爾照在橘宇受爾左之仕奉者卿大夫等 第五古命之將全幸限忘日八 第十六薦疊平群乃阿曾我 又云八重疊平群乃山爾 古事記雄略天皇御製多多美許母幣具理能夜摩能許智碁知能夜麻賀比爾多知邪加由流波毗呂久麻加斯 又垂仁天皇段云故科二曙立王一令二宇氣比一曰云々 又在甜白梼之前葉廣熊白梼令宇氣比枯忽忽令宇氣比生云云

是謂二思邦歌一也

○十八年秋七月辛卯朔甲午到二筑紫後國御木一(頭注云)神代紀私記云古者謂木爲介 師説素戔烏尊の毛を拔散玉へるか身の所に依てさま〳〵の木さ成たれば木は毛の意なり 居二於高田行宮一時有二僵樹一長九百七十丈焉百寮蹈二其樹一而往來時人歌曰

阿佐志毛能瀰概能佐烏麿志魔幣菟耆瀰伊和多羅秀暮瀰開能佐烏麿志

(頭注云、鵲の渡せる橋におく霜の白きをみれば夜ぞ更にける(家持)人迹板橋霜

四十年夏六月東夷多叛邊境騷動云云於是日本武尊雄語之曰熊襲既平未レ經二幾年一今更東夷叛之何日逮二于大平一矣羣臣雖レ勞之頓平二其亂一云云爰日本武尊則從二上總一轉入二陸奥國一云云蝦夷既平自二日高見國一(頭注云)神名帳陸奥桃生郡日高見神社 還之西南歷二常陸一至二甲斐國一居二于酒折宮一時擧燭而進食是夜以レ歌之問二侍者一曰

珥比磨利菟玖波塢須擬氐異玖用加禰菟流

○諸侍者不能答言時有秉燭者續王歌之末而歌曰

伽餓奈倍氐用珥波虛虛能用比珥波苫塢伽塢　（頭注云）萬葉第一

馬數而（うまなへて）

即美秉燭人之聰而敦賞

○日本武尊於是始有痛身然稍起之還於尾張爰不入宮簀媛之家便移伊勢而到尾津（頭注云）和名抄伊勢桑名郡尾津（乎都）昔日本武尊向東之歲停尾津濱而進食是時解一劍置於松下遂忘而去今至於此劍猶存故歌曰

烏波利珥多陀珥務伽幣流比苫菟摩菟阿波例比等菟摩

菟比苫珥阿利勢磨岐農岐勢摩之塢多知波開摩之塢

（頭注云）古事記云到坐尾津前一松之許先御食時所忘其地御刀不失猶在云々

○氣長足姬尊攝政元年三月丙申朔庚子命武內宿禰和珥臣祖武振熊率數萬衆令擊忍熊王爰武內宿禰等選精兵從山背出之至菟道以屯河北忍熊王出營欲戰時有熊之凝者為忍熊王軍之先鋒則欲勸己衆因高唱之歌曰

烏智箇多能　（頭注云）神名帳宇治郡彼方神社　拾遺愚草彼方やはろけき道に雪つもり待夜かさなる宇治の橋姫

阿邏邏摩菟磨邏摩菟磨邏珥和多利喩祇弖菟區喩瀰珥

末利揶塢多具倍　（頭注云）末利揶鞠矢乎鋺矢乎鏑矢なるべし但古來の矢の名さ知べし

宇摩比等破　（頭注云）萬葉水薦苅信乃眞弓吾引者宇眞人佐備而不欲常將言可聞

于摩辟苫奴知野伊徒姑幡茂　（頭注云）古事記八千矛神御歌伊刀古夜能伊毛能美許等

伊徒姑奴池　（頭注云）萬葉第十六伊刀古名兄乃君

伊裝阿波那和例波多摩岐波屢于池能阿曾餓波

邏濃知波異佐誤阿例揶伊裝阿波那和例波　（頭注云）那　後漢韓康伯傳云公是韓伯休那註那餘語聲也音乃賀反　萬葉第五靈剋內限者自註云謂瞻浮洲人壽一百二十年也

時武內宿禰令三軍悉令推結因以號令曰各儲弦藏于髮中且佩木刀既而擧皇后之命誘忍熊王曰吾勿貪天下唯懷幼王從君王者也豈有距戰耶願共絕弦捨兵與連和焉然則君王登天業以安席高枕專制萬機則顯令軍中悉斷弦解刀投於河水忍熊王信其誘言悉令軍衆解兵投河水而斷弦爰武內宿禰令三軍出儲弦更張以佩眞刀度河進之忍熊王知被欺謂倉見別五十狹茅宿禰曰吾既被欺今無儲兵豈可得戰乎曳兵稍退武內宿禰出精兵而追之適遇于逢坂以破故號其處曰逢坂也軍衆走之

及于狹狹浪栗林（頭注云）龍馬樂鷹の子に栗津の原のみ栗栖の云々而多斬於是血流溢栗林故惡是事至于今其栗林之菓不進御所也忍熊王逃無所入則喚五十狹茅宿禰而歌之曰

伊裝阿藝伊佐智須區禰多摩枳波屢于知能阿會餓句夫菟智能伊多豆於破殫破珥倍廼利能介豆岐齊奈（頭注云）應神紀御製伊裝阿藝を古事記には伊邪古梯母につくる

則共沈瀬田濟而死之于時武內宿禰歌之曰

阿布彌能彌齊多能和多利珥伽豆區苦利梅珥志彌曳泥麼異枳廼倍呂之茂（頭注云）萬葉十九伊佐騰保流許己呂能宇知乎思延

於是探其屍而不得也然後數日之出於菟道河武內宿禰亦歌曰

阿布彌能彌齊多能和多利珥介豆區苦利多那加彌須疑弖于泥珥等邏倍菟（頭注云）谷上（たなかみ）雄略紀

○十三年春二月丁巳朔甲子命武內宿禰從太子令拜角鹿笥飯大神癸酉太子至自角鹿是日皇太后宴太子於大殿皇太后擧觴以壽于太子因以歌曰（頭注云）文選潘安仁閑居賦稱萬壽以獻觴善曰毛詩曰萬壽無疆史記曰武安君起爲壽如淳曰上酒爲稱壽

虛能彌企破和餓彌企那邏儒區之能伽彌等虛豫珥伊麻輸（頭注云）舊事本紀云少彦名命行到熊野之御碕適於常世國矣伊波多多須周玖那彌伽未能（頭注云）私記云少彦神是造酒神也今有其遺迹云等豫保枳保枳茂苦陪之訶武保枳保枳玖流保之摩菟利虛辭彌企層阿佐孺塢齊佐佐

（頭注云）審神私記云按古事記天皇控御琴而建內宿禰居於沙庭請神之命於是大后歸神言敎云々　師說沙者唱進之義也言出居神樂稱沙佐之庭也今代號撫琴人爲沙庭者少有意依相兼號耳　師說楚辭朱熹註此楚國祝語と云萬葉神樂浪をさゝなみと讀略して樂浪と書ても同じくよみたれば私記に出居神樂稱沙佐之庭也と注す合て祝語也

武內宿禰爲太子答歌之曰

許能彌企塢伽彌雞武比等破曾能菟豆彌（頭注云）菟菟彌私記云　師說古時曰邊立鼓以其聲助杵聲也師說大嘗會稻舂歌あり于輸珥多弖弖于多比菟菟伽彌雞梅伽墓許能彌企能阿椰珥于多娜濃芝枳沙

○譽田天皇六年春二月天皇幸近江國至菟道野上而歌曰（頭注云）古事記曰天皇幸近淡海國之時御立宇遲野上望葛野歌曰

知婆能伽豆怒塢彌例麼茂茂智儾儾夜珥波母彌喩逼珥能朋母彌喩（頭注云）和名抄山城國葛野（加止乃）郡葛野（加度乃）神武紀細戈千足國

十一年是歲有人奏之曰日向國有孃子名髮長媛即諸縣君（頭注云）和名抄日向國諸縣（牟良加多）郡牛諸井之女也是國色之秀者天皇悅之心裏欲覓十三年春三月天皇遣專使以

徵髮長媛。秋九月中髮長媛至自日向。便安置於桑津邑。（頭注云）和名抄攝津國豐島郡桑津（久波津）爰皇子大鷦鷯尊及見髮長媛。感其形之美麗。常有戀情。於是天皇知大鷦鷯尊感髮長媛而欲配。是以天皇宴于後宮之日。始喚髮長媛。因以上坐於宴席。時撝大鷦鷯尊。以指髮長媛。乃歌之曰

伊奘阿藝怒珥比蘆菟瀰珥比蘆菟瀰珥和餓喩區瀰智珥伽遇破志波那多智麼那（頭注云）萬葉第十香細寸花橘乎玉貫辭豆曳羅波比等未那等利（頭注云）等利郭公乎萬葉第九詠霍公鳥長歌云來鳴令響橘之花乎居令散云云保菟曳波等利委餓羅辭瀰菟遇利能那伽菟曳能府保語茂利阿伽例蘆烏等咩伊奘佐伽麼曳那

於是大鷦鷯尊蒙御歌。便知得賜髮長媛。而大悦之報歌之曰

瀰豆多摩蘆豫佐瀰能伊戒珥奴那波區利破陪雞區辭邏珥委遇比菟區伽破摩多曳能比辭餓羅能佐辭雞區辭羅珥阿餓許居呂辭伊夜于古珥辭豆

○大鷦鷯尊與髮長媛既得交慇懃。獨對髮長媛歌之曰

瀰知能之利古波儾烏等綿烏伽未能語等枳虛曳之介廼阿比摩區羅摩區

又歌之曰

瀰知能之利古破儾烏等綿阿羅素破儒泥辭區烏之敍于蘆波辭瀰茂布

○十九年冬十月戊戌朔。幸吉野宮。時國樔人來朝之。因以醴酒獻于天皇而歌之曰

伽辭能輔珥豫區周烏菟區利豫區周珥伽綿蘆於朋瀰枳宇摩羅珥枳虛之茂知烏勢磨呂餓智

歌之既訖。則打口以仰咲。今國樔獻土毛之日。歌訖即擊口仰咲者。蓋上古之遺則也。

○二十二年春三月甲申朔戊子。天皇幸難波。居於大隅宮。丁酉登高臺而遠望。時妃兄媛侍之。望西以大歎。於是天皇問兄媛曰。何爾歎之甚也。對曰。近日妾有戀父母之情。便因西望而自歎矣。冀蹔還之得省親歟。爰天皇愛兄媛篤溫凊之情。則謂之曰。爾不視二親既經多年。還欲定省於理灼然。則聽之。仍喚淡路御原之海人八十人為水手。送于吉備。夏四月兄媛自大津發船而往之。天皇居高臺。望兄媛之船。以歌之曰

阿波泥辭摩異椰敷多那羅阿豆枳辭摩異椰敷多那羅

珥豫呂辭枳辭魔之魔儴伽多佐例阿羅智之吉備那流伊慕𡨩阿比彌菟流慕能

○三十一年秋八月詔ニ羣卿ニ曰宮船名枯野者伊豆國所レ貢之船也是朽之不レ堪レ用然久爲ニ官用一功不レ可レ忘何其船名勿絕而得レ傳ニ後葉一焉群卿便被レ詔以令ニ有司一取ニ其船材一爲レ薪而燒鹽於是得ニ五百籠ノ鹽一則施之周賜ニ諸國一因令レ造レ船是以諸國一時貢ニ上五百船一悉集ニ於武庫水門一云云初枯野船爲ニ鹽薪一燒之日有ニ餘燼一則奇ニ其不レ燼而獻レ之天皇異以令レ作レ琴其音鏗鏘而遠聽是時天皇歌之曰

訶羅怒烏之褒珥揶枳之儴阿摩離虛等珥菟句離訶枳譬句揶由羅能斗能斗那訶能異句離珥敷例多菟那豆能紀能紀佐揶佐揶

○大鷦鷯天皇然後大山守皇子每恨ニ先帝廢之非一レ立而重有ニ是怨一則謀之曰我殺ニ太子一遂登ニ帝位一爰大鷦鷯尊預聞ニ其謀一密告ニ太子一備レ兵令レ守時太子設レ兵待レ之大山守皇子不レ知ニ其備一レ兵獨領ニ數百兵士一夜半發而行之會明詣ニ菟道一將レ渡レ河時太子服ニ布袍一取ニ檝櫓一密接ニ度子一以載ニ大山守皇子一而濟至ニ于河中一誂ニ度子一蹈レ船而傾於是大山守皇子墮レ河而沒更浮流之歌曰

知破揶臂苦于泥能和多利珥佐烏刀利珥破揶鷄務臂苦辭和餓毛胡珥虛務

然伏兵多起不レ得レ著レ岸遂沈而死焉令レ求ニ其屍一泛ニ於考羅濟一時太子視ニ其屍一歌曰

知破揶臂等于泥能和多利珥和多利涅珥多豆屢阿豆瑳由瀰摩由瀰伊枳羅牟苦虛虛呂破望閇耐伊斗羅牟苦虛虛呂破望閇耐望苦弊破枳瀰烏於望臂涅須惠弊破伊暮烏於望比涅伊羅那雞區曾虛珥於望比伽那志雞區虛虛珥於望臂伊枳羅儒曾區屢阿豆瑳由瀰摩由瀰

○十六年秋七月戊寅朔天皇以ニ宮人桑田玖賀媛一示ニ近習舍人等一曰朕欲レ愛ニ是婦女一苦ニ皇后之妬一不レ能レ合以經ニ多年一何徒棄ニ其盛年一乎即歌曰

瀰儺曾虛赴於瀰能鳥苦譬鳥多例揶始儺播務

於是播磨國造祖速待獨進之歌曰

瀰箇始報破利摩破揶摩智以播區娜輸加之古倶等望阿例揶始儺破務

即日以ニ玖賀媛一賜ニ速待一

○二十二年春正月天皇語ニ皇后一曰納ニ八田皇女一將爲レ妃時皇后不レ聽爰天皇歌以乞ニ於皇后一曰

于磨臂苦能多菟廈虛等太亘于瑳由豆流多曳磨菟餓務
珥奈羅倍亘毛餓毛

皇后答歌曰

虛呂望虛曾赴多鱉茂豫耆瑳用廼虛烏那羅陪務耆瀰破
介辭古耆呂介茂

天皇又歌曰

於辭亘廈那珥破能瑳耆能那羅弭破蕃那羅倍務苦虛層
層能古破阿利雞梅

皇后答歌曰

那菟務始能譬務始能古呂望赴多鱉耆亘介區瀰夜儴利
破阿珥豫區望阿羅儒

天皇又歌曰

阿佐豆磨能避介能烏瑳介烏介多那耆瑳珥致喩區茂能
茂多愚譬亘序豫枳

皇后遂謂不聽故默之亦不答言

○三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀國到熊野岬即取其處之御綱葉而還於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中時皇后到難波濟聞天皇合八田皇女而大恨之則其所採御綱葉投於海而不著岸故時人號散葉之海曰葉濟也爰天皇不知皇后忿不著岸故時親幸大津待皇后之船而歌曰

那珥波譬苦須儒赴泥苦羅齊許辭那豆瀰曾能赴尼苦羅
齊於朋瀰赴泥苦禮

時皇后不泊于大津更引之泝江自山背廻而向倭明日天皇遣舍人鳥山令還皇后乃歌之曰

夜莽之呂珥伊辭雞苦利夜莽伊辭雞之雞阿餓茂赴菟磨
珥伊辭枳阿波牟伽茂

皇后不還猶行之至山背河而歌曰

菟藝泥赴揶莽之呂餓波烏箇破能朋利涴餓能朋例磨箇
波區莽珥多知瑳介踰屢毛毛多羅儒揶素磨能紀破於朋
耆瀰呂介茂

即越那羅山望葛城歌之曰

菟藝泥赴揶莽之呂餓波烏瀰揶能朋利和餓能朋例磨阿
烏珥豫辭儺羅烏輸疑烏陀亘夜莽苦烏輸疑和餓瀰餓朋
辭區珥波箇豆羅紀多伽瀰揶和藝弊能阿多利

更還山背興宮室於筒城岡南而居之

○冬十月甲申朔遣的臣祖口持臣喚皇后爰口持臣至筒城宮雖謁皇后而默之不答時口持臣沾雪雨以經日夜伏于皇后殿前而不避於是口持

臣之妹國依媛仕于皇后適是時侍皇后之側見其兄沾雨而流潦之歌曰

揶麻辭呂能莵莬紀能瀰揶珥茂能莽鳥輸和餓齊鳥瀰例麼那瀰多愚摩辭茂

時皇后謂國依媛曰何汝泣之對言今伏庭請謁者妾兄也沾雨不避猶伏將謁是以泣悲耳時皇后謂之曰告汝兄令速還吾遂不返焉口持則返復奏于天皇

○十一月甲寅朔庚申天皇浮江幸山背時桑枝沿水而流之天皇視桑枝歌之曰

莵怒瑳破赴以破能臂謎誐飫朋呂伽珥枳許瑳怒于羅愚破能紀豫屢麻志口枳箇破能區莾愚瑳豫呂朋譬喩玖伽茂于羅愚破能紀

明日乘輿詣于筒城宮喚皇后皇后不參見時天皇歌曰

莵藝泥赴揶摩之呂謎能許久波茂知于智辭於朋泥佐和佐和珥儺餓伊弊齊虚曾于知和多須那餓波曳儺須企以利摩韋區例

又歌曰

莵藝泥赴夜莽之呂謎能許玖波茂智于智辭於朋泥泥士漏能辭漏多娜武枳摩箇儒鷄磨虚曾辭羅儒等茂伊波梅

時皇后令奏言陛下納八田皇女為妃其不欲副皇女而為后遂不奉見乃車駕還宮天皇於是恨皇后大怒而猶有戀思

○四十年春二月納雌鳥皇女欲為妃以隼別皇子為媒時隼別皇子密親娶而久之不復命於是天皇不知有夫而親臨雌鳥皇女之殿時為皇女織縑女人等歌之曰

比佐箇多能阿梅箇儺麼多謎謎利餓於瑠箇儺麼多波椰歩佐和氣能瀰於須譬鵜泥

爰天皇知隼別皇子密婚而恨之然重皇后之言亦敦于支之義而忍之勿罪（古事記曰天皇直幸女鳥王之所坐而坐其殿戸之閾上於是女鳥王座機而織服）俄而隼別皇子枕皇女之膝以臥乃語之曰孰捷鷦鷯與隼焉曰隼捷也乃皇子曰是我所先也天皇聞是言更亦起恨時隼別皇子之舍人等歌曰

破夜歩佐波阿梅珥能朋利等弭箇慨梨伊莵岐餓宇倍能娑狹岐等羅佐泥（頭注云）婆恐娑乎

天皇聞此歌（頭注云）此當作是而勃然大怒之曰朕以私恨不欲失親忍之也何舋矣私事將及于社稷則欲

殺隼別皇子。時皇子娶鵯鳥皇女欲納伊勢神宮而馳。於是天皇聞隼別皇子逃走、即遣吉備品遲部雄鯽播磨佐伯直阿俄能胡曰、追之所逮即殺。云云 雄鯽等追之至菟田迫於素珥山。時隱草中僅得免急走而越山。於是皇子歌曰

破始多亘能佐餓始枳揶摩茂和藝毛古等赴駄利古喩例磨揶須武志呂固茂

爰雄鯽等知免以急追及于伊勢蔣代野而殺之

○五十年春三月壬辰朔丙申河内人奏言於茨田堤鴈產之。即日遣使令視曰既實也。天皇於是歌以問武内宿禰曰

多莽耆破屢宇知能阿曾儺虛曾破豫能等保臂等儺虛曾破區珥能那餓臂等阿耆豆辭莽揶莽等能區珥珥箇利古武等儺波企箇輸揶

武内宿禰答歌曰

夜輸瀰始之和我於朋枳瀰波宇倍于儺倍儺和例烏斗波輸儺阿企菟辭摩揶莽等能倶珥珥箇利古武等和例波枳箇儒

○去來穗別天皇大鷦鷯天皇崩皇太子自諒闇出之未即皇位之間以羽田矢代宿禰之女黑媛欲為妃納采既訖遣住吉仲皇子而告吉日。時仲皇子冒太子名以奸黑媛。是夜仲皇子忘手鈴於黑媛之家而歸焉。明日之夜太子不知仲皇子自奸而到乃入室開帳居於玉床。時床頭有鈴音。太子異之問黑媛曰何鈴也。對曰昨夜之非太子所賷鈴乎。何更問妾。太子自知仲皇子冒名以奸黑媛則默避也。爰仲皇子畏有事將殺太子密興兵圍太子宮。時平群木菟宿禰物部大前宿禰漢直祖阿知使主三人啓於太子。太子不信。一云太子醉以不起 故三人扶太子令乘馬而逃之。一云大前宿禰抱太子而乘馬 仲皇子不知太子不在而焚太子宮。通夜火不滅。太子到河内國埴生坂而醒之顧望難波見火光而大驚則急馳之自大坂向倭至于飛鳥山遇少女於山口問之曰此山有人乎。對曰執兵者多滿山中。宜廻自當摩徑踰之。太子於是以為聆少女言而得免難。則歌之曰

於朋佐箇珥阿布夜烏等謎烏瀰知度沛磨哆駄珥破能邏孺哆嗜摩知烏能流

○雄朝津間稚子宿禰天皇八年春二月幸于藤原密察衣通郎姬之消息。是夕衣通郎姬戀天皇而獨居。其不知天皇之臨而歌曰

和俄勢故俄勾倍枳豫臂奈利佐瑳俄泥能區茂能於虛奈比虛豫比辭流辭毛

天皇聆是歌則有感情而歌之曰

佐瑳羅餓多邇之枳能臂毛弘等枳舍氣帝阿麻多絆𣾰受邇多儀比等用能末

迹イ　ロイ

明旦天皇見井傍櫻華而歌之曰

波那具波辭佐區羅能梅涅許等梅涅磨波揶區波梅涅孺和我梅豆留古羅

皇后聞之且大恨也

○十一年春三月癸卯朔丙午幸於茅渟宮衣通郎姬歌之曰

等虛辭倍邇枳彌母阿閇揶毛異舍儺等利宇彌能波摩毛能余留等枳等枳弘

時天皇謂衣通郎姬曰是歌不可聆他人皇后聞必大恨故時人號濱藻謂奈能利曾毛也

○二十三年春三月甲午朔庚子立木梨輕皇子爲太子容姿佳麗見者自感同母妹輕大娘皇女亦艶妙也太子恒念合大娘皇女畏有罪而默之然感情既盛殆將至死爰以爲徒非死者雖有罪何得忍乎遂竊通乃悒懷少息因以歌之曰

阿資臂紀能揶摩娜烏菟區利揶摩娜箇彌斯哆媚烏和之勢志哆那企貳和俄儺俱菟摩箇哆儺企貳和俄儺俱菟摩去鐏去曾揶主區泮娜布例

○二十四年夏六月御膳羹汁凝以作氷天皇異之卜其所由卜者曰有内亂蓋親親相奸乎時有人曰木梨輕太子奸同母妹輕大娘皇女因以推問焉辭既實也太子是爲儲君不得罪則流輕大娘皇女於伊豫是時太子歌之曰

於褒企彌烏志摩珥波夫利布儺阿摩利異餓幣利去牟鋤和餓哆哆瀰由梅去等烏許曾哆哆瀰等異絆梅和餓烏菟摩烏由梅

又歌曰

阿摩儾霧箇留惋等賣異哆儺介麼臂等資利奴陪瀰幡舍能夜摩能波刀能資哆儺企邇奈句

○穴穗天皇是時太子行暴虐淫于婦女國人謗之群臣不從悉隸穴穗皇子爰太子欲襲穴穗皇子而密設兵穴穗皇子復興兵將戰故穴穗括箭輕括箭始起于此時也時太子知群臣不從百姓乖違乃出之匿物部大前宿禰之家穴穗皇子聞則圍之大前宿

禰出レ門而迎之穴穗皇子歌之曰
於朋摩弊烏摩弊輪區泥餓訶那杜加礙訶區多智豫羅涅
阿梅多知夜梅牟
古事記曰穴穗御子興レ軍圍ニ大前小前宿禰之家一爾到ニ其門一時零ニ大冰雨一故歌曰
大前宿禰答歌之曰
瀰椰比等能阿由臂能古輸廼於智瑘岐等瀰椰比等等豫
牟佐杜弭等茂由梅
乃啓ニ皇子一曰願勿ニ害太子一臣將レ議由レ是太子自
死ニ于大前宿禰之家一
○大泊瀨幼武天皇是日大舍人驟言ニ於天皇一曰穴穗天
皇爲ニ眉輪王一見レ殺天皇大驚即猜ニ兄等一被レ甲帶
レ刀率レ兵自將逼ニ問八釣白彥皇子一見ニ其欲一レ害嘿
坐不レ語天皇乃拔レ刀而斬更逼ニ問坂合黑彥皇子一
皇子亦知レ將レ害嘿坐不レ語天皇忿怒彌盛乃復並爲
レ欲レ殺ニ眉輪王一案ニ劾所由一眉輪王曰臣元不レ求ニ天
位一唯報ニ父仇一而已坂合黑彥皇子深恐レ所レ疑竊語ニ
眉輪王一遂共得レ間而出逃ニ入圓大臣宅一天皇使
レ使乞之大臣以レ使報曰蓋聞人臣有レ事逃入ニ王室一
未レ見ニ君王隱ニ匿臣舍一方今坂合黑彥皇子與ニ眉輪
王一深恃ニ臣心一來ニ臣之舍一詎忍送歟由レ是天皇復益

興レ兵圍ニ大臣宅一大臣出ニ立於庭一索ニ脚帶一時大臣,
妻持ニ來脚帶一愴矣傷懷而歌曰
飫瀰能古簸多倍能婆伽摩烏那那陛鳴施爾播爾陀陀始
諦阿遙比那陀須暮
大臣裝束已畢進ニ軍門一跪拜曰臣雖ニ被戮一莫ニ敢
聽一命古人有レ云匹夫之志難レ可レ奪方屬ニ乎臣一伏願
大王奉ニ獻臣女韓媛與ニ葛城宅七區一請ニ以贖一レ罪天
皇不レ許縱レ火燔レ宅於是大臣與ニ黑彥皇子眉輪王一
俱被ニ燔死一
○四年秋八月辛卯朔戊申行ニ幸吉野宮一庚戌幸ニ于河
上小野一命ニ虞人一（山司）駈レ獸欲ニ躬射一而待虻疾飛來噆ニ
天皇臂一於レ是蜻蛉忽然飛來齧レ虻將去天皇嘉ニ厥
有レ心詔ニ群臣一曰爲レ朕讚ニ蜻蛉一歌賦之群臣莫ニ能
敢賦者一天皇乃口號曰
野麼等能鳴武羅能陀該爾之之符須登拖例柯擧能居登
飫褒麼陛爾麻烏須（一本易飫褒枳彌爾摩鳴須）飫褒枳瀰簸賦據鳴枳舸
斯題拖麿磨枳能阿娛羅爾陀陀伺（一本易伊麻伺）施都摩枳能阿
娛羅爾陀陀伺斯斯魔都登倭我伊麻西磨佐謂麻都登倭
我陀陀西磨陀俱符羅爾阿武柯枳都枳都曾能阿武鳴婀

枳豆波野倶譬波賦武志謀飫褒枳瀰儞摩都羅符儺我柯
陀播於柯武娜岐豆斯麻野麻登

一本以波賦武志謀以下易飼矩能御等儺儞於婆武登蘇羅瀰豆野摩等能矩儞嗚娜岐豆斯麻登以符　因讚蜻蛉名此地爲蜻蛉野

○五年春二月天皇狡于葛城山靈鳥忽來其大如雀尾長曳地而且鳴曰努力努力俄而見逐嗔猪從草中暴出追人獵徒緣樹大懼天皇詔舍人曰猛獸逢人則止宜逆射而且刺舍人性懦弱緣樹失色五情無主嗔猪直來欲噬天皇天皇用弓刺止 刿(本) 擧脚踏殺於是田罷欲斬舍人舍人臨刑而作歌曰

野須瀰斯志倭我飫褒枳瀰能阿蘇磨斯志斯斯能宇拖枳
舸斯固瀰倭我尼凝能褒利志阿理嗚能宇倍能婆利我曳
陀阿西嗚

皇后聞悲興感止之詔曰皇后不與天皇而顧舍人對曰國人皆謂陛下安野而好獸無乃不可乎今陛下以嗔猪故而斬舍人陛下譬無異於豺狼也天皇乃與皇后上車歸呼萬歲曰樂哉人皆獵禽獸朕獵得善言而歸

○六年春二月壬子朔乙卯天皇遊于泊瀬小野觀山野之體勢慨然興感歌曰

舉暮利矩能播都制能野磨播伊麻拖智能與盧斯企野磨
和斯里底能與盧斯企野磨能據暮利矩能播都制能夜麻
播阿野儞于羅虞波斯阿野儞于羅虞波斯

於是名小野曰道小野

○十二年冬十月癸酉朔壬午天皇命木工鬭鷄御田始起樓閣於是御田登樓疾走四方有若飛行時有伊勢采女仰觀樓上怪彼疾行顛仆於庭覆所擎饌（饌者御膳之物也）天皇便疑御田奸其采女自念將刑而付物部時秦酒公侍坐欲以琴聲使悟於天皇橫琴彈曰

柯武柯筮能伊勢能伊勢能奴能娑柯曳嗚伊褒甫流柯枳
底志我都矩屢麻泥儞飫褒枳瀰儞柯拖倶都柯倍摩都羅
武騰倭我伊能致謀那我倶母鵝騰伊比志拖倶瀰儞夜阿
陁羅陁倶彌儞夜

於是天皇悟琴聲而赦其罪

○十三年春三月狹穗彥玄孫齒田根命竊奸采女山邊小嶋子天皇聞以齒田根命收付於物部目大連而使責讓齒田根命以馬八疋太刀八口祓除罪過既而歌曰

耶摩能謎能故思摩古喩衛尒比登泥羅賦宇摩能耶都擬播鳴思稽矩謀那斯

○秋九月木工猪名部眞根以石爲質揮斧劉材終日劉之不誤傷刃天皇遊詣其所而恠問曰恒不誤中石耶眞根答曰竟不誤矣乃喚集采女使脱衣裙而著犢鼻露所相撲於是眞根暫停仰視而劉不覺手誤傷刃天皇因責讓曰何處奴不畏朕用不貞心妄輙答仍付物部使刑於野爰有同伴巧者歎惜眞根而作歌曰

婀拕羅斯枳偉儺謎能陀倶彌柯該志須彌儺皤旨我那稽磨拕例柯柯該武預婀拕羅須彌儺皤

天皇聞是歌反生悔惜喟然頽歎曰幾失人哉乃以赦使乘於甲斐墨駒馳詣刑所止而赦之用解徽纒復作歌曰

農播拕摩能柯彼能矩盧古摩矩羅枳制播伊能致志儺摩志（一本云伊志柯播阿羅摩志）柯彼能倶盧古摩

○二十三年七月辛丑朔天皇寢疾不豫云々是時征新羅將軍吉備臣尾代行至吉備國過家後所率五百蝦夷等聞天皇崩乃相謂之曰領制吾國天皇既崩時不可失也乃相聚結侵寇傍郡於是尾代從家來會蝦夷於娑婆水門合戰而射蝦夷等或踊或伏能避脱箭終不可射是以尾代空彈弓弦於海濱上射殺踊伏者二隊二嚢之箭既盡即喚船人索箭船人恐而自退尾代乃立弓執末而歌曰

瀰致儞阿賦耶鳴之盧能古阿毎儞擧會枳擧曳儒阿羅毎矩儞儞播枳擧曳底那

唱訖自斬數人更追至丹波國浦掛水門盡逼殺之

弘計天皇久居邊裔悉知百姓憂苦云々穴穗天皇三年十月天皇父市邊押磐皇子及帳內佐伯部仲子於蚊屋野爲大泊瀬天皇見殺因埋同穴於是天皇與億計王聞父見射恐懼皆逃亡自匿云々天皇勸兄億計王向播磨國赤石郡倶改字曰丹波小子就仕於縮見屯倉首云々白髮天皇二年冬十一月播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡親辨新嘗供物適會縮見屯倉首縱賞新室以夜繼晝尒乃天皇謂兄億計王曰避亂於斯年踰數紀顯名著貴方屬今宵億計王惻然歎曰其自導揚見害孰與全身免厄（頭注云厄一作危）也歟天皇曰吾是去來穗別天皇之孫而困事於人飼牧牛馬豈

若顯名被害也歟遂與億計王相抱號泣不能自禁億計王曰然則非弟誰能激揚大節可以顯著○天皇固辭曰僕不才豈敢宣揚德業億計王曰弟英才賢德爰無以過如是相讓再三而果使天皇自許稱述俱就室外居乎下風屯倉首命居竈傍左右秉燭夜深酒酣次第儛訖屯倉首謂小楯曰僕見此秉燭者貴人而賤己先人而後己恭敬撙節退讓以明禮可謂君子於是小楯撫絃命秉燭者曰起儛於是兄弟相讓久而不起小楯嘖之曰何爲太遲速起儛之億計王起儛既了天皇次起

自整衣帶爲室壽曰

築立稚室葛根築立柱者此家長御心之鎭也取舉棟梁者此家長御心之林也取置椽橑者此家長御心之齊也取置蘆雚者此家長御心之平也取結繩葛者此家長御壽之堅也取葺草葉者此家長御富之餘也出雲者新墾新墾之十握稻之穗於淺甕釀酒美飲喫哉吾子等子者男子之通稱也脚日木此傍山牡鹿之角舉而吾儛者旨酒餌香市不以直買手掌憀亮拍上賜吾常世等

壽畢乃起節歌曰

伊儺武斯廬褐簸泝比野儺擬寐逗喩凱磨儺耶企於己陀智曾能泥播宇世儒

小楯謂之曰可怜願復聞之天皇遂作殊儛殊儛古謂立出儛立出此云陀豆豆儛狀者乍起乍居而儛之誥之曰倭彼彼茅原淺茅原弟日僕是也小楯由是深奇異焉更使唱之天皇誥之曰石上振之神榲伐本截末於市邊宮治天下天萬國萬押磐尊御裔僕是也小楯大驚離席悵然再拜承事供給率屬欽伏於是悉發郡民造宮不日權奉安置乃詣京都求迎二王白髮天皇聞憙咨歎曰朕無子也可以爲嗣與大臣大連定策禁中仍使播磨國司來目部小楯持節將左右舍人至赤石奉迎白髮天皇三年春正月天皇隨億計王到攝津國使臣連持節以王青蓋車迎入宮中

古事記云弟將儛時爲詠曰物部之我夫子之取佩於太刀之手上丹畫著其緒者載赤幡立赤幡見者五十隱山三尾之竹矣訶岐苅末押磨魚簀如調八絃琴所治賜天下伊邪本和氣天皇之御子市邊之押齒王之末奴

○春正月白髮天皇崩是月皇太子億計王與天皇讓位久而不處由是天皇姉飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政自稱忍海飯豐青尊當世詞人

歌曰

野麻登陛爾我保指母能婆於戸農瀰能莒能拖苛紀儺屢都奴婆之能瀰野

冬十一月飯豐青尊崩

○元年二月戊戌朔壬寅詔曰先王遭離多難殞命荒郊朕在幼年亡逃自匿猥遇求迎外纂大業廣求御骨莫能知者詔畢與皇太子億計泣哭（頭注云、計泣之間脱王字乎）憤惋不能自勝是月召聚耆宿天皇親歷問有一老嫗進曰置目知御骨埋處請以奉示（置目老嫗名也）（近江國狹狹城山君祖倭帒宿禰妹之名曰置目）於是天皇與皇太子億計將老嫗婦幸于近江國來田綿蚊屋野中掘出而見果如婦語云々詔老嫗置目居于宮傍近處優崇賜䘏使無乏少是月詔曰老嫗伶俜羸弱不便行步宜張繩引絚扶而出入繩端懸鐸無勞謁者入則鳴之朕知汝到於是老嫗奉詔鳴鐸而進天皇遙聞鐸聲歌曰

阿佐膩簸羅嗚贈禰嗚須擬謨謀逗拖甫奴底喩羅倶慕與於岐毎倶羅之慕

○二年九月置目老困乞還曰氣力衰邁老耄虛羸要假扶繩不能進步願歸桑梓以送厥終天皇聞惋痛賜物千段逆傷岐路重感難期乃賜歌曰

於岐毎慕與阿甫彌能於岐毎阿須用利簸彌野磨我倶利底彌曳孺賀謨阿羅牟

○小泊瀨稚鷦鷯天皇億計天皇崩大臣平群眞鳥臣專擅國政欲王日本云々於是太子思欲聘物部麁鹿火大連女影媛遣媒人向影媛宅期會影媛曾奸眞鳥大臣男鮪恐違太子所期報曰妾望奉待海柘榴市巷由是太子欲往期處遣近侍（奉仕）舍人就平群大臣宅奉太子命求索官馬大臣戲言陽進曰官馬爲誰飼養隨命而已久之不進太子懷恨忍不發顏（御心中に）果之所期立歌場衆執影媛袖躑躅從容俄而鮪臣來排太子與影媛間立於是太子放影媛袖移廻向前立直當鮪歌曰

之褒世能（一本易彌儺斗）儺鳴理鳴彌黎磨阿蘇寐倶屢思寐我簸多泥儞都摩陀弖理彌喩

鮪答歌曰

飫瀰能古能耶陛耶賀羅賀枳瑜屢世登耶瀰古

太子歌曰

飫裒拖摂嗚多黎播枳多撥弖農賀儒登慕須衛婆陀志弖
謀阿婆夢登茹於謀賦

鮪臣答歌曰
儆裒枳瀰能耶陛能矩瀰賀枳賀賀梅騰謀儺嗚阿摩之耳
瀰賀賀農俱瀰柯枳

太子歌曰
於瀰能姑能耶賦能之摩賀枳（一本易耶陛賀羅賀枳）始陀騰余瀰那
爲我與虚據魔耶㯒夢之麿柯枳

太子贈影媛歌曰
擧騰我瀰儞枳謂屢箇皚比謎拖摩儺羅磨婀我裒屢拖摩
能婀波寐之羅陀魔

鮪臣爲影媛答歌曰
於裒枳瀰能瀰於寐能之都波拖夢須寐陀黎陀黎耶始比
登謀阿避於謀婆儺俱儞

太子甫知鮪曾得影媛悉覺父子無敬之狀赫然
大怒此夜速向大伴金村連宅會兵計策大伴連將
數千兵徼之於路斬鮪臣於乃樂山是時影媛。逐（本）
追行戮處見是戮已驚惶失所悲淚盈目遂作
歌曰

伊須能箇瀰賦屢嗚須擬底擧慕摩矩羅拖箇幡志須擬慕
能娑播儞於裒野該須擬播屢比能箇須我須擬逗摩御慕
屢嗚佐裒嗚須擬拖摩該儞播伊比佐倍母理拖摩慕比儞
瀰逗佐倍母理儺岐曾裒遲喩俱謀柯哿比謎阿婆例

於是影媛收埋既畢臨欲還家悲鯁而言苦哉今日
失我愛夫即便灑涕愴矣纏心歌曰
婀嗚儞與志乃樂能婆娑摩儞斯斯貳暮能瀰逗矩陛御暮
利瀰儺曾曾矩思寐能和俱吾嗚阿娑理逗那偉能古

○男大迹天皇七年九月勾大兄皇子親聘春日皇女
於是月夜清談不覺天曉斐然之藻忽形於言乃口
唱曰
野絁摩俱儞都摩摩都賀泥底播屢比能賀須我能俱儞儞
俱婆絁謎嗚阿利等枳枳底與慮志謎嗚阿利等枳枳底
紀佐俱避能伊陀圖嗚飫斯毗羅枳倭例以梨魔志阿都圖
利都摩怒利絁底魔俱羅圖利都魔怒利絁底伊慕我堤嗚
倭例儞魔柯絁毎倭我堤嗚麼伊慕儞魔柯絁毎摩左棄逗
羅多多企阿藏播梨矢泊㒵（本）矩矢慮于魔伊禰矢度禰儞
播都等利柯稽播儺俱儺梨奴都等利枳蟻矢播等余武波
絁稽矩謨伊麻娜以播孺底阿開儞啓梨倭蟻慕

○妃和唱曰

莒母利矩能簸都細能賀婆庾那我例俱屢駄開能以矩美娜開余嚢開謨等等陛嗚磨莒等儞都俱利須衞陛嗚磨府曳儞都俱利府企儺須美母慮我紆倍儞能明梨陀致倭我彌細磨都奴婆播府以簸例能伊開能美儺矢駄府紆嗚謨紆倍儞堤堤那皚矩野須美矢矢倭我於朋枳美能於魔細屢婆佐羅能美於寐能武須彌陀例駄例夜矢比等母紆陪儞泥堤那皚矩

○二十四年冬十月調吉士至自任那奏言毛野臣爲人傲佷不閑政體意無和解擾亂加羅又倜儻任意而思不防患故遣目頰子徵召是歲毛野臣被召到于對馬逢疾而死送葬尋河而入近江其妻歌曰

比攞哿駄喩輔曳輔枳能朋樓阿符美能野愷那能倭俱吾伊輔曳符枳能朋樓

目頰子初到任那時在彼鄉家等賜歌曰

柯羅屢儞嗚以柯儞輔居等所梅豆羅古枳駄樓武哿左屢樓以祇能和駄利嗚梅豆羅古枳駄樓

○天國排開廣庭天皇二十三年秋七月遣大將軍紀男麻呂宿禰將兵出哆唎副將河邊臣瓊缶出居曾山而欲問新羅攻任那之狀云々河邊臣瓊缶獨進轉鬪所向皆拔新羅更擧白旗投兵降首河邊臣瓊缶元不曉兵對擧白旗空尒獨進新羅鬪將曰將軍河邊臣今欲降矣乃進軍逆戰盡銳遄攻破之前鋒所傷甚衆倭國造手彥自知難救棄軍遁逃新羅鬪將手持鉤戟追至城洫運戟擊之手彥因騎駿馬超渡城洫僅以身免云々於是河邊臣遂引兵退急營於野於是士卒盡相欺蔑莫有遵承鬪將自就營中悉生虜河邊臣瓊缶等及其隨婦于時父子夫婦不能相恤鬪將問河邊臣曰汝命與婦孰與尤愛答曰何愛一女以取禍乎如何不過命也遂許爲妾鬪將遂於露地姧其婦女婦女後還河邊臣欲就談之婦人甚以慙恨而不隨曰昔君輕賣妾身今何面目以相遇遂不肯言是婦人者坂本臣女曰甘美媛同時所虜調吉士伊企儺爲人勇烈終不降服新羅鬪將拔刀欲斬逼而脫褌追（頭注云）追一作令以尻臀向日本大號叫（叫咷也）曰日本將嚙我臗脽即號叫曰新羅王啗我臗脽雖被苦逼尙如前叫由是見殺其子舅子亦抱其父而死伊企儺辭旨難奪皆如此由此特爲諸將帥所痛惜

其妻大葉子亦見二禽愴然而歌曰

柯羅俱爾能基能倍爾陀致底於譜磨故播比例甫囉須母耶魔等爾武岐底

或有和曰（頭注云有一作者）

柯羅俱爾能基能倍爾陀陀志於譜磨故幡比禮甫羅須彌喩那爾婆陛武岐底

○豐御食炊屋姫天皇二十二年〇日本紀作二十年春正月辛巳朔丁亥置レ酒宴二群卿一是日大臣上レ壽歌曰

夜須瀰志斯和餓於朋者瀰能訶句理摩須阿摩能揶蘇訶礙異泥多多須瀰蘇羅嗚瀰禮磨豫呂豆余珥訶句志茂餓茂知余珥茂訶句志茂餓茂知余珥茂訶句志茂餓茂訶之胡瀰弖菟伽倍摩都羅武烏呂餓瀰弖菟餓倍摩都羅武宇多豆紀摩都流

天皇和曰

摩蘇餓豫蘇餓能古羅破宇摩奈羅磨譬武伽能古摩多智奈羅磨句禮能摩差比宇倍之能訶茂蘇餓能古羅烏於朋枳瀰能菟伽破須羅志枳

○二十一年冬十月自二難波一至レ京置二大道一十二月庚午朔皇太子遊二行於片岡一時飢者臥二道垂一仍問二姓名一而不レ言皇太子視之與二飲食一即脫二衣裳一覆二飢者一而言安臥也則歌之曰

斯那提流箇多烏箇夜摩爾伊比爾惠弖許夜勢屢諸能多比等阿波禮於夜那斯爾那禮奈理鷄迷夜佐須陀氣能枳彌波夜那祇伊比爾惠弖許夜勢留諸能多比等阿波禮

辛未皇太子遣レ使令レ視二飢者一使者還來之曰飢者既死爰皇太子大悲之則因以葬二埋於當處一墓固封也數日之後皇太子召二近習者一謂之曰先日臥二于道一飢者其非二凡人一爲必眞人也遣レ使令レ視於是使者還來之曰到二於墓所一而視之封埋勿レ動乃開以見二屍骨一既空唯衣服疊置二棺上一於是皇太子復返二使者一令レ取二其衣一如レ常且服矣時人大異之曰聖之知レ聖其實哉逾惶

息長足日廣額天皇於是摩理勢臣進無レ所レ歸乃立泣哭更還之居二於家一十餘日泊瀨王忽發レ病薨爰摩理勢臣曰我生之誰恃矣大臣將レ殺二境部臣一而興レ兵遣之境部臣聞二軍至一率二仲子阿椰一出二于門一坐二胡牀一而待時軍至乃令二來目物部伊區比一以絞之父子共死乃埋二同處一唯兄子毛津逃二匿于尼寺瓦舍一即奸二一二尼一於是一尼嫉妬令レ顯圍レ寺將レ捕乃出之

入畝傍山因以探山毛津走無所入刺頸而死
山中時人歌曰
于泥備椰摩虚多智于須家苫多能瀰介茂氣菟能和區呉
能虚茂羅勢利祁牟
○天豐財重日足姬天皇元年是歲蘇我大臣蝦夷立
己祖廟於葛城高宮而爲八佾之儛遂作歌曰
野麻騰能飫斯能毗稜栖鳴倭拖羅務騰阿庸比拖豆矩梨
擧始豆矩羅符母
○二年冬十月丁未朔壬子蘇我大臣蝦夷緣病不朝私
授紫冠於子入鹿擬大臣位復呼其弟曰物部
大臣大臣之祖母物部弓削大連之妹故因母財取
威於世戊午蘇我臣入鹿獨謀將廢上宮王等而
立古人大兄（舒明天皇之皇子也）爲天皇于時有童謠曰
伊波能杯儞古佐屢渠梅野俱渠梅多儞母多礙底騰裒羅
栖歌麻之之能烏賦（蘇我臣入鹿深忌上宮王）
時人說前謠之應曰以伊波能杯儞而喩上宮
以古佐屢而喩林臣（林臣入鹿也）以渠梅野俱而喩
燒上宮以渠梅拖儞母陀擬底騰裒羅栖柯麻之之
能鳴賦而喩山背王之頭髮班雜毛似山羊又曰
棄捨其宮匿深山相也
○三年夏六月癸卯朔乙巳志紀上郡言有人於三輪
山見猿晝睡竊執其臂不害其身猿猶合眼歌
曰
武舸都烏爾陀底屢制羅我儞古禰舉曾倭我底鳴騰羅每
拖我佐基泥基佐泥曾母野倭我底騰羅須謀野
其人驚恠猿歌放捨而去此是經歷數年上宮王等
爲蘇我鞍作圍於膽駒山之兆也
○戊申於劒池蓮中有一莖二萼者豐浦大臣妄推曰
是蘇我臣將榮之瑞也即以金墨書而獻大法興寺
丈六佛是月國內巫覡等折取枝葉懸掛木綿伺
大臣度橋之時爭陳神語入微之說其巫甚多不
可具聽老人等曰移風之兆也于時有謠歌三
首其一曰
波魯波魯儞渠騰曾枳舉喩屢之麻能野父播羅
其二曰
烏智可拖能阿婆努能枳枳始騰余謀作儒倭例播禰始柯
騰比騰曾騰余謀須
其三曰
烏摩野始儞倭例烏比岐例底制始比騰能於謀提母始羅

猪伊賀母始羅猪母

於是或人說第一謠歌曰此即宮殿接起於嶋大臣家而中大兄與中臣鎌子連密圖大義謀戮入鹿之兆也

說第二謠歌曰此即上宮王等性順都無有罪而爲入鹿見害雖不自報天使人誅之兆也

說第三謠歌曰此即入鹿臣忽於宮中爲佐伯連子麻呂稚犬養連網田所斬之兆也

○秋七月東國不盡河邊人大生部多勸祭虫於村里之人曰此者常世神也祭此神者致富與壽巫覡等遂詐託於神語曰祭常世神者貧人致富老人還少由是加勸捨民家財寶陳酒陳菜六畜於路側而使呼曰新富入來都鄙之人取常世虫置於淸座歌儛求福棄捨珍財都無所益損費極甚於是葛野秦造河勝惡民所惑打大生部多其巫覡等恐休其勸祭時人便作歌曰

禹都摩佐波柯微騰母柯微騰枳擧曳倶屢騰擧預能柯微乎宇智岐多麻須母

此虫者常生於橘樹或生於曼椒其長四寸餘其大如頭指許其色綠而有黑點其貌全似養蠶

天萬豐日天皇大化五年三月乙巳朔戊辰蘇我臣日向譖倉山田大臣於皇太子曰僕之異母兄麻呂伺皇太子遊於海濱而將害之將反其不久皇太子信之云々喚物部二田造塩使斬大臣之頭云々皇太子妃蘇我造媛聞父大臣爲塩所斬傷心痛惋惡聞塩名所以近侍於造媛者諱稱塩名改曰堅塩造媛遂因傷心而致死焉皇太子聞造媛徂逝愴然傷怛哀泣極甚於是野中川原史滿進而奉歌歌曰

耶麻鵝播爾鳥志賦拖都威底陀虞毗預倶陀虞陛屢伊慕乎多例柯威爾鷄武 其一

模騰渠等爾婆那播左該騰模那爾騰柯母于都倶之伊母我摩陀左枳涅渠農 其二

皇太子慨然頽歎褒美曰善矣悲矣乃授御琴而使唱賜絹四疋布廿端綿二褁

○白雉四年是歳太子奏請曰欲冀遷于倭京天皇不許焉皇太子乃奉奉皇祖母尊間人皇后幷率皇弟等往居于倭飛鳥河邊行宮于時公卿大夫百官人等皆隨而遷由是天皇恨欲捨於國位令造宮於山崎乃送歌於間人皇后曰

舸那紀都該阿我柯賦古麻播比枳涅世儒阿我柯賦古麻
乎比騰灑都羅武箇
○天豐財重日足姫天皇四年五月皇孫建王八歲薨
今城谷上起殯而收天皇本以皇孫有順而器重
之故不忍哀傷慟極甚詔群臣曰萬歲千秋之後
要合葬於朕陵廼作歌曰
伊磨紀那屢乎武例我禹杯介倶謨娜尼母旨屢倶之多多
婆那介柯那皚柯武 其一
伊喩之之乎都那遇舸播杯能倭柯矩娑能倭柯倶阿利岐
騰阿我謨婆儺倶你 其二
阿須箇我播灑儺蟻羅甿都都喩矩灑都能阿比娜謨儺倶
母於母保喩屢柯母 其三
天皇時時唱而悲哭
○冬十月庚戌朔甲子幸紀溫湯天皇憶皇孫建王愴
爾悲泣乃口號曰
耶麻古曳底于瀰倭拕留騰母於母之樓枳伊麻紀能禹智
播倭須羅庾麻旨珥 其一
瀰儺度能于之裒能矩娜利于那倶娜梨于之盧母倶例尼
飫岐底舸庾舸武 其二

于都倶之枳阿餓倭柯枳古弘飫岐底舸庾舸武 其三
詔秦大藏造萬里曰傳斯歌勿令忘於世
○六年十二月丁卯朔庚寅天皇幸于難波宮天皇方
隨福信所乞之意思幸筑紫將遣救軍而初幸
斯備諸軍器是歲欲為百濟將伐新羅乃勅
駿河國造船已訖挽至續麻郊之時其船夜中無
故艫舳相反衆知終敗科野國言蠅群向西飛踰
巨坂大十圍許高至蒼天或知救軍敗績之恠有
童謠曰
摩比邏矩都能倶例豆例於能幣陀乎邏賦倶能理歌理鵝
美和陀騰能理歌美烏能陛陀烏邏賦倶能理歌理我甲子
騰和與騰美烏能陛陀烏邏賦倶能理歌理鵝
○七年秋七月甲午朔丁巳天皇崩于朝倉宮冬十月癸
亥朔己巳天皇之喪歸就于海於是皇太子泊於一
所哀慕天皇乃口號曰
枳瀰我梅能姑裒之枳舸羅儞婆底底威底舸矩野姑悲武
謀枳瀰我梅弘報梨
○天皇開別天皇九年夏四月癸卯朔壬申夜半之後
災法隆寺一屋無餘火雨雷震五月童謠曰
于知波志能都梅能阿素弭介伊提麻栖古多麻提能伊辨

能野韓古能度耳（頭注云）眞云耳は耳（じ）とよみて度耳（トジ）にはあらじか伊提麻志能倶
伊播阿羅珥茹伊提麻西古多麻提能韓野能韓古能度耳
○十年春正月是月以大錦下授佐平余自信沙宅紹
明云々以小山下授餘達率等五十餘人童謠曰
多致播那播於能我曳多曳多那例例騰母陀麻爾農矩騰
岐於野兒弘儞農倶
○十年十二月癸亥朔乙丑天皇崩于近江宮癸酉殯
于新宮于時童謠曰
美曳之弩能曳之弩能阿喩阿喩舉曾播播施麻倍母曳岐
愛倶流之衛奈疑能母騰制利能母騰阿例播倶流之衛其一
於彌能古能野陛能比母騰倶比騰陛多尒伊麻擬藤柯禰
波美古能比母騰矩其二
阿箇悟馬能以喩企婆婆箇屡麻矩儒播邏奈爾能都底舉
騰多拕尼之曳雞武其三

萬葉緯巻第二　古事記

目次

美夜受比賣答歌一首
倭建命御病甚急時御歌一首
倭建命崩時后及御子等作御陵而哭爲歌一首
倭建命化白智鳥飛行時其后及御子等以哭追時歌
一首
又入海鹽行時歌一首
又飛居其礒之時歌二首
應神天皇
天皇矢河枝比賣命任令取大御酒盞御歌一首
吉野之國主等瞻大雀命之所佩御刀歌一首
天皇宇羅宜須須許理之所獻之大御酒而御歌一首
仁德天皇
天皇望瞻黑日賣之船出浮海以歌一首
天皇戀黑日賣欺太后幸行淡道島之時遙望歌
一首
天皇到坐黑日賣之採菘處歌一首
天皇上幸之時黑日賣獻御歌二首
天皇遣丸邇臣口子送太后歌一首
天皇戀八田若郎女賜遣御歌一首
八田若郎女答歌一首

速總別王女鳥王共逃退而騰于倉椅山於是速總別
王歌一首
履中天皇
墨江中王火著大殿故牽逃於倭爾天皇歌一首
到於波邇賦坂望見難波宮爾天皇亦歌一首
允恭天皇
木梨之輕太子姧其伊呂妹輕大郎女而歌一首
輕太子被捕歌一首
輕太子將流之時歌一首
衣通王輕大郎女獻於歌太子歌一首
後亦不堪戀慕而追往時歌一首
追到之時待懷而歌二首
雄略天皇
太后坐日下天皇幸行還上於宮之時行立其山之
坂上歌一首
引田部赤猪子守志待天皇命依玆賜御歌其歌
二首
赤猪子答歌二首
天皇幸行吉野之時有童女彈御琴令爲儛因
其孃女好儛作御歌其歌一首

天皇幸行于春日之時袁杼比賣逢道逃隱岡邊故
作御歌其歌一首
天皇將斬於三重采女之時歌一首
獻歌者赦其罪爾太后歌其歌一首
即　天皇歌一首
春日袁杼比賣獻大御酒之時　天皇歌一首
袁杼比賣獻歌其歌一首
清寧天皇
袁祁命立歌垣時志毘臣歌一首 連歌
袁祁命歌一首 連歌
志毘臣亦歌一首
爾　王子亦歌一首

萬葉緯第二

洛東隱士編緝

古事記

三卷序云元明天皇和銅五年正月二十八日正五位上勳五等太朝臣安麻呂謹上云云今案近世度會延佳神主所鏤梓新本與古本間存齟齬正元元集所引之記與新本全同延佳之記可信用傳言管家雖閲此書義理難通從焉法橋顯昭袖中抄所引記者有倭註古來定有註疏之類惜哉世不傳今因師說成旒頭摘倭字歌數凡百七首內五十一首出日本紀已上記今所記五十六首

此八千矛神將婚高志國之沼河比賣幸行之時到
其沼河比賣之家歌曰
夜知富許能伽微能美許登波夜斯麻久爾都麻麻岐迦泥
氐登富登富斯故志能久邇邇佐加志賣遠阿理登岐加志
氐久波志賣遠阿理登伎許志氐佐用婆比爾阿理多多斯
用婆比邇阿理加用婆勢多知賀遠母伊麻陀登加受氐淤
須比遠母伊麻陀登加泥婆遠登賣能那須夜伊多斗遠淤
曾夫良比和何多多勢禮婆比許豆良比和何多多勢禮婆
阿遠夜麻邇奴延波那伎佐怒都登理岐藝斯波登與牟爾
波都登理迦祁婆那久宇禮多久母那久那留登理加許能
登理母宇知夜米許世泥伊斯多布夜阿麻波勢豆加比許
登能加多理碁登母許遠婆

爾其沼河日賣未開戶自內歌曰
夜知富許能迦微能美許等怒延久佐能賣邇志阿禮婆和
何許許呂宇良須能登理叙伊麻許曾婆和杼理邇阿良米
能知波那杼理爾阿良牟遠伊能知波那志勢多麻比曾伊
斯多布夜阿麻波世豆迦比許登能加多理碁登母許遠婆
阿遠夜麻邇比賀迦久良婆奴婆多麻能用波伊傳那牟阿
佐比能惠美佐迦延岐氐多久豆怒能斯路岐多陀牟岐能
和由岐能和加夜流牟泥遠曾陀多岐多多岐麻那賀理麻

多麻傳佐斯麻岐毛毛那賀爾伊波那佐牟遠阿夜爾那古斐岐許志夜知富許能迦微能美許登能迦多理基登母許遠婆

故其夜者不合而明日夜爲御合也

八千矛神之嫡后須勢理毘賣命甚爲嫉妬故其日子遲神和備弖(三字以音)自出雲將上坐倭國而束裝立時片御手者繫御馬之鞍片御足踏入其御鐙而歌曰

奴婆多麻能久路岐美祁斯遠麻都夫佐爾登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多多藝母許禮婆布佐婆受幣都那美曾遲奴岐宇弖蘇邇杼理能阿遠岐美祁斯遠麻都夫佐邇登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多多藝母許母布佐波受幣都那美曾邇奴棄宇弖夜麻賀多爾麻岐斯阿多尼都岐曾米紀賀斯流邇斯米許呂母遠麻都夫佐登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多多藝母許斯與呂志伊刀古夜能伊毛能美許等牟良登理能和賀牟禮伊那婆比氣登理能和賀比氣伊那婆那迦士登波那波伊布登母夜麻登能比登母須須岐宇那加夫斯那賀那加佐麻久阿佐阿米能疑理邇多多牟叙和加久佐能都麻能美許登許登能多理基登母許遠婆

爾其后取大御酒坏立依指擧而歌曰

夜知富許能加微能美許登夜阿賀淤富久邇奴斯許曾波遠邇伊麻世婆宇知微流斯麻能佐岐那岐加岐微流伊蘇能佐岐淤知受和加久佐能都麻母多勢良米阿波母與賣邇阿禮婆那遠岐弖遠婆那志那遠岐弖都麻波那斯阿夜加岐能布波夜賀斯多爾牟斯夫須麻爾古夜賀斯多爾久夫須麻佐夜具賀斯多爾阿和由岐能和加夜流牟泥遠多久豆怒能斯路岐多陀牟岐曾陀多岐多多岐麻那賀理麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛毛那賀邇伊遠斯那世登與美岐多弖麻都良世

如紀歌即爲宇岐由比(四字以音)而宇那賀氣理弖(六字以音)至今鎭坐也此謂之神語也

神武天皇坐日向時云云更求爲大后之美人時大久米命曰此間有媛女是謂神御子其所以謂神御子者三島湟咋之女名勢夜陁多良比賣其容姿麗美故美和之大物主神見感而其美人爲大便之時化丹塗矢自其爲大便之溝流下突其美人之富登(此二字以音下效之)爾其美人驚而立走伊須須岐伎(此五字以音)乃將來其矢置於床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子名謂富登多多良伊須須岐比賣命亦名謂比賣多多良伊須氣余理比賣(是者惡其富登云事後改名者也)故是以

謂神御子也於是七媛女遊行於高佐士野（佐士二字以音）伊須氣余理比賣在其中爾大久米命見其伊須氣余理比賣而以歌白於天皇曰

夜麻登能多加佐士怒袁那那由久袁登賣杼母多禮袁志摩加牟

爾伊須氣余理比賣者立其媛女等之前乃天皇見其媛女等而御心知伊須氣余理比賣立於最前以歌答曰

加都賀都母伊夜佐岐陀弖流延袁斯麻加牟

爾大久米命以天皇之命詔其伊須氣余理比賣之時見其大久米命黥利目而思奇歌曰

阿米都都知杼理麻斯登登那杼佐祁流斗米

爾大久米命答歌曰

袁登賣爾多陁爾阿波牟登和加佐祁流斗米

故其孃子白之仕奉也

於是其伊須氣余理比賣命之家在佐井河之上天皇幸行其伊須氣余理比賣之許一宿御寢坐也（其河謂佐韋河由者於其河邊山由理草多在故取其山由理草之名號佐韋河也山由理草之本名云佐韋也）

後其伊須氣余理比賣參入宮內之時天皇御歌曰

阿斯波良能志祁志岐袁夜邇須賀多多美伊夜佐夜斯岐弖和賀布多理泥斯

然而阿禮坐之御子名日子八井命次神八井耳命次神沼河耳命（三柱）故天皇崩後其庶兄當藝志美美命娶其嫡后伊須氣余理比賣之時將殺其三弟而謀之間其御祖伊須氣余理比賣患苦而以歌令知其御子等歌曰

佐韋賀波由久毛多知和多理宇泥備夜麻許能波佐夜藝奴加是布加牟登須

又歌曰

宇泥備夜麻比流波久毛登韋由布佐禮婆加是布加牟登曾許能波佐夜牙流

於是其御子聞知而驚云云故爾神沼河耳命殺當藝志美美故亦稱其御名謂建沼河耳命

景行天皇段

倭建命到相武國之時其國造詐白於此野中有大沼住是沼中之神甚道速振神也於是看行其神入坐其野爾其國造火著其野故知見欺而解開其姨倭比賣命之所給囊口而見者火打有其裏於是先以其御刀刈撥草以其火打而打出火著向火而燒退還出皆切滅其國造等即著火燒故於今謂燒津也自其入幸渡走水海之時其渡神

與レ浪廻レ船不レ得二進渡一爾其后名弟橘比賣命白之妾易二御子一而入二海中一御子者所レ遣之政遂應二覆奏一將レ入レ海時以二菅疊八重皮疊八重絹疊八重一敷二于波上一而下二坐其上一於是其暴浪自伏御船得レ進爾其后歌曰

佐泥佐斯佐賀牟能袁怒邇毛由流肥能本那迦邇多知氐斗比斯岐美波母

故七日之後其后御櫛依二于海邊一乃取二其櫛一作二御陵一而治置也

倭建命自二甲斐一越二科野國一乃言二向科野之坂神一而還二來尾張國一入二坐先日所レ期美夜受比賣之許一於是獻二大御食一之時其美夜受比賣捧二大御酒盞一以獻爾美夜受比賣其於二意須比之襴一（意須比三字以レ音）著二月經一故見二月經一御歌曰

比佐迦多能阿米能迦具夜麻斗迦麻邇佐和多流久毘比波煩曾多和夜賀比那遠麻迦牟登波阿禮波須禮杼佐泥牟登波阿禮波意母閇杼那賀祁勢流意須比能須蘇爾都紀多知邇祁理

爾美夜受比賣答二御歌一曰

多迦比迦流比能美古夜須美斯志和賀意富岐美阿良多麻能登斯賀岐布禮波阿良多麻能都紀波岐閇由久宇倍那宇倍那岐美麻知賀多爾和賀祁流意須比能須蘇爾都紀多多那牟余

故爾御合而以二其御刀之草那藝劍一置二其美夜受比賣之許一而取二伊服岐能山之神一幸行倭建命此時御病甚急爾御歌曰

袁登賣能登許能辨爾和賀淤岐斯都流岐能多知曾能多知波夜

歌竟即崩爾貢二上驛使一於是坐レ倭后等及御子等諸下到而作二御陵一即匍二匐廻其地之那豆岐田一（自レ那下三字以レ音）而哭爲レ歌曰

那豆岐能多能伊那賀良邇伊那賀良爾波比母登富呂布登許呂豆良

於是化二八尋白智鳥一翔レ天而向レ濱飛行（智字以レ音）爾其后及御子等於是小竹之苅杙雖二足跳破一忘二其痛一以哭追此時歌曰

阿佐士怒波良許斯那豆牟蘇良波由賀受阿斯用由久那

又入二其海鹽一而那豆美（此三字以レ音）行時歌曰

宇美賀由氣婆許斯那豆牟意富迦波良能宇惠具佐宇美賀波伊佐用布

又飛居其礒之時歌曰
波麻都知登理波麻波由迦受伊蘇豆多布
此四歌者皆歌其御葬也故至今其歌者歌天皇之
大御葬也
應神天皇一時越幸近淡海國之時云云故到坐木
幡村之時麗美孃子遇其道衢爾天皇問其孃子曰
汝者誰子答白丸邇之比布禮能意富美之女名宮主矢
河枝比賣天皇即詔其孃子吾明日還幸之時入坐
汝家故矢河枝比賣委曲語其父於是父答曰是者
天皇坐那理（此二字以音）恐之我子仕奉云而嚴餝其家候待
者明日入坐故獻大御饗之時其女矢河枝比賣命令
取大御酒盞而獻於是天皇任令取其大御酒
盞而御歌曰
許能迦邇夜伊豆久能迦邇毛毛豆多布都奴賀能迦邇余
許佐良布伊豆久邇伊多流伊知遲志麻美志麻邇斗岐美
本杼理能迦豆伎伊岐豆岐志那陁由布佐佐那美遲袁須
久須久登和賀伊麻勢婆夜許波多能美知邇阿波志斯袁
登賣宇斯呂傳波袁陁弖呂迦母波那美波志比斯那須伊
知比韋能和邇佐能邇袁波都邇波波陁阿可良氣美志波
邇具漏岐由惠美都具理能曾能那迦都邇袁加夫都久麻
肥邇波阿氏受麻用賀岐許邇加岐多禮阿波志斯袁美那
迦母賀登和賀美斯古良迦久母賀母阿賀美斯子邇宇多
氣陁邇牟迦比袁流迦母伊蘇比袁流迦母
又吉野之國主等瞻大雀命之所佩御刀歌
本牟多能比能美古意富佐邪岐意富佐邪岐波加勢流多
知母登都流藝須惠布由布由紀能須加良賀志多紀能佐
夜佐夜
又秦造之祖漢直之祖及知釀酒人名仁番亦名須須
許理等參渡來也故是須須許理釀大御酒以獻於是
天皇宇羅宜所獻之大御酒而（宇羅宜三字以音）御歌曰
須須許理賀迦美斯美岐邇和禮惠比邇祁理許登那具志
惠具志邇和禮惠比邇祁理
如此之歌幸行時以御杖打大坂道中之大石者
其石走避故諺曰堅石避醉人也
仁德天皇太后石之日賣命甚多嫉妬故天皇所使之
妾者不得臨宮中言立者足母阿賀迦邇嫉妬（自母下五字以音）
爾天皇聞看吉備海部直之女名黑日賣其容姿端
正喚使上而也然畏其太后之嫉逃下本國天皇
坐高臺望瞻其黑日賣之船出浮海以歌曰
淤岐幣邇波袁夫泥都羅々之玖文瀨邪能摩佐豆古和藝

毛玖邇幣玖陁良須

故太后聞是之御歌大忿遣人於大浦追下而自歩追去於是天皇戀其黑日賣欺太后曰欲見淡道島而幸行之時坐淡道島遙望歌曰

於志氐流那爾波能佐岐由伊傳多知氐和賀久邇美禮婆阿波志摩淤能碁呂志摩阿遲摩佐能志麻母美由佐氣都志摩美由

乃自其島傳而幸行吉備國爾黑日賣命令大坐其國之山方地而獻大御飯於是爲煮大御羹採其地之菘菜時天皇到坐其孃子之採菘處歌曰

夜麻賀多邇麻祁流阿袁那母岐備比登登等母邇斯都米婆多怒斯久母阿流迦

天皇上幸之時黑日賣獻御歌曰

夜麻登幣邇斯布岐阿宜氐玖毛婆那禮曾曾岐袁理登母和禮和須禮米夜

又歌曰

夜麻登幣邇由玖婆多賀都麻許母理豆能志多用波閇都都由久波多賀都麻

太后石之日賣命爲將豐樂而於採御綱柏幸行木國之間天皇婚八田若郎女云云於太后大恨怒云云即不入坐宮而引避其御船泝於堀江隨河而上幸山代此時歌云云天皇聞看太后自山代上幸而使舍人名謂鳥山人送御歌曰夜麻斯呂邇伊斯祁登理夜麻伊斯祁伊斯祁阿賀波斯豆摩邇伊斯岐阿波牟迦母

又續遣丸邇臣口子而歌曰

美母呂能曾能多迦紀那流意富韋古賀波良意富韋古賀波良邇阿流岐毛牟加布許袁陁邇迦阿比淤母波受阿良牟

天皇戀八田若郎女賜遣御歌其歌曰

夜多能比登母登須宜波古母多受多知迦阿禮那牟阿多良須賀波良許登袁許曾須宜波良登伊波米阿多良須賀志賣

爾八田若郎女答歌曰

夜多能比登母登須宜波比登理袁理登母意富岐彌斯與斯登岐許佐婆比登理袁理登母

故爲八田若郎女之御名代定八田部也天皇以其弟速總別王爲媒而乞庶妹女鳥王爾女鳥王語速總別王曰因太后之强不治賜八田若郎女故思仕奉吾爲汝命之妻即相婚云云故天皇知其情還入於宮此時其夫速總別王來之時其妻女鳥王歌曰

比婆理波阿米爾迦氣流多邇由攷夜波夜夫佐和氣佐邪岐登貢佐泥 天皇聞此歌即興軍欲殺爾速總別王女鳥王共逃退而騰于倉椅山於是

速總別王歌曰

波斯多氏能久良波斯夜麻袁佐賀志美登伊波迦伎加泥氏和賀氏登良須母

履中天皇本坐難波宮之時坐大嘗而爲豊明之時大御酒宇良宜而大御寢也其弟墨江中王欲取天下以火著大殿於是倭漢直之祖阿知直盜出而乘御馬令幸於倭故到于多遲比野而寤詔此間者何處爾阿知直白墨江中王火著大殿故率逃於倭爾天皇歌曰

多遲比怒邇泥牟登斯理勢婆多都碁母母知氏許麻志母能泥牟登斯理勢波

到於波邇賦坂望見難波宮其火猶炳爾天皇亦歌曰

波邇布邪迦和賀多知美禮婆迦藝漏肥能毛由流伊幣牟良都麻賀伊幣能阿多理

允恭天皇崩之後定木梨之輕太子所知日繼未即位之間奸其伊呂妹輕大郎女而歌曰云云又歌曰

佐佐波爾宇都夜阿良禮能多志陀志爾韋泥氏牟能知波比登波加由登母宇流波斯登佐泥斯佐泥氏婆加理許母能美陀禮婆美陀禮佐泥斯佐泥氏婆

此者夷振之上歌也

此以百官及天下人等背輕太子而歸穴穗御子爾輕太子畏而逃入大前小前宿禰大臣之家云云於是穴穗御子興軍圍大前小前宿禰之家爾到其門時零大氷雨故歌曰云云爾其大前小前宿禰擧手打膝儛訶那傳（自訶下三字以音）歌參來云云如此歌參歸白之我天皇之御子於伊呂兄王無及兵若及兵者必人咲僕捕以貢進爾解兵退坐故大前小前宿禰捕其輕太子率參出以貢進其太子被捕歌曰云云又歌曰

阿麻陀牟加流袁登賣志多多爾母余理泥氏登富禮加流袁登賣杼母

故其輕太子者流於伊余湯也亦將流之時歌曰

阿麻登夫登理母都加比曾多豆賀泥能岐許延牟登岐波和賀那斗波佐泥

此三歌者天田振也

其衣通王獻歌其歌曰

那都久佐能阿比泥能波麻能加岐賀比爾阿斯布麻須那阿加斯氏杼富禮

故後亦不堪戀慕而追往時歌曰

岐美賀由岐氣那賀久那理奴夜麻多豆能牟加閇袁由加
牟麻都爾波麻多士此云山多豆者是今造木者也

故追到之時待懷而歌曰

許母理久能波都世能夜麻能意富袁爾波波多波理陁氐
佐袁袁爾波波多波理陁氐意富袁爾斯那加佐陁賣流淤
母比豆麻阿波禮都久由美能許夜流許夜理母阿豆佐由
美多氐理多氐理母能知母登理美流意母比豆麻阿波禮

又歌曰

許母理久能波都勢能賀波能賀美都勢爾伊久比袁宇知
斯毛都勢爾麻久比袁宇知伊久比爾波加賀美袁加氣麻
久比爾波麻多麻袁加氣麻多麻那須阿賀母布伊毛加賀
美那須阿賀母布都麻阿理登伊波婆許曾伊幣爾母由加
米久爾袁母斯怒波米

如此歌即共自死故此二歌者讀歌也

雄略天皇初太后坐日下之時自日下之直越道幸行河内爾登山上望國内者有上堅魚作舍屋之家天皇令問其家云其上堅魚作舍者誰家答曰志幾之大縣主家爾天皇詔者奴乎己家似天皇之御舍而造即遣人令燒其家之時其大縣主懼畏稽首白奴有者隨奴不覺而過作甚畏故獻能美之御幣物能美二字以音布縶白犬著鈴而己族名謂腰佩人令取犬繩以獻上故令止其著火即幸行其若日下王之許賜入其犬令詔是物者今日得道之奇物故都摩杼比此四字以音之物云而賜入也於是若日下王令奏天皇背日幸行之事甚恐故己直參上而仕奉是以還上坐於宮之時行立其山之坂上歌曰

久佐加辨能許知能夜麻登多多美許母幣具理能夜麻能
許知碁知能夜麻能賀比爾多知邪加由流波毘呂久麻加
斯母登爾波伊久美陁氣淤斐須惠幣爾波多斯美陁氣淤
斐伊久美陁氣伊久美波泥受多斯美陁氣多斯爾波韋泥
受能知母久美泥牟曾能淤母比豆麻阿波禮

即令持此歌而返使也

一時天皇遊行到於美和河之時河邊有洗衣童女其容姿甚麗天皇問童女汝者誰子答白己名謂引田部赤猪子爾令詔者汝不嫁夫今將喚而還坐於宮故其赤猪子仰待天皇之命既經八十歳於是赤猪子以爲望命之間已經多年姿體瘦萎更無所恃然非顯待情不忍於悒而令持百取

之机代物一參出貢獻然天皇既忘二先所レ命之事一問二
其赤猪子一曰汝者誰老女何由以參來爾赤猪子答白
其年其月被二天皇之命一仰二待大命一至二今日一經二八十
歲一今容姿既耆更無レ所レ恃然顯二白己志一以參出耳
於是天皇大驚吾既忘二先事一然汝守レ志待レ命徒過二
盛年一是甚愛二悲心裏一欲レ婚憚二其極老一不レ得レ成
レ婚而賜二御歌一其歌曰
美母呂能伊都賀斯賀母登加斯賀母登由由斯伎加母加
志波良袁登賣
又歌曰
比氣多能和加久流須婆良和加久閇爾韋泥氐麻斯母能
淤伊爾祁流加母
爾赤猪子之泣淚悉濕二其所レ服之丹摺袖一答二其大御
歌一而歌曰
美母呂爾都久夜多麻加岐都岐阿麻斯多爾加母余良牟
加微能美夜比登
又歌曰
久佐迦延能伊理延能波知須波那婆知須微能佐加理毘
登登母志岐呂加母
爾多祿給二其老女一以返遣也故此四歌者志都歌也

天皇幸二行吉野宮一之時吉野川之濱有二童女一其形姿
美麗故婚二是童女一而還二坐於宮一後更亦幸二行吉野一
之時留二其童女之所一過二於其家一立二大御呉床一而
坐二其御呉床一彈二御琴一令レ爲レ儛二其孃子一爾因二其
孃子之好一作二御歌一其歌曰
阿具良韋能加微能美氐母知比久許登爾麻比須流袁美
那登許余爾母加母
天皇婚二丸邇之佐都紀臣之女袁杼比賣一幸二行于春
日一之時媛女逢レ道即見二幸行一而逃二隱岡邊一故作二
御歌一其歌曰
袁登賣能伊加久流袁加袁加那須岐母伊本知母賀母須
岐婆奴流母能
故號二其岡一謂二金鉏岡一也
天皇坐二長谷之百枝槻下一爲二豐樂一之時伊勢國之三
重釆女指二擧大御盞一以獻爾其百枝槻葉落二浮於大
御盞一其釆女不レ知下落葉浮中於盞上猶獻二大御酒一天
皇看二行其浮レ盞之葉一打二伏其釆女一以レ刀刺二充其
頸一將レ斬之時其釆女白二天皇一曰莫レ殺二吾身一有二應
レ白事一即歌曰
麻岐牟久能比志呂乃美夜波阿佐比能比傳流美夜由布

比能比賀氣流美夜比氣能泥能泥陁流美夜許能泥能泥
婆布美夜夜本爾余志伊岐豆岐能美夜麻紀佐久比能美
加度爾比那閇夜爾淤斐陁氐流毛毛陁流都紀賀延波本
都延波阿米袁淤幣理那加都延波阿豆麻表淤幣理志豆
延波比那袁淤幣理木都延能延能宇良婆波那加都延爾
淤智布良婆閇那加都延能延能宇良婆波斯毛都延爾淤
知布良婆閇斯豆延能延能宇良婆波阿理岐奴能美幣能
古賀佐佐賀世流美豆多麻宇岐爾宇岐志阿夫良淤知那
豆佐比美那許袁呂許袁呂爾許斯母阿夜爾加志古志多
加比加流比能美古許登能加多理碁登母許袁婆

故獻二此歌一者赦二其罪一也爾大后歌其歌曰

夜麻登能許能多氣知爾古陁加流伊知能都加佐爾比那
閇夜爾淤斐陁氐流波毘呂由都麻都婆岐曾賀波能比呂
理伊麻志曾能波那能氐理伊麻須多加比加流比能美古
爾登余美岐多氐麻都良勢許登能加多理碁登母許表婆

即天皇歌曰

毛毛志紀能淤富美夜比登波宇豆良登理比禮登理加氣
氐麻那婆志良袁由岐阿閇爾波須受米宇受須麻理韋氐
祁布母加母佐加美豆久良斯多加比加流比能美夜比登
許登能加多理碁登母許袁婆

此三歌者天語歌也故於二豐樂一譽二其三重采女一而
給二多祿一也

是豐樂之日亦春日之袁杼比賣獻二大御酒一之時天皇
歌曰

美那曾曾久淤美能袁登賣太陁理登良須母太陁、理斗理
加多久斗良勢斯多賀多久夜賀多久斗良勢太陁、理斗
良須古

此者宇岐歌也爾袁杼比賣獻歌其歌曰

夜須美斯志和賀淤富美岐能阿佐計爾波伊余理陁多志
由布計爾波伊余理陁多須和岐豆紀賀斯多能伊多爾母
賀阿世表

此者志都歌也

顯宗天皇將レ治二天下一之間平群臣之祖名志毘臣立二
于歌垣一取二其袁祁命將レ婚之美人手一其孃子者菟田
首等之女名大魚也爾袁祁命亦立二歌垣一於是志毘臣
歌曰

意富美夜能袁登都波多傳須美加多夫祁理

如レ此歌而乞二其歌末一之時袁祁命歌曰

意富多久美袁遲那美許曾須美賀多夫祁禮

爾志毘臣亦歌曰

意富岐美能許許呂袁由良見游美能古能夜弊能斯婆加岐伊理多多受阿理

於是王子亦歌曰

斯本勢能那袁理袁美禮婆阿蘇毘久流志毘賀波多傳爾都麻多氐理美由

爾志毘臣愈忿歌曰

意富岐美能美古能志婆加岐夜布士麻理斯麻理母登本斯岐禮牟志婆加氣夜氣牟志婆加岐

爾王子亦歌曰

意布袁余志斯毘都久阿麻余斯賀阿禮婆宇良古本斯祁牟志毘都久志毘

如レ此歌而開明各退明旦之時意富祁命袁祁命二柱議云凡朝廷人等者旦參ニ赴於朝廷一晝集ニ於志毘門一今者志毘必寢亦其門無レ人故非レ今者難レ可レ謀即興レ軍圍ニ志毘臣之家一乃殺也

萬葉緯卷第二續日本紀

續日本紀

日本後紀第三桓武天皇延曆十六年二月己巳先レ是重勅ニ從四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子學士菅野朝臣眞道從五位上守右少辨兼行右兵衛佐丹波守秋篠朝臣安人外從五位下行大内記兼常陸少掾中科宿禰巨都雄等一撰ニ續日本紀一至レ是而成上レ表曰云々今按類聚國史與レ今同矣起ニ文武天皇元年歲次丁酉一盡ニ桓武天皇延曆十年一曆數九十五年卷數四十卷

聖武天皇天平十四年正月丁未朔壬戌天皇御ニ大安殿一宴ニ群臣一酒酣奏ニ五節田舞一訖更令ニ少年童女蹈歌一又賜ニ宴天下有位人幷諸司史生一於レ是六位以下人等皷レ琴歌曰

新年始邇何久志社供奉良米萬代摩提丹　頭注云今案賀ニ大養德恭仁新京一也　年中行事秘抄踏歌條下引此歌而書曰歌詞七言也如絕句詩以平聲韻字爲韻云々今案未詳

宴訖賜レ祿有レ差

同十五年五月癸卯宴ニ群臣於内裏一皇太子親儛ニ五節一　頭注云左傳昭公元年云先王之樂所以節百事也故有五節杜預註五聲之節云々今案從中古以來好事者天武帝於吉野彈琴時前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女應曲舞擧袖五變故謂之五節其歌曰乎度綿度茂云々此歌萬葉第五長歌云乎度綿度何遠度綿左備須等可良ゝ万乎多茂等邇麻可志止云へるを取て僞作せるなるべし懷風藻吉野遊覽之時有敎旨只有美稻之古事無五節飜レ袖作以万葉歌

左傳之語此詔旨等後人附會明矣○貞觀儀式新嘗祭式云大歌別當大夫率歌者參入就座定奏大歌舞五節

右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏太上天皇曰天皇（政事要略廿七イさあるは政事要略をさす）大命爾座而(留イ)奏賜久掛母畏伎飛鳥淨見御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命天下乎治賜比平賜氐此所思坐久上下乎齊倍和氐氣无動久靜加爾令有爾波禮等樂等二都並氐志平久長久可有登隨神母所思坐氐此乃舞乎始賜比造賜比伎等聞食氐與天地共爾絕事無久彌繼爾受賜波利行牟物等之氐皇太子斯王爾學志頂令荷氐(天イ)我天皇大前爾貢事乎奏於是太上天皇詔報曰現神御大八洲我子(イ)天皇乃掛母畏伎天皇朝廷乃始賜比造賜敝留(倍イ)寶國寶氐等之此王乎令供奉賜波天下爾立賜比行賜流倍伎法波可絕伎事波無久有家利止見聞喜(嘉イ)侍止奏賜等詔大命乎奏又今日行賜布態乎見行波直遊(遊イ)止乃味爾波不在氐之天下人爾君臣祖子乃理乎教賜比趣賜布止有志止奈母所思須是以教賜比趣賜比奈何良受被賜持氐不忘不失可有伎表氐等之一二人乎治賜波奈止那毛所思行須等奏賜止詔大命乎奏賜止波久奏因御製歌曰

蘇良美都夜麻止乃久爾波倭國可未可良斯隨神多布度久安流羅之貴有許能末比美例波此舞見

又歌曰

阿麻豆可未天神美麻乃彌己止乃孫尊登理母知氐取持許能等與美岐遠此豊酒伊可多氐末都流嚴重奉（頭注云伊ノ可可流布本作寸依年中行事秘抄改正焉舒明紀嚴矛持統紀重日式祝詞伊加志穗又茂世云々）

又歌曰

夜須美斯志隅知和己於保支美波吾大君多比良氣久平那何久伊末之氐長座（伊末は發語也）等與美岐麻都流豊酒奉（頭注云夜須美斯志志流布ノ本作留依年中行事秘抄改正焉仙覺万葉註釋並同）

稱德天皇寶龜元年（神護景雲四年也）三月辛卯葛井船津文武生藏六氏男女二百三十人供奉歌垣其服並著青摺細布衣垂紅長級(紐カ)男女相並分行徐進歌曰

乎止賣良爾乙女乎止古多智蘇比男添布美奈良須踏爾詩乃美夜古波西宮與呂豆與乃美夜萬代宮

其歌垣歌曰　頭注云聖武紀天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣男女二百四十餘人五品已上有風流者皆交雜其中正四位下長田王從四位下栗栖王門部王從五位下野中王等爲頭以本末唱和爲難波曲倭部曲淺茅原曲廣瀬曲八裳刺曲之音令都中士女縱觀極歡而罷賜奏歌垣男女等祿有差

頭注云紀神護景雲二年十一月壬辰設新嘗豐樂於西宮前殿　種季云乙女と多く書たらへれど乙は音於止に用れは少女には國字差へり

崇神天皇十年時官軍屯聚而踏草木因以號其山曰那羅山（踏跙此云布瀰那羅須）

布智毛世毛淵瀬　伎與久佐夜氣志清淨　波可多我波博多川　知止世乎千歲　萬知天待　須賣流可波可母澄有川

毎歌曲折擧袂爲節其餘四首並是古詩不復煩載時詔五位已上內舍人及女孺亦列其歌垣中歌數闋訖河內大夫從四位上藤原雄田麻呂已下奏和儛賜六氏歌垣人商布二千段綿五百屯夏四月癸巳朔乙未正六位上船連淨足東人融麻呂三人族中長老率奏歌垣並授外從五位下

頭書云紀三月丙□車駕臨博多川以宴遊焉此日百官文人及大學生等各上曲水之詩　神名帳云河內國安宿郡伯太彥神社伯太姬神社

文德實錄第十天安二年二月甲子朔己丑在河內國從五位下伯太彥伯太姬神並預官社

○寶龜元年天皇（光仁）諱白壁王近江大津宮御宇（天智）天命開別天皇之孫（施基皇子）田原天皇第六之皇子也母曰紀朝臣橡姬贈太政大臣正一位諸人之女也寶龜二年十二月十五日追尊曰皇太后　天皇寬仁敦厚意豁然也自勝寶（孝謙）以來皇極無貳人疑彼此罪廢者多　天皇深顧横禍時或縱酒晦迹以故免害者多矣又潛龍之時（有乎）童謠曰

葛城寺乃前在也豐浦寺乃西在也於志止（度）刀志止（度）櫻井爾白壁之豆（久也）好壁之久（豆也）於志止（度）刀志止（度）然爲波國曾（也）昌由流五（吾乎）家良（曾也）昌由流於志止（度）刀志止（度）

頭注云河海抄云催馬樂葛城加津良支乃末戸名留也止與良乃天良乃爾之奈留也二段江乃波爾之良太万之川久也於之止止於之止止三段之可之天波久爾曾左加江無也和以戸良曾止美世乎也於之止止止之止止　今案寄此歌則櫻井櫻葉井同所歟五音誤歟又五上脫晋字歟又櫻櫻葉二字誤歟

于時井上內親王爲妃識者以爲井則內親王之名白壁爲天皇之諱蓋天皇登極之徵也

日本後紀

序云臣緒嗣等討論綿書披閱曩策文史之興其來尙矣云々又曰自延曆十一年迄于天長十年上下四十二年勒以成四十卷名曰日本後紀承和七年（頭注云七年恐八年歟月九之恐脫十字）十二月九日云々今案緒嗣左大臣正二位藤原朝臣緒嗣也此外遂

功夫輩七人不類載類聚國史與紀同續日本後紀云承和八年十二月丙寅朔甲申修日本後紀訖奉御云々西峯先生曰今所世傳紀初十卷自中古抄來末十卷近世或人依類聚國史等古記編集焉（頭注云今案類聚國史二百卷之內所流布現有六十卷此內日本後紀全文間見焉）毎事至語末以云々終則此說眞可謂得之雖然其事依爲實幸得水戶西山公御本以令比校而貫于玆而已

○桓武天皇延曆十四年夏四月戊戌朔戊申曲宴天皇誦古歌曰

以邇之弊能古能那何浮流彌知野中古道阿良多米波改者阿良多麻良武也將被改哉能那賀浮流彌知野中古道　頭注云六帖第二道題出之爲柏原帝御製誤也又以第四句爲阿良多米良禮與

勅尚侍從三位百濟王明信令和之不得成焉

天皇自代和曰

記美己蘇波君社　和主黎多魯羅米忘有　爾記多麻乃柔靈多和也米和禮波手弱女吾都爾乃詩羅多麻常白球

頭注云萬葉集第九日和靈乃服寒等母云々

侍臣稱萬歲

○同十五年夏四月丙寅宴庭酒酣　上乃歌曰

氣左乃阿沙氣今朝朝氣　奈呼汝來登以非都留將鳴云　保登登擬須霍公鳥　伊萬毛奈可奴加今不鳴歟比登能綺久陪久人可

聞　頭注云師說暗久文章可何十許里之可（ハカリ）同

○同十六年冬十月癸亥曲宴酒酣　皇帝歌曰

己乃己呂乃志具禮乃阿米爾時雨菊乃波奈花　知利曾之奴倍岐散爲可　阿多良蘇乃香乎惜其香　頭注云和朝詠菊花歌初見

賜五位已上衣被

同十七年八月庚寅遊獵于北野便御伊豫親王山庄飲酒高會宴カ于時日暮　天皇歌曰

氣左能阿狹氣今朝朝氣奈久知布之賀農鳴止云鹿曾乃己惠遠其聲　岐嘉受波伊賀之不聞不去與波布氣奴止毛夜更畢雖

登時鹿鳴　上欣然令群臣和之胃夜乃歸

○同二十年春正月甲午朔丁酉曲宴是日雨雪上歌曰

宇米能波那梅花　故飛都都鄔黎匠戀草居　敷魯庾岐乎降雪　波那可毛祉流留花散　於毛飛都留何毛思

賜五位以上物各有差

○同二十二年三月庚辰遣唐大使葛野麻呂副使石川道益賜餞宴設之事一依漢法酒酣　上喚葛野麻呂於御床下賜酒　天皇歌曰

許能佐氣波此酒於保邇波安良須凡不有　多比良可備平何倍理伎末勢止歸來座　伊謀比多流佐氣祝有酒　頭注云凡万葉第七吉備津采

女蚝時短歌人麻呂數凡津子之相日於保爾見數者今叙悔
葛野麻呂諦涙如雨侍宴群臣無不流涕賜葛野
麻呂御被三領御衣一襲金二百兩道益御衣一襲金一
百五十兩

○平城天皇大同二年九月乙巳幸神泉苑琴歌間奏四
位已上共挿菊花 頭注云菊恐闕歟 于時皇太弟頌歌曰
美那比度乃 皆人 曾能可爾米豆留 其香感 布智波賀麻闘鼓
美能於保母能 君偶 多乎利太流祁布 手折而有今日
上和之曰
袁理比度能 折人 己己呂能麻爾眞 隨意 布知波賀麻闘宇 類史廿一作麻眞丹
倍伊呂布賀久 諸色深 爾保比多理介利 香而有 頭注云此二首共在六帖并大和物語六帖皆人乃歌闘きみのためと云々
羣臣倶稱萬歲賜五位以上衣被 頭注云師說紀中十二首の中みな人の歌の上の句のみぞ万葉の古風よりはすこしこなたに聞ゆる其外はまたく古風也貫之の新撰和歌集序に弘仁より延長に至るまでの歌を取て夫よりあなたの古質なるは取らずとあるもおぼつかなし

○同三年九月戊戌幸神泉苑有勅令從五位下平
群朝臣賀是麻呂作和歌曰
伊賀爾布久 如何吹 賀是爾阿禮波可 風在者 於保志萬乃大
島乎波奈能須惠乎 尾花末 布岐牟須悲太留 吹結而有 頭注云萬葉第二天智天皇賜鏡王女御歌云山跡有大島嶺爾併案大島當在平群郡
皇帝歡悅即授從五位上

○嵯峨天皇弘仁四年夏四月癸未朔甲辰幸皇太弟南
池命文人賦詩右大臣從二位藤原朝臣園人上
歌曰 頭注云祁布祁作祈依類聚國史改正
祁布乃比乃 今日 伊介能保度理爾 池邊 保止度伎須 霍公鳥
多比良波知與止 平安千代 那久波企企都夜 鳴聞乎
天皇和曰
保度止伎須 霍公鳥 那久己惠企介波 鳴聲聞 宇多奴志度 歌主
度毛爾千世爾度 共千代 和禮母企企多理 朕聞而有
大臣舞蹈雅樂寮奏樂賜五位以上衣被及諸王藤氏
六位已下并文人等綿各有差

○同十四年二月丙戌朔癸丑幸無品有智内親王山庄
花宴 上欣然 賦詩群臣獻詩者衆賜祿有差俾下
文人 頭注云俾文以下與續日本後紀全同 賦春日山庄詩各探勒韻公主
探得塘光行蒼即灑筆曰
寂寂幽庄水樹裏 仙輿一降一池塘

栖レ林孤鳥識二春澤一　隱レ澗寒花見二日光一
泉聲近報初雷響　山色高晴暮雨行
從レ此更知恩顧渥　生涯何以答二穹蒼一
天皇歎レ之授二三品一于レ時年十七是日　天皇書レ懷
賜二公主一曰
忝以二文章一著二邦家一　莫下將二榮樂一負中烟霞上
即今永抱二幽貞意一　無事終須レ遣二歲華一
詩賜下召二文人一料上封百戶內親王者太上天皇幸姬王氏所二誕育一也頗涉二史漢一兼善屬レ文爲二賀茂齋院一

○續日本後紀　頭注云今按世所流布續日本後紀與類聚國史令比校此紀亦贋書也惜哉不全篇矣

序云起レ自二天長十年二月乙酉一訖二于嘉祥三年三月己亥一惣十八年操二春秋之正体一聯二甲子一以銓次考以二始終一分二其首尾一都爲二廿卷一名曰二續日本後紀一云々又云貞觀十一年八月十四日太政大臣從一位臣藤原朝臣良房參議正四位下式部大輔臣春澄朝臣善繩云々

○仁明天皇承和九年秋七月癸巳朔己酉是日春宮坊帶刀伴健岑但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等謀反事發覺云々乙卯詔曰現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔止良萬宣御命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止與宣不慮外爾太上天皇崩流爾依天晝夜止无久哀迷比焦禮御坐爾春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊（伊字未詳）隙仁乘天與二橘逸勢一合レ力天逆謀乎搆成天國家乎頗亡須无止此事乎波皇太子波不レ知毛在止女不善人仁依天相累事波自レ古利言來留物奈利又先先毛仁令二法師等一天呪咀止云人多安利而止毛隱號擾求女无事乎不欲奈毛之天抑忍留太又近日毛或人乃云屬レ坊人等毛有レ謀止云若其事乎推究波恐波不善事乃多有无事乎加以後太上天皇乃厚御恩乎顧天那毛究无事乎不レ知奴今思保佐久波皇太子乃位乎停天彼此無レ事波善久有部之止思保之女須又太皇大后乃御言仁毛如此久奈毛思保世留故是以皇太子乃位乎停退介賜不云云八月壬戌朔甲子遣二參議正躬王一送二廢太子於淳和院一備前守從四位上紀朝臣長江自レ院逢迎其儀駕二小車一出二禁中一到二神泉苑良角一駕二牛車一先レ是童謠曰

天波琵琶乎打留那玉兒牽枯　頭注云牽枯或作二橋括一等不レ知二孰是一　樋口氏曰枯ハ裾乎前漢鄒陽傳曳レ裾魏志辛毘傳引レ裾
坊爾牛車波善有識咸言童謠不レ虛于今驗之矣

○同十二年春正月戊申朔己卯於大極殿修最勝會之初也是日外從五位下尾張連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂觀者以千數初謂鮐背之老不能起居及于垂袖赴曲宛如少年四座僉曰近代未有如此者濱主本是伶人也時年一百十三自作此舞上表請舞長壽樂表中載和歌其詞曰

那那都義乃七世美與爾萬和和ノ字有疑倍留御代所舞毛毛知萬利百餘止遠乃於支奈能十翁萬飛多天萬川流舞上

○丁巳天皇召尾張連濱主於清涼殿前令舞長壽樂舞畢濱主即奏和歌曰 頭注云同紀承和十三年正月乙巳天皇朝覲太皇大后於冷泉院戊辰召外從五位下尾張連濱主清涼殿前令奏舞于時百十四○續敎訓抄第四春鶯囀下なにつきのみよにまわへる翁さおきなさてわひやはおらむの翁さかきて次下に云天皇頗御感ありて今の長壽樂の子細な御尋あるきさみ又和歌を奏す其詞云はゐこさにももみやいいろさりのさえづりてこさしはちよさまひそかなづる此和歌の韻について奏するこころの舞は今の春鶯囀是也云々

於岐那度天翁和飛夜波遠良無 佗哉者將居 久左母支母草木散可由流登岐爾榮時伊天弖萬吼天牟出而舞

天皇賞歎左右垂涙賜御衣一襲令罷退

○同嘉祥二年三月乙卯朔庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十奉造聖像四十軀寫金剛壽命陀羅尼經四十卷即轉讀四萬八千卷更作天人不拾芥廿八(子)類天女(衣類)罷拂石翻攀御藥倶來祇候及浦嶋子暫昇雲漢而得生長吉野女眇通上天而來且去等像副之長歌奉獻其長歌詞曰(注意細字類さあるは類聚國史の略也)

日本乃野馬臺能國遠賀美神佐(保類)伎能宿那毗古少彦那加葦(草イ)菅遠殖生志川國固米造介牟與里瀛津(都類)波起川毎年爾春波有禮度今年之春波毎物爾滋榮惠牟乎豆類天地乃神毛悅比海山毛色聲變志梅柳常與理殊爾敷榮咲比開天鶯毛聲改豆八千種爾奇事波茜刺志天照國乃日宮能聖之御子曾瓠葛天能梯建踐歩美天降坐志大八洲洲下脫天字歟 日嗣能高御坐萬世鎭布五八能春爾有氣利我國之聖乃皇波尊毛御座加日宮能聖之御子能天下爾御坐天御世御世爾相承襲豆毎皇爾現人神止成給御坐波世四方之國隣皇波百嗣爾繼云毛止何加豆等久有牟所以爾神毛順比佛倍佐敬給布益益爾今我帝波往古毛爾不御坐志將來毛何申牟釋迦之法弘米給豆(比類)出家之人法乃族遠罪有度赦賜都咎有止宥米賜都無譬岐御惠乃

異廣久御坐波世出家人(家人之間脱之字乎)法族波御世世(世世之間類有遠字)恒
爾惜乎度年月遠堰倍加留天不レ過弖須鎮牟止許曾誓願比禱申勢
然毛禮度世之理度慶之春爾有利介何志弖帝之御世萬代
爾而爾飾弖奉レ令レ榮度栢之枝乃 頭注云桑枝仁徳紀求栢之枝由者承上榮而寄詞於吉野仙媛之名歟 延喜式春日祭祝詞云天皇我朝廷爾八久波叡能如久佐加叡志米賜登云々 私云寄此祝詞而栢枝乎久八乃木止可讀歟 種季云天平本三體詩長鶴社日詩桑栢影斜家社散云々栢讀文注桑巾讀久波者爲得
由求禮波佛許曾願成倍志多
聖而已驗波伊萬世所以爾帝遠鎮布爾驗須萬陀羅尼乃御
法四十卷乎寫志繕(納類)倍護成須聖之御像四十軀奉造
弖四十之師乃(能類)悟開介天○(脱五字一句乎)行布人達詞弖倍誠乎致志四萬爾
八千卷添弖誓願奉レ讀利飾祈鎮申利世行倍留此之所
爲乃態乎 頭注云古語拾遺云美夜比登能於保與須我𡖋爾伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須我𡖋爾 何爾志天
陳倍聞止江乎茜刺須終日𡖋爾須加烏玉乃狹夜通左右時日經天思
爾付(慈類)悳等俱功悅也倍也悳也三重韻恩也落湍乃○(水乎)堰(倍類)毛賀爾天世中乃(能類)
伊須賀志 頭注云伊須賀志齊明天皇紀嚴神之宮さかきていつくしのかみのみやさも又はいつかしのかみのみやさもよめりすさつさ通すれはいぬかしはいつかしなる人也
熊遠添飾利申曾志上留就中爾大海
乃白浪開弖常世嶋國成建天到住美聞見人波萬世能壽

遠延倍川故事爾云語來留澄江能淵爾釣世志皇之民浦嶋子
加天女釣𡖋禮來弖紫(之歟)雲之(住類)棚歟引弖片時爾將弖飛
往天是曾此乃常世之國度語弖𡖋比七日經𡖋志加 頭注云神代紀一夜之間
无限久命有波志此島爾許曾有介𡖋三吉野爾有志熊志爾天
女來通弖𡖋後波蒙レ譴天毗禮衣著弖飛度爾支云是亦
此之島根乃人爾許曾有度波云禮五種乃寶雲波大悲者乃千
種乃御手乃人乃世遠萬代延留一種乎別爾莊天萬代爾
皇乎鎮倍利礒上之緑松波百種乃葛爾別爾藤花開榮
弖萬世爾皇鎮倍利鶯波枝爾遊天飛舞弖囀歌比萬世
爾皇乎鎮倍利澤鶴命乎長美濱爾出弖歡舞天滿潮乃無ニ
斷時ニ久萬代爾皇遠鎮倍利薰修法之力乎廣美大悲者之
護乎厚美萬代爾大御世成波如ニ八十里ニ城爾芥子拾布
天人波 頭注云萬葉第十八安米比度之云々私云天人也又第十天人乎比古保之止讀里 擧レ手弖不レ拾
成奴如ニ八百里ニ盤根爾毗禮衣裾垂飛志波拂人不レ拂成
天皇乃護之法乃藥乎擎持來候布如レ是鎮倍留事者毎レ事
雖レ劣毎レ物非レ數度爾旅人爾宿春日奈留山階乃 頭注云山階寺則興福寺
也佛聖乃奉レ獻布里奈大御世乎萬代祈利佛毛爾申上流

事之詞波此國乃本(本上脱日字歟)詞尓逐倚天唐乃詞遠不假須良
書記須博士不雇須此國乃云傳尓布良(久類)日本乃(能類)倭之
國波言玉乃(頭注云萬葉第五言靈能佐吉播布國等加多利繼第十一事靈八十衢夕占問第十三志貴島倭國者事靈之所佐國叙)
云々適當さつゞく時は有幸之意 當國曾度古語尓流來禮神語尓
されば當なさきはふとよむべし 傳來禮留傳來事任万本乃世(能類)乃事尋者歌語尓詠反
志神事尓用來利(禮類)(留類)本乃世尓依遵弖佛尓毛神尓毛與陳弖
天禱志誠波丁寧度聞志食弖嬰兒乃孩(水歟)(頭注云孩一作咳紀亜類咳和名嬰兒下云孩
兒、美止利古)戸語仁折箸乃本末不知亂絲乃(能類)亂天有度禮
來反始生小兒也
九重能御垣之下等(尓類)常世鴈率連天狹牡鹿乃膝折反
志(頭注云萬葉第三十之自物膝折伏云々)候聞(開イ)止曾言須何尓以聞牟廖汗
流志競恐留何尓以聞牟
者夫和歌之體比興爲先感動人情最在茲矣季
世陵遲斯道已墜今至僧中頗存古語可謂禮失
則求之於野故採而載之於是大法師等寓居右
大臣家遣右近衛少將橘朝臣眞直宣勅慰之即
施御被賜雜色四十餘人調布各有差

○日本三代實錄

序云臣時平等竊惟云々又云起於天安二年八月乙卯訖于仁和三
年八月丁卯首尾三十年都爲五十卷名曰日本三代實錄云々延
喜元年八月二日左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平從五
位下勘解由次官兼大外記臣大藏朝臣善行
清和天皇天安二年　天皇諱惟仁　文德天皇之第
四子也母太皇大后藤原氏太政大臣贈正一位良
房朝臣之女也嘉祥三年歲在庚午三月二十五日癸
卯生　天皇於太政大臣東京一條第十一月二十五
日戊戌立成皇太子于時誕育九月也先是有童
謠云
大枝乎超天走超天走超天(頭注云第二走超恐衍文至下云三超之謠)
騰躍(躍利止 騰加イ)超天我那護毛留田仁搜理阿左食無志岐
耶雄雄伊志岐耶(那三代實錄)
識者以爲大枝謂大兄也是時　文德天皇有四皇
子第一惟喬親王第二惟條親王第三惟彥親王皇太
子是第四皇子也天意若曰超三兄而立故有此三
超之謠焉

萬葉緯卷第四

此章雖非古詠同類將有便古語依而集于茲

台記別記 康治元十一月大嘗會記

(頭注云)續千載神祇康治元年近衛院の御時大嘗會悠紀方神樂歌三上山をよめる左京太夫顯輔 ちはやふる三上の山の榊はなかなかぐはしみさめてこそなれ 此外同集此集の歌有二首不預載 顯輔家集に此時の大嘗會悠紀方の歌屏風歌不殘見ゆ

本朝書籍目錄云台記左大臣賴長宇治惡左府云々今案別記者所流布于世之台記外所奧秘記也康治者近衛院年號也此壽詞蠶蝕衍文甚多矣雖然以延喜式等祝詞參考而有明證則聯綿字句傍書圈別新古耳

中臣壽詞 舊事本紀第五宇摩志麻治命傳下云辛酉正月庚辰朔天孫磐余彥尊都橿原宮初即皇位號曰元年云々宇摩志麻治命先獻天瑞寶亦竪神楯以齋矣謂五十櫛亦云今木刺繞於布都主劔大神奉齋殿內即藏天璽瑞寶以爲天皇鎭祭云々高皇產靈尊兒天富命率諸齋部擎天璽鏡劔奉安正殿矣天兒屋(根乎)命兒天種子命奏神代古事天神壽詞矣

貞觀儀式大嘗會條下云辰日神祇官中臣捧賢木入自儀鸞門東戸就版跪奏天神之壽詞 (頭注云)延喜式大嘗祭下與貞觀式同

神祇令云 凡踐祚之日中臣奏天神之壽詞義解云 謂以神代之古事爲萬壽之寶詞也釋言壽詞神代古事也 跡云奏壽詞上劔井鏡至十一月爲大嘗耳

現御神止大八嶋國所知食須大倭根子天皇我御前仁天神乃壽詞遠稱辭定奉止申須高天原仁神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天八百萬乃神等遠集賜天皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平止所知食天 (頭注云)式大殿祭祝詞云所知食(古語云志呂志女須) 天都日嗣乃天都高御座仁天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉氐天降坐之後仁中臣乃遠都祖天兒屋根命皇御孫尊乃御前仁奉仕氐天忍雲根神遠天乃二上仁奉上氐 (頭注云)神代紀下天津彥火瓊々杵尊云々自槵日二上天浮橋云々 神漏岐神漏美命乃〇御乎前仁受給波里申仁皇御孫尊乃御膳都水波宇津志國乃水加天都水加 (頭注云)貞觀儀式踐祚大嘗祭上云次定御井所注方一丈二尺若當所舊井卜食使修理用之云々又云御井在院外東北角荒見川東童女井在其東云々 式踐祚大嘗祭齋場下其井二所卜訖御井者造酒兒始掘造酒兒井者稻實卜部始掘云々 神宮雜事記第二云永承五年云々抑皇太神宮天降御之時射始天御饌乎備進乃水非當朝乃水天村雲命乃詔勅遠蒙天高天原乃天忍石乃長井水乎持下天其上方遠八盛備進天殘乃水以天忍井水登宣天豐受神宮坤方岡乃片岸仁御井遠新掘天其御井底仁天忍井乎入加天當朝乃水仁和合志天末乃世乃御饌備進料仁移置給水也云々 立奉牟止申里遠事敎給志仁依氐天忍雲根神天乃浮雲仁乘氐天乃二上仁上坐氐神漏岐神漏美命乃〇御乎前仁申世波天

乃玉櫛遠事依奉氐此玉櫛遠刺立氐自ニ夕日一至ニ朝日ノ照
万天都詔刀乃太詔刀言遠以氐告禮如此告波麻知波弱
韮仁(頭注云)○麻知波弱韮未詳 由都五百篁生出牟(頭注云)古事記云伊邪那岐命云々刺其右美豆
良之湯津津間櫛引闕而投棄乃生ノ筍○和名抄筍(和名太加無良俗云太加波良)竹萌也 自ニ其下一天乃八井
出牟此遠持天都水止所聞食止事依奉支如此依乎○奉志
任任仁所聞食由庭乃瑞穗遠四國卜部等太兆仁卜事
遠持氐(頭注云)○種季曰垂仁古事記云布斗麻邇々卜相云々日本紀大占此云布刀麼爾 奉仕留悠紀仁近
江國野洲主基仁丹波國氷上遠齋定氐(頭注云)○江次第大嘗會國郡卜定主基丹波備
中代尭之丹波桑田船井多紀氷上天田何鹿云々○和名抄丹波氷上郡氷上(比加美) 物部人等酒造兒酒波二字衍文乎
粉走灰燒薪採相儐稻實公等大嘗會乃齋場仁持
齋波利參來氐今年十一月中都卯日仁由志理作乎伊都志理
(頭注云)由志理伊都志理未詳齋知嚴知乎 持恐美恐美清麻波利仁奉仕利(頭注云)○
式祈年祭祝詞云忌部弱肩爾太多須支取掛氐持由麻波利云々又大殿祭祝詞云持齋波利云々 式齋王奉入齋比清麻波理氐云々 月内
仁日時遠撰定氐獻留悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠
(頭注云)○貞觀式大嘗祭下宣命云黑岐白岐御酒赤丹乃穗爾食惠良岐罷止云々 大倭根子天皇我天都御
膳乃長御膳遠遠御膳止(頭注云)○式祈年祭祝詞云六月々次長御食乃遠御食登赤丹穗爾聞食故云々
汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛所聞食氐(頭注云)式廣瀨祭祝詞云初穗者汁仁毛穎爾毛云々 豐明

仁明御坐氐天都詔刀乃稱辭定奉留皇神等毋千秋五百
秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利(頭注云)式大嘗祭下大嘗聞食牟爲故爾皇神等相宇豆乃比奉氐云々
堅磐常磐仁齋奉伊賀志御世仁榮志女奉利(頭注云)式平野祭祝詞云天皇我
御世乎堅石爾常石爾齋奉利伊賀志御世爾幸閇奉云々 自ニ康治元年一始氐與ニ天地月
日一共照志明良志御坐事仁本末不レ傾茂槍乃中執持氐奉
仕留(頭注云)式齋王奉入祝詞云御杖代止進給布御命乎大中臣茂桙中取持云々 欽明紀云如嚴矛(此云伊箇之倍虚)中取事而云々
中臣祭主正四位上行神祇大副大中臣朝臣淸親壽詞遠
稱辭定奉久止申叉申久天皇朝廷仁奉仕留親王等王等諸
臣百官人等(頭注云)式平野祭祝詞云仕奉流親王等臣等百官人等云々 天下四方國乃百
姓諸々集侍利氐(頭注云)貞觀儀式參集讀レ集爲宇古那波禮留 見食倍尊食倍歡
食倍聞食倍天皇朝廷仁茂世仁八桑枝乃立榮奉仕留倍
禱乎(頭注云)式春日祭祝詞云王等卿等乎毋久天皇我朝廷爾伊加志八久波爾如久仕奉利佐加爾志米賜登云々 所聞
食止恐美恐美毛申給波久止申
物部人等 貞觀儀式大嘗祭下物部十人造酒童女一人粉走女一人相仕一人云々 式踐祚大嘗祭造酒兒神語佐加都古 御酒波一人篩
粉一人共作二人多明酒波一人(巳上並女) 稻實公一人燒炭一人採薪四人歌人二十人歌女二十人云々 天都水 實基本紀にこゝに似
たることあり又御鎭座傳紀豐受宮御井神社下 又御鎭座本紀云天村雲命參登云々天忍石乃長井乃水乎云々 北山抄大嘗會辰日云々
中臣捧ニ賢木一跪奉ニ天神之壽詞一云々 同註天慶記云卜文二枚一枚下ニ定御井一 貞觀式次御水六理用ニ齋場御井水一云々 千秋乃五百

欽仁此段天孫降臨之段ニ似たり　立奉此詞榮花物語ニ多し舊事紀皇孫本紀我女二並立奉由者云々　粉走式粉飾つくる　灰燒式炭に作る式は誤なるべし灰は當時にもあしき酒には入るなり昔は皆入るさみえたりしかれば炭は誤なり　清親(伊庭氏曰)公卿補任云大中臣清親故神祇大副輔清一男永長二二叙位云々保延二年十二月卅日祭主同五正廿四轉大副康治元正七正四位御祈賞十一十四叙從三位大嘗會叙位先例云々久壽二十一六日正三位大嘗會(壽カ)詞賞保元二八薨七十二云々

貞觀儀式本朝書籍目錄云十卷云々今案不レ記ニ作者一同貞觀式ノ下ニ記シテ云貞觀十三年奏進右大臣氏宗公撰云々　若同作歟此祭文延喜式陰陽式亦載焉因ニ予茲ニ記ニ同異一耳

十二月大儺儀

晦日戌二刻諸衞勒ニ所部ニ云々于時陰陽寮官人率ニ齋郎等(頭注云、今俗さいやれさ云ふは此齋郎の轉語に似たり)候ニ承明門乎外一。以ニ桃弓葦矢桃杖一頒ニ宛儺人一云々陰陽師進讀ニ祭文一其詞云

今年今月今日今時時上直符時上直事一人一事時下直(四字式无朝野亦无)符時下直事及山川禁氣江河谿谷二十四君千二百官兵馬九千萬人已上音讀位置衆(儲(朝野))諸前後左右各隨ニ其(其 式朝同)方ニ諦定レ。(朝)文(朝)位。可レ候ニ大宮内爾一神祇官宮主(みやしゅ)能(乃(朝))伊波比奉里敬(あが)奉留(め)天地能(乃(朝))諸御神等(かむたち)波平久於太比(おたひ)爾(頭注云)於大比)伊麻佐可(里(朝))布倍志登申。事別天(寸(朝))詔(氏(朝))久穢久惡伎(久(朝))疫鬼能(乃(朝))所所村村爾藏(おさま)里隱(かくさ)座布留乎波千里之外四方之堺東方陸奧西方遠値嘉

(頭注云)和名抄肥前國松浦郡値嘉(知加)今案遠値嘉近値嘉あるさ云りしからばさほちさ讀べし又筑前國遠賀郡あり和名今本和訓なし若遠賀は乎知加さ讀で此遠値嘉さ同所歟可尋此四堺の事拾芥抄にも出せり

南方土佐北方佐渡與乎知(遠 里)能(乃(朝))所乎奈牟多知疫鬼之住(すみ)加登定賜比行賜弖五色寶物(罷、朝)海山能(乃(朝))種種味物乎給弖罷賜移(汝等)賜布所所方方爾急爾罷往(ゆけ)(里(式))(牟(式))登追給登詔爾挾ニ姧心(かたましき)ニ弖留女加久良波。大儺公小儺公持ニ五兵ニ弖追走刑殺登。(イナシ 打都々之加牟物所止(式) 隱)○○○○○○○○○聞食登詔布(式)

訖儺長大舍人著ニ方相面(頭注云、方相喪葬令義解云謂方相者蒙ニ熊皮一黄金四目玄衣朱裳執戈云)緋衣(うけの)皂裳(くりの)持ニ楯槍(たてほこ)一小儺齋郎著ニ紺布衣緋末額一持ニ桃弓葦矢桃枝(杖見上)一碎レ死儺長稱レ儺少儺及(齋郎乎)。。分配人等隨即同稱遍馳ニ宮中一出レ自ニ十二門一付ニ京職ニ云々

年中行事秘抄內膳司供ニ忌火御飯一事條下

須和名抄云鳴鳩爾雅集註云鳴鳩(鳴音七余反和名美佐古今案古語用ニ鶚賀鳥三字一云ニ加久加乃土利一見ニ日本紀私記一公望案高橋氏文云水佐古)鶚鶚也好在ニ江邊山中一亦食レ魚者也云々今案釋日本紀亦引ニ公望私記一可レ謂古書雖レ然恨不レ載ニ全文一矣

高橋氏文云天皇景行乎五十三年八月行ニ幸伊勢ニ轉入ニ東國一
冬十月到ニ上總國安房浮嶋宮一（旁注云）和名抄養老二年割上總國四郡置安房國 尒
時磐鹿六鴈命從駕仕奉矣 （頭注云、紀景行天皇五十三年秋八月丁卯朔天皇詔ニ群卿一曰朕顧ニ愛子一何日止乎冀欲レ巡ニ狩小碓王所平之國一是月乘輿幸ニ伊勢一轉入ニ東海一冬十月至ニ上總國一從ニ海路一渡ニ淡水門一是時聞ニ覺鴐鳥之聲一欲レ見ニ其鳥形一尋而出ニ海中一乃得ニ白蛤一於是膳臣祖名磐鹿六鴈以レ蒲爲ニ手繦一白蛤爲レ膾而進レ之故美ニ六鴈臣之功一而賜ニ膳大伴部一云々姓氏錄山城國皇別高橋朝臣阿倍朝臣同祖大稻輿命之後也景行天皇巡ニ狩東國一供ニ獻大蛤一于時天皇喜ニ其奇美一賜ニ姓膳臣一天渟中原瀛眞人天皇天武十二年改ニ膳臣一賜ニ高橋朝臣一云々（又阿倍朝臣孝元天皇々子大彥命之後也） 天皇葛餝野毛御獵
（旁注）和名抄下總國葛餝（加止志加）郡度（野カ）毛 六鴈留守太后詔此浦 聞ニ異鳥音一
（旁注）私記曰說ニ瑞鳥一不レ見ニ其名一也 其鳴賀我久々欲レ見ニ其形一不レ得レ登レ陸還時領鮐魚多追來 （頭注云）領鮐魚未詳 六鴈以ニ角弭弓一當ニ遊魚之中一卽著レ弭而出忽獲ニ數隻一仍號ニ頑魯乎一此今諺曰ニ堅魚一 以レ角爲レ釣（頭注云和名抄鰹音堅加）橋此由也（豆乎式文用堅魚二字） 過ニ潮涸一渚上仁居奴爲爾得ニ八尺白蛤一具一六鴈捧ニ件二種之物一獻ニ太后一太后譽給弖鱠乎給供ニ御食一尒時六鴈命申久令ニ料理一弖 （頭注云）料理令義解 將ニ供奉一白云々見ニ河西山取乎曲乎枹葉一弖
（頭注云）和名抄安房國安房郡河曲（加波和）同枸杞和名沼美久須利俗云久古云々 高次八枚仁刺作爪見ニ取乎
眞木葉一枚次八枚仁乎○刺作弖取ニ日影一弖爲レ縵以ニ蒲女羅葉一弖美頭良乎卷麻佐氣葛乎多須岐爾多須岐（己乎此間疑有脫字乎歟）
時爲供奉口太后詔之是時上總國安房大神手御食都神止坐奉爲湯坐連等始祖（頭注云）和名抄上總國周淮郡湯坐の國字たつぬへき 意富賣布連之子豐日連手令ニ火鑽一弖此手忌火手爲天 （頭注云）江次第云忌火每レ至ニ神態一鑽レ火炊亦燮謂之忌火眞也延喜式忌火庭火祭宮主於內膳司行事又云天平三年正月神祇官奏ニ庭火御竈四時祭禮一永爲ニ常例一云々 伊波比由鹿々（麻歟）閇天供ニ御食一并大八洲爾像天八手ト古八手上呼ニ（止歟七乎齋）定天神齋大嘗等ニ供奉始支但之安房大神（頭注云）神名帳安房郡安房坐神社（名神大月次新嘗） 爲ニ御食○神一著令大膳津（式神名帳）職ニ祭神也令レ鑽ニ忌火乎○大伴造者物部豐日連之後也

神今食事下

高橋氏文云太政官符云定ニ高橋安曇二氏一供ニ奉神事御膳一橋（頭注云）和名抄下總結城郡高 神名帳同國同郡高椅神社

中辰日節會下

高橋氏文云六鴈命七十二年（景行天皇六十年崩不審）秋薨天皇宣命云十一月新乎○嘗の會も○大乎膳職の御膳の事も六鴈命の勞始成流所なり是以六鴈命の御魂乎は○大乎膳職仁（頭注云）神名帳云大膳職坐神三坐（並小）御食津神社火雷神社高倍神社倍は橋乎埼乎三代實錄云貞觀元正廿七大膳職從五位下大八島竈神八前齋火武主比神內膳司從五位下庭火

皇神等竝從五位上云々伊波比奉天春秋ノ永世ノ神財ト仕奉牟志女云

云

拾芥抄 種季云拾芥抄洞院相國公賢公の抄也坊本三本あり一本活字の本又つれの板本に二本あり此中活字のを定本とすべし板本は二本共に増添たるもの往々に見ゆ活字の本を合校すべし舊江州石山寺より出たる本也又別に一本連歌師里村紹巴三條西殿より傳へて手寫したる本を後代まで持傳へたるを其子玄心代に有レ由て須華の某道億氏家藏となれり其本も活字に合見るに後に加へたること多く見えたれば還て活字の本にいづれ活字本上末終に寫本云後本者洞院相國被レ抄之仍果守僧正留寫之當寺宿座主相傳令深秘被レ納二宿底一云々紹巴手寫の本には爾名院殿手書の奥書ありき

○宮咩祭文 伊呂波字類抄云宮咩奠正月十二月初午日院宮諸家祭レ之云々 (頭注云)淸少納言枕草子詞なめげなる物みやのめのさい文よむ人云々　神名帳御巫祭神八座之内有二大宮賣神一與二宮咩一同神乎謂二五柱笠間一則別神歟式祈年祭祝詞大宮賣云々宮咩大宮賣爲二同神一者入二於乃字一可レ讀　兵範記云保元三年正月九日殿下宮咩祭如レ例右大臣殿御方初有二此儀一自二御所一調給二人形一政所備二祭物一家令大舍人允紀宗賴爲二祝師一

後冷泉院

維永承某年歳次某其月壬午年加中仁月乎擇比月加中仁日乎擇比日加中仁時乎擇天掛毛畏支宮咩五柱笠間乃廣前仁從四位上行官姓名恐美恐天毛申給久緒波乍レ編綿首乍レ結進物波高环加彌高高仁飯乃方毛利加仁清酒乃早仁堅酒乃堅久乎○橘乃忽仁餅乃持天榮仁鯛乃平仁鱠乃彌益益仁鯯乃好美好仁鮑乃片岡仁蠣乃搔寄天壽乃庭佐良須嚴久聞食志受納給天壽長久身全天志天地乃不祥内外乃惡事未萌以前仁兼天波遠久拂世退介給天官爵如意仁叶志女給天萬世仁子孫繁昌乃門止有志女夜乃守里日乃守仁里常磐堅磐仁守里幸戸給止閉恐美恐美毛申須

(頭注云)○笠間うつほ物語國ゆつり巻そん王の君ふぢつぼにあるたぐれにかはばなれてくろき水桶のおほきやかなるよつゝいつゝかされて女どもさしいれていぬつほれの人々あやしきものかなごぜんにかゝるものなさし入ていぬるさてみればおほきなるくぼてをしろきくみしてゆひていつゝさしいれたりさりいれたればほさはおけいのおほきさなりあけてみればひ(さカ)つにはれりたるきぬをいひもりたるやうにいれたりいまひとつにはあやをおなしやうにいれたりいま一にはかつをさけなどのやうにてぢんをいり(れカ)たりくぼてのふたになま女のてにてけふならんからうじて一ついのちつるひらてくぼてにはなどかれざこさもきかずなりにしかさまには神のおほかるくぼてさけさぞ云々實方家集云ためたふの辨なかよりかいづにたえそめしさしこさしばかりさて宮のへのうへの御そのはしらひたりけるたが心けあはむさおもへりけるをけしきを見てしりふこさに(本ノマヽ)

あめにますかさまの神のなかりせば
ふりにし中をいかでさはまし云々

釋日本紀書二于目錄一云通議大夫祠部員外郎雍州刺史卜部宿禰懷賢釋云々凡關二此書一今不レ傳二于世一古書間多矣可レ謂二神代紀至寳一也

龜兆傳曰(頭注云)令義解云兆者灼レ龜縱橫之文也令集解云灼レ龜爲レ卜灼駁爲レ兆也　江次第第十八

軒廊(こんらうの)御卜條下　青龜春用レ之西座東向　紫夏用北座南向　(頭注云)今按近世衒ニ神道一者以ニさほかみえみ多如等詞一爲ニ三種祓一此龜卜詞而目ニ吉來一稱ニ三種祓一不レ聞ニ名目一可レ笑

水灌レ之　火放レ之　木立レ之　金爲ニ懸レ水器一　土以ニ龜甲一撒　水ト

火ホ　神カミ　人エミ(頭注云)種季云黃龜四季用向其月建さある下に押紙にしてあり龜卜必具ニ五行一

土多如女乎　金えみ(人)　木かみ(神)　(頭注云)多如如可作女又後人神二字闕ニ和訓一准レ前是亦可レ讀ニえみかみ止一乎又多女かみさよむべき歟所註初ノ今案江次第所レ記さほかみえみため等之假字疑有ニ書失一人以下ノ闕恐有ニ亂脫一

白龜秋用レ之西向　黑冬用南座北面　黃龜四季用向ニ其月建一　(頭注云)袖中抄うらべかたやきの下に云龜卜に五兆さ云事あり其中にためさ云字は人さ云字を書さ云々仲實朝臣戀歌にはゝかひにちがへるかたのうらくしやためさはしろはきしかあへるかはゝかひさは朱櫻桃火さもかき又たゞ櫻桃さもかけりためにはあふさ云事あり相の字をかけりかめのうらなかめのますなさもよめり師時卿歌云おもひかれかめのますなにこさゝへはためあひたりさきくそうれしきさ云々　江次第與ニ袖中一人字訓相違如何伴田氏曰はゝかは山櫻也今世取レ皮曲レ物などをさつる物也此木の皮横にのくれる故に縱横に氣を通ずるなり夫故に龜卜に用なりうらかたにたてよこに氣をめぐらさむために象をされり云々

今案惜哉龜卜之術倭漢共以失ニ於其傳一對馬儒醫伴田氏曰至ニ于今世一對馬業ニ龜卜一神人多矣僉卜部氏也自然海邊取下所ニ寄來一之龜甲上乾曝收置而成ニ龜卜一其異詞等雖レ有ニ數多一秘而不レ傳ニ外人一云云夫龜卜者自ニ往古一對馬伊伎氏掌レ之近世雖レ混ニ貴姓一無ニ分レ之者一師雜記引ニ今古明證一正秀於是雖ニ無レ用事多一爲レ解レ惑載ニ全文一而已雜記云或書云卜部姓仲哀天皇御宇雷大臣(天兒屋根十一世)人達ニ龜卜一故始給ニ卜部姓一又常磐大連(兒屋根十八世一本レ授)中臣祓於欽明天皇一於是改ニ卜部姓一而給ニ中臣姓一天智天皇御宇至ニ大織冠一給ニ藤原氏一大織冠御子意美麻呂又復ニ中臣姓一神護景雲二年意美麻呂子清麻呂被レ拜ニ中納言一斯時加ニ給大字一又改ニ大中臣一自ニ清麻呂一四世日良麻呂又給ニ卜部姓一(頭注云)三代格第一貞觀十四年十二月十五日官符平野社預從五位下卜部宿禰平麻呂云々三代實錄四十九元慶五年十二月乙亥朔五日己卯尾張國中嶋郡人從五位下行丹波介卜部宿禰平麻呂者伊豆國人也幼而習ニ龜卜之道一爲ニ神祇之卜部一揚レ火灼レ龜決ニ義疑一多効承和之初遣使聘唐平麻呂以レ善ニ卜術一備ニ於使部使一還之後爲ニ神祇大史一嘉祥三年轉ニ少祐一齊衡四年授ニ外從五位下一天安二年拜ニ權大祐一兼ニ宮主一貞觀八年還ニ參河權介一十年授ニ從五位下一累ニ歷備後介一卒年七十五云々(以上頭注)自レ爾以來代代至レ今吉田家不レ改今いはくこれは妄傳を受たる說なるべし卜部の家の說にてあるべからず先大中臣は天兒屋命より傳はりて隱れなき貴姓卜部は忍見命より傳はりて先祖大きに殊なり凡祭祠等は中臣を最さして忌部これに次たり延喜式等をみるに卜部は是等の下に屬すさみえたり令第二(神祇)云凡灼レ龜占ニ吉凶一者是卜部之執業これ中臣の外に卜部氏ある事昔より明らかなり然るに天武天皇十三年に八姓を分て眞人朝臣宿禰等の姓を諸氏に賜ひける時中臣には朝臣忌部には宿禰を賜ひけれど卜部は㕘からずみにたる事もなし三代實錄第七云貞觀五年九月七日丙申壹岐島石田郡人宮主從五位下卜部是雄神祇權少史正七位上卜部業孝等賜ニ姓伊岐宿禰一其先出レ自ニ雷大臣命一也　(頭注云)顯宗天皇三年月ノ神著レ人謂之曰云々壹伎縣主先祖押見宿禰侍レ祠云々又日神著レ人謂云々對馬下縣直侍レ祠云云○姓氏錄右京神別壹伎直天兒屋根命九世孫雷大臣之後也又未定雜姓大和國津島直天兒屋根十四世孫雷大臣命之後也○今案壹岐對馬二姓共天兒屋根庶流而雷大臣亦有ニ兩人一(以上頭注)同第廿

一云貞觀十四年夏四月廿四日癸亥宮主從五位下兼行丹波權掾伊伎宿禰是雄卒是雄者壹岐島人也本姓卜部改爲ニ伊伎一始祖忍見足尼命始レ自ニ神代一供ニ龜卜事一厥後子孫傳ニ習祖業一備ニ於卜部一是雄卜數之道尤究ニ其要一日者之中可レ謂ニ獨歩一これによれば卜部の上祖は忍見足尼命にて雷大臣より殊に顯はれたる意をあらはさむために今の兩文影略互見して初には雷大臣より出といひ後には始祖を擧たる歟雷大臣は日本紀には見えず神功皇后紀に中臣烏賊津臣といふ人を審神者としたまふとあれば仲哀天皇の御時尤此人神職を掌るべし烏賊と雷と似たれば烏賊津臣を雷大臣といひなせるにやされど神功紀に中臣烏賊津臣とあれば混ずべからず又大臣にあらず其上後御時は武内宿禰大臣にておはしければ雷大臣は別の代の人なるべし又上古より中臣氏は中臣にて卜部と改たる事も卜部を中臣と改たる事も日本紀等の史書古語拾遺などにもすべてなき事なり用へからず文德實錄第六云齊衡三年九月庚戌宮主外從五位下卜部雄貞神祇少祐正六位上業基等賜ニ姓占部宿禰一これは卜部の文字をも卜部と改ため姓も宿禰と賜たれば卜部氏の嫡家なり今の卜部は庶流なれば卜部の文字をも改ためず宿禰の尸をも賜はらず此故に古語拾遺の奧書には延久元年神祇大副卜部兼豐とあり新勅撰にも卜部兼直とのみあり釋日本紀奧書云正安四年二月大常卿卜部朝臣兼永とあり正安は後伏見院御宇の年號なればこれよりさきに朝臣の姓を賜はりけるにや何の姓もなかりける家の俄に朝臣を賜ひたるは面目なる事なり續日本紀第三十九云延暦七年七月癸酉前右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂薨曾祖國子小治田朝小德冠父意美麻呂中納言正四位上云々これによれば意美麻呂を大織冠御子といへるも誤なり大織冠御子は定慧和尚と淡海公となり或物に大織冠の父をは御食子といひ意美麻呂をは大織冠の甥といへり甥ならば大織冠と意美麻呂の父とは兄弟にて國子の子なるべしいづれも日本紀等に見えねば皆おぼつかなし天智天皇の御時は中臣の金を左大臣に任じたまひ持統天皇御即位の御時は神祇伯中臣大島朝臣天神壽詞を讀申されければ此人々意美麻呂よりは猶嫡流にて有けるなるべし清麻呂を中納言に任ぜられたるは景雲二年二月なれど大中臣を賜はれるは同じ三年六月十九日なれば斯時加ニ給大字一といへるも誤れり大中臣は史籍におほく見え頼基能宣等の和歌の堪能さへ出來て代々の勅撰に歌ともさかりに見えたりしばらく末の集にみえたるを出して證すべし新後撰集神祇大中臣定忠朝臣まきもくの玉きの御代に跡たれてみやゐふりぬるいすゞ川上續千載雜一大中臣永胤朝臣身のうさをおもへばいとゞ世をあきの袖のしぐれははるゝまぞなき風雅集雜(春歟)上大中臣直宣雪かゝるそともの梅はおそけれど先づ春告る鶯の聲新後拾遺雜秋兼冬大中臣行廣朝臣身こそかくふりぬる物を年くれてつもるを雪と何おもひけん初て兼直の歌見えたり新續古今集秋下卜部兼敦朝臣有明の殘るもうすき庭の面にそれかとばかりおける初雪同神祇吉田祭正三位兼熙もゝさせをばやよかへりの霜をへて絕ぬよし田の神祭かな同集に兼直の歌あれど頭注云)兼直朝臣宣胤卿記に見えたり此歌の時は未だ兼直の四品にならざりける時なるべし樋口氏(以上頭注)たゞ卜部兼直とのみあれば朝臣の尸を賜はりけるも先祖までには廻らざりけるなり右兩氏のやうかくのごとし委しくは家にたづれて知べしかゝればさきの說は大かたひがことなり鎌兼卿の童蒙抄顯昭法橋の色葉集に或物に卜部は思兼命の裔なりといへり彼蒙に兼の字をおきて名のり來れるもさる故にやとおぼしきを三代實錄の說明らかなればおしばかりなり又或說に大織冠藤まきの鎌をもて入鹿を亡ぼされける故に帝より名を鎌足とたまひ其子孫なればとて鎌の字の旁を賜はれりなどいふにたらず意美麻呂は持統紀に臣麻呂とある人なり意は日本紀萬葉等に於とおなじく用るなり伊とおなじとおもひて忌麻呂とよむは誤なり

云々

(頭注云)伊庭種季云活字古本日本紀假字抄云にゝぎの尊の降臨の時有ニ龜神一名曰ニ太詔戶命一服ニ玄衣一而進延レ頭白ニ天照太

神。曰龜者知天而不知地、龜無所不知、焉請獻甲灼之觀光則天下之吉凶居可知矣、蓮遮五兆、曰地天神人兆如次配北南東西中、左爲外、右爲內、地天兆各二十九卦、神人兆各三十八卦、中兆三卦合爲一百三十七卦、以櫻木皮灼甲、決其吉凶、櫻木此云波々加木

凡遊龜賛皇親神魯岐天照太神之謚也神魯美命高御産巣日神之謚也荒振神者掃々手石木草葉斷其語詔群神吾皇御孫命者豐葦原水穗國安平知食天降事寄之時誰神皇御孫尊朝之御食夕之御食尋常之御膳也長之御食遠之御食之間食大嘗會嘗曉御膳也故事已上皆以卜食可仕奉神問問賜之時取天香山白眞名鹿一說云白眞名鹿吾將仕奉我之肩骨内イ拔拔出火成卜以問之問給之時已致火僞名乎

(頭注云)萬葉集第十五長歌略云由吉能安末能保都手乃宇良敝乎可多夜佐良云々

太詔戸命進啓又按時神女住天香山也龜津比女命今稱天津詔戸太詔戸命也白眞○鹿者可知上國之事何知地下之事吾者能知上國地下天神地祇(頭注云)龜策傳云卜祝曰假之玉靈夫子、夫子玉靈荊灼而心命而先知而上行於天下行於淵諸靈數剸莫如汝信玉靈尊神龜而爲之作號判策別名況復人情憤悒但手足容貌不同群天乎神故皇御孫命放天石座別○八重雲天降坐立御前下來也云々吾八十骨甲也乾縣日以竿打小斧天之千別千別甲上甲尻眞澄鏡取作之以天刀掛乎掘可判掃之

穴鉢似町云々先師說云太占讀太町據甲穴鉢者也云々

中臣祓祭文(朝野群載第六)古語拾遺云逮于神武天皇東征之年令天種子命(天兒屋根命之孫)解除天罪國罪事(所謂天罪者上既說訖國罪者國中人民所犯之罪其事具存中臣祓詞)云々今案此祓詞無有史籍而適載于朝野群載而已又與延喜式六月晦大祓祝詞(十二月准之)有大同少異突式不載之者公事以無用故歟今執於神道者稱自神代傳來奧秘恣吐我意大概假用浮屠虛無寂滅之說可笑(頭注云)種季按祓神事即上古之朝政也其毀畔以下罪名足以觀前王法度

高天○原仁乃(朝)神留坐須皇親神漏岐神漏美乃○命御(朝)式ナシ於以天

(頭注云)續日本紀天平勝寶元年夏四月甲午朔宣高天原爾天降坐之云云神留續日本紀第十七宣命詞云高天原神積坐皇親神魯棄神魯美命云々神名帳八神殿祭神玉積產日師說あはせみろにかみつまりさよむべし

八百萬乃(朝)○神達遠神集仁集賜比神議仁議賜天給比(朝)我加(朝)吾皇御孫尊波乎豐葦原乃水穗乃國乎(式)袁イ於安國登平久介所知食○世(朝)登事依之奉差世(朝)天(朝)幾如此依之奉之差世(朝)國中仁荒振○留(朝)神達乎波神問之仁世(朝)問○世(朝)賜比神掃仁ナシ掃賜比天語問之磐根木乃立草乃垣葉於毛語止○天乎(式)給(朝)天○磐座乃(朝)戸袁押開天(朝)乃(朝)之(式)乎(式頭)(朝)放千天○八重雲於伊豆乃千別仁千別○天給(朝)天降利依○之奉差世(朝)左志(式)幾如此久依之奉之差(朝)左志(式)四方乃國中仁登(式)大倭日高見乃國乎安國登木(朝)定奉天下津磐根仁宮柱太敷立天高天

原仁千木高知天我(朝)吾皇御孫○尊乃命(朝)○美乎波(朝)頭乃豆(朝)御舍仁仕止(朝)
奉天(朝)天乃御蔭日乃ナシ御蔭登隱坐天安國登平介久ナシ所知食しろしめさ
乃(朝) 介(朝) ナシ式 ナシ(式)
牟國○中仁成出○牟天乃益人等加過乎犯氣牟種々乃
罪事咎祟利 乎波(朝)三字式無 天津罪登波畔乎放千溝於埋女樋乎放千 ナシ式ナシ式ナン式ナシ式ナシ式ナシ式
頻(式)差(朝) 木(朝)屎戶(式) 乎(式)ナシ(式、詔(朝)
敷蒔串刺生剝逆剝○許々太久乃罪於天津罪登波去別
天 (頭注云)神代紀上是素戔烏尊之爲行也甚無狀何則天照太神以二天狹田長田一爲二御田一時素戔烏尊春則重播種子重播種子此云二璽枳
廢枳且毀二其畔一毀此云二波那豆一秋則放二天斑駒一使レ伏二田中一復見二天照太神當新嘗時一則陰放二屎於新宮一又見下天照大神方織二神衣一居田
齋服殿一則剝二天斑駒一穿二殿甍一而投納 一書曰塡レ渠毀レ畔又秋穀已成則冒以二絡繩一且日神居二織殿一時生二剝班駒一納二其殿內一 國津
罪登波生乃膚斷死乃膚斷白人古久美己加母乎犯世留罪 ナシはだたち 乎(朝)ナシ 與(式) ナシ
己加子於犯世留罪母登子止犯世留罪子登母登犯世留罪畜 與(式)
生(朝)養(朝)ナシけふ ○於犯世留罪昆蟲乃災高津神乃災高津鳥乃禍畜仆 ナシ ナシ式生臥(朝)
志(式)ナシ式爲(式)(ナシ式 ○蟲物乎犯世留罪許々太久能罪事乎出天牟 ナシ式 (頭注云)古事記神
功卷更取二國之大奴佐一而(奴佐二字以レ音)種種求二生剝逆剝阿離溝埋屎戶上通下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類一爲二國之大祓一 如
此出天ナシ式 神波天津(朝)ナシ式 大中臣かなき 天津○宮事於以天○天津金木於本打切末打 乎(式)枝イ
斷天千座乃置座仁置足天波之天津菅曾乎本苅斷末苅切 ナシ 食(朝)食(朝) 麻(朝)
天八針仁取辟天(頭注云)種季云菅麻一絢麻 天津祝詞乃太祝詞乃事 詔言(朝)袁以須ナシ式

乎(式)
於宣禮如此宣羅波 詔(朝)
(頭注云)種季云宣禮は使令の辭にはあらず只のろ也 若菜上云おの／＼わかるゝ道のほさ物語し玉ふて宮の御事の猶いはまほしけれ和漢朗詠にます鏡そこなるかけにむかひゐてしらぬ翁にあふ心ちすれ皆ての字にあたりて「さ」さめたり
天津神者天能磐戶乎押開幾天乃八重雲乎伊 波(朝)乃(朝)門(式)披天(式)
頭(朝)
豆乃千別仁千別天所聞食天牟國津神波高山乃末短山
乃末仁登利坐天ナシ式高山乃伊惠理短山乃 (頭注云)短女坏延喜式侏儒神武紀雉兩靈 ひきゆつき
異紀玉篇鋒才戈切雉然短也 伊惠理於撥別天所聞食牟 乎(式)ナシ
如此所聞食天波 皇御孫之命乃朝廷乎始氏天下四方國爾波(式) ○○○○○○○○○○○ 罪止云
布(式) ○罪咎登云咎 以上四字式ナシ 波不レ在登科戶乃風乃天乃八重 有(朝)
雲乎吹放津事能如久朝能御霧夕乃御霧於朝風夕風乃 式ナシ 乃(朝)仁(朝) 乎(式)
吹拂事能如久大津乃邊仁居留大船能舳綱解放艫 ナシ式 乎(式)式ナシ ナシ式 地
式ナシ 綱解放天大海原仁押放津事乃如久彼方乃繁木加本於 之(式) 乎
燒鎌能敏鎌乎以天打拂○事乃如久遺禮留罪波不 利(朝)ナシ式 不(朝)ナシ 二字ナシ式
有(朝) レ在止祓賜比淸賜事於高山乃末短山能末佐久良谷仁 給不(朝) ナシ 奥利 奈太理(朝)
(頭注云)佐久那太理廣瀨大忌祭祝詞云皇神等乃敷坐須山山乃自レ口狹久那多利爾下賜水乎云々 落瀧津速川乃瀨 多支(式)隼(朝)
ナシ式爪(朝) 仁坐須瀨織津比咩登云神大海○原仁持出奈牟 乃(朝) 涌(朝) 如此
往(朝)ナシ式 持出○波奈荒鹽乃鹽乃八百道乃八鹽道能鹽乃八百會爾 やほあひ

坐須速開津比咩登云神持可々牟呑天 ナシ隼(朝) 哥(式)式ナシ 客(朝) 持加々(朝)ナシ式 哥(式) 如此可々牟

呑波天 (頭注云)師說延喜式六月祓祝詞に呑な哥呑ミ云りよはきたかよはきよろなかよろなご源氏にもいへり季云催馬樂石川

氣吹戸仁坐須氣吹戸主登云神○○○○○氣吹放氐如此 伊(朝) 爪(朝)伊(朝) 乃朝伊(朝)根國底之國(件五字師不讀)

氣吹放波天根國○底○國仁坐須速佐須良比咩登云神持 伊(朝) 乃(朝)之(式) ナシ式 ナシ

佐須良比除失氐牟 路(朝)ナシ式 如此失天波遺禮留罪止云罪咎登云 久持路災天牟自今日以後(朝)

咎波不在物於止祓賜比淸賜登申事○○能由於八百萬 有止(朝) 給(朝) 給(朝) 拔戸(朝)乎

○神等諸共仁左男鹿乃八能○耳乎振立天聞食止申壽 御(朝)達(朝) 佐乎志加(朝) 御(朝) ふりたて ナシ ナシ

式結句如此失氐波天皇我朝廷爾仕奉留官人等乎始氐天下四方爾波自今日始氐罪止云布罪波不在止高天原爾耳振立聞物止馬牽立氐今年六月晦日夕日之降乃大祓爾祓給比淸給事乎諸聞食止宣云々

春日若宮社神樂舞乃歌

初乃歌

君加代乃比左之加留倍支太女志爾波神毛宇江介牟住 例 手乎加由留鼓乃加之頁 殖

吉乃松也禮住吉乃松也禮 可 有 久 (頭注云)詞花集賀讀人しらず君が代のひさしかるべきためしにはは神もうゑけん住吉の松

之頁拍子

春日山以波禰乃松波伊波禰止毛千年乎美止里乃色爾 岩根 雖不云 綠

志里 (頭注云)後拾遺賀能因法師春日山岩根の松は君がため千年のみかは萬代ぞへむ祝千載賀爲家春日山松吹風の高ければ空にきこゆる萬代のこゑ 知

頁牟拍子乃鼓止於奈之

見爾乃嵐波於止世爾止萬歲乃比々支曾美美仁三津 峯 雖不音 響 耳 滿

中の歌 是與里鼓波絕万弖於奈之

三笠山生曾布松乃江太古止爾絕受毛君加左加由倍支 手乎加由留 添 毎 枝 不 可 榮

加那也禮○左加由倍支加奈左加由倍支加奈也哉 (頭注云)拾遺賀聲たかくみかさの山ぞよばふなる天の下こそたのしかるらし 三笠山おいそふ松の枝ごとにたへずも君がさかゆべきかな

末乃歌

色加戸奴松止竹止乃松止竹止乃 不變 之保留手乎加由留 (頭注云)色かへぬ松ミ竹この末の世にいづれひさしさや君のみぞみむ

萬川止竹止乃萬川止竹止乃須惠乃代爾以津 何

禮久志止也以津禮久志止也君乃美曾美牟君乃美曾美 久 身將見

牟君乃美曾美牟以津禮久之止也以津禮 扇乎右戸止留

久之止也君乃美曾美牟君乃美曾美牟

同

初乃歌

千代萬天止君乎以乃禮波三笠山 迄 安比舞乃時波是與里同音 祈 (頭注云)千代までミ君をいのれば三笠山みねにもおなじこゑきこゆなり

美爾仁毛於奈之聲幾古由奈里也禮聲支古 手乎加由留 峯 同 聞 也

之頁拍子

由奈理也奈太牟加之頁

松波以波比乃多女之爾比加留留波春日乃山乃姬小松 樣 被 引

八千代乃玉椿 祝

鼓波之女止同

以川乃支貫與奴通河爾須無鶴奈加井乃浦爾安曾布龜

（頭注云）催馬樂莚田のいつぬき川にすむつるのちとせをかけてあそびあへるかも

中の歌上　同音

鶴乃子乃萬太川留乃子乃也之波子乃

又

曾太太牟代萬天君波萬之萬世也禮君波萬之萬世君波萬之萬世君波萬之萬世君波萬之萬世（頭注云）夫木廿五よみ人しらず君が代は長居の濱にゐるたづのあたまの千代もあかずぞありけるたづなかめに替へろ歟つるのこのまたつるのこのまたつるのこのやしはごのそだゝむ

末乃歌　よまで君はましませ

宮人乃宮人乃須禮留衣爾須禮留衣爾須禮留衣爾須禮

倍取

留衣爾由布太須支加介天心袁也須禮留衣爾由布太須支加介天心袁也太禮爾與須良牟太禮爾與須良牟誰爾與須良牟誰爾與須良牟加氣天心乎也加氣天心乎也加介天心乎也加介天心乎也多禮爾與須良牟多禮爾與須良牟誰爾與須良牟誰爾與須良牟（頭注云）宮人のすれる衣にゆふたすきかけて心をたれによすらむ

同

初乃歌

萬代乃萬津乃尾山乃加氣志介美（旁注云）鼓乃太牟加之頁毛呂拍子爾舞乃手乎

加由留

君乎曾以乃留止支波加支波爾也禮登幾波加支葉爾也禮（頭注云）新古今賀康富王母萬代を、ゝ詞がきに寛治八年關白前太政大臣高陽院歌合にいはひのこゝろを　春日まで松尾の歌不審若宮社務何某曰只古歌をうたへるまでにて松尾をよめるに心なし

之頁拍子

神明所爾萬之萬勢婆一左以諸願毛與之奈志

萬民宇禮戸奈介禮婆加牟古毛於支天那爾加世牟

中乃歌上　同音

我也止能千代乃川竹布之止遠美左毛行末乃波留加奈留加那也禮（頭注云）我やとのちよの川竹ふしとほみさも行末のはるかなるかな　波留加奈留加那波留加那留加奈波留加那留加奈波留加那留加奈也

安布支乎右倍止里
天拍子乎支久奈里

末乃歌

宇江天見留殖天安萬乃萬加支乃竹乃萬加支能竹乃萬加支乃竹乃萬加支乃竹能布之古止爾以也古毛禮留千代波以也古毛禮留千代波君能美曾見牟君能美曾見牟君乃美曾美牟君乃美曾美牟以也古毛禮留千代波以也古毛禮留千代波以也古毛禮留千代波君乃美曾見牟君乃美曾見牟君乃美曾見牟（頭注云）うゑてみるまがきの竹のふしごとにこもれる千代は君のみそみむ

右神樂舞歌依于細見長惠書寫而已

釋奠

見于延喜大學寮式貞觀儀式江次第等　追而以春日若宮社務何某正本比校之

(頭注云)續日本紀第二文武天皇大寶元年二月丁巳釋奠(注)釋典之禮於是初見矣云々同紀十七聖武天皇天平廿年八月癸卯改定釋典服器及儀式○二水紀永正二神泉苑西北茶園中孔廟基址猶存云々(桶口註)○學令集解云開元令云釋奠爲中禮州縣釋奠亦準小祀例神護景雲二年七月卅日官符云應改孔宣父號爲文宣王事右得式部省解偁大學寮解偁助教正六位上膳臣大丘解偁天平勝寶四年大丘隨使入唐問先聖之遺風膠庠之餘烈國子監有兩門題曰文宣王廟時國子學生程賢告大丘曰今主上大崇儒範追改爲王鳳王之徵于今至矣然准舊典猶稱前號誠恐乖崇德之情失致敬之理大丘庸闇聞斯行請敬陳管見以請明斷者勅號文宣王今依所牒請者省裁者案解狀理須必然方行其教合旌厥德深天奉天時蓋謂此乎仍顯改由請官裁者官議奏聞奉勅依奏　此事續紀稱德紀神護景雲二年紀亦出

二座　先聖文宣王　先師顏子

祝文　古人云此式多用漢音

已下皆音讀

維其年歲次月朔日子天子謹遣大學頭任姓名敢昭告于先聖文宣王惟王固天攸縱誕降生知經緯禮樂闡揚文教餘烈遺風千載是仰俾茲末學依仁遊藝謹以制幣犧齋粢盛庶品祇奉舊章式陳明薦以先師顏子等配尚饗(コヒネガハクバウケタマヘ)

從祀九座　閔子騫冉伯牛仲弓冉有季路宰我子貢子遊子夏

祝文

以下皆音讀

維其年歲次月朔日子天子謹遣大學頭位姓名昭告于先師顏子等十賢爰以仲春(仲秋)奉遵故實敬修釋奠于先聖文宣王惟子等或服膺聖教(顏(朝野群載))○○○德冠四科○○○○○○(庶幾休二(朝))(服道聖門實致壼奧(朝))○或光闡儒風貽範千載謹以制幣犧齋粢盛庶品式陳明獻從祀配神尚饗　大學寮釋奠圖式見于雲圖抄幷江次第抄今煩不載之

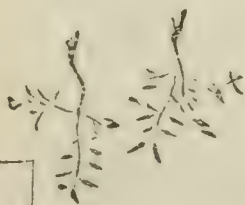
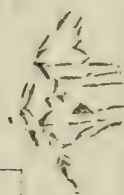
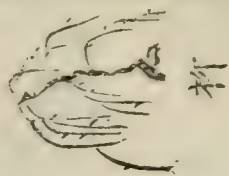
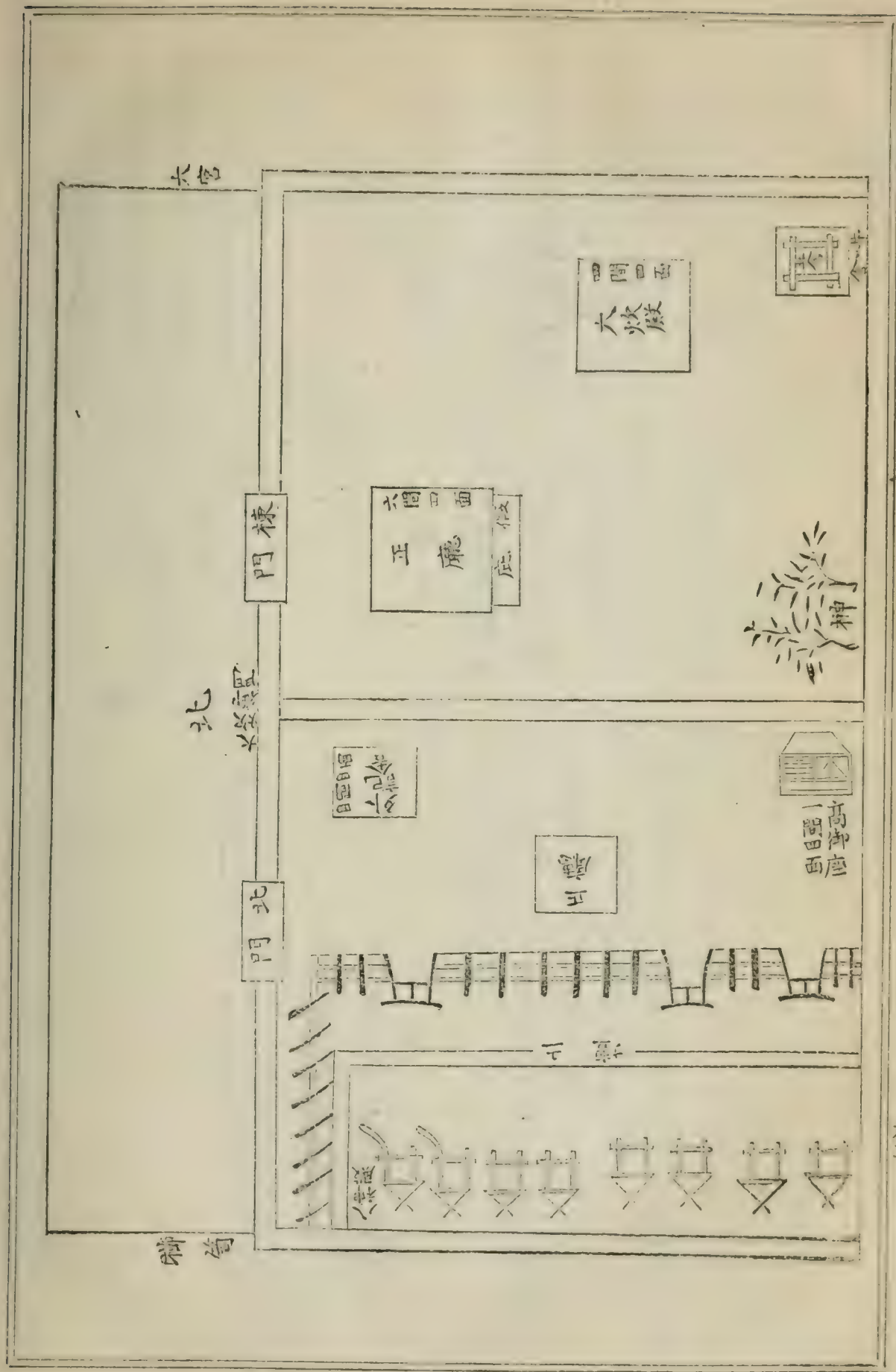
神祇官圖　以大島求馬之本寫之　幷加今案

捨芥抄宮城指圖內諸司廚町下云　神祇官　春日南堀川西二町大炊御門北大宮東藍園西一町又中御門南西洞院東一町同俱

延喜式第九　神名帳

神祇官西院坐御巫等祭神廿三座　並大月次新嘗　(頭注云)百練抄崇德天皇大治二年二月十四日園韓神社神祇官以下神殿幷內外院門垣等燒亡園韓神御正躰同奉取出之但後日兼俊宿禰云八神殿園韓神自元無御正躰但園韓神有神寶緞梓云々頭書或記云古傳云鐘樓桓武天皇遷都被作渡其後未逢火災至今年三百三十七年

神祇官圖

南

御巫祭神八座 並大月次新嘗中宮東宮御巫亦同　（頭注云）延喜式四時祭下九月御巫奉レ齋神祭座摩巫奉レ齋神祭生島巫奉レ齋神祭右御巫以下諸祭並於二神祇官齋院一祭レ之

神○産日神 魂（式）御乎　高御産日神　玉積産日神 種季云玉積産日とよむべし大山積等有レ例作レ留者玉留（たまつみ）なり積（つみ）は積（つもり）の轉留（とまり）を留（とみ）留（つみ）と通じ用たり　積字實至志と陌麥借とにてつむとつもろとの義ひを云へど於二和語一ことさらに異なること なし　生産日神　足産日神 以上五神三代實錄貞觀元年正月廿七日從一位元无位二月丁亥朔並正一位　大宮賣神　御食津神（頭注云）貞觀三年五月甲戌朔授園池司無位御氣津神從五位下　事代主神

座摩巫祭神五座 並大月次新嘗

生井神　福井神社　綱長井神　波比祇神　阿須波神

御門巫祭神八座 並大月次新嘗

櫛石窻神 四面門各一座　豊石窻神 四面門各一座

生嶋巫祭神二座 並大月次新嘗

生嶋神 國（八）　足嶋神 國（八）（頭注云）自二生井神一至二足島神一貞觀元年正月廿七日授二從四位下一元無位　同二月十一日丁酉二神並正四位下

今按神祇官西院「頭注云諸社根元記云神祇官（東西院事）八足門内（有レ額八神殿南北西廳御幣殿）謂二之西院一（或齋院）棟門内（東方中屋 東廳謂二之東院一（或厨院）以上頭書」祭神廿三座の内御門神八座は四門におはしまし殘十五座は神祇官に祭らるゝと見えたり然るに圖には八神殿のみ見ゆれば今七座は何方にましましけるにや西院と云るは圖の內を見るに西にましませばなるべししかれば東院と云るも有てそこに座摩生島の巫等の祭れる神はおはしますにや此神たちの御事はさのみはと留めつ都て八神殿を祭らるゝ事は祈年祭六月月次夏冬二度鎭御魂祭「頭注云式第二四時祭下鎭魂祭神八座（神魂　高御魂　生魂　足魂　魂留魂　大宮女　御膳魂　辭代主）以上頭注」並大嘗會等也此外式大三百四座の内にて大月次新嘗と記せられぬれば預二祈年月次新嘗等祭一之案上官幣にたまへりと見えたり

古語拾遺云逮二于神武天皇東征之年一妖氣既晴無二復風塵一建二都橿原一經二營帝宅一爰仰二從皇天二祖之詔一建二樹神籬一所謂高皇産靈神皇産靈魂留産靈生産靈足産靈大宮賣神事代主神御膳神 已上今御巫所レ奉レ齋也 櫛磐間戸神豊磐間戸神 已上今御門（御舊）巫所レ奉レ齋也 生嶋 是大八洲（州舊）之靈今生島（御舊）巫所レ奉レ齋也 坐摩 是大宮地之靈今坐摩（御舊）巫所レ奉レ齋也 舊事記第七全同

日本紀云神武天皇戊午年九月是夜自祈而寢夢有二天神一訓之曰宜取二天香山社中土一 香山此云二介遇夜摩一 以造二天平瓮八十枚一 平瓮此云二毘邏介一 并造二嚴瓮一而敬二祭天神地祇一 嚴瓮此云二怡途背一 亦爲二嚴咒詛一 嚴咒詛此云二怡途能伽辭離一 如レ此則虜自平伏

天皇祗承二夢訓一以將行○天皇以二前年秋九月一潛

取天香山埴土以造八十平瓮躬自齋戒祭諸神遂得安定區宇四年春二月壬戌朔甲申詔曰我皇祖之靈也自天降鑒光助朕躬今諸虜已平海内無事可以郊祀天神用申大孝者也乃立靈時於鳥見山中其地號曰上小野榛原下小野榛原用祭皇祖天神焉

今按古語拾遺舊事記等は事を委く記し日本紀は理を詳かに盡せり共に并して八神殿並に大嘗會の起源となして見べし

延喜式第八 祈年祭祝詞云今年二月大巫能辭竟奉皇神等能廣歟○前爾白久神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮乃賣大御膳都神辭代主登御名者白而辭竟奉者皇御孫命御世乎手永御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣次座摩御門生嶋辭別伊勢爾座天照太神並御縣爾座神山口爾座神次水分等也

貞觀儀式大嘗祭式中 先祭七日鎭大嘗宮齋殿地其儀也神祇官中臣忌部二宮人依次率悠紀國司及稻實卜部禰宜卜部造酒童女燒灰等令持鎭料雜物二姓入自朝堂院南掖門宮主執祭文入南門内再拜兩段訖讀祝詞鎭畢二國童女各執着木綿賢木捌神殿四角並門處其宮地東西廿一丈南北十五丈云々

舊事本紀云天照太神細開磐戸而窺之手力雄神奉承其御手引而奉出天兒屋命天太玉命以日御綱縄廻懸其御後以端出之左縄矣復令大宮賣神侍於御前天太玉命久志備所生之神如今世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悦懌焉　古語拾遺

同之

今按元元集に神皇實錄を引て足產魂を大已貴神とし大宮賣を今所引舊事紀の大宮賣神とす都て大宮賣にまぎるゝ事有八神殿の内の大宮賣又造酒司に所祭大宮賣神四座又拾芥抄に宮咩祭文に宮咩五柱笠間廣前とあり是を合せて思ふに先づ八神の内にまします大宮賣は大已貴命なるべし其證文姓氏錄に出て左に引るが如し夫八神殿は無上の神を祭られて天子も御一代に一度は御自らも祭らせ給ふ程の御神なればいかに善言美詞すればとて無上の神の内に合祭し給ふべきやうやはある大已貴神は素盞烏尊の正嫡にてそのうへ少彦名尊と力を戮せ天下を經營し給へる御神なれば合せ祭らるゝ事左もありぬべし足產魂を大已貴とせる事は本據も雖知事なればおぼつかなし次序を思ふにも大已貴神辭代主神とこそ次第し玉ふべけれ大宮賣神をへだてゝ序で給ふもいかゞとおぼゆ扨宮咩五柱といへるは舊事紀の大宮賣神も造酒司に祭らるゝ四座の内におはしてそれに八神の大宮賣を合祭して五柱となして院宮諸家までも毎年祭れる事とはなれるにや天子の祭らせ玉ふにはあらで院宮諸家の祭れるは或は祈年新嘗或は鎭魂諸祭を兼て私に祭れる故に無上の神たちまではなくて大已貴神たちなどを祭れるはいはれ有る事とみえたり凡て八神殿

の御事は元元集に諸書を引て陰陽不測の説をこと〴〵しく演られぬれど浮屠の説に似て信用しがたし只神代紀等によるに高皇産靈神神皇産靈神國常立尊伊弉諾尊伊弉册尊天照太神少彦名命大己貴命辭代主命などいひまほしくや今延喜式に所レ出名目は元舊事紀に出たるを廣成直ちに古語拾遺に取用ゐたり今神號の事を評し奉る事は聊かなけれど舊事紀は聖德皇子浮屠を好み玉ひ馬子宿禰君を弑し奉る心よりなりたる書なれば舍人親王も用られざりけるにや旣に神武紀には只鳥見山に皇祖天神を祭り給ふとのみ書玉ひて神號のなければ聖德馬子なとの知食さころにあらざる歟ましして凡人などの口遊する事は中々おそるべき事どもにや只天子のみ知食らん事とおぼえ侍へる

姓氏錄中之末　山城國神別　神宮部造(かんみやのへの)
葛城猪石岡天下(あまくだります)神天破命之後也六世孫吉足日命磯城(しき)瑞籬(みづがき)宮御宇崇神天皇御世天下有レ災因ニ遣吉足日命ヲ令レ齋(いはひまつら)ニ祭大物主神ヲ災(わざはひ)異即止天皇詔曰消ニ天下災ニ百姓得レ福自レ今以後可レ爲ニ宮能賣(のめ)神ヲ仍賜ニ姓宮能賣公ヲ然後庚午年籍(しるす)ニ註神宮部造(かんみやのへの)ヲ也

○壺碑圖以ニ伊庭種季本ヲ寫レ之

多賀　和名鈔陸奥國宮城郡多賀　神名帳陸奥國宮城郡多賀神社

續日本紀元正天皇神龜元年三月庚申陸奥國言東海蝦夷反丙申以ニ式部卿正四位上藤原朝臣宇合ヲ爲ニ持節大將軍ヲ爲レ征ニ東海蝦夷ヲ也十一月乙酉征夷持節大使正四位下藤原朝臣宇合等來歸同二年春正月丙辰天皇臨レ朝詔叙ニ征夷將軍已下□勳位ヲ各有レ差授ニ正四位上藤原朝臣宇合從三位勳二等從五位上大野朝臣東人從四位下勳四等ヲ云々淡路廢帝天平勝寶五年十一月癸未以ニ從四位下惠美朝臣朝狩ヲ爲ニ東海道節度使ヲ同六年十二月乙巳朔從四位下惠美朝臣朝獦爲ニ參議ヲ云々

今案東人朝獦此時碑は立てたるなるべし

陸奥國宮城郡壺碑石 竪六尺余横 三尺余

西

此間一尺

此封内三尺七寸

多賀城

去京一千五百里

去蝦夷國界一百二十里

去常陸國界四百十二里

去下野國界二百七十四里

去靺鞨國界三千里

此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勲四等
大野朝臣東人之所里也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東
山之節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美
朝猟修造也

天平寶字六年十二月一日

涯一尺七寸

此封内横二尺七寸

寛文七年土中ヨリ堀出ス也神亀元年ヨリ寛文七マテ九百四十四年

自天平宝字六年寛文七迄九百十一年ニ成

今市川ト云所ニアリ立石ト云アヤマリタリ以朱書之者後人書加之

袖中抄九第十

いしぶみ

いしふみやけふ〔のイ〕のせはぬのはつ〳〵にあひみても
猶あかぬけさかな

顯昭云いしぶみとは陸奥のおくにつぼの石文あり日本のはてといへり但田村將軍征夷の時弓のはずにて石の面に日本の中央のよしかきつけたればいしぶみと云と云々信家侍從の申しは石の面ながさ四五丈許なるに文えりつけたりその所をばつぼと云也私云みちのくには東のはてとおもへどえぞの嶋はひろくて千嶋ともいへば陸地をいはむに日本の中央にても侍にてそ

今案顯昭よりはるか後に此碑は掘出したるよしなればしらずがきにかゝれけるにや信家は直にみられたりとみえたり賴朝卿おもふことさいはでしのぶはえぞしらぬかきつくしてよつぼのいし文拾玉集陸奥のつぼの石文ゆきてみむそれにもかゝじたゞまごへとは同思ふことさいなみちのくのえぞいはぬつぼの石文かきつくされば夏玉集懷圓法師日數へてかくふりつもる雪なればつぼの石文あとさやたえなむ（頭注云）今按顯昭よりはるか後に此碑は掘出したるよしなればしらずがきにかゝれけるにや又は其比はありて其後土中にうづまりたるを寛文の比ほり出しけるにや信家は直にみられたりとみえたり新古今雜下前大僧正慈圓ふみにてはおもふほどのことも申つくしがたきよし申つかはしてはべりける返事に前右大將賴朝おもふことさいはで……………………………つぼの石文あとさやたえなむ

○太秦牛祭文以二太秦傳來之正本一寫レ之世傳言傳敎大師作也

謹請再拜　謹啓須　維南瞻部州大日本國歲次に某年號〔五字ナシ〕某季無射十二乃天朝日乃豐登り夕日の豐降り坐中に銀に花榮金に實結天門開支〔ナシイ〕開けて地戸和合したる今〔この文の平がなもと漢字をあてたりしを太秦本によりて平がなに改めあるを以てそれに從ふ〕夜當寺の堂僧四番大衆等誠を二花乃嶺よりも高し志〔ナシイ〕を五葉の底よりも深して恒例不闕乃勤として摩吒羅神（頭注云）摩吒羅神山城名勝志東寺條下拾葉集云を敬祭し奉る事あり神明を祭るは超福の計ことと靈鬼を敬ふは除災の基なり上は梵天帝尺四大天王日月五星廿八宿七曜九曜三辰九膂下は炎魔王界五道大神秦山府君天さう司命司祿別ては當所鎭守卅八所五所護法飛來天神（頭注云）三十八所山城名勝志云毗沙門堂記錄云鎭守三十八所醍醐天皇延喜年中大別當增命鎭守三十七所護法神繪僧奉安置之　鳥羽院御車請二加秦大夫一爲二三十七所一私云神號略之同云廣隆寺緣起云飛來天神者亘二三國一靈神也爲二當寺三論守護一自二新羅國一飛來之由依二日藏上人夢中之告一奉レ勸二請于當寺一神容白髮老翁也部類眷屬惣ては日本國中の大小乃神祇田中にはあらねども稻積片山にはあらねども榎が本榲が本木が

らさ藤の森嵯峨の奥なる一拳打れては軈てうさい辻
辻の道祖神家々の大黒天神の袋持に至るまで驚し言
て曰く
夫以ば性を乾坤の氣にうけ德を陰陽の間に保ち信を
專にして佛に仕へ愼を致して神を敬天尊地畏の禮を
しり是非得失の科を辨る是偏に神明の廣恩也因玆單
微の幣帛を捧て敬て以て摩吒羅神に奉上す豈神の恩
を蒙らざるべけん哉これによつて四番大衆等一心の
懇切を抽て十列の儀式を擧び萬人の逸興を催すを以
て自神明の法樂に備へ諸衆の感嘆を成を以て晴に神
の納受を知らんと也然る間さいづち頭に木冠をいた
たきくはびら足に舊鼻高をからげつけからめ牛に荷
鞍を置痩馬に鈴を付て馳も有蹄もあり或はくらつめ
に大闇をつめてにがみ或は荷鞍に尻かさをすりむひ
て悲もあり企は誠に十列の風流に似りといへ共體は
唯百鬼夜行に(頭注云)夜行鬼本草云 異す如レ此等の振舞を以て摩
吒羅神を敬祭し奉る事偏に天下安穩寺家安泰平爲也
因レ之長く遠く拂ひ退くべき者あり先は三面の僧坊
乃中に忍入て物とるせて盜人め奇怪すはいふはい也
(頭注云)すわびふわび 小童とも木々なり物取らんとて明障子打壞
る骨なさ法師頭もあやうくは覺る扨はあた腹頓病風
欬嗽疔瘡よう瘡闇風(頭注云)闇風は東語に下風と云寸白と云病なり 殊には尻瘡
虫がさ膿瘡あふみがさ冬に向へる大あかゞり並ひゞ
咳病鼻だり瘧心地くつちつわり傳死病しかのみなら
ず鐘樓法花堂のかはつるみ讒言仲人いさかひ合の中
間言貧苦男のたけり能なし女の隣行又は當塔の檜皮
くひぬく大鳥小鳥め聖敎やぶる大鼠小鼠め田のあせ
うがつうぐろもち如此異類異形ふだう無慚のやつは
らにおひては長く遠く子の國そきの國まで拂ひ退く
べき者也

本曰
天文十八年九月十二日　宥蓮寫之
後奈良院
右之祭文如レ本寫レ之古年號之事者其時之年號用

若狹　淨雲　良專　正覺　覺榮

中間祭文
已上以太秦直正本寫之

園太曆文和四年十二月廿日神宮告文案
維文和四年○歲乎次乙未十二月己丑朔廿日辛未吉日良辰

爾掛毛畏支王城鎮守諸大明神二所大神宮八幡大菩薩
賀茂太神於奉レ始天惣波志天二十二社於奉レ驚天禁裏傳
奏小臣等恐美恐美毛申賜波久止申久一日萬機之政二帝三王
之道偏思無レ邪南豈不レ歸レ正乎方今上闢二聖明垂拱之
化一下竭二克己復禮之議一斯以議奏之輩政道得失耳目
之所レ觸獻二諫言一天勿レ存レ私禮敷奏之仁評議之輩雜
訴乃奉行理非乃評判無レ憚二權勢一具無レ怪二賤貧一久不レ
致二擁怠一壽不レ存二偏頗一須速任二道理一天可レ達二朝議一利奈
又爲二訴論人物一不レ論二小大一壽利不レ謂二性輕乎重一須一切
禁止之天不レ可レ受二賄賂一須縱自身不二受用一毛止妻子僕從
之中爾毛知而不レ可レ令レ犯レ之須聞而專可レ令レ誡レ之志比
等旨聊毛令二違越一者小臣等之身爾神罰於可二當給一志但
愚昧之性不レ辨二理致一短慮之質若レ卒二叡念一志神毛宥
々比多末君毛免之倍多末禱爾無レ私照察宣垂志止恐美恐美毛申
賜波久止申

權中納言從三位　藤原朝臣仲房
正　三　位　藤原朝臣藤長
從　二　位　藤原朝臣宣明
正二位行權大納言　藤原朝臣實夏
正二位行權大納言　藤原朝臣長光

正　二　位　藤原朝臣隆陰
正　二出乎　位　藤原朝臣經顯
告文職事辨官同事書藏人左少辨忠光執筆各連署

萬葉緯卷第五

神あそびの歌 神遊波神代卷等所記之悪良久也悪良久波神樂也夫木抄云年中行事歌合内侍所御神樂貞世久堅の天の昔の神遊び今日も雲井にうたふ成哉古今集おほむへの歌は大嘗會の歌なり都て大嘗會の歌の中に神樂歌もあれば神あそびの歌又はひるめの歌其外なも頻にひかれて大嘗會の歌のはじめに置物ならん

ひるめの歌

佐佐乃久萬比乃久萬加波仁古末止米天志婆之美川加戸加介乎太仁美牟

今按比留女波奉祭大日靈貴之神樂歌歟萬葉集第十二左檜隈檜隈河爾駐馬(うまさめて)馬爾水令飲(かへ)吾外將見(われよそにみむ)和名抄云大和國高市郡檜前(比乃久末)

ふるきやまとまひの歌 三代實錄第三云貞觀元年十一月十九日庚午撤去悠紀主基兩帳天皇御豐樂殿廣廂宴百官多治氏奏田舞伴佐伯兩氏久米舞安部氏吉志舞内舍人倭舞入夜奏五節並如舊儀云々 江次第第五云和舞取榊枝舞也又大嘗會次第云奏和儛註云著青摺舞人十人歌人十人居庭中琴師二人居歌人前舞人用内舍人掃部庭中南北行設二行座舞人分著其南立床子琴師二人著之笛工一人在其後云々

楉結布葛城山爾降雪乃萬那久時奈久(頭注云)今按無間無時は君の萬歲なおもふなるべし

於毛保由流絕

近江曲 近江乃風俗曲なり神代紀下云此兩首歌辭今號夷曲續日本紀云天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣男女二百四十餘人五品已上有風流者皆交雜其中正四位下長田王從四位下栗栖王門部王從五位下野中王等爲頭以本末唱和爲難波曲倭部曲淺茅原曲廣瀨曲八裳刺曲之音令都中士女縱觀極歡而罷賜奏歌垣男女等祿有差

近江與里朝多知來禮波宇禰乃野爾田鶴曾鳴奈留明奴古乃夜波(頭注云)新葉集戀三よみ人しらずうれの野にたづの一聲鳴わかれ又もあふみさたのめてぞこし

水莖曲

美豆具支能岡乃屋形仁妹止安禮止禰天乃安佐介乃霜乃降羽毛(頭注云)水莖岡は筑前の名所萬葉に多くよめり第十雁がれの寒く鳴より水莖の岡の葛葉は色付にけり

四極山布里

四極山打出天美禮波加佐由比乃嶋搚加倍留棚無小舟之波川山

此歌は萬葉第三に高市連黑人か羇旅歌八首有中の第三の歌也三四句打越見れば笠縫のさあり此歌の前に年魚市方(カユチカタ)と讀り尾張也此歌の次に枝の湖高島の勝野原を讀り共に近江なり総に山背高槻村とよめり然れば東より都へ歸り上り來る道にてよめる次第也和名抄な考見るに參河國幡豆郡礒泊(之波止)此礒泊鄉に四極山あるべし注に之波止とあれどこゝつは五音通じて同じ事也日本紀孝德紀に礒泊といふ人あり同じ文字にてしはつとあれば是をもて知べし雄略紀云是月爲吳客道通磯齒津路名吳坂上に住吉津とあれば此磯齒津は萬葉第六にちぬにより雨ぞふりくるしはつのあまあみたづなほせりぬれてたへんかもとよめる所なり是異處ながら同名の證なり然れば笠ぬひの島も參河なり笠といふにつきては笠縫にてありぬべくおぼゆ

已上五首古今和歌集大歌所歌也

大嘗會悠紀主基歌

神代紀上云是後素戔嗚尊之爲行也甚無狀何則天照大神以天狹田長田爲御田時素戔嗚尊春則重播種子（重播種子此云璽枳磨枳）且毀其畔（毀此云波那豆）秋則放天斑駒使伏田中復見天照大神當新嘗時則陰放屎於新宮一書曰日神尊以天垣田爲御田時素戔嗚尊春則塡渠毀畔又秋穀已成則冒以絡繩云云及至日神當新嘗之時素戔嗚尊則於新宮御席之下陰自送糞日神不知徑坐席上由是日神擧體不平故以恚恨廼居于天石窟閉其磐戶云云○同下云是時天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰云云復勅天兒屋命太玉命云々又勅曰以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒云云○淸寧天皇二年冬十一月依大嘗會供奉料遣於播磨國司山部連先祖伊豫來目部小楯○顯宗天皇卷云小楯於赤石郡親辦新嘗供物適會縮見屯倉首縱賞新室以夜繼晝云云○天武天皇白鳳二年冬十二月壬午朔丙戌侍奉大嘗中臣忌部及神官人等幷播磨丹波二國郡司亦以下人等悉賜祿因以郡司等各賜爵一級云云　五年九月丙寅朔丙戌神官奏曰爲新嘗卜國郡也齋忌（齋忌此云踰既）則尾張國山田郡次（次此云須岐也）丹波國訶紗郡並食卜○冬十月乙未朔丁酉祭幣帛於相新嘗諸神祇○十一月乙丑朔以新嘗事不告朔云云　今按大嘗會儀式見于延喜式貞觀儀式江次第等

八雲御抄（第二）云大嘗會歌者上古所見不詳起自承和（于時丹波播磨國也）仁明淸和陽成光孝在古今其後丹波因幡美濃尾張遠江伊勢參河越前美作備中備前但馬等郡名少々詠之而延喜以後偏以近江爲悠紀以丹波國備中替々爲主基也後冷泉院主基爲幡磨歟只先例歌人詠之自中古儒者必交之延喜（寛平九）

近江黑主　村上（天慶九）備中不知人　冷泉（康保四）兼盛能宣元輔不知人　圓融（安和二）能宣中務兼盛

自三條院所見不絕（花山未勘之）　一條

三條　長和主悠　後一條　同四年（五歟）輔親兼隆主悠　後朱雀　長元輔親爲政主悠　後冷泉　永承輔親義忠主悠

後三條　治曆資業家經主悠　白河　承保實政經衡主悠　堀河　寛治實政匡房主悠　鳥羽　天仁匡房行家主悠

崇德　保安匡房正家主悠　近衞　康治敦光行盛主悠　後白河　久壽顯輔敦光主悠　二條　平治永範令明主悠

六條　仁安俊憲範兼主悠　高倉　嘉應俊成兼光主悠　壽永永範淸輔歟主悠　元曆淸輔兼光主悠

建久季經光範主悠　建曆資實主悠　資實有家

（頭注云）顯廣永範新院（六條）永範　淸輔　高倉　兼光　季經　當今（安德）兼光　季經　後鳥羽（今上）　已上所載于袋草子相違如此

是皆悠紀近江主基丹波備中替々也一人必儒者一人只歌人也乍二人儒者又例事歟歌人顯輔淸輔俊成有家等人也凡中納言以下也未及大納言之以上敦光令明なと儒者中にも無指歌人ども必可爲儒者也是自然流例也

行事辨注國所々名下作者々々撰其所計其詞詠之遣行事辨家以風俗歌下樂所以屛

風歌給繪所若歌遲々時以所名加詞且進（遣イ）之風俗歌許進先例也和歌書樣或以神樂歌爲始或以稻春歌爲始又資業家眞名別紙風俗與屛風也家經假名一紙匡房眞名別紙但匡房一度書假名他人皆眞名別紙也同資業說但顯輔詞眞名歌假名也悠紀主基共十月上旬可進皆遣行事辨許近代先經說奏流例也

清輔袋草子（第一）大嘗會歌次第　先從國々註進所所名於行事辨下作者許作者撰便宜所々（各可避禁忌）諷詠之進行事辨所以風俗歌下樂所（以之令作樂）以屛風歌下繪所（以之書圖之）若和歌有遲々之時所々名に書詞先進之和歌は追進之（件詞作者計之）又風俗歌許進常事也書和歌之時家々之說不同也輔親兼澄等假名又風俗並屛風歌等書一紙義忠假名別紙　資業之流眞名別紙家經之流歌假名詞眞名一紙（又以神樂歌爲初自余人以稻歌爲初）匡房眞名別紙（但天仁度假名也）以下人々皆眞名別紙但故左京詞眞名歌假名一紙也長和以上人書樣不慥也進覽之時可有禮紙也宮內少輔伊行云件歌先被下淸書所而又書三通送辨許一通（終一枚連書）書稻春歌神樂兩者風俗歌八首一通（二枚書）屛風歌十八首並稻春歌をは下に風俗は下樂所屛風歌下繪所又云行成並伊房書置秘書有號右筆抄書寫之間口傳也件書悠紀の歌は假名書之主基歌は眞名也作者皆如此存淸書人又可然云云但近代不必然歟大嘗會天武天皇御宇白鳳二年癸酉十一月始之但歌不見而自承知御宇出來但歌少々歟勤悠紀主基國々其初丹波播磨也其後因幡美濃尾張遠江但馬近江備前美作越前參河伊勢備中隨令下（ト歟）用其郡但書嘉名郡一兩を下之歟近來以後偏悠紀國近江主基國丹波備中替々勤也但冷泉院時主基國播磨也　（今按因于八雲御抄袋草子等中古以大嘗會歌或書眞名或書假名以有類聚書歟惜哉今不傳因茲採諸書所出大嘗會歌今輯之雖然所見僅十而一耳亦惜哉所謂其次序稻春神樂辰日參入音聲樂破樂急退出音聲已日參入音聲樂破樂急退出音聲悠紀主基合而二十首也此則風俗而謠物也此外御屛風甲乙丙丁戊己之六帖每帖三首而已上十八首也此歌雖非謠物以類故編焉）

所載勅撰並撰集大嘗會和歌（仁明天皇續日本後紀天長（于時承和 天年前年）十年十一月癸卯天皇御八省院修禋祀之禮戊辰御豐樂院終日宴樂悠紀主基共立標悠紀則山上栽梧桐兩鳳集其上從其樹中起五雲雲上懸悠紀近江四字主基則慶山之上栽恒春樹樹上泛五色慶雲雲上有霞霞中懸主基備中四字云云おほむへば天武天皇の

巻に大嘗の二字をおほむへ叉異點におほにへさもよめり猶大嘗の吉備國の歌さ云はむかごさし贄の歌など云ろ說はさろにたらざる歟

まかねふくきびの中山おびにせる細谷川の音のさやけさ　この歌は承和のおほむへのきびのくにの歌

古今集　文德天皇文德實錄第三仁壽元年夏四月癸卯朔癸丑定ニ悠紀主基等國ニ伊勢國爲ニ悠紀ニ播磨國爲ニ主基ニ並卜レ之所レ食也

今按此時歌無ニ所見ニ清和天皇三代實錄第三貞觀元年十一月十六日丁卯車駕幸ニ朝堂院齋殿ニ親奉ニ大嘗祭ニ十九日庚午撤ニ去悠紀主基兩帳ニ云云詔曰云云 參議從三位行右衞門督○兼乎美作守藤原朝臣氏宗正三位內藥正從五位下兼侍醫參河權介物部廣泉等正五位下參河守從五位下御長眞人近人散位美作介大中臣朝臣眞主等並從五位上外從五位下參河介壹志宿禰吉野正六位上右近衞將監兼美作備大掾紀朝臣正守並從五位下參河掾大原宿禰廣呂美作掾佐伯直豊廣呂並授ニ外從五位下ニ云云紀文兩國卜食のことはみえれど悠紀參河主基美作なる事此等の人々の昇進にて知べし和名抄美作國久米郡久米性靈集に美作國佐良莊云云 皇年代略紀云清和天皇貞觀元年十一月十七日丁卯大嘗會參河美作云云

みまさかやくめのさら山さら〳〵にわかなはたてし萬代までに　これは水のをのおほむへのみまさかの國のうた同　陽成天皇三代實錄三十元慶元年四月十九日庚寅卜ニ定悠紀美濃國席田郡主基備中國都宇郡ニ並卜食

皇年代略記云元慶元年十一月十八日乙卯大嘗會美濃備中

みのゝ國せきのふぢ川たへずして君につかへん萬代までに　これは元慶のおほんへのみのゝうた同

催馬樂美濃山

みの山にしげりかさなる玉かしはとよのあかりにあふかたのしさ　しぐゝおひたろ(催馬樂)　躰源抄催馬樂目錄美濃山備前國悠紀風俗云云和名抄備前國御野郡御野(美乃)今按梁塵抄承和帝仁明天長十一大嘗會悠紀の風俗の歌也さてまかねふくの歌さ同時さの玉へども其時には近江高島郡悠紀備中下道郡主基なれば事たがへろにやみのゝ山さはよまでみの山さばかりよめれば御野郡の山さきこゆれど備前を悠記さしたまへろこさ是より上にきこえればられもいかゞさ覺ゆ仁和の御時備前和氣郡卜食ぬれど主基にて郡もたがひぬれば、催馬樂目錄もおぼつかなし作者も黑主なればみの山みのゝ山同所さなして陽成天皇の悠紀の歌さ心うべきにや後の明哲を待のみ

(頭注云)六帖には第二三句しげりかさなる玉かしは五句あふかうれしきさて國の題にて大伴黑主さあり顯昭陳狀には第二三句しけりさかゆろ神さかきさあり　今按備前備中備後元一國なるを後に割れて三國さなれば此御時備中都宇郡卜食て主基なれば昔は御野さも近郡などにて一所などにてはなかりけるにや可尋

催馬樂席田

むしろ田のいつぬき川に住鶴のちとせをかねてあそびあへるかも　躰源抄催馬樂目錄席田美濃元慶悠紀風俗云々師說席田卜にあひつればこれも美濃國の歌さ同時にて作者もくろぬしなるべし

君か代はかぎりもあらじ長濱の眞砂の數はよみつくすとも　これは仁和のおほんへのいせの國の歌 古今集

光孝天皇三代實錄第四十五元慶八年(仁和元之前年)三月廿二日定大嘗會悠紀伊勢國員辨郡主基備前國和氣郡並卜食 萬葉集第七元慶大嘗會悠紀方美濃國風俗歌ちはやふる神のさだめし國なれば古へよりも今ぞさかえん 作者なし 皇年代略記元慶八年十一月廿二日己卯大嘗會伊勢備前(頭注云)ちはやふるの歌名所をよます以下此類あり

仁和御時大嘗悠紀方伊勢國風俗歌 續後拾遺集賀部

大伴のくろぬし

伊勢の海のなぎさを淸みすむ鶴のちとせの聲を君にきかせん
こえん(萬代)

仁和の御時大嘗の歌 拾遺集賀

よみ人しらず

かまふ野の玉の緒山に住つるのちとせは君か御代のかずなり

宇多天皇扶桑略記云仁和四年十一月廿三日大嘗會近江播磨云々 今按此時歌無所見皇年代略記亦無 ニイ

國郡卜定文醍醐天皇扶桑略記云寛平九年七月十三日丙戊天皇即位於大極殿 十三 春秋 十四日丁亥今日政也以近江國依智郡爲悠紀以丹波國多紀郡爲主基 皇年代略記云寛平九年十一月廿三日辛卯大嘗會 近江丹波云云

(頭注云)此歌諸書爲近江誤也仁和帝悠紀伊勢主基備前此兩國内也若宇多帝大嘗會近江播磨なれば其内などにやいづれにても拾遺誤なるべし　夫木抄家集光俊朝臣桑門今がみる玉のを山のふもとにてくちしかまふの野へのほとりは

大伴くろぬし 古今集　(頭注云)八雲延喜近江黑主

あふみのや鏡の山をたてたれはかねてそみゆる君かちとせは　これは今上のおほんへのあふみのうた

朱雀天皇扶桑略記云承平元年四月八日乙丑定大嘗會國郡等悠紀近江神崎郡主基丹波國氷上郡云々 今按此時歌無所見皇年代略記云承平三年十一月十六日辛卯大嘗會近江丹波

天暦御時大嘗會主基備中國中山 新古今集賀

よみ人しらす

ときはなるきびの中山おしなへて千年をまつの深き色かな

村上天皇八雲第二延喜以後偏以近江爲悠紀以丹波備中替々爲主基也村上備中不知人云々 扶桑略記云村上天皇天慶九年(天暦元前年)十一月十九日大嘗會近江備中供奉悠紀主基云々 (頭注云)江次第近江野洲備中下道 皇年代略記亦無國郡卜定文

天慶九年大嘗會悠紀方近江國稻舂歌 玉葉集

よみ人しらす

あふみなる朝日の里はけふよりそ世のさかゆへき光見へける

村上御時天慶九年大嘗會悠紀方巳日參入音聲鏡山をよめる　よみ人しらす續千載賀
我君の千年のかけをかたみ山豊の明に見るかたのしさ
村上御時天慶九年大嘗會主基方參入音聲備中國高倉山をよめる　よみ人しらす新千載賀
雲の山に萬代とのみ聞ゆるは高倉山の聲にぞ有ける
冷泉天皇安和元年大嘗會風俗なからの山拾遺集神樂歌（頭注云）八雲冷泉（兼盛元輔能宣不知人）
大中臣能宣
君が代のなからの山のかひありとのとけき雲のゐる時ぞ見る
さゞ浪のながらの山のなからへてたのしかるへき君か御代かな
いはくら山　よみ人しらす
うこきなきいはくら山に君か代をはこびおきつゝちよをこそつめ（頭注云）兼盛集大嘗會歌十二首皆近江也
みかみの山　よしのふ
ちはやふるみかみの山のさかきはゝさかへぞ増る末の世までに
萬代の色もかはらぬさかき葉はみかみの山におふるなりけり　讀人しらず
もとすけ
萬代をみかみの山のひゞくにはやすの川水すみそあひにける
おほくら山　よしのふ
みつしくむおほくら山はときはにて色もかはらす萬代やへん
みほ山　讀人しらす
高嶋やみほの中山そまたてゝつくりかさねよちよのなみくら（頭注云）なみくら伊勢神樂歌云
かゝみ山　よしのぶ
みがきける心もしるしかゞみ山くもりなき世にあふかたのしさ
松がさき　清原元輔
千とせふる松がさきにはむれゐつゝたつさへあそぶ心あるらし
おものゝはま　かねもり
よろづよなもちろさかへん（家集）
とゝこほる時もあらじなあふみなるおものゝ濱のあ

まのひつきは　已上十一首拾遺神樂同時同國歌也

扶桑略記云安和元年三月二日乙酉右大臣參入被定大嘗會國郡悠紀近江國主基播磨國八日辛卯大嘗會國郡卜定去二日大略定兩國今日被卜定郡近江國野洲播磨國飾磨

冷泉院御時大嘗會の歌よしたの里夫木三十一　能宣朝臣

名にたかきよしたの里のいねなれはつくともつきし千世の秋まて

なかひた山家集　元　輔同廿

はりまなるなかひた山の霧はれて千年の春をみるかうれしき

さゝれ石の山近江又丹波　家集　夫木廿　能宣朝臣

君か代のかすをかそへて取つまんためしなりけりさゞれ石の山右者能紀方の歌にて近江の石山をかくつゞけたる歟

家集いやたかのみね近江金葉備中　夫木二十　元　輔

さゝれ石のいはほとなれははりまなるいや高のみねあふみなる歟

いやたかになる

家集　能宣朝臣夫木廿四

國もせにつくれるみよの里にたてるいはの井川の音のさやけさ

家集　元　輔同

いくちたひ君か御代にはあふみなる玉つくり川すまんとすらん

同やすかは近江　兼　盛

やす川の水そこ見えてゐるかめのよろつ代しりてあそふをそみるすみて鶴　かれて已上家集

題不知五葉　よみ人不知

百千鳥やすのかはらにむれゐつゝ友よひかはす心あるらし

家集いはひの歌　元　輔同二十五

みふはまのいさこのこすなわか君のたからのくらゐかそへみんかし

冷泉院御時大嘗會歌　能宣朝臣夫木廿七

家集ナシ　やす川のかはへにあそふあしたつは千年のかけにならべてぞみるかすにイ　思ふイ

家集　兼　盛同

君か代を待しもしるくおほくらの里のなかちを見る

かたのしさ

冷泉院御時大嘗歌會歌　元輔 夫木三十二

くりもとやせたの橋けたたわむまてはてひつゝくる
みつき物かな

家集大嘗會歌　元輔 夫木廿

さかき葉の色もかはらぬかめ山にときはの陰としけ
るべき哉

題不知秋風　よみ人しらす 夫木廿

昔よりなつけそめけるとみ山はわか君か代のために
そありける

懐中　よみ人しらす 同三十一

年ことにます田の里のいねなればつくともしらし千
代の秋まで

盧井川近江栗太郡懐中　よみ人しらす 同廿四

あふみなるいほの井川の水すみて千年の數の見へわ
たるかな

題不知備中いつみ井　龜鏡　よみ人しらず 同廿六

くにてほり今そつかへんいつみ井の君かみよには絶
しとおもへは

龜鏡愛智郡近江　よみ人不知 同三十一

うしはみにえちのこほりのいねをすへて神と君とに
つくはつほかな(頭注云)はつほ三代實錄第十八云新鑄作之早穗二十文云々

龜鏡ひかみのこほり丹波氷上　同 同

萬代のためしにいねをつきしよりひかみの郡民そつ
かへん

龜鏡松原のさと未勘國　よみ人しらず 同

春秋はおほくつもれと年をへてときはに見ゆる松原
のさと

あをやきのさと未勘國　よみ人しらず 同

木からしの風はふけともちらすしてあをやきの里と
きはなるらん (頭注云)新續古今賀青柳近江也

藻鹽草千束橋近江　作者なし

君か代はちつかのはしをいくかへりはてふみつきの
數もしられす

同　同

末遠きちゝの川瀨による玉は我すべらきの御代の數
かも

安和作者悠紀兼盛能宣主基元輔不レ知レ人天祿作者悠紀能宣兼盛主基中務等のよし八雲にみえぬれば明證のあるなば上に記し畢ぬ又しるしさすべき證文なきさいへども安和天祿の間の作者又讀人不レ知さいへども凡其時代の歌に類せるなば上に！

ゐすもの
ならん

兼盛家集　大嘗會歌 夫木三十二安和元年大嘗會悠紀方近江國御屛風歌風雅集賀云天祿元年大嘗會

悠紀方屛風の歌近江國勢多の橋をよめる

ひつき物たへすとなふるあつまちのせたの長橋音もとゝろに

いはのうへの川せきあけてうゑし田の稻は萬代たへてたへにし

さゝなみのなからの山のなからへはひさしかるへき君かみよかな

いにしへも(た〻(夫))見すやありけん(神山の(夫))かゝみ山行末遠き(さき(夫))とよの(ちよ)あかりに（のかざりは夫木廿）

鏡山やまひこたかくよばふなる世のさかゆへき影とそ見ゆらし

世のとみは岩藏山にをさめ置て萬代まても君そつた(に夫木廿)へん

とみゆかのかすまさりゆく君か代にあへるくに人たのもしきかな（夫木廿山）

あさつまのみゐのてのかけしけりあひてさかへゆくよをみるかたのしき

重之家集　大嘗會に主基の方にあかしのはま

朝日さす明石の濱をたちゐせし波ものとかになる世也けり

大嘗會主基方丹波國くははらの里を

くははらの里の引まゆひろひ置て君かやちよのきぬいとにせん（頭注云〻和名抄假蘭（比支末由）いたてつよき糸さみえたり）

同方たまつくり江を　夫木廿四題不知　懷中讀人不知

ひとつして萬代てらす月なれは空にみかける玉つくり江は（そこも見へける玉つくり川）

今案重之大嘗會作者なることさ八雲御抄等にみえす冷泉圓融一條の間の人さみゆれば安和天祿の比の大嘗會主基の歌なるべし圓融天皇御屛風の歌「頭注云圓融能宣兼盛中務」此御代初見八雲扶桑略記云天祿元年三月五日丙午於太政大臣式曹司被レ定二大嘗會悠紀主基國一（近江坂田丹波氷上）又被レ定二兩國郡一十一月十七日乙卯大嘗會仍天皇八省院（悠紀近江主基丹波）

天祿元年大嘗會風俗千年能山　拾遺集神樂歌　よしのぶ

ことしよりちとせの山は聲たへす君か御代をそいのるへらなる（頭注云〻此一首主基方にて丹波歟千載集神祇部藤原光範朝臣歌の詞云丹波國千年山云々）

いやたかの山　かねもり

あふみなるいやたか山のさかきにて君かちよをは祈かさゝん

みかみの山野洲郡三上　　　　よしのふ

祈くるみかみの山のかひしあれはちとせのかけにかくてつかへん

いはくら山

けふよりはいはくら山に萬代をうごきなくのみつまんとぞおもふ

かゝみ山　　　　中　務

よろつ世をあきらけくみん鏡山千とせのほとはちりもくもらし

おほくにのさと　　　　かねもり

年もよしこかひもしたり大くにの里たのもしくおもほゆるかな（頭注云）和名抄愛智郡大國

よしたのさと

名にたてるよし田のさとの杖なれはつくともしらし君か萬代

まつかさき

鶴のすむ松かさきにはならへたるちよのためしをうするなりけり　已上九首拾遺神樂大嘗會同時同國歌

天祿元年大嘗會悠紀方御屛風歌新勅撰雜四　　清原元輔

辛崎の濱のまさこのつくるまで春のなこりは久しからなん

扶桑略記云寛和花山院元年二月三日戊寅大嘗會國郡被定之悠紀近江主基丹波同云寛和一條院二年十一月十六日庚辰於豐樂院大嘗會（近江國野洲郡備中國下道郡）今按此兩代大嘗會歌無所見皇年代略記亦兩代共以無國郡卜定文扶桑略記云三條院長和元年八月十三日甲寅大嘗會國郡卜定近江國坂田郡丹波國天田郡

榮花物語日蔭鬘　長和元年冬の日もはかなくくれて大嘗會のいそきせさせ給されとその日は只うるはしうそある悠紀の方は大中臣能宣かこの祭主輔親つかうまつる主基の方は前加賀守源兼澄なり（頭注云）兼澄は信明朝臣息公忠孫なり　此人々輔親はよしのふかこなれはとおほしめしたりかねすみは公忠の辨のすちなりなとおほしめしてうたのかたにさもあるべき人ともをあてさせ給へるなるべし悠紀のかたいなつきうたさかたのこほり輔親

やまのことさかたのいねをぬきつみて君かちとせのはつほにそつく　（頭注云）貞觀儀式大嘗會式中卯日兩國獻物各收膳屋神祇官留候北門内左掖造酒童女先舂御飯稻次酒波等共不易手且舂且歌（歌詞當時制之）

御神樂の歌おなじ人

おほやしまくにしろしめす初よりやは萬代の神そさ

もれる

まいり音聲たかみくら山（頭注云）今案まいり音聲は辰の日なり

よろつよはたかみくら山うてきなきときかさ（はカ）はにあ
ふくへきかな

樂の破の歌しき地

おほみやのしきちそいと丶さかえぬるやへのくみか
きつくりかさねて

樂の急（イソギ）のうたかなやま

夫木廿家集
かな山にかたくねさせるときは木のかずにおひます
くにのとみくさ

まかで音聲やすかは

すへらきの見よをまちて丶みつすめるやその川波の
とけかるらし

又つぎの日の參音聲ながらの山

あめつちのともにひさしき名によりてながらの山の
なかきみよかな

（頭注云）貞觀儀式大甞會式中卯日戌刻鑾輿御大甞宮宮內官人率吉野國栖十二人猶笛工十二人入自朝堂院南左掖門就位奏古風悠紀國司率歌人入自同門就位奏國風伴佐伯各一人率諸部十五人亦入自同門予就位奏古詞同下辰日辰刻車駕幸豊樂院須臾留清暑堂乃御悠紀帳神祇官中臣捧賢木就位跪奏天神之壽詞國司率風俗歌人等且歌參入立庭中歌人先入幄次國司就幄座伏地者更起擊鉦如初儀入幄乃奏風俗歌儛（儛以八人成列之）次奏所司樂訖退出皇帝御清暑堂（主基同之）今案卯日風俗者別也誦古歌獻同巳日辰刻御悠帳悠紀人入自儀鸞門就中庭左掖奏和舞（十人共舞）訖退出次雅樂寮率樂人亦入門幄奏樂未刻御主基帳次主基人等入中庭 右幄奏田舞（十人共舞）訖退出云々今案つぎの日さいへるは巳の日なり

樂の破のうたよしみつ

吉水のよきてとおほくつめるかなおほくら山のほと
はるかにて

樂の急のうた

ゆふしての日かけのかつらよりかけてとよのあかり
のおもしろき哉　（頭注云）此歌無名所

まかで音聲やすらのさと（にィ）

夫木三十下同
もろ人のねかふこ丶ろのあふみなるやすらのさとの
やすらけくして（からイ）（きかなイ）

主基の方いなつきうたおほくら山　兼澄

ふたはよりおほくら山にはこぶいね年はつむともつ
くるよもあらし

續後拾遺
御神樂歌なかむらやま

君か御代なかむら山のさかきはをやそうち人のかさ
しにはせん

たつの日の樂の破の歌たまゝつやま
あまつそらあしたにはるゝはしめにはたまゝつ山の
陰さへそゝふ
おなじ日のかくの急のうたいなふさ山
夫木廿源兼澄
としつくりたのしかるへきみよなれはいなふさ山の
（つくり田の（夫））
ゆたかなりけり
おなじ日參り音聲さゝれいし山
かすしらぬさゝれいし山ことしよりいははとならん
ほどはいくよぞ
おなじ日のまかて音聲ちとせ山
うごきなき千とせの山にいとゝしく萬世そふるこゑ
のするかな
みの日のがくのはとみつき山
君か代はとみつき山のつき〳〵にさかへぞまさん萬（さ 夫木廿下同）（ろイ）
代までに（もイ）
おなじ日のがくの急の歌なかむら山
夫木源兼澄
よろつ代をなかむら山のなからへてつきすはてはん
みつきものかな
同じ日のまいり音聲とみのをがは

あめのしたとみのをかはのすゑなれはいつれの秋か
うるはざるべき
同じ日のまかて音聲ちくかは
にごりなくみへわたる哉ちくかはのはしめてすめる
とよのあかりに（季を）
このおなしおりの御屛風のうたなどあれど同じす
ぢの事なればかゝず云々（今按屛風のうた所見なし）八雲
扶桑略記云後一條院長和五年四月七日庚辰卜定（頭注云）長和五
大嘗會國郡悠紀近江國甲賀郡主基備中國下道郡 悠紀輔親主基爲政
後一條院の御時長和五年大嘗會主基方御屛風に備
中國長田山の麓に琴ひきあそひしたる所をよめる
善滋爲政朝臣 千載賀
千世のみとおなしことをそしらふなる長田の山の嶺
のまつかせ
長和五年大嘗會悠紀方風俗歌近江國朝日郷
祭主輔親 新古今賀
あかねさす朝日の里のひかけ草豊の明のかざしなる
へし
長和五年大嘗會主基方備中國御屛風 萬代廿
善滋爲政朝臣

うごきなき君か御代かなまかねふくきびの中山ときはかきはに　八雲

後朱雀院　扶桑略記云長元九年十一月十七日大嘗會近江（悠紀）丹波（主基）供奉其事　（頭注云）長元九悠輔親主基義忠　皇年代略記亦元國郡卜定

長元九年後朱雀院の御時大嘗會主基方の神あそびの歌丹波國神なび山をよめる　千載神祇

藤原義忠朝臣

常盤なる神なび山の榊はをさしてそいのる萬代のため

後朱雀院御時大嘗會御屏風歌　續古今賀

贈參議義忠

てる月のかつらの山に家居してくもりなき世にあへる秋かな

長元九年大嘗會御屏風　夫木七

贈參議義忠卿

のとかなるあめの下かないなふさの山田にたてもさなへとるなり

千瀧山丹後藻鹽　拾葉集名寄

義忠

年をへて絶しとそ思ふたくふれはちたきの山にひけるしら糸　（頭注云）此歌名寄になしふしん丹後は丹波の誤歟

後冷泉天皇　扶桑略記云永承元年十一月十五日辛卯大嘗會近江甲賀備中英賀供奉悠紀主基云々八雲御抄云永承悠紀甲賀主基家經　（頭注云）皇年代略記亦元國郡卜定文

後冷泉院御時大嘗會主基方御屏風に備中國たかくら山にわきたの人花つみたるうたかきたる所によめる

藤原家經朝臣　詞花雜下

打むれてたかくら山につむものはあしれなき世のとみ草の花　（頭注云）俊成卿九十賀の時權中納言隆房こゝのそらよはひを君にゆつりおきてななはるあきにさみ草のはな

永承元年大嘗會悠紀方に屏風近江國もり山をよめる

式部大輔資業　新古今賀

すへらきをときはかきはにもる山の山人ならし山かつらせり　（頭注云）古今巻向のあなしの山の山人と人もみるかに山かつらせよ

永承元年大嘗會巳日樂急　ふかき　夫木卅一

式部大輔資業　萬代第七

わか君につかへまつらん苔むせるいはねの村の萬代までに

後冷泉院の御時の大嘗會の主基方備中國二萬郷をよめる

藤原家經朝臣　金葉賀

みつきものはこふよほろをかそふれはにまの里人かすそひにけり

同國いな井の里を人にかはりてよめる家經に替らる

高階明賴　同

苗代の水はいかゐにまかせたり民やすけなる君か御代かな

後三條天皇　扶桑略記云治曆四年十一月廿二日辛卯大嘗會近江國愛智郡備中國英賀郡供奉悠紀主基云々八雲御抄云治曆悠實政主經衡　（頭注云）皇年代略記亦无國郡卜定文

治曆四年後三條院の御時大嘗會主基方神樂の歌いはや山をよめる

藤原經衡　千載集神祇

うこきなくちよをそ祈るいはや山とる榊はの色かへすして

後三條院御時大嘗會備中國歌　新拾遺賀

藤原經衡

はるかにぞ今ゆく末を思ふべき長尾の村の永きためしに

祝歌中　龜鏡

經衡　夫木三十一

はこへともつきせさりけりみつき物おはいすの里のみちのすもなく

白川六條天皇　扶桑略記云承保元年十一月廿一日乙卯大嘗會近江坂田丹波多記供奉云々八雲御抄承保悠實政主匡房

（頭注云）皇年代略記亦无國郡卜定又

白川院の御時承保元年大嘗會主基方稻舂歌神田郷を讀る

前中納言匡房　千載賀

ちはやふる神田のさとのいねなればつきひとゝもにひさしかるべし

承保元年大嘗會主基方丹波國かつらの山

前中納言匡房　新勅撰賀

久方の月のかつらの山人もとよのあかりにあひにける哉

承保元年大嘗會主基方御屏風歌石坂山　續古今賀

いはさかの山の岩根のうごきなくときはかきはに君のむすかな

承保元年大嘗會主基方さかゐの村を

前中納言匡房　玉葉賀

八隅しるわかすへらきの御世にこそさかゐの村の名にもすみけれ

承保元年大嘗會巳日退出音聲樂急ふなせのはし

前中納言匡房　風雅賀

御調物はこふふなせのかけはしに駒のひつめの音そ絶せぬ

おなじ屏風の歌人の家の門田にいねかる所あり　同

君か代はしつか門田にかるいねの高くら山にみちぬ
へきかな
ひおきのむらゝ人おほきさ所同
くもりなき君か御代にはあかねさす日おきの里もに
きはひにけり　（頭注云）和名抄丹波國多紀郡日置
大嘗會主基方御屛風　前中納言匡房卿七夫木
あやめ草ひらの谷水底深み長きはちよのはしめなり
引しら谷水の名寄三十丹波
けり
大嘗會主基方御屛風ふちさか山に藤咲たる所
前中納言匡房卿六夫木
君か代にあふかひありて紫の雲たち渡る藤さかの山
大嘗會主基方御屛風丹波夫木十一
ふたむらの山のふもとの秋萩に錦をしける野へかと
は名寄　前中納言匡房卿
そ見る
主基方御屛風
前中納言匡房卿十四夫木
色もかもうつりやするとたび人の衣に匂へ白菊の花
（頭注云）所の名をよまでたゞ其おもむきをよめるも例あり此中にも考へし
とみのを山丹波大嘗會風俗十首神樂歌廿夫木

榊はの色もかはらてけふよりはとみのを山にちよを
前中納言匡房卿
こそまて
同　同
水清きとみのを川のあやめ草けふを待てそなかきね
も引　此二首時代分明ならされど丹波といへるによりてこゝに入
承保元年大嘗會主基の御屛風廿夫木
前中納言匡房卿
いのることかなひの山のさねかつらくれともつきぬ
よもの山かな　入歟
なかを山承保元年大嘗會御屛風たび人のあまたゆ
きかふあり　前中納言匡房卿同
もろ人のさかゆく道はなかを山またゆくすゑそはる
けかりける
大嘗會悠紀方御屛風　同
椎柴のかはらぬ色をたのむ哉君かよはひの長みねの
山
承保元年大嘗會同　作者なし實政乎悠紀
槇のはも苔おふるまで成にけりいくよかへらぬ長み

ねの山

承保元年大嘗會主基方御屏風村雲山に神社又山の
ふもとに田あり　前中納言匡房卿 夫木 廿
天の下年へぬ秋そなかりける村雲山の神のしるしに

家集遊樂山松を 承保大嘗會主基方歌歟 前中納言匡房卿 同
ゆらの山ふもとの松の松風に立よる人もちよをこそ
まて

承保元年大嘗會主基方御屏風 同
君か代はいつれの里もおしなべていな村岡になりに
けるかな

承保元年大嘗會くらをかのわかな 丹波 同　同　卿
をとめこか袖ふりはへてくらをかにちとせの春の若
なつむらん

承保元年大嘗會主基方御屏風 夫木 廿二　同　卿
ふた葉なる若松のもり年をへて神さふるまて君はま
しませ

主基方御屏風 夫木 廿五　同　卿
かはしまやふなきの濱にゐる千鳥おのれの名をは年
とたのまん （頭注云）和名抄丹波國氷上郡船城（布奈木）

實政 夫木 廿五 私承保悠紀方作者
何こともならひなくのみ見ゆるかなくらふの里にい
かゞいふへき

延久大嘗會 夫木 廿　前參議實政卿
久しさのしるしなるへし色かへぬいはねの山の山の
みとりは 名寄此歌の左に右承保元年大嘗會歌云々

主基方御屏風 夫木 三十一　前中納言匡房
くらかきの里に浪よる秋の田は年なりひてのいねに
そありける

承保元年大嘗會いつみのむらの人の家に菊花さか
りなり　前中納言匡房卿 同
白菊のいつみの村にすむ人はくろかみなから年をこ
そふれ

承保元年大嘗會　前中納言匡房卿 同
けふりたつはるへの村はいにしへのなにはのみつの
けしきこそすれ

承保主基方御屏風　前中納言匡房卿 夫木 三十一
ちはやふる神田のむらのいねなれは月日とともに久
しかるへし （頭注云）和名抄丹波國多紀郡神田神名帳神田神社

承保元年大嘗會 同　私作者なし 悠紀實政主基匡房丹波

わか君の千代の數かも五月雨のたかの丶むらの軒の玉水

雨の下かくこそはみめかへはらや高田の村はみぬ年そなき

承保元年主基方同　匡房卿

八角しるわかすへらきの御代にてそさかゐの村の水もすみけれ

承保元年大嘗會木綿園村近江

をちこちの卯花月夜あかけれはひるとそみゆるゆふその丶村

毛利山名寄丹波　匡房

もり山に祈りしことはしるしあれともみちは神の手向也けり

遊布山名寄丹波　匡房

萬代と千度やちたびいはねなるゆふの山こそ數は知けれ

大雲川歌枕名寄　匡房

よもの海もかくこそあらめ大雲川ひとりも波のたつ時そなき

大芋川同　匡房

おいも川ひとたひすめるしるしにはけふそちとせの初也けり

右承保元年大嘗會歌

永保三年大嘗會主基御屏風（頭注云）永保三年應レ作二承保元年一

前中納言匡房卿夫木廿五

すへらきは千坂の浦のさゝれ石の雲井にみゆるいはとなるまて

歌撫村同　匡房

うた家ての村に旅人まとゐしてをさまれる世の聲を聞かな

高松山丹波名寄　匡房

緑なる高松山を數ふれはいつしか年のゆき積るらん

堀河天皇　扶桑略記寛治元年（應德四年也）十一月十九日丁卯大嘗會近江中賀備中賀夜供奉其事云々八雲御抄云寛治悠匡房主行家（頭注云）皇年代略記云寛治元年四月廿三日國郡卜定云々

寛治元年堀川院の御時大嘗會悠紀方神あそひの歌

諸神郷をよめる千載集神祇　前中納言匡房

いにしへの神の御代よりもろかみの祈るいはひは君か代のため

寛治二年大嘗會屏風にたかのを山をよめる元獻新古今賀

前中納言匡房

とやかへるたかのを山の玉椿霜をはふとも色はかはらし

寛治元年悠紀歌近江國みむらの山新勅撰賀

前中納言匡房

時雨ふるみむらの山の紅葉々はたかおりかけし錦なるらん

堀川院御時寛治元年大嘗會悠紀方風俗歌千々松原

前中納言匡房續千載賀

ときはなる千々の松原色深み木高き陰のたのもしき哉

寛治元年大嘗會屏風に小松原のもとにながるゝ水ありその所にすゞむ人あり風雅賀

前中納言匡房

小松原した行水のすゝしきにちとせの數をむすひつるかな（頭注云）此歌無名所歟

堀河院御時大嘗會近江國歌新拾賀

前中納言匡房

みかみ山いはねにおふるさかきはのはかへもせずに萬代やへん

寛治元年大嘗會悠紀方屏風に高野村新續古今賀

わか君のちよの數かも五月雨の高野の村の軒の玉水

大嘗會悠紀方御屏風夫木三十一　前中納言匡房卿

八重たてる白雲山の梅の花南の風にはゝざらめや

大嘗會悠紀方御屏風青柳杜の柳を夫木三

前中納言匡房卿

代々をへて絶しとそおもふ春ことに糸よりかくる青柳の杜

春深み玉野のはらのはなれ駒やよひの草にまかせてぞみる

大嘗會悠紀方御屏風夫木四　前中納言匡房卿

やす川のわたりの櫻はつ〳〵にみれともあかす垣こしにして

くらふ山下てる道は三千年に咲なるもゝの花にそありける

家集あさひの野きし同五　前中納言匡房卿

春のくることやうれしきあかねさすあさ日の野へにきゞす鳴也

大嘗會悠紀方御屏風夫木十一（頭注云）脊作野今訂正

前中納言匡房卿

かまふ野のしめの〻原のをみなへしのもりにみすないもか袖ふり
かまふ野のわかむらさきのふちはかま千世の秋まで匂へとそおもふ

大嘗會御屛風　前中納言定家卿廿夫木

玉かつらさきよくみせんとか〻み山豊の明の月もくもらす（頭注云）今按定家卿は大嘗會の作者におらず匡房卿俊光卿の間の歌なるべし

悠紀方御屛風風俗歌廿夫木　前中納言匡房卿

つくはねの白雲山のたか〳〵にわかすへらきをあふくなりけり

しろかね山廿夫木　同

白金の山のかひある梅の花萬代ふへき匂ひてそすれ
此歌は永承四年大嘗會主基方御屛風に丹波國しろかねやまのうめのはなさかりにさけるに旅人のある所と云々（頭注云）今按永承悠方賓業主基方家經なり此注あやまてりさみえだり依てこゝに載

悠紀方御屛風津野岡夫木廿　前中納言匡房卿

つの〻岡みなみにかほる梅の花君かみかどにかよふなりけり

悠紀方御屛風風俗歌廿夫木　前中納言匡房卿

山もとやさの〻ふなはし中〳〵にたのしきことを聞わたるかな

承保元年大嘗會主基御屛風廿四夫木　前中納言匡房卿

あふみなる高つき川の底清みのとけきみよのかけそうつれる　歌によるに疑ひあり近江は主基の國にあらず寛治天仁の間の悠紀の歌なるべし（頭注云）藻鹽　秋

悠紀方御屛風安川群鶴廿七夫木　前中納言匡房卿

やす川にむれたるたづのむれながら年をは君か年とこそつめ　さいへば光をそへて高槻の川せの波もきよくすむ也

大嘗會悠紀方御屛風三十夫木　前中納言匡房卿

あし原やみつほの國をもる山もとよのあかりのおもしろき哉

家集やすらのむら卅一近江安貝夫木　匡房卿

さなへとるやすらの村の五月雨にあめか下こそにきはひにけれ

　匡房卿十二夫木三

さゝ波やしかの浦より升出してはこふみつきはかちもかはかす

櫻山歌枕名寄三十丹波　匡房

櫻山ちるへき花もなかりけりあらき風たにふかぬ世

なれは　（頭注云）私櫻山近江なるべし　同

櫻山花さへ匂ふかひありて旅ゆく人も立とまりけり

韓見山同　同

見わたせはからみの山のおもしろく雪そちとせの數はふりける　（頭注云）師說からみ山はかゝみ山にて近江歟

篠原近江名寄廿四

朝またき野はらしのはら雪深みたひゆく人の道はいつくそ

右寛治元年大嘗會當國歌也　匡房卿

寛治元年大嘗會悠紀方近江國辰日樂急七萬代

三上山いはねにおふるさかきはのはかへもせすて萬代やへん

鳥羽院八雲御抄悠紀匡房主基正家江次第第十五天仁近江甲賀丹波氷上皇年代略記云天仁元年八月三日（一本十一月廿一日）丁卯ノ大嘗會　（頭注云）今案皇記近江丹波云々　亦無國郡卜定之文

天仁元年大嘗會悠紀方御屛風に三神山

前中納言匡房續後撰賀

あさ綠三上の山の春霞たつや千年のはしめなるらん

かゝみ山

くもりなき君かみよには鏡山のとけき月の影もみへけり

天仁元年鳥羽院の御時大嘗會の悠紀方神樂歌音高山をよめる續千載神祇　前中納言匡房

よはふなる音高山の榊はの色にかはらぬ（もイ）君か御代哉

天仁元年大嘗會悠紀方近江國石根山新千載賀

前中納言匡房

石根山やまあゐにすれる小忌衣袂ゆたかにたつぞうれしき

天仁元年大嘗會　藤原正家朝臣夫木六

音高み藤さか山の藤の花よろつの年の數をそちきる

天仁大嘗會歌　藤原正家朝臣同七

あかねさす日おきの里を見わたせはうの花咲てなつかしきかな

天仁元大嘗會　前中納言匡房卿同廿

蟬の聲いやたか山の木のしたやたひゆく人のやとり成らん

悠紀方御屛風　同　卿同廿

足引のいたくら山の峯までもつめるかりほをみるかうれしさ

天仁元年大嘗會　藤原正家朝臣夫木廿

春たちて霞たなひく千年山ふもとの里のかけものとけし

天仁元年大嘗會丹波國御屏風　同　同

高倉の山のふもとの里なれはつみおく稲の數もしられす（頭注云）此歌次上に匡房卿歌あり又名寄此歌作者匡房とせり丹波は主基にて作者正家なり夫木丹波とあるは誤なり

玉松山近江又丹波　正家朝臣丹波　同同

はる〳〵とひさしかるへきみよなれは玉松山にちよをこそまて

天仁元年大嘗會　藤原正家朝臣　同同

しつかなる二村山のふもとにそちとせの秋の花も咲ける

天歟永仁元年悠紀方御屏風は秋夫木廿　前中納言匡房卿のあなの巳上名寄

くれたけ芦竹のふえ吹山の松かせによろつ世の秋しらへてこそすれ（頭注云）夫木抄第一雜三岡家集、あそびの岡大和）前大納言俊光卿笛吹の社の神は音にきくあそびのなかや行かへるらむ神名帳穴吹（ふゑふき）神社大和添上郡或作穴咋 景行紀春日穴咋邑 延暦七年八月對馬島守正六位上穴咋當麻呂賜姓秦忌寸 今按笛吹有二三所故有不審

同笛吹近江丹波（頭注云）今案近江は誤歟　藤原正家朝臣　同

いはねさす笛吹山のかひありてちとせをふへき聲そきこゆる

天仁大嘗會　藤原正家朝臣夫木廿

君か世のたのしき年のいねなれば稲むら岡にみちてこそつめ

たか岡にむれゐる人もたつとりにちよをちきりてわかなをそつむ

天仁大嘗會　前中納言匡房卿夫木廿五

我君はちさかの浦にむれてゐるたつや雲井のためしなるらん

天仁元年悠紀方御屏風夫木廿一　前中納言匡房卿

時雨せぬよしたの村の秋をさめかりはすいねのはかりなきかな

天仁大嘗會　同　藤原正家朝臣

はる〳〵と年もはるかにみゆるかななからの村の長ひこのいね（頭注云）長ひこのいね下に亦出

天仁元年大嘗會　同　次上匡房卿

眞木の村つら〳〵つはきつら〳〵におもへは久し君かやちよは

天仁元年大嘗會主基方丹波國神樂歌萬代第七神祇

しつかなる山の高根の榊はをときはかきはにいはひ

てそとる（頭注云）此歌無名所
天仁元年大嘗會主基方丹波國御屛風 同第二十賀

正　家

△君か代にあふかひありて紫の雲たちわたる藤坂の山 名寄丹波

△春立ちて霞たなびく千年山ふもとの里。花もめつらし は脱歟

たかくらの山のふもとの里なれはつみおく稻の數もしられす（頭注云）季云高倉山歌重出

△二首大嘗會歌歟

崇德院 八雲御抄悠紀敦光主基行盛皇年代略記云保安四年六月十六日國郡卜定十一月十八日□大嘗會（近江備中）云々

大嘗會主基方備中國彌高山をよめる 冬 金葉

藤原行盛

雪ふれはいや高山の梢にはまた冬なから花さきにけり

保安四年大嘗會主基方御屛風 夫木二十

藤原行盛朝臣

ちはやふるかみ村山の稚柴のいや年のはにいのりまつらん

大嘗會主基方辰日叅音聲に鞁山をよめる

藤原行盛 金葉集賀

音たかきつゝみの山の打はへてたのしきみよとなるそうれしき

悠紀方朝日のさとをよめる　藤原敦光朝臣 同

くもりなきとよのあかりにあふみなる朝日の里は光さしそふ

巳日の樂の破に雄琴の里をよめる 同 近江

松風の雄琴の里にかよふにそをさまれる世の聲は聞ゆる

近衛院 八雲御抄悠紀顯輔主基敦光皇年代略記云康治元年七月廿七日國郡卜定十一月十五日□大嘗會（近江丹波）云々

顯輔家集　近衛院御時大嘗會和歌

悠紀方　近江國　風俗和歌十首

從三位行左京大夫兼近江守太皇太后宮亮藤原朝臣

稻春歌　野洲郡

夫木卅一
人心やすのこほりと聞なへにつけとつきせすはこふ稻哉

神樂歌　三上山

續千載神祇
ちはやふる三上の山の榊はをかをかくはしみとめてこそとれ

辰日　參音聲　高御倉山
雲かゝるたかみくら山のほる日のはるかに見ゆる君か御代かな
同日　樂破　玉蔭井
にごりなきたまかけの井のそこ清みすみよきよにもあひにける哉
玉葉
同日　樂急　長等山
君か代はなからの松のいはね松ちたひやちたひ花のさくまで
同日　退出音聲　安良鄕
夫木卅一ぬ夫
やすみしるわかおほきみのみよにてそいと〻やすらのさともとみぬれ
け夫
巳日　參音聲　佐野船橋
よもの海波も音せぬきみか世とよろこひわたるさの〻ふなはし
同日　樂破　朝日鄕
夫木卅一
いつしかとあさ日の里をたちいて〻いそぎもはてぶみつきもの哉
急舞
同日　樂破　大富山
夫木卄
よろつよとおほとみ山そよはふなるひさしく君をさかゆへしとは
同日　退出音聲秋富村
君か世はたのしかるらしつねよりも年へて見ゆる秋富の村

御屏風六帖和歌十八首

甲帖正二月
夫木卄
長峯山小松多生
君か代はなかみね山に二葉なるこ松の千たひおひかはるまで
同
見遣岡有摘若菜人
はる〳〵とみやりの岡のわかなこそちとせの春はつむへかりけれ
梅原梅花盛人翫之
を季
いつれをかわきてもおらん梅はらは心にそまぬ色し見へねば

乙帖三四月
玉葉
青柳村樹尤多
君か代はたみの心のひとかたになひきてみゆる青柳

のむら

白雲山櫻花盛開行客見之

夫木四
八重たてるしら雲山のさくら花かほるはかりやしるし成覽

山吹崎欵冬開敷行人見之

いはねともくちなし色にしるきかなこや音にきく山吹の花

丙帖五六月

長澤池行ニ採ニ菖蒲一人上

夫木廿三
としことにたへすひくかなあやめくさねを長澤の池を尋て

千载里稙田茜多

夫木三十一
見わたせはちくらの里にあまるまてかすもしられすとる早苗哉

常夏里毎ニ人家一瞿麥開

夫木卅一
苗ことにうゑける花のかひありて咲亂れたる常夏の花

里夫

丁帖七八月

石瀧水如レ糸

夫木廿六
むかしよりなにながれたるいはたきの水のしら糸いくよへぬらん

千草原色々草花開敷

色々のちくさのはらに見わたせはいくらはかりの錦なるらん

玉井宿レ月

くもりなくすむたまの井にいとゝしくひかりをそふる夜半の月かな

戊帖九十月

板倉山田多積レ稲人見之

詞雑下
いたくらの山田につめる稲をこそをさまれるよのはとをしるかな

會坂關運ニ調物一人馬多

夫木廿
みつきものはこふよはろしおほかれはみちもさりあへすあふさかの關

鏡山紅葉盛客見之

日にそへてあかくそみゆるかゝみ山紅葉の色やふかく成らん

己帖十十二月寅

鷹尾山付鷹狩人

夫木廿
みかりするたかのを山にたつましや君かちとせのみ
つき成らん

益田杜祭神祈

夫廿二
すへらきを守り益田の杜なれやあからかしはのあか
らめもせす　（頭注云）和名抄近江國淺井郡益田末須太）神名式同郡麻蘇多神社　夫木卅一懷中讀人不知「年こ

さにます田の里の稻なれはつくさも
盡し千世の秋まで大嘗會歌めきたり

高宮里白雲尤深　雪カ

朝まださふりさけ見れは白たへの雪つもれるやたか
みやの里

康治元年十月三日　巳上敦光主基方歌所見

後白川院　八雲御抄悠紀永範主基令明百練抄云久壽二年十一月廿三日大嘗會云々皇年代略記云久壽二年九月十二日

大嘗會國郡卜定十一月廿三日（頭注云）台記康治二年八月巳刻廿四
（丁卯）大嘗會（近江丹波）云々　日大内記藤令明死紀傳儒敦光成
佐等外其才无及今明者惜哉々々
生年七十云々年紀有相違如何

院の御時の久壽二年大嘗會悠紀方風俗歌近江國わ
か松のもりをよめる千載賀　宮内卿永範

すへらきの末さかゆへきしるしには木高くそなる若
松のもり

久壽二年院の御時大嘗會悠紀方の神樂の歌近江國

木綿園をよめる同神祇　宮内卿永範

神うくる豊のあかりにゆふそのゝひかけかつらそは
へまさりける

久壽二年大嘗會悠紀方屛風に近江國かゝみ山をよ
める新古今賀　宮内卿永範

くもりなき鏡の山の月を見て明らけき世を空にしる
かな　（頭注云）拾貫萬代なあきらけくみんかゞみ山千年のほさにちりもくもらし

久壽二年大嘗會歌續古今賀　宮内卿永範

をさまれる時にあふみのやす川はいくたひみよにす
まんとすらん

みそぎを　宮内卿永範夫木九大嘗歌似たり

ちはやふるたなかみ川の清き瀨にちとせをいのる夏
はらへしつ

久壽二年大嘗會悠紀方御屛風近江國夫木十八　前參議俊憲卿

あられふる玉野の原にみかりして天のひつきのにへ
たてまつる　（頭注云）俊憲卿は平治悠紀方の作者也如何萬代亦作俊憲

主基方歌丹波國酒井村名寄三十夫木廿六　藤原茂明朝臣　義イ

明玉出る名寄
わきかへりさか井の水もすみにけりおほやしま知み
くみ同
よのはしめに　（頭注云）此人大嘗會歌未見今按茂は義の誤にて義に令さ通じ用て令明歟

祝言中 歌乎 松井山城又近江　同

むすひあくる松井の水はそこすみてうつるは君か千代のかけかも　（頭注云）此歌大嘗會あきたり松井は新古今建久九主基備中さす同名異所歟

悠紀乎 大嘗會主基方御屏風廿七夫木　宮内卿永範

粟津野のこはきか花に色そへて時しりかほにましるさき草　（頭注云）永範は久壽悠紀方の作者也此歌両代の内の歌なるへし

月よみのさと　夫木卅一大嘗歌似たり月よみの里は准ゝ上するに丹波歌義歟　藤原茂明朝臣

くもりなきとよのあかりに容はれて光をそふる月よみの里

二條院　八雲御抄悠紀俊憲主基範兼皇年代略記云二條院平治元年四月廿日國郡卜定十一月廿二日(癸卯)大嘗會(近江丹波)云々

平治元年大嘗會悠紀方風俗歌近江國ちさかのうらをよめる 千載賀　參議俊憲

君か代の數にはしかし限なきちさかのうらのまさこなりとも

同御時大嘗會主基方稻春歌丹波國雲田村をよめる 同　刑部卿範兼

あめつちのきはめもしらぬみよなれは雲田の村のいねをこそつめ

平治元年大嘗會主基方辰日參入音聲生野をよめる 新古今賀　刑部卿範兼

大江山こえていく野の末遠み道ある世にもあひにけるかな　（頭注云）後拾小式部大江山いく野の道の遠ければまたふみも見す天の橋だて　平治悠紀俊憲主基範兼

二條院大嘗會十四夫木　よみ人しらす

高宮のさとのしるしに白菊の花の雪とは見ゆるなるへし

平治元年大嘗會主基方丹波國神樂歌第七萬代　刑部卿範兼

色かへぬときはの山の榊はをいはひかさしつ萬代のため

六條院　八雲御抄悠紀俊成主基範兼光皇年代略記云仁安元年九月三日國郡卜定十一月廿二日(己卯)大嘗會(近江備中)云々（頭注云 袋草子悠紀顯廣主基永範

長秋詠藻上

仁安元年大嘗會悠紀方の歌よみて奉るへきよし宣旨有しかはさきくつねは儒者なとつかうまつるをいかゝと辭し申を猶よみて奉るへきよし御氣色有よし行事辨俊經朝臣たひ〳〵しめしをくりしかは

よみて奉りし歌

悠紀方　近江國

風俗歌十首

新古賀 稻舂歌　坂田郡

あふみちや坂田のいねをかりつみて道ある御代の初（の(新)）
にそつく

夫木廿 神樂歌　長岑山

萬代を祈そかくる長みねの山のさか木をさねてしに
して

辰日參入音聲　鏡山

うれしくもか〻みの山をたて置てくもりなきよのか
けをみるかな

同日樂破　余吾海

四方の海も風しつかにそ成ぬらし聲おさまれるよて
のうら波

同日樂急　眞木村

君か代はちえのなみくらひまもなくつくりかさねよ
まきの村人

同日退出音聲　香高山

風賀 吹く風は枝もならさて萬代をよはふ聲のみそ（おと季）とたか
の山

夫木廿 巳日參入音聲　石根山

行末をおもふも久し君か代はいはねの山のみねのわ
か松

同日樂破　安河

安川にむれゐてあそふまな鶴ものとかなる世を見す
るなりけり

玉葉 同日樂急　木綿園

ゆふその〻日影のかつらかさしもてたのしくもある
かとよのあかりに（の(玉)）

夫木廿 同日退出音聲　高御倉山

うこきなきたかみくら山祈おきつ（な季）おさめん御代は神
のまに〳〵

同悠紀方御屛風六帖和歌十八首別紙にあり

甲帖正二月

夫木廿五 小松崎　子日有遊客眺望湖海

子日して小松か崎をけふ見れははるかに千世のかけ
そうかへる。

龜岳　有下採二若菜一女人上

をとめこも君かためとやかめ岳に萬代かねてわかなつむらん

梅原山　梅花多開敷

夫木廿
春の日の光はさはもなけれともまつ花さくは梅はらの山

乙帖三四月

櫻山　櫻花盛開松樹交ㇾ枝

夫木四
松かえに枝さしかはす櫻山はなも千年の春や匂はん

山吹崎　款冬臨岸水

水の色に花の匂ひもひとつにて八千代そすまん山吹の崎

大瀧山　卯花旁開山脚民家多

夫木七
布さらすふもとの里のかすそへてうのはなさける大瀧の山

丙帖五六月

長澤池　端午日人採二菖蒲一

夫木七
長澤の池のあやめを尋てそ千代のためしにひくへかりける

吉田郷　殖ㇾ田之所多

夫木廿一
せく水も吉田のさとにうふる田はかねて年へんかけそみへける

玉陰井　水邊松藤有二納ㇾ涼之人一

夫木九
岩間もる玉かけの井の凉しさに千年の秋をまつ風そふく

丁帖七八月

高宮郷　七夕有二引ㇾ糸之家々一

夫木卅一
七夕に今朝ひく糸もなかゝれと君をそ祈る高宮の里

志賀浦　月浮二水上一人見之

照月も光をそへて見ゆる哉玉よせかへす志賀の浦波

玉野原　秋花開敷

夫木廿二
露しけき玉野のはらの萩さかり風ものとかに見ゆる秋かな

戊帖九十月

吉水郷　多人家菊花臨ㇾ水

夫木卅一
いくちよの秋かすむべき菊の花匂ひをうつすよし水の里

大藏山　山脚民家多二積ㇾ稻之所一

夫木廿
かすしらす秋のかりはをつみてこそ大くら山の名にはおひけれ

松賀江岸松樹茂盛邊山有二紅葉一

紅葉々をそむる時雨はふりくれと緑そまさる松かえのきし

已帖十一月十二月

千坂浦　千鳥群飛行客見レ之

夫木十七
いくちとせいくさかゆかむ御代なれやちさかの浦に千鳥鳴也

勢多橋　白雪積敷人馬通レ之

夫木廿二
あつまちや日つきのみつき絶しとて雪ふみ分るせた（すして夫）の長橋

吉身村　失題乎

夫木卅一
君か代はよしみの村の民もみな春をまつとやいそき立らん

仁安元年十一月三日詠二進之一　已上主基方歌无所見

高倉院八雲御抄悠紀永範主基清輔皇年代略記云仁安三年四月廿八日大嘗會國郡卜定十一月廿二日(己卯)大嘗會(近江備中)云々

高倉院御時仁安三年大嘗會悠紀方の御屏風のうた

千載集賀　刑部卿永範

霜ふれとさかへてこそませ君か代に逢坂山の關の杉村（守イ）

嘉應元年高倉院御時大嘗會悠紀方の神あそびの歌

近江國守山をよめる　千載神祇　宮内卿永範

すへらきをやはく萬代の神もみな常盤にまもる山の名そこれ

仁安三年悠紀風俗歌　新勅撰賀　宮内卿永範

あめつちをてらす鏡の山なれは久しかるへき影そみへける

高倉院御時大嘗會備中國歌　新拾遺賀　清輔朝臣

くもりなき玉田の野への玉か影かさすや豊の明なるらん

おなしき御屏風歌　同

はるくとくもりなきよをうたふ也月出か崎の海士のつり舟　(頭注云)夫木廿五大嘗會悠紀方御屏風清輔朝臣はるくと云々夫木悠紀誤歟

仁安三年大嘗會主基方備中國辰日樂破

藤原清輔朝臣　萬代集第七神祇

神代よりあめのおしての動なきしるしにたてしいはや山かも　(頭注云)季云あめのおして不詳神璽ならばあめのしるしこそあるべけれ清輔神祇令義解を見ぬ人さいふかへらず

安德天皇八雲御抄悠紀清輔(兼光袋)主基兼光(季經袋)吉記第五云悠紀近江國野洲郡 主基丹波國氷上郡 治承四年四月廿七日云々百練抄云安德天皇壽永元年十一月廿四日大嘗會也去年聖不被行之今年所被遂行也 皇年代略記云壽永元年十一月廿四日(辛卯)大嘗會 (頭註云)吉記第十二元年六月八日大嘗會本文文(近江丹波)云々 章博士敦周光範等朝臣可勘申之和歌悠紀前皇后宮亮季經朝臣主基左中辨兼光朝臣可談之旣被定仰云々 同第十三壽永元八月十九日 大嘗會一切難計上無許容下不應 動 何況追討使下向者近江國々勤彌難計歟又主基右少辨有輕服(五日)日數過了不以辭退云々

壽永元年大嘗會主基方の歌よみて奉りける時神樂歌丹波國神なひ山をよめる千載集神祇

權中納言兼光

みしまゆふかたに取かけ神なひの山の榊をかさしにそする

仁安元年(イ壽永元)大嘗會主基方稻舂歌丹波國長田村をよめる

權中納言兼光新古今賀

神代よりけふのためとややつかほに長田のいねのしなひそめけん (頭注云)鈴鏡第一おさろの下後鳥羽院元暦元年十月廿五日御禊十一月十八日に大嘗會也主基方御屛風のうた兼光中納言といふ人丹波國長田村さかやを神代より……鈴鏡あやまれる歟新古異本の壽永を正とすべき歟

後鳥羽院八雲御抄悠紀季經(兼光袋)主基光範(季經袋)百練抄云後鳥羽元暦元年八月十日 丙寅大嘗會國郡卜定也(近江甲賀郡丹波多紀郡)同十一月十八日癸卯大嘗會也云々

今上の御時元暦元年大嘗會悠紀方の風俗の歌三神の山をよめる千載集賀

藤原季經朝臣

ときはなるみかみの山の杉むらや八百萬代のしるし成らん

元暦元年會(今カ)上御時大嘗會悠紀方歌奉りける神わそびの歌近江國諸神鄕をよめる同神祇

藤原季經朝臣

もろかみの心に今そかなふらし君をやちよと祈ることは

おなし大嘗會の主基方(歌歟)よみ(て歟)たてまつりける神樂の歌丹波國千草山をよめる同

藤原光範朝臣

ちとせ山神の世させる榊はのさかへまさるは君かためとか

元暦元年大嘗會悠紀方(主基乎)青羽山新古今賀

式部太輔光範

立よれは凉しかりけり水鳥の靑羽の山の松のした風

元暦元年大嘗會悠紀方近江巳日退出音聲

正三位季經萬代第七神祇

かくはかりたのしきみよはいさゝ川いさゝまたこそ

きゝもわたらね （頭注云）今按主基也

土御門院八雲御抄悠紀貢實百練抄云土御門院建久九年十一月廿二日大嘗會云々皇年代略記云建久九年四月廿三日國郡卜定十一月廿二日、乙卯）大嘗會（近江備中）云々

建久九年大嘗會主基屛風に松井 新古今賀

權中納言資實

ときはなる松井の水をむすふ手のしつくことにそ千代は見へける

建久九年大嘗會主基方の御屛風に備中國神島有神祠所を 續拾遺集

前中納言資實

神嶋の浪のしらゆふかけまくもかしこき御世のためしとそみる （頭注云）神名式小田郡神島神社

建久九年大嘗會 夫木二十

前中納言資實卿

まさき山まさきのかつら紅葉して時雨も時をたかへさりけり

建久九年大嘗會主基方備中國御屛風 萬代集第廿賀

前中納言資實

夫木廿五

みつきものはこふ千舟もてき出よもたゐのとまりしはもかなひぬ ひ夫

順德院八雲御抄悠紀貢實主基有家百練抄云順德院建曆元年八月十一日卜二定大久會國郡一（近江丹波）同二年十一月十三日大嘗會仍天皇行二幸廻立殿一云々皇年代略記云建曆元年八月十一日國郡卜定十一月十三日、乙卯）大嘗會延引（今月八日依春花門院崩）二年四月十八日更國郡卜定十一月十三日（乙卯）大嘗會（近江丹波）云々

建曆二年大嘗會悠紀方屛風歌長等山 續古今賀

前中納言資實

すかのねのなからの山の嶺の松吹くゐ風もよろつ代のこゑ

已上以レ所下載二八雲御抄一給上之大嘗會目錄中所レ集倭歌如レ左

後堀川院悠紀家衡主基賴資百練抄云後堀河院貞應元年十一月廿三日大嘗會也云々皇年代略記云貞應元年四月十六日大嘗會國郡卜定十一月廿三日（丁卯）大嘗會（近江備中）云々

貞應元年悠紀方たま野 新勅撰賀

正二位家衡

いろ〳〵の草はの露をおしなへて玉野の原に月そみかける

おなし主基の風俗いはや山 同

權中納言賴資

ふかみとり玉松かえの千世まてもいはやの山そ動かさるへき

御屛風歌いはくら山 同

あしひきのいはくら山の日かけ草かさすや神のみて

と成らん（頭注云）岩藏山は近江蒲生郡なり然れば此歌家衡さいへる名を落せる歟又備中にもいはくら山有歟

貞應元年大嘗會主基御屏風に備中國あきさか山 玉葉賀 前中納言賴資

初しくれふりにけらしなあすよりはあきさか山の紅葉かさゝん

四條院百練抄云四條院天福元年（頭注云天福當作嘉貞）四月十六日庚寅大嘗會國郡卜定（近江坂田丹波氷上）同云嘉貞元年十一月廿日（乙卯）天淸月明今夜大嘗會也

嘉貞元年大嘗會悠紀方巳日樂破近江國眞木村 續拾遺賀 前中納言家光

ときはなるかけはかはらしまきの村あまの露霜いくよふるとも

嘉貞元年大嘗會悠紀神樂歌石戸山 新後撰賀 前中納言家光

神代より祈るまことのしるしには岩戸の山の榊をそとる

後嵯峨院悠紀爲長主基經光百練抄云後嵯峨院仁治三年四月廿六日戊寅大嘗會國郡卜定也近江野洲備中下道同十一月十三日辛卯天晴月明大嘗會祭也

仁治三年悠紀風俗歌三神山 續後撰賀 前參議爲長

いにしへに名をのみ聞て求けんみかみの山はこれそこの山（頭注云）萬代集第七巳日退出音聲いにしへに云々

おなしき主基の風俗歌石崎 同 前中納言經光

末とほき千世のかけこそ久しけれまた二葉なる石崎の松

仁治三年大嘗會御屏風歌 續古今賀 大藏卿爲長

けふよりそ千々の松はらちきりおく花はとかへり君は萬代

仁治三年大嘗會悠紀方風俗歌朝日山 續拾遺賀 前參議爲長

あきらけきみよのはしめの朝日山あまてる神の光さしそふ

仁治三年大嘗會悠紀方屏風歌 新續古今賀 前參議爲長

春風は枝もならさす靜にてなひくはかりの春柳のむら

仁治三年大嘗會悠紀方近江國御屏風 萬代集第廿賀 大藏卿爲長

秋田もる山下陰のかり庵にいなはの風も寒し今宵は

後深草院悠紀經光主基成實百練抄云寛元四年四月廿三日壬午大嘗會國郡卜定也（近江丹波）同十一月廿四日巳卯六

嘗會山

寛元四年主基風俗歌神山續後撰賀　　正三位成實

神山の日影のかつらかさすてふとよのあかりそわきてくまなき

おなしき御屏風に藤坂山同

紫の藤さか山にさく花のちよのかさしは君か爲かも

寛元四年悠紀風俗歌三神山新後撰賀　　民部卿經光

玉椿かはらぬ色を八千世ともみかみの山そときはなるへき

寛元四年大嘗會悠紀方近江國巳日樂破玉葉賀

前中納言經光

空晴ててらす月日のあきらけき君をそあふくいや高けはゝの山

龜山院悠紀經光主基行家皇年代略記云文應元年四月廿九日大嘗會國郡卜定十一月廿六日(乙卯)大嘗會(近江備中)

文應元年大嘗會悠紀方御屏風歌玉井續拾遺賀

民部卿經光

涼しさにちとせをかねてむすふかな玉井の水の松の下かけ

文應元年大嘗會主基方神樂歌に新千載賀

從二位行家

色かへぬ黒かみ山の山かつらかくてやいさにつかへまつらん

文應元年大嘗會主基備中國稻舂歌夫木廿二

從二位行家卿

昔さく神のまく田のたねなれは二萬のみしねはやそくらそつむ

後宇多院歌无所見従鏡草枕文永十一年三月廿六日御即位同十一月廿二日大嘗會くわいりう殿の行幸節會にかりおこなはれて清暑堂の御神樂もなし云々皇年代略記云文永十一年四月廿八日國郡卜定十一月十九日(辛卯)大嘗會(近江丹波)云々

伏見院悠紀資宣主基隆博従鏡さし櫛正應元年三月十五日御即位同十一月廿五日この程は大嘗會五節などのゝしる云々皇年代略記云建治十一年(頭注云建治十一年、本正應元年)四月廿八日大嘗會國郡卜定十一月廿二日(癸卯)大嘗會(近江備中)云々

正應元年大嘗會主基方屏風に奈加良川岸菊盛開行人汲下流風雅賀

正二位隆博

汲人のよはいもさこそ長月やなからの川の菊の下水

正應大嘗會四夫木

民部卿資宣

とこしへにたつ白雲の山櫻春をかさねていくよかもてん(頭注云)此歌无名所

正應大嘗會同廿

民部卿資宣

かくはかりゆたけき年にいなむら近江の山田もるをは又もあひきや

正應大嘗會同廿　　民部卿資宣

さか木とる今もいは戸の山かつらふたゝひなひけやそのもろ神
近江

正應大嘗會廿大木　　大藏卿隆博

今そしるちらぬ櫻のはなみ山備中かせもうらゝにをさまれる世を

正應大嘗會廿大木　　大藏卿隆博

あめかしたかさめの山の草木まて春のめくみに露そあまねき（頭注云）姓氏錄笠朝臣下加佐米山

正應大嘗會同　此歌藤原行盛朝臣の歌の次に同さあり誤なり大藏卿隆博歟

萬代をさらにそ祈るちはやふる神村山のみねのまさか木

正應大嘗會夫廿　　民部卿資宣

ましらふの鷹の尾山の朝かりに霜うち拂ふ峯の椎柴

たかつき山高月備中夫廿大嘗めきたり　　大藏卿隆博

霧はるゝたかつき山の月影につらもみたれす鴈は來にけり

正應大嘗會夫廿　　大藏卿隆博

すへらきの位の山の玉日かけ雲井にかくるけふの宮人（頭注云）此位り山は常の位山にて悠紀主基の國にもよらずよめる歟

正應大嘗會廿大木　　大藏卿隆博

時雨つるまさ木の山のそかひよりみゆるもみちの色のてこらさ

正應大嘗會日差備中夫木　　同

のとかなる春の日さしの山高みあきらけきよのはしめをそしる

後伏見院悠紀俊光主基隆博皇年代記云永仁二年八月廿五日國郡卜定十一月廿日（癸卯）大嘗會（近江丹波）云々

永仁六年二乎（頭注云）永仁三年にて正應さ改元なり六年誤なり　大嘗會悠紀方御屏風

近江國千枝村藤花淺深玉葉賀　　前中納言俊光

うすくこく千枝にさける藤浪のさかりも久しよろつ代の春

永仁六年二乎大嘗會悠紀方屏風長澤池端午日採ニ菖蒲一風雅賀　　前大納言俊光

君か代のなかきためしに長澤の池のあやめもけふそひかるゝ

おなし大嘗會主基屏風増井納涼の人あり　　正二位隆博風雅賀

涼しさをます井のしみつむすふ手にまつかよひくる萬代の秋

永仁六年大嘗會悠紀方屏風に花垣里（新續古今）　權大納言俊光

白妙のゆふ取して神まつるう月にはふ花垣の里

永仁大嘗會（犬岡山近江夫木廿）　前中納言俊光卿

はしたかの羽風に雪はうちみたれ朝風さむきいぬかひの山

永仁大嘗會（夫木廿）　前中納言俊光卿

神代よりくもらぬやたのかゝみ山ねてしのさか木色もかはらす

永仁大嘗會（同）　前中納言俊光卿

もろともにちよをならせるためしかな鶴のきやとる高松の山

永仁大嘗會（淺井岡近江夫木廿）　前中納言俊光卿

秋はまたあさ井の岡のをさゝ原むすひやすらん千代の初霜

永仁大嘗會（夫木廿三）　前中納言俊光

滋賀の海やいそ山おろししつかにて波路のとかにかよふ舟人

永仁大嘗會（夫木廿五）　前中納言俊光卿

しかの浦やみつきをはこふのほり舟まかちしけぬき月にてく也

永仁大嘗會（夫木三十一）　前中納言俊光卿

さなへとるたてのひまなみ五月雨のふるも時しるあさはらの里

永仁大嘗會（田中村近江同）　俊光卿

すへらきのちいほの秋のはしめには田中のいねのわさほをちつく　（立入）

（稲舂歌歟）うつろはてたてりの村の白菊はさていく秋の露霜かへん

永仁大嘗會（夫木三十四）　前中納言俊光卿

あまてらす日かけのたすきかけまくもかしこくまもれやそのもろ神　（頭注云）もろ神名所歟已に上に見ゆ

もろともにちよをならせるためしかな鶴のきやとる高松の山　俊光（大嘗會歌めきたり）

永仁大嘗會（夫木三）　俊光朝臣

菅の根のなかみね山のさくら花かさなる雲の末そは

るけき

後一條院悠紀兼仲主基隆敎皇年代略記云正安三年四月廿七日大嘗會國郡卜定十一月廿日（乙卯）大嘗會（近江備中）云々（頭注云）隆博は隆敎にかはりてよまれたることもあるにや

正安三年悠紀風俗神樂歌三神山新後撰賀　前中納言兼仲

榊とるみかみの山にゆふかけていのるひつきの猶やさかへん

正安大嘗會夫木三十一　兼仲卿

いつくさのあひみたれたるたなつ物池田の里に雲をなしつゝ

正安大嘗會夫木三　兼仲卿

高宮の宮人いかにかさすらんまつさく梅の花を尋て

正安大嘗會夫木廿　大藏卿隆博

陰しけき玉のを山の玉椿八千代のかすは君か爲かも

正安大嘗會夫木廿二　兼仲卿

すへらきをいのる祈りのかひありてちゝの松原こけそむしける

ちよふへきねのひの小松ひきうへて君をしいはふ野の宮の原

正安大嘗會所々名を夫木廿二　大藏卿隆敎

綠なる同し二葉をひきそへて小松か原にわかなをそつむ（頭注云）上に正安すき方玉緒由て藏卿隆博

正安大嘗會夫木廿二　兼仲卿

ひさかたののとけき空をけさみれはかはたの社はかすみきにけり（頭注云）神名式近江國河田神社

正安大嘗會新千造備中夫木廿三　大藏卿隆敎

はしめてや千年の影をうつすらんにひ田の池の春の青柳

正安大嘗會新後保川夫夫木廿四（頭注云）季云遷保は近江野洲郡歟　兼仲卿

もろ人もよはひをのへてむすふ也にほの河瀨の菊の下露（頭注云）季云下露は下水歟

正安大嘗會長峯川備中夫木廿四　大藏卿隆敎

彥星の契の末のなから川あふせはいつの秋も絕せし

正安大嘗會夫木廿五　兼仲卿

君がためやちよの數をためしにてからさきの濱に千鳥しはなく

稻春歌歟 正安大嘗會夫木三十一　兼仲卿

君か代はやすのこほりのみつきものゆにはのいなほ

つきそはしむる

大藏卿隆教 同

末遠き春のむかへのみつき物かすくはこふにまの里人

時にあふ民の心もやすらけき御代のはしめの豊岡のさと

正安大嘗會 大木三十二　兼仲卿

しらつるは千世ものとかにかた岡の里を所とむれつつそゐる

川邊里 備中國　大藏卿隆博

白妙の浪もしつけき色見へてかはへの里にさけるうの花

正安大嘗會 大木三十一　兼仲卿

雨露もめくみあまねき時にあひて長田の里に早苗とる也

同 野山里 備中 同　大藏卿隆教

あかすこそ秋の野山の里人はくもりなきよの月をみるらめ

正安大嘗會 同　兼仲卿

ふるいちの名にあらはるゝ里なれはひさしくかゝる池の藤浪 (頭注云）和名抄近江滋賀郡古市（布留知）

正安大嘗會 大木三十一　大藏卿隆博

うたふらし世をゝさまれといはくらの村のもろ人諸聲にして

正安大嘗會 同　兼仲卿

色々の木々のもみちを見わたせはたれおりかくるにしきへの里 (頭注云）和名滋賀郡錦部（留之古利）淺井郡有同名

正安大嘗會　大藏卿隆教

備中 八重村にさける山吹いくとせかあかぬにほひの色をかさねん

正安大嘗會 備中　大藏卿隆教

色ことにそむるもみちのきしの村しくれけりとは今そ知らるゝ

花園院 悠紀俊光主基　餘鏡云花園院延慶二年十一月御禊におなし廿四日大嘗會云々皇年代略記云延慶二年四月廿八日大嘗會國郡卜定十一月廿四日(癸卯)大嘗會(近江丹波)云々

延慶二年大嘗會悠紀方稲舂歌近江國暗部里をよめる 玉葉賀　前に永仁大嘗會俊光卿の歌あり此歌作者なけれとも同俊光卿なり

いにしへに今をくらふの里人はよゝにこへたるみしねおそつく (頭注云）和名近江國甲賀郡倉歴

延慶二年新院御時大嘗會悠紀方神樂歌石戸山をよめる續千載神祇　前大納言俊光

久方の天の岩戸の山のはにとてやみはれていつる月かな

後醍醐天皇悠紀俊光主基（十一乎）月廿七日大嘗會云々　益鏡云後醍醐天皇文保二年十年四月廿三日大嘗會國郡卜定十一月廿三日（己卯）大嘗會（近江備中）云々

文保二年大嘗會悠紀方辰日の樂破近江國益原郷續後拾遺賀　前大納言俊光

君か代は千年五百年かさねてもいやさかゆへき益原の里

文保二年大嘗會悠紀方巳日參入音聲近江國新居郷新千載賀　前大納言俊光

いにしへにやゝたちまさる御たからの新居のさとはにきはひにけり（頭注云）已上益鏡

光嚴院皇年代略記云元弘二年四月廿八日大嘗會國郡卜定十一月十三日（己卯）大嘗會（近江丹波）云々大嘗會歌無所見

光明院悠紀隆教主基同人皇年代略記云曆應元年四月廿八日大嘗會國郡卜定十一月十九日（己卯）大嘗會（近江備中）云云

曆應元年大嘗會悠紀方神樂歌近江國鏡山風雅賀　正二位隆敎

岩戸あけしやたの鏡の山かつらかけてうつしきあきらけきよは（頭注云）顯蒼生神代紀（うつくしきあをひとくさ）

曆應元年大嘗會主基方稻春歌新續古今賀（頭注云）悠紀主基歌人同人　正二位隆敎

萬代のためしにそつく田上や秋のくつほの長ひこのいね

崇光院續神皇正統記奥書云文明三年四月尙書都事小槻宿禰在判云々與九十九代崇光院云々抑も今度打つゞき天下擾亂によりて御禊も俄に停止せられ大嘗會も被ㇾ行ぬ事ころ帝闕の初例無例に侍れ云々　皇年代記云觀應元年四月廿九日大嘗會國郡卜定同十月廿二日御禊治定之處天下擾亂仍不被行之大嘗會遂以無沙汰云々

後光嚴院悠紀　主基　皇年代畧記云文和三年八月廿七日大嘗會國郡卜定十一月十六日（癸卯）大嘗會（近江丹波）云々

今上御時大嘗會御屛風に新拾遺賀（頭注云）ゆきすき作者不分明　權中納言時光

時をへてちたの村人いくちたひとれともつきぬ早苗成らん

後圓融院悠紀儀同三司主基忠光皇年代略記云永和元年四月廿六日大嘗會國郡卜定十一月廿三日大嘗會（近江備中）云々

永和元年大嘗會悠紀方辰日退出音聲千々松原新後拾遺慶賀　儀同三司

君か代はちきるも久しもゝとせをとかへりふへきさち

ちの松原

永和元年大嘗會主基方屛風備中國松山（新續古今賀）

權大納言忠光

十かへりの花さきぬらし松山の梢を高みつもる白雪

玉村（近江夫木三十）　藤義方（資忠イ）

うつろはて庭おもしろき初霜におなし色なる玉村の菊

（頭注云、義方何の御代の作にや、夫木大嘗會めきたり）

家集（長田丹波國）

しつかなる長田の村にすむ人のかりつむいねのはかりなき哉

後小松院（皇年代略記云永德三年月日國郡卜定同十一月十六日（乙卯）大嘗會（近江丹波）云々）

稱光院（皇年代略記云應永廿二年四月廿八日大嘗會國郡卜定十一月廿一日（乙卯）大嘗會（近江備中）云々）

後花園院（皇年代略記云永享二年四月廿三日大嘗會國郡卜定十一月十八日（乙卯）大嘗會（近江丹波）云々）

後土御門院（皇年代略記云文正元年月日大嘗會國郡卜定十二月十八日（乙卯）大嘗會（近江丹波）云々）

今按後圓融院以後大嘗會和歌無所見矣雖然後花園院永享十年奏新續古今集云々因茲止焉　（頭注云）皇記云十二月大嘗會上古以來初例歟然觸穢無力之上京中已及兵亂令延引者雖被行仿無力被遂行之云々

萬葉緯卷第六

日本後記

桓武天皇延曆十四年春正月庚午朔乙酉宴侍臣奏踏歌曰（頭注曰）續列仙傳云藍采和唐末時有道士襴衫綠衣黑木腰帶一足靴一足跣夏服絮衫冬臥冰雪出氣如蒸自謂藍采和歌曰踏々歌藍采和世界能幾何紅顏一春樹流年一擲梭古人混々去不返今人紛々來更多朝騎鸞鳳到碧落暮見桑田生白波長景明輝在空際金銀宮闕高嵯峨與長繩拖錢以行錢散不收後至濠梁飛升遺下靴帶襴衫濠州今有望仙樓相傳采和登仙時人聚此樓望之　△李白贈汪倫詩李白乘舟將欲行忽聞岸上踏歌聲　事文類聚第七先天初上御安福門觀燈令朝士能之者爲踏歌聲調入雲

伊呂波字類抄云踏歌本朝事始云天武皇三年正月朔朝大極殿詔男女無別闇夜踏歌（長輪曆云）正月十五日踏歌意何當除時來之凶邪祈年中之吉故從唐五帝之時起也顓頊氏治天下之時也女踏歌聖武天皇天平十四年正月十六日天皇御大安殿宴群臣酒酣奏五節田舞訖更令少年童女踏歌云々（天武三年踏歌不載于國史）今按持統天皇七年春正月辛卯朔丙午是日漢人等奏踏歌釋日本紀云私記云今俗日阿良禮走師說此歌曲之終必重稱萬年阿良禮今故日萬歲樂是古語之遺也　年中行事秘抄云仁和五年正月十四日踏歌記云議者多稱踏歌者新年之祝詞累代之遺美也歌頌以延寶祚言吹以祈豐年豈啻縱樂遊於管絃惜時節於風景而已也宜依承和事實以作每歲長歡歌又云古詩云　天上姮娥遙解意偏教月向踏歌明注曰月夜者美人踏歌張蕩云々江談抄云佳辰令月歡無極萬歲千秋樂未央謝偃作雜言詩此詩踏歌詩也古塔瓦銘有萬歲千秋樂未央字今按作文見唐祠列三寶感通錄上作

錄云仁壽二年正月後分二布舍利五十三列一至二四月八日一同年時下
其列如レ左云々 其中梨列塔地下瓦文千秋樂云々件錄唐麟德元年終
南山釋氏所レ撰也云々因二此
等文一蹤跡起源見ノ唐初明矣

山城顯樂舊來傳　帝宅新成最可恰

郊野通平千里望　山河㣲美四周連

新京樂　平安樂

士萬年春　樂類史

沖襟乃眷八方中　不日爰開億載宮（頭注云）不日孟子

壯麗裁規傳不朽　平安作號驗無窮

新年樂　平安樂

士萬年春

新年正月北辰來　滿宇韶光幾處開 哉乎

麗質佳人伴春色　分行連袂儛皇垓

新年樂　平安樂

士萬年春

昇高詠澤洽歡情　中外含和滿頌聲

今日新京太平樂　年年長奉我皇庭

新京樂　平安樂

士萬年春

賜二五位已上物一有差

同紀云延暦十二年正月庚辰朔甲午遣二大納言藤原ノ
小黒麻呂左大辨紀古佐美等一相二山背國葛野郡宇太ノ日
村之地一爲レ遷レ都也同十三年冬十月辛酉朔辛酉車
駕遷二于新京一丁卯此日遷都詔曰云々葛野乃大宮地
者山川毛麗久四方國乃百姓乃參出來事之便之旦云
云

朝野群載卷第二十一 本朝書籍目錄云朝野僉載（朝野群載同事歟三十卷記二作文書札等体一三善爲康撰

踏歌々曲 男女　樂章

踏歌章曲 男乎 乎 二首

萬春樂萬春樂萬春樂（頭注曰）蹈二河海抄ニ附二假名一

我皇延祚億千齡 萬春 樂　元正慶序年光麗 萬春 樂

延暦休期帝化昌 萬春 樂　百辟陪筵花幄內 天人 盛呼

千般作樂紫宸場 萬春 樂　久ィ
人霑湛露歸依德 萬春 樂（頭注云）詩小雅注湛露天子燕二諸侯一也

我皇延祚億千齡 萬春 樂　願以佳辰常樂事 天人 盛呼

日暖春天御載陽 萬春 樂

千千億歲奉明王 萬春 樂

今按源氏物語（初音）河海抄曰踏歌章曲ニ書云――踏歌に我家此
殿萬春樂なにそり（綺會利）此四曲たうさふ謂呂也 冬氏の秘説也

又至ㇾ未ㇾ有ニ事吹々々新之常樂（此詞難解、淡海二松（應作三船）撰ト云
十三字ニ三船者續日本紀桓武天皇天應元年六月石上宅嗣傳云白ニ
寶字ノ後宅嗣及淡海眞人三船爲ニ文人之首ニ釋日
本紀云神武等ノ名者淡海眞人御船奉ㇾ勅撰也

女踏歌章曲七首

明明聖主億千齡（万イ）千春樂　無事無爲准（唯乎）賞豫千春樂

凝流（旒乎）端拱任群賢千春樂（爾イ置イ）　網（綱イ）疎刑措還千古天人感呼（頭注云）刑措後漢文帝紀

治定功成。太平年千春樂

明明聖主（荒乎）億千齡千春樂　深仁潜及三泉下千春樂

鴻（イ无）德遐充六合中千春樂　悅（悦イ）以紀（紏乎）民民悅服天人感呼

○○○○○○○千春樂

明明聖主億千齡千春樂　上月韶光早先春千春樂（頭註云）年府云流蘇帳

盤綸綉之毬五色錯爲ㇾ之同心而下垂者也（海北粹事）

階前細草綠初新千春樂　南山雪盡春峯遠天人感呼

北闕煙生瑞氣淳千春樂

明明聖主億千齡千春樂　君王曉卷流蘇（揚乎）帳千春樂

春日芳菲遣興催千春樂　曉光偏著靑樓柳天人感呼

寒色金舞玉砌梅千春樂　自ㇾ此以下爲ㇾ破

明明聖主億千齡千春樂　宮女春眠常嬾起千春樂

被催中使繪粧成千春樂　雲鬟尚恨無新樣天人感呼

霧鬢（殿イ）還嫌色不輕聖主億千齡

明明聖主億千齡千春樂　春歌清響傳金屋千春樂

雙踏佳聲繞玉堂千春樂　借問曲中何憶有天人感呼

仙齡實祚與天長聖主億千齡

早年愛光花（華イ）千春樂　春遊不知厭

暮景落朱顏　猶惜韶光短

徘徊不欲還聖主億千齡以ㇾ此爲ㇾ急

東舞歌章（頭注云）日本紀仁賢天皇卷室壽詞云殊儛釋日本紀云
養老私記云舞狀者作ㇾ立作ㇾ居而舞今東舞是也　持統天
皇二年冬十一月乙卯朔戊午皇太子率ニ公卿百寮人等與ニ諸蕃賓客ニ
適ニ殯宮ニ而慟哭焉於是奉ニ奠奉ニ楯節儛ニ諸臣各擧ニ己先祖等所仕狀
遞進誄焉釋日本紀云楯節儛私紀云今
之吉士舞也手以ㇾ楯爲ニ節度ニ故名云々

一歌　於百　於百

波禮奈百一天於止々百一乃百一乃呂一奈　于太百一　止

止乃一反乍一奈百一佐加一（相模）無一乃禰百一（峯）江　於々

於々。々イ（頭註曰）今案此歌難ニ註解ニはしなは歌の曲節歟てなさゝの
へ曰なは手を調べるにて舞の姿を調ぶる歟口さるさ通ず于太
さゝのへむなは歌調べに歟奈は二つさもに詞なるべし六緒ここ
むつのよりめこさにぞかはにほふ引なさめれか袖やふれぬる今
案むつの緒は和琴なり七絃は琴の類也蕭宗作て開元中に進
む形ち陸咸に同じさいへり八絃は未ㇾ聞ニ其說ニ皆筝にあらず

二歌

江百一和加吾世古一背子加百一介佐今朝乃一古言百一止天

波出百一安波禮何怜奈々川於乃一七絃夜川於一八絃乃一古止

琴於百一之一返調太留在百一古止於一奈一イ無奈於百一加

加介夜安末一乃止々呂自加津乃百一於介夜　於々々

百々百々

夜宇止波萬有波濱二一須留加駿河奈留在宇止波萬仁

宇千與須る打縁十見は波一奈々久佐七種乃一伊毛妹

（頭註曰）今按七種妹は七人の女さいはむが如し　古止古曾與之一事社善　古止古曾與

之一奈々久佐乃伊毛八一古止古曾與之一

あへるとき逢時伊佐爭助詞之禰乍夜將レ寢奈々久佐乃七種

伊毛妹古止古曾よしあなや須良介穴安　あなや須良夜

須良夜須良あ奈夜須良介以下三字无　（頭注曰）萬葉十九ものゝふのやそのいもらかくみまかふ寺ゐの上のかたかごの花

今按有度濱神女天降見二于駿河國風土記有度郡條下一宇ちよするなみは萬葉集第三長歌打縁駿河能國同第廿宇知江須流須流河乃禰夏波云々打縁駿河如レ言下打二縁砂一而成レ洲國上風土記載二駿河仙河珠流河駿河尖㠊等和訓一無下打二縁於國一之來由上（頭註云）

鉢源抄第五云雜日傳丙辰記云人王廿八代安閑天皇御宇敎到六年丙辰歲駿河國宇戶濱に天人あま下りて歌舞したまひければ周由上

琰が腰たをやかにして海岸の春柳におなしく廻雪の袂かろくかりて紅浦のたの風にひるかへりけるを或翁いさこをほりて中にかくれ居て見傳へたりと申せり今の東遊とて公家にも諸社の行幸には必ず是を用らる神明ここに御納受あるゆえなり其翁は道守氏とて今の世までも侍る

八雲御抄第二云東遊等歌又被レ召事歌人一人也近は儒者多獻レ之是非二儒者役一自然事也

加茂臨時祭敏行　八幡臨時祭貫之

平野女使能宣　松尾行幸兼際

日吉行幸實政　祇園行幸經衡

又船岡今宮崇尊之時長能詠レ之云々　今按東舞（或號二駿河舞一）東遊求子

「頭註云鉢源抄第五云求子駿河舞をは諸舞と云求子ばかりなば片舞と云歌も則諸舞の時は始より歌之片舞の時は第三の句より歌之　花鳥餘情云東遊譜云先一二歌次駿河舞次求子次加太於呂之調子高麗双調也云々」　皆同曲歟後拾遺能因法師うと濱に天の羽衣とよまれたる顯昭注（袖中廿）にむかし駿河の國のうと濱に神女天くだりてまひしを野叟のまれびつたへてまふを今はするが舞とてあづまあそびにするは是也云々此駿河舞といはれたるは朝野群載歌の事なるを夫を摸して能因の東遊によまれたる歌に注せられたるは顯昭のおもひたがへられけるにやされば東舞は朝廷御遊の時するかの國の野叟のうたへる風俗をさりて舞とし給へるなり其長篇をさりて短歌となして神前にて舞かなづるを東遊といへるなるべし東は東舞に相模の歌又駿河なる有度濱などうたへばなり遊は神樂歌の類を古今集に神あそびの歌といへばなるべし又求子といへるは源氏末摘花奧入云櫻の花の色の

こさくくみかさ山の乙女をばすてゝ求子歌也春日社にてはみかさの山とうたふこさ社にては各其所をうたふ也云々此歌全篇未考といへど春日社へ勅使など立らるゝ時之東遊の歌なるべし扨乙女をすてゝとうたへばなさもさかよはして求子とさいへるにや此歌も東舞を摸して舞へるにやされば私の宴遊にて東遊をうたひ又私事にてよめるを皆求子さいへるにや千早振平野の山の歌八雲御抄に東遊の歌さし注へるに源氏（若菜下）河海抄にに求子さいひ又住吉の松か根あらふの歌明月記に東遊の詠さかゝれたるに拾遺愚草には住吉に求子の歌よみてたてまつるさあり是等の歌にてしるべし

（頭注曰）袖中抄第十三俊頼もさめつかおまへにかゝるしき舟のきたけになれやよる方もなし顯昭云求塚の事大和物語云云々萬葉第九過葦屋處女墓時歌云々なさめなもさめさ云歟なさめさおなしひびきなり云々

冬の加茂のまつりの歌

藤原敏行朝臣

千早振加茂の也之呂乃姬小松與呂川代不止毛色波加波良之 古今集 巻軸

年中行事秘抄云寛平元年十月廿四日壬午御記云未登祚之時鴨神託人曰自餘之神一年得二度之祭只予一度而已其自弘仁始得書女非有宮供奉不致昔怨只極宜實然秋時欲得此幣事不雖也但若佛德不堪其勢云々仍自去年調備馬一匹令鮑亦習東舞近衛府官人中堪歌曲者十五人爲陪從内藏寮請幣依穢停止令藤原滋實於彼所遣被所云々十一月廿一日己酉刻走馬幷舞人等奉向鴨社頭時平爲使云々今按此時敏行詠乎可尋書東舞者則東遊也近世加茂祭被再興亦有東遊間俳人獻此歌云々

（頭注曰）扶桑畧記云醍醐天皇昌泰二年十一月十九日己酉奉遣臨時祭使於賀茂神社先朝有此使仍當今相傳從今年被行之

今按此時敏行詠歟可尋

朱雀院御時石清水の臨時祭をはじめておこなはせ給ふとてめされける歌

紀貫之

松毛於比生末多毛苔生石清水行末惠止平久（末遠）川加倍末川良牟（任奉） 續古今 神祇私 保季

貫之家集此歌を出て次に又石清水松かげさをくかげ見えてたゆくくもあらの萬代のかけ袋草子に此二首を出して云能宣集冷泉院御時始て石清水臨時祭行給に可唱之歌奉之傳らに君が代にみなそこすめる石清水ながれを千代につかへまつらむ此時更又被改歟不審云々年中行事秘抄云石清水臨時祭初事天慶五年四月廿七日庚辰調神寶舞人十人歌人十人被奉遣石清水云頭注云扶桑略記云天慶五年四月廿七日奉幣于住八幡宮者推幣石清水宮依賽東西兵賊徒討平之由也）依東西國賊亂時御祈也云々此事去年十一月欲被遂果之間有內裏穢于今延引有宣命去年分度者御封等被奉寄之由截之使播磨權守從四位上源光朝也天慶四年十一月五日辛酉依平將門藤原純友追討得報賽可自今年又始自今年石清水可被奉歌舞人等以式乾門內西殿爲樂所自今日行之所司每日著饌舞人十人左右衛門左右兵衛左右馬兵庫等判官也歌人十人堪能六位等也歌云 新たる八幡の宮の石清水ゆくすゑとほくつかへまつらむ云々（江次第同之此歌下有貫之詠と全同書禁秘與八幡東遊章曲之替歟朝野群載（第十二）宣命類云石清水臨時祭天皇加詔旨止掛畏支石清水爾御坐世留八幡大菩薩乃廣前云々去天慶元與利始天奉出給布宇都乃御幣乎差使天令捧持天東遊走馬乎調備天奉出賜布云々（頭注曰扶桑略記云圓融院天祿二年三月八日癸卯始有石清水臨時祭使右近衛中將源朝臣舞人十人近衛中將已下六位等也倍從十二人諸卿參御前勸盃獻巡各淵醉盡御宿願賽也）

はじめて平野祭に男使たてし時うたふべき歌よませ

しに　　　大中臣能宣

千早振平野乃松乃枝之介美千代毛八千代毛色波加波良之 拾遺集賀私

扶桑略記云花山院寛和元年四月十日甲午平野祭左大臣参ニ仕座一始レ自ニ今年一被レ奉ニ舞人走馬一左衛門權佐藤原朝臣惟成爲レ使有ニ宣命一江次第(第六)平野臨時祭使儀宣命云天皇我詔旨止掛畏支平野乃大神乃廣前爾申云々　宇都乃御幣遠官位姓名遠差使天命ニ捧持一天東遊走馬遠調備天奉レ出給(布良久遠)云々(朝野群載同之)江次第平野祭條下云先令木次久度次古關次相殿比賣其四前立ニ舞殿一卜部二人執ニ賢木一前行至ニ社門外一左右相分跪執ニ食薦一入敷ニ神殿前一膳部入而立ニ机廻一炊女四人各執レ薦敷ニ舞殿一膳部十六人立机云々内侍参進可レ供レ之云々又云承平四年十一月十二日内侍有レ障不レ参以ニ女使一爲ニ代官一命婦敦子云々下臈男使女吏のこと江次第等に見えたり(頭註曰)崇神天皇六年以天照太神託豊鍬入姫命是齋宮初也淸和天皇天長八年替賀茂齋内親王被進于子女王自是先有齋院歟紀是初見同貞觀十五年六月春日太神被進齋女今按女使准此等歟

一條院御時はじめて松尾の行幸侍けるにうたふへき歌つかうまつりけるに　　　源兼澄 際八雲

千早振松乃尾山乃影見禮婆今日曾千歳乃初奈利介留 後拾遺集私

扶桑略記云一條院寛弘元年閏九月十三日甲子有ニ行幸點地一依レ可レ行ニ幸松尾平野北野一也同十月十四日甲午天皇行ニ幸松尾社一(私云先レ此或死亡甚多風損間有而又書ニ大有レ年二度)　同七年閏二月九日己未於ニ八省院一奉ニ幣廿一社一依ニ祈年穀一也又被レ申明年當ニ三合厄一的後年有ニ閏月一有ニ御愼一由神祇官陰陽寮所レ申也仍伊石賀松平稻春原住吉北十二社別被レ副ニ進神寳東遊一云々依ニ此文一錄

澄詠歌與ニ十二社東遊一別乎可レ尋

後三條院御時はじめて日吉社に行幸侍けるに東遊にうたふへき歌おほせごとにてよみ侍りける

(頭註云)續世繼つかさ召このつきの御門後三條院におはしましゝ大貳實政は春宮の御時の學士にて侍りし時なくおはしませばかまへてまいりよらぬこゝにならんとおもひけるにさすがいたはしくて甲斐守に侍りければかの國よりのぼりてまいるまじき心がまへしけるにくだりけるに餞せさせたまふさて州民縦發ニ甘棠詠一莫レ忘多年風月遊とつくらせたまへりけるさなむえわすれまいらせざりける云々

　　　大貳實政 日野家也

安支良介支日吉乃御神君加太女山乃加比有留萬代也將レ經 同私

扶桑略記云後三條院延久三年十月廿九日庚辰行ニ幸日吉一同四年三月廿六日丙午行ニ幸稻荷祇園一此二社并日吉行幸此時始レ之云々

榮花物語(松しつえ)内(後三條)にはさし比の御願さて祇園ひえなどに行幸あり云々

おなじ御時祇園に行幸侍けるに東遊にうたふべき歌めし侍ければよめる　　　藤原經衡

千早振神乃薗奈留姫小松萬代不倍支波之女奈里介利 同私

世中さはがしく侍ける時さとの刀禰宣旨にてまつ

りつかうまつるべき歌ふたつなむいるべきといひ
ければよみ侍ける　藤原長能
白妙乃止與幣乎止利毛知天以波比曾初留牟良左支乃
野爾私
今與利波安良不留心末之萬須名波奈乃美也古爾社左
太女川　この歌或人云世中さはがしう侍ければ船岡
の北に今宮といふ神をいはひておほやけも神馬奉
りたまふとなむいひつたへたる　後拾遺神祇　以上以二八雲御抄目錄一次レ之

扶桑略記云一條院正暦五年六月廿七日爲二疫神一修二御靈會一木工寮修理職造二神輿二基一安二置北野船岡山窟一令レ行二仁王經之講説一城中之人招二伶人一奏二音樂一都人士女齎二持幣帛一不レ知二幾千萬人一禮了送二難波海一此非二朝議一起レ自二巷說一長保三年五月九日庚辰於二紫野一祭二疫神一號二御靈會一依二天下疫疾一也是日以前神殿三字瑞垣等木工寮修理職所レ造也又御輿内匠寮造レ之京中上下多以集會此社號二之今宮一寛弘五年五月九日戊辰紫野御靈會諸司諸衛調二神供東遊走馬十列等一參向云々（頭註云）百練抄云三條院長和元年二月八日設樂神自二鎭西一上洛今日着二舟岳紫野一今案設樂今したらとよむ姓氏にあり樋口氏又案しらきさとよむべき歟

今宮夜須禮章曲

百練抄云近衞院久壽元年四月近日京中兒女備二風流一調二皷笛一參二紫野社一世號二之夜須禮一有　勅禁止云々今按此章曲者世以レ傳二寂蓮法師之眞蹟一本（者乎上）所二書寫一也本書者雖レ書二假名一今爲二片假名一序段蠧蝕鼠殘待二後知者一耳

○はなやさ　や乎　いはなや乎（頭註云）やすらは
○○○○きたる○　やすらや○○○　安穩ノ意乎見二于
東舞章曲一

はなさやきた乎
○○○○○るや　やすらいはなや
はなやさきたるや　やすらいはなや

急

やとみくさのはなや　やすらいはなや
やとみをせばなまへ　やすらい花や
やとみをせばみくらの山に　同　（頭註曰）千載雑下釣名ま○きのやたて源
俊頼朝臣みくら山眞木の屋たてゝすむ民は年をつむさも朽じさぞ（まイ）（たへ）
思　類字みくら山な山城の内さす　今按さみなせはみくらの山に
あまるまで命なこほは千代の千代そへぬこのさのななれのせき
さいはしめて千代ふる神のみよさのませむさいへる二首の歎歟
やあまるまでなまへ　同
やあまるまでいいちをこはゞ同
やちよのちよそへや　同
やこのとのをなまへ　同
やこのとのをなねのせきと同
やいはしめてなまへ　同
やいはしめてちよふる神の同
やみよとのにせむや　同
やさけなへこなへ　やとるまろもやすら
やさけなへこなへ　やひくまろもやすら

返

やさかておたひに　とりたつなり　やたとりたつなり　やてよひにきて　よひにきて　ねなましかば　やとりたゝまじ　やたとりたゝまじ　やいま　ありそはでねなましものを　いまおもいでゝ　あなゝしたらてひし

（頭註云）したら内宮年中行事云志太貫は手を撃事也云々

圓融 天延三年六月十五日丙辰公家自二今年一於二感神院一被レ奉二走馬勅樂東遊一依二去々年皰瘡事一也上卿不レ參參議源惟正卿參入行事右近少將藤原理兼爲レ使左右御馬各五疋左右近衛官人已下供奉東遊歌云

神加代乃八坂乃里止今日與利曾若加千年止計始牟留　左假名は公事根源

走馬音樂毎レ年可レ被レ奉東遊今年計也　年中行事

秘抄扶桑略記云圓融院天延三年六月十五日丙辰初公家自二今年一被レ奉二走馬幷勅樂東遊御幣等感神院一是則去年秋依二瘡皰御禱一有二此事一今被レ賽也是日也太政大臣參二向感神院一公卿上官供奉中宮職奉レ幣同社有二東遊等一使亮從四位下藤原季平

式部大輔資業伊豫守に侍ける時かの國の三嶋明神に東遊してたてまつりけるをよめる

能因法師

有度濱爾天乃羽古呂毛牟加之支天不利介牟袖也介不乃波不利古　後拾遺 神祇私　此歌するが舞にてあつまあそびにするよし顯昭の說上に已にしるせり

建曆元十一月四日住吉經國來談之次當社東遊歌可レ詠進一由同來云付レ之事重示レ之仍詠レ之

住吉社東遊和歌　從三位行侍從藤原朝臣

住吉乃松加根安良不之幾奈三仁以乃留三加計波知與毛加波良之　明月記私　續後拾遺神祇此歌詞書云住吉社にうたふべき求子の歌とて神主經國よませ侍けるに　前中納言定家云々拾遺愚草神祇云住吉幷依羅社に求子の歌よみてたてまつるべきよし祠宮申しかばたてまつりしさて右の歌を書て次

君加代波與佐美乃杜乃止吉止波仁松止杉止也知多比左加江牟　此歌事上已記畢

加茂の社に午日うたひ侍ける歌

也萬止加毛海介安良之乃爾之不可波以川禮乃浦爾御船川奈加牟　新古今 神祇私　（頭註云）風雅神祇加茂遠久々方のあまの岩舟濟よせし神代の浦や今のみ生野や　大木

三十四神祇歌中加茂氏人　神山に天の岩舟濟よせてつなきさめしもわか君のため　天磐舟の事神代紀萬葉さ兩說也此等の歌亦異也賀茂緣起などに見えたる事にや今神代の浦さいへるは處も上賀茂にあり猶上鴨氏人岡本權大夫䕫深の說侍れどもこゝにもらし侍る

千種云これは悉皆渡の事をよめり順風に舟をいだすごさくに聊もつなぐ所もなくはらへて清淨なるよしなり

大比叡也小比叡乃杣爾宮木比支以川禮乃禰宜加祝爾

女郞　此歌は日吉の祭にささ立て午日の御うらの歌となむ昔よりいひつたへたる　續後拾遺私

内宮年中行事歌

今所書寫兼某河青手師禰宜荒木田官恩塞所寫置也依茲見誤讀加傍字又以皇太神宮年中行事所載和歌令校讎畢倭姫世記云修從宴樂舞歌音乃臣御大小長短久國保佐奉云々　註十二律在焉年中行事記具也云々今　按二十二詠鳥名子十二首歟年中行事記亦古樂記而今并所引書歟

（頭註曰）伊勢名所集蒔繪松二見郷にあり又蒔繪明神とて江村の山にありいかなる神にかおぼつかなし是内宮の末社のうたび物にあり云々蒔繪松と云歌此内に見えず

二月一日鐵山伊賀利神事

阿奈太乃志穴貫（頭註曰）馬樂穴貫　催氣不今日乃太乃志佐伊仁志戸

母往古加久也如此阿利氣牟氣不乃太乃志佐

六月十五日荒蠣御贄神事

於海路在歌三首一歌云

阿者良岐矢嶋者七嶋止萬宇世止毛毛奈志加天天波　萬葉

十四ひろつき合而　八嶋奈利氣里（頭註云）倭姫世記云倭姫命御船乘給御膳御贄處定幸行島國國崎たびれがふ云々

爾朝御饌夕御饌止詔而湯貴潜女等定給天還坐時神堺定給支戸島志波崎佐加太岐島定給而伊波戸居給而朝御氣夕御氣處定奉○爾海鹽相和而淡在（介留）故淡海浦止號支伊波戸居島名戸嶋號彼刺處名崇前岐號從其以西之海中爾在七箇島從其以南鹽淡耳支其島乎淡頁支之島號支其鹽淡滿止號名乎伊須滿號支○還幸行其御船泊留處乎志長原止號支云[illegible]云右世記[illegible]士本にに点あり今此本に略す直に世記にて可見

次歌二首

和加矢古久　此句未考　伊乃千乃保津々乃命　帆　瀬美乃宇戸仁上壽乎千歲止云花乃佐伊太留　有　開而　（頭註云）和加矢は所の名歟其處を書出る舟也　伊乃千一本作伊千此歌難解保津々は帆稲也後頼歟にこそつしめ澁心せよとよまれたり瀨美は帆柱の上にてつなぐほす穴也　千歲止云

和加君乃於波志萬佐牟古止者御座事左左禮石乃伊波保慶止奈利天古氣乃牟須萬天　苔生

同

安婆羅氣耶嶋波七嶋止由世止毛氣奈志賀豆天者八嶋奈利氣里惠伊耶惠伊耶　（頭註云）無枝名寄阿波羅氣島伊勢神島の向ひにちひさき島々七つあり是をあはらけさいふその外に草木も生ぬいはほありけなしさいへる是なりあはらけの島に七島その中にけなしくはへて八島なりけり

我君乃御濱出乃御座船乃蟬乃上爾千代止云鳥（頭註云）千代止云　鳥鶴歟　千鳥歟

舞會遊不惠伊耶惠伊耶

我君乃命乎乞婆左左禮石乃巖止成天苔乃生萬天惠伊耶惠伊耶

我君乃御倉之山爾鹽乃滿如富古曾入座惠伊耶惠伊

耶

十五日御占神事　奉レ下レ神其御歌

阿波利矢遊波須止萬宇佐奴不申阿佐久良仁朝倉天津神國津神於利萬志萬世下座　（頭註曰）阿波利矢所名歟遊は從也萬葉多出　種季云よりの切イに

四折返にてゆさなりたる也あはりやゆ一句はすさまうさぬ一句ぬあにりや一句ゆはすさまうさぬ一句　以上二句句讀并義未レ通下二首同安佐久良朝熊山歟

阿波里矢遊波須度萬宇佐奴安佐久良仁奈留伊賀津千

毛鳴雷於里萬志萬世

阿波利矢遊波須度萬宇佐奴安佐久良仁上津大江下津大江毛摩伊利参太萬戸

十六日櫻宮神事　玉串大內八舞　大和舞也

作御歌

美也比止乃人宮佐世留頭所挿佐加支乎榊和禮香左志天刺與呂津與代萬萬天仁加奈天奏阿曾婆牟遊將

十七日神事　鳥名子歌

志太良（頭注云）年中行事云志太良は手を擊事也宇天止打天天・加父乃太戸波日

宇知波牟戸利打侍奈良比習波牟戸里

阿古女乃曾天袖也不禮度天波牟倍里於比帶仁也世牟將レ爲多須支手繦仁也世牟伊左率世牟將レ爲伊左世牟多加乃鷹乎仁緖世牟（頭注云擧あしを和名抄韋鞲へなしかはあしを日本紀）

又云

志太良波志利宇知大津乃濱戸行波安不毛乃加波女多知古加牟左（頭注云）あふものかはめたちこかむさは樋口氏曰逢者買女起濟无牽歟

又云

志太良波與彌米波也早加波婆買左氣久美安氣擧酒酌天毛禮盛止美乃頓津加比使曾

伊氣保良禮與掘池所波知須蓮波和禮我宇惠牟殖將波知須賀宇戸上仁奈女久良倉列多天良禮與建所　（頭注云）宇戸はほとり也奈女は行にて行列也常陸國行方郡　長秋詠藻仁安元年大嘗會辰日樂急眞木村君が代はちえのなみくらひまもなくつくりかされよまきの村人拾遺神樂高島の水尾の中山楯たてゝつくり重れよ千世のなみくら讀人不知

又云

伊佐率太知奈牟立將去乎志鶯乃加毛止利鳧美津萬左良牟婆水增止美富曾萬左良牟將增　（頭注云）鶯の鳧鳥は二の鳥の名にあらず鶯をやがて鳧さ云也催馬樂にも此詞あり

大和舞　宮司舞時歌（年中行事云齋内親王御参宮之間大第事云々）

美奈豆支乃六月於保與曾古呂毛衣比佐津支天膝突與呂豆與萬天仁加奈天阿曾婆牟（頭注云）於保與曾衣古語拾遺歌詞也

神主舞時

美也比止乃佐世留佐加支乎賢木和禮佐志天與呂豆與萬天仁加奈天安曾婆牟

祭使舞時

大宮乃戸影仁集神乃鳥曾禮其乎美天曾良空乃阿良多加荒膽止比比鵜加介刎留女利（頭注云）旋頭歌也大宮は日神御正殿也倭姫世記云隨二大神之敎一國々所々仁大宮處乎求給倍利云々

歸宮舞時

於保美也乃大宮知支仁於比多留擣風生而有也萬加佐支未考與呂川乎知與仁代千代川加戸萬川良牟奉仕（頭注云）與呂川乎は萬代也乎さ與さ通

鳥名子（さなこ）事の讀　雜歌十二首（頭注云）元々集第七云或書曰人長者猿女君祖天鈿女命也依二高貴尊勅命一負二沖天氣宇一即時は百萬神等集會坐故手持物名二之沖一（古語拾遺）御笛神舊龍王採二天香山金竹一其空節間離二風穴一融二通和氣一抗二安樂聲一奏御歌神本聲曲天兒屋根命末音曲太玉命御琴神金鵄命長自羽命用二天香弓六張一叩レ弦今世號二鳥名子一則金雞長鳴緣也神宮雜事記第二云長暦二年九月云々鳥名子男女十六人青摺衣裝可著云々

第一

阿女天奈留也在也加利加未考奈加奈留也中在和禮我比止乃古人乎佐安禮止毛也然雖有也加利加奈加那留也和禮比止乃古

第二

美知乃戸乃道邊古太知婆奈乎小橋不佐（頭注云）不佐は總也多也萬葉にあまたある詞也乎利毛川波折持多加古奈留讓乎在良牟

第三

止保多不美遠江美奈佐乃也萬山乃志比加衣太乎梢枝不佐乎利毛天波井未考萬呂毛止留（頭注云）萬葉第十四遠江國歌等保都安不美伊奈佐保曾江乃水乎都久思云々倭名抄遠江國引佐郡（イナサ）みさいさ通

第四

伊與與五百代止曾伊不云支美加與波君世知與千代止曾伊不云知與止曾伊不牟良左支紫乃於比袁帶太禮天垂伊佐也率阿曾婆牟通（頭注云）伊與與は五百代也與さ保さ於比乎太禮は心解て歡樂する也

第五

於保美也乃大宮萬戸乃前安良禮須太禮簾安良禮安良禮和加我加與戸通波曾川萬妻毛曾呂布候（頭注云）安良禮須太禮は簾の名歟あられ〳〵は上の詞を返してうたふなるべし

第六

於保美也乃萬倍乃加波乃古止川 如 加波乃奈我佐長 伊乃知命 毛奈我久永 止美富 毛志太末戸爲給

第七

也萬加波仁山川 須牟栖 也乎志乃鴛 米止利鳴 萬之也汝 古乃與仁奈奈太比此夜七度 川萬古比也須留 妻戀 爲哉（頭注云）萬之也は汝やにて呼かけたる也度々鳴を聞心なるべし

第八

也末加波仁太天留所立 久呂女須古女萬佐不久也未考 與支古仁天好籠 乎止利加介天 媒鳥懸而 以佐也安曾婆牟（頭注云）久呂女は西行の哥に見えたり須古女は萬葉第一なつむすごいづれも賤女の惣名なるべし 第十一の哥によれば八九十の三首は千鳥を媒鳥にて捕らんと云心にや

第九

美奈美奈支未考 止利波加里仁曾安留（頭注云）鳥は千鳥にて鳥計と云るにや 安良禮不利霰降 志毛於久與毛霜置夜與止毛宿乎（頭注云）與止毛は宿も歟與さやと通 佐太女須不定

第十

於保加波也奈幾波比呂久葉廣 天多天留所立 於保加波揚奈支與支加古仁天乎止里可介天伊佐也安曾婆牟

（頭注云）大河楊に媒鳥の籠をかけんと也加古の加は衍文乎第八の哥になし俗に籠をかごと云ふ古くはこのみよめり

第十一

波末爾伊天天濱出 安曾不知止里名利遊千鳥 安也之奈支吾君 已萬川加宇戸爾小松之上安見那於加禮曾網莫所置

（頭注云）千鳥か云我は濱に出て、、、安也は我也音通神代紀吾（アガシナキ）君云々

第十二

太知婆奈加毛止耳美知乎不美天加宇婆志也香 和加加與戸婆曾通 川末毛曾呂不（頭注云）萬葉第二三方沙彌橘之蔭履路乃八衢爾物乎曾念妹爾不相而

已上十二首次第如此畢之後あまのおひあまのおひ止三度申す 異本云鳥名子等組ㇾ手廻々後各頭一所聚伏其後起各手合後退出也件職掌人忌火屋殿御琴上退出也 年中行事此間云六月晦日輪越神事家司輪と人形を奉ㇾ持北に向候于時一座近寄人形を取持家司に向三度越六月乃なごしの祓する人は千年のいのち延ぶとぞきく度別申云々 今按奥儀抄云 六月此月まことにあつくしてことに水泉かれつきたるゆゑにみづなし月といふ云々 私云水泉涸盡ぬるは早魃にて別に天災の名なれば 如何詩經陽月をかみなつきとよめり集註に疑ㇾ無ㇾ陽と註せりしかれば陽月に對したる言葉にて是も陰月にて疑ㇾ無ㇾ陰と云へる心にや老陰少陽の月のかはりは子細有べし又水を水底水上の例にて みなとよめば無と云字はみなとよますべき料に添字にて 元は水月とばかりかきけるにや なごしは 同書云とはへなすあらぶる神もなしなへてけふはなごしのはらへなりけり とはへなすと云事日本紀に天照大神の御孫皇孫命を葦原中津國の主とせんとおぼすに かの國に如五月蠅邪神おほかりと云へり（頭注云）今 西國の人稲に蟲のつきてからす

なを祭りて遂るなさば(へごの祭さいふ)たさへば夏のはへのちりみだれたるやうにあしきかみのある也これをはらへなこめむさて六月祓はする也云々 私云萬葉に和の字をなごむさよめばなごしは邪神心はらへやはらぐる心也さいへご今輪越さかけるによればなさわさかよへば今は輪を越る祓さ云心にや

九月十七日神事　　大和舞歌

宮司舞時

奈我豆支乃九月之具禮乃安女爾時雨雨奴禮天古曾也萬乃古乃波波宇良加戸留米戀良米(頭注云)宇眞加戸留は色の變して紅葉するを云歟然らば加を濁るべからず又は色かはるの轉語歟　樋口氏曰うらかへるは今西國詞に草の熟するをうれるさ云夫歟

十二月十七日神事　　大和舞歌

宮司舞時

宇知宇治也萬乃伊須春乃五十鈴波良仁原美知多知天(頭注云)美知多知は與呂豆與末天耳加奈轉奏安倍婆牟遊衆人滿立也

十一月中寅日鎭魂事年中行事秘抄(頭注云)秘抄此文有二省略一今以二全文一載二于茲一

天孫本紀先代舊事本紀云宇摩志麻治命十一月丙子朔庚寅初齋二瑞寶一奉二爲帝后一鎭二祭御魂一祈二請壽祈一其鎭魂之祭自レ此而始矣詔二宇摩志麻治命一曰汝先考饒速日尊自レ天受來天璽瑞寶十種是也以レ此爲レ鎭每レ年仲冬中寅爲レ例有司行事永爲二鎭祭一矣所謂御鎭祭是也凡厥鎭祭之日猨女君等主二其神樂一擧二其言一大謂二一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十一而神樂歌舞尤緣二瑞寶一蓋謂レ斯歟

天神本紀天神御祖詔授二天璽瑞寶十種一所謂瀛都鏡一ツ邊都鏡一八握劒一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖敎詔曰若有二痛處一者令二玆十寶一謂二一二三四五六七八九十一而布瑠部由良由良止布瑠部此如爲レ之者死人反生矣是則所謂布瑠之言本矣所謂御鎭魂祭是其緣也

職員令云神祇官伯七人掌二鎭魂一謂鎭安也謂二人陽氣一曰レ魂魂運也言招二離遊之運魂一鎭二身體之中府一故曰二鎭魂一

鎭魂歌

あちめ一度おゝゝ三度(頭注云)あちめおゝゝ見神樂歌　あめつちに天地ちト通きゆらかすは玲瓏こ乎さゆらかす　かみわかも　かみ神ゆりは　きねにきかう　きゆらならは　あちめ一度おゝゝ三度　いそのかみ石上　ふるやしろの振社　たちもがと太刀欲得(頭注云)萬葉第十六堺部王詠二數種物一歌虎爾乘古屋乎起而靑洲爾蛟龍取將來劒刀毛我　ねがふそのこに願其兒神樂歌いそのかみふるや男の太刀もがなくみのをしてゝ宮ぢかよはむ

そのたてまつる奉　あちめ一度おゝゝ三度さつおらが
薩雄等　もた（ろ乎）○さのまゆみ持而在木眞弓　おくやまに　奥
山　みかりすらしも御狩爲　ゆみのはずみゆ弓筈所見
（頭注云）神樂譜さつならがもたせのま弓おく山にみかりすらしも弓のはずみゆ
あちめ一度おゝゝ三度のぼりますす上座　とよひるらが（め乎）
豐日靈女　みたまはすす御魂欲　もとはかなはて本金梓す
ゑはゝはて末木梓
あちめ一度おゝゝ三度みつやまに　ありたてる有立有
ちがさを　いまさかえては今不榮　いつかさかえむ何
時將榮
あちめ一度おゝゝ三度　わざもこが吾妹子（ひ乎）　あなしのや
まの穴師山　山の山もと　ひともみるかに人見　み
やまかづらせよ太山縵爲　（頭注云）神樂歌葛わきもこかあなしの山の山ひとゝ人もしろべく山かつらせよ
たまばこに魂筥　ゆふとりしでて木綿取鎭　た
まちとらせよ魂令取　みたまかり御魂上　をまかりまし（た乎）
ゝ魂上座　かみは神　いまぞきませる今來座有　みたま
みに御魂見　いましゝかみは去座神　いまぞきませる
今來座　たまばてもちて魂筥持　せりくるみたま（さ乎）　去來
御魂　たまかへしすなや魂復爲也

次ひとふたみよいつむゆ（頭注云）雄略天皇五年紀六日むゆ俗六日むゆか　なゝ
やこゝのたりや種季云太利足義而十之古語也其謂止遠者太利之轉也
十度讀之毎度中臣玉結也　今按三代實錄云淸和天皇貞觀二年秋七月己酉朔二
十七日甲辰夜偷兒開神祇官西院齋戸神殿盜取三所齋戸衣并主
上結御魂緒等云々　古語拾遺云凡鎭魂之儀者天鈿女之遺跡然則
御巫之職應任舊氏云々　貞觀儀式鎭魂祭條下云以安藝不綿
二枚實於筥中進置伯前御巫覆宇氣槽立其上以梓撞槽
毎十度畢伯結木綿訖御巫舞訖次諸御巫猨女舞畢云々　江次
第鎭魂祭の條下云神祇官雅樂寮神樂次御巫衛宇氣次神祇官一人
進結糸於葛筥自一至十此間女官藏人開御衣筥振動註云神
琴師彈和琴衛宇氣神遊儀也神代上卷宇氣船不美止止呂加須義
也以賢木衛槽上也結糸自一至十字麻志麻治命十種○（神
乎）寶振之返死之縁也用糸自一至十計之也次神祇官一人進
結糸於葛筥（自一至十）此間女官藏人開御衣筥振動畢○（神
乎）祇官着座云々　（頭注云）薩戒記應永卅三年十一月十三日壬
寅——今日鎭魂祭也予爲分配仍引見舊記之所古今儀頗以相
違　深山御記云長寬二年十一月十六日——鎭魂祭也——次予示辨
令始神樂（只琴笛許也）此間神祇官下部取槽（其體如手横高
三四寸弘二許尺令敷席一枚置山南方次御巫（小童結髮着靑
闕腋袍表袴帶紙以墨畫石形持來押付鈴衣加神）自東北方來
置槽上北面立又下部以御玉緒糸（以葛圓結中縱横擊之其中
結付白糸也）授下部宮主衆敎々々挿笏取之——次大中臣
少副親隆進寄件筥前跪指笏取糸結也（一緒也）此間御巫以梓
柄令琴笛音
空槽上
年中行事奧書云本云永仁（伏見）之比被書初之處自然被闕之
畢宣曆（後醍醐）令終寫功者也外見不可許乎云々　季御讀經等

下云是日予（師光）與參行香云々　野宮宰相定基公仰云師光者中原師光也守按是大御假條下云予以此事申後三條院云々　三宮作予

兼盛家集

するがに富士といふ所の池にはいろ〳〵なる玉なむわくといふそれに臨時の祭しける日よみてうたはする

川加不邊枳加須仁乎止良牟淺間在美太良之河波乃曾古仁和久滴玉　日吉神道密記云春日岡（頭注云）春日岡在大宮樓門左申日御祭禮畢有此事土人謂之止乃末川利云天兒屋禰命御祭禮日七社神輿昇置此所也結付長柄於本社而奏樂也役人笛和琴忿藥出之歌云

君賀爲女日吉乃御神君我爲咩燐乎也燐乎也

歌畢後七社神幸春日岡奏神樂也此神代昔日神入磐屋之砌八百萬神等奏神樂春日神奏祝詞玉故春日岡爲奏之樓門出御此窟出御之顯義也正四位下大藏卿行丸敬而撰述

萬葉緯卷第七

體源抄云太神景範家記云古語拾遺抄云天磐屋者大和國神部云處也作俳優下御琴既現佐岐國座也長白羽命等彈禰　御歌本方天兒屋根命地藏菩薩六波羅座末方太玉之命虛空藏菩薩法輪寺座御笛神大和國座云なり大己貴命大三輪明人長天細女命大祝明神唱文釋使事配侍自春日南白町尻西角座　普賢文釋者一乘法說給相共歌吹舞乙先豐龍神廻坂向於天石戶前庭火寄合採物是皆豐岡姬命逵御寶也大前斯宮人小前斯哦留女神寶廻遊立朝倉其駒今神樂是也

一同第十二上神樂の時の事かんとりの明神は鼓の役としひるこの明神太笛の役なり鹿島の明神は韓神の役

弓本末或說本末五首
劔本末或說本末四首
鉾本末二首
杓本末二首
片折本末二首
諸擧本末二首
葛本末二首
韓神本末二首
早韓神一首
韓神或說本末二首
宮人本末一首
木綿志天本末一首
難波潟本末一首
前張本末一首
階香取本末二首
井奈野本末二首
脇母古本末二首
小前張
薦枕本末二首
閨野本末二首

篠波本末二首
殖槻本末一首
總角本末二首
大宮本末一首
湊田本末一首
荎本末或說共二首
已上小前張
千歲本末二首
早歌本末長篇一首
星
吉吉利利本末二首長篇
得錢子本末二首長篇
木綿作本末一首
雜歌
晝目本末或說本末四首
弓立本末一首長篇
朝倉本末或說共三首
其駒本末二首
竈殿歌本末二首

酒殿歌本末或說其四首

神樂（頭注云）體源抄曰或云當神樂譜昔貞觀御時神宴之日被撰定神樂歌者見清暑堂御神樂歟云々次朱雀院御時貞信公攝政之間被始御神樂云々後時藏人前歌依有禁忌不被歌其後尙又歌云々或秘記云大嘗會のとき清暑堂の御神樂昔は未必始終奏之其歌少々唱之其事御遊云々　秘說云日本紀竟宴一代一度行はる也近來此儀なし和歌高後御遊を始んとするとき先つ御神樂歌一曲を歌て然て後に樂を奏するなり云々　同云神樂は此朝の風俗にて位に居給てはじめたる宴會にもまつ清暑堂の御神樂とてこそおこなはるれば必す人のたしなむべき事也

古語拾遺に云其後素戔嗚神奉爲日神行甚無狀云々于時天照大神赫怒入于天石窟閉磐戶而幽居焉爾乃六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔措凡厥庶事燎燭而辨高皇產靈神會八十萬神於天八湍河原議奉謝之方云々又令天鈿女命以眞辟葛爲鬘以蘿葛爲手繦以竹葉飫憩木葉爲手草手持著鐸之矛而於石窟戶前覆誓槽（古語字氣布禰約誓之意）擧庭燎巧作俳優相與歌舞云々于時天照大神中心獨謂比吾幽居天下悉闇群神何由如此歌樂聊開戶而窺之爰令天手力雄命引啓其扉遷坐新殿則天兒屋根命太玉命以日御綱廻懸其殿令大宮賣神侍於御前令豐磐間戶命櫛磐間戶命二神守衞殿門當此之時上天初晴衆俱相見面皆明白伸手歌舞相與稱曰阿波禮（言天晴也）阿那於茂志呂（古語事之甚切皆稱阿那言衆面明白也）阿那多能志（言伸手而舞今指樂事謂之多能志此意也）阿那佐夜憩（竹葉之聲也）飫憩（木名也振其葉之調也）爾乃二神俱請曰勿復還幸仍歸罪過於素戔嗚神而科之以千座置戶云々今按古註以此語爲神樂濫觴爲事本紀天孫本紀云猿女君等主其神樂擧其言云々伊呂波字類抄云神樂（加久良）樂音也本朝事始云仲哀天皇元年三月神功皇后遷吉日入齋宮親爲神主則命武內宿禰令撫琴喚中臣烏賊津使主爲審神云々今按此事見日本紀神功皇后卷上古至書遊之體皆謂惠羅久惠笑也羅久添字也萬葉第七云靜滿者入流礒之草有也見良久少戀良久乃大寸今俗ゑへら笑又けら〳〵笑と云けらゑら通す或はゑくぼ又ゑがほ等皆此類也史家（用歡樂歡喜盈懷或樂等文字以此等義案之上古惠良久則後世神樂歟）本朝書籍目錄云神樂譜二卷云々惜哉不傳于世今有稱內侍所御神樂式者（頭注云）體源抄云長久の內裏燒亡にそやけそんぜさせ給たる所を取て庄櫃に入たりけりそれより內侍所の御神樂ははじめておこなはれけるとかや）皆用眞名假名而所々有註解其躰似右書依于茲所篇次隨梁塵愚按所模寫徵御神樂式註解亦引證用之而歌ノ下加式字矣又用梁塵之說則記古註梁塵愚案抄者一條禪閣兼良公之述作也奧書云先年綾小路前中納言有俊卿所望之間愚案之趣書遣之其後思得事共重加草削凡以難不定信用暫以此本可爲後證也云々（頭注云）體源抄大神景範記長慶子下云神樂者本者平調也依爲亡國音後成壹越調又氣比宮神樂用盤涉調

足乎　足イ

拾芥抄神樂部云（頭注云）體源云神樂

庭火（庭燎本無之）（頭注云）庭火以多近人說付假名差聲

採物

榊　幣　杖　篠　弓　劒　鉾　杓（片折）（諸擧梁）（旁注云）ひしやこ

葛　韓神（頭注云）體源抄云神樂譜本云體源 韓神取物ノ外也又號八枚手

大前張（庭燎本宮人由不志天梁無源同歟居竹源）前張之外不被載之

大宮人何爾波形木綿四手（旁注云）天梁（頭注云）又葛又宮入木綿四手以上三首爲大前張余元

前張階香取面白井奈野和支母子（旁注云）脇梁

小前張

薦枕　閑野小菅宴筆ノ本作ニ志都ニ「旁注」云志津衣乃(簾)志津野(體)礒等崎本同
無ニ崎(旁注云)前簾　篠波　殖春梶梁　總角上卷簾(旁注云)下上蘇イ同
字大宮　湊田　蒜　総蜂(旁注云)宴筆無體　千歲　早歌已上二首宴筆雜歌被レ載レ之
梁無
星歌宴筆本歌字無レ之書目弓立等加レ之被是七首被レ載レ之
吉吉利利宴筆本一ノ利無　得錢子(ぜに體)　木綿作
雜歌宴筆ノ本小前張之次被レ載レ之千歲早歌之外無レ之
晝目宴筆本木綿作ノ下被レ載レ之　湯立宴筆弓立　竈殿。同本無レ之(旁注云)歌梁
酒殿歌梁同　梁無　神擧同　(頭注云)體源晝目湯立竈殿酒殿神擧元書云右神樂之目錄者北院御室御撰絲管抄被レ載レ之云々
朝倉閑宴筆同ニ本星(旁注云)淺閑簾　其駒同
今按梁塵抄約次有ニ片折諸擧一又階香取次脱ニ面白一酒殿次脱ニ神擧一與ニ諸擧一同歟歟有職之人可レ尋レ之惣拾芥梁塵簾中抄等有異同記レ之
如レ上(頭注云)簾中抄神樂歌中此外有ニ鶴鳴可レ尋
庭燎(頭注云)神樂式云庭燎神代始ニ天兒屋根命一又至ニ庭燎末歌一註云神代始ニ天太玉命一云々
古語拾遺庭燎文上已註訖續日本紀聖武天皇天平三年春正月庚戌ノ朔乙亥神祇官奏ニ庭火御竈四時ノ祭祀一永爲ニ常例一云々詩ノ彤弓ニ云夜如何其夜未レ央庭燎之光君子至止鸞聲將將禮記月令云季冬命ニ四監一收ニ秩薪柴一以共ニ郊廟及百祀之薪燎一又郊特牲第十一云庭燎之百由ニ齊桓公一始也集註云庭燎者庭中設ニ炬火一以照ニ來朝之臣夜入者一大戴禮言天子百燎云々今按俊漢設ニ庭燎一之意別也神代紀窟戸段云火處燒覆槽置顯神明之憑談私記云此時日神深閉天下常暗擧レ燭行レ事謂ニ之火處燒一也此火者八處燒レ之不レ言ニ火燒一殊加ニ處燒一者將明其有ニ八處一耳覆槽置覆ニ置槽舟一登ニ立其上一令ニレ之踏響有聲也天書第二曰使天鈿女○爲ニ師主一頭著ニ蘿蔓一身著ニ手繦一足踏ニ覆槽一在ニ於窟前一顯神明之憑談諸神欲レ令ニ下日神深見中奇物上故俳優爲態不レ可ニ彈記一云々神樂並庭燎起源具ニ于茲一雲圖抄御神樂之庭燎都十八箇處假ニ與ニ私記說一同ニ江次第内侍所御神樂事云
綾綺殿額間四砌立ニ鐵輪一燒ニ庭燎一云々
(頭注云)體源抄云私諺云神樂は近來舍人のしわざ也今に其中に多氏のもの〻皆よりこゝに傳へ歌ふ今に不絶　又曰體中云又云上代は神樂は無調也而近來都て以て一越調爲之我世相替事是也云々　讀教訓抄第十一上長笛をもて神樂には付なり平調律音にふく昔は盤涉調にて吹なり横笛には一越調に合なり庭火朝闇ばかりにて吹さらては皆歌に付て吹也但皆各の手あり云々　古事記云於ニ天之石屋戸一供ニ汗氣一而蹈登杼呂許志云々　體源抄云凡神樂の人長には甚深の作法ある也秘說に見たり庭燎の　諸歌は鳴ふ所のある也人長の詞に隨て歌ふなりもろうたつかまつれと云也又一首なから歌終る事あり是も人長の詞にしたかふ也此作法今世に知人まれなり

深山爾波霰降羅志外山奈留正木乃加豆羅色豆幾爾介理上句　(旁注云)古今大歌所あそびの歌

阿知女作法(古註)あちめの作法慥なる所見なし但うすめなあ岩戸の前にて俳優のたはふれをなし給へるを今の世にあちめの作法と名付侍るべし於々於々は笑聲也日本紀にあゝと笑聲を云りお

さおさ五音相通ぜり於介は天鈿女のたぐさにしてふるい侍る木の名也但又歌のふし歟

本

阿知女　於於於於

末

於介　阿知女　於於於於

採物歌　私云此八つの採物は神世に由緒ありて國の爲人の爲身の爲ともなれる物なれば神に奉れるなり神代紀式の祝詞等にくわしくは見えたり

榊　神代卷云掘天香山之五百箇眞坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡下枝懸青和幣白和幣相與致其祈禱云々

本

拾遺 榊葉乃香乎加俱波志美覓來禮波八十氏人曾大宮（或本拾）滿登爲圓居（此原本）顯昭陳状世利介留

末

古今 神籬乃御室濃山乃榊葉畔神乃御前爾繁逢仁介理

（頭注云）體源抄第十一見山にはあられふるらし是は庭火の歌也然るに此歌の末はもろ歌さて秘事也御神樂式云於於御先聲也雖々應々云

云

本 或説

拾遺 榊葉爾由布止理志天天（旁注云）木綿取鎭（萬葉）而 多我世爾加神乃御室爾（みまへに拾）貫 祝比曾女介牟

末

古今 霜八度於介止毛加禮奴榊葉乃多知左加由倍支神乃幾禰加毛 こきねぎこ 新 日本紀

（頭注云）古事記神武卷幾々志夜胡志夜此者伊基能布曾（此五字以音）阿々暗志夜胡志夜此者嘲咲者也　古語拾遺云飫憩木名也振其葉之調也　古註云とり物は榊以下みな手にとる物也

萬葉第十香細寸花橘乎玉貫將送妹者三禮而毛有香或香乎乎作於依假名遺違改正下倣之滿登比可作滿登居まる註云まさひさはあそぶ事也神遊するを云べし證本并後拾遺皆まさひに作非也御室は神社也萬葉集に多くよめり古今集并梁塵おけさかれせぬ

本

拾遺 幣波我爾波安良須天爾萬須豐遠加姫乃美也（神或）乃美天具良

末

拾遺 幣爾奈良萬志物乎皇神乃御手爾止良禮天奈豆左波留倍幾く染　（頭注云）古註皇神是も天照太神の御事など申べしなづさはるは馴むつるゝ心也 拾遺結句なつさはましを

杖

本

此杖波伊豆古乃杖曾天爾萬須豐遠加姫乃美也濃川衣奈里　つゑなり國字の法差へり季云

末

相坂乎今朝越久禮波山人乃千年川氣止天支禮留杖奈里　（頭注云）或曰山人は仙也

本或説

續後撰　足引乃山乎左加志美喩　木綿川久留付　榊乃衣太乎かみのさかき杖爾幾里伐　川津（ろ或）

末

皇神乃美也萬乃杖爾山人乃千年乎伊乃里支禮留御杖曾

篠

本

此篠波以豆古乃左左曾舍人良我古志爾左加禮留下有

輌岡乃篠（頭注云）中務集夏山のしけりをわけてなく鹿をいかでともの丶ひこたつぬらむ和名抄山城國乙訓郡輌岡（度毛乎賀）清少納言云をかはともをかはさゝのおひたるかおかしきこと也云々　師説輌は弓射る時の具なれは舍人等か腰に著る故にかくつつけたり日本紀に兵衛をとねりとよめり

末

新勅　篠分波袖古曾也禮女ぬれめにて有ぬへくや長淵　登禰川乃石波布牟止毛伊佐河原與里

本或説

篠乃葉爾雪布理川毛留冬乃夜爾豊乃安曾比乎須留我手伸左　（頭注云）萬葉十四されは川のかはせもみえすたゝ渡波にあふいすあへる君かも上野利根郡　同云古注とよのあそびは豊明也日本紀に宴と云字をとよのあかりとよめり都て宴遊をいへり

末

瑞籬乃神濃御代與里篠乃葉乎多布左爾登里天安曾比爲良志毛（頭注云）瑞籬乃神同瑞籬乃久數ゝ　後撰遍昭折つれば腕にけかるたてながらみ代の佛に花たてまつる又さゝを手草にとるといへば若はかきたがへたる歟師説古註天鈿女神の竹のはを手草にするよし見え侍れは竹の葉さゝ同事也だ歟師

弓

本

新勅　弓止以倍波品奈支毛乃遠梓弓眞弓槻弓志奈古曾安留良志　なしひとしなも　（頭注云）萬葉第二梓弓引はまに〳〵よらめさものちの心をしり勝ぬかも　同十二今さらになにを思はむ梓弓引みゆるへみよりにしものを

末

古今　陸奥乃安達乃萬由美和我比加波也字也久　へ古　與里古忍此志乃比爾

本或説

薩天天父　我毛多世乃萬由美持眞弓　奥山爾御獵須良志毛弓乃筈美由　（頭注云）薩天天幸父なり薩摩ゝ幸彦達のすみ玉ふ國なれば名付たるにてしるべし父を敬ひていへる也みかりは萬葉にみ神とよめるになぞらへて知べし　（旁注云）萬葉第十みは古へは貴賤にわたりて云る詞也三神の類是也師説

佐豆人之弓月我高儞同第五
佐都由美乎多爾佞利持而

又本一說

拾遺　四方山乃萬保里仁多乃牟　ひさのまほりにひさのたからさ
るゆみな　加美乃多加良爾今志川留加奈　たてまつる拾
みみまへにけふ（頭注云）古注四方
山はこゝにはすべて世界の人をいへり　梓弓　みをするゆ

末或說

梓弓波留來留毎爾皇神乃豐乃遊比爾安波牟止曾於毛不

劔

本

拾遺　白加禰乃目貫乃太刀乎左介佩天提寧樂乃美也古遠
禰留舒歩　波誰子曾（頭注云）萬葉第十六虎にのりふるやなすきてあをふちにみつちさりてこむちから
たちもが

末

拾遺　石上古屋男乃多知毛我奈久美乃緒志天天宮路加與
波牟

本或說

伊波比古志神波祭里津明日與里波組乃緒鎮而遊比太刀佩
於幾津支爾須女神多知乎以波比古志心波今曾多乃志
加里介留（頭注云）古註神の祭りはすきつ隙ある折なればたちはきてあそはむと也
（頭注云）古註おきつきは人をおさめたる墓のことを申侍れど爰には神のほこらをおきつきとはいへる歟たちの歌なればすへかみたちさうへ侍るなり

鉾

本

此鉾波何國乃保古曾天爾萬須豐表加比賣乃宮濃保古奈里

末

四方山乃人乃萬保里爾爲留保古乎神乃美前仁以波比川留加奈

本

六帖　大原也清加井乃水乎杓毛天てにたみて烏波奈久止毛
安曾比天將レ行

（頭注云）和名抄云杓廣韻曰音酌同和名比佐古斟水器也今案杓元瓢なり瓢を以て古は水を汲と見えたり式の祝詞にも見えたれば由緒ある事にやいづれの道にも瓢よりおこりて杓をひさごとよめるとおぼゆ私

末

古今六帖　家持　我門乃板井乃淸水里止乎美人志久萬禰波水

草爲爾分里 おい生なればおひなり季云 （頭注云）古註清加井は山城國大原鄕にある清水の名也曉の鳥の鳴比までも猶納涼してあそばむとよめるなり

片折

本

大原也清加井也世加井乃水平杓持天鳥波鳴止毛安曾比天久萬乎ゆかむイ （頭注云 古注片折と云は歌曲の篇の名也杓の歌にとりてせかゐやせかゐ 板井や板井と第二句をかさねてうたふをいへり或人曰舞の手の急になる時袖を折て舞を片折と云

末

我門乃板井也以多井乃清水里遠美人之久萬爾婆水草ほ季爲爾介理

諸擧 （頭注云）古注もろあけと云も歌の節也第一句を略して第二句を三かさねてうたふをいへりたとへば陽關三疊の曲と云て王維が詩を行人を送る時詩の句を三度かさねて諷ふ事のあるになぞらふべし

本

清和井也世加爲○世加爲乃水平比左古毛天鳥波奈久止毛遊比天由加牟やイ

末

板井也伊太爲○伊太爲乃清水里遠美人志不ㇾ扱婆美ほ季草居爾介里 （頭注云）今案石井と云は石をたゝみてゐさせるを云ひ板井とは板を並べてゐさせるを云ひ筒井といへるは石も板もなくて筒の如くにすぐにほりて井とせるを云也今も左の如くせるを筒非と云沙ましり又は柔らか成土にてはほられず赤土のかたき土にてはいつ方にもある事也

葛

本

古今和支毛古加 わきもくの古今袖中抄 穴師乃 あらし袖中 山乃山人止比毛志留倍久 古今袖中抄みるかに 山加豆良世與 （旁注云）袖中抄云みるかにとはみるへくと云同詞也古註萬葉集に卷向と書てまきもくと詠り然ればわきもこは只まきもことおなしなるべし萬葉第七卷向のあなしの川に行水のたゆることなく又かへりみむ人麿呂第十二まきもくのあなしの山に雲井つゝ雨はふれどもぬれつゝぞくる （頭注云）袖中抄山かつらの條下意をとりて長流云山かつらとは穴師の山の社頭にて神事の時山風烈しくして頭をかつらのやうなるものにて卷て山風をふせぐと有その姿を殘して今も神樂の時山かつらを取て冠にかけぬるを云なりまきもくの穴師の山と云をわきもこがあらしのやまとはうたひなせる誤、り敎長卿云穴師山の木を取て神樂の庭火にも燒詣社の祭にも奉る主殿寮のさた也柴取人はかつらゆうと云ふものを額より後ろへ引廻してゆへる也これは神事をうやまひかしこまるなり

末

古今深山爾波霰不留良志外山奈留正木乃加豆羅色豆支爾氣里 （旁注云）神代紀以天香山之眞坂樹爲鬘以蘿爲手襁 古語拾遺以眞辟葛爲鬘以蘿葛爲手繦袖中抄云日本紀古語拾遺相違如何まさかきとまさきと其詞かよへるにや賢木をかつらにせん事いかやうなるべきにや枝葉を折てかなつへきにや又神樂譜には取物中に葛歌あり本にはまきもく歌をかけり云々但八幡御神樂には取物九を皆捧て廻りて別意をうたふとなん申す又ひかけて冠をゆふと

りと云

韓神

本

三嶋木綿肩仁取掛我韓神乃加羅遠幾世牟彌加良遠幾

（旁注云）長流云みしまゆふは伊豆國みしまより出る木綿也又やひらの木は八枚の柏の葉に神供をもるものなり

（頭注云）御神樂式云韓神之事素盞雄尊子也有二帝基安泰之譽一故宮中祭レ之　遠幾遠准二早韓神一可レ作二於幾一假名違也下皆倣レ之

末

八平手乎 手乎二字式脫 手仁取持天我韓神乃加羅遠幾世牟彌加羅遠幾 （旁注云）八平手は神供献進具也　古注八ひらでは八枚の平盤也柏の葉にてさして神供をもる物也

（頭注云）御神樂式云加良於幾座置也云々　躰源第十二上七調子渡韓神譜あり　今略之凰笙全譜亦韓神樂あり體源抄云私云から荻はかれたる荻な云にや清暑堂御神樂の試樂執柄家にて行はるゝ時人長かれたる荻の枝を持事あり是秘藏事也　執柄家清暑堂大内豊樂院あるなり云々　同云恒方云かなでは歌ごとに有レ之而に近代は不舞之也只上拍子は韓神と其駒とにかなづるなり歌の心を舞也星には仰て月をみるやうをまなぶなり是今夜の月もろはこゝにましますといふ詞を作なり今世も度々折て興あらんときは乙つべき也是舞ひは叶作樂心之文

式早韓神 體源太神景通家日記云早韓神間人長乙云々 肩仁取掛我韓神乃加羅於幾世牟彌加羅於既手爾取持天我韓神乃加良飫來世牟也加羅於木加羅於木世

武彌（式）

本或說

和加介禮婆風婆毛志羅須父我加多母我加多止毛神曾志留羅牟 （旁注曰）續日本紀天平神護元年十一月大嘗會詔曰必人方父我助多母我可多（能イ）親在天成物仁在云々

（頭注云）袖中抄みやびの下に歌或人云神樂の大直日歌曰わかければ云々神ぞしるらん此歌の心はわかければ其振もしらず父方母方と神はしると有にやされぱみやびは振舞と覺たりかやうの詞はかよはして用也やさしともきこゆ神樂同詞ときこゆ云々今按梁塵わかあれば神はに作る袖中によりて改正する也長流わかあれば我生はと註之

末

皆人乃志天四手波左加由留榮於保奈保美大直長以左和加止毛仁神左加毛止仁長坂本 （旁注云）古註さかもとは坂本也神まします所をいへり

（頭注云）大直古今集大直日歌ありそれはまがれるを直くする心とみえ侍ればこれも心を直ふしていざ我友と神の社につかへんいの心にや

宮人（旁注云）古語拾遺美夜比登能於保與須我良爾伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須我良爾　今俗歌云美夜比登能於保與曾許呂茂比佐止保志由伎乃與保志茂於保與曾許呂茂詞之轉也註解在二第十卷一

本

宮人乃於保與曾許呂茂比佐止保志 （頭注云）古注おほよすからなおほよそ衣さうたひいさとほしらひさほしさうたへるはいづれも五音相通也歌の心はおほよそは凡の心なりひさとほしは膝より下まで衣のたけの長きを云

末

比佐止保志雪乃夜侶志茂 じもイ 於保與曾許侶茂（頭注云）ゆきのよろしもは雪の夜に宜しきと云心也○但きのよろしも云詞相違ありきのよろしもはきてよろしきと云詞歟又ゆきのゆ文字を略してきのよろしもとうたふにやしりがたし長流云凡衣ひさとなしはひざより下迄衣のたけのながきを云也

木綿志手

本

由布木綿 四手乃神乃多支田乃以奈乃稲 穂乃（頭注云）多支田今案神領にて四手などを引廻したる高田といはむが如しあげたきさ音通す神代紀下海神教彦火火出見尊曰先作高田者汝可作洿田云々萬葉第二たけばぬれたかねば長きいもが髪比來みぬにみたれしつらんか之は髪をあぐればぬれ〳〵とみゆあげれば長くみゆるとほめてよめり照し合せてみるべしもろほは二基也是をいふなしは田をほめて云べきことのなし也

末

以奈乃保乃毛侶穗仁左禮波古禮乎伊布奈志

難波潟

本

古今 奈仁波我多鹽美知久禮婆安萬衣

末

安萬衣田蓑乃志萬爾田鶴奈支和多留

前張

本

左以波理仁衣波曾女牟安女布禮度（頭注云）江次第内侍所御神樂作左井八利假名違可尋萬葉第十詠榛おもふれの衣にすらむにほひせよ島の榛原あきたゝずとも 同第七寄木白菅のまのゝ榛原心ゆもおもはぬ君がころもにぞ摺同第十四いかほろのそひのはりはら我きぬにつきよくしゝめよひさゝへと思へは 拾遺集神樂歌衣はすらむといはりは榛の木をほめて幸榛と云歟以と幾と五音通ぜり題に前張とかゝれたるはすべて此神樂の名かりてかける事おほければ是もなすらへて知べし榛の木の初しほにてそむるを云べし

末

雨雖レ除宇川呂比我加志布加久染天波 多歟

階香取

本

志奈加止里也猪名野湊仁安比曾 音曲節 柏子の詞也 津留船乃加知梶與久萬加世加太布久奈勿レ傾 （頭注云）古注かぢよくまかせば風にまかせてよくされしと云心にや

末

弱草乃也妹毛乃里多理也安比曾我毛乃里多里也船加 らイ 太布久奈布禰勿レ傾（頭注云）わかくさの今案しなかとりの歌の返しのやうによめり

井奈野

本

志那加登里也井奈乃布志原 五倍子 安比曾止比天來留
鴫我羽音波面白幾志支加波於止 (頭注云)拾遺集神樂し
なか鳥いなのふじはら
さひわたるしぎのはれ音おもしろき哉六帖あさはらに小夜打ふけて
立鳴の羽こそしろらめ獨ぬるよは猿丸家集しなか鳥猪名のふし原青
山にならむ時に
ぞ色はかはらむ

末

階香鳥也井奈乃布志原安比曾加美左須也和加世乃吾
背 君波以久良加幾等 さる大 か歟 止里介牟取 以久羅加止里介牟
(頭注云)長流云ふし原はふしさ云木の生たる原也かみさすは髪にか
むざしを刺たる也今按にいくらかさりけむは源氏引歌にぬえ人さい
ふもこさはりさよ中に君がこゝろをさりにきたれば此さろさ同じわ
かよはよみそこなへるなり世の字なればなり我背の君なり萬葉に多
き詞なり男を
さして云り

脇母古

本

和幾茂古仁也一夜波多膚布禮安比曾誤里爾志與里止
里毛止良禮須止 毛イ ○里止羅須 (頭注曰)古注さりもさられずさ
は一夜ねて又さもあはぬ心にや

末

然有止毛也我世乃背 君波安比曾以川川止里六津止里 らイ
奈奈川止里八川止里古古乃夜十波止里止乎波止里介
牟 (頭注云)是も本歌の反歌のやうによめりしかりさもは然
れども也さりさられずさはいへど十夜までは逢たるなり

小前張

薦枕

本

古茂萬久羅也多加瀬乃淀仁也安比曾誰贄人曾志來銜
上留網遠(於季)路之佐傳(欏左天和名)指上留 誰以下式 (傍注
云)河内茨田郡高瀬和名
贄人者調レ贄而奉レ人事也式
(頭注云)六帖こも枕高瀬の淀にかろこものかろさもわれはしらでた
のまむ續後撰こも枕高瀬の淀にさすさでのさてや戀路にしほれ果べ
き源家長武烈紀影姫歌云擧慕摩矩羅他箇幡志須擬 三代實錄薦枕高
御座栖日神社 萬葉第七薦枕相卷之兒毛 六帖こも枕高瀬のよさに
かりこものかろさもわ
れはしらでたのまん

末

天爾萬須也豐遠加姫乃也安比曾其贄人曾志來銜上留
網遠路之佐傳指之上留 其以下式 (頭注云)長流云にゑ人さは魚鳥
など供御にそなふる人也鴫さろ
於歟
なばつくさなん見へり豐岡 こも枕の歌の返歌
姫は天照太神の御こさなり のやうによめり

閑野

本

之川也乃小菅鎌毛天加良婆生牟也古須介

末

天在比婆里與里來也雲雀止美草毛知天　(頭注云)詞花雜下家經朝臣打むれてたかくら山につむものはあらたなき代のさみくさの花相撲家集み山なるさみ草の花つみにさてゆろきの袖をふりてゝそこし古註富草は稻な云也　(傍註云)俊成卿九十賀權中納言隆房こゝのちぢよはひな君にゆづり置て猶春秋にさみくさの花

礒等

本

以曾良加左支衞鯛鉤安萬乃多比津留蜑乃　(頭注云)體源抄云礒等かさきなうたひけるに兼氏が人長して榊をもて鯛つる體をなしける時の人稱美後代遺學樂人助貞開此事其骨なくしてこれをまなぶ萬人咲哢云々　夫木伊勢島やいそらか崎の朝きりにたなゝし小舟こきはなれつゝ有房　體源第十朱雀院御時貞信公攝政之間被始御神樂云々　彼時礒等前歌依有禁忌不被歌其後尙又歌云々

末

吾妹子加爲止太比川留蜑乃鯛鉤白水郎乃

篠波

本

篠波屋志賀乃幸崎也美志禰豆久　御米春　遠美奈乃女與佐好佐也曾連母夫　加母加連彼　毋加毛伊登古勢能滿以止古世傭世牟禰式　(頭注云)夫木廿二文應元年大嘗會主基備中國稱春歌從二位行家卿昔きく神のまゝたのたねなればニ萬のみしねはやそくらぞつく美志禰は御米也和名抄糙(加知之禰)粳(乃古利之禰)之類也遠美奈師說麻績中略奈神代紀姊之類而女仁添留字也以女切爲和訓伊登古はしたしみていへる詞なり第一神功皇后の歌に注ぜりせさまさそへる詞也

末

阿志波羅太乃　葦原田　伊奈豆來加爾能也　稻舂蟹　於乃連佐倍已副與女遠江須止天也　媾不得　佐々介傳波擧　佐々介也佐々介亘波佐々介也加飛奈介遠寸留也式　(傍注云)腕添い無甲斐二掊　云腕擧　(頭注云)和名抄揚氏漢語抄云螃蟹(彭其二音海濱稻舂蟹之類也)兼名苑云(螃蜎彭越二音楊氏漢語抄云葦原蟹)形似蟹而小也案當時も海邊の葦原などに小き蟹の常の蟹よりははさみのふさきか何萬さもなく出て一度に腕をそろへてさゝげてはおろしおろし稻つくやうにすれば稻舂蟹さ云へりされば よきよめをえぬ事のかひなきさ云ろ事を蟹の腕をさゝくるにそへて詠り　式傳波々作和佐倍倍作惡依假名遣違改正

殖槻

本　三代實錄清和天皇貞觀七年四月廿五日乙亥授大和國無位田中神從五位下(式外添下郡)

殖槻也田中乃毛里也　毛里也イ　天布加左乃安左知加波羅爾　(傍註云)もろは名のもろにや長流漏止云々　(頭注云)うゑつきは大和國添下郡也かさの淺茅原に我をおきて舊事記第三云曾曾笠縫等祖天都赤麻呂顯宗紀云倭者彼彼茅原淺茅原云々これらを引合するに礒城瑞籬を立られし笠縫邑さ同じくて添下郡に有て也(師說)　續後撰夏里さはき田中の森のゆふひかけうつりもあへず取早苗かな參議雅經　玉葉上山きはの田中の森にしめはへてけふ里人は神祭るなり爲家

末

我於支天置布太妻止留也取　止留奈天布取勿止云加左乃
朝茅加原仁

總角

本

總角乎和左早田爾也里天也遣曾其思布止曾其於毛布
止曾其思布止曾其於毛布止曾其思布止也　(頭注云)總角は今は使ふわらはなり早苗を治せむとてわらはを出しやりつるが長き春日を
すら何もせずしてや遊びをるらんと心づかひするなり萬葉第七春日
すら田に立つかる君はかなしつ
まなき君が田に立つかる師說

末

其於毛布止奈仁毛何世須不爲之天也春日須羅波留比
寸良春日須羅波留比寸良春日須良

大宮

本　比歟寧

大宮乃知以左小舍人○殿上童也手々仁也てらにや手にさらやの心也長流
手々仁也玉奈良婆手々仁也　(頭注云)大宮のちいさこされり玉ならはひろは手にとりよ
ろはされてんと云歟なるべし長流　禁秘抄云小舍人六人近
代及十二人歟昔白張裝束也小舍人召加人識下知有名簿歟

末

玉奈羅婆比留波晝手仁止里也夜留波夜　左禰天牟寢天無イ
仁也與留波左禰天牟天仁也無イ

湊田

本

湊田仁鵠也川遠里也八居　止路知奈也取衛　止呂知奈也
八川奈加良止路知奈也　(頭注云)爲野王按鵠(胡篤反漢語抄云古布日本紀私記云久々比)大鳥也
八つ居る鵠を取る街なき也さら
んずるやうを得しらぬをいへり

末

八川奈加羅物毛波須表里也不思居　止呂知奈也止呂知
奈也八津奈加良止路知奈也
八つながら物もはずなりやとろちなやとは物もはずは物も思はずな
り日本紀萬葉などの歌はかやうに思ふを略してもふさのみいへる事
多し何の心もなく居るをいへり萬葉十三物おもは
で道ゆきなむもとよめるも何心なくといへる也

埜

本

蟋蟀乃禰多左姤宇禮太左也慨(神武紀)御園生仁萬以里
參來天木乃根乎掘喰牟天袁左萬左歌曲節(梁)津乃乎禮　(頭注云)體源云少納言入道信西云蟋蟀は物說
奴(長流)角折　袁左萬左　上中下の三說あり自木根折之爲下記自
御園折之爲上說也鳥羽院御物笛譜載テ自御園折說上也同十一云
しかさへつりといふ秘事はきりぎりすといふ歌の事也　今案いやし

き人のさかくして貴人に近付奉りぬれごもさより下賤のものなれ
ばかへりて身もいたつらになりぬる事をきり〳〵すになぞらへてよ
めるにや蕃には角はなきものなれさ媚へつらひて人をついやすを角
さはいへる歟詩にも誰か云ふ雀に角なしさ何によりてか我屋をうか
つさ作
れり

末

爾多左宇禮多左也美曾乃布仁萬以里支天

或說

志多良加萬宇止乃臣比止戸乃單加里支奴狩衣　奈止禮
里曾勿取入　以止爾多之最妬　(頭注云)古注したらは所の名歟かまうさは高麗人也今案したら
かさ何を切てまうさのさよむべき歟したらかは所の名さもいふべし
まうさは萬葉に臣女さかきてまうさめさよめれば今はそれなるべし
古今の序にまくらさいへるも臣等にてまうさ等也榮花物語に道長公
人をのりての玉へる詞にもまうさたちさの玉へり伊勢物語やよひの
ついたち雨そぼふるにやりけるおきもせずねもせず
よるをあかしてははるのものさてながめくらしつ

末

奈止乎禮里曾古左女仁曾霢霂(和名古左女)保奴良世沾與
加禮須留夜離爲　以止以止爾多之

以上小前張

千歲

本

千歲千歲千歲也千年乃千歲也式

末

萬歲萬歲萬歲也萬代乃萬歲也式

早歌

本

伊豆禮曾毋何處(梁)止宇止末利無イ
留(梁)

末

加乃佐木彼崎　越天

本

深山乃小豆々良葛

末

久禮操々小都々良　(頭注云)萬葉第七をみなへし生る澤邊のまくず原いつかも絡て我きぬにせむ
古註くれ〳〵は野くれ山くれはろ〳〵さくる心也つゝらはくる物なればかくつゝけたり

本　伊式

佐木乃鷺久比止路牟止頭將取
伊止波多最將(梁)止路牟止
阿加々理布武奈勿蹈　志利奈留子後在
我母女波阿里目有　佐木南留子先在　(頭注云)我も目がある故あかゝりはふまじさ
後へなる人の先なる人にこたふる也胼ひろかめ皹あかゝり

舍人古武曾將レ來志理古武曾後將レ來　（頭注云）舍人以下八句御神樂式无之又本

末歌本不（傍注云）分明可尋以下式无

我母古武曾志理古武曾

安知乃也萬後方山遠也萬

遠也萬乃安知乃世後方川瀬

近衛乃陽明門美加止仁門巾子於止落以津　古註これは冠の巾子也昔は冠額と巾子とをはさりはなつやうにしたる故　（頭註云）體源抄云多親方云人長は其歌の詞を舞也早歌に近衛御門に巾子をつと云ところには冠を抑き亦鷹踏なしりなること云時には後を顧て見て前へ進み舍人こせうとうたふにはこせう尻に成けり如此して取物にも狹居張に詞にしたがひて舞ける但是はよく其曾法を上て神妙の境に入らむものゝすべきなりしからずは還て

也かみのなき故に巾子をおとしたるぞとなり

なこの論賊

髮乃根乃奈介禮婆無有

由須利安介牟須須里安介牟　蘇敬本草注云髮髮根也古註ゆすりあけんとは人のおほくてすりあけらるゝと云心也すゝりも同意也

須須里安介牟由須里安介牟

谷加良由加波行遠加良由加武尾將行

遠加良由加波行多尓加良由加武（式多爾加良の良字无）

是加良由加波彼加良由加武（頭注曰）是彼二句御神樂式无之

彼加良由加波是加良由加武

遠美奈子乃女佐衣波オ　（頭註曰）遠美奈前に註するが如し　衣字式无

霜月師走乃加木古保里　古註かいこほちは垣をやぶりて薪にするなり或人曰霜月しはすのあいこほちと云は女の才知のなくてをろかなるあまり垣戸などをこほちて薪にすることなり古註大方一曲の意こゝろえかたき也

安布里止也飛波里止　（頭注曰）障泥板「延喜式太神宮式」古註あふり戸は脇戸などの風にあふらるゝを云

飛波里止也阿布里止有ニ式句毎皆頭ニ也字一　（頭注曰）ひはり戸今案檜割戸歟檜は良材なれば割て用也今も檜のおほくある山中などには檜をわりて板に用る也

星

吉吉利利

本

吉吉利利千歲榮白衆等聽説晨朝清淨偈也安加星波明歲星明星波久波也古古奈利也奈尓志加母今宵乃月波只受介末寸也只受介末寸也式大此句なし　（頭注云）體源抄云神樂に雜義か星歌に白衆等長説晨朝清淨偈此詞は涅槃經文也而神樂は我朝の事起樂神世者如何少納言通憲云神樂本體は氣比社神樂には可尋之人長之榊に輪つけたるは模鏡云々　法華懺法の晨朝偈也師説今案祭星非神非儒偏浮居意より出づ依て用ニ佛説ニ乎

末

白衆等古註云本歌同仍略レ之

得錢子

本

得錢子加禰也奈留間在志毛標(しめ)由布結(ゆふ萬葉)飛波遠檜葉 多連加波誰 太遠利志手折 得錢子彌太々良未詳(一譯)古來飛與彌誰加波多遠利志得錢子也式(頭注曰)或書云江家次第云得選厨子所女官於采女中選其人故得名云々禁秘抄云得選三人也又蔵上采女築之行幸之時持大袋與內侍同車是不可然事第十也云云 志毛由布古註標結也飛波は檜葉也今案飛波批把歟師説又下結檜葉にて檜葉をもて垣にゆふに下をれせて上をはさきおくをいへる歟萬葉第七旋頭歌にみなとなる芦の末葉を誰か手折し我せこがふる手をみむと我とたをりしすべては此歌に似たり云々

末

我社波美禮波也宇連多佐見(嘗イ)ねたましき心也梁 多遠里傳古志加也栞歟 得錢子也多々良古木飛與也多遠里傳古志加也得錢子也式(頭註曰)此歌亦本末贈答

木綿作

本

木綿作志奈乃原尓也安佐太豆禰麻尋 安佐太豆禰安佐大都禰也式 (頭注云)今按本歌は木綿を作らむとて信濃の原に麻を尋に行也末の歌はたづね行にてます／＼好かううた得て木綿をつくりぬれば神あそびをせよや／＼とうたふ也主計式信濃の調庸をいへる所に中男紙紅花麻子などいへば麻の多き國にやましもは益もやほめたる意あり萬葉橘はみさへ花さへの歌の續句まことはの木とよめりかみそやは紙麻や也主計式凡中男一人輸作物ノ裝紙麻三斤穀三斤といへり穀はかむひと云る木にに和訓の意紙裝なり紙麻は今かうぞといへる木にて共に柴の皮を剥て紙に漉なり紙をかうとよめるは紙縒(カウエン)の類是也麻をそとよめるは天津菅麻又にごき麻の類是也麻穀を東國に殖らるゝことは古語拾遺に見えたり青和幣白和幣といひて穀は木麻は草のかはりめあれども木綿といへる時は共に穀麻にわたり又皮を剥たる時もおなじやうにみゆる物なれば紙なも麻の類として紙麻とはいへるなるべし裝も又穀の內にて今かはりめのある木也

末

安佐太都禰末志母益 加美曾也紙麻 阿曾陪遊 阿曾陪阿曾陪阿曾陪阿曾陪阿曾陪也式 此一句无イ

雜歌拾芥

晝目

本

伊加波加里何許與幾和佐志天加善業爲 天照也飛留女乃日靈女 神乎志波之暫 止止女牟將留 (頭註云)古今ひるめの歌さゝのくまのくま川に駒とめてしばし水かへかげをだにょむ

末

伊豆古尓加何處 駒遠川奈我牟將繫 朝日天イ子加阿左留澤邊乃玉篠乃宇倍尓上 (頭註云)袖中抄十三いつゆにか……されはひるめの神とはいはれど他の詞をも相具する歟あさひこは朝日也或本にはあまひことあり天の日と云歟山彦をあまびこと云別の事也ひるめの神は日神也天照太神をば大日靈貴と申也神樂にはあまてるおほむ神をおろし奉れは神樂とてあげ奉る歌もありされはいかなるわざをしてかしはし留め奉るべきとうたふ也 拾遺神樂我駒ははやくゆかなむあさひこがやへさす岡の玉ざゝの上 阿左留は阿太留歟約通 河海抄帚木いづくにかや

さりはさらむ朝日このさすやなかべの玉さゝの上あさひこのやさり
玉ふさ云義也天照太神をあさひこさ云又朝日の直ばかりにも云或說
二首以河海抄補レ之
在神樂譜云々

本或說

奈尔和佐乎何業　我波志都都加爲　天照也日靈乃神乎志
波志止止女牟

末

以加尔之傳 知何爲　何業志天加天照也比留女乃神乎之
波之認牟

弓立

本

伊勢嶋也安萬乃蜑刀禰等加多久保乃介 燒火氣　於介於
介
(頭注曰)夫木有房いせ嶋やいそから崎の朝霧にたなゝし小舟
こきはなれつゝ　保乃介は火氣なり萬葉には火氣をけふりさ
よめり火のけさいひて
は氣に煙をかたるなり

末

多久保乃介伊曾良加崎爾加保里安布 薰合　於介於介
(頭注曰)かほりあふさは鹽氣のにほふなり萬葉第二長歌云神風乃伊
勢能國者奥津藻毛靡足波爾鹽氣能味香乎禮留國爾云々同第九云鹽氣
立荒磯丹者雖在云々これらはおのつからなる鹽氣なりましてやくに
は猶かほりあふべし神代紀伊非諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之
哉霧にも香あ
るもの也師說

本

於保大君乃由支止留湯木取山乃稚櫻於介於介　(頭注曰)清正集い
つしかさうゑてみたれは若
櫻さずて春久きぬべきかな

末

和加櫻止里尔我由久也 行　船加知 梶　棹比止加世 人借　於
介於介

本

皇神乃介佐乃神安介仁安布人波千年乃以乃知安里止 ふイ
社支介　(頭注曰)なる註かみあけさは神遊
はてゝ神の天にあかり給をいふ也

末

曾倍神波與支 善　日祭禮婆明日與里波緋乃衣乎介古呂
毛仁世牟 褻衣將爲

朝藏

本

朝倉也木乃丸殿仁我遠連波 式　(傍注云)新勅撰神祇神樂な
讀侍ける大納言通具有明の
空にまだ深く置霜に月
影さゆる朝くらのこゑ　(頭注曰)體源云朝倉筑前國風俗なり延喜年
中に神樂に加へらる仍朝倉其駒は風俗拍子
なり　朝倉やきのまろさのに我をればなのりをしつゝゆくは誰子ぞ
此歌新古今雜中に天智天皇の御製のよしいへども日本紀竟宴の歌の
體に似たり袖中抄かへし物の條下云神樂譜云朝闇吹返催馬樂拍子云
云或本云朝くらや云々此歌爲御所返歌是延喜廿一年勅定也神樂遊仕
る時は榊音振唱又云星已畢搔返絲竹可仕朝倉支催堪能之歌人顯昭曰
朝倉うたふなばあさくらかへしさ云或は吹返さいひ或搔返絲竹さ云

或は催馬樂拍子といへり的かへすとは云歟かへすとは其歌を又さくかへすなこそいへ此返しは笛も箏も別にしらへあらたむる也催馬樂拍子といふにてしりぬ又古今返し物の歌と云は多くは催馬樂せる律歌なりされはかへすとは催馬樂拍子にふきなしひきなしてあさくらなうたふなるへし云々

末

我遠連波名乘遠志都々也由久彌太連 式

本或說

朝倉也纖面乃湊仁網別世波せる(袖中)多末乃女佐志仁安比仁逢介里 (頭注曰)古今こよきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすな沖にをれ波猿衣に めさしなるかみと書するはわらはのこさし

末

葛城也和多留久米路乃繼橋乃古呂毛茂(はこゝろも 六帖袖中)止良須以左加倍里古牟 (頭注曰)古註ころもゝとらすはいそき歸る心也 久米路の橋は夜のあくれはかけたゆる故にいそきかへるといへるにや

其駒本歟

其駒曾也我仁我仁草古乎乞イ 飼乎 久佐波登利加波牟取將飼 水波くつはイ 登利久佐波登里加波牟 式 (頭注曰)河海抄初句のくさはとりかはむをいざとりかはむ或本水汲を轡につくるくつは沓 今存在之河海抄風俗下其駒也詳に草かふ草はとりかへ水はとりかはん(神樂其駒)

或說末歟

足布知○也毛里乃毛里乃下奈留和加古佐爲天古 弱草の大將來 安之班乃止良介乃虎毛 駒 (頭注云)和名抄驄馬(踏雪馬附)爾雅註云四骹皆白曰驓(音僧俗云阿之布知)骹謂膝以下也四蹄皆白曰(音前)蹢蹄也俗呼爲踏雪馬古註虎毛あしぶちはまたらなれはとらけと云にや

竈殿歌古註竈殿はへつい殿也神供を調する所なりとよは豊也豊酒なと云かことしゆたかなる心也みあそひは御遊也かくらなうたひ遊事也あまのかはらは昔八百萬乃神集り給ひし所なれはへつい殿をなすらへていへり (頭注云)體源抄云進十縣利吉調之竈祭舞

本

止與豊 倍津以美遊比須良志爲 久堅乃天乃加波良仁琴乃聲須留琵琶乃聲須留登左乃古衛須留 (頭注曰)續日本後紀第十一童謠云天衛波琵琶乎曾打那留云々 一本琵琶乃聲須留一句无 登左乃古衛古註とさの聲するは文字あやまりあるべし笛のこゑするとぞあらまほしき或人云とさのは胡笳聲なりとさこか聲通す藻鹽草にこさふかばくもりもやせむ陸奧のゑぞにはみせしあきの夜の月注に夷刀海に入て又浮上りて鹽をふけは霧のごとくに曇ると也笳吹の字也角笛とも云 日吉神道秘記云大竈社 奥津彦神也此即大歳神子也大歳者杵築大神御孫也竈殿社奥津姫神註解同上

末

比左加多乃久堅 天乃河原仁止與津豊歟 以須良之比波

乃古悪與志善 琴乃聲須留

酒殿歌

本

左加止乃波酒殿 比呂之廣 ま添字 萬比呂志廣 甕古之乃腰腹
也こしの心歟 和加手奈止里曾我勿取 志加川介那久爾
然不告 （頭注曰）古註酒殿はみわつくる所也みかは甕の字なり神酒なもろかめの名也祝詞にも甕の腹みちならへてと云こしも則腹を云べしわか手なさりそはけあるへきに也

末

酒殿波今朝波勿掃曾牟連里群 女乃裳引裾引今朝波掃
傳幾 （頭注曰）古註加茂のみさしろにかたひらに裳きたる女の色さりたるみかはたもつものをれそめと云 それをうれりめさも云にや神田つくるもの食物もつなみかはたさは云也むれそめは群女と云心なるへし

或説本乎

天乃原振放見禮波八重雲乃久毛乃中奈留雲乃奈加止乃中臣乃天乃小菅乎左支波良比祓 祈里志古止波今日乃日濃多女爲 安奈古那也和加皇神乃神魯岐乃與左古よけへ歟長
萬葉中臣のふとのそごとゝいひはらへあかふ命はあがためになれ
（頭注曰） 古註さきはらひは菅貫もて祓する事也あなこやはなごむろと云心也今案あなは穴樂の穴なるべしこなやは酒は濃きを上品として濃酒ともいへはあな濃なるべしなやはなそやなるべし都て大嘗會の時白き黑きの酒を造りて神膳に奉らる事式等に見えたれば其よしをよめるなるべし

末

仁波鳥波鷄 加介呂止鳴奴奈利於支與起 起與和加我加ひ歟
止夜一夜 妻人毛古曾見禮 （頭注曰）鷄鳴樂 加止夜妻今按加與日草書互に書誤り來れると多し然れは一夜妻なるへし 萬葉集第十六善門尉千鳥數鳴起余起余我一夜妻人爾所レ知名 此歌をよみかへて一夜妻をかと夜と書誤れるなるへし又幾日といへる時日をかさもよめれは日止與妻なとかけるをよみ誤れる事もあるへし 古註奥にいたりて云凡神樂は一越調をもてうたふといへり二條家には宮人の曲をもて奥儀とす綾小路家には弓立を秘曲とす但宮人の曲は近代うたひたえすと云へり

萬葉緯卷第八

體源抄第八本近眞敎訓抄箏の㕝を註せる條下に撥合
召廿六註せるうちに玉戸村上天皇御製 葛城光明皇后作 東路櫻人已上
黄鐘調 宮中聖主村上 宮人伊勢宮齋宮女御也 小野宮實頼大臣 三嶋邊太政大臣師長作已
上平調音 御神樂延喜聖主一越調音 蒼海○波宇治宮知足院關白殿作 嶋河已上無調子 和國
にていてきたる分已上なし
第十　季云押紙にあり第十とは何の書を指していへる歟
村上御記云く管絃に四德あり心に忍ひ手に携り口に
唱へ耳に聽これを四德といふしかれは唱歌尤人のす
へき事なりと云々　又云唱歌には皆以詞あり近來其
習皆絶畢ぬ平調の品玄の末の詞に　⊥由中⊥夕火⊥
由六由下中中り六中五り⊥由⊥五火亍火口亍りゝ亍
りゝ此詞は蘭生(とつふ)に出て蒜(ひる)取淦と云々
(旁注云)此說人にかくすへし當時不知人　季云此二行朱にてあり
集義外書雅樂解　季云集義外書たつねへきこれも押紙にあり
或問催馬樂歌に呂律ありうたはれさる事はあるへか
らすいかん云催馬樂の呂律といへるふしはかせ何と
か有けんふりたえぬれはしりかたしといへり角徵の
間に二律へたてたるはきに作之ふしはかせを付なは
うたはるへしされと日本にて自然におこりたるうた
ひ物には此いきなし中夏の律書のしらへにてうたひ
てはふしゆかす心あり作之なすは國風に非されは各
別の事也日本の小歌にたゞひとつ呂のいきのふしあ
りたるを聞たると云ものあり律呂の學ありし人わさ
と作之ふしをつけ置たるか所により中夏の風のこと
くなる所ありてうたひ出せるか知へからす催馬樂の
呂律といへるは黄鐘調を呂の樂といひし類ひにや今
黄鐘調は律の調なれとも十二音を十二月に配すれは
林鐘は呂に當れり林鐘を宮にて黄鐘の樂となれり黄
鐘は午調と同し律の樂なれとも林鐘によりて呂とい
ひし類ひかたゝし中夏にて黄鐘の樂は呂ともいふへ
し
同かるは大になるなりかるはちいさくなるなり

頃來於書肆得於催馬樂章曲一卷奥書云右催馬樂一冊者宗尊親王御自筆以本書寫校合畢外題者聖護院道晃親王之御筆跡也尤可秘々々云々可謂信得神助依茲目錄以下除章曲之外不違一點書寫焉與諸書有異說則附傍或有衍字則爲識頭焉且隨師說又加今案催馬樂顯倭名抄云催馬調曲催馬樂律我駒曲是也(頭註曰和名我駒作我駒澤田河作律田河俟無具用共攺正焉)狹箸河「律澤田河曲是也」云々體源抄云狛朝葛新作續敎訓抄云(頭註云續敎訓抄第四末催馬樂序一帖拍子七)催馬樂さ云

は催馬樂と云樂あり其より事起れり此樂の唱哥にこまをもよをすと云事のありけるをやがて哥になして國々より哥ひいだしたり我駒と云催馬樂是也故に馬を催さかきたるなり云々古註に往昔貢調を大藏省へおさめし民の口すさみの哥なるなどいへるは誤れり此兩說を以て知べし據倭名古來二首耳雖然隨朝廷全盛撰或有益公私歌(我駒澤田河類是也)或野章俚語(大芹無力蝦類是也)集而爲宴會之歌物矣又體源抄云催馬樂笛譜は藤原忠房依延喜聖主之勅譜を作箏琵琶には中務太輔信明(博雅二男)譜を作れるなり云々袖中抄ひぢかさ雨下云催馬樂譜は一條左大臣雅信公作也云々本朝書籍目錄云催馬樂譜二卷云々正見源氏奥入草河海抄等所引之催馬樂大概與今同而今所書章曲宗尊親王以何證書書寫給哉可尋(頭註云)三代實錄第三貞觀元年冬十月廿三日尚侍從三位廣井女王薨廣井者二品長親王之後也廣井少修德操舉動有禮以能歌見稱特善催馬樂諸大夫及少年好事者多就而習之焉云々

催馬樂目錄

律歌　(頭註云)本書假名なしさいへど體源抄を以付之

我駒　拍子十二　二段各六
澤田河　拍子十三　三段(一段九、二段四)　狹鯖河(拾芥抄)
高砂　拍子卅三　七段(一段五、二段四、三段五、四段四、五段六、六段五、七段四、)
貫河　拍子廿七　三段各九　拾芥藤家無之
夏引　拍子廿三(二乎)　二段(一段九、二段十三)
走井　拍子八
東屋　拍子十八　二段乎
青柳　拍子十二　二段各六
飛鳥井　拍子九
伊勢海　拍子八
庭生　拍子九
我門　○爾(梁塵愚按抄)　拍子廿二　三段(一段七、二段六、三段八、)
大芹　拍子卅一
淺水　○橋拾　拍子十九
大路　道拾イ　拍子十四二段各七　拾芥藤家無
我門乎　拍子十四　二段各七
鳥イ
鷄鳴　(頭註云)古註云鷄鳴名月にとりかなくと云なり俊豈說儀永正六十廿三
挿(梁)
逢路　更衣同音
刺櫛
穩(梁)
陰名
更衣
道口
鷹子
何爲　無(伊)　○更衣下陰名上今目錄脫故補之
老鼠　目錄歌共脫以梁塵補之　拾芥抄或號西寺源家無之云々

呂歌

安名尊　拍子十四　三段(一段六、二段五、三段三、)
新年　拍子十四　三段(一段六、二段五、三段三、)
之(梁)已上同音
梅○枝　拍子十四　三段(一段六、二段五、三段三、)
櫻人　拍子廿二　二段各十一
葦垣　拍子卅　五段各六　(頭注云)葦垣三段以下眞金吹全篇山代二段以上哥脫以梁塵補之

眞金吹拍子十八山代同音
二段各九

竹河拍子十四
二段各七

美作拍子十五藤生野同音
二段(一段八、一段七、)

妹與我拍子九
々(梁)山に无同

奥○山爾拍子十二

鷹山拍子十六二段各八(旁注云)此殿此殿乃此殿奥同音
(頭注云)此殿者此殿乃共歌脫以₌梁塵₋補ㇾ之
无(梁)

此殿者拍子十六
二段各八

紀伊國拍子十六
二段(一段九、二段七・)
州(拾)

葛城拍子廿二
三段(一段六、二段七、三段九)
香(簾)

我家拍子十一

淺緑拍子十二
(簾)香(拾)

鈴之河拍子

田中○井戸拍子十
拾(梁)

大宮拍子十
同

城(拾)背(簾中抄)

山代拍子廿七
三段各九

河口拍子十四
二段各七

藤生野二段乎

奥山拍子九

此殿乃拍子十六
二段各八
西(梁)
河(拾)

石川拍子十五
三段(一段六、二段六、三段三)

此殿奥拍子十六
二段(一段七、二段八)
五乎

白簾
青○之(拾)馬拍子十二妹之門同音

莚簾
席田拍子十二
二段各(六乎)

酒飲拍子八
嚢拾)

美濃山拍子

角総拍子十
擧卷(伊)

本滋拍子廿
二段各十

無力蝦拍子六

婦簾
妹之門歌在₌席田ノ上淺緑下₋
无伊

眉止自女拍子八

難波海拍子十

> 今按簾中抄此外有₌呂御馬草(頭注云)御馬草は眉刀自女の一名なるへし倉垣は此殿西の一名なるべし酒屋(頭注云)酒屋は此殿奥の一名成べし倉垣此殿萬木鏡山高嶋長澤律千年經淺也同歌異名歟可ㇾ尋
>
> 西宮記臨時十一私遊宴事夫於₌律遊₋者用₌平調₋於呂遊者用₌雙調₋至₌于他調₋隨ㇾ時用ㇾ之但律呂遊以歌爲ㇾ本樂曲相交反覆於₌倭琴₋先常醍同音數度次甲斐各獨唱風俗等也云々

律

我駒拍子十二
二段各六

伊天(頭注云)いでは古註さらに云かこさし乞萬葉　安加己末波也久由支己世萬
川知也末安波禮萬川知也末波禮末川知也末
萬川良无比止乎由支天波也安波禮由支天波也見无

又說末川乃也末異說由支天美牟安波禮
由支天美牟安波禮

今按萬葉第十二羈旅發ㇾ思乞吾駒早去欲「頭注云去欲萬葉類葉にゆかませと點せり」亦打山將ㇾ待妹乎去而速見牟體源抄卻萬曰

催馬樂我駒なは呂律倶に唱之又云催馬樂は我駒をもて序とし伊勢海をもて破とし竹川をもて急とす是故人之口實也云々

澤田河 拍子十三三段、一段九、二段四）（頭注云）澤田河三段以下有不審梁塵抄爲二段體源抄狛朝葛曰澤田河或譜此哥絶畢云々傳貞か譜をみるに安名尊と同哥と云々竊按同哥不平云々 長嘯曰澤田川袖つくはかり淺けれとくにの宮人高橋わたすと云哥を三段にわかちてうたへるなり夫木廿一喜多院入道二品親王家五十首三師入道左大臣五月雨に水こえにけりさはだ川くにの宮人わたす高橋 あはれそこよしやは鳴呼也ほめたる詞なりそこはその所なり古註

左波多可波澤田河 曾天川久波加利袖衝許 也安左介禮度雖淺 波禮

安左介禮止恭仁久爾乃山城相樂郡 見也比止也宮人 太可波之

和多須高橋渡

安波禮曾古與之也太加波之和多須

一說安波禮止々也之也 今按朝葛曰澤田川呂律倶に唱之云々萬葉第七廣瀬川袖衝許淺乎也同十一須蘇衝河同十七安夫美都加須毛云々續日本紀聖武天皇天平十四年八月乙酉宮城以南大路西頭與甕原宮東之間令造大橋令諸國司隨國大小輸錢十貫以下一貫以上以充造橋用度又云十二月巳丑始運平城器仗置恭仁宮辛卯初壞平城大極殿竝步廊遷造恭仁宮四年於茲其功纔畢用度所費不可勝計至是更造紫香樂宮仍停恭仁宮造作焉同十七年五月恭仁京泉橋云々 師說聖武天皇久しく世を治めさせ玉ひて全盛なりし事唐の開元天寶の比とひとしかりけるを夏史少しそしりたれば今の哥も時の人のよみて諷刺をふくめるにや云々

（旁注曰）神代紀に大己貴命のために天安河に高橋浮橋及ひ打橋を造らんと太神のみことのりし玉ふは高橋はそりはしのやうに開ゆるにや袖つくはかり淺き瀬なればかりそめなる橋をわたしても事にたりぬへきとおもへる心と聞ゆるにやと云々

高砂長生殿破（頭注云體源抄大神景範記云長生樂長秋樂同音云以二反爲一帖高砂催馬樂同音 季云催馬樂高砂同音と云ふ歟

一 拍子卅三七段（一段五、二段四、三段五、四段四、五段六、六段五、七段四）

多可左古乃高砂 左伊左々重詞 古小砂乃太加左古乃

乎乃戸尒尾上 太天留立有 之良多末白玉太萬川波木玉椿

多萬也名支 此第一段有二說

曾禮毛加止左乎 （頭注云）古註それもかささむはそれかと云詞也ましもかさは汝かと云心さんは詞の助也

末之加（河海）毛可止末之 加（同） 毛可度爾利乎左美乎乃

見曾加介爾世乎御衣析將爲 多萬也名支玉柳

名尒之何 加毛沙 （頭注云）古註なにしかもさむはなにかと云詞也誰しもかと云か如し（頭注云）奥入に沙の下加乎字爲名爾之加毛沙乎 名爾之加毛名尒之加毛

古々呂心 毛萬多伊介乎由利波名乃 百合花 沙由利波名乃（旁注云）沙由利の沙は淺上略萬葉道邊之草深由利云々

介左々伊多留今朝咲而有 波川波名爾初花 安波萬之毛乃乎進物 沙由利波名乃（頭注云）さゆりはなをさゆりばなとうたふ故にさゆりばさいふ哥はそれよりよめ

ろさそ長流（旁注云、樋口氏曰无與レ毛通毛字彙云蒙輔切音摸無
也後漢馮衍傳訊有毛レ食太子賢曰案衍集作レ無今俗語猶然者或古
語亦通乎當ニ
讀如レ摸
又說安波萬之无乃乎
夏引 拍子廿二段一 段九二段十三（頭注云）教訓抄第四末云夏引樂序拍子
廿三催馬樂ニ夏引音此曲承和帝王御作舞是
成作催馬樂青
馬哥音也云々
奈川比支乃忍妻之良伊止白糸麻名々波加利七量（頭注云）伊止下に
あさぎぬと云へり名々波加利は車七兩を萬葉になゝくるまとよ
めるとこさく量に七はかりかくる也麻糸をなゝはかりはかりう
みて我いましに衣をおりてきぬへければもとの妻を
いなせて我を妻にせよと忍妻の男をすゝむるなり
安利有左己呂毛尒小衣於利織天毛支世牟將令著萬之
男答
女汝妻波名禮與放 可多久名爾頑愚（疑日本紀）毛乃以不
物云乎美名女加奈哉名萬之汝安左麻支奴毛衣和加我
女乃指本妻己止久如多毛止袂與久好支與久著好可安
引音多肩與久好己久比襟也春良爾安末之汝支世女將著
加毛奴比縫支世女將著加毛
貫河 拍子廿七 三段各九（旁注云）金葉賀君か代はいく萬代か重ぬへきい
つ貫河の鶴の毛衣藤原道綱 續後拾遺席田のい
つ貫河に氷柱非て宿る月にはし、物うなき大納言成道（頭注
云）ぬき河のきしのやはら田やはらかにぬるよはなくておやさ
くる妻と云る
歟なるべし

（女）奴支可波乃世々乃瀬也波良泥枕詞多末久良手枕也波
良加尒柔承上奴留寢與波良名久夫無於也親左久留離
用末妻（頭注云）世々乃也波良はひらりこなり是
は枕やはらかにといはむ爲に取出せり
於也親左久留川末妻波末之增天留波美上略之〇之加も漆壓
沙良波然有者乎也波支乃矢矧（作日本紀）伊知尒市久川沓
加比買爾加牟將レ行上略
（頭注云）於也左久留川末とは萬葉第十四にもとのの舟橋取はな
し親はさくれとゝよめり妻は今は女の詞にて男をいへりおやさ
くる妻はましてるはしとは猶女のいふなり物はすくなきをもて
めつらしとするこさくおやのさくるによりてましてうるはしき
となりうるはしのう字を略せり萬葉に物おもひを物もひといふ
かことし 之加沙良波奥入作ニ加佐阿良波ニ今按因ニ奥入ニ利加有
良波歟梁塵作ニ之加之阿良波ニ不レ知孰是ニしかさらはゝさあらは
なりしるはしとおもへるをうけて男の沓かひにゆかむとなり
（女）久川加波波千加伊乃沓縫目也保曾細之支乎可戸買
左之挿波支天著宇波毛上裳止利支天取著美也知宮道加
與波牟將レ通（頭注云）ちかいは俗におほはなをさいふなるへしほ
そしきはほそきなり、うばもは我門にうはものすそぬ
れてと云に同し宮道にをとこのすめるにこそ 宴曲集第四海道中
に早藤澤にかゝりぬる宮地の山中々云々 傍注云 今按矢蜩參河
國也今號ニ岡崎ニ美也知倭名鈔云同國寶飯郡宮道（美也知）夫木抄
衣笠内大臣待人のやはぎに今宵とまりなばあすやわたらむ豐川
の水倭名抄同郡豐
川止與加波云々

東屋拍子十八（旁注云）梁塵
塵案加須可比以下爲二段

（男）安川未也乃四阿（和名阿豆萬夜）末也乃母屋今案乎安萬利乃軒古註曾乃安萬曾々支雨灌和禮我多知立奴禮奴沾畢止乃殿止戸比良可也閉（女答）加須可比鎹和名毛止左之毛鎖安良有波己曾曾乃其止乃止（人イ）和禮我左々女鎖於之比良伊押開天支末世來座和禮也我比止川末人妻

（旁注云）古事記八千矛神詠遠登賣能那須夜伊多斗遠　萬葉第五違等咩其何佐那周伊多斗乎意斯比良伎（頭注云）今按河海塵抄等加須加比以下爲二二段一又止左之乎作二止尼之一比良伊天作二比良天一今因二兩書一改正焉メ四阿はあつまや兩下はまやなり今はあつまやなやかてまやといへは和名の心にあらす木を眞木と云こさくあつまやをほめて眞屋と云なり止乃止は殿戸也ひらかせはひらけと云古語也あすかひも戸ざしもあらはこそ其殿戸我さゝめおしひらいてきませ我や人つまとは鎖はかけれ也戸さしは鎖也人の妻とさたまるものこそおそる事もあれ我やは他妻なる人妻ならねは心のまゝに戸をおしひらいてきたれとなり

走井拍子八

波之利爲乃走井（或相坂）己加也小菅可利刈乎左女加介曾禮爾己曾末由川久良世天伊止絲比支名左女

萬葉第七云此小川白氣結瀧至八信井上爾事上不爲友隕田寸津走井水之清有者度者吾者去不レ勝可聞師說此走井歟いつれの國にありとしられと前後大和の名所をよめる中にあれば大和なるべし小菅刈をさめは蠶を飼には箱和名えひらといふ物をあみて其上におきてかへは其料なるべしされはこそそれにこそまゆつくらせてとはいへれ云々

（頭注云）簗名苑云簾二音簾和名衣比良一名箇二音曲一蚕蠶施二於其上一令作繭者也說文云繭「音顯和名萬由」蠶衣也唐韻云繰「蘇遭反又所銜反訓久流」絡レ絲取也漢語抄云繰車「於保加」

飛鳥井拍子九

安須加爲爾也止利宿波春戸之也可爲於介可介毛陰與之好美毛水比毛左牟之寒見萬久左毛御秣與之好

（頭注云）狭衣一とまれともえこそいはれれあすかゐにやとるへきけしきなられは同あすかゐに影みまほしきやとりしてみまくさかくれひさやとかめむ　師說飛鳥井は大和高市郡飛鳥川あり同し所也蜻蛉日記中みかさ山をさしてゆくかひもなくぬれまさふ人おほかりかすかにみあかし奉りけれは木たちいとをかしき所なりにはきよげにゐもいとのまゝほしけれはむへやとりはすへしといふらむとみえたり云々　みもひは水也景行紀にみえたり赤染衛門集云又むまつと云所にとまる夜かりやにしけはしおりてすらんに小舟におのこふたりはかりのりてこきわたるを何するそことへはひやゝかなるおもひくみにおきへまかるろといふおき中の水はいとゝやぬるからんことはさなるを人のくめかし參をはもびといひてみといひおといふはおなしく御の字なり和名に漿をにおもひといへるも同し心歟又主水司をもひとりのつかさといふももひは水なり盌をもひといふも飲水器と注したれは盌をもとゆひといひ又髮をゆふ物をもとゆひといふことくふたつにわたれる名歟但もひとはのむ手をいひて海川の手をなへていふにはあらす云々私に云今やめる人におもひもとほらもぬといへり以上頭注

但件也止利波須戸之可レ有二音振二說一

今按清少納言井はあすかゐみもゐもさむしとほめたるこそおかしけれ玉葉旅かりそめと思ひし物をあすかゐの御秣かくれ幾夜れぬらむ　惟明親王大島氏云今萬里小路二條南東頓民屋內有二古井一古來爲二名水一之由云傳疑是飛鳥井歟美毛比景行天皇十八年四

月壬戌判王中自淡路泊於韓北小島進食時召山部阿耶古之祖小左令進冷水私記謂左牟支美毛比梅園氏曰片假名井字傳寫或遺横一畫寫廿乎又水古訓志與左右音通同義歟云々私云比與井通

青柳 長生樂序拍子 十二段各六

安乎也支乎加多以止爾片絲 與利天也繆 於介也宇久比

春乃鶯 於介也（傍注云）續敎訓抄第四末云拾翠樂博雅譜云序拍子七舞已絶畢急拍子十永承「御冷泉」一大掌會樂所預源賴吉作山村吉光作舞云々京極大相國御記云昔承和「仁明」一勅作此樂令永承「後冷泉」一撰其急時代雖異意趣惟同賴能折乃「携乎」一竹音而多日比葵邑之德學龍吟而幾年稱馬騏之詞料知解並清濁深知宮商也云々（頭注云）師說伊勢家集云故中務の宮の事をかり給ひてあづま琴はるのしらべをかりしかばかへし物とは おもは さりけり是は 春は呂秋は律なる故に東は春の方にて名もあつま琴なればかへし物とはおもはぬと琴をほめてかへしかれ玉ふよしによませ玉へるなり 安元御賀記云作者隆房そののちさりのは難波の海がてむのきうさてそらにふきあへしつ青やき萬 さ いらくおほうち云々 體源抄大神景範記云拾翠樂又云承和帝作之給催馬樂合序青柳 破伊勢海急竹河同云長生殿三反可吹之催馬樂青柳同音續敎訓抄第四末長生樂新樂中曲序催馬樂青柳同音南竹譜云承和御時清涼殿前紅梅花賀時此箇曲を作る則帝王の御作舞則左大臣信朝臣所作なり童男四十人麴塵を著す御前舞云々同云

宇久比春乃奴不止縫 以不云 可左波笠 於介也宇女乃梅

波名加左也花笠 古今集第廿かへしものゝ歌青柳を片糸によりて鶯のぬふてふかさは梅の花笠源氏若菜上云

さうかの人々みはしにめしてすぐれたる聲のかぎりいだしてかへりごゑになる夜のふけゆくまゝに物のしらへ ども なつかしくかはりて 青柳あそび給ほさけにねぐらのうくひすおごろきぬべくいみじくおもしろし細流云かへり聲になる呂の律になるなり

伊勢海拾翠樂拍子八（旁注云）和名鈔云拾翠樂律亦有伊勢海曲是也之保加比爾古註擅加千也師說之保加比は貝也古今集賀之長歌浦のしほかひひろひあつめさけりさすしさ云々（頭注云）南宮譜云拾翠樂件曲承和大嘗會時豐樂院前に海濱を作て此曲を奏す砂石を集め樹木を殖て山阜の形をなす縹布を敷洋藻を散して 海濱の體を像る船を其中に引て飛帆の波に隨ふに擬す童を其中に載て海人の藻を拾ふに似せたり

伊世乃宇美乃 引河海 支與支清 ○名支 江同 ○左爾渚 河同 之保 擅

加 安同 比爾千名乃利曾也 神馬藻 川末 ○ ○牟將摘加比也

貝比呂波 安々宇同 ○○○ 牟也將拾多末也玉 安々同 ○○ 比呂波 安々同 ○ ○牟也 安々同

（頭注云）曲畢に即ち徹して 復元又笛作清上舞作尾張濱主古樂後撰集忍びて 通ひける人いまたかへりてなごたのめおきて おほやけのつかひにいせのくにゝまかりて かへりまてきてひさしうこはす侍ければ少將内侍人はかゝる心のくまはきたなくて 清きなぎさをいかて過けむ假島葉第十五に對馬の竹嶋浦にて玉しける清きなぎさとよみたればいつくにも云へき歟 今もたゞ渚のきよきを清き渚とよみ少將内侍も 名所とはおもはれど今の歌によりて何となくよめるにても侍るへし 續後拾遺集仁和御時大嘗會悠記方をよめる大友黑主いせの海のなぎさを清みすむつるの千年の聲を君にきかせむ是清き渚所の名ならば清き渚にすむ鶴のさよむへきをなぎさを清みさよめるにても知るべし

古說 太萬毛比呂波牟 加比毛比呂波乎

庭生拍子九

爾波爾於不留加良名川名波唐音 與支好名々利波禮見
也比止乃宮人 左久留提不久呂乎袋 於乃禮己可介掛 太
利
拾遺集女のもさになつなの花につけてつかはしける長能寄をう
すみ垣根につめるからなつななづさはまくのほしき君哉師說お
のれかけたりさはなづなのみのなれるが袋に似たれば云へり宮
人の袋は官位によりてかはれり云々（頭注云）伊呂波字類抄云魚
袋本朝雜錄云古老傳云昔蛟龍化而爲人成害仍作魚袋「公卿金殿上
人銀」付之其後無害云々 令集解云養老六年二月廿三日格云太政
官謹奏停二止位袋一事右奉勅者行六位行授刀頭レ藤原朝臣房前上意
見一品以下初位以上位袋者一切停却者宜作齋囊者臣等謹撿衣服令
袋從位色緒別二正從一明二上下一當時裁從女功勞位衣袴將着反資欲
停即利伏請依彼意見永從停廢謹以申聞謹奏奉勅依奏和名抄云薺
推禹錫食經云「辭啓反上聲之重和名抄奈都那」一菜煮噉之私云今な
づなの實を俗に雀の巾著と云 同書幣紡切韻云袋囊名又金銀魚袋
唐令云諸官人魚袋並
令二中尙預造進一也

我門 拍子廿一
三段一段七二段六三段八

和可々止爾和加々止爾宇波毛乃上裳 須曾奴禮襦沾之
太毛乃下裳 春曾奴禮安左名川美朝菜摘 由不名川見夕
菜摘 安左名川美
安左名川美由布名川見和可吾 奈乎名之良知末久
保之欲 加良波美曾乃不乃御園生 見曾乃不乃
美曾乃不乃美曾乃不乃安也女乃己保利乃郡 大領乃末
名愛 牟春女 嫗本に鄕さ有いかゝ季 止以戸云 於止牟春女止 弟嫗以

戸云 えそいはめイ （頭注云）二段終有二美曾不三字一三段既二美曾
不乃五字一今因二梁塵一補二乃乃之二字一加二三段一
安也女乃郡愛子萬葉第六今は愛嫗なり 大領孝德天皇
二年其郡司嘛取國造性識淸廉堪二時務一者爲二大領少領一
又說止己曾以波女 （頭注云）小果字未詳
千由朝臣說

大芹 拍子廿一

於保世利波當歸 久爾乃沙多毛乃己世利小芹 己曾由天
天毛茄牟末之美 古禮也是 古乃此 前盤三多乃支由之柞
乃支乃盤牟之加女乃止宇筒 左伊可久乃犀角 左伊榮乎
左以箋止左以 鐵篦新猿樂兩面加須女宇介 習新猿樂記 多留
而有 支利止保之 雜徵 榮 加名波女盤木五六可戸之反 伊知
六二乎古註 乃左以也箋 四三左伊也 止奈禮盤 由之支乃 （頭注云）和名抄本草云當歸和名夜末未
世里一云於保世里又云字爲世里こせり、こそゆて、もむましてに
なは今にかなはず萬葉にも今さたかへるてにたばあり古今にも
秋の野に妻なき鹿の年をへてなそ我戀のかひよさめなくさある
下句は顯昭もうたかひを殘されたり師說 和名抄陸詞切韻云芹
「音勤和名世里」菜生二水中一也本
草云水芹味甘平無毒一名水英
今按萬葉集第十六詠二雙六頭一謌二一之目耳不レ有五六三四佐倍有雙
六乃佐緻（新點）和名鈔衆名苑云雙六子一名六采一今按簿塞是也簿
音博和名須久呂久「同雙六采楊氏漢語抄云頭子「雙六乃佐
以今按見二雜題雙六詩一玉篇云箋「先偕切行棊相塞日レ箋」 和名抄
四聲字苑云柞 音祚一音昨和名由之漢語抄云波々曾一木名堪 作レ槐種李云孟子盡心下以二追蠡一朱註蠡音禮盡

レ木蟲也新猿樂記云大君父者高名博少打也筒父擢傍筭目任意五四
倘利目四三小切目錐徹一六難吳流叩子平簺々鐵簺金頭定筒入破
云々古註くにのさたものは諸國より奉る物を云せんはんさんた
ゆしなさは皆木の名にて雙六の盤に用ゆる也むしかめのさうは
頭子を入る筒也むしかめは虫のくびたろかめをえり
たる也かなはめは盤のめにかれをはめ入たるなり

一說閑木　又說

淺水拍子十九

安左牟川乃波之乃止々呂蟲止々呂止不利降之安女乃
雨不利爾之古和禮乎我多禮曾誰古乃此名加比止中人
媒也太天々起美毛止乃御許加太知綰乎世字曾己之消
息止不良比故訪久留也來沙添字支牟多知也公達一頭注云夫
木廿懷中あさみつの橋はしのひてわたれさもさごろくさなる
そわびしき」和名鈔越前國丹生郡朝津（阿佐布豆）清少納言に橋は
あさむつのはし夫木鈔廿一定家こさづてむ人の
心もあやうきにふみだにもみぬあさむつのはし

又說世字曾己度

大路拍子十四二段各七

於保々知尒曾比天添乃保禮留上有安乎也支青柳加波
名也柳絮安乎也支加波名也
安乎也支加之名比乎莫莫然美禮波見伊末左加利今盛
名利也伊末左可利奈利也（頭注云）大路今案新京朱雀大路乎
大宮の西の小路ともうたへり朱雀
にしたり柳あるよし淺緣にみえたり於保々知爾假名有二不審一梁
塵作二於保平知衞一可レ用二本作二於保於知一一段第二安乎也支之也

字脫隨二梁塵一補レ之萬葉第十云率爾今毛欲見秋茅木
之四搓二將妹之光像乎以上頭注
神代卷上云其秋垂穗八握莫莫然甚快也伊勢物語藤花のしなひ三
尺六寸ばかりなむ有けり文選萋々闇𡖋等の字をしなへるさよめ
り

我門乎大路同音拍子十四二段各七

和可々止乎止散加宇散爾留乎乃己練男與之己左留良
之也縱木來有與之古左留良之也
與之奈之尒止散加宇散爾留乎乃己與之己左留良之也
與之己左留良之也西行（カウサマニユキ）雲眇々（頭注云）江談菅家御點東行（トサマニユ井）止散加字敢
はさまかうさま也爾留は徐歩なり右註七日節會二大將の假の
粧の具を給ふ陣の官人をはねりをさこさいへり陣は歩心なり

鷄鳴

止利波名支奴天不云可左左久良萬呂可之加毛乃乎
於之波之支太里爲天奉禮奈加古奈須萬天又奈可古須利天口（輿乎）
（頭注云）鷄鳴無章曲

刺楠體源抄云拍子十五源又說十六

左之久之波多宇萬利相似（頭注云）相似（たうじり）雖略記名々川安利七
有之可止雖太介久乃曾宇掾（古注）乃安之太爾朝止利取

與宇左利夜止利止利之加波左之久之毛奈之也左支无太知也

逢路 體源抄云 拍子十三 （頭注云）逢路は近江路也文字なかるのみ

安不美知乃近江路之乃々平不々支波也早比可須吹ふト通己毛知萬知持侍也世奴良牟痩之乃々平不々支也左支无多知也

（頭注云）順家集君きかはなけほさゝきす黑髮ふゝきになれは我もおさらす 皇極紀云山背の王の頭髮斑雜毛フヽサニシテ似山羊（ヤマシヽ）今案萬葉に小竹さかきてしのさよめりをふゝきは斑雜毛の左點によるに 山背王のみくしのみたれし山羊に似たる體をふゝきさいへは小竹の風に吹みたれたるを小竹の小ふゝきさいへる歟花のふゝきなさいへるを雪吹さかくさいへり是毛斑雜毛に叶へり比可須を判詞にふかすさかけるはヒフ通するも故歟是は不吹にてはあらす吹也をさめさひすさいへるも乙女さひするなり皆古語也旅に久しくすみたる人なさに秋風の小竹を吹きさふきぬる比さむき夜もすから古郷の子持たる妻の待や痩ぬらむはやく皈れさいさむるなり古註しのゝをふゝきは秋吹風のはけしきを云野分なさの類なり

今按千五百番歌合左たのむ共今はたのまじあふみぢのしのゝをふふき人はかりなり 顯昭判詞曰左歌は催馬樂にあふみぢのしののをふぶきはやふかすこもちまちやせぬらむしのゝをふぶきさ申歌につきてよめるなるべしゝのゝをふゞきは風の名さ申つたへたりこもちまちやせぬらむさいふ詞につきて人はかりけりさはよめるにこそそれもなしはかりにやたしかに詞をこゝにあきらむるこさはいかゞ大かた神樂催馬樂などのうたはふるき歌にて心得やすき事もあり又古語などまじりゆへありてなにごさゝ申あきらむべくもなきこさあり さこそ云々萬葉第十秋相聞吾妹兒爾相坂山皮爲酢寸穂庭開不ㇾ出戀渡鴨此歌によればしのゝをふゝきはしのゝをすすきさひさしきやうなれご皮の字檜皮（ヒハタ）などの時皆はたさよめれば萬葉の歌もはたすゝきさよむべければいかゝさおぼゆ 季云萬葉第十以下至ㇾ此七行本にけしてあり

更衣 體源抄云 拍子十三

己呂毛可戸世无也左支无太知也和可我支奴波衣乃波良野原之乃波良小竹原波支乃榛波名須利也花摺左支无太知也

袖中抄萩か花ずりの下此催馬樂を引て萬葉第七寄ㇾ木白菅之眞野乃榛原心從毛不ㇾ念吾之衣爾摺顯昭曰稱ニ大萩ー是歟古枝に花發（サク）なさ讀は此萩歟以ニ榛字ー用ㇾ之萩字は小萩歟但萬葉には皆以ニ榛字ー用ㇾ之同第十吾衣摺有春不ㇾ在高松之野邊行之者芽子摺類曾はぎのはなのきぬにうつりたるがすれる樣にみゆる也云々 又曰此催馬樂の更衣の歌に秘説あり春夏は萩の葉のずりやさうたひ秋冬ははぎの花ずりさ謡ふべしさ云々其れな秘説につきて譜にかきわけず惣してはぎは葉のすりさかきたるわろし 彼縄振の風俗になはのつふらえの（せなノ歟）春なればかすみてみゆるなはのつふらえさあるを秘説さて春夏は如ㇾ此うたひ秋冬はきりてもみゆるなはのつふえさうたふがごさし云師説榛の花すりは今榛の木ぞめさて此木の皮にて物を染る色にて云へりさればこそ寄木題にてまのゝはきはらさはよめれ萩の花すりは露なさにぬれて此花の衣につきたるを云へり榛さ萩さ兩樣に心うべし

何爲 體源抄云 拍子十三

伊可爾世无世无也平之乃鶯可毛止利也鬼鳥伊天々出由加波行於也波安利久止親步左伊名戸止與川萬波夜

左妻太女川也定 左支无多知也 （頭注云）なしかもさて鴛鳥も見のうちなればなしのか
もさりさよめり鄙曲伊佐立奈牟いさたちなむなしのかもさり水
まさらはさりそまさらむさいなむ階媒若綵れいの心なしのかゝ
ろわさしてさいなまろゝこそいさ
心つきなけれ云々河海罪さいなむ

陰名

久保乃名乎波名尓何止可伊不云（二反）川良多利介不久
奈宇太毛呂（二反）（頭注云）古註くほは奥ふかくかくれたる所を云なちくほは谷くほなさ云かこさし或人云川川
多利は十足也十分也けふくは穗をほのけさ云ことなりふくは吹
也なうは無也たもろは屯也 或は田面なり日本國中なり稲の實な
れる時風にも損せすたむゐして田を守り居れは十分の年さおも
へるなりひつきめは田を守女な云々（以上頭注）今按川頁多利以
下梁塵抄ニ作ニ川川多利介不久奈宇太毛呂
比乃奈加乃比川支女介不久奈宇太毛呂一

鷹子 源拍子十五 藤又謌十四 體源抄

多加乃己波末呂爾鷹呂（自稱）多波良无給天爾須惠天手
居安波川乃波良乃粟津原 美久留須乃眞栗栖 女久里邊
乃宇津良鶉 加良世无也將令狩 左支无多知也 體源抄猶朝葛云大饗の
引出物に用鷹時必す鷹子な歌也雅信の尊者にて被座けるに蒼鷹
な引出物に進せられたりけるに欲レ出時自取ニ拍子一鷹子を歌はれ
たりける爲ニ珍事一さ云々庇大饗にはうたはす御鷹飼不レ參故也貧
賢云母屋之大饗には鷹子な歌也是所以也本體は鷹山な歌也就レ
之有ニ云ニ大饗一之説レ云々（頭注云）神功皇后紀云狹々浪栗林あ
はつの原のみくるす野あはつのはらみくるす野共に山階鄕の內
にあるへし粟津は近江の粟津にあらす風俗の歌に相坂の關のこ
なたはなにさかやな君にあはつの心山しなや云々みくるす野は
今小栗栖野さ云同所なるべし
みさなさ共に御の字なるへし

道口 體源抄云 拍子十三

見知乃久知太介不乃己不尓國府 和禮波安利止我有 於
也尓親萬宇之太戸申給 己々呂安比乃加世也風便也 左
支无太知也（頭注云）和名抄北陸國越前（古之乃三知乃久知）武藏
吉見郡高生（多介布） 古註みちのくちたけふのこふ
に我はありさおやはにはつけよこゝ
ろあひの風さみろ歌なかくうたふ也

老鼠 以ニ梁塵抄一補レ之體源抄云亦名ニ西寺一拍子十

今按西寺拾芥抄云西大宮東二町九條坊門南歷代編年集成云延曆
十五年以ニ大納言藤原伊勢人一爲ニ造寺長官一建ニ立東西兩寺一古今
和歌集西寺の柳を僧正遍昭淺緑いとよりかけてしら露を玉にも
ぬける春の柳か季云古今以下至此けしてあり（頭注云）體源抄
大神景範記云林歌別裝束紫袍付ニ金鼠一又曰向レ西拾レ足之時加ニ三
度拍子一云々此外聲歌の詞あれさも此には似よらさることなれは
略之此曲西寺の老鼠さ云事あり老鼠
さは呂催馬樂也宴曲抄下靈鼠譽曰

尓之天良乃尓之天良乃於伊爾須美老鼠 和加爾須美
於无毛御裳 川牟川介左袈裟 川牟川喋 介左川牟川
保宇之仁法師 萬宇左无將申之尓萬宇世師匠申 保宇之尓
萬宇左牟之尓萬宇世 今按體源抄附葛云（本の）西寺ノ調に法藏
さ歌はひも事也薩者川むゝ袈裟つむゝ或
人云薩者は横に被名なりさ云々（頭注云）川牟川今案むちになり以
て喰らわむさ云つむ是乎えむしやうつみ又けさつみ宴曲抄下

呂歌

安名尊　拍子十四　三段（一段六、二段五、三段三）
安名尊多不止貴盛　介不乃今日　太不止左也伊介之戸古
毛波禮（頭注云）あな古遺語拾遺あなたふさけふのたふさいにし
へもかくやありけむけふのたのしさいへる歌也師說此た
ふさはたのしきを云欽明五年の貴盛をたの
しさもたふさしさも兩方に點せり云々
伊介之戸毛可久也安利介无也有　介不乃多不止左。也梁塵
奥入　安波禮　曾己與之也介不乃太不止左。也奥入　體源抄猶朝葛云安名尊
歌つれば新年はうたはざる也先年に左右を別て扇合あり事をは
りて御遊のさき政長朝臣爲二方人一安名尊をうたふ時故二條關白
殿新年を歌べきよし其仰あり政長これをうたふ間二方人嘲哢一政
長の云く一日の事人々嘲哢せらる更にあやまたざる事なり指二御
せあらむにをいては提坊（防乎）を忘べきよし前言耳にあり而る
に殿の仰によてうたはしむる處なり殿は大納言の弟子にてまし
ませば覚しろしめさゝらむや云々（頭注云）古註あ
はれそこよしやば歌のふしなり人をたつさふ詞なり

新年　拍子十四　三段（一段六、三段五、三段二）
安多良之支新止之乃波之女介也年始邇加久之己曾何久
志祉波禮（頭注云）古今大歌所おほなほひの歌あたらしきさし
のはじめにかくしこそちさせなかれてたのしきをつ
め日本紀にばつかへ
まつらめ萬代までに
可久之己曾川可戸末川良女也供奉頁女　與呂川與萬代
萬天介摩提丹（紀）
安波禮己曾與之也與呂川與萬天介

體源抄云資時入道云常不レ儛二年字一云々猶朝葛云安名尊をうたひ
つれば新年をうたはざる也朝覲行幸には必新年をうたふべき也
詞千金に直する故なり云々

梅枝　拍子十四　三段（一段六、二段五、三段三）
无女加江介梅枝　支爲留來居　宇久比春也鶯　波留春　加介
天波禮古今集春　者留加計天名介止毛雖鳴　伊萬太也未　由支
波雪　不利川々降
安波禮曾己與之也由支波不利川々
體源抄朝葛云梅枝には鳴くさゝの字を
ば御前の儀には不レ歌樣さもこ歌也

櫻人　拍子廿二　二段各十二
今按和名鈔云嗁木地久樂即歌有櫻人曲是也師說櫻人は難波人須
磨人と同し和名鈔尾張國愛智郡作頁此所なるへし萬葉第三櫻田
へたつ鳴わたるあゆちかたし
ほひにけらしたづなきわたる
左久良比止作頁人　曾乃不禰知々女其舟止　之末川多平嶋
津　田止萬知十町　川久禮留作有見天見　可戸利己无也歸將
來　曾與也曲節　安春加戸利己牟明日歸將來　曾於與於也拍子
詞　（頭注云）體源抄大神景範紀云いつれの比事にか大宮右大臣殿上
人時南殿の櫻さかりなる比うへ臥よりいまた裝束もあらためす
して御階の本にて獨化を詠られけり霞わたれる大内山春曙のよ
にしらす心すみけれは高欄によりかゝりて扇を拍子に打て櫻人
の曲を數度うたはれけるに多政方か陣直つさめて候けるか武帶
なきゝて花のもさにすゝみ出て地久破をつかうまつりたりけり

花ヶ狩衣袴をそ着たりける事はて、入けるとき櫻人をあらためて奏山をうたはれけるに政方又立歸て同急をまひけるいみしくつきしありける事なり　體源抄云地久此樂呂催馬樂櫻人合樂といふ所に田多ければ櫻田と云るにやその舟ちゝめは止めや河海には止止とし侍り　師說之衆川多は嶋津田にて嶋にある田なり童之集名取川わたりてつくる小嶋田ならんにつけつゝ夜かれのみすゝ

己止乎詞 己曾安須止毛以波女明日將言乎千可太爾彼方川萬妻 左留有（サアヒ通）世那波夫安須毛左爾己之也眞不來曾與左左（河海）曾於曾於與安春毛左爾己之也曾與也 （頭注云）二段は櫻人のこたふるなり彼方は嶋津田ある所をさせりつまさるは妻あるなりアとサと通せりせなは男女の中にていふにかぎらずせは兄の字なれは人をうやまひていふ也なは添たる字也されこしやにまことに皈りこしとや　師說古事記仁德御製ことをこそ菅とはいはめ日本紀木梨輕太子御歌ことをこそたゝしといはめ皆古語也ことはにこそなり

一說川末左留比止波

葦垣拍子卅五段各六

安之可支葦垣 末可支前垣 萬可支加支和介搔分 天不己春止超意 於比己須止負越 波禮（頭注云）體源抄云葦垣雜也西王樂の序なりてふこすは超の字なり音と訓といへりおひこすは負越なり源氏としへにける此家のとに祝言の句なれは致仕のおとゝうたひかへられたるにや

關詠合樂にも如此の事有なり

天不己春止多禮加（可河海）誰 己乃己止乎 此事（密事也） 於也爾觀 末宇申 與己之（讒日本紀萬葉）末宇申 之之

止々呂介留己乃以戸此家 己乃伊戸乃於止與女乙婦 於也爾觀 萬宇與己之介良之毛 （頭注云）今案とゝろけりはさかなきなどいへるがことし止

々呂介留以下只＝奥入＝補之　體源抄大神景範云長竹譜云西王樂葉垣と同音也又云以＝葦垣＝爲レ序以＝籠山＝爲レ破　續教訓抄云長竹譜云仁明天皇御作なり葦垣と同音なり舞は舞師大上是底力所作なり又云承和聖主御製作云々

（婦答）安女川知乃天地 可見毛神 可美毛曾宇之多戶證給 和禮我 波萬宇與己之萬宇左春不申（婦答）須加乃曾根乃根 春可名須哥奈支無實也 己止乎和禮波支久聞和禮波支久宇之可名戦哉（神武紀）今按萬葉第十春されば卯花くだし音越　詠の垣之は古事記にけんにも同十三葦垣之末搔別而君越跡人丹勿告事杏謂細利此等の歌によりてつくるにや

山城七三段各九 代目）體源抄三段拍子各十合拍子卅　目錄拍子廿　又云夏也西王樂のことはふりなりと畢

也末之呂乃古萬狛乃和太利乃渡 宇利川久利瓜作 名與也良以之奈也曲節 佐伊之奈也同上 宇利川久利宇利川久里波禮（頭注云）給雑下音にきくこまの渡りの瓜つくりとなりかくなりなこゝろかな大納言朝光　萬葉第六こま山に鳴ほとゝぎす泉川わたりを遠みこゝにかよはず　蜻蛉日記千代もへよ立かへりつゝ山しろのこまにくらべし瓜の末なり

宇里川久里和禮乎我 保之止伊不欲云 伊加介世先如何將爲名與也良伊之奈（名） 也左伊之奈也以可耳世介以加介世介波禮（頭注云）古今足引の山田のそほづおのれさへ我をほしといふうれはしきこと

以加尒世牟奈利也志那萬之（頭注云）萬之以上以奥入補レ之 宇利多川萬天尒也良以之奈也左伊之名也宇利多川末宇利多川萬天尒波禮（頭注云）古註なりやしなましはうりつくりの妻になりやせましさなりうりたつまでには瓜のなりたつまてに猶やますほしさいふ心なり 續教訓抄第四末云西王樂古樂此破山城歌音振樣也又上書記鷹山音也眞僞難决長作譜云上件の花賀の將笛曲を作ら仁明天皇の御作なり序事也葦垣と同音也舞は舞師犬上是成力和舉𫞂御製作以葦垣爲序以鷹山爲破云々

又說第二段第三段 和禮（我）乎曾保之（欲）止以不名利也波之奈萬之

今按體源抄朝萬云山城歌詞にらいしなやさいしなやさ云詞葛城之詞に乎志止止云詞等其童謠之詞さも也たさへば近來の童謠にやれこさつさうせいさらなりさ云義なり云々

前日

眞金吹目錄拍子十八二段各九山代同音體源抄二段拍子名十合拍子廿

萬加禰不久鐵吹（鍛冶）支比乃吉備名加也萬中山於比爾世留帶爲奈與也良以之名也左伊之奈也於比爾世留於比爾世留波禮（頭注云）眞金吹歌脫以二梁塵抄一補之

於比爾世留保曾太爾乃細谷加波乃川於止乃音左也介左清良以之名也左伊之奈也於止乃左也於止乃左也介左也

今按古今集大歌所御歌まかね吹吉備中山おびにせる細谷川の音のさやけさこのうたは承和のおほむべのきびのくにのうた云々

竹河拍子十四二段各七

太介加波乃多氣河波之乃橋川女端名留也在波之乃川女名留也波奈曾乃爾花園波禮（頭注云）伊勢國多氣郡夫木たけ川やえた野をみればはるさ山田の原の松はくもれる際心法師

波名曾乃爾和禮乎波我波奈天俺又放置也也和禮乎波波名天也女左之多久戶天（頭注云）今案あまのめさしのおさなりせばさいへる歌によればめさしは童女のとさみゆかひつものなさを入る籠をめさしさいへるはかこはめをさしくむものなればいへる歟それを持て海邊へいつればめさしさ海士の子をいへる歟 又和布をさしされはめさしさ名付る歟 伊勢名所集云竹河齋宮の頓て西の方なる村也延喜式齋宮群行の時此所にて前鎭の祓あるよしみえたりたけかはの橋の齋宮のましくける昔は橋も有しさなり其近きほさに今も花園さ云所あり皆民の田地にほりなしたれは古の花園の跡のしるしさて橋なさは殘しおけり云々伊勢國新後撰くもりなく月もれさてや川口のせきのあらかきまさほなるらむ後嵯峨院

今按六帖竹河の橋のつめなる花ぞのに我をばはなせ（はなて）めざしたぐへて河海抄云竹河大和國宇陀郡有ニ竹河流一之由見ニ舊記一云々和名抄云大和國宇陀郡多氣此乎

河口拍子十四二段各七

加波久知乃河口世支乃關安良可支也荒垣世支乃安良可支也末毛禮止毛雖守波禮萬毛禮度毛伊天天出和禮我禰奴也寢畢以天々和禮禰奴也世支乃安良可支

又說伊天々安比爾支也

今按六帖第二川口の關あらがきまもれども出て我ぬる忍び忍びに同川口の關のあら垣いかなれば夜の通ひたゆるさざる

覽

美作拍子十五

美作二段(一段八、二段七)

美萬左可也美作 久女乃久女乃久米左良也萬讃良山 左良

更左良爾名與也左良左良爾奈與也

左良左良爾和可名我名 和可名波太天之不起 與呂川與

萬天爾也 萬代迄 與呂川與末天爾也 今按古今集大歌所御歌美作や久米のさら山さらくに我名はたてじ萬代までに これは水尾のおほむべのみまさかの國の歌體源抄朝葛云美作呂歌美作歌振は 柳花苑に合なり

これによて面白き也上古催馬樂をもて作る樂なる流例也以樂之音曲合歌天歌出み證如此云々

藤生野 體源抄二段拍子各八今拍子十六

不知不乃々可多知可太知加波良乎 香拍原之女波也之標

生 奈與也之女波也之奈與也 (頭注云)袖中抄作瓜生野古註ふちふのゝかたちか原にしめはやしいつきいはひししろく時にあへるかもと云歌也藤生野に神の社あるべし

之女波也之以川支齋以波比之齋之留久著 止支爾時安

戸留合 加毛也止支介安戸留合 可毛也

今按日本後紀云天長八年二月戊寅 新築山城國綴喜郡香達池百姓所願也好忠家集ふちふ野に柴かる 民の手もたゆくつかれもあへずかぜの寒さに

婦與我拍子九

伊毛止妹與安禮止我伊留左乃也末乃入佐山也萬山安良

良支闇天名止利不禮曾也手勿取觸 可保顏乎香 萬左留增又薫

可歟爾也止久德 末左留可爾也(頭注云)入佐山但馬 八雲御抄師說未勘國 御撰秋下梓弓いるさの山は秋ぎりのあたるごとにや色まさるらん宗于朝臣 鄙曲伊佐立奈乎いざたちなむなしのかもさり水まさらばこくぞまさらむ 庶人三臺詠云あらゝきの末に花さくこゝしばかりはかぜなふかせそ安良良木はかふちばかりにきてれぬれば心かうばし古註以止久為毒關不開有毒依茲為德焉 鄙曲のいさたちなむを内宮年中行事にうたへるは結句をこみそまさらむさいへり富も德も大やう似たるこゝろ思ひ侍る

一說可保萬左留加爾也 止久萬左留加爾也

今按六帖我せこがいるさの山の山あらゝき手なさりふれそ香もまさるかに允恭天皇二年紀云初皇后隨母在家獨遊苑中時鬪鷄國造從傍徑行之乘馬而莅籬謂皇后嘲之曰能作園乎汝者也汝此云那鼻苦也且曰壓乞戸母(イデドジ)其蘭一莖焉(壓乞此云異提戸母此云覩自)和名抄蘭隱居本草注云澤蘭(和名佐波阿良々木一云阿加末久佐)生澤傍故以名之

奥山拍子九

於久也末爾奥山支々留也木伐乎知老翁(神代紀)支也波介

川留伽末支也木 波介川留支介川留乎知 (頭注云)奥山樹梁塵抄作奥々

山

奠山爾目錄拍子十二

於久也萬爾支名可須木流　左可支加乎知老翁　支也止支

木蒺也哉乎止　萬支也波介川留支也波介川留支介川留

乎知（頭注云）萬葉十ひだ人のまきなかすてう丹生の川こさはかよへさ舟そかよはぬ　同十三長歌略　なのさりてにふのひ山の木こりていかたにつくり

鷹山拍子十六二段各八（傍注云）禮源抄云冬なり西王樂の破たり

太加也末爾鷹山多加乎鷹太可乎波名知安介放揚乎久乎乎

名美安波禮乎久乎奈美波禮（頭注云）山城の所にくはし久乎名美古註おくは鷹を木に居置也をなみに女也云々

乎久乎那美和可春香和可須留止支爾香爲時　安戸留合

世奈昔可毛也安戸留世奈可毛也

又說安戸留之裏加毛

此殿者

己乃止乃波此殿　牟戸毛諾　止美介利富　左支久左乃福草

安波禮左支久左乃波名禮々（頭注云）此歌脫以奧入歌補之

左支久左乃美川波三葉與川波乃四葉奈可介中　止乃川久

利世利也殿作爲　止乃川久利世利也　師說古今集序いはひ歌此殿はむへもさみけり

さき草のみつはよつはにとのつくりせり源氏初音にこのとのうち出たるはうしいさはなやかなりおとゝもさきく〳〵發うちそへたまへるさき草の末つかた、いとなつかしうめでたくきこゆさいへりむへもとみけりは諸の字宜の字などをむべとよめりけにも聞つるごとく富けりの心也さき草はみつといふべき枕詞なり和名鈔云文字集略云莔（音娜和名佐木久佐日本紀私云福草）草枝々相値葉々相當也延喜式治部省式云福草瑞草也朱草別名也生宗廟中此草枝々葉々かたゝがひなられば中をそへてはみつある故にみつはとつゞけたり又令義解神祇令云三枝祭（謂率川社祭也以三枝花飾酒樽祭故曰三枝也）これは三枝の花を福草になずらへて酒樽を飾く神に祭る故にさいくさ祭と名付る歟萬葉第五長歌にさきくさの中にをねむとゝあるもみつある物には必中ある故につゞけたり枕草子にひのき人ちかゝらぬ物なれどみつはよつはのとのづくりもおかしさかけるにて後の人檜の木の異名とおもへり清少納言もしかおもへる歟只詞をのみ取ていへるにも有べしみつはよつはといへるは軒の三端四端にかさなれるなり重閣の三層四層にも又こなたかなたに作りたる殿の軒の一所に集りて重れる心にも有べし今案此歌を内侍所の殿作りをよめるといへる說且て無所據說なり用うべからず

此殿西

己乃止乃乃此殿　介之乃西　爾之乃久良加支倉垣　波留比

須良春日　安波禮波留比春良波禮（頭注云）此歌脫以梁塵歌補之

波留比須良由介止由介止毛雖行　川支須不盡　爾之乃久

良加支也爾之乃久良加支　今案このとのゝにしのくらがき春日すらゆけどもつきずにしのくらがきさと云る歌なるべし

又說

紀伊國拍子十六二段（一段九、一段七）

支乃久爾乃紀國之良良乃白真波末爾濱末之良良乃波
末爾於利爲留可毛女下居鷗波禮曾乃其太末玉毛天持
己米（鷗答）可世之毛風不介波吹名己利之毛餘波太天禮
波起美名曾己水底支利天霧波禮曾乃太末美江春不見

（頭注云）萬葉十六紫のゆかたのうみにかつく鳥たまかつき出は
わか玉にせむ　兼盛集君か代のかすにもとらむきの國のしらゝの
濱につめるいさこを大木寛治三年四條宮扇合歌かもめゐるしら
らの濱の水底にその玉みゆる秋の夜の月よみ人と不知　今案萬葉
に天の中務とかきてあまきらひとよめりきりて
は遮る心なりあまきる雪とよめるも同し心也

本說可世之毛不以太禮波奈己利之毛太天禮波又件歌本四段也而只用二二段一

其歌段詞云（頭注云）詞云此下脱二二段歌一乎

石川拍子十五三段（一段六、二段、三段三）

伊之加波乃石川己末宇止爾高麗人於比乎止良禮天帶所
取可良支久以須留苛悔爲（己比須留河海）（頭注云）體源抄第九石川中曲此樂は石川と申催馬樂に同音也　久以假名違有二不審一悔久比也河海抄亦作二久以一云くやむと云ときやいゆえよの行なりくい是也
伊可奈留如何在以可奈留於比曾波奈多乃花田於比乃奈
可波多中綿伊禮奈（多河）留加不入歟（加字なし河）

可也留可安也留加奈可波太伊禮太留可入而有歟　左河

（頭注云）可也留體源第九石川の注にかやるかやるかは人に物とら
するを云也　石河大和國高市郡にあり河内にもあれと昔高麗等の
國より來化せる人おほく大和におかる日本紀に今來郡といへる
は大和にはなし高市郡に今來あり此名も異國より今渡り來たる
者をすゑおかせたまひける故の名とみえたり　師說又云いはゆる
石川は大和國高市郡の石川もしは河内の石川なるへし長明の石
川やせみの小川とよまれたるは加茂川の別名にてこゝにてはあ
るへからす姓氏錄河内諸蕃下大狛連出レ自二高麗人伊利斯沙禮斯一
也大狛連出レ自二高麗溢士福貴王一
也島木高麗國伊理和須使主後也

異說奈可波太以禮太留可

今按續日本紀孝謙天皇天平感寶元年冬十月乙亥幸二石川之上一
志紀大縣安宿三郡百姓年百以下小兒已上賜レ物和名鈔河内國石
川「以之加波」郡志紀大縣安宿並河内之郡名也奈可波多伊禮奈
留加中綿不レ入歟也奈留左留也音通綿假名以二和多一「奈留乎」後
人誤爲二中絶一雖二高麗人一取二於中絶之帶一
而何爺有二袖中抄河海抄等亦與レ今同

葛城拍子廿二三段（一段六、二段七、三段九）體源抄云雜也（頭注
云）體源抄大神景範記云榎葉井抑此曲承和帝ノ御作雜犬上
是成作之催馬
樂葛城同音

可川良支乃葛城天良乃寺末戸名留也前在止與良乃豊
浦天良乃寺爾之奈留也西在
江乃波爲爾榎葉井之良太萬白璧之川久也沈（萬葉）末之良
太末好璧之川久也於之止々止於之止々（頭注云）此葛城
の歌は光仁紀に

ある童謠を歌ひ損せるなり葛城寺乃前在也豐浦寺乃西在也於志止度刀志止度櫻井爾白璧志豆久也好璧之豆久也於志止度刀志止度然爲波國曾昌由流也五家其曾昌由流也於志止度刀志止度手時井上内親王爲レ妃識者以爲井則内親王之名白璧爲天皇之諱盖天皇登極之徵也これをもて引合て知へし葛城寺の前豐浦寺の西といへるは葛城寺は西にありて東に向ひて其西の方に櫻井榎葉井其名大きにたかへり又昔より葛城寺則豐浦と心えけるにや葛城にてえのはゐを尋ねけるよし無名抄にかゝれたり長明歌にかつらきや豐浦の寺のえのはゐに猶しら玉をしつく月影豐浦ノ寺は高市郡なり此故に萬葉第八故郷豐浦寺といへり元明天皇藤原宮より奈良宮へ遷らせたまへる故に彼集には明日香川の邊をさして故郷といへり葛城寺は葛上郡なれば更におなしからずかつらぎやさよらの寺の秋の月西になるまで影をこそみれ是又長明歌と同じやうに心えてよめり白璧をしら玉とうたふは推量するに璧を壁と見たかへたるべし紀に五家其曾とあるは此歌によるに五は吾の字の下の口の落たるなるべし師說

之可之天波然而 久爾曾左可江无也國將昌 和伊戸良曾
止美世无也吾家將富 於々之止々止々止之屯止於々止屯止
止之屯止 （旁注云）葛城寺の前豐浦寺の西といへるは葛城寺は西にありて東に向ひ豐浦寺は南などに向ひて其西の方に

櫻井は有無櫻井榎葉井其名大きにたかへり標註の落字このとある也

體源抄朝葛云清暑堂御神樂には葛城を歌也又臨時客に歌レ之云々無名抄云或人云宮内卿有賢朝臣時の殿上人七八人あひさもなひて大和國かつらぎのかたへあそびにゆかれたる事ありけりその時ある所にあれたる堂のおほきにやう〳〵しきがみゆければあやしくてその名をあふ人ごとにさひけれどもしれる人もなかりけりかゝるあいだに事のほかにびん白き翁ひさりま見えけりこれはしもやうあらむとてたづねければこれなむさよら寺と申さいふ人々いみじき事也と返々感じてさるにてもしこのへんにゐのはゐといふゐやあるととふみなあせて水も侍らねどあとは今に侍りとて堂より西いくほどならぬほどにゆきてなしへければ人々奥に入てやかてうこにむれ居てかつらきといふ歌數十返うたひてこの翁にきぬどもぬぎてかづけたりければおほえぬことにあひぬとてよろこびかしこまりてさりにけるとぞ

此殿奥拍子十六 二段一段七二段八

己乃此止乃々殿於久乃奥於久乃左可也乃宇波多末利
安波禮宇末太萬利波禮（頭注云）古註うはたまりは酒屋に酒をうる女を云
宇波太萬利和禮乎我和禮乎己不良之戀己左可己惠小
坂越奈留也己惠奈留也 （頭注云）已惡のかなあしゝ聲歟

我家拍子十一

和伊戸乎波吾家止波利幌帳毛多禮太留乎垂而有於々保
支美支萬世大君來座 无己爾世无聟將爲 美左可奈爾奈
爾與介无御肴何將好 安波比鰒左多乎加可世石陰子與
介无安波比左太乎可加世與介无 （頭注云）延喜式螺さゝひ崔禹錫食經云榮螺子「和名左左比」「似蛤而圓者也さたをかは是乎 本草云石陰子「漢語抄云甲贏加也」此物在海中陰精故以名レ之

古說此留眞无也比久眞无也安波比乃之万奈留之万男 此說今不レ用

今按體源抄朝葛云執聟の家臨時客には吾家を歌ふ云々

青馬 拍子十二（旁注云）體源抄云春也（頭注云）云體源抄大神景範記云夏引樂初拍子五已下八此曲笛承和帝御作舞是成作催馬樂青馬歌音也

安乎乃駒末波奈禮波 馬放 止利川奈介 取繫 左乃乎 小青
萬者奈禮波止利川奈介之乃伊左也乃之乃左也乃左世
己可比己 孫和名彦比古和名 名留左以論語末多波太 又將 論語乃多
以支乃 大伎 和良波乃 童 左世己加比己奈留左伊論語

（頭注云）驄馬說文云驄「音聡」一漢語抄云驄青馬也黃驄馬葦花毛馬也日本紀私記云美太夏乎乃字万胄白雜毛馬也　多以已下十三字以二梁塵抄一補レ之

淺綠 拍子十二
安左美止利 淺綠 己以 濃 波奈太曾女 花田染 加介太利止毛
懸有 美留萬天爾見迄太萬比可留 玉光 之太比可留 下照 新
京朱左可乃 雀 之多利也奈支 垂柳（万十） 萬太 又 波太爲止
奈留 田井成
前栽安支波支 秋芽子 奈天之己 瞿麥 可良保比之太利也奈
支（頭注云）万太波太爲止奈留梁塵抄作二万太伊太爲一止名留一兩解二又成二板井一古註からほひは唐葵也
今按萬葉集第十淺綠染懸有跡見左右二春楊者目生來鴨　凌雲集云和二菅祭酒賦一朱雀衰柳一作　皇城陌上楊將レ柳雨々三々夾レ道斜　晴昔榮華都不レ見今時憔悴一應レ嗟　古今集花さかりに京をみやりて素性法師　みわたせば柳さくらをこきまぜて　みやこぞ春のにしき成ける

妹之門 體源抄云拍子十二源又說廿二
伊毛可可度 妹門 世奈可背 々止由支須支可爾天也 行過不勝 和可由可波 吾行 比知可左乃比知可左乃安女毛也不
良奈无 降 之天多平左 賤田長 安萬也止利 雨宿 可左 笠 也止
利也止利天末加良无 罷 之天多乎左（頭注云）源氏須磨ひちかさ雨とかふりて　古註
ひちかさ雨とは俄にふる雨の笠も取あへずして袖をかつぐ雨也
今按萬葉集第十一妹門去過不レ勝都久方乃雨毛零奴可其乎因將レ爲袖中抄云して田をさは田つくる物なりしづのたをさなりして　こしづさは同音なり

席田 拍子十二 二段各六 體源
无之呂太乃无之呂太乃伊川奴支加波爾也須无川留乃
住鶴 伊川奴支加波爾也須无川留乃 第二伊川奴支加波以下十三字以二梁塵抄一補レ之（頭注云）新拾席田に千年をかねてすむ鶴も君がよはひにしかしこそ思ふ　師光　金賀君が代はいく万代かかさぬべきいつぬき川の鶴の毛衣　藤原道經
須无川留乃 鶴 須无川留乃知止世乎可爾天曾 千年兼 安
曾比安戶留 遊會 あらそふ 夫木廿二 與呂川與呂川與 万代 加爾天曾安曾
比安戶留與呂川與以下十三字以二梁塵抄一補レ之
今按體源抄催馬樂目錄云席田美濃元慶悠紀風俗又朝葛云莚田の初段には接[illegible]をは二度不レ唱也主上の御前にて歌には身を堅く心な

皆て主上に對し奉て帝徳を褒たてまつる如くにて可レ歌也云々古今集みのゝ國せきのふぢ川たえずして君につかへむ万代までに
これは元慶のおほむべの美濃のうた云々三代實錄第三十一云元慶元年四月十九日庚寅卜定悠記美濃國席田郡主基備中國都宇郡並卜食六帖國みの山にしげりかさなる云々作者大伴黒主師説いつぬき川の歌も六帖の歌も此時の歌にて作者も黒主なるべし

鈴之川 體源抄拍子九

須々加々波鈴鹿河 也曾世乃八十瀬 太支乎湍 美名比止乃皆人 女川留惑 毛之留久著 止支爾安陪留時合 止支爾安陪留可毛（頭注云）古註すゝか川八十せのたきを皆人のめづるもしろく時にあへるかもと云歌也

酒飲 拍子八

左介乎酒 太宇戸天給 太戸給 惠宇天醉不敷季云 太不止己利 ○ 曾牟梁懲 梁塵作レ己利牟曾也 萬宇天久曾留梁止來與呂保比曾末宇天久留々々々々々 々々々々々 梁塵抄無二此重點一而作二多牟名多牟奈太利也且无奈多利知利宇二〈宇ノ字體源九ニハ且ニ爲二表ニ笛聲一歌之曲節一と（旁注云）體源第九與此説同
今按體源抄朝葛云箏彈某云催馬樂酒飲と有朱胡德樂と只一甲相替と云々
〔頭注云〕續教訓抄云胡德樂催馬樂酒飲合「多忠節記」一町くたりよろぼひ出て世なみれは物のことわり皆しられけり慈鎮の詠といへり體源抄云唱哥事成佐云く唱歌詞は百濟國の語なり我朝の音樂濫觴は百濟國より渡るなりたりけり如此の詞なり皆彼國語なりと云り云

田中井戸 梁拍子十 （旁注云）體源十一末催馬樂同音樂者催馬樂所に注胡飲酒破と田中井戸全無相違云々

太名加乃爲度爾田中井戸 比加禮留太奈支 田水葱（和名川女川女 摘摘 安己女己安己女 〔頭注云〕體源抄大神景範記云胡飲酒破是も中心拍子なりされども呂歌田中井戸に合たる故に樂拍子を用たるなめり但歌に合時少しのそぐさころある也一拍子を打へきなり 夫木かはつなく田中の井戸に日はくれてなもだかなびく風わたるなり寂蓮 此歌によれは田なきをもたか同じ物歟たつぬべし 古註田を作らむためおきいひて溝をほりて水をためたる也其水を田にまかせ入し日を井戸と云なりあこめはいやしき女をいふへし 類字名所和歌 田中井戸屬紀伊國今案ひかれるは葉のぎら〳〵とひかるを云乎

多太利良利太奈可乃己安己女

美濃山 體源抄拍子十又説廿 藤源 備前國悠紀風俗

美乃也萬爾之々爾於比多留太萬加之波止與乃太可利爾安不加多乃之左也安不加太乃之左也
今按六帖國の題の歌に大伴黒主みのの山にしげりかさなる玉拍さよのあかりにあふもたのしさ梁塵抄此歌は承和帝の大嘗會の悠紀の風俗の歌也云々 續日本後紀第一に仁明天皇天長十年三月戊子朔己酉卜定大嘗會事以近江國高島郡爲悠紀備中國下道郡爲主基云々 天長十一年則承和元也和名鈔備前國御野郡御野（美乃）體源抄説近い是不知何ノ御代風俗

大宮 拍子十

於保美也乃爾之乃西 己无知爾小路 安也女漢女貞觀儀式指女云 己无太利子産有 左（かさ返）也女己无太利多良利也 曲節

輪太名（頭注云）今案大宮は洛中の大宮乎にしのこむちは西の小路

見たりあやめは菖蒲によせて女をよめること常の事なりこゝに
ては只菖蒲によせれとも女をよめりと見ゆこむだりは子を產た
るなり中略とみゆ仁德天皇茨田堤鴈產る時武內宿禰にとはせ玉
ふ御製にもあきつしまやまとの國にかりこむとなはきかすや上
下略答歌にもあきつしまやまとのくにかりこむとわれはきかず
云々如此御贈答の歌に產をこむと中略してよみ玉へはこゝも子
產したりに
てあるへし

又說止利己止爾利　又多々介己无太利

體源抄資忠記云倭舞の歌は宮人を用るなり「笛者左笛」舞作法
座を二行に敷て先出て居也袖を攪合す次伏時互に二度次立て
番寄てと四度次居て如レ初の袖
攪合て伏時二度して退入なり

角總拍子十

安介萬支也總角　止宇止宇曲節　比呂波可利也尋許　止宇
止宇左可利天爾太禮止毛雖寢　萬呂比安比介利轉顚　止
宇止宇加（添字）與利安比寄合　介利止宇止宇　（頭注云）拾遺集戀に人麿竹
のはにおきゐる露のまろびあひてぬるとはなしに立わかる哉實
方家集ある女に文やりたるかへりことにあけまきをむすひてを
こせたれはひろはかりさかりてまませとまろれせむそのあけまき
のしるしありやと　今案猿樂の三番叟とやらむに此歌をとりて舞
を傳へ秘事と
可レ笑

又說　左可利天爾太禮
止毛止宇止宇

本滋拍子廿二段各十

毛止之介支本繁　毛止之介支支比乃吉備　奈加也末中山
无可之與利昔自　无可之加良斯　无可之可良　（頭注云）もとしげききびの
无可之與利名乃名　不利古古奴波不來　伊末乃今　與乃代
多女爲介不乃今日　比乃日　太女

中山昔より名の古こぬは今の代のためといへる歌なるへし今
案此歌いつれの御代にても吉備國の大嘗會の歌なるへし

眉止之女拍子八

美萬久左祿　止利可戸取飼　萬由止之女末由止之女々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々

（頭注云）體源抄　酒清子催馬樂合謂ニ眉止白女一也早物　續教訓
抄第四末云酒清子古樂小曲堀河左大臣入道殿の說云酒清　司薗還
鼻胡德樂破本より師說なけれども吹之眉戸自女酒飲へてといふ
催馬樂に音振だかふことなし彼哥を吹なりとそ仰られける六條
入道蓮道も催馬樂に眉止自女と云歌を吹につゆたかすといへり
いにしへのまゆとしめにもあられともきみはみまくさとりてか
ふとか催馬樂にみまくさとりかへまゆとしめといふこ
とのあるをよめる也まゆとしめとは馬あひをいふなり

又說　於保美支和可世萬由止之女拍子同打

今按夜鶴庭訓抄云酒清子は「和名鈔作ニ酒淨
子ニ」眉止白女といふ催馬樂を吹なり云々

無力蝦拍子六

知可良奈支可戸留無力蝦二反　保禰名支美々須無骨蚯蚓

一反（頭注云）淮南子云蟲無筋骨之強　體源抄云吉簡呂歌無力蝦
に合と串たり此曲極秘曲也古註みゝすなはかへるか取て食
物なり故に對し
ていへるにや

難波海拍子十

名无波乃難波　宇美海　名无波乃宇美己支毛天　漕以　乃保
留泝乎不禰小舟　於保不禰大船　川久之川萬天爾筑紫津迄
以末須己伊今少　乃保禮也萬左支萬天爾山崎　（頭注云）難波なんば
といへるは音によめるにはあるべからず只なにはといへるを歌
のふしにてむとはぬるなるべし（勞注云）つくし津までにとは地
の名なるべし筑紫より京へのぼる人の舟にてそこのあたりまで
くれは筑紫津といふ歟今すこしのぼれ山崎までにといへば山崎
より下の方
なるべし

體源抄云

藤家不傳歌

律

貫河　東屋　大路　逢路　道口

呂

此殿西　此殿奥　鷹山　鈴香河　奥山
奥山介　青之馬　妹門　我家

源家不傳歌

律　呂

老鼠　无刀蝦

兩家共絕歌

律

我駒二段　澤田河三段　鷄鳴　陰名

呂

河口　大宮　紀伊州奥三段

萬葉緯卷第九

體源抄

奥書云豊原統秋判云々　續礫集云豊原樂人統秋（豊筑後正四位下）と云者あり邪も後柏原院御師範たり又歌道も無手ならず逍遥院實隆公の高弟なり風流の者にて隱者なり云々　雪玉集云統秋身まかりける時いたみの十首の內めのまへにきえぬ面影ものいはゝたえず昔のことやかたらむ

風俗

前朝葛新作續教訓抄「體源內」云四條大納言（公任）の仰られけるは風俗うたはぬ人雨日の徒然をいかにしてかくらすらむと云云又古人風俗をば世人皆律歌と思ふしからざる也呂律相分也呂樂律歌可尋之又云風俗は諸國の古風を集る也故に諸國の風俗多在催馬樂中事也廣河（本の）限催馬樂雜藝今樣童謠之詞此多是風俗之流也云々今按催馬樂風俗等其所集同而至曲節音聲有別乎（皆乎）體源普讚下以片假名書做於奥入河海所引催馬樂改眞名假名適奥入以上野歌一首書眞名耳然風俗譜亦元書眞名假名明矣本朝書籍目錄風俗譜一卷云々體源與拾芥風俗目錄合符節依以拾芥目錄書于茲而今體源所不載風俗諸書所出亦載于茲（頭注云）朝葛云風俗は古人は戲言の口すさひのやうにうたひし今世近方よりしたゝかに成たる也云々　古今顯注縁わかめかるたごの浦の中にいれのあまはさうたふは丹後國與謝の海のたこの浦也いれのあまもそのうみにありこれは湖海也云々　康富記云文安五年山城國大住庄內隼人領大嘗會田中て田地一町二反有之大嘗會時參洛於官廳奏風俗舞人役是也

拾芥抄風俗部（有雜藝）

鳴高（又號大宮）　難波乃都　布良江（寬筆如此乃字無之）　玉垂　知知良

良　東道　筑波山　甲斐加禰　伊勢人　菅村　常陸歌

荒田　大鳥　八乙女　我門

（寬筆次第付如此歟）

雜藝

東遊　今按以下只有名目體源等無章曲所謂稱東遊古所載朝野群載東舞與代代勅撰所載東遊求子謂異名實爲一依茲不出章曲然委註別卷寬筆皆以神女駿河國有度濱天降事爲詠故稱東舞後世倣其風新詠歌爲神遊之應依茲稱東遊歟求子意未詳或曰東遊神社被奏經每度被讀替云々雖然未見其證如何

朗詠

愚問記（體源內）云文應元年十一月六日今夜清暑堂御神樂拍子合也中院御代始也云々御神樂こと終御遊催馬樂安名尊次鳥破次むしろ田次鳥急次反平調伊勢海次萬歲次更衣次朗詠佳辰令月徳是北辰云々　今按大納言公任卿所撰朗詠集之詩應時宜詠歎句中或取音或用訓其見節曲之詩與其和歌詠歌曲節音聲歎因彼從古所奥秘朗詠訓點現在焉（頭注云）文選賦係具公天台山賦云凝思幽巖朗詠長川（伊庭丈）

今樣

體源抄（朝葛記）云今樣事歌唱音なりこゑあしき者のうたふはきかまほしくもおぼえずむつかしき也前草は始はくぐつにて後には遊女になりて雨の事をしりてめでたかりけり前草がいひけるは歌は第一の句の短く歌て吉なりとそいひける又云今樣は本體は律なり然而呂律俱に存也くゝつのやうは呂音に歌なり比丘法師の歌は呂音也而傀儡の體にあらで直く歌ながら呂音に歌がめでたき也　又云呂歌は揚聲にて不久て迅くおろしてうめきにて違に延々待聽るなり律者商を迅拾て早ながらのどかにきこゆるこそは聞よけれ早く歌も振を大浪になみよりて歌はのどかにきこゆる也忠季云く今樣近來其程延たり今樣は四句なり而一句各一息なり仍其程つゝまやかにありしなり又云今樣は歌者のつゝみて唱は必ず歌ひ損ずる也傍若無人に思て歌が不損なり

又云聲はつよくうたへば揚る緩へて歌へば下るなり又聲は吉朽ぬるときは常はありながら大音になる也忠政は政長が說をうけて歌笛を知る人也其が今樣の歌笛は習なきを彼人の付て吹けるは成にめでたかりけるなり律の催馬樂笛の調を其振舞にて今樣を吹ければめでたかりけり云々（頭注云）百練抄高倉天皇承安四年九月一日於太上法皇御所（法住寺殿）有今樣合事撰定堪能輩卅人十五ヶ夜間每夜一番被レ決ニ雌雄ニ師長資方卿等爲判者十三日御潤今樣合之次有御遊上皇令歌今樣給希代之美談也

古柳　風俗內備ニ我門ニ歌是乎可レ尋

田歌　未レ知ニ其說ニ

沙羅林　體源抄云眞教訓抄に所レ載の音曲さ中は一節ある事見たり法文歌習あまたありいはゆる沙羅林のやうさ云常の今樣よりは少しふりのへておほやうにあはれなるていに歌のべしさあり只今樣のやうに歌ひて此事をわくものなしおほやけなりなさ云てにくみて今は沙羅林（所の名を名さするとあり）がやうはうたはぬあるまじき事なり早歌さて郢曲世にもてあそびしなり是は悉雅樂の音聲をたゝして七音七音皆其源をもさづく殊勝の物也これもさる間世に數奇なくなりて今はきゝしる人もまれなり雅樂に屬す

早歌　片下　物樣　躰源抄云敎訓抄云所の歌ひは又別なるにこそ法文の歌今樣片下早歌これわくものいさかたしさあり云云今按物樣說躰源亢

已上只ニ躰源說ニ附ニ會於拾芥所レ載雜藝目錄ニ已下只有ニ一箇名目ニ只レ不レ探ニ求其實ニ以ニ或有或亡ニ爲ニ目錄ニ（頭注云）拾芥神樂目錄

內面白

今亢

夏神樂　躰源抄（國葛記中）云多資忠云く內侍所の御神樂四月に行るゝ時夏神樂の作法を用ゐさ云々夏神樂さは庭火に唱ふ歌のあるなり又云或記云く夏神樂には不レ燒ニ火を云而長保四年壬六月廿三日內侍所の御神樂なり內侍所南面の庭中に庭火をたくさ云々是左近將曹重胤か依レ有ニ所ニ申燒レ之云々

倭舞　同云資忠記云倭舞の歌は宮人を用るなり（笛者左笛）舞作法座を二行に歌て先出て居也袖を攙合す次伏時牙に二度次立て香寄てさ四度次居て如初の袖攙合て伏時二度して退入なり

安波乃戶　同云又云陪胡飮脫は大食調の曲なり而博雅三位目錄に始て入ニ平調ニ也樂の調も大食調吹也問曰此樂律催馬樂安波乃戶の音振をもて作レ之云々

葦柄　同云今世にあしがらは誰人か歌らむ目出きものなり宮內大輔基俊が歌しこそ絕たか程の事にてはありしか本性のあしがらになりたりしなりなまりて（本の）うたひし節共のふかしきなりしも也　又云足柄は世人構雜藝たり此事不レ然敦政長朝臣家歌笛譜に以ニ足柄歌笛譜ニ入ニ風俗部ニ也以レ之案レ之足柄は風俗歟云々（頭注云）今案此歌無所見

神歌　至ニ于歌ニ注レ之

猿樂並白拍子歌　同云音曲事私云神樂催馬樂朗詠今樣荒音以下にもあらず皆をふしをつけてうたふ事のあるなり琵琶法師之うたふにも又あらず中昔は白拍子さて遊君のうたふこさも當世猿樂さてうたふこさは一向昔はなき事なり知レ此の音曲世に出來して天下之亂おこる事有レ之也樂道に生來者かりそめにもうたふべからず唐にも其事はありさみえたり論語子曰惡ニ樂之奪ニ朱惡ニ鄭聲之亂ニ雅樂ニ如レ此いましめたり不調音曲世に充滿すればおのづから雅樂はすたれゆくなり當世の儒[illegible]

此義也催音は更に面白もなし淫樂は人こゝに賞翫のことになれり人の心けもみへつらへるによつて佛神の御心を敬嘆申催聲は人の心にはちがふ也 仍是を面白とも思はずあさましき事なり（頭注云）續記樂記云今夫新樂進伏退俯姦聲以濫溺而不止及優侏儒優雜子女不知父子樂終不可以語不可以道古此新樂之發也集註云侏優雜戯侏儒短小之人知獼猴之狀間 雜於男子婦人之中不復知有父子尊卑之等優與侏同云々 本朝文粹第三辨二散樂一邑上御製結句云學二獼猴之奇態一云々今按散與レ猿同御覽ニ依レ樂記一見矣 新猿樂記云 都猿樂之態鳴許之詞莫不斷腸解頤者又云定緣者鳴滸之神也先見其形能者猿樂之仙也未出其詞解萬人頤云々 源氏乙女卷さるかうがましく 宇治拾遺御神樂職事家綱

安米不禮波（神哥）	以川禮乃佛（今樣歟）
藥師乃十二（今樣歟）	海東久太禮波（今樣）
太子乃美奈介之（同）	之奈乃爾安牟奈留（同）
竹乃與奈加久（同）	與之名乃和禮良（同）
心乃宇知介波（同）	已上出二鉢源一
上野歌（風俗）	宇惠支乎世之古止（今樣）
小車（風俗）	駿河舞（東遊） 衛門府風俗

季云安米不禮波羌レ此にけしてあり

風俗（頭注云）體源抄第十一云風俗事十四首つれの事也但その員數さだめがたし當座のけいきを言葉なさの歌をも詠するも也又ひたゝ歌とて十四首の中に侍ることに又べちの秘事のひたち歌とて侍也されは二說有歟

鳴高又號二大宮一 西宮記云有レ政日事辨就二結政一如常上卿入二外記戸一官掌唱二鳴高一

奈利太加之也 鳴高 奈利多加志同 於保美也大宮 知加久

天近 奈利太加之安波禮乃奈利多加之 二段 於止奈世

曾也音勿爲於止奈世曾 三段 安名加萬穴姦古牟止毛也

雖將來 美曾加奈禮 密在

難波都布良江（頭注云）萬葉第三日置少考縄乃浦にしほやくけふり夕されはゆきすきかれて山にたな引同山部赤人縄浦從そかひにみゆるおきつしまこぎたむ舟は釣をすらしも此哥武庫につゝけて書ぬれは攝津國に縄浦あるへし今按頭に難波さかき哥になはさよめれは、にの字は略せることさ必せりしかればつぶらえも難波の内にあるへし 夫木もみちする高津の宮に吹風のにしきをあらふなはの浦なみ實家 今難波稲五郎殿又新御靈の社さ俗に云ならはせる社のあたりを津村さいへりつふさつむさ通す難波のつふらえ是乎夫木廿三つふらえのせなの霞も春きえて霧立わたる秋の夕暮隆季

奈波乃川不良衣牟乃世奈也背 波留名禮波春在 加須美

天美由流霞所見 奈波乃川不良江

勞字 安支奈禮波在 支利太知和多留霧立 渡川不良江

乃世奈也

袖中抄云秘說さて春夏は如レ此うたひ秋冬はきりたちわたるさもきりてもみゆるなはのつふらえさうたふ如此說は時にしたがふにはあらで本末に如レ此哥歟

玉垂（頭注云）古今集雜寛平の御時に久くさふらひに侍ける…のことをもかめを持せて后の宮の御かたにおほしき…

しさ聞えに奉りけるをくら人ともわらひてかめをお前にもてい
てゝさしかくもいはす成にけれはつかひの歸りきてさなむあり
つるといひけれはくら人のなかになくりける敏行朝臣玉た
れのこかめやいづらこよろきの磯の波わけおきに出にけり

多萬多禮乃玉垂　古加女乎小瓶　名加仁須衣天中居(同)安
留之波毛也圭　左加奈毛奈支尒肴無　左加名毛止女爾
求　二設古由留支乃小余綾(相模)伊曾尒磯　和加米和布
加利安介尒刈揚　(頭注云)忠見集こゆるきのあまはあさりに
やゝれつゝいかなる時かなまめかるらむ
古今大歌所御歌こよろきの磯たちならし
そなつむめさしぬらすなおきにをれなみ

知知良良

知知良良加加止尒宇曾不伊乎門嘯　萬呂古曾多天禮麻
て歟
呂社左有　天宇止比左介天調度提　奈止加波也多天利
之乎
○何立有之禮毛世左良牟不爲　於乃禮加也己伊止靈古
世禮天加止尒門　天宇止乎比左介天調度提

東道

安川萬知尒東路　加留加也乃刈萱　與古於保知尒横大路
奈(旁注云)此奈字附上句乎酒寄情乎　左介乎加伊　比(季)買　加留加也乃見禰
牟添字　波也古止事　牟添字　毛也春良尒安穩　加留加也乃
之左加以(此季)加留加也乃(頭注云)苅萱横小路名所歟新古今
苅萱のせき守にのみみえつるは人
もいろきぬ道へなりける此關筑前にあると云
へりしかれは東路のかるかやと云へは別歟

筑波山

川久波也萬筑波山　波也萬端山之介也萬繁山　之介支乎曾
茂多加古毛加與不誰乎通　牟奈(旁注云)二字袖中无　之太尒下忍　加
二字共添字
與戸通　和加川萬波吾妻　之太耳袖　(頭注云)古今つくは山は山しげ山しげゝれごおも
ひ入にはさはらさりけり

甲斐加禰　(頭注云)西宮記臨時士私遊宴事夫於律遊者用平調
於呂遊者用双調至于他調隨時用之但律呂遊具レ歌
爲レ本樂曲相交反ニ要於和琴一先常陸同
音數度次甲斐各獨唱風俗等也云々

加比加禰波甲斐之嶺之　左良支波白　由支加也雪歟　伊奈乎否
左乃加比乃介古呂毛也甲斐毛衣　左良須曝　天都久利也
調布　左良春天川久利也

萬葉第十四云つくばねにゆきかもふらるいなをかもかなしきこ
ろがにぬのさるかも袖中抄云けころもは古哥につるのけ衣さ
よめるは鶴の毛の白きによせて白き衣こ云歟　又蘂い衣こよめる
歟いなはいなむこ云詞歟　おさは長歟何事にもおささいふこさ有
ば衣さらす人にてあるべし云々今按此風俗は萬葉の哥を取損じ
けるにや萬葉はいなかもにてなは添字也(旁注云)筑波山に雪の
ふれるかいなさにはあらぬかかなしくおもへ
るいもが布を干せるにてあるべきかさよめり

伊勢人

以世比止波伊勢人　安也之支毛乃乎也異物　奈止止伊
戸波云　乎不禰尒乃利天也小舟乘　古曾也曲節　名美乃宇

戸乎波上 名美乃宇戸乎古久也 濇 （頭注云）いせ人はあやしきものさなどゝいへは小舟にのりて波のうへゆくさ云歟なるへし

菅村

須加牟良乃也 菅村 和禮古曾 吾社 春加无良乃也牟良乃也春加牟良乃也於以天波 老 和禮古曾加伊加良女 癡

常陸哥（頭注云）朝葛云御遊のさきは先常陸歌を歌ふ也此歌今染物歌也次又可致朗詠染物音無如朗詠云々

比太知尓波 常陸 多乎古曾川久禮 田社作 安太化古古呂加女止也支美波 君 也萬乎古江 山越 乃乎古衣 野越 安萬由支萬世留敷多來座

太乎 奥入作ニ第二句ヲ禮乎加爾波結句支美加安萬天支萬世留ニ

荒田

安良多尓於不留 荒田生 止美乃宮久左 花（稻也） 乃波名 花（穗也）天尓川美禮天 手摘入 美也戸萬伊良宇也 宮可參 加川多戸旦給 （頭注云）榮花物語日陰蔓大嘗會悠紀方祭主輔親樂急かな山かな山にかたくれさせるさきは木のかすにおひますくにのさみ草

大鳥（頭注云）和名抄云本草云鵠（音官和名於保止利）水鳥似鵠而巣樹者也 同唐韻云（音安和名加夜久木）雀鷂小鳥也 同崔禹錫食經云鷺又有一種相似而小色蒼黒並有水湖間（漢語抄云蒼鷺美止佐木 朝葛云大鳥其駒は如ㇾ葉之破急ㇾ大鳥をは延哥天其駒をは早哥也神樂に哥ふ時は初て三反は三般（段乎）拍子に打之其後に入拍子は打て早成也云々

於保止利乃 大鳥 波禰尓 羽 也禮奈牟 曲節 之毛不禮利 霜降也禮奈牟多禮加左伊不 誰然云 知止利 千鳥 乎左以不良牟加也久支乎 鵝 左以不良牟安良之也 不有 安良之知止利毛伊波之之 所云 加也久支毛伊波之之美止左支毛 蒼鷺 京與利 自 支天 來 左以波禮之 然所云

八乙女（頭注云）河云拍子各六段合十二 （頭注云）源語匂宮（十五ツ七）河に風俗の八乎止米を求子さ書ける由さ有

也乎止米波 八乙女 和加 吾 也乎止女 同 曾に（奥入） 多川也立也乎止米太川也也乎止女 二段 加美乃 神 也 まと 通須 座 古乃美也之呂尓 此御社 伊萬須（座）多加萬乃波良（高天原）爾一說 多川也 ○ 乎止米太川也也乎止女 多川以下以ㇾ奥入ㇾ補フ 也乎

我門

宇奈與也之多留古也名支 垂小柳 之太留加以天波奈與也之太留古也奈支之多留加以天波也久尓曾 國 左加江牟 將昌 古保利曾 郡 左加江牟左止曾 里 止美世牟 將見富 和以戸曾 吾家 止美世牟也之多留古也名支 今按此歌無ㇾ云ㇾ我門ㇾ詞ㇾ

脫乎又催馬樂有ニ我門曾さ云歌ニ彼乎給芥目錄有ニ古柳さ云歌ニ是乎 （頭注云）宇奈與也は項好（ウナヨ）也與冠柳さいへるも楯よりしだれたる體をいへるさみえたり是も楯よりみたれたる體頂に見なれたるにや

雜藝

宇波良古支

宇波良古支乃之太尓波以多知下聰　不江不久左留　笛吹

猿加奈川鸛鼓乙以名古萬呂蜂蠕波拍子宇川打　支利支利

須波攤譚　鉦鼓宇川鼓

狹衣第三に云又(母代)さしよりて其つぎかなてをくさひちしてつくめればいたちふえふくさるかなづ(五節君)さひきたまふをははしろいさおもしろうめでたう思ふにえたえず心もすみたちてすゑにまうさりてあふぎうちならしていなごまろはびやうしうつきりくすはなごほそめあけてくびすちひきたてゝたれ(たイ)かへりくひくそばがほのみすにすきてみゆるは(狹衣心)おかしなどもよのつねい事こそいへ云々此ことばを以て改正

(頭注云)今近江の人荊に春白き花咲物のわかたちをいばらこぎと云所謂荊荖花にまじへて酒にひたす花のいばら也　和名抄鼬鼠(以太知)同本草云作鼪(作鼪二音和名以奈古末呂)貌似鼬鼠而色小黄在田野間者也下河邊長流いばらこぎいつをそすきて　しづのおか垣に花さく　夏のきぬらん

伊與湯　雜集催馬樂(頭注云)萬葉三長哥略みゆのうへのこむらをみればおみの木も生つきにけり

以與乃由乃湯　由介多波伊久川湯桁幾　伊左さ河之良須也率不知　加須戸春也不數　加須戸春與萬須不算　也禮曾與也名與也支美曾之留良宇君知覽　也以河海補之(頭注云)古哥云いよのゆのゆげたはいくつへのかすはむ河イ左八つ右は九つなかは十六

以與乃由乃之太志多與利下下自和久乃之良以止湧寄歟　白絲乃也久留比止繰寄来人太江女絕(ヤ乎)也禮曾與也奈(ヨ乎)也毛乃尓曾安利有介留也(頭注云)物にそたえめやたえすある物にぞありけ ゑ歟

伊與古江乃越奈古戸乃名所乎　川川良葛　和加比加波若引也宇也宇漸與利古寄來也禮曾與也名よ乎也之乃比忍之乃比忍尓也(頭注云)神樂弓末みちのくのあたちのま弓わかひかはやうやくよりこしのひくに

以與乃由乃左良波尓名所乎　多知天立　美和太世波見渡多介乃古保利波和氣郡　天尓手　止利天取　美由也所見

今按以下非伊與湯類歟失題乎今依傍例以發句爲題

遠江(頭注云)遠江(止保太阿不三)濱名(波萬奈)和名

止保太不美波萬太乃濱名乎　波之乃橋　多由久波奈古以加也不名加也波江乃古止毛乃子等　安曾不名利遊戲　介利也多由以下有亂脫乎(頭注云)重之家集水の上の濱名の橋もやけにけり　打けつ浪やよりこざるらん　枕草子ちかく昔さほつあふみの神かけてむげに濱名の橋みざりきや　三代實錄四十六云遠江國濱名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六尺　貞觀四年修造二十餘年已以破壞

相坂

安不左加乃相坂　世支乃關　古名太波此方　奈尓何　止加也

奈支美爾善 安波川乃粟津 古古呂心 也萬之奈也山寄疾科

（頭注云）古今意一音羽山音にきゝつゝあふ坂の關のこなたに年
たふる哉 粟津相坂より此方にて山城の内山科郷の内手鷹子に
あはつの原のみくるすのめめりさいへろ
に可考合樋口氏曰あはつは粟田歟音通

安乃由久 安乎

安乃由久波見由加也美由加美（安乎） 由奈良波於支古
久沖須不禰乎船 也禮曾與也名（よ乎）也以曾戸由久磯方行
也（な乎）介與也 あゝ等四字（安美假字）雖別 注家以附眞名後人正之
古名利女 （頭注云）古奈利女は古奈美に利の字を加へたろなる
へし女美は音通す又りみ音通和名抄云顔氏云前妻
（和名毛止豆女）
一云（古奈美）
古名利女波前妻 支爾来 介留毛乃乎物 加良須天不烏止云
久呂止利黒鳥 （頭注云）久呂止利は和名に鳥を久呂止里さよめさ
も是は烏の事なるへし和名抄云唐韻云烏（哀都反
和名加良須）爾雅云鸒
黒而反哺者謂之烏 也川乃罵詞乎 也禮曾與也奈よ乎也以
末太古須来レ来 天川也歯節乎

神樂乃其駒

曾乃古萬其駒 曾也和禮爾吾 和禮爾吾 久左古波牟草将
乞久左波草 止利取 加波乎楽む乎牟神将飼 美川波止利久左波止
利加波乎む乎牟神楽

朝萬記云其駒は本躰風俗なり而るを一條院の御とき朝倉其駒は
神樂の無下に尾もなきやうなるにさて神樂に諷ひ具するなり當
時は神樂なれども本躰は風（俗乎）さ習ふ也統秋書
入に云昔は風俗なり堀河院神樂に入させ給畢云々

體源抄

抬朝萬之記所抜書中神歌今
様等載于茲而亦爲眞名矣

神哥事（頭注云）神歌亦見 孫姫式今略于茲

神歌は昔はつゝめて手らかく歌ひける也今の世になかくなりに
たり敦家はさその給ひける顯仲云神哥は前句末句撥に籠さまに
次句を出すなり或云（著聞集第六）侍從大納言成道雲林院にて物
なけられけるに雨にはかにふりたり けれははしがくしのまに立
いりて階にしりをかけて（へしばし著）はれまをまたれけるほどに
安米不禮雨降 波乃支乃軒 多末美川玉水 川布川不止雨垂
之聲也俗閑語 （頭注云）寶方家集にあるなんなにものをたにいまは
の水のつぶ〳〵さいはばやゆかむ おもふこゝろは蜻
蛉日記よろづに思ふ事のみしげきをいかでつぶ〳〵さいひしらする
ものにもがなさおもひみだる云々 つぶ〳〵さ云詞は神代巻萬葉集
伊呂波字類抄等に出たり 以波波也言 毛乃乎物 古古呂由久
さのみやはさ不記之

萬天心行迄

さ云神哥を口ずさまれける程に格子を内よりなしあけて女房の
聲にて此程これに候入のものゝけわづらひて候か只今の御聲を
承てあくこして氣色かはりて見え候に今少し候なむやさすゝめ
けれは沓をぬぎて堂の内に（へ著）入てきちやうのほかにゐて
以川禮乃何 佛乃願與里毛自 千手乃知加比曾誓 太乃毛

又

心乃宇知爾波中之乃戸止毛難忍色爾波以天介利出和

加古比波晉戀物也思不止美留比止乃見人安也女天異

以加爾止如何止不萬天爾間迄（頭注云）平兼盛拾遺戀忍ふれど色に出にけり我戀は物や思さ
れ人の問ふ迄

巳上いかゞともあれども略之云々　巳下諸書所出風俗載于茲
至讀下書於出所只奥入上野歌一首書眞字假字餘者倣之書
矣

上野歌風俗

乎之多加戸鶯鷂和名加毛左戸支爲留兇副來居波良乃原伊

介乃也池多萬毛波玉藻萬爾奈加利曾勿莉於比（いイ）毛須

加禰也萬爾奈加利曾也　奥入全篇如此六帖原の池におふる玉ものかりそめに君な我おもふ物なら

なくに今按萬禰奈は萬奈に同しされかりそはなかりそと同し詞也無（萬名）勿（萬名）孝德紀廣嗣等の證也源氏眞木柱梳草子等に玉もはなかりそといへり（頭注云）云後拾冬むは玉のよなへてこほる原の池は春と共にや波も立へき藤原孝善おひもすかれば生も東なるへしすこつと通多く東たるほさに生するを云なるべし

令按

大納言成道薨後に逢て御遊有けるに

宇惠木乎植木世之古止波爲事宇久比須奈加世牟鶯令鳴

止爾毛安良須不有久川久川保宇之乎蛁蟟寺法師（頭注云）和名鈔十九蟬類下蛁蟟

（和名久豆）久豆保宇之奈女須江（惠本）天（並居）讀經世左世牟（令爲）止曾

於毛不爲河淸　といへる今様を當座にうたひかへてかうなき題あなゝなみすえてそめかみ（染髮頭注云染髮齋宮禁詞見延喜式）にませんとうたひたりけるを時の人感じてけるといへり

小車風俗

乎久留萬小車伊禮天支乃比毛止加牟紐將解興比曾和乎　入平

之乃波波我忍　○支可奈和禮之乃波吾忍支與（こイ）和

禮之乃波支與川毘（萬一）左以保天介良之乃袖中

袖中抄云此の哥をんるまさいひ紐とよむとはみえたれど錦といふ詞はなし昔きのしもとあるは錦の紐とかむな文字の落失歟なる本說を可考よびと云詞もあり又われしのばきと云詞もあり綺語抄の哥にしのぶしむすびもあへずなゝるまのよひよ（へびカ）ごこにと、る下紐といふは此風俗の哥なおもへるにや月面小車といふ風俗の哥に今は說たえたりと申せばみちの人もたしかに不知や　（頭注云）允恭天皇御製さゝらがたにしきのひもをときさげてあまたはねずにたゞひとよのみ
侍らむ

衞門府風俗歌

多多良女乃花乃如加以爾利擇藤好牟夜々（よイ）滅紫乃色

好牟夜（淺乎藏乎紫雲寄）　淺江入道引此哥云たゝらめの花は只藤のはなのごとく也うたひものなればふしにひかれてたゝらめと聞ゆる擇藤は兩面ふくさはりにて中古より紅色也云々

（頭注云）擇藤抄第九頭挿花或人云舞人冠をさる時は必す花をさしつたなさすへき也時の花をさすへきうへは其季に可隨也たさへ作り花をさすとも其季の花をさすへき也恒例曾式云々稲荷出居（三月）たゝらへの生花（鳥帽子附之）同御祭四月卯花也生花也

今按たゝらめとたゝらへと音通樣にはあらさる歟

ひめ宮（保子村上の皇女）はまだいとわかくおはすればあてやかにおかしくおはするに御琴をいさおかしうひき給へばきゝ給ふ

やこれはいかにひき給ふぞと（村上）の玉はすれば母御息所（正妃）三尺の木丁な御身にそへ給へるな木丁ながらゐざりより給はごなき心つきなく御覽ぜらるゝに

毛かイ乃尙止奈爾きイ止無乎美知乎路萬加禮波經乎曾
一萬支美川介太留乎止利比呂介天巳惠乎安介天與牟
毛乃波佛說乃奈加乃摩訶乃般若乃心經奈利介利 榮花物語

月 染塵秘抄 夫木第廿 題しらず
甲斐仁於加之支山乃名波之良根奈美咲 白根波之保乃山牟呂不之加之波麻山須須乃之介禮留爾波萬山 （頭注

云）今按梁塵秘抄二十卷後白河院勅撰（本朝書籍目錄）今按おかしきは面白き也しられなみ咲は雪にて花の波なりすゞは大峯に多き草さいへり續古今よなこむろすゞのしのやの朝戶出に山陰くらき峯の松風僧正行意歌なりしほの山は古今にしほの山ざしでの磯になく千鳥君かみ代なは八千代さぞなく南方紀傳南朝元中元年三月大雪ふる事八尺甲斐國しほの山南帝の勅願寺さし玉ふ云々

今樣四首 拾玉集第五

花
春乃也與比能三月安計保乃丹曙四方乃山邊乎見和多世波花左加里加毛盛之良雲乃加加良奴峯古曾奈加利介禮

郭公
波奈多知波奈毛仁保不奈里軒乃安也女毛加保留奈里夕久禮左萬乃五月雨爾由郭公名告之天

月
秋乃波之女爾奈里奴禮波古止志乃名加婆波中葉須支古曾仁介里我世不介更行月加介乃加太不久美留傾見哀奈禮

雪
冬乃與左无乃朝保良介知支利之山路丹雪不加之心乃安止波跡川加爾止毛雖不著於毛比也留思遣古曾哀奈禮

知足院禪定殿下の仰に云く萬歲樂は公私に付て祝所には必す舞といひ樂といひ先奏之後にこそ何の曲をも用ゐられ侍れ誠に目出き曲にて侍なりなにはの事も名によりて其德をあらはす事なれは尤其謂ありておぼへ侍りさればいはひの今樣にも
祝乃所介吹笛波地久美濃山黃鐘調君加與波比波萬歲樂
といへり續教訓抄

梁塵秘抄口傳集卷第十

（旁注云）爭云以下別にさし入てありすてかたくて出於此

四六調

像法轉ては藥師のちかひそたのもしき一たひみなをきく人はよろつのやまひなしといふ

同

次第聲聞いかはかりよろこひ身よりもあまるらんわれらは來世の佛そとたしかにきゝつるけふなれは

同

熊野の權現はなくさのはまにそおり給ふわかの浦にしましませはとしはゆけとも君王子

同

はるのはしめの梅の花よろこひゝらけてみなるとか

第三句

みたらし川のうす氷（まへのなかれのみかはみつ大裏にてうたひかへる）心とけたるたゝいまかな

同

松の木かげに立よれはちとせのなかれそ身にしめる

梅かえかさしにさしつれば春の雪こそふりかゝれ

同神歌

ちはやふる神々にますものたちはあはれにおほしめせ神もむかしは人そかし

そのゝち足柄四首ありあまのとうさい二反闕神瀧水

黑鳥子伊地古荒河

同

みねのあらしのはけしさにきゝの木の葉もちりはてて

奧書嘉應元年二月中旬云々　又左兵衞佐資時治承二年三月廿三日瀧尻宿よりはしめて二年かあいたに今樣沙羅林竹下歌早歌足柄黑鳥子舊河伊地子薫古柳權現御幣等物樣田歌にいたるまてみなならひて寫瓶しおはりぬ

廿七左六百寄𠀋戀案房

一はる〳〵と浪路わけくる笛竹をわか戀くさとおもはましかは

おほくちみてそにけてしかなといへるなた曲のてゝろゑんなるににたるへし云々詞略

萬葉緯卷第十

神代卷上

伊弉諾尊伊弉冊尊立於天浮橋之上共計曰底下豈無國歟廼以天之瓊（瓊玉也此曰努）矛指下而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之曰磤馭盧嶋二神於是降居彼嶋因欲共爲夫婦產生洲國便以磤馭盧嶋爲國中之柱（柱此云美簸旨邏）而陽神左旋陰神右旋分巡國柱同會一面時陰神先唱曰憙哉遇可美少男焉（少男此云烏等孤（頭注云憙玉篇云許記反樂也）舊事紀云憙哉遇可美少男焉）

又改後和曰姸哉可愛少男歟云々古事記曰何那邇夜志愛袁登古袁（此十字以音）（頭注云）神代卷一書曰姸哉可愛少男歟（白注云姸哉此云阿那而惠夜可愛此云哀今案訓吉爲衣可愛與吉意通先讀少女少男後讀可愛於理不順可愛似得字訓今讀直向下於理爲順神武紀云姸哉乎國之獲矣姸哉此云鞅奈珥夜可愛は男猶よきなとこそいはむかこさし）

陽神不悅曰吾是男子理當先唱如何婦人反先言乎事既不祥宜以改旋於是二神却更相遇是行也陽神先唱曰憙哉遇可美少女焉（少女此云烏等咩○舊事紀云憙哉遇可美少女焉又改後和曰姸哉可愛少男歟云々古事記云阿那邇夜志愛上袁登古袁云々）

古今集假名序云此歌あめつちのひらけはじまりけるよりいてきにけり（あまのうきはしのしたに女神男神とへ成給へる事ないへる歌也）

同眞名序曰神代七代時質人淳情欲無分和歌未作云々顯昭古今集序注引二神詞曰此詞相當和歌歟神代夷曲不定文字章句故也眞名序者委不沙汰只以素盞烏之詠爲濫觴歟是私案也可秘藏歟

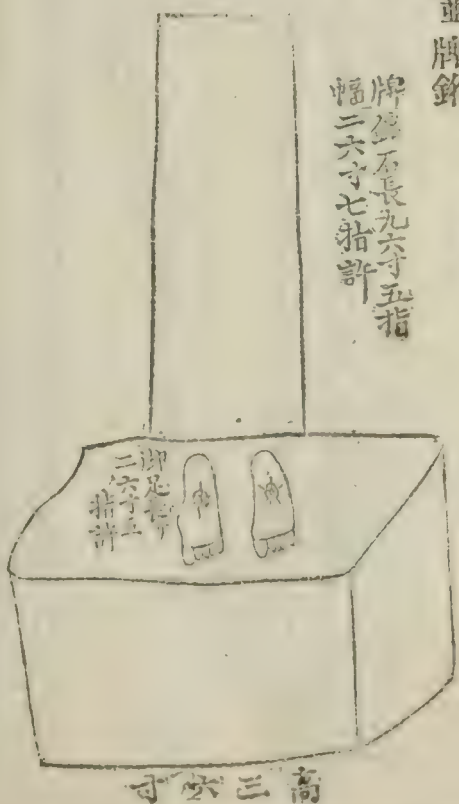
（頭注云）種季曰住吉神を和歌の神と仰き奉ることは二神橘小戶之檍原にて御身の穢しきを滌き祓除し給へる時住吉の三神は出生し玉へり然れは二神と住吉の神とは同體也二神則此詠をなし給へは住吉を和歌の神と云なるへし

和州藥師寺佛足跡石圖並牌銘

竪四尺六寸許

牌碑石長九尺六寸五指
幅二尺六寸七指許

御足長一尺六寸五指許

高三尺六寸

橫四尺六寸五指許

（頭注云）和州舊跡幽考云藥師寺添下郡也佛足形十七首歌外千輻輪相穀𩋙相又其足魚鱗相金剛許相足跟亦梵王頂相衆蠡相之紋在云々十七首可作廿一首手減たるを除きけるにや

光明皇后御筆作牌銘

比止乃知乃保毛氣爾歡後佛由豆利麻都良牟讓將奉
佐々美(すゝめ乎)麻宇佐牟將申　(頭注云)佐々美
己禮乃世波此世宇都利佐留止毛移去雖止巳止婆爾常葉
佐[illegible]乃己利伊麻世殘座乃知乃與乃多米爲後世
麻多○○○○○
麻須良乎能美大夫○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○
○○○○○○
佐伎婆比乃幸阿都伎止毛加羅厚族麻爲多利豆參至麻佐
二將爾齋祀牟阿乎　止乃止毛○志佐乎○
○○○○○○
乎遲奈伎夜(頭注云)乎淨奈枝夜　和禮爾於止禮留我劣有　比止乎於
保美人名和多佐牟多米止爲將濟　宇都志麻都禮利寫奉
都加閇麻都禮利仕奉
舍加乃美阿止釋迦御跡伊波爾宇都志於伎石寫置　由伎米
具利行廻宇夜麻比麻都利敬奉　和我與波乎閇牟我世將終
己乃與波此世乎閇牟　れト通
久須理師波藥師　都禰乃母阿禮等常雖有　麻良比止乃希人
(頭注云)麻良比止乃　伊麻乃久須理師今藥　多布止可理家利尊有

米太志可利鷄利　(頭注云)米太志感乎
己乃美阿止乎此御跡　麻波利麻都禮婆行遶奉　阿止奴志乃
跡主　多麻乃與會保比玉裝飾　於母保由留可母所思
美留閇止毛可見(乎)　阿留可
於保美阿止乎大御跡　美爾久留比止乃見來人　伊爾志加多
過去方　知與乃都美佐閇千歲罪並　保呂夫止會伊布亡云
乃曾久止叙伎久除聞　可噴生死
比止乃微波人身　衣賀多久阿禮波難得有　乃利乃多米爲法
能與須加止奈禮因成(頭注云)能字下旬ノ與須加止奈禮　都止米毛呂毛呂勤諸
須ゝ賣進　毛呂毛呂
與都乃閇美四蛇　伊都々乃毛乃々五衆　阿都麻禮流集有
伎多奈伎微乎婆汚穢身　伊止比須都閇志厭可捨
波奈禮須都倍志離
伊加豆知乃雷　比加利乃期止伎如電光　己禮乃微波是身　志
爾乃於保伎美(頭注云)志爾乃於保伎美死乃多身乎又大君乎直指死乎　都禰爾多具閇利
常相具　於豆閇可良受夜可畏不有哉
○○○○○○○○○○乃多爾久須理師毛止
牟藥師求與伎比止毛止牟善人求

佐爾佐牟我多米爾爲

古語拾遺 序云從五位下齋部宿禰廣成撰 至書末云大同三年二月十三日

○至二子磯城瑞垣朝一漸畏二神威一同殿不レ安故更令二下齋部氏率二石凝姥神裔天目一箇神裔二氏一更鑄レ鏡造レ劔以爲レ護二身御璽一是今踐祚之日所レ献神璽之鏡劔也仍就二於倭笠縫邑一殊立二磯城神籬一奉レ遷二天照大神及草薙劔一令二皇女豐鍬入姬命奉一レ齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌曰

美夜比登能 宮人 於保與須我良爾 終夜 伊佐登保志由伎能與呂志茂 雪衣 於保與須我良爾 今俗歌曰 美夜比止乃於保與曾許呂茂 大凡衣 比佐止保志由伎乃與呂志茂 於保與曾許呂茂詞之轉也

日本國現報善惡靈異記

序曰諸樂右京藥師寺沙門景戒錄云々 順倭名鈔引二靈異記一而邪鬼得二惡病一而死篇一可レ謂古書

狐爲レ妻令レ生レ子縁第二

昔欽明天皇 是磯城島金刺宮食國天皇天國押開廣庭命也 御世三野國大野郡人應レ爲レ妻不レ見二好孃一乘レ路而行時曠野中過二於姝女其女媚牡（頭注云ニ牡牝牡）之牡以爲男夫乎 馴睇之牡睇之言何行雅孃也之イ 答言將レ覓二能縁一而行女也牡心語言成レ妻耶女答言聽即將二於家一交通相住此頃懷妊生二一男子一（比イ）時其家犬十二月十五日生レ子彼犬之子每レ向二家室一而苑期睚眥嘷吠家室脅惶告二室家長一言此犬打殺雖レ然患告苦イ而猶不殺於二二月三月之頃一年來春時其家室於二稻舂女等一將レ充二間食一入二於碓屋一即彼犬子將レ咋二家室一而追吠即驚懍恐成二野干一登二籬上一而居家長見言汝與レ我之中子相生故吾不レ忘汝每來相寐故隨二夫語一而來寐故名爲二岐都禰一也 時彼妻著二紅襴染裳一 今之桃花裳也 而窈窕裳襴引遊逝イ也夫視二去容一戀歌曰

古非波示未イ奈（頭注云）戀は匈我上にきはまるの意歟たまかきる魂極の意にて死を云歟 和我尸爾於知奴多万可岐留波呂可爾 美縁互所見 伊邇師古由惠邇去子故

故其令二相生一子名號二岐都禰一亦其子姓負二狐直一也其人强力多有走疾如二鳥飛一矣三野國狐直根等本是也

○聖德皇太子示レ表縁第四

聖德皇太子者磐余池 旁注云邊雙槻宮御宇 天皇立レ之爲二皇太子云々皇太子居二住于鵤岡本宮一時有レ緣出レ宮遊二

覩片岡村也路側有乞匄人得病而太子見之從輦下俱語之問訊脫所著衣覆於病人而言安臥也遊觀既訖返輦幸行脫覆之衣挂千木枝無彼乞匄太子取衣著之有臣白曰觸於賤人而穢衣何乏更著之太子詔佳矣汝不知也彼乞匄人侘（化イ）處而死太子聞之遣使以殯岡本村法林寺東北角有守部山作墓而收名曰人木墓也後遣使堀墓而不開無（无イ）之人（入イ）　唯作歌書以立墓戶歌曰（イ）

伊珂瑠賀能等美能乎可波能多延婆許曾和賀於保吉彌能美奈和須良延米

使還白狀太子聞之默然不言誠知聖人知聖凡夫不知凡夫肉眼見賤人聖人之通眼見隱身斯奇異之事

○見烏邪婬厭世修善緣第二（直イ）

禪師信嚴者和泉國泉ノ水郡大領血沼縣主倭麻呂也聖武天皇御世人也此大領之門大樹烏作巢產兒抱之而臥雄烏遐邇飛行求食養抱子之妻求食行之頃他烏遞來與（而イ）　婚奸就止其奸今夫烏共翥空指北而飛棄兒不睠于時前夫烏食物哺將（持イ）來見之無妻烏于時慈兒抱之而臥不求食物而經數日大領見之使人登樹見其巢抱見死大領之大悲愍心視烏邪婬厭世出家離妻子捨官位隨行基大德修善求道名曰信嚴但要語曰與大德俱死必當同往生西方云々信嚴禪師無幸少緣自行基大德先少命終也大德詠（詠乎）歌作

加良酒等伊布烏云於保乎蘇等利能（大鳥）　去等乎美（等事）
見等母邇等伊比天（共云）　佐岐陀智伊奴留（先達去）

夫火炬（脫一字歟）時前備折松（花イ）　時雨降時衆潤石根示鳥鄙事領發道心光（花イ）（業乎）善方便見苦悟道者其斯謂之矣云々

○女人惡魂見點彼食噉緣第卅三

聖武天皇世舉國歌詠之謂　（頭注云此歌誤字多而難解）

奈禮乎曾與咩邇保師登（汝姉欲）　多衆阿牟知能古（阿乎菴知子）
牟知餘呂豆能古萬之（子）　南无南無耶仙佐加又佐加母持酒
酒利法萬宇師夜太能知識給萬去土邇（何イ）（誠）

爾時大倭國十市郡菴知部東方有大富家姓鏡作有一女子名曰萬之子未嫁未通面容端正高姓之人伉儷猶辭而經年祀爰有人伉儷忽々送物彩

三槧

帛。車見レ之觀レ心兼復近視視イ隨レ語許可閨裏交通其夜閨內有レ音而言二痛哉一三遍父母聞レ之談レ之曰未レ效忍猶寐矣明日晩起家母叩レ戸驚喚不レ答怪開見唯遺二頭一指一自余皆噉父母見レ之悚慄惆慘隱下乎送二嫂妻一之彩帛上變成二畜骨一載レ之三車亦變成二柴與木一也八方人聞集臨見レ之無レ有也韓筥入レ頭初七日朝置二三寶前一以爲音食乃疑災表先現彼歌是表或言二神恠一或言二鬼噉一覆二思之一猶是過去怨咲乎也斯亦奇異之事也

聖德太子傳曆 此傳曆與二政事要略所レ引太子傳一別矣 平氏撰 第十以下編次猥籍也追可改

季記此有二押紙一云

本朝書籍目錄云聖德太子傳二卷云々日本記竟宴得二聖德太子一從四位下右行中辨藤原朝臣師尹歌云佐支瑘保數云々此故事無二紀中一在二傳曆一可レ謂二古書一矣平氏者平基親一條院代人也云々

推古天皇二十七年己卯春正月太子奉レ勅命レ駕巡二撿機內諸國臣連國造伴造所レ建寺地一云々夕時旋二班鳩宮一到二于勢益之原一北顧謂二左右一曰可怜此處有二一信女一(推古)可下建二小寺一(平隆寺)在中三十年以來上即獨謠曰

壽耶全人者帖席重栗山之熊樫葉頭飾丹刺彼子

(頭注云)壽耶此歌わかいのちのまたけむ人はたゝみこもへぐりの山のしらしかえたうすにさせこのこさて日本紀景行天皇御製末也爲太子歌平氏虛也

屆二于椎坂東一望二本宮一獨謠曰

班鳩宮之葦丹炎火之火村中丹心者入沼 (頭注云)今案此謠僞非二古代作一乎

皇極天皇三年甲辰冬十一月大臣幷入鹿起二二家於甘樫嶽上一大臣家外作二城垣一積二貯兵食一又氏々人等入侍二其門一名爲二祖子一孺者一大臣懷奢無レ君之意曰甚深時入危レ之故天皇讓二位於皇太子一自爲二皇祖母尊一 是曆錄文也

一說甲辰當年 年三月八日東方種々雲氣飛來覆二班鳩宮上一連レ天良久而銷云々 元年傳云十一月入鹿臣獨謀小德臣勢臣德太等一將レ率レ兵殺二山背大兄王等於班鳩宮一云々途與二子弟等一自絞死云々大臣聞入鹿弑二大兄王等一歎曰我亡不レ久云々

蹔上丹兒猿米燒米谷裾喫而今座乎 枝山羊指入庫乎之伯父 (頭注云)與日本紀歌可二照合一

又謠曰

山背之菟手之枝々水金丹相看杜根菟手之枝々

此二謠謠始起二王子孫未レ滅之前一王子孫滅後猶不二之止一 齊明天皇四年入鹿爲二中大兄皇子一被レ誅 (頭注云)日本紀云時有二謠三首一其一曰はるはるにこさぞきこゆるし

まのやまはら其二日なちかたのあはのゝききしさよもさすわれ
にはしかごひさそさよしす其三日なばやしにわれなひきれてせ
しひさのおもてもしら
すさいへもしられず

江次第第四十
本朝書籍目錄云廿一巻中納言匡房卿撰

大原野行啓忌二五條后一子順 以二藤氏勸學院衆一爲二車副一
二條后高子 以レ姪乘二車後一在五中將書二和歌一與二二條后一
大原也小鹽之山毛今日等巳曾神代之事緒思出良目
(頭注云)顯註密勘定家卿曰江次第說不レ可レ用レ之云々 伊勢物語云むかし二條の后のまた春日のみやす所ときこえける時云々 貞明親王(陽成院)貞觀十一年二月立爲二皇太子一云々 三代實錄第五云貞觀三年二月廿五日己巳皇太后向二大原野神社一奉幣御二牛車一 以二藤氏六位以下一爲二御車從者一云々今案云レ不レ可レ用年歟有二相違一也
人疑先レ是若有二密事一歟或云在五中將爲レ嫁二件后一出家相構其後爲二生髮一到二陸奥國一向二八十島一求二小野小町戸一夜宿二件島一終夜有レ聲曰
秋風之吹仁付天毛阿那目阿那目 (頭注云)叵耐(アナメ)遊仙窟
後朝求レ之髑髏目中有二野蕨一在五中將涕泣曰
小野止波不成薄生計里 (頭注云)今案薄は惣じて草の茂りたるをも云歟 赤染右衛門家集なてしこのすゝきになりたるなみて云々
即獻葬中將與二齋宮一蜜通令レ生二師尙眞人一仍高家子レ今不レ參二伊勢一 故中宮大原野詣時資仲卿進二五條后一行啓時行列圖一人疑レ之

江談抄
本朝書籍目錄云六巻江匡房云々

玄賓律師辭退事
弘仁五年玄賓初任二律師一辭退歌云
三輪川乃清流介洗天之衣乃袖者不穢計利
同大僧都辭退事
又云辭二大僧都一歌云
外國水草淸事多君都不住末佐禮利
又云去二洛陽一赴二他國一間道來一會女人脫レ衣奉レ之二得レ之歌
三輪川介諸天淸幾唐衣久留 途上略 土思奈得豆土思波之

○安倍仲麿讀歌事
靈龜二年爲二遣唐使一仲麿渡唐之後不二歸朝一云々讀レ歌雖レ不レ可レ有二禁忌一尙不快歟如何(頭注云)類聚國史百八十七佛道部十四云桓武天皇延曆十七年五月丙午正五位 粟臣翼卒云々文吉麻呂靈龜二年以二學生一阿倍朝臣仲麻呂竝入唐云々
天原不利左計見禮波加須加奈留三笠乃山爾出之月加

毛

伴歌仲麿讀歌止覺候遣唐使爲罷時於唐讀歟如何何事爾無奈利之曾可レ有ニ禁忌之事一云々　永久四年三月或問師還

嵯峨天皇御時落書多候事

嵯峨天皇之時無惡善止云落書世間爾多候也篁讀云无レ惡善止讀止云々天皇聞レ之給天篁所爲也土被レ仰天欲レ蒙レ罪之處篁申云更不レ可レ候事也才學作イ之道然者自レ今以後可ニ讀申一云々仍天皇尤以道理也然者此文可レ讀被レ仰令レ書給

十廿卅　冊乎　○五十落書事　（頭注云）此落書等不レ知レ解誤脫多乎子子子子子子子又れこのこのこ

これのこゝ此時篁讀之、宇治拾遺物語に見えたり

海岸香　左前落書也

二冂口月八三中土世遠市中用ニ小斗一欲唐艷書　谷

傍有レ欠日本返事木頭切月中不用

一伏三仰不來（人）待書暗降雨慕漏寢如此讀ミ云々（頭注云）古今集戀

粟天八一泥　如坂都

或令爲市々々有砂々々又左縄足出　端乎

志女狐與布　波斯國語

『江談抄三』　『ヨリ』マデ一本ナシ

古塔銘事又云古塔銘曰粟天八一　此文未讀被云云　件塔在所可尋也』

博雅三位習ニ琵琶事一

博雅三位會坂目暗琵琶習被レ知乎　如何答曰不知談曰尤有レ興事也博雅高名管絃之人而美道重求會坂目暗琵琶最上之曲風ニ聞世上一人々雖レ令ニ請習一更以不レ得住所遠以所狹而行向人少々爾　博雅先以下　源光乎一本光　人內內所謂樣等書而不ニ思懸一所爲レ住京都爾居而

過與加之土賺目暗詠歌曰

世乃中波土天毛加久天毛須久志過天牟宮毛和良也毛藁屋　半天之奈計禮波　果無有

土詠而不レ答使者以ニ此由一云爾　博雅思樣此目暗命有ニ在乎　且暮一我亦壽雖レ不レ知　御文乎　尙（江イ）流泉啄木止云曲者此目暗耳社傳奈禮相搆天　聞レ彈欲レ傳レ之處三箇年間宅頭仁　聞仁更以不彈三年土云八月十五夜爲ニ朧曇一風少吹而博雅思樣憐今夜有レ興夜哉會坂目暗流泉啄木奈土波今夜彈良牟土思天琵琶譜具天　向會坂如レ案琵琶遣使レ鳴程盤涉調鳴爾　博雅　聞天　尤有レ興啄木是盤涉調也今夜鳴ニ此絃一定欲レ彈哉土思而

嬉思間目暗獨遣レ心無レ人詠レ歌曰

逢坂乃關乃嵐乃險備志比天曾居多留強而有與遠世過
土天

土詠而鳴レ絃博雅垂レ涙啼泣好レ道憐也土思目暗獨言云憐有レ興夜哉若我曾數寄者今夜在ニ世間一ナ今夜爲ニ心得一人來逢世與加之物語世牟土獨言聞天博雅出レ音云博雅社爲レ參云計禮波目暗云誰敷坐間然也ト答目暗音ニ聞計禮波感而物語仕天遣レ心令レ傳ニ件曲ニ云々博雅依レ不レ隨ニ身琵琶ニ只以レ諳傳請歸云云諸道之好者只可レ如レ此也近代作法誠以不レ可レ有左禮波社上手者諸道仁有近代仁無事也誠以憐也ト被レ談又問云件曲近代有否被レ答曰第一也無ニ識者一代ニ闌亂旋ニ第一曲用也傳者少件人所レ傳也

白雲似レ帶閑ニ山腰一　青苔如レ衣負ニ巖肩一 左中詩

苔衣爲着巖者末比呂計牟巖嵩　喜奴喜奴山乃 衣不著 帶
遠須留加奈

昔契ニ蓬萊宮裏月一　今遊ニ極樂界中風一 榮花物語 花山云 此詩

義孝少將卒去之後賀縁阿闍梨夢見少將有歡樂之氣色阿闍梨云君何心地有之久天波被レ坐母　君被ニ戀慕一仁波土云苔少將詠曰

時雨天波千々乃木乃葉曾散末加宇亂爲加那留里乃知
何積奴良左牟合當

(頭注云)爲加那留假字違後拾遺哀傷しくにこは千草の花ぞ散まがふなにふる里に袖ぬらすらむ此歌よしたかかくれ侍りて後十日はかりに賀縁法師の夢に心ちよけにて笙をふくさみるほにくちをただならずになむ侍けれ母のかくはかりこふるを心ちよけにていかにさ云侍りければたつをひきさゝめてよめるなむいひつたへたる云々

鷹司殿屛風詩事

又被レ命云鷹司殿屛風詩齊信卿被レ撰レ之齊信頗多被レ入ニ資業詩一花時宴詩色絲白撰ニ入之一義忠聞レ之申ニ宇治殿一云絲字他聲非ニ平聲一可レ謂ニ僻事一許云位遠保昌之可レ作也資業依ニ當任受領一其詩被ニ多入一云々戶部納言聞ニ此事一勘ニ文集詩一被レ獻レ之聲々麗何敷ニ塞玉一句々妍詞綴ニ色絲一云々宇治殿聞ニ食此事一被レ勘ニ仰義忠一云々蟄居及ニ明年三月一不レ被レ免レ之則付ニ女房一獻ニ和歌一云々

青柳乃色乃絲仁天結天之與禮波曾縷土計傳解　春乃久
禮奴留曉

依ニ此歌一被レ免云々

扶桑略記

本朝書籍目錄云三十卷阿闍梨皇圓抄云々 (頭注云皇圓律師叡山功德院僧也(通口氏))伊勢兵亂記系譜云親房村上天皇十三代

伊勢國司祖北畠准后大納言正二位一品准大臣南朝詔云々著書四部元々集扶桑略記神皇正統記職原抄云々今案近世所稱扶桑略記殘篇纔十四五代至二卷末一以テ如來滅後書爲是皇圓所レ作乎又有下稱二日本紀略一本上自二醍醐一至二後一條一全文掛二於朝政一是親房卿扶桑略記乎雖レ然皇圓略記之內有二親房卿略抄混雜一歟如何者皇圓略記之內有下無二如來滅後文一本上也可レ尋不審

後一條院治安二年十月十七日丁丑入道前大相國御堂殿道長詣二紀伊國金剛峯寺一云々廿六日召二維時一給二御馬一御二法隆寺一先覽二東院一是聖德太子夢殿也覽二種々寶物一有二御歌一云

王乃御名乎者聞士雖 麻多毛三須 未不見 夢殿麻天仁伊賀手木津來覽

雖レ有二古今之秀歌一不レ可レ出二其右一云々修理權太夫源長經依二敎命一記レ之多々略抄

和歌三式

八雲御抄云四家式歌經標式（參木藤濱成奉勅）喜撰作式（喜撰奉勅）孫姬式（有序）石見姬式（是安倍清行式同時歟）顯昭古今秘抄云七病は光仁御代濱成卿撰レ之四病は仁和御代喜撰注レ之八病は後に孫姬雖二喜撰一也然は和歌之始は七病也愚問賢注云濱成式は光仁の詔勅に應し孫姬式は聖廟製作なのこゝろともに病をのそき體をわかてり誰人かこれに隨はさらむ又顯昭古今序注云但喜撰式中有二良僞兩本一其僞本中以二長句歌一名二短歌三十一字爲二長歌一又或立二六義六體八病等一尤不レ可レ用歟又背冠折句（合業物）仁和帝御製云々 是（天曆帝之御製也）又私考云四句混本歌無レ載二諸式一件喜撰僞式在レ之仍後賴範清輔等引二用之一無二其謂一歟云々

今案濱成式今現有レ序至レ終云寶龜三年濱成謹上喜撰有二序并四句混本歌一而似レ稱二顯照僞本一式レ雖レ然依レ非二新作書一采用唯四病都三式雖レ有二殘篇無レ可レ徵矣予レ茲先師歎二此式不レ全織一諸書所二引證一式文上附二殘式之後一依レ是改レ繁而書二於此一古本間作二眞字一因撰レ焉

和歌七病歌經標式（濱成）

一頭尾第一句終字與二第二句終字一同字也

萬十 旨母我禮能霜枯 旨陀留夜那疑能垂柳 已下奥なし萬十 阿岐可是能秋風 比爾計爾不氣馬日異吹 美豆倶基能水莖

二胸尾第一句終字與二第二句三六等字一同字也

萬二 何牟何是能神風 伊勢能倶爾爾母 國以下奥無 阿羅有麻之呼

萬七奥ナシ 宇治何婆呼河 不爾和他是呼等船渡 能與能也

三腰尾他句終字與二本韵一同字也

和我夜那疑吾柳 美止利能伊止爾綠絲 那留麻弖爾成迄

奥なし 美那具宇禮太美不見觀 何氣弖倶美陀利掛組而有 爾與附也

以上出二于殘篇一以二奥儀抄一補レ考此外雖レ有二（萬十）伊母我比毛（妹紐）等倶止牟須婢弖（解結）他都他夜麻（立田山）美和多須能勢能丹至去計羅倶婆之三十字一文字不二分明一且依レ無レ據而不レ爲二本文一

四譽子五句中本韻有二同字一也一譽子不レ爲二巨病一二譽子以上爲二巨病一

伊母我那婆妹名 知與爾那我禮牟千代將流 比賣之麻爾姬嶋 爾與レ爾也 （頭注云）萬葉いもか名は……ひめしまの小松かうれにこけむすまでに河邊宮人

五遊風一句中字與終字同字也

等衞何倶衞母能濃於毛波之物不思比他太具美斐太匠

但物名不可忌假令妹紐是物名也如此云不可避

六𦁝韻二句共同字是也

萬

美麻倶保利見被和我於母不岐美毛吾思君阿羅奈具爾不

有奈衞衞可基介乎何來宇麻都何良可之爾馬痩爾與爾也

但不巨病長歌皆用之

七遍身二韵中除本韻二字已上有同字也

伊麻左邁爾今更奈衞可於母波乎何將思和可奈婢具吾

古々呂波岐美衞心君與利爾之母能呼因物二句中用四爾是也

和歌三種體

一者求韻　二者査體　三者雅體

求韻歌別有二種

一長歌以第二句終字爲一韻以第四句終字

爲二韻如此轉々

二(者イ)短歌以第三句終字爲初韻以第五句終

字爲終韻

韻字有二種

一麁韻　夜麻　太麻　旨麻　波麻　等類也

二細韻　旨イ利イ爾イ利イ　等類也

査體別有七種

一雜會

　　　　資人久米廣足歌云

可須我夜麻春日山美爾古倶不爾能峯清舟夜具旨豆羅葉

師寺阿波知能旨麻能淡路嶋可良須基能俶羅

牛馬犬鼠等一處知相會無有雅意故云雜會

二猿尾　　道合師歌云

波太保己爾蘇比豆能保禮留添登有那波努古等如繩蘇婢

豆能保禮留波他保古能

終七字有五字也故云猿尾

三無頭有尾

　　　神日本磐余彦天皇擊梟帥歌云

衣美旨呼比陀利蝦夷獨母々那比等百人比止波伊倍等毛

人雖云他乎可比屈勢須手向不爲(旁注云)神武紀道臣命歌也

無初五字故云無頭有尾

四列尾

殖栗豐嶋詠夜歌云

阿可都基婆（止與）曉 止利母奈具那利雞鳴也 豆羅豆羅能寺寺何
爾母止與美努鐘動等 阿氣婆豆努己能與（波イ）○曙果此夜
終句有二八字一故云二列尾一
五有頭無尾
八坂入姫答二活目天皇一歌云
己能奈旨呼此梨 宇衣豆於保佐婆殖生 可之古計牟賢
無二頭以下一故云二無尾一第三句爲レ腰々以上爲レ頭腰以下爲レ尾
六直語
活目天皇贈二八坂入姫一歌云（奈イ）
美麻旨須留御座爲 呼可爾何氣須留 岡陰爲 己能奈之呼
此梨 宇衣豆於保旨豆 殖生（頭注云宇惠於不旨） 何氣爾與計牟母陰好
俗人言語無レ異故云二直語一歌人勿レ犯二古歌句體一苦犯レ之爲二齊體一
七雜韻
角沙彌紀濱歌云
萬十
之羅那美能白浪 波麻々都我延能濱松之枝 佗牟氣俱佐手向草 伊具與麻豆爾可幾代迄 等旨能婆爾計牟年經（衣イ）（旁注云）仙
疊萬葉第一註釋
韻字不合（第三の句終の字初韻第五の句終の字終韻）故云二雜韻一左與レ牟非二同韻一
雅體有二十種一
一聚蝶毎句上用二同事一也
淨御原御製曰
萬第一
美與之能呼御吉野 與旨止與具美豆善善見 與之等伊比旨
吉云 與之能與俱美與吉野善見與岐止與具 美 與善善見
毎句有レ吉無レ凶假令如レ聚二葉蝶一處一故云二聚蝶一
二謎警言隱言露也
立式者歌云
爾須美能伊倍鼠家與爾都基不留比米白篩 岐呼基利豆木
伐 比岐岐利伊陀須引切出 與都等伊不可蘇禮四云夫
夫鼠家穴名也米白篩粉名也伐レ木引切出火名也與都是
四字也則云二穴戀（あなこひし）一心也故云二謎警一如レ此言名爲甲第也
三雙本以二六句一爲二一絶一第三句終字爲二初韻一第六句終字爲二終韻一
大神高市萬呂卿歌云
旨羅具母能白雲 他奈比俱夜麻波牧擧引山 美禮等阿可努
何母雖見不飽 太豆那羅婆田鶴爾有 阿佐止比己衣豆朝飛 由
不幣古麻旨呼夕邊來
母與レ呼同韻字也

四短歌以五句爲一絕第三終字爲初韵第五句終句終字爲終韵

神代紀下
於基都等利沖鳥　可毛豆具旨麻爾鬼著島　和我爲禰之吾率
寢　伊母波和須禮之妹不忘　與能古止己等爾夜每每　之與レ爾同韵字也

五長歌二句ノ終字爲一韻一如レ此轉々

弔天稚彥會者歌云止

神代紀下
阿女奈留也天爾有　於保太奈婆他能大織女　一韻
宇奈我勢留　大麻能美須麻侶（乃イ）珠御統　神代紀此一句なし　二韻
美須麻呂能　阿奈他麻婆也美穴珠　三韻
太爾不陀和他留谷二渡　阿治須基能可美味耜神　四韻

二句能字是一約四句侶字是二韻能與レ侶一對也六句美字是當三韻八句美字是四韻美與レ美是一對韻四句文字六句尾字當レ韻今欲レ改レ韻故以五句能字貫レ韻於四句侶字露改レ韻節也若歌者欲レ改レ韻者如レ此爲焉若不レ欲レ改者又居其韻同字韻不レ可レ背レ例雖レ然多不レ可レ用
但絕句其禁甚也

六頭古腰新以古事陳發句以新意陳三句是爲雅意也（以下顯昭陳狀）以古事陳於初句故曰頭古陳新意者於三句是故曰腰新

當麻太夫陪駕伊勢思レ婦歌云

阿豆佐由美梓弓　比基都能倍奈留引津邊　那能利蘇母神馬
藻　婆奈婆佐具麻豆花咲迄　伊毛爾阿婆怒可母妹不逢

（頭注云）仙覺萬葉第十註釋引濱成卿式出此歌次書云本制云莫乘毛花開于等兩辭於事不稱又二韻同音也可レ謂阿豆佐由美一句比岐部能倍那留二句那能利蘇我三句婆那佐具麻豆四句伊母爾阿婆怒何五句云々
梓弓者是古事引津是譬神馬藻新意花咲迄新物色不レ逢レ妹歟是爲結句

七頭新腰古以新意陳發句以古事陳三句是爲妙佳也

長田王戀レ婦歌云

阿基也麻能秋山　母美治婆蘇牟留黃葉染　旨羅都由能白
露　伊知之留岐麻豆著迄　伊母爾阿波努可母妹不逢

秋山發句之新句新意黃葉々二句物色白露三句古事將四句譬不レ逢レ妹鬼五句結句與レ毛一對凡作歌體背レ是皆爲貪體　顯昭陳狀

八頭古腰古第一句陳古事爲頭第三句陳古事爲腰頭並陳於古事故曰頭古腰古此（以下殘篇從十新意詞書傳來歟）體或有相對或無相對

詠レ春歌云

阿呼爾與旨青丹吉　奈羅夜麻可比與山峽（與比與校本）之侶太弊爾白妙
己能陀奈比具婆此棚引　波留我須美可母春霞

青丹吉白妙共古事也是爲相並也

九古事意都此體非一例無レ所レ定四句中交錯

詠龍田山歌云

可是不氣婆具母能基努何佐雲衣笠 他都太夜麻竜田山 伊
等爾保波努留阿佐我保能波奈朝貌花
雲衣笠是二句竜田山三句寄於二句衣笠、顯於三句山之名、故曰古事意
十新意體 臣中抄等因 此體非是古事、亦非是直語、或有相對、或無相對、故曰新意、如孫王讚燒羹歌曰
雙對
旨保美豆婆異滿者 伊利努留伊蘇能入流礒 具佐草 奈羅之
萬葉第七
美留比須俱奈具見日少 己不留與於保基戀夜大寸
數不見嘗知、潮滿之礒草盈時不見落時纔見、故擬爲喩遠古離直（雖旨イ）故曰新意、見日少戀夜大者是其相對是體與古直（旨イ）相似少亦難別
可以消息也云々

無對

藤原里官卿奉贈新田親王歌云

阿基波疑波秋萩佐岐豆知留羅之咲散 可須我能爾春日野
奈具奈留旨何能鳴鹿 己惠呼可奈之美聲哀
仙覺萬葉第七注此等
美那曾己弊一句水底 旨都俱旨羅他麻二句沉白玉 他我由惠爾三句誰故
己々侶都俱旨豆四句心盡 和我母波那俱爾我不思 （旁注云）第一二句非是直語
三四句是爲語三句一句之情をあらはす故名新意令頭灌知
已上出於奥義抄
比佐可太能久堅乃 阿麻由俱都基呼天歸月乎 阿 美爾佐旨
網打 和我於保岐美波我大君者 基努我佐爾勢利蓋爾爲有

仙覺萬葉集第三注釋云此歌出濱成和歌式
濱成式云失著如下柿本若子詠長谷四韻歌云上
阿麻俱母能天雲之 可氣佐倍美由留影寒所見 一句
己母利俱能隱來 婆都勢能可婆努長谷之河乃 二句
宇羅那美可浦無故 不爾能與利己努舟之依不來 三句
伊蘇那美可礒無故 阿麻母都利勢努海部釣不爲 四句
與旨惠夜旨吉咲八師 宇羅婆那具等母浦者無友 五句
與旨惠夜旨吉書矢寺 伊蘇婆那俱等母礒者無友 六句
於岐都那美奥津浪 岐與俱巳岐利古浄榜入來 七句
阿麻能都利不爾白水郎之釣船 八句
右萬葉集仙覺註釋全文如此

和歌四病喜撰式

一岸樹者第一句初字第二句初字同聲也〇〇（如云乎）
豆留比佐倍照日副 豆羅努都基佐倍不照月 豆與豆同聲也
二風燭者每句二字第四字同聲也如云
加能等能波此殿 佐止能止利止加能與能止與止同聲也
三浪舟者五言之第四五字與七言第六七字同聲也如云
俱佐能努能草野 和可禮旨伊毛母離妹 能與能母與母同聲也
四落花者每句交於同文詠誦上中下文散側也如云

奥儀ナシ
能知能比能後日　旨留之衛旨都留標爲　能與能同聲也

奥義抄云新撰髓腦落花有讃歌云　乃知能比乃之留之爾旨川留之良加之能之娑旨能知也久太豆奴婆加利曾　乃與レ乃之與レ之也云々

已上以奥義抄補焉

和歌式殘篇

孫姫

和歌八病　避レ病之處頗損益觸レ類長之時々猶渡已上如本

第一同心　一篇之内再用二同詞一或謂二之和裝飾一

第二亂思　義不レ優猶叉而造次難レ讀或謂之和彩迹

第三欄蝶　欲レ勞二句首一疎二義於末一或謂二之和平頭一

第四渚鴻　偏均二於韻一不レ勞二其始一或謂二之和上尾一

第五花橋　諷レ物繼レ詞直用二其本名一或謂二之翻(讎乎)語一

第六老楓　篇終一章上四下三用也(之イ)或謂二之傍離騷一

第七中飽　一篇之内或有二卅五六字一或謂二之和結腰一

第八後悔　混本之詠音韻不レ諧或謂二之和解鐙一

第一同心者　一篇之内再用二同辭一詞人用二心根一其同心之歌云　(頭注云)西行ますけ生るあなたに水をまかすればうれしがほにもなく蛙かな

美豆太加支水高　陀何他乃萬千衛高田町　麻可須等天任

美豆奈支以爲爾水無械保等保止爾爲禮殆居　(頭注云、種季云械は玉篇に於歸切とあれば音爲とすべし今此處は倭語なるべければ以爲之以は發語の以故)

再用二水辭一是其病也若故重讀無レ咎若以レ意自用者不レ拘レ此

左衛門督源氏歌曰

宇太婆宇天打打　比可婆比歌那牟引々　古與比左倍今宵

安奈古止和利也穴理　禰豆波可弊良之不寢不歸

是則於レ義無レ妨也

又雖二文辭詞一義理已異亦無レ妨也

中原氏初雁歌曰

阿支那禮等秋　和佐太爾加利萬早田苅間止古呂奈三所無

加利我禰與曾爾雁金餘所奈岐和太留可毛鳴渡

是雖二同辭一義苅與レ雁異也

文辭雖レ異義理其同宜不レ宜乎

古木嶋歌云

安比美留女逢見和布奈支古乃之萬爾無木島　(頭注云)三代實錄第四十七山城國葛野郡上木島下木島兩里云々　介不與利天今日寄　安萬止母三衣須海士不見與須留奈美可那寄浪

上句無此　下句寄波也　是雖文頗異
再論無之義如此類必須避之
第二亂思者義非優於文而造次讀之去錯亂思慮
古交郊(奥)野遊覽歌曰
由久水能行奈我太乃津止母之良奈倶爾知無　於能我己
左等佐止那古蘇不利介禮名社古
若能與趣顯露鮮擧言之則歌可愛
紀氏少卿女乎獻歌云
奥ナシ
加久婆可利如此計宇支古止於母比憂事思　旨氣岐世爾繁
奈爾加和我身能何吾雖(乎)　宇麻禮支爾計无生來
第三欄蝶者欲勞句首疎義於末猶蝶之集欄蹈花次弟及其分散趣舍各異或謂之倭平頭
古小嶋歌云
春加須美霞佗奈比具也麻乃棚引山萬津我衣耳松枝　保
爾波安羅須天顯也不有之良久毛曾太都白雲起
奥ナシ
若能聲略如始終詞暢用之則混穢轉(乎)是矣
奥ナシ本ノ
古以那河衣之用首歌云
奥ナシ
礒萬天八迄ナシ波左和歌之美騷葦間與利自
見爾己曾人八之北八奈良女全文如此本ノ
（季云第字衍歟）
第四第渚鴻若偏抱於韻不勞其首猶遊渚之鴻任徙摸其將飛而刷羽

（旁注云）偏に題にひかれてこそばたいたつがはしくせざる也奥
奥
用韻歌云
己禮乃冬此我身於以由支老往　己介乃八布苦連　衣太爾
曾不禮留技所零　乎之介奈介禮八惜無有者うれしげもなく奥
奥ナシ
左近府生友秀飛舟歌云
奥ナシ
風間奈三無海乎和介由久分往　白波乃立和賀禮○者別奈乎
賀奈之賀利奈无悲有全文如此
第五花橘者猶橘之錯花實者也詠緩詞或直稱本名具知譬
安奈豆太奈穴　太介追毛乃木難焼　毛衣奈久爾無情
太追倍者爾无也與將似　吾加己比良久爾我戀　全文如此
第六老楓者一篇終章上四下三用之猶香楓之樹技葉先零其秋而無夏花色云々詞已似賀吟詠可難必宜避
古答賜花歌云
天留照月八（頭注云）天留月八加禮奈萬女三爾　上加支良久介奴留加比幾篇如此以奥儀補之　不以己乃　波禮
萬奈久乃三晴間無爾保不以呂乃句色比止由支毛奈久無
支衣消奴留加宇支左イ　全文有脱字以奥義補之
奥ナシ
若能變其體宛轉用之其所望也
小野小町
人古己呂心和我美乎安支爾我身秋　奈禮婆古曾成社宇支

己止乃波能憂言葉之介具知留良女繁散

第七中借者雖五章分句或有卌二三四五六言猶下人飾外只中有邪心終然彼人飽狀唯辯猗獠疾不爲巨害 奥ナシ

古題中秋花歌云

追支八秋曾時花色(已乎)春奈利也天布八乎都毛那三支加支衣利天色見爾曾津利尓左介良牟無

(頭注云、奥義ときは秋うはなに春也こふうへもなみかきえたりいろをうつりにさくらん)

自卌六言是　小野小町歌曰

加支利奈支於毛比爾萬介天與留八己无由女千乎佐倍奈八八千加不奈

第八後悔混本謌者音韻不諧披讀章句循雲眈味後見者唯悔恨云々(若能守持一言不貞兪緒彌爲處助也)

古歌曰

以八乃宇倍爾上禰左須根刺　松栢止於毛比思之物乎槿乃夕景萬他須宇津呂倍留加奈

(頭注云)奥儀抄いはかうへにれさす松がふさこのみこそおもふこゝろある物を

音韻不諧是也混本歌五句體　三國町歌右の如抄奥儀

若能諧調用之則綺靡也

憐治敎歌曰

和太津三乃海童　底深久安良无將有千比呂久留尋繩安萬乃太久奈八海士栲繩　太由留止支奈久全文如此絶時無

音韻諧調者是也

凡長歌式五七五七七七五言與七言襟懷交往循環不絶唯其落句重用七言歟

高市親王歌曰

掛萬久毛　加之己介禮止毛神(乎)　以八萬久毛　由々之介禮止毛　明日香山　眞柏原耳　比左加太乃　安萬津三己止乎加(奥)　加之己久毛　左太女太萬比天　神左比天

(布止奥)　以八加久禮萬須　安萬三已利(やすみし、ゝ)

吾於保支三乃麿(奥)　支已之女須　曾止毛乃國乃　萬支乃太津つるぎ(万)　曾〇山已衣天　已萬介毛乃　和左三乃八良乃

伊利宮介ふやま奥　止々萬利萬之天　安女乃之太　左加衣无止支二は奥　我毛止毛止毛全文如此

已上孫姫式殘篇以奥義抄補焉

孫姫式殘篇第十七袖中抄

雨之あめつふるごとく、なんだ　滌涙　螢鯉須留於渡河涙　涙已上袖中校本

奈久那三太雨止不良奈无和太利川美豆萬左利奈湊加倍利久留加爾

瀧之流浦瞯聲正(瓜字乎)聞於稚嵩(頭注云、)

椎尾と云は山崎天王の山より北を云

和加支毛乃(肝袖校本)奈我留々瀧能牟須(せ袖校本)留己惠(瑀)支古
衣也須良牟之比乃乎能支旨(にしイ)(岸)
裂ニ菅麻一而禱レ神終得ニ樂ヲ於今日一
奈加止三乃(中臣)天能須我曾乎(菅麻)太津美曾疑(立御祓)以
乃利之神波介布乃太女之耳(今日例)こそ(袖校)(頭注云)種季云須我曾乎太津須我麻を斷
ならむ中臣祓云本苅斷末苅切氏云々度會延佳祓具圖說云案上幣菅麻波長六寸仁本末乎苅斷云々
榊掛ニ木綿一而祠レ社未レ知レ起ニ於誰世一
佐加木葉爾由布取之天々(鎭)太我世爾加神乃以加支乎
以波比曾女介先
漢國屛風豈勝我神之立レ庭
毋呂古之乃(唐)屛風乃繪爾毛三天岐安禮者(ど袖校)(見吾)和禮左
弊加美能(我神)庭太知乃與佐(立善)(頭注云)顯昭云にはたちとは神のなり給ふ事歟神樂には庭火と云事あり又社にはひろ庭なと云り又諸社行幸にも庭の座とてあり又かへりたちともいへり神には庭立ある事なり
倭州屛風欲レ釣ニ故人之累路一(見イ)共に古への神歌也
神加太(ぜイ)爾以世倍和禮由久(伊勢我行)加弊留左耳母波毛萬
津良牟待加等左須奈由女(門閉勿努)(頭注云)師說神かたには神のためさいへる歟萬葉五同十四にためにを略してたにさいへりもは藻の字もばさよめり延喜式神供の支度に祝詞にもおきつもはへつもはなどいへりられな取に伊勢へ行さいふにや

致ニ感ニ三味一左法(尼乎)(陀羅尼)結之○(隱)可レ知
感安利豆比止乃萬宇津留(諸乎)久羅萬也(麻)(薮馬山)於古
那不(行)法波曾波加奈利(成)介利
發ニ願四月一他方(北)參之○(功)爰効
知波夜布留加毋乃萬都利乃(祭)玉加豆良(鬘)(頭注云)玉加豆顯昭說爲玉桂唯玉鬘にて葵なかさすを云行かへるやり氏人の玉かつらかけてぞたのむおふひてう名を絕恩
安不比奈利介利(逢日寄葵)太衣須於毛比波不
縫織以レ笠憐ニ錦羽之用ニ柳絲一
安乎夜疑乎加太以止爾與利豆(片糸)宇久比須乃奴布止
以不笠波宇女乃波奈我左
鞦韆(恐)於レ枝鶯尻之刺ニ梅針一(頭注云)古今著聞云鞦韆(ゆさはり)以ニ綵繩一懸ニ空中一以爲レ戲也
梅加衣爾由左波利之太不宇久比須與牟女乃先波羅爾
之利安倍(や袖校)不佗弊
以上出ニ於袖中抄一
顯照古今序秘註孫姬式云
浪花津之蘆蘺送ニ三冬一而春ニ二月一
舊枯野之本柏因ニ新交一而恨ニ故人一
今案此二句亦恐有レ歌

『江吏部集下　〔『ヨリ』マデ一本ナシ〕
暮秋從大井河各言所懷和歌序寛弘之歳秋九月蓬
壺侍臣二十釐合ニ宴于龜山之下大井川之上一或高談
艶語或絲竹觴詠沙鷗與鷄鷲狎近紅葉與紈綺紛糅於
戯今日之興今日之情不レ偏遊泛ニ誇四海之無事一也
不偏好眺望觀三農之有年也艤船者攝州刺史盡ニ水
陸之珍一趁令者翰林主人兼花鳥之事于時山水秋深
若雲夢者有八九煙嵐日暮記風物以難ニ一二一懇詠和
歌其聊慰ニ老思一其詞云
河船仁乘天心乃行時八沉女留身止毛思保江奴加奈
散木集第九
恨レ躬恥レ運雜歌百首之内
佐藻古曾商無智文盲荷生計和布人悲人庭可成等哉』

（頭注云）毎月記云去元久比住吉參籠の時汝月あきらかなりと實の靈夢を感じ侍しによりて家風にそなへむため明月記を草しおきて侍ること身には過分のわざと思ひ給へる云々

明月記歟違之事

奥書云本　以後成恩寺禪閤殿下令ニ書拔一給御自筆之本上所ニ書寫一也云々今案明月記者權中納言藤原定家卿日紀也傳聞有ニ數十卷一雖レ然於レ歟者悉以無レ漏ニ此書一今難レ有下書ニ假名一歟數多上不ニ煩載一焉

建久八年八月十六日黄昏著ニ東帶一依ニ駒牽事一也退
出之後送ニ一行右中辨許一

（頭注）（旁注云）駒牽次將除籍其後事資實朝臣駒牽辨也云）今案細註一條禪閤兼良公也

立馴之三世乃雲井乎今更爾隔天見鶴霧原乃駒
返事歸レ廬即持來
時乃間農隔鳴覽立馴之雲井爾近幾霧原乃駒

宮女御參賤書歟可詠進由二品御消息事

建保三年十二月六日二品御消息云明日宮女御參
彼狀如此　可レ被レ遣和歌誰人可ニ詠進一哉之由申ニ水無瀨
殿一之處可レ被ニ詠進一由被ニ仰下一可レ存ニ其由一著畏
奉了如レ此先例上臈多奉レ之歟頗似ニ過分面目一左右
可レ隨ニ御定一由申レ之祝言雖ニ一首一無レ難詠出之條
恆以可レ畏事也彌增ニ沉思之辛勞一耳聞見事忘却人レ
宮立后之間歌尋ニ申內大臣殿一了雖レ廻ニ愚案一卒爾
風情不ニ尋常一仍書ニ二首一汀湯（木ノマヽ）付ニ清範朝臣一可ニ伺
披露一由示レ之
倶禮奴萬野計布野所羅仁所志良禮奴留萬都波比佐志
喜千世能田目志登私
萬津保登毛比佐志幾計布野由布倶禮者千支里也千世
野波志女奈利計里
七日卯時夜前清範朝臣返事到來其狀云

御詠經二御覽一候之處端御歌ものものしくて殊宜候可レ被レ用レ之由內々御氣色候處也　清範謹言

夜前進覽之後重有二思出事一くれぬまのけふ古今貫之歌七字頗不快仍當時之詞雖レ劣改レ之也後日可レ申二此由一

暮難支今日乃客仁會知禮奴留待者久敷千世乃例登

（頭注云）古今哀傷紀友則が身まかりける時によめる貫之あすしらぬ我身さおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりける

書二高檀紙二枚一加二禮紙一以二一枚一如二立文一裹レ之依レ有二存旨一用二此字一　（頭注云）存旨今案娶人立二五常一爲二夫婦有ッ別愼夫婦無レ別則走二色情一亂二禮儀一矣而今用二假名一者此體似二誂書一故用二眞名一備二古實一乎

倶禮加多喜計布野所羅仁所志良禮奴留萬津者比佐志喜千世能田目志登

午時東帶參二彼宮一土御門北堀川東新所重門高闕翠簾白砂驚レ目　付二前右少辨親房朝臣一進二入之一女房有二會釋返事一

東宮除目加階所望之事　清範

建保四年十二月十二日今日付二一首愚詠於山城守一

雪乃內能松谷色萬左禮加多倍乃木々波花毛佐久奈里　頭注云　拾遺愚草云京官除目のついでに下臈參議おほく納言に昇進あるべききよしきこえしに正三位を申さて　清範朝臣につけ侍し雪の內の……

正三位所望貽儀可然事

傍官昇進不レ被二競望一僅申二松爵之一階一由先日示ヨ付之一稱二無レ次由一仍加ヨ送此歌一爲ヨ之伺二松容一也

十三日午時計山城送レ書云今朝御湯殿之次其申入了愚歌有二御詠吟一還二自賞一以二舊賞一加階有二其例一哉之由有御事々體似レ宜者且以感悅舊賞之餘執遇二加階之勤功一（懇切イ）　（頭注云）勘物云定家建保四年十二月十四日敍正三位春日行幸賞

後撰抄奧書云此書中院入道大納言爲家所レ令二撰作一也三代集口傳不レ可レ有二他見一而已

古撰云

近來波憂身衰氣里奈良山之靑木之下葉色哉替禮留

曼荼羅緣起作者不詳云昔河內國有二富家一門前有二卑民一其子號二麻蘿困丸一戀二富家之女一將レ死母惟問童不レ答母就二其知己一竇問レ之童語二所由一母歎二其不ㇾ可ㇾ及其病臥媼風聞以爲母子若爲レ我死須二大罪一即密使僞慰二母子之心一母子喜悅焉又使云密事不レ筆不ㇾ通汝宜レ學レ筆童諾又使云汝願爲レ僧近レ我有レ便也童即作レ僧又使云縱爲ㇾ僧無二効驗一不二敢近一願爲二高僧一矣小僧不レ得レ止而既走二他國一欲二修行一習論所謂引二欲駒一入二佛道一是此謂乎姫愍二其志一手自縫二藤袴一以充二行裝一小僧竟走焉未レ經二幾歲一而姫早世小僧在二他國一悲歎之餘更恐二無常迅速一日夜孳々勤

而學成名振世稱二智光法師一智光先二行基一卒智之徒以爲師初謗二行基一其罪尙不レ輕故使下二行基一修中智之中陰追薦上基應レ請來登レ壇一磬詠二和歌一首一云

麻福田加修行爾出之藤袴其片袱遠波我曾縫天喜（頭注云）石橋氏泉州志曰麻福田家池在二泉南郡稻葉村一

玆知姫是行基之前身也出二千泉州志一

袖中抄云芹つみし昔の人の下　或人の語しは昔大和國に猛者ありけり家には山を築池をほりていみしき事共を盡せりけり門守の嫗の子なりける童のまふく田丸といひし有けり池の邊にいたりて芹を摘ける間猛者のいつき姫君いてゝ遊ひけるを見てより此童おほけなき心つきて病になりて其事となく臥りければ母恠みて故を強ちに問ければ童此よしを語るにすへて有へき事ならねば我子の死む事を歎く程に母も又病に臥す其時に彼家の女房此女の宿りに立入るに二人の者の病臥るを見て恠みて問に母の云くさせる病にあらす然々のこと待るを思ひなけくによりて母子死むとする也といふ女房笑ひて歸り此由を姫君に語るに姫君哀かりて安き事なりはや病をやめよといへと有れは此由をつくるに童もおやもかしこまりよろこひて起て物くひなとして例の如くになりぬ姫君の仰せに忍ひて文なと通はさむに手かゝさらむ口惜手習ふへしとあれは童悦ひて一日二日に習ひつ又云く我父母しなむ事近し其後は何事も沙汰せさすへきに文字しらさらむは淺まし學問すへし童又學文して物みあかす程になりぬ又云しのひてかよはむに童は見苦し法師に成へし則なりぬ又云其事となき法師の近付むはあやし心經大般若なと讀へし祈りせさするやうにもてなさむと云に隨てよみつ又云く猶いさゝか修行せよ護身なとするやうにて近付へしといへは修行に出たつ姫君哀みて藤はかまを調してとらす片袴をは自らぬひつ是をきて修行しありく程に姫君かくれにけれはその由を聞て道心を發て偏に極樂を願ひてたうとき聖りにて失ぬ弟子とも後の事に行基菩薩を導師に請したるに禮盤にのほりて云くまふく田丸か○○○○修行に出し(乎)藤袴われてそぬひし○○その(乎)かたはかまといひてかね打ならしてと事もいはてをりぬ弟子あやしみて問ければ忘者智光は必往生すへき縁ありし物のはからさるに世間に貪著して惡道に

ゆかむとせしかは我方便にてかくはこしらへいれたるなりとなむありける姫君は行基菩薩の化身行基は文珠なりまふくた丸は智光也されは智光賴光とて往生したる物は是也此義はうきたる事にもあらす或人の文珠供養しける導師にて仁海僧正宣ひけるなり云々

弘仁四年癸巳建ニ南圓堂ー冬嗣公本願四天王像造ニ彼堂ニ之時筑レ檀之鬼現形歌云

補陀羅久乃南乃岸仁伊保利世波北乃藤波今曾佐加衣无

其後藤原氏繁昌（伊呂波字類抄興福寺條下）

天德五年二月十六日改ニ天德五年ー爲ニ應和元年ー天德是火神號也可レ有ニ其忌ー仍改レ元也世傳云新造內裏之柱虫食卅一字其歌云

作論倫乎　又母屋計南燒　菅原舍棟之板間之乎　不合奴限者（扶桑略記第廿六）

且於ニ病床ー詠歌云

限安留命於人仁伊曾加禮天（被急）見奴（不見）世之後緒加禰天兼知奴留　（頭注云）於當作遠季云

（爲世）此歌於ニ病床ー令レ詠レ之條自ニ其時ー世以所ニ口遊ー也況可レ令ニ吹擧ー哉（延慶（爲世爲兼）兩卿訴陳狀於ニ病床人ー者阿佛歟）

神龜二年九月將ニ諸弟子ー行致ニ山崎河ー不レ得ニ船假ー掩ニ留河中ー見レ有ニ一大柱ー大菩薩問曰彼柱有ニ（與乎）知人ー矣或人申曰往昔尊船大德所レ度橋柱云々愛ニ大菩薩發願ー從ニ同月十二日ー始度ニ山崎橋ー天平五年壬三月朝廷與ニ輦車一兩ー愛ニ大菩薩ー和歌云

止夫久留末（飛車）和禮爾太末倍利（我給）以加爾（如何）止々毛々與呂己倍止（百慶雖）毛止毛（脱四字乎）

八年於ニ久修園ー結ニ夏安居ー七月三日乘レ船下ニ去菩薩寺ー田以ニ二千餘ー蓮華莊嚴以ニ二千餘蓮ー浮ニ於河水ー迎道出居俄爾之間三僧乘レ船到來（一僧婆羅門僧正一人林邑僧一人大唐僧云々）時婆羅門僧正稽首大菩薩云南謨阿利耶曼蘇悉里菩地薩埵波耶摩訶薩埵波耶云々大菩薩答拜云南謨阿利耶波魯吉帝世波羅耶菩地薩埵波耶薩埵波耶即波羅門僧正和歌云

伽毗羅衛爾聞天吾來之日本乃文珠乃御容今日見都留加奈

大菩薩答歌云

靈山乃釋迦乃御前爾結天之眞如不レ朽天今日見都留加奈

則設々無數供具以盡二主客之禮一時人嘆二未會有一自爾始稱二文珠一也　作者部類第三行基傳（季云如此朱書して出處を出してけしてあり）

天平十三季春三月掩ヨ留泉橋院一行基　天皇行幸シ給フ終日清談奉レ施二食封一百戸一左大臣橘朝臣奉レ施二食封五十戸一于レ時闕天皇玉駕巡二於泉河一乃請二大菩薩一總シ玉フ日識樂大臣彈レ琴云

蓮葉爾湛倍留水乃玉如比加禮留人乃安不加宇禮之佐

天皇和歌曰

玉乃如比加禮留人爾於保呂計爾吾之念波己々爾安波女也　此將逢　作者部類第三行基傳

永享後花園院十年秋九月將軍義教　綸旨を申請御教書をなしそへ上杉中務少輔持房を大將として持氏退治乃爲關の東に遣はすみかとより御旗をくたし給ふ持房頂戴して進發御旗乃御製

神振海中雲乃幡之手仁東之塵於拂不秋風　（頭注云）古本海中をやへたつさ訓す於レ義無レ謂萬葉第一わたつみの豊旗雲云古註云豊旗雲曰二海雲一云々依レ是改點さよはたさす

後に上杉山內の重寶天子の御旗といふは是なり

南方記傳

萬葉緯卷第十一

此卷新撰萬葉集なり

○扶桑略記宇多院寬平四年九月廿五日道眞公撰二新撰萬葉集上下一其序略曰當今寬平聖主萬機餘暇擧レ宮而方有レ事レ合レ歌後進之詞人近習之才子各献二四時之歌一初成二九重之宴一又有二餘興一同加二戀思之二詠一債見二歌體一雖二誠見レ古知レ今而以レ今比レ古新作花也舊製實也以レ花比レ實今人情彩煎レ錦多述二可レ憐之句一古人心緒織レ素少綴二不レ整之艷一仍左右上下兩軸惣三百有首號曰二新撰萬葉集一

○或曰下卷延喜十三年八月廿一日源相公說云々

○扶桑略記延喜三年正月廿五日丙申從二位太宰權帥菅原道眞乎○○薨二西府一年五十九

○雁之酢祇花之散鴨　酢字上脫二手字一歟下卷有レ之又萬葉第九手酬草

○將レ惜砥哉許々良鶯之鳴　將レ惜とかきてはをしむ也將の字衍文歟おはつかなし又をしむの略語乎

○如此時不有芝輌思倍者　萬葉に思ふのおを略してもふとのみよめる歌多し然れは不有輌倍者とかゝせ

給ふへきを不有はあらぬともよむへければあらしと
よますべきために芝の字を加へ玉へり下に至りてし
らぬを不知沼と書せ給ふも同し國史の宣命なとにも
此例多し思の字を加へ玉へるはあらしともへはとは
あらしと思へはと云事を知らせ給はむとて成べし
○うすくや人の成砥思者　古今成むと思へば戀將成
也けるを將の字おちたる歟
○五十人沓夏鳴還濫　季云五十人沓夏后宮歌合歟た
つぬへき作者も友則歟貫之歟
○沓直不輸　師説くつていたさぬ人とは百舌鳥也
○五十人沓之
○蟬之葬無佐　後撰によるに禮は禰を寫し誤れる歟
又葬の字の下に所の字有るべし季云上に初夜云間裳
葬處無見湯留
○あきかせにはころひぬらんふちはかまつゝりさせ季云衣歟
させ　樂天詩に冬夜殊未レ製夏服行將レ綻
○秋山丹　鳴管可ニ爲死ー　可爲死は死ぬへきにはあし歟季
らす爲ぬへき也下に鳴管可爲岐とあるに同し季云音
立手鳴管可レ爲岐
○稻負鳥之涙那留部之　和名十八云萬葉集云稻負鳥
萬葉になし若新撰の二字おちたる歟奥義抄にも今ひ
けるがごとし
○鋪留墀柄　文選丹墀　卓吾雜字集曰天子殿前之階
也以ニ丹朱ー漆レ地謂ニ之丹墀ー
○凍不レ泮者　詩迨ニ氷未レ泮
○こひしとは　成沼柄倍者　玉葉戀三戀の歌讀侍り
ける中に興風戀しともあひみぬさきになくなりぬれ
ば興風集同し成は滅の誤にてきへぬともへは成べし
○燃艸丹　師説萠木とよめる歌あり是になすらへば
萠草に燃をかりてかゝせたまへる歟
○往春之跡谷有砥見　三歟季五　申加者迅還來砥言申物
緒　此歌后宮歌合爲ニ一首ー可レ爲レ正　往春之跡谷有
砥見申加者のべのまにまにとめましものをあかずし
てすぎゆくはるの人ならば迅還來砥言申物緒
○さかばかつちるをゝしむべしはるのかたみにつみ
ぞとめつ此歌如レ本異本同
開者且散華緒惜芝美春之方見丹摘管駐鶴后宮歌合に
日くるればかつちる花をあたらしみ春のかたみにつ
みぞとめつる以ニ此歌ー改正
○去年鳴芝云々花になれけむ　此歌叢と云文字をす

ゑずしてこぞ鳴しと云花になれけむと云て題はせり
○匂傳散西花曾思裳保湯留第三句を書せ玉へるやう
は萬葉十六にやぶりを破夫利みやこを都夜故とかけ
るに同し
○土毛丹芝手申　左傳昭公七年云食ニ土之毛一誰非ニ
君臣一
○將問而爲麻　麻は鹿の字をあやまれるなるべし
○草繁芝多放往　したはなちゆくとはもすそをかゝ
ぐるを云歟又したばかれ行と后宮歌合にあれは下葉
枯行歟夏の暑日は草の下葉ももえてかれゆくもの也
○奴摩砥散傳　摩は寫し誤れる字なるべし麻にてあ
さの上略乎季云麼摩新撰見るへく又季か寫し誤り也
○つちにおとさばきずもこりつけ　萬葉六奥山のま
きのはしのぎ降雪のふりはますとも土におちぬやも
○昔丹菊花見來禮者秋之野之道迷左右芊霧曾起塗
他本無ニ此歌一季公云后宮歌合此の如し六帖には秋霧
の道さまたけにたちわたりつゝ　芊の字未詳と有
○飛鳥佐倍曾雁聲緒鳴　萬葉十ぬば玉のよわたる
雁はおぼつかな幾夜をへてかおのが名をのる後撰秋
行かへりこゝもかしこもたびなれやくる秋ごとにか
りのへとなくひたすらにわかおもはなくにおのれさ
へかり／＼とのみなきわたるらむ
○淺杵湍良杵裳あさきはふかきを　瀞湲せゝらく　是乎季公
謠曲に小紬さ走るせゝらき歟
○しらくもにはねうちかはしとぶかりのかけさへみ
ゆるあきのつきかな古今秋上題不レ知讀人不レ知かず
さへみゆる秋の夜の月是定家卿天福の本也顯昭法橋
本はかげさへみゆる秋の夜の月
○五十人童葬處砥人將レ來　后宮歌合あやごは雪降
なへに道も無何處はかとかひとのとめこむ古今冬題
不知讀人不知雪降敷て踏分て問人し無れば今案將の
下に問の字有て問こむ歟葬處は字をかりて書せ玉ふ
までにて墓にはあらずいづこをそこと云程の心とみ
えたりそこはかなど云るはかなるべし
○川係紛之上丹　恐衍文絲乎
○しものうへにあとふみとむる濱千鳥ゆくもなしと
なしのみぞくる　后宮歌合あとふみつくなきのみぞ
くる新古今戀二題不知藤原興風あとふみつくるねを
のみぞなくふみとむるゆくへもなし皆道の緣なり濱
路とつゝく心をしらせんとて道鳥と書給へり

○身緒筑紫　季國字の事に抄出す
○こひわひぬかげをだにみじ玉桂ゝゝ
○のちつひにいかにせよとか玉桂の一月を玉桂と云事此に二首みえたる外もろ〳〵の文によめる歌なし
○人をみて念棠牟事谷　後撰戀二女の許に初て遣ける藤原忠房思ふ思ひは牟は布を寫誤れる歟又通韻歟
○ちきりけむこゝろそつらきゝゝあふはあふかは古今秋上寛平御時后宮歌合歌興風此歌こゝに入ことおぼつかなし秋の歌と後にまじれるにや
○夕三里夜　發句をかゝせ玉へるやう萬葉にもみえず夕月は人の三里ばかり行ほどある心にや
○さりとてひとにそはぬものゆゑ　左の詩の第三句不レ添物故更生此によるに添の下沼字落たる歟
○女郎花歌廿五首　四平　一本無二女郎花部一以二戀部一爲二卷終一
○名丹饒手　司馬相如傳云賓用益饒　張良傳云巴蜀之饒　廣匀曰益也飽也餘也
○秋之野緒皆歴知砥手少別丹潤西袂哉花砥見湯濫季云をみなへしの國字の證也物の名の樣也夫木十一秋に女郎花昌泰元年亭子院歌合讀人不知秋の野の女郎花とるさゝわけに是によるに小竹別丹と有けむを竹の字落たる歟少は小と通用少納言少輔なとの如し
○名丹許曾佐里介禮名にこそありけれを曾阿切佐なればつゞめてこざりけれとよめり曾の字は衍文なりもしあとさと同韻にて通すればありけれをさりけれとよめる歟但此例はみえず
○おくしらつゆの姿緒作禮留　姿をすがたとはよむまじ萬葉に風流をよしと讀ればこれをもさ讀べき歟
○女倍芝此秋而已曾已膽杵緒玉砥貫手見江南　此歌三四の二句の間おちて知がたし
○あらかねのつちのしたにてへしものをけふのうらてにあふをみなへし　夫木第十一秋に昌泰元年亭子院歌合女郎花讀人不知腰句秋まちてうつは物語祭の使あらかねの土の上より藤かづらはひてふけしぞうれしかりける
○花之○者殘ざりけり　詠平限平　詩第二句云路頭遊客花色詠
○夕方之つきひとをとこゝゝ夕當レ改二作久一
○をみなへし析野のさとをあきくれゝゝ析野は名所なり萬葉第八春山のなどよめり國郡未レ考をみなへしはさくとつゝけむ料の枕言なるをやかて下に秋くれは花の陰なとよみて題にかなへたり
○打敷亂イものを思ふか……詩第一句云打亂緒秋風吹倦

萬葉緯卷第十二

此卷日本紀竟宴歌なり

此本者鎌倉中書王眞蹟藏在ニ肥後國熊本城下本妙寺ー矣師不レ應得レ臨ニ寫彼本ー而成ニ奮頭ー或於ニ諸書ー每レ有ト稱ニ竟宴歌ー者上纂ニ於書尾ー手自加ニ與書ー附ニ與於予ー雖レ然以レ不レ類ニ撰書ー玆ニ除歌左並註釋假名ー再臨寫附ニ片假名於歌右ー令ニ人易一見焉以ニ古註並師說ー合而爲ニ頭註ー且加ニ今案ー而已

○養老五年始講　博士從四位下大江朝臣安麿釋日本紀云日本書紀講例　康保二年外記勘申養老五年博士或云不レ作云々今案養老五年ー品舍人親王奉レ勅撰ニ日本書紀ー而奏上翌年也作者大江中書王誤也應レ作ニ太一字ー

○弘仁四年講　博士刑部少輔太朝臣人長外記日記注弘仁三年釋紀同云竟宴弘仁三年私記云四年云々博士刑部少輔從五位下多朝臣人長仁イ今案作者太ノ麻呂後麻乎安乎日本後紀第二十二曰弘仁三年六月戊子是日始令ニ參議從四位下紀朝臣廣濱陰陽頭正五位下阿倍朝臣貞眞イ勝等十餘イ四人讀ニ日本紀ー散位從五位下多朝臣人長執講上日本後紀三年とあれば外記の異說こそ四年とあるへけれ

○承和十年講參議從四位上滋野朝臣貞主外記日記注博士散位正六位上菅野高年釋紀同云承和十年六月朔博士散位菅野朝臣高年建春門南腋曹司講之續日本後紀第十三曰承和十年六月戊午朔令下知ニ古事ー者散位正六位上菅野高年於ニ內史局ー始讀中日本紀上同私考云十一年六月丁卯日本紀講畢上に貞主事は西宮記等にも見えす

⊙元慶二年講五年畢六年宴　助敎從五位下善淵朝臣愛成釋紀同云元慶二年二月二十五日博士伊豫介善淵愛成敷政門外宜陽東廟講レ之竟宴序云右相府命ニ儒書大夫ー於ニ敷政門外宜陽東廟ー講ニ日本紀ー　竟宴序者從五位下行大內記菅野朝臣惟肖歌人兵部卿本康親王以下三十八博士序者加レ之序云中間相府轉ニ太政大臣ー秘書拜ニ豫州別駕ー壬寅歲秋八月相府奉ニ唱群公ー聊行ニ澆章之禮ー三代實錄第三十三曰元慶二年二月二十五日辛卯於ニ宜陽殿東廂ー令ニ從五位下行助敎善淵朝臣愛成始讀ニ日本紀ー從五位下行大外記嶋田朝臣良臣爲ニ都講ー右大臣已下參議已上聽ニ受其說ー同第三十五曰元慶三年五月七日丙申令下從五位下守圖書頭善淵朝臣愛成於ニ宜陽殿東廂ー讀中日本紀上イナシ喚ニ明經紀傳生三四人ー爲ニ都講ー大臣以下有日關關讀前年始讀中間停廢

故更始讀焉同（第四十二）曰元慶六年八月二十九日戊辰於ニ侍從局南右大臣曹司ニ設ニ日本紀竟宴ニ先レ是元慶二年二月二十五日於ニ宜陽殿東廂ニ令ニ從五位下助教善淵朝臣愛成讀ニ日本紀ニ從五位下大外記嶋田朝臣良臣及文章明經得業生學生數人遞爲ニ都講ニ太政大臣右大臣及諸公卿並聽レ之五年六月廿九日講竟至レ首申ニ澆章之宴ニ親王以下五位以上畢（充イ）至抄ニ出日本紀中聖德帝王有レ名諸臣ニ分宛太政大臣已下預ニ講席ニ六位已上各作ニ倭歌ニ自餘當日探（撿イ）レ史而作レ之琴歌繁會歡飲竟（景イ）レ宴博士及都講賜レ物有レ差五位已上賜ニ內藏寮綿ニ行レ事外記史預レ焉

○延喜四年講六年宴（紀傳博士矢田部公望明經得業生葛井清鑒）　釋紀同云延喜四年八月廿一日博士從五位下大學頭藤原朝臣春海（或云前下野守云々）講所不レ註竟宴（同六年閏十二月十七日）序者從五位下行大外記兼周防權介三統理平歌人兵部卿員保親王以下三十六人序云甲子歲降ニ綸旨ニ令ニ大學頭大夫說ニ之始ニ於四年秋八月廿一日ニ終ニ於六年冬十二月廿二日ニ即閏十二月十七日聊屈レ師禮以成ニ竟宴ニ　新國史曰延喜四年八月二十一日壬子是日於ニ宜陽殿東廂ニ令ニ初講ニ日本紀ニ也前下野守藤原朝臣春海爲ニ博士ニ紀傳學生矢田部公望明經生葛井清鑒等爲ニ尙複（復イ）ニ公卿辨大夫咸以會矣特召ニ大舍人頭惟良宿禰高尙文章博士三善朝臣清行式部大輔藤原朝臣菅根大內記三統宿禰理平式部少輔大江千古民部少輔藤原佐高少內記藤原傳文等令レ預ニ講座ニ焉　上新國史全文初見ニ于玆ニ又何在諸神記云新國史云仁和五年四月乙亥朕外祖母當宗氏神在ニ河內國ニ自ニ今年ニ始可レ祭レ之云々　日本紀略云延喜四年八月九日大學寮差ニ遣日本紀尙復ニ同廿一日講ニ日本紀ニ同六年十月廿二日日本紀講竟同十二月廿七日日本紀竟宴閏十二月十七日於ニ侍從所ニ日本紀竟宴每人分レ史詠ニ和歌ニ云々上にと云より以下標註なり

○承平六年講　天慶六年宴　釋紀同云博士從五位下行紀伊權介矢田部宿禰公望宜陽殿東廂講レ之竟宴（天慶六年十二月二十四日依亂逆延引）序者從五位下行大內記兼近江權少掾橘朝臣直幹歌人（中務卿重明親王以下三十七人）序云承平六年ニ冬令ニ阿州別駕田太夫說ニ之中間別駕累遷ニ美州紀州ニ天慶六年九月傳授始畢至ニ其十二月二十四日ニ聊仍ニ舊貫之儀ニ以行ニ澆章之禮ニ云々上今按亂逆將門純友亂也今按日本紀略云朱雀院承平六年十二月十八日壬辰於ニ宜陽

殿東廂講日本紀同廿四日戊申有日本紀竟宴同
天慶六年十二月廿四日戊辰於宜陽殿有日本紀竟
宴私云承平竟宴史家失乎今按釋日本紀云康保二年
八月十三日博士攝津守橘朝臣仲遠承平尙復云々日本
紀略云村上天皇康保元年二月廿五日壬申令日勅定
散位正五位下橘仲遠講(女)日本紀又尙復學生仰紀傳
明經道可令差進之由仰大學寮同九日乙酉陰陽
寮勘申可講日本紀之日時來月廿日乙丑同二年
八月十三日庚戌於宜陽殿東廂始講日本紀以橘
仲遠爲博士私云此後記竟宴不見亦講日本紀
無所見朝政衰行可歎焉西宮記云始講日本紀事
大臣奉(其乎)宣旨定博士又仰明經道令差進尙復學
生定去日裝束於宜陽殿東廂大臣南面東上(右北壁下)
大納言以下參議以上東面北上(列)於納言座之東端(西面)
設博士座其南(西面)設當講尙復學生座東孫庇小板敷
有聽衆幷少納言外記史幷尙復學生座時尅大臣幷納
言立左近陣座各執書卷(別笏)入自東面板戸昇殿
着座(納言白角尙登之)(イカヽ)次參議入從東面板戸即昇自南第一
間著座(同執書卷)座定大臣召外記外記稱唯趁立東戸內(西面)

(是則大臣入戸也)大臣仰可召博士之由(其詞在上日記也)外記稱唯退出次
博士入從南小戸直登著座次尙復學生等入自同
小戸著東小板敷座(座乎)○次聽衆弁小納言及召人等入(幷歟季)
從同南小戸著小板敷座座次當講尙復學生一人進
著其座次博士尙復大臣以下皆披書卷次尙復唱文
一聲音其體高長之次博士讀了尙復讀訖尙復博士退
出二三年之間講讀畢定日設宴座於侍從所竟宴事
侍從所其座西撤大臣座其所立四尺屛風二帖其前
施地敷二枚幷茵一枚爲之博士座又撤納言以下
座其母屋東第一二間西上對座設大臣以下參議以上
座(位机備弁食物但博士机三前)參議座東庇設四位幷辯少納言座南
廂東第一二間設召人侍從大夫以下座其末設尙復
學生等座同南廂中央間立文臺裝束訖(此間[illegible])親王一人
許也公卿自左近陣引至件所入從坤角東行登
自巽角階相分着座次辨少納言及侍從昇殿着座次
尙復學生等又着座次辨少納言及侍從大夫等着座座定
外記等置紙筆硯尙復學生一人就文臺披詠詩三
再奉親王次臨時召人等(々乎)一々畢但大臣以下預件講
人○兼皆得其詠詩之文盃酒三獻之後上達部進盃

序者進レ序之後取ニ文臺筥ヲ置ニ博士前上卿座之上方ニ次又外記秉レ燭次上卿召ニ博士一人ヲ一人也 預定ニ其 爲ニ講師一人々 各平 讀ニ件倭歌一 此間親王公卿出レ歌令レ入レ莒 此間辨少納言并侍從大夫等文 召乎 候ニ公卿座近邊一于レ時大歌御琴師調ニ和琴一被レ公候公卿 合平 座頭令レ應ニ詠之音一講畢博士尚復各給レ祿有レ差件祿物爲ニ饗饌等之物一從ニ公卿家々一依ニ廻文一所レ給也 諸道講書 記傳講書漢書竟宴之日貞眞親王參會出ニ詠句一以ニ明法博士惟宗直本一於ニ里亭一可講律云々令給ニ宣旨一 上詩今按歌也萬葉集以レ歌稱レ詩或稱レ賦至レ下云讀ニ件和歌一則爲レ歌必矣

○八雲御抄第二會の歌の書樣をの玉へる下に和歌の注不レ可レ然事歟但源起ニ日本紀竟宴哥一近崇德院御時顯賴書レ注云々

○此紀元慶 たいてよりを 皷レ篋 禮記入レ學皷レ篋遜ニ其業一

○座人耳熱 前漢楊惲傳酒後耳熱呼嗚々

○於牟加斯佐 神功紀欣感 於武加志美 靈異記喜武可之比

萬葉十九ムカシクモアルカ

○伊朋津儒波屢濃 つねはすまるといへど統の字すぶとよめばすばるといはれたり

○そらみつにそらみつともそらにみつともいふはやまとの枕詞なるをこれはやがてやまとをさしてそらみつといへり山を足引といふが如し

○式部少丞正一位下藤原朝臣佐高 を歟季云 正一位下不審

○たれもこのかなしきときはみそすてゝとらのしたさるなもたちぬべし西宮記云其中秀句誰裳子之無レ香有時波棄レ身底虎野舌切名祇舒奴壁 舘乎

○得ニ土倉阿弭古一

あみはれるあびのこあひて……… 仁德天皇四十三年作ニ依網屯倉阿弭古一西宮記云元慶六年竟宴未レ得ニ解由一者前三河守菅野高松得ニ土倉能阿弭古一土倉能網爾獦々令流鷹狎哉繫絆手無ニ解由一四年之間解由無之とよめる不レ得ニ解由一述懷也和名抄河内丹比郡依羅 與佐美 今按與ニ住吉大羅一不レ可レ混

○つゝみをはとよらのみやにつきそめて聖德太子傳曆云推古天皇十五年秋九月池をはり塘を築ことは崇神紀垂仁紀等あまたみえたるを今の歌にとよらの宮につきそめてとよみ玉へる事おぼつかなし若つきてめとやよませ玉ひけん今案豊浦宮には神功皇后のましくて夫より後の帝おはしましける事未レ聞

○やまとたけ美古仁波也良奴みてにやはあらぬをあ

文字を略したる歟古歌の例多しみてにはやはみてにやはと同し

○いかるかのなみきのみやにいかるがとは太子推古天皇九年に初て斑鳩にみつから住給へき宮をつくりそめ玉ひ十三年十月に初て住せ玉ふなみきの宮とは用明天皇十市郡磐餘池邊雙槻宮をたてさせ玉へり斑鳩は今の法隆寺にて程へだゝり時たがへりおぼつかなし又たなしのりとは十七條憲法にて推古天皇十二年のことなればいかるがとはしばらくおきてなみきの宮おぼつかなし又なみつきにてこそあるをなみきとあるもいかにそやよみそこなひ玉へるにや

○國經年十三始奉二仕田邑天皇一其後于レ今六代故之武内宿禰景行天皇より仁德天皇まで六代の帝につかへ奉り玉ひければ此注そのなぞらへをかき玉へり

○たかとのにのぼりてみればあめのしたよもにけぶりていまそとみぬる新古今賀みつきものゆるされて國とめるを御覽してたかきやにのはりてみれはけふりたつたみのかまとはにきはひにけり疑是今歌

○あまかしのかはねすましきすましきは今案姓をいさぎよくするなり今俗物を洗ことをすますと云

○みつのゐの曾己爾之奈へる見林云正字通云分二宀之半一爲二广乇一篆作二门门一左右宀作二广乇一和國印本智度論初四十卷ばかり末に音を注したる所に其字は某反と云反の字に乙乙などありあまたなり

○天慶六年竟宴の序以行二澆章之禮一釋紀作二浹章一季云此序釋紀と校合すべき歟

○あまつかみ意賦奈禮度意の字日本紀萬葉等は皆於にもちゐて伊につかひたる事なし下の秦敦光歌に賀美能意非雄云々

○文章生正六位上源（橘）朝臣仲遠　新勅撰　續後撰　扶桑略記　續日本紀

○ひたのたくみの木工鬪雞御田なれどたくみをば都てひだのたくみといへばかくよめる歟

○伯孫可垣馬作之雄略天皇九年秋七月壬辰朔河內國言云々これ伯孫事十七年春三月詔土師連等云々これは別義右取合てよまれたるは誤りなるべし又伯孫垣馬つくるといへる事も紀中にみえず

……

○しることとのあるとなきとのへたてをはみかはありともいふへかりけり世說新語云魏武甞過二曹娥碑下一

○てりまさるかほはたれぞと古事記には衣通郎女と

は允恭天皇の皇女輕大郎姬をいひて今の衣通姬の名をば琴節之郎女といへり

○得二土倉阿弭古一從五位下行前三河守源臣治西宮紀沿あみのうちにかゝりはじめし久知よりも今西宮記有二作者名一歌脫仁德天皇四十三年今案此歌有二述懷意一倶智は箕裘字書にもろ〳〵の國にて鷹の名のかはれる事をいへる所に鳩鴿高麗とありかゝれば倶知は鳩鴿の音なるへし

○さきにはふはなをはおきてとよとみこまつにはみますいろなかりけり太子傳云三年甲午春三月云云太子三藏答之桃花一旦榮物松葉萬年之貞木也故可レ賞レ之白氏文集云若無二桃李妾一孰表二貞松節一今案日本紀にてよむ歌に紀に且てなき事を他の說に付てよまれたることはいかゞあらん此本によりてみれば太子傳はふるき書にこそ

○こゝろゆかすそおもふへらなる心ゆくへきにゆかすとあること吟味すべし

○かそいろはあはれとみすやひるのこはみと。にセイなりぬあしたゝすしてかりいろはいかにあはれとおもふらむみとせになりぬあしたゝすして朗詠詠史西宮同西宮其中秀句西宮の意は辨官にて三年をへられける述懷なり

○あめのしたをさむるはしめむすひおきてむすひおきといへる詞解しがたし

○くろかねのまとをとはせる新勅撰續後撰橘釋日本紀右兵衛督從四位下源朝臣仲宣

○はだのきみはおとごをぞめくみたまへるくにをゆつ。るれ乎ことのふかきに此歌よみときがたし愛の字をめぐみとよめど心にはめぐといひて腰の句にみたまへるとありいまだかくよめる例をしらねば後の人さだむべし

○ときのまにまにみよもたえせず漏刻を初て此天皇皇太子の時造られしは齋明天皇六年五月の紀にみえたり

○みたまのふゆはけふそうれしき清輔奧儀抄云曾丹歌にいとまなみかひなき身さへいそぐ哉みたまのふゆとむへもいひけりみたまのふゆと云はなき人の恩德を報ずとて年の季云此下いかにしておとしたる脫簡なくばよからむに奧義抄の分は他ニ可レ補

○西宮記云講二日本紀一博士等例天長承和其人未レ詳

元慶六年右大臣宣奉レ勅講レ之例以二假名字一書二詠句一　講博士伊豫介善淵愛成序者大内記菅野惟肖得二土倉阿彌古一未レ得二解由一者前三河守菅野高松其詞曰日本紀竟宴各分レ史得二土倉阿彌古一前三河守菅野高松土倉能網尼鴒々介流鷹狎哉（つちくらのあみにかゝれるたかなれや）繫絆手無二解由一（つなきほたしてこくるよしなし）歌體大略如レ此云々今按此外雖レ出二二首一與二前篇一依レ爲二同詠一省二略之一

○元慶二（當作六）年日本紀竟宴彥波瀲武鸕鷀羽葺不合尊續後撰神祇部兵部卿本康親王わたつうみなみかきわけてあらはれしたけうのみてといくよへぬらむ

○元慶二（當作六）年日本紀竟宴歌譽田天皇萬代集神祇部右大臣多（まさる）ひしかたのをくらのやまははるけきをきみをまはるにかげも はな れず西峯云菱形小倉山日本紀無二所見一宇佐詫宣集第一云菱形者三山之總名也北辰影向之地也山形如二菱之角一三山者一龜山在二北方一似二龜形一（號小倉山）二大尾山在レ東爲二龜山尾一三宮山菱形耶小倉乃山之下津石根宮柱太敷立是也又云菱形之稱非レ一山之秀分二三方一而崎二於松林之間一有二自然之池一隨レ山總名之故稱二菱形池一

○詞林采葉抄ひもろきの條下云日本紀竟宴歌云神のひもろぎそなへつるかなとよめり云々上句なし上に順家集夏衣きもてそまされおなしくは神のひもろきときてかへらむ

○朝くらや木の丸とのに我をれば名のりをしつゝ行は誰子ぞ此歌新古今雜中に天智天皇の御歌とてのせらる又神樂歌の中にもみへたり若天智天皇を得てよめる竟宴の歌にや古代の歌に似す

萬葉緯卷第十三

○此卷眞名伊勢物語なり

○繝裳　繝無所見疑綸乎韻會眞韻云爾雅綸似レ綸組似組東海有レ之註云海中草生二彩理一有二象レ之者一因名云通志云綸鹿角菜組海中苔繝綯乎詩云霄爾索綯ひじきはなはをなへるに似たる藻なればなり

○六帖あふことをあてきの島に引鯛のたびかさならば人も知なむ

○四乎知　或説云鹽尻壺鹽といふ物あり其尻似二此山一物語之習好二卑詞一寂蓮殊信二用此説一或本はしりはしの先人命縦雖レ爲二鹽事一凡卑也不レ可レ用レ之心えすとてありなん往年有レ尋二問人一答憶不レ知

○かきりなくとはくも來爾計留哉與わひあへるに哉此文字異邦の書に我國にかなとつかへる心ある事なし我書の内にもこゝにはじめてみえたる歟

○僋　萬葉舟きはふ堀江の川のみなきはにきゐつゝなくは都鳥かも順集てしの海にむれはゐるとも都鳥みやこの方の戀しかるべきうつは物語名にしおふ關をもこえし都鳥聲する方をもゝしきにして

○上表　題日本紀うはふみ紫式部北へ行鴈のつばさにことつてよくものうはかきかきたえずして

○よろこぼひて新拾遺花山院御製長歌略たくみいてけんひたたくみよろこぼしく思へども云々かげろふ日記思ふやうにもあらぬ身をしなげゝばこゑあらたまるもよろこぼしからず云々

○源氏引歌ある時はありのすさみにかたらはでなくてぞ人は戀しかりける

○今案いづくをはかともおぼえねば墓はなき人のしるしにきづく所をいへば古語にそこときはめたる所を云とみえたり菅萬にもはかなくと云るに葬處無とかゝせ玉へりしかればはかはかなくそこはか皆同じ詞と見えたりはかりと云も自らかよへり源氏夕顔に君もかくうらなくたゆめてはひかくれななはいづてをはかりとかわれもたづねん

○墓無毛　䟽覺記云むかしの人は父母の墓をいみしくかさゆるを孝養とす保忍の志なき愚者をはかなしといひそめて今もおろかなる人をはかなしといへり

○古賤之をだまき　舊事記云復令二倭文造祖天羽槌神織二倭文布一者萬葉第三赤人勝鹿眞間娘子墓をみ

てよまれたる長歌略いにしへに有けん人のしづのはたの帯ときかへて同第十一いにしへのしづはた帶古今へのしづのをだまきいやしきもよきも盛は有し物なり萬葉倭文幣ともしづは神代よりある布の名なりそれを民のきものにせし故にいやしき者をしづといへり

○顔強　漢書司馬遷傳云言不レ辱者所レ謂强顔耳通鑑第四十九集覽云强顔猶レ言二顔厚一也

○摸力無　摸撲之誤乎此上相字脫而相撲二字連綿而須末布歟古事記逗留　推　禁同若遊仙窟

○さつきまつはなたちばなの香乎聞者今香をかぐをきくと云は此字なるべし

○いにしへのにほひはいつらさくらはな扱留之如毛扱韻會說文收也取也獲也擧也引也今案こけるは木の葉などをこく也歌にも桑てきたれてなどよめり今よめる所のこけるは焦悴なりやせこけてなどいへりそれを假て扱の字をかけり季云扱箸農具しごく　引こくる

○狹莚樹てろもかたしき　延喜式山城國調席二百八十枚狹席五百九十枚又云狹席六枚長席八枚

○はしりかゝる水はわうこうじくそのおほきさにて三代實錄四十九云太宰府例貢小柑子云々性靈集獻二柑子一表曰小柑子六小櫃大柑子四小樻云々

○隨分イ點なつさく　朗詠管絃隨分管絃還自足

○翁佐備　萬葉をとこさびをとめさび神さび都めくをみやびゐなかめくをひなび同第十八大伴池主針袋これはたばりぬすり袋今はえてしがおきなさびさむ季云古事記勝佐備さびはほてるとまではいかゞ氣色だつを云はん歟

○季云眞名伊勢物語の註は歌並に古語どもに萬葉以下勅撰集等を以て所二考證一もの多し件はさと抄出するなり

○みちのくのしのぶもちずり　定家卿勘物河原左大臣源融寬平七年八月薨七十三於二在中將一非二幾先達一如何

○わが門にちいろある竹をうゑつれば　これはさたかすのみこ　貞數親王淸和第八母中納言行平女延喜十三年薨四十二　貞數延喜十三年ましくたれば伊勢が筆にあらぬ證なり

萬葉緯卷第十四

吾邑有正六位上宗岡（岡廳作岳）眞行者一夕談予曰有下以二和漢朗詠集和歌一（頭註云或說云歌堀河院御宇右衞門督師頼卿加之藤原基俊之新撰朗詠有歌如何）爲二眞名一書上青蓮院家藏本也矣以隣好之交借請閲之雖叶古風間多雖然又非近世之作至如以蝦鳴書河維以保乃保爲似似以異妹我寢書幾本縮者用文字不容易因玆書寫以爲緯而已文字甞少而爲一首萬葉第十一卷十二卷其例多矣先是西峯先生有言予和漢朗詠者四條大納言公任卿作也以於倭漢才士詩句採摘而爲上下和歌者後人書加江談抄云四條大納言者高相如弟子也仍撰朗詠集（頭註云今案今之朗詠集相如之作不爲多疑有異本乎）之時多入相如作所謂獨茶漸忘浮花味樵蘇往反之句有何秀發乎云々十訓抄第六云小野宮右大臣實資（頭註云小野宮實資公は誤乎大二條關白敎通公則公任卿聟也）さておはしける云々公任卿此殿を聟に取てはしめて入申されける時朗詠上下卷を撰て置物の厨子におかれたりけるゆゝしき聟ひきて物にてそありけると云々今按兩書無和歌事則西峯說可爲是乎雖然今世有稱世尊寺行能卿自筆印本而有和歌行能卿爭以異本書焉暫殘不審耳今案至卷軸題白和歌一首公任卿自歌也撰集之書入自歌事尋常也和漢共自撰乎傳聞公任大納言筆之和漢朗詠集今有宜家向來可一校之耳又歌人等之名有相違併可正之

和漢朗詠集上卷和歌

（頭注云）文選孫興公天台山賦凝二思幽レ巖一朗二詠長川一善曰朗猶二清徹一也翰曰朗高也

春

立春

古今卷頭　年内春來梟一歳去年言今年言（こしのうちにはるはきにけりひとゝせをこそこやいはんことしとやいはん）　さしのうちに春立ける日よめる　在原元方

古今　袖浸結水凍春立今日風也解覽（そでひちてむすびしみづのこほれるをはるたつけふのかぜやとくらん）　はる立ける日よめる　紀貫之

拾遺卷頭　春立謂計三吉野山霞今朝見覽（はるたつといふはかりにやみよしのゝやまもかすみてけさはみゆらん）　平貞文か家の歌合　壬生忠峯

（旁注云）秀歌體大略卷頭

早春

新古今　岩灑覓上垂氷早薇生出春成梟哉（いはそゝくたるひのうへのさはらびのもえいづるはるになりにけるかな）　萬葉八　かも　万　志貴（貫行能本誤）皇子

續後撰　見渡平野高嶺雪消若菜可摘野○梟（みわたせはひらのたかねゆききえてわかなつむべくのはなりにけり）　成乎　龍景殿女御の歌合に平兼盛

谷（たに）やま　古今　風解凍毎レ暇打出波也春初花（かぜにとくるこほりのひまごとにうちいづるなみやはるのはつはな）　寛平御時后宮の歌合の歌　源正澄

春興

新古今　百敷大宮人有レ遑櫻𥫗而今日暮（もゝしきのおほみやひとはいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつ）　萬十作者未詳　新同赤人

拾遺　春猶我知花盛心長閑人有那（はるはなほわれにてしりぬはなさかりこゝろのどかにひとやあらしな）　平貞文が家の歌合に忠峯

古今　見渡柳櫻茄雑京春錦成梟（みわたせはやなぎさくらをこきまぜてみやこぞはるのにしきなりけり）　字彙云人余切音如雜揉也　イ早春　素性法師

春夜

古今　春夜闇無レ益梅　花色社見香者隠
（はるのよのやみはあやなしむめのはないろこそみえねかやはかくる、）
春の夜うめの花をよめる躬恒

子日

拾遺題不知　子日野邊小松無則千代獮何引増
（ねのひするのへのこまつのなかりせはちよのためしになにをひかまし）
壬生忠峯

拾遺　千歳迄限松自二今日一君　被　引萬代經
（ちとせまでかぎれるまつもけふよりはきみにひかれてよろづよやへん）
入道式部卿の御子の子日し侍る所に大中臣能宣

新古今　子日占野邊姫小松引千代陰待増
（ねのひしにしめつるのへのひめこまつひかてやちよのかけをまたまし）
藤清正　清正家集紀國にて子日しけるに

若菜

新古今　不燒共草生　春日野只春　日　任　見
（やかすともくさはもえなむかすがの〻たゝはるのひにまかせてやみむ）
まかせたらなむ新　春壬生忠見　行能本无以无爲是乎下卷草題重出

拾遺題不知　明日柄若菜摘　占　野　かたをかの（拾）明日原今日燒也そやくめる
（あすからはわかなつまむとしめしのにあしたのはらはけふもやくなり）
行本拾同　萬葉十作者未詳

新古萬葉八　明日柄若菜　摘　思　しめしのに本　昨日今日　雪　降
（あすからはわかなつまむとおもひしにきのふもけふもゆきはふりつゝ）
赤人

三月三日付桃

是則集忠峯　集拾遺賀　三千年成謂桃從二今年一花笑春　逢　梟哉乎あふそうれしき　拾
（みちとせになるてふもゝのことしよりはなさくはるにあひにけるかな）
亭子院歌合躬恒

暮春

古今　徒　過　月　日　多花　見昏春曾少無
（いたづらにすぐるつきひはおほけれどはなみてくらすはるぞすくなき）
興風　興風家集さたやすのみこの后の五十賀奉り給ひける御屛風の繪に櫻の花見たる處

三月盡

古今　今日耳春○思　時　而立事安　花　影哉　かは本
（けふのみとはるをおもはぬときだにもたつことやすきはなのかげかな）
不乎　亭子院の歌合に春のはての歌躬恒

拾遺　花皆散宿者行春古　鄉社成應成
（はなもみなちりぬるやどはゆくはるのふるさとこそなりぬべらなれ）
おなし御時月頃の御屛風に貫之　貫之集延喜六年月次屛風の歌三月晦日

後撰　亦來時思○被レ憑我身　在　惜　春　哉。ら本
（またもこんときぞとおもへどたのまれぬわがみにあればをしきはるかな）
不乎　三月つこもりの日ひさしうまうてこぬよしいひて侍る文のおくにかきつけ侍りける

閏三月

古今家集　櫻花春　被レ加　年　人　心　被　飽　爲　せぬ（古家）
（さくらばなはるくははれるとしだにもひとのこゝろにあかれやはする）
伊勢

鶯

拾遺　璞年立回從レ朝　被レ待物　鶯　之　聲
（あらたまのとしたちかへるあしたよりまたるゝものはうぐひすのこゑ）
延喜の御時月頃の屛風素性
あさみとり春立空にうくひすの初聲またぬひとはあらしな（シヲマシ）麗景殿女御　行能本

拾遺　鶯　聲無則雪消矣○山里如何可レ知レ春
（うぐひすのこゑなかりせばゆききえぬやまざといかにはるをしるべく）
不乎　天暦十年三月十九日内裏の歌合に中納言朝忠　中務行能本誤歟

霞

拾遺 昨日社年暮 春霞 吉野山かすかの行能本拾同 早立梟
赤人家集かすみをよみはべりける山邊赤人
人丸行能本誤歟 萬葉八作者未詳
朝日指 嶺白雪村消 春霞 靉二梟兼盛集無重之
古今讀人不知六帖 春霞立也何 三吉野々山雪者降

雨

拾遺 櫻獵雨降來矣同者濕共花影 宿（かげにかくれば拾同行能本）
新勅撰 青柳枝懸 こもれる家 春雨者 しらつゆを六絲持貫
玉乎見家集六帖貫之勢 柳をよみけり伊

梅付紅梅

拾遺 古年根擧 栽我宿水木梅花笑梟中納言安倍廣庭 若乎
後撰 我瀨子 見思 梅花其共不レ見 雪降 赤人（頭注云）後撰春上
よみ人不知我せこに見せんと思ひし梅の花それともみえずゆきの降れば
拾遺 香認誰 不レ折梅花無益 霞立藏 齋院の御屛風に躬恒
拾遺萬十 梅花其共不レ見久堅天衣雪之遍降 古今冬左注人麿 行能本無人
拾遺麻呂

紅梅

古今 不レ君誰見梅花色香知人知 梅の花を折りて人におくりける友則
新古今 色香思○出新いれず行本 梅花不レ常世寄添見
花山院 梅の花をみ玉ひて 不乎

柳

古今 青柳從絲掛初霜亂花綻梟 貫之
春來持垂柳迷絲妹心 成よりに證本 梟哉 行能本無 或證本有
（頭注云）萬葉第十春去は爲垂柳十緒にもいもか心にのりにけるかも此歌を改めのせられけるにや
新千載 青柳眉 籠糸者 春來色增梟 るらむ已上 貫集兼輔中
納言貫之集 家集屛風に

花付落花

古今 世中絕不絕まて 櫻無則 さかさらは 春心者長閑栴增 土佐日記
伊勢物語渚の濱にて櫻をみてよめる業平
我宿花見緩來人散後可戀 櫻の花さけりけるを見にましてきたりける人によみてをくりける 躬恒
古今 見耳人語山櫻每レ手折家梟爲 山の櫻を見て讀素性 裏萬葉梟

落花

拾遺 櫻散木下風寒柄霄被レ知雪降梟 亭子院の歌合に貫之

拾遺雜題　殿守友宮司子（頭注云）奥儀抄六義家の説には臣（トミ）の
有心者此春計朝清　御奴のいへりともさみ五音通する故也　公忠
家集南殿の御まへのさくらの花のちるをみて

躑躅

古今戀讀人不知　思出常盤山岩躑躅不言社戀物（頭注曰）北畠准后
親房古今抄に此歌は眞雅僧都の業平につかはしける云々

欵冬

萬葉八新古今　河維　ちはやふる六帖　神南川影見今笑覽欵冬花　厚見王

拾遺讀人不知　我宿八重欵冬一枝に也散殘覽のこらなむ　一重た　行本拾同　春形
みに（頭注云）天德四年歌合一重つゝ八重山吹は
見ひらけなむほさへて匂ふ花さたのまむ　兼盛

藤

拾遺萬葉十九内藏忌寸繩麿　田子浦底匂藤浪廱行見人爲　夏たこのうらの藤花を見侍りて

續古今題不知　常磐うつろはぬ家集　松名立無益掛藤笑散爲　さき
てちるかな　本行續古　同貫之

夏更衣

拾遺家集立夏廿首の内　花色染袪惜者衣更憾今日有哉　冷泉院の東宮
におはしましける時百首の歌奉れと仰られければ重之

首夏

拾遺　我宿垣根春隔覽夏來梟見卯花　家集延和二年十一月前朱雀院のわか
みやの御裳着の日の料の四月卯花さける所屏風に　順

夏夜

夏夜○寐明言置人者物哉不思梟　不平　けむ行本　家集無　人丸

拾遺題不知讀人不知　鵑鳴五月短夜獨寢則明兼つも　本拾同　人丸

古今萬葉　夏夜者欲臥時鳥鳴一聲明明白　貫之

端午

家集　我駒今日逢來菖蒲草追後負覽　五月五日駒くらへする比　輔基

拾遺　昨日迄餘所思菖蒲草今日我宿妻哉　屏風に　能宣

納涼

六帖新載　涼　六イ　每草村立倚暑增長夏花　貫之

千下くゝる水に秋こそかよふらんむすふ泉の手さ
へすゝしき　中務

拾遺　松かけにいはゐの水をむすひあけて夏なきとしと
おもひけるかな　恵慶　能本行

晚夏

新古今　夏果扇與秋白露何先置增覽　延喜の御時月次の

御屏風に壬生忠岑中務
行能本誤歟

拾遺藤原長能　彌宜事不聞　有　神　達　今
日名越　人　言　也
さはへなすあらふるがみもをしなへて拾
のはらへなりけり
行本拾同齋宮　行本誤歟

盧 花橘

古今題不知讀人不知　五月待花　橘　香　嗅　昔人　袖之香爲　伊勢イ本伊勢物語

新古題不知讀人不知　時鳥　花　橘　香　認　鳴者昔人也戀敷　印本新撰和歌貫之

こいへる歟業平の歌なり
（頭注云　拾遺たか袖に思ひなそへてほさゝきす花橘の枝になくらむ）

蓮

古今遍昭僧正　荷葉濁。不平　染心持何者露玉欺　（頭注云）文集十五
荷葉雖圓宣是珠

郭公

五月暗よひの無覺束時　鳥鳴聲　彌　ほとの新晴氣　後拾遺　明香皇子

拾遺　行。不平　遺山路　暮　時　鳥今一聲聞間　星　北の宮の裳着の屏風に　源公忠朝臣
（旁注云）家集北の宮のみくしあけの屏風に山をこゆる人の子規きゝたる所

拾遺　五更深。不平　寢覺者時　鳥人傳耻可聞。有平　梟　天暦の御時歌合に壬生忠見（旁注云）新古雑下天暦御歌秋の夜の暁かたのきりくす人つてならてきかましものを
（頭注云）右元眞ならはまてさいふへ人

きをほとゝきすふた聲さたにきかてすきぬる　左さよふけて―左歌きかんともおもはてねさめしけんそあやしきされと歌からおなじ持となる

螢

新勅撰讀人不知　草深荒宿燈火風。不平　消　きえぬは新　螢也梟

後撰　包共隱物者夏虫從身餘思也梟　かつらのみこの螢さらへてさいひ侍りけれはわらはのかざみの袖につゝみて
（旁注云）大和物語にかつらのみこのわらはか歌也

蟬

家集ナシ　夏山　峰　木末高則空　蟬之聲　聞　人丸（に行本）

後撰　是見人。不平　咎戀而　音鳴虫　成　姿　ものいひける女にせみのもぬけをつゝみてつかはすさて　大納言重光

扇

拾遺雑歌　天河河邊せ行本　凉　七夕扇風　猶　借　增　天祿四年五月廿一日圓融院のみかと一品の宮にわたらせ給ふて亂碁なさらせ給はゐにまけわざを七月七日にかの宮より内の臺盤所に奉られける扇にはられてけるうすものにおりつけて侍りける　中務

同　銀　河　扇　風　霧　晴　空　澄　渡　鵲　橋　同時の歌歟　元輔
（頭注云）君かてにまかする秋の風なれはなひかぬ草もあらしとそおもふ　中務行能本

秋

立秋

古今 秋來目分明○見共。風音被驚奏 秋立日よめる 敏行

後撰 讀人不知 打著物悲木葉散秋始今日 行本 思 能宣

早秋

拾遺 題不知 萬八 秋立幾日○有 此寢ぬる 行本拾同 拾萬同 朝氣風袂凉 安貴王

(頭注云)いくかもあらねはこのてにをは萬葉におほし首秋の末の歌也こゝに入たる不審

七夕

後撰 題不知讀人不知 人麿家集萬葉十作者未詳 銀河遠渡○有共 わたり人なければ 不乎 君舟手つな 行本 年社待 人丸

拾遺 六帖 秋 一年一夜思七夕相見む 六同 拾 秋無限哉 右衛門督 源法隆家

古今 の屏風に 貫之 毎季逢開すれど 行本 七夕寢夜數少那梟 なぬかの日の夜よめる 躬恒

秋興

新拾遺 題不知 讀人不知 萬葉八 鶉鳴岩根野邊ふりにし 秋萩思人共 さち 見今日哉るかも あひみつ

秋猶不徒 くれ ゆふま 社覺 れ 行本 たゝなら 荻上風萩下露 義孝少將

秋晩

新古今 讀人不知 小倉山麓野邊花薄似見秋夜月 行本 新同

秋夜

拾遺 萬十一 作者未詳 足引山鳥尾持垂尾永々夜獨寢 人丸

古今 誹諧 睦事未盡無明梟何秋長謂夜半 躬恒

八月十五夜 付月

拾遺 家集 水面照月次算者今夜秋最中也梟 屏風に八月十五夜池ある家に人あそびしける所 順

月

古今 天原振提見春日成三笠山出月 もろこしにて月をみてよみける 安倍仲麻呂

古今 題不知 讀人不知 白雲羽打替飛雁數 かけ 新撰萬葉 見秋夜月 躬恒

拾遺 世俑者ふれ 行本 ふれ 拾 具平親王 物思年無共月幾度詠覽 後中書王

九月九日 付菊

乎

拾遺 我宿菊白露毎ニ今日ニ幾世積成レ淵 三條のきさいの宮の裳着侍る屏風に九月九日の所 元輔 中務 行 能本誤

菊

古今 久方雲上而見菊天津星ゝ被誤梟 已上行能本 寛平の御時きくの花をよませ給ける敏行

古今 心宛折者折初霜置惑白菊花 しらきくの花をよめる躬恒

九月盡 清

風雅 山凄し さむ 秋暮矣 なは 行本 告鴨槇毎葉置白露 あさしも已上行能本 暮秋の心を 大江千里

拾遺 昏行秋形見置物我鬘霜有梟 くれの秋重之かせうそこして侍りけるかへりごとに 兼盛 （頭注云）家持集別ゆく冬のかたみの黒髪にふりおける雪のきへぬなりけり

女郎花

古今小野美材 女郎花多野邊に 新撰萬葉 にほへるのへ 宿無益褪名立増

遍照 本誤

新古 女郎花見心者慰なくさまで 彌昔人戀敷 廉義公の母なく成て後女郎花を見て （勇注云）伊勢家集女郎花を折て硯の上におけるを見て

萩

秋野 かのを かに拾 萩刈男名並寢煉索碎思 人丸

家集 移事惜秋萩折 ぬ拾 計置白露 つゆかな 行本 伊勢

家集 秋野萩錦古郷鹿乍音移哉 なのゝ宮のおさゝか野にいて侍しに 元輔

蘭

古今 主不知香社匂 にほひつ行本 秋野誰拔掛蘭

槿

新勅讀人不知 無覺束誰識 秋霧に已上行本 斷間見槿花 道臣

中將 拾遺哀傷藤原義孝 槿何無計思覽 ひけむ行本拾同 人花左社見 （勇注云）あさかほの花を人のもさにつかはすとて拾 道臣中將

前栽

古今 塵不陶思自種幾本縮 妹止 我寐長夏芭 隣より床夏の花をこひにおこせたりければをしみて此歌をよみてつかはしける 躬恒

花依物思白露置如何爲成 あらむさ す行本 覽らむ

紅葉

古今 白露時雨痛漏山下葉不殘色付 もみぢしにけり 家集行同 梟 貫之

家集無 村々錦見篙山柞紅葉截 不平 ○裁間 には行本 清正

落葉

新古今萬十作者未詳 阿須加川紅葉葉流葛城山秋風吹仕矣 人麻呂

後撰人不知 無神月時雨共神並森木葉降社降 このはゝいましくるらん萬貫之

古今 無見人散奏奥山紅葉夜錦也梟 北山に紅葉折らんとてまかれる時よめる 貫之

鴈付歸雁

古今 秋風初雁音聞成誰玉札懸來覽 是貞のみこの家の歌合の歌 友則

歸鴈

古今 春霞立見捨行雁花無里栖哉習 歸雁をよめる 伊勢

虫

今來誰憑驗秋夜明兼宛松虫鳴こゑ行本

古今 蛬痛那鳴秋夜永思者は行同うらみ吾被增 人のもとにまかれりける夜きりきりすのなきけるを聞てよめる 藤原忠房 素性行能本誤

鹿

拾遺不平 ○紅葉常盤山住鹿己鳴哉秋知覽 能宣 重之集能宣集無

古今 夕月夜小倉山鳴鹿聲中哉秋暮 しる行本古同覽 九月晦の日大井にて 貫之

露

新古萬八 笛鹿朝立小野のへ秋萩玉見迄置白露 家持

霧

拾遺 川霧麓籠立則底秋 拾行同 山者見垂 深養父

古今 誰爲錦成者か古行同秋霧笛山過立藏覽 やまとの國にまかりける時さほ山に霧のたてりけるをみてよめる 友則

擣衣 季云玉篇丁道切手推也今本从木者非

新勅撰 唐衣打聲聞月清末寢人空知哉 貫之

冬

初冬

後撰不知 無神月降見不降見無定時雨冬初梟 貫之 （る行本）

冬夜

拾遺題不知 思兼夫獵許行冬夜川風寒千鳥鳴也 貫之（頭注云）千載傳大納言道綱家の歌合千鳥をよめる藤原長たふ妹かりさほの川へを分行はさよか更ぬる千鳥鳴也

歳暮

古今冬卷頭 行季惜有哉增鏡見影暮奏思 貫之（頭注云）此歌みるかけさへに老ぬとおもへはといへる歳尾の折にむかひて幽玄なるものなるべし

爐火

埋火下焦行本こがれし自レ時是被惜折曾悲歟 家集等に見へず業平

霜

拾遺讀人不知後撰 夜寒不二寢覺一けは行本れさめてき拾 鴛鳴拂不レ肯霜置

雪

拾遺初雪をよめる源景明 城而珍敷見初雪吉野山降也矣覽にけるかな行本

古今 三吉野山白雪積古里寒成増也 ならの京にまかれりける時にやとりける所にてよめる 是則

古今 雪降毎木花笑梟何分むめさわけて古行本同 梅折増ゆきのふりけるをよめる 友則

氷

古今題不知讀人不知萬上 大空本の行月光寒きよイひかりし 則影見水先凍梟まつはこほれる行本 文時誤

春氷

山川のかけ水者みかさみきわ増則れる東風谷氷解仕矣覽 氷はさけにらけしも續後拾氷もけふやさくらむ行本 惟忠誤 (旁注云)續後拾遺平兼盛 麗景殿女御の歌合の歌

霞

古今大歌所かた又御樂 深山霞降外山成正木桂色増梟つきに古行同

奥山初雪降外山成正木柞也付梟 (頭注云)此歌古本なし不叶題詞歟

佛名

家集無拾遺 璞季而暮則造驗つる行本 罪不レ殘成仕矣覽 兼盛

荏 荏字彙云想里切音洩物數也 則我身積季月送迎何急覽

齊院の御屛風に十二月晦日の夜兼盛 (旁注云)家集内の御屛風に十二月佛名する家

としの内につくれるつみはかきくらしふる白雪ともにきゑなむ 行能本拾遺貫之詞書に延喜御時御屛風に

和漢朗詠集下卷和歌

雜

風

後撰戀 秋風吹就而。不平 問哉荻葉成者音而増 平のかれきかやう〳〵かれかたになりにければ 中務

新古今題不知家集 似々有明月月影紅葉吹下山下風 信明 人丸 行本誤家集御屛風の繪にもみちりしけるを見る人々

雲

新古今戀卷頭 餘所耳見哉休葛城高間山峰白雲 讀人不知 や新

晴

童蒙抄　霞晴碧天長閑而有耶無遊野馬

曉

後撰戀　曉無間敷者白露置諑　離騷經云謠諑謂譖淫　博雅責也、玉篇諑猪角切訴也

責也　別爲間哉　人のもとよりかへりて貫之

松

古今　常磐成松綠春來今一入色增梟　寛平の御時きさいのみやの歌合の歌源宗于朝臣　徴行行本誤

古今雜讀人不知　吾見久成矣住吉岸姫松幾世經覽

拾遺神樂　天下荒人神相生思久住吉之松　安法法師

竹

古今讀人不知　世栖はふれ古事葉繁吳竹憂節每鶯鳴　うくひすそ　已上行本

六帖　時雨降する行本同　音爲共吳竹那與世共色○換（旁注云）　不乎

新古今雜　輔丹家集

草

拾遺施頭人丸　萬葉九人丸　彼丘草刈男わらは萬　然刈有得つゝも行本同　君來

秣爲　人丸　乎

古今讀人不知　大荒木森下草生則駒不レ諫字曩多言也口すさむ心あり　樋口氏　刈無

人　無人は人　無乎

新古今　不レ燒共草生春日野只春日任足　忠見上卷若菜題已出

忠見家集御屛風春日野やく

鶴

續古今雜　六帖古今小注　和歌浦鹽盈來片男波葦邊指鶴鳴渡　赤人

拾遺賀　大宮群入ゐるたる行本　鶴乍指思心有氣成哉　五條内侍のかみの賀民部卿清貫侍ける時屛風に伊勢

新古今　天津風吹井浦居鶴何雲井可レ不レ歸　殿上はなれ侍てよみ侍ける

清正　（頭注云）袋草紙云歌仙も晴時歌を人に乞常事也清正任紀伊守の後申還昇歌ふけゐのうらにゐるたつの──忠見可令讀也見彼集を件歌無　（旁注云）家集紀伊守になりてまた殿上のおへり申て　清正集

猿

古今俳諧　佗左らに行本　猿那鳴足引山甲斐有今日不レ在　法皇にし川におはしたりけるに橫山のかひにさけふさいふ事を題にてよませ給ける　躬恒

管絃付舞妓

拾遺雜　琴音峰松風通自何絃調初驗　野宮に齋宮の庚申し給ひけるに松風入夜琴といふ題をよみ侍りける　齋宮女御

文詞付遺文（遺季）

古今戀讀人不知　偽無世也則如何計人情　古行本同　こそのは嬉柄間歟

酒

拾遺雜秋　有明心地社爲盞光にひか副而出矣思者　け拾　近江にあたりける人のもさにまかりけれは女さも盃にひかけそへてなしたりけれは　能宣

山

拾遺雜下貫之　名耳而山三笠無梟朝日夕日指在梟　拾行本同にまかせて

忠見行本誤歟　同　雲出年ふれば越白山帶而　拾已上行本同　ないにけり　多年之雪積宛

忠見（峯）　同　見渡松耳拾のは白吉野山幾世積雪有覧　入道攝政の屏風に　兼盛

山水

拾遺物名の木高向草房　神並水室岸崩賢立田川之水被濁　みかさまさりて　行本

水付漁父

古今　年經花鏡成水散掛哉曇言覧　水のほさりに梅の花のさけりけるをよめる　伊勢

詞花　源上詞同の行本　定則君之代本の行　再度澄堀川水　圓融院の御時

堀河院にふたゝひみゆきせさせ給ひけるによめる　曾禰好忠

禁中

家集ナシ　御鑰守其燒火しのたくひに　○不在其吾心中社有

たけ行本　中務

拾遺　愛光寒氣秋月雲上社思被遣　延喜の御時八月十五夜藏人所のをのこさも月の宴し侍りけるに　藤原經臣

古京

新古今春通不知讀人　不知中務集清正集　礒神古京りな　來見者昔笄花曾笑　さきに已梟　上行本

故宮付故宅

六帖　無君荒宿自板間月漏袖沾梟　河原の左のおほいまうちきみの夕まかりて後かの家にまかりて有けるにしほかまいふ所のさまをつくれりけるを見てよめる　貫之

古今哀　無君まさ古煙斷鹽釜浦凄敷見度哉

古　若散哉人之惜驗今花社いまは　昔請　一條攝政　（頭注云、拾遺哀傷謙徳公中納言敦忠まかりかくれてのちひえの西坂本に侍ける山里に入々まかりて花を見侍けるに後拾雜三小大君ちるをこそあはれさみしか梅花はなやこさしは人なしのはむ

仙家付道士隠倫

古今寛平歌合　濕乾山路菊露間爭我　いつからさせなわ　れは行本イ古同　千世
經覽仙宮に菊なわけて人のいたれるかたなよめる　素性

山家

古今讀人不知　山里物凄左　わひしき事有　こそあれ古　ものさびし　かろこさはあれこ行本　世自
憂栖吉假梟
古今　山里者冬凄左増梟人目草枯矣思　冬の歌さてよめる　宗于

田家

拾遺六　春田人任而我者只花心盡計曾　つくるころかな拾つく
帖冒之集　るけふかな行本承平四年中宮の賀し給ひける時屏風に齋宮内侍
古今讀人不知　昨日社早苗取何間稻葉　脱字歟いなは　そよきて古　秋風吹
家集　ときすきはさなへもいたくおひぬへしあめにも田子はさはらさらなむ　貫之

隣家

六帖　君宿我宿懸同　わくる行本六　わかぬイ　杜若　不乎　映矣　映字彙時つう相照也
ろはぬ見人哉　に行本

山寺

拾遺題不知　讀人不知　山寺入相鐘之毎聲今日暮聞悲歟（頭注云）清少納言
皇后宮山ちかき入相の鐘の聲ごさにこふる心のかすはしらなむ
詞花　木下爲棲則自花看人可成矣哉　なりにけるかな行本　修行しあ

りかせ給ふけるに櫻花の咲たりける下にやすませ給ひてよませたまふ　花山法皇（頭注云）榮花物語見はてぬ夢花山院所々あくかれありかせ給ふて圓城寺なさいふ所におはしまして櫻のいみしう面白きなみて見めくらせ給ひてひさりたたせ給ひける木の下た

佛事

此世菩提種栽則君可引身成矣　九條左相府
新古今比叡山中堂建立の時　阿耨多羅三藐三菩提佛達吾立傍　そま行本新同
冥加有給　傳敎大師
拾遺　極樂晴氣道聞連勤而到處也梟　極樂なれかひてよみ侍る仙慶法師拾
千載集空也上人

拾　何然與君思若菜法爲今日摘梟（つる行本拾同）　天暦の御時故さいの宮の御賀せさせ給はんさて侍けるな宮うせ給ひにけれはやかてそのまうけして諷誦おこなはせ給ひける時　村上御製

僧

後撰家集六　多羅地禰掛兎優　む行本　婆玉我黑髪不摧　撫歟　有　はしめてかしらおろし侍りける時物にかきつけ侍る　亘僧正
拾遺題不知　世中牛車無則思之家如何出間歟
水上　續古今題不知行本同　清流雪而任乎仕我名更又乎汚

江談　支賓

閑居

古今 吾宿道無迄荒梟無レ例乎人待爲間 良僧正

眺望

古今 見渡者柳櫻茹交而京春錦也 梟 花さかりに京をみやりて 素性

餞別

後撰離別 想像心計者不レ礙於何阻覧峰白雲 さなくまかりける人に餞し侍りけるに 直幹

家集 季直毎春別於歟憐共人後人曾知梟 元眞

古今 壽而心叶物成者何乎別之可レ悲假 源のされかつくしへゆあみむさてまかりける時に山崎にてわかれをしみける時にてよめる 白女

行旅

古今羇旅 不知左註人丸 似々明石浦朝霧嶋藏行舟推思 人丸

同別 和田原八十嶋掛漕出人告天釣舟 隱岐の國に流されける時に舟にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける 小野篁

拾遺 有レ便爭京告遣今日白川關越 陸奥に白川の關こへ侍けるに 兼盛

道遠く雲井はるかの山中に又とも鳴ぬ鳥の聲哉 行能本

庚申

沖中漁えさる 行本 無方 さきなき 釣舟海士先立魚先立

袖中抄 いかてかは人にもとはむあやしさはおもはぬ中のえさるましきを 行本

帝王付法皇

古今注王仁 難波津笑此花冬籠今春部笑此花 は古行本同

散矣又來春者笑梟 行本 千年後君於賴 光孝小松天皇

親王付王孫

拾遺 伊加留伽 や行本 拾同 富小河絶者社我大君御名忘 逢麻呂本

大師 行本 拾遺讀人

承相付執政

讀古今 山櫻飽迄色見津留哉花可レ散乎風吹間 (ヨニ行本同) 清愼公月輪寺の花見侍ける時讀侍ける兼盛 (旁注云)家集小野宮のおとゝの櫻花御覧しにおはしましたりしに注云此歌は月輪寺の花見侍りける時讀侍ける

將軍

後撰判行本 王梳下再世乎不逢君身乍明哉者有思 公忠

刺史 刺史は國史也此歌こゝに入る事御製有疑

新古賀 仁德天皇 高屋上見則煙立民竈者賑鬼 御調物ゆるされて國さめゐな御覽して (頭注云)日本紀竟宴歌得大鷦鷯藤原時平たかさのにのほりてみれはあめのしたよもにけふりていまそとみぬる

詠史

箏則（かそふれは）は竟行本かそいゐ 如何憐（いかにあはれと） 思（おもふらむ） 覧三季成矣（みとせになりぬ） 足立間（あしたゝねまに） あしたゝずして同上行

後江相公 本大江朝綱 （旁注云）日本紀竟宴歌得伊弉諾尊大江朝綱かそいろはあはれとみずやひるのこのみとせになりぬ足立すして

王昭君

家集 足引（あしひきの） ノシ さしなへてみ 山隱 成（やまかくれなるほと） 杜鵑聞 人無 音（ほとゝきすきくひともなきねをや） 鳴覧（なくらむ） のみそなく行本

已上 實方 拾遺 拾同

家集 ナシ みるたひに鏡のかけのつらきかなかゝらざらましやは行本 はかゝらさりせ

妓女（きじよ）（ヲヨ季）

古今 天津風雲通路吹閉（あまつかせくものかよひちふきとちよ） 弟妻姿（をとめのすかた） 暫留（しはしとゝめむ） 良峯宗貞五節の舞姫を見てよめる

遊女

新古今題不知讀人不知 白浪（しらなみの） 寄 渚（よするなきさに） 夜 過（よをすこす） すくる行本同つくす新 すつるイ 海士子則（あまのこなれは） 宿不定（やともさためす）

老人

拾遺 磨鏡底成影（ますかゝみそこなるかけに） 向而（むかひて） そむかゐてみる時にこそ拾施頭ゐで行本同 楚乎不知（しらぬ） 翁逢（おきなにあふ） 心地（こゝち） 爲（すれ） 躬恒家集

何方（いつかたに） くに かく行本 身寄（みをはよせまし） 間 世中（よのなかに） 乎不 老（おいて） 厭（いとはぬ） 人仕（ひとし） 無則（なけれは） 爲頼

交友

新千載題不知讀人不知 與君（きみと） 我何成事（われいかなることをちきりけん） 契昔世（むかしのよこそ） 社知間（しらま） 乎脫 皃（ほしけれ） 村上御製

古今 誰而知人（たれをかもしるひとにせん） 爲高砂松（たかさこのまつも） 昔乍友無（むかしのともならなくに） 藤興風

懷レ舊

古今雜讀人不知 古野中冷水濕皃（いにしへののなかのしみつぬるけれと） 本心知人（もとのこゝろをしるひとそ） 楚酌（くむ）

拾遺 昔不懸（むかしをはかけし） 思（とおもへと） 士旦計（かくはかり） 怪敷（あやしくめにも） 目波立（なみのたつかな） 哉みつなみた拾行本同 右大臣の女御うせ侍りにければ父おとゝのもとにつかはしける村上御製 （旁注云）いにしへをさらにかけんとおもへども拾

拾遺哀傷 世中有間敷者（よのなかにあらましかはと） 思人（おもふひと） 無 多成（なきかおほくも） 皃哉（なりにけるかな）

述懷

古今俳諧讀人不知 爲何身（なにをしてみの） 徒（いたつらに） 老矣（おいぬらむ） 覧にけん 季之（としのおもはむ） 思事（こともはつかし） 慙敷（やさしき） 古行本同

新古今 世中者（よのなかはとてもかくても） 兎角可有（ありぬへし） おなしこと 新行本同 宮也藁屋（みやもわらやも） 終無（はてしなければ） 蟬丸

拾遺 且計（かくはかり） しはしたに 拾行本同 難經見（へかたくみゆる） 世中（よのなかに） 浦山敷（うらやましくも） 澄月（すめるつき） 哉 かな 法師にならんと思ひたち侍ける比月を見侍りて藤原高光

慶賀

新勅撰讀人不レ知 嬉（うれしさを） 左昔者袖（むかしはそでに） 包（つゝみけり） 皃今夜（こよひはみにも） 身餘（あまりぬる） 矣哉（かな）

祝

古今賀讀人不知 君代（きみかよは） わかきみは古 千代（ちよに） 哉千代（やちよに） 磊（さゞれいしの） 磊字彙音雷衆石皃前漢書磊落 成（なりて） 苔蒸迄（こけのむすまて） 岩（いはほと）

拾遺賀 萬代（よろつよと） 御嵩山（みかさのやまそ） 曾呼成天下（よはふなるあめかしたこそ） 社長閑（のとけかりけり） 皃 樂しかるらん拾 已上行本同 仲算

戀

古今 我戀者（わかこひは） 行末不知（ゆくゑもしらす） 終無（はてもなし） 逢限（あふをかきりと） 思計（おもふはかりそ） 躬恒

拾遺 類宛乎不來夜餘多成則不レ待思待増 人丸 六帖こむさいひて
こざりしよろも有しかはま
ためしもこそ待にまされろ

古今 今來言計長月有明月待出乎津留哉 素性

無常

拾遺 世中何喩朝暏き漕行し舟跡之白浪 なきかごさ萬

滿誓法師

萬葉 世中夢耶覺々共夢共不レ知有無則イナシ（すも行本）

拾遺哀傷 手結水宿月影之有無之世有哉 こそありけれ 世中心ほ

後 そくおまへて常ならぬ心ちしけれは公忠朝臣のもとによみてつかはしける此あひた病おもくなりにけり貫之左注此歌よみて程なくなくなりにけるとなん

新古今 末露下滴也世中後先縞仕成覽 家集世のはかなさいさゝおもひしられ撰ろ 頁僧正

白（頭注云）西行撰集抄村上の帝の末比公任の中將に梅の花折てまいれとてつかはされけるにほどなく雪をちらさず折てまいり玉ふに帝いかゝ思ふと仰のありけるにかくこそよみ侍りつれしらしらし——う季

白々志爲レ白夜月影雪踏分かき己梅花折 上行本

萬葉緯卷第十五

風土記 續日本紀（第六）元明天皇和銅六年五月甲子、制、畿內七道諸國郡郷名著二好字一其郡內所レ生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物具錄二色目一及土地沃瘠山川原野名號所レ由又古老相傳舊聞異事載二于史籍一言上云々 朝野群載卷第二十一雜文上云諸國召二風土記一官符 太政官符 五畿七道諸國司 應三早速勘二進風土記一事 右如レ聞諸國可レ有二風土記文一今被二左大臣宣一偁宜下仰二國宰一令上レ勘二進之一若無二國底一探二求部內一尋二問古老一早速言上者諸國承知依レ宣（行之）不レ得二延廻一符到奉行 參議左大辨從四位上兼行讚岐守源朝臣恒外從五位下行右大史阿刀宿禰忠行 延長三年十二月十四（二十一）日云々 本朝書籍目錄云風土記事見二扶桑略記一云云今案元正天皇靈龜開二風土記端一紀中不レ見二撰進之文一又或曰仁明帝撰レ之延喜時全備不審憶自二元正帝一以後往往依レ撰二進之一不レ載二史籍一歟至二出雲國風土記卷末一書云天平（聖武天皇）五年二月卅日勘二造之一云々此間雖レ勘二造之一或不レ全或亡失歟依レ茲延喜賢主展轉反側探二求諸國官符一云レ可レ有二諸國風土記文一則以往全備明矣書目雖レ書レ事見二扶桑略記一所レ載二風土記一篇亦亡焉惜哉不レ傳御而可レ嘆今適全部出雲一國而已雖レ有二流布本一不レ免二傳寫誤一今所レ書寫本者以二出雲國造文庫所レ秘本一爲二篇首一餘者諸書採二所引證一殘篇遺紙ヒ爲二好古者一次レ之耳

出雲國風土記 先年出雲國史出雲風土記抄を見る與今合て國郡所々分明なり

國之大體首レ震尾レ坤 東南宮（陸乎）西（西乎）○北屬レ海 東○西（西乎）一百卅七里一十九步
南北一百八十三里一百九十三（步乎）○

一百步

七十三里卅二步

得而難可誤

考細思枝葉裁定詞源亦山野濱浦之處鳥獸之棲魚貝海菜之類良繁多悉不陳然不獲止粗擧梗槩以成記趣所以號出雲者八束水臣津野命詔八雲立詔之故云八雲立出雲

合神社參佰玖拾玖所　壹佰捌拾肆所在神祇官　貳佰壹拾伍所不在神祇官

玖郡鄕陸拾壹里一百七十九餘戶肆驛家陸神戶柒里十一(二イ)意宇郡於字鄕一拾壹里卅餘戶壹驛家參神戶參里六　嶋根郡之末爾鄕捌里廿五餘戶壹驛家壹　秋鹿郡安伊加鄕肆里十一(二イ)餘戶壹里ナシイ　神戶壹里楯縫多天奴比郡鄕肆里十二(一イ)餘戶壹　出雲郡鄕捌里廿二神戶壹里二　神門郡加無止鄕捌里廿二餘戶壹驛家貳神戶壹里一　飯石郡伊比之鄕漆里十九　仁多郡爾以多鄕肆里十二　大原郡於保波良鄕捌里廿四

(頭注云)順和名鈔此外有能義郡爲十郡而雜有七十八餘戶驛家神戶等混合

已上細字にて和名を附せり

右件鄕字者依靈龜元年式改里爲鄕其鄕名字者被神龜三年民部省口宣改之

意宇郡

合鄕壹拾壹里卅三　餘戶壹驛家參神戶參里六

母理鄕(旁注云)和名爲能義郡之内　本字文理　屋代鄕同　今依前用　楯縫鄕同　今依前用　安來鄕同　今依前用　山國鄕同　今依前用　飯梨鄕(旁注云)和名南郡共无　本字云成(飯イ)　舍人鄕(旁注云)和名爲能義郡之内　今依前用　大草鄕和名　今依前用　山代鄕同　今依前用　拜志鄕同　本字林　完道鄕同　今依前用　以上壹拾壹鄕別里參　餘戶里同　野城驛家(旁注云)和名在野義郡　黑田驛家　完道驛家　出雲神戶(旁注云)和名能義意宇兩郡有神戶　賀茂神戶(旁注云)和名能義郡　忌部神戶(旁注云)同意宇郡

(頭註云)和名鈔此外有能義郡日縫意宇郡來待筑陽而爲郷

所以號意宇者國引坐八束水臣津野命詔八雲立出雲國者狹布之堆國在哉初國小所作故將作縫詔而栲衾志羅紀乃三埼矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女(稚イ)胸鉏所取而大魚之支太衝別而波多須須支穗振別而三

身之綱打挂與霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々（頭注云）聞々耶々もや〳〵にと讀べし古本古事記舊事紀等此例多矣毛々曾々呂々是亦もそろ〳〵と讀可 爾國々來々引來縫國者自去豆乃折絕而八穗米支豆支（杵春）乃御埼以此而堅立加志者石見○與出雲國之堺有名佐比賣山是也亦持引綱者園之長濱是也亦北門佐伎之國矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女胷鉏所取而與大魚之支太衝別而波多須々支穗振別而三身之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自多久乃折絕與狹田之國是也亦北門良波乃國矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女胷鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穗振別而三身之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自宇波○折絕而闇見國是也亦高志之都都乃三埼矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女胷鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穗振別而三身之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者三穗之埼也持引綱夜見嶋是也固堅立加志者有伯耆國火神岳是也今者國者引○詔而意宇社介御杖衝立而意惠登詔故云意宇（所以意宇杜者郡家東北邊田中在）

塾是也圍八步許其上有一以茂

母理鄕（頭注云）和名鈔能義郡母理 郡家東南卅九里一百九十步 所造天下大神大穴持命○越八口平賜而還坐時來坐長江山而詔我造坐而命國者皇御孫命平世所知依奉但八雲立出雲國者我靜坐國靑垣山廻賜而玉珍直賜而守詔故云文理（神龜三年字改母理）（頭注云神龜三年詔紀中元見和銅六年紀此間三十三年）

屋代鄕（頭注云）和名能義郡屋代 郡家正東卅九里一百卅步天乃夫比命御伴天降來坐伊支等之遠神天津子命詔吾淨將坐志社詔故云社（神龜三年改字屋代）

楯縫鄕（釋日本紀引之）郡家東北卅二里一百八十步布都怒志命之天石楯縫直給之故云楯縫

安來鄕（頭注云）和名抄能義郡安來 郡家東北廿七里一百八十步神須佐乃烏命天壁立廻坐之尒時來坐此處○御心者安平成詔故云安來也即北海有邑曰賣埼飛鳥淨御原宮御宇天皇御世甲戌年七月十三日詔臣猪麻呂女子逍遙件埼邂逅遇和尒所賊不切尒時父猪麻呂所賊女子斂買上大發苦憤號天踊地行吟居嘆晝夜辛苦無避斂所作是之間經歷數日然後興慷慨志麻呂

篇鋭鋒撰便處居、即擡訴云、天神千五百萬地祇千五百萬幷當國靜坐三百九十九社及海若等大神之和魂者靜而荒神者皆悉依給猪麻呂之所乞良有神靈坐者吾所傷。給以此知神靈之所神者、尒時有須臾而和尒百餘淨圍繞一和尒、徐率依來從於居下不進不退猶圍繞耳、尒時擧鋒而及中大一和尒殺捕已訖、然後百餘和尒解散、殺割者女子之一脛屠出、仍和尒者殺割而掛串立路之垂也（安來鄉人語臣與之父也、自爾時以來至于今日經六十歲）　山國鄉（頭注云、和名鈔能義郡山國）郡家東南卅二里二百卅步、布都怒志命之國廻坐時、來坐此處而詔、是土者不止欲見詔、故云山國也、即有正倉　飯梨鄉郡家東南卅二里、大國魂命天降坐時、當此處而御膳食給、故云飯成（神龜三年改字飯梨）　舍人鄉（頭注云、和名鈔能義郡舍人）郡家正東廿六里、志貴嶋宮御宇天皇御世（頭注云、磯城島金刺宮（欽明）磯城島瑞籬宮（崇神））倉舍人居等之祖日置臣志毘大舍人供奉之、即是志毘之所居、故云舍人、即有正倉　大草鄉郡家南西二里一百廿步、須佐乎命御子青幡佐久佐日古命坐、故云大草　山代鄉郡家西北三里一百廿步、所造天下大神大穴持命御子山代日子命坐、故云山代也、即有正倉　拜志鄉郡家正西廿一里二百一十步、所造天下大神命將平越八口爲而幸時、此處樹林茂盛、尒時詔吾御心之波夜志（頭注云、御心之波夜志萬葉集）詔、故云林（神龜三年改字拜志）即有正倉　完道鄉郡家正南卅七里、所造天下大神命之追給猪像南山有二（一は長二丈七尺高一丈周五丈七尺、一は長二丈五尺高八尺周四丈一尺）追猪犬像（長一丈高四尺周一丈九尺）其形爲石無異猪犬、至今猶有、故云完道　餘戶里郡家正東六里二百六十步（依神龜四年編戶立一里、故云餘戶也）　野城驛（頭注云、和名鈔能義郡野城）郡家正東廿里八十步、依野城大神坐、故云野城　黑田驛郡家同處、郡家西北二里有黑田村、土體色黑、故云黑田、舊此處有此驛、即號曰黑田驛、今郡家屬東、今猶追舊黑田號耳　完道驛郡家正西卅里（說名如鄉）　出雲神戶郡家南西二里廿步、伊弉奈枳乃麻奈古（頭注云、愛子（マナコ）神代紀季云古事記云々）坐熊野加武呂乃命與五百津鉏々猶所取々而所造天下大神大穴持命二所大神等依奉、故云神戶（他郡等之神戶如是）　賀茂（頭注云、和名鈔能義郡賀茂）神戶郡家東南卅四里、所造天下大神命之御子阿遲須枳高日子命坐葛城賀茂社、此神之神戶、故云鴨（神龜三年改字賀茂）即有正倉　忌部神戶郡家正西廿一里二百六十步、國造神吉詞望參向朝廷時、御沐之忌玉、故云忌部、即川邊出湯、出湯所在兼海陸、仍男女老少

或道路驛或海中沼洲日集成レ市繽紛燕樂一濯則形
容端正(也イ)○再沐則萬病悉除自レ古至レ今無レ不レ得レ驗故
俗人曰ニ神湯ー也
教昊寺(寺イ)○舍人郷中ー郡家正東廿五里一百廿歩建ニ立五層(在イ山城イ)
之塔ー也(有僧)(在乎)教昊僧之所レ造也 散位大初位下上腹首押(神イ)猪之祖父也 新造院
一所○山代郷中郡家西北四里二百歩建ニ立嚴堂ー也(無僧) 置
君自熊之所造也 出雲神戸置君猪(鹿イ)麻呂之祖也 新造院一所在ニ山代
郷中ー郡家西北二里建ニ立嚴堂ー(住僧)一軀飯石郡少領出雲臣
弟山之所レ造也 新造院一所在ニ山國郷中ー郡家東南
(廿イ)卅一里百廿歩建ニ立三層之塔ー也山國郷人置(部イ)那根緒之
所レ造也
熊野大社(社乎)(頭注云)仁壽元年九月庚午朔乙酉特擢出雲國熊野杵築兩大神並加從三位貞觀元正廿七正三位同五月廿八日從二位元正三位勳七等 夜麻佐社(山狹式) 賣豆貴社(守式) 加豆比(勝日式)乃社 由
貴社 加豆比乃高○社 都俾志呂社(辨式) 玉作湯社(たまつくゆの)(頭注云)貞觀十三年十一月十日授出雲國正五位上湯神從四位下𦊆玉作ニ守是乎 野城社(頭注云)意宇與能義兩郡犬牙相接有ニ此混合ー乎能義即野城訓耳又案三代實錄廿云貞觀十三年十一月十日授出雲國從五位上能美神正五位下今案无ニ此神ー疑寫生義誤作美耶 伊
(梯式)布夜社(頭注云)齋明紀言屋社「言屋此云伊浮瑘」古事記出雲國之伊賦夜坂又揖屋 貞觀九年五月二日出雲國從五位下揖屋神從五位上十三年十一月十日正五位下 支麻知社(來待式) 夜麻佐○○○○○○○○○ 同社坐久志美氣濃神社

社 野白(城イ)(ヒ乎)○○○○○○○社(同社坐大穴持神社式) 人(久イ)多美社 佐久多社
(田)多乃毛社(面式イ) 須多社 眞名井社 布辨社 斯保彌社(美式) 意
(多伎式)陀支社 市原社 久米社 布吾彌社 完(しんち)道社 賣布
社 狹(佐式)井社 狹井高守社(同守式誤乎) 宇流布社 伊布夜○○○(同社坐韓
國伊太氐神社) ○○○○○社 布自奈○○○○○社(大穴持神社式) 同布自奈社(布式) 由
宇社 野代社 野代社 佐久多○○○○○○○○社(同社坐韓國伊太氐神社式)
(意イ)伊陀支○○○○○○社(同社坐御譯神社式)(頭注云)仁壽元年九月庚午朔乙酉御譯命等並授從五位下貞觀七年十月廿八日
從五位上 前社 田中社 詔門社 楯井社 速玉社 石(鑒式)
坂社 佐久佐社(頭注云)仁壽元九月庚午朔乙酉青幡佐草壯丁命等並授從五位下是乎 元慶二年三月三日授出雲
國正五位下青幡佐草壯丁神正五位上 多加比社(應日式) 山代社 調(ツキヤ)屋社(筑陽式) 同社○
波夜都武自和氣神社式 ○○○○○○○○ 以上四十八所並在神祇官 宇由比社 支布佐社
毛社乃社 那富乃夜社 支布佐社(與イ) 國原社 田村社
予穗社 同予穗社 伊(末イ)布夜社 阿太加夜社 須多
下社 河原社 布宗(宇イ)社 米那爲社 加和羅社 笠柄
社 志多備社 食師社 以上一十九所並不レ在ニ神祇官ー
山
長江山郡家東南五十里有ニ水精ー 青垣山郡家正東八十

歩有二蜂𧒂一 高野山郡家正東一十九里 熊野山郡家正南一十八里有二檜檀一也所謂熊野大明神之社坐二イ 久多美山郡家西南廿三里有レ社栢イ 玉作山郡家西南三十二里有社栢イ 神名樋山郡家西北三里一百廿九歩高八十丈周六里卅二歩東有レ松三方竝有レ第

凡諸山野所在草木 麥門冬 獨活 石薢 前胡 高良姜 連翹 黄精 百部根 貫衆 白朮 薯蕷 苦參 細辛 商陸 藁本 玄參 五味子 黄芩雄黄 葛根 牡丹 藍漆 薇藤 李 檜字或作レ栢 杉字或作レ椙 赤銅桐イ 白桐楮イ 楠 椎 海榴字或作レ椿 楊梅 松 栢字或作レ榧 蘗 槻 禽獸則有二鵰 晨風一字或作隼 山雞 鳩 鶉 鶬字或作二離黄一 鴟鴞作二横致一惡鳥也 熊 狼 猪 鹿 兎 狐 飛鼯字或作レ鼺 獼猴之族至繁多不レ可レ題レ之

川

伯太川源出下仁多與二意宇一二郡堺葛野山上流經二母里栖縫安來三郷一入二于海一有二年魚伊久比一 山國川源出二郡家東南卅八里枯見山一北流入二于伯太川一 飯梨河源有レ三一水源出二仁多大原意宇三郡堺田原一一水源出二枯見一一水源出二仁多郡玉嶺山一三水合北流入二于海一有二年魚伊久比一 筑陽川源出二郡家正東一十里一百歩荻山一北流入二于海一有年魚 意宇川源出二郡家正南一十八里熊野山一北流東折流入二于海一有イ○年魚伊久比 野代川源出二郡家西南一十八里須我山一北流入二于海一 玉造川作イ源出二郡家正西一十九里○志山一北流入二于海一有二年魚一 來待川源出二郡家正西廿八里和奈佐山一西流至二山田村一更折北流入二于海一有二年魚一 宍道川源出二郡家正西卅八里幡屋山一北流入二于海一無レ魚

池

津間抜池周二里四十歩廿イ有二鳬鴨芹菜一 眞名猪池周一里北流入海

門江濱伯耆與二出雲一二國堺自レ東行レ西 濱乎 粟嶋有二椎松多年木宇竹眞㠯等葛一 砥神嶋周三里一百八十歩高六十丈有二椎松薺頭蒿都波師太等草木一也 賀茂嶋既礒 羽嶋有二椿比左木多年木蕨薺頭蒿一（蒿イ）鹽楯嶋有二蓼螺子永蓼一 野代海中蚊嶋周六十歩中央涅土四方竝礒中央有十掬許木一株耳其礒有レ蚊有二螺子海松一 自レ玆以西濱或峻堀或平土竝是通道之所レ經也

島乎 子嶋既礒 蒿乎 イナシ 椿イ 濕イ

通道二國東堺手間剗一（頭注云）剗伊呂波字類抄せき 六帖せき八雲たつ いつものくにのてまのせきいかなるてまに人さはるらむ 同まてしはし人しりみむや我せこなさゝめかれてそてまさなつけん堀川百首師頼さりとも思ひしかども八雲たつてまの關にも秋はさまらず 卅一里一百八十歩通二大原郡堺林垣峯一

卅二里二百歩通出雲郡堺佐雜崎一卅二里卅歩通嶋根郡堺朝酌渡四里二百六十歩前件一郡入海之南（是イ）北則國務也

郡主司主帳 無位海臣 無位出雲臣
少領從七位上勳業出雲臣
主政外少初位上勳業林臣
擬主政無位出雲臣

嶋根郡

合郷捌（里廿五イ）餘戶壹驛家壹

山口郷 今依前用　朝酌郷 今依前用　手染郷 今依前用　美保郷 今依前用　方結郷 今依前用　加賀郷 本字加加　生馬郷 今依前用　法吉郷 今依前用 以上捌郷別里參　餘戶里　千酌驛（家）（頭注云）和名鈔加多久千酌二郷爲十郷

所以號嶋根郡國引坐八束水臣津野命之詔而（負イ）顯給故名嶋根　朝酌郷郡家正南一十里六十四（八イ）步熊野大神命詔朝御餼勘養夕御餼勘養五贄緒（組）之處定給故云朝酌　山口郷郡家正南四里二百九十八步須佐能烏命御子都留支日子命詔吾敷坐山口處在詔而故山口負給

手染郷郡家正東一十里二百六十歩所造天下大神命詔此國者丁寧（所イ）造國在詔而（故イ）丁寧（顯イ）負給而今人猶誤謂手染郷之耳即有正倉

美保郷郡家正東廿七里一百六十四歩所造天下大神命娶高志國坐神意支都久辰爲命子俾都久辰辰爲命子奴奈宜波比賣命而令產神御穗須須美命是神坐矣故云美保

方結郷郡家正東廿里八十步須佐能烏命御子國忍別命詔吾敷坐地者國形宜者故云方結

生馬郷郡家西北一十六里二百九歩神魂命御子八尋鉾長依日子命詔吾御子平明不憤詔故云生馬

加賀郷郡家北西二十四里一百六十歩佐太大神所坐也御祖神魂命御子支佐加地賣命闇岩屋哉詔金弓以射給時光加加明也故云加加（頭注云）神代紀下星神香香背男　篝火　赫やく　かゝは　ゆき　加賀國

法吉郷郡家正西一十四里二百卅歩神魂命御子宇武賀比賣命法吉鳥化而飛度靜坐此處故云法吉

餘戶里 說名如意宇郡

千酌驛家郡家東北一十九里一百八十歩伊佐奈（差イ）枳命御子都久豆美命此處坐然者則可謂都久豆美而今人猶千酌號耳

社（乎）布自伎彌社（頭注云）布自枳美高山（記中）　多氣社　久良彌（爾イ）社（記中）　椋見社　同
（速鎭）波夜武志社　川上社　長見社（長見川記中）　門江社　橫田社
加賀社（加加明記中）　爾佐社（美佐島記中）　爾佐加志能爲社（能式）　法吉
社（法吉島記中）　生馬社　美保社（美保濱記中）　以上十四所並在（二）神祇官（一）　大
崎川邊社　朝酌社　朝酌下社　努那彌社　椋見社
大井社　阿羅波比社　三保社　多久社（頭注云）多久郷和名抄島記中久（簡イ）マタ留（イ）
與（レ）新通す是乎上多久郷以下標註當（レ）在（二）於此（一）　蜛蝫社　同蜛蝫社　質開比社　方
結社　玉結社　川原社　虫野社　持田社　加佐奈子
社　比加夜社　須義社　伊奈須美社　伊奈阿氣社
御津社　比津社　玖夜社　同玖夜社　田原社　生馬
社　布夜（奈イ）保社　加茂志社　一夜社　小井社　加都麻
社　須衞（衞イ）都久社　以上卅五所並不（レ）在（二）神祇官（一）
山（里イ）布自枳美高山郡家正南七十二百一十步高○（大イ）二百七十
丈周一十里（一）　女岳山郡家正南二百卅步　蝨（きし）（しらみ）野郡家西
南三里一百步無（二）樹木（一）　毛志山郡家北一里　大倉山
郡家東北九里一百八○（十イ）步　糸江山郡家東北卅六里卅
步　小倉山郡家正西廿四（東イ）里一百六十步　凡諸山所在
草木　白朮　麥門冬　藍漆　五味子　○○（苦參イ）　獨活葛

根　薯蕷　萆薢　狼毒　杜仲　芍藥　柴胡　苦辛
百部根　石斛　藁本　藤李　赤桐　白桐　海柘榴
楠楊　松栢　禽獸則鷲（字或作（レ）鵰）隼雉山雞鳩鶉猪鹿猿飛鼯
水草（川イ）川（河イ）源二（一水源出（二）郡家北三里一百八十步毛志山（一）一水源出（二）郡家西北六（東イ）里一百六十步同毛志山（一）（二イ））二水合
南海流入（二）于海（一）有（レ）鮒　長見川源出（二）郡家東北九里
一百八十步大倉山（一）東流　大鳥（犬イ）川源出（二）郡家東北一十
二里一百一十步墓野山（一）南流二水○（合イ）東流入（二）于海（一）
野浪川（河イ）源出（二）郡家東北家廿六里卅步糸江山（一）西流入（二）
（于乎）大海（一）　加賀川源出（二）郡家正北廿四（西イ）（二十イ）里一百六十步小倉
山（一）北流入（二）大海（一）（于イ）　多久川源出（二）郡家西北二十四里小
倉山（二）西流入（二）秋鹿郡佐太水海（一）以上六川並少少無魚川也
法吉坡周五里深七尺許有（二）鴛鴦鳧鴨鯉鮒須我毛（一）當（二）夏節（一）尤
有（二）美菜（一）　前原坡周二百八十步有（二）鴛鴦鳧鴨等之類（一）　張田
池周一里卅步　匏池周一（三イ）里一百一十步生（レ）蔣　美能夜
池周一里　口池周一里一百八十步有（二）蔣鴛鴦（一）　敷田池周一里
有（二）鴛鴦（一）　南入（二）于海（一）自西行東
朝酌促戸渡東有（二）通道（一）西有（二）平原（一）中央渡則筌（うへをわたす）亘（二）東
西（一）春秋入出大小雜魚臨（レ）時來湊（あつまり）筌邊駈（はしり）駭（驗イ）（頭注云、玉篇、駈、驅普、懸、步、悲

二切黄白色又馬走良駿于駿切馬行也又無知也 風壓水衝或破壊塋或製白鹿於（如）（如）（魚乎爲乎）
鳥被捕大小雜魚濱藻家閭市人四集自然成鄽矣
白並入東至于大井濱之間南北二濱並捕白魚水深也 朝酌渡廣八十歩許自國廳
通海邊道矣大井濱則有海鼠海松又造陶器也
邑美冷水（頭注云）寒水日本紀成務紀乎 東西北山並嵯峨南海澶漫中
央滷灠磷（二イ）○男女老少時○（二イ）叢集常燕會地矣 前原埼東
北並巃嵸下 則有陂周二百八十歩深一丈五尺許三
邊草木自生涯鴛鴦鳬鴨隨時常住陂之南海也即陂與
海之間濱東西長一百歩南北廣六歩肆松蓊鬱濱鹵淵澄
男女隨時叢會或愉樂歸或耽遊忘歸常燕喜之地矣
蜛蝫嶋（頭注云）本草綱目鮫魚部鼻前有骨如斧斤能撃物壞舟者曰鋸沙 今按蜛蝫訓多古乎今俗用蛸字 周一
十八里一百歩高三丈古老傳云出雲郡杵築御埼有蜛
蝫天羽合鷲掠持飛燕來止于此嶋故云蜛蝫嶋（曰イ）
今人猶誤栲嶋號耳土地豐沃西邊松二株以外茅沙薺頭
蒿（頭注云）薺頭蒿者正月九日生長六寸さ下にあり多識牡蒿異名薺頭蒿和名波々計久佐季云 蕗等之類生靡
牧 即有 去陸三里蜈蚣嶋周五里一百卅歩高二丈 古老傳
云有蜛蝫嶋蜛蝫食來蜈蚣止居此嶋故云蜈蚣
嶋東邊神社以（外イ）下皆悉百姓之家土體豐沃草木扶疎桑

麻豐富此洲（洲乎）所謂嶋里是也矣 去津二里一百歩 即自此嶋達
伯耆國郡内
夜見嶋磐石二里許廣六十歩許乘馬猶往來鹽滿時深
二尺五寸鹽乾時者已如陸地 和多太嶋周三里二百
二十歩 有椎（椎イ）海石榴白桐松芋菜薺頭蒿落都波乎猪鹿 去陸渡一十歩不知
深淺 美佐嶋周二百六十歩高四丈 有推樺茅薺都波薺蒿 戸江剗
郡家正東廿里一百八十歩 非島陸地濱耳伯耆郡内夜見島將相向之間也 栗江埼
相向夜見島促戸渡二百一十六歩 埼之西入海堺也凡南入海所在雜物入
鹿和爾鯔須受枳近志呂鎭仁白魚海鼠鰝鰕海松等之類
至多不可盡名北大海埼之東大堺也 猶自西行東 鯉石
島 生海藻 大島 磯（叱イ） 宇由比濱廣八十歩 捕志毗魚 鹽道濱廣八十
歩 捕志毗魚 澹由比濱廣五十歩 捕志毗魚 加努夜濱廣六十歩
捕志毗魚 美保濱廣一百六十歩 西（北イ）有神社○有百姓之家捕志毗魚 美保埼 用壁峙崖
定岳 等等島 禺々當立（位イ） 土島 磯 久毛等浦廣一百歩 自東行西十船
可泊 黑島 生海藻 這田濱長二百歩 比佐島 生紫菜海藻 長嶋 生紫
菜海藻 比賣島 磯 結島 門周二里卅歩高一十丈 有松薺頭蒿都波
御前小島 磯 質（留イ）簡（本此イ）比 北浦 質簡比浦見上 廣二百廿歩 有南神社北者百姓之家卅船可泊
久宇島周一里卅歩高七尺 有椿椎白朮小竹薺頭蒿都波芋 加多比島 磯

船島礒　屋島周二百步高廿丈有二椿松薺頭蒿一　赤島生二海藻一　宇氣島同レ前　黒島礒同所前イ　粟嶋周二百八十步高一十丈有二松茅都波一　玉緒濱廣一百八十步有碁石東邊有二鹿砥一又有二百姓之家一　小島周二百卅步高一十丈有二松茅（茅イ）薺頭蒿都波一　方結濱廣一百八十步里イ東西有家　勝間埼周有二二窟一一高一丈五尺裏周一十八步一高一丈五尺裏周二十步　鵜島周一百廿步高一十步有二都波茨一（茨イ）　鳥島周八十二步高一十丈五尺有二鳥（島イ）栖一（栖イ）挟重出黒島生二紫菜海藻一　須義廣二百八十步　衣島周一百廿步高五丈中鑿南北船猶往來也　稻上濱廣一百六十步有百姓之家　稻積島周卅八步高六丈有松木鳥之栖　中鑿南北船猶往來也　大島礒　千酌濱廣一里六十步東有二松林一南方驛家北方百姓之家郡家東北廿（一十イ）九里一百八十步此則所謂度二隱岐國一津是矣　加イ如志島周五十六步高三丈有レ松　赤島周一百步高一丈六尺有レ松　葦浦濱廣一百廿步有二百姓之家一　黒島生二紫菜海藻一　龜島同前　附島周二里一十八步高一丈有二椿松薺頭蒿茅葦都波一也其薺頭蒿者正月元日生長六寸、頭注云）薺頭蒿師說和和名鈔薺蒿さかきて於波木いへる草あり萬野邊のうはぎをつみて煮てしもさよめる是也薺頭蒿已薺蒿歟おぼつかなしうはぎは今俗よめかはぎといへるもの歟　蘇島生二紫菜海藻一　中鑿南北船猶往來也　眞屋島周八十六里高五丈有松　松島周八十步高八丈有二松林一　立石島礒　瀨埼礒所瀨崎或（戍イ）是也　野浪濱廣二百八十步東邊有二神社一又有二百姓之家一　鶴島周二百

一十步高九丈有松　間島生二海藻一　毛都島生二紫菜海藻一　川來門大濱廣一里一百步有二百姓之家一　黒島有海藻　小黒島生海藻　加賀神埼即有レ窟（いはや）一十丈許周五百二步許東西北通　所謂佐太神所レ產生處也產生臨レ時弓箭（亡イ）坐爾時御祖神魂命之御子枳佐加比々賣命願吾御子麻須羅神御子坐者所レ亡弓箭出來願坐爾時角弓箭隨二水流一出爾于時所生御子詔此者非二弓箭一詔而擲廢給又金弓箭流出來即待取之坐而闇鬱窟哉詔而射通坐即御祖支佐加比々賣命社坐二此處一今人是窟邊行時必聲磕而待（行乎）若密行者神現而飄風起行船者必覆也

御島周二百八十步高一十丈中通二東西一有二松栢椿一　葛島周一里一百一十步高五丈有二椿松小竹茅葦一八本　櫛島周二百三十步高一十丈二本三本有二松林一　許意島周八十（二イ步イ）丈高一十丈有二松林一茅澤瀉　眞島周一百八十步高一十丈有二松林一　比羅島生二紫菜海藻一　黒島同前　名島周一百八十步高九丈有松　赤島生二紫菜海藻一　大埼濱廣一里一百八十步西北有二脊著百姓之家一　須須比埼有二白朮一　御津濱廣二百八步有二百姓之家一　三島生海藻　虫津濱廣一百廿步　手結埼濱邊有レ窟高一丈裏周三十步有二檜一　二手結浦廣卅二步船二計可レ泊　久宇島周一百卅步高七尺有レ松　凡北海所レ捕雜物（くさぐさのもの）志毗鮪鮐鯊魚烏賊蟛蜞鮑（あはび）縈螺蛤貝字或作二蚌菜一　蕀甲蠃（かせ）字或作二名（石イ）經子一）甲蠃蓼螺子字或作二螺子一　螺蛎子（かき）石華（華イ）字或大脚也或嚝（おふ）作蠣於脚者勢也　白貝海

藻海松紫菜凝海菜等之類至繁不レ可レ令レ稱也
通道通ニ意宇郡朝酌渡ニ一十一里二百廿歩之中海八十
歩通ニ秋鹿郡堺佐太橋ニ一十五里八十歩通ニ隱岐渡千
酌驛家湊ニ一十一里二百八十歩

郡司主張無位出雲臣
大領外正六位下社部臣
少領外從六位上社部石臣
主政從六位下勳業蝮朝臣

秋鹿郡

合郷肆里十二 神戸壹
惠曇郷 本字惠伴 多太郷 今依前用 大野郷
今依前用 伊農郷 本字伊努 以上肆郷別里参 神戸郷

所ニ以號ニ秋鹿ニ者郡家正北秋鹿日女命坐故云ニ秋鹿ニ矣
惠曇郷郡家東北九里卅歩須佐能乎命御子磐坂日子命
國巡行坐時至ニ坐此處ニ而詔此處者國稚美好有ニ國形
如ニ畫鞆ニ哉吾之宮者是處造者故云ニ惠伴ニ 神龜三年改ニ字惠曇ニ
多太郷郡家西北五里一百廿歩須佐能乎命之御子衝
杵等乎而留比古命國巡行坐時至ニ坐此處ニ詔吾御心照
明正眞成吾者此處靜將レ坐詔而靜坐故云ニ多太ニ 大野
郷郡家正西一十里廿歩和加布都努志能命御狩爲坐時
即郷西山狩人立給而追ニ猪犀ニ北方上之至ニ阿內谷ニ而
其猪之跡亡失尒時詔自然哉猪之跡亡失詔故云ニ內野ニ
然今人猶誤大野號耳 伊農郷郡家正西一十四里二百
歩出雲郡伊農郷坐赤衾伊農意保須美比古佐和氣能命
之后天𤭖津日女命國巡行坐時至ニ坐此處ニ而詔伊農波
夜詔故云ニ伊努ニ 神龜三年改ニ字伊農ニ
神戸里 出雲之説レ名如ニ意宇郡ニ

社平隠神 佐太御子社 比多社 御井社 垂水社 惠杼毛社
許曾志社 大野津社 宇多貴社 大井社 宇智社 以上一十所並在ニ神祇官ニ
惠曇海邊社 同海邊社 怒多之社 那牟社 多太社 同多太社 出島社 阿之牟社 田仲社
彌多仁社 細見社 同下社 伊努社 毛之社 草野社 秋鹿社 以上一十五所並不レ在ニ神祇官ニ

山

神名火山郡家東北九里卌歩高二百三十丈周一十四里
所謂佐太大神社即在彼山下也足日山郡家正北一里高

一百七十丈周一十里二百歩　女心高野山郡家正西一
十里廿歩高一百八十丈周六里土體豐渡百姓之膏腴之
園也矣無樹林但上頭在樹林此則神社也都勢野山郡
家正西一十里廿歩高一百一十丈周五里無樹林嶺中
有澤周五十歩羅藤荻等等物叢生或叢峙或伏水
(頭注云伏水仙覺萬葉註釋云)鴛鴦住也　今山郡家正西一十里廿歩周
七里　凡諸山野所在草木　白朮　獨活　女青(頭注云女青和名)
鈔云　苦參　貝母　牡丹　連翹　茯苓　藍漆　女委
細辛　蜀椒　薯蕷　白歛　芍藥　百部根　薇蕨　薺
頭蒿　藤李　赤桐　白桐　椎　椿　楠　松　栢　槻
禽獸則有鵰晨風山鷄鳩雉猪鹿兎狐飛鼯獼猴
川
佐太川源二(東水源島根郡所謂多久川是西水源出秋鹿郡渡村)二水合南流入佐太
水海即水海周七里有鮒水海通入海潮長一百五十歩
廣一十歩　山田川源出郡家西北七里湯太南流入
于海多太川源出郡家正西一十里女心高野南流入
于海　大野川源出郡家正西一十三里磐門山南流
入于海　草野川源出郡家正西一十四里大繼山南
流入于海　伊農川源出郡家正西一十六里伊農山
南流入于海　長江川源出郡家東北九里卅歩神名
火山南流入于海(並無魚　以上七川)
池
○陂周六里有鴛鴦鳬鴨鮒四邊生葦蔣菅自養老
(惠曇池(本字惠伴改惠曇字矣))
元年以往荷葉自然叢生大多二年以降自然至失都無
莖俗人云其底陶器瓱𤭖(頭注云瓱𤭖字彙云甌甄燒擊甍也)等類多有也自
古時時人溺死不知深淺矣　深田池周二百卅歩有
鴛鳬鴨　杜原池周一里二百歩　蜂峙池周一里　佐久羅池
周一里一百歩在鷲　南方入海春則在鯔魚須受枳鎭仁
鳰鰕等大小雜魚秋則在白鵠鴻鴈鳬鴨等島北大海
惠曇濱廣二里一百八十歩東南並在家西野北大海即自
浦至于在家之間四方並無石木猶白沙之積大風吹
時其沙或隨風雪零或居流蟻散掩覆桑麻即有彫鑿
磐壁三所(一所厚三丈廣一丈一所厚二丈廣一丈○高八尺一所厚二丈廣一丈高一丈)其中通川北海
入大海(川東島根郡西秋鹿郡內也○)自川口至南方田邊之間長一
百八十歩廣一丈五尺源者田水也上文所謂佐太川西源
是同處也矣　凡渡村田水南北別耳古老傳云島根郡大
領社部臣訓麻呂之祖渡蘇等依稻田之澇所彫堀也
起浦之西礒盡楯縫郡之堺自毛埼之間濱壁等崔

嵬雖ニ風之靜ニ往來船無レ由レ停ニ泊頭ニ矣
白島（生ニ紫苔菜ニ）御島高六丈周八十歩（有ニ松三株ニ）都於島（礒）著穗
島（生ニ海藻ニ）
凡北海所在雜物鮐沙魚左波烏賊鰓魚螺貽貝蚌甲嬴螺（イナシ）
子石（華乎）𠍈騎子海藻海松紫菜凝海菜
通ニ島根郡堺佐太橋ニ八里二百歩通ニ楯縫郡堺伊農橋ニ
一十五里 ○○（歩イ）
郡司主張外從八位下勳業日下部臣
大領外正八位下勳業刑部臣
權任少領從八位下 蝮 部 臣

楯縫郡
合郷肆（里一十二） 餘戸壹神戸壹
佐香郷 今依レ前用 楯縫郷 今依レ前用 玖潭郷
本字忽美 沼田郷 本字努多
以上肆郷別里參
神戸里
（釋日本紀引之）
所ニ謂號ニ楯縫ニ者神魂命詔五十足天日栖宮之縱横御
量千尋栲繩持而百結結八十結結而此（與イ）天御量持而所
レ造ニ天下ニ大神之宮造奉詔而御子天御鳥命楯部爲而（天降釋）
天下給之爾時退下來坐而大神宮御裝（東釋）楯造（始）給所是
也仍至レ今楯桙造而奉ニ於皇神等ニ故云ニ楯縫ニ（已上釋）
佐香郷郡家正東四里一百六十歩佐香河内一百八十神
等集坐御厨立給而令レ釀レ酒給之即百八十日喜讌解散
坐故云ニ佐香ニ楯縫郷即屬ニ郡家ニ（說レ名如レ郡）即北海濱業利磯（梨イ）
有レ窟裏方一丈半高廣各七尺裏南壁在レ穴口周六尺徑
二尺人不レ得レ入不レ知ニ遠近ニ玖潭郷郡家正西五里二百（見イ）
歩所ニ造天下ニ大神命天御飯田之御倉將ニ造給ニ並覔巡
行給爾時波夜佐雨久多美乃山詔給之故云ニ忽美ニ（神龜三年改ニ字玖潭ニ）
（頭注云）忽くだ通じたる歟
古命以ニ介多水ニ而御乾飯介多介食坐詔而介多負給
之然則可レ謂ニ介多郷ニ今人猶云ニ努多ニ耳（神龜三年改ニ字沼田ニ）
餘戸里（說名如ニ意宇郡ニ） 神戸里（出雲也說名如ニ意宇郡ニ）（八字无イ）

寺
新造院一所在ニ沼田郷中ニ建ニ立嚴堂ニ也郡家正西六里
一百六十歩大領出雲臣太田所レ造也

社

久(玖)多美社　多久社　佐加(香イ)社　乃利斯(能呂志)社　御津社　水
神社　宇美社　許豆社　同社　以上九所並有神祇官　(許豆乃社イ)○○○又許
豆乃社(ナシイ)　○(又イ)許豆社　久多美社　同久多美社　高守社
又高守社　紫菜島(のりしま)社　鞆前社　宿努社　埼田社
山口社　葦原社　又葦原社　又葦原社　峴之社　阿
年知社(頭注云)阿年知阿牟知乎靈異記阿牟乃子又掩知子云々　葦原社　田田社　以上一十九所
不在神祇官

山

神名樋山郡家東北六里一百六十歩高一百卄丈五尺周
卄一里八十歩(有乎)嵬西在石神高一丈周一丈許側在小石(有乎)
神百餘許古老傳云阿遲須枳高日子命之后天御梶日女
命來坐多忠村逢給多伎都比古命爾時敎詔汝命之
御祖之向位欲生此處宜也所謂石神即是多伎都比古之
命御託(魂)當旱乞雨時必令零也　阿豆麻夜山郡家正西(北イ)
五里卅歩　見椋山郡家西北七里
凡諸山所在草木　蜀椒　漆　麥門冬　茯苓　細辛
白歛　杜仲　人參　升麻　薯蕷　白朮(イナシ)　藤李　榧楡
椎　赤銅　白桐(梧イ)　海○榴(石乎榴イ)　楠　松　槻

禽獸則有鵰(くまたか)晨風鳩山雞猪鹿兎狐獼猴飛猫(鼯イ)

川

佐香川源出郡家東北所謂神名樋山東南流入于海
多久川源出郡家東北(ナシイ)○神名樋山(同イ)西南流入于海
都宇(宇)川源二東水源出阿豆麻夜山西川(水イ)源出見椋山二水合南流入于
海　宇加川源出同見椋山南流入于海　麻奈加(池イ)
比池周一里(二百イ)十歩○○○(可欠字)大東池周一里亦南(市イ)(池乎)○周一里
二百歩　沼田池周一里五十歩　長田池周一里一百歩
南入海雜物等如秋鹿郡說
北大海自毛埼(秋鹿與楯縫二郡堺崔嵬松柏欝即有晨風之栖也)
佐香濱廣五十歩　己自都濱廣九十二歩
御津島(生紫菜)　御津濱廣卅八歩　能呂志島(生紫菜)(周乎島)　能呂志
濱廣八歩　鎌間濱廣一百歩彌豆椎長里二百歩廣一里
(周嵯峨上有松菜芋)(北イ)　許豆島(生紫菜)　許豆濱廣一百歩(出雲與楯縫二郡之堺)
凡此海所在雜物如秋鹿郡說但紫菜者楯縫郡尤優也
通秋鹿郡堺伊農川八里二百六十四歩○出雲郡堺宇(通乎)
賀川七里一百六十歩

郡司主帳無位物部臣

大領外從七位下勳業出雲臣
小領外正六位下勳業高善臣（史イ）

出雲郡
合郷捌（里廿一（二イ））　神戸壹　里二
健部郷　今依レ前用　漆沼郷　本字志司沼　河内郷　今依レ前用　出雲郷　今依レ前用　杵築郷　本字寸付　伊努郷　本字伊農　美談郷（三イ）　本字三太三（以上漆郷別里參イ）　宇賀郷　今依レ前用（里貳イ）　神戸郷（里イ）　里二

所二以號一出雲一者說レ名如レ國也

健部郷郡家正東一十二里二百廿四歩先所三以號二宇夜里一者宇夜都辨命其山峯天降坐之即彼神之社主今猶坐二此處一故云二宇夜里一而後改所三以號二健部一之（者乎）纏向檜代宮（耶イ）御宇天皇勅不レ忘二朕御子倭健命之御名一（景行）健部定給尓時神門臣古禰健部定給即健部（耶イ）臣等自レ古至レ今猶居二此處一故云二健部一（禰）

漆沼郷郡家正東五里二百七十歩（耶イ）神魂命御子天津枳値可美高日子命御名亦（又イ）云二薦枕志都沼値一之此神郷中坐故云二志司沼一（神龜三年改二字漆沼一）即有二正倉一

河内郷郡家正南一十三里一百（三イ）○○○（九十七イ）歩斐伊大河（野イ）此郷中北流故云二河内一即郡有レ優長一百七十丈五尺（七十○丈之廣七丈九十五丈廣四丈五尺）（一イ）

出雲郷即屬二郡家一（說レ名如レ國）

杵築郷郡家西北二十八里六十歩八束水臣津野命之國引給之後所二造天下一大神之宮將奉與諸皇神等參集二宮處一杵築故云二寸付一（神龜三年改二字杵築一）

伊努郷郡家正北八里七十二歩國引坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣能命之社即坐二郷中一故云二伊農一（神龜三年改二字伊努一）

美談郷郡家正北九里二百四十歩所二造天下一大神御子和加布都努志命天地初判之後天御領田之長供奉坐之即彼神坐二郷中一故云二三太三一（神龜三年改二字美談一）即有二正倉一

宇賀郷郡家正北一十七里二十五歩所二造天下一大神命讓二坐神魂命御子綾門日女命一尓時女神不レ肯逃隱之時大神伺求給所是則此郷也故云二宇賀一即北海濱有レ磯名二腦磯一高一丈許上生二松（木イ）菜一芸至レ磯里（邑イ）人之朝夕如二往來一又木枝人之如二攀引一（有）自レ磯（以下釋日本紀引有）西有二窟戸一高廣各六尺許窟內在レ穴人不レ得レ入○不レ知二深淺一也（又イ）多（夢）至二此磯窟之邊一者必死故

俗人自古至今號。黄泉之坂黄泉之穴也以上神戸釋日

郷郡家西北二里一百歩出雲也或名如意宇郡

寺

新造院一所有河内郷中建立嚴堂也郡家正南一十

三里一百歩舊大領出雲部臣布彌之所造今大領佐宣鹿之祖父

社

杵築大社　御魂社　御向社　出雲社　御魂社　伊努

社　意保美社　曾致乃夜社　牟久社　寐伎乃夜社

阿受伎社　美佐伎社　伊奈佐乃社　彌太彌社　阿我

多社　伊波社　阿具社　都牟自社　久佐加社　故努

波社　阿受枳社　加守社　布世社　同阿受枳社　神

代社　加毛利社　來坂社　伊農社　同社　同社　鳥

屋社　御井社　彌豆伎社　同社　同社　阿受枳社

同社　同社　同社　同社　同社　同社　同社　同社

同社　同社　同社　來坂社　伊努社　同社　同社

阿陀彌社　縣社　斐堤社　韓（竈式）銍（蛭イ）。加佐

加社　伊自美社　波禰社　立虫社以上五十八所（頭注云）並有神祇官今五十九

所不在　御前社　同御埼社　支豆支社　阿受枳社　同

阿受枳社　同社　同阿受枳社　同阿受支社　同社

同社　同社　同社　同社　同社　同社　同社

同社　同社　同社　同社　同社　同社　同社

同社　同社　同社　同社　同社　同社　同努社　縣

社　彌陀彌社　同伊努社　同社　同社　同社　同彌

陀彌社　同社　同社　同社　同社　同社　同社　同

社　伊尒波社　都牟自社　同社　彌努波社　山邊社

同社　同社　間野社　布西社　波加社　佐支多社

支比佐社　神代社　同社　百枝槐社已上六十四所並不有神祇官

山

神名火山　郡家西南三里一百五十歩高一百七十五丈

周一十五里六十歩曾支能夜社坐伎比佐加美高日子命

社即在此嶽故云神名火山　出雲御埼山郡家西北或正西

廿七里三百六十歩高三百六十丈周九十六里一百六十

五歩西下所謂所造天下大神之社坐也

凡諸山野所在草木　草薢　百部根　女委　夜干　商陸

獨活　葛根　薇藤李　蜀椒　楡　赤桐　白桐　椎

榧松栢

禽獸則有晨風鳩山雞鵠鶫（つくみ）猪鹿猨兎（狐イ）○獼猴飛鼯（かうもり むさゝひ）○（鼠イ）也

川

出雲大川源自伯耆與出雲二國堺鳥上山（とりかみ）流出仁多郡横田村即經横田三處（三澤）○淨布勢等四郷出大原郡堺引沼村即經來次斐伊屋代神原等四郷出出雲郡堺多義村經河內出雲二郷北流更折西流即經伊努杵築二郷入神門水海此則所謂斐伊川下（上乎）也河之西邊或土地豐饒土穀桑麻稔欵枝百姓之膏腴薗也或土體豐渡草木叢生也則有年魚鮭麻須伊具比魴鱧等之類潭端雙泳自河口至河上横田村之間五郡百姓便河而居（出雲神門飯石仁多大原郡）起孟春至季春校村木船沿泝河中也

意保美（イナシ）小川源（白乎）○出雲御崎山北流入大海（有年魚少少）

池江

土負（項イ）池周二百卌步○○（可欠字）須須比池周二百五十步西門池（江イ）周三里一百五十八步東流入于海（有鮒）大方江周二百卌四步東流入于海（有鮒）二江源者並田水所集矣東方入于海三方並平原遼遠多有山雞鳩鳧鴨鴛鴦等之族也東方入海所在雜物如秋鹿郡說也

北大海宮松埼（有楯縫與出雲郡之堺）意保美濱廣二里一百廿步氣多島（生紫菜海松有鮑螺子蕀甲蠃）井呑濱廣卌二步宇多保濱廣卌五步大前島高一丈周二百五十步（生海藻）腦島（生紫菜藻有松栢）鷺濱廣二百步黑島（生紫藻）手結（米イ）濱廣廿步爾比埼長一里卌步廣廿步埼之南山東西通戶船猶往來上則松叢生也宇禮保浦廣七十八步（船廿計可泊）山埼高卅九丈周一里二百五十步（有椿松○○椨 推楠イ）子負島（磯）大埼濱廣一百五十步御前濱廣一百廿步（有百姓之家）御厳島（生海藻）御厨家島高四丈周廿步（有松）等等島（有蕀石花）怪聞埼長三十步高卅二步（有松）意能保濱廣一十八步粟島（粟イ）（生海藻）黑島（同前）這田濱廣一百步二俣濱廣九十八步門石島高五丈周四十二步（有鷲之栖）島（乎）○（頭注云）薗松山神門郡薗下脫松字并島字乎）薗長三里一百步廣一里二百步松繁多也矣即自神門水海通大海潮長參里廣一百廿步此則出雲與神門二郡堺也凡北海所在雜物如楯縫郡說但鮑出雲郡尤優所捕者所謂御崎海子（あま）是也

通道通（通乎）意宇郡堺佐雜村一十三里六十四步○神門郡堺出雲大河邊二里六十步通大原郡堺多義村一十五里卅八步通楯縫郡堺宇加川一十四里二百廿步

郡司主帳無位若倭部臣
大領外正八位下置部臣
小領外從八位下大臣
主政外大初位下〇部臣（脱字乎）

神門郡
合郷捌（里廿二） 餘戸壹 驛家貳 神戸壹
朝山郷 今依前用（里二） 日置郷 今依前用（里參）
鹽冶郷 本字止屋（里參） 八野郷 今依前用（里參）
高岸郷 本字高峯（里參） 古志郷 今依前用（里參）
滑狹郷 今依前用（里二） 多伎郷 本字多吉（里參）
南佐（和名）（頭注云）和名鈔八郷外有伊秋狹結滑狹三郷（和名爲郷）
餘戸里 狹結驛 本字最邑 多伎驛 本字多吉
神戸里
所以號神門者神門臣伊加曾然之時神門貢之故云神門。即神門臣等自古至今常居此處。故云神門。
朝山郷郡家東南五里五十六歩神魂命御子眞玉著玉之邑日女命坐之。尓時所造天下大神大穴持命娶給而毎朝通坐。故云朝山。　置郷郡家正東四里志紀島宮御宇天皇之御世置伴部等所遣來宿停而爲政之所也故云置郷。　鹽冶郷郡家東北六里阿遲須枳高日子命御子鹽冶毗古能命坐之故云止屋。（神龜三年改字鹽冶）　八野郷郡家正北三里二百一十歩須佐能袁命御子八野若日女命坐之。尓時所造天下大神大穴持命將娶給爲而令造屋給故云八野。　高岸郷郡家東北二里所造天下大神御子阿遲須枳高日子命甚晝夜哭坐仍其處高屋造可坐之即建高椅可登降養奉。故云高岸。（神龜三年改字）
（字高岸）（一本ナシ）　古志郷即屬郡家。伊弉（那）彌命之時以日淵川築造池之。尓時古志國人等到來而爲堤即宿居之所也故云古志也。　滑狹郷郡家南西八里須佐能袁命御子和加須世理比賣命坐之尓時所造天下大神命娶而通坐時彼社之前有磐石其上甚滑之即詔滑磐石哉。故云南佐。（神龜三年改字滑狹）　多伎郷郡家南西二十里所造天下大神之御子阿陀加夜努志多伎吉比賣命坐之故云多吉。（神龜三年改字多伎）

餘戸里郡家南西三十八里〔六イ〕說レ名如ニ意宇郡一

狹結驛郡家同處古志國佐與布云人來居之故云ニ最邑一神龜三年改ニ字狹結一〇其所ニ以來居一者說名如ニ古志鄕一也〔也イ〕　多岐驛郡家西南一十九里說レ名即如ニ多岐鄕一

神戸里郡家東南一十里說レ名如ニ意宇郡イ一

寺

新造院一所有ニ朝山鄕中一〔在イ〕郡家正東二里六十歩建ニ立嚴堂一也神門臣等之所レ造也　新造院一所有ニ古志鄕中一〔在イ〕郡家東南一里刑部臣等之所レ造也本立ニ嚴堂一

社

美久我社　阿濱〔須式〕理社　比布知社　又比布知社　多吉社　夜牟夜社　矢野社　波加佐社　奈賣佐〔伎〕社　知乃〔伊〕社〔朝〕　淺山社　久奈爲社　佐志牟社　多支枳〔伎藝〕社　阿利社　阿如〔彌〕社　國村〔持イ〕社　那賣佐〔伎〕社　阿利社　大山社　保乃加〔伎〕社　多吉社　夜牟夜社　同夜牟夜社　比奈社

以上廿五所並在ニ神祇官一(頭註云)神名帳廿七座今二一座脱乎　義亮按神名式云々國神門郡廿七座之中〇鹽冶神社、鹽冶比古神社〇鹽冶比古麻由彌神社〇鹽冶日子命御子燒太刀大穗日子神社合有四座而今風土記中作式內廿五座又式外中作鹽夜社二座是全混淆錯置恐當作式內廿七座式外十座歟

鹽〔冶イ〕夜社　火守社　同鹽〔冶イ〕夜社　久奈子社　同久奈子社　加夜社　小田社　波加佐社　同波加佐社　多支社　多支支社　波須波社

已上十二所並不レ在ニ神祇官一

山

田俣〔たまた〕山郡家正南一十九里有ニ梔枌一　長柄〔ながえ〕山郡家東〔正イ〕南一十九里有ニ梔枌一　吉栗〔よしくり〕山郡家西南二十八里有ニ梔枌一也所謂所ニ造天下一大神宮〇狹〔在乎〕造山也　宇比多伎山郡家東南五里五十六歩大神之鄕屋也　稻積山郡家東南五里七十六歩大神之稻積也　陰山郡家東南五里八十六歩大神之御陰〇也乎　稻山郡家正東五里一百一十六歩東在ニ樹林一(木)イ三方並礒也大神御稻種〇也乎〔イナシ〕

枅山郡家東南五里二百五十六歩南西並有ニ樹〔林イ〕木一東北並礒也大神御枅〇也乎

冠山郡家東南五里一百五十六歩大神之御冠〇也乎

凡諸山野所在草木　白蘞〔斂イ〕　桔梗　藍漆　龍膽　商陸　續斷　獨活　白芷　秦椒〔析イ〕　百部根　百合　卷栢〔柏イ〕　石斛　升麻　當歸　石葦　麥門冬　杜仲　細辛　茯苓　葛根　薇蕨　藤李　蜀椒　檜　杉　榧　赤桐　白桐　椿　槻　柘　楡　蘗　楮

禽獸則有ニ鵰鷹晨風鳩山鷄鶉鶻猪狼鹿兎狐獮猴飛鼯一

也

川

神門川源出飯石郡琴引山北流即經來島波多須佐三郷出神門郡餘戸里間立村即神戸朝山古志等郷西流入水海也則有年魚鮭麻須伊貝比　多岐小川源出郡家西南卅三里多岐岐山北西流入大海有年魚

池

宇加池周三里六十歩　來食池周一里一百四十歩有菜　笠柄池周一里六十歩有菜　刻屋池周一里

水海神門水海郡家正西四里五十歩周卅五里七十四歩裏則有鯔魚鎮仁須受枳鮒玄蠣也即水海與大海之間在山長廿二里二百卅四歩廣三里此者意美豆努命之國引坐時之綱矣今俗人號云薗松山地之形體壤石並無也白沙耳積上即松林茂繁四風吹時沙飛流掩埋松林今年埋半遺恐遂被埋已與起松山南端美久我林盡石見與出雲二國堺中島埼之間或平須或陵礒凡此海所在雜物如楯縫郡說但無紫菜

通道通出雲郡堺出雲川邊七里廿五歩通飯石郡堺掘坂山一十九里通同郡堺與曾紀村廿五里一百七十四歩通石見國安濃郡○多伎伎山卅三里（路常有別（頭注云）路常有剗路）常有剗乎　通同安濃郡川相郷卅六里徑常引不有但當有政時僅置前件伍郡並大海之南也

郡司主張無位刑部臣

大領外從七位上勳業神門臣

擬小領外大初位上勳業刑部臣

主政外從八位下勳業吉備部臣

飯石郡

合郷漆里一十九

熊谷郷　今依前用　三屋郷　今字三刀矢　飯石郷　本字伊鼻志　多禰郷　本字種　須佐郷　今依前用　以上伍郷別里三　波多郷　今依前用　來島郷　本字支自眞　以上貳郷別里貳　（頭注云）和名鈔此外有草原田井二郷爲九郷

所以號飯石者飯石郷中伊毗志都幣命坐故云飯石

熊谷郷郡家東北二十六里古老傳云久志伊奈太美等與麻奴良比賣命任身及將產時求處生之介時

到來此處詔甚久麻久麻志枳谷在故云熊谷（久久麻麻イ）　三屋郷郡家東北廿四里所造天下大神之御門即在此處故云三刀矢神龜三年改字三屋即在正倉　飯石郷郡家正東一十二里伊毗志都幣（弊イ）命天降生（坐イ）處也故云伊鼻志神龜三年改字飯石　多禰郷屬郡家所造天下大神大穴持命與須久奈比古命巡行天下時稻種墮此處故云種神龜三年改字多禰　須佐郷郡家正西一十九里神須佐能袁命詔此國雖小國國處在故我御名者非著木（水イ）石詔而即己命之御魂鎭置給之然即大須佐田小須佐田定給故云須佐即有正倉　波多郷郡家西南一十九里波多都美（一イ）命天降坐處在故云波多　來島郷郡家正南卅六里伎自麻都美命坐故云伎自眞神龜三年改字來島即有正倉

社

須佐社　河邊社　御門屋社三屋式　多倍社（位イ）（頭注云）和名鈔飯石郡田井郷　飯石社以上五處並有（在イ）神祇官　狹長社　飯石社　田中社　多加社　毛利社　兎比社（鹿イ）　日倉社　井草社　深野社　託和社　上社　葦麻社　粟谷社　穴見社　神代社　志志乃村社以上十六所並不有（在イ）神祇官

山

燒村山郡家正東一里　穴厚山郡家正南一里　笑村山（笑イ）郡家正南（西イ）一里　廣瀨山郡家正北一里　琴引山郡家正南三十五里二百歩高三百丈周一十一里（里イ）古老傳云此山峯有窟裏所造天下大神之御琴長七尺廣三尺厚一尺五寸又在石神高二丈（丈イ）周四尺故云琴引山有鹽　石穴山郡家正南五十八里高五十丈　幡咋山郡家正南五十二里有紫草　野見木見石以三野並郡家南西四十（次イ）（卅イ）里有紫（芝イ）草　佐比賣山郡家正西五十一里一百四十歩石見與出雲二箇國堺　堀坂山郡家正西（南イ）卅一里有杉松　城垣（恒イ）山郡家正西一十二里有紫（芝イ）草　伊我山郡家正北一十九里二百歩　奈倍山郡家東北二十（廿イ）里二百歩

凡諸山野所在草木　草薢　升麻　當歸　獨活　大薊（一薊イ）　黄精　前胡　署蕷　白朮　女委　細辛　白頭公（翁イ）　白芨（茨イ）　赤箭　桔梗　葛根　秦皮　杜仲　石斛　藤李　檑（榴イ）○赤桐　椎　楠　楊梅　槻　柘楡　松　榧　蘗　楮

禽獸則有鷹隼山雞鳩雉熊狼猪鹿兎獼猴飛鼯

川

三屋川源出郡家正東一十五里多加山北流入○斐(于イ)伊川有年魚 須佐川源出郡家正南六十八里琴引山北(大イ)流經來島波多須佐等三郷入神門郡○門立村此所謂神門川上也(河イ)有年魚 磐鉏川源出郡家西南七十里箭山北流入須佐川有年魚 波多小川源出郡家西南二十四里志許斐山北方流入須佐川有鐵(鐵イ) 飯石小川源出郡家正東一十二里佐久禮山北流入三屋川有鐵

通道通大原郡堺斐伊川邊廿九里一百八十歩通仁多郡堺溫泉川邊廿二里通神門郡堺與曾紀村卅八(廿イ)里六十歩通同郡堀坂山卅一里(廿イ)通備後國惠宗郡堺荒鹿坂卅九里二百歩(經常有剗)通道通(衍文乎)(備後國之イ)○三以郡三坂八十一(徑イ)里(經常有剗(頭注云)剗經常有郵乎馬傳曰置歩傳曰郵郵ひさまさりさよむべき歟) 波多多(次イ)(爾乎)經須佐(徑イ)經剗但志(志都)(徑イ)○都○○美(三イ)經以上○經常無剗但當有政時權置(かりにおく)耳並通備後國之(也イ)

郡司主帳無位　置　首(臣)

大領外正八位下勳業大弘造

少領外從八位下出雲臣

仁多郡

合郷肆(里十二)

三處郷　今依前用　布勢郷　今依前用　三津郷

今依前用　横田郷　今依前用

(頭注云)和名鈔此外有漆仁阿位二郷爲六郷

所以號仁多者所造天下大神大穴持命詔此國者非大非小川上者木穗刺(刺乎)加布川下者阿志(河イ)婆布(波イ)這度之是者尒多(にた)(頭註云)爾多はにたくの笑又莞爾にこやか樋口氏 志枳(しき)小國在詔故云仁多

三處郷即屬郡家大穴持命詔此地田好(よし)故吾御地(みところ)古經(所造天)故云三處 布勢(ふせ)郷郡家正南一十里古老傳云○○○(下乎)大神大巳貴命之宿坐處故云布世(神龜三年改字布勢) 三津(澤イ)郷郡家西南廿五里○(所造天下乎)大神大穴持命御子(みこ)阿遲須枳高日子(あぢすきたかひこ)命御○(須イ)髮八握(やつか)于生(におひて)晝夜哭坐之(ひるよる)辭不通尒時(ときに)御祖命御子乘船而率巡八十島(やそしま)宇良加志給鞆(いさちたまふよしを)猶不止哭之大神夢願給告御子之哭由(ましてことは)夢尒願坐則夜夢見坐之御子辭通則寤(さめてとひ)問給尒時(御イ)三津申(いさはこ)尒時何處然云問給即御祖(みおや)前立去○(於)(石イ)於坐而名川度坂上至留申是處也尒時其津水治(さはみつくみて)(沼イ)

於而御身沐浴坐故國造○吉事奏參二向朝廷一(頭註云)國造神吉事奏參二向朝廷一時其水活出而用初也依レ此今產婦彼村稻不
レ食若有二食者一所レ生子己不レ云也故云二三津一(神龜三年改二字三澤一)即有二正倉一

橫田鄉 郡家東南廿一里古老傳曰鄉中有二田四段許一形聊長遂依レ田而故云二橫田一即有二正倉一(以上諸鄉所レ出鐵堅尤堪レ造二雜具一)(在乎鉄イ)

社

三澤社　伊我多氣社(以上二所並有二(在イ)神祇官一)　玉作社　須我乃非社(非乃イ)

湯野社　比太社　漆仁社　大原社　仰支斯里社

石壺社(以上八所並不レ在二神祇官一)

山

鳥上山 郡家東南卅五里(伯耆與二出雲一之堺有二鹽味葛一)(頭注云)鳥上山鹽味葛今案五味鯎和名抄云蘇敬本草注云五味(和名作爾加豆良)皮肉耳酸辛苦鄙有二鹹味一故名二五味一

室原山 郡家東南卅六里(備後與二出雲一二國之堺有二鹽味葛一)

灰火山 郡家東南三十里

遊託山 郡家正南卅七里(有二鹽味葛一)

御坂山 郡家西南五十三里即此山有二神御門一故云二御坂一(備後與二出雲一之堺有二鹽味葛一)

志努坂野(山乎) 郡家西南卅一里(有二紫菜(草イ)少少一)

玉峯山 郡家東南一十里古老傳云山嶺有二玉上神一故云二玉峯一

城紲野 郡家正南一十里(有二紫草少少一)

大內野 郡家正南廿二里(有二紫草少少一)

菅火野 郡家正南四里高一百廿五丈周一十里(峯有二神社一)

戀山 郡家正南廿三里古老傳云和爾戀二阿位(河イ伊イ)村坐神玉日女命一而上到介時玉日女命以レ石塞レ川(門イ)不レ得レ會所レ戀故云二戀山一(和爾乎○○)

凡諸山野所在草木　白頭公(翁イ)　藍漆　藁本　玄參　百合　王不留行　齊苨　百部根　瞿麥　升麻　枚葜(拔葜イ)

黃精　地楡(楡イ)　附子　狼牙　離留　石斛　貫衆　續斷

女委　藤李○檜　椙　樫　松　栢　栗　柘　槻　蘗

楮

禽獸即有二鷹晨風鳩山雞(イナシ)雉熊狼猪鹿狐兎獼猴飛鼯(鼯イ)一

川

室原川(橫田イ) 源出二郡家東南卅五里鳥上山一北流所レ謂斐伊河上也(川イ)(有二年魚少少一)

橫田川(室原イ) 源出二郡家東南卅六里室原山一北流此則所謂斐伊大河上(川イ)(有二年魚麻須魴鱧等類一)

灰火小川(々イ) 源出二灰火山一入二斐伊河上一(川イ)(有二年魚一)

阿伊(位)川 源出二郡家正

南卅七里遊託山一北流入二斐伊河上一川イ　有年魚　阿伊川源削イ位出二郡家西南五十里御坂山一入二斐伊河上一有二年魚麻須一　比太川源出二郡家東南一十里玉峯山一北流意宇郡野城河上是也有年魚

湯野小川源出二玉峯山一西流入二斐伊河上一川イ

通道通二飯石郡堺漆仁川邊一廿八里即川邊有二藥湯一一浴則身體穆平也再濯則萬病消除男女老少晝夜不レ息駱驛往來無レ不レ得レ驗故俗人號云二藥湯一也即有二正倉一

通二大原郡堺辛谷村一一十六里二百卅六歩通二伯耆國日野郡堺阿志毗緣山一卅五里一百五十歩有常剗　通二備後國惠宗郡堺遊託山一卅七里有常剗　通二同惠宗郡堺比市山一比布イ五十三里常無剗但當有政時權置多耳イ

郡司主帳外大初位下品治部
大領外從八位下蝮部臣
少領外從八位下出雲臣

大原郡

合郷捌里廿四

神原郷　今依レ前用　屋代郷　本字矢代　屋裏郷本字矢內　佐世郷　今依レ前用　阿用郷　本字阿欲　海潮郷　本字得鹽　來次郷　今依レ前用　斐伊郷　本字樋以上捌郷里參

所三以號二大原一者郡家正西一十里一百一十六歩田一十町許平原也故號曰二大原一往古之時此處有二郡家一今猶追レ舊號二大原一今有二郡家一處號云二斐伊村一　神原郷郡家正北九里古老傳云所レ造二天下一大神之神御財積置給處也則可レ謂二神財郷一而今之人猶誤。云二神原郷一耳　屋代郷郡家正北一十里一百一十六歩所レ造二天下一大神之垜立射處故云二矢代一神龜三年改二字屋代一即有二正倉一　屋裏郷郡家東北一十里一百十六歩古老傳云所レ造二天下一大神令殖矢給處故云二矢內一神龜三年改二字屋裏一　佐世郷郡家正東九里二百歩古老傳云須佐能袁命佐世乃木葉（頭注云）佐世乃木和名鈔楊氏漢語抄云烏草樹「佐之夫乃紀」辨色立成同」師說今山中者佐世保乃木古事紀仁德天皇皇后磐之媛歌詠之頭刺而踊躍爲時所レ刺佐世木葉墮レ地故云二佐世一　阿用郷郡家東南一十三里八十歩古老傳云昔或人此處山田佃而守レ之介時目一鬼來而食二佃人之男一爾時男之父母竹原中隱而居之時竹葉動之介時所レ食男云二動動一（頭注云）動動あよあよとよむべき歟故云二阿欲一神龜三年改二字阿用一　海潮郷郡家正東一十六里卅六歩三イ

古老傳云宇能活比古命恨ニ御祖須義禰命一而北方出雲海潮押止。漂ニ御祖。神一此海潮至故云ニ得鹽一。改ニ字海潮一。即東北須我小河之湯淵村川中温泉。不レ用レ號。同川上毛間林川中温泉出。不レ用レ號。來次鄕郡家正南八里所ニ造天下一大神命詔八十神者不レ置ニ青垣山裏一詔而追廢時止此義迢以生故云ニ來次一。斐伊鄕屬ニ郡家一樋速日子命坐ニ此處一故云レ樋。神龜三年改ニ字斐伊一。寺

新造院一所在ニ斐伊鄕中一郡家正南一里建ニ立嚴堂一也。有僧五軀。大領勝部君虫麻呂之所レ造也。新造院一所在ニ屋裏鄕中一郡家正北一十一里一百廿歩建ニ立層塔一也。有僧一軀。前少領。田部臣押島所レ造也。今少領伊去美之從父兄也。新造院一所在ニ斐伊鄕中一郡家東北一里建ニ立嚴堂一也。有ニ尼二軀一。斐伊大樋伊支知麻呂之所レ造也

社

矢口社　宇乃遲社　支須支社　布須社　御代社　宇乃遲社　神原社　樋社　樋社　佐世社　世裡陀社　得鹽社　加多社　以上一十三所並在ニ神祇官一。赤奈社　等等呂吉社

矢代社　比和社　日原社　情屋社　春殖社　船林社　宮津日社　阿用社　置谷社　伊佐山社　須我社　川原社　除川社　屋代社　以上。十六所並不レ在ニ神祇官一。

山

菟原野。郡家正東即屬郡家

城名樋山郡家正北一里一百歩所ニ造天下一大神大穴持命爲レ伐ニ八十神一造レ城故云ニ城名樋。一也。高麻山郡家正北一十里二百歩高一百丈周五里北方有ニ樫椿等類一東南西三方並野也古老傳云神須佐能袁命御子青幡佐草壯命是山上麻蒔祖故云ニ高麻山一即此山峯坐ニ其御魂一也。須我山郡家東北一十九里一百八十歩有ニ檜枌一。船岡山郡家東北一里一百歩阿波枳閇委奈佐比古命曳來居レ船則此山是矣故云ニ船岡一也。御室山郡家東北一十九里一百八十歩神須佐乃乎命御室令レ造給所レ宿故云ニ御室一。

凡諸山野所在草木　苦辛　桔梗　蕃茄　白芷　前胡　獨活　卑薢　葛根　細辛　茵芋　白芍　説月　白

𦮼(欽イ)　女委(椿イ)　署蕷　麥門冬　藤李　檜　杉　栢　樫
櫟　精　楮　楊梅(やまもゝ)　梅　槻(つき)　蘗(きはだあり)
禽獸則有鷹晨風鳩山雞雉熊狼猪鹿兎獮猴飛鼺
川
斐伊川郡家正西五十七歩西流入出雲郡多義村(有年魚麻)
須我小川源出須我山西流(有年魚少)
海潮川源出意宇與大原二郡堺入矣(笑イ)村(山イ)上北自海潮西流(有年魚少少)
佐世小川源出阿用山之北流入海潮川(無魚)幡
屋小川源出郡家東北幡箭山南流(無魚)水三(四イ)氷(水イ)合正流
入出雲大川(河イ)(已上十一字イ本)　屋代小川源出郡家正東正(西イ)除
田野西流入斐伊大河(無魚)
通道通意宇郡堺水(木イ)垣坂廿三里八十五歩通仁多郡
堺幸谷村廿(七イ)三里一百八十二歩通飯石郡堺斐伊河(川イ)
邊五十〇歩通出雲郡多義村一十二(一イ)里二百廿歩前
件參郡並山野之中也
郡司主帳無位勝部臣
大領正六位上勳業勝臣(かちのおむ)
少領外從八位上勳(額イ)〇部臣
主政無位置(田イ)臣

道度
自國東堺去西二十四(廿イ)里二百八十歩至野城橋
長三十(廿イ)丈七尺廣二丈六尺(飯梨川街乎)　〇又西二十(廿イ)一里至國
廳意宇郡家北十字(八十イ)家街即分爲二道(一正西道一枉北道)枉北道去
北四里二百六十六歩至郡北堺朝酌渡(渡八十歩渡船一)　〇又
北方一十里一百卅(卌イ)歩至島根郡家自郡家去北(又イ)
十七里一百八十歩至隱岐渡千酌驛家濱(渡船)〇亦自
郡家西一十五里八十歩至郡西堺佐太橋長三丈廣一
丈(佐太川)〇又西方八里三百歩至(秋イ)〇秋鹿郡家又自郡家西
方一十五里一百歩至郡西堺〇又西方八里二百六十
四歩至楯縫郡家又自郡家西方七里一百六十歩至
郡西堺〇又西方一十里二百二十歩出雲郡家東邊即
入正西道也總枉北道程九十九里一百一十歩之中
隱岐道一十七里一百八十歩正西道自十字街西一十
二里至野代橋(野代川イ)長六丈廣一丈五尺〇又西七里至玉作
街即分爲二道(一正西道一正南道)正南道十四里二百一十歩
至郡南西堺〇又南廿三里八十五歩至大原郡家即(廣イ)(渡廿五歩渡船)
別爲二道(一南西道一東南道)南西道五十七歩至斐伊川
一〇又南西二十九(廿イ)里一百八十歩至飯石郡家又自
郡家南八十里至國南西堺(通備後國三次郡)總去國程一一

百六十六里二百五十七歩也○東南道自郡家去二十（廿イ）三里一百八十二歩而至郡東南堺又去東南一十六里二百卌六歩（ナシイ）而至仁多郡比比理村分爲二道其一道東方去卌八里一百卅一歩至仁多郡家一道南方去卌（廿イ）八里一百二十一歩備後國堺至遊託山○又正西道自玉作街西方九里至來待橋（來待川イ）長八丈廣一丈三尺○○亦（又イ）西三十三里二十（廿イ）四歩至出雲郡家自郡家西二里六十歩而至郡西堺出雲河（川イ）渡五十歩渡船一（頭注云）イ本又自郡家西二里六十歩至郡西堺出雲河度五十歩度船一（季云けしてあり）又西方七里廿五歩而至神門郡家即有河（川イ）渡二十五歩渡船一者自郡家西方四十三（卅イ）里而至國西堺通石見國安濃郡

○總○國程一百五十四（六イ）里二百（三イ）○十四（四イ卅イ）歩

○驛（頭注云）驛和名鈔唐令云諸道須置驛者每三十里一驛「音繹和名無末夜」言地勢險阻及無水草處隨緣置之師說驛日本紀點波以意早馬也夜與以五音通万葉集同又云波由万夜與山通厩和訓同義歟

自東堺去西方二十（廿イ）里一百八十歩至野城驛又西方二十一里至黑田驛即分爲二道一正西道一渡隱岐國道也　隱岐國道去北方三十四（卅イ）里一百卅歩至隱岐渡千酌驛○又正西道卅八里至完道驛又西方廿六（十イ）里二百廿九歩至狹結驛又西方一十九里至多伎驛又西方一十四里至國西堺

○團（頭注云）團塞改團下皆倣之軍防令云凡軍團大毅領一千人又云兵士簡點之次皆令比近團割義解云謂團者聚也割者分也（團イ）

意宇軍（卑イ）團即屬郡家熊谷軍團（團イ）飯石郡家東北廿九里一百八十歩神門軍團（團イ）郡家正（西イ）東（北イ）七里

○馬見烽（烽乎）（頭注云）烽軍防令云凡置烽皆相去四十里若有山岡隔絕須逐便安置者但使得相照見不必要限四十里和名鈔說文云烽燧（峰遂二音度布比）邊有警則擧之唐式云諸置烽之處置火臺臺上插擲「音厥俗云保久之」　出雲郡家西北三十二里二百四（三イ）十歩土椋烽（烽乎）神門郡家東南一十四里（イナシ）○多天志烽出雲郡家（正イ）○北一十三里卅歩○布自（自乎）目（夫イ）。美烽島根郡家正南七里二百一十歩（波イ）○暑垣（青垣イ）烽意宇（義イ）郡家正東二十八里（イナシ）八十歩○宅和式（平沙戌）烽（三イ）神門郡家西南四十一里瀨埼式（戌イ）島根郡家東北一十九里一百八十歩

天平五年二月卅日勘造秋鹿郡人神宅臣全（金イ）太理

國造帶意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣島

續日本紀第九元正天皇神龜三年二月庚寅辛亥出雲國造從六位上出雲臣廣嶋齋事畢獻神社劍鏡并白馬鵠等廣嶋并祝二人並進位二階賜廣嶋絁二十匹綿三十屯布六十端自餘祝部一百九十四人祿各有差

和歌童蒙抄

全

和歌童蒙抄

「狩谷本此系譜あり」

左大臣武智麻呂第四子參議巨勢麻呂十三男中納言貞嗣五世孫山井三位永頼四代大學頭從四位上季綱子

友實　勘ヶ由次官從五位下本保實

能兼　藏人式部少輔從四位下　母大學頭棟綱女　保安五二月五日卒年五十四

女子　源三位頼政室

範兼　佐渡近江權守　大學頭東宮學士式部少輔刑部卿從三位　母兵部少輔爲賢女　保延五三月五日卒年五十四

範光　大藏卿　民部卿　權中納言　式部少　右衛門督　母伊勢守源俊重女

範朋　正二位中納言

範季　從二位式部少　母高階爲時女

範季　從三位治部卿

範重　皇后宮大進

女子　範子　法勝寺執行能圓妻

和歌童蒙抄第一

天部

天　日　月　春月　夏月　秋月　冬月

風　雲　雨　春雨　五月雨　時雨

霞　露　霧　霜　雪

霰

天部

天

ふかみどりいろことなりやあさまだき
かすみのひまにみゆるおほぞら

古歌也みどりのそらは青天碧空也つねのことなり樓炭經云須彌山は四寶のなせる處也黄金白銀水精瑠璃也たかさ三百卅六里しも海にいれりかたちつゞみのやうにてこし細し東面は黄金西面白銀北面は水精南面は瑠璃也されぼこの南贍浮州のそらは碧瑠璃にて

みどりにみゆるなり

わがそのにむめのはなちるひさかたや

あめよりゆきのながれたるかも

萬葉集四にありひさかたとはそらを云ひさしくかたしと云心也久堅とかけり天の字をあめとよめはひさかたの月ひさかたのあめといはむおなし心なり

ひさかたのあまてるつきのかくれなば

なにゝよそへていもをしのばむ

この歌本書にみえす

同上にありあめといひあまといふ又同事也されはそらてるとよめるなり

あまのがは(うみに)くものなみたちつきのふね　人麿

天海丹雲之波立月船

ほしのはやしにまきかくされぬ

星之林丹榜隱所見

同七にあり詠(ル)天(ヲ)歌也あまのかはゝ漢河也あまのかはと云につきて舟に月をたとへ星をはやしになせるなり

あまのがはうきゝにのれるわれなれや

ありしにもあらずよはなりにけり

采女

むかしみかどうねめをめしめぐみたまふてゝちれいにそむけりければまかり出たるにおもひわすれさせ給ひてのちまいりたりしにもあらさりければ奉れりける歌也これによりてもとよりもけ(勝)にもてなさせ給ひけるほどに程なくかくれさせ給ひければ御はかにおさめ奉るにての采女いきなからこもりにけりさて其御はかはいけこめのみさゝきとてやくしでら(藥師寺)のうしろいくばくものかであり

うきゝにのれるとは金谷園記曰(ク)漢武帝張騫至牛國にいたりてたなばたのかはのほとり(源)にて沙をあらふをみる騫(ガ)曰漢帝の使にて河のみなもとをきはむる也たなばたのたまはくきはむる事うべからずすみやかにかへりさりて漢帝にまみゆる事をゑよすなはちひとすぢのうきゝあたへてのせてかへらしむ又一の塊石をゑたり東方朔そのいしをみてたなはたの支機石とぞいひけるされはひこほしのくにゝてあらぬよのこゝちのしけるをおもひてよめるなるべし

二

あかねさすひはてらせどもうばたまの

茜刺日者雖照烏玉之

よわたる月のかくらくおしも

夜渡之月隱良久惜毛

萬葉二にありあかねさすとはあかきひかりさすとい

へる也日は日本紀第一に伊弉諾伊弉冉二神生二日神一このみてひかり國のうちにてりとほる此時に天地あひされる事いまだとをからずあめのみはしらをもてあめにあぐさづくるにあまのはらの事をす次に月神をうめりその光ひにつけりひになずらへて又あめにをくる

一書曰神あめのしたをさむ珍子をうまむとをもふすなはち左の手をもて白鏡をとり玉ふすなはち化出神これ日神と云右手にますみの鏡をとり玉ふなりいづるかみを月神と云月神一云二月弓尊一又月夜見尊月讀尊

あさひかげにほへる山にてるつきの
　あかざるいもを山でしにおきて

同四にありこれはあさひのいづるまでありあけの月の西の山にのてりたるがあかずわりなく思ふによせて戀のこゝろをよめるなりにほへるとはあさひのかげに映じあひたると云心也

たまはやすむでのわたりのあまつたふ
　ひのくれゆけばいへをしそおもふ

同十七にありむことはつの國にありたまはやすとは珠は海にあるものなればたまおほかると云心にやあまつたふとはそらつたふとよめる也さればつの國のむごの海に舟にのりてゆふくるに家をこひてよめるうたなり

夕附日さすやかはべにつくるやの
　かたちをよしみしかぞよりくる

同十六にありゆふづくひとは夕附日とかけりさすやかはべとは反照は東山をてらせば東山の西のふもとになかれたるかはとぞ云ふべきかたちをよしみとは地形のよければよりきたるなりとよめる也しかぞとは鹿にはあらずことはなり

月

つきたちてたゞみかつきのまゆねかき
　けなかくこひしきみにあへるかも

ふりあふぎみかつきみればひとめみし
　ひとのまひきのおもほゆるかも

萬葉集第六にありほそき月の女のまゆににたるなり月眉といへりけながくとはいきながくといへるなり次歌まゆにゝたるは若月をみるにまゆひき思ひいて

○ゐとよめり

ゆふづくよあかつきがたのあさかげに
　わがみはなりぬきみおもふかねに

萬葉十一にありゆふづくよとはよひに出てとく入を云也されはあかつきかたのあさかげにとよめるうちきくはあやしきをわかみのこひにをとろへてあらぬさまになりたるなむよひにつき入たるあけのそらのみところもなきに似たるとよめるなるべし

山末留不知與歴乎将出香豈
やまのはにいざよふ月をいでむかと
待作居留與會降家類
　まちつゝをるによぞふけにける

同七にありいざよひとは十六日のよのつきを云也されば待とてよもすこしふくべし本集には不知夜とかきていさよひとはよみたればよをしてとく出るかとみゆるを不知と云はいさと云事なればかく書るなるべし

てるつきをゆみはりとしもいふことは
　やまべをさしていればなりけり

ゆみはりとは釈名云ゆみはりは月のなかばなる名也そのかたちひとかたはまかりひとかたはうるはしくて弓をはれるつるに似たるなり

たまたれこすのまとほしひとりゐて
　みるしるしなきゆふづくよかな

同 萬葉七にありこすのまとほしとは小簾間通とありみるしるしなしとはこすのひまよりみれどみると云べき心ちもせずかひなく入ぬと云心也

おほふねにまかぢしゝぬきうなばらを
　こぎでゝぞくるつきひとをとこ

同十五にありしゝぬくとはしげぬくと云をなをししぬきとよめるにやうなばらは海を云日本紀蒼溟といへり月人男は月讀男也

やまのはのざゝらゐれとこあまのはら
　とわたるひかりみらくしよしも

同六にありさゝらへをとこもかつらおとこなり

あめにますつきよみおとこすさはせよ
　こよひのながさいをよつけこそ

同六にありあめにますそらにあると云也いをよつけこそとは五百夜をつけと云也又こそとはかしといへることはにや月よみは日部にみえたり

おほとものみつとはいはじあかねさす

てれるつきよにたゞにあへりとも

同四にあり月をあかねさすとよめり

みなそこのたまさへきよくみつべくも

てるつきよかもよのふけゆけば

同七にあり玉みつべしとは水のそこにあらむ玉をみえぬへしとよめり文選洛水高淫雨顆珠とつくれるやうに月の水にやどりて珠とみゆへきにや月のうつらむ心はつよけれどもふねの底にやあらむ玉もみえぬべしとよめらむは月のあかさまさるべし

たびにあればよ中をさしててるつきの

たかしまやまにかくらくをしも

同九にありよなかをさしてとは廿日の月なるべしたかしまは近江國にあり

つきゝよみてすゑをめぐるかさゝぎの

よるべをしらぬみをいかにせむ

古歌也よるべもしらぬとは魏武帝短歌行曰月明星稀烏鵲南飛繞レ樹三匝何枝可レ依といへる心なるべし

ゆづかつらすゑはもりくるつきかげの

したてるひめのやとをさすらむ

古歌也ゆづかづらとは神代下にあめわかひこつかひとしてあし原のなかつ國のあしきものをはらふこゝろよめならずしてすなはち顯國玉のむすめ下照ひめをめとる仍てかへりこと申さず此時たかむすひのみことあやしみてなゝしきじをつかはすあめわかひこのかとのまへのゆづかづらにとゞまると云々

うなはらのそこまですめるつきかげに

かそへつべしやはたのせばもの

古歌也はたのせばものとはちひさきいをなり日本紀に鰭廣鰭狹と云り

春月

あさがすみはるひくるればこのまより

うつろふ月をいつとかまたむ

萬十にありこれはあしたにはかすみたりつるはれてくれぬれどこのまうつろふ月の心もなき心をよめるなるべし

はれもせずくもりもはてぬはるのよの

おぼろづきよにしくものぞなき

大江千里か歌也文集詩非レ明非レ暗朧々月と云句を題にてよめるなり

春水云此歌新古今春上に入朧々たる月

夏月

なつのよもすゞしかりけりつきかげは
　にはしろたへのしもとみえつゝ

朗詠集にあり月照二平沙一夏夜霜と云詩の心なり

秋月

まつのはにつきはうつりぬもみぢばの
　すぎぬやきみにあはぬよおほく

萬葉二にありこれは人にあはぬよおほくすきぬとい
はむとてまつのはにうつりぬといひてもみぢはのと
はよめるなるべし又このはのちりて透たるによそへ
たるにやともてゝろえられたり

きみてふとしなへうらふれわがをれは
　あきかせふきて月かたふくを

萬葉十にありしなへうらふれとはなけきものおもふ
と云也見二古語集一

もみぢするつきになるらんつきひとの
　かつらのゑたのいろづくみれば

同十二にあり

ひさかたのつきのかつらもあきくれば
　もみちすればやてりまさるらむ

古今集にありこの月の桂とは兼名苑云月中江々の上
にかつらのきあり高さ五百丈したにひとりの人あり
樹をきる姓は呉名は剛天西河の人年十六にて仙をま
なびて後こゝにありと云々これをかつらをとこと云
ふなるべし外典言月中に桂ありしかはあらす樓炭經
云閻浮提の地に閻浮樹あり一名は波利質多一名龍樹
たかさは八萬四千里樹顯月中に現せり世人又月をみ
るに樹ありまことにはなしすなはちこれ閻浮樹のか
げなり

つねよりもてりまさるかなやまのはの
　もみぢをわけていづるつきかげ

拾遺第十にあり屛風ゑを貫之がよめる也つねよりも
秋の月をてりまさるとこれならす古今いふことは御
覽の月部河圖帝覽嬉曰立春々分月東のかた青道より
す立秋秋分は月西のかた白道よりすと云しかればこ
とに光のしろきなるべし

すだきけむむかしのひともなきやどに
　たゞかけするはあきのよのつき

後拾遺第五にあり河原院にて惠慶がよめる也すたく
とは多集とかきて萬葉集によみたれはおほくあつま

るを云ふことばなり
あきのつきしろくぞてれるうなはらや
あをふしかきもいろかはるまで
古歌也あをふしかきとは日本紀に事代主神海中に八重蒼柴籬をつくりてかへりさりぬといへり不レ委レ之
冬月
書入云
此冬月書落他本を求て書入べし此外にもあり正辭云この處各本如此空紙なり
風
あまぎりあひひかたふくらしみづくきの
をかのみなとになみたちわたる
萬葉七にありひかたとはたつみのかぜのふくをいふなり
あゆのかぜいたくふくらしなこのあまの
つりするをぶねゆきかへるみゆ
同十七にありあゆの風とは越俗語東風謂二之安田乃可是一也と本集にはかゝれたるをかの國の人は南の風を云とぞ申なる昔と今と詞のたがへるにや
あさごとにゐてこすなみのたやすにも
あはぬものゆへたきもとゞろに
萬十一にあり井堤はひききなれば風のふかむになみのこへむ事やすき也されはあふことのやすからぬものゆへをとにたてつとよめる也たきもとゞろとはこえにたてゝ人々にみなしられぬといふこゝろなり
ころもてにやまをろしふきてさむきよを
きみしまさすはひとりかもねむ
同十三にありやまをろしとよみてかぜといはねどかくよめり
きみまつとわがこひをればわかやどの
すだれうごかしあきかぜのふく
同四にありまちかねてゐたるに人はこぬに秋風そすたれを動かすとよめる也
雲 論衡云雲は霧雨の微也夏は露となり冬は霜となりあたたかなれば雨となり寒は雪となる則霜雪雨露凍凝者皆地より起りて天より降らす
渡津海乃豊旗雲伊理比沙之
今夜之月夜清明已曾
わたづみのとよはたくもにいりひさし
こよひのつきよすみあかくこそ

萬一にありとよはたとはおほきなる旗を云豐字をと
よとよむおほきなりと云詞也ゆふひやけしてあかき
くもの紅旗ににたるをみればあめのふらぬによりて
こよひの月ははれたらんずるとよめり
しらくものいはへゝたてゝとほくとも
よかれずをみむいもがあたりは
萬十にあり七夕の歌也いはへとは五百重なり
かすがやまあさたつくものけぬひなり
みまくのほしきゝみにもあるかな
たちやまのゆふゐるくものうすからば
われかこひむないもかめをほり
萬第四第十一にありあしたにたちてゆふへにゐると
みえたり
うらふれてものなおもひそあまぐもの
たゆたふこゝろわかおもはなくに
萬十一にありたゆたふはうかれさたまらずといふな
り
わだつみにしまもあらぬにあまのはら
たゆたふなみにたてるしらくも

萬七にありしまもなけれどなみに雲たつとよめり天
の原とは白雲とよまむとてをけるなるべし
これをおもへばけたものゝ雲にほへけんてゝあし
て
古今忠岑が古歌にくしてたてまつる短歌の中によめ
りみはあやしけれどみかどのおほせてとをうけ王は
るなむめてたきと云によせてよめるなりけたものゝ
雲にほゆとは論衡曰淮南王得レ道餌レ藥在レ庭畜産舐
レ之皆得レ仙犬吠二天上一鷄鳴二雲中一
あまくものやへくもがくれなるかみの
をとにのみやもきゝわたりなむ
萬十一にありやへくもがくれとはかならずやへと云
にあらず雲あつしと云心也八はかずのきはめなれば
やみねのきゝすやつをの椿など云がごとし
あまくもをふろにふみあたしなるかみも
けふにまさりてかくにげめかも
萬十九にありふろにあたしとはあまくものはれにい
たしてなると云にや

雨

わきもてがあかものすそをそめむとて
　けふのこさめにわれもぬらすな
萬七にありこれはそめんとてとはたゝぬらさむとてと云心也もすそをぬらすべきこさめにわれさへぬれじとよめるなるべし
　いもがゝとゆきすきかてらひぢかさの
　あめもふらなむあまかくれせむ
ひぢがさあめとはにはかにあめのふりて袖をかつぐを云といひつたへたり
　つれ〲とあめふるさとのにはたつみ
　すまぬにかげはみゆるものかは
此歌はむかし物語に人のめをされりけるにかけなる馬のはなれてうせたりけるを雨のふりける日あめふるさとにもとのはみにていたるとて尋て來りければもとのめのよめるなりこれをたゞよめると思ふに淮南子ニ人莫レ鑒ニ於沫雨一者雨ニ潦上ノ沫起如ニ覆レ盆一也只言其濁不レ見ニ人形一也といへるにこそこれをみてはよもよまさりけめともをのづからかなひたるもめで度こそあれ

春雨

　はるのあめのいやしきふるにむめのはな
　いまたさかなくいとわかみかも
萬葉第四にありいやしきとはいよゝしきことをいふなり
　はるさめのたなびくけふのゆふぐれは
　月もかすみにをとらさりけり
萬葉第十にあり本文細雨霞ノゴトクニ錚タリと云によりてよめるなり
　みづのをもにあやをりみだるはるさめや
　やまのみどりをなべてそむらむ
六帖第一にあり波文常のことなり古詩云池有ニ波文一氷盡開と云りこれはあめのふりてたつなみのあやをるとよめるなり
　あふこととはかたいとなればしらたまの
　をやますはるのながめをぞする
同二にありこれは戀の心をよみてあふことのかたければなかめをのみすとははるのものとていへるこゝろにてよめりたまのをといふことのあればしらた

まのといひてをやますとつゞけたり
　ふるとしもみえでふりくるはるさめは
　　はなのしへゆふいとにぞありける
同第一にあり古詩細雨滋レ衣看不レ見とつくれり如レ絲とは張孟陽詩曰騰雲似レ涌レ煙密雨如レ散レ絲
　よもやまにこのめはるさめふりぬれば
　　かぞいろはとやはなのたのまむ
堀川院百首に江中納言のよめる也本文云雨爲二花父母一と云り又父母をばかぞいろはといへり
　五月雨
　さみだれになへひきうふるたでよりも
　　ひとをこひぢにわれぞぬれぬる
六帖第一にありたごとはなへとりうふる人を云也ひぢとは泥をいへばこひぢによそへたるなめり
　時雨
　しぐれのあめまなくなふりそくれなゐに
　　にほへるやまのちらまくおしみ
萬八にありしぐれひとむら〳〵とをりてそらははれぬるをまなくふるとよめればさみだれをいはむこゝちすれどこれはまことにひまのなきにはあらずしけしといはむ心にてまなしとはよめる也もみぢをにはふとよめり
　ながつきのしぐれのあめにそめかへり
　　かすがのやまはいろづきにけり
萬十にあり山のいろそめかへりとよめり
　しぐれのあめまなくしふればまきのはも
　　あらそひかねていろづきにけり
萬葉第十にあり
　わかやどのあさちいろづくふぢはりの
　　なつみのうへにしぐれふりつゝ
同まきにあり
　かみなづきしぐるゝときそみよしのゝ
　　やまのみゆきもふりはじめける
後撰第八にあり
　霞
　ときはいまはるになりぬとみゆきふる
　　とほきやまべにかすみたなびく
萬葉第一にありゆきふりながら霞たなびくとよめり
　はるがすみなかるゝときにあをやぎの

えだくひもちてうぐひすぞなく

同第十にありかすみなかるとよめり本文流霞といへり

はるのきるかすみのころもぬきをうすみ

やまかぜにこそみだるべらなり

古今の第一にあり在原行平か歌也かすみの衣とは本文に霞衣といへり詩云去衣與レ浪霞應レ濕云々

やまかぜのはなのあとどふふもとには

はるのかすみぞほだしなりける

後撰第二にあり寛平御時花のいろ霞にこめてみせすと云心を興風がよめる也花のあとゝふとはかをやとひてくと云心なり

露

うはたまのわかくろかみにふりなつむ

あまのつゆしもとれはきえつゝ

萬葉第七にありつゆしもふりなつむと云り露霜とは露結びて霜となると云なり

あきはぎのゑだもとををにをくつゆの

けにはけぬともいろにいでめや

萬葉第八にありとををはたはゝと云也けにはとはきえにはといふなり

くさのいとにぬくしらたまとみえつるは

あきのむすべるつゆにぞありにける

後撰第五にありくさのいとゝは古詩に草縷と作れり

あしのはにおくしらつゆやしげからむ

さはべのたづのこゑのきこゆる

無名集にあり古歌也つゆさむくてつるなくとは風土記曰白鶴性警レ寒八月白露降二流於草葉上一滴々有レ聲即鳴

霧

あすかがはかはよとさらすたつきりの

おもひすぐべききみにあらなくに

萬三にありこれはことなるうたかひなし河きりのたちさることもせぬやうにきみひとりに心のとまりて思すぐべきかたもなしとよめり

わがゆへにをもなけくらむかさはやの

うらのおきつにきりたなびけり

萬葉第十五にありかさはやのうらはいよの國にあり

あきぎりにぬれしころもをほさずして

ひとりやきみかやまぢてゆらむ

類聚抄にありきりにぬるとよめりよぶことりの歌にもあり

しらかとりゐなのをゆけばありまやま
きりたちてむるむでがさきかな

古來難義也さま〴〵の義の中にしらかとりといへるはもし日本紀景行天皇卅年云日本武尊進二入信濃一是國山高谷幽翠嶺萬重人倚杖而難レ昇馬頓轡而不レ進然日本武尊遙逃二千峯一飢之食二於山中一山神令レ苦レ王以化二白鹿一立二於王前一王異之以二一箇蒜一彈二白鹿一則中レ眼而殺レ之爰王忽失レ道不レ知レ所レ出時白狗來導レ王仍得レ出二信濃一先レ是渡二信濃坂一者多ク得二神氣一以瘼臥但從レ殺二白鹿一之後踰二是山一者嚼レ蒜塗二人及牛馬一自不レ中二神氣一也然者津國有馬山者雖レ非二信濃坂一霧立渡失レ路心にて白鹿となりたりけむときこえたりとよめるにやとぞこゝろえられたる

なさけなきうきよとおもへばあきゞりの
ふかきやまぢをいてむものかは

古歌也むかしの人よをうらみてひえの山にてもれりけるにそのしるよしある人いつかいでむことゝいへりければよめるをうちきくはことありげもなきによくおもひつゞくれば博物志と云フ書に王肅張衡馬均と云フ三人もろともに霧をわけて山をこゆひとりはつゝがなく一人はやみぬ一人はしにゝけりそのつゝがなきは酒をのみやめるは食をししぬるは空腹にてなむ有りけるとしるせる事をおもひてたゝかくてをしなむとよめると思へばいとなむめでたき

したやもりなるこのつなにてかくなり
はれまもおかぬきりのみなかに

堀河院の百首歌に越前守仲實がよめる也みなかとはもなかと云フ心也

霜

よやさむきころもやうすきかさゝぎの
ゆきあひのまよりしもやをくらん

昔住吉明神の天降たまへりけるときつくりたりける神殿の年月多クつもりてあはれたりければそのよしをみかどにしらせ奉らむとてかの明神のみかどの御ゆめにみせ奉り玉へる歌也かさゝぎとはあやまてるなりかたそぎといふべき也神のはくらのつまにかたの

やうにてたてたる木を云フ也その木をばちぎと云フなり
あしべゆくかものはがひにしもふりて
さむきゆふべのことをしぞおもふ
萬一にありはがひとははねがひと云フなり
ゆふでりのしもおきにけりあさといでに
あとふみつけてひとにしらすな
萬十一にありゆふでりとは夕凝とかけりゆふべにこ
りゐたる心也さればあさとをいでゝあとふみつけて
はひとしりなむとよめるなり
しものうへにあられたばしりいやましに
あられまゐこむとしのをなかく
萬廿にありまゐこむとはめくりこむと云フ心也
たてもなくぬきをさだめすをとめこが
をれるもみぢにしもなふらせそ
萬葉第八にありしもふるといへり
あまくものよそにかりがねきゝしより
はだれしもふりさむしこよひは
同第十にありはだれしもふりとよめり
あまとぶやかりのつばさのおほひばの
いつこもりてかしものおくらむ

同巻にありあまとぶとはそらをとぶと云フなりつばさ
のおほひはとよめり
たかさごのをのへのかねもおとすなり
あかつきかけてしもやおくらむ
堀河院百首に匡房卿のよめるなりもろこしに豊山と
云フ處ありそのみねに鐘ありしものくだるをまちてな
るなり

雪

わがをかのおかみにいひてふらしめん
ゆきのくだけのそこにちりけむ
萬葉第二にありをかみとはをかにゐてまもるものな
り又雪のくだけとよめり
かせまぜのゆきはふれともみにならぬ
わがいへのむめをはなにちらすな
同巻にありかせまぜとよめり
たなぎりあひゆきもふらぬかむめのはな
かさすはかりにそへてたにみむ
同一にありたなぎりあふとよめり
うからふとみるやまゆきのいちじるく

ていをばいもなひとのしらむか
同巻にあり鏡良布跡とかけり
たちやまにふりをけるゆきとこなつに
けぬてわたるはかもなからとそ
同第十七にありたちやまとは越中國にあり夏もゆき
つねにありかもなからとそはかくもなからといふな
り
しはすにはあはゆきふるとしらぬかも
むめのはなさくつはめらずして
萬八にありしはすとよめり
まきのうへにふりをけるゆきのしら〳〵に
おもほゆるかもさよとわかせて
同八にありしら〳〵にとはすさましと云フ心也さよと
はせまきよとのわかせてと云フ也
あはゆきのほとろ〳〵にふりしけば
ならのみやこしおもほゆるかな
同八にありほとろ〳〵とはものゝほとり〳〵にふり
しけばとよめるなりゆきのいたくふらぬほどはもの
ゝきは〳〵にたまるなり
しらゆきのところもわかずふりしけば
いははにもさくはなかとぞみる
古今第六にあり紀秋峯か歌也いははにさく花とは本
文花に巖花と云へり
としふれどいろもかわらぬまつのえに
かゝれるゆきをはなとこそみれ
後撰第八にあり題不レ知讀人不レ知と書り松花は一千
年に咲と本文にいへり

春雪

うちなびきはるさりおれ（なイ）ばしかすがに
あまくも（くイ）きりあひゆきはふりつゝ
萬葉第一歌也しかすがとはさすかにといふ

霰

あられふりいたまかせふきさむきよは
またやてよひもわがひとりねむ
萬葉第十一にありいたまかせふきてゝろおほかり
しものうへにあられたはしりいやましに
あられはまゐてむとしのをなかく
同第廿にありたはしりとはとはしりと云フことなりま
ゐこむとはめぐりてむと云なり

みやまにはあられふるらしとやまなる
　まさきのかづらいろづきにけり
古今第廿にあり朗詠にもいれり委見二神樂一云々
みやまべのこのくれことにそめわたる
　しぐれとみしはあられなりけり
六帖にありこのくれとは木のしげりあひてくらさをいふ

和歌童蒙抄第二

時節

春

早春　七日白馬在若菜　子日　卯杖

三月三日　雜春　三月盡

夏

更衣　神祭　夏夜　納涼

氷室　晩夏　六月祓

秋

早秋　七夕　八月十五夜

駒迎　九月九日　九月盡

冬

初冬　冬夜　佛名　歳暮

除夜

春　つかさとる神をさをひめといふなり

正月　このつきにしたしくおもふ人にゆきあひむつふるによりてむつきといふ

二月　このつきにさらにさむきかせふきていまさらにきぬをきるによりてきさらきといふ

三月　この月にもろ〳〵のくさのいやおひにおふるによりてやよひといふ

早春

むつきたちはるのきたらばかくしてそ
　むめををりつゝたのしきをつめ

萬葉五にありたのしきをつめとは老子に衆人熙々如ㇾ登二春臺一と云也熙々樂はたのしむかたちなりはるはおほかた物の色もこゑもよろこび人のこゝろもたのしむなり

むつきたつはるのはじめにかくしつゝ
　あひしゑみてはとしはてめはも

萬十四にありあひしゑみてはとはとしのはじめにはしたしき人には必あひみえてよろこびをなしいはふなりとしはてめとはとしはへぬと云也

ふゆすぎてはるはきたればとしつきは
　あらたまれどもひとはふりゆく

萬十にありふりゆくとはとしのかさなりておい（老）ゆくといふなり

まきむくのあなしのひばらはるたてば
　はなかゆきかとみゆるゆふして（大和四手）

萬葉集に詠ㇾ山歌也類聚三代格の第二云ク大和ノ國丹生(にふ)川上(かはかみ)穴師(あなしの)神社(やしろ)といへり

ゆきのうちにはるはきにけりうぐひすの
　こほれるなみだいまやとくらむ

古今一にあり二條ノ后歌也とりはなけどもそのなみだ（ヌイ）まなこにみえずといへどもなくといふにつきてかくよめり

うぐひすのたによりいづるこゑなくば
　はるくることをたれかつげまし

古今一に友則歌也谷よりいづとは毛詩伐木篇曰ク出

レ自二幽谷一遷二于喬木一

たにかぜにとくるこほりのひまごとに
うちいづるなみやはるのはつはな

古今にありたにかぜとはよめるにはあらず毛詩云習々谷風注曰習々和舒之貌東風謂二之谷風一陰陽和則谷風至云々されば東風のこゝろをよめるなりされば天徳歌會に源順鶯歌にもこほりたにとまらぬはるの谷風になをうちとけぬ鶯の聲とよめり

ふくかせやはるたちきぬとつげつらむ
えだにこもれるはなさきにけり

後撰第一にあり讀人不レ知后宮歌合によめり先遣下二和風一報中消息上と云る詩の心也

たづのすむさはべのあしのしたねとけ
みぎはもえいづるはるはきにけり

拾遺歟イ
後撰第一にあり天曆三年太政大臣七十賀しはべりける能宣がよめるなり　經信卿さはべとみぎはといへる義のやまひなりと難ぜられたりもえいづとはおひいづと云なり萌てころなり

ふるゆきにみのしろころもうちきつゝ
はるきにけりとおどろかれぬる

敏行
としゆきの朝臣むつきのついたちの日きさいのみやにまゐりたりけるにゆきのふりければおほうちきをたまはりてよめる歌也みのしろ衣とはゆきふるにうへにきたればみのしろとよめるなりはるきにけりとはとしのはじめにことさらにとておほうちきをたまはりたるがめつらしきよしなめり此歌をためしにて山里の草は露もしげからんみのしろ衣ぬはずともきよとよめり正月ついたちに雪のふれるに衣を給はることもろこしにありけるをことのおこりにするにや宋史に孝武帝大明五年正月朔日にゆきふれり江夏王義恭衣をもちてゆきをうちて六出の花をなして瑞とす帝はなはだよろこびてたまふに衣をもてすといへり

あづまぢはなこそのせきもあるものを
いかにしてかはるのきつらむ

後拾遺にあり春はひんがしよりきたると云心をよめり禮記曰立春之日天子迎二春東郊一云々

七日　在二若菜　白馬一

荊楚歳時記曰正月七日爲二人日一正月朔日爲レ鷄ト二日爲レ狗ト三日爲レ猪ト四日爲レ羊ト五日爲レ牛ト六日爲レ馬ト七日爲レ人ト以二七種菜一爲レ羹食レ之人無二萬病一

かすがのゝとぶひのゝもりいでゝみよ
　いまいくかありてわかなつみてん

古今第二巻にありむかしもろこしにいくさせしときおほきなるたいまつを山の峯ごとにたてゝいくさおこりくれば次第に火をともしつゝ一日にゆくほとなれば一日にしるこれを烽燧と云むかし奈良の京の時あづまよりいくさきたらんとせしにかのとぶひをあげたりしにこのかすがのにたてはじめてまもり人をおきたりきそれよりとぶひのと云也山のみねならぬぞ本文にはたがひたるいづれの帝の時ぞたしかにたづぬべし

けふよりはをぎのやけはらかきわけて
　わかなつみにとたれをさそはむ

後撰一春部にあり平兼盛詠也やけはらかきわけてとよみがたけれどかくよめり

白馬　光仁天皇寶龜六年正月七日楊梅院の安殿に御して宴を五位以上にまうけて内厩に宴し給ひて青御馬をたてまつらしむ兵部省の五位以上をすゝめて馬をかざらしむ委ハ見二續日本紀一

みづとりのかものはいろのあをきむまを
　けふみる人はかぎりなしてふ

萬葉第廿にあり

子日

はつはるのはつねのけふのたまはゞき
　てにとるからにゆらぐたまのを

萬葉第廿にあり家持詠也たまはゞきとはゐなかのこがひするやう子日のこまつに蓍をゆひくはへて子午のとしの女のこがひによきしてはかすといひつたへたりかの萬葉集に家持が歌にてあるを經信卿のもとに能因がまかりて此歌は時平大臣の御女に京極のみやす所と申ける志賀寺へまゐり給ひけるにちかくなりてところさまのをもしろさを車の物見よりごらむじけるにいとちかくきしのうへに草の菴のうちより老たる法師にめをみあはせ玉へりければいとむつか

しくおぼしけりさて次日此老法師ふたへにかゞまりたるが杖にすがりて參て昨日しがにて見參しはべりし老法師なんまゐりたるといへどきゝ入るゝ人なしひめもすにゐでうじてあまりにいひければかゝる事申もの侍ると申ければさることあらむ南おもてへとおほせられて召よせていかなる事ぞとゝはせ玉ひければよくためらひて志賀に此七十年ばかりはべりてひとへにごせぼだいの事をいとなみ侍りつるに思はざる外に見ざむをしてのちいかにも／＼こと心なく今一たびげむさむをせむの心ばかりにて年比の行ひもいたづらになりなむ事のかなしさにもしたすけやせさせおはしますとて杖にすがりてなく／＼參りて侍るなりと申ければいと安きことなりとの玉ひてみすをすてしあげてみえさせ玉ふしろきまゆのしたよりおいかはりて人ともおぼえぬまゆしてとばかりまもり奉りてその御手をしばし玉はらむと申にしたがひてさし出し給ひけるをわがひたひにあてゝ不覺の泪を落して此歌をよみかけ申てことし九十に及びはべりぬるにかばかりのよろこびはべらず此緣をもて思ひのごとくにみだの淨土にむまれなばかならずみちびき奉らむ又淨土にむまれたまはゞみちびかせ玉へとぞ申ける御返事によしさらばまことのみちのしるべしてわれをみちびけゆらぐ玉の緒これをきゝてよろこびながらかへりにけりとなむ語りける能因むげならむ事はかたらじと思ふをいかゞ無覺束事也

卯杖　持統天皇三年正月天皇萬國に朝せしめて前殿にして上卯に當て大舍人寮より杖八十枝を奉らしむ

うづゑつきつまゝほしきはたまさかに
　きみがとぶひのわかなゝりけり

後拾遺歌也正月七日卯にあたりけるにけふはうづゑつきてやなんと通實（宗イ）朝臣のいへりければよめる

三日　舍衛國の兢伽河に三月三日その水をあみ河のほとりにして逍遙すれば諸罪を滅すと云へり見內典

からひとのふねをうかべてあそびける
　けふぞわがせてはなかづらせよ

萬葉第十五にあり曲水宴宋書曰自魏已後但用三日不復用巳也續齊諧記曰昔周公卜城洛邑因流水以汎羽觴故逸詩也云詩曰羽觴隨波流又秦昭王

三月上巳置酒河曲有金人自淵而出奉水心劔（叙イ）曰令君（若別イ）制有西夏乃（此イ）其處也因立爲曲水二漬相治皆爲盛集云々曲水にそひて盃を流すと云に此歌は舟に乘て遊びすとよめり春水云闕（イナシ）機詩學第三卷にも此文少出

雜春

いまさらにゆきふらめやはかげろひの
もゆるはるべとなりにしものを

萬十にありかげろひもゆとはかげろふの文字ひ文字にかよへるゆゑにひかれてもゆるとはよめるなるべし

のべみればやよひのつきのはつかまで
まだうらわかきさゐたづまかな

後撰（拾遺歟イ）第二にあり民部大夫藤原義孝歌也さゐたづまとはくさのなにはあらではるのわかくさをいふなり

あはづの丶すぐろのすゝきつのぐめば
ふゆたちなづむこまぞいばゆる

後拾遺第一にあり權僧正靜圓がよめる歌也すぐろのすゝきとは春の丶をやきたるにたてるをすゝきを云也此歌よめりけるときはかげのやうなるもの丶こゝしていはくわれは素性法師也しかるを此よみ玉へる歌いみじくこのもしく思ふすぢなればめづる心にたへでなむまうでたるとなむいひける

かすみはれみどりのそらものどけくて
あるかなきかにあそふいとゆふ

朗詠下にあり古詩云天外遊絲或有無と云り野馬也莊子曰野馬者遊（芰流）塵（茇疏イ）也成（支英疏イ）玄（黄）疏に細塵の馬のいきをえて（得）あがるなりと云々はるのひのうらゝかなるにみゆるが野馬のはしりあがるにもに（似）たり又絲のあそぶにもにたるなり

三月盡

こゝろうきとしにもあるかなはつかあまり
こゝぬかてふにはるのくれぬる

長能が四條大納言家にて三月盡の小月なる心をよめるなり大納言打きゝけるまゝに思ひあへず春は卅日やはあると許申れたりけるを聞て長能詞もはてゞやがていでにけり扨又の年やまひかぎりになりたりと聞てとぶらひつかはしたりければよろこびてうけ玉はりぬたゞし此やまひは去年三月盡日はる卅日や

はあると仰られしに心うき事かなとうけ玉りしがやまひになりて其後いかにもゝのゝたべられでかくまかりなりたると申て又の日うせにけり大納言ことの外になげかれたりとぞ

夏　つかさどるかみをつゝひめといふ

四月　この月に卯花さくによりて卯月と云

五月　この月にさなへをとりうふるによりてさなへ月と云

六月　この月にもろ〳〵のくさきのひにやけてつくるによりてみな月と云

更衣　仁明天皇承和三年紀朝臣乙魚授従四位下柏原天皇の更衣也委見日本紀更衣彼時よりはじまれりとみえたり

はなのいろにそめしたもとのをしければ
　ころもかへうきけふにもあるかな

拾遺抄第二にあり冷泉院東宮におはしましける時百首歌たてまつりけるに帯刀長源重之がよめるなり

けさかへるせみのはごろもきてみれば
　たもとになつはたつにぞありける

堀河院百首基俊作也蟬翼とは夏衣を云うすき心なり

神祭

さかきとるうづきになればかみやまの
　ならのはがしはもとつばもなし

後拾遺第三にあり曾丹歌也神山とはかものうしろなる山を云なりもとつばとはふるきはと云也故人をばもとつびとゝぞ萬葉集によめる

夏夜

わかくさのいもがきなれしなつごろも
　かさねもみえずあくるしのゝめ

玄々集能因作
玄々巻上にあり長能か歌也わかくさとは女を云なるべししのゝめとは凌晨とぞかきたる物理論曰夏は陽さかりにして陰おとろふるかゆゑに日長く夜短し云冬は陰さかりに陽衰ふるが故にひるみじかく夜ながし

なつのよはうらしまのこがはこなれや
　はかなくあけてくやしかるらむ

四條大納言和歌論議にあり委見疑開抄泊瀬朝倉はせあさくら宮也委見日本紀第十四雄略天皇廿二年秋七月に丹波國餘社の郡の管川人水江の浦島子舟に乗てつりす大なる龜を得たり便化してをとめとなる

てこにうらしまのこ婦とすあひしたしみて海に入ぬ蓬萊山に至りて仙衆歷覽語在二別卷一
又云元明天皇六年夏四月に丹波國五郡を割て始て丹後國をおけり委見二國史一天長二年己巳丹後國與謝郡の人水江浦島子この年松舟にのりて故鄕にいたれり爰閭邑なみに沒して人物ともにむかしにあらず山川あひうつり人居ふちとなれり于レ時浦島のこ四方にはしりて一族をとふらふにあへてしれるものなし但一の老嫗ありこれに問て曰なんぢいづれのさとの人ぞや又わが根元をしれりや老嫗答て曰われこのさとに生れて百有七年なりあへて君が事をしらずたゞわがおほぢの口傳に曰昔水江の浦に釣をこのむ人ありけりなを浦島の子といひけり海にあそびてかへらず其後いく百年と云事をしらず此事を聞て神女の所に歸んとするにあへてしることとなし神女をこひてかのあたへし所の玉匣をひらく處に紫の雲くしげのうちより立のぼりて西をさしてさりき但浦島子歸る時わかきわらはの如しはこをひらいて後老大すみやかにいたりて步行に堪ずなんありける彼雄略天皇廿二年よりこの淳和天皇天長二年に至るまで三百四十八年と云にかへりきたれり

納涼

まつかげのいはゐのみづをむすびあげて
なつなきとしとおもひけるかな

朗詠上にありいはゐとは石をつきたたみたるをいふなり

かはそひのやなぎのかげにすゞみして
たえずおとなふかざをきのこゑ

古歌也かざをきとはうそふきしてかせをまねくと云事なり無目籠の所にみえたり
春水云無目籠此抄第六籠部引日本紀委風招は嘯也とあり

氷室

仁德天皇六十二年五月に額田大中彥皇子鬪鷄に獦す時に皇子山の上より野の中を瞻に物有其形廬のごとし使をしてみせしむかへりて曰窟也因鬪鷄の稻置大山主を喚で此を問曰氷室也皇子曰其藏如何曰地を堀こと丈餘して草を以て其上に蓋敦茅荻を敷て氷をとりて其上に置夏の月を經て泮ず皇子則其氷を御所に奉る天皇これを歡これより季冬に氷を藏て春分に

氷を散也委見二日本紀一氷室はこれよりはじまれり

すべらぎのみてとのすゑしきゑせねば
いまもひむろにおものたつなり

堀河院百首俊頼歌也氷をばひのをものと云也

晩夏

ふじのねにふりおけるゆきはみなづきの
もちにきゆればそのよふりけり

萬葉第三にあり富士とは郡の名をとれるなり富士山は駿河國に有其高さはかるべからず峯のことくに起て天際にありたゞ人其のふもとをすぎて數日ありてかへりみればなほそのふもとにあり是神仙の遊萃する所也承和年中に山のみねより珠玉落來れり玉にちひさきあなありこれ仙簾の貫珠也又貞觀十一年十一月五日吏民ふるきによりて祭をす日の午なるに天よくはれたりあふぎて山のみねをみれば白衣の美女二人ありてならびまふ山のいたゞきに一尺餘土人ともにみゆ古老傳に神ます淺間大神となづくいたゞきの上に平地一許里中央のはかにして體こしきをかしくがごとしこしきのそこに神池あり池の中に大石あり石體あやしくしてうすづくまれる虎の如し其こしきの中につねに氣あり其色鈍青也そこをみれは湯のごとくにわきあがる遠くしてのぞめばつねに煙火の如し其いたゞきの上に池をめぐりて生竹青餌柔濡せり宿雪春夏きえず山のこしよりしも腹のもとにとゞまつて達することをえずこれ白砂の流下る故也相傳昔役居士そのいたゞきにのぼることとえたり其後のぼるものなし腹の下より大河ながれたり山の東のふもとに小山あり土俗これを新山と云ふ本は平地なり延暦廿一年三月雲霧ひやくやくして十月ののち成レ山これ神造也委見二都良香富士山記一ふじのねは夏もゆきありとみえたり已下本のまゝ

にしへだになつのゆきせばしたひつゝ
やがてこひしきあきはきてまし

六帖第一にあり此歌の心は秋は西よりきたると云によりてよめるなり本文西高といへり　又迎二秋於西郊二云々

荒和祓

さはへなすあらふるかみもをしなへて
けふはなてしのはらへなりけり

拾遺抄の第二にあり藤原長能歌也昔天照太神皇孫の葦原の中國の主とせんとす而彼地に多螢火光神及蠅聲邪神あり又草木こと〴〵くよくものいふかるかゆへに八十諸神をつどへて問てのたまはく葦原の中國の邪鬼を撥平しめむにたれかえけむねがはくは儞諸神なかくゝましそみなまうさく天穗日命これ神の傑也又云葦原の中國は磐の根木の株草葉売などよくものいふ夜は若煙火して喧響晝如五月蠅して沸騰委見日本紀第二卷

七月　この月の七日もろ〳〵の文をさらすによりてふ◦月と云

秋　つかさとるかみをたつたひめといふ

八月　この月によものくさきのはのいろつきおつるによりて八月と云

九月　この月よのながきによりてながつきと云

早秋

あさまだきたもとにかぜのすゞしきは
　　はとふくあきになりやしぬらむ

堀河院百首に顯季卿詠歌也はとふくあきとは立秋の日よりはとなくなりふくとはなくといふなり古歌に

いはく

みやまいでゝはとふくあきのゆふぐれは
　　しばしとせとをいはぬはかりぞ

諺にはとふいたりと云はすさまじきこゝろなり

あきたちていくかもあらねどこのねぬる
　　あさけのかぜはたもとすゞしも

萬七にありあさけとは朝開とかけりあさあけといへるなり

をなじえをわきてこのはのいろつくは
　　にしこそあきのはじめなりけれ

古今第五にあり貞観の御時綾綺殿のまへに梅の木あり西のかたにさせるゑだのもみぢはじめたりけるを藤の勝臣がよめるなり

七夕

たなばたのそでつぐよるのあきつきは
　　かはせのたづはなかすしもあらむ

萬八にありそでつぐとは袖續とかけりされば二星のあひちかづく心なりそてつぐばかりといふうたありそのこゝろかはりたり

やちとせのかみのみよよりともしづま
　ひとしりにけりつげてしおもへば
萬十にありやちとせとは八千歳とかけりそのかみと
さしたることとみえずたゞひさしき心をよめるなりと
もしづまとは乏嬬とかけりあふことすくなきつまと
いふなりつげてしとは告てといふなり
あまのがはこぞのわたりのうつろへば
　かはせふむまによぞたけにける
同にありわたりうつろふとよめり
あきかぜのふきたゞよはすしらくもは
　たなばたつめのあまつひれかも
同にありあまつひれとは天津領巾とかけりひれとは
女のきものに裙帶領巾といふものあり
あきかぜにかはなみたちぬしばらくも
　やそのふなつにみふねとゞめよ
同にありやそのふなつとは八十舟津とかけり
あまのがはやそせよりあへりひこぼしの
　ときまつふねはいまでぎくらし
同にありやそせとは八十瀬とかけりよりあへりとは
時まつ舟のわたればせもよりあふやうになむみゆる
とよめるなるべし
あまのかはやすのがはらのさだまりて
　こゝろくらべはときまたなくに
萬葉第十にありやすのがはらとはやせと云也あまの
がはにあり天照太神のかくれゐましたりしときやほ
よろづよのかみたちのつどひて大神をおの／＼いの
りいだし奉らんとはかりてことせしめ玉ひし所なり委
見二鹿部一これ古人まどへりけることなり
　わがこほるにほへるいもゝこよひかも
　あまのがはらにいそまくらまく
同第十にありいそまくらとよめりまくとはまうけと
ぞ人はいふなれどたまくらまくとあまたいふなれば
八巻とぞいはれたる
　あひみまくあきたらずともいなのめの
　あけはてにけりふなでせむつま
六帖第一にあり人丸歌也いなのめとは曉を云也しの
ゝめおなじ事也
　あまのがはとだえもせなむかさゝぎの
　はしもわたさでたゞわたりなむ

後撰第五にあり鵲橋とは李嶠詩橋扁烏鵲河可渡といへり又鵲橋愁ラクハ隨織女歸ルコヲと作れり註を可引勘也

十五夜

水のおもにてるつきなみをかぞふれば
こよひぞあきのもなかなりける

拾遺第三にあり源順歌也もなかとよめるを時の人和歌のことはとおぼえずと難じけるを歌がらのよければえらみにいれり釋名云望は月のみてる名也日月のはるかに相望かゆゑにそのかたちのかけぬなり日のちかきかたのかくるなり

なにはかたしほみちくればやまのはに
いつる月さへみちにけるかな

六帖第一にあり月の水にしたがひて十五日にはしはもたかくみつなり

抱朴子曰月の精生ッ水是八月盛ニ而濤潮大云々

駒迎

あふさかのせきのいはかどふみならし
やまたちいづるきりはらのこま

拾遺第三にあり大貳高遠が少將にはべりける時よめるなりきりはらはむさし武藏のくにのむまきの名なりてのふみならしてそふみならし馴しか又ふみならし鳴しかふたやうにてこゝろえがたけれ

あふさかのせきのしみづにかげみえて
いまやひくらむもちづきのこま

同にあり延喜御時月次屏風歌也貫之作也もちつきは信濃國の牧の名也

九日

なかつきのこゝぬかのひのもゝしきの
やそうぢびとのわかゆといふきく

六帖第一にありもゝしきとは内裏を云也やそうぢびと八十氏人とは伴人也わかゆとはとしつみておいずいのちながきなり

九月盡

かぜのおとはかぎりとあきやせめつらむ
ふきくるごとにこゑのわびしき

後撰第七にあり讀人不知

冬

十月　つかさどるかみを。つたひめと云すによりて神無月といふ　この月よろづのかみたち出雲國へおはしま

十一月　この月にしもいたくさゆるによりてしも

月と云

十二月　この月に山寺の師のいのりの巻數を檀越のもとへやるとてはしりあへるによりてしはすといふ

初冬

かみなづきしぐれのつねかわがせこが
　やどのもみぢのちるべきもみむ

萬十九にあり神無月のことかみにみえたりしぐれのつねかとは神無月にしぐれつねにすと云なり

あしのはにかくれてすみしわかやとの
　こやもあらはにふゆはきにけり

重之歌也こやもあらはにとはあしのは冬がれてあらはにみゆと云なり

しはすにはあはゆきふるとしらぬかも
　むめのはなさくつぼめらずとも（のふすイ）

萬八にありしはす見上この歌別にうたがひなし

冬夜

やまさとはよごとさえつゝ（へイ）あけにけり
　とかたそかねのおとのすなるは

山家冬夜と云心を經信卿の讀也いづかたぞと云べきをとかたぞとよめるいかに

佛名

あらたまのとしもつくればつくりけむ
　つみものこらずなりやしぬらむ

朗詠集にありつみものこらずとは佛名懺悔の心なり

歳暮

つきよめばいまだふゆなりしかすがに
　かすみたなびくはるたちぬとか

萬葉集にあり月よめばとは月なみをかぞふればと云なりしかすがとはしかはあれどゝいふことにや

本

元久三年四月十六日於長尾房以證本令校合畢

以書本一校…………

和歌童蒙抄第三

地部

土　國　山　嶺　嵩　谷　杣
坂　林　杜　野　原　田　澤
關　道　石　水　氷　波　河
堰　瀧　池　沼　瀞　海　江
浦　嶋　濱付墟霞　洲　瀉　湊
津　礒　埼　岸

地儀の部

土

おほつちもとればつくてふよのなかに
　　つきせぬものはこひにぞありける

萬葉十一にありおほつちもとは大地といふなりよく
ひろくてきはめなきによりてつきせぬことにたとへたり

しろたへのみづのはにふのいろにいでゝ
　　いはすてのみぞ我こふらくは

同十一にありはにふとは黄土とかけり

國

とよくにのかゞみのやまにいはとたて
　　かくれにけらしまてどきまさず

萬葉集第三にありとよくにとはやまとしまねの名歟
日本紀にとよあしはらのみづほのくにといへり又豊
前豊後の國を云歟

いなといはむてとをもしひしきしまの
　　やまとのくにの人やたえたる

磯城イ
礒城島は大和の名也磯城郡

たまがきのうちをさまれるよのなかは
　　つきひのかげものどけかりけり

古歌也日本紀第三神武天皇卅三云々昔伊弉諾尊目ニ
此國一曰ニ日本一者浦安國細戈千足國磯輪上秀眞國復
大己貴大神目レ之曰ニ玉墻内國一云々

山

あしびきのやまべはゆかじしらかしの
　えだもたはゝにゆきのふれゝば

此歌素盞烏尊の詠也といへり但日本紀に不見あしびきとはむかしあめ地さきわかれて涅濫いまたかはかず仍山にすみてゆきかへるあとおほし故に此國のはじめ名をやまとゝなづけたるなり言はやまのあとゝいふなり委見二日本紀問答抄一されば山のつちかはかずしてあしをひく義によりてあし引の山とは云歟又波羅捺國に一角仙人と云仙人あり額に一の角おひてかせきのあしあり四無量を修して五神通を得たり雨ふりて山のみちあれたふれてあしをそこなへり委見二智度論第十七一さて足をひきしによりてもいへる歟

　とふさたてあしがらやまにふなきこり
　　きみかへりぬとあたらふなきを

萬葉第三にありとふさたてとはたつきたてといへることばなり きにきりかへつと拾穗抄にありきみかへりぬにてはきこえず

　いにしへのひとをはしらすわれみても
　　ひさしくなりぬあまのかごやま

萬七にありあまのかご山とはあまりにたかくてそらのかのかゝへくるによりていふと日本紀に見えたり

　おほなむちちひさみかみのつくりたる
　　いもせのやまをみるかなつくも

萬七にあり大穴道小御神とかけり此神のつくり給へる山とみえたり此山紀の國にあり

　せの山にたゞにかへれるいもの山
　　ことたへしやもうちはしわたす

同にありせの山いもの山あひならべるなるべし

　すはにあるいはくに山をこえむひは
　　たむけよくせよあらきその山

萬にありすはにあるとは周防にあるといへるなりいはくに山かの國にあり

　とおつひとまつらさよひめつまこひに
　　ひれふりしよりおへるやまのな

萬五にありそでがきにいはく大伴佐提比古郎子時被二朝命一奉レ使二漢國一妾松浦佐用濱面このわかれのやすきことをなげきかのあふことのかたきことをな

げきてたかき山の峯にのぼりてはるかにわかれさる舟をのぞむにきもたえたましひきえぬつひに領巾をぬいてさしまねく此故に此山をひれふるみねと云なり肥前國風土記曰昔武小廣國押楯天皇之世大伴狹手彦連任那の國をしづめかねて百濟國をすくはんがためみことのりをうけたまはりて此むらに至りつきぬすなはち篠原村第四姫子を娉しつ其かたち人にすぐれたりわかれ去日鏡をとりて婦にあたふ婦別の悲をいだきてくりかはをわたるあたふる所のかゞみをえていだきて川にしづみぬこゝを鏡の渡りといふ狹手彦連ふねを出してさる時第四姫子こゝにのぼりて袖をもちてふりまねく此故に袖ふる峯と云と云々此狹手彦連事すこしかれてこれたかひたり。

又筑前國風土記うちあけ濱の處に云く狹手彦連舟にのりて海にとゞまりてわたることをえがたし爰石勝推ていはく此舟のゆかざることは海神の心也そのかみはなはだ狹手彦連かゐてゆく處の妾宇那古若をしたふこれをとゞめばわたるべし于時彦連妾とあひなげく皇命をかゝむ事をおそれてうつくしひをたちても上にのせてなみにはなちうかふと云々これは又こと妾をあひともなひてうみをわたりけるとみえたり

　いはたゝみけはしきやまとしりつゝも
　　われはこふるかともならなくに

萬七にあり磐疊とかけりいはほかさなりてけはしと云なり

　いはねふみかさなるやまにあらねども
　　あはぬひあまたこひわたるかも

萬十一にあり　石根踏とかけり

　まゆのごとくもゐにみゆるあはのやま
　　かけてこぐふねとまりしらずも

萬六にありまゆのごとゝはあをきまゆずみのやうにてほそくてはるかにみゆるなりもろこしならぬくににもむかしの女ははなしてうす／＼とぞまゆをつくりけるされはそれににたるとよめるなり

　いはがねのこりしくやまにいりそめて
　　やまなつかしみいでかてにかも

萬七にありいはがねとは石金とかけりものふたつな

りこりしくとは凝敷なり

みよしののきさやまぎはのこずゑには
こゝだもさはぐ鳥の聲かな

萬葉第六にありきさやまとはちかき山と云也こゝたもとはそこはくと云也

しらつゆはむへしなりけりみつとりの
あをばの山のいろつくみれは

同第八にありあをば山は若狹國にありされど此歌はそこともさゝずたゞ青山とよめるなり

みこしぢのゆきふる山をこえんひは
とまれるわれをかけてしのばせ

同第九にあり三越地とは越前越中越後をみこしぢと云なりされはかの國のみちをばみこしぢと云べきか

ならやまのこのてかしはのふたおもて
とにもかくにもねぢけびとども

萬第十六にありなら山とは崇神天皇十年秋七月丙戌朔巳言武埴安彦與二妻吾田姫一謀反逆として師を興して忽に至て各道を分て夫は山背より婦は大坂より入て帝京を襲とすときに天皇五十狹芹彦命を遣して吾田媛の師を擊即大坂に遮て吾田媛を殺て悉に其軍を斬つ後大彦與彦國葺をつかはして山背に向て埴安彦を擊つ爰忌瓮をもて和珥を武鐰坂の上に鎮座て則精兵を率て追て那羅山に登て軍たつ時官軍屯聚て草木を蹈跡因て其山を那羅山と云也委見二日本紀第五一爰に忌瓮を以和珥を武鐰坂の上に鎮座と云り此忌瓮はあをじなりされはあをじよきならとはいふ也あをきとは訛也

まがねふくきびのなかやまおびにせる
ほそたにがはのをとのさやけさ

古今第廿にありまがねふくとはくろがねをふきわかすを云也鐵をかの山にとる也きびの中山は備中備後の中にある也その山のこしにほそく谷川はながれたればおびにせるとよめり

かひがねをさやにもみしかけゝれなく
よこほりふせるさやのなかやま

同にありかひがねとはかひの國の山を云さやにもみしかとはさやにみてしがなと云也けゝれなくとは心なくと云也よこほりふせるとはよつの郡にふせると

そふるくは申ためれともよこほりふせるとぞ云べき貫之が土佐日記によこをれる山ありはやゝまさきなりけりとみるもみやこへきにけるとおもふあはれなりとあけるにてこゝろへられればべるそまたくやるとはふせると云ことばなりするがの國の風俗なり

さゞなみやひらのやまかせうみふけば
つりするあまのそでかへるみゆ

萬葉第九にありさゞなみとは昔天智天皇の御時王城は近江國大津の宮にありき寺をたて給はん所を祈願し給ふよるの御夢に法師きたりていはくこれよりはいぬゐの方にすぐれたる地ありとく出てみ給へ夢さめて出てみ給ふにひのひかりあきらかにそひけり即使を遣はして尋給ふに使歸て奏すらく日の光の處に小さき山寺あり又一人優婆塞ありてめぐりをこなふとへともこたへず其かたちあやしくよの人ににず帝悦給ひて其所にみゆきし給ふ優婆塞出てむかひ奉る帝問給に答申す古仙の靈窟伏藏の地佐々名實長等山と申て失ぬあくる甲辰年正月に始て寺を造り給とてつちを引山をきるに實鉢をえたり又白きはしありよる光を放ちつ帝いよ〳〵つゝしみ給ひて堂を造り佛をあらはしますみかどの左無名指を切て石のはこに入て燈機のつちのもとにほりおき給ひつゝ參議兼兵部卿正四位下橘朝臣奈良麿天平勝寶八年二月五日はじめて法會を此寺につたへてをこなふそれより今にいたるまで橘氏人まゐりてをこなはしむ委見二志賀緣起一

さゞなみのおほやまもりはたがために
やまにしめゆふきみもあらなくに

同第四にありさゞなみのこと神功皇后の御時にもあり凡近江國名とみえたり委見二坂部一

みわのやまいかにまちみんとしふとも
たづぬる人もあらじとおもへば

これはいせが枇杷のおとゞにわすられておやの大和守つきかげがもとにまかるとてよめるなりみわの山を尋ぬと云る事は昔大和國に女あり男よる〳〵きつつひるみえず女かたちをみぬことをうらみければいとことはり也わがかたちをおそれなんてとを思也といひければそのかたちみにくゝともねがはくはみえ

給へと云さらばそのみくしげのうちにおらむひとり
あけてみよと云て歸りぬいつしかみるにちひさきくち
なはわだかまりてありをどろきてふたをおほひつそ
の夜又來りて驚き思へることはり又來らんことをは
ぢなきて別れ去ぬ女うとましながらてひしからんこ
とを思ひてをの卷あつめたるをありぎぬのしりにさ
しつ夜あけてそのををしるしにてたづねゆきみれば
みわの明神の御ほこらのうちにいれりそのおの殘り
みわげ殘れりければみわの山と云と○○○

嶺

つくばねのそかひにみゆるあしほやま
あしかるとかもさねみえなくに

萬葉十四にありつくはねとはみねを云か又おほかた
の山の名なりとも云なるべしそかひとはすちかへと
云なりあ○かるとは南山の妻不レ褰といへる本文也
さねとはまことにと云ふなり

つくはねのこのもかのもにかげはあれど
きみがみかげにますかげはなし

古今廿にありひたち歌也つくは山と云山のかの國に
あるなりされはかくよめるか此歌にはたゞみねのな
とはみえず或人云つくは山は八面ありされはこのも
かのもとはこのおもてかのおもてと云ふなり

嵩

あなじがはなみたちぬらしまきもくの
ゆづきがだけにくもたてるらん

萬葉第七にありみな同所の名ともなりやまとにあり

岳

あきかぜのひことにふけばみつくきの
をかのくずはもいろづきにけり

萬葉十にあり

谷

あさかやまかすみのたにのかげくもり
わがものおもひはるゝよもなし

六帖第二にありあさか山はみちの國にあり霞谷と云
へり

杣

あられふるたかみの山にみやぎひく
たみよりもげにものをこそおもへ

萬葉三にありたかみの山は近江國にあり宮材引とかけり此山いみじくさかしされはかくよめるか
きみかゆきけながくなりぬやまたづの
むかへにゆかんまちにはまたし
同第二にありやまたつとはそま人を云やまだちと云ふことばなり
まきばしらつくるうま人いさゝめに
かりほのためとつくりけんかも
同第七にありいさゝめとはかりそめと云歟
坂
あじがらのみさかかしこみくもりよの
あやしたはへをこちてつるかも
萬第十四にありかしこみとはみちのあしきをいふ
ひなくもりうすゐのさかをこえしたに
いもがこひしきささそすられぬかも
同廿にありうすひの事見二女部一
あふさかのあらしのかせはさむけれど
ゆくへしらねばわひつゝぞふる
古今第十八にありあふさかとは神功皇后元年武内宿禰三軍に令していはく各儲弦を髮のなかにかくし木刀を佩既而皇后の命をのたまひ擧て忍熊王を誘て曰吾は天下を貪んことな。れば唯幼王を懷て君王に從となり豈距戰ことあらんや願は共に弦を絶共に兵をすてゝ與に連和然則君王天業を登て席を安じ枕を高して專萬機しまさむ則軍中に令して悉に弦を斷刀を解て河水に投忍熊王其誘言を信て悉衆に令て兵を解て河水に投じて弦を斷爰武内宿禰三軍に令して儲弦を出して更に張眞刀を佩て河を度て進忍熊王欺れぬることを知て稍々退武内宿禰追ふ適逢坂に遇て破るの故號二逢坂一也軍衆走て狹々浪の栗林に及て多に斬血流て栗林に溢故是事を惡て今に至て栗林菓を御所に不レ進忍熊王逃て入所なし則五十狹茅ノ宿禰をめして歌曰いさあぎいさちすくねたまきはるうちのあそがりふつちのいたてをはずはにはとりのかづきせな
則共に瀬田の濟に沈て死于レ時武内宿禰歌曰
あふみの。せたのわたりにかづく.とり

めにしみえねばいきとほろしも

於是其屍を探とも得ずして數日を經て菟道川に出たり武內宿禰又歌曰

あふみの○せたのわたりにかづくとり
たなかみすきてうちにとらへつ　委ハ見ニ日本紀第九一

林

たきゝつきゆきふりしけるとりべのは
つるのはやしのこゝちこそすれ

後拾遺第十にあり入道前太政大臣のさうそうのあした雪ふりはべりければ忠命法橋のよめるなり鶴の林とは昔釋迦如來の入滅し給時沙羅林の花葉いろしろくなれり仍鶴林と云委見ニ止觀一

杜

ものゝふのいはせのもりのほとゝぎす
いましもなかなんやまのとかげに

萬第八にありいはせのもりは大和にあり又津國やし信濃なのにもあり山のとかげとは常頭とかけり又跡陰と書てふもとゝも又とかげともよめればふもとの心にや

いかにせんうさかのもりにみをすれば
きみがしもとのかずならぬみは

うさかのもりは越中國にありそのかみのまつりの日ねぎのゝと申時にとしのうちに女の男したる男の女したるかずを申さする也拟すはへを持ちて女のしりをうつされはしゅうちのまつりとなん云ひつたへたる又みをすればとは神にものをまゐらするをいふ進食と書り委ハ見ニ日本紀第七一

なげきのみしげくなりゆくわがみかな
きみにあはでのもりにやあるらむ

康平三年三月十九日高倉一宮の國々の名所をあはせさせ給けるにさがみがよめるなりあはでの杜はおはりにありむかしめおとにあひみむとてたがひにゆきしにかのもりにゆきつきてあひもみでしにきこれによりて名づけたりその國をおはりの國と云終とかけり尾張とは訛也

野

くれなゐのあさはののらにかるくさの
つかのあひだもわれわすれすな

萬葉第十一にありのらとはくさを云かとおもふにてれはのらに草かるといへれば野はらなどを云と見えたりあさはのにたつみわてすけと云歌ありさればあさはのと云ふ野のあるなりくれなゐのと云こととはいろなればあさしといはむとてすゑたるにやあらん

はるなればもずのくさぐきみえずとも
われはみやらむきみがあたりを

六帖第六にありもずのとはやましろのくにゝある野を云也くさぐきとはくさのくきと云也又はもすのくさくきとはかすみを云也とも可レ尋也

原

なはたのめしめじがはらのさしもぐさ
わがよのなかにあらんかぎりは

しめじのはらとはそことさしたる所なしたゞしめたるのと云なるべし又の説にしめしの原と云しめぢとはしもつふさの國にしめつの原と云所ありその原にさしもぐさおほくおひたりさればしめづしめをしめしといふかつとちとは同事也又云さしもぐさとはよもぎを云又よもぎに似たる草とも云又云しめじのとは夏の一名也されば夏の原といふべきなりと云々

田

おほくらのいりえなるなりいめひとの
ふしみがたゐにかりわたるらん

萬葉第九にあり

すみよしのきしをたにはりまきしいねの
しかもかるまであはぬきみかな

同十二にあり

あきのたのほだのかりはかかよりかはゞ
そこもかいとのわがことなさむ

萬葉四にありかりはとはさかりかといふなり

あきたかるかりはもいまだてをたねば
かりかねさむしゝもをかぬに

萬葉八にありかりはとはかりのいほと云也

つくはねのすそはのたゐにあきたかる
いもがりやらむもみちたをゝるな

同九にありつくはねのすそはのたゐとはやまのすそめくりのたとよめる也

あきのたのかりほのいほのとまをあらみ
わがころもではつゆにぬれつゝ
天智天皇御製也後撰第六にありいほのとまとよめり
いそのかみふるのわさだはひでずとも
つなだにはへよもりつゝをらむ
萬葉第七にあり不レ秀とも〳〵はよからずともいふべきにや
わがまけるわさだのほだちつくりたる
ほくみをみつゝしのべわがせこ
同第八にありほぐみとよめり
あしびきのやまのふもとになくしかの
こゑきかんやはやまだもるすご
萬葉十にありふもと〳〵は跡陰とかけり山田もるすごとはいほにひとりをる人を云也
あしびきのやまだつくるこひですとも
つなだにはへよもるとしりかね
同にありやまだつくることとよめり
たゝならず五百代小田をかりみたり
いほにしをればみやこおほゝゆ

萬葉第八にあり
いくしたてみわすゑまつるかもぬしの
くすのたまかけしればともしも
ゐなかに田つくるをりにくにの神を〳〵まつるとて幣を五十はさみて田のくろにたてまつるさけをそのれうにきよくつくる也其酒をみわと云うすのたまかけとはまめをつらぬきてうすのやうにしてかざりにするとぞ

澤

さぬらくはたまのをばかりて○らくは
ふしのたかねのなるさはのごと
萬葉第十四にありなるさはとはふしの山の上にありつねにながれてをとたえせぬなりさぬらくとはすてしぬることはたまのをばかりにてこふることはなるさはのごとにたえずとよめるなり
釋名曰下有レ水曰レ澤言潤澤也風俗通曰水草交曰レ澤言潤二萬物一以阜二氏用一
きみがためやまたのそふにゑてつむと

ゆきけのみづにもすそぬらしつ

萬葉十にありそふとはさはと云也そとさとふとは通ふこゑなり又ゑくとは人のくふ草也又ゑくとかけるところをせりとよめりされぱゑくとせりとはひとつのなとみえたり

關

もの丶ふのいづさいるさにしほりぬる
とや〳〵とりのふや〳〵のせき

古歌也もの丶ふとはたけきものを云也みちのくにいては國の中にゆきかよふ山ありつねに人もありかずしてこしげししかるをしほりうちしつ丶たとりつ丶ありくされぱとや〳〵とりはとや〳〵とほりと云也ふや〳〵のせきとはその山のみちのくちの出羽國のかたにある關を云也ほや〳〵もおなじ事也又もやもやのせきとも云りこれは日本紀第七不便とよめりさればそことさ丶ずたよりならずと丶こはる處を云るとおぼえたり又しをりとは歸らむ道のしるしに木の枝を折かけて行也しるしにをると云事也

道

にゐばりのいまつくるみちさやけくぞ
きこえけるかもいもがうへのこと

萬葉第十二にありにゐばりとは新治とかけりあたらしくつくると云也

石

たのみつ丶きがたきひとをまつほどは
いしにわがみぞなりはてぬべき

しら丶のものがたりの第二にありしら丶のひめきみおとこの少將のむかへにてむとちぎりてをそかりしをまつとてよめるなり石になりぬとよめるは幽明錄に昔貞婦ありきおつと軍にしたがひてとをくゆく婦をさなきこをして武昌の北山までをくる夫の行をのぞみてたてりをつとかへらずなりぬ婦立ながらしぬ化して石になりぬかたちひとのたてるかごとしそののちその山を望夫山と云ふその石を望夫石と云云々望夫石世說曰武昌北山上有云々狀若レ人古老傳云昔有二貞婦一其夫從レ役遠越二國疆一婦携二弱子一餞送此上立而爲レ石

いざやさみこさのむらなるいはにゐて
　　ながゝらんよのことをちかはん
古歌也日本紀神功皇后卅九年云々千熊長彥至百濟
國登辟支山盟之後登古沙山共居磐三百濟王盟
曰若敷草爲坐恐見火燒且取木爲坐恐爲
水流故居石盟者示長遠不朽者也云々
　春水云是の下和玉の古事にてよめる歟
きみだにもわれになげゝばをしむらも
　　かゝやくたまにおとりしもせじ
古歌也日本紀に石礫をそしむらとよめり

水

いにしへののなかのしみづぬるけれど
　　もとのこゝろをしるひとぞくむ
古今第七にありのなかのしみづ河內國にあり又はり
まの國にもあり云々みづとは妙清水とぞ本文にはか
きたる

氷

いはまにはこほりのくさびうちてげり
　　たまゐしみつもいまはもりこず
後撰第六にあり題不知とかけり曾丹が歌也
ますらおのもふしつかふなふしづけし
　　かひやかしたはもみぢしにけり
堀川院百首に春宮大夫の歌也もぶしつかぶなとは鮒
の歌に見たりふしづけとは河のよとみにしばをきり
つけていをのいれるをとるを云也かひやのことは蝦
の歌にみえたり
あしろきにもみぢこきませよるひをは
　　にしきをあらふこゝちこそすれ
後拾遺第六にあり少納言橘義通がよめる也錦を洗と
云事紅葉歌にみえたり

波

あふさかをうちいでゝみればあをうみの
　　しらゆふはなになみたちわたる
萬葉十三にありしらゆふ花になみたちわたるとよめ
り
わたつみのかさみにさせるしろたへの
　　なみもてゆへるあわぢしまやま

古今十七にあり
あしびきのやましたゝぎついさなみの
こゝろくだけてひとぞこひしき
六帖四にありいざなみと云へり
ちどりなくさほのかはらのさゞらなみ
やむときもなしわがこふらくは
同六にありさゞらなみとよめり
河付柵
はつせがはしらゆふはなにおちたぎつ
かはせきよしとみにこしわれを
萬葉第七にあり白木綿花のやうにおちたぎつなり
このかはのみなはさかまにゆくみづの
ことはかはらじおもひそめてき
同十一にありみなはさかまにとは水のあはさかまき
と云なり
いぬがみのとこのやまなるいさやがは
いさとこたえてわがなもらすな
萬葉第七にあり
古今第十三にありとこのやまいさやかは近江にあり

もがみかはのぼればくだるいなぶねの
いなにはあらずこの月はかりぞ
古今廿にありこのかは出羽國のたちのまへに流れた
りそれよりこほり〳〵のいねをふねにつみてのぼる
にかははやくしてのぼりてはくだり〳〵してつゐに
のぼりぬされはかくよめり又云かはのはやくてのぼ
るふねのかしらをふるをいなぶねと云ふなりと云々
みわがはのきよきながれにすゝがれし
わがなをさらにまたやけがさむ
朗詠下にあり玄賓がやまとの國のみわと云處にこも
りゐたりけるをみかどのめしければよみて奉れる歌
也かのみわがはによせて三輪清淨のこゝろをよめる
なり
みかのはらわきてながるゝいづみがは
いづみときけばきみかこひしさ
六帖第三にありいづみがはとは崇神天皇の官軍更那
羅山を避て進て輪韓川に至て武埴安彦河を挾て屯
各相挑故に時の人其河を改て挑川と云今泉河と云は
訛也委見日本紀第五

わがやどのいさらをがはのましみづに
　　ましてぞおもふきみひとりをば
同第五にありいさらをがはとはやりみづなどのあさやかにてながるゝを云也まし水とはよく出るを云妙美水とぞかける又云大和國に率川と云所ありされどもこの歌はやりみつと見えたり

柵

をほさがはてゝろしがらみかみしもに
　　ちどりしばなくよぞふけにける
六帖第三にあり心しがらみとよめり
わがそではつゆぞをくなるあまのかは
　　くものしがらみなみやこすらむ
後撰第六にあり題讀人不知とかけり

瀧

やまたかみしらゆふはなにをちたきつ
　　たきのかうちはみれどあかぬかも
萬葉第六にありかうちとは○○のうちと云也
みな人のいのちもわれもみよしのゝ
　　たきのとこはのつねあらむかも

同巻にありとこはのとはとこのいはと云也

池

みづとりのかものすむいけのしたひなく
　　ゆかしききみをけふみつるかも
萬葉第十一にありしたひなくとはいけのしりへにしたに樋をわたして水をとほすなりされればおもひやるかたもなきによせてよめるなるべし

沼

おく山のいはかきぬまのみごもりに
　　こひやわたらむあふよしもなみ
同十一にありみごもりとはみづかくれと云也水籠とかけり
かくれぬのしたにこふればあきたらず
　　ひとにかたりついむべきものを
同にありかくれぬとはうへは草なとしげれるぬまを云ふなり
みちのくのあさかのぬまのはながつみ
　　かつみる人にてひやわたらむ
古今戀第四にあり花がつみとはてもの花を云ふこも

をかつみと云也

淵

玉蜻のいはがきぶちのかくれには
　　ふしてしぬともわかなはいはじ

萬葉第十にありいはがきぶちとよめり

かみなびのうちまふさきのいはぶちに
　　かくれてのみやわがこひをらん

六帖第五にあり

潮

これやこのなにあふなるとのうづしほに
　　たまもかるてふあまをとめとも

萬葉第十五にありうづしほとはしほのうづまきたるを云ふあまをとめはあまのこのまだをとこもたぬなり未通女とかけり

しほになばまたもわれこむいさゆかん
　　おきつしほさゐたかくたちきぬ

同にありしほさゐとはしほのさしあふなみを云也

海

、けひのうみのにはゝよくあらじかりこもの
　　みだれてみゆるあまのつりぶね

萬葉三にありけひのうみとは日本紀曰御間城天皇世額有角人乘一舟泊于越國笥飯浦故其處曰都怒餓

なにたかきたかつのうみのおきつなみ
　　ちへにかくれぬやまとしまねは

萬葉三にありたかつのうみとはなんばのうみを云也やまとしまねとは日本をすべたる名也

をく○うみのしほのひかたのかたおもひに
　　おもひやゆかんみちのながてに

同四にありおくうみとはみちのくにの海とよめる也みちの國をばをくと云也

うなばらをやそしまがくりきぬれども
　　ならのみや○はわすれかねつも

同十五にありうなばらとは海を云也やそしまとは八十島と云をこれはたゞあまたのしまと云へる心也八をかずのかぎりにする心也がくりとはかくれといふなりれ○りとは同こゝろなればなり

むこのうみのにはよくあらしいさりする
　あまのつりぶねなみのうへにみゆ
同巻にありむこ（武庫）のうみとはつのくにゝあり
ふせのうみのをきつしらなみありかよひ
　いやとしのはにみつゝしのばむ
同十七にあり

江

はりえよりあさしほみちてよるこづみ
　かひにありせばつとにせましを
萬葉廿にありはりえとはつのくにのよしのかはのは
りえなりこづみ（木屑）とはきのくづのよりたるなりはりえ
のこと見二五節部一

浦

おはぶねのつもりのうらにつけんとは
　まさしにしりてつかふたりねし
萬葉第二にありつもり（津守）のうらはつのくにのすみよし
にあり
おきつなみへなみのきよるさだのうらの
　このさだすぎてのちこひんかも
同十一にありへ（邊）なみとははとりのなみと云ふなり
むらさきのなだかのうらのなびきもの
　こゝろはいもによりにしものを
同にあり
むごのうらのいりえのすどりはぐゝもる
　きみをはなしてこひにしぬべし
同十五にありむごのうらはつのくにゝありすとりと
はすにたてる鳥とよめり
しろたへのふぢえのうらにいさりする
　あまとやみらんたびゆくわれを
同巻にあり

島

おきつどりかもつくしまにわがいねし
　いもはわすれじよのことごとに
日本紀第二にあり天御神の孫の兒彦波激武鵜萱葺不
合尊を海童の女豐玉姫うみ給ひてのちうみをわた
りてさり給ひき仍天御孫かの歌を詠じて豐玉姫のを
とゝ玉依姫につげてやり給ひつそのゝち乳母をとり

てやしなひ給ふこのよの人のめのとをとりてこをやしなふはこれによりて也其時わたつみのみむすめこのみこの端正をきゝて弟たまよりひめをつかはしてやしなひまつるこの玉依姫につけてこのうたのかへしをたてまつり給へるにいはくあかたまのひかりはありとひとはいへどきみがよそひしたふとくありけりとなんありけるおほよそこの贈答二首は擧歌と名付けたり古今序に天神の孫海童の女と云へるこれなり委見日本紀

あはしまにこぎわたらんとおもへども
　あかしのとなみまださはぎけり

萬葉第七にありあはしまとは阿波を云となみとはあかしのせどのなみと云り

ことしゆくにゐしまもりのあさころも
　かたのまよひはたれかとりみん

同にありにゐしまもりとはあたらしきしまもりと云ふなり

わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと
　ひとにはつげよあまのつりぶね

古今九にあり小野篁卿の刑部太輔なりけるときもろこしのつかひにつかはす時おほづかひのふねとあらそひたりとて隠岐國にながしつかはすときに舟にのりてさしいづとてよめるなりわたの原とは海の名也やそしまとはおほくのしまと云也出羽國に八十島と云ふ島はあれどもそれはかなはず凡もろもろのかずはやつをはじめとするなりいはゆる九九八十一也これを算術のつもりのはじめのきはめにせりされぱしもやたびをけどもちらぬさかきばのともやしほのころもかやうにいひならはしたるなり

濱付鹽竈

しはひればたまもかりをさめいへのいもが
　はまづとこはゞいかゞしめさむ

萬葉三にありはまづとゝよめり

さがみぢのよろぎのはまのまなごすら
　こらはかなしくおもはるゝかも

同十四にありよろぎとはこほりの名也さがみぢといへり

鹽竈

みちのくのちかのしほがまちかなから
からきはきみにあはぬなりけり

昔みちのくにのかみしほがまの明神にちかひ申こと
ありてひとりむすめをゐてまいりてかの神の寶殿の
うちにをしいれてかへりけりこのむすめなきかなし
みて神殿よりさし出たり父これをみけるに心まどひ
にけりそれよりこの神の命婦はみやづかさのかざ
らむかぎりはおやこたがひにみゆまじとちかへり年
にひとたびのまつりのひならぬかぎりはひとにあひ
みゑず彼女の子孫今につぎてその命婦たり 委見二陸奥國風俗一
春水云風俗は風土記のことなるべし

わがせこをみやこにやりてしほがまの
まがきのしまのまつぞこひしき

萬葉廿にありまがきのしましほがまのうらのおきに
あり

洲

こゝふがあらばふたりきかむをおきつすに
なくなるたづのあかつきのこゑ

同萬葉六にあり

なつそひくうなかみがたのおきつすに
ふねはとゞめむさよふけにけり

萬葉十四にあり

潟

おきつかぜふくべくなりぬかすひかた
しほひのはまにたまもかりてな

湊

いそさきをこぎてめぐればあふみなる
やそのみなとにたづなきわたる

萬葉三にありやそとは八十とかけりこれもおほくの
みなとゝ云也

あまさりあひゝかたふくらしみづくきの
をかのみなとになみたちわたる

同七にありかせのところにみえたり

津

さゞなみのしがのつ。こらがまがりみちの
かはせのみちはみればかなしも

萬葉二にあり志賀津子等がとよめり
をしてるやなにはのつよりふなよそひ
あしはこぎぬといもにつけてそ
同廿にありなにはのつとよめり
磯
みづゝてのいそのうらはのいはつゝじ
とくさらみちをまだもみむかも
萬葉第二にありみづゝてとは水傳と云ふなり
さゞなみのいそこせぢなるのとせがは
をとのさやけさたきつせごとに
同三にあり
あまざかるひなのあらいそにきみをきて
おもひつゝあればいけるともなし
同四にありひなのあらいそとよめりあまざかるとは
ひなはえびすなればはどのはるかにおなしそらにあ
らぬはどなるくもゐのはらといへるなめり天離とぞ
かきたる
こよろぎのいそたちならしいそなつむ
めざしぬらすなおきにをれなみ
古今廿にありさがみ歌なりかのくにこゆるぎのい
そはあり
埼
かまたらのみこしのさきのいわくゐの
きみがくゆべきこゝろはもたし
萬葉十四にありかまくらとは相摸國にある郡の名也
いはくえとはくづれたるところなるべし
岸
しらなみのちゐにきよするすみよしの
きしのはぎふにゝほひてゆかん
萬葉六にありきしの萩ふとよめり

和歌童蒙抄第四

人倫部

帝王

あまのはらふりさけみればおほきみの
　みいのちはながくあまたりしあり天足有

萬二にありふりさけとはふりあふぎと云也あまたりしありとはそらにたるまでと云也

ひさかたのそらみしがごとくあふぎみし
　みこのみかどのあれまくをしも

同二にありみこのみかどのとは親王より位につき給へると云ふ心歟

やすみしるわがおほきみのしけくには
　みやこもひなもおなじとぞおもふ

同六にあり八隅知やすみしるとはおほやけの八方をしろしめすと云ふなるべしひなとはえびすを云也世治まつりでとすなはなればえびすも四夷賓服すさればえびすもみやこもとをきほイとなくちかきとなくあふぎたてまつること同じと云心なり

すへらぎのみてめイゝろつよよイにかりくイしこそ萬代イ
　みせあきらめゝたつとしのはに

同十九にありすめらぎとは天皇を申也

みつぎものはこぶよほろをかぞふれば
二萬のさとびとかずそひにけり

金葉に入詞書後冷泉院とあり

後三條院大嘗會歌に藤原家經がよめるなりみつぎものとは貢調也よほろとははこぶ夫也時の人此歌を難じて云く秀歌なれども帝德の事にはいかゞとぞ申ける其故は皇極天皇六年大唐將軍蘇定方新羅の軍をひきひて百濟をうつ百濟つかひを奉りたすけられんことをこふ天皇つくしにみゆきしてたすけむとす其時天智天皇太子として攝政して行路したがへり備中國邇磨郷をみ給ふに甚盛也みことのりをくりしにいくさめすにすなはち勝兵二萬人をえしめたまへり仍この里を二萬郷と名づけたりのちに改て邇磨とかく天皇筑紫の行宮にて崩じ給ひぬついにこの軍をつかはさずなりにけり然ればことのをこり不レ宜歟日本攝政のおこりかの天智天皇太子の時よりはしまれりもろこしには周成王のおぢ周公旦の時よりは始れりと云々

皇子

はしきかもみこのみことのありかよひ
みしいくみちのみちあれにけり

萬葉三にありみことのみこととは東宮のみこと申也東宮とも又春宮とも云其故は東方朔神異經云東方明山有レ宮焉春石檣而面一門々有ニ銀傍一以ニ春石碧鏤一題曰ニ天地長男之宮一皇天后地也云々　春宮と申も東は春の方なればなり

きみがためいはふこゝろのふかければ
ひじりのみよのあとならふとぞ

或本に此歌見聖部

後撰廿にあり今上のとう宮ときこえしとき太政大臣の家にわたりおはしましてかへり給ふ御ひきで物に手本たてまつるとてよみ給へるなりひじりのみよとはかしこきみかどの御ときといふなり

大臣

ますらをのとものおとすなりもの丶ふの
おほまうちぎみたてまつらしも

萬葉二にありおほまうちぎみとは大臣を云也

兵衛

ひとしれずたのめしことはかしはぎの

もりやしにけんよにちりにけり

拾遺抄第九にあり右近少將季繩か女の歌也中納言敦忠兵衛佐にはべりける時にしのびていひちぎりけることの世にきこへてはべりければつかはしける兵衛をかしはぎとはいふなるべし

聖

いにしへのなゝのかしこきひとゞもの

はしがるものはことさらにこそ

萬葉三にありなゝのかしこき人とは魏氏春秋曰阮籍嵆康山濤向秀阮咸王戎劉寡あひともに竹林に遊ぶ皆酒を好むこれを七賢とす

父

たれぞこのやどにきてとふたらちねの

をやにいさはれものおもふわれを

萬葉十一にありたらちねとは父を云也いさわれとはいさめられと云ふなり

母

かぞいろはいかにあはれとおもふらん

みとせになりぬあしたゝずして

承平竟宴歌に伊弉諾尊を得て從四位下行民部大輔兼文章博士大江朝臣朝綱がよめるなり朗詠下に入れり昔陽神左よりめぐり陰神は右よりめぐり國の柱をわかれめぐりて同く一面にあひぬ于時陰神まづとなへてのたまはく喜哉うまし男にあひぬ陽神悅びずしてのたまはく吾はこれ男子也理まさにまづとなふべしいかんぞ婦女のかへてことばをさへだつる故に蛭兒を生りこの兒三歲までに足なはたゝず次に天磐樟船をうましめてたやすくひるこをのせて順風にはなちすつよの人ひるこをうむこととこれなり又云葦の舟にのせてこれをながすともいへりかぞとはちゝを云いろとは母を云也又云朝綱辨官を放て後三年に及べり故にいへり見二西宮記一

乳母

くやしくもそひにけるかもわかせこが

もとむるちもにゆかましものを

萬葉十二にありちもとはめのとを云ふなり乳母とかけり

兒

かつみつゝあなゐにおちゐるみどりこの
まどへるこひもわれはするかな

六帖にありあなゐとはつゝなきゐを云也小兒をみどりこと云ことは兒七八歳にいたるまでは春の生益とすあをきはこれ春の色也この故におさなきちごの衣の色とす童子をば青衣とからのふみにもつくれるはこれなり七歳以前いとけなくしておそるゝことかぎりなしくれなゐすはうなどは鬼神のすける色にてをのづからそのなやみをうることあるなりみどりこあなゐにおちいるとは晉事鮑靚字太玄うまれて五歳にしてその父にいひて云くもとはこれ曲阿李家兒なり井に落て死たり其父尋るにまことにてなんありけると云々これをよめるにやと見たり春水云此古事にて讀歟さもあらむ然而孟子惻隱之心と云孺子陷井委可考合

童

たちばなのてれるながやどわれいねば
うなゐはなれはかみあげつらんか

萬十六にありながやどはなむちかやと云也うなゐとはわらはを云也

うなゐこがかみふりしつるふぢのはな
そでなつかしくおもほゆるかな

六帖にありかみふりしつるとはふりたると云也

男夫

われのみぞきみにはこふるわかせこが
こふといふことはことのなぐさぞ

萬葉四にありわがせことは男を云ことのなぐさぞとはことのなぐさめぞと云也

かねてよりひとごとしげくかくあらば
しゑやわがせこいかゞあるかも

同二にありわがせことは男を云也しゑとはよしやといふなり

くさまくらたびゆくこまのまろせねば
いはなるわれはひもとかずねむ

同廿にありせことはおとこを云いはなるとはいへ

なると云也はとへとは同ことなり
わがかどにちとりしばなくおきよ〱
わがかくしづまひとにしらるな
萬十七にありつまとは男も女をばつまといひ女も男をつまと云べきなんめりこれはしのびたるおとことみえたり
女
こもりゑのはつせをとめがてにまける
たまはみだれてありといはじやは
萬三にありをとめとはいまだ男せぬ女をいふ未通女とかけり
にはにたつあさてかりほししきしのぶ
あづまをんなをわすれたまふな
萬四にあり藤原宇合大夫遷任上レ京常陸娘女贈歌一首とかけりいとあはれと思けれどかぎりありければのぼりにけりしきしのぶとはしきりにしのぶといふなりあづまとは日本紀七云日本武尊相摸國より上總國に往とす海中にして暴風急起て王船漂蕩して渡べからず王に從へる女あり弟橘媛と云穗積氏忍山宿禰の女也王に啓して曰風起浪泌して王船沒すこれかならず海神心也願者賤妾が身王の命を贖て海に入と申す言訖て乃なみをかぶりている風すなはちやむで船岸につく事をえたり故時人其の海を號して馳水と云上總國より陸奥國に轉入蝦夷既に平又日高見國より還て西南の方常陸をへて甲斐國いたりて酒折宮に居したまへり甲斐より武藏上野をめぐりて西方碓日坂にをよべる時日本武尊每に弟橘媛をしのびたまふみこゝろあり故に碓日の嶺にのぼりて東南の方に望で三歎て曰く吾嬬者耶故山東の諸國を號して吾嬬の國と云されば東と云ことはこれよりはしまれり日本武尊は景行天皇の子也同胞にして雙生末即レ位親王にして崩たまへり年卅
かうちめのてぞめのいとをくりかへし
いもにあへりともたえんとおもへや
萬七にありかうちめとは河内國の女と云也
きのふみてけふこそはひまわきもてが
こゝたしく〱みまほしきかな

萬十一にありわきもことは女を云こゝたとはそこら
と云也しく〳〵とはしきりにと云也
なにはめのあしびたくやのすゝたれと
おのがつまこそとこめづらしき
同にありなにはめとは津の國の女也すゝたれとはす
すたれこと云ふなり
たをやめのそでふきかへすあすかゝぜ
みやこをとをみいたづらにふく
萬一にありたをやめとは婐女とかけり日本紀には婦
女とかきてかくよめりあすかゝぜとはならの京にあ
すかと云處にふく風なるべし
かすがのはけふはなやきそわかくさの
つまもこもれりわれもこもれり
古今一にあり伊勢物語歌也かのものがたりにはむさ
しのはとかけるを古今にはかすがのはとかけりむさ
しの國入間郡にかすがのさとゝ云所ありさればかく
てもたがはぬにや
姑
いまこんといひしばかりを命にて
まつにけぬべしさくさめのとし
後撰十八にあり昔人のむこの今こんといひてまかり
にけるがふみかよはす人ありときゝてひさしくまて
どこざりければあつま歌のこゝろをとりて女の母か
くいひつかはしけるその返歌にいはく
かすならぬみのみものうくおもほえて
またるゝまでもなりにけるかな
とてうるさしと云までにぞまうできけるさてさくさ
めのとじとは姑の年おいたると云也委見二東古語一又
劉安列女傳に云く老母を謂て負とするなり俗のため
には刀自の二字を用は訛なり東の國にさくさめと云
ところありと云へりこれは古來難義にて四條大納言
和歌論義に此事かたりきかせん人もがなとかけりさ
ればましていかゞはたしかにしれる人あるべき
翁
もゝとせにおいたちひそみなりぬとも
われはわすれじこひはまつとも
六帖にあり字抄歌也
おいたればかしらのかみもしらかはの

みつはぐむまでなりにけるかな

六帖にありみつはぐむとは支離とぞかけるされば　え
だもはなれ〳〵になりぬればつぎめもさゝへずおい
かゞまりてひざの左右の耳の上までさしあがりたる
を云也

おきなさびひとなとがめそかりころも
けふばかりとぞたづもなくなる

伊勢物語にあり仁和帝せりかはの行幸せさせたまひ
ける日たかゝひにてかりぎぬのたもとにつるのかた
ちをすりて行平朝臣かきつけはべりける歌也これて
ころえぬ人は今日ばかりとぞ申なるけふは鴈とぞ鶴に
もなくなるとてそいはれたれば仁和帝としおとなに
おはしましけるにかくいへりとて御氣色あしく。な
んてもりをりけるおきなさひとはおきなあそびとも
又おきなさしともいふなり

使

もみぢばのちりゆくなへにたまぼこの
つかひをみればあふひしおもほゆ

萬二にありたまぼこのつかひといへり

たまぼこのきみがつかひをまちしよの
なごりぞいまもいねぬよのおほき

同十二ありたまぼことはみちをいふとぞしれるをつ
かひをも云べきにや又みちをかよふものなればかく
よめるにや

わかやどのわさだかりあげてにえすとも
きみがつかひをかへしはやらじ

このにゑすともとよめるははるさはりなき人をかず
をさだめてものなどくはせてとしきといふものきら
せておきてその秋つくりたるをはしめてかりてはる
としきゝりし人をよびてかごをさしかためてくひも
のをしてくひのゝしるほどに來るひとはあひことを
だにせぬにきみがつかひならばかへさじとよめる也

海人

しほかれのみつのあまめのくゞつもて
たまもかるらんいざゆきてみん

萬葉三にありくゞつとはかたみを云也

人體部

面影

よのほどろわがいでゝくればわぎもこが
　おもへりしくよおもかげにみゆ

萬四にありよのほどろとはよのほどいふなり

咲

おもはずにいもがゑまゆをゆめにみて
　こゝろのうちにいみつゝぞをる

萬四にありゑまゆとよめり

髮

うばたまのくろかみしきてながきよを
　たまくらのうへにいもまつらんか

萬十にありうばたまのとはくろしといふなり

わぎもこがひたひのかみやしゝくらむ
　あやしくそでにすみのつくかな

世諺云人をこふる人ひたひのかみしゝく人にこひらるゝ人袖にすみつくと云り

わぎもこがねくたれがみをさるさはの
　いけのたまもとみるぞかなしき

拾遺抄第十二にあり人丸がならのみかどのさる澤の池にみゆきし給ひて采女の身なげたるをあはれみて人に歌よませ給ひけるに御供にてよめるなりねくたれがみとはつとめてなどねをきたるかみとぞきこえければみなげたらん人のかみにはたがひたるやうにこそきこゆるはひがことをおもふにやたゞかみのみだれたるをいふべきか

眉

いとまなきひとのまゆねをいたづらに
　かゝしめつゝもあはぬきみかな

萬四にありまゆねかきてはこひしき人をみるといへり

涙

しきたへのまくらをくゞるなみだにぞ
　うきねをしけるこひのしげさに

萬四にありまくらくゞるといへり

ちのなみだおちてぞたぎつしらかはゝ
　きみがよまでの名にこそありけれ

古今十六にあり前太政大臣白川わたりにをさけるよ

素性がよめるなり文選になみだつきぬるときにはつぐに血をもてすといへり後漢書云至寳衆妙不レ同故不和泣レ血といへりちになく事不和泣レ玉より起るなるべし委見二韓子一

きみこふるなみだのとこにみちぬれば
みをつくしとぞわれはなりぬる

古歌也みをづくしとはかはのふかきしるしに木や竹などをたてたるを云也

なみだがはなにみなかみをたづねけむ
ものおもふときのわがみなりけり

古今歌也なみだがはと云事たゞてゝにのみ云ことにあらず外國記云拘尸那國に血河ありむかしほとけ涅槃にいらせ給ひければもろ〳〵の天人なく涙川をなせり故血川と云又涙川と云兼名苑に出たり

肝

むらきものこゝろくだけてかくばかり
わかてふらくをしらずやあるらむ

萬四にありむらぎもとよめり斷腸村の心歟

命

たまちはふかみをばわれはうちすてゝ
しえやいのちのおしけくもなし

萬十一にありたまちはふとはあらたに靈のあらはれてひかりとふと云なるべししゑやとはよしやといふなり

かひがねのやまざとみればあしたづの
いのちをもてるひとぞすみける

六帖にあり貫之が歌也かひの國のつるの郡に菊おひたる山ありその山の谷よりながるゝ水菊をあらふてれによりてその水をのむ人は命ながくしてつるのごとし仍て郡の名とせり彼國風土記にみえたりもろこしの酈縣ににたる所也

たまきはるいのちもかふるわきもこを
いかにせよとかたびにゆくらむ

六帖にありたまきはるとは命をいふなり

魂

ものおもへばさはのはたるもわがみより
あくがれいづるたまかとぞみる

後拾遺廿にあり和泉式部保昌にわすられてはべりけるころき舟にまゐりてはたるのとぶを見てよめるなり

おく山にたぎりて落るたきつせのたまちるばかりものなおもひそ

となん貴船の大明神男の聲にて詠しおはしましける

式部其後重明親王のおほえたくひなくしてわかれになんありける親王かくれ給ひて後は尼になりけりとぞ

詞

ひとごとのよこすをきゝてたまぼこの

みちよりあはずといふわがせこ

萬十二にありよこすとは讒と云事也

しるしなきおもひとぞきくふしのねも

かごとばかりのけふりなるらむ

後撰戀六

同十四にあり朝頼朝臣の思かけたる人の許につかはしける歌に

ふじのねをよそにぞきゝしいまはわが

おもひにもゆるこゝろなりけり

といへる返歌也かごとゝはかこつと云詞也

さかはやなひとつてならぬことのはを

みとのまぐはひまてもおもはず

みとのまぐはひは爲夫婦とかきてよめり

夢

あらたまのつきたつまでにきまさねば

ゆめにみえつゝこひぞわがせこ

同第八にありとしをこそあらたまとはよめれたゞしこれはいづる月にはあらで月建なるべしあらたまとはあたらしと云心也蝶に月のにたると云ことによりてよめると云人ありひがことなり

うたゝねにてひしき人をゆめにみて

おきてさぐるになきぞわびしき

陳皇后長門賦云忽寢寐而夢想す夢魂若君之在傍惕寤覺而無見兮魂迋々若有已この心によくかよひたり

いおしねばゆめにも人をみるべきに

うちはへさむるめこそつらけれ

文選寡婦賦曰願假夢以通靈目烱々而不寢といへる心也

ゆめにみし人をうつゝにえしよりぞ

よもすなはにははやなりにける

堀川院百首夢歌に越前守藤原中實朝臣よめる也殷ノ武丁位につきてまた殷をおこさむことを思ふに其佐をえずして三年まつりことをいはず武丁夢に聖えたり名を説といふゆめにみし所をもて群臣百吏にみせしむるにみな非なりこゝにすなはち百工をして野にいとなみもとめしむるに説を傅巖の中にえたり武丁にまみゆ曰く是也これをかたらふにはたして聖人也擧して爲レ相殷の國大に治るつひに傅巖を性として號して傅説と○○○云々見ニ殷本記一

よひのまにまくらだにせぬうたゝねの
ゆめにゆめをもあはせつるかな

同百首夢基俊よめるなりこれは夢中說レ夢由重虚と云る文集の詩の心なるべし

述懐

からくにゝしづめる人もわがごとく
みよまであはぬなげきをぞせむ

堀川院百首述懐基俊よめる也漢武故事曰上嘗輦至ニ郎署一郎鬢眉皓白衣服不レ完問云何時爲レ郎何其老也對曰姓顔名駟江都人以ニ文帝時一爲レ郎上問曰何其不レ遇駟曰文帝好レ文而臣好レ武景帝好レ老而臣尚少陛下好レ少而臣老也是以三世不レ遇感ニ其言一爲ニ會稽都尉一

みのうさをゑぞいひゝらくかたもなき
よはうつむろのこゝちのみして

古歌也日本紀皇孫天降於日向襲之高千穗峯一云々到ニ於吾田ノ長屋ノ以笠狹之碕一其地有ニ一人一自號ニ事勝國勝長狹一（事勝神者伊弉諾尊之子也亦塩土老翁）時彼國有ニ美人一名木花開耶姫皇孫問曰誰之子耶對曰妾ハ天神娶ニ山祇ノ神一所生也皇孫因幸一夜有娠皇孫未レ之信曰何能一夜之間令ニ人有レ娠乎汝所レ懷者必非ニ我子一歟故木花開耶姫忿恨乃作ニ無戸室一入ニ居其內一誓曰所レ娠若非ニ天孫之胤一必當燼滅云々さればうつむろとはともなきむろなればひらくかたもなくいぶせきこゝろによせてよめるとみえたり

別

かくしつゝおほくのひとはおしみきぬ
われをおくらむことはいづくも

後拾遺八にあり源爲善が伊賀にまかりけるに人々餞たまひけるにかはらけとりて源兼澄がよめるなり餞序に楊岐路滑我が之道レ人多年李門波高人々通レ我何

日ぞと書る心をとれるなり
きみがすむやどのこずゑをゆく〳〵とかくるゝまでにかへりみしかな
拾遺抄別部にあり菅家の流されさせ給ひてのちよみて送せ給へりける御歌也文選別賦に視二喬木於故里一と作りたるこゝろにおなじもしかれをおぼしめしてやよませ給へりけむと申もかたじけなし
わかれゆくきみがすがたをこずゑにかきてむねのあたりをさしやとめまし
古歌也昔人女のとほきくにへまかりけるをこひわびてよめる也これは幽明錄と云文に顧長康と云人ひとりの女にあへ女いへりにかへることと○○なしこひおもふことやすめがたし則ち女のかたちをこずゑにかきて其むねのほどにかむざしをさしてかべにさしつ女ゆくこと十里ばかりたちまちにむねのいたき事さすがごとし又ゆくことあたはずといへる心なり
羇旅
あまさかるひなにいくとせすまひつゝみやこのてふりわすられにけり
萬葉五にありひなとは古人おほくゐなかを云とぞかきたるさもときこゆる事なし萬葉集に夷とかきぬるは東へいかむをひむかしのゑびすのわかれとほどをはかるにいひなすとぞ心えられたるひがことにやあまさかるとは天離とかけりくもゐはるかにおなじそらにもあらず然にと云心なりみやこのてふりとはふるまひと云とぞふるくは申ける
おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは
古今十八にあり小野篁刑部大輔なりけるときもろこしのつかひにつかはすにおほつかひとふねのことあらそひたりとて隱岐國にながされてよめる也ひなのわれとはをきの國のほどはるかに蠻狗のとなりなればよめるなめりひなとはえびすと云こと也又恒山の四鳥ともわかれたるにより雛のわかれと云事もありいづれにてもたがはざるべしあまのなはたきとはなはたぐりと云事也くりよするをたくといふ也さればあまの栲繩とはいふなり
又云恒山の四鳥の雛になりてわかれしこゑのかなしかりしことをよめるにぞかなひてきこゆる又みやこ

になれずありつかぬものをばひなびたりといへばひなのわかれとはゐなかにありくを云をばむげにわろしえびすをひなと云ならば文字こそかはりたれ四方にあるものなればいづれのかたにてもなどかいはざらむあまのなはたきと云はたく繩といはゞいさりせむとは云事のあしければあまのなはたぐりとよめる也たくなといふと也　孔子家語曰孔子在衛顔回侍聞哭聲甚哀子曰回汝知此何哭對曰此哭非彼爲死又爲生離回曰聞桓山之鳥生四子羽翼既成將分四海悲鳴而送之哀聲似此孔子使聞之果曰父死家貧責子葬

ふるさとをこふるこゝろぞまさりける
　　あはのはたりをみるにつけても

古歌也昔人たびにいでゝあはのほのいでたるをみてよめる也文選思玄賦曰既垂穎而顧本人の故居を思がごとし云々これをおもひてよめるなるべし

かまのつちとらましものをかくばかり
　　みやこてひしきものとしりせば

古歌也昔人遠きくににまかりてよみけるうたなりこれは淮南萬畢術に竈之土不思故鄕注曰かまのまへに二寸はること方寸半にしてなかのつちとりてもちてとほくゆけば故鄕をおもはずといへり

思

あかでこそおもはむなかははなれなめ
　　そをだにのちのわすれがたみに

漢書曰李夫人得幸武帝夫人病以篤上自臨之作之夫人蒙被謝曰妾久寢病形貌毀不可以見帝上復言欲女見之夫人遂轉向壁欷上不悦而起夫人姉妹讓之曰獨不可一見上屬託兄弟耶夫人曰不見帝者乃欲深託兄弟也以色事人者色衰則愛絶上所以戀々顧念我以平生容貌也今見我毀壞顔色非昔必且畏惡我尙昔陰思錄其兄弟哉このこゝろにあへるしもめでたく

そうもくがおもひにいかゞたとふべき
　　てはいなづまのひかりばかりぞ

そうもくとは唐人なりおはけなき心おこしたりしものなり

いきてのよしにてのゝち。のちのよも
　　はねをかはせるとりとなりなむ

御返事

あきちぎることのはだにもかはらずは
　　われもかはせるえだとなりなむ

これは天暦のみかと師尹のおとゝ芳子女御につかはしける御歌也御返しとめでたし長恨歌の天にあらばねがはくは比翼の鳥となり地にあらばねがはくは連理の枝とならむの心也比翼とははねとふことをゑずそのなをば兼々と云注曰いろなくてをし一目一翼ありてあひえてすなはちとぶと云々連理とは唐書曰貞觀中山南獻二木連理交玲瓏一有同羅一丈之幹二枝をあらはせたる事二十四處又曰貞觀中玉花宮李連理隔澗合レ枝云々

戀

玉勝間あはむといふがたれなるか
　　あへるときさへおもかくれぬる

萬葉十二にあり頭註書入云契沖抄に玉勝間は玉かたま也かたは籠也季吟抄は別なり口傳の中也

こひ／＼てひとにこと／＼こひしなば
　　もえむけふりはこひのかやせむ

六帖にありこひにもえむけふりとは白毫式にむかし天竺に魔術婆迦と云童子ありその母としごろきさきにつかまつりけりこのわらはおもはずにきさきを見奉りけるよりいかでかと思ふ心つきて人知れずいもねずやせゆきけり母あやしみてとへどいはずしてものおもへるけしきあらはなり母の曰何によりてかわれにかくすべきとせめとひければありのまゝにこたえたり母おもひくらしていはく江のほとりにゆきていをつりて毎日にきたれわれとりつぎてきさきにたてまつらむとをしゆこれによりて日ごとに鯉をつりてきたればしたがひてはゝこれを后にたてまつること三年になりぬきさきこゝろざしのふかきことをあはれみてよきひまにとひ給ふいかなることをおもひてするわざぞと母おそれながらこのわらはのおもへることをもらし申天竺のならひ心に思ひ詞に云つることをたがへざりければあふべきよしをちぎりたまひつきさきたよりをえむ事かたければはかりことをなしての給はく術婆迦まづ自在天神にまゐり寶殿

のうちにかくれをれまゐりてあはむとちぎりてみゆきして自在天神の寶殿にみこしをよせて一と夜すでさしめたまふ人しづまりよふけて后術婆迦おるとてろにゆきたまへるにねいりてしらず其しるしに玉のかむざし一すぢをおきてこしのもとへかへり給ぬ又ゆき給へるにおどろかずそのしるしに又かんざしひとすぢをおきて歸り給ひぬこゝに母術婆迦にとふにねいりてをぼえずたゞ此玉のかむざしばかりありとこたふ母今はちからおよぶべからずと云をきゝて術婆迦かむねより火いできてもえて烟になりてうせぬと云々かの鯉を釣りてことを通せしよりこひとは云也もろ〳〵のこひの起り此術婆迦より始れり

みずもあらずみもせぬひとのこひしくは
　あやなくけふやながめくらさむ

古今十一にあり在中將右近馬場のひをりの日むかひにたてりける車のしたすだれより女のかほほのかにみえければつかはしけるそのかへしには

しりしらぬなにかあやなくわきていはん
　おもひのみこそしるべなりけれ

此歌を古今にはかきたるを本歌の心にはたかひてしたる返しとみゆるを大和物語には「みもみずもたれとかしりてこひらるゝおぼつかなしのけふのながめやこれこそ心にはかなひたれ此歌のかへしにしりしらぬなにかあやなくとはよめるなりされど古今の撰者よみあやまてるにはあらじこのたれとかしりてこひらるゝとよめるが心にもかなはず思のみこそとよめるがいみじくおぼへければたゞかへしとかきていれられたるとぞこゝろえられたるひをりの日と云ことはふるきうたがひなり兼久はまゆみいむとするときにかちのしりをうちさまにひき折てはさむを云なりとぞ申ける但いつれの日もさこそはすめればこれひが事にやあるやうでとなきひとのありけるは左近馬場の南洞院よりはひんがしにひき入りたる處有そこを日をりと云也さらは左近とかくべきを右近とはかきあやまてるにや業平が手づからかみやかみにかける伊勢物語の朱雀院のぬりごめにありけるには只右近の馬場の日むかひにたてりける女のかほ下すだれよりほのかにみえければとぞかけりけるされば日

をりの日とかきあやまてるにや
　わがこゝろいともあやしくしこめとは
古歌也日本紀醜女とかきてしこめとよめり又不平とかきてやくさむとはよめり
　みゆるものからにやくさまるらむ
　わがこゝろそらしとひとのうとめはや
古歌也日本紀に將婚とかきてみあはしとよめり又つらしとは惡といふ心也最惡不順孝云々と
　そのみあはしのいつときもなき
古歌也日本紀に哭泣とかきていさちなくとよみ不順とかきてまつろはずとよめり
　ときとなくいさちなけともことゝせで
　さもまつろはぬひとこゝろかな
古歌也なかよりとはるをいむ事縈亘菩薩傳云昔阿修羅のいもと天のめとなる阿修羅いかりて天とたゝかふ天修羅がかしらきさる手ひぢをきるにかへり。つゞ事もとのごとしこゝに修羅のいもと天にさとるらしめむがため青蓮花をふたつにわけて各左右にちらしてその女なかよりゆく天すなはちさとりて修羅の手足をきりて左右になげて天なかよりさる修羅のみはなれてまたあふ事をせずつひにいのちをはりにきこれによりてなかよりとはるをいむなり
　はなれこしなかよりひとやはりけむ
　またあひがたきこひもするかな

人事
祝
　きみがよはたえじとぞおもふ神風や
　みもすそ川のすまむかぎりは
承暦二年四月廿八日の殿上の歌合に大宮權亮源道時がよめるなり神風とは日本紀の六に垂仁天皇廿五年三月丁亥朔丙申天照大神倭姬命に誨て曰是神風伊勢國は即常世之浪重浪歸國也云々
　かみかぜやいせのうらわにしきよするとこよのなみやきみがよのかず此心也或本に此歌こゝにあり然而本に奥にあり
又同九云氣長足姬の尊神功皇后仲哀天皇の神のをしえにしたがひで筑紫の橿日の宮にはやうせたまひつるをいたみたまひてたゝる神のしりてたからをもとめむとおはしめしてつかさ〳〵にみてとのりしてつ

ナシ
＊日本紀第五にあり此引事舊事記さみゆ

みをはらへとがをあらためて齋宮を小山田邑につくりて三月壬申朔に皇后吉日を撰てみづから神主となり給武内宿禰におほせて琴をひかしむ中臣烏賊の使主をめして審神者とすよりて千繒高繒をもて琴がみことじりについて請していはくさきの日に天皇にをしへ給しはいつれの神ぞねがはくはそのみなをしらむとおもふ七日夜にいたりてすなはち答してのたまはく神風伊勢國の百傳度逢縣の折鈴五十鈴之宮に居處神也名撞賢木嚴之御魂天疎向津姫命と云也

きみがよはあまのこやねのみことより
　　いはひぞそめしひさしかれとは

寛治八年八月廿九日高陽院殿上の七番の歌合に右大辨藤原通俊卿のよめる也

日本紀云天兒屋根命は神事をつかさどれる宗源なり故に高皇産靈尊みことのりしてのたまはくやつかれはなほち天津神籬又天津磐境をたてゝまさに吾孫のためにいははれまつれいまして天兒屋根命太玉命よろしくあまつひもろぎをもて葦原の中國にくだして吾孫のためにいはひまつらしむべし

神風や伊勢のうらはにしきよする
　　とこよのなみやきみがよのかず

古歌也日本紀垂仁天皇廿五年云々天照太神誨ニ和姫ノ命ニ曰是神風伊勢國即常世之波重浪歸國也

みもろやますゞめしよせじとひくなはし
　　うちはへながききみがみよかな

＊崇神天皇四十八年勅ニ豐城命活目命ニ曰 二子慈愛共齊不レ知ニ曷爲レ嗣各宜レ夢朕以レ夢占レ之ニ皇子被レ命淨沐新寢各得レ夢會明兄豐城命以レ夢奏曰 自登ニ三諸山ニ向レ東八廻弄槍八廻擊刀弟活目尊奏曰三諸山之嶺繩ニ縆四方ニ逐ニ食レ粟雀ニ則天皇相夢曰 兄則一行當レ治ニ東國ニ 弟 是臨ニ四方ニ宜レ繼ニ朕位ニ四月立ニ活目尊ニ爲ニ皇太子ニ豐城命令レ治レ東是上毛野君下毛野君始給也活目命垂仁天皇是也（九十九年治ニ 秋七月崩ニ於纏向宮ニ 是年百卅五冬十二月葬ニ菅原伏見陵ニ

本

元久三年十二月七日於ニ喜多院御所ニ屯レ爐馳レ筆

畢ニ同三年四月十日於ニ長尾房ニ以ニ證本ニ一校畢

此一行掖齋本になし岡本本紀州本にはあり
正應三年九月十九日以ニ書本ニ一校訖

寛延二年己巳夏五月十四日照高山主親阿自書

同四未秋九月十五日得生院主松阿自書之

○紀州本に此文ありさて紀州本もすへては片假字もてかけるを此卷のみは草假字にかけり

和歌童蒙抄第五

居處部

都　宮　殿　門　戸　墉（牆イ同イ）　庭

橋　井　舟（付水手）　車

寶貨部

玉　錦　綾　絲　綿　布

文ノ部

書　筆

武ノ部

弓　矢　鞆　劒

伎藝ノ部

畫

飯食ノ部

酒　飯　薬

居處部

都

金の野のみくさかりふきやはれりし

うぢのみやこのかりいほおもほゆ

萬葉十一にありやはしりしとはやどれりしといふこゝろなり

ひさかたのみやこをゝきてくさまくら

たびゆくきみをいつしかまたむ

萬葉十三にあり久かたとは月や空などをこそよめれ都をよめるは久しく堅しと云義歟又みかどの都なれば天闕など云にひかれてよめる歟日本紀には帝宅とかきてみやことよめるがゆへなり

宮

よのなかはとてもかくてもすぐしてむ

みやもわらやもはてしなければ

これは逢坂の蟬丸が歌也琵琶をよくならひて流泉啄木などをつたへたりと博雅の三位きゝてさふらひをつかひにてなどかく山のあらしもはげしくくさの庵も露けきにさてのみすぐし玉ふぞ京に人のいとをしくしたてまつらむと仰らるゝにいざゝせ玉へかしとこしらへけれど耳にもきゝ入れで此歌をながめて琵琶をかきならしけりかへりてこのありさまをかたるをきゝて博雅逢坂に行きて此流泉啄木をうけならはんといへどきゝも入ねばもしひく時やあるとて三年まで日ごとゝ云ばかり行て立きけどえきくことをだにせざりけり三年と云十月廿日比風さびしく月おぼろにさしのぼりてよからのあはれなりければ今夜こそと思て又いにけり蟬丸おもひつるなへに心すめるけしきにてあはれ物心細き夜哉こよひ心あらん人もがなものがたりせんと云をきゝてうれしと思ひてさしよるまゝに博雅こそまゐりたれと云とは○○たれ

と云しかしかなり此二三年つねにまゐりきつることゝ云ふ同イ
なむと云にふかく感じて此曲どもをしえければ譜許をぐしたりけるにみなうつしえて今の世に傳たり
道をこのむ人いにしへはかくなんありける

殿

あさくらやきのまろどのにわがをれは
　なのりをしつゝゆくはたかこぞ

昔皇極天皇の百濟をたすけんがために兵をひきゐてつくしにみゆきせしめおはしませりし時天智天皇みこと申し時まつりことをおさめてしたかひおはしまして詠せしめ給御製也あさくらとは筑前國にある處なり木の丸殿とはまろ木して造れるなり旅の御やすまりにてうちとけさせ給はざらん故に出入人なのりをしけり藏人惟親大齋院の女房に忍て物申けるをあやしがりてさしこめたりときこしめしてうたよみとこそきけゆるせと仰られければいづとて
　かみがきはきのまろどのにあらねども
　　なのりをせぬはひとゝがめけり

とよめりければあはれがらせ玉ひけり
　まきばしらはめてつくれるとのゝごと
　　いませはゝとしおめかはりせす

萬葉廿にありはめてつくれるとのとは昔神武天皇三月辛酉朔丁卯に令をくださしめての給はくわか東うちしよりこゝに六年になりにたりまさに山林をひらきはらひ宮室ををさめ作りてつゝしみて寶位に臨てみたからをしづむへし觀夫畝傍山東南橿原の地はけだし國の墺區也都つくるべし此月に即つかさづかさに仰て經二始帝宅一故ニ古語稱まして曰うねびのかしはらにしてしたつゝいはねに宮柱太敷たてゝたかまの原にち木たかしりてはつくにしらすすめらみことゝいへり委見二日本紀第三一
いませはゝとしとは八年と云也おめかはりせずとはおもかはりと云也めともとはかよふこゑなり神武天皇と申は畝傍橿原宮也在二大和國一

門

わきもこがやどのまがきをみてゆけば
　けだしかどよりかへしてんかも

萬葉六にありけだしとはすなはちと云なり盖とかけり

戸

いはとわるたちからをがもえてしがな
　たをやめなればすべもしらなくに

萬葉第三にあり昔天照大神あめのいはやにいはとをさしてかくれてます國のうちとこやみとなり時に萬の神達天のやす河原に集てます處のかみを云也

𤼧　墻イ

をとめ子がそでふるやまのみづがきの
　ひさしきよゝりおもひそめてき

萬葉四にあり人丸詠也人丸は天平之時人也崇神天皇三年秋九月に都を磯城にうつさしめ給これを瑞籬宮と云也委見日本紀第五されはみづがきのおこり彼時也されはひさしきよゝりとはむかしよりといはんとてみづがきのとはよめるかをとめこがそでふるといへるにぞ松浦明神のいかきとよめるとみえたるをみづがきとは又神のめぐりやみかどのおはします處のかきを云也仍ひさしきことによせてよむと云もいはれたれど此歌にてはさもみえぬ歟

はりえにはたましかましをみづがきの　各本同
　みふねこかんとかねてしりせば

高野姫孝謙天皇也天平比の帝也なにはの宮にみゆきし玉ひし時左大臣橘諸兄卿の奉れる歌也此歌にも必ひさしと云ふにはあらずとみえたり崇神天皇のみづがきの宮にすみ玉ひしによりそのみなをみづがきと云つればみかどをはめたてまつるなにてよめるか

みづがきのひさしきよゝりこひぬれば
　わがをびゆるふあさゆふごとに

萬葉十三にありこれも戀をしていと久しく成たる心をよめる也池にとりゐしと云心にてひとへに久しきことによせてはよまぬなりこれをたゞ久しと云と心えけるにや公誠朝臣の周防國より花山院にまゐらする歌になにことかをはしますらんみづがきの久しく成ぬみたてまつらでとよめりひがことゝもやいふべかるらんときこえたり

あしがきのすゑかきわけてきみこゆと
　人になつけそことはたなしり　事は棚利たなゝりとよめり

萬葉十三にありこれは催馬樂の箱の歌にあしがきまがきわけとうたふ心をよめるにかなへり拙人にな告そ事將なしりとよめりなしりとはなしりそと云意歟

庭

おもふひとこむとしりせばやへむぐら
おほへるにはにたましかましを

萬葉十一にあり玉しく庭とは本文に玉堺と云り玉とはうるはしくよしと云詞也

橋

まのゝうらのよどのつきはしこゝろにも
おもふやいもがゆめにしみゆる

萬葉四にありつぎはしとはたえずと云心にてよみすえたるべし

おばたゝのいたゞのはしのこほれなば
けたよりゆかむてふなわがいも

同十一にあり

いはゝしのよるのちぎりもたえぬべし
あくるわびしきかづらきのかみ

三齋略記云秦始皇海の中に石の橋を造る海神これがためにはしらをたつ始皇あひみんことをもとむ海神の曰我形ち醜し我形をうつすことなかれ帝すなはち海に入こと卅里にして海神をみる左右の人をして縛し手をうごかすことなしゑにたくみなる人ひそかに足をもちてその形をかく神怒りて帝約を背けり早くさりねと始皇馬を早めてかへる馬のしりあしをひくにしたがひてはしつくる伇に岸にのぼることをえたり繪書つる者水に溺れて海にしぬと云云されば神のわたすいしはしはいづこにもわたしえぬことゝ思ひあはするがにたればかきのするなり

こひせじとなれるみかはのやつはしの
くもてにものをおもふころかな

此歌の心伊勢物語によくみえたりくもてとは柱にちかへてゆるがさじとうちたる木を云也されど此八橋はたゞ板を打たるやうにてあるなればくものてはやつあればやつといへるこゝろにつきてよめるなり

かみのよのあまのうきはしならねども
いかゞはすべきみとのまくはひ

大江匡房卿つくしよりのぼりて周防内侍のもとにつかはしたる歌也

伊弉諾尊伊弉卌尊天のうきはしの上にてほこをさし

をろしてさぐり玉ひきこゝに滄溟をえ玉へりき其鉾の先よりしただれるしほこりて一の嶋となるなづけて礒馭盧嶋と云此二柱の神かの嶋に天降りまして共爲夫婦してくにつちをうましめ給へり人のめまきてうむてとこれより始れり

おもふてとはしん〲らにぞかきつけて
むかしのひとはくらゐましける

堀川院百首隆源阿闍梨詠也これは瑚玉集忘節篇相如字長卿前漢蜀郡成都人也初めの名は犬子慕藺相如爲人乃更名相如蜀城北有升遷橋送客館相如初向長安逕度今橋乃題柱曰大丈夫今向京師不乘大車肥馬不復過此相如乃至長安武帝善其才德拜爲武騎常侍後遷中郎將奉使蜀郡大守聞之出郡迎題令人具弩矢先駈蜀人見之莫不差嘆也

井

いにしへをこふるとりかもよろづはの
みゐのうへよりなきわたりゆく

萬葉二にありよろづはとは弓弦葉とかけりゆつるとかよへるなり

あさかやまかげさへみゆるやまのゐの
あさくはひとをおもふものかは

萬葉廿にあり葛城王のみちの國へ下るに近江守なるものくりやのことをろ○かなり王こゝろよからず仍采女王の膝を叩て此歌をうたふ王の心とけて心ゆくなりぬと云りされば古今のかなの序にもあさか山の言の葉は采女のたはふれよりよみ出てとあり而大和物語には大納言のむすめを內舍人なるもの盜てあさかの郡あさか山にこもりて家を造りてすえて里に出つゝ物を求てくはせありく出て二三日こざりけりまち侘て出て山のゐに影をみればありしかたちにもあらずいとおそろしげなり扨此歌を木に書付て庵にきてしにけりをとこかへりていとあさましと思ふ山のゐなりける歌をみて思ひしにゝしにけり此ふることそれになむありけるとかけるは物語のひがことゝ云べきなり

舟付水手

おほぶねにまかぢしげぬきおほきみの
みことかしてみいそめくりかし

萬葉三にありまかぢしげぬきとよめり天磐船日本紀

曰嘗有二天神之子一乘二天磐船一自レ天降止曰櫛玉饒速日命云々

あまをとめたなゝしをぶねこぎいづらし
　　たびのやどりにかぢのをときこゆ

同六にありたなゝしぶねとはうらうへのふなはたにうちたる板をいふ舷とかけりそれもなきこぶねといへるなり

しまつたふあしはやをふねかせまつと
　　としはやめなむあふとはなしに

同七にありふねのはらをばあしといふなるべしおほきなるふねのはあしかたとぞ云ふめる

まつらぶねくだるはりえのみをはやみ
　　かぢとるまなくおもほゆるかな

同十二にあり肥前國松浦の津の舟をまつら舟とは云也それにつきてつくしぶねをばかく云ともいひつたへたり

かつしかのまゝのうらまをこぐふねの
　　ふなびとさはぐなみたつらしも

同十四にありかつしかのまゝのうらとは下總國にあるなり

はりえよりみをひきしつゝみふねさす
　　しづをのともはかはのせまうせ

同十八にありみをひきとは水引なりしづをとはいやしき男と云也

あさごとにきけはゝるけしいみづがは
　　あさこきしつゝうたふあま人

同十九にありあさこきしてうたふとよめり

さきもりのおほえこきいづるいつてぶね
　　かぢとるまなくこひはしてまし

同第廿にありいつて舟とはかぢひとをつろよつある舟を云也とぞいへどなほ舟は伊豆國をもとゝしたればいづて舟と云にやいづよりいできたる舟と心えられたり

日本紀第十應神天皇五年冬十月伊豆國におほせて長十丈の船をつくらしむ試海にうかふすなはちかろくうかひてとく行こと走るがごとし故に其名を枯野と云輕野とは後のひとの訛也

同卅一年秋八月宮船枯野朽て用にたゝず其舟の名を

たゞずして後世につたへむとて有司に令して其船材を薪として鹽をやかしむ五百籠鹽をえたり則諸國に賜て船を造らしむ初枯野船を塩のたきぎにせん日餘燼ありすなはち其もえざしをあやしむで天皇に献ず琴につくらしむ其音鏗鏘にして遠聆云云

しらなみにあきのこのはのうかべるを
あまのながせるふねかとぞみる

古今第五にあり寛平后宮歌合に興風がよめるなり木の葉を舟とよめるはこのはの水にうかべるをみて舟をばつくり始しなりさてにたるが故に船の名を一葉と云也船になとをくゆくひとを餞する詩に一葉舟飛不レ待レ秋とつくれり

すみよしのかみもうれしとおもふらむ
むなしきふねをさしてきたれば

後拾遺十八にあり後三條院御製なり延久五年三月に住吉にまゐらせおはしまして詠じたまへり程もなくかくれおはしましければ世の人の申けるは帝位の重載を令レ脱ぬれば太上天皇をはむなしきふねと申ことなれどやまとことはにむなしき船とよませ玉へるか事さまのよからぬによりて也とぞ舟をば大人にたとへて頭陀寺碑に虚舟易レ遠と云るはまがまがしきこと也されば空しき舟と云ふこと宜からぬなるべし

碇

おほぶねのたゆたふうみにいかりおろし
いかにしてかはわがこひやまむ

萬葉十一にありたゆたふとはうかびたりと云ことばなり

水手

つきよみのひかりをきよみゆふなぎに
かこのこゑよぶうらまこぐかも

萬葉十五にありかことは水手とかけり水手を鹿子と云は應神天皇十三年日向の諸縣の君牛朝廷につかへて年既に老て仕ことあたはず仍本の國にまかる始て播磨に至たる時天皇淡路嶋に幸して遊獵し給ふこゝに天皇西のかたを望するに數十の麋鹿海に浮て來れり播磨の鹿子水門に入る天皇左右に謂曰其何麋鹿ぞ海に浮て多來爰左右使をつかはしてみるに皆人也唯

着ニ角鹿皮一を以て衣服に爲耳間曰誰人對曰諸縣の君牛也是年老て仕ことあたはずといへども朝を忘れ奉ることをえず故におのれがむすめ髮長媛を以貢上る天皇悅て喚て御船をつかまつらしむと云云時人其着し所を鹿子の水門と號す凡水手を鹿子と云は蓋是時より始也在ニ日本紀第十卷一この鹿皮をふなこにきすることも鹿皮はいろの黄なればなるべし漢書曰鄧通以レ擢レ船爲ニ黄頭郞一注曰守勝レ水は其色黄故耶船郎皆着ニ黄帽一也

車

もろともにみつのくるまにのりしかど
　われはいちみのあめにぬれにき

後拾遺廿にあり三車とは（此下各本空紙あり）一味雨とは釋迦如來一音にてとき玉へとも衆生はしな〳〵にしたがひてさとりをうると雨は一味なれど草木はくさ〳〵にうるほひて受るがことしされば我は悟をえつとよめるなり

　いまはとてくるまかけてしにはなれば
　　にほふくさはもおほひゝけり　各本同

寛平御時菊合歌也懸車

寶貨

玉

よるひかるたまといふともさけのみて
　こゝろをやるにあにしかめやは

萬葉三にあり夜光は玉の名也搜神記曰隨侯行見ニ大蛇傷一救而夜給レ之其後蛇銜珠以張之徑盈レ寸張白而夜光可ニ以燭レ堂故レ歷也稱焉續漢書曰大秦國有ニ夜光（同イ）壁一

　としをへてにごりたえせぬさびえには
　　たまもかへりていまぞすむべき

後撰十五に有忠房朝臣つのかみにて屏風にかの國の名ある所〳〵をえに書てはべりけるにさびえと云處壬生忠峯がよめるなりたまかへるとは謝承後漢書云云もろこしに孟嘗と云者合浦の大守たりき其所もとより珠をとりて米にかふ而してさきの時二千石むさぼりて民をして珠をとらしむみなみづからいる珠たちまちにうつりて去ぬ合浦にたまなしうへ死ぬる者道にみてり孟嘗ゆきのぞみて一年の間に去たる珠又歸れり

ころもなるたまともかけてしらざりき
えひさめてこそうれしかりけれ
後拾遺廿にあり赤染歌也法華經五百弟子品の心也たとへばひとりありてしたしき友の家にいたりて醉てふせり親友無價の寶珠を以て其衣の裏にかけて去ぬ醉ふして不レ覺起て遊行して他國にいたりぬ衣食甚艱難也後に親友あひてつたなきかな我昔無價の寶珠を汝か衣裏にかけき汝しらずして憂惱してみづから命いかんことをもとむる甚痴也云云これは衆生の佛性ありと云ふことをしらぬにたとふるなり

錦

みるひともなくてちりぬるおくやまの
もみぢはよるのにしきなりけり
古今五にありきた山に紅葉折(かりイ)にまかりて貫之がよめるなりよるの錦とは漢書云朱買臣字翁子會稽人武帝賢レ之後遷二會稽大守一帝謂二買臣一曰富貴不レ還二故郷一如二衣レ錦夜行一與爲二本郡意一何買臣稽首行謝而也
もみぢばのながるゝあきはかはごとに
にしきあらふとひとやみるらむ

後選第七にあり
益州有二青衣水一益州人織レ錦既竟先須二山水一洗レ之然後綾紵(綏紩イ)及左思蜀都賦曰貝錦斐然濯二色紅波一
をぐるまのにしきのひもをとけむとき
きみもわすれよわれもわすれむ(たのまむイ)
六帖第三にありをぐるまのにしきとはこくるまをちかへて文におれり伊勢大神宮の御衣には此錦を用るとみえたりもろこしには男に逢とては錦のはかまをきるなりそのはかまによつをと云物の付たるを紐とは云なり

綾

くれはとりあやにこひしくなりしかば
ふたむらやまもこえずなりにき
後撰第十にありおほやけのつかひにてあづまへまかるあひたにあひしれる女にいひちぎりていてたちにけりのちにあらためさためられて召返されて京へまできにけるをこの女よろこびて問にをこせてはべりければみちに人のこゝろざしたりけるくれはどりと云あやをゝくりはべるとてよめるなりくれはどりとはあやのなゝり輕嶋豊明宮應神天皇卅七年春二月戊

年朔阿知使主都加使主の呉につかはして縫工女求しむ爰阿知使主等高麗國に渡て呉に達とす則道路を知ず道を知者高麗に乞ふ高麗の王の久禮波久禮志二人を副て導とす是によて呉に通ずることをえたり呉王是に工女兄媛弟媛呉織穴織四婦女を與たり委見二日本紀十卷一この工女をばぬひめとよめれどたゞものをぬふにはあらず女たくみにてきぬあやをおるそのおるもの丶なをあやのなにいひつけたるべし鳳竹をりたるを云とも申めるはおしはかりに云なめりたしかならず

絲

かくはかりせきてかくてふたしまいとの
まゆめかきてはうれしかりけり

六帖第五にありたしまいと丶よめり伊弉諾尊曰聞二葦原中國有二保食神一月夜見尊就候之月夜見尊也到二保食神許一保食神乃廻レ首嚮レ國則毛麁毛柔亦自レ口出貯二之一百机一饗之我拔レ劔殺然後復命時二天照大神怒曰汝是惡神不レ須二相見一乃一日一夜隔離テレ住復遣二天熊人一往看レ之保食神實死其神之頂化爲牛馬一顱上爲レ粟眉上生レ繭眼中生レ稗腹中生レ稻陰生麥及大小豆一天熊人悉取而奉レ之天照大神喜曰是物者顯蒼生可二食而活一也乃以二粟稗一以二其稻種一始殖二天狹田及長田一其秋垂穎八握莫々然甚快也又口裏含レ繭便得レ抽レ絲自レ此始有二養蠶之道一焉

綿

しらぬひのつくしのわたはみにつけて
いまだはきねどあたゝかにみゆ

萬葉第三にありしらぬひのとはつくしのわたのひろくよきをきぬにも入ずしてたゞぬひて昔はきけり今やうもさるべきやむごとなき人など拵さるとあまたきこゆべし

布

たまかはにさらすてづくりさら〳〵に
なにをこのよのこ丶たかなしき

萬葉十四にありぬのをば川に洗てさらすなりてづくりとはよきぬのを云なりこゝたとはこゝらと云なり花麿續漢曰崔寔五原の太守たりその地に麻おはかり民うふるとしらずうむとあたはずして衣なし冬にな

りぬればをそきくさをうへて其中にふす吏も草を其身にきる塞はじめて麻をうみておらしめたり布はこれよりおこれることゝみえたり

みちのくのけふのほそぬのほとせばみ
むねあひがたきこひもするかな

陸奥國のけふの郡よりをり出したる布を云なりそのぬのはたばりせばしされはむねあひがたきとはよめるなり

文部

書

たまづさのあるかなきかにゆくみづの
たえせずきみをあひみてしかな

六帖第五にありたまづさとはふみを云にいかに此五文字にはすへたるにか心えがたし張泊芝が池にのぞみて書をまなびしに水のくろくなりけることをよめるかとおもへどそれもかなはぬにやあらむ

わがこひはからすばにかくことのはの
うつさぬほとはしるひともなし

堀河院百首に忍戀を顯季卿のよめる也敏達天皇元年四月甲戌五月高麗上ける表疏からすの羽にかけり黒くしてしる人なし三日よむことをえず爰ニ船史の祖王辰爾と云ものありすなはち羽を飯の氣にならべて帛をもて羽におして悉に字をうつしてよくよめり朝廷これをことなりとす委見ニ日本紀第廿巻ニ

筆

みづぐきのかよふはかりをすくせにて
そもゐなからにきえねとやさは

六帖第五にあり筆をみづぐきといへばかきたるふみばかりをかよはしてとよめるなり

武部

弓

あづさゆみつりをとりはけひくひとは
のちのこゝろをしるひとをひく

萬葉第二にあり久米禪師がよめるなりあづさゆみとはみちの國のあづさの山に取りたる弓を云ふ又はあつさの木と云木のまゆみに似たるをもてつくれるを云梓弓と書く

みこもかるしなのゝまゆみひかずして
しひさるわざをしるといはなくに

同巻にあり同人よめりしなのゝまゆみとよめり
ますらをのゆはずふりたていづるやの
のちみむひとはかたりつちかね 各本同
同三にあり
みちのくのあたしらまゆみつるつけて
ひかはかひとのわがことなさむ 各本同
同七にありたあしらまゆみとはあたちのしらまゆみ
と云ッ歟
たつかゆみてにとりもちてあさがりに
きみはたゝれぬたまくらののに
六帖第二ニ有リ

矢

ますらをのともやたばさみたちむかひ
いるまとかたはみるにさやけし
萬葉第一に有リともやとはものにあたる矢を云フなり得
物矢とかけりたばさみとはふたつもみつもてにはさ
みぬきているを云フ
きのくにの昔弓をのかぶらやの
しかとりなびくさかのうへぞみる

萬葉九にあり弓をのとはゆみいるおとこと云フなりひ
びくやとよめり

鞆

ますらをのゆとりのかたにくるゝてふ
ともすればなとものゝうれたき
古歌なりゆとりのかたとは左なりともをは昔はむだ
とぞ云ける
應神天皇既ニ産ス時に宍腕ノ上ニ生たり其形鞆の如ク也此
に母皇大后の雄装を爲て鞆を負たまへるに肖給へり
故ニ其名ヲ譽田天皇と號ス是上古時の俗鞆を褒武多と號す
るに因てなり委ハ見ニ日本紀第十巻ー

鈒

なきあとにかけゝる太刀もあるものを
さやつかのまにわすれはつべき
俊頼朝臣太刀をこふにおこせぬ人の許へ遣しける歌
なり史記曰呉ノ季札之物使シテ北過ル徐君ニ徐君好ム季札ガ鈒ヲ
口ニ弗テハ敢言ハ季札これをしれり國に使として行ぬ歸て
徐に到る時に徐君すでにしにたりすなはち其太刀を
解て徐君の冢の樹にかけてさりぬと云云これをなき
跡にかくとはよめるなり

伎藝部　非　書畫

　畫圖

わきもこがすがたにゝたるえもあらは
　　こひにこゝろはなくさめてまし

說蒙曆王起二九重之臺一募二國中一有二能畫者一賜二之錢一有二敬君一者居常飢寒其妻有二妙色一敬君工レ畫貪賜二畫臺一去レ家日久思二憶其妻一乃畫二仆レ妻像一向レ之而咲傍人見以白レ王々召問レ之對曰有レ妻如レ此去レ家日久心常念レ之竊畫二其像一以慰二離心一云云

飲食部

　酒

おもふなかさけにゑひにしわがなかは
　　あふひならではやむくすりなし

六帖第六にありゑひたるにはあふひのみをくへはさむと云へり

　飯

いへにあればけにもるいひをくさまくら
　　たびにしあればしゐのはにもる

萬葉二にありむかしはけにいひをばいれてくひける也り勸學院などには學生ともこの比もけいひくふな笥

り

　藥

わがさかりいたくくだちぬくもにとぶ
　　くすりはむともまたおちめやも
くもにどぶくすりはむともみやこには
　　いやしきあがみまたしおちぬべし

萬葉第五にあり雲部にみえたり

和歌童蒙抄第六

佛神部
寺　佛　經　僧　鐘　念珠　神
祝部　巫　端出繩　木綿　繦　手繦

音樂部
琴　笛

漁獵部
鵜河　夜河　網代　網　栲繩　筌
羅　照射

服餝部
衣　裳　帶

資用部
鏡　玉匣　櫛　枕　簾　莚　薦
蓑　笠　秤　籠　鍋　針　斧
機　絡染　反轉　火

音樂部
琴

ことのねにみねのまつかせかよふらし
　いづれのをよりしらべそめけん

文集詩に松風入ニ夜琴一と云フことを題にて齋宮女御のよめるなり琴に入ルニ松風一之曲のあるなり

あしびきのやましたみづはゆきかよひ
　ことのねにさへながるべらなり

後撰第四にあり夏夜ふかやぶが琴をひくを聞キて貫之がよめるなり是は彈箏扶（峽イ）の心をよめり峽水の流るる聲ことをしらぶるにゝたり仍テ爲レ名也流水と云フ曲もあれどそれは此歌にさしてかなはず酈善長水經注曰注東南延都廬山之路之中常有レ如ニ彈箏之聲一行者經レ之皷舞樂シテ而後去ル即紘歌之山也故此峽爲ニ彈箏峽一也

たえにけるはつかなるねをくりかへし
　かづらのをこそきかまほしけれ

後拾遺十九にあり能宣歌也或所にて御簾中の琴の音のあかぬ心をよみけるによめりたえにけりとはもろこしに伯牙と云人琴をひく鐘子期これを聞て曰山の曲をひけば巍々たること泰山のごとし水曲をひけば洋々たること流水のことし鐘子期死にて聞しる人なし伯牙身終るまで琴のををたちてひかずと云り又かづらのをとは葛絃也陶潜葛を絃にしてひく心に曲をあやつればこゑなけれど同ことなりとて又絃もなくて琴をもてあそぶといへり

笛

いつかまたこちくなるへきうぐひすの
　さへづりそへしよはのよこぶえ

後拾遺十九にあり相摸が歌也入道一品宮にて式部卿敦貞のみことなど笛吹遊びはべりけり次の日奉りけるなりこちくは呉竹と云なりもろこしに呉の國と云處より出たるなり鶯の囀りそへしとは春鶯囀と云樂によせてよめるなり

　ことのねにかよひしこゑをきゝながら
　そならぬそれにあふはあふかは

これは山驛記に昔もろこしより箏をよく吹人わたりその曲調を習うけんかためによく其道をしれるものを勅使につかはすほどやうやうとほくなりて山の中にあるむまやにとゞまれり人ありて此驛はわしきもの有て人とまることなしといへどひもくれぬ行べきやうもなければとゞまりぬ所さまさもいはむやうに物おそろしもしのともあらんにと思ひてうるはしくかふりをし装束して月のあかければ火をとりやりてことをひきならしてゐたるに心のすゝめることかぎりなしよなかにも過ぬらむと思程に風打吹たゝならぬ空のけしきなりとばかりありてえもいはずなつかしきさましたる女房ゐざり出てゐたりおそろしとぞおもふべきにつゆさもおぼえずあはれにおぼゆることつきせず此女の曰御琴のしらべのめでたさにまゐりたるなりたまはりてむかしのことわすれてもやとこゝろみむといへばことをさしやりたるにかきならしたるてざしつまおと此世ならずめでたしちかくよりてあはれに打かたらふよにめづらしき曲調をこの

女にならひ受ること數おほかりさてしたしくなりてふしぬらうありてこゝろざしふかしあけ方になりて女いたくなきて曰我は大貳にてくだりし人の女なり此むまやにてことをひきしにより山の神にとられてかゝる處にあるなり苦を受ることおほかりねがはくは我爲に法華經を供養し玉へあけなむとすれば歸なむとするに此男かくてもちとせをへむ女こゝろざしあれとゝゞむべきにあらねばおこしてやりつなでりしもかなしくておつる泪盡せず日たかくなりぬとともなるものいそがせばてゝをたゝむてとさへも物うく覺ゆれど限ある道なればたちぬ道すがらも忘るゝひまなしからくしてつくしに行つきてもろこしの人にあひてことをうけながらもろこしの人又ひかせてきくに此むまやにならへりししらべを聞て感じめづること盡せずさてかのいひしまゝに心をいだして經をかき佛を供養しさていそぎのぼるもとくありしむまやにゆきていまひとたびあはむことをおもふ扨其むまやにとまりぬはしめのやうにひをとりのけてことをひきすまして今や今やとまつにみえず口おしく心うく思こと限りなしよあけがたになりてのきちかくもたなびくやうにみゆ在し聲にて申しゝにかなひてうれしく善根を修せさせ給ひたりしちからにて天人にうまれて候なりと云てさりぬいと〳〵かなしきことたくひなし扨此歌をばむまやのかべに書付てぞたちにける京にのぼりてももろこしのをならひうけたるよりも此むまやにて習たりしをぞみかとよりはじめてめてたきてとにはめあへりけるこれを思ひ合すれば世說に王敬伯と云人洲渚のうちにとゞまれりいへにのぼりてやどれりこよひ月あかく風すさまじ敬伯琴をひく劉原明が亡女の靈いたりつきてありさまいけりし時にたがふことなし敬伯琴をなでゝよくうたふといへるがよく似たることそあはれなれさかひはことなれどこゝろはおなじかるべし

漁獵部

鵜河

としごとにあゆしはしればせきつがは
　　うやつかつけてかはせたづねむ

萬葉第十九に有家持歌也うやつかつけとは鵜を八頭

つけてとよめるなり
しらかはのせをたづねつゝわがせこは
うかはたゝせばこゝろなぐさむ
六帖第三にあり同人歌なりうかはたゝすといへり
うかはたちとりはむあゆのしたはたえ
われはかぎりにおもひおもへは
同二にあり同人歌也したはたえとはみつきよきひと
をあゆはだといへばよそへたるにや
夜河　或本に阿字あり
めひがはのはやきせごとにかゞりさし
やそとものをはうかはたちけり
萬葉第十七にあり八十伴男とはやそうぢ人と云かこ
とし
かゞりびのかげしうつればうはたまの
よかはのみづのそこもみえけり
六帖第三にあり貫之歌なりうはたまのよかはといへ
り
かつらがはよるかひのぼるかゞり火の
かゝりけれともいまこそはしれ

同二にありよるかひのぼるとよめり
網代
ものゝふのやそうぢがはのあじろきに
たゞよふなみのゆくへしらずも
萬葉第三にあり物部の八十氏河
みよしのゝよしのゝかはのあしろぎは
たきのみなあはぞおちつもりける
六帖第三にありよしのがはにあじろありとみえたり
網
あふことはかたよせにひくあみのめに
いはけなきまでこひかゝりぬる
六帖第三にあり
すみよしのつもりのあみのうけのをの
うかびかゆかむこひつゝあらずば
萬葉第十一にあり
網子
おほみやのうちにてきけはあひきすと
あことゝなふるあまのよびこゑ
萬葉三にありあびきはあみひくといへりあごとはあ

みひく人を云

栲縄

いせのあまのちひろたくなはくりかへし
みてこそゆかめひとのこゝろを

六帖第三にありたくなはとはあみの手縄を云なり日本紀云天神のみつかひのふたばしらの神出雲の五十田狭の小汀にくだりまして大己貴神にみてとのりせしめたまふ汝天日隅の宮にすむべしいまさらにつくりまつらむすなはちゝひろの栲縄をもてもゝむすびあまりやそむすびにしてそのみやをつくらむのりにすべしと云

簗

やまがはにうへふせをきてもりかへに
としのやと世をわかぬすまひし

萬葉十一にありうへとはいをとるものなり

維

とりあみのささるいとまはおはかれど
かゝるはゝやのひとめなりけり

萬葉に有きさるとはくさると云てとばなり

鵾鷄賦跨崐崙而播戈冠雲霓而張羅維綱維之備設終日之所加也云々かゝるはゝやくひとめなりけりと云る心これにかなへり

照射

さつきやみともしにかくるともしびの
うしろめたきをしかやみるらむ

長元八年關白家卅講之次歌合赤染がよめる右方の歌也輔親判者にて此右の歌よしと思ふあひたに左の人人ともしびとはいかによめるぞ人の宿にともすをこそさはいふめれと申すに右人のふるくもともすとはよめりとまうせどこのともすによりほかにはりしと云となしとて右をまくるになしつのちにながたみの四條大納言の入道して居玉ひけるがみて赤染がうたまけたるはまことにみしりたる人のよの末になりてうせたるにこそあんめれとぞ宣ひける

やまのへにあさるさつをはあまたあれど
やまにものにもさをしかなくも

萬葉十にありあさるとはかるを云なりさつおとは五月にかりする人を云とぞ。いひならひたるはひがこ

なりさつおとはしづのおと云ことばなりさとしとは
をなじてゑなりされはおなじまきの歌に
やまべにはさつおのねらひおそろしみ
をしかなくなりつまのめをはり
此歌の心はしかなきてつまを思と云へるなれば五月
にはあらずときてえたりはりとは思と云なり
あつさゆみすえののはらにとかりする
きみかゆつるのたえむとおもへや
六帖にありとかりとはとかりと云なり

服餝部

衣

たなばたのいほはたゝてゝおるぬのゝ
あきさりごろもたれかとかみむ
萬葉第十にありいほはたとは五百のはたと云なり
ひとつまにいふはたがことすごろもの
このひもとくといふはたがこと
萬葉十二にありす衣とはわたなどもいれでむなしき
衣を云なり
つくはねのにゐくはまゆのきぬはあれど
きみがみけしかあやにきほしも
萬葉十四にありにひくはまゆとはあたらしきくはま
ゆといふなり
ふるゆきのみのしろごろもうちきつゝ
はるきにけりとおどろかれぬる
後撰第一にあり藤敏行正月一日二條后宮にて白きお
ほうちきを給りてよめるなりみのしろ衣とは雪など
ふる時にうへにきたる。云なり
やまざとのくさばのつゆはしげからむ
みのしろころもぬはずともきよ
中原師輿が歌なりこれにもみのかはりのころもとみ
えたり
そらをとぶあまのはころもえてしがな
うきよのなかにからもとゞめじ
六帖第五にありあまのはころもとは天人の衣なり天
人は飛レ天とてかくよめるなり殿上人をは天人にた
とふるはその衣をあまのはごろもと云
たなばたのくもの衣をひきかさね
かへりてぬるやてよひなるらむ

後拾遺四にあり堀河右大臣歌なり雲衣は本文なりひとをこふるにはころもをかへせばゆめにみゆといへばかくよめる

くれなゐのうすそめころもあさはかに
あひみしひとにこふるこのごろ

萬葉十二にあり

いかにしてこひをかくさむくれなゐの
やしほのころもまくりでにして

古今十九にあり住吉の國基はくれなゐにまふりでと云色のあればまふりてと云べきぞまくりでと云となしと云けるか良暹法師はかざこしのみねよりおるゝしづのをのきそのあさきぬまくりでにしてといへればまくりでと云となきにあらずとぞ申けるかざこしのみねはしなの〻くに〻あり風つねに吹こす所なりきそのあさきぬもやがてしなの〻國のきその郡にをりいだせるなり

つくまのにおふるむらさきゝぬそめば
いまだきずしていろにいでにけり

萬葉第三にありむらさきの衣とは上達部の衣を云也

おもひきやきみがころもをぬきかへて
わかむらさきのいろをみんとは

後撰雜一六帖第五にあり九條右大臣のよみ玉へるなりこれは大臣の衣とみえたり可尋也

つるばみのあはせのきぬのうらにせば
われみゐめやもきみがきませぬ

萬葉十二にありつるばみとは四位のうへのきぬを云なり扱われみゐめやもとはよめるなり

つるばみのきぬきるひとはことなしと
いひしときよりきまほしくおもふ

六帖五にあり昔は四位したる人はとがありけれどをはろげにてはとがをおこなはれざりければかくよめるとぞ

たまくしげふたとせあはぬきみがよを
あけながらやはあはんとおもひし

公忠歌也あけながらやはとは五位の緋衫をきながらやはといへるなり委見大和物語

からあひのやしほのころもあさな〳〵

なるとはきけどましめづらしきみ

六帖第五にありからあひのやしほの衣とは緋袄を云へ
り六位のうへのきぬなり

ときならぬまたらころものまはしきか

しまのはりはらときにあらずとも

萬葉七に有班衣といへり

すみよしのとほざとをのゝまはぎもて

すれるころものさかりすぎゆく

萬葉第六にありまはぎもてするとよめり

つきくさにころもはすらんあさつゆに

ぬれてのゝちはうつろひぬとも

同第七にあり月草とは移花なりされぼうつろふとよ
むなり

すみよしのあさゞはをのゝかきつばた

きぬにぬりつけきむひしらずも

同にありかきつばたきぬにするとよめり

みちのくのしのぶもぢすりたれゆへに

みだれそめにしわれならなくに

古今十四にあり河原大臣の歌也もちずりとはみちの
國のしのふの郡にすり出せるなりうちゝがへてみた
れがはしくすれり遍照寺のあしすだれのへりにて有

おもふともしたにをゝもへむらさきの

ねすりのころもいろにいづなゆめ

六帖第五にあり

ひとしらでねたさもねたしむらさきの

ねすりのころもうはきにをせん

後拾遺第十六にあり堀河右大臣の歌なり昔紫のきぬ
下にきて男とねたりけるにあせにぬれてみにうつり
なむとしてきぬもじすりのやうになれりけりねたる
にうつりたればねすりと云なり但紫はねに色のあり
てそれをほりてそむるものなればねすりといふとぞ
いはれたる

としゆくにひしまもりのあさごろも

かたのまよひはたれかとりみん

萬葉七にありにひ島守とはあたらしき島守と云也か
たのまよひとはめゆひと云心なり

よをいとひてのもとごとにたちよりて
　うつぶしぞめのあさのきぬなり
古今第十九（二十イ）にありふし（五倍子）ゝては僧の衣を染るによそへ
てうつぶし染とはよめるなり
けころもはゝるふゆまけてみゆきせし
　うたのおほの（野）はおもほゆるかも
萬葉第二にありけころもとはけにきるころもと云（フ）也
褻服とかけり鶴の毛衣と云は毛衣なり
あつふすまなごやがしたにねたれども
　いもとしねゝばはたへさむしも
萬葉第四にありあつふすまとは蒸被と書りなごやと
もふすまを云なり日本紀に見えたり
裳
いかならん（む）ひのときにかもわきもこが
　もひきのすかたあさにけにみむ
萬葉十三（二イ同）にあり裳引容儀とかけり
をとめこがたまもすそひくこのにはに
　あきかぜふきてはなはちりつゝ
同廿にあり

たちておもひゐ（居）てものおもふくれなゐの
　あかもたれひきいにしすがたを
六帖第九（五イ）にあり
帯
むらさきのおびのむすぶもとくもみず（同）
　もとなやいもにこひわたりなむ
萬葉十二にあり紫の帶とよめりもとなやとはこゝろ
もとなしといへる心歟
あづまぢのみちのはてなるひたち（常陸）おびの
　かごとばかりもあひみてしがな
六帖第五にあり紀友則歌なりひたちおびとは兩說あ
りかの國の人かごとゝ云（フ）くみをひらなるおびのやう
にして荷をおふを（緒）にするを云なりこれはわろき說な
るべしひたちの國かしまの明神の祭の日女のけさふ
人あまたあるにはそのなをぬのゝおびにかきあつめ
ておまへにおくにそれがなかにすべき男のなかきた
るおびのうらがへるなりそれをとりてやがておまへ
にてかけ帶のやうにするなりそれをききつればその
男かこちかゝりてしたしくなるなりされはかことゝ

かこつと云こゝろなり

資用部

鏡

ますかゞみあかざるきみにをくれてや
　あしたゆふべにさびつゝをらむ

萬葉四にあります鏡とはますみの鏡同事也眞澄と書けり日本紀には白明鏡とかけり

はしたかの野もりのかゞみえてしがな
　おもひおもはずよそながらみむ

雄略天皇御時にたかをうしなひてもとめありく程に渇に及べり爰に野中に一の翁あり問て曰なむ人ぞ答て曰野守に侍る又問て曰水の所をしれりや答て曰しれりすなはち大なる樹をさしてかの下に水あり仍て到りて飲んとするにたかのかけうつれりあふきてみればうしなひたるわがたかなりされはしたかのゝもりのかゞみとよめり或秘抄云此歌古歌二首也

はしたかのゝもりのかゞみえてしがな
　こひしきひとのかげやうつると

あつまぢのゝもりのかゞみえてしがな
　おもひおもはずよそながらみむ

とよめるを一首にかけりと云々西京雜記云高祖初入咸陽宮周行府庫有方鏡四尺九寸表裏有明人宜來照之影倒見以手掩心而來即腸胃五臟歴然無礙人有病則掩心而照之即知病所在又女子邪心膽張心動秦始皇帝以照宮人膽

やまどりのをろのはつをのかゞみかけ
　となへつゝこそなきゆすりけれ

古歌也本文山鳥の所にみえたり

みるからにかゞみのかけのつらきかな
　かゝらさりせばかからましやは

後拾遺十七に有王照君を懐圓法師がよめるなり昔漢王三千人の妃あり胡のえびす奏して云く妃一人給はらむもしたまはらずは國の爲にあしく給はりたらば國のかためとならむと申す王これを聞てみめぐらむに數多ければ畵工を召て三千人のかたちをかきうつさせて中にもみにくからむを給はむとす仍畵工にわれもわれもと黄金のまひなひを送る王照君鏡をみるにかたちよにすぐれたるをみづからたのみてまひなひをせず此故にふでを僞りて照君をみにくゝかけり

仍えびすにたぶ時み玉ふにかたちたぐひなければえびすみつればとゞめかたしつひにゐてさる頃は八月ばかり月あかゝりけり照君(昭イ)ふるさとをかへりみつゝなげゝどかひなし漢書にみえたり　詩云愁苦辛勤顦悴盡如今却似二畫圖中一　李白　照(昭イ)君若贈二黄金賂一定是終レ身奉二帝王一　江相公

玉匣

みつのえのうらしまのこがたまくしげ
あけてのゝちぞくやしかりける

此歌は浦嶋子傳にあり昔うらしまの子と云人ありきよはひ三百歳に過たれどかたちわかし水の江の浦にあそびていをゝつるにおのづから大なる龜を釣えたりをそれたまふてふねのうちにねふれりときに此龜化して玉の顔なる神女になりぬしまのこ問神女答て云く我は蓬萊宮の仙女なりさきの世にめをとこにならんとちぎれり仍こゝに來と云しまのこ此とを信せり神女の云しばらくねふれしばらくねふる程に蓬萊にいたれりおとろきてみるに奇妙ならぬとなしかくてありつる程にしまのこふるさとこひしくなりぬ神女此けしきをしりてはやくかへれ我おくらむと云て玉匣のにしきをもちてしたまをもてむすびたるをとらせて云く此蓬萊へかへらむと思はばかたくつゝみてあくべからずあひがたくして別やすしまことにあはれなるかなといひててづからかひて涙を拭ふ嶋の子かへりてみるに其里もなくみし人もなくなれりくやしく思てかの蓬萊をこひてをりなぐさむるかたなくて神女のもたせたるはこをあけてみるにさせるものなくてたゞ紫の雲ぞ出ていにける其後嶋の子年假によりてあけつるとをくやしく思ひけれどかひなくてはてにけり委見二延喜二年浦嶋子傳一

いにしへのうらしまのこがつりふねは
おなじうら(浦)にぞみとせこぐてふ

四條大納言抄に浦嶋子は雄略天皇の時の人なり三年こぐと云と可レ尋なり

櫛

おとめこ(なイ)がたまくしげなるたまくしの
めづらしげなるいもにあはむわれは(あれはは吾なるべし)

萬葉第四にありたまくしとはよきくしと云なり

きみなくはなぞみのかさりはこにある

つけのをくしもとらんとおもはぬ

同九にありつげのをくしとはつげのきのくしと云也湯津抓櫛は神代上素盞烏尊天より出雲國簸の河上にくだります時川上になく聲あり聲を尋て覔往者老公老婆となかにひとりのをとめをすえてかきなでつつなく問て曰誰也なくとなむぞ答て云ふ吾は國神也童女吾見也號奇稻田姫吾兒有二八ケ小女一年ごとに八岐大蛇ためにのまれにき今此をとめ又のまれなむとす素盞烏尊勅曰然者汝以レ女奉レ吾耶對曰みことのりのまゝに奉素盞烏尊立化奇稻田姫爲二湯津之抓櫛一揷二於御髻一云々兼相與遘合生二兒大己貴神一云々

枕

あしかりのまのゝこすけのすがまくら
　　あせかにかさんてろせたまくら

萬葉十四にあり

簾

たまだれのこずのまとほしひとりゐて
　　みるしるしなきゆふつくよかな

萬葉にあり玉垂とかけりたまたれとは玉すだれと云也玉簾珠簾と本文に云りこれはたまだれたるこすといへるなりまとほしとは間通といへるなり

たまたれのあみめのまよりふくかせの
　　さむくはそへていれむおもひを

後撰十六にありかれこれ女のもとにまかりてもの云けるに女のあなさむの風やと云ければよめるなりこれは玉のすだれをたゞ玉だれとよむとみえたり古今十七に玉だれのこがめはいつらとよめりそれは玉のやうなるものをやきたれたるかたをいへはこれにたがへり

莚

ひとりぬとゝこくちめやもあやむしろ
　　をになるまでにきみをしまたん

萬葉十一にありあやむしろとは文あるむしろと云也

いなむしろかはそひやなきみづひけば
　　なびきおきふしそのねはうせず

いなむしろとは水の底に莚をしきたるやうなるいしを云なり又いはの水の底に柳の葉のやうなる草の莚をしきたるやうにおひたるを云なりこれぞさもとき

こゆるかはそひやなぎとはたゝよみならべて物ふたつをいへるにやあらむ

顯宗天皇御製在日本紀十五卷

薦

みちのくのとふのすがごもなゝふには
　　きみをしなしてみふにわれねむ

古今廿にありかの國にとふの郡と云處のあればそれにつきてとふのすがごもとよみてやがてふのとをあるにとりなせるとぞ聞えたるたゞとふあることもといはばみちの國にかならずあるべしとみえたることなし

蓑

わかせこかゝさのかりてのわさみのに
　　我はいりぬといもにつけこそ

萬葉十にありわさみのとよめりつけこそとはつけてせと云詞なりそとせとは同ことばなり

笠

おはきみのかさにぬふてふありますげ
　　ありつゝみれどことなきわきもて

萬葉十一にありつのくにのありまのこほりのすげとよめるなり

をしてるやなにはすがゝさおきふるし
　　のちはたがきむかさならなくに

同二にありこれも津の國のなにはなり

みしますげいまだなへなりときかば
　　きずやなりなむみしますがゝさ

同二にありこれもつのくにのみしまなり

わきもこがそでをたのみてまののうらの
　　こすげのかさをきずてきにけり

同にありそでかさをたのみてといへるなり

秤

くれはかりわれをなゝめてたのめつゝ
　　さやにやきみかわれをはかるな

六帖第五にありくれはかりとはかろはかりと云なりたてをしてをもきを云ぞと申人のあるはよきひがことなりくれといひかろと云はをなじこゑなり

籠

うみをなとなみだにぬるゝてともうし
まなみかたまをいかでたみゝむ

古歌也日本紀曰火闌降命有ニ海幸一弟彦火々出見尊有ニ山幸一相語曰試欲レ易レ幸遂相ニ易之一各不レ得ニ其利一弟失レ釣無レ由レ覓兄忿急責故弟憂苦甚深行ニ吟海畔一時逢ニ鹽土老翁一老翁問曰何故在レ此愁乎對以ニ事之本末一老翁曰勿ニ復憂一乃作ニ無目籠一内ニ彦火々出見尊於籠中一沈ニ于海一即有ニ可怜小汀一爰棄レ籠遊行忽至ニ海神之宮一門前有ニ一井一々上有ニ一湯津桂樹一就ニ其樹下一彷徨海神鋪ニ八重席薦一延内レ之即語ニ情之委曲一海神乃集ニ大小魚一逼問之唯赤女々々鯛魚名也有ニ口疾一不レ來探レ口者果得ニ失釣一已娶ニ海神女豊玉姫一已終ニ三年一海神乃曰天孫若欲レ還レ郷者吾當レ奉レ送便誨曰與ニ釣兄一之時陰呼ニ此釣一曰ニ貧釣一然與レ之又授ニ潮滿瓊及潮涸瓊一誨曰潮レ兄如レ此逼惱兄伏已還レ宮隨レ教兄伏罪曰吾將爲ニ俳優之民一云々一云海神誥召ニ鰭廣鰭狹一問之口鯔女口疾云々立得レ釣海神制曰儞口女從レ今以往不レ得ニ呑餌一又不レ得レ預天孫之饌一即以ニ口女一所ニ以不レ進レ御者此緣也一云海神曰宜在ニ海濱一作ニ風招一云々即如レ此則吾起ニ瀛風邊風一以ニ奔波一溺惱今歸來居レ濱嘯之時迅風忽起兄溺苦云々

鍋

あふみなるつくまのまつりはやせなむ
つれなきひとのなべのかずみむ

伊勢物語の歌なりこゝろかけたる女のしのびてことひとにもの云ときゝてほどへてのちにつかはすとてよめるなりかのつくまの社の祭には其里の人をとこしたる數にしたがひて鍋をつくりていたすなりさればかくよめり

針

くもゐよりくたれるいともすげつべし
うみのそこなるはりをえつれば

類聚抄にあり赤染歌なり人の身となり佛教にあふことは梵天の上よりさがれる糸の大海の底にある針のみみにつらぬかんよりもかたしと法文に云りされば人の身に生れたれば佛教にあひて生死は出ぬべしとよめるなり

斧

をのゝえはくちなばまたもすげかへむ
　うきよのなかにかへらずもかな

六帖第二にあり

機

あしだまもてだまもゆらにおるはたは
　きみがころもにぬはんとぞおもふ

六帖第三に有手玉もゆらにとは日本紀第二云天孫吾勝神に聞てのたまはくそのさきたつるなみのほのうへにしてやひろのとのをたてゝ手玉玲瓏はたおるをとめはこれたれがむすめぞ答てまをさく大山祇神のむすめともなりと云々

絡染たゝり

をとめてがうみをのたゝりうちをかけ
　うむときなしにこひわたるかに

萬葉十一にあり

反轉

わきもてにこひてみだるゝくるめきに
　かけてしよりなわれこひそめし

萬葉第四にありくるめきとはいとをかけてくるものなりぬのおるにもこれはあり

火

日本紀一書或曰伊弉諾尊斬軻遇突智命爲五段此各化成五(三)山祇斬血激灑染於石礫樹草此草木砂石自含火之縁也

頭註書入云此注文岡本は全く本書と同し紀州本は改正したるかたさ合但三段三山の三字共に五に作る

きみまもるゑじのたくひのひるはきえ
　よるはすがらにもゆてそはすれ

六帖にあり衛士とは諸陣にありみかきをもるものなりひたきやにてよるはひをたくべきなりされどつねにたくこととはみえず位に即せ玉ふ時ひたくまねをするなり

佛神部　此三字紀州本にも岡本本にもなきは脱たる也

寺

あひおもはぬひとをおもふはおほてらの
　がきのしりへにぬかづくがごと

萬葉にあり昔はてらに餓鬼をつくりすえたりけりそれをしらでをろかなる人佛と思ひてぬかつきたりけるなりされば思はぬ人を思ふなむにたるといへり

佛　佛と云部寫本書落せりや他本を求めて書くべし此外前後にあり

經

こふつくすこのみたらしのかはがめは
　　のりのうきゝにあはぬなりけり

玄々集にあり女院御八講に捧物をかねしてはうらいをつくりてたてまつらせ玉ふとて前に齋院選子内親王のよみ玉へるなり法華經第八に如ニ一眼之龜値ニ浮木吼ニといへる心なり

くらきよりくらきみちにぞいりぬべき
　　はるかにてらせやまのはの月

玄々集にあり和泉式部歌也從レ冥入ニ於冥ニ永不レ聞ニ佛名ニといへる法華經の三卷之文の心なり

僧

このみゆきちとせをかへてあらせばや
　　かゝるやまぶしときはあふべく

六帖にあり素性歌なり

しらかしのしらぬやまちをそみかくだ
　　たかねのつゞきつみやならへる

長能歌なりそみかくだとは山伏を云ふ

みねたかみやまにしまろぶそみかくた
　　さゝらえをとてひとりまつらん

公實卿獨待山月と云題の詠なりさゝらえおとて見ニ月解部ニ歟

鐘

しもまつかね

山海經曰豐山有ニ九鐘ニ是和霜鳴郭璞注曰霜降則鐘鳴故言の如也物有自然感不レ可レ爲也

念珠

このよにて菩提のたねをうへつれば
　　きみがひくべきみとぞなりぬる

朗詠下にあり御八講のをくり物菩提子の念珠をつかはすとて左相府のよみたまふなり

つらぬける玉のひかりをたのむとも
　　くらくまとはむみちぞかなしき

赤染歌也

神

やちはこのかみのみよゝりともしへの
　　ひとしりにけりつぎておもへば

萬葉十にありやちはこの神とは

かみのますはやせにしのぶからふねの
　　をとにたてしとつゝむわりなさ
古歌也荊州記曰魚腹縣瞿唐灘上有二神廟一先極靈刺又二千石經過者不レ得下鳴二鼓角一高振上恐レ觸レ石有二乃以レ布裹揚レ是
かはやしろしのをおりはへほすころも
　　いかにほせどもなぬかひさらん
ゆくみづのうへにいのれるかはやしろ
　　かはなみたかくあそぶなるかな
河社神義也河神樂とて河の上にやしろをいはひてしのをゝりふせてその上にものをうかぶることくにくににあるべしされはかはやしろとはたゞかはのうへにいはふを云とのみかくいひならはしたるを江中納言集にしみづのみてくらのぢむとかきて
ほさはやなしいをゝりはへほすころも
　　しみづのみやのながれたえせて
とよめりもろこしやまとのことよく〳〵ふかくしりたる人のよまれたればあた〳〵しきことはあらじ此歌の心ならばかはやしろとはやはたを申にやしみづの宮とはことゝころを云べきならずあらはにそれとみえたりいづれもひがことにはあらぬなるべし古今にはしのにをりはへともかきたる本ありしのをゝりそへとよめるはしのだけをゝりしきてと云なるべしなぬかひざらんと云ことはなきなたてるをばぬれきぬと云を七日までいのれどなきなと云ことのあらはれねばほせどもひぬとはよめるなり
いなりやまみつのたまかきうちたゝき
　　つきねきことを神もこたへよ
後拾遺廿にあり恵慶法師歌なりみつのたまがきとは瑞籬とは神かきを云ことゝろなれど又いなりのみつのやしろにておはしますこゝろによめるなるべし
あめのしたはぐゝむかみのみぞなれば
　　ゆたけにぞたつみつのひろまへ
同にあり讀人不レ知大貳成章肥後守にはべりける時あそのやしろに御さうぞくたてまつり侍けるにかの國の女のよみはべりけるなりゆたけにぞたつとはゆたかにそたつと云なりみつとは瑞也已上見二日本紀一
あまかたのをかのくやたちきよければ

にこれるたみか○はねすゝしき

日本紀第十ほむたの天皇九年武内宿禰をつくしにつかはすそのをとゝ甘美内宿禰このかみを讒言武内宿禰わめのしたをねかふ心ありとこれによりてつかひをつかはして武内をころしむ爰に壹岐直の祖眞根子とものよく武内がかたちに似たりひとり武内がつみなくてむなしくしなんことを歎きて曰大臣既に黒心なしねがはくはひそかに都にまうでましてつみなきことをわきためよ人の曰く僕かたち大臣に似たり大臣にかはりてしなむとて釼にあたりてしす武内ひとりかなしんで舟よりみかどにまうでゝつみなきことをわきたむ二人あらがふ是非さだめがたし勅して神祇に申して探湯二人ともに礒城の河はとりに出でてくかたちず武内かちぬすなはち弟をうちたふしてころさむとす天皇勅してゆるさしむ

祝

あちさけをみわのはふりがいはひおきて
　ふれしつみかきみやあひがたき

萬葉四にあり

うとはまにあまのはごろもむかしきて
　ふりけんそでやけふのはふりこ

後拾遺廿にあり式部大輔資業伊豫守なりける時彼國の三嶋明神にあづまあそびしてたてまつりけるを能因法師のよめるなり昔するがの國のうとはまに神女の天降りてまひしをうつして今の世にはするが舞とてあづまあそびにするなり

巫

やをとめのそでかとみゆるをみなへし
　きみをいはひてなではじめてよ

六帖にありやをとめとは八人のかむなぎを云ふなり

端出繩

ゆふだすきしめなはかけていのれはぞ
　かみもかたひくこゝろつきけむ

寛治七年五月五日郁芳門院の根合の歌ありてのち左方人の賀茂御社に參りてきほひ馬しけるなり讀人不知日本紀第一天照大神天のいはとをあけてみそなはする時に手力雄の神みてをうけ給りて引出し奉るこゝに中臣の神忌部の神端出之繩を引わたしてすなはちことひうけ申て

勿復還またなかへり幸そと云て同に云太玉命をして弱肩に
羅の太手繦をとりかけて御代手にして皇孫をまつり
はじめてまつりき

木綿

みつのやま山へまつゆふみしかゆふ
かりのみゆへになかれとおもひて

萬葉二にありまそゆふとはまをのゆふと云なり日本
紀に云天日鷲命をして作木綿とすと云り呉錄地理志
曰交趾定安縣有二木綿樹一高大實如レ須林中有レ綿如二
蠶綿一又可レ作レ布名曰レ緤一名毛布羅浮山記曰木綿正
月則花大如二芙蓉一花落結レ子方生葉即子內布綿々甚
白蠶成熟倚人以レ爲レ蘊如レ立各本同恐衆字

織

ちはやふるかみのやしろにわがゝけん
ぬさをばたまへいもにあはなそま

六帖にあり日本紀第二云天稚彦の神にみことのりし
てのたまはく豐葦原の中國はこれやつがれがみこの
王たるべき地なりしかるをおもむはかるに殘賊强暴
あしきかみどもあるらん故いましさきにゆきてたひ
らげよと云々ちはやふると云こと丶よりはじまれ
りぬさとは幣を云也

手繦

もゝたらすやそすみざかにたむけせば
すきゆくひとにさしあはんかも

萬葉にあり日本紀に云大己貴神ましくやつかれこ
の廣矛をもてなせることなり天孫このほこをもてく
にをさめ玉ふべくはかならず常平安いまやつが
れまさし百不足之八十隈にかたれなむことを終てつ
ひにかくれたまひぬと云々

以書本一校

和歌童蒙抄第七

草部

春草　蕨　躑躅　菫菜　杜若

款冬　藤花

夏草　卯花　葵　瞿麥　蓮

菖蒲　早苗　菻

秋草　萩　女郎花　蘭　薄

苅萱　菊　稻

冬草

雜草　竹　黄蓮(かくもくさ)　忘草　忍草

鷄頭草(すゑつむはな)紫 辛藍イ　阿千左井　百合　葎

茅花付茅　亭イ同 イにはなし　朮　萩　山橘　麥門冬(やますげ)

菅　蔣　葦　菱　蓴　芹　葱(こなぎ) 蒀

蓼

海藻(なのりつ はまも)　濱木綿

木部

春

梅　柳　桃　櫻イ同 イにはなし　花付餘花

夏

樗　花橘

秋

紅葉　落葉

冬

埋木　簗木 此二條イになし

雑 イにあり

桂　松　檜　杉　椿　榊　栢

槻　桑　石南草（楠イ）

草部

春草

おも○ろきのをばなゝやさそつるくさに（しイ）（野）（イナシ）（ふイ）

にゐくさまじりおひばおふるかに

萬葉十四にありふるきくさにあたらしきくさおひまじれるとよめるなり新草とかけり

蕨

いはそゝぐたるひのうへのさわらびの

もていづるはるになりにけるかな

萬葉八にあり志貴王子の歌なりいはのうへにそゝぐ水のいはよりたるこほりたりにさわらびもえいづと（ゐあたりにイ）よめるか又垂見と書たる本ありたるみと云ふ野のあると云ふべしされど同き第十二云石走垂水之早敷八師君爾戀良久吾意柄とよめりこれにてこゝろうるにいしよりたるみづのほとりとみえたりうへとほとりとはそのこゝろかよひたり上と云ふ文字をほとりとよむなり

むらさきのちりうちはらひはるのゝに

あさるわらひもものうげにして

堀川院百首顯季卿歌也古詩云紫塵嫩蕨人拳レ手と云へり或説嫩字（嫩歟イ）はわかきとよむべきなりと云へるは僻事なり嫩字をこそわかしとはよむめれ作を不レ辨歟

躑躅 イかゞ草の部に入るや イになし紀州本には朱にてかけり

はるやまのつゝじのはなのにくからす（ぬ）

きみにはしゐやよそふともなし

萬葉第十にありしゐやとはうれしと云ふなり思咲と書けり喜哉委見ニ日本紀第一ー

菫菜

ちばなぬくあさぢかはらのつぼすみれ

いはさかりなりわかてふらくは

萬葉第八にありちはなつばなをなしてとなりちとつとは同音也つはなまじりのつはすみれとは此歌をみてよめるなり 春水云堀河百首に我宿の妹が垣根は荒にけりつばなまじりのすみれのみしてイになし紀州本には朱にてかけり

杜若

かきつばたにほへるきみをいざなみに

おもひいでつゝなげきつるかな

萬葉第十一にありいさなみとは引率とかけりいざなはれてと云心也催字をばいざはひとぞ日本紀にはよみたる

かきつばたきぬにすりつけますらをの

きそふかりするをきはきにけり

同十七にありますらをとはいやしきものたけきものなどを云なり健男又は大夫と書りきそふはあらそふと云なり

款冬

やまぶきはならへつゝをはさむありつゝも

きみきましつゝかざしたりけり

萬葉廿にありならへをほすとよめり

藤花

いもがいへにいくりのもりのふぢのはな

いまこむはるもつねかくしみむ

萬葉第十七にあり いくりのもりにさくとみえたり

たごのうらのそこさへにほふふぢのはな

かざしてゆかんみぬ人のため

同第九にあり たごの浦はするがの國にあり藤やま吹などさく處なり此歌は藤歌の本體にひくと匡房卿の承暦の歌合にいへるなり

いさゝめにおもひしものをたごのうらに

さけはふぢなみひとよへにけり

いさゝめとはしばしといふことなり

春水云たごのうら越中の國にもありイになし紀本には朱にてかけり

夏草

ひとごとはなつのゝくさのしげくとも

いもとわれとしたづさはりなは

萬葉第十にあり

わがせこにわがてふらくはなつくさの
かりはらへどもおひしをがごと
同第十一にあり　おひしくとはおひしげると云なり

卯花

けふもまたのちもわすれじしろたへの
うのはなにほふやどゝみつれは
六帖第一にあり貫之歌也にほふとよめり
ときわかずふれるゆきかとみるまでに
かきねもたはにさけるうのはな
後撰第四にありかきねもたはにとはたはむまでさきたると云なるべし又たはとはたへにといふにやとも

葵

あふひくさてるひはかみのこころかは
かげさすかたにまつなひくらむ
堀河院百首基俊作也日向葵とひのかげにかたむくなり

瞿麥

わがやどのなでしこのはなさきにけり
たをりてひとめみせんともがな
萬葉第八にあり　なでしこをるとよめり
みわたせばむかひのゝべのなでしこの
ちらまくをしもあめなふりこそ
同第十にありあめにちるとよめり
あなこひしいまもみてしがやまがつの
かきほにおふるやまとなでしこ
古今十四にあり本文に鍾愛勝衆草といへればはなでしこと云也さればおもはしきものによせてよめるか

蓮

はちすはゝかくてぞあるものをいき丸が
いへにあるものかいものはにあらし
萬葉第十六にありいきまろとは人の名なり蓮葉と芋葉とは似たりといへばかくよめるか
春水云意吉丸の書イになし紀本には朱書
はちすばのにごりにしまぬこゝろもて
なにかはつゆをたまとあざむく
古今第三にあり僧正遍昭歌也經云不染世間法如蓮花在水されば　いさぎよき心に露を玉とあざむくとよめり
はちすばのうへはつれなきうらにこそ

ものあらがひはつくといふなれ

後撰第十三にあり消息かよはしけれどまたあはすありける男をあひにたりといひさはぐをきゝながらあはさりと女のこゝろやみつかはしければよめるはちすのうらにかひつくとみえたり

菖蒲

ほとゝぎすいとふときなしあやめぐさ
かつら○せんひもこゝなきわたれ

萬葉第十にあり聖武天皇天平十九年五月に南苑観に御して騎射走馬せしめ給ふに此日詔して宣はく昔五日の節に菖蒲をもちて夢とせり今よりのちあやめのかづらせざらむものはみやのうちにまゐることなかれといへり委見二日本紀一

春水云續日本紀第十七巻悉古今集云日本紀にはつかへまつらめ萬代までにさいへる如く縵の字なけさ一例なりイになし紀本には朱書也

さはへなるみこもかりつけあやめぐさ
むへもねなからおひそめにけり

六帖第一にあり貫之歌也かりつけとはかりさけと云フ也みこもとは水蒋と云る也

みかくれてをふる五月のあやめぐさ
かをたつねてや人のひくらん

同二にあり同人歌也あやめは深き水におひがたければかくれたることなけれとかくよめり

つくまえのそこのふかさをよそながら
ひけるあやめのねにてしるかな

後拾遺第三にあり永承六季五月五日殿上根合に良暹法師がよめるなりあやめぐさとよまでたゞあやめとばかりよめりあやめとはめのわらはべがくちなはなどをこそいへと右大臣殿は難じ玉ひけるされど集にいれるいと難にすべからぬことなり

早苗

みたやもりけふはさつきになりにけり
いそげやさなへおひもこそすれ

後拾遺にあり好忠詠也みたやもりとは田もるもの也おひも社すれとは時もそ過ると云フ也

はつなへにうすのたまゐをとりそへて

いくしまつらんとしつくりゑに

堀河院百首俊頼朝臣詠也うすのたまゑとは以下落文

のてりたはそしろにすきしあすはたゞ

ゆひもやとはでさなへとりてん

同百首隆源詠也そしろとは十代と云也ゆひとはたう

たとて人をやとひてたをうへさせて又そのかはりに

かならずうふるを云也

さなへとるてらかもすそもひちにけり

日本紀第九神功皇后識二神教有一レ驗定二神田一而佃

時引二難河水一欲レ堀レ溝及二于迹驚岡一大磐塞召二武

内宿禰一捧二劔鏡一令レ祈二神々一當時雷電蹴二裂其磐一令

レ通レ水故人號二其溝一曰二裂田溝一

うなてのみつのありあぎりして

蒜

なつのいけによるべさだめぬうきくさは

みづよりほかにゆくかたもなし

或本云延喜十三年亭子院歌合第廿三番に左にて興風

がよめるなりうきくさはねもなくてうかれありくな

り晋司馬歆詩曰汎々江漢蒜　飄蕩永無レ根

秋草

萩

そまかたのはやすはじめのさのはきの

衣につくなりめにつくわがせ

萬葉第一にあり綜麻形とかけり狭野榛とかけり

わがやどのひとむらはきをおもふこに

みせずほと〳〵ちらしつるかな

萬葉第八にあり　はきちるとよめり又ひとむらはぎ

とよめり

をもすまにうへしもしるくいでみれば

やとのわさはぎちりにけるかな

同第十にありてもすまにとはてもやすまずと云なり

又わさはぎといへり

はきかはなさくらんをのゝつゆしもに

ぬれてをゆかんさよはふくとも

萬葉にあり露しもとは毛詩に蒹葭蒼々白露爲レ霜い

へり露のしもとはなればつゆしもと云也露と霜とふたつにはあらぬなり

みまくほしわがまちでひしあきはぎはえだをしみゝに花さきにけり

同にありしみゝとはしげみと云也

あきはぎのふるえにさけるはなみればもとのこゝろはわすれさりけり

古今第四にあり躬恒歌也はぎはからでをきたれば又の秋花の同く咲也

女郎花

をみなへしおふるさはべのますげはらいつかもうみてわかてろもきん

萬葉第七にあり　さはにをふるといへり

あきの野のつゆにおかるゝをみなへしはらふひとなみぬれづゝやふる

後撰第六にありつゆにおかるゝとよめり

蘭

ぬししらぬかはにほひつゝあきのゝにたがぬぎかけしふぢばかまぞも

朗詠にあり素性法師歌也かはにほひつと

薄

いもかりとわがゆよひぢのしのすゝきわれしかよはゞなひけしのはら

萬葉第七にあり　しのすゝきとはもとには○のなきを云又ほの出ぬも云

はたずゝきおばなさかふきくろきもてつくれるやどはよろづよまでに

同第八にありはたすゝきとは河しのすゝきを云なりかはすゝきとも云か委見二仙部一

かへりきてみんとおもひしわかやどのあきはぎすゝきちりにけんかも

同十五にありすゝきちるとよめり

さをしかのいるのゝすゝきはつをばないつしかいもがたまくらにせん

古今第十一にありはつをばなとよめりはなすゝきはにちりやすきくさなれば

みにならんとはたのまれなくに
後撰第七にありはにちりやすきとよめり
こてふにもにたるものかなはなすゝき
こひしきひとにみすへかりけり
拾遺抄第三にあり　來白似とよめり
あきかせのふくたびことにあなめ〳〵
をのとはいはじすゝきおひけり
小野小町集にあり昔野中をゆく人あり風のをとのやうにて此歌を詠る聲聞ゆ立よりて尋きゝければ白くされたるひとかしらの中よりすゝきおひ出たるがながめけるなりそのすゝきを取捨て其かしらを淸き所に置て歸りぬ其夜の夢に我は是昔小野小町といはれしものなりうれしく恩を蒙りぬると云りけりさて此歌を彼集にいれるとぞあなめ〳〵とはあなめいたと云也

苅萱

みよしのゝかけろふのをのにあるかやの
おもひみだれてぬるよしぞなき
萬葉第十二にあり

菊　廣志菊有白菊

うへしうへはあきなきときやさかざらん
はなこそちらめねさへかれめや
古今第五にありきくのはなちるとよめり業平歌也
しつくもてよはひのぶてふはなゝれば
ちよのあきにぞかげはしげらん
後撰第七にあり友則歌也菊とよまで花とばかりよめり雫によはひのぶと云ことはもろこし酈縣の北五十里に菊谿ありみなもと石澗より出たり山に甘菊あり村人此水を飲で命長し見二荊州記一
又云南陽酈縣に甘谷ありたにの水あまくよし其山の上に菊花あり水山の上より流れ下り其こきしるをえてたにのうちに三十余家井を堀しめて此水を飲上壽のものは二千歳なり中のものは百余歳也見二風俗通一
咸和之荊州記曰酈縣有二菊水一其源悉芳菊復岸水其甘馨大尉胡廣久患二風羸一恒汲二飲此水一復疾遂瘳年延二百歳一非二唯天壽一亦菊以延云々

稲

おしていなといねはつかねとなみのはの

いたふらしもよきそひとりねて
萬葉第十四にあり　きそとは昨日也しもよとあれば
昨日の夜なり　イになし紀本には朱にてかけり

あらきたの師子だのいねをくらにつみて
あなつたゞしわがてふらくは
同第十六にあり　猪田なるべし同集にしゝた守でと
ゝあり　イになし紀本には朱書さす

ときしまれいなばのかせになみよれる
期にさへひとのうらむべしやは

御かへし　　女御

いかでかはいなばもそよといはざらむ
あきのみやこのほかにすむみは
村上の御時齋宮の女御なかをかと云處に住給ひける
に奉らせ玉ひける御歌也此歌の心はいなでまろと云
虫はいねのいでくるときにある也御ものねたみもせ
ざらむとよませ玉へり御集にははぢてのせられずと
云傳たり

いなしきのふせやをみればにはもせに
かとたのわせはかりはしてげり

堀川院百首に肥後君かよめるなりいなしきとはゐなかを云なるべし垂仁天皇四年秋九月皇后の母兄狹穂彦王謀反として皇后の燕居を伺て語て曰汝兄と夫といづれか愛する對曰兄を愛す則皇后に誂曰色を以て人に事色衰て寵緩今天下に佳人多して遂に進て寵を求む永く色を恃得や吾鴻祚に登て汝と天下に照臨して永く百年を終む願は我爲に天皇を殺たてまつれと匕首を皇后に授て曰く袖の中に佩て天皇の寢し給覧時に頸を刺於是皇后不知所如兄王の志を視に諫事をうへからず五年冬十月天皇來目幸して高宮に居玉へり時皇后の膝枕して晝寢せり於是兄の王の謀る所は是時也と思に即眼より涙流て帝の面に落天皇即寤て皇后に語て曰朕今日夢らく錦色小蛇朕が頸に繞て火雨狹穂より發來て面を濡す是何祥ぞ皇后不得匿して地に伏て曲奏して曰兄の王の志にもたがふことあたはず天皇の恩をも背くことえず涙溢て帝面をうるほす今日の夢是の應歟錦色小蛇は妾に授し匕首也火雨發は妾之涙也天皇曰汝の罪に非也即近縣之卒を發して八綱田に命て狹穂彦を擊時に狹穂彦師を興して距て忽稻を積て城を作る其堅

事破にからず是稲城と謂なり委見日本紀第六

冬草

雑草

としをへてなにたのみなんかつまたの
いけにおふといふつれなしのはな

萬葉にあり

もろこしやにはにおひけむくさのはの
さしもまねかぬわかこゝろかな

古歌也田休子曰黄帝時草あり帝庭若は階おひたり佞人入朝ば即ち草かゝまりてこれをさす名を屈軼草と云此故に佞人敢て進てとなし

竹

わがやどのいさゝむらたけふくかぜの
おとのさやけきこのゆふべかな

萬葉廿にあり大伴家持卿歌也いさゝむら竹とはいさゝかにすくなき心ありいひさゝといふはわろし

おくつゆはそのなみだにもあらなくに
またらにみゆるまのゝむらたけ

張華博物志舜死妃涙下染竹即斑妃為湘水神故曰湘妃竹

たまさゝのはわけにむすぶしらつゆの
いまいくよへむわがみならなくに

六帖にあり

黄連

うかりけるみきはかくれのかくもくさ
はすえもみえずゆきかくれなん

六帖にありかくもくさは黄連也

忘草

わすれくさかきもしみゝにうへしども
おにのしこくさなほおひにけり

萬葉十二にありわすれくさは萱草也萱草をば忘憂草と云り説文曰萱令人忘憂也博物志曰合観蠲忿萱草忘憂

忍草

わすれぐさおふる。ひとゝはなるらめと
こはしのぶなりのちもたのまん

伊勢物語にあり弘徽殿のはさまをわたりければあるやむことなき人の御局より忘草を忍草とや云とて出

させ玉へりければ業平がよめるなり此御局は二條の后となん

ひとりのみながめふるやのつまなれば
　ひとをしのぶのくさぞおひける

六帖にありしのぶとは垣衣と書けり苔類也やとののき垣などに生るなり本草にわすれ草の一名を忍草と云也とみえたりされは軒のつまにも又すみよしの岸にもおふとよめる忘草は萱草にはあらず苔のたぐひなるべし。

鶏頭草。

かくはかりこひしわたらはくれなゐの
　すえつむはなのいろにいでてなむ

六帖にあり紅ゐは咲たるつとめて末をつむ成べしにはとりのさかに花の似たれば鶏頭草と云り

紫

むらさきのねはふよこのゝはるのには
　きみをかけつゝうぐひすなくも

萬葉十にありねはふとよめり

辛藍　此両字端の目錄になし然而付或本書之

こふるひのけながくあればみそのふの
　からあゐのはなのいろにいでけり

同にあり

阿ぢさゐ

あぢさゐのやへさくごとくやつよにを
　いませあがせてみつゝしのばん

同廿にありあぢさゐやへさくとよめり

百合

みちのくのくさふかゆりのはなえみに
　ゑみせんからにつまといふべし

同七にあり　くさふかゆりとよめり

さゆりばなゆりもあはんとしたはふる
　こゝろしなくはけふもへめかも

同十八にありさゆりの花とよめり

なつのゝのしけみにまじるひめゆりの
　しられぬこひはくるしかりけり

六帖にあり坂上郎女が歌なりひめゆりとよめり

萑　春水云萑和名抄もぐら萑と曰歟　イになし紀本には朱にてかけり

いかならんときにかいもをむくらふの
　けがしきやとにいりまさしめん
萬葉四にあり
　淺茅
あきくればをくしらつゆにわがやどの
　あさぢがはらはいろつきにけり
萬葉十にありあさちとは淺茅とかけり
あきはぎはさきぬべからしわがやどの
　あさぢがはなのちりゆくをみれば
同にあり
わぬかためわかてもすまにはるのゝに
　ぬけるつばなのくひてこひませ
同八にありわぬかためとはわがたといへることばな
るをさてはたがふやうにてそきこゆるきみがためと
云フ心歟てもすまにとはまたもなくひとりかつめりと
云フ
わがきみにけぬはこふらしたまひたる
　つばなをくへどいやゝせにやす

同にありこれもくひてこゆべしとみえたり
　苧
さくらあさのおふのしたくさつゆしあらば
　あかしてゆかんおやはしるとも
萬葉十にありさくら麻とはあさをの櫻に似たるがあ
るなりおふとは苧生と云也
　朮
わきもこにあとかもいはむゝさしのゝ
　うけらかはなのときなきものを
萬葉十四にありあとかもとはいつかもと云フなりうけ
らとは香藥なりとこなづに花ありつぼみたるやうに
て咲なり集註爾雅曰朮は花ありといへどひらけざる
ごとしと云りされば時なきものをとよめりをけらを
うけらと云フなりうとをとは同じ音なり
　萩
かすがのにけふりたつみゆをとめこが
　はるのゝをはぎつみてくふらし（イにもなし紀本にはあり）
萬葉にあり
　山橘

わがこひをしのびかねてはあしびきの
　やまたちばなのいろにいでぬべし
古今十三にあり山橘いろにいづとよめり
けのこりのゆきにあひたるあしびきの
　やまたちばなをつとにつゝめり
六帖にありけのこりとはきえのこりと云ᄀ也又つと
につゝむとよめり
　麥門冬
やますげのみならぬことをわれにより
　いはれしきみはたれとねたらむ
萬葉四にありやますげみならぬとよめり
　菅
おくやまのいはほのすげをねふかめて
　むすびしこゝろわすれかねつも
萬葉三にありねふかしとよめり
淺葉野にたつ神古菅ねかくれて
　たれゆへにかはわがこひざらむ
萬葉十二にあり
　蔣
まをこものふのみじかくてあはなこは
　をきつまかものなげきぞあかぬ
同十四にありまをこもはまこもを云ᄀなりをもじはた
だいひくはへたるなりこれつねのことなりあはなこ
とは人の名歟
さつきまつぬまにおひたるわかこもの
　そよ〳〵われもいかでとぞおもふ
六帖にありわかこもとよめり
をみなへしさくさはにおふるはながつみ
　みやこもしらぬこひもするかな
萬葉四にありはながつみとははなさきたるこもをい
ふ
みちのくのあさかのぬまのはながつみ
　かつみる人のこひしきやなぞ
かのくにの風俗にてかつみとはこもを云ᄀ也昔あやめ
のなかりければ五月五日にはかつみふきとてこもを
ふくなり橘爲仲任にこもをふきければはらたちてみ
をこなひてふかせける在廳のものをめし出してみれ
ばとしをひしらかしろきものにてありいかでとしの

みよりてかゝることはせさするぞといましめければ
中將のみたちの御時に菖蒲やさぶをはざりけんあさ
かのぬまのかつみをふくべきよし候ければ其後かく
れいになりてつかまつるなりと云ければ爲仲はぢて
入にけりとぞ語り傳たるされば實方中將の時よりふ
くなるべし

葦

あしつのゝおひてしときにあめつけと
　ひとひとのしなはさたまりにけり

六帖にあり昔開闢はしめに國土の浮ひたゞよへるて
とたとへは遊ぶ魚水に浮べるが如し時に天地の中に
一の物なれりかたち芦牙のごとしすなはち化して神
となる國常立の尊と號なり見二日本紀第一一

ひとしらすものおもふときはつのくにの
　あしのしゝねのしゝねやはする

同巻にありしゝねとよめり

なつがりのたまえのあしをふみしだき
　むれゐるとりのたつそらぞなき

たまえは越前國にたまの江と云處のあるなり芦は秋
かるものを夏苅置たるうへにむれゐるとよめるなり
又其たまえはしをとをくひるかたにてあるにあしお
ひたりししをかりをろしてかり人のふみしだくによ
りてむれゐるとりなん立わつらふと云

神風やいせのはまおぎおりふせて
　たびねかすらんあらきはまべに

はまおぎとはかの國ノ芦を云なり神風いせの國と日
本紀に云り

菱

きみがためうきぬのいけにひしとると
　わがそめしそでぬれにけるかも

萬葉七にありひしとるとは採菱の歌と云事あり

とよくにのひしのいけなるひしのねを
　とるとやいもがそでぬれにけり

六帖にあり菱のねとはねと云なり左思呉都賦曰或
踰二綠水一而採菱郭璞江賦曰忽忘レ夕而霄歸詠二採菱一

以叩レ船（ふなばたたゝく）イにあり紀州本には朱書さす

蕁

わがこゝろゆたにたゆたにうきぬなは　蓴
へにもをきにもよりやかねまし

六帖にあり人丸詠也ゆたにたゆたにとはうこきたゆたふてゝろなり

こもりゑのそこよりをふはねぬなはの
ねたなはたゝをゝるないとひそ

六帖にありそこよりをふるねぬなはとよめり

芹

あかねさすひるはたゞにてぬはたまの
よるのいとまやつめるせりこれ　イ同紀本諸兄歟に作る

萬葉廿にあり左大臣橘清光の詠諸兄歟

せりつみしむかしのひともわがごとや
こゝろにものはかなはさりけむ

頭註書入云此歌諸本まふくたの事ないへり今愛の説によらば行基の歌むなし所詮このむ所可隨行基の歌まふくたかすきやうに出しかたはかま我こそぬひしか其○○はかま

これはにはの草をけつるものその家のいつきむすめのせりくふをみてこゝろさしわりなきが故にせりをつみてたてまつりけりなど昔より云傳たるたしかにみえたることやはあらん文選の與山巨源絶交嵇叔夜書に野人せなかをあぶることをたくましふして芹ねをうまむずるもの至尊に献せむと思ふ區々の意有といへど又すでにおろそかなり注曰博物記曰宋に田夫ありみづから日にさらすかへりみて其妻に曰日のあたゝかなることをおもへり人これをしることなしわがきみにたてまつるものならばかならず厚き賞を蒙ん妻の曰昔芹をほめてあましとするものありこれを其里の長に奉る里の長なめてにがしとして笑ふしかもこれを恨みき此人又汝がたぐひなりと云々されば此歌の心は我心によしと思ひて云ことをもちゐられぬことを恨てよめるなるへし

葱（こなぎ）

なはしろのこなぎのはなをきぬにすり
なるゝまに〳〵あせがゝなしも

萬葉十四にあり　あせがとはをのがと云心也

蓼

わがやどのはたでひともとつみはやし
　　みになるまでにきみをしまたん
同十一にあり
わらはべもくさはなかりそやはたでを
　　はつみのあそがわきくさをかれ
同十六にありやはたでとは八穗蓼と書くやつはの立チたる蓼のあるなり
はつみのあそは人の名なり　イになし紀本には朱にてかけり
　海藻
すみよしのしきつのうらのなのりその
　　なはつけてしをあはぬふやしも
萬葉十二にありなのりそとは神馬草を云フとなむ
おほともの みつにはおひしゝらなみの
　　おきよりきませなのりそのはな
古萬葉集にありはなさくとみえたり　イ本同紀本にはなし
とこしへにきみもあれやもくさなとり
　　うみのはまものよるとき〳〵を
衣通姫歌也日本紀十三云允恭天皇十一年春三月に天皇茅渟宮に幸し玉へるに衣通姫此歌をよみ給フ時天皇の宣はく是歌は他人にきかしむべからず皇后聞玉ひなば必大に恨てん故に時の人濱藻をなのりそもといふと云々　いさなとりとはいそなとると云フ也さとそとは同意也
しかのあまのいそにかりほすなつけもの
　　なはつけしをいかにあひがたき
萬葉十二にあり　しかのあまとはつくしにあり然海部とかけりなつけもとは名告藻とかけり
むらさきのなたかのうらのなつびきもの
　　こゝろはいもによせてしものを
六帖にあり
けふもかもかきつたまもはしらなみの
　　やへをるうへにみだれてあらん
同にあり
しらなみをおりかけあまのこぐふねは
　　いのちにかふるみるめなりしか
同三にあり
　三　濱木綿
みくまのゝうらのはまゆふいくかさね

われよりひとをおもひますらん
同にありはまゆふとははせをにゝたるくさのみくまのゝはまにおふる也くきのかはのうすくておほくかさなる也人丸も浦のはまゆふもゝへなるとよめりこのみくまのをはみなひと紀の国のくまのゝ浦としれりこれはいせにみくまのゝ浦と云浦のあるなり又くまのゝうらと云大饗の時はとりのあしつゝむれうにいせの國みくまのゝうらへはまゆふをめすと云

木部

春

梅

なにはづにさくやこのはなふゆごもり
いまはゝるべとさくやこのはな

古萬葉集云新羅人王仁が大鷦鷯天皇にたてまつれる歌なり仁德天皇是也應神天皇次帝也彼天皇難波の朝の高津の宮におはしますによりてなり此帝正月に位に即給れば梅花によせてよめり古萬葉集云蘆萩花と書たり芦萩の花は即ち大根なり又こもりとは島の名なれば大根ともいへどわろし神武天皇卅五年甲寅冬十月に日向國をさりて筑紫菟狹に到り給ふ十一月におなじ岡の水門に到り給十二月にあきの國に至て埃宮に居王へり乙卯年三月吉備の國にいでまして行館をつくりて居給これを高島の宮と云三年ふる間だに舟檝をおさめ蓄兵食天下をたひらけむとす戊午年春二月皇師ひむがしにゆく舳艫あひ接難波の崎に至て奔潮はなはだはやしよりて浪速の國となづく亦は浪花とも云今難波と云は訛なり應神天皇秋八月に上毛野君の祖荒田別巫別を百濟につかはして王仁をめす同十六年二月王仁來太子菟道稚郎子これを師としてもろ〳〵のふみをならひ給にとほりさとらずと云ことなし而新羅の人王仁と云はひがことなり百濟人なり高麗百濟新羅これを三韓と云なり見日本紀第九

いもがいへにゆきかもふるとみるまでに
こゝたもまかふむめのはなかも

萬葉五にありこゝたもとはそこらと云也

むめのはないめにいたらくみやひたる
花とみれどもふさけにうかへこそ

同巻にあり いめとはいもと云也古詩落梅浮酒盃と云へり

わがやどのむめはてたりぬうゑしこが
　　てをしふれてはなはちるとも
萬葉にありてたりぬとは花のやう〳〵ちりかたにな
ると云なりうゑしてとはうへし人と云なり
ふゆこもりはるひさくはなをたをりもて
　　いへのかぎりもてひわたるかな
萬葉第十にありこれは梅をふゆこもりとよめり
はるさめのふらば野やまにかくるなん
　　むめのはなかさありといふなり
後撰第二にありはなかさとよめり

　柳

あをやぎのえだきりをらんゆたねまき
　　いろ〳〵きみにこひわたるかも
萬葉十五にありゆたねまき
わがやどのいつもとやなぎいつも〳〵
　　おもかこひすなりましつとも
萬葉第廿にありいつもと柳とは昔もろこしに陶令と
云もの閑居をこのみて琴をひき酒をのみき門に五柳
生ひたりまましつもとはあり
さましつるなりと云也
南史曰陶潜宅邊有二五柳樹一時自著二五柳先生傳一
うぐひすのいとによるてふたまやなぎ
　　ふきもみだるかはるのやまかせ
後撰第三にあり古詩曰春嬌黄珠嫩柳風と云へり
さほひめのうちたれがみのたまやなぎ
　　たゝはるかぜのけづるなりけり
堀河院百首に匡房卿よめるなり古詩に氣霽風梳二新
柳髮一と云り
いなむしろかはそひやなぎみつゆけば
　　なびきおきふしそのねたえせず
これは昔みかどのながれなる人あやしきわらはにな
りて柳のもとにゐてつりすとてうたひをりけると云
傳たるなりいなむしろとは水のしたに青きもの〻な
みよりてあるを云又かはそひ柳も水にひかれてその
ねはたえであるをわがあやしくなりてまとひありく
によせてよめるにやいなむしろかはそひ柳はものふ
たつ也此は難儀にてもとしらぬことなり

春水云日本紀第十五にあり顯宗天皇御製也此註傾頭不審　帝後胤と云は顯宗紀を見に就ニ仕縮見屯首ニ給ひて零落し玉ふ事などあり考レ紀可レ見此抄六卷莛部に往委見於萬葉集拾穗抄者爲口決可見家説　イになし紀本には朱にてかけり

おしなべてゝすえにかぜはふかねども
　ひとりしうごくたまやなぎかな

ひとりうごくとは古今註に柳一名高飛一名獨搖と云へり（風イ　紀本同）

はるかぜにしだる柳のかたよりに
　きみになびけはくにそさかへん（園　同）

同百首に國信卿のよめる歌なり本文に帝德如レ柳順レ風と云へる心也

桃

かのをかにまてるもゝのきならはやと
　ひとのさゝめをながてゝろゆめ

萬葉第七にありまてる

ひのもとのもろふのけもゝもとしげみ
　わがおほきみをならすはやなじ

同第十一にあり　室原とかけり（屋イ　紀本）

みちよへてなるてふもゝのことしより
　はなさくはるにあひにけるかな

拾遺第五にあり延喜十三年亭子院歌合に躬恒がよめるなりみちとせといふべきをみちよとよめりとてまけたるなり

昔漢武帝このむて桃實を食す春いまだ桃の實ならじときに一足の青鳥とんで帝のまへにとゞまれり大きさからすのごとし帝東方朔にとふ朔がまうさく西王母が來らんとする也われかくれなんとて屏風のうしろにかくれぬしはらくありて王母來て桃實に七枚をもて帝にたてまつるあぢはひ甘美仍これをうへむとす王母まうさく下土のものに非ず上界の菓也三千年にひとたびなる也たゞ此屏風のうしろにあるわらはなんみたびぬすみてくらへる耳委見ニ漢志ニ　又漢武故事曰東郡獻ニ短人ニ帝呼ニ東方朔ニ至短人指ニ東方朔ニ謂レ上曰王母種桃三千歲一爲レ子此兒不良三過偷レ之矣後西王母下出ニ桃七枚ニ自噉レ二以五枚與レ帝留レ核着レ前母問曰用此何爲上曰此桃美欲レ種レ之母咲曰此桃三千歲一着レ子非ニ下土所ニ植也　又王子年拾遺記

日磅礴由背去扶桑五萬里日所不及其地寒有桃樹千圍其花青黒也萬歳一實ナルナリ

きみがためはるをるはなははるとをく
ちとせをみたびふりつゝぞさく

六帖第一にあり　上歌心を貫之がよめるなり

ふるさとのはなのものいふよなりせば
いかにむかしのことをとはまし

後拾遺第二にあり世尊寺桃花をみて出羽辨がよめる也本文に桃李不言下成蹊と云り　成蹊之文史記にも出り

櫻

いもがなにかけたるさくらはなさかば
つねにやこひんいやとしのはに

萬葉十六にあり

なこりなくちるぞめでたきさくらはな
うきよのなかははてしなければ

紀本には残りおく云々ありて世の中果のうければさあり言葉つゞきたがへり可見合イニ此註ナシ紀本にはあり朱書なり

古今歌也花のあたなるをめでたる文選凡非詩に浮華升ニ風雅ニ何以標ニ貞麗ニとつくれるにかよひたるこそまことにめでたけれ

たれこめてはるのゆくへもしらぬまに
まちしさくらはうつろひにけり

古今第二にあり典侍因香歌也さくらうつろふとよめりたれこめてとはおろしこめてと云詞なりてゝちをそこなひて風にあたらでこもり侍けるにをれるさくらのちりかたになりにけるをみてよめるなり

やまざとにちりなましかばさくらはな
にほふさかりもしられざらまし

後撰第二にあり右衛門みやす所の家のうつまさには べりけるに花おもしろかなりとておりにつかはしたりければきこえたる歌なりおりにおこしたるにつけてなむなみだおつると云るなりはるしくれぬといへるにはあらす

此歌の御返

さくらがりあめはふりきぬおなじくは

ぬるともはなのかげにかくれん

拾遺第一にありさくらかりと云ことあらそひかたくありすこしくらがりと云又花のもとに雨ふり來ると云されど歌のことば萬葉集などにこそいたはらすぬよみたれ拾遺はさかりたるにいかでかさることはよまむたゞものをこゝかしこにみありくかなと云ことばなればさくらがりと云ぞことばもこゝろもよき

ゆくほどにたまゆらちらぬものならば

やまのさくらをまぢかくてみん|む

具平親王なり イになし紀本には朱書

中務宮のたまゆらとはなにことぞと四條大納言にとはせ玉ひける歌なりたまゆらとはわくらはと云同事也わくらはとはたまさかと云なり又云まれなりとも云

たかさでのをのへのさくらさきにけり

とやまのかすみたゝすもあらなん|む

後拾遺第一にあり二條關白殿にて遙望山花と云心を江中納言のよめるなりたかさことは山の惣名也本文に石砂長成山と云りはりまのたかさでにはあらずおのへとは峰上とぞ萬葉集に書たる

華

はなのいろはかすみにこめてみせずとも

かをだにぬすめはるのやまかせ

古今第二にあり良峯宗貞歌也さくらをばにはふとはよめどうちまかせてかをはよまざめりふみには

やまたかみかすみをわけてちるはなは

ゆきとやよそにひとはみるらん|む

後撰第三にありかすみをわけてもちるとよめり

ふしておもひおきてながむるはるさめに

はなのしたひもいかにとくらん|む

六帖第一にあり春花をしたひもとくとよめり秋花をこそしたひもとくとはよめれ同心歟

はるかせにてずゑさきゆくきのくにや

ありまのさとにはなまつりせよ

日本紀第一伊弉冊尊爲火神やかれて神さかりましぬ紀伊國熊野の有馬村に葬土俗此神をまつる花の時はなを以すと云り

たづねきてあるじをとへどものいはで
　つゆにのみなくはなのいろかな
古歌也なき人のふるごとにまかりて花をみてよめりける歌也花のものいはずとは漢書曰李廣將軍恂々如二鄙人一口不レ能レ出レ辭及レ死之日一天下知皆爲ニ流ニ涕一諺曰桃李不レ言下自成蹊　紀本朱書　史記列傳にあり

餘花

あはれてふことをあまたにやらんとや
　はるにをくれてはなのさくらん
古今第三にあり大内記紀利貞が四月に咲たる櫻をみてよめるなりこれはかた〳〵の心ある歌也あはれと云ことをさくらにのみあらせむといへるなり又は木のひときのみあはれといはむと云なり又此みる人のみあはれとみむといふこと也とぞましおきたる

夏

樗

たまにぬくあふちのいへにうゑたれば
　やまほとゝぎすかれずこむかも

萬第十七にあり

花橘

たちばなにみさへはなさへそのはさへ
　えだにしもをけどますときはのよ
萬葉第六にありはなたちはなもろこしにありがたきにや吳錄曰朱光錄曰建安庭有レ橘冬覆ニ其樹一春夏色變ニ青黑一味絶美と所をさしていへり花橘を盧橘とはにたれば云なりと云傳へたれば相如傳に橘夏熟注曰蜀中有ニ給客橙一似レ橘而非若ニ柚香冬夏花實相繼或如ニ彈丸一或如レ拳通歲食レ之卽盧橘也と云るたしかにみえたるに御覽三百十一云橘部曰李七願曰梁土靑襄盧橘是生ニ金衣一素裏班々理內家されば又花橘にあらずといはんことといかゝとおぼゆ橘にはあらでにたらむものを御覽橘部にはさきにいるべからぬことなり此をみて四條大納言朗詠集には盧橘子低といへる詩をばいれたるにや

とこよものこのたちはなのいやてりに
　わがおほきみはいまもみるごと

同第十八にあり垂仁天皇九年春二月田道間守に命して常世の國につかはしてときならぬ香菓（此云箇俱能未）をもとめしむ今のたちばな是なり九十九年秋七月天皇纏向の宮に崩給ぬ年百三十歳冬十二月癸卯朔壬子菅原の伏見の陵に葬る明年春二月辛未朔壬午田道間守常世の國より貢物至非時香菓八竿八縵焉田道間守泣悲て曰命を天朝にうけてとほくたえたるさかひにまかる萬里浪を踏てはるかに弱水をわたる是常世の國の神仙の秘區俗のいたる處にあらず是以往來之間自十年をへたりしかるに聖帝の神靈に賴てかへりきたることをえたり今崩し給復命ことをえずいけりともやくなしとてみさゝきに向て叫哭てみづからしぬと云々

さつきまつはなたちはなの香をかけは
　むかしのひとのそでのかぞする

古今第三にあり伊勢物語の歌也

秋

紅葉

わかきぬのいろにそめたるあぢさけの（味酒）
　みむろのやまはもみぢしにけり

萬葉第七にあり

むまざけ（美酒）のみわのやしろのやまちらす
　あきのもみぢのあらまくをしも

同第八にあり此二首は萬葉七八にありあぢさけのとはあぢはひあるさけといひむまさけのとはむまきさけといへる也酒と云るなり旨字はむましとよむなりかく酒とよみをきてみわともみむろともいひつゞけたることはさけをみきと云によりてものをいひさすはつねのならひなり又酒にはみのあれば昔はかゝることをもまさなしとはいはぬことなればあぢさけむまさけなどよむばかりになりなむにみをよまんこともさらなることなりこのは（木葉）の春はみどりにて秋はくれなゐになることといとこゝろえぬを此南州は火を地の性として銅を地の躰とせりかるかゆへにうまるゝ人あたゝかにちあか（血赤）かしおひたる草木さかりなるときはあをき色なり銅のあつきをあらはすのちにはあかき色なり火の色を着する也是諸經のなかにあまたかくいへり

しくれのあめまなくなふりそくれなゐに
　にほへるやまのちらまくおしも
同にありもみちにはふとよめり
ひらやまをにははすもみぢたをりてて
　てよひかさしつちらばちるとも
同にあり
たかしきのうらまのもみぢわれゆきて
　あへりたるまでちりてすなゆめ
同第十五にあり
おふやまのいはかきもみぢゝりぬべし
　てるひのひかりみる時なくて
古今第五にあり藤原關雄歌也
このはちるそらになみたつあきなれば
　もみぢにはなもさきまかひけり
後撰第七にあり興風歌也
わたづみのかみにたむくるやまひめの
　ぬさをぞひとのもみぢといひける
同にあり　讀人不レ知

いろもかもみえすもみぢばあしびきの
　やましづよりやながれいづらん
六帖第六にありもみぢばかやはあるされどかく貫之がよめり
いもがそでまきもくやまのあさぎりに
　しぼむもみぢのちらまくもおし
同にありきりにしぼむといへり
　落葉
ちはやふるかみよもきかずたつたがは
　からくれなゐにみづくゝるとは
古今第五にあり業平歌也くれなゐに水くゝるとばかりにて落葉とよめり
木部
　埋木
あまたあら奴なをしもおしみむもれきの
　したにぞこふるゆくゑしらずて
萬葉十一にありむもれきとはくされたる木の山の谷の下なとに伏たるを云也

帚木

そのはらやふせやにおふるはゝきゞの
　ありとはみれどあはぬきみかな

そのはらは信濃の國にありふせやとはそのかたはら
にある處なりはゝきゞとはかのふせやに生たる木也
其梢とほくてみればはゝきににたりちかくてみれば
こしげくてみえぬなり云ふるしたることなり

桂

めにはみてゝにはとられぬつきのうちの
　かつらのごときゝみにぞありける

伊勢物語にありそこにはありときけどせうそこをだ
に云へくもあらぬ女のあたりを思て業平がよめる也
イにもあり祀本には朱書とす
兼名苑云月中有ㇾ河河水之上有ニ桂樹一高五百丈云々
外典云月中有ニ桂樹一不ㇾ然樓炭經云閻浮提○樹一名ハ
波利質多一名龍樹高八萬四千里樹影現ニ月中一世人見
ㇾ月有實無ㇾ樹即是閻浮樹之影也

松

いはしろのはまゝつのえをひきむすび
　まことさちあらばまたかへりこむ

いはしろのゝなかにたてるむすびまつ
　こゝろもとけずむかしおもへは

のちみむときみがむすべるいはしろの
　こまつのうれをまたもみむかも

萬葉○にあり孝德天皇と申けるみかどの位をさり玉
はんとしける時に有馬の皇子の位をたもつまじきけ
しきをみしり給ひてゆづり玉はざりければ世をうら
みてうかれありき玉ひていはしろと云所にて松の枝
を結びてよみ給へる歌也

みよしのゝたまゝつのえはゝしきかも
　きみがみことをもちてかよはん

同巻にありたまゝつとよめりまろなるみなりたるを
云べきにやたゞたまとはよしといへる心也ともはし
きかもとはよしと云也

わきもこにゐなのはみせつなつぎやま
　つのゝまつばらいつかしめさん

萬葉三にありゐなのはつのくにゝあり名次山と書く
つのゝ松原とよめり

まつのはな花かずにしもわがせこが

おもへらなくにもとなさきつゝ
萬葉十七にあり松花は千年に一度さく也されはもとなさきつゝとよめる也もとなとはこゝろもとなしと云詞也
ゆきふりてとしのくれぬるときにこそ
つゐにもみちぬまつもみえけれ
論語曰歳寒而後松柏のゝちにしほむをしるといへり
うへしときちぎりやしけんたけくまの
まつにふたゝびあひみつるかな
宮内卿藤元良かみちのくにのかみのはじめの任にうへてのちの任によめるなりその松の火にやけて失ぬ滿正任にうふ其後又うす道貞が任にうふそのゝち孝義きりてはしにつくりてのちうせをはりたりと云
檜
いにしへのありけんひともわかごとや
みわのひばらにかざしおりけん
萬葉七にありひはらにかさしおるとみえたり
ゆくかはのすきにしひとのたをらねば
うらふれたてりみわのひばらは。
同にありこれにもたをらねばとよめりうらふれとはうれへてと云詞也
杉
わがいへはみつのやまもとこひしくは
とふらひきませすぎたてるかど
古今十八にありむかしいせのくにあさきの郡にはべりける人の深き山に入てしがまち侍りける程に風吹雨降けしきたゞならずして來者あり形ち黑くしてたけ高しめはてれる星の如くにしていなづまの光にゝたり獵師これをいてあてつとゞまらずしてなを來り向ふ又射てあてつ其たび風雨やみて飯りぬ夜のあくるまゝにちの跡につきて尋いたる遙なる山中にすてしはれてのゝなかにつかあり其うちに人れりつかの前に神女住て此のれふしをまねくすなはち弓に矢をはけてすゝみよる神女恐るゝけしきなくて曰汝がいたりつる物は此塚に住む鬼なりわれ此をにゝとられて年比此塚にすめり汝此をにを殺すべしこゝにれうしはを刈て其塚の口に入れて火をつけてやき殺しつ其后此神女をぐして家に飯ぬ相住こと三年になる

にれふしとみ榮へぬ又ちでひとりを生しめたり其時此男あからさまにあるきけりそのまに此女うせぬ皈來てみるに女はなくて児ひとりあり泣悲で尋ありけど行方をしらずしばらく有て此ちこ又うせたりいよ〳〵泣悲む程に此女つねに居たりける所をみるにみわの山本杉たてるかど丶ばかり書付たりこれによりて大和國に尋至りてみわの明神の社に參りて此女に逢べきよしを祈申程に其社のみとをおしひらきてみえたまふ兒も同しくみゆ此男の志切なることをみてともにちかひて神になれりとみえたりこれによりて其神祭をはいせの國あふきの郡の人おこなふなりそれよりしるしの杉とは云なるへし諺に云くをに丶かみとらる○と云はこれなり

椿

あしびきのやつをのつばきつら〳〵に
みるとあかめやうへてみるきみ

萬葉第廿にありやつをとは八峯と云なり

きみがよはしらたまつばきやちよとも
なにか丶ぞへんかぎりなければ

後拾遺第七にあり永承四年内裏歌合に式部大輔資業かよめるなりしらたまとはしろきみのたまのやうにてなれるを云なり

大椿之木八千歳をもて春とし八千歳をもて秋とする也委見二莊子一

榊

しもやたびおけどかれせぬさかきばの
たちさかゆべきかみのきねかも

古今第廿にあり

柏

いそのかみふるからをの丶もとがしは
もとつこ丶ろはわすれやはする

萬葉第　にあり

わがせこがさ丶げてもたるほをがしは
あたかも似たるあをきゝぬがさ

同十九にあり

いなみの丶あからかしは丶ときはあれと
きみをあがきもふときはさねなし

同第廿にあり

ちばのぬのこのてがしはのはゝまれど
　あかにかなしみをきてたがきぬ
同にあり兒手柏とかけりをさなき人のてはどにちひ
さきを云なるべし
ひとこふるながめがしはゝふるさとの
　かきねにのみぞしげくさきける
六帖第六にありながめがしはとよめり

槻

あまとぶやかるのやしろのいはひつき
　いくひあるべきかくれつまりも
萬葉十一にあり齋槻とかけり神などいはひたる杜の
木なるべし
ひきまゆのかたふたこもりせまほしみ
　くはこきたれてなくをみせばや
六帖にあり

石楠草

うへたてゝあけくれみれどしらざりき
　とひらのきとはけふぞきゝける
類聚抄にあり山寺のみなみおもてにしやくなんさう
のありけるを客人これはしり給ひたりやととひけれ
ばとひらの木となむ申すといひければ房主のよめる
也とひらの木と云べき歟

和歌童蒙抄第八

鳥部

鳥「百千」(各本なし)鶯　喚子鳥(喚イ)　鷰　郭公　雁

千鳥　水鳥　鳧　鴛　鶴　鸊鷉(にほどり)

鶉(う)　鵙(鴟イ)鳩　鴫(しぎ)(紀本)　雲雀　鷺　鷹　山鶏

鵼　鷄　烏　鵲

鳥部

鳥

しきみやのとまりのいけのはなちどり
　ひとめにこひていけにくゝらず

萬葉二にありはなちどりとははねをきりてはなちたるとりを云(フ)なりされはいせか歌に「はなちどりつはさのなきをとぶからにくもゐをいかでおもひか(あイ)くら(む)んとよめり

百千鳥

むめのはないまさかりなりもゝちどり
　こゑのこひしきはるきたるらん

万葉第五にあり本文に百鳥とかけり

わがやどのえのみもりはむもゝちとり
　それ(く)ともきみぞきまさゞりける

同第十六にありもゝちどりとはもろ／＼のとりと云(フ)なめり

もゝちどりさへづるはるはものごとに
　あらたまれどもわれぞふりゆく

古今第一にあり春はもろ／＼の鳥のいてゝなくなり又鶯を百舌(千)鳥といへばひとつの名なりとも云(フ)めり易通(同)卦験曰反舌者百舌鳥(もず)也能反二覆其舌一隨二百鳥之音一(フト)云々反舌をば月令にうぐひすとよめりされど此歌ともにて心うるに百千(○ナシ)の鳥なり鶯とはさして云(と)がたし春になりてよろづのとりのやはらぎなくなるべし

(同)春

鶯

はるされはこぬれかくれてうぐひすぞ
　なきていぬなるむめがしつえに

萬葉第五にありてぬれがくれとはしづくにぬるとい
ふこゝろなり
鹿背
かせのやまこだちをしげみ朝さらず
○同
すきなきとよますうぐひすのこえ
○
正解按にすは三の句のす文字を誤りて四句の上につけたるなるへ
し
萬葉六にありかせやまやましろのくにゝありあさゝ
らずとはあしたごとにと云なりすなきとよますとい
へるは巣になくといへるなり
みそのふのたけのはやしにうぐひすの
しばなきにしをゆきはふりつゝ
萬葉第十九にありしはなくとはあまたゝびなくと云
なるべし數鳴と書けり千鳥にぞよみならひたれど鶯
にもよめり
ゆきのうちにはるはきにけりうぐひすの
こほれるなみだいまやとくらん
古今第一にあり二條后歌也本文にとりはなちもその
なみだまなこにみえずと云りしかれどもなくと云に
つけてかくもよめるにやめでたし

うくひすのなきつるこえにさそはれて
はなのもとにぞわれはきにける
後撰第一にあり文集の鶯聲誘引來花下と云詩の心
なり
喚子鳥
あさぎりにしぬゝにぬれてよぶこどり
みふねやまよりなきわたるみゆ
萬葉第十にありきりにぬるとよみたりはるのきりは
梅歌にもあり又詩にも咽霧山鶯鳴尙少と作たりし
ぬとはしとゝにと云なり
鷰
つばめくるときになりぬとかりがねは
ふるさとこひてくもがくれゆく
萬葉十九にありつばめとはつばくらめと云なり春の
なかばに雁も皈りつばくらめも來たるなり
かそいろはあはれみつらむつはめすら
ふたりはひとにちきらぬものを
昔人むすめにおとこをあはせたりけるにおとこうせ
にければ又こと人をむことらんとしければむすめの

よめる也南史曰巻七十四覇城王整之姉妹襄陽衛敬瑜妻年十六而敬瑜亡父母舅姑咸欲嫁之誓而不許乃截耳置盤中為誓乃止所住戸有燕巣常雙来去後忽孤飛女感其偏栖乃以縷繫脚為誌後歳此燕果復更来猶帯前縷女為詩曰昔年無偶去今春猶獨歸故人恩既重不忍復雙飛云々出事類賦

をとづれぬなかだちでゝろいかなれや
　つはめさへづるときはきたるを

古歌也婚嫁は夫は陽婦は陰なれば晝夜ひとしき故に二八月を時とする中にも二月の燕くるほどをよしとするなるべし禮記曰仲春之月玄鳥至々之日以大牢祠于高禖注曰玄鳥燕時以其来巣室宇嫁娶之象也媒氏以之為作

夏

郭公

ほとゝぎすこゑきくをのゝあきかせに
　はなさきにけりおとのとぼしき

萬葉第八にあり秋はとゝぎすなけりとみえたる如何

ほとゝぎすながなくさとのあまたあれば
　なをうとまれすおもふものから

古今第三にありなかなくとはなれがなくと云也

さみだれのそらもとゞろにほとゝぎす
　なにをうしとかよたゞなくらむ

同にあり貫之歌也よたゞとはよたゞしくと云にや可尋

いくばくのたをつくればかほとゞぎす
　しでのたをさをあさな〳〵よぶ

同十にあり誹諧歌也敏行歌也しでのたをさとはほとゝぎすを云也江中納言歌に「いとゞしくいりあひのかねのさびしきにしでのたをさのこゑきこゆなり

ほとゝぎすをちかへりなけうなゐねか
　うちたれがみのさみだれのそら

寛平御時洞院后宮の歌合にみつねがよめるなりをちかへりとは百千返とよめるなり又をちよりかへりなくと云はむげのひがてと歟うなゐことはわらはべと云ことなればうちたれがみとよまんとてをける詞也又ほとゝぎすはしでの山をこえてくる程はわらは

にてあるなればかくよめるといへばかなひてもおぼえずひがこと也又うちたれがみとはさつきやみの空くろしといはむ心とぞ云めれどこれかなはずかみうちたれやうにさみだれのふると云心とぞみえたる

しでのやまこえてきつらんほとゝぎす
こひしきひとのうへかたらなむ

拾遺抄第八にありいせがうみ奉りけるみこのかくれ玉ひにける又の年ほとゝぎすの鳴てわたりけるを聞てよめるなりしでの山こゆとみえたり本文不見

たびねしてつまこひすらしほとゝぎす
かみなひやまにさよふけてなく

後撰にありつまこひすとよめるめづらし

ほとゝぎすなきつるなつのやまへには
くつていださぬひとやわぶらむ

寛平御時后宮の歌合也まことにはもずを郭公と云べき也昔くつぬひにて有ける時くつれうをいま四五月はかりに奉らんといひちぎりてうせにけりそのゝちみえざりければくつをこそえさせざらめくつてをたにかへしとらんとてとらせんとたのめたる四五月にきて郭公とよびありくもずまろめのころは秋のやうに木の末にゐて聲高にもなかでかきねをつたひてしのびやかにことしくつぶやきてなくなり此事たしかなる本文みえずそらごとならむにむかしの人歌合のうたにはよまじとぞおぼえ侍る

伯勞大戴禮曰五月鵙鳴鵙者鵙也鳴者相命也左傳昭曰々々郯子曰少皡爲師而鳥伯趙氏司至者也注曰伯趙勞也夏至鳴冬至止也　尓雅曰鵙伯勞也　禮記月令曰仲夏之月々々無聲々々風土記曰䴗鴂之也䴗鴂鵙也禮記月令仲夏之月小暑至螳蜋生鵙始鳴反舌無聲注螳蜋螵蛸母也鵙伯勞也反舌者百舌鳥也高誘曰是月陰作於下陽發於上伯勞夏至後應陰而殺蛇磔之棘上而始鳴也反舌者百舌也爰其聲効百鳥之鳴故謂之百舌也

秋　鴈

たれきゝつみなゝきわたるかりがねの
つまよぶこゑはかつしるくぞある

萬葉第八にありつまよぶとよめり

あきのひのほたをかりがねなくそらに
よのほどろにもなきわたるかも
同にありほたをかりがねとよめり
むはたまのよわたるかりはおぼつかな
いくよをへてかをのがなをよぶ
同にありをのがなをよぶとよめり
あきかぜにはつかりがねぞきこゆなる
たがたまつさをかけてきつらん
古今第四にあり紀友則歌也　史記曰蘇武在匈奴中昭帝教使謂單于曰天子射上林中得鴈足有係帛書言武等在其澤中使者如其言單于大驚乃使傳武至
まこもかるほりゑにうきてぬるかりは
こよひのしほにいかにわぶらん
後撰第八にありうきてぬるとよめり
みよしのゝたのむのかりもひたふるに
きみがゝたにぞよるとなくなる
かへし
わがゝたによるとなくなるみよしのゝ
たのむのかりをいつかわすれむ
伊勢物語の歌也昔男むさしの國までまとひゐにけりその國に女をよばひはべりけりすむ處はいるまの郡みよしのゝ里なりけりと書く此たのむのかりとかく人のあらそふことなり田に向雁とぞ俊頼いはれける基俊はたのもしのかりとてよりあひてかりをしてむねとをきてたる人にとらせ〳〵たがひにするを云といはれけれどこれはむげにことたがひたりしゝかりならんにはなくとよむべからず又田のをものかりともそるうひつたへたり田にむかひとも田のうへにあるとも云はさもときこえはんべるめり
冬
千鳥
きよきせにちどりつまよぶやまきはに
かすみたつらんかひなひのさと
萬葉第七にありきよきせにつまよぶとよめり
やそしまのうらにあとふむはまちどり
きみばかりとぞおもひならしな

六帖第三にありあとふむといへり

なへおひしうみかた〳〵のはまちどり

すたけどきみがをとだにもせぬ

萬葉第七にありちどりすだくとよめりすだくとはを
ほくあつまると云なり文集には集多とかきたる

こゑをのみきけばなぐさのはまちどり

ふるすわすれずつねにとひこよ

六帖第三にありふるすわすれずといへり

よくたちてなくかはちどりむべしこそ

むかしそひともしのびきにけれ

萬葉第十九にありよくたちとはよふけてと云ことと
はなりしのびきにけれとはむべこそむかしよりあは
れなるものとは云つたへたれとよめる也

むはたまのよはふけにけりひさぎおふる

きよきかはせにちどりしばなく

同第三にあり赤人歌也しばなくとはあまたゝびなく
と云也數鳴とぞ書る

やまがはのいしまがくれにすむちどり

ひとしれねばやこゑのきこえず

六帖第六にありいしまがくれにすむとよめり

いとゞしくものおもふよりは川千鳥

野にも山にもなきみだれつゝ

同にあり萬葉集歌也大伴郎女の歌也野山にも鳴くと
云へり

あふみのうみゆふなみちどりしばなけば

こゝろもしのにいにしへをもほゆ

萬葉第三にあり

水鳥

なみたかしいかにかちどりみづとりの

うきねやすべきなをやこぐべき

萬葉第七にあり

かぜふけばよとをむつぶるみづとりの

うきねをのみやつがねわたらん

六帖第三にありよとゝはよどみと云ふ也萬葉集には
不行とぞ書たる

いもこふといねぬあさけにみづとりの

こゑよびわたるいもがつかひか

同にありこゑよびわたるいもがつかひとよめり

鳧

あしかものすだくいけみづまさるとも

まけみそかたにわれてゑめやも（えイ）

萬葉十一にありあしかもとはあしの中にすむかもなりすだくとはおほくあつまるなり紀州本朱書（イ墨書同）

鴛

はねのうへのしもうちはらふともをなみ

をしのひとりねすとぞわびしき（ろイ同）

六帖にあり鴛鴦ははねをならべてその契ふかしひとつ〱おのづからうせぬれば又こと友をくせぬなり

しろたへのなみふみならしをしどりの

はがなきあとゝひとやまちみん（しイ同）

同にあり

鶴

たつがねのけさなくなへにかりがねは（鳴）

いつくにさしてくもがくるらん（む）

萬葉第十一にありたつがねとはつるのなくを云なり

たづがなきあしべをさしてとびわたる

あなたつ〱しひとりもぬれは

同十五にありたつがなきとよめりたつ〱しとはた（イになし紀本にはあり）ど〱しなり同集大伴旅人の歌にもよめり（紀本以下朱書）

いくよともさしてはいはじゝらつるの（まで）

しらぬまてそあらまほしけれ

六帖にありしらつるとよめり（白霍イ同）

あさひてやけさはうらゝにさしいづる

たのむのたづのそらにむれなく

堀河院百首に前兵衛佐顯仲朝臣のよめるなりあさひことはあさひかげと云なりけさはうらゝにと云てう（そ）らにむれなくとよめるは天晴てつるはそらにたかく（イ同）まふことなり本文におほくみえたりこのたのむので（同）とかりに古難儀にてあるをかくよめるいかゝ

ふるさとをわすれずきなくまなつるは

むかしのなをもなのりけるかな

同百首にあり越前守仲實がよめるなり

鶺鴒（にはこり）

はるのいけのたまもにあそぶにはとりの

あしのいとなきこひもするかな

六帖にありたまもにあそぶとは鳧藻之樂とて鳧はもにたのしむなりあしのいとなきとは水鳥の水にあるをみるはやすけれどあしをばひまなくかくなりされはいとなきとはいとまなきとよめるなり

鵜

あべのしまうのすむいしによるなみの
　　まなくてのころやまとしまみゆ

萬葉三にありうのすむいしとよめりやまとしまねとは日本の名也

雎鳩

みさごゐるふじのやまへにわがきなは
　　いつちゆきてかきみがなけかむ

萬葉十四にありみさごをふじのやまにゐるとよめるいかが

鷸

はるまちてものかなしきにさよふけて
　　はふりなくしぎたがたにかすむ

萬葉十九にありはるまちてとは春さりてと云心なりまちてとは罷と書る也

もゝはがきはねをかくしぎもわがごとく
　　あしたつわひしきかずはまさらん

拾遺抄七にあり貫之歌也このとりははやしをすぎきねをわたる時にもゝはがきはねをかくといへり

雲雀

うら〳〵にてれるはるびにひばりあがり
　　こゝろかなしもひとりおもへは

萬葉十九にありこのとりは春うらゝかにてるにはるかにそらへあがるなりうら〳〵にとはうらゝかにと云ことば也東行南行雲眇々二月三月日遲々と云詩を人の北野にまうでゝ詠じけるにすこしまどろみたるゆめにとざまにゆきかうざまにゆきてくもはる〳〵きさらぎやよひ日うら〳〵とこそ詠ずれと仰せられけるをおもへばをそしと云心にもやあらむ

ひばりあがるはるべとさらになりぬれば
　　みやこもみえむかすみたなびく

同廿にあり

鷲

つくはねにかゝなくわしのねをのみや

おきわたりなむあふとはなしに
六帖にあり
ひとこふるかゝひもわらはいとひけり
わしのけゝなくしらねこゆれと
越前守仲實歌なりかゝひとはをとこにすてられたる
女を云わらとはわれをばと云なりしらねとはをく山
をいふかくまのゝ本宮と那智とへかよへるみちにあ
る山をぞかくはいふ

鷹

やかたをのたかをてにすえみるまのゝ
からぬひなく月ぞへにける
萬葉十七にありやかたをとは矢形尾と書くやのかた
にゝたるをのあるなりたかゝりは仁德天皇御時より
始れることとなり日本紀十一云仁德天皇四十三年依網
屯倉の阿弭古異鳥を奉れり天皇秦公酒をめして曰何
鳥ぞ答てまふさくなれぬることをえつれば人にした
がふ又もろ〳〵のとりを接す此鳥の名を倶知と云な
り天皇百舌鳥野に幸して遊獵して數十の鴙をえ玉へ
りと云々

やかたをのましろのたかをとやにすえ
かきなでみつゝかはまくもよし
同十九にありましろとはめのうへのしろきを云とや
とはたかすへたる屋を云とやかへるといひとかへる
と云はかのやにてかへると云なり其歌
とやかへりわがてなをしゝはしたかの
くるときこゆるすゞむしのこゑ
後拾遺四にあり大江公資歌也われがみはとかへるた
かとなりにけりとしはふれどもこひはわすれず同十
一にある經年戀の心を左大臣のよみ玉へるなり
あらたかのいまはくもゐにいりぬれば
きてもやゐるとみするてだぬき
六帖にありあらたかはならしたるやうなれどもやが
てそりてくもゐに入こともあればかくよめりたかだ
すきをめにあてゝたかへのゆくぬをみるなりてだす
きとはたかだすきなるべし
みかりするすへのにたてるひとつまつ
たかへるたかのこひにかもせむ

此歌長能がよめるなりたかへをむたかはこゐにかゝらんとやこしなかるべきとぞ宇治殿もおほせられける

鴙

すゝきのにさをとるきゝすいとしろくなきしもなかんこもりつまかも

萬葉十九にあり家持歌也大戴禮ニ曰正月鴙震雊禮記月令律中ニ大呂ニ雉雊雞乳云々

山鶏

あしびきのやまどりのをのしだりをのながながしよをひとりかもねむ

六帖歌也人丸詠也山とりの尾のしだりをのともいはれたるを山どりの雄のしだりをのと云べきなりと古人申けるとかやみねをへだてゝよる雌雄ふすとりなりさればひとりねる心にもよせてよめるなるべし

ひるはきてよるはわかるゝやまどりのかげみるときはねはなかれける

同にありよるはひとりぬる心をよめりかげみる時子をなく心は委見ニ鏡部ニ異苑云山鳥は其毛羽を愛す水映すれば則舞魏武時南方獻レ之曰子倉舒令レ人取ニ大鏡ニ著ニ其前ニ山鳥かたちかゝみてまふことやむことえず

雞

にはとりのかけのたれをのみだれをのながきこゝろもをもはざるかも

萬葉七にありにはとりかけのとはにはとりを云なりたれをみだれをとはながくみだりたるを云なり

とをつまとたまくらあけてねたるよはとりのねなくなあけばあくとも

同十にありにはとりといはでたゞとりと云り雞の曉になくことは鷄明春秋說題辭曰雞は爲ニ積陽ニ南方之象大陽精初炎上也故陽出雞のなくは類に感すればなり

又玄中記曰東南有ニ桃都山ニ上有ニ大樹ニ名ニ桃都ニ枝相去三千里上有ニ天雞ニ日初出照ニ此樹ニ雞即鳴天下雞皆隨レ之鳴

ものおもふといねみおきたるあさかけは

わびてなくなりあけのとりさへ

同十にありあけのとりとよめり

あふさかのゆふづけとりにあらばこそ
きみかゆきゝをなく〳〵もみめ

古今十四にあり中納言源昇(のぼる)卿(イ同)の近江介に侍りける時閑院のごがよみてつかはしけるなり齋宮の業平がためにはらへしていだしたりしにはとりをゆふつけてあふさかのせきにはなちたりしによせてよめるとぞにはとりにゆふつけていたすはらへのあるによりゆふづげどりとはいひはしめたりされば古今十八に「たかみそぎゆふつけとりぞからころもたつたの山にをりはへて鳴とよめり大和物語にくはしくみえたりとり(イニあり)のそらね

論衡曰孟嘗君叛出レ秦關鷄未レ鳴關不レ開下座賤客皷(ならして)レ臂爲二雞鳴一而群鷄和レ之乃得レ出焉未下牛馬以二同類一相應上而鷄人忽以二殊音一相和レ之騐未乙以効二同類一也

烏

あかつきとよがらすなけどこのやまの
こずゑのうへはいまだしづけし

萬葉第二(七イ)にあり夜烏とかけり

あさがらすいたくなゝきそわがせこが
あさけのすがたみればかなしも

同十二にあり朝烏とかけり

やまからすかしらもしろくなりにけり
わがゝへるべきときやきぬらん(む)

後拾遺十八にあり増基法師熊野に參てあす出んとしけるに人々しばし待なむや神もゆるし玉はじと云侍ける程におとなし河のほとりにかしら白きからすのはべりければよめるなり

燕丹子曰燕太子丹質二於秦一々王遇レ之無禮不レ得レ意欲レ歸秦王不レ聽謬言曰令烏白頭馬生レ角乃可レ歸仰天歎烏即白頭馬爲レ生レ角秦王不レ得レ止而遣レ之

からすてふおほよそどりのこゝろもて
うつしひとゞはなにおもひけむ

此歌は伊勢のくにゝこほりのつかさなるものゝいへに烏のすをくひて子をあたゝめけるほどおとこからす人に殺されにけりまてどこざりければあたゝめ(さ)けるかひこをすてゝこと男烏をまうけていまたかしく

うちぐしてありきければかひてもかへらでくさりけりこれをみて家あるじの男道心をこして法師になりてなんありける此心をよめるなるべしをはよそどりはからす一名也

ゆふざればこすゑのとこやまかふらん　これかゝれかとなくからすかな

赤染が加茂にこもりけるにゆふぐれにからすのいたくなきけるをよめるなりこすゑのとことはねくらをよめるなり

鵲

かさゝぎのみねとびこえてなきゆけば　なつのよわたるつきぞかくるゝ

第四イ本舊校紀本

後撰の心にあり同月にかさゝぎのとびなくこと月のところにみえたり

和歌童蒙抄第九

獣部

龍　熊　虎　馬　牛　羊　鹿

猪　猿　䶄　鼠

魚具部

魚　鱸　鯉　鮎　貝

虫部

夏虫　蟬付晩蟬空蟬　蚊　秋虫　蛬

蝶紀本同イ　蜻蛉　螢　蛛　𧎴　守宮

蛭

獣部

龍

くちおしやくもゐがくれにすむたつも
　　おもふひとにはみえけるものを

内大臣家の歌合俊頼よめる也くもゐがくれにすむたつもとは昔もろこしに莊子曰子帳見魯哀公不禮去曰君好士也有似葉公子易之好龍彫文畫之於是天龍聞而下之窺頭於牖抱尾於堂葉公見之失其魂魄五色無主是葉公非好龍也好夫似龍而非龍也今君非好士也好夫似士者

熊

あらくまのすむてふやまのしばさやぎ
　　せめてとふともながなはいはじ

萬葉十一にありあらくまとはたけきくまと云心也しばさやぎとはしばをかきと云歟又しばそよきと云にやさやといひそよと云は同じ事也

虎

ありとてもいくよかはふるからくにの
　　とらふすのべにみをやなけまし

六帖にあり釋迦如來の薩埵王子と申し時虎子をうみてうえてふしたりけるをみまうして衣を竹の林にかけてみを虎に施し玉ひたるをよめるなるべし

馬

たつのむまをあれはもとめむあをによし
　　ならのみやこへこむひとのため

萬葉五にありたつのむまとは龍馬といふなりかをさしてむまといふひともありければ

かもをもをしとおもふなるべし

拾遺抄十二にあり能宣かもとに車のかもをこひにつかはしたりけるになしと云て侍ければ仲文がよみてつかはしたりけるなりその返歌に

なしといへばをしむかもとやおもふらん
　　しかやむまとをいふべかりける

となむ能宣よめりける昔もろこしに秦始皇と申すみかどおはしましきその子秦の二世と申すみかどをはすす心おろかにつたなし趙高まつりことををさめて天下をわがまゝにす二世をうしなはむの心いできぬ天

下人の心をみむとて鹿を彼二世に奉りて馬也と云時にしかと云人をばつみをおこなふ其後鹿と云人なしこゝに趙高いくさをおこして他國より君を討奉んとていくさきたれりと云二世樓にのぼりて見給にいくさ四方にかこめり逝れむ方なくて自殺をはりぬ

玉尅春苑道

たまきはるうちのおほのにこまなめて
あさふますらむそのくさふけの

萬葉一にあり玉きはると其こゝろはひ云にや命の終る時をぞ玉切命とよみならはしたるされば日本紀に武内宿禰の忍熊王を追ふせたのわたり〇しづみてしす其かはねをかけども數日をへてうち河にてえたり武内宿禰歌曰あふみのにせたのわたりにかづくとりたながみ過てうちにとらへつと云によりたることにやされどせたにてこそみえたればこれも如何と聞ゆくさふけとは草ふかと云

しはつやまうちてえくればわがのれる
こまぞつまづくいへこふらしも

萬葉三にありふるさとにてふればこまつまづくといふなり

久敬胡之　武藝波古宇馬
くゑこしにむぎはむこ〇まのはつ〳〵に
あしにしてらしあやにかなしも

同十四にあり

柜楮越　麥咋馬
ませこしにむぎはむこまをのらるれと
なほもこひしくおもひかてぬを

ませこし云々ノ歌イナシ紀本には朱書也

同十二にあり

かきごしにうまをうしとはいはねども
ひとのこゝろのほどをしるかな

四條中納言の少式部内侍につかはしける歌也孔子の道をおはしけるに馬のかきより頭をさし出たりけるを牛よとのたまひければ弟子共あやしと思顔回ぞ十六町を行心得たりけるひよみの午と云文字の頭いたしたるは牛といふなり

ゆふさればみちもみへねどわれはただ
もとこしてまにまかせてぞゆく

こまにまかすとは韓子曰桓公伐孤竹春行て秋歸るまどひて道を失ふ管仲曰老馬之智もちゐるへしすなはち馬を放て從ひて歸りぬと云々

きみとわれえもおきやらずしらこまや
　そのむしうらのつちなけれども
此歌昔男女とふせりけるに志し深く思ひければ淮南萬畢術といふとに東にゆける馬の跡の中なる土をふせる人をおこすことをなし注曰ひむがしにゆける白き馬のひつめの下の土に三家の井中の泥を取てあはせてふしたる人のへその上につくればをくることあたはずといへることをよめるなるべし
　紀本朱書イになし書寫のたがひなるべし追て書入べしのりかへしはにむまならねぞ
後賴歌也はに馬は日本紀十四に伯孫むすめ子うめりときゝてゆきてむこの家によろこぶつきのよにかへる蓬蔂丘譽田陵のもとにあかき駿にのれるものにあひぬ其馬龍の如くに飛あがり鴻のごとくにをどろく伯孫心にねがふすなはちのれることの駿馬にくつばみをならふあかむまこゝろのひけはせきえぬまたらの馬をそぐしておふべからずその時にむまにのれる人伯孫がねがふ心をしりてむまをのりかへてあひわかれぬ伯孫悦てむまやに入てくらをときまくさをかひてねぬあけてみるにあかむま土馬になれり伯孫心にあやしみて歸へりてはむたの陵にもとむすなはちまたらをの馬をはにむまのなかにみるとりかへてかへたる所の土馬をおくと云々

牛

あしびきのやまたことひのうしなれば
　おもしろくこそけふはひきけれ
六帖歌也おもしろとは天照大神あめのいはとをひらかしめしにそはれひとのおもてみなしろかりきこれよりはじまれることはなり
以下イニナシ紀本に朱にてかけり
やまとことゝ云ふよりひきけれと云ふにやことひ牛は亘の字とぞ

羊

うらみかねむまや〳〵とおもふまに
　けふもひつじになりにけるかな
古歌也いといたくものねたみしける人の妻男を日のたくるまでまちわびてよめる也ひつじになるとは妬記曰素邑有ニ士人一婦大妬ニ忌於夫一小則罵詈大

搖打掌以長繩繫夫脚且嗄便牽繩士人窖與家巫婦爲計固婦眠士人入厠以繩繫羊士人壞墻走近婦覺牽繩而羊至大驚怪召問家巫阿嬢積惡先人怪責故郎君變成羊若能改悔乃可祈請婦因悲號抱羊慟哭自咎悔祈是師巫乃令七日崇擧家大小悉適於室中祭鬼神師咒羊遠復本形婿徐還婦見婿啼而曰多日作羊不辛苦耶婿曰猶憶噉草不美腹中痛耳婦愈悲哀後陰妬著婿因伏地作羊鳴婦驚起後跪啼先人爲誓於此不陰妬忘羊

以下イになし紀本にはあり　むまや〳〵とは今や〳〵なるべし夫れを羊といはむとてむまと云ふ也又歌表は午の時と思間に未の時と云ふにや此抄の說は羊に成たることを云へり

けふもまたむまのかひこそふきつなれ
ひつじのあゆみちかつきぬらむ

摩那經云譬ば梅陀羅が牛をかひてほふるところにいたるあゆむごとに死地に近づくが如し人の命又かくの如しと云々此梅陀羅と云はわらはなりこのうしと云は羊也往生要集に居所に到る羊のさらに死にちかづき小水に遊ぶ魚日々に命を滅するがごとしと云々

鹿

このをかにをしかふみをこしうかねらひ
ゆくまてすをむきみゆへにこそ

萬葉第八にありうかねらひとはうかゝひねらふと云ふなり

きみこひてうらふれをればしきのゝの
あきはぎしのぎさをしかなくも

同に有さをしかとはめしかのつのおひたるを云ふと古人申けれどなほちいさきをゝしかと云ふなり

あきもきぬはぎもちりぬとさをしかの
なくなるこゑもうらふれにけり

同にありてゑうらふるとよめり

あきはぎにうらこひをればあしびきの
やましたとよみしかぞなくらむ

古今第四にありうらこひをれば又山下とよみと云へり

みやぎのにつまよふしかぞさけびなる
もとあらのはぎにつゆやさむけき

後拾遺第四にあり藤の長能が歌也さけぶとよめり

しかのねそねさめのとこにきこゆなる
をのゝくさぶしつゆやをくらむ

同にあり家經が歌也をのゝくさぶしとよめり

すかるなくあきのはぎはらあさたちて
たびゆくひとをいつとかまたむ

すがるとは鹿を云契仲はすがるは鹿にあらず蜂なりと難じたり

かごやまのはわかゞしたにうちとけて
かたぬくしかはまつこひなせそ

堀川院百首に匡房卿所ㇾ詠也かたぬくしかとは昔天照大神あめのいはとをうちふさゐであめのいはやにこもりゐましゝときに思兼の神をかくはかりとおくはかりて天香山のしかをいけながらとらへて其かたをぬぎてしかをばはなちかりてあまのかご山のはゝかのきをねごしにこして其かたのほねをやきてかの大神の出まさむことをうらなふみうらのたばりにかゐひていはとをおしひらきいでましきいまのよにかめのこうをもちゐたり委見二古語拾遺一

彼思兼の神はいまのト部氏之遠祖也さればかご山はそらにある也はわかとは木の名也ことのおこり神樂歌にみえたり又かご山は大和國にあり日本紀には山のあまりに高くてあめのかのくれば天香來山と云とみえたり

猪

かるもかきふすゐのとこのいをやすみ
さこそねざらめかゝらずもかな

後拾遺十四にあり和泉式部歌也かるもとはかれたる草也其草をかきあつめてゐのしゝはふすなりゐのながいとて七日まで伏すと云へり

こしらへてこゝにゐよとはいへどなを
したひてありくこひのやつこか

古歌也韓子曰曾子力妻之ㇾ市其子隨而泣其母曰汝還反爲汝殺彘妻迎市來曾子欲捕彘殺之其妻止之曰持與嬰兒戲也曾子曰嬰兒者有非知之侍父母而學之者也今子欺之是敎子欺也母欺子々而不信母非所以成敎也遂殺彘

猿

あしびきのやまのたえまにつまこふと
　しかにもまさるてゑきてゆなり
六帖にあり山のたえまとは斷峽也さるつまこふとみえたり
わびしらにましらなゝきそあしびきの
　やまのかひあるけふにやはあらぬ（躬恒が紀本同）
古今にあり貫之詠也大井河逍遙に猿叫レ峽と云題なりかひとは峽を云又心のかひありと思にみせたるなりさる峽になくてとは（イニアリ紀本には朱にてかけり）宜都山川記曰峽中猿鳴山谷傳二其響一皦々無レ所レ絶行者歌レ之曰巴東三峽猿鳴悲猿鳴三聲涙沾衣

鼯

むさゝびはこずゑもとむとあしびきの
　やまのさつをにあひにけるかも
萬葉三にあり志貴王子の詠也さつをとはしづをと云なりさとしとは同じ事也これを五月のれうと云など申人のあるはむげのひがことなんめり

鼠

たのむよかつきのねずみのさはぐまの
　くさはにかゝるつゆのいのちを
高光少將詠也甚義述義記下卷云たとへばひとのつみを王にうるなりその人遁れ走る王醉象をしてをはしむをそれ急にして白枯井に投ず井のなかばにひとつの朽たる草あり手をもてこれをひかへたり下に惡龍ありて毒を吐てこれに向ふ五毒蛇ありて又害をくはへんとす大象うへにのぞみてまたなめむとす其人くるしみきはまりて大におそれ井の上に一の樹あり樹の上に蜜滴ありて口のうちにおちいる味ひにつきてしかくおそれをわすれぬ枯井は生死也醉象は無常也毒龍は惡道也五蛇五陰也腐草は命根也二鼠は白黑日月也蜜滴は五欲樂也蜜滴おちて怖を忘ると云は衆生の五欲樂をえて生死の無常もよほしせむることを忘れたるに喩る也又明宿願果報經に此たとひあり二白鼠は日月なりと云り

魚貝部

魚

やまさとはたのきのさいもくむべきに
　をしねはすとてけふもくらしつ
萬葉にありたのきとはたのきはと云なりさいとはち

いさきいをゝ云をしねとはをそいねと云なり

鱸

あらたつのふちえのうらにすゞきつる
　　あまとかみらんたびゆくわれを

萬葉三にあり

すゞきとるあまのたくひのよそにたに
　　みぬ人ゆへにてふるてのごろ

同十一にあり

鯉

よどがはのそこにすまねごこひといへば
　　すべていをてそねられざりけれ

六帖三にあり漢事鯉不レ寝と云り

いとねたしくゝりのみやのいけにすむ
　　こひゆゑひとにあさむかれぬる

古歌也景行天皇四年幸二美濃國一有二佳人一曰二弟媛一幸二天皇弟媛之家一弟媛則隱二竹林一爰天皇權令弟媛至而居二于泳ノ宮一泳宮此云區玖利能彌椰鯉魚浮レ池臨視而戲遊時弟媛欲レ見二其鯉一密來臨レ池天皇則留而通レ之云云　●

鮒

おきへゆきへにゆきいまやいもがため
　　わがすなとれるもぶしつかぶな

萬葉四にありへにゆきとはほとりへゆきと云也もぶしつかぶなとはもにふしたるひとにきりのふなと云なり

鮎

まつらがはかはのせひかりあゆつると
　　たゞをるいもがものすそぬれぬ

萬葉集五にあり　日本紀九云神功皇后夏四月壬寅朔甲辰肥前國松浦のこほりに至りてたましまの里の小河のほとりに進食を奉る於レ是皇后針を勾て釣に作りて粒を取て餌にして裳のいとすぢをぬきとりて緡にして河の中に石の上にのぼりて釣をなげて祈て曰朕に西のかた財の國をもとめむと思ふもしてとなることあらばかはのいをつりをくへ因て竿をかけてすなはち細鱗魚をえ玉へり時に皇后の曰希見物也故に時人其所を號て梅豆羅の國と云今松浦と云は訛也是以其國の女人四月上旬にあたることに年魚をつるこ

と今にたえずたゞ男夫(をのこ)のつるにうることあたはずさればかの皇后のたからの國をもとむとをぼしめしてつりし玉ひしにとられたるいをなればあゆとはなづけたるなり

虫部

虫

つゝめどもかくれぬものはなつむしの
　みよりあまれるおもひなりけり

大和物語にあり式部卿宮のかつらのみやにすみ玉ひけるとき其さふらひけるうなゐをとこ宮を思(と)かけ奉りけるをしろしめさゝりけりほたるのとびありきたるをかれとりてこと此わらはにのたまひければかさみのすそにつゝみてごらんせさすとてかくきこえける也されば夏虫とは螢を云(フ)と見えたるを又夏夜火にとびいるあをき虫をも云(フ)也本文青蛾拂(ニ)燭(ニ)と云り禮記月令曰季夏之月腐草化爲(イニナシ)螢(ニ)註螢は飛虫螢火也

六帖歌に

もゆるひにおもひ入にしなつむしは
　なにゝかさらにとびかへるべき

蟬付 晩蟬 空蟬イ

いはゝしるたきもとゞろになくむしの
　こゑをしきけばみやこおもはゆ

萬葉七(十五イ)にありたきもうごきてなくとよめり

晩蟬

ひぐらしはなきとなけどもわがこふる(つま イ同)
　たをやめわれはさだめかねつく(ブ)

萬葉十一(ワ)にあくひぐらしとは秋の末つかたにひくれに鳴を云(フ)なりたをやめとは婦女と書て日本紀にはよめり

ゆふかげにきなくひぐらしこゝたくの
　ひごとになけどあかぬこゑかも

同巻にありこゝたくとはそこばくと云(フ)也

空蟬

うつせみのむなしきからになるまでに
　わすれむとおもふわれならなくに

六帖第六にありうつせみとはせみのもぬけを云(フ)なり

蚊火

すくもかきをのれふするかやりびの
　けぶりにむせぶしづのをだまき

六帖に齋院(課イ)保子内親王歌合に宣旨のよめる歌なりす

くもかきとよめり又しづのをだまきとは只やまがつなどをばいはで苧をまく○を云ッにこそあめれくりかへしなごふるくよめば此歌にもさもみへめ如何

秋虫

あきあればのもせにむしのをりつめる
こゑのあやをばたれかきるらむ

後撰第五にあり藤元良朝臣歌なりてゑのあやとよめり

かぜさむみなく秋虫のなみだこそ
くさはいろとるつゆとをくらん

同卷にあり讀人不レ知とかけり秋虫のなみだいろとるとよめり

蓊

なけやなけよもぎがそまのきり〳〵す
すぎゆくあきはげにぞかなしき

後拾遺第四にあり曾丹歌なりよもぎがそまとはよもぎのむれてたてるがそま山のきのむれたてるににたるなり

蜾（紀本蜍 イ同）

もゝとせははなにやどりてすぐしてき
このよはてふのゆめにやあるらむ

堀川院百首夢歌に江匡房卿のよめるなり莊子に云ッ昔莊周夢爲二胡蝶一栩々然不レ知之俄然覺則瞿然周也不レ知三之夢爲二胡蝶一也

蜻蛉

つれ〴〵の春ひにまよふかげろふの
かげみしよりぞ人はこひしき

六帖にありかげろふとはくろきとうばうのちひさきやうなるものゝ春の日のうら〳〵とあることものかけるてとのやうにてほのめくなり（イにあり紀本には采にてかけり）尸子曰ッ昔荊莊王養由基に命じて蜻蛉いさしむ王の曰吾いけながらこれをえんとおもふ由基弓をひいているに左のはねをはらひつ王大によろこぶ

蠶

たらちねのをやのかふこのまゆごもり
いぶせくもあるかいもにあはずて

萬葉十二にありてかふこのまゆごもりとよめり

馬聲蜂音石花蜘蛛と書けり石花はせいなり

蛛

わきもこがくべきよひなりさゝがにの
くものふるまひかねてしるしも　イ同本紀も同

古今十四にあり衣通姫のみかどをこひ奉りてよめるなりくものふるまひとはあつまると云にや西京雜記曰「鵲は雨濕を惡む鳥ゆゑ乾と云義を以て乾鵲と云行人至は旅行したる人の家に歸る也唐山の文には歸着のとを至ると書くと常にあり」イに此までなし 樊將軍噲問二陸賈一曰自レ古人君皆云レ受二命於天一云レ有二瑞應一豈有レ是乎賈應レ之曰夫目瞤得二酒食一燈火花得二錢財一干鵲噪而行人至蜘蛛集則百事意小既有レ徵火亦宜レ然故目瞤則咒レ之火華則拜レ之干鵲噪則餧レ之「蜘蛛集則放レ之況天下大寶人君重位非二大命一何以得レ之哉瑞寶也信也天以レ寶爲レ信應二人之德一故曰二瑞應一無二天命一無二寶信一不レ可二以レ力取一也 餧之粟をまきて食はしむるなり伺鳥と云てはなし」又蜘蛛垂客人來と云文あり可レ尋衣通姫と云は近江國坂田郡忍坂大中姫之弟也大中姫と申は允恭天皇の皇后也允恭天皇と申は雄朝間雅子宿禰の天皇也天皇七年冬新室に讌したまふ天皇みづから琴を撫給皇后惶々としてたちまふ舞ことをはつてのたまはく娘子を奉らむ天皇すなはち皇后にとふ娘子はたれぞ奏してのたまはく妾がをとゝひめ也容姿すぐれてならびなしその艶色衣をとほりててれり是以時人衣通姫と號たる也天皇心ざしかゝり時に弟媛母に随て近江坂田にあり使を遣してめす皇后のみこゝろをゝそれてまいらせず又かさねてなゝたびめすになほまうでずひとりの舍人中臣の烏賊津に勅してめす弟媛したがひて來れり天皇大によろこむで別に殿屋藤原にかまへてすへ玉へりみゆき八年春藤原宮に幸したまふて衣通姫の消息をみ玉ふに姫天皇をこひ奉りてひとりゐ玉りその天皇臨玉へるをしらずしてかみの歌を詠じ玉ふを聞給てすなはち感情有て詠し給歌に曰「さゝらかたにしきのひもをときさけてあまたはねずにたゞひとよのみ皇后これを聞給て大に恨給ふ衣通姫まうさくねがはくは王居をはなれてとほくいなむと思ふ皇后のねたみ給心やすこしやすみ玉はんか天皇すなはちみやを河内の茅渟につくり衣通姫をすえ給ふ委見二日本紀十三卷一

國史云元正天皇靈龜二年五月癸卯河内國の和泉日根兩郡を割て珍弩宮に供せしむ四年甲子に大鳥和泉日根三郡を割て始て和泉の監をゝけり孝謙皇帝天平勝寶九年五月乙卯に勅して和泉國と云てふるきによりて分立也されば宮を河内の茅渟に造といへる今和泉國也「續日本紀第二十巻にあり」

蟇

あさかすみかひやがしたになくかはづ

しのびつゝありとつけむかもかも

萬葉集十にありかひやは古來難義也岸なんとのくづれたる所にしばのねなどさしおほひてゐるなるをいふなど申すめるはひがことなめりたゞかはのしたになくと云べきとぞ心えられたるひとはとはかよふ聲也やはたゞをゝる文字也かもじはもじいたらぬ所にをく歌のならひなりあつふすまなでやがしたと云がごとし

守宮

ぬぐゝつのかさなることのかさなるは

ゐもりのしるしいまはあらじと

一條院御時或人のめによみてとらせける歌也世の諺に云くめのみそかをとこするときにぬきをくゝつかさなると云ゐもりのしるしとは兼名苑云蜥蜴一名守宮形鱓器をもてかふくは爪ろには朱をもちゐるみにあかきことゝはりていふところ七斤にみちてのちうつことは萬杵して女人の支體に點す身をゝふるまできえずもし婬すればすなはちきへぬ故に守宮となづくるなり

蛭

いてしろくひるはけしきをみせんとて

しのぶるむねはいかゞくるしき

古歌也このひるとよめるは蛭と晝とをかよはしていへるなり賈誼が書曰楚王食ニ寒菹一を中に有ニ水蛭一欲レ發レ之宰夫の得レ罪しなむことをおそれてひそかに呑因て得ニ心疾一甚乃以言ニ令尹賀一曰陰德なり如陽報あらむてよひ惠苑而蛭吐心腹之病皆愈

和歌童蒙抄第十

雜體（體イ同）

長歌　短歌　旋頭（諸本此事落）　混本　誹諧

相聞　折句　廻文（イニナシ紀にはあり）　隱題　連歌　返歌

歌病

七病　四病　八病

歌合例（判例イ同）

勝劣難決之例　御製勝例　一番左勝例

病難例　詞難例　文字病難不レ例

題心難例　所名難例

雜體

長歌

やくもたついづもやへがきつまごめに
　やへがきつくるそのやへがきを

素盞鳴尊出雲詠也五七五七七の句をさたむることこれよりはしまれり第三句のはての字を初韻とし第五句のはての字を終韻とせりこれを又反歌と云へりからの歌になずらへて六義あり一曰風そへうた二曰賦かぞへうた三曰比なそらへうた四曰興たとへうた五曰雅たゝことうた六曰頌いはひうた

このうたども古今假名序にみえたり

短歌

ちはやふる　かみなづきとや　けさよりは　くもりもあへず　はつしぐれ　もみぢとゝもに　ふるさとの　よしのゝやまの　やまあらしも　さむくひごとに　なりゆけば　たまのをかけて　てきちらし　あられみだれて　しもこほり　いやかたまれる　にはのをもに　むら／＼みゆる　ふゆくさのうへにふりしく　しらゆきの　つもり／＼て　あらたまの　としをあまたも　すくしつるかな

躬恒かうたの短歌也五七五七の句をつゞけていはま

はしきことをいひつくしていく句とさだめす第二句のはての字を一韻とし第四句のはての字二韻としてつらねたり「はてに韵としてつらねたり」はてには七々の句をゝけりよくもしらぬ人初の五七五の句とはての七七の句を卅一字の詠によみかなふると云ひがことなりたゞよくよめるいひのこしたることもなくこれをかくいはむとてながくいひつゞくるときこえてはての句にいひきはむべきなりおくに反歌を一首くはふたとへば詩の序あるかことし短歌は序のやうになかくいひつゞけて反歌は詩のやうにおなじ心を句をつゝめてかへさひつくるなり反字をばかへさふとよめりこの反歌をよみかなふることかたしされば古今短歌五首の中に忠峯が古歌にそへてたてまつれるくれたけのよゝのふることなかりせばとよめるにそへたるきみがよにあふさかやまのいはつゝじてがくれたりといへるばかりをぞいれたる長歌短歌はふるき論にて昔よりしれる人なし此短歌をたゞうち云にはながうたと云濱成中納言式にぞ反歌をは短歌といひ短歌をば長歌といへるされども日本記に卅一字の詠を長歌といへり萬葉集には反歌を短歌とかけることもまじりけれどもたしかにながくよみつゞけたる短歌と云ることはいますこしたしかなり其人の作反歌一首とかきて注に加短歌とかけるは詩とかきて加レ序と云にかはらねははしにある長句の歌を短歌と云とあらはにみえたりいかにいはんや古今こそえらべるときもやむごとなく撰所人もあやまちあるべくもなきに長句の歌を短歌五首とかゝれたりしたがひて長句短歌とむかしよりの論にて卅一字を短歌と云ことはやむことなくこのみちにふかきひといはぬなりたゞいかなればなかきをみじかうたとはいひみしかきをなかうたとはいうぞと云うたがひのこれるなりちかくは俊頼朝臣無名抄と云物をかきとゞめたるには短歌とはおなしことをよみながさずしてをきつなみあれのみまさるとおもひよりなばそのうちのことにつきていひはつべきにはなすゝきしてまねかせばはつかりをなきわたらせなどあまたのものをいひつゞけたるによりていふなんめりとかけり帥大納言の申されけることにかと思へとこれはいはれなき儀なり短歌にもひとすぢをよめるおほかりはしにしるせる忠峯が短歌も冬のことをのみよみながしたり

長歌に又くものなみたちつきのふねなどさま〳〵のものどもをいへるもあり短歌とや云べきたゞ文選文集の長歌行短歌行の心を尋ねてをろかなる心におもひみるにこれはうたと云はうたふと云ことなれば卅一字作は字すくなく句のつゞきなかくよけれはその詠のこえながし長句の歌は句のおほくつゞけるゆへに詠のこえながくはあるべからず仍短歌と云なりかく安きさまにはこゝろえぬにより難義になりたるにやとこゝろえられ侍されどこれはどのことゝは思よらぬ人なかりけむやはされはいかゞとも思ふべけれどかくいはむをひがてとゝは又云人かたくぞあるべき

混本歌

あさがほのゆふかげまたすちりやすき
　はなのよぞかし

又

いはのうへにねさすまつがへとのみこそ
　おもふこゝろあるものを

(イに此廿二字ナシ)
(岩の上に根さす松か枝とのみこそおもいしものを)

これは一句をすてゝよまずなりはじめのはすゑの七字をすてたりつきのはすゑの七文字を五文字によめるなりかくもよむなるべし

但四條大納言抄に後悔病の歌にぞ入たるいそぎてよみいつるか故に文字のかずさだまらぬをのちにくやしくおもふなるべし

俳諧歌

むめのはなみにこそきつれうぐひすの
　ひとく〳〵といとひしもをる

あきのゝになまめきたてるをみなへし
　あなこと〳〵しはなもひとゝき

もろこしのよし〳〵やまにでもるとも
　をくれむとおもふわれならなくに

古今雑歌部に俳諧歌のいれること五十首なり此三首は其内の歌也俳諧はいにしへより人しらず俊頼無名抄に宇治殿の四條大納言にとはせ玉ひければこれは尋ねさせ玉ふまじきことなり先達ともにとい侍りしにさらに申ことなかりきといひしことなりと宇治大納言にかたらせ玉ひけるを通俊の中納言後拾遺をえらへるに俳諧の歌を入たりもしをしはかりごとにやとかきたりましていかなこととぞとたづねむにつけてを

こかましかるべしされど俳諧は戯言なりと云はかりをことにて俳諧は滑稽なりと云ことをみざる人の心えがたく思ふにや俳者俳優也日本紀にわさをきとよめりものをかしくいひさしたることを云諧はいふてとのつきもせずきはめがたきなり文選に東方朔は滑稽の雄也といへり注に滑稽は俳諧なりといへり古今の五十七首の歌みなこれにかなはぬなしあるひはをもひもかけぬふしをよみあるひはたはふれざれたることをよめり「あなこと〳〵しともとへどこたえすともいへるはひとのしりやすきすぢなり「もろこしのよしのゝ山にとよめるはなにことにいりたるぞとうたがふこと也あるひは金峯山は五臺山のわしの五色の雲にのりてきたれるなりと李部王記にかゝれたりこれによりて江中納言のみたけの御塔御願文に五雲にのりてとひきたれりと書れたりされはもろこしとはいへるなり又基俊は文彦太子の母后の太子の傅のもとへやるとて漢恵帝のことをおもひて商山四皓の心をよめるなりとおもひかけぬすちにとりなして

まをされしをあるひとの伊勢集に
みわのやまいかにまちみむとしふとも
たつぬるひともあらじとおもへば
とよみて時平大臣の許へつかはしける返歌とこそみえたれと申ければさてそあなれとてもものもまうされざりけりもし五臺山の心にても又商山の心にてもあらば俳諧の歌にはあらて雑部にいるべしたとへばこのよしのゝ山にこもらむはこともよろしもろこしならむよしのよしのゝ山なりともをくれじとよめるなりさればこそおもひもよらぬこゝろあまりたるによりて俳諧にはいりたれ俳諧に入たらむまで心えむにやすかるべし

相聞歌

萬葉集に古今相聞往来歌類也上下と部をたてたり其歌ともは多は戀心或述懐羇旅悲別問答にてそれとたしかにさしたることはなしたゞ桂紅集をもてあそび雪月を詠ぜるにはあらでおもふこゝろをいかさまにもいひのべてひとにしらする歌をあひきかするうたとなづけたるべし

折句歌

からころもきつゝなれにしつましあれば
　はる〳〵きぬるたびをしぞおもふ
これは何ことのはしめにかきつはたとをきたりかふ
りのうたと云ｯ
あふさかもはてはゆきゝのせきもゐず
　たづねてとひこきなばかへさじ
これは何ことのかみしもに「あはせたきものすこし」
とすえて仁和のみかどのかた〳〵にたてまつらせた
まへりけるにみなこゝろもえずかへしをたてまつり
けるなかにひろはたのみやす所のたき物を奉らせ玉
へりければ心あることにてめでをぼしたりけりとか
たりつたへたるうたなり　春水云此事天暦帝と亦染
衛門が榮花物語第一卷に見えたり仁和とは書誤り歟
と見ゆるを汞俊の悦目抄下にも仁和とあり廣幡女御
は源庶明卿女村上女御也然を古先哲仁和とは胸臆の
まゝに書れし一失なり後人鑒之
〔○順印〕イニナシ　〔△逆印〕イニナシ
をのゝはぎみしわきにゝすなりぞます
　へしだにあやなしるしけしきは
これはをみなへしと云ふことを何のはしめにをきは
なすゝきと云ふ文字を何のはてにさかさまにすえてよ
めるなり此二首をば上下に置たればくつかふりのう
たといふ
以下イニナシ紀本にはあり追考清輔奥儀抄第一云此歌在村上御集廣幡御息處の
紀本同詩也而載喜撰式尤不審者以古歌歟

廻文

むらくさにくさのなはもしそなはらば
　なぞしもはなのさくにさくらむ
これはさかさまにもをなじやうによまるゝなり

隱題歌　俗にたにたて入ミ云也ナシ

あだなりなとりのこほりにをりゐるは
　したよりとくることをしらぬか
これはなとりのこほりといふことをかくせり
あきちかうのはなりにけりしらつゆの
　をけるくさばのいろかはりゆく
これは桔梗をかくせりつねの人のいふまゝにきねと
かくさむはよみにくかるべきにあはせて文字をたづ

ねてよめるなり

連歌

よのつねのことなればしるしのせず上下の句をきらはずいひのこすことなくてつけにくきやうにすべき也はれなるにつゝ敬みてつくべき連歌をゝそくつくるはことしらけてやかていひいでがたしたゞいかにもしつけやぶりつるはよし良暹が「もみぢばのこかれてみゆるみふねかなといへりけるに殿上人あまたありけるにやがてさてやみにけるはうきためしにいひながしたりつけたる人あまたありけめどほとの過ぬれば出ぬわざになむ

返歌

うたのかへしつねのことなればかきのせずよき歌にはかへしはせぬ事也とぞ古き人申けるさもあることなりかへしのよきにはさまでもなけれど本歌もひかれて撰集なとにはいる物也鸚鵡がへしと云ことあり本歌にいともたがはぬを云なりものいへばそのくちまねをするなりとぞ云つたへたる異苑には帳茂光と云人鸚鵡をかふありきてかへるごとにそのつかはれびとのよしあしきかたると云りこれはなへてならぬとりにてありければこのふみにしるされたりと見えたり

淮南子には鸚鵡よくものいふしかれどもそのいふことをえていはさることをばえすといへりされば鸚鵡かへしとは本歌に云る心をことさまならでこたへたるを云べき也うたのかへしかならずさもなきがゆゑなり

七病見濱成中納言式寶龜三年奉勅制式

一頭尾　第一句尾字與二句尾字同也

赤人春歌云しもかれの一句したるやなきの二句此者發句尾字又第二句尾字同也

二胸尾　第一句尾與二句三句三六字同也

大伯内親王贈大津親王歌曰

かみかせの一句いせのくにゝも二句あらましを三句

此發句尾字二句三字同也

高市里人秋歌曰

しらつゆと一句あきのはきとは此發句尾二句六字也

三腰尾　本韵字與他句尾同也

鏡女王詠立春歌曰

わかやなぎ一句みどりのいとに二句なるまでに
本韵二句みなくうれなみ四句かけあくみたり五句
此本韵にの字と二句の尾字となり少長谷鵜養玉津
島歌曰
やまとにて一句われはてひむな二句きのくにの
三句さひかのうみの四句をきつしまのと五句
此本韵の字と四句の尾字と同也
已上爲二巨病一
四蹶子　五句中に本韵と関ある字あるなりこれなもき病ならず
いもがなは一句ちかになかれむ二句ひめじまに
三句こまつがえたの四句こけむすまでに五句
此本韵の二字と二句中の二字とを爲二一蹶一也他字
准レ之可レ知
五遊風　一句中ノ二字與尾字同也
紀末在判事懐思歌曰
とにかくに一句ものはおもはず二句ひだひとの
三句
此發句二字と五字と同也これ巨病とせず
六同聲韵二韵ともに同字是也

大伯内親王至レ自二齋宮一應三大津親王二歌曰
みまくほり一句わがおもふきみも二句あらなく
に三句なにゝかきけむ四句むまつからしに五句
仁字共ニ韵字同聲也故曰二同聲韻一これ巨病にあらず
長歌にはみなさることなし
七遍身二韵中に本韵をのぞきて用二同字一也
但馬内親王答二穂積親王一歌曰
いまさらに一句なにかおもはむ二句うかなびく
三句こゝろはきみに四句よりにしものを五句
此二韵のうちにて字のよつあるなり
四病　見二四條大納言抄一
一岸樹　第一句初字與第二初字同也
てるひさへてらぬつきさへといふなり
これはさるべしきゝにくきがゆへなり
されともよきうたにおほくよめり
二風燭　初の句の二字與四字同也曰二遊風一
このとのはさとのとりとると云也あながちにさる
へきにあらず
三浪舟　船舶　初の五言の第四五字と次の七言の第六七

字と同なり
四落花　句ごとにおなし字をまぜてみだれたるなり
此外に疊句連句(つらね)と云ふことあり
疊句　おなじことをかさねていふなり
こゝろこそこゝろをはかるこゝろなし
こゝろのあたはこゝろなりけりと云也
連句　おなし文字をつゞけて云なり
春の野の秋のゝと云なり
八病
一同心　歌一首のなかにをなしこゝろをふたつよめるなりたとへば
やまざくらさきぬるとよみて又みねのしらくもといひいまそなぎさにといひてみぎはのたつのとよめる也此山と峯と磯と渚となり
二亂思　ことばつゞきつまひらかならずそのこゝろみだれてなにともきこえぬなり
三欄蝶　一首のなかにふたことをならべてよめる也かすみこむといひて又くもたつといへる等なり
四諸鴻(渚鴨)　ひとへに韻をとゝのへてはじめの句のことばをいたはらぬなり
五花橘　句のつゞきにことばをかけて讀也たとへば
此解不足イになし
六老楓　ことばなたらかならずしぶ〳〵しくて吟詠にさまたげあるなり

七中飽　卅一字にあるべきを卅二三四五字をよむ也「もみぢふきおろすやまおろしのかぜとよめるは卅四字なり「いきもやするとこゝろみにいへるは卅三字ありされどよくつゞきたればくせともきこへず
八後悔　韻をとゝのへずしてたとへば混本歌也「いはのうへにねさすまつかえとをもひしものをなさいへる也いそぎてよみいだすほどに句のかずもかへりみぬがゆへにのちにくやしきやまひと云フ也
この歌どもふるき歌にさりてよめるとみゆるなしましていまの人さるへきならねど所注也しらずは論談の時などわろかりぬべければたゞさるぞとみせんがためなりこの頃の人のさるべきやまひは心の病又ことばの病也詞のやまひと云ことはふるきやまひにみへねど髓惱に同心と云病をなしことばふたゝびもちゐる(用)を云ふとかきてみつかたきたかたのまちにかきすとてみつなきひゐにはと〳〵にゐぬこのみづと云ことをぞたゝいへるなりといへりされはことばのやまひは同心の病なるべしされどこのほと人のわにきへよむことは同し心の病の所にしるしのせたる「山さくら峯のしらくもとよみ又なぎさみぎはとよむをば心のやまひとしれ
又

みやまにはまつのゆきだにきえなくに
　みやこはのべにわかなつみけり

又

いまてむといひしばかりにながつきの
　ありあけの月をまちいでつるかな

とよめるは此みやと（深都）／＼つきと（月）／＼（月）とはみな心はかはりたれとことはの病さりところなしかくふるき歌のよきためしとなるによみすゑたると今の人よみ出すに此二ノ（ツ）の病はことの外のあやまちと思へることなれば必さるべき也

歌合判

　勝劣難決例

さよふけてねざめざりせばほとゝぎす
　ひとつてにてそきくべかりけれ

ひとならばまてといふべきをほとゝぎす
　ふたこえとたにきかですぎぬる

天德歌合左（リ）忠見右（キ）元眞歌也判云左（ニ）（ク）（リ）きかむと思はでねさめしけむあやし右人なりといま一聲きかむとてまてとはいかゞいはむするてとたらぬ心ちすいづれもをなし程也とて持に定めらる後に人皆左歌殊の外にまさりたり一日の論にあらすと申けり

こひすてふわがなはまだきたちにけり
　ひとしれずこそおもひそめしが

しのぶれといろにいてにけりわかこひは
　ものやおもふとひとのとふまで

天德歌合左忠見右兼盛歌也小野宮殿判しわづらはれて天氣をうかがはれけるを人は物や思と云歌はこよ（無）なく（越）まさりたりとぞ申める又この物思と云ことは右歌に同やうによまれたる歌を其おりおぼえられさりけるにやとぞ帥大納言の伯母の歌論の返事にはかゝれたる巳上二番判不可也寛治八年大殿ノ歌合判者帥大納言と伯母と判是非論消息に此二番をそ判者はありがたき例にひきのせられたり

ねのひするあまたのひとをひきつれて
　きみがちとせをまつにぞありける

きみかよにひきくらふればねのひする
　まつのちとせもかずならぬかな

承曆二年内裏ノ歌合一番左（リ）實政右公實歌也いつかたも難あらむまうせと仰らるゝに右人々はちとせを數な

らぬと左はちとせをまつとあればことの外にをとれり又松と云ことかくしたるわさといひたるにいかでかくらばむと申に師賢講にていきのしたにあめの下にありとある人のまたむちとせはすくなくやはあるべきちとせにこそあらめと申右の歌つゆばかり難する人なし判者皇后宮大夫顕房うたはいとおしくよき歌也左はたゝよみたれどかつと定められしてこそ心えさりしかと書り

御製勝例

はるかせのふかぬよにたにあらませば
こゝろのどけきはなはみてまし

ちりぬともありとたのまむさくらばな
はるはすぎぬとわれにしらすな

亭子院歌合に左御製右貫之也判に左はうちの御歌也まさにまけむやはと書り

一番左勝例

はるたてはまつひきつれてもろひとも
よろつよふべきやとにてそくれ

くもりなきそらのかゝみとみゆるかな
あきのよながくすめるつきかな

後冷泉院御時皇后宮歌合左臨時客小式部命婦右月伊勢大輔歌也判者内大臣民部卿二人也いかにも一番は左勝べしとさためらる一番は左のまけぬにやされと應和二年内裏歌合一番右勝承暦右方後番歌合に右勝長久二年弘徽殿女御歌合一番右勝このほかに一番歌（此年號本に無之）合右勝ことかぞへつくすべからずさはあれど若事もよろしくは持なども可判歟頗可有用意故也

病難例

さかさらんものとはなしにさくらばな
おもかげにのみまたきみゆらむ

やまざくらさきぬるときはつねよりも
みねのしらくもたちまさりけり

亭子院歌合二番左躬恒右貫之か詠也判云左はらむと云こと二つあり右は山櫻と云て又みねと云ふことありて持になりぬ

つきみればひるかとぞおもふあきのよを
ながきはるひとおもひなしつゝ

寛治八年大殿歌合右方月中納言通俊歌也經信卿難云ひるとひとはもじ同じことにやと申しかは中納言いるとひとは文字かはりて同ことにもはべらずとのべ

申しをことかはりたれど「やまさくらさきたるとき
はつねよりもみねのしらくもたちまさりけりと云フ歌
合歌にてよき歌也されどさることとこそ定められたれ
と申しかばともかくものへ申さゞりきとかゝれたり
あれまさりあしげにみゆるはるこまは
をのがゝけにもおとろきやせむ
永保二年女四宮詩歌合卷藤保房歌也若狹守通宗判ニ云
あしげかけと云フこと二つあれどこれなを春駒とはみ
ゆれば今すこしひきどころありと云々
あるゝむまはみなあしげにぞみえつれど
さはにうつれるかげにぞありける
應德三年若狹守通宗朝臣女子達歌合一番右春駒歌也右大
辨通後卿判ニ云クあしげかけなどたはふれうた也又やま
ひとや申べからむ

詞難例

わがやどにうぐひすいたくなくなるは
にはもはたらにはなやちるらむ
天德歌合右方兼盛歌也左順またうちとけぬ鶯の聲と
よめり左リ爲レ勝小野宮殿判云クよしなき花ちらすもと
る興なくことばもよろしからずと云々

としをへてきけどあかぬはわがやどの
はなにこつたふうぐひすのこゑ
いかなれば春くるからにうぐひすの
をのれがなをばひとにつくらむ
承曆歌合左政長右匡房作也わがやどのとは內にては
よまぬことなりと難す左リ天德歌合によめりと云フ右か
らにとよめるいかなるもじぞと云フに右の人々きゝつ
るからによしの山とよめる歌合の歌にて勝にて後撰
にもいれる歌ぞかしわが宿はちかくよまぬことゝ云フ
に左リはよはけなり右はさし歌也とて持とさためらる
さしうたとはいかなるをいふにかといはまほしかり
しことかな
あきかせになびくゆふべのはなすゝき
ほのかにまねくたちとまりなむ
天永二年八月規子內親王號女四宮注也野宮歌合一番
右歌輔正朝臣詠也順判ニ云クなびくまねくをなしやうな
れはらうたてしたるやうなりと云ヘり
ゆふつくひいれはをくらのやまのはに
をちかへりなくほとゝぎすかな
郁芳門院根合匡房卿作也右大臣判云ク右歌いとみゝと

をくかゝることはふるき歌合にもよからぬことゝなむあるとさだめられたり
ちよをへてすむべきみつをせきいれつゝ
いけのこゝろにまかせたるかな
宇治殿高陽院歌合長元八年九月左方資業詠也輔親判云左せき入るゝわろしとてまく
にはのをもにからのにしきをしくものは
なをとこなつのはなにぞありける
同に赤染衛門よめるなりなをとこなつのとあるわろしとてまく
やまがはにてゝろぼそくぞすだくなる
ひとつみなるゝをしにやあるらむ
若狭守通宗女子達歌合鴛鴦を題にする右歌也通宗判ニ云すだくといふことを心はそしとはいかゞ云へからむもしあまたある聲を云にやあらむかやうのこと證歌などやいるべからむ云々すたくと云ことは通俊卿もよくもしられさりけるにやさはかりの人のかく書れけむあるやうことにやあらむ
をちこちのみちみえぬまであきの道見ゝは
しげくもくさのなりにけるかな
義忠阿波國歌合野草道滋題也義忠判云をちこちとよめるはあしびきの山のみちてそかみよのふることにもいひとゞめたれと云々さればやまぢにのみをちこちといふことばゝいふへきにや
丹後守公基任國歌合霧題に
ながめやるかたさへぞなきをちこちの
やまべにきりのたちしわたれは
判者範永とかくさためす
文字病難不レ例
はなのいろをうつしとどめよかゝみやま鏡山
はるよりのちのかげやみゆると後
亭子院歌合是則詠也此上下の句のはじめの同字くせとさためられす
ことならばくもゐのつきとなりなゝむ
こひしきかげやそらにみゆると
天德歌合中務右方歌也上下句のかみの文字に同し字ぞあめるにくさけにぞいかゝ侍べきと奏しければ左右の仰なしさせる難にはあらぬにぞ左もよければ持

はぎのはにをくしらつゆのつもりせば
はなのかたみはおもはさらまし
野宮歌合望城作也順判ニうためきたりとて勝と定むこ
の上下の句のはじめの同シはの字難にせず
あきのよはいとゞなかくぞなりぬべき
あくるもしらぬつきのひかりに
寛治八年大殿歌合左方兼房が詠也右正家にかてり此
上下句の初字同とて難なし
あしびきのやまかくれなるさくらばな
ちりのこれりとかせにしらすな
天徳歌合左方少貳命婦か歌也小野宮殿判にいとおか
しとてかちぬ此二韵の同字難なし
ひとへつゝやへやまぶきはひらけなむ
ほどへてにほふはなとたのまむ
同歌合云ク右方兼盛作也又かみしもの句のはてに同字
ありと云々左順勝
はるふかみゐでのかはなみたちかへり
みてこそゆかめやまぶきのはな
判云右やへやまぶきのひとへづゝひらけばひとへ山
ぶきにてやへさかずはほいなし
けふよりはねのひのまつもひきかへて
やをよろづよのはるをこそまて
承暦右方後番歌合に美作守匡房よめる也二韵のはて
は字同されど難とせられずかちとさだめられたり
おりやせむおらでやみましあきはぎの
つゆもこゝろをかけぬひぞなき
後冷泉院御時皇后宮歌合美濃君（相模國女也）詠也かちとさた
めらる此第一二句のはじめもし岸樹病とぞいへど難
にもちいられず
むはたまのよるのゆめだにまさしくは
わがおもふことをひとにみせはや
天徳歌合中務右方歌也判云クむはたまとかけりよると
云ツことはぬは玉とぞ云フかきあやまちたりと奏すれば
あやまちあらむにはいかてかと仰らる仍左爲勝云々
これたつぬべきことなり
萬葉集に烏玉とかきてむはたまともうはたまともぬ
はたまとも和字に順かきて侍けりよるならむからに
ぬはたまの心かなふへしとも覺えねど村上聖主のを

まへにて小野宮殿申されけることあだならむやは

題心難例

春

くれなゐのうすはなさくらにほはずは

みなしらくもとみてやすぎまし

しらくもとみゆるにしるしみよしの丶

よしの丶やまのはなざかりかも

大殿寛治八年八月歌合一番左筑前伯母右中納言匡房歌也師大納言判云左めつらしきやうによまれたれと歌の心はとをうてくもとみつれどちかく過てみればくれなゐに匂ふさくら也けりとよまれたるなりさらばやまなどにかけてとをき心やみすべからむ右はめづらしげなけれど別の難もみえねは持とや申べからむ筑前後日に陳して云くれなゐと云さくらやあると侍らばこれをおほへさせたまへ一條大納言歌合

くれなゐにふかくにほへるさくらはな

あめさへふりてそめてけるかな

又白雲は山のみねならねどやどにもゐるものなりたちねとやいひにやらまし丶らくもの

とひてともなくやどにゐるらむ

しらくもとみえつるものをさくらはな

いまはちるとやいろことになる

など貫之がよみて侍ば花紅葉たつねありくにはそこ〳〵とやはよみしるすはなのある處をくもとみるぞかしと云々又帥大納言にきてゆるふみのなかにのもしいつ丶作歌にいとひと候にやまさしく輔親が母に申さふらひしをおさなみゝにき丶候しはおなしみもじはありなむよもじはおほやけ歌にえよまじとこそ申しかさくらはさやみましと申たるをひとしらせさせ玉へる末の世もさだめ人の御ためにみえ侍なむものをと云々

帥大納言のふみのなかに

くれなゐをさくらと云ことをおほろけの人はしりはへらざりけるいはれたることに侍されどこれはふみなどにもつねにつくられ侍ことなれば難する人も侍らざりけむかし又花を雲とよまれたるになを山やあるべからむと云ことはたしかにも覺へ侍らずたゞし此よまれたる御歌の心はとをくてもとみつれどちか

うすくればあさくれなゐの花なりけりとはべればいとをかしく思ひよられて侍めり同はやまなど云ﾌとはき所はべらましかはと思給て申たりけることにやさらに此たてまつられたる歌は叶ひはべらずこれはとほくて雲とみえつれどみえぬはちりにけるにやあらむとあればともにとほくてよまれて侍る也すきゝ（ゝ）とよまれたるは近き方にはべりされぱとはきてとい心のあらむはまさりもやせむと思給て申けるにや昔より歌の判はいとかたく侍事也ちかく殿上人天徳歌合に能因法師のきなかぬよひのしるからばと云ﾌ歌はよき歌といひつたへて侍を四條大納言北山にいませし程までこれをみて歌合の歌にはにずとていれられず侍し也されば皆人の心ゆきてあらむことと有かたく侍りしかばそれいつれまさりたりと申がたしと申てはべりし也これはじめて申にははべらず殿上歌合侍しに左ﾘ一番歌にかすが山いはねの松も君がためとよみあげられて侍しに二條殿かすがをかけたてまつりたらむ歌はえまけ侍らしとの玉ひしかば勝と定められはべりしかばその由を申て侍と判じ申しゝをその案内しらぬ人あやしとやおもひはべりなむと云々

又筑前の君のふみの中に

そのよのことはこまかにもうけ給はらで山みえずとてなむひとしく定められたるとうけ玉はりて山のかゝらぬ雲の歌ともをまひらせたりしにけふのをちてちのためしになるべきにもはべらずたゞみつくすにしろたへにさきまじりたるなかにうすくれなゐにさくらのかほり出たるに立とゞまりてかくにはすはくらのかほり出たるに立とゞまりてかくにはすは雲とみてこそすぎましかと思てなむやのゝきよりものにもたつ雲なればさくらのちかきにもとをきにもよりはべるまじくなむかたはらいたきことに侍れとそらにしられぬゆきやはふるとたにこそ難ははべりければみゝうれしきうたのゆかりにおかしき御文をみ侍りておいのつとにこそはとりをかれ侍りぬれ

やちよへむやとにゝほへるやへさくら　やそうぢびとはちらでこそみめ

かぜのをとものごけきはるのやどなれば　にはふさくらをあくまでぞみる

大殿寛治八年歌合四番左讃岐君〈兼房女〉右正家〈式部権大輔〉よ

めるなり師大納言判ニ左やそうち人もちらでこそみめとよまれたるはいまだちらぬ心を花のちらぬかとおぼゆるうちに二句のかみごとのやもじやおぼからむ右はあくまでと云フことばゝよむことにはあれど花のあかむはいかゞあらむとて持とさだめられたり

みちよへむなるてふもゝのことしより

はなさくはるにあひそめにけり

亭子院延喜十三年歌合是則詠也としといふをよとよめりとてまけたり三千年を三千世といへるなりされど後撰に入たり

夏

ひにそへてにほひぞまさるふぢのはな

ちとせのはるをおもひてそやれ

永保三年女四宮歌合源有賢藤ノ歌也若狭守通宗判ニ云クきみがちとせをかけていはへるとかく云フべきにあらずまさるとさだめたり祝によせつればかつべきことかとみえたり

みなそこもむらさきふかくみゆるかな

きしのいはねにかゝるふぢなみ

承暦歌合五番右仲實詠也左人實政かげうつることはいはでみなそこ紫なりとよむべきと申に右人藤歌の本うつれりとよみたると申左歌わろけれどいの持とさだめらる

むらさきにゝほふふぢなみうちはへて

まつにぞ千世のいろもかゝれる

天德歌合左朝忠中納言歌也水きしいそなどよまでたゞふぢ波とよめるいはれなしとてまけたり

あらしのみさむきみやまのうのはなは

きえぬゆきかとあやまたれつゝ

同歌合に右方衆盛詠也左忠見

みちとをみひともかよはぬおくやまに

さけるうのはなたれとおらまし

判云ク左方右山に卯花をしも思ひけむぞいかゞされど右歌さまゝされりと云々

ほのかにもまつなきそめよほとゝぎす

あけばあやめのねもつくしてむ

應和二年五月四日内裏歌合待郭公心をよめる四番右方兵庫ノ藏人歌也判に時鳥まづなけと云フは卯月よりなくをなかぬかと思へるに似たりとてまく

さみだれにふりでゝなけとおもへども
　　わすのためとやねをのこすらむ
應和二年内裏歌合左方侍從佐理歌也ほとゝぎすと云ヮ
もじなければ歌の姿けうらなりとて勝たり題字をよ
まぬ證なり
　ほとゝぎすわがですぎぬるこゑにより
　　あとなきそらをながめつるかな
　ほとゝぎすあかつきかけてなくこゑを
　　またぬねざめをひとやきくらむ
永曆歌合左家忠右伊家作也俊綱あとなき空はいかに
ほとゝぎすはあとあるものかは又まかくしきやう
なりと申左にのぶるかたなしされどこれも持とさだ
めらるとかけり
　ふたこゑとなとかきなかぬほとゝぎす
　　さこそみじかきなつのよならめ
　なこずとてうちもふされでほとゝぎす
　　こゑまつひともねがたかるらむ
郁芳門院根合左堀河殿右雅俊卿作也右大臣判云ヮ左い
とおかし右はかみしもことたがひたるこゝちす又時
鳥きかずとてまけぬ

　よをかさねまちかねやまのほとゝぎす
　　くものよそにてひとこゑぞきく
　あくるまでまちかねやまのほとゝぎす
　　けふもきかでやゝまむとすらむ
大殿寛治八年歌合十番左周防内侍右顯綱帥大納言判に
左右たゞをなじやうなれども左はきゝたりとてかち
とあり
　五月やみほくしにかくるともしびの
　　うしろめたきをしかやみるらむ
高陽院長元八年宇治殿歌合左方赤染が詠也左ともし
びとあるうたがひありと申せば右方ともす火はとふ
るさにいひたりともしといはねどもともすと云ヮもお
なじこと也と申にともしびとはたゞいゑなどにとも
したるをなむ云ヮとさかたく申せばことはりとてまけ
ぬ
　おのがじゝてことにともすかりひとの
　　おもひくのしるくもあるかな
兩國受領歌合左方照射歌也守判にて手ごとにともす
と云るおかしとかけりともしは人おほくてゝごとに

ともすとはきかぬをいかゞ可ㇾ尋
ひをみてはみなぐるむしもあるものを
ふすぶばかりにうとむかやなを
同判云ヶをかしとはめてかちとさだめたりかやりびは
火をさりてのくとみえたり
たにふかみたづねてぞひくあやめくさ
ちとせあるべきくすりとおもへば
東宮學士阿波守藤原朝臣義忠任國にて歌合をせり谷
中菖蒲と云題の左歌也守判云五節の菖蒲おひたる谷
中の石上の年でとのけふ人あつまりてとりてくすり
とす右は題心なしとてまけたり
よろづよもときはならなむけふのため
いはひておはすそのゝよもぎは
同歌合園中蓬と云題の歌也判云昔人けふのあかつき
とりともにおきてそのゝよもぎの人にゝたる所をと
りてかげぼしゝてくすりとしけるをしらざりけるに
や其心にかなへることなしとかけり
きみがよのながきためしにひけとてや
よごのあやめのねさしそめなむ

寛治七年五月五日郁芳門院根合右方前典侍歌也左難ノ
云あやめぐさとこそいへあやめとつかまつれるはな
にぞと云右大臣判云あやめと云ことけふにはじめず
といはれたり
たまのをゝみなへしひとのたゞさらは
すくべきものをあきのしらつゆ
くらぶやまふもとのゝべのをみなへし
つゆのしたよりうつしつるかな
野宮歌合左師君源有忠作也順判云有忠朝臣さがのを
打過てくらぶ山までもとめありきけむあぢきなし又
やまとごとに云にくきことをてそゝへてはよめとて
持とさだむ判詞四
わきもこがをみなへしてふあたらなを
たまのをにやはむすびてむべき

秋

あさぢふのつゆふきむすぶこがらしに
みだれてもなくむしのこゑかな
あきかぜにつゆをなみだとなくむしの
おもふこゝろをたれにとはまし
野宮歌合判左但馬君右橘正通詠つゆにむすぶこがら

しのなどいへるわたりいひなれたりとさだむるほど
に正通申こがらしとは冬のかぜをこそいへこの頃の
風をいはゞあめをもしぐれとやいふべからむと云ヮを
みすのうちにふるきことをこそためしにはひかめと
て

こがらしのあきのはつかぜふきたるは（ぬイ）
などかくもゐにかりのをとせぬ

わがやどのわさたもいまだからなくに
またきふきぬるこがらしのかぜ

などあればとて正通まけぬ

たつたやまちるもみぢはをきてみれば
あきはふもとにかへるなりけり

承暦歌合右方匡房作也師賢ふもとのさとの秋こそあ
りけると云ヮ歌にゝたりと云匡房されば又心もえで申
也これこそまことのことしらぬはくちをしけれ此歌
はかへると云ことをよむなり秋をもはつるをはかへ
るといひはをもねにかへると云ヮことあれば秋のふも
とにかへるとよむなりふもとの里のあきなりといへ
る歌いつこにか似たるなどいふと云々

あきのよのつきすみわたるやまのはゝ
たちゐるくものかけるまもなし

多武峯往生院千世君歌會閑山秋月と云題明尋作也紀
伊入道素意判皆用ㇾ歌此歌題心よくよめればかちと
さだめたりの文字のおほきは（ろイ）難とせず

祝

きみがよはしらくもかゝるつくばねの
みねのつゞきのうみとなるまで

高陽院歌合能因作也輔親判にうみはうみ山は山にて
あらむこそよからめいま〳〵しとてまく

きみがよはゆくゑもしらぬわたづうみの
なはしろみづになりかはるまで

承暦後番歌合匡房作也長元歌合にも山の海にならむ
もあぢきなしとさだめられたりこれに心にたりとあ
り

きみがよはよろづよまでにさしてげり
みかさのやまのかみのこゝろに

きみがよはあまのこやねのみことより
いはひぞゝめしひさしあれとは

寛治八年大殿歌合左帥中納言右通俊卿帥大納言判に
左右やむことなき神をかけたてまつりはべればかち

まけ申がたく持に侍り　通俊の歌は一番右也　匡房の歌は二番右也　兩卿左右の條如何

戀

おもひかねさてもやしばしなぐさむと
たゞなをさりにたつぬやはせぬ　實右大臣作

郁芳門院根合右方少別當歌也左人申云右の歌に戀と云もじなしいかゞと申右方人申天德四年歌合に朝忠卿の歌に「人をもみをもうらみざらましと云歌人の口にありてよき歌にせらる其時に又かつとなむ定められけると申ば左の人又申云承曆四年歌合左戀歌そのことばなしとは今日の判者大まうち君なむとの時にもさだめ申せると申せば大臣申云彼歌はわたつうみのはるかなるそこにあまのいれるよしをのみ云たりし也ふるくも戀となけれどその心あるは常ことなりとあり

所名難例

きみがよはするのまつやまはるぐ\と
こすしらなみのかずもしられず　越白波

義子女御歌合永成法師詠也義忠判云末の松山すがたはいとをかしくしきしまのやまとことゝみゑはべれど男女のいかにぞやあるうらみ歌とおぼへて祝のかたにはきこえずと云り

くらぶやまふもとのゝべのをみなへし
つゆのしたよりうつしつるかな

あだしのゝくさむらにのみしけりつゝ
にほひはいまやひとにしらるゝ

野宮歌合にくらぶ山は源有忠あたしのは和氣守近朝臣作なり順判云有忠さかのをうちすぎてくらぶやまでもとめありきけむあぢきなし守近朝臣のあだしのことになだかゝらねばあり所しるひとすくなしと難せり

たにがはのをとはへだてずまかねふく　谷川
きびのなかやまかすみこむれと

承曆歌合　左方二番實關白殿家忠歌なり　俊綱申云さりごころなき病ありへだつとこむとは義の病也申又たにがはまかねふくきびの中山といひつれば左歌のこりずくなゝりといふ通俊この霞たち所はるかなり女四宮前栽合にあたしのみればとあるはさがをすぎけむあぢきなしとてそさだめたれと申に判者たゞ持なりと申さる右方

伊家實賴綱作「いつしかとけさはかすみのたなびけば春きにけりとそらにしるかな無二殊難一云々

此和歌童蒙抄十冊は中原通廣家藏の本をもて寶曆六丙子年十一月廿二日燈下に筆を染畢

稼軒穗積世美

岡本先生手跋曰和歌童蒙抄十卷掖齋狩谷先生所惠賜也且別蒙被借覽古鈔本因對校一過天保五年甲午五月廿五日況齋岡本保孝識

右童蒙抄はもと屋代輪池翁のもたりしなり所々の押紙又靑き墨して文字の異同を記したるはやがて翁のみづからしるされたるなりかつ十の卷の一卷はみながら自筆にてかけりとみゆ但卷九の奥書によるに此本もと卷の十の缺うせたるによりて其を補はれたる也さておのれこたび紀州家の本と岡本先生の本とをもて比校を加へ異同をば朱もてしるし以原校の藍にわかたむとて也その岡本本は掖齋先生の藏本をもて校合したるよしなり紀州本はこれももと輪池翁のもたりし本とみえて卷一より卷六および卷八の七冊はかの翁の手跡也七九十の三冊は別人の書也さて兩本とも十冊にわかてり今此兩本をもて此本に比校するに岡本本は此本の原文とあひ紀州本はかたへにしるしたる異本のかたとあへりさて兩本とも此本の押紙の文を皆本文にかきつらねたりたゞ紀州本七の卷以下は此本のごとく押紙にてあるなりかくてこの兩本字こと〴〵くわけて異同をしるさむはかへりてわづらはしきわざなればともにたゞイとのみしるして某本とはいはずされど中にはたしかにいはまほしきところありて某本某に作とことわりたるもありそのうち大かたははじめにいふごとく紀州本はかたはらなる異本のかたとあひ岡本本は原文とあへりされば本文のかたはらにイとしるしたるは大かたは岡本本旁書のかたなるはこと〴〵く紀州本と同じければ今ひとつひとつにはしるさず又たゞ同とのみしるしたるは兩本ともに同じき也

文久三年八月十三日　木村正辭しるす

詞林采葉抄

全

詞林采葉抄目錄

詞林采葉抄第一

奈良都　當集第三卷大宰少貳小野老朝臣歌云

あをによしならの都はさく花の
にほふか如くいまさかりなり

奈良の宮都香本の時代ノ事香本。或云十代或云九代香本无又は亦香本七代なと說
說不同なり
續日本記延暦十六年菅野眞道奉勅撰之曰自ニ持統天皇一至ニ光仁天皇一九代居ニ寧樂
都ニ云々水鏡葛城尼於泊瀨寺語なりイ曰和銅三年自ニ難波一遷ニ奈良都一矣萬葉
集香本○第一本ナシ一卷云和銅三年春二月從ニ藤原宮一遷ニ寧樂都香本一○焉
如此兩說者七代と見たり仍今考レ之云慶雲四年六月
十七日文武天皇於ニ藤原宮一崩○同七月十三日母玉イ后元
明天皇即位同五年正月改元爲ニ和御香本銅元一同二年始て建ニ
那羅都一同三年遷都至ニ桓武天皇延暦二年一八代居ニ平
城宮一同三年遷ニ山城國筒紹喜イ木綴喜イ郡長岡京一同十三年遷ニ都香本。
平安城ニ云々然者自ニ藤原宮一遷都以來皇居是七代なる
者也十代說自ニ持統一至ニ桓武一まてそ申とかや然而文

武天皇猶以至二平城一玉はす況や持統をや
抑奈良都には七大寺十五大寺なりといへとも東大寺興福○寺無二止事一共なり東大寺は聖武皇帝の御願四聖共成靈場閻浮第一加藍諸寺諸山に逴躒す然間聖武天皇我朝諸神の中に奉撰玉ひて正八幡大菩薩を此寺の鎮守と崇めたてまつらんとて勅使を鎮西宇佐の宮へたてまつらせ玉ひけれは乘物なきよし勅答あ○○るによ○て帝の玉御輿を奉せ玉しかはやかて乘うつらせ玉て南都へ入らせ玉ふ自其以來代々の御門の祖神○○○一朝の宗廟○○○四維八埏を擁護し玉ふ者也又興福寺は淡海公不比等の御願累代攝籙の氏寺也南圓堂を建立せしに千躰の觀音像〆銀にて奉鑄底に埋て其上に立玉ひしに春日明神老翁に現て北藤波の詠をなし給しより以降陛下輔佐の臣として藤門四家相別末代まて榮させ玉ふ事限有へからす此心を讀せ玉ける
新古賀
春日山みやこの南しかそ思ふ
北の藤浪春にあへとは　後京極殿
秋津島をさむるやとそ長閑きに
つかへる北の藤浪のかけ　京極黄門
青丹吉寧樂　當集第十五卷大納言旅人歌
竜の馬いまもえてしか青丹吉
ならの都にゆきてこんため
あをによしならと云こと說々云之日本紀第五曰御間城入彥五十瓊殖天皇十年武埴安彥起レ軍奉レ傾二御門一山背より競來る妻の吾田媛は大和より引レ長襲來〓城嶋瑞籬宮に入らんとす天皇五十芹彥命を被レ差遣一爰に旅聚二那羅山一草木を蹢跙因號二其山一曰二那羅山一時に酒を入二青瓮一官軍の前に持來る此刻埴安彥超二輪韓河一已責來る官軍曰青瓮よしもて返れと云に依レ之あをしよしと云○○を○とにと同韵の故に○○○○○○○○又震旦の三皇の中に黄帝の時帝德昌んにして衣裳をたれ棟宇を搆へ弧矢

(頭註) 一本頭註書入云日本紀元正御宇養老四年五月取註養正四年一品舍人親王太政大臣安麿奉勅撰之

と升積を作り素字を作り申子の始め暦數を定め醫方
黠候呂律宴會以下此代を儀式禮法を本とする故に奉
レ褒ニ此帝一○○如ニ丹青の書一出ニ云へとも詞を我朝神
武帝功より以來鼻樂七代超ニ過代々一し玉ふことを准
例して丹青といはん和語不レ叶故に青丹吉奈良と云
也又家持歌に青丹吉國地ことくみせまし○をとよ
める○に付て靜謐の義と云ことあり
聖武御宇天下安寧にして萬國民なひき奉ることを帝
の勅言にあれによくなひくと御口号し玉ふ云なり仙
覺此の義を勘出せりと申さ家持も越中の國の司にて
國をなひかしたりとよめるなり又幣帛に色にあり○白
○○○○○青幣手は青き帛なりそのあを○きてはな
をくとまとはれる物なれはあをにきてならと云る
をきゝよきに付てあをによしと云なり隨而當集第十
三巻歌に云

　帛をならよりいてゝ水たてのはつみにいたりと
あるはる坂とをすきて石走る神なひ山にあさ宮
に○○○○○○○吉野へと入ますみれはと云々
青丹吉云歌近來いと多からず現存六帖云

　あをによし奈良のあすかはいたつらに
　　猶八重さくらいまもさかなん

拾遺愚草
　青丹吉ならの都の玉柳
　　色にもしるく春は來にけり　京極黄門
　ひめもすにみれともあかすあをによし
　　ならの都の山となてして

凡青丹吉奈良說々多し宜レ用ニ心之緣一矣

　賀茂　當集第十一巻歌曰
　かも山の後せしつけみ後もあはし
　　いもには我よ今日なをすとも

同第十二巻歌曰
　神山の山下とよみ行水の
　　水「尾も一たえすは後もわかつま

賀茂山神山同山名也○○大明神御事社家の深秘に
て兩氏人々も被申旨なき故に上古の歌もすくなくな
り子細をしる人稀なる者歟爰に或書云曰向の襲之宮

頭註書入云按或書山城

風土記也釋紀巻九同玉袖中抄巻十七十六丁可考　本朝月令引秦氏本に天降坐○賀茂建角身命也神倭名寸彥之御前に立上坐而宿坐大體葛木山峯彼より漸く遷坐山代國の岡田之賀茂隨山代河下坐葛河與賀茂川所會立坐見廻賀茂川言雖狹少然も石河清川に在けり仍て號石河瀬見小河自彼川上定玉て○久我國之北山基爾時より名曰賀茂也建角身命娶丹波國神伊賀古夜日賣生子曰玉依日子次をは曰玉依日賣〻於石川瀬見小河遊爲時丹塗矢自川上流下乃取挿置床邊遂感孕生男子至成人之時外祖父建角身命造八尋屋竪八戸扉釀八腹酒神集に集て七日七夜互に遊ふ然して與子語て言汝父時に將思人令飮此酒即擧酒杯向天爲祭遊時穿屋甍昇天因外祖父名號賀茂別雷命と云々今所謂丹塗矢者乙訓社坐火雷命在賀茂建角見命丹波「の神」伴賀古夜日賣之三柱神有蓼倉里三井社坐也妹玉依日子者今賀茂縣主御遠祖也其詞日乘馬矣」

此神天降坐賀茂縣鎮座矣

賀茂大明神御歌　一本に新古神祇

やまとかも海に嵐の西ふかは　いつれの浦に御舟つなかん

同　同

我たのむ人いたつらになしはては　雲かき分てのほる計そ

千載神祇

君をいのる願をそらにみて玉へ　別雷の神ならは神

磯城島宮御宇天皇御世天風吹雨零百姓含愁爾時勅卜部伊古若日子令卜乃賀茂神祟也仍夏四月吉日馬繋鈴人蒙猪頭駈馳以爲祭祠能令禱祀曰之五穀成就天下豊平也○○○○○○○○○○○○○○（一本曰乘馬始於此也矣是號上賀茂社）山をは神山日影山賀茂とも申

堀川百首

そのかみの日影の山のもろは草　けふのみあれのしるしにそとる

續後撰賀

神山の日影のかつらかさすてふ　とよのあかりそわけてのとけき

片岡社をは中賀茂と申　鶴岡山に鎮座

秋かけて神の時雨やふりぬらん
我片岡の紅葉しにけり　賀茂成仲
多田須宮をは號二下鴨社一御祖神と申とかや
はくゝめよ世にはまゝ子の心○して
鴨の御祖をたのむはかりに　平經兼
古歌
みたらしのたえぬにしるし石川や
瀬見の小川の清き流は
續古質
君か代も我世もつきし石川や
瀬見の小川の絶さらんには　鎌倉前右大臣
壬生二品集上
神山の室木の半月さえて
鳥の初音に御戸ひらくなり　慈鎮和尚如何

宇治都　當集第一巻歌曰
秋の野の美草かりふきやとれりし
菟道の都のかり庵しそ思
問曰右歌は皇極天皇戊申近江の比良宮に幸時の御製也然に此うちの都山城の宇治と可二心得一哉將又比良浦に在之哉答云當前の御作歌の上へ比良の內都なり何故山城の宇治と心えんや彼宇治者若郎子の宮の龍樓也といへとも即位しましまさて崩玉し上者都と云かたし故代々の先達歌枕にも不レ擧二宇治都一八雲御抄皇居の御目錄にも入させ給はす隨而貞觀右大將此歌をとりて
やとりする比良の都のかり庵に
を花みたれて秋風そふく
此倚書禪閤は爲レ續二古今集撰者一宏才博覽之上對二仙覺律師一萬葉集一部相傳云々於レ是末學留受二蒙愚一雖レ不レ可レ及二九牛一毛一今試考レ之日本紀第十巻曰大鷦鷯天皇譽田天皇の第四王子なり母曰二仲姫命一天皇幼而聰明叡智貌容美麗及レ壯仁寬慈惠
四十一年春二月譽田天皇崩時に太子菟道稚郎子讓位于大鷦鷯尊一未即帝位仍諮二大鷦鷯尊一夫君二天下一以治二萬民一者蓋レ之如レ天容レ之如レ地上有二驩心以使二百姓一々々欣然天下安矣今我也弟也且文獻不レ足何敢繼二嗣位一登二天業一乎乃至亦奉二宗廟社稷重事也僕之不レ佞不レ足以稱乃至固辭不レ承各相讓

之既而興ニ宮室ヲ於ニ菟道ニ而居之乃至菟道雅郎子皇子「今若宮」ニ我知不レ可レ奪ニ兄王之志ヲ豈久生之煩ニ天下ヲ哉乃自死焉時大鷦鷯尊聞ニ太子薨ヲ以驚之從ニ難波ヲ馳之到ニ菟道宮ニ爰太子薨之經ニ三日ヲ時大鷦鷯尊摽擗叩哭不レ知ニ所如ヲ乃解レ髪跨レ屍以三呼曰我弟皇子○應レ時而活自起以居爰○鷦鷯尊語ニ太子ニ曰悲哉惜哉何所以之自逝之若死者有レ知先帝何ニ謂我ヲ乎乃太子啓ニ兄王ニ曰天命也誰能留焉若有レ向ニ天皇之御所ニ○奏ニ兄王聖之且有讓ヲ矣然聖王聞ニ我死ヲ以急馳ニ遠路ヲ豈得レ无レ勞乎㚑乃進同母妹八田皇女曰雖レ不レ足ニ納米ヲ僅死ニ抆庭之數ヲ乃且伏レ棺而薨於レ是大鷦鷯尊素服爲レ之發哀哭之甚ダ慟仍テ葬ニ於菟道山上ニ既以謂ニ宮室ヲ併ニ菟道宮ヲ非ニ宗治都ヲ乎比良山麓の内都也といはんと奈何ん現文在ニ眼者哉就中御製註曰山ノ上憶良大夫類聚歌林曰天皇戊申年幸ニ比良宮ニ大御歌云但日本紀曰天皇五年春正月己卯朔辛巳天皇至ニ紀伊温泉ニ三月戊寅朔天皇幸ニ吉野宮ニ而肆宴爲庚辰幸ニ近江平浦ニ焉以レ之推レ之吉野宮より幸ニ比良宮ニ中途にして宇治の故宮借庵を結をはしましけりと見○たり此御製の文字使も菟道宮とかけり日本紀合ニ符合ニ就中此御製の腰句にやとれりしとて第五句にしそ思と云へり相像る言也當所の景とは不見乎山城國風土記曰謂ニ宇治ニ者輕嶋明宮の御宇天皇之子宇治若郎子造ニ桐原日桁宮ヲ以爲ニ宮室ニ因ニ御名ニ号ニ宇治ニ本名曰ニ許乃國ニ矣」彼是宇治都無ニ相違ニ者乎雅郎子崩御の心を

拾玉集四
昔すみし人の涙やつゆならん
　世を宇治山の秋の花園　慈鎮

白露にちりやすきなん山城の
　宇治の都の秋萩の花　衣笠内府

物武八十氏河　付千早人宇治

物武とは物のふしと云詞也萬人に勝たりと云なり當集第三巻柿木人丸歌曰

物の武の八十氏川のあしろ木に
　　いさよふ浪の行へしらすも
八十氏と云こと先達の異義區々也或曰物の武の矢とつゝくるなり或は百姓の中に卿相雲客の所レ賜氏姓の外八十氏は武士以下の姓也或云百官は百敷に候して政をたすく武士は日城に散在して國家を奉レ守物の數の極は算術にも九々八十一と云滿數なるを云也「玉墻内風俗 九條前内大臣製作 天武天皇吉野河鰭にして奇者を御覽して召て問玉に我をば物武申也又は八十氏人と申すと即召使子孫相續して其後宇治河の河上にをき玉」と云々依之同卷大伴家持歌に
　吾君のみてのみことと物の武の八十伴の雄を召あつめいさよいたまい朝かりにしゝふみそてし夕狩に鳥ふみたてゝ云々
八十伴の雄とは只多義なり古老の傳曰昔崇神天皇御宇逆徒山背より競來る時八十氏と云防人を宇治の邊に差遣して關城を固むと云々是橘の小島關歟 可詳 又卿相雲客をも八十氏人と申にや
古今六帖 長月の九日の百しきの
　　　　八十氏人のさかゆてふ菊
後撰 夏よみ人しらず
　ゆきかへる八十氏人の玉かつら
　　かけてぞたのむあふひてふ名を
又八十氏とつゝかぬ歌
　物の武の八十乙女らがふみとよむ
　　白猪の上のかたかごの花
次千早人宇治當集第七卷歌に
　ちはや人うちの河浪きよみかも
　　旅行人のたちかてにする
ちはや人うちとは路早人打出とつゞくる言也然而此歌心はちはや人のごとく路を早く行べきに宇治川の形勢の美なるによて過かてにすると讀るなり又千は滿數の義なり早人は勇士なり多は物武の打出て輕く早姿なり是以「吳子曰勇の於レ將乃數すかし一爾也天勇者必輕レ合而不レ知レ利未可也矣」然者勇士者かならず輕く早かるべき者也焉
千岩破宇治　當集第十三卷穗積朝臣歌曰
　ちはやぶるうちの渡のたきつせをみつゝわたりて
　あふみちの相坂こえて　前後略之

同巻歌　そらみつ倭の國

青丹吉なら山こえてちはやぶるうちのわたりの瀧のやのあこ尼の原云々

ちはやぶるうちとは道早くふる兎と云言也と先達申たれども撿二日本紀第一一曰于時高皇産靈尊以二眞床追衾一覆二於皇孫天津彦火瓊々杵尊一使レ降之皇孫乃離二天磐座一天岩座此云阿麻能以簸矩羅且排分天八重雲稜威之道別々而天二降於日向襲之高千穗槵觸峯一以レ之按レ之いとのちわけにちわけてみちはやくくたると見えたりあまとはうちなりうちは寓宙也大そら也然は道早く降寓宙なり降はくだる也此詞を

古今雜上

ちはやぶるうちの橋守なれをしぞ
あはれと○思○としのへぬれば

此橋守は橋姫のことなるべし今は姫大明神と申とかや彼「橋姫の物語は昔妻二人もたりける男本妻のつはりして七瀨の和布をねがいけるに伊勢の海つらにて尋とて龍王に召れてうせぬ彼妻尋行てあへりけるにさむしろに衣かたしきと云歌を詠してきえうせにけり又今の妻も尋行てあへりければ同歌を詠けり」と云々委は彼物語あり

新古冬

はしひめのかたしき衣さむしろに
待夜むなしきうちの明ぼの　後鳥羽院「御歌」イナシ

同秋上

さむしろや待夜の秋の風ふけて
月をかたしくうちのはし姫　京極黄門

鏡山

鏡山は三所にあり山城近江豐前也當集第二卷從二山科御陵一退散之時額田王作歌

山科の鏡の山によるはも夜の月ひるは○日のつきねのみをなきつゝ「ろ」百敷の大宮人は行わかれなん

右歌は天智天皇大津宮にして崩御と云々然而まことにはいづちともなく御馬に召てうせ玉けりと申御沓の落たりけるを取て山科の山陵に納たてまつるとなん此鏡山をよみ玉ける

新勅雜四

大たけの「すゝ」吹風にきりはれて
鏡の山に月ぞくもらぬ　慈鎭

近江

近江の鏡山はあふみのや鏡の山をたてたればとよみ
鏡山いざたちよりてみてゆかんと詠○り

現存六帖
雪ふればしらぬ翁の鏡山
　松もさながら生かはりけり

行月の鏡の山やふけぬらん
　影すみわたる瀬田ノ長橋　能因

豐前國鏡山者當集第三卷手持女王歌
とよ國の鏡の山に石門たて
　かくれにけりなまてどきまさぬ

此鏡山は廣嗣の靈の神と顯れ玉ふ其心になすらへてよみ玉ふ也此山より死手の山へ入しこととなり石門は死門なり安樂集に見たり

此廣嗣は淡海公孫宇合の子也此人玄昉僧正の讒によて太宰の小貳にうつさる依之謀反の心にや肥前國松浦郡より龍駒に乘て朝には都にのぼり夕には松浦に歸る仍大野の東人を將軍として平城御門御宇天平十二年官軍馳下て責戰廣嗣軍を引て知賀島より龍駒に鞭打て海を渡る馬すゝまず怒りをなして龍駒の頸を切て舟に乘て東國を指て行に逆風吹て吹反す時松浦の橋の島に到る官軍取籠てうつ其遺體三ヶ日の間虛空にかけりて雷の如也ひかりかゞやきとゞろく聲都に及り爰に吉備の眞吉勅を承て靜てけり其時遺體此鏡山に落留れり同十七年玄昉僧正歸朝して太宰府の觀音寺供養導師として要輦に乘て參堂しける刻俄に空より黑雲飛降て僧正の首を引切りて提て上り忽然として失ぬ次年其首を興福寺の唐院の邊に落したり塔頭とて今にあり是則廣嗣の靈の所爲なり「然而」に「豐前國風土記云田河郡鏡山在郡東昔者○○○○氣長足姫尊在此山遙覽國形勅祈曰天神地祇爲我助福便用御鏡安置此所其鏡化爲石在此山中○○○○焉」又或系圖云宇合子廣嗣坐群配流爲惡靈肥前國松浦群の鏡明神是也此兩說凡慮難測然而於山名者多百出上古之上者風土記之說可用之者歟焉

楯並泉河　當集第十七卷歌
たてなめていづみの河のみをたえず
　つかへまつらん大宮所

此歌は從奈良宮遷久爾都之時の詠歌也泉川と云

事日本記第五巻曰崇神天皇の御宇埴安彦謀二反逆一興レ師官軍更避二那羅山一而進二到輪韓河一與二武埴安彦一「と河を」挾長各相挑焉故に時の人改レ號二其河一曰二挑川一今泉河と云は訛也云々此時楯並ていとみける名也

古今羇旅読人不知
都いでゝけふみかの原泉川　川風さむみ衣かせ山

六百番
新古秋下
時わかぬ浪さへ色にいづみ川　はゝその森に嵐ふくらん

詞林采葉抄第二

隱口初瀬　當集第三巻山前王歌

こもりくのはつせをとめがてにまける　玉はみだれてありといはしかも

隱口此訓かくらくかくれくこもりえこもりく先達古訓如レ斯區也其中にかくらくは字の訓なる故尤有二其謂一。訓こもりえ更に不相叶乎若疑らくば口の字草にして大なるが江に混する歟返々到二淺智一之故也所詮此所は山の口より入て奥ふかき故に籠口の初瀬と云者乎就中萬葉集巻々眞名假名こもりくと書所多し或云己母理久乃初瀬と或云己毛利久乃波都世と又云隱來と又云隱國乍云隱久不遑二羅縷一因日本紀曰大泊瀬幼武天皇六年春二月戊子朔乙卯天皇遊二泊瀬小野一觀二山野之體勢一慨然興感歌曰

擧暮利矩能播都制能野麻播伊麻他知能與廬斯企野磨和斯里底播與呂斯企夜磨能據暮利矩能播都制乃夜磨矣

右萬葉日本紀こもりくと云べき證跡明鏡也

○次あまを舟泊瀨と云事「當集第十卷歌曰」已上七字イ本に无し 此間空位一行イ 舟とむると云詞は近來歌也○○○ 多は舟はつると詠せり當集第三卷大寶二年壬寅太上天皇幸ニ于參河國ニ時高市連黑人歌

いづくにかふなはてすらんあれのさき
こきたみゆきしたなゝし小舟

同第三卷角麿歌曰

久堅のあまのさくめか岩舟の
はてし高津はあせにけるかも

然者只あまを舟はとつゞくる詞なり抑初瀨と者此川をば百瀨川と云名あり長谷寺詣に渡る所は最初の瀨なる故に初瀨と云なるべし○大初瀨小初瀨あり

君が代は大初瀨路の百枝槻
百えながらもさかへます哉　後頼

小初瀨や峯のときは木吹しほり
雪の庵のあけぼのゝ空

泊瀨山入逢の鐘を聞たびに
昔の遠くなるぞかなしき　有家

○味酒三輪○○○○ 付味酒三室イ 當集第八卷長屋王歌曰

うまさかのみわの祝が山てらす
秋の紅葉のちらまくもをし

味酒此訓あぢさけうまさけうまさか三訓也撿日本紀記曰崇神天皇八年冬十二月丙申朔乙卯天皇以ニ大田々根子ニ令ニ祭ニ大神ニ是日活日自擧ニ神酒ニ獻ニ天皇ニ於ニ茲天皇歌之

宇麻作階爾和能等能々阿佐妬珥毛於辭寐羅箇禰禰和能等○渡鳩馬

今以ニ此御歌ニ證とするにうまさかと云べき物をや任ニ字訓ニあぢさけ混俗歟不可「廣以來矣」凡酒をみわと云事神造始玉し故歟日本紀曰素盞烏尊敎曰以ニ諸菓ニ酒也和羅醸 仍神酒と書るなり云々一説云崇神天皇の御宇土佐國神河水を以大神ために酒を醸したりけるがことに目出○酒にて御門に獻したり故に彼川の名を取て酒をみわと申とも云也又三輪にたづぬると云事は古今集歌に

戀しくばとふらいきませ我やどは

みわの山もと杉たてる門

此歌は三輪明神住吉大明神にたてまつり玉と申傳たれば三輪は女體にておはしますと聞えたり雖然拾遺抄に住吉明神の御託宣の歌とて

拾遺抄雜上　拾遺集神樂
住吉のきしもせざらん物ゆへに
ねたくや人にまつといはれん

此歌は住吉明神女體にて三輪へ奉り玉と申にや然而住吉四所明神内一社神功皇后にてをはしますとも申叉玉津島にておはしますとも申ばかく讀玉けるにこそ住吉は男體にて異朝征伐の時も代々荒御前にておはしますとなん三輪明神の女體男體の物語兩說在之或伊勢國あふきの郡にて獵師の妻となり玉ひ男子をうみ玉けりとも或は人の女に通て寶殿にとめ入られてしるしに付たりけるしづのを玉木みわげのこりたりければ三輪と申たり正說難辨爰古語拾遺云大神宮禰宜齋部廣成奉撰大己貴神大和城上郡大三輪神是也云々俗體頗莫異論者哉此神は社もなくして祭には茅の輪を三つくりて岩の上にをきて祭ると申現存六帖云

つかねつゝたてかさねたるあしやさは
三輪の社のしるしなるらん

叉伊勢のあふきの郡の獵師のたづねきたりける時は社内に母子ともにおはしまして御戸を開てみえ玉けりとも申は社なしとも申べからず

○次味酒三室　　當集第七卷歌云

わ「こさ」きぬの色きそめたりうまさかの
三室の山の紅したるに

同第十二卷歌

祝子がいはふみ室のます鏡
かけてぞしのぶあふ人ごとに

此歌をとりて　新勅神祇正三位家隆
榊とりかけし三室のます鏡
その山のはと月もくもらず

右三輪三室神南火同山也故者同第三卷曰登神岳山部赤人作歌

三室のや　神なび山に　五百枝さし　しゝにおひたる　とかの木の　いやつき〳〵に　玉かつら云々

抑うまさかのみとつゞくる諷詞は酒に藤花と云名あ

り春を經て熟したる酒に白。みのうかびて色の赤
は藤の花の姿に似たる故也然は酒のみとつゞくる也

雷岳　常集第三卷天皇御二遊雷岳一之時人丸歌
云

すめろきは神にて「まし」ませばあま雲の
　いかつちの上に庵するかも

いかつては山の名也三室山の賜名也其所○○以○者
日本紀第十四卷曰大泊瀬幼武天皇御宇七年秋七月甲（頭註書入云雄略天皇也）
戌朔丙子天皇詔二沙子部連螺蠃一曰朕欲レ見二三諸岳（之イ）
形一（或云此山之神爲大物主神也或云菟田墨坂神也矣）汝膂力過レ人自行捉來螺蠃
答曰試に往投レ之乃登二三諸山一投二取大蛇一奉レ示
天皇一云々不レ齋戒一其雷虺々目精赫々天皇畏玉蔽
レ目不レ見却二入殿中一使レ放二於岳一仍賜レ名爲レ雷矣
螺蠃無レ程訖天皇榊墓をつき碑文を立玉投レ雷螺蠃之
墓矣雷大に怒て碑文の柱をけさくに半分破たるさけ
目落入て七ヶ日あり天皇ゆるすよしの贈二宣命一時雷
忽に天にあがりぬと云々天皇螺蠃が姓改め玉と焉

○葛城山　常集第十一卷歌云

青柳のかつらぎ山に立雲の
　たちてもゐても妹をしぞ思ふ

此歌をとりて新古今集（春上）云

白雲のたえまになびく青柳の
　かつらぎ山に春風ぞ吹く　雅經

昔此山をば高尾帳の邑と申けるを此所に土蜘蛛と云
物ありけるを國土人民多勢を率し葛の網をすきて投
懸て押致てけりそれより葛城と申とかや凡此山に靈
崛靈所あまたあり或は金剛山とて過去迦葉佛説法の
場今は寶喜菩薩の○○○「法」砌あり古﨟眞和尚天平年
中に我朝へ渡り平城宮へ入玉とて此山をとをられけ
るに布薩の鼓の聞ければ尋行て見玉に赤面の鬼王鼓
をうつ和尚問曰何靈場ぞや答曰往昔迦葉説法の所今
に在二寶喜淨土一也○即隨二鬼王一往二詣彼所一說戒の砌
に烈採玉ける籌は招大寺にあり彼鬼王は昔西天の流
砂葱嶺にすみし深砂大王日本に越て吉野藏王權現と
あらはれ給ふと名乘玉けりと申傳たり或豐等寺榎葉
井三村杉あり葛城高崗宮と申綏靖天皇の皇居なり葛
城の巫と聞しか鬼となり后を𢈘角なやましたてまつ

りしその棲を知人なし伏見翁とて盲聾なりしか天竺波羅門僧正のとをり玉を見たてまつりて驚立て十天楽を舞唱歌をしけるも此山の仙人とかや九箇乙女と贈答せし竹取の翁の舊跡あり今世に竹取の城とておとろ〳〵しく聞し是也太子の御廟をは御廟山と申とそ又一言主神とて御座日本紀曰雄略天皇四年春二月天皇射二獵於葛城山一忽見二長人一來望二丹谷一面貌容儀相二似天皇一云々 知二是神一於故問曰何所公也長人對曰現人之神先稱二王諱一然後應導天皇答曰 朕是幼武尊也長人次稱曰 僕是一事主神なり 乃至 於レ是日晩田罷神侍レ送二奉玉ふ 天皇一至二來田水一是時百姓咸言 有レ徳 天皇なりと矣此一言主神のすみ玉ふ在所とて靈瑞の幽谷あり彼神の渡しけるとて久米路に石橋あり抑此岩橋事昔文武天皇御宇役小角と申優婆塞あり金峯山金剛山の間石橋をわたさんとて彼一言主神語けるに其形醜ことを耻て夜渡しけるか渡し終さるに夜明にけり行者怒をなして金剛杖をもて散々に打明神恨をなして御門に訴へ申けれは伊豆の大島へ流さる行者よな〳〵は富士嶽大峯葛城を巡禮し明

れは嶋に歸剰河内國膽駒山の二鬼を投て使者として相從へり一言主神御門を奉レ傾伺申由奏しけれは行者を召返て已に首を刎らるへきにて有けるに行者勅使の前にして其刀を○取て二の肩面背をまねきりて勅使に返すみれは金の文あり富士の明神の表の文なり天帝驚まし〳〵て則ゆるされたりけるに行者神咒を誦して高聲にをそし〳〵とせむる時口より火焔をはける○大鬼王明神をしはりて出來れり行者慈尊の出世に此しはりめをはとき玉へとて谷の底へ投入る御門恐させ玉て此國土にすむへからすと勅勘ありければ藤杖を庭上に突立てそのすえに登て端座す其杖の立所猶王土なりと有けれは老母を鉢に入て捧て唐朝へ飛去訖云々異國にも此例あり

三齋記秦の始皇海中に造二石橋一海神杜をたつ始皇相者 求海神云我形醜と始皇即入二海底一卅九里至看二海神一始皇海神の姿を繪に寫さんとしたまうに手はたらかす左右の中に妙なる繪師あり足にて書く海神大に怒て帝勅變す始皇忽迯玉ふ馬の脚に隨て橋倒轍を

あて〇走る繪師の臣は水に溺て死と云々

新勅戀三
岩橋のよるの契もたえぬへし
　明るわひしきかつらきの神　女藏人左近

身をはつとわたしもはてぬ我戀や
　かつらき山の谷の梯　五條三品

葛城やくめちの谷の村霞
　とたえは橋にかきらさりけり　隆房

新古春上
かつらきや高天の櫻さきにけり
　立田の奥にかゝる白雲　寂蓮

葛城や雲も霞もやとりにて
　花をかたしく春の山人　光明峯寺殿

○龍田山　當集第一卷歌曰

わたつみのおきつ白波立田山
　いつかこえなんいもかあたりみん

龍田と云こと古老傳曰昔此所に雷神落てあかること
をえす童子となりたりけるを農夫養て子とす比しも
旱魃なりけるに隣村にはふらされとも此農夫か田の
上に夕立時々そゝき稲花成熟し秋收思のまゝにして
けり其後童子暇を乞て小龍となりて天に昇る依之

此作田を龍田と云けるをやかくて所の名とす然者龍
田は正字なり立田は半假字也彼在中將奈良京春日の
里にすみけるころ河内國高安里へ通ひけるにも此山
を越けるとそ中高安の女は安大領と云ける物の女と
かやされは大領か屋敷中將の墻内とて今にありと申
さて中將の春日里女の風吹はおきつ白波立田山とよ
めりけるは此山には盗人ある所なれはおほつかなき
よしをよめりと中随盗人の立田山に入にけりと古今
六帖歌によめるはさもやと覺ゆるに今の歌わたつ海
のおきつ白浪立田山とあれは浪の立とつゝくる諷詞
と聞たり又古今集にたかみそきゆふつけ鳥か唐衣と
云歌は花山院勅作云々大和物語には昔ある男の女を
ぬすみて立田山を越けるかあまりに泣を聞て男のよ
めるとなん中然而伊勢物語には業平の歌と見たり奈
何

續拾秋下
立田山木葉吹しく秋風に
　落て色つく松の下露　順德院

新古羇旅
龍田山秋行人の袖をみよ
　木々の梢は時雨さりけり　慈鎭

同秋下
心とや紅葉はすらし立田山

松は時雨にぬれぬ物かは　五條三品

けさよりは立田の櫻色そこき
夕日や花の時雨なるらん　内大臣基

立田山錦をりそへ白妙の
えふ付鳥そ花になくなる　中院亞將

○芳野宮

吉野宮何の時始て建られけりとも不知仙覺未勘管見も所レ不レ及也爰に勘日本紀曰取意神武天皇葦原中津國を征玉はんとて日向國より御舟に召て今の難波に着河内より行て射駒山を超んとし玉し時長髄彦○○云○櫛玉速日命君とたとひて天皇をふせき奉しかは葛木を越木の國を巡り吉野に出まして御軍を調へ玉し程に行宮を定てありけるにや其後代々御門の皇居之有無不分明然に應神天皇十年吉野宮に幸し時國栖人參て二寸を獻せしかは天皇さま〳〵の物給ひ御歌よみ給けりと○○○云々○應神天皇以前に吉野宮とてありける事勿論也自其以來大泊瀬幼武天皇四年秋八月行幸二吉野宮一又皇極天皇五年春正月幸二吉野宮一肆宴矣又清見原天皇八年五月幸二吉野宮一天皇御製

よき人の吉野よくみてよしといひし
吉野よくみよよき人よきみ

當集第六卷曰元正天皇養老七年五月幸二吉野離宮一之時笠朝臣金村歌曰

美吉野　秋津の宮は　神からや　貴あるらん　國からや　みかほしか○ん山川を　さやくすめり　うふし神世も　かためけらしも

神代より吉野の宮のありかよひ
たかくしけれは山川をよめ　山部赤人イ

此両首神世よりとよめり爰知神武天皇畝火橿原宮にをはし〻時彼吉野に離宮を搆へて臨幸ありけるにより神代よりとは神武御宇をさすなるへし○草葺不合尊の第四御子神日本武磐余彦天皇と中神代とよめることはりにや又持統文武両帝臨幸ありと見たり又聖武天皇神龜二年臨幸時笠金村歌曰

萬代にみれともあかぬ三吉野の
瀧つ河内の大宮所

此歌をとりて
月影のやとりてみかく玉水の
　たきつ都に秋風そ吹
風雅春中
　三吉野の大宮所たつねみん
　ふるきかさしの花やのこると　冷泉黄門
千載春上
　美吉野の花の盛をけふみれは
　こしの白根に春風そ吹　五條三品
同雜中
　いつくにて風をも世をも恨まし
　吉野の奥も花はちりけり　京極黄門
續古春下
　吉野川花にも水やまさるらん
　ちれは落そふ瀧の白浪　成茂
抑此吉野山は漢朝よりも飛來とも申にや金峯山神區古老傳云昔漢土に有二金峯山一金剛象王菩薩住玉ふ而に彼山飛ニ移巨海一而來今の金峯山是也焉日藏傳曰天竺佛生國巽傍に闕て飛來矣李部王記曰吉野山は五臺山の片端乘レ雲飛來也焉此三說皆異朝の山也
○吉野國栖　當集第十卷歌云
　くにすらか春菜つむてふ司馬の野の
　しは〳〵君を思てのころ
日本紀曰取意　輕嶋豐明宮天皇十九年天皇幸吉野宮時國樔人參○御酒を獻る此國樔○は人となりすなをにして山の菓を取て食物とし蛙を煎て吉味とすと申其后節會には栗草平かへる○と云物を國つ物とて持て參なり是則吉野國栖の始也今の世にも元日參ことを不絕云々
新撰六帖歌云
　なつみ川吉野のくにすいつしかと
　つかへまつらん春の始に　衣笠内府
吉野のくにすの事應神御宇より始と見たり但重て○日本紀曰取意　神武天皇大出甲刀冬十月日向國より東征して吉備國より波早國今難波なり着玉ふそれより國々を經て吉野へ幸す時兎田郡より尾長く引て岩を押攉て參者あり名を問玉へば石排別子也と申○○天皇駕侍へしとて相從玉ふ是則吉野の國栖か初祖也一然は人皇の始より仕る者哉」
○袖振山　當集第十一卷歌曰
　をとめらか袖ふる山のみつかきの

ひさしき世より思きわれは

此山の在所不分明歟或先達云石上布留山を神なりと
隨て同第十二卷歌曰

吾妹子やわきもこかあをわすらすな石上
袖ふる川のたえんと思へや

依之歌歟尤有レ據者也然而八雲御抄云吉野にありと
云々神女降臨の所誠に有由來者也仍乙女等とよめり
神女群降と聞たり此心を

新勅冬 をとめらか袖ふる山の白妙に
吉野の宮はさえぬ日もなし　洞院攝政殿

新續古春上 花の色をそれかとそみる乙女等か
袖振山の春の曙　後京極殿イ 京極黄門

○蜻小野

當集第十二卷歌曰

三吉野のあきつの小野にかるかやの
思みたれてぬるよしそなき

蜻の小野かけろふの小野かたちの小野あきつの小野
三訓也然而秋津の小野と云へき歟有其據者也
撿日本紀曰大泊瀬幼武天皇四年八月癸卯朔戊申行幸
吉野宮庚戌幸二于河上小野一命二虞人一「欲」レ駈レ獸
欲二躬射一而待　蝱疾飛來嗒二天皇臂一於レ是蜻蛉忽
然飛來齧レ蝱將去天皇喜二厥有一レ心詔二群臣一曰爲レ朕
讃二蜻蛉一歌賦二群臣莫二能敢一○者一天皇乃口號曰
野麿等能鳴武羅能陀謀爾之○符須登陀綢可擧能居登
飯褒麿陛儞麿烏須乃至倭我陀々西麿陀俱府羅尼阿武
阿枳都俱々曾能阿武烏阿枳豆波野俱嗶波牟武志謀々
飯麿褒枳彌爾麿都羅府阿皷豆斯麿野麿登乃至讃二蜻
蛉名一此地一爲二蜻蛉野一云然而異訓可レ隨二心緣一歟

○東野

當集第一卷輕皇宿二于安騎野一時柿本朝臣人麿作歌曰

長歌略之 あつま野に煙のたてる所にて
かへりみすれは月かたふきぬ

右歌輕皇子幸二吉野安騎野一之時侍レ獨言然者東野
は吉野にありと見たり隨而彼所に東坂と云道在之而
進來の歌人如二武藏野一詠之歟烟のたてると云ること
を富士と心得にや比興之至と可云歟雖然萬葉集の外

〻猶有二殊諫操一者非レ可レ辯レ之能々可レ詳レ之矣
〇〇〇 〇〇〇 〇〇 〇 〇〇〇〇 〇〇續古今集に

秋上
雲こそは空になからめ東野の
煙もみえす夜半の月影　哉

法印實伊イ

詞林采葉抄卷第二

天皇

當集第一卷　從二藤原京一遷二寧樂宮一時歌　歌主未レ詳

天皇の　御ことかしこみ　にきひにし　家をゐらひて　隱國の　初瀨の川に　舟うけて　みち行くらし　青丹よし　ならのみやこの　佐は川に　いゆき至て　我子たる　衣のうへに　朝月夜の　以下略之

右イ
〇吾朝の聖主をすめらぎと申す「事一和語義「訓一字釋共に「其義分て」五品也一曰此王の字は三の字を體とす是〇天地人の〇才を兼ぬ〇三の字則木數〇河圖洛書數也此三の字に｜の點を引下せり「然れば一木を惣て以てすべらぎと云「也」二二曰日域は是扶桑國也　仍レ之一國木也日東より出づ震の卦木也　其色青也三二曰松と云字は十八公也加之緣松は霜の後に君子の德を彰すと云其色緑なると東を司るの謂也木の公と「云へ一る事專ら和國の君と云つべき者歟四二曰日本「一は漢土より」一東也

「日の字木の字合して東となる此日」木の木の字に横に一「點」を引「て木の字となる」皇は木の王なれば最も符合するもの歟又日本「と云」本の字は「もと木也」木は基也○○全く一體にして其聲も同レ之是を以て論語に君子は務レ本本立而道生「木者」基也「基」立而後可二大成一矣　和漢兩朝合二自然之理一○事を成せるもの歟五曰王皇の字共に木の體「にして」木を專にし震の卦の青色を惣てすべらぎの御名を成せしむるもの也就レ中皇の字にあまたの義有レ之其一理「は」世○人依二野馬臺の說一歟○人代は百王に限るべしと云○「雖レ然」豊葦原は神國にして天照太神の御末を受て石淸水の淸き流を今にすましめ北の藤波猶古へに立返り君臣の道互に其德つきせす松の緑は千年の色を彰し花「の香きは萬代の匂を殘す是皆春の季を司り朝日の影を陽德に象とる者歟詩曰誰言春色從レ東到露暖南枝花始開云々然者すべらぎの儲君をは東宮と「云も」此謂歟側聞天照太神の御壽○十萬五千歳と云々神道の一世未レ央王法以可レ同レ之○也亦皇は是白王也白色は衆色の王として至て白きは青色也故に皇の字は亦木を惣るによりてすべらぎとも訓也「白王」とも云歟凡そ和歌は我國の風俗として以レ之扶レ政以レ之和レ民の媒と爲るもの也君は亦青木の德を得て天下を安じ萬民を撫「育し」給ふ「也」故に史記ニ曰歌者樹也「云々」則可木と書く是を以て古今集の序に曰夫和歌者託二其根於心地一發二其花於詞林一者也「云々」君子の木德は和歌○一致なるもの歟すべらぎと詠る歌古來多し

當集第十八巻に

皇の御世さかへんと東なる
みちのく山の金き花さく

「乞巧奠の心を詠る」

皇の南のそのに御いてせし
その世の秋はてよひなりけり　光俊

當集第十三巻歌に

磯城島大和

式島の大和の國に人ふたり

有としきかば何かなげかん

仙覺「云」式島の大和とはときゝぬの思みだれてと云へるが如しとばかり註して何とも義を釋せず如何に云へ○事に「や」雖二心得一今試に考之曰式島とは大和國の○名所なり皇居「にも」崇神天皇は磯「城」島瑞籬宮欽明天皇は磯城島金判宮「に」あり然れば式島と云も大和と云も同じ詞なるべき歟大和は吾朝の惣名なれども○一國の名也されぱやまとことのはしきしまの道あしはらの道など云は皆同事「也」しきしまやまと「と云」は○かさね○言なるべし然ばとき衣はみだれたる物なれば思亂ると云も重たる言也と心得べき歟と覺ゆ「凡吾朝の異名數多あり」伊弉諾尊曰下豐葦原千五百秋瑞穗國浦安國細戈千足國磯輪上秀眞上國上と「云」大己貴神曰玉墻内國と云神武天皇曰秋津島「と云」鹿島大神「曰」藤根國と「云亦」葦原中津國大八十洲と「云」漢朝には扶桑國東海國倭面國耶麻堆亦君子國「と云」寶志和尚は東海姫氏國亦野馬臺と「云」是等の名は次でを以て所レ擧也非二今要樞一也○やまと云「訓は」山跡と云詞也「其故は」日本○私記曰日本國自二大唐一東去萬餘里日出二東方一昇二于扶桑一故云二日本一古者云二之倭國一通云二山跡一山謂二之耶麻一跡謂二之止一音登戸反下同夫天地剖判泥濕未レ燥是以栖レ○山往來因多二蹤跡一故曰二耶麻止一亦古語謂二居住一爲レ止言○住二於山一也音同レ上東海女國也「云々」裏書云隋書東夷傳曰倭國在二百濟新羅東南一水陸三千里於二大海之中一依二山島一而居三十餘國云々因レ玆神武天皇をば神日本磐余彥天皇と云然ばやまとゝ云詞は○神代より在りける也○○○○○○○○○「古今集曰」

古今戀四貫之
武島の大和にはあらぬ唐衣
ころも經ずしてあふよしもかな

續後撰春上　　　　　　　　後鳥羽院御製
式島や大和島根の朝霞
唐しまでも春やたつらん　　後京極殿

新古賀
式島や大和しま根の神代より
　君が爲とやかためおきけん

「續拾遺集」
「をしなべて今朝は霞の敷島や
　大和諸人春をしるらん」　土御門院

「式島大和とつゞかぬ歌」
「敷島や高間の山の木の間より
　光さしそふ弓張の月」　中院亞相

山は皆唐紅に敷島の
　御室の「木の葉」いつしくれけん

「是等は譬へば近江國の名所をばいづくをも神樂波と讀るが如くなるべし亦可レ有レ據にや」　中納言長方

新勅冬
敷島や布留の都はうづもれて
　ならしの岡に御雪ふる也（つもれり新勅）

秋津島大和

萬葉集第一卷「高市岡本宮御宇天皇」（イ舒明天皇ノ）登ニ天香具山ニ望レ國之時御製

やまとには　村山あれど　とりよろふ　あまのかぐ山　のぼりたち　國みを○すれば　國原は　けふり立たつ　うなばらは　かもめ立たつ　をもしろ○國「ぞ」　秋津しま　大和の國は

右イ
○秋津島と云こと神武天皇三十一年すべらぎ廻ニ幸嗛間岳ニ登り給て此國の姿を廻見「給」て蜻蛉の臀呫「する」如くあるか○との給ひしより始て秋津島の名を得たる也秋津とは東方羽なり此虫の東に向て居たるすがたなり大和「は前に註する如し」（袖中抄十七二十二オ　仙覺抄五三十オ）

虛見津大和

「嗅頭」雄略天皇御製
當集第一卷
そらみつ　大和の國は　をしなべて　われこそをらん　つけなべて　わらこそをらん　我こそは　せなにはつけぬ　家をも名をも

イ元明天皇御宇奉レ勅撰ニ日本紀ニ
古事記に曰櫛玉饒速日命乘ニ天石舟ニ葦原國を見廻給

ふとて虛空を飛翔給しを虛見津大和「國」と云也日本記第一「を考るに」神武天皇筑紫より御軍を集て吉備の小島「今備中備後也」をへて葦原中○國へ入らんと御舟をそろへて難波津に着給ひ○○○○河內に泝て膽駒山を越へ給ふに長髄彦と云雖の族○○○○○「とせき」戰「ひ給ふ」に天皇勝ことを得給はぬ引退て葛木山を越て紀伊國に廻り吉野の內津國「より」國見の岡と云所「にて」武き軍ともつどへり御軍すゝみて戰はんとす長髄彦使を奉て申さく昔し天○神の御子天岩舟に乘て天降「坐せ」り櫛玉饒速日命と名乘給「ふ」奴が妹三炊屋媛命を御妻とし給て御子を生し給へり名をば可美眞手命と申す是を君と崇て葦原國を治めさせ奉る其外に亦天○神の御子いますべしや○○○○○○○○○○「と」長髄彦則速日命の天羽々矢一すぢ及步靫を天皇にみせ奉る天皇まことも也とて亦我天羽々矢と靫とを視せしめ給ふ長髄彦是を見て恐惶奉る「云々」此心を詠る

天雲に岩舟うけしそのかみを
　思へばつきじ大和島人

○天香具山　持統天皇御製

當集第一卷

春過て夏きにけらし白妙の
　衣乾有天の香具山

「香具」山に衣○ほす○と云事「彼山に」甘橿明神とてをは「します」人の脊虛實を正し給ふ神にて「罪の有無には」其「人の」衣を神水にぬらしてほすと云傳へたり然「而」○○○○○今考レ之に此香來山の宮は藤原宮の御宇天皇の離宮と見へたり其故は當集第「二卷の」長歌云

我大君の　萬代と　おもほしめして　つくらしし
　香來山の宮　萬代に　す「きん」とおもふや云々

同第三卷歌云

あもりつく　天の香具山　霞たち　春にいたれば
　松風に　池波たちて　さくら花　このくれしけ
に○○○　百しきの　大宮人の　立出で　あそぶ舟

には　かちさはも　なくてさびしも　よく人なし

○右案ずるに遷二都寧樂一之後怜レ舊作二此歌一歟然るに此山昔は人屋多くありける故に衣をもほしけるか。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇必しも科を正すばかりにてはあらざるべし就レ中此山には卯花多くさきけるを「衣」「の干」に似たりとも云凡此山は我朝の靈山として在所陰陽家に沙汰せらるゝ所也古語拾遺曰天照太神入二天岩窟一幽居六合常闇にして晝夜不レ分高皇產靈神會二八百萬神於六八瑞河原一議二奉謝之方一取二天香山銅一以鑄二日像之鏡一種レ麻以爲二青和幣一殺木種殖之以作二白和幣一「是木綿也已上」○此等儀式者以二香具山一也今世豊御神樂と云は是を模して被レ行○也此心を詠る

題　　　仲

白幣手草の枝に取かざし
　うたへば明る天の岩門

くら闇の岩戸も明にけり
　さ夜すき人の歌ふ神樂に　　讀人不知

あめにます豐國姫のゆうかつら
　かけてかすめる天のかぐ山　　「後鳥羽院御製」

かぐ山の天路の霞をりはへて
　神もや昔し衣ほしけん　　鶴内大臣殿

雪ふれば峯のま榊うづもれて
　月にみがける天のかく山　　五條三品

「此山之事以二短筆一難レ記者也」

石上布留

當集第十一卷歌に

石上布留の神杉○○となる
　戀をも我は更にするかな

此歌を取「せ給て」

ふかみどりあらそひかねていかならん　　後鳥羽院

まなく時雨の布留の神杉

昔し此河にて女の布を洗ひけるに水上より劒流れくたりけるがあたる土石草木たまらずきれけるに此布にまとはれて留りたりけるを俗人取て神といはひたりけるがあまり物に祟りければ土を一丈ほりて埋み○○。たりければ一夜に杉生たりけるを神杉と申す也此所は安康天皇の穴穂宮仁賢天皇の廣高宮を造られし跡なり「此心を詠る」貫之歌に

新古春上讀人不知イ
石上布留き都をきてみれば
昔かざしゝ花さきにけり

「古今集
石上ふるからをのゝもとかしは
本の心は忘られなくに」

拾遺集神樂イ
石上ふるや男の太刀もかな
くみのおしてゝ宮路通はん

玉手次畝火山

當集第一卷　柿本人麻呂イ歌
たまたすき　うねびの山のかみ原の　ひじりの御世に　あれましゝ神のあらはす　とかの木の云々

玉たすき○○とは玉はほむる言也○○田を耕せばうね「出來る」故にたすきうねと云也順和名「抄」に「釋二田字一引二唐令一曰諸田廣一步長二百三十步爲レ畝畝百爲レ項去穎反項者六町六段二百四十步也亦玉手次懸たるは肩に畝の如くにすぢの「たかければ云」也と「新撰六帖に」

賤女があさてほすてふ玉手次
思かくればちかふ世もうし　知家朝臣

ねたげなるしづがあさでの玉手次
誰にむかひてわきをかくらん　信實

勝間田池

此池には水なしと詠ならはせり然れども當集第十六卷歌に

勝間田の池に吾しる蓮なし
しかいふ君がひげなしがごと

註曰右「此歌は」新田部親王出二遊于堵裏一而見二勝間田池一感二緒御心之中一還レ自二彼池一不レ忍二怜愛一於レ時語二婦人一曰今日遊行。見二勝間田池一水影濤々蓮花灼々可怜斷レ腸不レ可レ得レ言爾乃婦人作二此戲歌一專輙吟詠也一云「云」此親王世に勝たる大鬚にておはしけるを表して戲に詠る也然れば水なしとは見へず。古今六帖二

かつま田の池に住てふこひ〳〵て
　まれにもよそにみるぞかなしき

抑此池之在所不二分明一古歌枕爲二美作國一。然萬葉集令二相違一歟新田部親王自二大和國藤原宮一當日遊覽「而所歸也」然。不レ可レ爲二美作國一「於是」。。。。良玉集云泊瀨へ參りける時昔の勝間田の池の跡を見てと云々此則奈良の藥師寺也昔の池の水絕て後已に精舍を立たり水なしと詠し事「尤有二其謂一也」帝王系圖云白鳳九年十一月依二皇后病一造二藥師寺一「云々」是則彼池の跡「也」古歌に
千載物名二條太皇太后宮肥後
　池もふり堤もくつれ水もなし

「此歌を取て」後拾遺集に
雜四
　むべ勝間田に鳥の「いざらん」
　鳥もいていく世になりぬ勝間田の
　　池にはくひの跡たにもなし　　　道濟

勝間田の池の跡を見て
　朽たてるくひなかりせば勝間田の
　　むかしの池と誰かつけまし

「玉吟集二」
　敷かゝる櫻を風の吹よせて
　　ふるき波たつかつまたの池　　家隆イ

墨吉
當集第七卷　　攝津國歌。
　すみの江の岸の松かねうちさらし
　　よりくる波の音のさやけさ

墨吉　　すみのえ　　みづのえ此三訓也。。。すみのえすみよしは同訓也みづのえとは浦島か子の釣しける水の江なるへし攝津の墨吉はみ

づのえとは不レ可レ訓也。」丹後國風土記云美津之江ノ
乃浦島子乃玉匣云々不レ可ニ混亂一者歟墨吉は古語也
近來は住吉也抑住吉の太神は日本紀を考るに底筒男
中筒男表筒男の三神也古事記に問此ノ三太神ハ者當ニ
レ任ニ筑紫橋之小戸一而今在ニ攝津國墨江一如何哉答曰
此神荒御魂者猶在ニ筑紫一但和魂は獨在ニ墨江一耳
神功皇后「宮」記に曰九年三月皇后親爲ニ神主一其後
皇后墨江遷坐一云々」此神本在ニ筑前小戸一即神功皇
后初遷ニ居攝津墨江一矣此三神海中より涌出し給ふ
「事」を詠る歌

續古今集神祇　　卜部兼直

西の海。淡木の原の鹽路より
　あらはれそめしすみよしの神

神功皇后○○○○○三韓を征し給ふ時守護「し給
ふ」荒御「魂を」歸朝の後住吉に鎭「坐なし給ふ歟」孝
謙天皇の御宇天平勝寶年中二社の荒廢したる事を帝
に告させ給ひける御歌」あり」

新古神祇住吉御歌
夜や寒き衣やうすきかたそきの
　ゆきあひのまより霜やをくらん

新古今集に侍らんイ○○○○○○○○。或人彼の社に詣て詠る
人ならは問はましものをすみよしの
　松はいくたひ生かはるらん

明神王のすかたにあらはれさせ給ひて
いかはかり年は經れともすみよしの
　松そ二たひ生かはりぬる

伊勢物語に。業平朝臣住吉に詣て丶
古今雜上讀人不知
すみよしのきしの姫松人ならば
　いく世か經しと問ましものを

「如レ此詠」たりければ井垣の内より翁出て返しける
と

新續古神祇住吉の御歌イ
衣だにふたつありせはあかはだか
　山にひとつはかさましものを

安法法師すみよしに詣て詠る
拾遺神樂
天「下か」る荒人神のあひをひを
　思へはひさしすみよしの松

彼太神は如ニ上述ニル神代に自ニ海中ニ涌出給ふ神也然るを「れは」あまくたるとも荒人神とも可レ申乎と覺ゆるに當集第六卷石上乙麻呂歌に

かけはくも　ゆゝしかしこし　すみよしの　荒人神の　ふなのへに　うしわき給ひ　つき給はん嶋のさき〳〵　より給はん　礒のさき〳〵あら波の

風にあはせす　草つゝみ　病あらせす　すみやかに「かくし」給はね　もとの國邊に

因ニ此長歌詞ニよめるにこそ凡そ荒神人と云ふ事其品「多かるへし」日本武尊對ニ蝦夷ニ吾は是現人神の子也と名乘給へり然れは天皇をも荒人神と可レ申にや亦日本紀に曰雄略天皇四年春二月射ニ獵葛城山ニ忽見ニ長人ニ天皇問曰何處公也長人對曰現人之神僕是一言主神也云々「亦」天神地祇之外神をは皆荒人神と申すへしと日本紀に「見へたれは何そ以て」墨吉太神をは荒人神と可レ申乎若荒御魂と申すに「依て云」にや次にあまくたると讀る事是亦日本紀に令ニ相違ニ歟但神皆天にのほりて大梵天皇の勅許を蒙て神と定給ふと申せはいつれの神をもあまくたるとは可レ奉レ申にや能々可レ詳也亦住吉四所大神は如ニ古事記ニ者神功皇后の遷座と見へたり但津守國基か申けるは第四の社は玉津嶋明神也云々定て有ニ子細ニ歟追可ニ尋極ニ也

古今賀イ
すみの江の松を秋風吹からに　　躬恒
こゑうちそふる興津白波

イ經信曰此歌を褒美して此對座に居らんずる歌を自讃せられければ
○此歌に對すへき歌とやらん自讃せらる「經信卿」

後拾雜四民部卿經信イ
興津風吹にけらしな住吉の
松のしつ枝をあらふ白波　「惠慶法師」

すみよしの岸のむれ松たはむまて
ふりもこりたる故鄕の雪　慈鎮和尚

おきつ風あはれはいかに住吉の
松のこすゑと孫の上葉と」

葦垣吉野

近來あしかきの吉野とつゝくる歌在之誠に詞のつき其たよりあるものなり然に日本紀萬葉「集」古歌○等の中に葦垣吉野とつゝけたる歌不及管見爰に萬葉集第六卷歌に

忍照や　難波の國は　あしかきの　ありにし里と
人みなの　思やすみて　つれもなく　ありしあひたに　うみをなす　長らのみやに　まき柱　ふとしきたてゝ云々

右歌の詞葦垣の故郷跡人皆○と上の七字を○○如此よみなせり或本には古郷の二字を吉野と書なをせる本有之然とも首尾相稱はさる歟此歌詞の前後「皆」難波也忍照難波と長柄の宮の卷柱と也將又難波に吉野と云所なし但ふりにし里にてあるへきにや吉野と訓せるも難信用況や吉野と書改むる本如何○○○○○但此古點の詞つゝきを以て○○○あしがきの吉野と詠「む」ことと非制限也例せはこもりくをこもりえとよみうまさかをあちさけとよめるうた多みゆるかことし此詞の便り甘心也「依て後嵯峨院御歌」みても猶奥そゆかしきあしかきの吉野の山の花のさかりは

京極黄門

み空行月もまちかしあしかきの
吉野の里の雪の朝けに

葦屋處女塚

當集第九卷過葦屋處女墓時「高橋連」蟲麻呂歌に

いにしへのさゝ田おのこのつまてひし
うなひおとめのをきつきそこれ

「此」さゝだをのことはいさゝけき男也勇み輕き也をきつきとは墓也息のつきたる處なり亦棺を置所也此歌の濫觴大和物語に見へたり然「れとも」本歌は當集なれは少しく所載之也攝津國の男の姓は菟原男士血沼のますらをと詠「るは」和泉國の男「を云也」あらそうに勝負をえさりけれは處女○○○○ひそかに出て身をなけゝる時詠る「歌」

大和物語
すみわひぬ我身なけてん津の國の
　　生田の川は名のみなりけり
「依て」二人の男も共に身をなけゝれは處女塚の左右につけり其後年經て此野を過ける旅人日暮けれは此塚の邊に臥たりけれは塚の内に戰の聲時を移しけり○やゝしつまりて後はだかなる男一人來て此旅人の枕に置たる太刀を「假借して失せしに」程なく「亦」戰の「聲」きこへけるか亦しつまりて「後彼男」太刀を返し此御はかせにて敵を○○○○○しへたけたりとよろこへる氣色にて失にけりと云々等思二兩人一戀と云心を詠る

攝津國の生田の川に鳥もいは
　　身をかきりとやおもひはてまし

此歌は彼二人の「男か」つまあらそいの時生田の河にいたる鳥を一人は頭を射一人は尾を射たりける事にこそ「委細見二大和物語一也」○此處女塚を後頼朝臣はもとめ○○詠り

堀百海路散木
もとめ塚御前にかゝるしは舟の
　　北氣になれやよる方もなし
風の名なりなりぬよるかたをなみ堀百散木
き堀百印本

志長鳥伊那附水長鳥安房就

當集第七卷歌に
志長鳥いな野をゆけは有間山
　　夕霧立ぬ宿はなくして

しながどり說々不同也或云狩衣の裾の長さを居る時かひとりして居るを云なりと或云攝津國猪名野にて狩しけるに白鹿を取て猪はなしと云けるより申すと日本紀「を考るに」景行天皇四十年日本武尊進二入信濃一是山「也山」高谷幽翠嶺萬重人倚レ杖而難レ昇山嶮磴紆長峯數千馬頓轡而不レ進日本武尊披レ煙陵レ霧經二大山一遙逕二子峯一飢二之食一於二山中一山神令レ苦レ王「以」化二白鹿一立二於王前一異レ之以二一箇蒜一彈二白鹿一則中レ眼而殺レ之爰王忽失レ道不レ知レ所レ出時白狗來道レ皇隨レ狗往仍得レ出二美乃一吉備武彥自レ越出而遇レ之先レ是度二信乃坂一者多得二神氣一以疾臥但從レ殺二

白鹿ニ之後踰ニ是山ニ者嚼レ蒜塗ニ人及牛馬ニ自不レ中ニ神氣ニ也「云々」今考レ之彼信乃國伊那「郡」にて白鹿をとり給ふ事をしながどりいなと云つゝけるを今の世には攝津國のいな野にとりよせて諷詞とするにこそ例「を以て見れは尊の」同國若栗林と云所を過き給ふに夷族をそひ奉らんとす尊則白鳥となりて南山に飛登り給ふ其處をは白鳥とて今世は驛館也「南山をは」鳥羽山と「云あり」然るに近代城南の鳥羽を白鳥の鳥羽と云ならはせるか如也亦白をしなと云詞は萬葉集第二卷歌に

みくさかるしなのゝま弓わかひけは
むま人さひていなといはんかも

三草とはすゝき也しな。とは薄の白くかれたる野を云なり仁野を信乃に詞をかる也古歌に

君とわれえもをきやらすしな駒や
そのあしうらの土なけれとも

しな駒とは白き駒なり歌「の心」は人。。。を〻てさんと思ふには東方へ行あしけの馬の足のうらの土を取て七家の釜の。すみをとり合樂してねたる人のはその上につけつれは起きあがらすと云事に詠る也亦薄をみ草と云事日本紀第一に曰使ニ山雷採ニ五百箇眞榊八十玉籤ニ使ニ野槌。採ニ五百箇野篶八十玉籤ニ「云」ニ「云」ニ是は天照太神「天の」石戸に籠らせ給ふ時「これを」出し奉んとせし態也依レ之信濃國諏方御射山の祭には薄を取て御幣とする也仍て三草かる信乃と云也亦信濃眞弓と云事續日本紀曰大寶二年甲午信乃國梓弓一千「廿」張以宛ニ大宰府ニ「云々」梓弓は弓の本たる故に眞弓と云也信乃國の古き濟物也

附水長鳥安房につくと云事

續日本紀曰日本根「子」高瑞淨足姬天皇御宇養老二年五月甲午朔乙未割ニ上總國之平郡安房朝夷長狹四郡ニ置ニ安房國ニ云々然れは長狹等の四郡を取て安房國に附ると云詞歟「然れとも」「萬葉」集第九卷に詠ニ上總末珠名娘子ニ歌に

しなかとり　あはにつきたる梓弓　すゑの王なは

むなわけの　ひろきわきも「こ」こしはその　す
かるをとめか　そのかほの　うつくしけさに花の
こと。　えみてたてれは云々
此歌のあはにつきたるあつさ弓とは安房につきたる
「なり」上總弓と云詞也弓は彼國の貢調也倭武尊旅泡
を以て白鹿を取り給ふ事を申すとも云誠に詞の緣さ
もと聞ゆ然に此歌は四郡を取て安房に附たりと云歟
凡萬葉集庭訓に仙覺「注レ之置る」しなかとりとは
獵スル者也鯨魚取也とは漁父也と云々此上は末學蒙昧
之微質雖レ非レ可レ及ニ料簡ニ令レ披ニ見一部始終ニ有下契ニ
此理ニ之歌上有下違ニ此詞ニ之處上於レ如レ然者不レ可レ有ニ
毎首一致之儀ニ者哉所詮しなかとり「いなと」は白鹿
取伊那可ニ心得ニ者歟伊那とは信濃と美濃との堺也伊
那郡「あり」[トヒ]則日本武尊の美濃へ出給ふと云詞に符
合せり「亦當集」[庭訓]「に水長鳥」いなとは獵者は類多
き者なれはさそ「ふ」心なるへしと云々「是」日本紀
の心と令ニ相違ニ歟亦いさなとりあふみの海「と云」も
只魚を取る海とつゝくる也と心得なは何れの歌も不
レ可レ有ニ相違ニ。歟「しなかとりも開ニ多義ニ白鹿を取
る伊那郡と心得へき者歟但「不レ窺ニ奮旨」「之深」處ニ後
哲宜レ令レ商ニ量之ニ「也亦」水長鳥と水字をしとつかふ
事當集第十巻歌に水良王のいはつゝとひをと云り玉
篇云水[尸癸反]焉しなかとりとよめる歌は近來少し
「續古今集ニ」「藤原仲實」
「水長鳥伊那のふし原風寒く
こやの池水凍しにけり」
續拾遺集
水長鳥伊なのさゝ屋のかり枕　大納言資孝
みしかき夜半もふしうかりけり
拾遺集
水長鳥いなのふみ原とひ渡る
鳴の「羽音の」おもしろきかな
「千載集　隆信
舟とむるいなの港に聞ゆなり
鹿の音おろすみねの松風」

詞林采葉抄第四

忍照難波

當集第十卷歌曰

忍照や難波堀江の蘆邊には
「たつ」ねたるかも霜のふるくに

喜撰式云海を「を」してる「と云」湖を○にはてると云
○爰に萬葉集一部始終披見之處難波の外をしてると
詠る歌なし亦海の惣名と註するも不審なきにあらす
「雖」然先賢の明作定て有二子細一○歟難波をしてる
と云事義理各別也其故は日本紀第十一卷に曰仁德天
皇十一年夏四月戊寅朔詔二群臣一今朕視二是國郊澤一
曠而田圃「小」且河水横逝以流末不レ駃聊逢二霖雨一○
海潮逆上而巷里乘レ船道路亦泥群臣共視レ之決二横
源向一通二海塞逆一流一以全二田宅一冬十月堀二宮北之
郊原一引二南水一入二西海一因以號二其水一曰二堀江一「云
云」以之思之彼難波浦は水淺くごみ深くして船を出
す時はをして出ると云詞と見へたり不レ可レ准二自余ノ
海一歟明玉集に○「此堀江を詠る」

忍照や御津の堀江に船とめて
つけのゝ鹿の聲を聞哉

昔鬪鷄野に小鹿あり妻鹿の外に淡路嶋に妾鹿をもち
たり或夜妻に語て云我背中に俄にすゝき生てやかて
霜かれぬと夢に見たりと云妻鹿云汝淡路嶋の妾か本
へ往ん時に海上にて背中に矢をいたてられて「しも」
をつけらるへしと○○○○○○「則」夢合の如し其れ
より鬪鷄野をは夢野とも申とかや「日本紀に見へた
り」「此意を中納言」家成卿家の歌合「歌」に

おのか身に霜をく夢やみへつらん
心ほそけに鹿のなく哉

難波浦の眺望○○○○

後拾春上能因法師

心あらん人にみせはや津の國の
難波渡りの春のけしきを　能因法師

新古秋上

忘れしな難波の秋の夜半の空　宜秋門院丹後

こと浦にすむ月はみるとも　京極黄門

難波江や蘆間の月のおほろ船
　霞にまかふ春の明ほの　守覺法親王

難波人蘆火たく屋にふる雪の
　うつみのうすは煙なりけり　家隆

「浦人も心ありてや難波江の
　里をは梅のやとゝなしけん」　級照

當集第九巻歌に
しなてるや　かたあすは河　さにぬりの　大橋の上に　くれなゐの　あかもすそひき　山あひも「て」すれるきぬきて云云
しなてる○かたあすとは級はしなふ也てるは日也かたあすはとはかたさかりなる○はと云詞也片さかりなる山には日影の殊にあたゝかにあたる也「譬へは馬の髪を兩方へ結ふをもろしなと云か如し亦しなてる○片岡山「と云も」其儀同し日本紀「を考るに」豐御食炊屋姫ノ天皇廿一年冬十二月庚午皇太子幸二於片岡一時に飢たる旅人道のほとりにふせり姓名を問ひ給ふに申さず太子飲食を給り即紫の御衣をぬきて飢人の上におほひ給ひやすく「ふせ」とて御歌「給ふ」

級照や片岡山に飯に飢て
　ふせる旅人あはれをやなし　已上略之

飢人かしら「をゝ」てして答る歌曰

いかるかや富緒川のたえはこそ
　我大君のみなをわすれめ

或記云太子の○○○御歌の心は彼の達磨和尚觀音の化來として西方極樂の本師彌陀に離れ奉り東土生死の旅人となりて三國を傳て我朝に來り給ふと云とも機○いまた純熟せさる故に度すへき生もなく弘むへき法もなし然るに中道法性の法味に飢へて二疊の片岡山に臥せりと云心也「云々」飢人の返歌は七代記に入云七代記は釋思禪師七代記也傳教弟子光定法師一心戒文の中に見

たり
在レ之此歌非二萬葉集の所談一以二詞ノ次一載レ之「委は日
本紀七代記に見えたり亦慈鎭和尙の詠る」

拾玉集四
なにとなく通ふ兎もあはれなり
片岡山の苞のかきねに　慈鎭イ

朝毛吉紀
調首淡海歌 イ云

當集第一卷
朝毛吉紀人ともしもまつち山
ゆきくとみらん紀人ともしも

あさもよしと云イ思らくイ
「此」詞は世人謂く旅人の朝いてたつ時のよそほひと
云。是推量の說歟雪の朝なとは爐邊を離れすして諸
の獸の形ちを炭にて造て紅火となしてあたる事和漢
の世俗也「然れとも」。吉薪をなく事最上也此故にあ
したもえてよき木と云言也見先達の尋常の儀也一然
るに」柿本ノ人麿集云天平勝寶七年春二月於二左大臣
磨イ二袋草子二引萬葉集抄序袖中抄五あさもよひの條亦同奥義抄中之下廿四人麿勘文十五
橘○○卿之東家一宴二饗○○○大夫等一于時主人大臣問二
人麿一曰古歌云安佐母余比紀能勢藝母利我多豆加由彌
由留須登伎奈久和加母幣流伎美奏歌頭之曰二安佐母
余比紀一其情奈何人麿答曰式部卿石河卿ノ說曰古俗言ヘノ
也併朝○食謂二之阿佐母余比一也紀新也以レ燎レ之炊レ飯
因レ之紀伊國發語以二○阿佐母余比一「也云々　此證尤
炳焉也朝毛吉紀「と云詞は」近代には詠る歌「希なる
へし亦」多豆加由彌と云事古○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○「き物語に在レ之」昔河內國
にある男いと志し深き妾「をもてり」或夜○○○夢の
內に云我は日比の契いまた不レ盡といへとも遠き所
へまかりなんとす此を形見に「給ふ」へしとて弓を
○○とらすとみて夢さめ又起て見るに枕「かみ」に弓
あり○妾は行方知れすなりぬ男歎さなから此弓を○
○○○自愛しけるに月日を經て後此弓白鳥と成て南
をさして飛去ぬ男跡を尋て行けるに紀伊國雄山と云
所にて亦女と成てかきけす如く○○失ぬと云々彼山
の關守の持たりける弓にて有けるとかや此歌と同心
の歌當集第九卷「歌に」

木の國の昔弓雄のなるやもて
　鹿とりなひく坂上にそある
此「等」も彼關守の持たりける矢とかや前の歌の心を
詠る
　別れにしたつかの弓の白とりを
　　木の河ゆすりてひぬ日はなし
　　　　「俊頼朝臣」
明玉集歌に
　朝もよひ木の川上をけさみれは
　　金の御嶽に雪ふりにけり　俊頼
「此外朝も吉と詠る歌近代希なるにや」
　妹背山
當集第七卷　柿本人麻呂歌
　大汝貴すくなひこなのつくれりし
　　いもせの山を見○そかしてき
日本紀「を考るに」大己貴神は素盞烏尊の御子「也」奇
稲田姫の所レ生「の」神也此神は父尊の讓りをうけ給
ひて葦原國をつくり給ひしかは國作大貴神とも申し
亦大國主神とも申す也此尊の御子すへて一百八十一
神○○をはすれとも國を作り給ふかをはせす爰に出
雲國五十佐々小汀にて海上を見給へは人の聲あり驚
て是を「見給へとも」見ゆる事なし暫くありて獨りの
小男「白蘞皮」を舟とし鷦鷯の羽を衣として潮に随て
うかひ到れり「大己貴神掌に」置て是をもてあそひ給
ふにをとりあかり○て尊の御顔さきにくひつき給へ
りあやしと思ひ給ひ天神に申給へは高皇彦靈尊曰吾
うめる所の御子すへて一千五百座あり其中腹悪くを
「よして」随ひ給はぬ御子をはしき手にとりひしかん
とせしに指のはさまよりくゝり落し「給ふを」養ひ給
へと申し給ひしかは子とし給ふ少彦名命と申き此神
「とふたり」國をゝさめ山川草木をつくり給ふ事○○
○也「此心を以て此歌を詠る也」必しも妹脊山はかり
にかきるへからす「然は」
當集第三卷　生石村主眞人「作歌曰」

大汝少彦名のいましけん
　しつのいはやはいく世經ぬらん

「是岩屋にもかきるへからす」「妹背山の歌 近來いと多からず」

古今集に　　讀人不知
なかれては妹背山の中にをつる
　吉野のたきのよしや世の中

　　　　　　　　　　　　業平
一つかひむかふ流の妹背舟
　思のつなのたえんものかは

後撰集二
むつましき妹背の山の中にさへ
　へたつる雲のはれつも有哉

　樂々浪

當集第一卷　　栛本人麻呂「歌曰」
樂々波のしかの唐崎さき。あれと
　大宮人の舟待かねつ

さゝ波と云言昔天智天皇粟津宮におはしましゝ時伽藍建立の御志ありしに天皇六年二月沙門ありて帝の夢に奏云戌亥に當れる山に靈堀あり彼所を「召し」給へと仍遣二勅使一みせしめ給ふに種々の奇瑞あり帝則臨幸ありしに仙人ありて奏曰予昔し此湖の畔を歴覽するに五色の波浪海上にうかへり其聲を聞けは五波羅密を唱ふ彼の波のよする方を尋て此所に來住して已に數百歳を經たりと「て」唱て曰古仙靈堀伏藏地佐々名實長等山と「云」て忽然として隱れ「訖」ぬ仍。。被レ建二靈場一而號二崇福寺一としかしより志賀唐崎の外に湖水。の「浦々」を「は皆」さゝ波と詠る也此心をよみ玉ふ」

拾遺愚草
山人の光尋し跡やてれ
　みゆきさえたる志賀の明仄　京極黄門

延暦七年傳教大師叡山を建立しいつれの神が我山の佛法を守護し給ふへきと日本紀を披見し給て大汝貴命我朝の地神にて坐けりとて彼の垂迹三輪の社へ參詣。。。ことのよしを被告申けれは明神一諾の神勅あり仍叡山の嶺に椙生たりき。。。。。。。。。。

國鹿島より來る三中琴の御館と云老翁を召具して
○○○○○○○○○○○○○○○○○○「神」五色の光
の波上に御舟を浮へて志賀の浦にこきよせ柱の棹を
河に突立てあかります○○忽に大木となりて今に在
と云々此心をよめり
「細流比叡の祭の時賀茂の明神え此柱を奉らせ玉ふ
と申翌日賀茂の祭過たれは葵を日吉え奉らせ玉ふと
申」已上細

志賀の浦に五つの光浪立て
あまくたりけんいにしへの跡

新勅神祇前大僧正慈圓

山人の光尋し跡や是
御雪寒へたる志賀の明はの

京極黄門

○傳教大師根本中堂建立し給ふとて「長等山の頂に」
地を引給ひしにさま〳〵の靈瑞あり八舌の○蠣蛤貝
の「類」多かりけれは○○○○「比良」明神に尋「給ふ
に」老翁現して宣○く此湖水「七度」桑田と成しより
遙の昔「湖水の龍神我朝の神々」集て伊勢海のきよき
汀の砂をはこひて此山を築き末世に佛法繁昌の地と
して住「し給ふ此時」慈尊出世し給はん「事とこしな
へ」なるへき山也と「定め給ふ」○○○○○○○○○○
玉云々七社内地主權現とて立せ玉ふ事をよみ玉いけれ
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○一又大師
三輪明神を勸請し給ひて大宮權現と崇め奉り給ふ此
大神は大己貴神にて葦原の地主神にてまします此心
を詠給ふにや」

後法性寺殿

千載上法性寺入道前太政大臣
佐々波やくにつみ神の浦さひて
古き都に月ひとりすむ

「彼の」權現本地釋迦如來にてをはしますとの心にて
詠る

慈鎮和尚

續後撰神祇後京極攝政太政大臣
古への鶴の林に散花の
匂をよする志賀の浦波

中院亞相

佐々波や遠さかり行舟穏の海は
氷そ浦の鹽干也ける

千載集春下　　　公行

嵐吹志賀の山邊の櫻花
　散れは雲井に佐々波そたつ
　　　　　　良清
雪吹する長等の山を見渡せは
　尾上を起るしかの浦なみ
「花のちるひらの山をろし海ふけは
　嶺よりおきによするさゝ浪「後徳大寺」

鯨魚取淡海

當集第二卷近江天皇大殯ノ時太后○歌
いさなとり　あふみの海を　おきさけて　こきくる○舟　へにつきて　こきくる舟　おきつかひいたくなはねそ　わか草の　つま思ふ鳥たつ
鯨魚取此訓くちらとるいさなとり兩訓也問曰此御歌淡海「の海也」近江の海とはみえす大海なるへし然れは○くちらとると可レ訓「鮲」何そいさなとりと點するや○○、○○○○○　答て曰「當集」第二卷を披見するに此太后の御歌の前後皆近江海の事を詠り或は志賀辛崎或は樂々波の大山守と云故に其○字つかへ相替るといへとも是近江浦なるへし仍て第一卷柿本人麻呂作歌に

石はしる淡海の國の佐々波の
　大津の宮云々

淡海とは近江也然れとも此訓いさなとりと云へき也其據は當集の中に○十二箇所あり或は鯨魚と書る所五所或は鯨名或は勇魚亦は不知魚亦は伊佐那と書り此は眞假名也支證宜(霍ㇾ然也イ)○○○○○○○○○○○○　凡魚をなと云事「眞魚鰹魚」眞臭なとゝ云俗言可ニ思量一就レ中日本紀に魚鹽地と訓せり

萬葉集第五卷「二」
　神功皇后
たらしひめ神のみことの魚つらすと
　御たゝしせりし石をたれみき

此歌は山上憶良筑前國司にて下りし時松浦川にて昔神功皇宮の鮎をつらせ給ひける事をよめる也鯨をいさと訓する事壹岐國風土記曰鯨伏郷在郡西　昔者鮐鰐追レ鯨鯨走來隱伏故曰ニ鯨伏一　鰐并鰐化爲レ石相去

一里俗云鯨為伊佐是證據分明也凡いさなとは魚の惣名也○○○○○○○○然は大海湖水何れにも可亘也
仍て大海の魚を取をいさなとりと云也日本紀曰雄朝津間稚宿禰天皇十一年春三月癸卯朔○○幸茅渟宮衣通郎姫歌に

とこしへに君もあへやも異舍儺等利
海のはまものよるときときく

時に天皇謂衣通郎姫曰此歌不可聆他人皇后聞給はゝ后心に大に恨み給はん故に時人號濱藻謂奈能利曾毛也○「此草の名は忍心の言也」爰に知ぬいつれの魚をもいさなと云へき「にや」彼の衣通姫は今の玉津嶋明神「にてをはします紀伊國」和歌浦に御心を留て鎮座し給ふ事を詠せ給ふ

後京極殿

いかはかり和歌の浦風身にしめて
宮はしめけん玉津嶋姫

「玉津嶋に奉りける」

慈鎮和尚

和歌の浦「や」言の葉風に立波を
心にかけて契とをしれ

中院亞相

人とはゝみすとやいはん玉津嶋
霞む入江の春の明ほの

「或云」いさなとり海とつゝくる「言は」魚を取る鵜と云なり古歌如斯と然は淡海の海とつゝくる「とは相違する歟」抑鯨をいさなと訓する事鯨鯢は勇に武けり輕きもの也一游一洋を走ると○云斃て後其眼天に昇て慧星となるとも云海錄に見へたり亦廣州記曰鯨鯢目明○○○○○「云々」凡いさなとりとは漁父也と云當集相傳の義「なれとも」たゝ魚取海と心得るに毎首無相違歟」今考之○○いさなとりと詠る歌多き中に○○○○「當集」第三卷曰角鹿津乘舟時笠金村作歌

大舟にまかちぬきをろし勇魚とり海路にいてゝあへきつゝ我こきゆけは玉たすきかけてしのひつやまとしまねを

同第十一卷曰大宰帥大伴卿上京之時陳所心作歌

昨日こそ舟出はせしか伊佐魚とり比治奇ひちきのなたをけふみつるかな

又所學衣通郎姫等イ「此兩首並に上に所擧の日本紀衣通郎姫の歌更に其外此類歌當集の中に不可勝計イ漢支の心にみえす○○○○○○○○○○○　然はたゝ魚取と云詞也と一見へたり」赤鯨魚取とつゝかすして淡海の海と詠る歌○○多し日本紀武内○歌

あふみの海せたの渡にかつく鳥田上すきて宇治にとらへつ

君かためあふみの海をいくそ度桑田になれと定めおきけん　「小侍從」

角鹿濱

當集第三卷　笠金村

こしの海の角鹿のはま ゆ大舟にまかちぬきおろしいさなとり海路にいてゝあへきつゝ云々

角鹿濱今の世には敦賀津と云日本紀「を考るに御間城入彦五十瓊殖天皇の御宇越國笥飯浦に額に角一つある者舟に乘て來れり何れの國の人そと問に答云伽羅國の王の子也名をは都努我阿羅斯等と云日本に聖天皇をはすと承て穴門と云所に着き浦々嶋々を傳ひ此浦に詣てたりと云然るに天皇めくみ給はすして崩ましぬ垂仁天皇の御宇に召れて赤絹百疋を給ひ先帝の御名御間城を給て汝か國の名とせよとて其國を彌摩那國と名付て返し給ふと云々「是よりして其所を角鹿濱と云けり然るを世人敦賀浦と云

明石浦

當集第三卷　柿本朝臣人「麻呂」

燈の明石の大門に入る日にやこき別なん家のあたりみす

明石浦と○○○云こと○○○○○○○神功皇后の三韓討征させ給て都へ歸りますに仲哀天皇の御子麛坂王忍熊王の二柱王御弟譽田天皇を皇后のはき玉ひし腹にあへ玉也稱をは古人は寶武多と申此の腕の形天皇の御腕の上に肉のをひ出給しゆへにほむたの天皇と申奉りしを寶武多を譽田と申かへたるなりを太子に立給ふ事をそねみて播摩國に先皇の○

陵を築くまねをして此浦に赤石をはこひて嶋を造らしめ二柱の王假庇を棧敷として皇后と太子を待奉て此棧敷にて伐ち奉らんとはかり給ふに赤猪來て麛坂王を忽くひころし忍熊王は軍を引て山背に渡り給ふ武内宿禰官軍を引率て淡海へ入給ふに忍熊王の軍に山中にて行合て多く伐るゝ也其處を相坂と云也忍熊王瀬田の渡にて討れ給ふ武内宿禰よみ玉へり歌を詠る

あふみのみ瀬田の渡にかつく鳥
みにしみゑねはいきのへせしも

赤石をはこひ積しゆへ赤石浦と云也○○○○○○○○上已
見二日本紀一　明石浦歌古來多イ

當集第三卷　柿本人麻呂

天さかるひなの長路をこきくれは
明石のとより大和しま見ゆ

拾遺愚草中　京極黄門

明石方いさおちてちもしら露の
おかべの里の波の月かけ

明石方宮なき人の袖を見よ　兼秀能

すゝろに月はやとるものかは

有明の月も明石の浦風に　平忠盛

波はかくてそよると見へしか

續古今集冬　寂蓮

心とや獨あかしの浦千鳥
友まよふへき夜半の月かは

陬磨浦

當集第三卷歌云

陬磨の海士の鹽燒きぬの藤衣
まとをにしあれはいまたきなれす

藤衣とは○あさましき麻の衣也若し昔は藤の皮にても織る事の有けるにや亦山田を守る藤衣とも詠る古今集の歌も可二同事一也此浦は昔行平の中納言事ありて沉論しける頃詠る

古今雜下
わくらはに問ふ人あらは須磨の浦に

もしほたれつゝわふとこたへよ
と詠て都に有ける舊友「腹から」兄弟の子也なとの方へ恨おとつれたりけれは左近中將業平片野の御狩にことをよせていそかに彼浦に尋行てやかて立別ける時よめる

須磨の浦秋萩しのき駒なめて
鷹狩をたにせてや別れん

曉懸て打出ける「に」イナシ此は八月廿日あまりの空なりけれは晨明の月中空にのこりて海上漫々たる銀浪千里の水凛々として淡路潟繪嶋イ嶋か磯はる〳〵と見渡さるゝに只遠山の雪の曙の心地していつくを天末とも見へすいつくを海岸とも辨へさりけれは此勝景に心のみ引れてやかて此もとに○○○しはしはイかくてもあらまほしく覺ゆるほとなれは行としもなけれとも玉の轡月毛の駒に任て泣々立返けるとかや「亦彼」イナシ源氏の大將そのかみ北闕の錦帳より出て只人となり給ひしかとも玉を磨き瑠璃をのへし御柄を引かへて此浦にさすらひ松の柱竹の垣柴の楗の内に玉藻の床波の枕を敷忍ひて三年を送り給ひ○○「し」イイナシありさま短筆に難ㇾ記有委、

物語ニ」此浦を詠る歌上古にはいと多からさりけるにやイ近來不可勝計此集の所談なをつきすさいへとも次々綴之○○○○○○○○○○○○○○○○○一萬葉集イナシの歌を取て古今集に

すまのあまの鹽やき衣おさをあらみ
間とをけれはや君かきまさぬ

此歌以後中古詠る歌多し」

新勅秋上正三位家隆　　京極黄門
すまのあまの間遠の衣夜や寒き
浦風なから月もたまらす　　家隆

夏か秋かえやはわくらんすまのあまの
浦次はへす月の衣手

行平の歌を取て　　京極黄門
拾遺愚草下
すまの浦も鹽の枕とふはたる
かりねの夢路わふとこたへよ

亦關城ある事を　　師俊
千載羇旅
播磨路やすまの關屋の板ひさし
月もれとてや間ばらなるらん

一源氏物語の歌を取て千載集に

山おろしに浦傳ひする木の葉哉

いかゝはすへきすまの關もり」

白縫筑紫

當集第三卷

しらぬひのつくしの綿は身につけて

いまたきねともあたゝかにみゆ

此歌 或云綿を物に入ねとも縫ひつゝけて敷もする事を云なりと然れとも綿ともいはすして白縫のつくしと詠る歌あれは此義未詳因撿日本紀第七曰大足彦忍代別天皇御宇十八年五月壬辰朔從葦北發船到火國於是日沒也夜冥不知着岸遙見火光天皇梶把者曰直指火處因指火往之即得着岸天皇問其火光處曰何謂邑也國人對曰是八代縣豐村○亦尋其火是誰人之火也然不得主茲知非人火故名其國曰火國云々今世號肥前肥後是也以之思之しらぬ火のつくしと云る○詞也凡九州を筑紫と云名は此島の形似木兎紫は嶋と云言也仍木兎嶋と云也然るに「今は」筑紫と書る也

符箋 つくしとよめる古來多之

新古羇旅あり新古 こゝにいてつくしやいつこしら雲の

たなひく山の西にそありける 大納言旅人

拾遺物名 つくしよりこゝまてくれとつともなし

たちのを川の橋のみそある 業平

我こそは心つくしにゆく舟の

よとのわたりのあけはのゝそら 慈鎮

松浦河 附玉嶋川

萬葉集第五卷遊松浦河序曰余以暫往松浦之縣逍遙聊臨玉嶋之潭遊覽忽値釣魚女子等也花容無雙光儀無匹開柳葉於眉中發桃花於頰上意氣凌雲風流絶世云々娘子等[illegible]曰兒等者漁夫之舍兒草菴「云」微者○唯性便水復心樂山或臨洛浦而徒羨○王魚乍臥巫峽以○望烟霞云々下官對曰唯「々」敬奉「候」芳命于時日落西山驪馬將去遂申懷抱因逆詠歌「曰逢客等」

松浦なる玉嶋川に紡つると

たゝせるてらかいへちしらすも

仙媛答謌云

玉嶋のこの川上に家はあれと

君をやさしみあら○さすありき

イ逢客仙媛共に仙家より来ると見たりイ

○此歌を取て詠る

拾遺愚草下

跡もなしこほれて落る白波の　雪上同　京極黄門

玉嶋川の河上のさと

後人追和二松浦仙媛歌一「一首」

君を待松浦の浦の乙女らは

常世の國のあまをとめかも

日本紀第七考るに○氣長足姫尊先皇の神教に随ひ給すして崩し給ふ事を思して筑紫に向ひ給ふに羽白熊鷲と云者心武く「力」強左右に羽生て能く空を翔爰に皇后是を伐んとて軍を催し武内宿禰節度使として松峡宮にうつりまして遂に熊鷲を討給ひ火前國松浦にをはして針「をかゝめすして」釣とし裳の糸を貫て釣緒として針を水に投入て誓て宣く我西寶ノ國を得へきならは此針をのめとて掉をあけ給へは鮎と云魚を得給へり珍物也とて其所をめつら○と名付給ふ今の松浦也今に此川の鮎をは男のつるにはつられすと申す王魚と云る名是也異朝にも此例あり○○○　朱雀記曰イ　南海有二王餘魚一　和名加良衣比俗云二賀「禮伊」例矣　昔越王責二呉王一渡レ海船中得二此魚一則鱠作不レ盡吾可レ得二呉國一者無レ斃「而餘

王かくひのこしたる鱠を海中にすつ仍王余魚と云今のかれいなりイ

半奇レ水自以二半身一爲レ魚故云二王餘魚一云々」

肥前國風土記曰昔武小廣國押楯天皇之世大伴狹手彦連任那國靜爲レ救二百濟國一承レ勅到二此村一即篠原村弟日姫子爲レ妃別去取二日鏡一與レ婦妾別悲渡二玉嶋河一則懐二彼鏡一而川底沈是以鏡渡云々

此心を詠る

沈めける鏡の影や是ならん

松浦の川の秋の夜の月　冷泉黄門　爲相

續千春上

梅か香や先うつるらんかけきよき　京極黄門　定家

玉島川の花のかゝみに

わかゆつる神代も遠し玉島や
めつらの川の昔しをもへは　　行家

浦島子

續浦島子傳云○○此浦島子者上古仙人也齡雖過三百餘歲形容如童子好仙學盡秘術於是釣魚之處曳得靈龜眠舟中間忽作美女問曰何處爲居誰人爲祖神女答曰妾是蓬萊女也在昔之世結夫婦之義我成天仙生蓬萊之宮中子作地仙遊澄江波上宜向蓬城將遂曩時之志島子隨神女須臾之間向蓬萊山其宮爲勢金臺玉樓隆宗紺殿綺窓攑爛嶋子與神女共入玉房座銀床錦莚朝服金丹石髓暮飲玉酒瓊漿駐老延齡然而神女語島子曰漸見子容顏累年枯槁逐日骨立定知成故鄉之戀慕宜○舊里以繡衣被島子送玉匣若欲見爾逢之期莫開緘言畢約成分手辭去島子忽到故鄉澄江浦廻見舊里桑田變改家園爲河濱水陸推遷山岳成江海僅遇洗衣之老嫗問故人嫗曰我年百有七歲未聞島子名唯古老傳曰經數百歲昔有水江浦島子者好釣乘船入海中云々島子不堪悲歎忽開玉匣時紫雲出匣指蓬山飛去之處老翁忽來紅淚濕白髮慕仙洞之芳談隱淪海浦遂不知所終「云々」

當集第九卷歌曰

「水の江」の浦島か子のかつはつりたひつりかねて
七日まて○○○○○○○○云々
いへいてゝみとせのほとにかきもなくいへもうせ
めやとこのはこをひらきてしれは白雲の云々

○○○紫雲白雲「兩說也浦嶋傳は白雲を紫雲云々」

右浦嶋子は廿二代雄略天皇廿二年戊午年入蓬萊之後送帝王三十二代歲曆三百七十餘年

頭註書入云　雄略天皇廿二年より淳和天皇天長二年まて三百四十八年なり然るを三百七十餘と云不審也

至淳和天皇天長二年乙巳○○丹後國餘謝郡海濱歸朝淺毛河明神示現也浦嶋か子の事を詠る歌不可勝

丹後國風土記曰美頭乃兄能宇良志麻能古我多麻久志義云々みつ
計ー○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
のえゝ可讀如此イ
○○○○○○

拾遺夏
夏の夜は浦嶋か子の箱なれや　　中務
はかなく明てくやしかるらん

詠れは松の木の間にほの〳〵と　　後京極殿
明るもおしき浦嶋の月

水の江の形みと思へは鶯の　　伊勢
花の匣をあけてたにみす

千載賀
百千度浦嶋か子は歸るとも　　五條三品
はこやの山は色もかはらし

續古今集
見すはまたくやしかるまし水の江の
浦嶋霞春のあけほの

渤海
當集第廿卷曰渤海大使小野田守朝臣云々

昔天智天皇七年冬十月大唐將軍李𧺆勣イ渤海を亡してより後日本へ貢調を獻せす然るに聖武天皇御宇神龜四年十二月渤海の寧遠將軍高仁義と云者豹皮三百帳獻レ之天皇叡感ありて絹綾糸綿を虫麻呂にそへ副イて返送給ふ其後改ニ渤海ニ王城國とせんとて田守を被遣歟未レ詳勅延暦十六年追可詳菅野眞道奏（コノ細字二行イナシ）續日本紀第十卷に曰渤海ノ郡ハ者舊高麗國也渤者海水涌踊イ騰良也云々日本紀を考るに○○取要仲哀天皇長門國豐浦宮ましますに天の告ありて云渤海は寶國也征伐し給へと天皇たかき岡に登て戌亥ニ當れる海上を視給ふに廣遠くして國なし天皇何れの神の吾をあさむくや大空に豈國あらんやと神の告を疑ひ給ふ○爰に熊鷲襲イと云鼬族を引て天皇を襲ひ奉るに是を責んとし給ふに塵輪とて雲に乘り風に隨て天を飛翔る者あり天皇御手に御多羅枝を以て此を射給ふに塵輪相引して毒矢を放つ互に疵を蒙て天皇崩給ひ時に神功皇后先皇の御遺勅に任て御妹の若多良姫姉イを御使として龍宮へ遣遺イして干珠滿珠を乞取鹿嶋香取諏訪住吉などの諸神

（淺を御供さして檀イ）を伴ひ給ひ檣日浦にて假に大夫の姿に成給ひ御舟を浮へ渤海へ渡り給ふ風「神」海神豊娘磯良高良なとゝ申す荒御前御舟に副ひ軍。ともを皆破て三韓の王を白縄にて自らしはられて皇后の御前に跪て首を叩て言ふ今より後王の馬飼とならん西より日の出河の逆に流れ石砂天に登り明星とならさらん外は御調を春秋に奉らんと申す皇后御弓のはすにて山頂の石に高麗公日本王門守犬人也と書給ふと云々渤海郡より我朝へ通用の事是より始れるなり

詞林采葉抄巻第五

鷄之鳴東

當集第二卷　柿本朝臣人麿呂作歌

鷄か鳴東の國の御軍を召給ひつゝちはやふる人をなこしとまつろはぬ國をおさむと皇子にまかせ給へはおほみ身に刀とりはかしおほみ手に弓とりもたし御軍をあともひ給ひとゝのふる皷のこゑは雷のこゑときくまて吹なせる小角のこゑもあたみたる虎かほゆると諸人のをひゆるまてに指あくる幡のなひきは野邊ことにつきてある火のなひくこと「云々」（上下略之イ）

今此歌の心は唐の兵機等を思はしめて詠る也「是以」（其故はイ）呉起曰夫鼙皷金鐸所ニ以威レ耳ニ旌旗麾幟所ニ以威レ目禁令刑罰所ニ以威レ心耳威ニ於聲ニ不レ可レ不レ清目威ニ於色ニ不レ可レ不レ明心威ニ於刑ニ不レ可レ不レ嚴云々是等の兵機を慮て「私語に事よせて」詠る也是は高市皇子達ニ武勇鬪戰ニ兵機を提て禮法を詳にし給ふ事「を詠る」也次に皷の聲は雷の聲ときくまて「吹なせる小

角の聲もおたみたる虎かほゆると諸人のをひゆるまてにと云事おほくの大國は軍を引て吾朝の御軍に譬て其心を具にして世人に知せんと詠るなり」○○○○○○軍の象は雷電の如く風雲の如しと云龍虎の威を振共云是也亦指麾る幡は○旗幡等也靡幡は莊麾也さしまねきとは左をまねきて左にし右をまねきて右にすと云々是軍陣の博士として士卒を靡き從る兆也依レ之立ニ奇心虛實ニ分ニ八將八部ニ者也是以古文握奇經曰黃帝立ニ井田之法ニ因以制レ兵臣風后佐ニ黃帝ニ○破ニ蚩尤ニ著ニ握機經ニ爲ニ萬世兵法之祖ニ云々旗之文とは天地風雲龍虎鳥蛇等也四を爲レ正○爲レ奇と「今」是等の理をとりて此歌にはよめる○也亦鷄か鳴東と云言は曉に至ては雌先くゝと鳴を聞て雄即鳴也因て鳥か鳴く○わか妻といふ言○ともいふなりあは明る「と云」詞なれは鳥か鳴は夜の明ると云詞也とも○故に玄中記曰東南有ニ挑都山ニ上有ニ大樹ニ名ニ桃都ニ枝相去三千里上有ニ天鷄ニ日初出照ニ此樹ニ鷄即鳴而天下之

鷄皆隨レ之鳴」云々」次にあつまと云事はおかつまと云言也日本紀第十三卷曰纏向「日」代宮御「宇」天皇四十一年日本武尊東夷征伐之時進ニ相摸ニ欲レ往ニ上總ニ乃至ニ于海中ニ暴風忽起王船漂蕩而不レ可レ渡時ニ有ニ從レ王之妾ニ曰ニ弟橘媛ニ穗積氏忍山ノ宿禰之女也啓メレ王曰今風起レ浪泌ノ王船欲レ沒是必海神之心也願賤妾身贖ニ王○命ニ而入レ海言訖乃被レ瀾入之暴風即止船得ニ著岸ニ故時ノ人號ニ其海ニ曰ニ馳水ニ然ニ日本武尊則從ニ上總ニ轉入ニ陸奧ニ時大鏡懸ニ於王船ニ從ニ海路ニ廻ニ於葦浦ニ至ニ蝦夷境ニ「乃至ニ蝦夷ニ」既平○○自ニ日高見國ニ還之歷ニ常陸國ニ至ニ甲斐國ニ居ニ于酒折宮ニ「云々」則自ニ甲斐國ニ北轉歷ニ武藏上野ニ而逮ニ于碓日坂ニ時ニ日本武尊顧ニ弟橘媛之情ニ故登ニ碓日嶺ニ而東南望之三歎曰吾嬬者耶 嬬此云ニ莵摩ニ 故因号ニ山東諸國ニ曰ニ吾嬬國ニ也「云々」今世東字をあつまと詠るは義讀也あつまと「云」歌古來多し古歌云

新古戀一讀人不知イ
東路のみちのすゑなる常陸をび○
かこ「と」はかりもあはんとそ思ふ

東路の春の向渡を今夜より　　慈鎮和尚
夢にもつけようつの山ふみ京極黄門イ
　　　　　　　　　　　　　　津守國助

讀拾羇旅イ
白河の關までゆかぬ東路も
日數經ぬれば秋風そ吹　　俊頼

麻手ほす東乙女かゝや莚
しき忍てもすくすころかな　　後京極殿

月清集上イ
故郷のぬしやいつちとことゝへは
東の方を夕暮の空　　鴨長明

都にはいかに花人春たえて
東の秋の木葉とそなる

富士山「附鳴澤」

凡此山者爲二神仙之居一故以二言語一難レ述以二翰墨一叵レ記者也雖レ然志所レ之粗可レ載レ之富士縁起云此山者月氏七島之第三也而天竺列擲三年我朝飛來故云二新山一本号二般若山一其形似レ合二蓮華一頂上八葉也中央有二大窪一窪底湛二滿池水一色如二青藍一味甘酸治二諸病患一池傍有二小穴一形如二初月一或時出二黑煙一或時立二白雲一○金色二承和三年春○垂二珠簾一雨二玉四方一貞觀五年秋白衣天女雙立舞○古老傳云此山麓乘馬里有二老翁一愛レ鷹嫗者飼レ犬後作レ箕爲レ業竹節之間得二少女一容良端嚴光明照耀爰桓武天皇御宇延暦之比諸國下二宣旨一被レ撰二美女一坂上田村丸爲二東國勅使一富士裾宿二老翁宅一終夜不レ絕二火光一問二子細一是レ養女之光明也田村丸即上洛奏二事由一於レ是少女登二般若山一入二巖崛一畢帝幸二老翁宅一翁奏二由緒一帝悲泣脫二○王冠一留二此處一登二頂上一臨二金崛一少女出向微咲曰願帝留レ此帝即入レ崛訖王冠成レ石有二于今一彼翁者愛鷹明神也嫗者犬飼明神也「云々」今是を考るに當山縁起之上者仰雖レ可二信用一時代甚不審也疑「ふらくは」若天智天皇「な

らんや」其故者○○近江大津宮にて崩し給ふと云へとも實は不レ然あからさまに御馬に召して出まして隱れ給ふ所を不レ知宇治山麓に御鞋片々落あり是を取て山陵に籠め奉る鞋石とて長さ三尺計「なる石あり「若し」富士の岩窟へ入給ふは此帝「ならんや」鴨長明か「海道記に云」昔此山の傍に採竹翁と云者あり家の後に竹林「ありて鶯のかいこを得たり」養て子とす少女となりて身の光かたはらを照し百の媚あり見る人斷レ腸聞者動レ心是よりして青竹の中より黄金出○て貧翁○○富人となり○○○榮花の家好色の道月卿光を爭ひ雲客色をかさねて艶言をつくし懇懷をぬきんす時に帝の叡に及ひ御狩遊「の由にて」鶯姫竹亭にましますに鴛鴦の契をむすひ松の齡をひき給ふ竹姫後日の契「を」申しけれは帝空く返し給ふ○○○天是を知て飛車を下し迎て天に登り給ふ鶯姫帝の御契のさすかに覺て不死藥に歌をそへてとゝめけり其歌云イ

今はとて天羽衣きる時そ　君をあはれと思ひいてぬる

帝の御歌返し

あふことの涙に浮ふ我身には　しなぬ藥もなにゝかはせん

勅使智計をめくらして富士の嶺に登て此藥を燒あけけりと仍て此山をは不死山と云けるを郡の名につきて富士と書る也「云々」或記曰此山蓬萊也昔漢朝之方士此山來求二不死藥一「云々」古老傳云秦二世皇帝皇子伴二方士一此山麓隱里來住聖德太子臣下秦河勝者彼王子十三代之後胤也云々漢土東夷傳曰東海有レ國曰二扶桑一彼國有レ山号二富士一仙所レ居○「云々」我朝大内記所レ錄日記云宣化天皇御宇自二海中一涌出此号二不盡山一「云々」「然而」

當集第三卷　山部赤人

あめつちのひらけし時よかみさひてたかくたうときするかなるふしのたかねをあまの原ふりさけみれは渡る日の影もかくろひてる月の光もみえす云

云
如ニ此歌ノなれは神代の山と見へたり梵竺一「より飛來
海中に」涌出「と云」兩説頗不審也亦かくや姫の異説
能々可レ尋レ之亦延暦年中に天神天降て造「れるを」浚
山とも新山とも「申せとも」ニ是亦不審也」當集第十四
卷に「歌云」

あまの原富士の浚山てのくれの
　時ゆつりなはあはすかもあらん

此歌亦延暦以前也然は昔より此山をは浚山と云ける
と見へたり都ノ良香ノ記ニ云頂上有ニ平地一廣一許里其
頂ノ中央窪「形」如ニ炊甑一〇〇底有ニ神池一池中有ニ大石一
石形驚奇宛如ニ蹲虎一云々伊勢物語には山のすかた
しほしりに似たり「云々」赫奕姫物語には鏡と薫とを
「此」山の嶺にうつめりと云々駿河國俗傳に云昔は此
山もゆる事甚しく火焔天にのほり黒煙日を隱し磐石
をふらし熱湯をなかす隣國鳴動して草木枯槁し東作
西收に民の愁へ有けるか清和天皇御宇貞觀年に此煙
たえてたゝすと云へり其〇〇燒石此山の四方の麓數
十里に及て充滿して今に有レ之云々
「隆祐朝臣海道記同レ之」此心を詠る

冷泉黄門

時しらぬ富士の煙も秋の夜の
　月の爲にやたゝすなりけん

然に西行上人は風になひく富士の煙と詠り家隆卿は
富士の根の煙も猶そ立のほると詠れたり昔の煙にな
すらへて絶たる「煙を」立と詠る事ためしなきにあら
さる歟例せば長柄橋をは伊勢の歌には造と詠れとも
絶たる例にひき〇隈の松も孝善任國の時剪て橋に造
レ之後長く絶たれとも有るよしに讀か如し此外たえ
たる事をありと詠る歌不レ可ニ勝計一抑此富士權現は
信濃國淺間大神と一體兩座の垂迹にておはしますと
かや兩山ともに淺間大菩薩と云也「亦」平兼盛集云富
士の池には色々の玉わくと云臨時祭しける日うたふ
歌に

君か代の數におとらん駿河なる

淺間の池の底にわく玉

此大宮御前の水をは御手洗と云也此山南閻浮提第一の靈山「也」高さ一由旬とかや須彌は十六萬由旬半は海に入て上は八萬由旬也日月行度は此半腹四○王天持雙山頂き成へし如ㇾ此數量をも此富士の一由旬を以て推量すと云々此山千里に秀たることを詠る

続後撰羇旅イ

源　昌兼

外にみていくかきぬらん東路は
さなからふしの山のふもとを

續古今集に

家　隆　卿

同秋中イ

朝日さす高根の御雲そらはれて
立も及はぬふしの河霧

東撰六帖に

讀人不知

富士の子は年にたかさやまさるらん
消ぬか上につもる白雪

當集第三卷に

赤　人　歌

富士の子に降つむ雪は六月の
望にけぬれはその夜ふりけり

世のつねの山とそみゆる富士の子の
霞にもるゝふもとはかりは

隆　辨

附鳴澤

當集第十四卷「歌云」

さぬらくは玉のをはかりてふらくは
富士の高根のなるさはのこと

此鳴澤水「の有無の事」古來の先達とかく申しあへり或云此「鳴」澤水のあるに非す彼○○權現の御誓に此山の砂盡は終日麓へ降り夜は夙夜嶺へ升り其砂の聲水の如くにて鳴る故に○鳴砂と云を鳴澤とは云也「云々」今考ㇾ之云右歌の異本には

さぬらくは玉のをはかりてふらくは
伊豆の高根の鳴澤のこと

「是」伊豆の高嶺ならん亦富士大菩薩の御誓にて砂の升降其理不ㇾ相叶ㇾ就ㇾ中俊頼「朝臣」法性寺殿御會に紅葉の題にて「よめる歌」

雲のいる富士の鳴澤風こして

清見か關に錦おりかく

此歌「によれは」鳴澤とて一名の澤ありと見へたり
亦津守景基駿河國へ下りける人に詠て送りける歌に
富士の子の雲いなりともわすられて
鳴澤水のたえねとそ思
亦後鳥羽院「の」御詠
歷立思もなとやこほるらん
富士の鳴澤おとむせふなり
此御製並に兩先達の歌○○○尤可ㇾ指南ㇾ者○
打緣○駿河國
當集第三卷
高橋連蟲麻呂
なまよみのかひの國打緣駿河の國とこち〳〵の國
のさかひにいてゝしあるふしのたかねはあまの雲
もいゆきははかりとふ鳥もとひものほらぬ
なまよみのかひの國とはなよやかにかほる香のよき
とつゝくる也打よするするかの國とは○○○波の
すなこを打よするとつゝけたり○○亦彼國には富士

と葦高との二の山あり是則金胎兩部の垂迹也此兩山
の間は昔は東海道の驛路也その間に横走の關と云あ
りけり此道は觸穢の者の通けるを明神いとひ給て南
海に浮嶋原の砂のゆられあるきけるを打寄させ給ひ
「けれは」打寄る駿河國と申とも「云へり」亦或記云昔
富士山は海中より涌出して波に隨て○○○○○もろ
もろの天女あまくたり舞遊けるを白波打寄て此國の
山となれりけれは申とかや是蓬萊「にて有と云」說に
符合する歟
當集第六卷
波關守
富士てえにゆかまし物を間守に
打ぬらされぬ波かそへすて
上古には足柄清見横走とて足柄を超へ富士の麓をと
をりて清見か關へ出る道に横走の關とて足高山の
「間に」有りけり間守とは清見か關「をは」波の關戶と
申は關守にうちぬらされぬと云歌を關の字を書損し
て間と書なしたるにや凡波の關守と云事今の世には

久岐賀崎と云（申イ）所なり昔は此道をとをりけるに鹽滿ぬ
れは往來の人立戻りて妻波男波をかそ（すイ）へて淩波（しはなみ）とて
小波のよする時とをりける故に波ノ關守とも波ノ關戸と
も申ける也依レ之後鳥羽院の御歌
清見かた關守波の秋の聲
是や都の荻の上風　「（イナシ）後京極殿
清見かた波の千里に雲消て
關守袖によする月かけ」　（イ後京極）
（月清集上）清見かた村雲はらふ夕（ろゝ月）「嵐（嵐イ）に」
關守波を出る月かけ
清見方鐘の聲たになぎさうつ　讀人不知
波の關戸は月そ明行
千載集秋下　實方
清見方關にとまらて行舟は
嵐そさそふ木の（のイ）葉なりけり
「詞花集（イナシ）
胸は富士袖は清見か關なれや　平祐擧
煙も波もたゝぬ日はなし」（イナシ）

鳥總立足柄山
「當集第三卷に」（イナシ）
鳥總（こふさ）たてあし（つい）から山にふな木きり
木に切よせつあたら舟木を
とふさたてとは八雲御抄云木の梢也と或先達云草木
のすえを切て木きりたる代に立るを云也亦仙覺筑後
入道寂意ともに○斧鉞（まさかり）（云イ）をとふさと云此を打立て木（之者イ）
を切と云々「此說もさして」（此義相傳の上はしかれども指てイ）證據ありとも不レ覺○○
歟今此歌の心を推するに木を切時てあし（木　足イ）とてきりく
つのちるか鳥の翅のとふに似たるをとふさと云木足
の輕くちるを足柄とよせたるにや亦（又イ）鳥の翅は鞦（しりがい）の
總（ふさ）の如く也鳥の飛んとては先翅をたてゝ足かろく飛
と言にやと覺ゆ「如何當集第三卷に」（奈何然而同第十七卷の歌云イ）
「旋頭歌」（イナシ）鳥總たて舟木切といふ能登の嶋山
けふみれは木たかくしけくなりにける哉（たちしけしもいくよ神ひそイ）
如此詠れ（さよめるはイ）は足かろく飛といはすとも只鳥の飛にても

ありなん或云とふさとは落花を申なりと云々古歌に
云イ
○祭主輔親
後拾戀三
我思ふ都の花の鳥總ゆへ
君も下えのしつ心なし
今案之云此歌も必落花にても非さるへし只花の枝と
云るにや朶の字をとふさと讀る上は何れの木の枝
にてもとふさと云へき歟○○源仲正の歌に
堀百卯花後頼散木集
卯花も神のひもろきとけぬとや
鳥總もたはに木綿かけてけり
此亦ちるとはみへす只枝のたはみたると見へたり然
れは御抄にとふさは木梢也と被遊たるも符合之○也
但當集「相傳之義なれは」をのまさかりを可レ申也亦
鳥總立とつゝけすして足柄山と詠る歌古來「多し當
集第十四卷に」
我背子を大和へやりて待したす
足柄山の杉の木の間か
後京極殿

新勅雜四
足柄の「山」路越行明はのに
一村かすむ浮嶋か原
「家隆卿
東路やまた明やらぬ足柄の
八重山雲を今そ分いる」
イ續古羇旅
秋まては富士の高根にみし雪を
今てそこゆる足柄の山
鎌倉山
光俊
當集第十四卷に
薪切鎌倉山のこたる木を
松となかいは○戀つゝやあらん
薪切鎌とつゝくる也こたる木とは松は葉しけり枝か
さなりてたるゝものなり是を人を待こと「は」にそへ
たり凡鎌倉とは鎌を埋める倉と云詞也其濫觴は昔大
織冠鎌足未鎌子と申し奉し頃宿願○○おはしまし
けるに依て鹿嶋「明神へ」參詣之時此由井の郷に宿り給
ひける夜感ニ靈夢ニて年來所持し給ける鎌を今の大藏
松岡に埋み給ひけるより鎌倉の郡と云 々 因レ茲思

之は此歌に鎌倉山の松とつゝくる言鎌を埋める所は松岡也と詠るにあらすや凡そ鎌と云義釋「亦」松と云字釋是皆異朝本朝「古今」其理多し先つ鎌倉とは鎌は金を兼ぬると書○○也金は司兵甲武機倉は人君と書けり然は此鎌倉は含自然之理武備將兵の居なる者也就中○見地理全書此所の風水山嶺の様を案するに今の鶴岡の天倉と云山也西に高き山「あり」武曲星地に相當「なりとて」その名を号武山亦同有大なる山號武庫龜谷山也是則鎌倉の中央第一勝地也と見へたりなりいま此等の山悉「く倉」庫の名有之「なり」其中山を當玄武貴人金爐等を當朱雀天倉を左にし武庫を右にして武將於成居は諸の古慶可有之歟故に全書曰天倉武庫接龍行前有金爐玉案若迁此地王侯之宅白屋爲官名目成行軍出陣來唱喏前有排衛及貴人十里方圓皆變改受職金牌玉榜名「云々」此外大藏亦倉也祟山亦武也然は鎌の字は兼金也金は西也倉の字は人君也因て案之

兼西人君の「居」穴たるへき理明白なる歟故に勘大織冠之古此所に鎌を埋み給ひて後天智天皇八年「にや」改中臣始て賜藤原姓任内大臣給ひしより以降代々皇帝の執柄として末代に至るまで萬國を治め給ふ依て彼の玄孫染屋太郎大夫時忠東大寺別當僧正之父也自文武天皇御宇至聖武天皇神龜年中鎌倉に居○して東八ヶ國の總追補使にて鎮東夷守國家奉れり其後平將軍貞盛孫上總介直方鎌倉を屋敷とす爰に鎮守府將軍兼伊豫守源賴義いまた相模守にて下向「の時」直方の聟と成給ひて八幡太郎義家鎮東將軍出生し給ひしかば鎌倉を讓り奉りしより以來源家相傳の地として去る治承五年右幕下征夷將軍鶴岡に奉崇八幡宮給案如此之義理先段に述るが如く王城は西也鎌倉は東也依含此理兼金人君と訓釋する者歟然は鎌倉の君將は都鄙の政をたすけ專武勇して可奉守護帝都之道也譬へは如謂寰中活陽也は天子の勅塞万國也外は將軍の令京鎌倉是也故に天子は禀天命以正王制將軍は禀玉命以守將道也然者此代々の將軍皆以

鎌倉ニ爲レ基也此字訓若あたるならば末代も亦可然抑鶴岡松岡に八幡大菩薩を奉ニ勸請ニ給ふ事○○不レ可ニ思議ニ之理也其故は彼の大菩薩は應神天皇の垂迹として神宮皇后三韓征伐之時胎内にして令レ得ニ將軍の位ニ給ふ誕生の砌には八流の幡天より降下しより專ニ鎮護國家ニにして武將擁護の神也本地は是彌陀○○「也」是亦合ニ兼レ西之理ニ者歟次に松岡に鎌を埋み給ふ事松は十八公と書り是木公也司レ東の義也彼是兼レ金人君に符合する者歟鎌倉山「に」松を詠る事上古の作者末代を鑒るにあらずや鎌倉山と」詠る歌○○○○○○多からず當集第十四卷に曰

眞悲さねにかわゆく鎌倉の
水無能瀨河に鹽みつらんか

鎌倉の御越か崎の岩くえの
君かくゆへき心はもたし

「古歌に」

鎌倉の御輿か嶽に雪消て
水無能瀨川にみつまさるなり

續古賀

宮柱太敷立て萬代に
今そさかえん鎌倉の里　鎌倉右大臣

堀川「院」後「度」百首に　常陸

我ひとり鎌倉山を越行は
星月夜こそうれしかりけれ

筑波山

筑波山と云名は天照大神此山の頂にて筑紫琴をひき給ふに至ニ水波曲ニ鹿嶋の浦の波乘レ雲○飛登て此山の巓につきたりけり仍て着波山と云然るを因ニ琴名ニ筑波山と云歟波の上りける浦をは波上浦と云とかや○○筑波○小筑波とて二峯あり狭衣のをつくは山と詠るは「此ノ小筑波なり」ニ嶺に女神男神の兩座あり疇昔耀歌祭とて諸國の男女騎歩ともに登りあつまりて自他妻妾をいはすたがひに𡢳遊けりかゝいと云言此也依て萬葉集第九卷に歌云

鷲の住む筑波の山にいさなひてをとめをとこのゆきつとひかゝふかゝひに人つまにわれもかよはむ我つまに人もことゝへこともとかむな云々

今の世には此祭り絶たり小筑波山と詠る歌當集第十四卷に

さ衣のをつくはころの。山のさきわすらへはこそなをかけなはめ

此山をは君の惠のしけきにたとへたり古今。眞名序曰仁流秋津洲之外惠茂筑波山之陰「云々」「同」歌に

筑波子のこのもかのもに陰はあれと
君か御かけにますかけはなし

「此歌の心を詠るにや」安嘉門院右衛門佐

筑波山しけき惠にもらさすは
たつ小玉木も花やさかまし

家隆卿

續古秋上

筑波子の山鳥の尾のます鏡
かけて出たる秋の夜の月

衣手常陸「國」

衣手のひたちと云に兩義あり日本紀曰倭武天皇巡狩東夷之國幸過新治之縣所遣國造毗那良珠命新令堀井流泉淨澄尤有好愛時停乘輿翫水洗手御衣袖垂泉而沾漬云云。「此」袖の義を以て爲此國之名。。。。。。。。。故にひたちと云と聞へたり依之當集第九卷歌に

衣手のひたちの國のになみのつくはの山をみまくほりあせかきなけきねとりするうそふきのほり云云

此歌は先段の嬥歌祭の歌也亦常陸國風土記云往來道路不隔江海之津濟「郡」郷堺相續山河之峯谷取近通之義以名稱「云云」此國中の道路江海陸地一つゝき「なる故に」直路と云なり

霰降鹿嶋

當集第廿卷歌に

あられふりかしまの神を祈つゝ
すめら三草にわれはきにしを

「あられふり鹿嶋とは」霰のふるはかしましきと云諷詞なりすめら御草とは野民也民の帝德に隨ひ奉る事

春の草の風に靡か如しと云故に民草と云○○也抑我朝諸神の中に上み天皇より下も萬姓に至るまで此鹿嶋の神を崇敬し奉る事有ニ由來ー者歟彼國摩大鹿嶋と云は天御中主尊の孫天兒屋根命より八代の神也天御中主尊「は」天上にまし〳〵盡て未ニ來際ー○○○一天下を照臨し給ひ天兒屋根命は瓊々杵尊の供奉の神として高天原より天降給ひ日向國高千穗峯より丹波國餘謝郡魚井原に座して雄略天皇御宇天照太神大佐々命に勅りし給ひて今の伊勢○外宮へ遷幸なし奉り給ふ彼の皇孫尊らは天照豐受太神宮と申し奉り天兒屋根命をは社稷の神とし相殿に座し○○○宗廟の神の御後見にて朝家を守護し給ふ就レ中稱德天皇御宇神護景雲比かとよ南都春日野に遷幸し給ひ藤氏の祖神として國家を治め給ふ故に大織冠淡海公より天下補佐の臣相續て末代までも繁榮し諸家に超過し給ふ者也凡そ我朝は藤根國と申とかや是則鹿嶋明神金輪際より生出たる御座石を杜として藤の根にて日本國をつなき給ふと申故也○四所明神の内武甕槌神と申は豐葦原の主未レ定時高皇產靈尊○○○○○○○○○○の使として出雲國に到り大己貴命に此「國」をこひとり國征する矛を受取て天上に登り天照太神に奉り給ふ則皇孫尊を大倭國主として下し奉り給ひしに五神をそへ奉り給ふ其專一の神として下し給ふ者哉其後神武天皇中津國を征し給し時天皇夢の中に武甕雷神の國征し給し部靈と云劔を得給ひて遂に○○○○○○○○長髓彥を征し給き是亦武甕槌の威神力にあらすや是以或は四夷の亂を靜め或は異朝敵を亡し給ふも專ら此神を先として諸神も進發し給ふとそ申す然は神功皇后三韓を責させ給ひし時鹿嶋香取の兩社に○○御札觸あり其銘曰東太神ノ表○三月初巳日香取明神門出○○○午日着ニ鹿嶋ニ兩神共○○○起「矣」今の世に旅「立」の首途を鹿嶋立と云は此緣也諸神も鹿嶋明神の起給ふ事を聞給て鹿嶋起と宜し故也○凡そ此垂迹の事秘說多し依レ不ニ習傳ー不レ與レ記レ之

夏麻引海上

當集第十四卷歌に

夏麻引海上潟の奥津洲に

　舟はとゝめむさよふけにけり

麻のをひたる所をはうと云へは夏そひくうとつゝく

る也麻のうは皮をとりのくるを引と云なり櫻あさの

をふの下草と詠るも「をう」とつゝくる○也亦ひきた

る麻を白く掛をきたるは老婆の髪に似たるをも云と

也亦當集十三卷歌に夏そ引みことをつみてと詠るは

只麻のみとつゝくる也此歌を取て「詠る」

　　　　　　　　　　　　　　　　知　　家

船とむる海上潟の奥津洲に

　夜やふけぬらんたつそなくなる

　　　　　　　　　　　　　　　　俊　頼「朝　臣」

「海上山とも詠る」

堀後百　夏麻引海上潟の椎柴に

散木夫木イ

　かし鳥なきつゆふあさりして

　　佐野船橋

此橋の在所先達の歌枕に處々にかはれり然るに當集

第十四卷に

かみつけのさのゝ船橋とりはなし

　おやはさくれとわはさかるかえ

とりはなしとは此橋を「は」河には渡さゝるにや路の

兩方水田にて板を打渡し〳〵するとかや然れは水の

なき時はとりはな「つと申也亦」同卷に

くるしくも降くる雨かみわのさき

　さのゝ渡に家もあらなくに

一本に此歌は近江國の佐野にや又大和歟此歌をとりて雨を雪にとり

なしてよみ玉へる

此歌を取て詠る　　　　　　　京　極　黄　門

新古冬イ　駒とめて袖うちはらふ影もなし

　さのゝ渡の雪の夕暮

　　　　　　　　　　　　　　家　　隆　　卿

壬生二品集中イ　あまの原月にこき出し心地して

　しはしやすらふさのゝ船橋

　　　　　　　　　　　　　　冷　泉　黄　門

行末の河せもみえす茂あひて

　草に渡せる佐野の船橋

　　　　　　　　　　　　　　津　守　國　助

新後撰羇旅　月に行佐野の渡の秋の夜は

　宿ありとてもとまりやはする

詞林采葉抄第六

千磐破

當集第三巻歌曰

千磐破神の社のなかりせは
　　春日の野邊に粟まかましを

ちはやふると云事先達の異儀多し或は千の磐を破ると云あるひは千磐屋○經ると云「亦」○○○○○○○○茅の葉にて葺たる屋に「社のなかりし昔は」神のすみたまひけるをもうすともいふ其外にも傳あるにや然れとも當集庭訓「抄」には任二紀文一令レ加二斫簡一○也「ちはやふるは」○○路早降と云言也日本紀第一曰于レ時高皇産靈尊以二眞床追衾一覆二於皇孫天津彦々火瓊々杵尊一使レ降レ之皇孫乃離二天磐座一「磐座」此云二○○以簸矩羅一且排二分天八重雲一稜威之道別道別而天二降於日向襲之高千穗峯一「云云」二「是」皇孫尊路早降と云也ふるはくたる也皇孫は神の御中の宗廟神にておはしませは千はやふると云詞を諸神に亘て申也○○歟不可勝計伊勢物語に

續千戀三讀人不知イ
千磐破神のいかきも越ぬへし
　　大宮人のみまくほしさに

「古今集に
　　　　　　　　　　　　僧正遍昭
千磐破神や切けんつくからに
　　千年の坂も越ぬへらなり」

千載賀
　　　　　　　　　　　　京極殿
千磐破齋宮のおりす川
　　松と共にそ影はすむへき

　　　　　　　　　　　　中院亞相
明るよりゆふかくるまて千磐破
　　神の宮人世を祈るらん

「此外千磐破と云歌不レ遑二枚擧一」

神風「附常世波」

神風伊勢「言ハ」者先達打聞髓腦等被二勘置一之上者未學淺智之魯愚雖レ難二探釋一拾二日本紀萬葉之詞一粗載レ之者也

當集第四卷非槻越往二伊勢國一留レ妻作歌云

神風の伊勢のはま荻折ふせて
　旅ねやすらんあらきはまへに

「神風と云詞」日本紀第一「考るに」高皇産靈尊皇孫尊之御祖神也經津主神香取明神也武甕槌神鹿島明神也二神を使として出雲國に天降ましまし對二大己貴神一「曰」三輪明神也皇孫尊を此國の君とし給はんと○○○大己貴命御子事代主神に問給ひ早く奉レ避給へと其弟健御名方神諏訪明神也○は武く荒ふる神にていなひ○給ふ然るに父尊國平くるの廣矛を以て二神に授け給ひて曰天孫此矛を以て國を平け給「は丶必平け給はんとて」百不レ足「之」八十隈に隱れ給ふ御子達すへて一百八十神をはしましは處々に隱れ給ふ○健御名方神は伊勢國より神風と共に信濃國諏訪郡へ遷り給ふ然れは神風は伊勢諏訪兩所に在座す然は神風と云事諏訪にも可亘也亦活目入彦五十狹茅天皇垂仁天皇也廿五年倭姫命を御杖として天照太神の鎭り給ふへき所を求給ひて伊勢國度過宮に遷り給ふ時に太神倭姫命にか丶りて曰此神風伊勢國は常世の○敷波寄る國也宇摩詞國也此國に居らんと思也と仍て五十鈴宮に大宮柱太敷立て鎭り給ふ十一ノ皇子の內に第十皇子は風宮也風伯(泊イ)神を云也然れは神風と云事神代よりの言也「とてよの波と云事をよませ玉ひける」

「附常世波」

續古神祇皇后宮大夫師繼イ
神風や五十鈴川原の礒の宮の
　常世の波のおとそのとけき

「或云常世波と云事」○○天照太神伊勢國に鎭り給はんとし給ふに天上より天降り給ひし十八神の內伊勢津姫と云神○○○○○○○○○○太神に國を「讓り給ふ事を」おしみ給「ふ故に」所レ退との神勅ありしかは波風をたて丶可去とて伊勢の海波あれ霧き暴風吹立天地動搖して黒雲に乘り信濃國諏訪郡へ飛去給ふと云云此ノ說は風宮と異同可レ詳又仲哀天皇新羅國をしたかへ給とて天の告ありといへとも神の言をそしり玉て用玉はす難の毒矢にあたりて崩玉ことを神功皇后歎玉て長門國豐浦宮に齋の宮を造玉みつから神

主となり玉天祈て曰先皇敎事し玉し神は何の大神におはするぞ御名をは誰と申ぞと七日七夜祈申玉しかは答曰神風伊勢國百傳度會の縣の五十鈴宮に所居の神也名をは撞賢木嚴御魂天疎向津媛命也云々日本紀に見たり猶神風と詠る歌○○多し

承暦歌合に　帥大納言經信「歌曰」

君か代はつきしとぞをもふ神風や
みもすそ川のすまむかきりは

後鳥羽院「御製」

神風やとよ○みてくらになひくして
かけて○たのむ「と」いふ「もかしてし」

俊惠「法師」

神風や玉くしの葉をとりかさし
内外の宮に君をてそいのれ

「後京極殿」

神風や玉籤の葉の露霜に
天照光いく世經ぬらん」

西行「上人」

神風に心やすくそまかせつる
櫻の宮の花のさかりは

神風と詠る歌不レ遑ニ羅縷ー

神無月

當集第八卷に　大伴宿禰池主「歌曰」

神無月時雨にあへる紅葉○は
ふかは散なん風のまに／＼

抑一天下の神無月を○出雲國○○には神在月とも○○○○○「云也」我朝の諸神集り給ふ故也其神在浦に神來臨の時は少童の「戯に」作れる如くなる篠舟波の上に浮ふ事不レ可レ及ニ算數ー諸神は彼浦の神在の社に集り給ひて大社へは參り給はすと云彼の神在社は不老山と云所に立給ふ神號をは佐太「大」明神と云也是則傳奏の神にて座すとかや大社は杵築明神と云別當をは國造と申「す云々或人」問曰此大社は素盞烏尊にて座「とかや」「然るに」日本國の神々御祖神の如く尊崇し奉り參集し給ふ事誠以不審也○○○伊弉諾尊伊弉冊尊の二神こそ天神地祇の御祖にて在座す亦は天

照太神をも宗廟の神にて在座せは尤尊敬あるへきに第四の御子にて「在」座すをは何故に祖神の如く成す事や如何答曰是深秘なれは不ㇾ載○○亦簸河上の手摩乳脚摩乳の神の女稲田姫「の宮」をさくさめの社と申て所にいはひ奉る社「とてはなけれとも」八重垣とて八所に「離を引有ㇾ之」さくさめの明神と云也大社の御歌とて

日も暮ぬさくさめの刀自はや出よ
　心のやみにわれまよはすな

さくさめの刀自とは「稲田姫を云とかや」子細可尋之

○○後撰集○○○○に

後撰雑四女のはゝイ
今てむといひしはかりを命にて
　待にけぬへきさくさめの刀自

此「歌」は外姑の歌と見へたり○○○○○○○○○○

○○凡刀自ㇾと云事娘子の惣名敷ㇾとみゆ源の順か和名「抄ニ」云劉向列女傳曰古語謂ニ老母ㇾ俗名ニ老女ㇾ謂ニ刀自ㇾ○○云々但○○○○行成卿の書れたる後撰集には此歌の終の○字を丁年と書れたり丁年とは若く盛なる心「と云へり」或廿とも「云」或卅とも云然れとも丁年は「丁の歳也」或は「強圉」或は「赤奮若○○或は作噩「也と」不ニ准一ニ亦江帥はさくさめの刀自は姑の名也と○○亦當集には母刀自とも詠り○○○○○○○○亦高貴の夫人なとの我身を卑下して刀自と被ㇾ仰たり天武天皇の后藤原夫人字曰ニ大原「大」刀自ㇾ亦刀自賣と云あり此集の作者物部刀自賣掠椅部刀自賣と云々神無月を詠る歌

詞花集　　赤染衛門
雑上イ
神無月在明の空の時雨るを
　また我ならん人や見るらん

千載集冬　　道因
嵐吹ひらの高根の子渡しに
　あはれ時雨る神無月哉

新古今集「冬」　　慶美

時しもあれ冬は葉守の神無月
　まばらになりぬ森のかしは木
　　　　　　「順徳院御製

神無月嵐にまじる村雨の
　色こきたれて散る木の葉かな」

大神

當集第二卷に歌云」
我岡の大神にいひてふらしつる
　雪のくだけしそこにちりけり
此歌は天武天皇賜藤原夫人御製也
我里に大雪ふれり大原の
　ふりにし里にふらまくはのち
此返歌を奉り給ふ也〇神とは蛇龍也凡そ龍に四種あり一には鳥龍二には馬龍三には蛇龍四には魚龍也此蛇龍もろ〳〵の神とあらはれて人を利し人をなやますと云へり豐後國風土記曰球珠郡球覃鄕此村有泉景行天皇行幸之時奉膳之人擬御飲令汲泉水即有蛇龗

美[実イ]〇常陸國風土記曰新治郡駅家名曰大神所以然稱者大蛇多在因名驛家云々日本紀曰闇龗此云久良於箇美山神也

木綿疊

當集第六卷に
ゆふだゝみ手向の山をけふ越て
　何の野邊に庵せむてら
木綿たゝみとは幣をはさみたる串の頭にはたゝみたる紙を挾む其下より幡の手の如くに長くたれたるは手也されは木綿疊手とつゞくる也
第十二卷に
木綿疊田上山のさなかつら
　ありさりてしもあらしめすとも
是同言也衣手の田上と云へるは重言也今の歌の詞書に云夏四月大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時便超相坂山望見近江海而晩頭還來作歌云々然れは相坂山を手向山と云はん事勿論也
　よそにのみ君をあひみてゆふたゝみ

手向の山をわすかてえなん

「此」戀の歌の心も手向山は相坂山と聞へたり猶亦當集第十三卷に

物の武のうち川わたりをとめらにあふさか山に手向草○とりをきつゝわきもこにあふみの海の云々

源　仲　正

鳥居たつ相坂山のさかひなる

手向の神よ我ないさめそ

古今集假名序云相坂山に手向をいのりと云々「是」相坂を手向山と云る○證如斯

紲呂寸

ひもろき歌によりて可「有」心得歟其説多し當集第十一卷に

神なひにひもろきたてゝいむといへは

人の心は守あへぬかも

此ひもろきは神籬を云と見へたり日本紀第一卷曰天照太神勅曰吾則起樹天津神籬○○古語比茂呂岐及天津磐境當爲吾孫奉齋「云々」汝天兒屋根命太玉命二神宜持天津神籬「降」於葦原中津國亦爲吾孫奉齋「云々」亦神にたむけ奉る贄なとをも申すなり日本紀竟宴「和」歌に神のひもろきそなへつる哉と詠り疑開抄に時文歌に

ひもろきは神の心にうけつらん

ひらの高根にゆふかつらせり

此歌を源順つたへ聞てなにと詠れたるにやとおはめきけれは時文かへり聞て順の主はえしらしゝと○○點頭けりと語り傳たり亦江帥卿歌に

見渡せは神の紲呂寸とけにけり

ひらのたかねにゆふかつらせり

「此」時文匡房の兩首歌等同也といへとも其心難得也亦先祖の廟を祭る供具をも「云といへり」亦帝に奉る供御なとをも申にや我朝大内の大學寮の二季の上丁下丁の釋奠の翌日に六位眞會を持參して奏云「文屋の司の」一獻る昨日の釋奠の胙云々亦文選西都賦曰論功賜胙「云々」是則王侯の外與庶人をも胙と云と聞へたり亦史記晉世家「を案るに」昔晉の獻公と云

帝の后の名をは齊羌と云死けるに其後驪戎か女に驪姫と云ふ后とす其腹の子をは奚齊掉子と云本の后の腹の子をは申生重耳夷吾と云父獻公奚齊を愛して太子に立んとす后云我子未少し「て」申生を太子に立よといみしく云たりと思て申生を立けり其後年月を經て后云太子の母こそ夢に見つれ胙をそなへ「よ其を」は我もとへもてきてたむけよと云太子いみしく調て繼母の后のもとへ遣たり父獻公狩に出て歸る一夕に「はやき」靑附子を其胙にぬりをき太子のもとより胙をてせたりと云て外よりもて來る物は初をゝ物に祭てこそと云けれは土に祭りたれは土俄にをひかあり たり毒の入たるよと父を殺して位に付かんとするよと云けれは父犬を餵てくはす。に立所に死たり父兵を遣て申生を殺しけりと云々然れは父母に物を奉るをも「胙と云なり古歌に」

一卯花も神の胙とけぬとや
　とふさもたはにゆふかけてけり」

八隅知之

「當集第一卷　天皇遊二獵内野一之時中皇命使下二間人連老一獻上歌一
八隅知之我大きみのあしたにはとりなて給ひゆふへにはいよせたてゝしみとらしのかつさの弓の中はすの云々

八隅知之」此訓やすみしるやすみしりしやすみしゝ三訓也やすみしると云へは之の字不レ被レ和也しりしといへは先帝を云詞なるへし然れはやすみしゝと可レ訓歟八方上下八嶋國をしろしめすと云詞なり八嶋國は日本紀第一「曰」伊弉諾尊伊弉冊尊立二天浮橋之上一共計曰　底下二豈無レ國歟廼チ以二天之瓊矛一指下而探レ之是獲二滄溟一其矛鋒滴瀝之潮凝成二一島一名レ之曰二磤馭慮島一二神於レ是降二居彼ノ島一因欲[illegible]共爲二夫婦一產下生洲國上便以二磤馭慮島一爲二國中之柱一「云々」是によつて始起二大八洲ノ國之號一なり嶋と洲と同し亦隅は乾坤なり乾坤は亦天地なり其故は天地開闢より以來案二大易大極之理一以二乾[illegible]一爲二方角

之父一以二坤卦一爲レ母是則非下以二震離兌坎等一爲中基上唯方は以レ隅爲二根本一「也」數は以レ八爲レ極八々六十四卦等以レ之可レ准知一也凡方角は以レ四爲レ本然に四維を謂二八隅一ことは四方は皆十二支を○○○○一支宛「司る」者也至二四維一は一隅に二支を司とるによつて四維は以二八支一爲二體本一所謂戌亥丑寅辰巳未申是也故に易道に「以二」乾坤一爲二父母一出二生少男少女一自餘の方角を生と云々加レ之合二方角一亦八々數也是則八隅の故也是以天下は以二乾坤一立天子は八隅を知食て國家を持しめ給ふ者哉亦隅は陬也嶋也釋氏云陬は隅也と麻果云聚レ居爲レ陬云々常陸國風土記曰卷向日代宮大八洲照臨天皇云々爰知乾坤隅陬嶋洲皆一致也「云々」然れは八隅知之とは天地乾坤向平て知食と云詞也因て○日本紀「にと考るに」大鷦鷯天皇五十年春三月壬辰朔丙申河内國人奏言於二茨田堤一鴈産之即日遣レ使令レ視曰既實也天皇於レ是歌以問二武內宿禰一曰阿耆豆辭莽椰麻等能區珥々箇利古武等儺波企箇輸椰

○武內宿禰答○歌曰夜輸游始之和我於朋枳瀰波宇倍儺宇倍儺和例烏斗波輸儺阿企豆辭摩椰莽等能倶珥珥箇利古武等和例破枳箇儒云々是やすみしゝと「云」詞明鏡也此外日本紀に○野須彌斯志或は安見師志なとと處々に多し

夷都

當集第十八卷「歌云」

あまさかるひなの都夜故にあめ人のかくてひすらはいけるしるしあり

夷都とは諸國の國府也是田舍の都にて國司の在所なる故に云也君とは王者をこそ申「せ」とも分々に隨て五位に至までもうち君と云か如く也亦都夜故と書てみやこと讀事二字あまるに似たれとも傍例もあるにや後ノ岡本ノ朝左大臣大紫蘇我ノ連を或は蘇我連羅志と書り亦當集十六卷に能登國の歌につゝきやふりと云句を都追伎破夫利と書り破の一字にて可レ足を夫利の二字をそへたり可二准知一なりあめ人とは王城の

人を微ふ言にて天人になつらへて云也。歌の心は都の人の戀しといへはいけるかひありと詠るなるへし

久堅天

此詞は久く堅き也世界建立の時渾沌二義に剖れて澄るはのほりて天となり濁るは降りて地となる「地は」となる。天は則住劫廿番の時彌勒慈尊の出世し給ふとも破へからす鑽「は」彌堅く仰けは彌高しと云か如し久方と詠る歌多かる中に古今集に

古今物名景のりのおほきみ　　景式王「のよみ玉へる歌」

佐夜ふけて半たけ行久方の
　　月ふき返せ秋の山風

續古今集

續後撰神祇後鳥羽院　　後鳥羽院「よませおはしましける御歌」

久堅の天の露しもいく世へぬ
　　みもすそ川の千本のかたそき

同戀二　　京極黄門

久堅の天照神の木綿かつら
　　かけて何世を戀渡るらん

久堅の天とつゝかぬ歌多し

拾遺愚草下　　京極黄門

秋といへは月の直路を吹風の
　　雲をはすての久方の山

「同」

久堅の嵐も雲もすみはてゝ
　　空の外なる秋の夜の月

讀古秋下　　同

久堅の桂の里の佐夜衣
　　おりはへ月の有にうつなり

新勅雜四　　後京極殿

久堅の雲井にみえし射駒山
　　春は霞のふもとなりけり

當集第十三卷には久方の都をとをみ草枕ともよめり此は久く遠き方とよめり聊歌の心ことなるへし

豐旗雲

當集第一卷に

わたつみの豐旗雲に入日ねし

こよひの月よすみあかくこそ

歌注曰豊旗雲は古語ニ云海の雲也夕日のほとりに赤き雲の旗の手の如なるか漫々と晴たる海上に浮へる也六是則月光清かるへき故也ねしと云るは寝る義なり。（臣註文選曰イ）○○○○寝るは息なり寝所休所と同事也歌の心は日も天の行度をはる〳〵と廻て入日になりぬれは閑に息給ふと云「言」也玉葉集に此歌を入日さしと入られたり旗と云言に因て尤縁ある。也本集の言をすこし引かへて代々の撰集に入らるゝ事是先規也。わたつみ○○○　わたつうみ同詞也和は廻れる義須彌ノ四域をめくる太はたゝへたる言也津は休字宇は多の義。美は水也海神海童海底なと書てわたつみと讀り龍宮は海の底なる故なり喜撰式云海底をわたつみと云也云々「亦當集」第三卷に

わたつみの手にまかしたる玉たすき

かけてしのひつやまとしまねを

と讀る手とつゝきたるは綿つむ手とつゝくるにや海童の手にまきたる玉とつゝくるにや可レ任ニ心緣一なり

古今集に（古今雜上讀人不知イ）

海神のかさしにさせる白妙の

波もてゆへるあはちしまやま

「新撰六帖に」（新勅撰イ）

海童の豊旗雲になる秋の

をとすきやらぬゆう立の空（信實イ）

日經緯

當集第一卷　持統天皇　藤原宮ノ御井歌（在大和國高市郡）

日の本の青香具山は日の經の大御門にかすか山路しみさひたてり畝火のこの水山は日の緯の大御門に水山と山さひいます耳高の青菅山は背友の大御門によろしなへかみさひたてり名たへなる吉野の山は影友の大御門に高しるやあめの御影あましるや日の御影の水こそはときはにあらめ御井のきよ

水

右藤原宮に東西南北の大御門を立られたり初の二は日の經緯によりて方角をあらはせり後の二つは山の陰陽を定むと見へたり因レ茲日本紀第十一ニ曰以ニ東

西爲日縦南北爲日横山陽曰影面山陰曰背面是以百姓安居天下無事云々今是を考るに此日の經緯は異朝の依水隨山陰氣陽氣ありと云ると同之也其地形不准一凡山陽水陰の事難心得者歟水の陰は山の陽也山の陽は亦水の陰也坎離可隨之加之就方角山川時陰陽之義在之故に陰陽論斷巻の歌に陽山曰乾甲坤乙屬何方坎癸申辰樣裝更與離壬寅午戊和山和水一時陽也同巻の歌に陰山曰艮丙巽辛何處尋兌丁己丑盡同體なり更與震庚亥卯未和山和水一時陰也云々是大國の詞也互細路之倩案當集歌心日の經緯は水陰山陽をよめるなるへし後人能不可得其心者歟○任本書○記之

月桂

當集第四巻　湯原王贈娘子歌云

めには見て手にはとられぬ月の内の
桂のことき妹をいかにせん

月内楓事彙明苑曰月内桂長一百五十丈月輪之内有之下有河此木秋花開云々安天論曰月中仙人桂樹○○初生仙人足看後成桂樹下有河河上有桂樹高五百丈桂下有人斫樹號呉剛父云々淮南子曰羿者請不死藥於西王母羿妻恒娥○○○○竊之服忽得仙入月宮成蟾蜍棲桂樹云々太平廣記曰唐玄宗皇帝開元六年八月十五夜羅公遠侍禁中翫月于時羅公遠桂枝投天化作銀橋玄宗踏此橋登月宮恒娥看霓裳羽衣曲舞寒氣甚白露霑袖故則歸下界○彼舞楊貴妃傳之云々此樹春花開秋實とも云亦秋花發く故に月光彌映徹とも云

一本頭註書入云初學記巻一引虞喜安天論云俗傳月中仙人桂樹今視其初生見仙人之足漸已成形桂樹後生云々

古今集に

古今物名源ほさこすイ
秋くれと月の桂のみやはなる
光を花とちらすはかりそ

鶴内大臣殿に

春の夜の驪下の月の桂方
山まてつゝく海の中道

一本崩イのイ「聖○」の御母○よませ玉けるイ
久堅の月の桂も折はかり　聖御母
家の風をもふかせてしかな　京極黄門
拾遺愚草下イ
久堅の月の桂のうす紅葉　下拾
宿かる袖そ色にいて行
道もかな行て拂はん久堅の　西行上人
月の桂にかゝるしらくも　「中院亞相」イナシ
かすむ夜の月の桂も木間より
光を花とうつろひにけり」
鴨長明秀逸と申しける歌
よひのまの月の桂のうす紅葉
あるとしもなき初秋の空
七夕姫
當集第十卷七夕歌九十八首之内
はたものゝふみきもていて天川
うち橋渡す君かこんため

七夕とは機を織名也たなとは空の言也たなくもると云も天のくもる也家○のたなと云もそらにつる故也たな橋と云も南岸の桁ノ上に板打渡すを云也然はたなはたとはそらのはたと云こと也或云七夕つめとは七夕嬬と云言也つまとは夫をも申す詞なれは彥星也云々此義先達の言なれとも不可然歟七夕つめとは姬と云詞也○○○當集第八卷山上臣憶良「歌曰」
ひこ星と七夕つめとあめつちのわかれし時ゆいなうし「ろ」河にむきたち思そらやすからなくになけく空やすからなくに已下略之
同第十卷に
ひこ星と七夕つめとこよひあはん
天川戸に波たつなゆめ
○古語拾遺曰于レ時天照太神赫怒入二于天石窟一閉二磐戶一而幽居焉爾乃六合常闇晝夜不レ分群神愁迷手足罔レ措「凡ッ厥ノ庶事燎レ燭而辨」高皇產靈神會二八十萬神於天八湍河原一議二奉謝之方一「云々令三諸神」鑄二日像之鏡二「令レ爲二」靑和幣二「令レ作二」白和幣笠二「亦○○

按錚恐鈴誤訓さけき亦さなき訛
刀斧鉾等雜物又イ

○○○○○○令天羽槌雄神織文布令天棚機姫神織神衣所謂和衣云々七夕に天上にして日神の御衣を織給ふと見へたり依て當集第十卷「七夕歌」九十八首之內

七夕の五百機立て織る布の
　　秋さり衣たれかとりみん

七夕つめは七夕姬「を云」證明白也寧彥星機らるへきやイ哉牽牛織女の女神男神の事古き物語にありといへとも作者未勘之故不載之○金谷園記曰漢武帝張騫使令極銀河源騫到牽牛國孟津時織女河邊洗身問曰何故至此乎騫曰依漢帝勅欲令極銀河源織女云不可極速歸親漢帝與一榛一恠石騫還下界獻帝東方朔云此是織女支機石也○「經三年歸云々」漢帝妃宮以此支機石始錦織已上注此說可詳乞巧奠之事風土記曰七月七日牽牛織女交會以此日○夜半時於庭中欄格席藉白第安置酒脯及糖粽蕤草祭之所願即從影而得云々長恨歌曰秋七月七日牽牛織女相見夕秦人風俗是夜張錦繡陳飲食樹瓜華焚香于庭○爲乞巧云々初學記曰庭施几筵設酒藥散香粉河鼓「彥星也」織女二星神當會手洗入水移影守夜懷私願天漢中奕々正白氣五色也以此爲徵見物拜之乞富乞壽乞子唯乞一無不得兼求「云々」荊楚記曰此祭時陳瓜菓於庭中乞巧時有蜘子網於瓜上以爲得云々古今集銀河橋を詠る○

古今秋上讀人不知イ
天川紅葉を橋に渡せはや
　　七夕つめの秋をしもまつ

　　　　　　　　　　　　　　　　俊惠

鵲の橋の渡に七夕は
　　夜もふけぬとやゆふけとふらん

　　　　　　　　　　　　　　　　中務卿親王

天川月の御舟のゝほり瀨に
　　みかく光やわたす玉はし

　　　　　　　　　　　　　　　　元輔

拾遺雜秋イ
天川扇の風に霧はれて（銀河イ）
空すみ渡るかさゝきのはし　五條三品

舟をよめる哥、新古秋上イ
漢川とわたる舟の梶の葉に（七夕のイ）
何秋かきつ露の玉つさ（イくイ）（札イ）　隆季

千載集秋上イ
七夕の天つ領巾吹秋風に（ひれ）
八十の船津を御船出らん（しイ）　家隆

秋を待雲のはたての天の川
今日や紅葉の御舟よすらん　後鳥羽院「御歌」（イ）

續拾秋上イ
彥星のかさしの玉や天川
水陰草の露にまかはん　京極黄門

七夕の手玉もゆらに織機の
なかき契はいつか絕せん（種みはイ）（イ）　「爲時

彥星のつまこひ衣今夜夕に
袖の露はせ秋の初風」　家隆

イナシ
「乞巧奠の心を詠る」
壬生二品集上イ
露しけき庭の灯かけ消て（燈イ數イ）（ぬイ）
ふかき集
夜やふけぬらん星合の空　順

拾遺雜秋イ
七夕は空に知るらんさゝかにの
糸かくはかりまつるこゝろを　光俊

皇の南のそのに御出せし（らイ）
その世の秋は今夜なりけり　讀人不知

玉葉秋上入道前太政大臣イ
七夕にひかで手向る琴の音を
雲井にかはす庭の松風（庭の面に玉）　家隆

天川秋の一夜の契たに（変イ）
引野の鹿の子をや鳴らん

天在一棚橋（イ）

當集第十一卷「歌曰」
「旋頭歌」イナシ
天にある一つ棚橋いかて行らんわか草のつまかり（あイ）

といふ足をうつくし
一つ棚橋「の事」或先達は天にある日とつゝけたりと云或先達は山あひ「なと」にたかく渡「した」る棚橋也と云へり今考レ之に
當集第十七夕哥云
第十卷
天川棚橋渡す七夕の
いわたらさむにたなはしわたす
一つたなはしと云「へ」は天川の橋也あめにあると詠るは不レ可レ及ニ料簡ー者歟凡銀川には浮橋玉橋○棚橋鵲橋○○○黄橋なとゝ詠る○此類也
時津風
當集第六卷歌
大貳小野老朝臣「歌云」
時つ風吹へく成ぬ香椎潟
しほひのきはに玉もかりてな
此風は四季の內何れの時にても吹つゝきたるを云也と○或云十一月の風也と其故は時雨霰ふりつゝきてあらきを云也○然れとも古今六帖に秋風の題に
打はふき詩そきぬらんわきもこか
衣のひもをときつ風吹
今考レ之曰所レ謂時津風者大風也其名亦四時之風歟隨而時世之吉凶以レ之可レ計者也「故ニ」軍勝卷第七曰立春注云正月戊申二月己酉三月庚戌在ニ暴風ー從レ東來而七日不レ止兵起云々立夏立秋立冬等之暴風依レ時隨レ節吉凶亦如レ是「余」以レ之可ニ准知ー也然れは此風をは漢朝には四時風と云和國には時津風と云なるへし此歌の意は如是あらき風吹來るなるへし然れは風波の難なからむに海人藻をかりあさりをいそくへしとよめる也時津風とよめる「歌」近來いと少歟
中院亞相
續古冬前大納言爲家
時津風寒く吹らしかすいかた
鹽ひの千鳥夜半に鳴なり

詞林采葉抄第七

玉鉾道

當集第十一卷「歌云」

玉鉾の道行うらにうらなへは
いもにあはむと我にいひつる

此玉鉾の事○○とかく申「かへたり」一には昔は刀を持てとすくなし○○○○○○○○○○○○鉾をのみつきて遠近をいはす道の兵具とせり人の亭へ入ては妻戸に立そへてをきけるなり「是を」ほうだてと云則鉾立なり今考レ之日本紀第一曰伊弉諾尊伊弉冊尊立ニ於天浮橋之上一共計曰底下豈無レ國歟廼以ニ天之瓊矛一指下而探レ之是ニ獲ニ滄溟一其矛鋒滴瀝之潮「凝成ニ一島」名レ之曰ニ磤馭盧島ニ「二神」於是降ニ居彼島ニ因欲ニ共「爲」夫婦産ニ生洲國一便以ニ磤馭盧嶋一爲ニ國中之柱一云々此瓊矛は是玉鉾なり「則」天地人の始也玉臣の道○○たるてと以レ矛爲レ始故に玉鉾の道と云也此心をよめる

續古雜中イ

久方のあめよりくたす玉鉾の
道ある國そいまの我くに　　後嵯峨院

但當集相傳には鉾にさやあり柄あり身あり然れは玉鉾のみと受るなり「亦さ」と受る歌當集第十一卷に

遠くあれと君をそ戀る玉鉾の
里人みなにわれてひめやも

「是さと受るなりみは身の心さは鞘の心」古歌の躰如レ此玉鉾の道とつゝけたる歌不レ可ニ勝計一新古今集に

新古夏藤原元眞イ

夏草は茂りにけりな玉鉾の
道行人のむすふはかりに

同夏

玉鉾の道行人のことつても
たへてほとふる五月雨のころ　　京極黄門

玉鉾の道とつゝかぬ歌

新古春下イ

此のほとは知るも知らぬも玉鉾の　　家隆

行かふ袖は花のかそする
　　　　　　貫　　　之

玉鉾の手向の神も我如く
　我思ふことを思へとそ思ふ
　　　　　　「京極黄門」

續古今定家
玉鉾や通ふ直道も河とみて
　渡らぬ中の五月雨のころ
　　　　　　順德院御製

玉鉾や多くの民の龍の市「に」
　暮れは歸る聲聞ゆなり

「異本云或云漢高祖項羽と戰事七十餘度の時玉鉾とて玉かさりたる鉾あり是高祖の兵機の第一の重寶也合戰破て軍兵散々になりける時此玉鉾をちまたにたてけれは高祖のをはする方えはこの向けれは是をしるへにて尋てけりと申此說未詳」

雲蘰玉
當集第十三卷「歌云」
五十串たて神酒すへまつり神主の
　うすの玉かけみれはともしも

雲蘰玉の事「或」先達の釋したるは田夫か田つくる水口祭するには幣を五十たてゝ神酒を手向て祭也うすの玉とは豆をつらぬきて盛りあけたるか中はくはそく。臼の樣なれはうすの玉と「云也と」此義〇〇〇をしはかりの事にや五十串と書たれはとて五十「の數」には限可からす只みてくらはさみたる串をいくしと〇云也うず玉とは昔は官位の階に隨て冠に鈿を付けりと見へたりうすとはかんさし也みれはともしもとはめつらしと云言也日本紀第二十二卷推古天皇御宇十一年十二月戊辰朔壬申始行官位大德小德今之四位大仁小仁位五大禮小禮位六大信小信位七大義「小義」八位大智小智位並以十二階當色絁縫之頂撮總如囊而著緣焉唯元日著髮花云々同第二十〇卷孝德天皇御宇副七色十二階冠其「冠之」背張漆羅以緣而鈿異其高下形似於蟬小錦冠「以銀上」之鈿雜金〇爲之大小青冠之鈿以銀爲之大小黑冠之鈿以銅爲之建武之冠無鈿云々「然あ

れは「官位に隨て冠に釵の玉を着ると見へたり依て
社官此冠を着たるを釵ノ玉懸るとよめる也○○當集
第十九卷に

しま山にてれる橘釵にさし
つかへまつるはまうちきみたち

月卿雲客の冠のかさりに花橘をさすと聞へたり曰の
說かへす〳〵見苦き料簡也

烏羽玉

當集第七卷に

ぬば玉の我くろ髮にふりなつむ
あまの露しもとれはきえつゝ

喜撰式云夢はぬる玉「と云」夜はぬは玉「と云」髮はう
は玉と「云と」然るに當集には大略ぬば玉と點して義
をは樣々に申しかへたり依て書樣あまたあり烏羽
玉烏玉黑玉夜干玉野干玉○と書り野干玉と云
事狐は百歲を經ぬれはうばの姿になる故に○○書る
となん亦順か和名抄に烏扇を射干とも書り此聲を
かりて野干とは書り「是」烏扇の實は黑き玉の樣なれ
は也「云々」亦烏の羽には黑き玉のやうなるものあり
て日に近つくれは○○くろくなりけると○古物語に
あり烏と云字をくろしと讀は黑玉「とは云へる也」
亦烏羽玉とも云人あり皆黑と云言也

古今集　讀人不知

むは玉のやみのうつゝはさたかなる
夢にいくらもまさらさりけり

古今物名　貫之

むは玉の我黑髮やかはるらん
鏡のかけにふれるしら雪

家隆

むは玉のやみのうつゝのうかひ舟
月のさかりや夢も見るらん

中院「亞相」

山たかみ嵐そ吹きて烏羽玉の
黑木の寢屋はいかに寒けき

助定

花鳥もみな行はてゝ黑玉の

夜の間にけふの夏は來にけり

玉勝間

當集第十二卷に 哥云

玉かつまあはむといふはたれなるか

あへる時さへおもかくれぬる

此歌の玉かつまとは女也とも云亦戀を云也と

先達申されし

同卷に 哥云

玉勝間あへ嶋山の夕露に

旅ねはえすやなかきこのよを

此歌にては玉勝間とは戀の魂のあへきあるくとも云

なり然れとも美作國風土記曰日本武尊櫛を池に落し

入給ふ因て號二勝間田池一云々○玉かつまとは櫛の古

語也○○○○○

同卷に 哥云

玉勝間しまくま山の夕暮に

ひとりや君か山路てゆらん

此歌は櫛の歯のしけきとつゝくる也しまはしけき言

也亦玉かつまとは玉匣也「亦」玉勝間あへ嶋山と云も

玉勝間あはむと云もあふ言なるへし然は當集の中

玉かつまの歌は皆此兩儀の外は出へからさるもの歟

玉箒

當集第二十卷　於二内裏一賜二玉箒一「右」中辨家持歌

初春の初子のけふの玉箒

手にとるからにゆらく玉のを

俊頼朝臣の玉箒を釋「して」云正月初子に蓍と云草を

小松につけてかひする屋を掃はじめて玉箒と云也

「云々」然れとも此歌は稱德天皇御宇天平寶字二年正

月三日召二侍從堅子王等一令レ侍二内裏之東屋垣ノ下一

即賜二玉箒一肆宴于レ時内相藤原朝臣奉二勅宣一諸王

卿等隨レ堪任レ意歌並賦レ詩仍應二詔旨一各陳二心緒一作

レ歌賦レ詩云々然れは養女の態に限るへからす就レ中

當集十六卷に 哥云

玉箒かりて鎌丸むろの木と

なつめかもとゝかきはかむため

此歌は玉箒と云草ありと見へたり鎌にてかるへき故

なり彼志賀寺上人宮息所の御手を賜て此歌を詠しける往昔誦詠と申なから心中誠に哀にてそ新撰六帖「歌云」

玉箒とる手もゆらに契をきて
何世子の日の春にあふらむ

玉冠春

玉冠春と云言歌によりて可ㇾ心得ㇾ也

當集第一卷「歌云」

玉きはる内の大野にうまなめて
あさふますらむその草ふけ野

此玉きはるは斷簡二義也一には玉きはまれる内裏と云「義」也莊嚴極る也内日さすと詠るも同義「也」文選曰晨光内照流景外延「云」「々是」玉樓金殿の心也二には黄帝の臣下に蚩尤琢鹿の野にて討れたりし眼を毬打の玉にして打ことを玉木はるうちと云也「亦」玉きはるゆふさりくれはと云歌は魂きはまり靜りて夜になると云事也亦玉きはる命と云歌は玉しゐきはまり命つき○「る」と云事也

當集第六卷

玉きはる命は知す松かえの
結ふ心はなかくとそ思ふ

京極黄門

玉きはる我身しくれとふり行は
いとゝ月日もおしき秋哉

玉木破我やの上に立霞
立ても居ても君かまに〳〵

角鄣經

當集第二卷

つのさはふ石見の海ことさへくからのさきなるいくりに○○○○○○ ふる

角鄣經此訓「四つあり」一には「すみさへし」二には「つのさふる」「一には」かくさふる「二には」つのさはふ古點如ㇾ斯然而つのさはふと可ㇾ訓也其故は日本紀曰大鷦鷯天皇卅年甲寅朔庚申天皇浮ㇾ江幸ㇾ山背ㇾ時ㇾ桑ノ枝沿ㇾ水而流天皇視ㇾ桑ノ枝ㇾ而歌ㇾ之ノ曰兎怒瑳破赴以破能臂謎餓飯明呂加耶枳許瑳怒于羅愚破能紀已下

略之つのさはふとは多しと云言也石「に」は「角の」イナシつのくさして多くさし出てある也　亦かのしゝと云ものは角を岩に掛て臥○○なりそれをさわると云「さはと云は多と云言也」日本紀にも當集にも處々多し亦鹿は木草の中を行に○角さはれともとゝてほらす岩なとにさはれは行てとなきを角さはふと云とも云へりいくりと「云は」石也いは例の發語なりくりは石なり北國の俗言也

釼刀

當集第七卷「歌云」
釼刀もろはのときに足をふみ
　しにゝもしなし君にあはすは
「是」釼と刀とには非す兩方に及のある也釼と云ものに似「たり」つはなくてわさ○○としたる輪ある也浦島子の長歌の反歌に
鎮へに住へきものを釼刀
　わか心からをそやてのきみ

此も輪とつゝけたり狛釼と云は柄を長くして輪のあるもの也こま釼わさみか原と詠る是也玉釼と詠るはたゝはむる言也○李嶠百詠曰帶レ鐶疑レ寫レ月引レ鏡似レ含レ泉註曰刀頭有レ鐶似レ月刀有二水文一云々世人劔刀と云は只普通の釼とはかり心得○○亦釼と刀と二物と心得るは返々不レ寛二當集一故也

山多豆

當集第二卷　衣通王歌云
君かゆきけなかくなりぬ山たつの
　むかへかゆかむまちてはまたし
○註云山多豆者是今造レ木者也「云々」言は斧鉞を云也をのまさかりは外へやれとも我方へ向ふもの也傍へ向てと無レ之二異朝にも此例あり「六韜」曰將軍受レ命乃齋二於大廟一擇レ日授二斧鉞一君入レ廟西面○立將軍入北面而立君親操レ鉞持二其首一授二其柄一曰從レ此以往上至二於天一將軍制レ之既受レ命曰臣聞治レ國不レ可レ從レ外治レ軍不レ可レ從レ中御二二心一不レ可二以事一レ君凝レ志不レ可二以應一レ敵臣既受レ命專二斧鉞之威一不二敢還一云々是

則以二斧鉞一定レ契行も留も同レ心しるし也仍て和漢の心同きもの也日本紀「を考るに」○○○景行天皇御宇東夷征伐の爲に日本武尊○下向の時天皇手持レ鉞授レ尊曰我聞蝦夷は夏は栖レ巢冬は臥レ穴登レ山如二飛鳥一草を行こと如二走獸一也恵を得ても恩を忘れ恨を得ては酬ゆる者也是を討んとすれは草に隱れ是を逐はんとすれは山に入る今汝を見に形は朕か子なれ共質は神靈也天下は是汝か天下也兵を煩さすして夷を征すへしと云々是則符二合六韜一或抄云山たつとは山田守賤也と○「依て」古人小田をもる山たつと詠る歌あるにや是今按の推量にて出所何の集にあるや就レ中「右の歌異本には」山たつねむかへかゆかんとあり「然れは」非二人ノ名一「軟昔者」萬葉集の無二沙汰一故に古來の先達等多は令二蹉路一者也

烽火

當集第六卷　悲二寧樂故郷一歌

いてま山飛火かくれにはきのえをしからみちらし
さをしかはつまよひとよみ山みれは山もみかほし
里みれは里もすみよし云々

國史云天智天皇三年於二對馬壹岐筑前一置二防與一烽和銅五年正月廢二高安烽一始置二高見及大和國春日烽一以通二平城一云々此說の如きは射駒山の西高安に烽を立られたりけるを當集には詠る也然るを元明天皇の御宇「に始て」奈良の都にうつされて後春日野の烽とは云也亦桓武天皇延曆十五年三月山城大和兩國置二「烽燧一」云々能因歌枕「云」烽岡は肥前國にありと云々亦攝津國須磨と淡路との岩屋○の中の渡舟を互に呼とてしるしに烽を立ると「云へり」

顯輔卿あはちと云女の許へつかはしける歌

いかにせん烽もいまはたてわひぬ
聲も及はぬあはちしま山

新勅雜四　「前内大臣」

あはち嶋しるしの烽たてわひて
霞をいとふ春の舟人

凡そ烽火の事「異朝にも」周幽王二「と云御門は王」申候か女を后「とす幽王是」をすてゝ褒姒を后とす此后す

へて咲ふことな「かりけるに」或時燧火を見て笑へり幽王興に入て燧火を擧てしす「るに是を見て」萬國の兵馳來こと數度也雖レ然空く歸り訖爰に申候西夷を伴て責來る時燧火を擧といへとも兵「馳來る事無して」幽王遂に麗山の下にて失給ふ○○○○○○○○○（命婦一本ニ狐トリ有）（后は尾ニある命婦さ）なりて失ぬ○○○○○

防人

當集第廿卷　被遣鎭西防人歌曰

ますらをのゆき取をひて出てゆけは
　別をおしみ歎きけんつま

此「卷の」防人の歌は皆夷の詞也防人は註釋云靭負職也と左右衛門司を懸たる者歟或註抄には關守の一名也云々○此卷の諸國の防人等の中に相模國の防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麻呂駿河國の防人部領使守從五位下布施朝臣人主○以下國々の防人等或は六位或は七位也豈如ニ關守等ー爲ニ下﨟仁ー乎就レ中此防人等被レ遣ニ筑紫ー事於ニ鎭西ー爲レ禦ニ異敵ー也○○「防人と云は」即防戰士也爰以痛ニ防人悲別之心ー

歌云

すめらきのとをの朝廷としらぬひのつくしの國は
あたまもるおさへのきそときこしめし四方の國に
は人さはにみちてはあれと鷄か鳴東男はいてむか
ひかへりみせすていさみたる武き軍とねな玉○已
下略之

右歌は東國の勇士等を撰召れて被レ遣ニ鎭西ー被レ搆ニ城郭ーと見へたり然は爲ニ異朝驚固ー於レ被ニ差ニ遣兵卒ーつ尤可レ然君將可レ被レ定ニ節度使ー之所被レ下ニ彼防人等ー事顧并レ無ニ不審ー雖レ然守レ城之時以ニ弓兵歩兵ー專爲ニ軍命ー者也加レ之兵家上中下之三有レ之不レ戰屈ニ敵兵ー上也百　戰　百勝中也深レ溝高レ壘守下也云々然「れは」先遣ニ防人等ー守レ城事此謂歟亦　大國是猛勢也我朝亦無勢也條攻不レ足守「者」是則上中下ノ三ッ一也」有ニ餘不足之義理ー兩朝符合事以レ之可ニ心得ー者也

橡衣

當集第七卷に
橡衣きる人はことなしと

いひし時よりきまほしくおぼゆ

つるはみの衣とは四位の朝服也此きぬきたる人はいかなるつみをも免されけるとかやされは此歌の心は朝「廷」につかふまつるには霜を拂ひ星をいたゝきてそあるへきにいもかりゆく心のみ有て忠臣の義を忘るゝ時のみあれは橡の衣をきて其とかを免れはやと云也「つるはみのときあらひきぬと詠るはいつもさめぬ色也」つるはみの一重衣と詠るははうもなき衣「なるへし」亦源氏には白橡衣とあり可レ考レ之

髮梳小櫛

當集第三卷に

しかのあまはめかりしほやきいとまなみ
髮梳のをくしもとりもみなくに

髮梳小櫛「此訓」かみけつりのをぐし「と云」つけのをぐし「と云」くしらのをくし「と云」三訓也髮けつりのをくしと云は○不レ可レ然つけのをくし「と云」は字訓おほつかなしくしらのおくしと云へき歟大隅國風土記曰大隅郡串下卿昔者造國ノ神○使者遣ニ此村ニ令レ見ニ消息ニ使者報云有ニ髮梳神ニ因レ玆可レ謂ニ髮梳村ト「亦」曰久西良卿（鄕カ）髮梳者隼人俗語久西良今改テ曰ニ串下ノ卿ニ（鄕カ）古語如レ此然れども世以つけのをくしと詠り依て伊勢物語の歌に

蘆の屋のなたの塩燒いとまなみ
つけのをくしもさゝすきにけり

中院亞相

さしなから千代もやへなん朝月日
向ふつけくしひさにふりつゝ

比禮麾

ひれの事先達多く以て袖也と「八雲御抄にも袖と註し給へとも」勘ニ舊記ニにひれは女の裝束の中に裙帶領巾とて有けるなり或は肩巾とて肩に○かける也膳夫采女の手繦なとの樣なるもの也然るを天武天皇御宇十一年三月四十八階并如レ此男女裝束等被ニ省略ニ訖細比禮之鶯と云るも首毛のひれの如くにさかりたる故也太平御覽云領巾婦人項ノ之飾也○今世のかけをひの如くなるもの也當集第三卷卅ノ○眞人笠麻呂往ニ紀伊國ニ超ニ勢能山ニ時の歌

（ほそい三字ありイ）たくひれのかけまくほしきいもか名を
　このせのやまにかけはいかゝあらむ
此歌の「細比禮と云の」ひれはかくるものと見えたり
「袖にはあらす」
當集第十巻問答歌云
　人つまの馬よりゆらにさかつまのかちよりゆけは
みることにねのみもなかる「そ」て思に心しいたし
たらちねの母のかたみとわかもたるまそみ鏡にあ
きつ領巾をそへもちて馬かへわかせ
右歌鏡と比禮と取そへて形見にのこしたるを以て馬
かへと云へり更に袖には非す亦云
　あこのうみのあら磯の上に濱なつむあまをとめら
か○まつひたるひれもてるかに手にまける玉もゆ
らにしろたへの袖ふりみせつあひ思ふらし
此歌比禮と袖と各別の物と見えたり肥前國風土記曰
松浦縣之東卅里有帔搖峯（帔搖ハ比禮府離也）最頂有沼計可半
町俗傳云昔者檜前（宣化イ）○○天皇世遣大伴紗手比古
鎮任那國于時有娘子名曰乙等比賣離別日乙
等比賣登此峰擧帔招因以爲名云々當集第五巻曰（中抄八九）
大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國艤棹言歸
稍赴蒼波妾松浦佐用嬪面嗟此別易歎彼會難登高
山之嶺斷肝銷魂遂脱領巾麾之傍者莫不流
涕號此山曰領巾麾之嶺云々「此」兩說娘女の名
相違すといへとも縡是等同也彼も是も全く袖をひれ
と云には非す但八雲御抄に云ひれは袖也と彼御代の
頃まては萬葉集の沙汰いと委細にもなかりけるにや
勅筆○○（尤仰イ）雖可仰信用任現文○如此註
「之」置者也

　日本琴　「異本　對馬結石山孫枝」
當集第五巻云梧桐日本琴夢化娘女曰余託根遠嶋
之崇巒晞幹九陽之休光　中略　偶遭良匠散爲小
琴不顧質麁音少恒希君子左琴　即歌云
　いかに有ん日の時にかもこゑ知らん
　　人のひさのへ我か枕せん
大伴淡等「改名旅人」夢覺報詩詠云

ことゝはぬ木には有ともうるはしき
君かたなれの琴にし有へし

凡和琴者依レ爲二本朝之調器一拍子「と云」調と○云暗に習二音曲一不レ傳二案譜一者也然に嵯峨天皇此曲を倘侍廣井女王に傳へさせ給ひ其後中絶したりしに承和御門召二慈賀慈門一於階下二其曲傳させ給ふ亦相坂の邊に蟬哥翁「と云者」あり尤此道に長せり亦貞觀聖主藤原磐井を召て於二御簾際一習御「し給ふ」彼時貞保親王蒙二勅命一譜を作給ふ自レ爾以來代々相傳て不レ絶云々和琴にあまたの名あり朽目塩竈水龍亦宇陀法師と云は檜を以て作るとかや一條院御宇内裏燒失の時昔の「宇陀」法師は燒訖（一本頭註書入云賴通公也）後三條院御時延久四年八月宥殿の御遊の時宇治左大臣殿和琴を賜らせ給ふ口宣に御たならしの宇陀法師と此勅言萬葉の古風を思食出（一本傍註書入云無名抄也）「させ給ひける」にや鴨長明記云和琴は元は弓六張を引並て用けるか後に「琴に」は作りたりける也其弓上總國の古き什物也仍て彼國の古註文云弓六張神樂料

五手船

當集廿卷「歌云」

さきもりのほりえこきいつるいつて舟
かちとるまなく戀はしけゝむ

櫓十丁立たる船を五手舟と○云二丁を一手と云故也亦舟は伊豆國より造始たる故にいつて舟と云とも云へり日本紀第十卷譽田天皇御宇五年秋八月庚子朔壬寅令諸國定二海人及山守部一冬十月科二伊豆國一令レ造舟長十丈船既成之試浮二于海一便輕泛疾行如レ馳故名二其舟一曰二枯野一（由二船輕疾一名二枯野一「是ノ義以下イ本文也」違ノ焉若謂二輕野一後人訛誰なる歟イ）

水手

當集第四卷「歌云」 「丹比眞人笠麻呂作歌」

あまさかるひなの國へにたゝむかふあはちをすきてあは嶋をそかひにみつゝあさなきに水手のをとよひ已下略之

水手をかこと詠る事鹿子也淡路國風土記云應神天皇

廿年秋八月天皇淡路嶋ニ遊獵ス時海上大鹿浮來則人也天皇召ニ左右ニ詔問答曰我是日向國諸縣群牛也角鹿皮
郡ノ字君の誤なるべし
著而ニ年老雖レ不レ與レ仕尚ほ莫レ忘ニ天恩ヲ仍汝女長髮姬貢也仍令レ搒ニ御舟ニ因レ玆此湊曰ニ鹿子湊ト云
云然れは水手楫取をかこと云也

範兼卿

はりまかたすまの朝氣のきりかくれ
をきこく鹿子のてえのはるけさ

水沙兒居

當集第十一卷「歌云」
みさこゐるすにをる舟のゆふしほを
まつらんよりはわれてそまされ

「水沙兒居と云こと」註譯に云「鳥也」此鳥水に入るをは涙にぬるゝにたとへ出るをは人目をつゝみかぬるにたとふすにをる舟とはしはし忍ひゐたるにたとへたり思ひわひて行かんとする心也云々今考レ「之云」

水沙兒の事イ
○○○○毛詩ニ曰關雎ハ后妃ノ德ナリト云々「關雎とは」我朝の水砂兒也此鳥天の七十二侯を知て嫁く事五日に一度つゝ也然れは一年に七十二度也雌雄ありと云へとも退て河中之洲にありと云へり后妃の心「然も」可レ准レ之其色に耽らすして退て深宮の中に有りと云此心也今の歌のみさこゐる洲にをる舟と云府ニ合之ニみさこと詠る歌近來いと多からす

俊頼

夕暮に鷹のとふかとみえつるは
なみまを渡るみさこなりけり

隆祐

みさこゐる藤江の浦の朝ほらけ
あらき波にもすむ心かな

此上は雖レ不レ可レ加ニ蒙愚之料簡ニ竊ニ窺フニ此歌之心ヲみさことは鳥には非さるか波の打寄たる洲也其側に舟をこき入るに塩の滿さる前にはしふりて出難き也是を「人」待心に寄たるなるへし亦ニ京極黃門の註し給「ふ抄」物にもみさこゐるは鳥に非すとあれは私の愚案も可ニ府合ニにや能々可レ尋レ之

必志

當集第二卷「歌云」

さしやかむて屋のしき屋にやきすてむかれこもを
しきてかゝれをらむ鬼のしきてをさしかへてねな
む君ゆへ赤ねさすひるはしみらにぬは玉のよるは
すからにこの床のひしとなるまてなけきつるかも

必志とは海中の洲也其故は大隅國風土記曰必志里昔者此村之中在海之洲因曰必志里（海中之洲者隼人俗語云必志也）古語之上は雖不可及重釋鬼のしきてとは住家のあまた有にも人と枕さしかへてぬる夜なければ焼すてんと思ふ我手をいたつらに我枕にしかむよりも家をも手をも焼すてはや凶のしきて○○と云こと也鬼と云も凶の心也鬼のしこ草と云も凶の草也しては醜也鬼也

歌方

當集第十「五」卷「歌云」

はなれそにたてるむろの木うたかたも
久しき時をすきにけるかも

歌方の事或抄云忘すと云詞也と或「抄」云未必と書とも後撰集に

思川たへす流るゝ水のあはの
歌方人にあはてきえめや

依之或先達云あたなる人を歌方人と云也然に京極黄門此歌を釋し給「ふ抄」物には歌方と云詞眞名には寧なとゝつかへる詞の様「なり」思ひ寄ることかはさなくてはいかてかと云様の詞也それを「此」歌ひとつを見て浮たる人と云様に歌方人と六字つゝけてよめりと云は深く見わかて知かほに演へやる説也只四字の詞也○云々誠に此思川の歌許にては浮たる人とも心得へけれとも萬葉集の歌は離たる磯崎に室の木の「根もあやうけにて」生たるか老木「となれるよと」詠「るなり」「歌方は」かりそめと云詞と見えたり「歌方人と云へからさるをや」猶當集第十七卷に

鶯のきなく山吹歌方も
君かてふれぬ花ちらめやも（すかもイ）
此歌もかりそめ（らすなさイ）なれとも君か手ふれたる山吹なれは
花ちるなとゝ詠る也

詞林采葉抄卷第八

紐鏡

當集第十一卷歌（イ）

ひもかゝみのとかの山に誰故か
君さませるに紐とかすねむ

紐鏡とは氷也いつれも結物也鏡に似たる氷也水の氷（はイ）ぬれは音もなくてのとかなれはのとかの山とつゝけ（つイ）たり實方朝臣五節の舞姫の紐のとけたりけるをよりを結ふとて詠る（讀イ）歌の返歌（事イ）清少納言云々（千載雜上清少納言イ）

うは氷あはに結へる紐なれは
かさす日影にゆるふ（さくるイ）はかりそ

菅家萬葉集に（歌云イ）

冬寒み軒にかゝれるます鏡（益今本）（ひもイ）
とくる破なむ老まとふへく

詩云

冬來氷鏡據簷（簷イ）懸　・　一旦趁看未破前

孀女頻臨無粉黛 老來皺集幾廻季

亦或云鏡は日神の御體なれは日も鏡にてのとかに照し給ふと云也是もさもやと覺ゆ

山鳥鏡

當集第十四卷歌云

山鳥のおろの長尾に鏡かけ

となふへみにそ名によそりけめ

おろのはつ尾の事「清輔」奥義抄になか○おと書て此言を譯するになきよそりと○あらむと思ふになにょそりとあるおはつかなしと云々明匠の言なれとも歌の始終心得かたし○○○○○○○○○○此歌の事古抄物云昔隣國より山鳥の鳴聲妙なりとて送けるにすへて鳴事なし然るを此鳥件を離て鳴ぬにやとて籠の上に鏡を掛て見せけれは○○○○則鳴けるとて後には長尾につけ「たり」けると云々此歌の心はおろは雄也はつをは長尾なりとなふへみこそとは鳴なりなによそりとは汝によると云也汝とは雌也雄の長き尾に鏡をかけたれは其影を見て雌と思て鳴と云也或云山鳥は夜は雌と○必す峰をへたてゝ寢るなり曉に至れは雄の尾をもたけて○○○○見れは雌のねたる所のみゆるを鏡「と云ともあり」此心をよめるにや新古今集に

新古戀五讀人不知

ひるはきて夜は別るゝ山鳥の

影みる時そねはなかれける

異苑曰山鷄愛毛羽映水則舞云々魏武帝時南方獻之令人取大鏡著其前鷄鑒形而舞云々古抄物之說令府合者也新撰六帖に

山鳥の長尾の鏡はつかにも

別るゝ妻の影みてそなく 知家

「續古今集に

山鳥の緒絕の橋に鏡かけ

長夜渡る秋の夜の月」 中務卿親王

九月其初鴈

當集第八卷云

聖武天皇上哥

天平十○年秋九月遠江守櫻井王奉天皇

九月其初鴈の使にも

天皇賜報和歌
思ふ心は聞えてぬかも
大の浦の其長濱によする浪
ゆたけく君を思ふてのころ

歌註に云大の浦は遠江國の海濱の名也云々

右長月の初鴈九月始て聞てよめるにや

胡鴈は八月中旬に來ると云事和漢事傳たり仍て此

歌難得其心者也文選六臣註曰陽鳥翔以玄月

云々爾雅曰九月爲玄云々國語曰陽鳥至于玄月

云々陽鳥者鴈の屬也然れは九月來るをも初鴈と可

申にや仍て當集第十三卷に

かみとけのひかるみそらの九月の時雨のふれは鴈

金もいまたきなかす百たらす卅の槻えに水えさす

秋の紅葉はひきよちて我はもてゆかむ君かかさし

に

九月鴈未たきなかすと詠り初鴈とよまむ事何のこと

かあらむ

百舌草莖

當集第十卷譬喩云

はるされは百舌草莖みえずとも
我はみやらむ君かあたりを

昔男はるかなる野を行けるに女あへりけりかたら

ひよりてけれは別れなんとする時男袖をひかへて女

の住里を問けれは○もすの居たる草のたかきを指て

我すみかは此に當れりと云て別れぬ男世につかへ

人にましはる程に次の年の春のころ思出て彼野に

行て教へし里をみやれは空くいと霞渡ていつく

を尋へしとも覺えさりけりと云々然れは當集の心

は必す草の莖には非す只草をくゝると云言也初

鴈の歌にも木の間たちくき○○○○○○と詠りた

ちくきはくゝる也もすは秋冬は木草のすゑに居て

鳴けとも春夏に成ぬれは木の陰草のもとにくゝりあ

るく此心によそへたる也俊頼朝臣伊勢國に住み侍け

る時題季卿のもとへ詠てつかはしける歌

とへかしな玉くしのはにみかくれて
もすの草くきめちならすとも

顕季卿是を見て鵙の草ぐき○は如何○しりてか「く」詠るに「かとかたむかれ」けるとそ玉くし「のは」とは榊を云也○○○○○○○○○○○ 日本紀公望註曰眞坂樹八十玉籤間ニ云玉籤ハ何物乎是坂樹也玉者尊貴之名也用ニ此坂樹ニ刺立以爲ニ神之木ニ故謂ニ之籤ニ耳

鹿火屋

當集第十卷「歌云」

あさ霞かひやかしたになくかはつ
こゑたにきかはわれこひんやも

此かひや「と云事」先達さま〳〵に申あへり清輔の説には井中に魚とるとて河江に簀と云物をたてまはして口を「一つ」あけて蕀なとを取入て置ぬれは魚あつまる「なり」其上に屋を作りて守る事ある也是をかひやと云と○○ 公實卿此義について詠る歌

ますらをかもふしつかふなふしつけし
かひやがしたはこほりしにけり

顕昭は井中にてかひするに別に屋をかまへ棚をもかきてこをかふ所をかひやと云也其棚の下に水をほり入たれは川すの鳴也○○○○○○○○○○○○ 云々

今考レ之に此歌本集には秋の雑歌に入たり「かひやの詞」頗る不審也就中左大將家の御歌合の「五條三品の」判詞に田屋に鹿をよせましとて人の髮の落なにくれのくさき物を取あつめてやけは其香をいとひて鹿のよりこぬ也○火の煙の翼朝までのこりて霞の如くに見ゆるを朝霞とは云也と判し給へり萬葉集の心に同し更に深義あるへからす「猶」當集第十七卷

柿本朝臣人麻呂「歌云」

足引の山田もるいほにをく鹿火の
したこかれつゝ我こふらくは

かひとは鹿火正字也鹿火屋「と云も」同言也但註釋云水邊に魚とらむとて造懸たる庵に鹿なとをよせしとて臭物を燒其火の煙の朝まで殘りたるを朝霞と云也「云々」然れは「彼の」判の詞に田屋に燒火也と被レ仰之上に管見も同レ之仍て如レ此註之ものなり

圖負神龜

當集第一卷　藤原宮役民作歌

我國は常世にならむふみをへるあやしのかめもあたらよと泉の川にもちこせるまきのつまてをもゝたらぬいかたにつくりのほすらむ云々

按ニ此歌ハ和漢兩朝の深意を含めるもの歟其故は史記曰神龜者天下寶也與物變化四時變色居而自匿伏而不食春蒼夏赤秋白冬黑云々是賢王聖主の御宇に神龜出來る事を詠るなり和國には靈龜元年（本範字ありし）〇〇〇八月己未朔丁丑大初位下高田首久比麻呂獻靈龜長さ七寸濶さ六寸左眼白く右眼赤し頭には三台あり背には負七星前脚並有離卦後脚並て有爻腹下赤く白し兩點相次て八字の文あり。亦天平元年五月甲子朔己卯京職大夫從三位藤原朝臣麻呂負圖龜一頭獻之背有文（天皇貴平知百年）。是を以て改神龜六年爲天平元年也亦異朝の事を考るに洛書之起者昔堯王以璧洛水之底沉時靈龜背上負書即出其象赤文朱字也註云天一禹王賜書神龜負文出背其數在云々元定曰洛書九宮之數載九履一三左七右二四肩六八足焉故洛書天地之理一也圖象圓也圓天也書象方也方者地也云々然則天地五行之根源四季萬物之本體併莫不備此龜背如此靈器神物明王聖主之代出施仁政之時其德化感而自然出現吉兆示者也。然者我朝詠歌譬異朝之洛書述其意者乎

肩拔占（附異名「占」）

當集第十四卷（歌曰）

武藏野に占へかたやさまさてにも　のらぬ君か〇占にてにけり

昔し天照大神天岩窟に籠らせ給ひし時思兼神議をなして天香具山の鹿を生なからとらへて肩を拔て香來山の葉若の木（はか歟イ一本頭註書入云和名鈔云朱櫻本草云樺櫻一名朱櫻和名波々加一云爾波佐久夏イ榊なり）を根こしにして其肩の骨を燒て占をせし事也今の世にも卜部氏は葉若の木にて龜の甲を燒て占ふとかや是を肩燒の占とも申にや古歌に

波間より出たる龜は萬代と　我か思ふ占のしるへなりけり

此肩拔「占」の事を武藏野によせて詠る故は昔は此

野に鹿多くありけり依レ之伊勢物語にみよし野のたのむのかり「の」と云る歌もたのむしと云事をして武藏「野」にて鹿○狩「りなとする」と釋したるなり「然に近代は鹿も希に住讀る歌も少し」

新拾秋下イ

家隆卿

さをしかの夜半の草ふしあけぬれと
かへる山なきむさしのゝはら

後京極攝政前太政大臣歟イ
中院亞相

月清集下イ

武藏○○しのゝをふゝきささむき夜も
つまもてもらぬをしかなくなり

抑此卜筮者自二異朝上代一莫レ不レ專二此道一故天地之道日月之運陰陽之吉凶以レ之計以レ是决王者聖人定二國家一此道爲レ先卜者從二洛書一事起通二用萬事一筮者河圖也八卦周易是以成自レ爾以來一切善惡事莫レ不レ依二卜術一是則兩朝一同儀也○次眞柴ノ占事同卷ノ歌ニ

をふしもとこのもと山の眞柴にも
のらぬいもか名かたにいてむかも

此占は眞柴を燒て占なふと云へり然は眞柴の占には出すして妹か名の肩拔の占に出たりと詠るなりをふしもとゝ云事或書云總刑罸之道不レ限二軍場一依二時宜一設二其刑品一有二五品一謂墨劓剕宮大辟也其數分二三十一亦有二笞杖徒流死之五刑一凡可レ明二律令一正二格式一云々此五刑の内笞をしもと云也科の輕重に依てしもとの數をあつる事也

拾遺集に○大隅守櫻嶋忠信が召かんかへんとしける翁の歌に

拾遺雜下翁イ

老はてゝ雪の山をはいたゝけと
しもとみるにそ身はひゑにける

此歌によりて其科をゆるされたりと云へり亦しもと云葛城山と○云ふ風詞も此笞を結ふ葛とつゝくる也近來霜と云葛城と云ことは不レ便こと也次に山すけ占と云ふは山菅の葉をむすひ合せて其すゑを巫にむすはするとかや○○○○○○○○○○○○○○○○○○思ひわひ三角かしわにとふことのしつむにうく○○○○○と詠る「は」大神宮にて三角柏と云物にて占をするにやあふ事を占ふと云題にて

俊頼朝臣

神風やみつのかしはにことゝひて
　　たつをは袖につゝみてそくる
此占は彼の三角柏を取て「水の上に」なくるに立ては叶ふしつむは叶はすとなん申「傳へり」亦御綱柏と云も三角柏と云も同物歟（委八在二下ノ柏之條一）

　足日木山

當集第「十」一巻に
足日木の山たち花の色にいてゝ
　　わかこひなむをやめかたくすな
足引のこと先達區々に申たれは縡新く雖レ難レ載二短筆一當集相傳之義爲レ遁レ之粗所レ註レ之「也」智度論第十七「を考るに」一角仙人とて額に角ありて手足鹿の脚の如し通力自在なりけるか山澤に落て腰を打折足を引ける故申とも「云へり」○○○○○○○○○○○○（又雄略天皇御狩に山へ入せ玉ひ御足をふみそんして惡き日来りたりさ宜ひたえを申さも）○○○○○○○○○○○○○○○○亦神代には山に生たる葦を引すてゝ人々栖としける故申とも「云へり」此外「ともかくも」申あひたり宜く隨二心之縁一歟然れとも當集相傳は山庫也同第二十巻に屬二目山庫一作歌三首
　　　　　　　　　大監物御方王
をしのすむ君かこのしまけふみれは
　　あしひの花もさきにけるかも
　　　　「左中辨」大伴「宿禰」家持
いけ水にかけさへみえてさきにほふ
　　あしひの花を袖にこきれて
　　　　「大藏大輔甘南備伊香眞人」
いそかけの見ゆる池水てるまてに
　　さけるあしひのちらまくをしも
「右」於二釋義一者依レ爲二秘曲一不レ註レ之大宰帥大伴卿の歌
いもとしてふたりつくりしわか山庫
　　こたかくしけくなりにけるかも
足引の山とつゝかぬ歌「多し」菅家の御歌「にも」
新古雜下に新古に道はあれどみやこへいささいふ人そなき
足引のこなたかなた○○○○○○○○○○○○○（新古）人のなき○「と詠し給ふ」亦當集第三巻に

足ひきの石根こゝしみすかのねを
　　ひけはかたみとしめのみそゆふ くイ
　　　　　　　　　　「權」中納言賴資
新勅撰集二
新勅賀イ
足ひきの岩倉山の日かけくさ
　　かさすや神のみことなるらむ
足引の石とつゝくること玉篇云高大有ㇾ石曰ㇾ山「云
云」然れは山と石とは一つ也亦地理○書曰水地之血
脈也石山之骨也云々有ㇾ石山大也と云事以ㇾ之可ㇾ知
ㇾ之者歟
月清集下イ
足ひきの山のたかねは久かたの
　　月のみやこのふもとなりけり 後京極歟「家隆」イ
千載集二
足引の山のはちかくすむとても
　　またてやは見るありあけの月
あらぬ詞に取なしたる歌
あしひきの大和ことひの牛なれは
　　おもしろくこそけふは引けれ
當集第十一卷　正述心緒歌 云イ
山櫻戸

足引の山さくら戸をあけをきて
　　わかまつ君をたれかとゝむる
山櫻戸と云に二義あり一には櫻の木を板に○○○つ さりてイ
くりたる戸也一には櫻の若木を植てかきをしまはし
て戸「口をこしらへ明て」人の出入するを云ともあ
をーあけてイ　さしたるを云也此歌をさりてよみ玉へるイ
り
拾遺愚草中イ
足ひきの山さくら戸をまれにあけて　京極黄門
　　花こそあるしたれをまつらん
新勅春下定家
名もしるしみねのあらしも雪とふる
　　山櫻戸のあけほのゝそら　同イ
此兩首は墻をしめくらしたる心にやイ
新千戀三
足引の山さくら戸のはる風に　洞院前攝政殿
　　おしあけ方は花のかそする
壬生二品集中
あふ坂の山さくら戸のせきもりは　同イ「家隆卿」
　　人やりならぬ花や見るらん　關守
あけをさし山櫻戸もとちてけり

をのれ春なる花のさかりは　同イ

玉生集中
とかりするかりはの小野に日はくれぬ
山さくら戸にやとやからまし　同イ

依之兩義な可意得者也イ
依レ歟兩義を可ニ心得一者也

鉾榾

當集第三卷歌云イ

いつの間に神さひけるかゝこ山の
むすきかもとに笞をふるまて。

鉾榾とは若木の榾也人のをさなき子をむすこともむすめとも云か如し然るをはやく老木に成て笞むしたると云也「亦は」榾のすかた鉾のさきの如くにほそくするとなれは云也仍て鉾榾と書けり正字なるへき歟「亦或」先達云以レ杉作レ鉾祭禮の具とす此山に此儀式在之云々

合歡木花

當集第八卷　紀女郎贈大伴家持歌イ

ひるはさき夜るはこひぬるねふの花
君に見せんやわけさへに見よ

此合歡木花の訓「三つあり」一には」かうかの木」二には」ねふりの木「三には」ねふの花「なり」先達「も區々に」釋せり仍古今六帖の題にかうかと擧けられたり然れともかうかと訓しねふりの木と訓しては花の字
不被訓之歟イ
訓なきもの歟但ねふの花と訓すへき歟其故は同一卷に」家持贈和歌云

わきもこか形見の合歡木は花のみに
さきてけたしもみにならぬかも

文選云合歡除レ眠云々今歡ノ之詞云「右」折ニ攀合歡花幷茅花一贈也云々尤花とよむへし當集「新點」の訓如レ此文「選に令ニ府合一者也」雖レ然六帖は貫之か女の爲にあつめた「る書なり」仍て號ニ紀氏六帖一「亦」かうかと詠し事も何事かあらんや

結松

當集第二卷　有間皇子自傷結ニ松枝一作歌

岩代のはま松か枝をひきむすひ
まさきくあらはまたかへりみん

此歌は孝德天皇有間皇子の位をたもち給ふましき氣

色を御覧して讓り給はさりけれは恨奉りてあくかれあるき給ひけるか畿内に軍をかたらひて屯をひき「い」にて國を傾け給はんとて蘇我赤兄の臣と心を一にして壖屋の小才と云者にひねり文をあたへて世の中を占せ給ふ此事世に聞へしかは後飛鳥岡本の宮より官軍木ノ路へはせ向て藤代の坂にて有間皇子をとらへてゆひてころし奉り赤兄臣をは鎮西へ流しつかはされ訖今此君は既に天子の位を可ニ受繼ーなれとも其謀拙なくして利害を知り給はす兵戰を興して天下を亂さんとし給ふ故にかゝる難ある「なる」へし凡義兵鬪戰之道は天地人の三才を勘見し國家の政を高察して可レ成レ事之所に假に筆跡を松に結ひて顯レ志纔の少卒を襲て於レ行ニ大宮ーは爭か其本望を可レ達乎誠に可レ謂ニ暗君愚將ーのみ或文云若以レ備進戰退守而不レ求ニ能用者ー譬ハ猶ニ伏雞之搏レ貍乳犬之犯ルカ虎雖レ有ニ鬪心ー隨レ之死云々此文更に此事に符合するものか中にも歌を結レ松事雖レ似ニ于祝言ー後代に可レ有ニ斟酌ー者也其故は松は雖レ有ニ千年之昌ー顯ニ君子之德ー此君にひかれて彼結松をは「祝言には」不レ可レ詠者歟此等の理和漢の舊記を以て事を決する故に及ニ此「釋」義ー者也彼皇子の昔を思て詠し給ふ人丸「の歌」當集第「二」卷

岩代の野なかにたてるむすひまつ
心もとけすむかしをもへは

兒手柏 附異名柏 歌云

當集第七卷に

なら山のこのてかしはのふたをもて
とにもかくにもねちけ人かな

「兒手柏と云は」柏のもえ出る時は兒の手の如くにしは〳〵と文あるを云也「ふたをもてとは」面も裏も同樣〇〇〇〇也ねちけ人とはうらゝかならぬ人の心〇〇〇〇〇〇〇〇を云也この手柏とて別にあるには非す「但草の中にもこの手かしはさてある也」

山家集下

いはれのゝ萩のふる枝のひま〳〵に
このて柏の花さきにけり　西行上人

範永朝臣大和守にて下けるに奈良坂のほとりにて白

き花のいみしくさきたるを持て行「人あり」(合たりイ)けるを國の民の中に供(ごも)したりけるか是を見てゆゝしくさきたるこの手柏哉と云けるを聞て馬を留て如何云ふと問(候物イ)(そイ聞イ)けれは此さきたる花は大とちとも申○○也それを此國にてはこの手柏と申也と云(聞イ)けれは範永朝臣めてゝ其男に物とらせて故を問けれは彼の花の葉は兒(とこ)の手の様なれは申也と云けりと云々

當集廿卷に

千葉の野のこのて柏のほゝまれと
　あやにかなしみをきて我きぬ

一本頭註書入に云異本ちはのゝのこのてかしはのほゝまれとあやにかなしみをきて我こぬ此歌は鎭西へつかはさる防人か妻のはらみたるをさゝめなきたりとよめる也

「如レ此(さイ)」よめる歌も花のつほめる(えイ)心と見たり茶(おほとち)(このてかしは)(茶イ)の説可ニ許用一(容イ)もの歟

(附)(次にイ)異名柏とは凡柏と云に○○(付てイ)樹の名にあり石の名に(の事イ)あり木の類には玉柏と云ははむる言也なら柏なかめ
こなら柏作也葉の細長也イ

柏○○○○○○○○○あから柏「葉(ナシイ)ひろ柏寶柏○○(本柏イ)

三角柏御綱柏石の類(名)には玉柏岩戸柏水の柏○○○○(なごありイ)

此中に三角柏と云は(申イ)伊勢國みもすそ(御裳濯イ)河の岸(岩イ)に生たるをとりて神供を「も盛り」(そなへイ)古をもするとそ「云へり」(申イ)祭主輔親集に云九月御祭時齋宮の女房の中より柏を(事イ)葉をこして是は何と申かと云へ「りける」(イナシ)(ろイ)返し○(事イ)に

「祭主輔親」(イナシ)

わきもこかみもすそ河のきしにをふる
　人をみつのゝ(三角柏なり)(なイ)かしはとをしれ

古歌云

神風や三角(みつのイ)かしはの秋の色に
　豐氏人の袖さへそてる

「當集第二卷歌註に云撿日本紀(記イ)曰大鷦鷯天皇卅年秋」(イナシ)九月乙卯朔乙丑皇后(磐姫)遊ニ行紀伊國一到ニ熊野岬一取ニ其所之御綱(みつなかしはを)葉一而還(リマス矣イ)云々(一切之石也イ)此亦三角柏歟所詮一物也(私イ)亦玉柏と云(柏イ)には(付てイ)石樹あり

新古今集に(夏イ)

たま柏しけりにけりな五月雨に
　葉もりの神のしめわふるまて
　　基俊

金葉集に夏イ

「大納言」(イナシ)經信

たまかしは庭も葉ひろになりにけり
　　こやゆふしてゝ神まつるころ
此外柏の歌不可勝計俊頼朝臣の難波江のもにうつもるゝ玉柏と詠るは石なるへし當集第七卷歌に芳野川岩戸柏のときはなると云歌をとりて詠る
　　　　　　　　　　　　　　　　小宰相
吉野川いは戸の波の玉かしは
　　たれにかくれてたちすさむらん
「草の中にも柏と云あり」
續古戀四イ　三角柏　　　　　　　小侍従
思ひ兼ゐつのかしははにとふことの
　　うくにしつむは泪なりけり
あまり續古イしつむにうくはさあり
しつめはうくはうかふイ
　　翼酢花
翼酢花「と云事釋義不准一古來の難義也」
はねすのはなの尺義一准ならす古今の難義イ
當集第四卷　　大伴坂上郎女「歌云」
思はすといひてし物をはねすいろの
　　うつろひやすき我こゝろかも
同第十二卷に歌云イ
はねすいろのうつろひやすき心あれは
　　年をそきふることはたえすて
此兩首を以て月草と釋せり
同第十一卷に七イ歌云イ
山ふきのにほへるいもかはねすいろの
　　あかものすかた夢に見えつゝ
同第八卷に　　家持唐棣花歌
夏まちてさきたるはねすひさ方の
　　雨打ふらはうつろひてむか
右此等の歌にて或は庭櫻奈梨或は木蓮なと〻釋せり
爰に本草曰陸機草木疏云唐棣ハ即奥李也其花或白或赤六月實成云々家持の歌に夏花開くと詠るは奥李に符合する歟今考之。古今集僻按「抄」に長歌の詞「は」とて註せらるゝ中にせめきけむと云事を釋せられたるに毛詩棠棣の詩を引て云兄弟鬩于牆外禦其務云々註云鬩ハ恨也禦ハ禁也。此は周公旦の兄弟の中あしゝと云へとも他人のあなつりをはふせくと云

也然而彼の○○○讒によ○て被レ流ニ東山一とを召公奭の作られたる詩也其意は棠棣花の下に蕚とて袴の如くなる物あり是を花の兄弟に喩てはなるましき物ながら讒に及ふよと作れる也然に奥李庭櫻月草なとは委振舞相叶はす木蓮○○○○かと覺ゆ其故は木蓮は花○○赤く白し就レ中唐「棣」花「反」偏發と」論語に云るは花の下なる袴花の盛なる時は一つに○○付き萎る時は「そり」かへりてはなるゝ事を譬る也彼の夏花開實成るもうつろひやすきと詠るも木芙蓉と見へたり○但註釋に云唐棣子は如レ李赤白して小し一名夫移○移柔して苦し野李也似ニ白楊一江東には呼て爲ニ夫移一と子は如ニ櫻桃一○食レ之

日本紀曰明位己下進位己上之朝服色淨位已上並著ニ朱花一云々「若斯釋義多之一篇雖落居能々可商量」

阿倍橘附橘甘子

此阿倍橘をあつ橘と詠るゝ先達多し○ 新撰六帖云々イ

當集第十一卷に 哥云イ

わきもこにあはてひさしもむましもの
あへたち花のこけをふるまて

此歌眞名假名に阿倍「橘」とかけり因て順和名「抄」を撿考るに七卷の食經に云橙 宅耕ノ反和名安倍太知波奈 似レ柚而小者也「云々」東方切韻曰橙柚ノ類郭知玄云大而皮黄皺 云々

類聚名義抄に云橙 阿倍多知波奈「云々」○○○○○○○○○○○○○○○○「是等を以て」あへ橘と云へき證據如レ斯あつ橘は假名の誤歟○○○○○「亦」橘の事は日本紀第七「を考るに」活目入彦五十狹茅天皇御宇九十年遣ニ田道間守於常世國一令レ求レ橘九十九年天皇隱「矣」明年田道間守非レ時香菓此ニハ箇俱乃弥持來則到ニ天皇陵一叫泣曰常世國神仙栖也非下可レ到ニ眞「也」人一之所上往還已十年生有ニ何益一忽死訖云々扶桑略記云九十年辛酉天皇遣ニ但馬毛理於常世國一詔ニ於新羅王子一曰求ニ非レ時香菓一仍貢ニ九種物一其中有ニ二ノ香花一所レ謂橘是也

○（矣イ）當集第十八卷（イナシ）　元正天皇御製（イ云）

たち花のとをのたち花やすよにも（つイ）

我はわすれしてのたち花を

とをの橘とは常世の橘也やすよ（つイ）とは八千代也常世ノ國の菓と見へたり彼の田道間守は昔新羅王子天日槍之四世孫但馬清彦之子也○彼の田道間守（馬イ）袖につゝみて（云イ）來りし事をひきよせてよめる伊勢物語の歌に

（古今夏讀人不知イ）五月まつ花たち花のかをかけは

むかしの人の袖のかそする

此歌をとりて詠る　五條三品

（新古夏イ）たれかまた花たち花に思いてむ

我もむかしの人となりなは

家隆卿

（同）今年より花さきそむるたち花の

いかてむかしのかに匂はふらん

李衡於ニ江陵ニ曰ク吾令ニ千戸奴（矣イ）種ニ橘年別（前イ）收ニ絹千疋ヲ一號ニ之千頭木奴ト一云々

（復次にイ）○○○「附」甘子之事　聖武天皇ノ御宇天平八年從五位下波多朝臣播磨唐朝より甘子の種を持來る佐味虫麻呂（丸イ）か家の後薗に栽て子を取て天皇に獻る仍て虫麻呂を從五位下にあけ給ふ「と云々」甘子を詠る（詠イ）歌まれなるにや

慈鎭和尚

このころは伊勢に知る人をとつれて（うれしきイ）

夕（道イ）より色ある花かうしかな

詞林采葉抄第九

手向草

當集第一卷

白波の濱松か枝の手向草

幾世までにか年の經ぬらん　　川嶋皇子

此歌者持統天皇朱鳥四年庚寅秋九月幸ニ紀伊國ニ之時從ニ駕若浦吹上濱等歷覽詠給御歌也此手向草は松の枝に懸りたるさかり苔と見えたり古今集物名のさかり苔と同物歟さかりこけと云に二「義」あり賤がかせに懸るうみ苧の一樣なるか深山木なとに懸てさがりたるをも云亦女蘿とて蔦の如にて「木に」懸りたる「をも云」也是を以て毛詩云有ニ誕羅ニ毛丘葛云○○○○○○○○○○○○○○」さがれるさかれる兩訓と云々」凡神に奉る物をば手向草と云へきにや「然れば瑞籬の松杉なとに木綿を懸る義にてはかなき物をも懸て奉るを手向草と云に何事か有ん」常陸國風土記云香嶋郡舊聞異事誌所海上安是嬢子歌云

いやせるの安是の小松に木綿して、

わをふりみゆも安是てしまはも

此歌も鹿嶋の明神に手向奉る幣綿を松の枝に懸たり○○○○川嶋皇子も玉津嶋明神に手向奉り給ふ由也加之當集第十三卷に

青丹よし　なら山すきて　もゝの武の　氏川わたり　をとめらに　あふ坂山に　手向草　いとりをきつゝ　わきもこに　あふみの海の　奥津波巳下略之

此手向草も關守る神にくさ〱の物を奉るを「手向草と云」と見へたり然るに續古今集に

神路山かひある春の手向草

玉枝の松やまつなひくらん

「此歌はさかり苔を詠るにや」

百夜草

當集第廿卷　防人歌

父母か　殿のしりへの　百夜くさ

百夜出ませ　我來たるまで

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○百夜草とは月草也此草百夜花さく故に此名

（歌の心は此防人鎮西え遣ろゝ道すからつゝかなかれさ百日たき玉へさよめるにやイ）

あゐと云月草「と書こと」正字也倶舎論に○依主尺持
業尺と云事あり持業尺と云は其正體を名に提たるを
中とかや此花俗語には露草と云也歌にもよめり凡此
月草は別名と云ひ書様○○○　あまたのしな有レ之所
レ謂鴨頭草鶏冠草韓藍花翼酢花唐棣花和名翼酢花歌云　百夜草月
草○○　等也鴨頭草と書所當集第七卷に

鴨頭草に衣はすらん朝露に
ぬれての後はうつろひぬとも

鶏冠草と書所第十卷に

しのひには戀てしぬとも御そのふの
鶏冠草の花の色に出めや

註云類聚古集曰鴨頭草亦鶏冠草○依二此義一「者」可
レ知二月草一云云

韓藍花「と」書所第七卷に

戀し日の氣なかくなれはみそのふの
韓藍の花の色に出にけり

翼酢花と書所第四卷に

思はしといひてし物を翼酢花
「色の」うつろひやすき我心哉

唐棣花と書所第八卷に　大伴家持

夏まちてさきたる唐棣花久堅の
雨うちふらはうつろひてんか

此等歌皆月草也○○○○○○○○○○○○○○○○○但翼酢花事後段に委細注之然而付二說皆月草之出擧之者也焉イ
○○○○○近代は百夜草と詠る歌いと不レ多「にや」六左大臣家の歌合にイ
百番歌合に

百夜草百夜まてなとたのめけむ
かりそめふしのしちのはしかき

思草

當集第十卷に

みちのへのお花か木の思草
今更なにの物かおもはん

「同卷云

秋つけは三草の花のかへぬかに
思へとしらぬたゝにあはされは」

思草「とは」瞿麥を「云と言り」子と云詞について
云へるにや○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○三草は思草と見えたり尾花と茅花の事を云るにや尤

有其據歟但淺茅を可申也イ
○○○○○○○○○○○「亦淺茅を云とも言り」茅は枝な
ともなくて一筋々に生るものにて餘念なく「思ふに（生たるは余念イ）（きこさによ）
は一筋なる物也」就レ中佛○成道の時茅草を指て吉祥（せたるにやイ）（初イ）
草との給へり仍て是を草座として「菩薩」樹下にして（卄イ）
未來の衆生を思念し何の法を說んとて於二三七日中一（尤ノ）
思惟如レ是事と說給ふ○是也淺茅の花をしつはなと（即イ）
も尾花とも申上は○○○○○○○○○○○ 尤有二據一者（おはなか下の思草さよめるイ）
歟然れとも家にはりんたうを思草と「は云なりと」被（イナシ）
レ仰の上は可レ信二用之一○○○○ 亦九條前關白殿は紫（不可付餘義）（僉義イ）
菀を思草と云也と被レ仰けると云云思草の歌多し

金葉戀上イ

思草葉末にむすふ白露の
たま／＼きては手にもたまらぬ　俊頼

以下三首イナシ

朝霜の色にへたつる思草
きゑすはうとし武藏野の原　京極黄門

烏羽玉のねてのゆうへの思草
今夜もむねにもえやあかさむ　家隆卿

下にのみいはてふるの丶思草
まねくすゝきははにいつれとも」　國通中納言

御熊野のかやか下たなる思草（はイ）
又二心なしとしらすや（にやさイ）　仲實

此一首（両イ）淺茅をよまれたると見へたり

一本に曰く拾遺愚草下

朝霜の色にへたつる思草
さえすはうとしむさしのゝ原　京極黄門

是はりんたうとをほゆ紫にさく花なるか故に又紫菀
も紫にさく物なれは符合する也

壬生二品集中

むは玉のねてのゆふへの思草
こよひもむねにもえやあかさん　家隆

戀草

當集第四卷に歌云イ
戀草を力車に七車

つみてもあまる我戀草は（こうらくはイ）
此戀草は草にはあらす戀の數也「種也」物思ふ事の（種々物をイ惣して思ふイ）數をよめり然れとも近來の先達皆草の名に詠り如レ此の舊例不レ可ニ勝計一也

堀川院百首に（堀百虫譚顯仲流布本に无イ）　顯仲（卿歟イ）
たのめをきしことの葉により戀草や（ろイ）
人松虫の栖成らん

千載集に（千載戀二イ）　顯家
夜と﹅もにつれなき人を戀草の
露こほれます秋の夕風

後京極殿
「しらさりし我戀草やしけるらん（イナシ）
昨日はか﹅る袖の露かは」

俊頼「朝臣」（イナシ）
逢事は夏野にしける戀草の
かりはらへともおひむすひつ﹅（せイ）

鬼之志古草
「鬼之志古草は八雲御抄云紫菀也と云々俊頼朝臣の（イナシ）

散木集に
御熊野に雨そほふりて木隱の
つかやにたてる鬼之志古草
亦鬼之志古草と云草別にありと見へたり爰に一萬葉集第四卷に

大伴宿禰家持
わすれ草我下紐につけたれと
鬼のしこ草ことにし有けり
以ニ此歌一忘草を鬼のして草と云と釋したる先達あり（多之イ）然れとも同卷に

忘草ひもにわかつくかこ山の
ふりにし里を忘れ○かため「や」（しイ）（イナシ）
此歌は忘草と云名に付て愁をも思ふ事をもわすれんとて紐に付○○事を詠りさきの草は此草を紐に付たれとも凶の草にて有けり彌戀の心のまさるはとよめる也萱草を鬼のしこくさと云には非す鬼と云も「醜（わすれぐさイ）（たるイ）（ナシイ）（醜カ）と云も」只凶の心なり心中に「忘れ」しと思ふ事をは（戀イ）紐に書すとて帶紐に書て付也當集の心にては「鬼の」（ナシイ）して○○草の名には非す只言をかれる也嵇康養生論（草はイ）

に曰萱草忘レ憂いへり李嶠百詠萱詩曰屣歩尋ニ芳草一忘レ憂自結レ叢云々然れは忘草は只萱草也鬼のしこ草にはあらす

一本曰
「散木集云

みくまのに雨そほふりて木隱の
つかやにたてる鬼のしこ草

此歌何をよめるとはをほえねとも氣色さもやとみゆ八雲御抄には紫菀也云々(頭註書入に云)紫菀本草に云紫菀一名紫蒨七見の反和名能之俗に云之乎邇一中院亞相同紫菀こ被仰上者不可有余者也イの鬼のしこ草は紫菀なりと被レ註たる上は無ニ異論一者也」

針原

當集第十四卷に歌云

いかほろのそひの針原わかきぬに
つきよらしもよひたへと思へは

針原は萩原也○○○○○○播磨國風土記曰萩原里右イ古へ所ニ以名ニ萩原一者息長帶日賣命韓國還上之時御船宿ニ於此村ニ一夜間生ニ萩根一高一丈許仍名ニ萩原一即闢ニ御井一故云ニ針間井ニ「云々依レ之」播磨國と云へる名は萩の名をとれる也「然れは針原萩原一也」

葛餝早稻

當集第十四卷に歌云イ

爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氐米也毋

鳰鳥のかつしかわせとは鳰鳥のかつくとつゝくる也但歌の心は下總國葛餝郡室と云里には早稻とていとはやく出くる稻あり此早稻をかつ〳〵とりて贄する時は門戸を開て親き疎きを云はす内へ入れすしてたた家中のけこはかりさしつとひてくひのゝしると申也かく人をいとふはにおとりの時也○○我思ふ妹を外にはたてしと詠るなり

水陰草

當集第十卷に歌云イ

あまの川水陰草の秋風に
なひくを見れは時はきにけり

此歌を取り給ひて　　後鳥羽院

續拾秋上イ
彦星のかさしの玉やあまの川
　　水陰草の露にまかはん

イナシ
「同し心を詠る　　清輔

銀河水陰草にをく露や
　　あかぬ別のなみたなるらん」

六條イ
「入道」前攝政殿

續後撰秋上イ
あまの河水草陰の露のまに
　　たま〳〵きても明ぬ此夜は」

イナシ
「水陰草は稲の一名也」亦異草をも水の陰に生すると云歌あり「イナシ其故は」歌云イ同第十卷に

山河の水陰におふるやますけの
　　やますも妹かおもはゆるかな

此水陰草は稲の一名と見えたり其故

イナシ
「此歌も同心也今案」之○○○○○○○○○○○○○○○はイイナシ○「銀河の水陰草」と詠るは」銀河の天水の恵にて苗代水の始より稲花成熟の時まても雨露の恩に浴する也是天漢の水陰の草と云心也イ○○○○○○○○○○○能因法師の天河稲代水にせきくたせと詠れは則イ即天感有て雨くたりけると「云も此心申も此心也と可申にや」イナシ「何れの草とは聞へねとも俊頼の歌にも」

又水陰草さもよめりイ
續後撰戀一俊頼イ
谷ふかみ水陰草の下露や
　　しられぬ戀の涙泪イなるらん

イナシ
此歌「にて」は稲にもかきらす水邊に生て水陰にある也イ草と見へたり

暮イ
夕陰草

當集第四卷歌云イ

我屋戸門イの暮陰草ゆふかげぐさの白露のにイ
　　けぬかつもとなおもはゆるかも

此歌を取て詠る　　道信經イ

新古戀三イ
庭に生る夕陰草の下露や
　　暮を待まの涙なるらん

註釋云暮陰草未レ勘云々今試考レ之に何の陰とはいはされとも夕陰草と詠る歌○○當集イ詠蟬歌云イ十卷「に」

夕陰に來鳴日晩きなくひぐらしこゝたくも
　　日ことにきけとあかぬ聲かも

此歌「にて」はたゝ夕陰の草とみへたり然に同巻に
陰草の生たる屋戸の暮陰に
鳴蟋きけとあかぬかも
此歌は「只」夕陰草と云草ありと見へたり爰に「或先達の云」夜一夜草の名也此草夕陰に花開て夜明れは萎むもの也此夜一夜草の和名司陰氣草と見えたるをや「亦」夜一夜草「は本草」に曰景天草云々此名天景也。「暮」「亦」曰陰也爭有餘義哉義理悉令符合「者也」夜一夜草を暮陰草と申詠る歌
續千秋上
水無瀨山夕陰草の下露や
秋なく鹿の渡なるらむ
久我大相國
「陰草と云歌」
ひかりなき我ふるさとの蛬
身は陰草のねをのみそなく
中院亞相
濱木綿
當集第四巻に
御熊野の浦のはまゆふ百重なる
心はおもへとたゝにはあはぬかも
柹本人麻呂
此濱木綿は紀伊國の御熊野にはあらす志摩國の眞熊野なり。。。。。「濱木綿を」志摩國。。。。。より獻する事舊例なり此を以て。。。。。。。。。。。此國の名所なる。。同第六巻に
みけつ國志摩のあまならし眞熊野の
小舟にのりておきへこくみゆ
大伴家持
此濱木綿。。は芭蕉の如にて莖をへげはいくへともなく「へかるゝ」也。。。新撰六帖に
かさぬとはなに思らんはまゆふの
へかれのみ行我世かなしも
此濱木綿に戀る人の名を書て枕にすれは必夢に見ゆるとなん衣なとにもつくるにや
京極黄門
拾遺愚草上
時の間の夜半の衣のはまゆふや
歎そふへき御熊野の浦
眞觀

書つくる浦のはまゆふなにとして
　夢には人を見せはしめけん
紀伊國御熊野にもよめり法印良守熊野法樂廿首とて
すゝめけるに「雪を詠る」
　　　　藤原季家朝臣
御熊野やいくへか雪のつもるらん
　跡たにみへぬ浦のはまゆふ
「濱木綿と云事志摩國紀伊國可レ亙二兩國一と見へたり」
「又慈鎮和尚熊野へ奉り玉ける御歌
みくまのゝ濱ゆふくれのなかめかり
　いかに重ぬる契り成らん」
　　弱草夫
當集第二卷　吉備津釆女死時柿本朝臣人麻呂作歌
しきたへの手枕まきて劒刀身にそへねけん若草の
そのつまのこは前後略之
弱草夫とは女にて可レ有かと覺ゆるに古今集に春日
野は今日はなやきそ若草のつまもこもれり○○○○○
○○と云歌あり后のよみたまへると申を男の歌にや

○おはつかなく思ひしに日本紀第十五卷曰有二女人一
居二于難波御津一哭曰於母亦兄於吾亦兄弱草吾夫恒怜
（古昔以二弱草一譬二夫婦一故以二「弱草」一爲レ夫云々「故
に」つまと云和語はつはつゝく○まはまとはる也夫
婦枕をならへて「つゝき」まとはりぬる「心」也
　　波志吉也志
此詞當集卷々に詠る歌其心不レ准一はしきやしはし
きよし「兩訓也」第二卷にはしきやしわかつまのこと
詠るは女と見へたり第七卷にはしきやし○○○わき
○へのけももと詠るは木と「も花とも」申すへきにや
○○○○第十二卷に石はしるたるみの水のはしきよし
「と詠るは」是は水也第十六卷に竹取翁にあひて九箇
の神女のはしきやし翁の○○と詞るは男と見へたり
第廿卷にみよしのゝ玉松か枝ははしきやしと詠るは
松と見「へたり」所詮いつれもほむる詞と心得て歌を
見るに不レ可レ有二相違一歟
　　人麻呂萬葉以前卒不
當集第二卷に　柿本朝臣人麻呂在二石見國一臨レ死

時自傷ノ〇歌

かも山のいはねしまける我をかも
しらすといもかまちつゝあらん

問曰此歌端作詞曰藤原宮御宇天皇代云々爰知人麻呂ハ持統天皇御宇令ニ卒去ニ者哉然〇人麻呂讃曰仕ニ持統文武之兩帝ニ遇ニ新田高市之皇子ニ云々此兩説雖レ令ニ相違ニ共以萬葉以前之歌仙也見其故「者」窺ニ當集之立様ニ不レ爾ニ季節雜歌ニ不レ論ニ譬喩相聞ニ以ニ年月次第ニ令ニ綜緝ニ者也然者人麻呂不レ至ニ元明以後ニ之條炳焉也奈何　答曰石見國風土記云天武三年八月人麻呂任ニ石見守ニ同九月三日任ニ左京大夫正四位上「行ニ」次年三月九日任ニ正三位兼播磨守ニ云々自レ爾以來至ニ持統文武元明元正聖武孝謙御宇ニ奉レ仕ニ七代朝ニ者哉於レ是持統天皇御宇被レ配ニ流四國之地ニ（土佐國打山里）文武天皇御代被レ左ニ遷東海畔ニ（上總山邊）子息躬都良者被レ流ニ隱岐嶋ニ於ニ謫所ニ死去云々如レ此沉論之時分死生之眞僞難レ定者歟就レ中當集時代前後之歌不レ限ニ此一首ニ第一卷者元明天皇御宇和銅五年之歌入レ之〇〇第二卷者孝徳齊明天智天武持統文武御宇歌有レ之以レ之可レ思レ之亦所レ載ニ先段ニ人麻呂集云天平勝寶九年春二月於ニ左大臣橘卿之東家ニ朝毛吉紀詞ノ問答記〇然者及ニ孝謙天皇御代ニ在生之條不レ可レ有ニ異論ニ者也仍萬葉撰集之時者人麻呂專雖レ可レ爲ニ棟梁ニ依ニ天氣ニ内々令ニ密談ニ云々

人麻呂入唐不

拾遺集歌詞書曰人麻呂もろこしのつかひにまかりける時

拾遺別人丸イ
あまとふや鴈のつかひをえてしかな
ならの都にことつてやらん

就ニ此集詞書ニ先達多存ニ人丸入唐之由ニ云々イ
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇今考レ之萬葉集幷ニ人麻呂集入唐之由曾所レ不レ見也爰萬葉集第十五卷云新羅使等當所ニ誦詠ニ古歌ニ百四十五首〇〇此中人麻呂歌多隨而今被レ入ニ拾遺集ニ天飛乎歌在レ之「第十五卷」云天平八年六月遣ニ新羅國ニ之時使人等及ニ海路ニ當所ニ「誦」詠ニ古歌ニ云天飛哉鴈乎使爾得旦之哉云々此歌之下ニ作者無レ之此歌亦人麻呂集有レ之就レ中遣唐使大

伴宿禰佐手麻呂記曰白木之共使山城史生上道人麻呂副使陸奥介從五位下玉手人麻呂○○件使等天平勝寶九年四月二日進發同十年九月廿四日歸二着紀伊國一○云々イ

○因二此人麻呂等之名一○○○○入唐之由被レ載レ之歟奈何○九章實傳云田口人麻呂非二歌人一柿本人麻呂比二本上道人麻呂玉手人麻呂已上如レ此同名異體人麻呂數多有之○○天平勝寶比者○○人麻呂專奈良朝之近臣者哉

古語採擇 註釋立言辭抄釋篇而イ 「仙覺抄二粗雖レ載レ之 爲二幼童一重テ註レ之

當集之歌者專二○○古語一有二鬼語一有二夷曲一有二境談一有二俗イ○○各依レ隔レ聞難レ解者也因レ茲粗擧レ之

たかどの 高樓也　　まさか 寢所也 在所をも云 同之イ

むら戶 裏戶也 あまたあるこそ也イ　　あれますむ まろゝなり

いかくる かくろゝなり いは發語なり　　みかちり みかてらなり 宮寺也みかてら也イ

かよりかくより かうさまなり　　をそそらこそ をそらこそなり

きそのよ 昨日の夜なり　　やさしみ はづる心也

あちさはふ あちわうなり　　みつら もさゝりなり

さにつらふ けわふなり いろめく也　　よしやゑし よしやよしなり

よすか 日本紀には資也かだみなり「よすかの山とよめるもかたみなり亦」物によするなり「たすくるなり亦」たより也イ 「もを云なり歌によるべし」

かはへなし 上なきなり　　をそろ をそきなり

よのほとろ 夜の明るほどなり　　うけひて 祈る心なり を云也イ

ねく○○○○ ねきこさなり いのるなり　　心くゝ あやしきなり

めくしあひする なり　　かくろき○○ かみのくろき也かみイ

こと玉 こさばなり　　こぬれ こすえなり こぬれかくれさもイ 同心なり手にさる也イ

たつかつえ 手につく杖なり 是は打歟イ　　たつか弓 手にとる弓なり

こはしき 戀しきなり　　をかひ をかへなり

くたつ くたけたるなり かたふくなり 月夜のふけるも也イ　　なつらすい 魚をつるなり

いとら うつらなり 鶉イ　　いくり 石なり「いは發語」 くりさもを云 をも云

こきたむる こぎめくる也 廻也たみて也イ たみて廻也イ　　山たつ きを「なり」 そま人 をも云イ のを「なり」 たつ をも云

わけ 男なりたれ也イ なのれなり たくれなも云イ
たふて つぶてなり ナシイ「たみでも同」
ほところ 笑い光なり ほてりさも云
うつし心 うつゝ心也
しらか 白きぬさ也四手也イ 白き四手なり しろき心なり
ゆきやなくゐ也 ひイ
とのくもり たなひきく もろなり
をきまけて なきかけてなり海也イ おイ
夏まちて 夏かけてなり けイ 同イ
をてもてのも このもかのもなりイ
草はもろふきあなたこなたに ばイ ぶイ かイ むかふなり
はりみちつくり道なり
かりはね 草木かりたる根なり ばイ
むかつを なり むかふみれ
すてしつなり すしつこは人也イ
こつこらさもと云「子也人也」 男女ともに人を子と云也イ
もころ こさくなり
うらなちをるこたにまつ いろなり きイ し
そゝりあかるなり
風のむた 云也 波のむたさも ごも○ 共に也イ
山のたをり ふもさなり
ほく○ かゆる也イ さかゆるなり さイ
かくはしき 香こまかなり「さ云」イ
いは人家「人」也 ナシイ 「いへ」と云へからず
つくひよ 月日夜也 ゆふつくよの心也 おひなりイ
かはたれ時 明ほのなり たうがれ時に對イ 若イ
ゐひ 帯なり
かまめ 鴎なり
むらきひ 寸々に切るなり 思切なる時は肝のと云イ もイ

かへらひぬれは 歸ぬればなり すイ
「時しみ」 時しげきなり イナシ
しらに 不知なり
「こねこ」よさよふなり イナシ
かもしもの 鴨なり
いはねさくみて 石根そみくほむるなり ちイ ふイ
「かにもかくにも」 さにもかくにも イナシ
しゝにし しげきなり しゝみさも しゝさもイ
谷くゝ 谷水「の」くゝる○ なり 也谷な 水イ
ま「なかひに」 眞に永日なり かなひイ
いたとりよりて 手さりよるなり
いとらして さらしめたるなり
わきへのその 我家の園なり かさもイ
いとのきて いさゝしくなり
こひのむ 乞祈也
あともひたちて 哀さ思たつ也 喪イ
とこのへたし 床のへたてなり
をみねみすくし 峯嶺を見過し「上る」也 尾峯イ そイ ナシイ
まかなしみ 眞に悲也 實イ
花ちらふ 花ちるなり
にふなみ ゆるさぬなり すイ
いもかへ 妹が家なり だイ
ころをしもへは 見ころなしイ 見たし思へばなり
した間なり
からすとふ 烏と云なり

まかも眞鴨なり　をかものもころ雉鴨の如し也
おさ〳〵優なり　しましくも暫なり
まつかへり待還也　つはら〳〵詳なり
かたねもち肩にもつなり　うつしまこ現の眞子なり
かそけき「なもかはりなり」幽也　まつろふ奉仕なりイ
ゑら〳〵ゑむ心なり　いむなし妹無なりイ
おめかはり面かはりなり　ちまり居て留居也
さゝてゆかんさゝけてゆかんなり　あめつし天地なり
みたらしみさらしさも御弓なり　いはろ家なり
はかし放なり　あしふ華火なり
まゆすひ眞に結なり　とりよろふとり寄也
（みつらし御たらし也）弓也　ぬるよをちす夜こそになり
さきく幸也「さちくさ」さも云　にはに海の面のしづかに平かなるなり
しのく加ろ也こゆるなり　角。ふくれ腹立也
てもすまに手もやす「ます」なり
此一行ナシイ
如レ斯ノ詞甚雖レ不ニ幽玄一爲レ令レ得ニ歌之心一粗載レ之

すこさく也損イ様也　ゆより又は發語なり　香維ゆ共皆發語なり
あへりくわふな　はふる亘也わたる心なり
はしきよきなり又ははしけきなり　かにもかくにもさにもかくにも也
かゝよふほのかになり　いさゝめいさゝかのほどなり
はたれ班なり霜雪のうすきなり　玉かつま繼なも云なり
さゝれしもさゝれ石もなり　まとをく眞遠也兒、ころくろさ也イ
へなりにけらし隔にけらしなり　ころくとそなり兒呂なり人なり
ふねはてゝ舟とめてなり　あかとき曉なり
さすなへ鈍子なり　しひにてあれかもやすらふなり立や憚也イ
石なみを河石のある河なり　たしやはゝかる輕なり立なり
しまかき嶋陰なり　のゝそき野のつゝきなり
山のそき同心なり山のつかさ山のつゝき也イ　のつかさ野のきはなり
きしつかさ同心なり　い本如此あり

詞林采葉抄巻第十

旋頭歌

當集第十一巻に 歌云イ

はつせのやゆづきがたけに我かくせるつま」あか

ねさして「れ」イナシる月夜に人みけんかも

旋頭歌と云は五七七五七七と詠へきもの歟其故濱成

式云旋頭者双本也「云々」イナシ双本とは本にならふと可

レ訓也○旋頭「とは」なはイはじめにかへる頭にめくると云

兩訓に詠り然れは兩訓共に上下の句文字數同かるへ

しと見へたり因て披二見萬葉集一部始終一旋頭歌六

十五首在レ之毎首二句「に詠レ之亦」拾遺集に

しらぬをきなにあふてゝちすれ

ますかゝみそてなるかげにむかゐゝて見時にこそ

イ此歌もみる時にさつゝくれば一句そふにゝたり二句によむべきな

らばみるさよみきらんにあながちに古歌の躰に不可背×

×此外三首○○○○は皆二句によまるゝ歌なり

古今集旋頭歌に

春されはのへにまつさく見れとあかぬ花まひなし

にたゝなのるへき花のなゝれや

此歌花まひなしにと○○下のイ句を切て二條家の庭訓とせ

らるゝ心は花もいゝなしにと云々然るに「顯註」イナシ密勘

○云花もいゝなしにを花まひなしにと書れ侍れは年

來誰もかくや知て侍らん心をやりて難義とも思侍ら

す花もいゝなしの難と申し歌は人の見し所にて詠て

侍しにや今こそ○はつかしくは侍れ○云々就レ之檢二

拾遺愚草一院向題五十首歌に

三吉野の花もいゝなしのあらぬかと

分入みねにはふ白雲

此歌の事にや侍らん然れは京極黄門も花まひなしに

とは詠むましきにやと被レ仰たり仍て此歌をは見れ

とあかぬ花と讀切てまひなしにたゝなのるへき花の

なゝれやと讀へき也まひとはまひない也賄賂也まひ

なひなくてはなのらしと○○○○○○○○云なりま

ひと云詞は萬葉集所々に有之第五巻歌に

わかけれは道ゆきしらしまひはせん

したへのつかひをひてとをらせ

同第六卷
あめにます月よみ男まひはせむ
今夜のなかさ五百夜つきこそ
同第九卷に
うくひすのかひこの中に時鳥ひとりむまれてさかちゝににてはなかす「や」さかはゝににてはなかすや卯の花のさける野へよりとひかへりきなきとよまし橘の花をいちらしひねもすになけときゝよしまひはせんとをくなゆきそ我やとの花橘にすみわたれ鳥
同第廿卷に
我やとにさけるなてしこまひはせん
ゆめ花ちるないやうちにさけ
右の歌等皆以₂賄賂之義₁炳然也。「而」にまひなしにと讀へきならは二句の義勿論也下の歌「の」みかさの山の紅葉葉の色神無月とは讀へからす二句に可ㇾ讀義同前也「但拾遺集其外にも適雖ㇾ有ㇾ之少は可ㇾ屬ㇾ無もの歟萬葉集の外閣ㇾ之矣ㇾ」
長歌短歌

於₂此長歌短歌₁は先達の所ㇾ判二途也隨而二條家冷泉家相分たり堀川院御時百首を召されしに俊頼なんと短歌とて長歌をそへて獻せられたりしを一旦いはれありとそんせられけるにや五條三品千載集を撰れし時も短歌とて長歌を載られたり京極黃門先人一期の遺恨此事也と被ㇾ仰云々。古來風體云「爰に」萬葉集には總て卅一字の歌をは短歌と書て長歌と書る所一所もなし卅一字の反歌短歌を長歌と云ふならん彼の髓腦は萬葉集を委く見さるに似たり拾遺集には長歌の部と立て人丸吉野宮にたてまつる長歌と書り源順。能宣と贈答せる歌も亦東三條入道左大臣圓融院へ奉れる歌にも皆なかきをは長歌としみしかきをは短歌と侍るなり已上然れは千載集の比まては萬葉集の。。。。沙汰。。。。なかりけるにや將亦「一世人」諷歌の詮につき給ひけるにや明眼の素意凡慮難ㇾ測者也爰に二條家の庭訓として近來の勅集に被ㇾ號₂短歌は長歌也是則先年爲世卿「彼の」古來風體は非₂釋阿之作₁と勅答被ㇾ申たりし故に被ㇾ背₂彼抄₁歟然に去

る嘉暦三年故藤谷黄門〇〇以釋阿自筆之古來風體於黒戸御所〇備後醍醐院叡覽後被止彼邪論訖就中八雲御抄に云古來風體は俊成作云々尤可被信用之何被違髪祖之本意哉甚不審也凡萬葉集の模樣を見に長歌二百六十首短歌四千百八十八首也此内なかきを短歌と云みしかきを長歌と云たる事一所もなし然るに長を短歌とたてらるゝ事は疑ふらくは若し彼の家には萬葉集相傳の本被紛失歟於〇〇披閲者爭有此義哉萬葉集には〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇短歌をは或は反歌或は一絶二絶とも云「綴は」如此修多羅之長行偈頌也長歌をくれ〳〵とつゝけ書て其大低をつゝめて三十一字に結ふを反歌とも短歌とも中也短きを長歌と云はん事以詩賦長篇絶句と云以絶句長篇と云はんに豈可階其理乎玉篇に字の反を〇〇〇切とも〇〇〇言へる事はつゝむる言也〇二字を一字にする也〇〇〇〇〇〇〇〇〇爭か長をつゝむると云へき哉返一返一遍不背の義勢也〇〇和語に違ふへきにあらす漢朝の古詩にも不叶者歟文選曰廣謂賦約謂詩矣

賦は長篇長歌と語異なりと云へとも心は是同一也〇〇古今集眞名序云逮于素戔烏尊到出雲國始有三十一字之詠今反歌之作也云々反歌とは何物哉即短歌也〇〇三十一字の歌を短歌と云事明鏡也老子經曰反は本也云々反歌は三十一字の歌〇〇なる事和漢符合す「彼の」古今集の序尚以被迷惑「況や」反萬葉集披閲哉亦拾遺愚草に云水無瀨殿へ候しに大僧正歟をよみて奉られたる返事只今つかふまつるへき由仰書侍しかはやかて

さてもいかに鷲のみ山の月のかけつるの林に入しよりへにける事を數ふれはふた千年をもすきはてて後の五の百年に入にけるこそかなしけれあはれ御法の水のあは消行比になりぬれはそれに心をすましてそ我山水にしつみゆく柚のたつきのひゝきよりみねの朝嵐はれのきてくもらぬそらにたちかへるへき

反歌

さりともと思ふ心そなをふかき

たゑてたゑゆく山川の水

右の長歌反歌「の説」(イナシ)古來風體の釋義に等同也萬葉集の立様(横イ)に相叶へり隨て壁案「抄」(イナシ)にも古今集雜體の部(又新勅撰)の註に長歌と擧てなか歌の詞を註せられたり○○○○(集にも長歌部さて長歌四首擧られたりイ)○○○○○○○○○○○○然れは五條三品京極黄門ともに長きを長歌とし短きを短歌と分明に被二註(仰イ)置一の上は○○○○(闕私非案イ)「仰て」可レ○信(被イ)二用○○○○○○○(累葉相傳之正義一歟イ)之一也抑古今集第十九卷の立様を披見するに萬葉「集は」(のイ)以二長歌一爲レ面「の故」(イナシ)喚頭(くわんとう)にも擧二長歌一古今集(萬葉イ)は以二短歌一爲レ面「の故」(してイ)喚頭にも短歌を載す(也イ)雖レ然(然而イ)續萬葉の號有て彼(後イ)の集の立様を賴う(粗イ)つされたり然れは長歌短歌の次第名目亦可レ同二本集一但長歌の始に短歌と出す事は如ク二萬葉集一しなく〳〵の體を立たり所レ謂長歌短歌旋頭歌誹諧歌等也然るに(而イ)先つ面に短歌(にするイ)とあけて(なイ)長歌を載す「る故に」(イナシ)さては短歌とはなか歌を云へきかと覺るに次に貫之か長歌より始て忠岑躬恒か長歌に至るまて各假名にてなかうた〳〵と「記(書て)せり是」(イナシ)なかきを長歌と云(名イ)事落居せり然るに「初の」(イナシ)題目に短歌と擧たるは何の心にて書るそと不審の所に

「(以下イ)忠岑か長歌の次に反歌とも短歌ともかゝすして君か代にあふ坂山のいはしみつといふ歌を擧たり是則揚レ略互顯(げてん)のたくみなるすかたをたてたり此名目立様内外典にわたりて有之揚略(書イ)互顯とは其名目計をあけて正儀をは略して奧にあるへき事を交て其端に顯申也而して(然而イ)題目に短歌とあけたるは君か代にといふうたを指なるへし不知(解イ)此義人初短歌と擧たるはかりを取て(執イ)(しつし)ふかき心を習」

萬葉集の事仙洞より仙覺律師へ被二尋下一條々萬葉集時代幷撰者奈良御門と云事長歌短歌の事右三ヶ條勘錄して奏覽訖ぬ重て被二仰下一に古今集には短歌とて擧二長歌一たり何そ一篇に三十一字の歌を短歌と可レ申乎貫之豈迷二惑之一哉勅答申云彼の集の立様其比までは依レ無二萬葉集之沙汰一故歟禁裏の御本錯亂の故に貫之不レ及二巨細之披閲一して長短の差別

不ニ分明一歟にて先つ短歌と長歌を一首擧て次の長歌より假名にてなかうた〳〵と爲レ不レ令ニ混亂一兩樣に立られたり其後至ニ天暦御宇一仰ニ五人一被レ加ニ點和一之時被レ召ニ出宇治寶藏御本一兩本有ニ校合一治定之御本出來して後家々の證本流布すと云々然而代々の先達任ニ古今集撰樣一長歌短歌一篇に不ニ申切一は是則不本ノマヽレ被ニ萬葉集一の故也爰に京極中納言定家卿新勅撰集奉レ勅之時長歌部を立て長歌四首を並て被レ擧レ之尤指南とすへき者歟然れは三十一字の歌を可レ爲ニ短歌一之條炳焉也就レ中古今集眞名序曰逮于素盞烏尊到ニ出雲國一始有ニ三十一字之詠一今反歌之作也云々此反歌とは何物哉則短歌也是三十一字の歌を短歌と云事明鏡爭か以ニ五七五七歌一可レ稱ニ短歌反歌一也を」知らさる故に短歌とは長きを云と被存之條譬案之至極也此等古今集之沙汰にして雖レ非ニ當集之所談一以レ次所レ載レ之也

萬葉集書樣

當集有ニ四種書樣一一は眞名假名二は正字三は假字四は義讀也開レ之爲ニ七種一「中にも」眞名假名は拗ニ古語一炳焉〇〇〇〇たり次に於ニ正字一は有ニ通正字一有ニ別正字一次於ニ假字一は有ニ全假字一有ニ半假字一於ニ義讀一は有ニ全義讀一有ニ半義讀一也「眞名とは天地陰陽日本等也假名とは阿畔津知畔鳥耶麻騰等也次に」通正字とは雪月花「春」霞秋風等也「次に」別正字とは霍公〇郭公 時鳥 芽子萩 黄葉紅葉 等也「次に」全假字とは河津蝦 日倉足蜩 垣津旗杜若 朝良槿 等也「次に」半假字とは乳鳥千鳥 秋津羽蜻蛉羽 打背貝空背貝 等也全義讀とは春鳥鶯 三五夜望月 水鳥鵜 丸雪霰 東細布横雲 小沼池 留鳥網 不行〇 風流由多集〇〇〇 無用徒 潔身みそき 入風すきま 〇日月程拾穗 喫鷄「し」羊蹄拾穗抄云 喫鷄羊蹄母准 追馬喚犬 母准「し」 八十一「」 火氣 戀水 左右まてに手 礒廻 求食 青頭鳥 馬聲 蜂音 石花 追馬喚犬「等也」已上不違羅樣イイナシ「次に」半義讀とは金風「秋風」 白風同 若月三日月イ 〇〇〇〇〇 若兒 樂〇浪 朝鳥 細竹 風流子 商風秋風 喚犬追馬鏡 暮三伏一向夜等也如

此七種の書様は廣く被一部普く亘古來者也依繁略之

萬葉集時代

問曰當集者何帝御宇被撰之哉如古今集序者人丸赤人同時奈良御門之御時被撰萬葉集云々然者寧樂帝者何御門可申哉（乎イ）答曰此條古來難義也雖然任當集現文幷風土記國史公卿補任等說以聖武天皇奉號奈良御門（帝イ）者也難曰此義不審也其故者古今集序曰昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集（焉イ）自爾以來時歷十代數過百年（三イ）云々「然者」（而イ）自平城天皇至醍醐帝十代也從大同元年迄于延喜五年百年也（九十七年也如何）依之（至イ）平城天皇（帝イ）奈良御門可申者歟（哉イ）（イに如此あり）○○○○○○○○○○○○（同茲中古先達顯輔淸輔俊賴顯昭等皆平城之由註置之者也イ）○○○○○○○○○○○○隨而國史曰平城號奈良帝矣（袋草子二五萬葉時代難事）大和物語云奈良帝泊瀨にをましくし時嵯峨帝より贈給一御歌

みな人のそのかにあけるふちはかま
　　君かためにと今そをりつる

道理證文（文證イ）如此尤平城帝奈良御門（帝イト）可申（者イ）○哉「如何」答曰先古今集序十代之事以繼體（帝イ）王位次第可考之所謂

仙覺抄一十一左

一聖武（文武二太子）　孝謙（聖武三女）　廢帝（天武の孫一品舍人親王の子雖無繼體萬葉當代之間不除之）（帝イ）
稱德（孝謙重祚之故不載之取イ）　四光仁（天智孫施基皇子御子）　五桓武（光仁太子）　平城（不繼體○依イ）（帝イ）
六嵯峨（桓武第二子）　淳和（「雖」爲桓武第三御子子細同前）（イナシ）　七仁明（嵯峨第二御子）　（之イ）故除之
文德　淸和　陽成（三代子細同前）○○已上（イ）　八光孝（仁明第二御子）　九宇多（光孝第三）
十醍醐（宇多太子）（御子）

已上如「斯」（此次第爲十代此是イ）諸ノ王臣人民計其重代之時自父祖（焉イ）曁（をよぶまで）子玄孫任譜系數之者也以之可知之也隨而續日本紀（記イ）曰延曆三年十月自奈良都遷長岡京同十三年自長岡「遷」平安城同延曆廿五年改大同五月十八日平城天皇即位同四年四月十三日爲太上天皇云々豈稱奈良御門（帝イ）乎（哉イ）但仙院之後○○○○（有御出家イ）奈良に住せおはしましゝかは奈良の御門と申す一名在（まします）しき其上彼院於奈良京崩御之間依立高陵（於イ）○奈

良ニ如レ此申也御在位之時平安城御座之上寧樂帝可レ申○哉其理○不ニ相叶ー嵯峨深草醍醐花山者是或離宮號或山陵名也莫レ迷ニ惑之ー例雖レ號ニ寛平於朱雀院ー承平御門也雖レ稱ニ圓融ヲ於仁和帝ー光孝天皇者乎亦人麻呂赤人者大同以前之歌仙也諸兄家持不レ奉ニ此朝ー旁以無レ據者也所詮古今序之平城天子奈良天子可レ訓也其故者當集第一第十第十七云平城亦第一第八云平山平宮平城故郷如レ此訓レ之亦國史曰平城朝左大臣○石足者天平元年二月任ニ正四位下左大辨ー云々亦云藤原朝臣弟貞平城朝左大臣正三位長屋王男云々長屋王ハ○天平元年二月十日坐レ辜自殺云々此云平城朝聖武天皇也尾張國風土記曰愛智郡福生寺俗號ニ三宅寺ー平城宮御宇天璽國押開「豊」櫻彦天皇神龜元年從七位下三宅連麻佐所レ奉レ造レ之云々公卿補任云藤原朝臣仲麻呂贈太政大臣武智麻呂男平城朝天平十五年五月五日任ニ參議民部卿ー亦天平寶字元年五月十九日任ニ紫微内相兼中衛大將ー云々是以ニ聖武ー奉レ號ニ平城帝ー支證○分明也仍古今序平城天子者奈良○○可レ訓之條無ニ異論ー者哉

亦問云以ニ繼體王位ノ次第ー爲ニ十代ー事幷平城奈良可レ讀之旨誠分明也但繼ヒ有ニ道理支證ー而雖レ可レ稱ニ聖武於奈良御門ー於ニ和歌道者自ニ後成定家爲家ー以後彼家督相承云義可ニ賞翫ー者也然○大納言爲氏卿以來以ニ文武天皇ー號ニ奈良御門ー於ニ彼御宇ー被レ撰ニ萬葉集ー人麻呂赤人共ニ爲ニ近臣ー之由代々庭訓也隨而二條家「證」本古今集序並秋部奈良御門御歌之註文武天皇被レ註○詫尤可ニ指南ー者乎就レ中大和物語註曰采女を召る○ならの御門はあめの帝也云云爰に文武天皇を天之津足根大火天皇と申也亦人丸赤人同事の帝と云事當集第一卷に安騎野同第二卷に雷岳臨幸之時人丸侍レ駕詠歌有レ之勘ニ此等之明證ー寧樂ノ御門者文武天皇勿論之上不レ可レ背ニ嫡流相傳之義ー此條亦○○如何答曰人丸赤人同時帝稱ニ寧樂御門ー之條諸家一同之義也然○人丸者自ニ天武天皇ー至ニ孝謙天皇ー

七代朝「近臣」之由載先段。訖不可限文武帝者也
○○「天帝號聖武天皇を天瑞國押開豐櫻彦天皇
と申の上は是亦非一帝名哉「次に」亦人同「時帝の」
事撰當集現文天武「天皇の」御宇「に亦人の」詠歌一
首も所不見之○也爰に知以元明天皇以後の歌仙
として至聖武御宇と「見へたり」亦次に文武天皇の
御宇に被撰萬葉集之由の事彼の帝は大化三年八
月十五歳にて即位慶雲四年六月十七日崩御云々御在
位之間爲幼年曾以撰集之沙汰無之何記錄被載
之乎不審○○也抑勘萬葉集一部始終○○○○於卷
卷所々引日本紀風土記爰に彼の「紀の」事天慶六年
日本紀竟宴「和歌に」橘直幹序曰元正天皇御宇一品舍
人親王太朝臣安麻呂ニ奉勅四十二帝興衰一千餘年
之治亂錄之云々○若此集文武天皇御宇於被撰（次風土記者聖武天皇御宇天平年中被御國々至）
（孝謙天皇勝寶元二載彼古集者也但天平勞有神亀歟三字）
之者爭三代以末來之書記爲本文哉將亦文武天（以三四代来之書イ）
皇者人皇四十二代之帝也隨而彼御宇之○治世「專

以「載之○知○○○○○○萬葉以前御門也と云事如（之證跡等被背俊成定家之庭訓之條可謂暗證之義勢者歟次天の帝の事文武を申さんに不可叶義無而聖武を天瑞國押開豐櫻彦天皇と申上者是又非文武一帝號者歟イ）
此被迷明鏡「支證之條可證義勢者歟」次に二
條家代々庭訓の事○後鳥羽院被召百首之時定家（「古來風體に云寧樂宮聖武天皇の御時になん橘諸兄大臣と申人勅を承て萬葉集を撰すと云々此抄俊成卿筆作之由）
卿（予時權少將）依被漏彼人數「釋阿」被進仙洞愁訴（八雲御抄に被載之而るを故爲世卿非俊成卿製作之由勅答申旨云々此）
狀云奈良東大寺大佛つくらせましまして候聖武天皇
の御時萬葉集をえらはれて候亦此都には延喜の御時（段在上加之イ）
この道を興し候（前後略）之此現文有掌上者不可依
彼末流庭訓者歟彼禪閤者匪直也人於斯道者被
通神明之由有其譽然此抄○已天下之明鏡也
微雖爲他門葉誰夢如之況爲彼苗裔尤可被
採用之爭被遺襲祖之義理乎疑若被稟餘家
遺流歟殆不審相貽者也亦文武不可稱奈良御門
事八雲御抄云藤原宮（持統文武元明）平城宮（元明自藤原宮遷之元正聖武孝謙光仁）云
云隨而當集第一卷云和銅三年庚戌春二月從藤原宮
遷寧樂都之時御輿停長屋原廻望古郷太上天

皇御作歌曰

飛鳥のあすかの里をおきていなは
君かあたりは見えすかもあらん

右の御製は慶雲四年六月十七日文武天皇於藤原宮崩御同七月十七日「即位」元明天皇○○「文武の御母」同五年正月十一日改元爲和銅元同二年被建平城宮同三年遷都之時惜慕文武陵令哀慟給之御歌也君かあたりとは文武の山陵と聞へたり○○奈良の都は文武崩御の後經四年草創也「然は」元明已前の帝をは不可稱諸樂御門之條炳然也就中當集卷々の中に始自泊瀨朝倉御宇天皇代至元正天皇「御宇」養老年中代々皇代年月具に以註之「然に」神龜以後天平乃至勝寶寶字間歌乍擧年號皇代の註無之是則聖武孝謙○○當代之故也是以榮花物語第一云昔高野女帝天平勝寶五年左大臣橘「卿」諸兄○○大夫撰集萬葉集云々是文明也可見之亦以聖武可稱寧樂御門事尾張國風土記曰葉栗郡川嶋社在河沼郡奈良宮御宇聖武天皇時凡海部忍人申此神化爲白鹿時出現有詔奉齋爲天社云々公卿補任曰藤原朝臣八束改名眞楯奈良朝天平廿年三月廿二日任參議兼太宰帥云々亦天平神護二年正月「八日」任大納言○依此等文理以聖武那羅御門申す者也抑萬葉集者皇代記曰天平元年正月十四日奏諸歌云々是則萬葉撰集之濫觴也仍同二年詔諸兄公大伴家持被撰之自爾以後迄于天平寶字三年正月一日首尾三十箇年之間以六箇集爲本集撰之所謂古歌集柿本朝臣人麻呂集山上憶良大夫類聚歌林笠朝臣金村集田邊福麻呂集高橋連蟲麻呂集○○此外帝王十代之御製其外被降芝詔於四海逮于天下之都人士女國々防人部領使上下之丁「白水」郎乞者等歌作者都盧五百餘人作歌類聚四千餘首鳩集所令呈進也誠以非聊爾撰集哉也亦當集所擧帝王十代御製者所謂雖略舒明天智天武持統文武元明元正聖武孝謙已上若文武御宇被撰之者元明元正聖武孝謙

未來四代之御製不可入之君大寶慶雲之比被撰之者和銅以後神龜天平勝寶寶字等未來年號詠歌不可入之旁以相違○○也以何明證二條家證本古今集顯露彼註○文武天皇乎恐大謬者歟凡此集爲體閑選微妙緝與難見之故古來好士斷簡適徒費言塵者歟但於二條冷泉相論者龍虎之爭也非所及凡慮者雖然不堪耽道之志任拙劣之管見粗註之矣

萬葉集撰者

當集撰者事「者」先達區々謂之也或云山上憶良或云藤原眞楯或云橘左大臣大伴家持○○前左兵衛佐顯仲云萬葉集者橘諸兄藤原眞楯等奉勅撰「之亦」仙覺考之云憶良者當集以前先達也眞楯者不撿其證據然此集者左大臣橘諸兄公「并」大伴家持爲撰者「歟其故第十九卷家持歌曰

白雲のふりしく山を越へ行む
君をそもとれいきのをに思ふ

左大臣換尾云いきのをにする家持猶喩曰如前誦之也撰者於不甘心之句欲換尾歟然○家持相共爲撰者之故令評判者也就中第廿卷昔年防人歌書之畢云右八首歌贈兵部少輔大伴家持云々爲撰者之條勿論也然諸兄公文武御宇葛城王弱年未稽古之時分也家持者十歲以前幼童也豈可及撰集之沙汰乎然者彼御宇此萬葉集撰者誰人乎未審矣爰諸兄公至聖武天皇御宇天平八年爲左大辨始賜橘姓之時太上天皇御製

橘は實さへ花さへその葉さへ
霜はおけともまし常磐樹

其後經左大臣天平勝寶元年叙正一位爲致仕大臣驗知爲聖武孝謙之寵臣萬葉集爲撰者事隨而第一卷奥書曰天平勝寶五年左大臣橘諸兄撰萬葉集○亦家持同爲撰者之條勘載先段訖然諸兄公孝謙九年天平寶字元年正月六日薨家持至桓武天皇延曆二年任從三位中納言同五年十月五日卒云云然則「撰者」兩人共文武平城中間之先賢也仍當集者

非ニ文武之撰集ニ、非ニ平城之勅撰ニ之旨明白也。誠知ニ聖武皇帝勅集（云事イ）○○ 無ニ異論ニ而已（者哉イ）

萬葉集點和

（村上天皇）天暦御宇詔シテ大中臣能宣清原元輔坂上望城源順紀時文等（イ）○於ニ昭陽舍ニ（梨壺）加ニ和點ニ、此號ニ古點ニ。亦追テ加レ點人々（ハ）法成寺入道（道長公イ）關白太政大臣大江佐國藤原孝言（たかこと）權中納言匡房源國信（くにざね）大納言源師頼藤原基俊等各加レ點。此名ニ次點ニ。亦權律師仙覺加レ點、此稱ニ新點ニ（名イ）（焉イ）

抑新點事（先段條々略之イに如此あり） 後嵯峨院御宇獻ニ上仙洞ニ仙覺律師奏狀ニ云○○○○○○ 寛元四年夏比抄出ス諸本無レ點歌長短旋頭合百五十二首（去イ）同年七月十四日終ニ以加ニ推點ニ畢。所レ點有レ誤者「奇異而」（可棄置イ）何有ツ恨。所レ點無レ誤者採用何無レ許ツ。羨ハク達ニ天聽ニ欲レ遂ト地皇ニ（望イ）其理若叶ハ者勿レ嫌ニ桑門下智之僧徒ニ。其事若宣シ者勿レ賤ムニ柳城邊鄙之凡俗ニ。走夫言聖人擇レ之、蓋此謂歟。爲レ散ニ餘執ヲ於萬葉之古風ニ只加ニ數點ヲ於一身之底露ニ（容拾穗抄）。採用無レ（難イ）知。任ニ浮沈カス於龍池之水ニ、叡賞不レ辨ツ待ニ許否ヲ於鳳闕之雲ニ而已。此狀依レ達ニ天聽ニ有ニ叡感ニ、萬葉得果（業 拾穗抄イナシ）之由「下ニシ」賜テ院（後嵯峨）（頭註ニ後嵯峨）

（嵯峨帝）宣ニ則被レ詔ニ入續古今集ニ訖。見仙覺「所レ謂」（所謂イ）新點本（ハ者イ）○ 正二位前ノ大納言（頼經光明峯寺殿息）征夷大將軍ノ（頼經光明峯寺殿息イ）○○○○○ 御本（法性寺殿御息）松殿入道（基房）ノ殿下御本（師大納言伊房ノ手跡） 光明峯寺入道前攝政左大臣家ノ（後京極殿御息道家）（前大納言頼經イ）御本 鎌倉右大臣家ノ（右幕下御息實朝）御本 六條修理大夫經盛ノ本（刑部卿忠盛息）（道家公後京極殿息イ）（此本以ニ二條院ノ御本ニ書レ之。經盛自筆也）（後イ不審イ） 左京大夫顯輔ノ本（正二位修理大夫顯季御息） 右大臣光俊入道ノ（三イ）（按察使中納言光親息）「之本」 眞觀本（基長中納言ノ本也） 以上（十イ）以レ本令ニ校合ニ○古次兩點者（矣イ）以レ墨（玉イ）點レ之、於ニ新點「歌ニ」者以レ朱點レ之。所レ謂本云文永元年（調イ）十月廿五日依テ中務卿親王家ノ仰ニ令レ獻ニ上之ニ訖。同三年丙寅八月廿三日重テ調レ之相ニ承之ニ云々

萬葉集點和ノ事は天暦御門ノ御時廣幡女后のすゝめ申させ給けるによって仰ニ五人英才ニ漢字の右に被レ附ニ假名ニ云々。然而無點和歌多相貽（のこる）之上古語鬼語相交リ輙難レ得。○心之故（其イ）疏レ之人少ク證本赤稀也けるにや。爰に俊綱朝臣（爲イ）○○○ ○○○○○○○○○○○○○流ニ布之ニ（法成寺寶藏より申出て書寫之其後顯綱朝臣書寫イ）乎。亦漢字之外假名の歌別ニ書之○○（袋草子一 三十四オ）（こさイ） 法成寺入道殿爲レ令レ獻ニ上東門院ニ仰テ藤原家經ニ被ル書ニ寫萬葉集一部ニ

之時假名の秋別「令レ」書レ之云々雖レ然○道風手跡之本假名歌別有レ之然則漢字右附ニ假名ニ事梨壺舊例也尤可レ貴レ之者歟委細追テ可レ詳レ之耳

先年草案之本紛失之間重寫之
應永二年三月十八日頽齡七十九右筆可恥之

去年「貞治四」「年」秋○二條關白殿下仰ニ冷泉相公ニ可ニ參洛ニ○之由度々依レ被ニ仰下ニ及ニ今年五月中旬ニ令ニ上洛ニ於ニ執柄家ニ萬葉集一部○讀進矣以ニ其次ニ詞林采葉抄（由阿抄ニ出「之」ニ）備ニ上覽ニ之處則被レ召ニ置之ニ被レ副ニ御本萬葉集ニ訖仍此草○既ニ非ニ私抄物ニ乎就レ中至ニ第十卷ニ者冷泉二條兩流之差違粗記レ之豈非下以ニ尺鷃之眼ニ計中大鵬之翅上哉然而太陽之光者管見知レ之迅雷之響者蒙愚驚レ之○○因レ茲或附ニ古集之文理ニ或任ニ先賢之舊記ニ所レ令レ採ニ擇之也ニ然者此抄於ニ異門偏執之族ニ者不レ可レ許レ之「却而」可レ致ニ難波之故也「亦無ニ萬葉集相傳ニ人不レ可レ見レ之」深「納ニ」篋之底ニ莫レ出ニ闥之外ニ而已
貞治「五年」丙午○○五月廿五日
「八代上人御註之時人也」ニ

「撿柳營邊」藤澤山陰士桑門由阿（隱侶イ）

春秋七十六歳記（七イ）（一イ）

于時應永二年乙亥卯月上旬書寫之

（以下すべてイにナシ）

二條關白殿御敎書

右萬葉一部所傳受於由阿也

貞治五年丙午七月十八日

開山老槐 在御判

（以下イ本ニハナシ）

右以數月之餘暇一部之書功成哉謂假名謂眞名謂章句謂點和不審非一也雖然此本者由阿自本之段奥書以明白也

于時嘉吉元年

三月十七日書功既訖

權少僧都惠珍

「水戶相公御本奥書

自一四自五七自八至十　三冊也

詞林采葉三策往歳呂長嘯翁新筆之本傳倉典龢繕寫矣今年借岩羽林古跡之本 野子 重訂正是雖有升子異同不盡記暫㝡閣之復得間暇別考玆所引之書而吏申八八是非开巾々投筆昔寬永第八之曆後之十月九日及

深更挑孤燈撿諸了

冷泉之支流爲曲跋

室松岩雄
保持照次　校
信田重並

明治四十三年八月二日印刷
明治四十三年八月五日發行

（定價金參圓）

著作權所有
不許翻刻複製

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里半七
東京市小石川區小日向臺町三丁目四十三番地

印刷者　佐伯外美雄
東京市小石川區小日向臺町三丁目四十三番地

印刷所　大日本慈善協會活版部

東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行所　國學院大學出版部